

群馬県利根郡月夜野町

# 三後沢遺跡 十二原II遺跡

一般国道17号線(月夜野バイパス)改築工事に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 一II一

1986

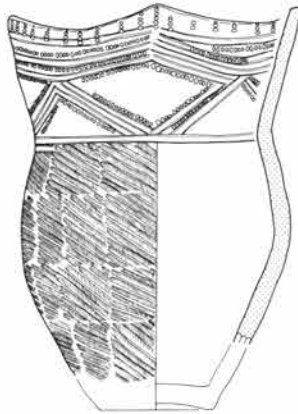
群馬県教育委員会  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



群馬県利根郡月夜野町

# 三後沢遺跡 十二原II遺跡

一般国道17号線(月夜野バイパス)改築工事に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 一II一



1986

群馬県教育委員会  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団





## 序

関東平野を縦断して太平洋と日本海を結ぶ大動脈である関越自動車道は群馬県内に大きな影響を与えました。月夜野インターから国道17号へアクセスする月夜野バイパスもその一つであります。

越後と上野とを結ぶ廻廊はいくつか考えられますが、旧三国街道もその一つで、もっとも主要なものであります。利根川右岸台地上に展開された本遺跡地は上野国側の拠点としての役割を荷っていたものと考えられます。

先史時代から、日本海と太平洋を結ぶ中継地であった月夜野町の中で、本遺跡は縄文時代前期か

ら弥生時代にかけての生活址が検出されました。

自然条件のきびしい中で発掘調査を行った担当者ならびに作業員の皆様、検出された遺構・遺物を報告書にまとめた担当ならびに補助員の皆様の労をねぎらうとともに完成までに種々の援助をいただきました関係各位に感謝申し上げます。

本書が県民の皆様、学界において広く活用されることを願います。

昭和61年3月25日

（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 清水一郎





遺跡の所在する群馬県利根郡月夜野町は、東西約8.91km、南北約13.75km、面積は約70.79km<sup>2</sup>で、県の北部に位置し、沼田市・水上町・新治村・吾妻郡高山村に隣接している。人口10,916人(昭和58年現在)。1955(昭和30)年4月、古馬牧村と桃野村の合併により月夜野町として発足した。町の中央部を利根川が南流、画面上から利根川に合流する川が赤谷川である。三国山脈の仙ノ倉・万太郎山南面に源を発し、流路延長は29.5km。利根川沿いには上越線が走り、また国道17号線も町内を通過するなど、関東と新潟を結ぶ要衝の地となっている。

月夜野町地内における大規模な発掘は、1973(昭和48)年の上越新幹線建設に伴う十二原遺跡・大原遺跡の調査を皮切りとし、1979(昭和54)年からは関越自動車道地域の調査がこれに加わった。そして月夜野バイパス道路建設に伴う発掘調査も1981(昭和56)年から実施され、数多くの考古学的成果が得られた。

長い歳月をかけて行われてきた月夜野町地内における大規模な調査は、1983(昭和58)年をもって終了した。今後、発掘の成果と整理作業を踏えた総合的成果が公にされることで、月夜野町の原始・古代像がより鮮明にされることであろう。

なお、掲載写真は昭和56年6月2日撮影。城平遺跡・諏訪遺跡の調査された年にあたる。写真提供は上毛新聞社。



- |           |             |
|-----------|-------------|
| 1 三後沢遺跡   | 9 利根商       |
| 2 十二原II遺跡 | 10 桃野小      |
| 3 城平遺跡    | 11 月夜野一中    |
| 4 諏訪遺跡    | 12 千日堂      |
| 5 大原II遺跡  | 13 町役場      |
| 6 村主遺跡    | 14 後閑駅      |
| 7 黒岩溪谷    | 15 古馬牧小     |
| 8 上毛高原駅   | 16 古馬牧小馬庭分校 |


## 〔例言・凡例〕

### 例言

1. 本書は、一般国道17号線（月夜野バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書に所収の遺跡名と発掘調査地の所在地番は以下のとおりである。  
三後沢（みつござわ）遺跡（C地区）  
利根郡月夜野町大字下津字北原2131、2128他・字三後沢十二原II（じゅうにはら）遺跡（D地区）  
利根郡月夜野町大字上津字十二原2152、2151-1他
3. 発掘した遺跡の調査期間（基本整理期間を含む）と調査面積は以下のとおりである。  
三後沢遺跡 昭和57年4月19日～昭和58年3月31日  
面積 約8040㎡  
十二原II遺跡 昭和57年4月19日～昭和58年3月31日  
面積 約6870㎡
4. 事業主体者は、建設省である。
5. 調査主体者は、群馬県教育委員会および財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団であり、調査担当者は以下のとおりである。  
相京建史（群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員）  
中沢 悟（群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員）  
菊池 実（群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員）
6. 出土遺物の整理作業・報告書作成期間は昭和59年4月1日～昭和61年3月31日までの2年間行った。
7. 本文執筆は、菊池を中心に相京・中沢が共同して行い、本文執筆の文責については目次に記してある。
8. 当遺跡の内容をより詳細に浮彫りする意図で、次の各位に資料の分析・測定を依頼し、その分析・測定結果の玉稿を賜った。各位に厚く御礼申し上げます。  
石材鑑定 田中宏之（群馬県立歴史博物館）  
飯島静男（群馬県地質研究会）  
黒曜石分析 鈴木正男（立教大学）  
福岡 久（日本大学）  
金山喜昭（野田市郷土博物館）  
戸村健児（立教大学）  
土器胎土分析 花岡絃一（群馬県工業試験場）
9. 縄文時代前期（繊維）土器のX線写真については、群馬工業高等専門学校教授呉屋充庸先生、群馬工業高等専門学校助手金子忠夫氏の御指導のもとに、北爪健二（群馬県埋蔵文化財調査事業団保存処理室）と菊池が共同して行ったものである。
10. 発掘調査および出土遺物整理にあたっては、次の諸氏、諸機関に御教示、御協力を賜った。（敬称略）  
秋山道生（板橋区教育委員会）、阿部博志（宮城県教育庁）、新井和之（日本考古学研究所）、大塚達朗（東京大学大学院）、笠原信男（国学院大学大学院）、金山喜昭（野田市郷土博物館）、菊池誠一（前橋商業高校）、桐生直彦（多摩市教育委員会）、呉屋充庸（群馬工業高等専門学校）、小西雅徳（板橋区教育委員会）、坂口一（群馬県企業局）、佐藤宏之（東京都埋蔵文化財センター）、佐原 真（奈良国立文化財研究所）、渋谷昌彦（島田市教育委員会）、関口功一（立教大学大学院）、

- 高井富二（月夜野町教育長）、都丸 肇（赤城村教育委員会）、外山和夫（群馬県立歴史博物館）、鳥羽正之（明治大学）、中村富夫（月夜野町教育委員会）、西井幸雄（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）、松本 保（前橋育英高校）、宮本長二郎（奈良国立文化財研究所）、三宅敦気（月夜野町教育委員会）、茂木由行（吉井町教育委員会）、原田昌幸（文化庁）、昼間孝志（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）、和深俊夫（いわき市教育文化事業団）、群馬県教育委員会文化財保護課、月夜野町教育委員会、山武考古学研究所、寿命院
11. 出土遺物・図面・写真・記録等の資料は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
  12. 発掘調査にあたっては地元関係者ならびに大勢の発掘作業員の御協力があり、特に月夜野町教育委員会には多大な御協力をいただいた。また寿命院高野住職および増田三津枝氏には公私にわたりお世話になりました。厚く御礼申し上げます。

### 凡例

1. 本書は三後沢遺跡・十二原II遺跡の2遺跡の報告であるが、各遺跡の調査に至る経過、遺跡の地理的環境と歴史的環境、調査の方法、調査の経過（日誌）については、1章調査と環境のなかで統一して記述した。そして2章を三後沢遺跡の遺構と遺物、3章を十二原II遺跡の遺構と遺物について記し、4章において自然科学的分析、5章において2遺跡の各遺構と遺物の成果と問題点を記述した。
2. 本書中の遺構番号は、発掘調査時に付したものをそのまま使用している。
3. 遺構名は三後沢遺跡（C地区）と十二原II遺跡（D地区）で各々1号から名称を付けた。
4. 竪穴住居跡の略号は次の通りである。  
J…縄文時代住居跡 Y…弥生時代住居跡 P…柱穴等
5. 本書の遺構・遺物挿図の指示は次のとおりである。
  - (1)挿図縮尺  
竪穴住居跡……1/60  
遺物出土状況……1/60  
土 坑 ……1/40  
土器実測図……1/4（縄文土器）1/3（弥生土器）  
土器拓本図……1/3  
石器実測図……1/3、石鏃等は1/2、石皿等は1/4
  - (2)水系レベルは標高を示す。
  - (3)遺物番号は本文、挿図、表と一致する。
  - (4)挿図中スクリーントーンの指示は次のとおりである。胎土に繊維を含む縄文土器
  - (5)弥生土器のなかで赤色塗彩のあるものは薄赤色で範囲を示した。
  - (6)色調については、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、新版標準土色帖（1976）に基づいている。
6. 本書に掲載した地図は、建設省国土地理院発行の20万分の1地勢図（高田・長野・日光・宇都宮）と5万分の1地形図（四万・道具・中之条・沼田）を使用した。



目次

## 三後沢遺跡・十二原II遺跡

**1章** 調査と環境

**2章** 三後沢遺跡

**3章** 十二原II遺跡

**4章** 自然科学的分析

**5章** 成果と問題点

**1章 調査と環境**

- [1] 調査に至る経過  
——神保侑史—2
- [2] 遺跡の地理的環境  
——中沢 悟—3
- [3] 遺跡の歴史的環境  
——菊池 実—4
- [4] 調査の方法——中沢 悟—8
- [5] 調査の経過（日誌）  
——中沢 悟—9

**2章 三後沢遺跡**

- [1] 三後沢遺跡の概要  
——菊池 実—15
- [2] 第1遺構群——16~32
- a. 縄文時代の住居跡——菊池 実—16~18
- J-1号住居跡（中期）——16
- b. 土坑——菊池 実—19~32
- (1) 縄文時代の土坑——19
- (2) 同一時期に構築されたと考えられる土坑-1——20
- (3) 同一時期に構築されたと考えられる土坑-2——26
- (4) 時期不明の土坑——27
- (5) 風倒木——29
- [3] 第2遺構群——33~244
- a. 縄文時代の住居跡——菊池 実—33~186
- J-2号住居跡（中期）——33

- J-3号住居跡（前期）——36
- J-4号住居跡（前期）——39
- J-5号住居跡（前期）——99
- J-6号住居跡（前期）——154
- J-7号住居跡（前期）——176
- b. 縄文時代の土坑——菊池 実—187~195
- (1) 陥し穴——187
- (2) 土坑——193
- c. 弥生時代の住居跡——
- 遺構 菊池 実—196~233
- 遺物 相京建史
- Y-1号住居跡（後期）——196
- Y-2号住居跡（後期）——204
- Y-3号住居跡（後期）——215
- Y-4号住居跡（後期）——220
- Y-5号住居跡（後期）——224
- Y-6号住居跡（後期）——227
- Y-7号住居跡（後期）——233
- d. 土坑——菊池 実—241~244
- (1) 時期不明の土坑——241
- (2) 風倒木・木痕——242

**3章 十二原II遺跡**

- [1] 十二原II遺跡の概要  
——菊池 実—247
- [2] 縄文時代の住居跡  
——菊池 実—248~302
- J-1号住居跡（前期）——248
- J-2号住居跡（前期）——252
- J-3号住居跡（前期）——261
- J-4号住居跡（中期）——264
- J-5号住居跡（中期）——270
- J-6号住居跡（中期）——274
- J-7号住居跡（中期）——277
- J-8号住居跡（中期）——283
- J-9号住居跡（中期）——293

J-10号住居跡(中期)——297

J-11号住居跡(前期)——301

### 〔3〕 縄文時代の配石・土坑

——菊池 実—303~324

(1) 配石遺構——303

(2) 土 坑——304

(3) 屋外埋設土器——312

(4) 陥し穴——313

### 〔4〕 弥生時代の住居跡——

遺構 菊池 実—325~350  
遺物 相京建史

Y-1号住居跡(後期)——325

Y-2号住居跡(後期)——330

Y-3号住居跡(後期)——333

Y-4号住居跡(後期)——336

Y-5号住居跡(後期)——348

Y-6号住居跡(後期)——349

竪穴状遺構(時期不明)——350

### 〔5〕 土 坑

——菊池 実—351~362

(1) 時期不明の土坑——351

(2) 風倒木——358

## 4章 自然科学的分析

### 〔1〕 石材の同定にあたって

——飯島静男—364

### 〔2〕 黒曜石分析

——鈴木正男—366

福岡 久

金山喜昭

所村健児

### 〔3〕 縄文土器の胎土分析

——花岡紘—367

菊池 実

### 〔4〕 縄文土器のX線写真撮影

——北爪健二—372

菊池 実

## 5章 成果と問題点

### 〔1〕 有舌尖頭器について

——麻生敏隆—375

### 〔2〕 縄文時代の石器について

——三宅敦気—377

### 〔3〕 弥生時代の遺構と遺物について——相京建史—384

### 〔4〕 三後沢遺跡の集落変遷

——菊池 実—388

### 〔5〕 十二原II遺跡検出の陥し穴群について

——菊池 実—401

### 〔6〕 十二原II遺跡の集落変遷

——菊池 実—407

## PLATES

### 別添資料

付図 三後沢遺跡・

十二原II遺跡全体図

## 挿 図 目 次

### 三後沢遺跡

第 1 図	遺跡の位置 (1/200,000) ……………	1	第 55 図	J-4号住居跡出土石器の器種別・石材別グラフ (2) ……	93
第 2 図	遺跡周辺鳥瞰図 ……………	4	第 56 図	J-4号住居跡出土石器 (1) (1/2) ……………	94
第 3 図	三後沢遺跡・十二原II遺跡と周辺遺跡 (1/50,000) ……	5	第 57 図	J-4号住居跡出土石器 (2) (1/3) ……………	95
第 4 図	グリッド設定図と試掘状況 ……………	8	第 58 図	J-4号住居跡出土石器 (3) (1/3) ……………	96
第 5 図	三後沢遺跡全体図 (1/1,000) ……………	折り込み	第 59 図	J-5号住居跡 (1/60・1/30) ……………	折り込み
第 6 図	三後沢遺跡の遺構配置図と土層図 (1/500) ……	折り込み	第 60 図	J-5号住居跡のピット深度・残存状況図 (1/60) ……	101
第 7 図	J-1号住居跡 (1/60・1/30) ……………	16	第 61 図	J-5号住居跡遺物出土状況 (1/60) ……………	102・103
第 8 図	J-1号住居跡遺物出土状況 (1/60) ……………	17	第 62 図	J-5号住居跡土器 (部位別) 出土状況 (1/60) ……	104・105
	石器の器種別・石材別グラフ ……………	17	第 63 図	J-5号住居跡遺物接合状況 (1/60) ……………	106
第 9 図	J-1号住居跡出土遺物 (1/3) ……………	18	第 64 図	J-5号住居跡の廃棄ブロックと 個体別出土状況 (1/60) ……………	折り込み
第 10 図	縄文時代の土坑 (4・19号) (1/40) ……………	19	第 65 図	土器の計測と成形 (積みあげ) 技法 ……………	107
第 11 図	同一時期に構築されたと考えられる土坑 (2・6・8・9・11・12号) (1/40) ……	21	第 66 図	J-5号住居跡出土土器 (1) (1/4) ……………	108
第 12 図	同一時期に構築されたと考えられる土坑 (13・14・15・16・17・18号) (1/40) ……	22	第 67 図	J-5号住居跡出土土器 (2) (1/4) ……………	109
第 13 図	同一時期に構築されたと考えられる土坑 (23・24・27・28・29・32・33・34号) (1/40) ……	23	第 68 図	J-5号住居跡出土土器 (3) (1/4) ……………	110
第 14 図	土坑群平面形図 ……………	25	第 69 図	J-5号住居跡出土土器 (4) (1/4) ……………	111
第 15 図	土坑の分類 ……………	26	第 70 図	J-5号住居跡出土土器 (5) (1/4) ……………	112
第 16 図	同一時期に構築されたと考えられる土坑 (42~44号) (1/40) ……………	26	第 71 図	J-5号住居跡出土土器 (6) (1/4) ……………	115
第 17 図	土坑 (45号) (1/40) ……………	27	第 72 図	J-5号住居跡出土土器 (7) (1/4) ……………	116
第 18 図	時期不明の土坑 (1・31・36・38・40・41号) 墓塚 (26号) (1/40) ……………	28	第 73 図	J-5号住居跡出土土器 (8) (1/4) ……………	117
第 19 図	三後沢遺跡第1遺構群の遺構分布図 (1/1,500) ……	30	第 74 図	J-5号住居跡出土土器 (9) (1/3) ……………	119
第 20 図	J-2号住居跡 (1/60) ……………	33	第 75 図	J-5号住居跡出土土器 (10) (1/3) ……………	120
第 21 図	J-2号住居跡遺物出土状況 (1/60) ……………	34	第 76 図	J-5号住居跡出土土器 (11) (1/3) ……………	121
第 22 図	J-2号住居跡出土遺物 (1/3) ……………	35	第 77 図	J-5号住居跡出土土器 (12) (1/3) ……………	122
第 23 図	石器の器種別・石材別グラフ ……………	35	第 78 図	J-5号住居跡出土土器 (13) (1/3) ……………	130
第 24 図	J-3号住居跡 (1/60・1/30) ……………	37	第 79 図	J-5号住居跡出土土器 (14) (1/3) ……………	131
第 25 図	J-3号住居跡遺物出土状況 (1/60) ……………	38	第 80 図	J-5号住居跡出土土器 (15) (1/3) ……………	132
第 26 図	J-3号住居跡出土土器 (1/3) ……………	38	第 81 図	J-5号住居跡出土土器 (16) (1/3) ……………	133
第 27 図	J-4号住居跡 (1/60) ……………	折り込み	第 82 図	J-5号住居跡出土土器 (17) (1/3) ……………	134
第 28 図	J-4号住居跡のピット深度・残存状況図 (1/60) 折り込み		第 83 図	J-5号住居跡出土土器 (18) (1/3) ……………	135
第 29 図	J-4号住居跡拡張変遷図 (1/80) ……………	41	第 84 図	J-5号住居跡石器 (器種別) 出土状況 (1/60) ……	146・147
第 30 図	J-4号住居跡遺物出土状況 (1/60) ……………	42・43	第 85 図	J-5号住居跡出土石器の器種別 石材別グラフ (1) ……………	148
第 31 図	J-4号住居跡土器 (部位別) 出土状況 (1/60) ……	44・45	第 86 図	J-5号住居跡出土石器の器種別 石材別グラフ (2) ……………	149
第 32 図	J-4号住居跡遺物接合状況 (1/60) ……………	46	第 87 図	J-5号住居跡出土石器の器種別 石材別グラフ (3) ……………	150
第 33 図	J-4号住居跡個体別出土状況 (1/60) ……	折り込み	第 88 図	J-5号住居跡出土石器 (1) (1/2・1/3) ……………	151
第 34 図	J-4号住居跡埋没状況 (1/60) ……………	折り込み	第 89 図	J-5号住居跡出土石器 (2) (1/3・1/4) ……………	152
第 35 図	土器の計測と成形 (積みあげ) 技法 ……………	47	第 90 図	J-6号住居跡 (1/60・1/30) ……………	折り込み
第 36 図	J-4号住居跡出土土器 (1) (1/4) ……………	48	第 91 図	J-6号住居跡拡張変遷図 (1/80) ……………	156・157
第 37 図	J-4号住居跡出土土器 (2) (1/4) ……………	49	第 92 図	J-6号住居跡遺物出土状況 (1/60) ……………	158・159
第 38 図	J-4号住居跡出土土器 (3) (1/4) ……………	50	第 93 図	土器の計測と成形 (積みあげ) 技法 ……………	160
第 39 図	J-4号住居跡出土土器 (4) (1/4) ……………	51	第 94 図	J-6号住居跡出土土器 (1) (1/4・1/3) ……………	161
第 40 図	J-4号住居跡出土土器 (5) (1/4) ……………	52	第 95 図	J-6号住居跡出土土器 (2) (1/3) ……………	162
第 41 図	J-4号住居跡出土土器 (6) (1/3) ……………	55	第 96 図	J-6号住居跡出土土器 (3) (1/3) ……………	163
第 42 図	J-4号住居跡出土土器 (7) (1/3) ……………	56	第 97 図	J-6号住居跡出土土器 (4) (1/3) ……………	164
第 43 図	J-4号住居跡出土土器 (8) (1/3) ……………	57	第 98 図	J-6号住居跡出土石器の器種別 石材別グラフ (1) ……………	173
第 44 図	J-4号住居跡出土土器 (9) (1/3) ……………	58	第 99 図	J-6号住居跡出土石器の器種別 石材別グラフ (2) ……………	174
第 45 図	J-4号住居跡出土土器 (10) (1/3) ……………	59	第 100 図	J-6号住居跡出土石器 (1/2・1/3) ……………	175
第 46 図	J-4号住居跡出土土器 (11) (1/3) ……………	71	第 101 図	J-7号住居跡 (1/60・1/30) ……………	177
第 47 図	J-4号住居跡出土土器 (12) (1/3) ……………	72	第 102 図	J-7号住居跡遺物出土状況 (1/60) ……………	178
第 48 図	J-4号住居跡出土土器 (13) (1/3) ……………	73	第 103 図	J-7号住居跡出土土器 (1) (1/4・1/3) ……………	180
第 49 図	J-4号住居跡出土土器 (14) (1/3) ……………	74	第 104 図	J-7号住居跡出土土器 (2) (1/3) ……………	181
第 50 図	J-4号住居跡出土土器 (15) (1/3) ……………	75	第 105 図	J-7号住居跡出土石器の器種別 石材別グラフ (1) ……………	184
第 51 図	J-4号住居跡出土土器 (16) (1/3) ……………	76	第 106 図	J-7号住居跡出土石器の器種別 石材別グラフ (2) ……………	185
第 52 図	J-4号住居跡出土土器 (17) (1/3) ……………	77			
第 53 図	J-4号住居跡石器 (器種別) 出土状況 (1/60) ……	90・91			
第 54 図	J-4号住居跡出土石器の器種別・石材別グラフ (1) ……	92			

第107図	J-7号住居跡出土石器 (1) (1/2) ……………	185
第108図	J-7号住居跡出土石器 (2) (1/3) ……………	186
第109図	縄文時代の陥し穴 (48・50号) (1/40) ……………	188
第110図	縄文時代の陥し穴 (56・64号) (1/40) ……………	189
第111図	陥し穴の平面・断面形図……………	190
第112図	陥し穴分布と条痕文系土器の分布 (1/1,000) ……………	191
第113図	グリッド出土の条痕文系土器 (1/3) ……………	191
第114図	縄文時代の土坑 (52・53・58・59・61・62・65号) (1/40) ……………	194
第115図	Y-1号住居跡炉 (1/30) ……………	196
第116図	Y-1号住居跡 (1/60) ……………	197
第117図	Y-1号住居跡遺物出土状況 (1/60) ……………	198
第118図	Y-1号住居跡出土土器 (1) (1/3) ……………	199
第119図	Y-1号住居跡出土土器 (2) (1/3) ……………	200
第120図	Y-2号住居跡炉 (1/30) ……………	204
第121図	Y-2号住居跡 (1/60) ……………	205
第122図	Y-2号住居跡遺物出土状況 (1/60) ……………	206・207
第123図	各住居跡出土土器の容量グラフ……………	207
第124図	Y-2号住居跡出土土器 (1) (1/3) ……………	208
第125図	Y-2号住居跡出土土器 (2) (1/3) ……………	209
第126図	Y-2号住居跡出土土器 (3) (1/3) ……………	210
第127図	Y-2号住居跡出土土器 (4) (1/3) ……………	211
第128図	Y-3号住居跡 (1/60・1/30) ……………	216
第129図	Y-3号住居跡遺物出土状況 (1/60) ……………	217
第130図	Y-3号住居跡出土土器 (1/3) ……………	218
第131図	Y-4号住居跡 (1/60) ……………	221
第132図	Y-4号住居跡出土土器 (1/3) ……………	222
第133図	Y-5号住居跡 (1/60) ……………	224
第134図	Y-5号住居跡遺物出土状況 (1/60) ……………	225
第135図	Y-5号住居跡出土土器 (1/3) ……………	226
第136図	Y-6号住居跡 (1/60) ……………	228
第137図	Y-6号住居跡遺物出土状況 (1/60) ……………	229
第138図	Y-6号住居跡出土土器 (1) (1/3) ……………	230
第139図	Y-6号住居跡出土土器 (2) (1/3) ……………	231
第140図	Y-7号住居跡 (1/60・1/30) ……………	234
第141図	Y-7号住居跡遺物出土状況 (1/60) ……………	235
第142図	Y-7号住居跡出土土器 (1) (1/3) ……………	236
第143図	Y-7号住居跡出土土器 (2) (1/3) ……………	237
第144図	Y-7号住居跡出土土器 (3) (1/3) ……………	238
第145図	時期不明の土坑 (46・47・51・60号) (1/40) ……………	241
第146図	時期不明の土坑 (1/40) ……………	242

## 十二原II遺跡

第147図	十二原II遺跡全体図 (1/1,000) ……………	折り込み
第148図	十二原II遺跡の遺構配置図と土層図 (1/500) ……………	折り込み
第149図	J-1号住居跡 (1/60) ……………	248
第150図	J-1号住居跡遺物出土状況 (1/60) ……………	249
第151図	J-1号住居跡出土遺物 (1/3) ……………	250
第152図	J-1号住居跡出土石器の器種別 石材別グラフ ……………	251
第153図	炉の構築方法 (1/30) ……………	253
第154図	J-2号住居跡 (1/60・1/30) ……………	254
第155図	J-2号住居跡遺物出土状況 (1/60) ……………	255
第156図	J-2号住居跡出土遺物 (1) (1/4・1/3) ……………	256
第157図	J-2号住居跡出土遺物 (2) (1/3) ……………	257
第158図	J-2号住居跡出土遺物 (3) (1/4) ……………	258
第159図	J-2号住居跡出土石器の器種別 石材別グラフ (1) ……………	258
第160図	J-2号住居跡出土石器の器種別 石材別グラフ (2) ……………	259
第161図	J-3号住居跡 (1/60) ……………	262
第162図	J-3号住居跡出土遺物 (1/3) ……………	263
第163図	J-3号住居跡出土石器の器種別 石材別グラフ ……………	264

第164図	J-4号住居跡 (1/60) ……………	265
第165図	J-4号住居跡遺物出土状況 (1/60) ……………	266
第166図	J-4号住居跡出土遺物 (1) (1/4・1/3) ……………	267
第167図	J-4号住居跡出土遺物 (2) (1/2・1/3) ……………	268
第168図	J-4号住居跡出土石器の器種別・石材別グラフ ……………	269
第169図	J-5号住居跡 (1/60) ……………	271
第170図	J-5号住居跡遺物出土状況 (1/60) ……………	272
第171図	J-5号住居跡出土遺物 (1/3) ……………	272
第172図	J-5号住居跡出土石器の器種別 石材別グラフ ……………	273
第173図	J-6号住居跡 (1/60・1/30) ……………	274
第174図	J-6号住居跡遺物出土状況 (1/60) ……………	275
第175図	J-6号住居跡出土遺物 (1/3・1/2) ……………	276
第176図	J-6号住居跡出土石器の器種別 石材別グラフ (1) ……………	276
第177図	J-6号住居跡出土石器の器種別 石材別グラフ (2) ……………	277
第178図	J-7号住居跡 (1/60) ……………	278
第179図	J-7号住居跡遺物出土状況 (1/60) ……………	279
第180図	J-7号住居跡出土遺物 (1/2・1/3) ……………	280
第181図	J-7号住居跡出土石器の器種別 石材別グラフ ……………	281
第182図	J-8号住居跡 (1/60) ……………	283
第183図	J-8号住居跡遺物出土状況 (1/60) ……………	284
第184図	J-8号住居跡出土遺物 (1) (1/4) ……………	285
第185図	J-8号住居跡出土遺物 (2) (1/3) ……………	286
第186図	J-8号住居跡出土遺物 (3) (1/3) ……………	287
第187図	J-8号住居跡出土石器の器種別 石材別グラフ ……………	288
第188図	J-9号住居跡 (1/60) ……………	293
第189図	J-9号住居跡遺物出土状況 (1/60) ……………	294
第190図	J-9号住居跡出土遺物 (1/3) ……………	295
第191図	縄文時代住居跡の面積・規模比較グラフ……………	295
第192図	J-9号住居跡出土石器の器種別 石材別グラフ ……………	296
第193図	J-10号住居跡 (1/60) ……………	297
第194図	J-10号住居跡遺物出土状況 (1/60) ……………	298
第195図	J-10号住居跡出土遺物 (1/3・1/2) ……………	299
第196図	J-10号住居跡出土石器の器種別 石材別グラフ ……………	300
第197図	J-11号住居跡 (1/60) ……………	301
第198図	J-11号住居跡出土遺物 (1/3) ……………	302
第199図	配石遺構と出土土器 (1/120・1/4) ……………	303
第200図	縄文時代の土坑 (3・4号) (1/30・1/4) ……………	305
第201図	縄文時代の土坑 (5・6・26・28・29・37号) (1/40) ……………	307
第202図	縄文時代の土坑 (38・8・13・66・68号) (1/40) ……………	308
第203図	縄文時代の土坑 (17号) (1/40) ……………	309
第204図	縄文時代の土坑 (17・5・28・29号) 出土遺物 (1/3・1/4) ……………	311
第205図	縄文時代の屋外埋設土器遺構 (1/20) ……………	312
第206図	屋外埋設土器 (1/4) ……………	313
第207図	陥し穴の名称……………	313
第208図	縄文時代の陥し穴 (7・10・11号) (1/40) ……………	315
第209図	縄文時代の陥し穴 (16・34・22号) (1/40) ……………	316
第210図	縄文時代の陥し穴 (57・43・47号) (1/40) ……………	317
第211図	縄文時代の陥し穴 (59・69・19号) (1/40) ……………	318
第212図	縄文時代の陥し穴 (50・72・73号) (1/40) ……………	319
第213図	縄文時代の陥し穴 (74・75号) (1/40) ……………	320
第214図	Y-1号住居跡 (1/60・1/30) ……………	326
第215図	Y-1号住居跡遺物出土状況 (1/60) ……………	327
第216図	Y-1号住居跡出土土器 (1/3) ……………	328
第217図	Y-2号住居跡 (1/60) ……………	330
第218図	Y-2号住居跡出土土器 (1/3) ……………	331

第219図	Y-3号住居跡 (1/60・1/30) ……………	334	第237図	三後沢遺跡J-4・J-5号住居跡胎土分析試料……………	368
第220図	Y-3号住居跡出土土器 (1/3) ……………	335	第238図	三後沢遺跡J-4・J-5号住居跡試料……………	369
第221図	Y-4号住居跡炉 (1/30) ……………	337	第239図	有舌尖頭器 (1/1) ……………	375
第222図	Y-4号住居跡 (1/60) ……………	338	第240図	県内出土の有舌尖頭器 (1/2) ……………	376
第223図	Y-4号住居跡遺物出土状況 (1/60) ……………	339	第241図	群馬県内出土の弥生時代の鉄鏃 (1/1) ……………	387
第224図	Y-4号住居跡出土土器 (1) (1/3) ……………	340	第242図	縄文時代前期前葉～中葉にかけての集落の広がり……………	389
第225図	Y-4号住居跡出土土器 (2) (1/3) ……………	341	第243図	三後沢遺跡・縄文時代住居跡の床面レベル (1/60) ……	390
第226図	Y-4号住居跡出土土器 (3) (1/3) ……………	342	第244図	縄文時代中期集落の広がり (1/1,500) ……………	391
第227図	Y-5号住居跡 (1/60) ……………	348	第245図	三後沢遺跡・弥生時代住居跡の床面レベル (1/60) ……	392
第228図	Y-5号住居跡出土土器 (1/3) ……………	348	第246図	弥生時代後期集落の広がり (1/1,500) ……………	393
第229図	Y-6号住居跡 (1/60) ……………	349	第247図	A群陥し穴の模式図……………	401
第230図	Y-6号住居跡出土土器 (1/3) ……………	350	第248図	縄文時代の陥し穴分布・配置図 (1/1,000) ……折り込み	
第231図	竪穴状遺構 (1/60) ……………	351	第249図	陥し穴の平面・断面形図 (1/60) ……………	404
第232図	時期不明の土坑(15・23・24・25・30・41号) (1/40) ……	353	第250図	縄文時代前期前葉住居跡の広がり」と土器分布図……………	409
第233図	時期不明の土坑(48・52・53・54・56号) (1/40) ……	354	第251図	十二原II遺跡・縄文時代住居跡の床面レベル(1/60)……………	410
第234図	時期不明の土坑(60・61・62・63・65・67号) (1/40) ……	355	第252図	縄文時代中期前半の居住域と土器分布図(1/1,500) ……	411
第235図	時期不明の土坑(70・71号) (1/40) ……………	356	第253図	十二原II遺跡・弥生時代住居跡の床面レベル(1/60)……………	412
第236図	風倒木 (14・20号) (1/40) ……………	359	第254図	弥生時代後期集落跡と土器分布図 (1/1,500) ……	413

## PLATES

### 三後沢遺跡 (遺構写真)

- PL. 1 J-1号住居跡・土坑 (4・19・2・6号)  
 PL. 2 土坑 (11～18号)  
 PL. 3 土坑 (23・24・27～29・32～34号)  
 PL. 4 J-2号住居跡 J-3号住居跡  
 PL. 5 1. J-4号住居跡 2. 調査スナップ  
 PL. 6 1・2. J-4号住居跡遺物出土状況  
 PL. 7 1・2・3. J-4号住居跡遺物出土状況  
 PL. 8 1. J-5号住居跡 2. J-5号住居跡炉  
 PL. 9 1・2. J-5号住居跡遺物出土状況  
 PL. 10 1・2. 廃棄第2ブロック 3. 廃棄第1ブロック  
 PL. 11 1. J-6号住居跡 2. J-6号住居跡炉  
 PL. 12 1. J-7号住居跡 2. 遺物出土状況 3. 炉  
 PL. 13 縄文時代の陥し穴 (48・50・56・64号)  
 PL. 14 縄文時代の土坑 (52・53・58・59・61・62・65号)  
 PL. 15 1. Y-1号住居跡 2. 出入口部 3. 遺物出土状況  
 PL. 16 1. Y-2号住居跡 2. 出入口部 3. 遺物出土状況  
 PL. 17 Y-3号住居跡 Y-4号住居跡  
 PL. 18 Y-5号住居跡 Y-6号住居跡  
 PL. 19 1・3. Y-6号住居跡遺物出土状況 2. 出入口部  
 PL. 20 1. Y-7号住居跡 2. 遺物出土状況  
 PL. 21 1. Y-7号住居跡炉 2・3. 遺物出土状況

### 十二原II遺跡 (遺物写真)

- PL. 62 J-1号住居跡出土遺物  
 PL. 63 J-2号住居跡出土遺物  
 PL. 64 J-3・J-4号住居跡出土遺物  
 PL. 65 J-5・6・7・8号住居跡出土遺物  
 PL. 66 J-8・9・10・11号住居跡と配石遺構出土遺物  
 PL. 67 3・4号土坑出土遺物  
 PL. 68 3・4号土坑出土遺物 (展開写真)  
 PL. 69 17・5・28号土坑出土遺物 屋外埋設土器  
 PL. 70 Y-1・2・3・4号住居跡出土遺物  
 PL. 71 Y-4・5・6号住居跡出土遺物  
 2. J-11号住居跡  
 PL. 30 1. 配石 2・3. 配石と土器出土状況  
 PL. 31 1. 3号土坑遺物出土状況 2. 4号土坑遺物出土状況  
 3. 5号土坑セクション 土坑 (6・26・28号)  
 PL. 32 土坑セクション・土坑 (29・37・38・8・13号)  
 PL. 33 土坑 (66・68・17号) 屋外埋設土器  
 PL. 34 縄文時代の陥し穴 (7・10・11・16・34・22号)  
 PL. 35 縄文時代の陥し穴 (57・43・47・59・50・69号)

### PL. 36 縄文時代の陥し穴 (72～75号)

- PL. 37 1. Y-1号住居跡 2. Y-2号住居跡  
 PL. 38 1. Y-3号住居跡 2. Y-4号住居跡  
 PL. 39 1. Y-5号住居跡 2. Y-6号住居跡  
 3. 竪穴状遺構

### 三後沢遺跡 (遺物写真)

- PL. 40 J-4・J-5号住居跡出土土器  
 PL. 41 Y-2・Y-6・Y-7号住居跡出土土器  
 PL. 42 J-1・2・3・4号住居跡出土遺物  
 PL. 43 J-4号住居跡出土遺物  
 PL. 44 J-4号住居跡出土遺物  
 PL. 45 J-4号住居跡出土遺物  
 PL. 46 J-4号住居跡出土遺物  
 PL. 47 J-4号住居跡出土遺物  
 PL. 48 J-5号住居跡出土遺物  
 PL. 49 J-5号住居跡出土遺物  
 PL. 50 J-5号住居跡出土遺物  
 PL. 51 J-5号住居跡出土遺物  
 PL. 52 J-5号住居跡出土遺物  
 PL. 53 J-5号住居跡出土遺物 (展開写真)  
 PL. 54 J-5号住居跡出土遺物 (展開写真・X線写真)  
 PL. 55 J-5号住居跡出土遺物  
 PL. 56 J-5号住居跡出土遺物  
 PL. 57 J-6号住居跡出土遺物 (X線写真)  
 PL. 58 J-7号住居跡出土遺物  
 PL. 59 Y-1・Y-2号住居跡出土遺物  
 PL. 60 Y-2・3・4・5・6号住居跡出土遺物  
 PL. 61 Y-6・Y-7号住居跡出土遺物  
 PL. 62 Y-7号住居跡出土遺物

### 十二原II遺跡 (遺物写真)

- PL. 62 J-1号住居跡出土遺物  
 PL. 63 J-2号住居跡出土遺物  
 PL. 64 J-3・J-4号住居跡出土遺物  
 PL. 65 J-5・6・7・8号住居跡出土遺物  
 PL. 66 J-8・9・10・11号住居跡と配石遺構出土遺物  
 PL. 67 3・4号土坑出土遺物  
 PL. 68 3・4号土坑出土遺物 (展開写真)  
 PL. 69 17・5・28号土坑出土遺物 屋外埋設土器  
 PL. 70 Y-1・2・3・4号住居跡出土遺物  
 PL. 71 Y-4・5・6号住居跡出土遺物

〔編集〕

菊池 実

〔執筆者〕

相京建史 (群馬県埋蔵文化財調査事業団)

麻生敏隆 ( // )

飯島静男 (群馬県地質研究会)

菊池 実 (群馬県埋蔵文化財調査事業団)

神保侑史 ( // )

中沢 悟 ( // )

花岡 紘一 (群馬県工業試験場)

三宅敦気 (利根郡月夜野町教育委員会)

〔写真撮影・資料提供〕

相京建史 (遺構写真)

中沢 悟 ( // )

菊池 実 ( // )

佐藤元彦 (遺物写真 群馬県埋蔵文化財調査事業団)

上毛新聞社

根井康雄

アジア航測株式会社

竝木賢二 (展開写真)

野田浩二 ( // )

(株)測 研

〔保存科学〕

関 邦一 (群馬県埋蔵文化財調査事業団)

北爪健二 ( // 嘱託員)

〔図版作成〕

大友幸江 (群馬県埋蔵文化財調査事業団整理補助員)

金子ミツ子 ( // )

末吉千枝子 ( // )

高橋順子 ( // )

田村千種 ( // )

戸神晴美 ( // )

森永 保 ( // )

高橋裕子 ( // )

新井悦子 ( // 嘱託員)

〔事業団内協力者 昭和57年4月～昭和61年3月〕

小林起久治 白石保三郎 梅沢重昭 近藤平志

大沢秋良 松本浩一 上原啓巳 細野雅男

神保侑史 秋池 武 平野進一 定方隆史

国定 均 笠原秀樹 須田朋子 吉田有光

柳岡良宏 佐藤明人 大江正行 小野和之

桜岡正信 山口逸弘 岩崎泰一 下城 正

女屋和志雄 関 晴彦 飯島義雄 石守 晃

新井順二

とりわけ第2課課長秋池 武氏には遺構・遺物について種々御教示を頂きました。厚く御礼申し上げます。

三後沢遺跡・十二原II遺跡の内容抄録

群 馬	<p>菊池 実編集 『三後沢遺跡・十二原II遺跡』 1986(昭和61)年3月(群馬県埋蔵文化財調査事業団(〒377勢多郡北橋村大字下箱田784の2、TEL 0279-52-2511)) A4判オフセット、本文416頁、折り込み8枚、写真図版72頁、付図1枚</p>
<p>縄 文 (早期後半 前 期 中 期)</p> <p>弥 生 (後 期)</p>	<p>本書は、一般国道17号線(月夜野バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。本書に所収の遺跡名と発掘調査地の所在地番は以下のとおりである。</p> <p>三後沢(みつござわ)遺跡:利根郡月夜野町大字下津字北原、字三後沢 十二原II(じゅうにはら)遺跡:利根郡月夜野町大字上津字十二原</p> <p>調査は三後沢遺跡・十二原II遺跡ともに昭和57年4月19日～昭和58年3月31日まで行われ、発掘面積は三後沢遺跡約8,040㎡、十二原II遺跡約6,870㎡である。両遺跡とも赤谷川・利根川の右岸段丘上に立地し、標高432～436mである。</p> <p>三後沢遺跡から検出された遺構は、縄文時代早期後半の陥し穴4基、縄文時代前期前葉(関山期)の住居跡2軒、前期中葉(有尾系)の住居跡3軒、縄文時代の土坑7基、弥生時代後期の住居跡7軒、時期不明の土坑36基、風倒木23基である。とりわけ前期中葉の住居は大型であり、覆土から完形品を含む多量の遺物が出土したことで注目されている。</p> <p>十二原II遺跡から検出された遺構は、縄文時代の陥し穴17基、土坑14基、前期前葉(関山期)の住居跡4軒、前期中葉の住居跡7軒と配石遺構、弥生時代後期の住居跡6軒、時期不明の堅穴状遺構1基、土坑19基、風倒木等である。</p> <p>本書の4章では自然科学的分析—石材の同定にあたって・黒曜石分析・縄文土器の胎土分析・縄文(繊維)土器のX線写真撮影—が行われている。5章では成果と問題点—有舌尖頭器について・縄文時代の石器について・弥生時代の遺構と遺物について・三後沢遺跡の集落変遷・十二原II遺跡検出の陥し穴群について・十二原II遺跡の集落変遷—が収録されている。</p>

\*本抄録は岡田茂弘氏(国立歴史民俗博物館教授)の提案にもとづいて作成したものである(岡田茂弘「文献の情報化に向けて」『月刊 考古学ジャーナル No.253』1985)。なお、抄録作成にあたっては、考古学情報連絡協議会編集の『考古学文献抄録カード』を参考にさせていただきました。

三後沢遺跡・十二原II遺跡の調査・整理に伴う普及活動

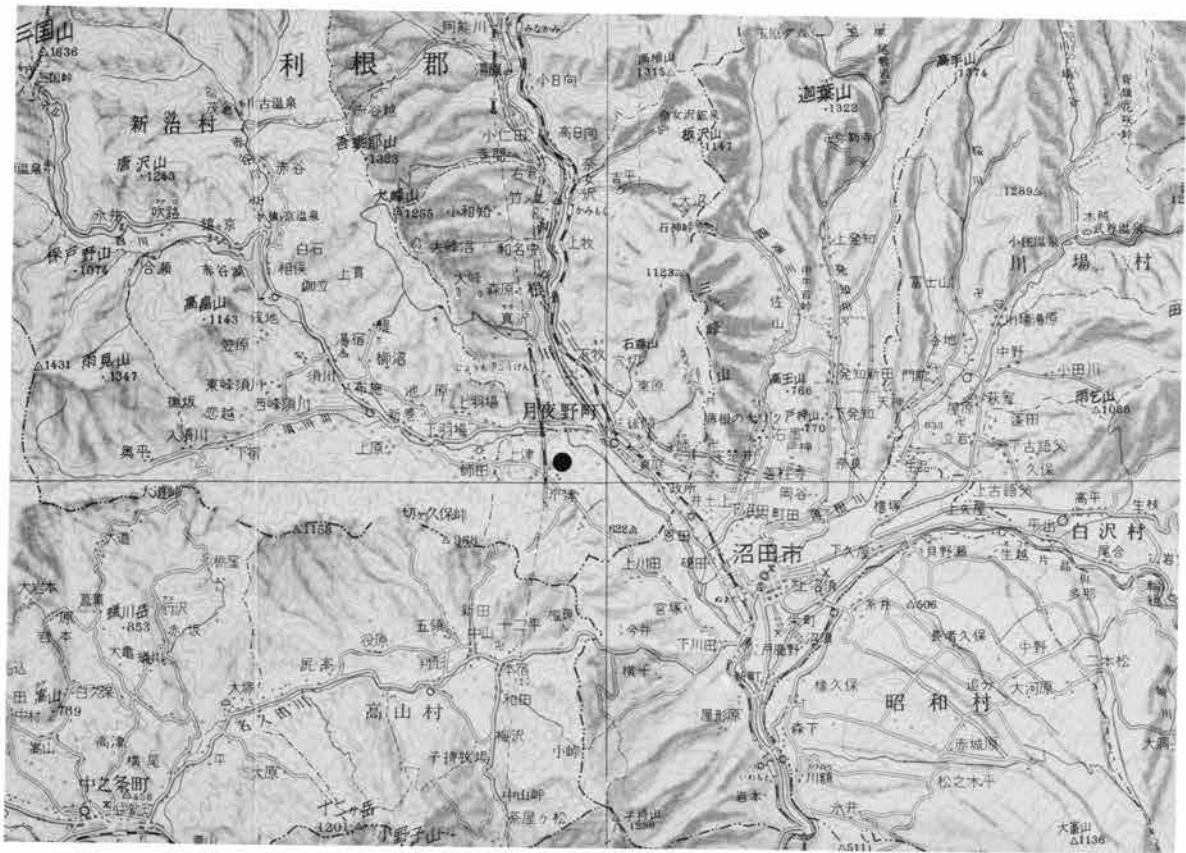
整理期間中、当事業団の普及活動の一環として実施されている出土文化財巡回展示会に、当遺跡出土遺物の一部を公開し、多くの成果をあげることができた。

- 1) 十二原II遺跡現地説明会  
期間 昭和57年10月9日
- 2) 昭和59年度出土文化財巡回展示会  
会場 利根沼田文化会館展示室(沼田市)  
期間 昭和59年9月22日～24日
- 3) 昭和60年度出土文化財巡回展示会  
会場 富岡市中央公民館  
期間 昭和60年6月7日～9日

さらに、群馬県立歴史博物館の第21回企画展(昭和60年7月20日～8月31日)、月夜野バイパス開通祝賀会(於:利根沼田広域観光センター、昭和60年9月30日)にも遺物の一部を展示し好評を博している。



# 1章 調査と環境



第1図 遺跡の位置 (1 : 200,000)

利根郡月夜野町を通過する一般国道17号は、近年の交通量の増加により交通渋滞が著しかった。とりわけ月夜野町区間は道路幅員が狭く、狭隘な地形のため、線形も悪く交通渋滞に拍車をかけている。

月夜野バイパスは如上の交通渋滞の対策として計画されたものであり、同時に関越自動車道新潟線の月夜野インターチェンジを接続させることにより、交通結接点として重要な役割を担うことを目的としたものである。総延長は5.6kmであり起点は沼田市井土上町、終点を利根郡新治村羽場に置く。

本バイパスの埋蔵文化財発掘調査については、計画が明らかとなった段階で群馬県教育委員会（文化財保護課）により埋蔵文化財分布調査が実施され、県指定史跡「名胡桃城跡」を含む13箇所を包蔵地が確認された。その後、路線決定の段階で下記のA～Fの6箇所が調査対象区域となり、これについては昭和56年4月3日付けにて建設省と群馬県教育委員会との間で「一般国道17号（月夜野バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」が締結された。この協定に基づき同年より群馬県教育委員会の委託を受けて（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施した。

昭和56年度の調査は、A・B地区（城平・諏訪遺跡）が対象となり、これが調査報告書は昭和59年度に刊行した。

昭和57年度の調査はC・D地区（三後沢・十二原II遺跡）が対象となった。この調査区の具体的な調査工程は同年4月17日に、県庁において建設

省・県教委文化財保護課・当事業団の三者で協議が行われ、当該年度は4月20日より調査に着手することで工事工程・調査工程が調整された。そして4月19日には月夜野町下津にて地元の月夜野バイパス対策委員会及び地権者会に、建設省共々工事工程・調査工程の説明を行い、了解を得て調査に着手した。

当該年度は夏季に台風が2度ほど本県に襲撃し、そのため遺跡地は2度にわたり被害を蒙った。特に十二原II遺跡は冠水し、三後沢寄りの崖端が崩壊し、遺跡の一部が被害を受けた。しかし、かかる被害にもかかわらず調査は順調に進捗し、調査工程の後半においては昭和58年度調査予定のE・F地区の試掘調査及び当初調査計画に入っていなかった赤谷川右岸下位段丘面に若干の土器片の分布が認められたところから、建設省の了解を得て遺構有無確認のための試掘調査を行なった。

赤谷川右岸下位段丘面の試掘調査は試掘対象地域の30%に相当するトレンチを入れたが、土器片等は確認されたものの遺構は存在せず、調査の対象外とすることにした。

試掘調査及び発掘調査は12月10日で終了し、以後は当事業団にて基本整理を行なった。

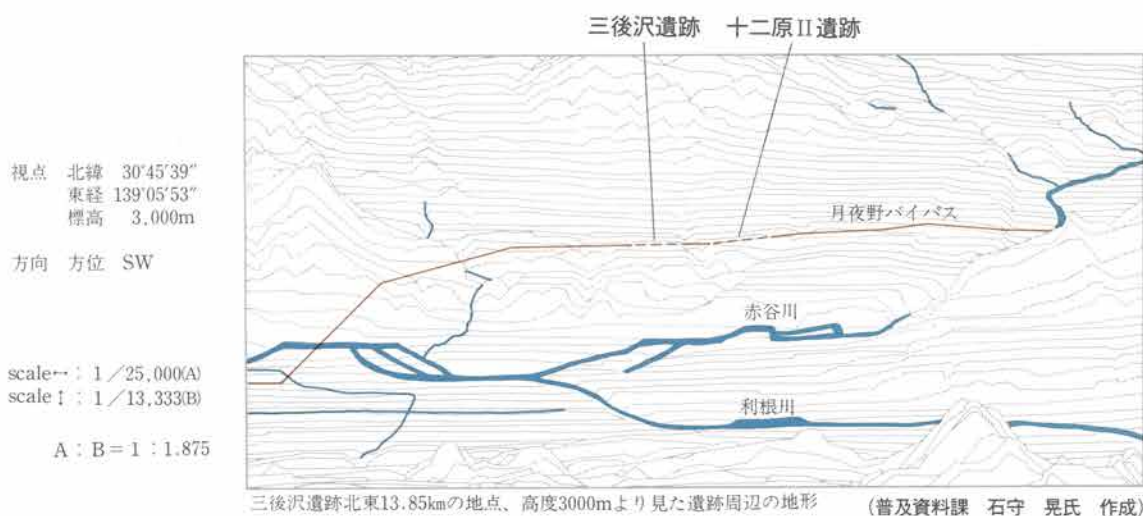
昭和57年度に調査した遺跡の本格的な整理は昭和59・60年度に、これを行なった。整理は当初予想した工程より縄文土器の復元・実測等で難渋し事業の進捗が心配されたが、担当及び関係職員の努力で、以下に報告するところの調査報告書を作成することができた。

地 点	A	B	C	D	E	F
st. No.	148～159	160～165	176～190	198～203	215～225	227～240
調査対称時代	縄文・城址	縄文～古墳	縄文～平安	縄文・平安	平 安	平 安
面 積 (m <sup>2</sup> ) (実面積)	5,720 (6,600)	3,130 (2,250)	7,500 (8,040)	2,250 (6,870)	5,200 (5,520)	6,300 (9,500)

遺跡の立地する利根郡月夜野町は、県北の山間地に位置する。北は水上町を経て谷川岳へと続き、北東には標高2156mの武尊山が位置し、西北は新治村を経て三国峠、新潟県へと連なる。南東は沼田市を経て赤城山を望み、南西は吾妻へ越える峠をいくつか持つ名胡桃の丘陵が連なる。このように月夜野町は四方を山に囲まれた地区であり、さらに町を東西に2分するように利根川が南北に走り、町の西側はさらに赤谷川により南北に分けられる。この利根川と赤谷川は町のほぼ中央で合流し、利根川として赤城山の西を流れて行く。赤谷川が利根川に合流する手前には、黒岩溪谷がある。この溪谷は赤谷川が緑色凝灰岩の味城山南麓を浸蝕して作ったものであり、全長約2kmほど続く、小袖橋、衣掛松、向山、蚕影山、扇岩、梯岩、一坏清水、亀甲岩の8つの奇岩は黒岩八景と称されている。このように月夜野町は、多くの山と川及び堆積と浸蝕をくり返す河川よりできた河岸段丘及び山より流出した土砂の堆積により形成された扇状地等により成り立っている。遺跡の立地する上津・下津地区は、通称名胡桃平と呼ばれている。この平地は赤谷川の浸蝕により形成された右岸の河岸段丘と下津大清水及び盆棚地区等より県道小日向・上津・沼田線付近までの間に流出した土砂の堆積より形成された扇状地の一部を含めた形で成り立っている。

河岸段丘は大きく分けて4段存在している。河川敷のやや上面にあたり、現在一部が水田として利用されている面を第4段丘面とし、高い段丘面を第1～第3段丘面と呼称する。第4段丘面は標高400m前後、第3段丘面は標高420m前後、第2段丘面は標高430m前後、第1段丘面は標高440～450mである。この段丘は赤谷川右岸に面した地区に多く発達しており、赤谷川、利根川との合流地点の右岸では3段の河岸段丘となっている。この段丘面は標高360m前後となっており、名胡桃地区の段丘面としては最も低い。ここの土地利用は段丘面西側の湧水地帯に多くの集落が営なまれ、一段低い東側が水田として利用されている。扇状地

は沢落林道が山の急傾斜から緩傾斜へ向かう変換した部分付近の大清水、後直道、見山、朽沢、盆棚、権現地区等より始まり、その部分の標高は約600mである。扇中央部大部分が桑畑として利用されており、標高は500m前後であり、幅は約800mである。扇端部は湧水が多く、多くの集落と水田が作られており、この部分に県道が走っている。標高は450m付近であり、幅は1.6km前後と思われる。ここでの湧水は小河川を作り、扇端部よりさらに低い東側の平地へと流れて行き、浅い沢がいくつかの深い沢へとまとまり、最終的には4つの深く大きい沢へと発展し、赤谷川と利根川の合流地点へと流れ出している。この沢は北より原沢、中後沢、後沢、湯舟沢と呼称されている。これらの沢は名胡桃平東端部においては幅約100m、深さ約80mにも大きくなって下津地区の河岸段丘を大きく掘り込み平地を分断している。この沢はやがて一段低い小川島の段丘面へと流れて行き、利根川へ合流して行く。三後沢遺跡・十二原Ⅱ遺跡および初年度に調査された城平遺跡・諏訪遺跡は、扇状地扇端部の外側を大きく取り囲むように調査された遺跡であり、この地区は過去において、一つの平地としてつながっていたものと思われる。それがこのような沢の発達により分断され、独立した平地の様相を呈しているのである。発掘調査の結果、縄文・弥生時代の住居跡、土坑、陥し穴等が多く検出された。しかしそれらの遺構は調査区全面に分布していたのではなく、各年度とも調査区の中で最も標高の高い北側部分に圧倒的に多く検出され、中央部および南側部には少ないという結果がでたのである。これは三後沢遺跡や城平遺跡等において、調査区中央部に湧水が認められたこと等を考え合わせると、竪穴住居は水や湿気を防ぐためにより標高が高く、水位の低い北西側の地域に作られたためではないだろうか。



第2図 遺跡周辺鳥瞰図

### 3

## 遺跡の歴史的環境

月夜野町地内における考古学的調査は、昭和10年に県下一斉に行われた古墳の分布調査を嚆矢とする。この調査によって当地域の旧古馬牧地区の師・後閑を中心<sup>こゝろ</sup>に97基の古墳が、旧桃野地区の塚原を中心<sup>つか</sup>に61基の古墳が明らかにされている。このうち塚原古墳群（第3図・38）については、戦後の昭和28年に群馬大学による実測調査が行われた。昭和16年には山崎義男氏により水沼・真沢の窯跡が紹介されている。戦後に入ると、さきの塚原古墳群と同時調査された天神遺跡（同図・37）、昭和30年には八束脛洞窟（同図・39）の紹介が山崎義男氏によりなされている。昭和45年から46年にかけて洞窯跡が井上唯男氏によって調査された。昭和48年以降からは上越新幹線建設に伴う調査、昭和54年には関越自動車道建設に伴う大規模調査が始まり、さらに56年からは月夜野バイパス建設工事に伴う発掘調査が加わった。

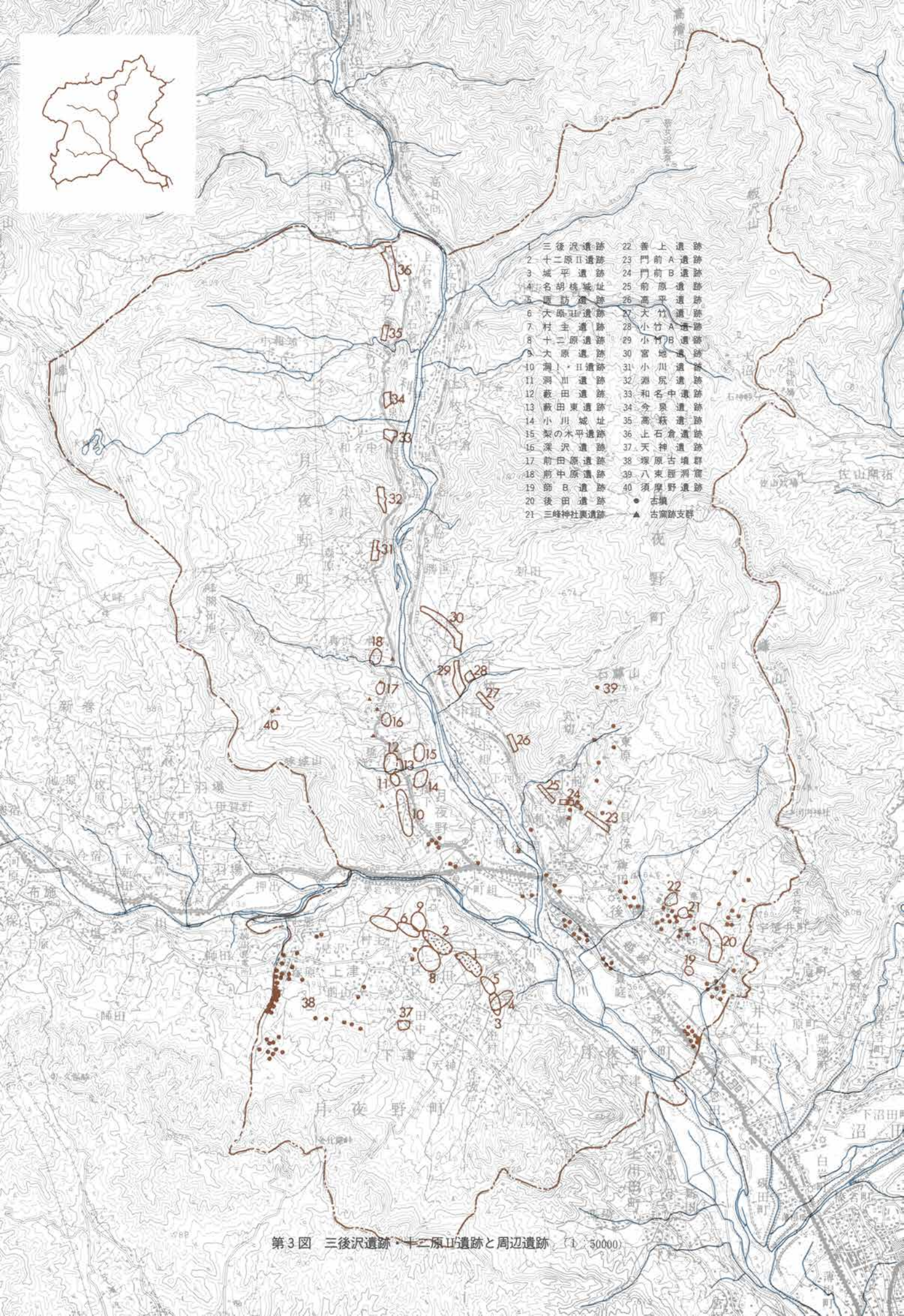
当地域における旧石器時代の遺跡は、利根川左岸の後田遺跡を始め、善上遺跡（同図・22）・三峰神社裏遺跡（同図・21）・大竹遺跡（同図・27）等で検出されている。

縄文時代の遺跡は、月夜野バイパスに関連した6遺跡（同図・1～3・5～7）すべてから検出

されている。早期から前期にかけての構築と考えられる陥し穴も各遺跡から検出されているが、その形態や規模、配置にいたるまで、遺跡毎に差異が認められ大変興味深い在り方となっている。前期から中期の集落は当遺跡を始め、利根川左岸の善上遺跡でも調査された。また中期末の敷石住居跡1軒が梨の木平遺跡（同図・15）から、後期の配石遺構が深沢遺跡（同図・16）から検出されているが、この配石遺構は南北18m、東西17mの規模で、幅約6mの河原石の帯がやや楕円状にめぐっている。配石遺構は形状・規模等を異にする約34基の小配石の集合体である。

弥生時代の遺跡は、中期の遺物や人骨・装飾品等が出土している八束脛洞窟がある。後期樽式土器を伴う住居跡は、当遺跡の他に諏訪遺跡（同図・3）で1軒、大原II遺跡（同図・6）3軒、大原遺跡（同図・9）2軒、十二原遺跡1軒、藪田遺跡1軒検出されているが、利根川・赤谷川が合流する部分の利根川右岸段丘上に集中して発見されている。

なお、古墳時代以降の遺跡については、『大原II遺跡・村主遺跡』の報告書中に詳述してあるので本書では割愛した。



- |    |         |    |        |
|----|---------|----|--------|
| 1  | 三後沢遺跡   | 22 | 善上遺跡   |
| 2  | 十二原II遺跡 | 23 | 善上A遺跡  |
| 3  | 城平遺跡    | 24 | 善上B遺跡  |
| 4  | 名胡桃城址   | 25 | 前原遺跡   |
| 5  | 原訪遺跡    | 26 | 高平遺跡   |
| 6  | 大原山遺跡   | 27 | 大竹遺跡   |
| 7  | 村主遺跡    | 28 | 小竹A遺跡  |
| 8  | 十二原遺跡   | 29 | 小竹B遺跡  |
| 9  | 大原遺跡    | 30 | 小宮地遺跡  |
| 10 | 洞川・II遺跡 | 31 | 小川遺跡   |
| 11 | 洞川遺跡    | 32 | 淵尻遺跡   |
| 12 | 藪田遺跡    | 33 | 和名中遺跡  |
| 13 | 藪田東遺跡   | 34 | 今泉遺跡   |
| 14 | 小川城址    | 35 | 高上遺跡   |
| 15 | 梨の木平遺跡  | 36 | 上石倉遺跡  |
| 16 | 深沢遺跡    | 37 | 天神遺跡   |
| 17 | 前田原遺跡   | 38 | 塚原古墳群  |
| 18 | 前中原遺跡   | 39 | 八束野洞窟  |
| 19 | 節B遺跡    | 40 | 須野遺跡   |
| 20 | 後田遺跡    |    | ● 古墳   |
| 21 | 三峰神社裏遺跡 |    | ▲ 古蹟支群 |

第3図 三後沢遺跡・十二原II遺跡と周辺遺跡 (1/30000)

周辺遺跡一覧表（発掘調査された遺跡）

No.	遺跡名	所在地	調査年度 面積	遺跡の概要	文献
1	三後沢遺跡	大字下津字北原、字三後沢	昭和57年 8,040m <sup>2</sup>	縄文時代陥し穴4基、前期前葉住居跡2軒、前期中葉住居跡3軒、弥生時代後期住居跡7軒他	本書所収
2	十二原II遺跡	大字上津字十二原2152他	昭和57年 6,870m <sup>2</sup>	縄文時代陥し穴17基、前期前葉住居跡4軒、中期前葉住居跡7軒と配石、弥生後期住居跡6軒	本書所収
3	城平遺跡	大字下津字城平3491-2他	昭和56年 6,600m <sup>2</sup>	利根川・赤谷川右岸段丘上。縄文時代前期住居跡1軒・土坑5基、名胡桃城址の馬出掘の調査。掘立柱建物址5棟、土坑5基。	岩崎泰一編『城平遺跡・諏訪遺跡』1984 群馬県埋蔵文化財調査事業団
4	名胡桃城址	大字下津字城平	昭和56年	利根川右岸段丘上の崖端を利用して構築されている戦国期城郭。	〃
5	諏訪遺跡	大字下津字諏訪3376他	昭和56年 2,250m <sup>2</sup>	利根川・赤谷川右岸段丘上。縄文時代陥し穴29基・貯蔵穴17基、弥生時代後期住居跡1軒、古墳時代後期住居跡6軒、土坑2基、溝1条。	〃
6	大原II遺跡	大字上津字大原955-1他	昭和58年 5,520m <sup>2</sup>	利根川・赤谷川右岸段丘上。縄文時代陥し穴22基・貯蔵穴4基、弥生時代後期住居跡3軒。大原遺跡とは同一遺跡として理解できる。	中沢 悟編『大原II遺跡・村主遺跡』1986 群馬県埋蔵文化財調査事業団
7	村主遺跡	大字上津字大原955-2他	昭和58年 9,500m <sup>2</sup>	利根川・赤谷川右岸段丘上。縄文時代陥し穴16基・土坑1基、奈良時代住居跡18軒、平安時代住居跡16軒、掘立柱建物址5棟他。	〃
8	十二原遺跡	大字上津字十二原2255-1他	昭和48年	利根川・赤谷川右岸段丘上。縄文時代中期の遺物散布地、弥生時代後期の住居跡1軒、古墳時代前半の住居跡1軒、平安時代住居跡1軒他。	下城 正編『十二原遺跡・大原遺跡・前中原遺跡』1982 群馬県埋蔵文化財調査事業団
9	大原遺跡	大字上津字大原929他	昭和48・49年	利根川・赤谷川右岸段丘上。縄文時代の土坑6基、弥生時代後期住居跡2軒、平安時代の住居跡1軒、溝1条。	〃
10	洞I・II遺跡	大字月夜野字洞1369,1442他	昭和51・53年	I遺跡—平安時代の住居跡2軒、近世の井戸・溝・土坑多数。II遺跡—中・近世の掘立柱建物18棟、近世鍛冶跡1基。	群馬県教育委員会『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報IV』1978 群馬県教育委員会『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報VI』1980
11	洞III遺跡	大字月夜野字洞1506他	昭和52・53年 7,500m <sup>2</sup>	味城山の東麓が緩やかに広がった地域に位置。平安時代の住居跡7軒、中・近世の掘立柱建物約85棟、土坑約40基、竪穴状遺構1基、溝3条、井戸9基。	群馬県教育委員会『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報V』1979 群馬県教育委員会『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報VI』1980
12	藪田遺跡	大字月夜野字藪田1757他	昭和52・53年	未城山東麓袖部に接する。弥生時代住居跡1軒、平安時代住居跡10軒、中・近世掘立柱建物群。	下城 正・関 晴彦編『藪田遺跡』1985 群馬県埋蔵文化財調査事業団
13	藪田東遺跡	大字月夜野字藪田1756他	昭和54年 5,600m <sup>2</sup>	藪田遺跡に隣接。粘土採掘坑を伴う平安時代集落。住居跡8軒、土坑6基、近世の掘立柱建物6棟・土坑21基。	原 雅信編『藪田東遺跡』1982 群馬県埋蔵文化財調査事業団
14	小川城址	大字月夜野1132	昭和55年	利根川右岸段丘端に築かれた戦国期城郭。二の丸推定地の一部を調査。掘立柱建物7棟、柱列9列、道路配石遺構1条、土坑15基。	相京建史編『小川城址』1985 群馬県埋蔵文化財調査事業団
15	梨の木平遺跡	大字月夜野字藪田	昭和51年	利根川右岸段丘上。縄文時代中期末葉の敷石住居跡1軒、弥生時代の土坑5基、平安時代の住居跡1軒。	能登 健・下城 正『梨の木平遺跡』1977 群馬県教育委員会
16	深沢遺跡	大字月夜野字深沢2111他	昭和51・54年 7,500m <sup>2</sup>	利根川右岸段丘上。縄文時代中期後半の住居跡1軒、縄文中期の土坑37基、後期の配石遺構43基・土坑25基、平安時代の住居跡2軒他。	下城 正・西田健彦・新井順二『群馬県深沢遺跡配石遺構』『日本考古学年報32』1982 日本考古学協会
17	前田原遺跡	大字月夜野字前田原2397他	昭和53年 5000m <sup>2</sup>	平安時代の住居跡1軒、中・近世の掘立柱建物2棟、溝状遺構3条、土坑3基。	群馬県教育委員会『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報IV』1980
18	前中原遺跡	大字小川字前中原18他	昭和50・51年	大峰山系の東南麓末端に位置。縄文時代早期の炉穴4基、前期前半の住居跡4軒、平安時代の住居跡1軒、土坑35基、墓壇4基。	下城 正編『十二原遺跡・大原遺跡・前中原遺跡』1982 群馬県埋蔵文化財調査事業団
19	師B遺跡	大字師・政所	昭和56年 15,861m <sup>2</sup>	三峰山東麓裾部。古墳時代鬼高期住居跡約70軒、奈良時代真間期4軒、近世墓壇、時期不明の土坑4基、溝他。	平野進一『師B遺跡』『年報1』1984 群馬県埋蔵文化財調査事業団

No.	遺跡名	所在地	調査年度 面積	遺跡の概要	文献
20	後田遺跡	大字師字後田・青岳他	昭和56・57年 27,000㎡	三峰山の南麓。旧石器時代約20箇所のユニット、縄文時代前期の住居跡9軒・土坑30基（陥し穴3基）、古墳時代後期集落、奈良・平安集落他。	大江正行・神谷佳明・麻生敏隆「後田遺跡」『年報2』1985 群馬県埋蔵文化財調査事業団
21	三峰神社裏遺跡	大字師字中堀	昭和57・58年 12,400㎡	旧石器時代の遺物、縄文時代前期住居跡15軒・土坑多数、古墳1基、平安時代住居跡1軒・掘立柱建物1棟、中・近世の土坑、塚5基。	中村富夫・間庭 稔・三宅敦気「三峰神社裏遺跡・大友館址遺跡」1986 月夜野町教育委員会
22	善上遺跡	大字師字八幡他	昭和57・58年 6,600㎡	旧石器時代遺物集中箇所11、縄文時代前期住居跡15軒・土坑多数、古墳時代住居跡1軒・古墳2基、中・近世の土坑。	中村富夫・間庭 稔・三宅敦気「善上遺跡」1986 月夜野町教育委員会
23	門前A遺跡	大字後閑字門前	昭和57・58年 3,544㎡	利根川左岸に存在する小扇状地に位置。古墳時代の住居跡7軒、奈良時代の住居跡4軒、平安時代の住居跡5軒、時期不明2軒。	月夜野町遺跡調査会「門前A遺跡」『関越自動車道（新潟線）埋蔵文化財発掘調査報告書』1985
24	門前B遺跡	大字後閑字門前	昭和57年	三峰山麓の観音沢及び寺沢の両河川によって形成された扇状地の西端。遺構は検出されなかった。	月夜野町遺跡調査会「門前B遺跡」『関越自動車道（新潟線）埋蔵文化財発掘調査報告書』1985
25	前原遺跡	大字後閑字前原	昭和57年	利根川左岸段丘上。縄文時代中期初頭の土器片出土。	月夜野町遺跡調査会「前原遺跡」『関越自動車道（新潟線）埋蔵文化財発掘調査報告書』1985
26	高平遺跡	大字下牧字高平2293-1他	昭和57・58年 2,070㎡	利根川左岸段丘上。縄文時代の陥し穴2基。	月夜野町遺跡調査会「高平遺跡」『関越自動車道（新潟線）埋蔵文化財発掘調査報告書』1985
27	大竹遺跡	大字下牧字大竹	昭和57・58年 6,870㎡	利根川左岸段丘上。旧石器時代に伴うユニット22箇所、縄文時代の住居跡2軒・土坑33基・集石1基、弥生時代土坑1基、平安住居跡11軒他。	月夜野町遺跡調査会「大竹遺跡」『関越自動車道（新潟線）埋蔵文化財発掘調査報告書』1985
28	小竹A遺跡	大字下牧字小竹	昭和57・58年 1,370㎡	利根川左岸段丘上。旧石器時代、縄文時代の土坑8基。	月夜野町遺跡調査会「小竹A遺跡」『関越自動車道（新潟線）埋蔵文化財発掘調査報告書』1985
29	小竹B遺跡	大字下牧字小竹	昭和57・58年 1,960㎡	利根川左岸段丘上。縄文時代土坑1基、歴史時代の掘立柱建物・畑状遺構・暗渠他。	月夜野町遺跡調査会「小竹B遺跡」『関越自動車道（新潟線）埋蔵文化財発掘調査報告書』1985
30	宮地遺跡	大字下牧字宮地	昭和57・58年 4,964㎡	利根川左岸段丘上。縄文時代の住居跡2軒・土坑15基、掘立柱建物1棟、土坑76基、溝1状、塚他。	月夜野町遺跡調査会「宮地遺跡」『関越自動車道（新潟線）埋蔵文化財発掘調査報告書』1985
31	小川遺跡	大字小川	昭和57年	利根川右岸段丘上。縄文時代前期土器片出土。	月夜野町遺跡調査会「小川遺跡」『関越自動車道（新潟線）埋蔵文化財発掘調査報告書』1985
32	淵尻遺跡	大字小川字淵尻	昭和57・58年 1,250㎡	利根川右岸段丘上。縄文時代前期住居跡1軒・陥し穴11基・貯蔵穴9基・不明4基。	月夜野町遺跡調査会「淵尻遺跡」『関越自動車道（新潟線）埋蔵文化財発掘調査報告書』1985
33	和名中遺跡	大字小川字向原1516他	昭和57年 11,272㎡	利根川右岸段丘上。縄文時代住居跡2軒・土坑82基・竪穴状遺構1基・配石1。土坑82基のうち陥し穴72基、貯蔵穴9基、他1基である。	月夜野町遺跡調査会「和名中遺跡」『関越自動車道（新潟線）埋蔵文化財発掘調査報告書』1985
34	今泉遺跡	大字石倉628他	昭和57・58年 259㎡	利根川右岸段丘上。縄文時代早期の土坑1基、近世村落址の検出。	月夜野町遺跡調査会「今泉遺跡」『関越自動車道（新潟線）埋蔵文化財発掘調査報告書』1985
35	高萩遺跡	大字石倉字高萩916	昭和57年	南向きに開口した谷地の最奥部に位置。遺構・遺物は検出されていない。	月夜野町遺跡調査会「高萩遺跡」『関越自動車道（新潟線）埋蔵文化財発掘調査報告書』1985
36	上石倉遺跡	大字上石倉字洞1313他	昭和57・58年 6,050㎡	利根川右岸段丘上。縄文時代の土坑、平安時代の住居跡、中・近世の掘立柱建物3棟、近世の炭焼窯2基他。	月夜野町遺跡調査会「上石倉遺跡」『関越自動車道（新潟線）埋蔵文化財発掘調査報告書』1985
37	天神遺跡	大字上津字天神2609	昭和28年	如意寺の西方200mの地。古墳時代の住居跡2軒確認。	尾崎喜左雄「月夜野町上津遺跡調査報告」1954
38	塚原古墳群	大字上津字塚原	昭和28年	緩傾斜の小地域に41基分布している。昭和28年に群馬大学が実測調査を実施した。	尾崎喜左雄「古墳文化に現われた地域社会 毛野」『日本考古学講座5 古墳文化』1955
39	八東脛洞窟	大字後閑字穴切	昭和30年	石尊山（標高745m）の中腹に位置。弥生時代中期前半の焼人骨・穿孔の人骨・貝製品・管玉などが発掘あるいは採集されている。	宮崎・外山・飯島「日本先史時代におけるヒトの骨および歯の穿孔について」『群馬県立歴史博物館紀要第6号』1985
40	須摩野遺跡	大字須摩野	昭和56年	大峰山山麓の東面緩傾斜地中にある小高い丘陵地上。縄文時代早期の土坑1基・前期の土坑2基等が調査された。	秋池 武「須摩野遺跡」『緊急文化財調査報告書』1983 群馬県教育委員会

## ① 遺跡名の選定

発掘調査対象地区は、道路幅にそった幅約24m長さ約600mの地区である。調査区内北側に幅約100m深さ約40mの中後沢があり、調査区はこの沢の西側地区と東側地区の2地区に区分できる。東側地区の小字名は西側約 $\frac{2}{3}$ が三後沢、東側約 $\frac{1}{3}$ が北原であった。試掘調査の結果、三後沢地区より多くの遺構と遺物が検出されたが、北原地区では非常に少なかった。そのため同一平地に位置する三後沢・北原地区を三後沢遺跡（C地区）と呼称した。中後沢を越えた西側調査区の小字はすべて十二原であった。しかし、今回の調査区南西側では上越新幹線に伴い十二原遺跡として調査が実施され、報告書が刊行されている。そこで同一小字名の今回の調査遺跡名を、前回調査地区と区別するために十二原II遺跡（D地区）と呼称した。

## ② 調査区（グリッド）の設定

調査地点を的確に把握するために、調査区全体に縦軸と横軸を基軸とした5m四方の調査区（グリッド）を設定した。横軸の中心は調査区全体をほぼ一直線で通る線を設定し、縦軸は横軸に直交する線とした。調査区は南東から北西方向の道路予定地内であるが、東西方向とみなして軸線の数の少ない東西方向の横軸を北からA-Z軸とし、軸線の数の多い縦軸を西から1-100~と呼称し、5mグリッドの呼び方は北西位置で交差するアルファベットおよび数字で例えばM-100のように呼称した。



第4図 グリッド設定図と試掘状況

## ③ 調査手順

三後沢遺跡の試掘調査より始める。119ライン東側全面に1.5×20mの試掘坑を6本設定し、119ライン以西は調査区南北両側に10m間隔に1×4mのトレンチを各1本設定し人力で調査を行なう。119ライン東の表土を原沢へ搬出し、119ライン東の調査終了後西側の土を東側へ移し西側の調査を実施する。十二原II遺跡では三後沢遺跡119ライン西同様に試掘を行ない調査を実施した。30ライン西は2m×50~70mのトレンチを5本設定し、重機にて試掘を実施、遺構検出後調査を実施した。各遺構の調査は、土層観察用ベルトを残し実施した。

## ④ 遺物の取り上げ方

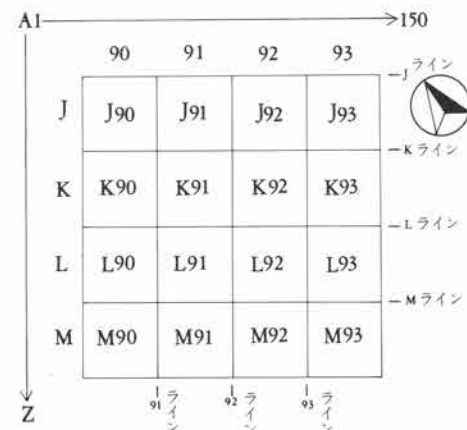
出土遺物の中で、遺構に伴わないものはグリッドで取り上げ、遺構に伴うもので床面よりはるかに高く、小さな破片は覆土として取り上げ、その他の遺物は平面・垂直位置・写真撮影等の記録を行なった。

## ⑤ 測量方法

遺構・遺物の実測はグリッド軸にそった平板測量で行なった。基準測量は建設省の敷設した工事用水準杭を用いた。

## ⑥ 写真撮影

遺構写真は35mm白黒フィルムとカラースライドフィルムおよび6×9cm白黒フィルムを用いたカメラで地上撮影を行ない、必要に応じて航空写真撮影を実施した。





4月19日 発掘調査に先立ち、調査地区である三後沢、北原、十二原の現地にて、文化財保護課、建設省高崎工事事務所、埋蔵文化財調査事業団の3者で打合せを行ない、細部について調整を行なう。

4月20日 事業団内にて調査担当者間で、話し合いを持つ。バックフォーを三後沢遺跡に搬入する。

4月21日 バックフォーにて桑をぬき取る。

4月22日 発掘作業員の方に来てもらい桑をかたづける。三後沢遺跡119ライン東に1.5×20mのトレンチを6本設定して試掘開始。

4月23日～29日 現地調査事務所建設予定地の試掘終了後、事務所を建設。三後沢遺跡(119ライン)西側の調査区南北両側に、10mの区間中に1×4mの試掘坑を入れ、遺構、遺物の調査を行なう。調査区全体を覆うグリッドラインを設定し、三後沢遺跡東側の遺構発掘を進め、図面・写真等を作成。

4月30日 三後沢遺跡表土を原沢へ運搬することについて地元町会議員、地権者代表者、文化財保護課、建設省高崎工事事務所、埋蔵文化財調査事業団の間で話し合いがもたれ、決められた制約の中で5月6日～15日の間で土の搬出を行なうことが決定された。

5月1日～5月15日 三後沢遺跡119ライン東側の表土を原沢へ運び出す。J-1号住居跡の調査終了。1～29号土坑の調査を終了。全体図作成。

96ライン以西に弥生、縄文時代の住居跡と多くの遺物を検出する。J-2号住居跡の調査を開始。

5月16日～5月29日 J-2号住居跡の調査、26号土坑より人骨が出土。Y-4号住居跡の調査継続。J-3・4号住居跡の調査開始。平面図・写真撮影を行なう。Y-1・3号住居跡を確認。

5月30日 26号土坑より出土した人骨を、月夜野町教育委員会教育長のお世話により供養することとなり、月夜野町下牧の玉泉寺の坂西良光氏にお願いして、再葬供養していただく。

6月1日～5日 Y-1・4号住居跡、J-2・3号住居跡の実測・写真撮影。縄文時代の陥し穴の実測・写真撮影。

6月7日～12日 Y-1号住居跡エレベーション図・炉跡セクション図作成。41号土坑セクション図・写真撮影終了。陥し穴、土坑等を掘り進む。J-3号住居跡炉跡セクション図・写真撮影終了。Y-1号住居跡調査終了。Y-2号住居跡調査開始、セクション図・平面図・写真撮影・遺物の取り上げ等行なう。

6月14日～19日 119ライン東側全景写真撮影。引き続き全体図1/50と柱状図作成。J-4号住居跡、Y-3号住居跡の調査開始。Y-2号住居跡実測継続、46～50号土坑全掘。

6月21日～25日 6月21日昭和村、赤城村教育委員会15名見学。J-4号住居跡遺物出土状況写真・実測終了。遺物を取り上げ・遺物出土状況図作成。Y-2号住居跡平面実測・エレベーション



対岸から名胡桃平を望む

図・炉跡調査。46～50号土坑全景写真終了。51～56号土坑セクション図作成。一部全景写真終了。J-5号住居跡発掘開始、Y-3号住居跡セクション図・及び遺物出土状況写真撮影。

6月28日～6月30日 Y-2号住居跡炉跡と入口柱穴の実測と写真撮影終了。Y-3号住居跡遺物出土の平面実測・エレベーション図・全体写真・遺物取り上げ終了。炉跡セクション図作成。J-4号住居跡遺物出土状況図作成。J-5号住居跡発掘開始。

7月1日 月夜野町立桃野小学校児童、先生約200名が三後沢遺跡の見学に訪れる。

7月1日～3日 49・50・57号土坑平面図作成・全体写真撮影。J-4号住居跡遺物取り上げ、J-5・6号住居跡遺物出土状況図作成。Y-3号住居跡炉跡写真撮影。

7月5日～8日 十二原II遺跡調査にそなえて、調査区の下草刈りと道路幅の確認を行なう。J-5号住居跡遺物出土状況実測・遺物取り上げ床面調査。J-4号住居跡床面調査。51・54～56号土坑平面実測図作成。58～60号土坑セクション図作成。J-6号住居跡周辺精査。

7月9日・10日 十二原II遺跡の試掘を開始する。三後沢遺跡J-4・5号住居跡遺物出土状況図作成・遺物取り上げ。58・59・60号土坑写真。

7月12日～14日 三後沢遺跡J-4号住居跡床面調査・ピット掘り、全景写真終了後遺物を取り上げる。J-5号住居跡遺物出土状況図作成。全景写真後遺物取り上げ。J-6号住居跡土層図作成・周溝調査。十二原II遺跡試掘継続。縄文時代

の住居跡を確認する。

7月15日～17日 三後沢遺跡J-4号住居跡写真撮影・平面図作成開始。J-5号住居跡炉跡セクション図・写真撮影・柱穴と周溝の調査・平面図作成・全景写真撮影。十二原II遺跡の試掘継続。

7月19～21日 三後沢遺跡95ライン以西の全景写真。Y-5号住居跡、Y-3号住居跡出入口部の写真撮影、J-5号住居跡床面調査・エレベーション図作成。J-4号住居跡エレベーション図作成。十二原II遺跡30ライン以東に幅2mのトレンチを入れて遺構確認調査を行なう。

7月22日～24日 三後沢遺跡93ライン以西の全体図作成。Y-1～3号住居跡床下調査、J-4号住居跡床下調査。十二原II遺跡30ライン東側の全景写真、34ライン東側の精査。

7月26日～30日 三後沢遺跡J-4号住居跡床下のピット実測。62～64号土坑実測・写真撮影。十二原II遺跡の精査。

8月2日 8月1日の台風通過に伴ない、プレハブの屋根の一部がこわれ、窓3枚が割れる。電話、電気の電柱2本傾き、1本折れる。テント2棟こわれ、トイレのドアがこわれて修理不能。遺跡内は多くが水びたして調査不能となる。排水ポンプを導入する。

8月4日～10日 4日より現場調査再開、三後沢遺跡Y-5・6号住居跡の水ぬきとその後の精査、J-6号住居跡遺物出土状況図作成・遺物取り上げ・床面精査。Y-5号住居跡遺物出土状況実測・取り上げ。十二原II遺跡調査地の精査、住居跡の検出作業、グリットポイントの設定、遺物



弥生時代住居跡実測（三後沢）



縄文時代住居跡調査（三後沢）

取り上げ。土坑内より縄文土器多数出土。平面図・エレベーション図作成。

8月11日～14日 三後沢遺跡J-6号住居跡床下部分の調査、Y-6号住居跡平面図・エレベーション図・炉跡実測図作成。十二原II遺跡J-1号住居跡の調査開始。J-2号住居跡土層図作成。土坑・陥し穴・風倒木痕の平面図・土層図・エレベーション図作成。

8月16日～20日 三後沢遺跡J-6号住居跡平面実測・遺物取り上げ・床面調査及び実測。十二原II遺跡J-2・3号住居跡平面図・エレベーション図作成。30ライン以東の精査、グリッド杭打ち。

8月23日～27日 三後沢遺跡J-6号住居跡レベリング・エレベーション図作成。4号土坑・風倒木痕の調査。十二原II遺跡30ライン以東1～3号土坑全景写真・平面図作成。

8月30日～9月1日 三後沢遺跡J-6号住居跡平面図追加・エレベーション図作成。十二原II遺跡J-1号住居跡全景写真。4・6・7・9号土坑全景写真。30ライン以東地区全景写真、全体図作成。

9月2日～4日 三後沢遺跡J-6号住居跡エレベーション図終了。十二原II遺跡J-1～3号住居跡全景写真・遺物取り上げ。5・9号土坑セクション・全景写真。

9月6日～10日 三後沢遺跡91～101ライン間の精査。十二原II遺跡J-1号住居跡調査終了。J-2号住居跡遺物出土状況平面図終了・遺物取り上げ。10～12号土坑セクション図作成。

9月13日 12日の台風18号の通過に伴い三後沢



弥生時代住居跡精査（三後沢）

遺跡西側と十二原II遺跡東側町道を含む地区の崖がくずれ。文化財保護課、町の関係者に来てもらい、善後策を話し合う。

9月14日～18日 三後沢遺跡排水作業、J-7号住居跡拡張作業。十二原II遺跡東端で崖くずれにより使用不可能となった農道を、調査済の西側に移動して仮設道路を作る。J-4・6号住居跡セクション図作成。10・11号土坑全景写真・平面図・エレベーション図作成。

9月20日～25日 十二原II遺跡18～21号土坑セクション図・写真撮影・平面図・エレベーション図終了。13～17・22～25号土坑全景写真。

9月27日～29日 十二原II遺跡J-2号住居跡炉跡調査。J-4・5号住居跡ベルト除去後遺物出土状況図及び全体写真終了。J-8号住居跡より顔面把手出土。

9月30日～10月2日 十二原II遺跡J-4号住居跡遺物取り上げ終了。J-5号住居跡遺物取り上げ・全景写真・エレベーション図終了。J-6・7・8号住居跡セクション図・遺物出土状況写真終了。

10月4日～6日 十二原II遺跡J-6号住居跡全景写真・平面図・遺物取り上げ・レベリング・炉跡セクション図・全景写真終了。J-8号住居跡遺物出土状況平面図作成・遺物取り上げ。Y-1～5号住居跡調査開始。

10月7日・8日 十二原II遺跡の空撮を7日に実施。J-1・2号住居跡出入部の調査。20・28・29号土坑平面図・エレベーション図終了。

10月9日 十二原II遺跡現地説明会開催。見学



台風による被害状況（十二原II）

者80名。

10月12日～16日 十二原II遺跡－風倒木痕の調査、J－4号住居跡平面図・エレベーション図・炉跡セクション図終了。31～35号・40号土坑全景写真。三後沢遺跡－風倒木痕の調査、Y－7号住居跡プラン確認・調査開始。J－7号住居跡遺物出土状況実測図・ベルトセクション図終了。

10月18日～23日 十二原II遺跡－36・37・38・46・47・48・51・52・53・55号土坑全景写真。42・43・44・51・54号土坑平面図・レベリング終了。Y－2・4・5号住居跡土層図・平面図作成。三後沢遺跡－J－7、Y－6・7号住居跡遺物取り上げ・床面精査・エレベーション図終了。

10月25日～27日 十二原II遺跡－Y－3号住居跡遺物出土状況図作成、Y－4号住居跡遺物出土状況図作成後遺物取り上げ・エレベーション図作成。三後沢遺跡－Y－7号住居跡炉跡セクション図終了。J－7号住居跡埋甕炉の写真・セクション図終了・平面図終了。

10月28日～30日 十二原II遺跡－Y－1号住居跡平面図・エレベーション図・炉セクション図・全景写真終了。Y－5・6号住居跡の平面図・全景写真・遺物取り上げ終了。28日より次年度調査予定のF地区の試掘準備に入る。調査地内に国鉄桃野送電区の水道管が布設してあることが判明し、事実確認を行なう。30日より試掘に入る。

11月1日～6日 十二原II遺跡－全体図作成。Y－2号住居跡遺物取り上げ、Y－3・4号住居跡炉跡セクション図・貯蔵穴・出入口部分ピット写真終了。J－9・10号住居跡遺物出土状況図・

写真撮影終了。村主遺跡－試掘終了地区より、重機を用いて表土除去を始める。

11月8日～13日 村主遺跡－道路幅両側に1×3mのトレンチを入れる。西側トレンチより須恵器が多く出土した。国道291号に近い部分で表土除去後に遺構調査を開始し、多くの陥し穴と土坑を検出する。1～5号土坑平面図・エレベーション図終了。全体図1/100作成。

11月5日～19日 村主遺跡－国道291号線に近い調査部分の終了に伴い埋めもどして、現場事務所を建てる。7～11号土坑平面図・全景写真終了。

11月22日～27日 大原II遺跡（E地区）の試掘を行ない新幹線に近い個所より弥生土器出土。村主遺跡8号土坑のセクション図・エレベーション図・平面図・全景写真終了。表土除去後調査した地区の埋めもどしを行なう。

11月29日～12月4日 月夜野バイパス道路予定地内で、村主遺跡西北部分の析原地区の試掘調査を実施。試掘結果、遺構の検出なく埋めもどす。土器洗い、注記、図面整理を行なう。

12月6日～10日 遺跡内の埋めもどし、遺構・遺物の分類、整理、器材整備等を行ない、12月10日にすべての現地調査を終了する。以後は、事業団内で基本整理を行なった。



十二原II遺跡調査風景

## 2章 三後沢遺跡



#### 凡例補則

住居床面積と土坑底面積はデジタル プラニメーター (PLANIX 7) による 3 回計測平均値を使用した。

なお、少数点 3 桁は 4 捨 5 入してある。

床面積から居住人員の算定にあたっては、関野克\*が  $P = (A - 3) / 3$  という床面積と人口の関係式を導き出し、3 m<sup>2</sup>あたり 1 人という数値を出している。また、小山修三\*\*は 3.3 m<sup>2</sup>あたり 1 人という。

本書では、小山修三の数値を用いて居住人員の算定を行った。

\*関野 克「埼玉県福岡村縄文前期住居と竪穴住居の系統に就いて」『人類学雑誌』53 1938

\*\*小山修三「縄文時代」中央公論社 1984

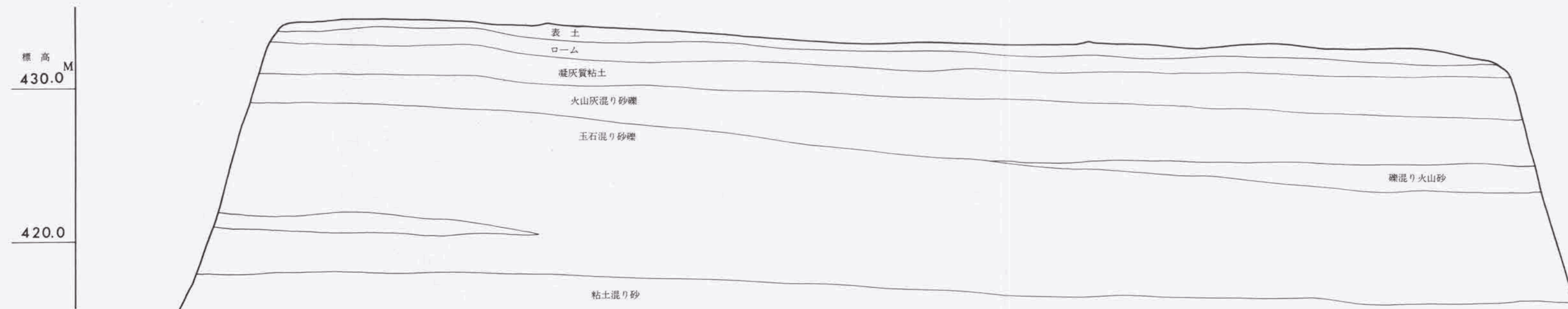
空中のある一点から撮影された写真を空中写真という。撮影にあたっては航空機が多用されることから航空写真とも呼ばれ、空中写真と同意語のように使用されている。

空中写真の歴史は新しい。我国では西南戦争（明治10年）のとき偵察目的で気球から撮影を試みたのが始まりである。第1次世界大戦・第2次世界大戦では作戦計画のための写真撮影が実施されたが、急速に使われだしたのは、戦後になってからである。

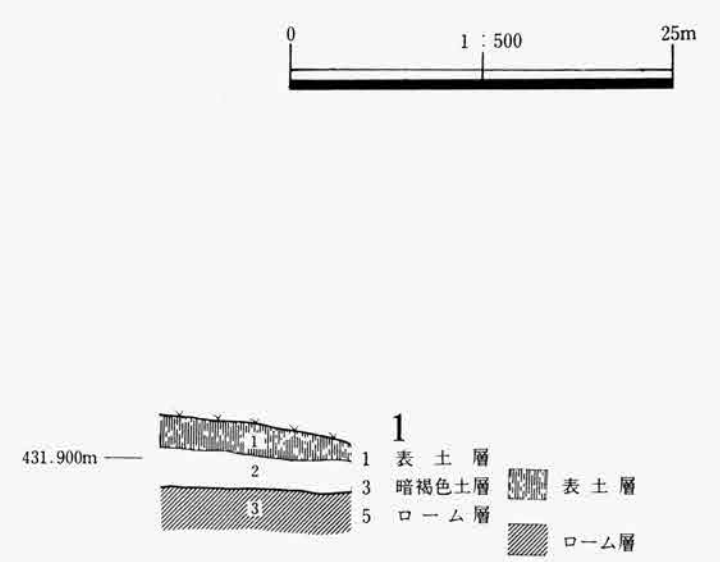
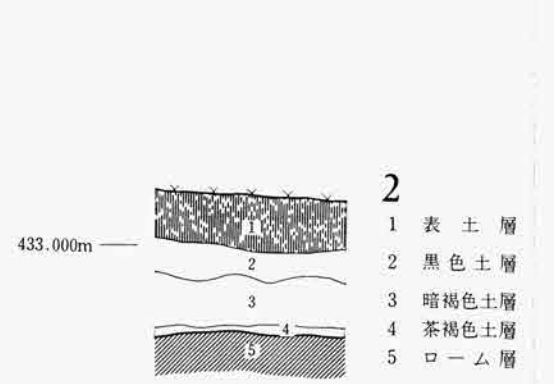
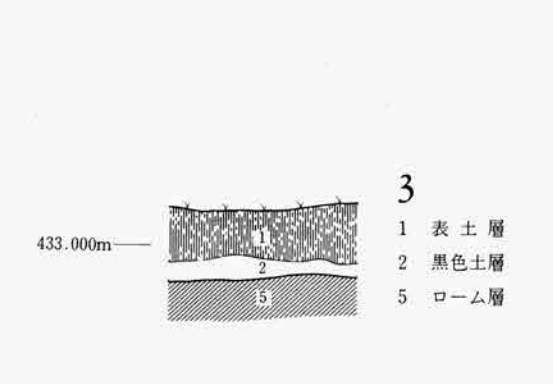
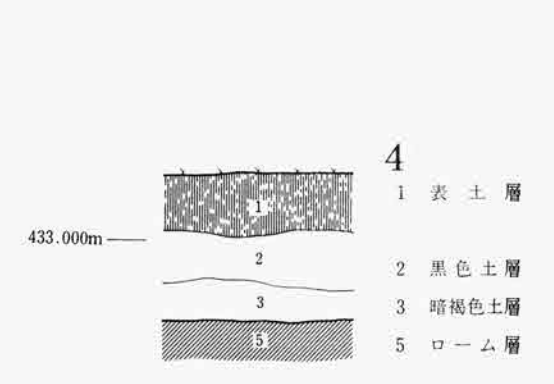
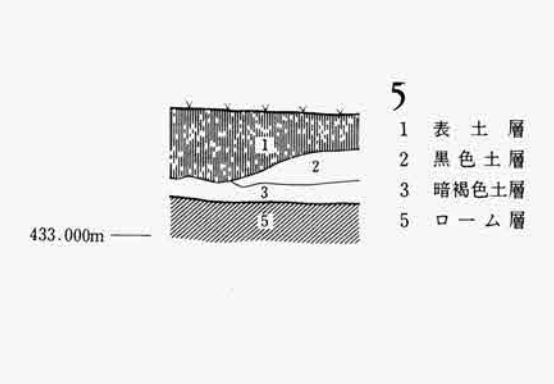
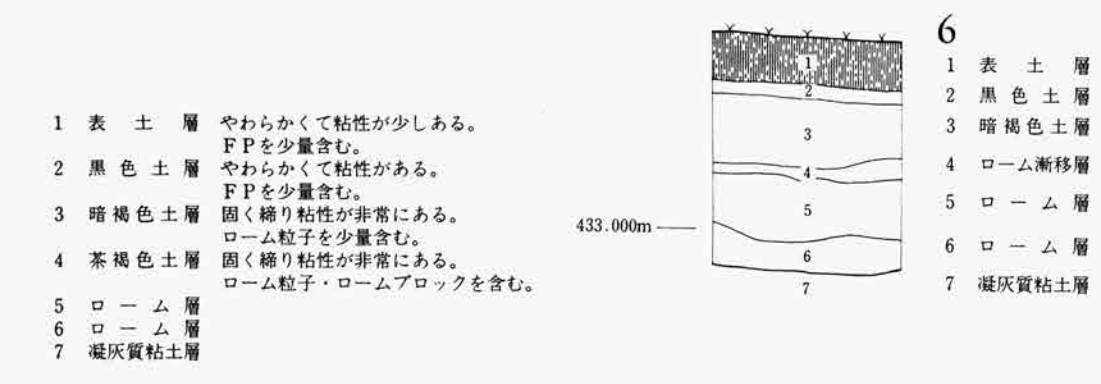
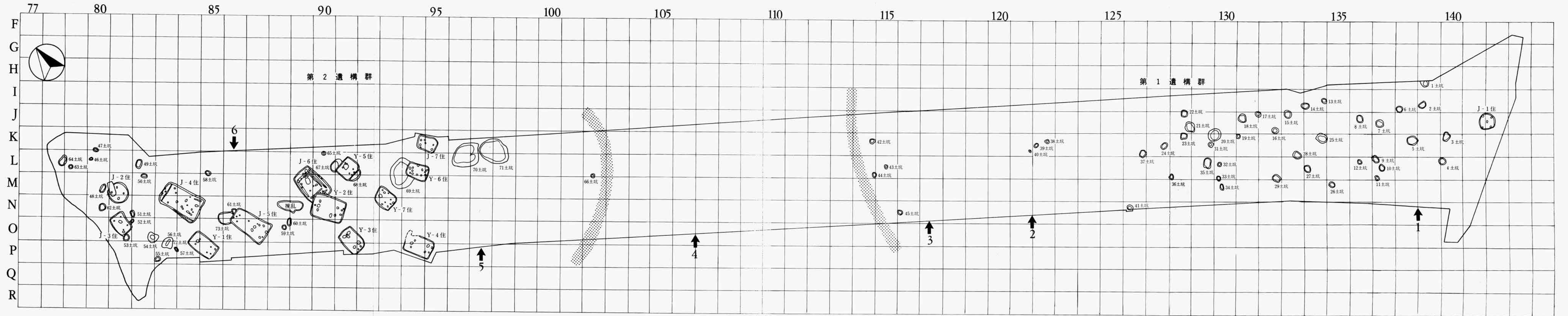
昭和21年から23年には米軍の極東空軍が約1/40,000の縮尺で日本全域を、また約1/10,000の縮尺で鉄道沿線、主要平野部の撮影を行っている。縮尺が小さいので広範囲にわたり撮影されており、また撮影時期が古いために国土大改変以前の状況を知るにはきわめて貴重な資料となっている。現在、市販されている1/50,000地形図のオリジナルは米軍写真を元に作成されたものである。国土地理院が1/25,000地形図作成のために、ほぼ日本全域を約1/40,000縮尺で撮影を開始したのは昭和39年からである。

今日、空中写真は土地に関するあらゆる分野—地形・地質、災害、防災対策、土地利用現況、都市の機能、都市交通など—に対して貴重な情報を提供している。考古学調査においても空中写真は利用され、図面からでは判読することのできない豊富な情報を提供してくれる。

前ページの写真は、昭和22年11月6日に米軍によって真庭上空から撮影（縮尺約1/40,000）されたものである。写真右下には沼田の街並がみえる。そして中央が現在の月夜野町にあたる。国土大改変によって消滅していった無数の遺跡、その立地や環境を知ることのできる貴重な写真と考えられる。



第5図 三後沢遺跡全体図



第6図 三後沢遺跡の遺構配置図と土層図



三後沢遺跡は群馬県利根郡月夜野町大字下津字北原・三後沢に所在し、後沢と中後沢とに挟まれた河岸段丘上に位置している。一般国道17号月夜野バイパス道路建設に伴う第2年度の調査にあたり、昭和57年4月19日から同年12月10日まで発掘が行われ、引き続き昭和58年3月31日まで基本整理が行われた。調査対象面積は長さ約320m、幅25～46mの路線区域であり、約8040㎡に及んだ。

調査は台地東側（字北原）から順次実施され、竪穴住居跡と多数の土坑群が検出された。しかし台地中央部では遺構は全く検出されず、西側（字三後沢）に及んで縄文時代前期の住居跡、中期の住居跡、弥生時代後期の住居跡と多数の土坑群が検出された。一つの台地を横断する調査区から判明したことは、遺構分布に極端な差のあることであった。東側部分では縄文時代の遺構は存在するものの、その中心は中・近世の可能性が考えられる土坑群の分布である。一方、西側部分は縄文時代早期の陥し穴から、前期の集落、中期の住居跡、そして弥生時代後期の集落と断絶はあるものの集落が営まれている。そして各時期において集落分布に相違はあるが、その分布範囲は台地断面図(第5図)からも理解できるように標高の高い部分にかぎられている。こうした事実は、この地域の各時期における集落立地を考えるうえで大きな示唆を与えるものであろう。

三後沢遺跡の報告にあたっては、台地東側から検出された遺構群を便宜上第1遺構群として、また西側部分から検出された遺構群を第2遺構群として順次報告することにした。

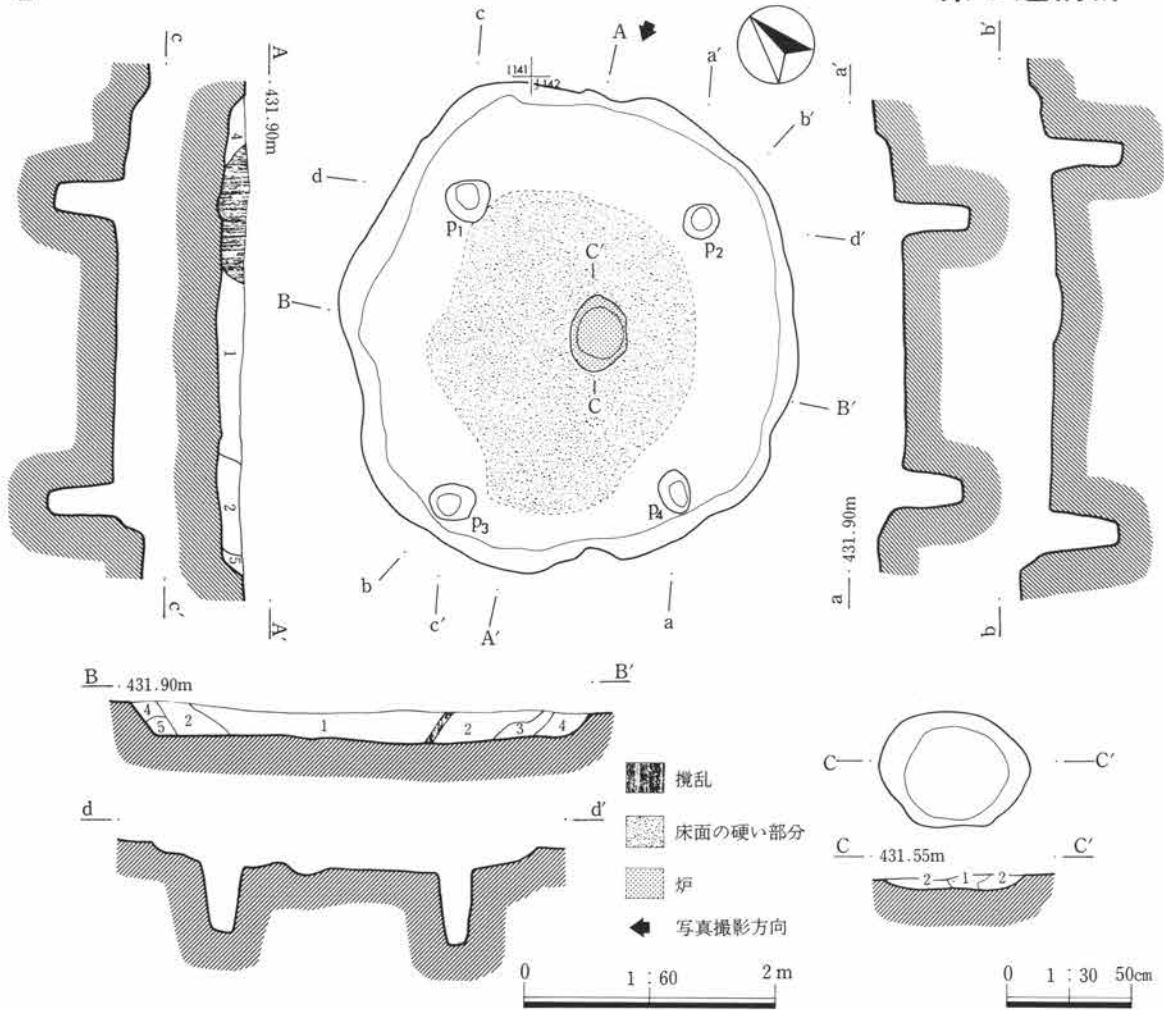
#### 三後沢遺跡第1遺構群（台地東側部分）

当遺構群から検出された遺構は、縄文時代中期の住居跡1軒、縄文時代の土坑2基、同一時期に構築されたと考えられる土坑20基、同じく同一時期に構築されたと考えられる土坑4基、時期不明の土坑6基、墓壇1基、そして風倒木11基である。同一時期に構築されたと考えられる一群の土坑は、覆土から遺物が全く出土せず、構築時期については残念ながら不明である。ただし土坑の形態や覆土の層相から判断すると、中・近世の土坑と把握できそうである。また1基検出された墓壇についても時期を明確にすることはできなかったが、近く（路線外）に墓地が現存することを考えると、この墓地との結びつきが強いように思われる。人骨は屈葬位で検出されたが、無縁仏として玉泉寺（月夜野町下牧2391）に納骨した。

なお、第1遺構群から出土した遺物は、縄文時代の遺構内からのものと、J-1号住居跡の北東方向にかけて出土した縄文時代前期の繊維土器片、大木5式土器片、前期末の十三菩提、中期前葉の土器片であった。いずれも少量の出土である。

#### 三後沢遺跡第2遺構群（台地西側部分）

当遺構群から検出された住居跡の内訳は、縄文時代前期の住居跡5軒、中期の住居跡1軒、弥生時代後期の住居跡7軒である。この他に土坑28基が検出されているが、その内訳は縄文時代早期後半の陥し穴4基、縄文時代の土坑7基、時期不明の土坑5基、そして風倒木12基である。縄文時代前期の住居跡は関山期と次段階の有尾系土器を出土する住居跡に区分される。とりわけ有尾系土器を出土する3軒の住居跡は、北に向かって狭まる台形を基本とする大型の住居跡であった。これら住居跡から出土した遺物は膨大な量に達し、J-4号住居跡では半完形品・大形破片28個体、土器片3384点、石器類1616点、J-5号住居跡では完形品・半完形品38個体、土器片3647点、石器類1816点であった。そしてこれらの出土遺物や住居の企画性（同一規模・同構造）、さらに各住居の配置から考えると同時期集落を構成するものと思われる。集落は台地北側に向かって展開する模様である。弥生時代の住居跡からはいずれも後期樽式土器が出土している。集落は縄文時代前期集落と異なり、台地南側に向かって展開するものと考えられる。



第7図 J-1号住居跡

a. 縄文時代の住居跡

J-1号住居跡 (第7・8図、PL.1)

**位置** J-141・142グリッドにかけてローム層直上で検出された。第1遺構群から検出された唯一の住居。  
**経過** 4月24日よりバックホーで表土剥ぎを開始。27日には調査区東端に黒色土の落ち込みが見られ、住居跡と確認された。以後、調査に入り5月7日から11日にかけて各種図面の作成、写真撮影を行い、12日に調査を終了した。

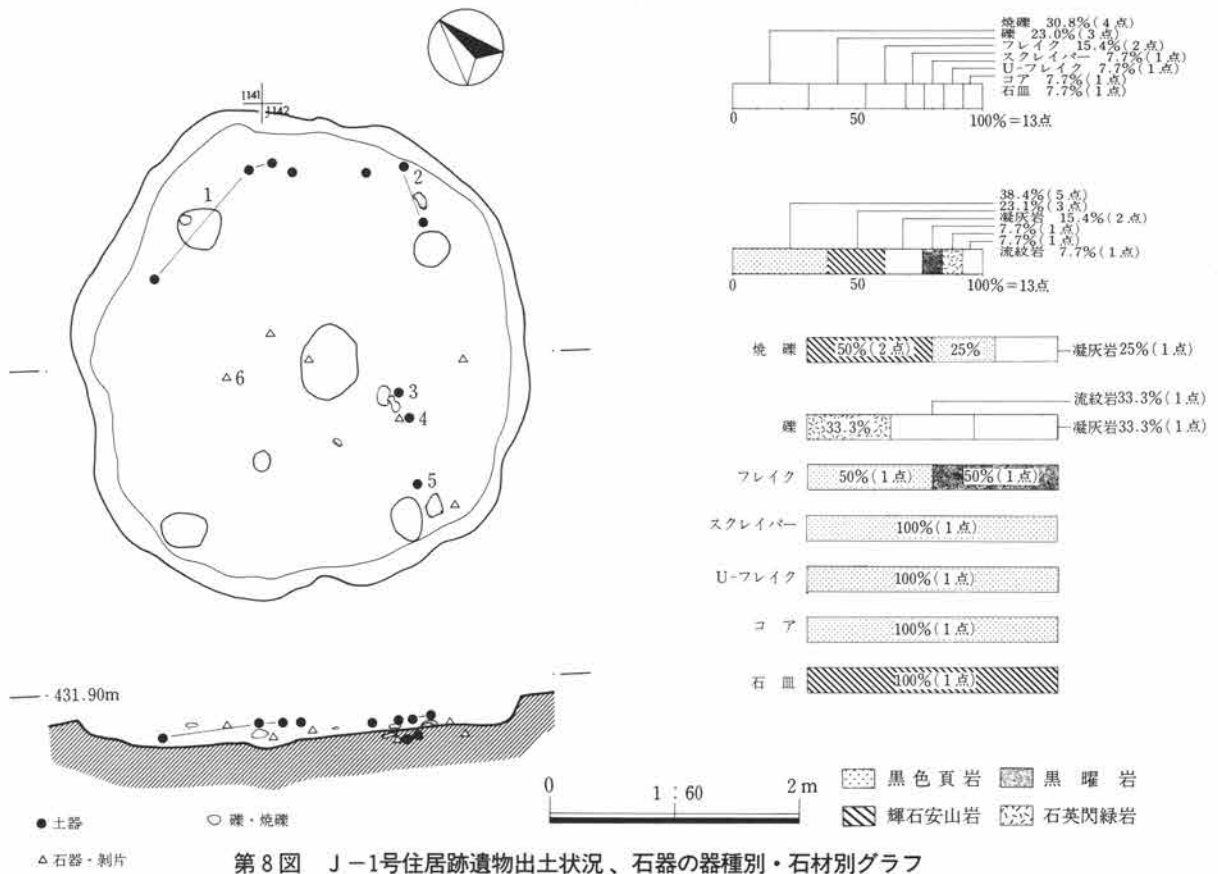
**覆土** ローム層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

- 第1層 暗褐色土層 やわらかくて粘性がある。ローム粒子・赤色スコリア粒子・炭化物粒子を少量含む。
- 第2層 茶褐色土層 やや固く粘性はほとんどない。ローム粒子を多量に、炭化物粒子を少量含む。
- 第3層 黒褐色土層 やや固く粘性がある。ロームブロック・ローム粒子を含む。
- 第4層 茶褐色土層 やや固く粘性がある。ロームブロックを少量、ローム粒子を多量に含む。
- 第5層 黄褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。

**形状** 長径3.85m、短径3.7mの円形を呈する。面積は約12.6㎡であり、住居1人あたりの面積を約3.3㎡と仮定した場合、居住人員は約4人となる。

**壁高** 住居跡確認面より約10~25cmで床面に達する。床面からゆるやかに立ち上がる。

**床面** ほぼ平坦である。炉を中心とした4個の柱穴内側は良く踏み固められている。その範囲をスクリーン



トーンで表示した。

周溝 検出できなかった。

柱穴 4個検出された。P<sub>1</sub>は深さ52cm、P<sub>2</sub>は深さ60cm、P<sub>3</sub>深さ60cm、P<sub>4</sub>深さ53cmであり、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は壁に接している。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間距離188cm、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間距離184cm、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>間距離245cm、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>間距離215cmを測る。P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>が壁に接していることや炉の位置から判断して、おそらくP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間が入り口部に相当するものと思われる。

No.	上 長径×短径(cm) 下 長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	35×35cm 22×18cm	52cm	主柱穴
2	28×28cm 18×16cm	60cm	"
3	37×28cm 18×18cm	60cm	"
4	35×25cm 20×13cm	53cm	"

J-1号住居跡ピット計測表

炉 床面を掘り窪めた地床炉である。長径60cm、短径45cm、深さ5cmの楕円形を呈している。面積は約0.58㎡である。覆土は2層に分かれた。

第1層 黄褐色土層 粘性がなくサラサラしている。黒色土をわずかに含む。

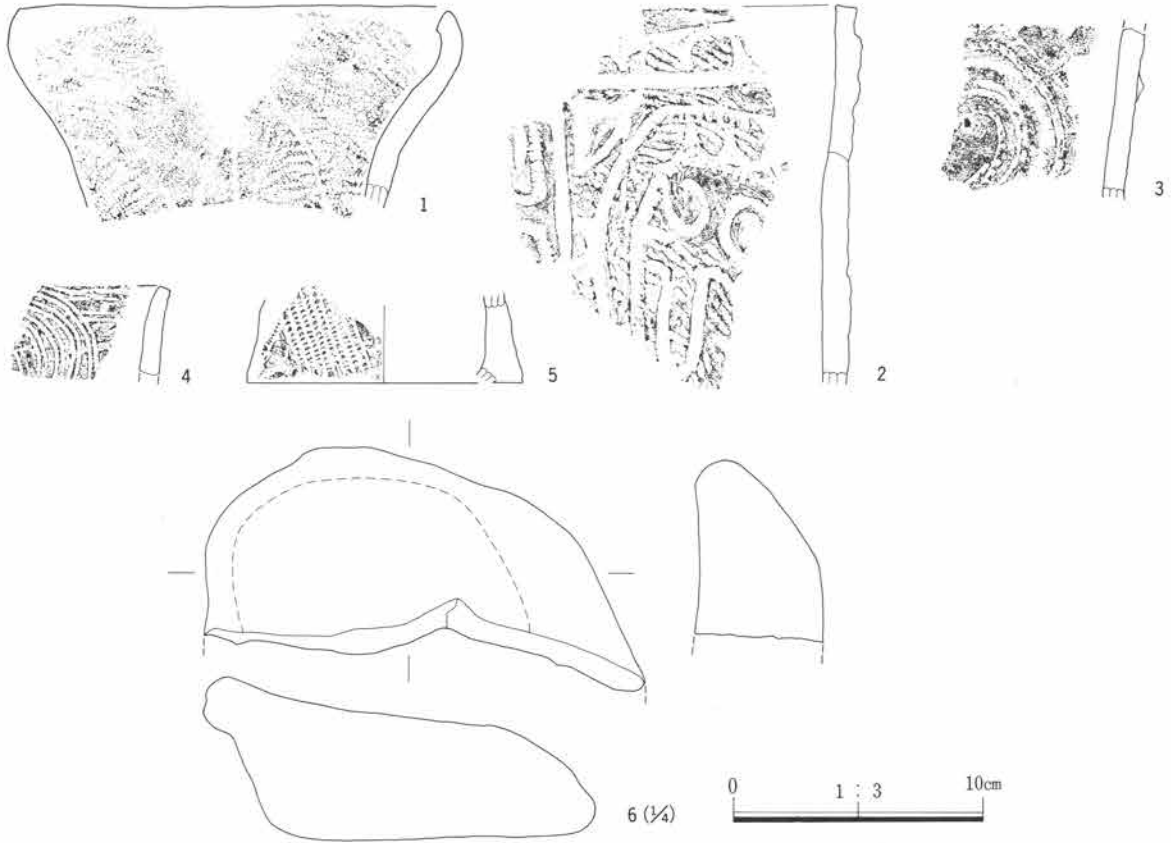
第2層 赤褐色土層 固く締った焼土層。炭化物粒子をわずかに含む。焼土の堆積は比較的薄かった。

遺物出土状況 覆土・床面上から土器片12点、石器類13点が出土している。遺物の出土は非常に少なかったが、そのなかで礫・焼礫の多さがめづらかった(第8図)。

出土遺物(第9図、PL.42)

第9図2は勝坂式、3は阿玉台式、4・5は前期末葉の十三菩提式土器である。

時期 わずかな出土遺物から判断すると、当住居跡は縄文時代中期前葉の段階に相当する。



第9図 J-1号住居跡出土遺物

J-1号住居跡遺物観察表

(法量：①口径②器高(現高)⑤底径) \* 第35図参照

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況			
							計測値( )内は現存値	備考	出土状況
	器種	遺存状況	石材	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
9-1 PL. 42	深鉢形	① 17.3 ② (7.4)	①細砂を含む ②良 ③外面にふい 橙色 内面 灰褐色	深鉢形土器の口縁部。口縁部は内彎し、口唇部は内傾する。器厚9mm。内面は荒れていてザラザラ。	縄文施文。原体はR(1/2)。	北壁付近(覆土)			
9-2 PL. 42	口縁部片		①細砂を含む ②良 ③外面 灰褐色 内面にふい 橙色	深鉢形土器の口縁部片。口唇部は平坦。器厚8mm~1.1cmで積みあげ技法A*。内面は丁寧な調整。	地文にR(1/2)の縄文施文。三叉文、爪形文が施されている。	東壁付近(覆土)			
9-3 PL. 42	胴部片		①雲母を含む ②やや良 ③外面に ふい橙色内面黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	断面三角形の隆帯に沿って結節沈線が2列巡る。	炉付近(覆土)			
9-4 PL. 42	口縁部片		①細礫を含む ②良 ③外面にふい 黄橙色 内面浅黄橙	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は平坦。器厚6mm~8mmで積みあげ技法A。内面は粗い調整。	巾4mmの半截竹管による平行沈線で円形のモチーフ。	炉付近(覆土)			
9-5 PL. 42	底部片	⑤(11.0)	①細礫を含む ②良 ③外面にふい黄橙色 内面にふい橙色	台状の底部片。器厚9mm~1.6cm。内面は丁寧な調整が行われている。	集合沈線を施文し、繊細な結節浮線文を貼付している。	南壁付近(覆土)			
9-6 PL. 42	石皿	1/3	輝石安山岩	(11.0) (23.0) 8.6 (2300)	使用面がやや凹む。火熱を受ける。	炉西側覆土			

## b. 土坑

三後沢遺跡第1遺構群からは総計44基の土坑が検出された。その内訳は(1)縄文時代の土坑2基、(2)同一時期に構築されたと考えられる土坑20基、(3)同じく同一時期に構築されたと考えられる土坑4基、(4)時期不明の土坑6基、墓壇1基、そして(5)風倒木11基であった。同一時期に構築された一群の土坑は覆土から遺物が全く出土せず、構築時期については残念ながら不明である。ただし土坑の形態や覆土の層相から判断すると、中・近世の土坑ととらえることも可能であった。

## (1)縄文時代の土坑 (第10図、PL.1)

## 4号土坑

K-139・140、L-139・140グリッドにかけてローム層直上で検出された。3号土坑の南西5.4mのところに位置する。上面は174×157cm、底面は133×133cm、深さ35~46cmのほぼ円形を呈する。底面は平坦であり、面積約1.5㎡である。覆土は5層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やや固く粘性がある。ローム粒子・炭化物粒子を含む。

第2層 暗褐色土層 1層より明るい色調。非常に固く粘性がある。ロームブロック・ローム粒子・炭化物を含む。

第3層 暗褐色土層 非常に固く粘性がある。ロームブロック・ローム粒子を多量に、炭化物粒子を少量含む。

第4層 茶褐色土層 非常に固く粘性がある。

第5層 黄褐色土層 非常に固い。ロームブロック・ローム粒子からなる層。

覆土からは縄文時代前期の繊維土器片2点が出土した。土坑の形態や覆土の層相、遺物の出土等から判断して、当土坑は縄文時代の所産と考えられる。

## 19号土坑

J-131、K-130・131グリッドにかけて暗褐色土層中から検出された。上面は96×94cm、底面は71×66cm、深さ46~56cmのほぼ円形を呈する。底面は比較的平坦であり、面積約0.35㎡である。覆土は3層に分かれた。

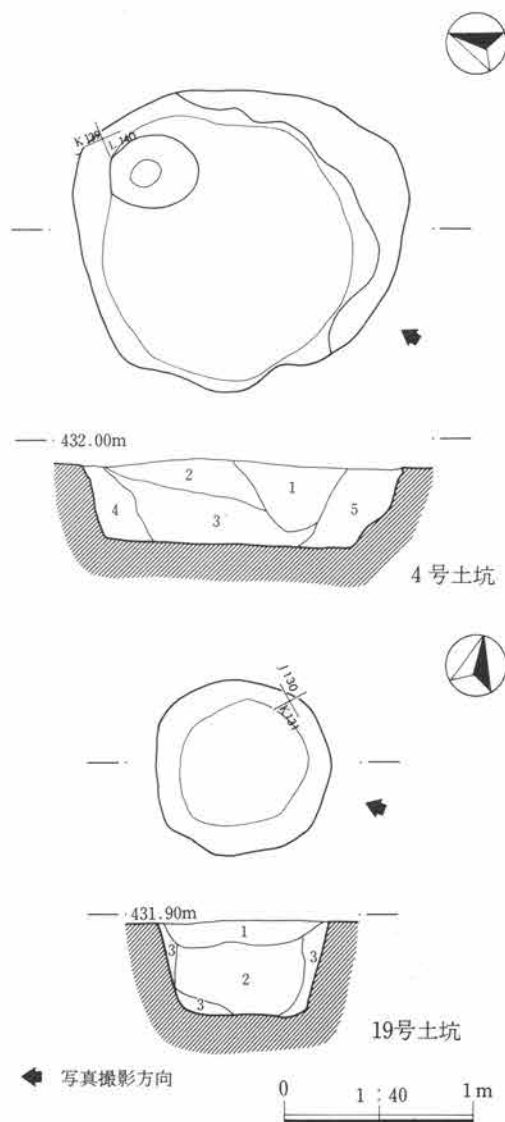
第1層 黒褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。ローム粒子を少量含む。

第2層 黒色土層 やや固く粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を少量含む。

第3層 黄褐色土層 固く粘性が少しある。大粒のロームブロック・ローム粒子を含む。

覆土からは縄文時代中期の土器細片2点が出土している。4号土坑と同様な理由から、当土坑もまた縄文時代に所属するものと考えられる。

第1遺構群から検出された縄文時代の遺構は、住居跡1軒と土坑2基だけである。第2遺構群とはきわだった対照を示している。



第10図 縄文時代の土坑 (4・19号)

(2)同一時期に構築されたと考えられる土坑 ー 1 ー (第11～13図、PL.1～3)

2号土坑

I-139グリッドにおいて検出された。6号土坑の東南5mのところに位置する。上面は175×153cm、底面は157×139cm、深さ10～15cmの楕円形を呈する。底面は平坦であり、面積約1.7㎡である。覆土は3層。

第1層 黒褐色土層 固く締め粘性が非常にある。ローム粒子を少量含む。

第2層 暗褐色土層 固く締め粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

第3層 黄褐色土層 非常に固く、ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

覆土からは遺物の出土はなかった。

6号土坑

I-138、J-138グリッドにかけてローム層直上で検出された。上面は156×136cm、底面は132×106cm、深さ13～24cmの楕円形を呈する。底面は比較的平坦であり、面積約1.1㎡である。覆土は3層に分かれ、2号土坑と同一の層相を示している。遺物の出土はなかった。

8号土坑

J-136グリッドにおいてローム層直上で検出された。7号土坑の北西4.5mのところに位置する。上面は172×155cm、底面は150×130cm、深さ9～18cmの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦であり、面積約1.6㎡である。覆土は3層に分かれ、2号土坑と同一の層相を示している。遺物の出土はなかった。

9号土坑

K-137、L-137グリッドにかけてローム層直上で検出された。12号土坑の東3.5mのところに位置する。上面は187×158cm、底面は166×133cm、深さ11～20cmの楕円形を呈する。底面はやや凹凸があり、面積約1.6㎡である。覆土は3層に分かれ、2号土坑と同一の層相を示している。遺物の出土はなかった。

11号土坑

L-137グリッドにおいてローム層直上で検出された。12号土坑の南5mのところに位置する。上面は100×88cm、底面は80×68cm、深さ9～20cmの楕円形を呈する。底面は比較的平坦であり、面積約0.4㎡である。覆土は3層に分かれた。2号土坑とほぼ同一の覆土を示すものの、やや異なりをみせている。

第1層 黒褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。ローム粒子を多量に含む。

第2層 暗褐色土層 やや固く粘性非常にある。ロームブロック・ローム粒子を多量に、炭化物を少量含む。

第3層 黄褐色土層 非常に固く粘性がある。ロームブロックからなる層。

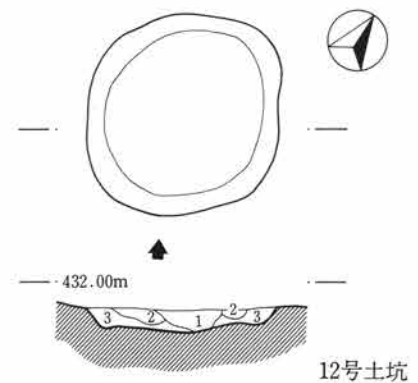
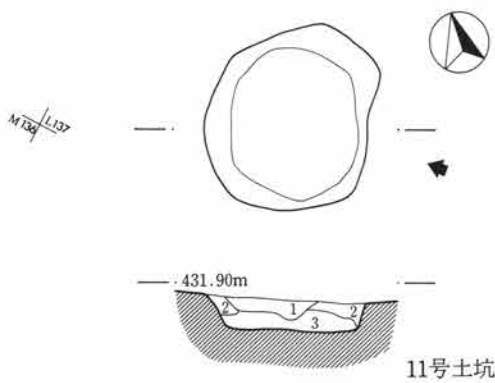
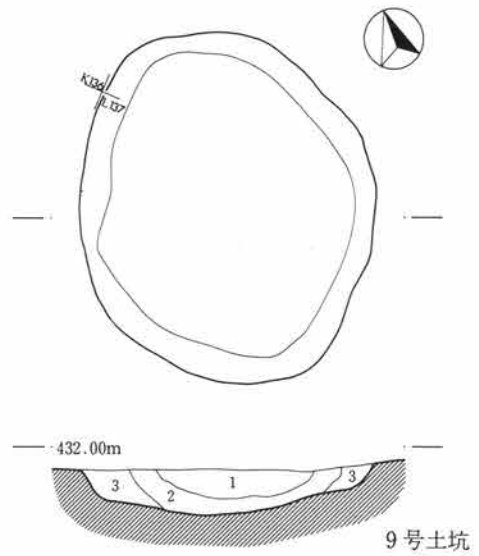
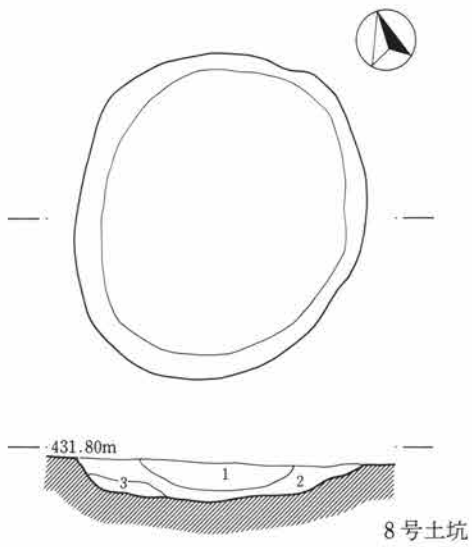
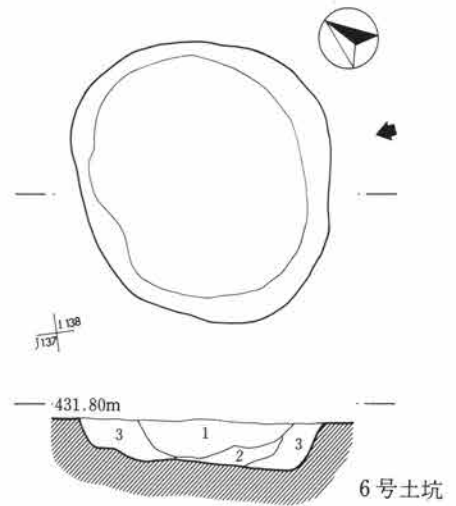
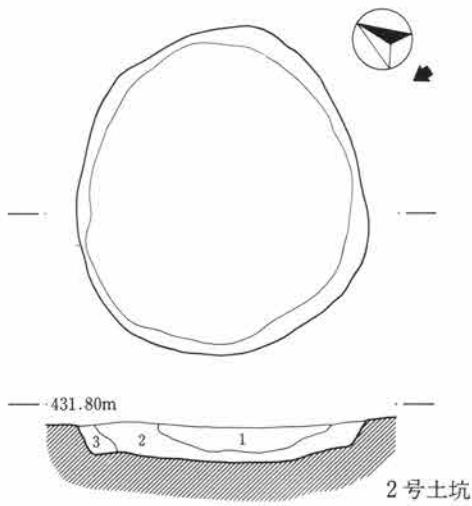
覆土からは遺物の出土はなかった。当土坑は覆土の若干の相違とともに、規模においても2・6・8・9号土坑とは著しく相違している。

12号土坑

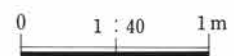
L-136グリッドにおいてローム層直上で検出された。上面は107×101cm、底面は90×83cm、深さ8～17cmのほぼ円形を呈する。底面はやや凹凸があり、面積約0.6㎡である。覆土は3層に分かれ、2号土坑と同一の層相を示している。遺物の出土はなかった。

13号土坑

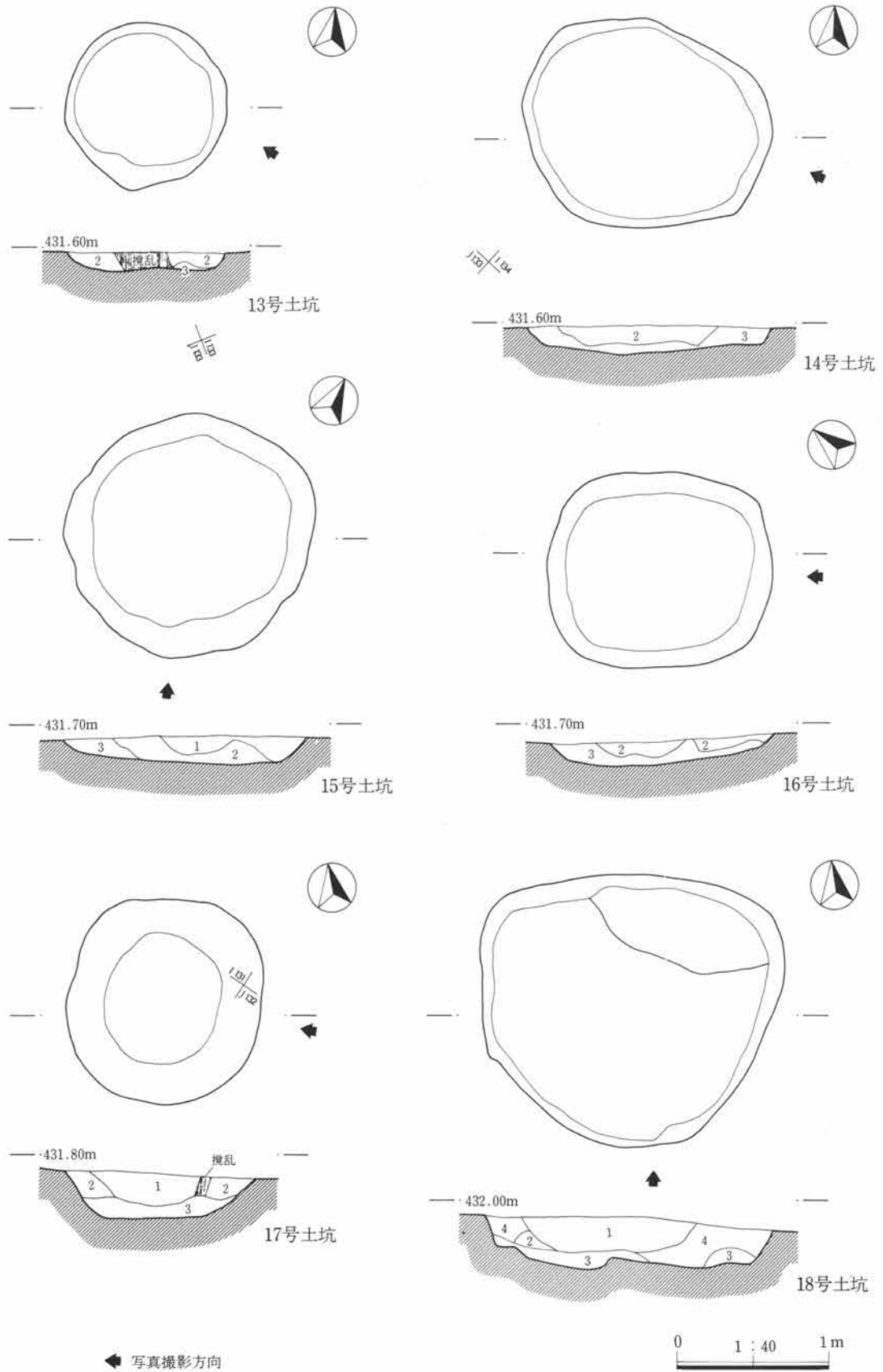
I-134グリッドにおいて暗褐色土層中から検出された。14号土坑の東4.5mのところに位置する。上面は110×106cm、底面は91×85cm、深さ5～12cmのほぼ円形を呈する。底面は比較的平坦であり、面積約0.6㎡である。覆土は2号土坑と同一の層相を示しているが、一部に木の根による攪乱が入っている。その部分をスクリーントーンで表示した。遺物の出土はなかった。



◀ 写真撮影方向

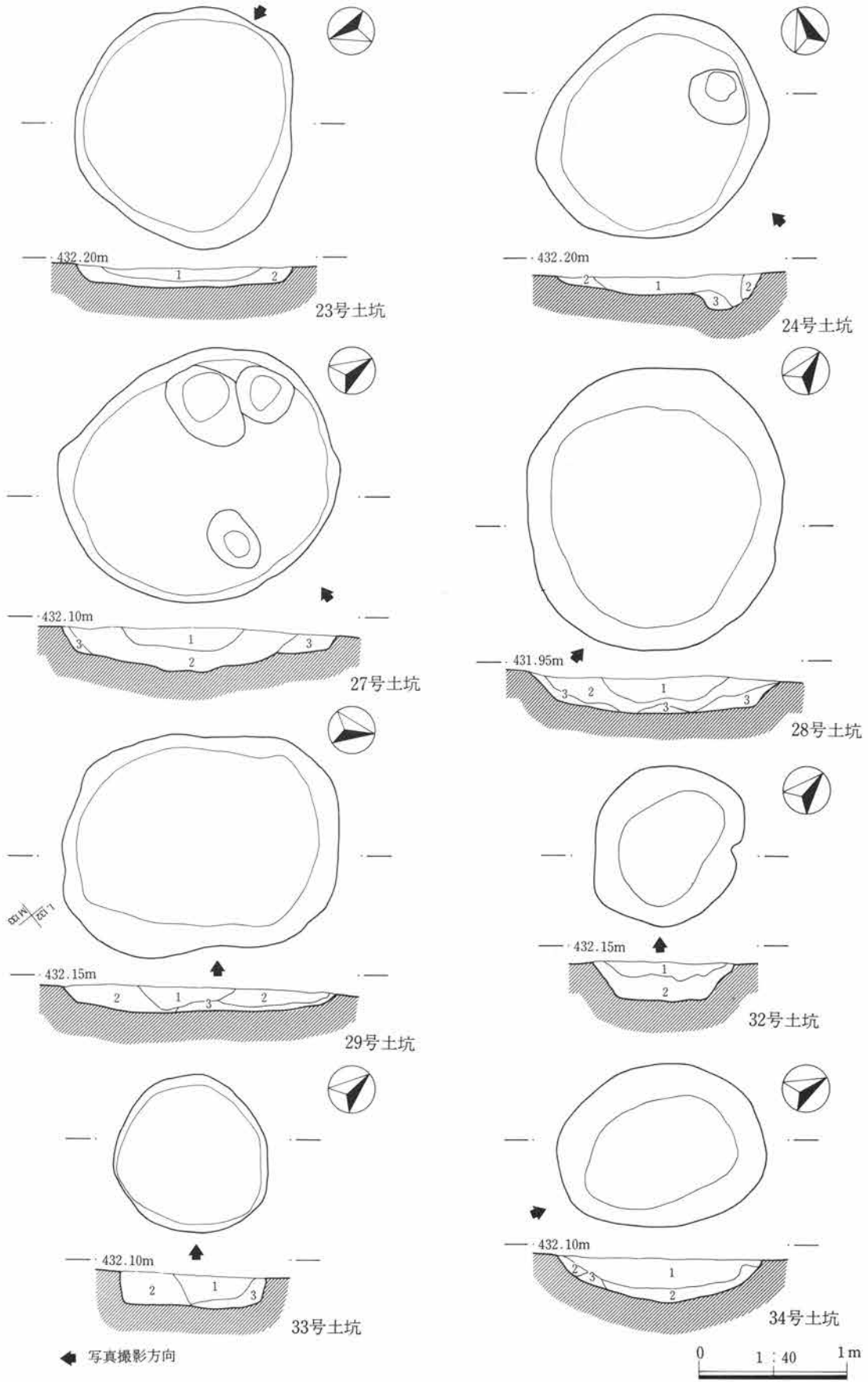


第11図 同一時期に構築されたと考えられる土坑 (2・6・8・9・11・12号)



第12図 同一時期に構築されたと考えられる土坑 (13・14・15・16・17・18号)





第13図 同一時期に構築されたと考えられる土坑 (23・24・27・28・29・32・33・34号)

#### 14号土坑

I-133・134グリッドにかけて暗褐色土層中から検出された。上面は167×136cm、底面は148×125cm、深さ7～17cmの楕円形を呈する。底面は平坦であり、面積約1.4㎡である。覆土は第1層を確認できなかったものの、第2・3層については2号土坑と同一層である。遺物の出土はなかった。

#### 15号土坑

I-133、J-133グリッドにかけてローム層直上で検出された。14号土坑の西4.5mのところに位置する。上面は168×156cm、底面は136×119cm、深さ10～19cmの楕円形を呈する。底面は比較的平坦であり、面積約1.3㎡である。覆土は3層に分かれ、2号土坑と同一の層相を示している。遺物の出土はなかった。

#### 16号土坑

J-132グリッドにおいて暗褐色土層中から検出された。15号土坑の西4.5mのところに位置する。上面は149×128cm、底面は123×103cm、深さ8～16cmの方形を呈する。底面は比較的平坦であり、面積約1.1㎡である。覆土は第1層を確認できなかったものの、第2・3層については2号土坑と同一層である。遺物無。

#### 17号土坑

I-131・132、J-131・132グリッドにかけてローム層直上で検出された。16号土坑の北5.5mのところに位置する。上面は135×130cm、底面は85×75cm、深さ21～31cmの楕円形（円形にちかい）を呈する。面積約0.5㎡である。覆土は3層に分かれ、2号土坑と同一の層相を示している。遺物の出土はなかった。

#### 18号土坑

J-131グリッドにおいて暗褐色土層中から検出された。17号土坑の西3.5mのところに位置する。上面は190×178cm、底面は175×162cm、深さ12～26cmの楕円形を呈する。底面はやや凹凸があり、面積約2.3㎡である。覆土は4層に分かれるが、第1～3層までは2号土坑と同一層である。

第4層 茶褐色土層 やや固く粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

覆土からは遺物の出土はなかった。

#### 23号土坑

J-128、K-128グリッドにかけてローム層直上で検出された。24号土坑の東5mのところに位置する。上面は161×147cm、底面は140×137cm、深さ3～14cmの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦であり、面積約1.5㎡である。覆土は2層に分かれ、第3層は確認できなかった。第1・2層は2号土坑の覆土と同一層である。遺物の出土はなかった。

#### 24号土坑

K-127グリッドにおいてローム層直上で検出された。上面は160×134cm、底面は138×120cm、深さ4～16cmの楕円形を呈する。底面は平坦であり、面積約1.3㎡である。東壁よりに小ピットが存在する。覆土は3層に分かれ、2号土坑と同一の層相を示している。遺物の出土はなかった。

#### 27号土坑

L-133・134グリッドにかけてローム層直上で検出された。28号土坑の南4mのところに位置する。上面は187×162cm、底面は175×143cm、深さ8～19cmの楕円形を呈する。底面は凹凸があり、面積約2.1㎡である。覆土は3層に分かれ、2号土坑と同一の層相を示している。遺物の出土はなかった。

#### 28号土坑

K-133、L-133グリッドにかけて暗褐色土層中から検出された。上面は190×180cm、底面は149×143cm、深さ11～25cmの円形を呈する。底面はやや皿状を呈し、面積約1.6㎡である。覆土は3層に分かれ、2号土坑

と同一の層相を示している。遺物の出土はなかった。

### 29号土坑

L-132、M-132グリッドにかけて暗褐色土層中から検出された。28号土坑の西7mのところに位置する。上面は187×142cm、底面は164×118cm、深さ10～23cmの隅丸長方形を呈する。底面は比較的平坦であり、面積約1.7㎡である。覆土は3層に分かれ、2号土坑と同一の層相を示している。遺物の出土はない。

### 32号土坑

L-130グリッドにおいてローム層直上で検出された。上面は110×100cm、底面は83×59cm、深さ16～25cmの楕円形を呈する。底面は平坦であり、面積約0.4㎡である。覆土は2層に分かれ、2号土坑の第1・2層と同一層である。第3層は確認できなかった。遺物の出土はない。

### 33号土坑

L-130、M-130グリッドにかけてローム層直上で検出された。34号土坑の北2mのところに位置する。上面は105×105cm、底面は95×95cm、深さ16～21cmの円形を呈する。底面は平坦であり、面積約0.7㎡である。覆土は3層に分かれ、2号土坑と同一の層相を示している。遺物の出土はなかった。

### 34号土坑

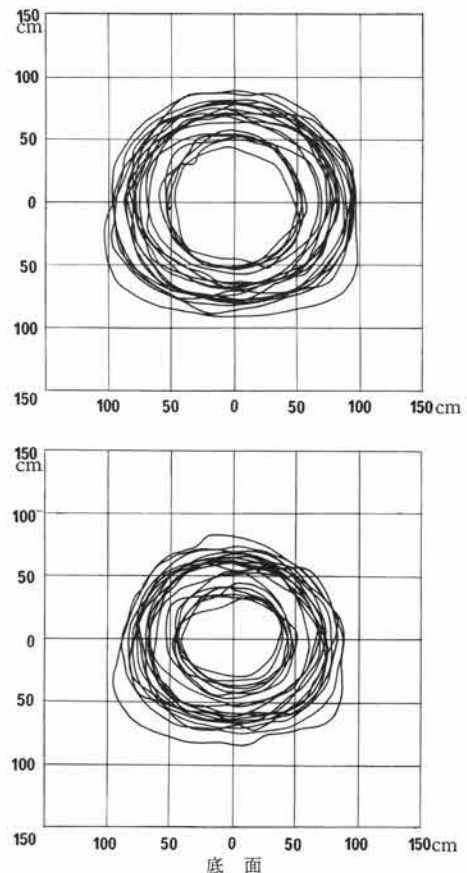
M-130グリッドにおいてローム層直上で検出された。上面は139×110cm、底面は105×69cm、深さ18～20cmの楕円形を呈する。底面は皿状を呈し、面積約0.6㎡である。覆土は3層に分かれ、2号土坑と同一の層相を示している。遺物の出土はなかった。

## まとめ

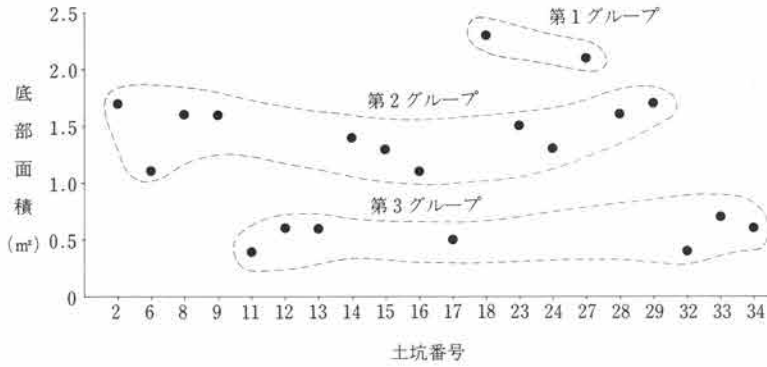
三後沢遺跡第1遺構群から検出された土坑44基のうち、2・6・8・9・11～18・23・24・27～29・32～34号の各土坑は、規模や形態、さらに覆土の層相・堆積状況から総合的に判断すると、ほぼ同一時期に構築・使用され、そして廃棄されていったものであろう。その分布範囲は径60mに及んでいる。

これら20基の土坑の底面積を比較検討すると、3つのグループに分けることができる(第14・15図)。第1のグループは18・27号土坑の2基であり、底面積が2㎡を超えるもの。第2のグループは2・6・8・9・14～16・23・24・28・29号土坑の11基のように底面積が1.1～1.7㎡の範囲に集中するもの。第3のグループは11～13・17・32～34号土坑の7基のように底面積が0.4～0.7㎡の範囲に集中するものである。いずれの土坑も楕円形を基調としているが、底面積第3グループは円形を主体とする。規模の違いが何に起因するものかは今のところ不明である。

覆土は3層を基本として分層された。第1層は黒褐色土層、第2層は暗褐色土層、第3層は黄褐色土層である。残念ながら覆土からは遺物が全く出土していないために構築時期を決定することはできないが、少なくとも覆土の層相や、掘り込み面が

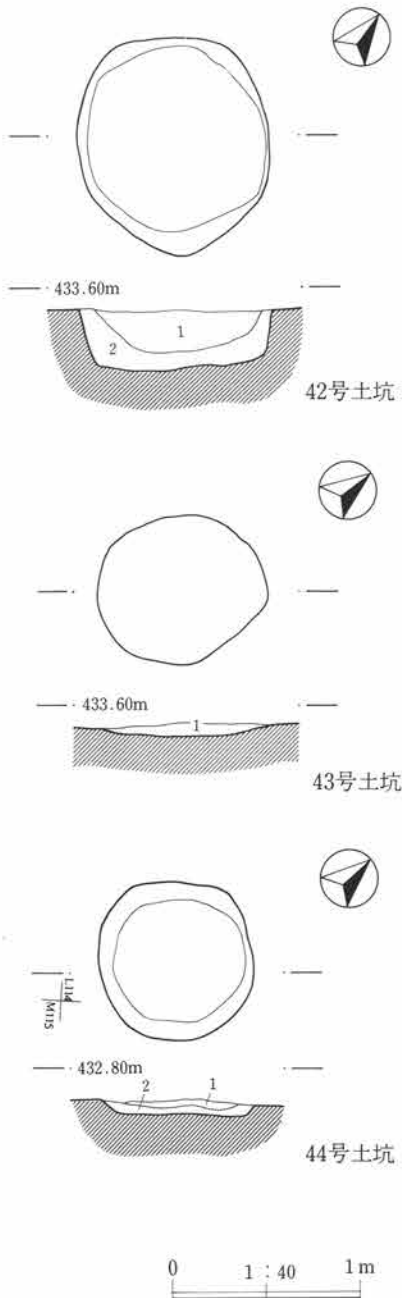


第14図 土坑群平面形図



第15図 土坑の分類

ローム層上の暗褐色土層から確認  
(13・14・16・18・28・29号) され  
ていることを考えあわせると、中・  
近世の土坑群と把握できるものであ  
ろうか。



第16図 同一時期に構築されたと  
考えられる土坑 (42~44号)

(3)同一時期に構築されたと考えられる土坑 — 2 —  
(第16・17図)

42号土坑

K-114グリッドにおいてローム層直上で検出された。43号土坑の北6.5mのところ

に位置する。上面は117×101cm、底面は98×95cm、深さ25~30cmのほぼ円形を呈する。底面は平坦であり、面積約0.7㎡である。覆土は2層に分かれた。

第1層 黒色土層 やわらかくて粘性が非常にある。ローム粒子・赤色スコリア粒子を少量含む。

第2層 暗褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。ローム粒子を多量に、赤色スコリア粒子を少量含む。

43号土坑

L-115グリッドにおいてローム層直上で検出された。上面は91×79cm、深さ3cmの楕円形を呈する。確認面から底面まで非常に浅いため、上面及び底面の区別はほとんど不可能であった。底面は皿状を呈し、面積約0.5㎡である。覆土は黒色土層を確認したが、この層は42号土坑の第1層と同一層である。遺物の出土はなかった。

44号土坑

L-114・115グリッドにかけてローム層直上で検出された。43号土坑の西3.4mのところ

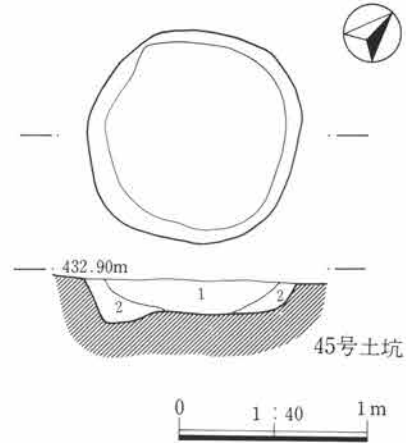
45号土坑

N-115・116グリッドにかけてローム層直上で検出された。44号土坑の南10mのところ

凹凸があり、面積約0.7㎡である。覆土は2層に分かれ、42号土坑と同一の層相を示している。遺物の出土はなかった。

#### まとめ

42～45号土坑もまた、その規模や形態、さらに覆土の層相・堆積状況から総合的に判断すると、ほぼ同一群の土坑として把握できるものである。底面積は0.4～0.7㎡にまとまり、いずれも円形を基調としている。こうした点は、同一時期に構築されたと考えられる土坑群―1―の第3グループとほぼ同一と見ることができる。ただ、その分布は前記土坑群から北西約60mのところろに位置することから、同一群を構成するものとは考えにくい。また覆土からは遺物が全く出土していないため、構築時期を決定することもできない。



第17図 土坑 (45号)

#### (4)時期不明の土坑 (第18図)

##### 1号土坑

H-139グリッドにおいて検出されたが、遺構が路線外に延びているために完掘できなかった。当土坑は第III層(暗褐色土層)を掘り込んで構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

第1層 暗褐色土層 やや固く締め粘性がある。ローム粒子・赤色スコリア粒子を少量含む。

第2層 黄褐色土層 固く締め粘性が少しある。ローム粒子・赤色スコリア粒子を少量含む。

第3層 黄褐色土層 やわらかくて粘性が少しある。ローム粒子を多量に含む。2層より明るい色調である。

覆土からは遺物の出土はなかった。

##### 31号土坑

K-129グリッドにおいてローム層直上で検出された。近接して20号土坑(風倒木)が存在する。上面は120×105cm、底面は78×50cm、深さ27～39cmの楕円形を呈する。底面はやや凹凸があり、面積約0.4㎡である。覆土は2層に分かれた。

第1層 黒褐色土層 固く締め粘性がある。ローム粒子を少量含む。

第2層 暗褐色土層 固く締め粘性がある。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

覆土からは遺物の出土はなかった。

##### 36号土坑

L-127・128グリッドにかけてローム層直上で検出された。上面は125×100cm、底面は88×77cm、深さ10～14cmの楕円形を呈する。底面は平坦であり、面積約0.5㎡である。覆土は2層に分かれた。第1層は黒褐色土層であり、第2層は暗褐色土層でロームブロック・ローム粒子を多量に含んでいた。

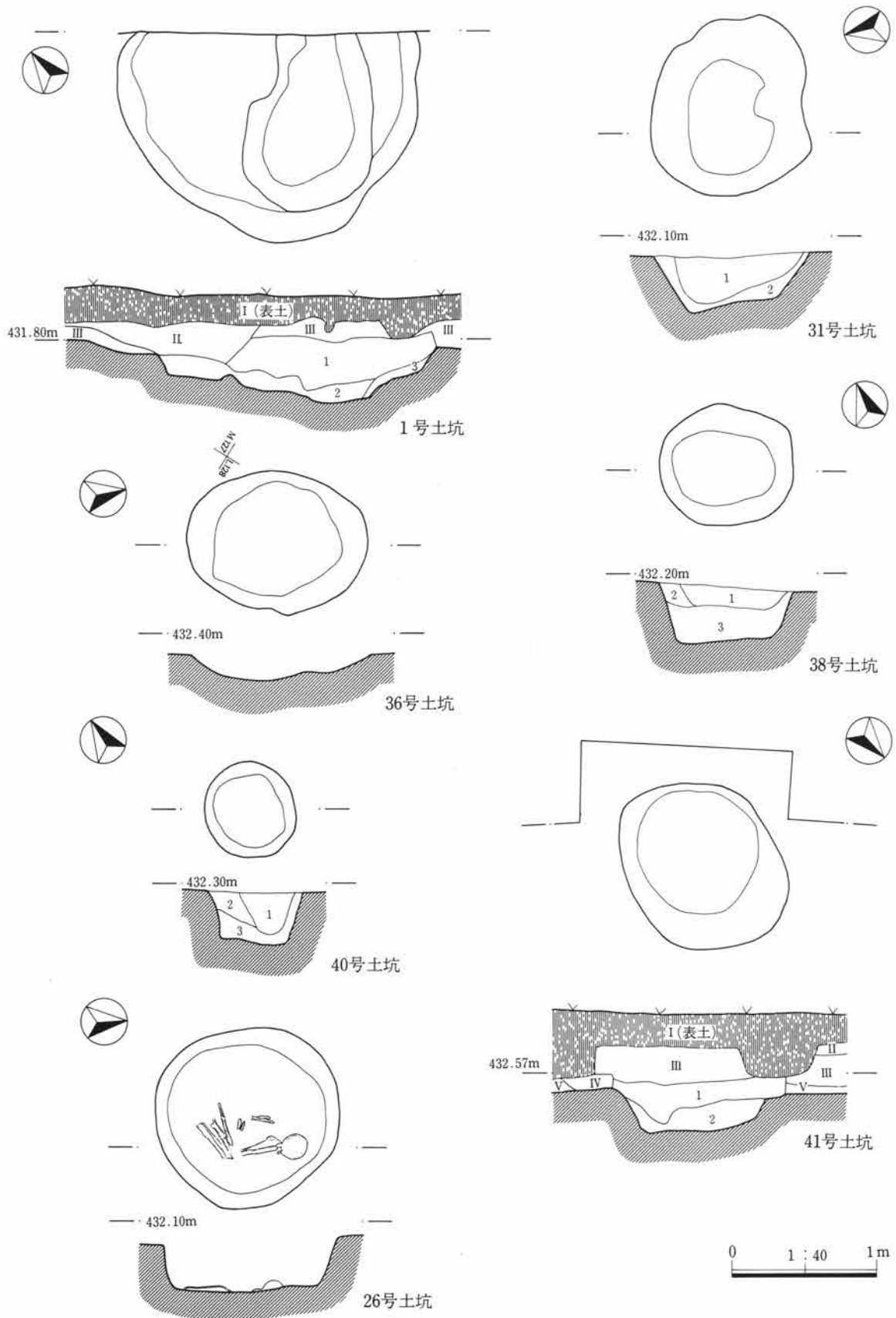
##### 38号土坑

K-122グリッドにおいてローム層直上で検出された。39号土坑(風倒木)の東2.5mのところろに位置する。上面は92×82cm、底面は70×50cm、深さ29～40cmの楕円形を呈する。底面は坂状平坦であり、面積約0.3㎡である。覆土は3層に分かれた。

第1層 黒褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。ローム粒子を少量含む。

第2層 茶褐色土層 非常に固く締め粘性がある。ロームブロック・ローム粒子・赤色スコリア粒子を含む。

第3層 茶褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。ローム粒子を少量含む。2層よりやや明るい色調。



第18図 時期不明の土坑 (1・31・36・38・40・41号)、墓壇 (26号)

覆土からは遺物の出土はなかった。

#### 40号土坑

K-121グリッドにおいてローム層直上で検出された。39号土坑の西1.8mのところに位置する。上面は67×62cm、底面は52×45cm、深さ31～38cmの楕円形（円形にちかい）を呈する。底面は坂状平坦であり、面積約0.2㎡である。覆土は3層に分かれた。

第1層 黒褐色土層 固く締り粘性が非常にある。ローム粒子を少量含む。

第2層 黒褐色土層 非常に固く締り、粘性がある。ロームブロック・ローム粒子を含む。

第3層 暗褐色土層 非常に固く粘性がある。ロームブロック・ローム粒子を含む。

覆土からは遺物の出土はなかった。

#### 41号土坑

N-126グリッドにおいてローム層直上で検出されたが、セクションから判断すると第III層（暗褐色土層）を掘り込んで構築されていることがわかる。上面は128×102cm、底面は89×82cm、深さ30～36cmの楕円形を呈する。底面は平坦であり、面積約0.6㎡である。覆土は2層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。ローム粒子・赤色スコリア粒子・炭化物粒子を含む。

第2層 黒褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子・赤色スコリア粒子含。

覆土からは遺物の出土はなかった。

#### 26号土坑（墓墳）

M-135グリッドにおいて人骨の検出された土壌である。上面は128×121cm、底面は110×102cm、深さ24～38cmのほぼ円形を呈する。底面は平坦であり、面積約0.9㎡である。覆土は黒色土とロームとの混合土であり、明らかに人為的埋土を示していた。覆土から判断して、比較的新しい時期のものである。路線外に墓地があるが、それと関連するものであろうか。人骨は屈葬位である。

#### (5)風倒木

三後沢遺跡第1遺構群からは11基の風倒木が検出されている。大きなものは20号土坑の上面340×268cm、小さなものは39号土坑の上面118×85cmであり、その規模や分布においても統一性がない。3・20・25号土坑の説明を行うことで、代表的な風倒木の事例としたい。

#### 3号土坑

J-140、K-140グリッドにかけて検出された。上面は148×142cm、底面は133×129cm、深さ5～23cmの円形を呈する。底面は凹凸が激しい。覆土は2層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて粘性がある。ローム粒子を含む。

第2層 暗褐色土層 1層より明るい色調。ロームブロック・ローム粒子を多量に、炭化物粒子を少量含む。

覆土からは遺物の出土はなかった。

#### 20号土坑

J-129・130、K-129・130グリッドにかけてローム層直上で検出された。上面は340×268cm、底面は265×197cm、深さ50～63cmの楕円形を呈する。底面は皿状を呈する。覆土は4層に分かれた。

第1層 黄褐色土層 ロームからなる層。わずかに黒色土を含む。

第2層 暗褐色土層 やや固く締り粘性はほとんどない。大粒のロームブロック・ローム粒子を含む。

第3層 黄褐色土層 やや固く締り粘性がある。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。黒色土少ない。

第4層 黄褐色土層 固く締り粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

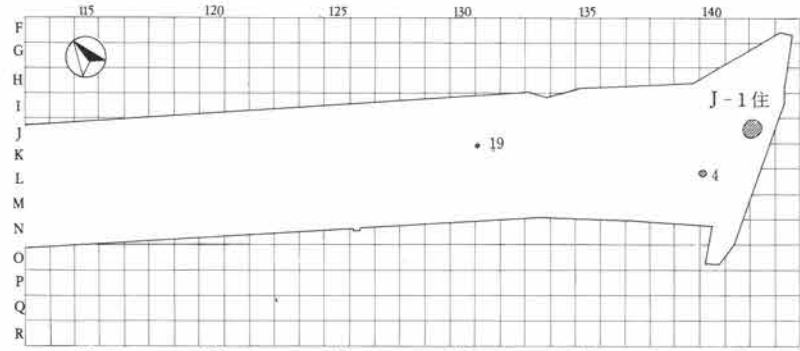
覆土からは遺物の出土はなかった。

25号土坑

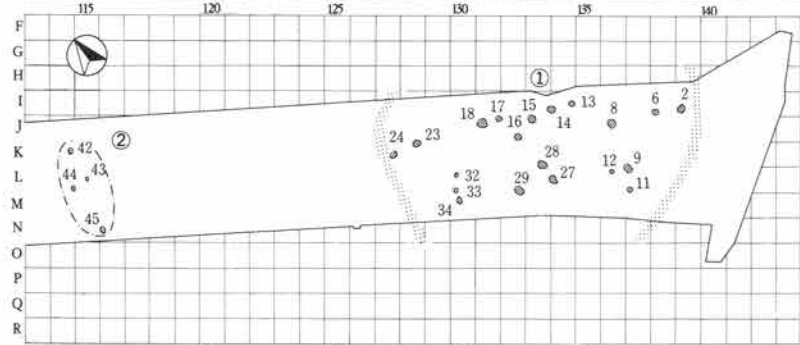
J-134、K-134グリッドにかけてローム層直上で検出された。上面は252×190cm、底面は190×140cm、深さ38～48cmの楕円形を呈する。底面は平坦であり、覆土は4層に分かれた。第1・4層がローム主体の層であり、第2層は暗褐色土層、第3層は茶褐色土層である。

覆土からは遺物の出土はなかった。

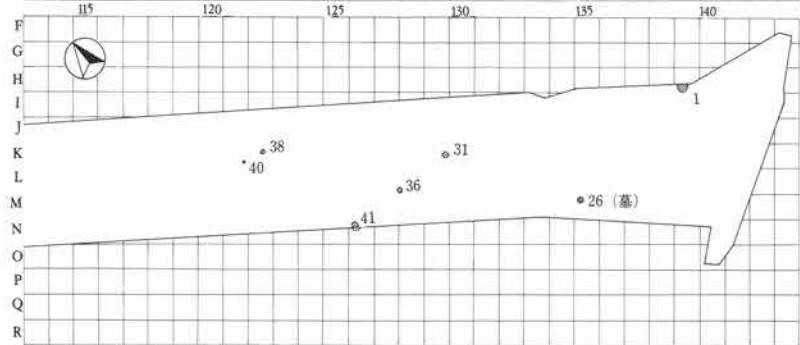
縄文時代の遺構分布図  
(J-1住と4・19号土坑)



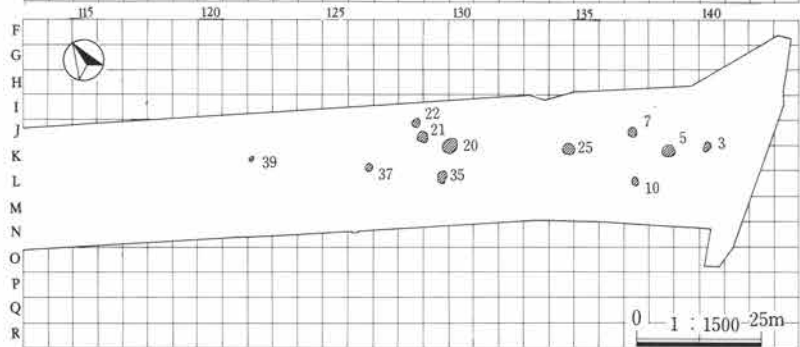
同一時代に構築されたと  
考えられる土坑-1・2-



時期不明の土坑・墓塚分布図



風倒木の分布図



0 1 : 1500-25m

第19図 三後沢遺跡第1遺構群の遺構分布図



## 三後沢遺跡第1遺構群検出の土坑一覧表

## (1) 縄文時代の土坑

No.	グリッド	上面 cm (長径×短径)	底面 cm (長径×短径)	上面 長径/短径	底面積(m <sup>2</sup> )	底面 長径/短径	深さ(cm)	備 考
4	K-139・140 L-139・140	(174×157)	(133×133)	1.11	1.5	1.0	35~46	前期土器(含繊維)2点
19	J-131 K-130・131	(96×94)	(71×61)	1.02	0.35	1.08	46~56	中期土器片2点

## (2) 同一時期に構築されたと考えられる土坑 - 1 -

No.	グリッド	上面 cm (長径×短径)	底面 cm (長径×短径)	上面 長径/短径	底面積(m <sup>2</sup> )	底面 長径/短径	深さ(cm)	備 考
2	I-139	(175×153)	(157×139)	1.14	1.7	1.13	10~15	第2グループ
6	I-138 J-138	(156×136)	(132×106)	1.15	1.1	1.25	13~24	"
8	J-136	(172×155)	(150×130)	1.11	1.6	1.15	9~18	"
9	K-137 L-137	(187×158)	(166×133)	1.18	1.6	1.25	11~20	"
11	L-137	(100×88)	(80×68)	1.14	0.4	1.18	9~20	第3グループ
12	L-136	(107×101)	(90×83)	1.06	0.6	1.08	8~17	"
13	I-134	(110×106)	(91×85)	1.04	0.6	1.07	5~12	"
14	I-133・134	(167×136)	(148×125)	1.23	1.4	1.18	7~17	第2グループ
15	I-133 J-133	(168×156)	(136×119)	1.08	1.3	1.14	10~19	"
16	J-132	(149×128)	(123×103)	1.16	1.1	1.19	8~16	"
17	I-131・132 J-131・132	(135×130)	(85×75)	1.04	0.5	1.13	21~31	第3グループ
18	J-131	(190×178)	(175×162)	1.07	2.3	1.08	12~26	第1グループ
23	J-128 K-128	(161×147)	(140×137)	1.10	1.5	1.02	3~14	第2グループ
24	K-127	(160×134)	(138×120)	1.19	1.3	1.15	4~16	"
27	L-133・134	(187×162)	(175×143)	1.15	2.1	1.22	8~19	第1グループ
28	K-133 L-133	(190×180)	(149×143)	1.06	1.6	1.04	11~25	第2グループ
29	L-132 M-132	(187×142)	(164×118)	1.32	1.7	1.39	10~23	"
32	L-130	(110×100)	(83×59)	1.1	0.4	1.41	16~25	第3グループ
33	L-130 M-130	(105×105)	(95×95)	1.0	0.7	1.0	16~21	"
34	M-130	(139×110)	(105×69)	1.26	0.6	1.52	18~20	"

三後沢遺跡

(3) 同一時期に構築されたと考えられる土坑 - 2 -

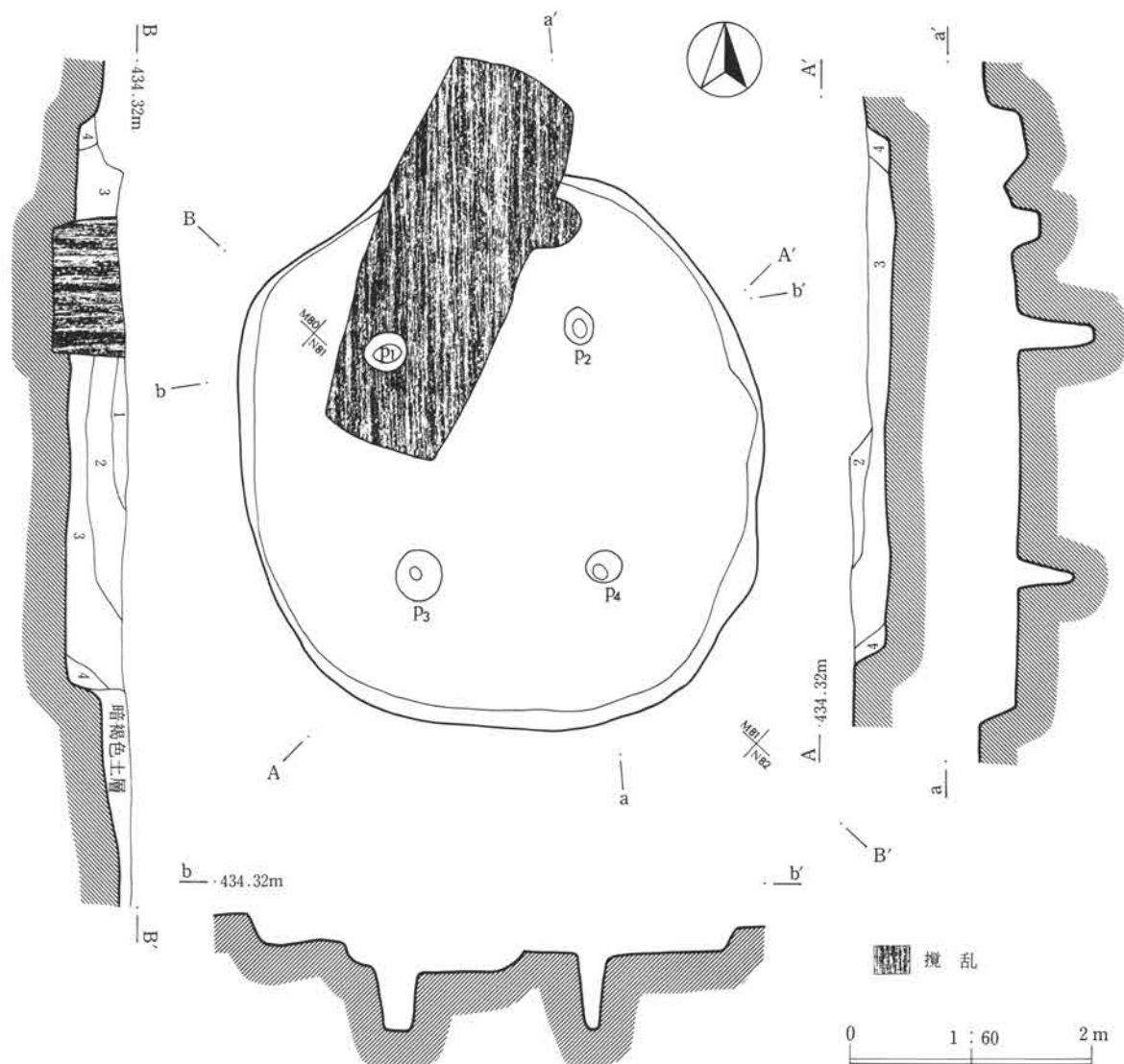
No.	グリッド	上面 cm (長径×短径)	底面 cm (長径×短径)	上面 長径/短径	底面積 (m <sup>2</sup> )	底面 長径/短径	深さ (cm)	備 考
42	K-114	(117×101)	( 98× 95)	1.16	0.7	1.03	25~30	
43	L-115	( 91× 79)	——	1.15	0.5	—	3	
44	L-114・115	( 84× 81)	( 71× 64)	1.04	0.4	1.11	5~7	
45	N-115・116	(111×111)	( 96× 93)	1.0	0.7	1.03	12~24	

(4) 時期不明の土坑・墓壇

No.	グリッド	上面 cm (長径×短径)	底面 cm (長径×短径)	上面 長径/短径	底面積 (m <sup>2</sup> )	底面 長径/短径	深さ (cm)	備 考
1	H-139	——	——	—	(1.8)	—	26~42	完掘できなかった。
31	K-129	(120×105)	( 78× 50)	1.14	0.4	1.56	27~39	
36	L-127・128	(125×100)	( 88× 77)	1.25	0.5	1.14	10~14	
38	K-122	( 92× 82)	( 70× 50)	1.12	0.3	1.4	29~40	
40	K-121	( 67× 62)	( 52× 45)	1.08	0.2	1.16	31~38	
41	N-126	(128×102)	( 89× 82)	1.25	0.6	1.09	30~36	
26	M-135	(128×121)	(110×102)	1.06	0.9	1.08	24~38	墓壇 (人骨検出)

(5) 風倒木

No.	グリッド	上面 cm (長径×短径)	底面 cm (長径×短径)	上面 長径/短径	底面積 (m <sup>2</sup> )	底面 長径/短径	深さ (cm)	備 考
3	J-140 K-140	(148×142)	(133×129)	1.04	1.3	1.03	5~23	
5	K-138	(270×196)	(255×184)	1.38	3.6	1.39	6~15	
7	J-137	(177×170)	(132×110)	1.04	1.5	1.2	13~36	
10	L-137	(160×127)	(140×108)	1.26	1.2	1.30	8~26	
20	J-129・130 K-129・130	(340×268)	(265×197)	1.27	3.4	1.35	50~63	
21	J-128・129	(260×211)	(216×141)	1.23	2.5	1.53	50~68	
22	I-128 J-128	(155×136)	(121×104)	1.14	1.1	1.16	17~22	
25	J-134 K-134	(252×190)	(190×140)	1.33	2.2	1.36	38~48	
35	L-129	(229×160)	(205×145)	1.43	2.4	1.41	6~29	
37	K-126 L-126	(163×151)	(144×137)	1.08	1.6	1.05	7~23	
39	K-123	(118× 85)	( 95× 59)	1.39	0.5	1.61	7~24	



## a. 縄文時代の住居跡

第20図 J-2号住居跡

## J-2号住居跡 (第20・21図、PL.4)

**位置** M-80・81、N-80・81グリッドにかけて暗褐色土層中から検出された。

**経過** 5月10日に遺構を確認し、17日から調査を開始した。25日～28日まで各種図面の作成、写真撮影を行い、6月1日の全景写真撮影を最後に当住居跡の調査を終了した。

**重複** 攪乱が住居跡北側に存在する。攪乱の規模は長辺3.3m、短辺1.3m、深さ60cmである。比較的新しい時期のものと判断される。

**覆土** ローム層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

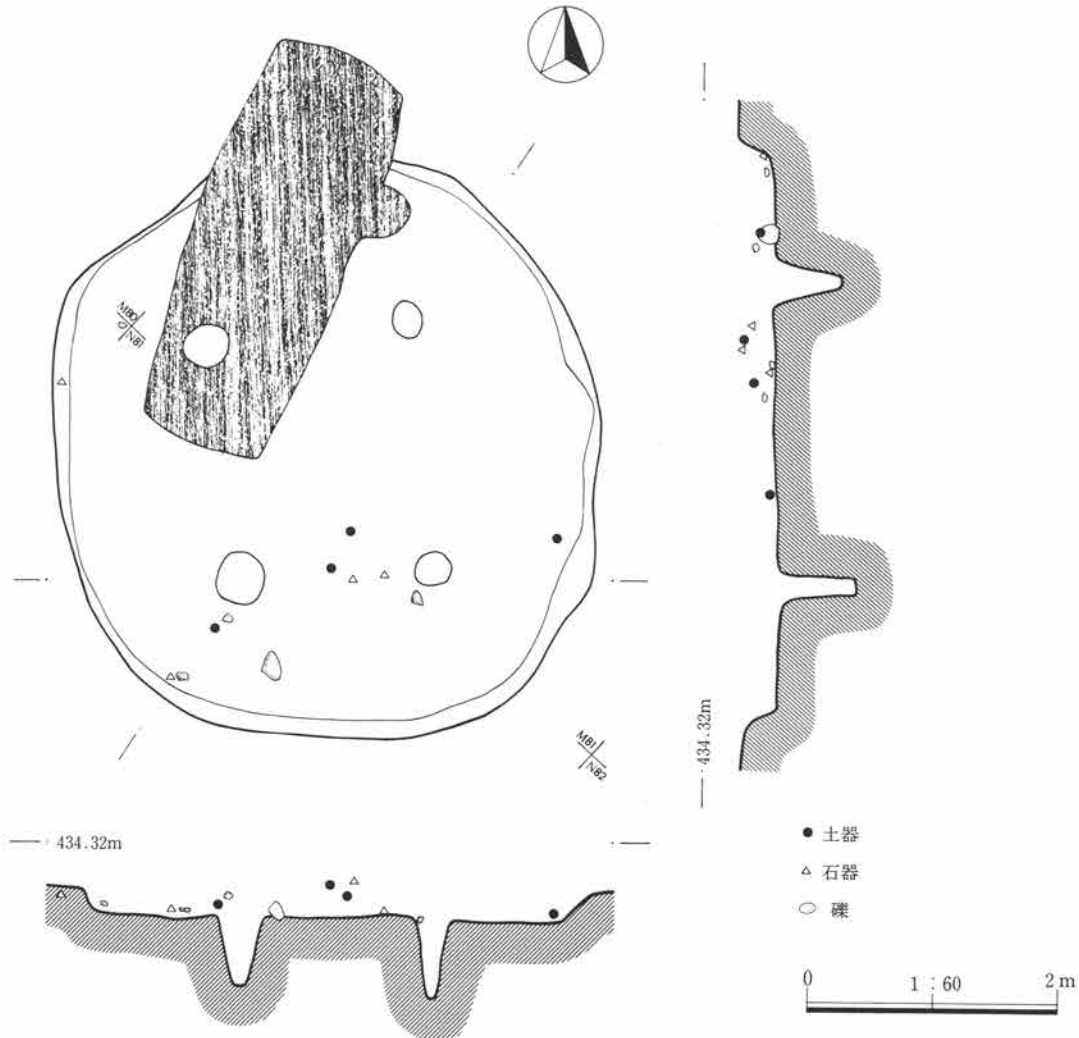
第1層 褐色土層 やわらかくて締りが悪い。粘性はあまりない。ローム粒子・炭化物粒子を少量含む。

第2層 暗褐色土層 やわらかくて締りが悪い。粘性はほとんどない。ローム粒子を含む。

第3層 暗褐色土層 固く締り粘性がある。径5cm程のロームブロックとローム粒子を多量に、炭化物も含。

第4層 黒褐色土層 固く締り粘性がある。ローム粒子を多量に、炭化物粒子を極少量含む。

**形状** 長径4.5m、短径4.35mのほぼ円形を呈する。推定面積は約15㎡であるから、居住人員は約4.5人となる。



第21図 J-2号住居跡遺物出土状況

No.	上	深さ (cm)	備 考
	長径×短径 (cm)		
1	37×33cm	50cm	支柱穴
	16×11cm		
2	30×25cm	60cm	"
	16×11cm		
3	43×38cm	55cm	"
	11× 8cm		
4	30×25cm	60cm	"
	14×10cm		

J-2号住居跡ピット計測表

**壁高** 住居跡確認面より約17~35cmで床面に達する。床面からゆるやかに立ち上がる。

**床面** ほぼ平坦である。住居中央部は良く踏み固められているが、壁際は軟弱である。

**周溝** 検出できなかった。

**柱穴** 4個検出された。P<sub>1</sub>は深さ50cm、P<sub>2</sub>深さ60cm、P<sub>3</sub>深さ55cm、P<sub>4</sub>深さ60cmであり、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>はP<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>にくらべて小さく深い。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間距離165cm、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間距離155cm、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>間距離185cm、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>間距離200cmをそれぞれ測る。

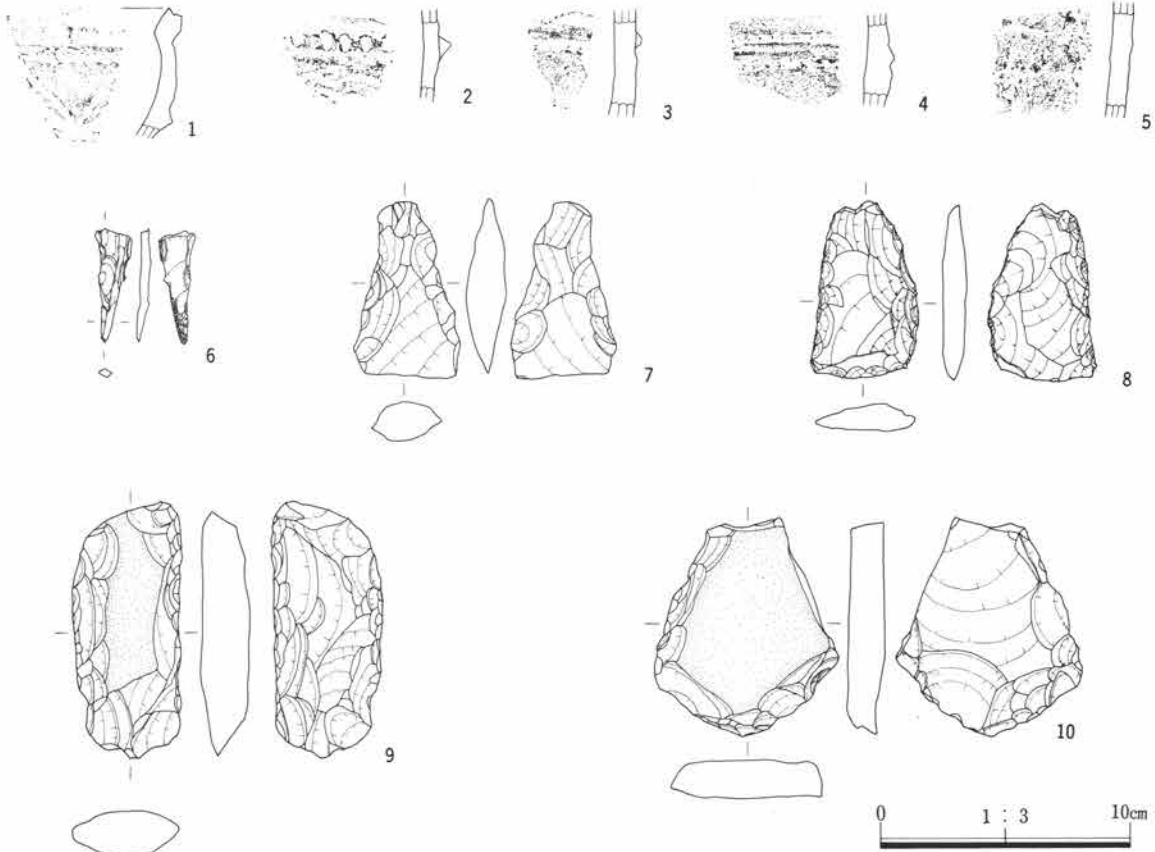
**炉** 検出できなかった。現場での所見は、攪乱によって壊されてしまったのであろうと記されているが、当住居跡が縄文時代中期前半の土器を出土していることから考えて、もともと炉は存在しなかったのではないだろうか。攪乱の位置から判断して、この範囲に炉が存在していたと考えるには不可能と思われる。

**遺物出土状況** 覆土・床面からの遺物の出土は非常に少なかった (第21図)。

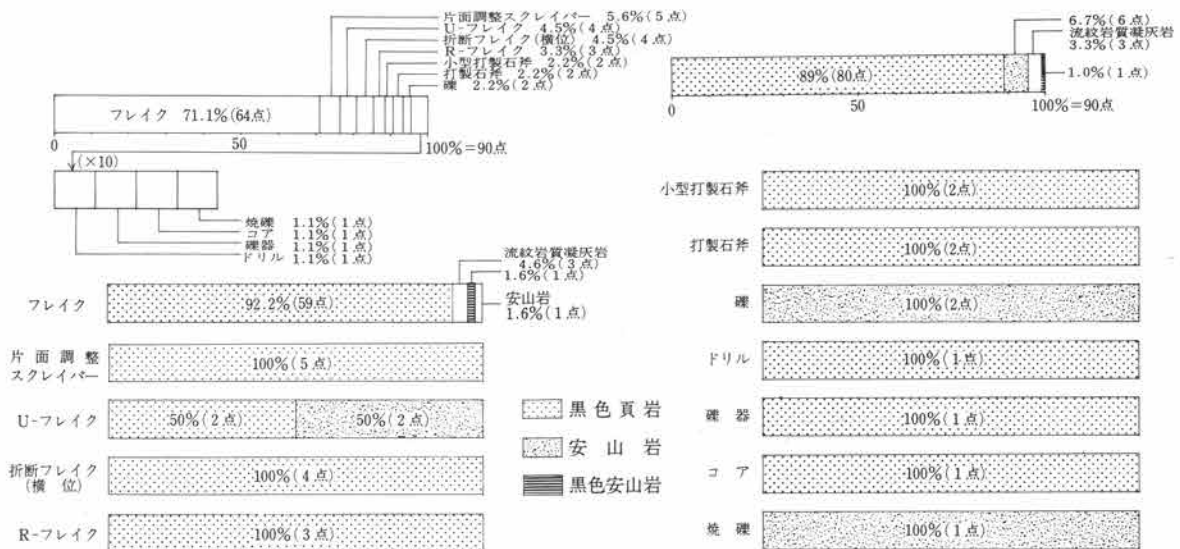
**出土遺物** (第22・23図、PL.42)

当住居跡から出土した土器の内訳は、中期土器片56点、前期土器片35点、弥生土器片16点であった。中期土器片はいずれも細片であるため、5点だけを拓本で図示した。石器類は90点出土している。その内訳は、フレイク64点、片面調整スクレイパー5点、U-フレイク4点、折断フレイク（横位）4点、R-フレイク3点、小型打製石斧2点、打製石斧2点、礫2点、ドリル・礫器・コア・焼礫が各々1点である。

時期 出土遺物から判断すると、当住居跡は縄文時代中期前葉阿玉台式土器の段階に相当する。



第22図 J-2号住居跡出土遺物



第23図 石器の器種別・石材別グラフ

J-2号住居跡遺物観察表

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況			
							計 測 値 ( )内は現存値	備 考	出土状況
図番 PL	器種	遺存状況	石 材	全 長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)		
22-1 PL. 42	口縁部 片		①雲母・細礫を含む ②良 ③外面 暗褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の口縁部片で口唇裏面に稜を形成する。器厚6mm。内面は丁寧な調整が行われている。	隆帯区画内に円形竹管による結節沈線が2列巡る。	覆土			
22-2 PL. 42	胴部片		①雲母・細礫を含む ②良 ③外面 暗褐色 内面にぶい橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚6mm。内面は丁寧な調整が行われている。	断面三角形の隆帯上に刻みを有する。	覆土			
22-3 PL. 42	胴部片		①雲母・細礫を含む ②良 ③外面 黒褐色 内面 灰褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。内面は丁寧な調整が行われている。	断面三角形の隆帯と竹管状工具による結節沈線により区画文様が施される。	覆土			
22-4 PL. 42	胴部片		①雲母・細礫を含む ②良 ③外面 にぶい赤褐色 内面 にぶい赤褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm～1cm。内面は丁寧な調整が行われている。	断面三角形の隆帯と竹管状工具による結節沈線により区画文様が施される。	覆土			
22-5 PL. 42	胴部片		①雲母・細砂を含む ②良 ③外面 にぶい 橙色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。内面は丁寧な調整が行われている。	器面に横走して多段に指頭状の圧痕が巡っている。	覆土			
22-6 PL. 42	ドリル	完 形	黒色頁岩	4.4	1.5	0.4	2.1	小さな切片を素材とし、一端を錐状に加工している。	覆土
22-7 PL. 42	小型打 製石斧	完 形	黒色頁岩	7.0	4.3	1.6	39	撥形。両側縁が内側に彎曲している。	覆土
22-8 PL. 42	小型打 製石斧	完 形	黒色頁岩	7.0	3.9	9.5	36	撥形。 "	覆土
22-9 PL. 42	打製石 斧	完 形	黒色頁岩	10.2	4.3	1.9	110	短冊形。両側面がほぼ直線的である。	西壁際
22-10 PL. 42	打製石 斧	基部欠	黒色頁岩	(8.3)	7.4	1.4	(121)	撥形。両側縁が内側に彎曲している。	覆土

J-3号住居跡 (第24・25図、PL.4)

位置 N-81、O-81・82グリッドにかけてローム層直上で検出された。

経過 5月10日にJ-2号住居跡とともに当住居跡を確認した。覆土から遺物がほとんど出土しなかったために、調査は比較的早く終了した。

重複 住居西側部分を上幅58～70cm、下幅24～48cmの溝によって壊されている。溝は比較的新しい時期のものである。また床面の一部も攪乱によって壊されている。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

第1層 黒褐色土層 やや固く締め粘性がある。ローム粒子を少量含む。

第2層 暗褐色土層 固く締め粘性が少しある。ローム粒子を多量に、赤色スコリア粒子を少量含む。

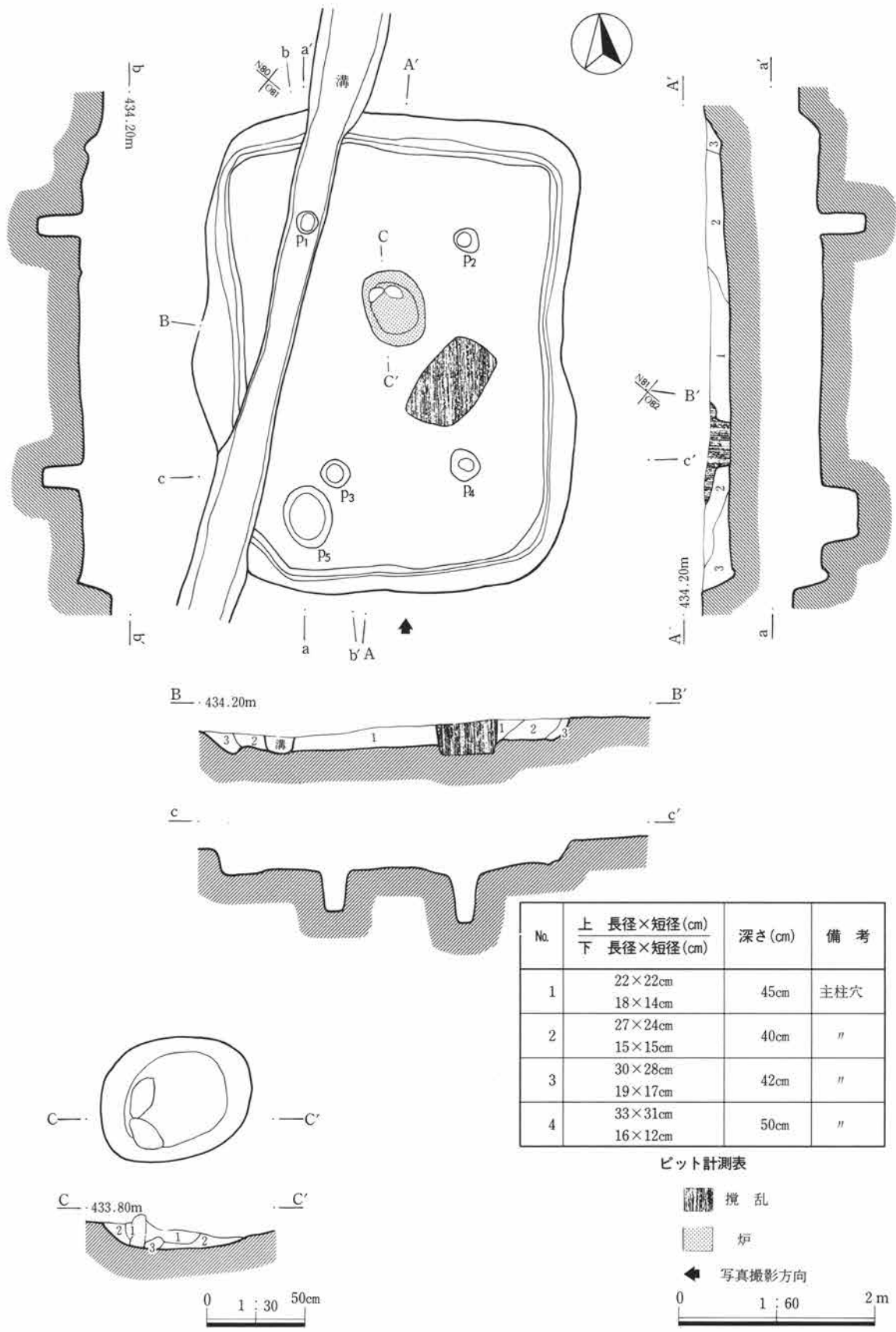
第3層 黄褐色土層 やわらかくて粘性がある。ロームブロック・ローム粒子を主体とする層。

形状 長辺4.8m、短辺3.7mの隅丸方形を呈する。推定面積は約12.7㎡であり、居住人員は約4人となる。

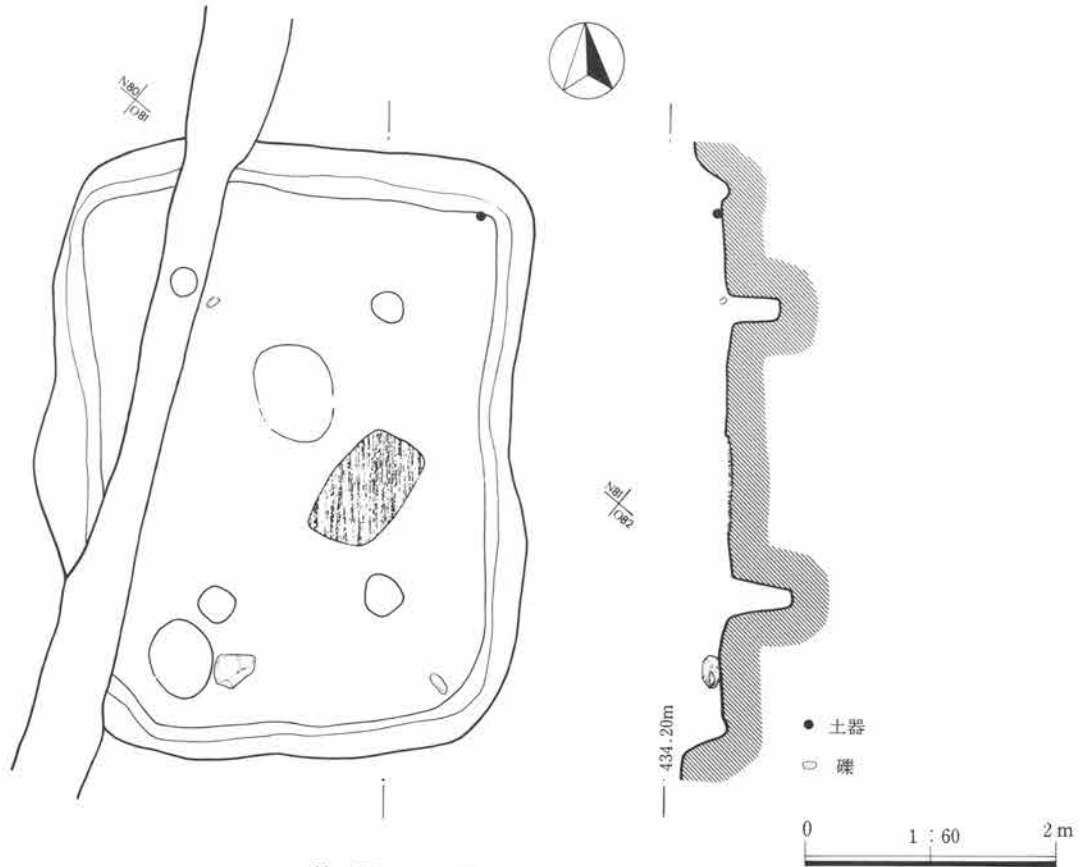
壁高 住居跡確認面より約15～35cmで床面に達する。床面からゆるやかに立ちあがる。

床面 ほぼ平坦である。全体的に良く踏み固められているが、壁際は軟弱である。

周溝 幅10～15cm、深さ3cmの周溝が、溝によって壊された部分を除いて検出されている。全周したもので



第24図 J-3号住居跡



第25図 J-3号住居跡遺物出土状況

あろう。

**柱穴** 総計5個のピットが検出された。このうちP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は主柱穴に、P<sub>5</sub>は貯蔵穴になる。P<sub>1</sub>は深さ(45)cm、P<sub>2</sub>深さ40cm、P<sub>3</sub>深さ42cm、P<sub>4</sub>深さ50cmである。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間距離160cm、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間距離140cm、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>間距離260cm、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>間距離230cmをそれぞれ測る。貯蔵穴P<sub>5</sub>は長径57cm、短径50cm、深さ37cmの楕円形を呈し、面積約0.23㎡である。遺物は出土しなかった。主柱穴、貯蔵穴および炉の位置から総合的に判断すると、当住居跡の出入口部分は南壁部分に求められる。

**炉** 床面を掘り窪めた地床炉である。長径78cm、短径60cm、深さ25cmの楕円形を呈し、住居中央やや北壁寄りに位置している。また北端に礫2個を配置し、面積約0.4㎡である。覆土は3層に分かれたが、焼土・炭化物の類はほとんど検出できなかった。

第1層 暗褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子・炭化物粒子を少量含。

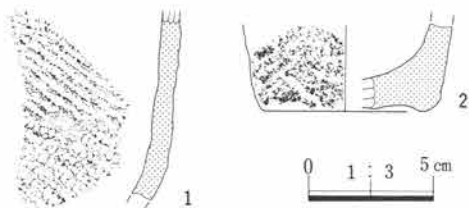
第2層 茶褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。ローム粒子を多量に、炭化物粒子を少量含む。

第3層 黄褐色土層 非常に固く締り粘性がある。ロームブロック・ローム粒子からなる層。

**遺物出土状況** 覆土・床面からはほとんど遺物は出土しなかった(第25図)。

**出土遺物**(第26図、PL.42)

当住居跡から出土した土器片は6点であり、内2点を拓本で図示した。その他にストーンリタッチャー1点、礫2点が出土しただけであった。



第26図 J-3号住居跡出土土器



**時期** 当住居跡から出土した土器は非常に少なかったために、時期決定することはむずかしい。ただ住居形態や覆土の層相、さらに周辺グリッドから前期（繊維）土器片が出土していることをあわせ考えると、当住居跡は縄文時代前期の関山式土器段階に相当するものであろう。

J-3号住居跡遺物観察表

〔法量：⑤底径〕

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
26-1 PL. 42	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面に ぶい褐色 内面褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm～ 9mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行なわれている。	縄文施文。原体はR(上)。	覆土
26-2 PL. 42	底部片	⑤(6.6)	①含繊維 ②不良 ③外面にぶ い黄褐色 内面褐灰色	上げ底でやや開いて立ち上がる。 器厚9mm～1.5cm。内外面は荒れて いて繊維痕顕著に認められる。	縄文施文。原体はL(上)か。	覆土

## J-4号住居跡(第27～34・53図、PL.5～7)

- 位置** M-83・84、N-83・84・85、O-84グリッドにかけて検出された。J-5号住居跡の北に位置する。
- 経過** N-84グリッド周辺から縄文土器片が多量に出土したことによって住居跡の存在が予想された。6月11日から遺構確認作業を行い、15日になって住居跡プランを検出し調査を開始した。この間、グリッド出土として多量の土器片が取りあげられている。さらに住居跡覆土からも多量の土器片の出土があり、遺物出土状況図を作成しながら掘り下げを続行。この作業は延々7月14日まで及んだ。以後、床面の精査、ピットの検出作業、各種図面の作成、写真撮影を行い、最後に床面下の掘り下げ調査をもって当住居跡の調査を終了。
- 重複** 上幅45cm、下幅24cmの溝と重複している。溝は比較的新しい時期のものである。
- 覆土** ローム層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。
- 第1層 暗褐色土層 やわらかいが粘性はほとんどない。ローム粒子・赤色スコリア粒子を含む。多量の遺物が出土している。
- 第2層 黒褐色土層 固く締め粘性が少しある。ローム粒子・赤色スコリア粒子を含んでいる。遺物が多量に出土し、土器は半完形品が多かった。
- 第3層 茶褐色土層 やや固く締め粘性はほとんどない。ロームブロック・ローム粒子を多量に含み、炭化物粒子・赤色スコリア粒子を少量含む。
- 第4層 暗褐色土層 固く締め粘性がある。ローム粒子・赤色スコリア粒子を含む。
- 第5層 暗褐色土層 やや固く締め粘性が非常にある。ローム粒子・赤色スコリア粒子・炭化物粒子を多量に、ロームブロックを少量含む。遺物の出土はほとんどなかった層である。
- 第6層 暗褐色土層 固く締め粘性がある。ローム粒子・赤色スコリア粒子・炭化物粒子を含む。第4層よりもやや暗い色調を呈している。
- 第7層 黒褐色土層 やや固く締め粘性が非常にある。ローム粒子・赤色スコリア粒子を含む。
- 第8層 黒褐色土層 固く締め粘性が非常にある。ローム粒子・赤色スコリア粒子を含む。
- 第9層 黄褐色土層 拡張前住居跡の周溝覆土。固く締め粘性が非常にある。ローム主体の層であり、わずかに黒色土を含む。

第10層 茶褐色土層 外側周溝覆土。固く締り粘性が非常にある。ローム粒子・赤色スコリア粒子を含む。  
**形状** 当住居跡は1回の拡張が行われている。拡張前の住居跡の規模は、長辺8.25m、短辺は北壁で4.7m、中央で4.8m、南壁で5.3mの北に向かって狭まる台形を呈している。面積約34.2㎡であるから、居住人員は約10.4人となる。拡張後の住居跡の規模は、長辺9.4m、短辺は北壁で4.7m、中央で5.4m、南壁で6.0mの台形を呈している。面積約40.1㎡であるから、居住人員は約12.2人となる。拡張は北壁方向へ約3.5㎡、西壁方向へ約2.4㎡が増加され、拡張総面積約5.9㎡であることから居住人員に換算すれば約1.8人の増員となっている。

**壁高** グリッドラインに沿った土層ベルトから判断すると、約60～80cmで床面に達している。ただ、住居跡プランが確実に検出された面からでは、東壁で22～30cm、西壁で41～52cm、南壁で28～43cm、北壁で29～34cmで床面に達している。すでにグリッド調査の段階で多量の遺物が出土し、住居跡の存在が予想されたものの、住居跡プランを明確にすることができずに掘り下げた結果、セクションと残存壁高に差がでてきたものである。いずれにしてもやや良好な壁の残存状況である。床面からゆるやかに立ち上がっている。

**床面** 凹凸が認められ全体的に軟弱である。踏み固められた良好な床面はほとんど検出できなかった。

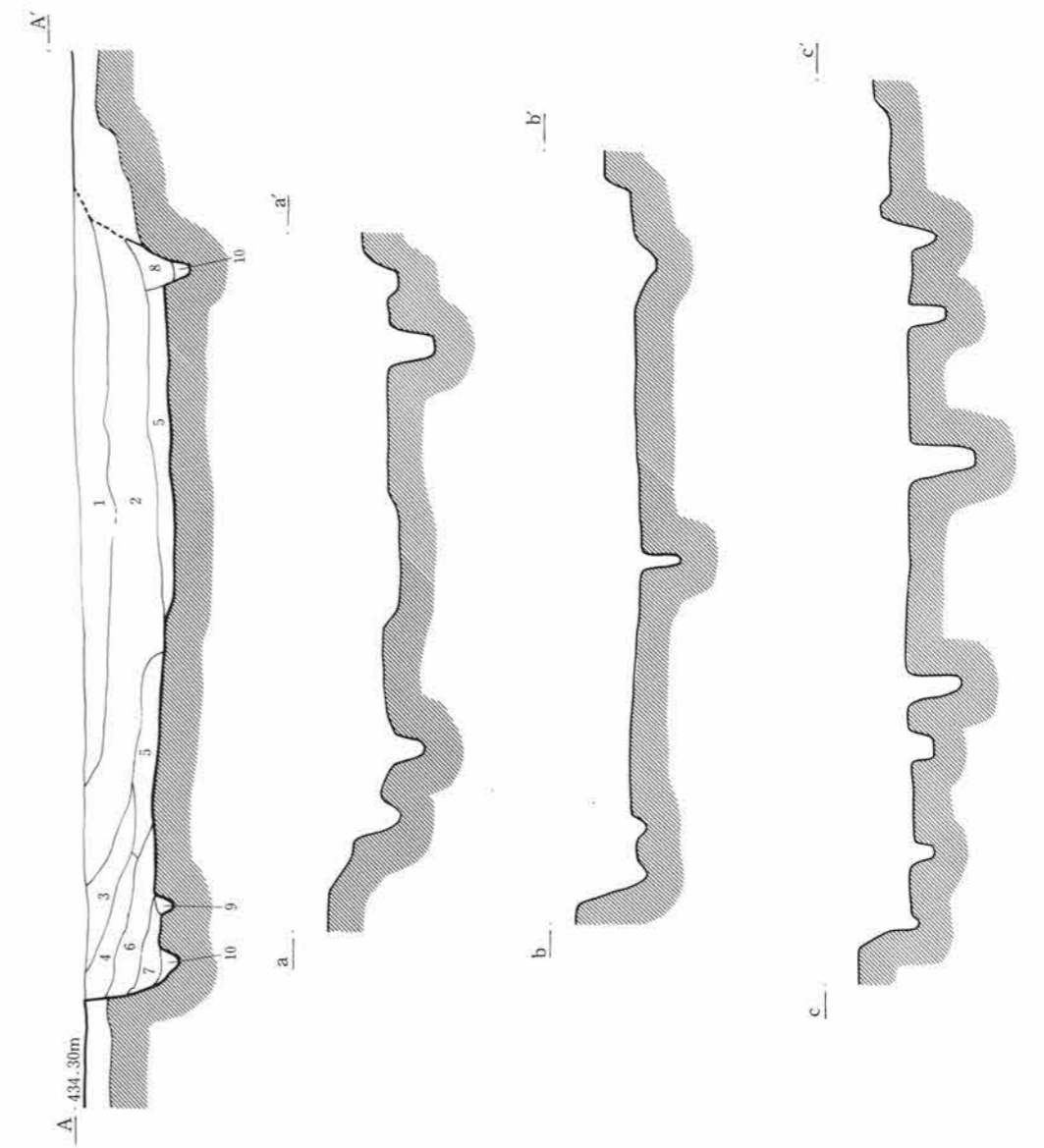
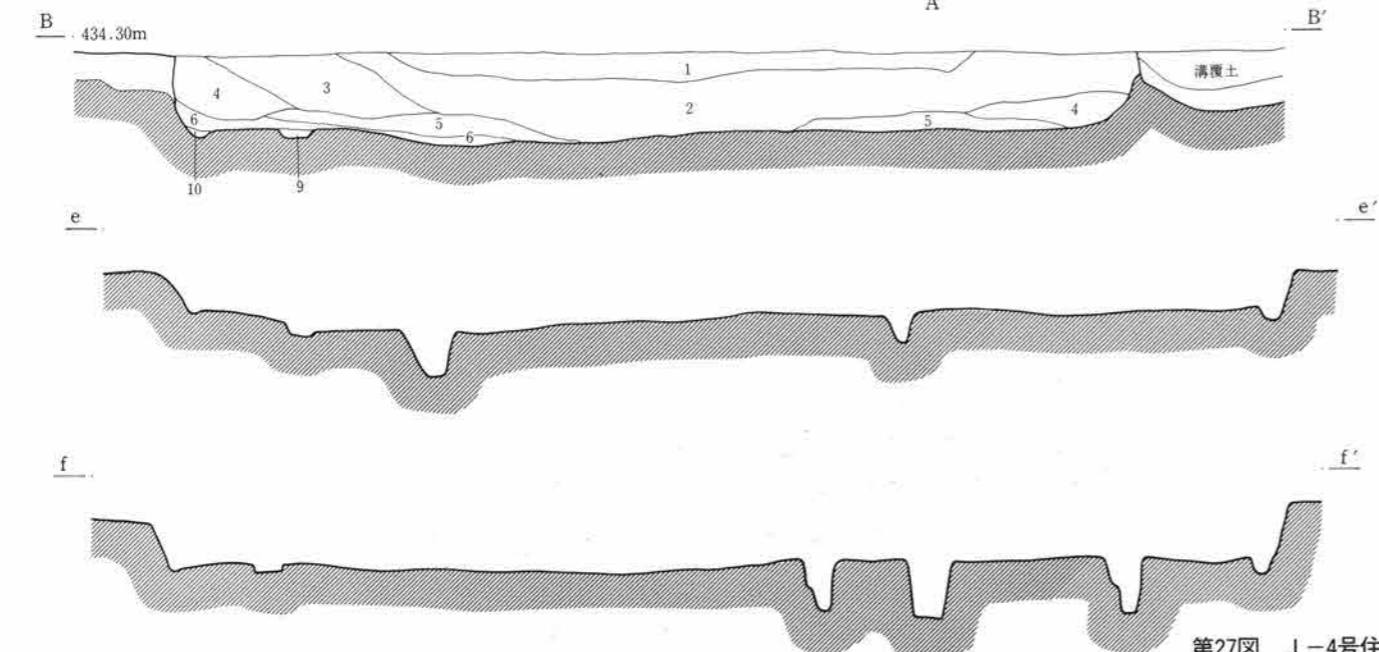
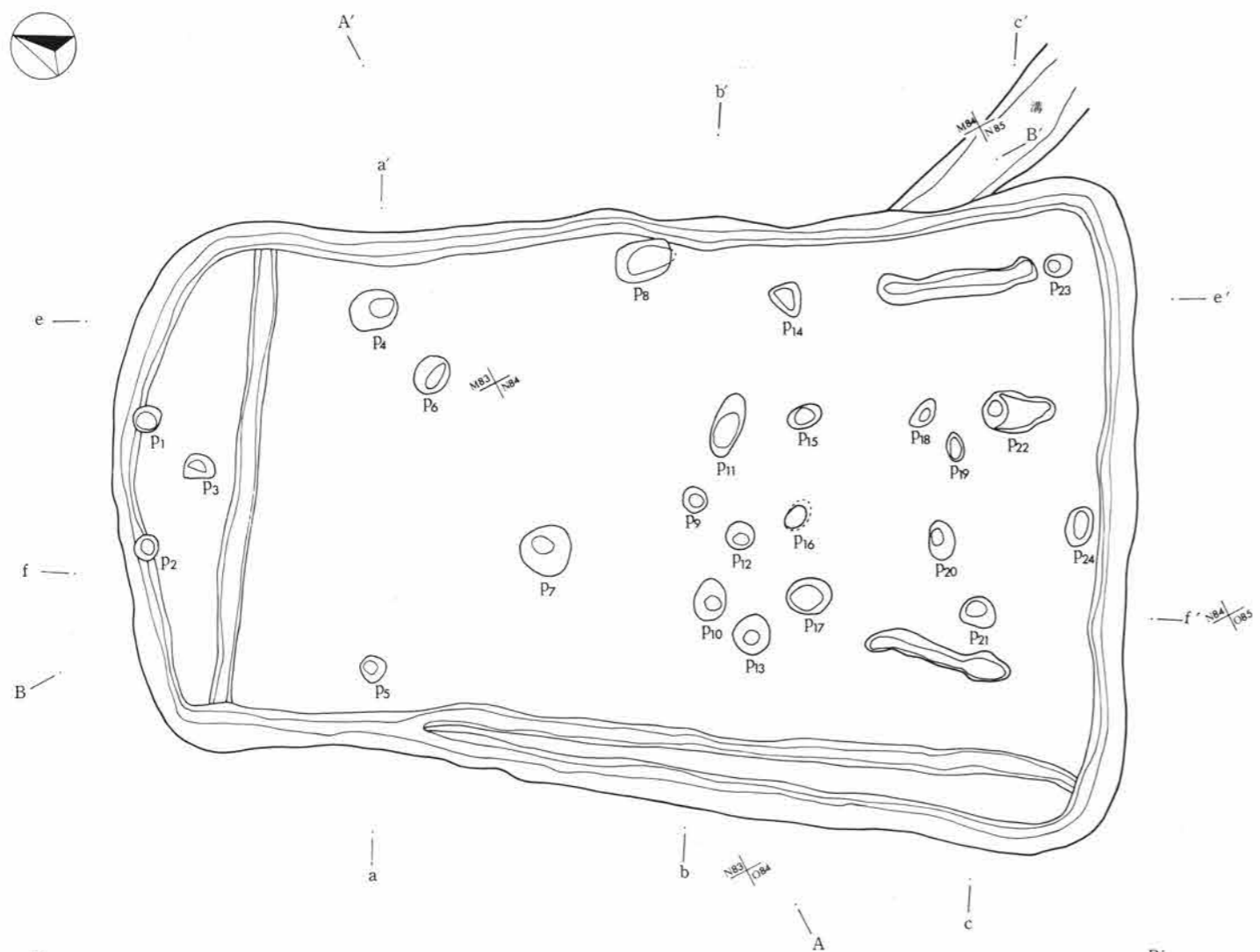
**周溝** 住居跡を全周している。拡張前の住居跡の周溝は、東壁下では長さ7.5m、幅5～12cm、深さ14～26cm、西壁下は長さ7.9m、幅5～15cm、深さ8～16cm、南壁下は長さ5.3m、幅5～8cm、深さ8～13cm、北壁下は長さ4.1m、幅10～18cm、深さ7～10cmをそれぞれ測る。拡張後の周溝は、東壁下では長さ8m、幅・深さは変わらず、西壁下は長さ8.2m、幅5～10cm、深さ7～16cm、南壁下は長さ5.7m、幅・深さは変わらず、北壁下は長さ5.3m、幅4～11cm、深さ4～7cmをそれぞれ測る。北壁の周溝は浅く、東壁のそれは深い。

**柱穴** 総計24個のピットが検出された。このうちP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>は拡張後の住居跡に伴うものであろう。残り21個のピットを拡張前・拡張後のどの住居跡に伴うものかは明確に区別することはできなかった。24個のピットの

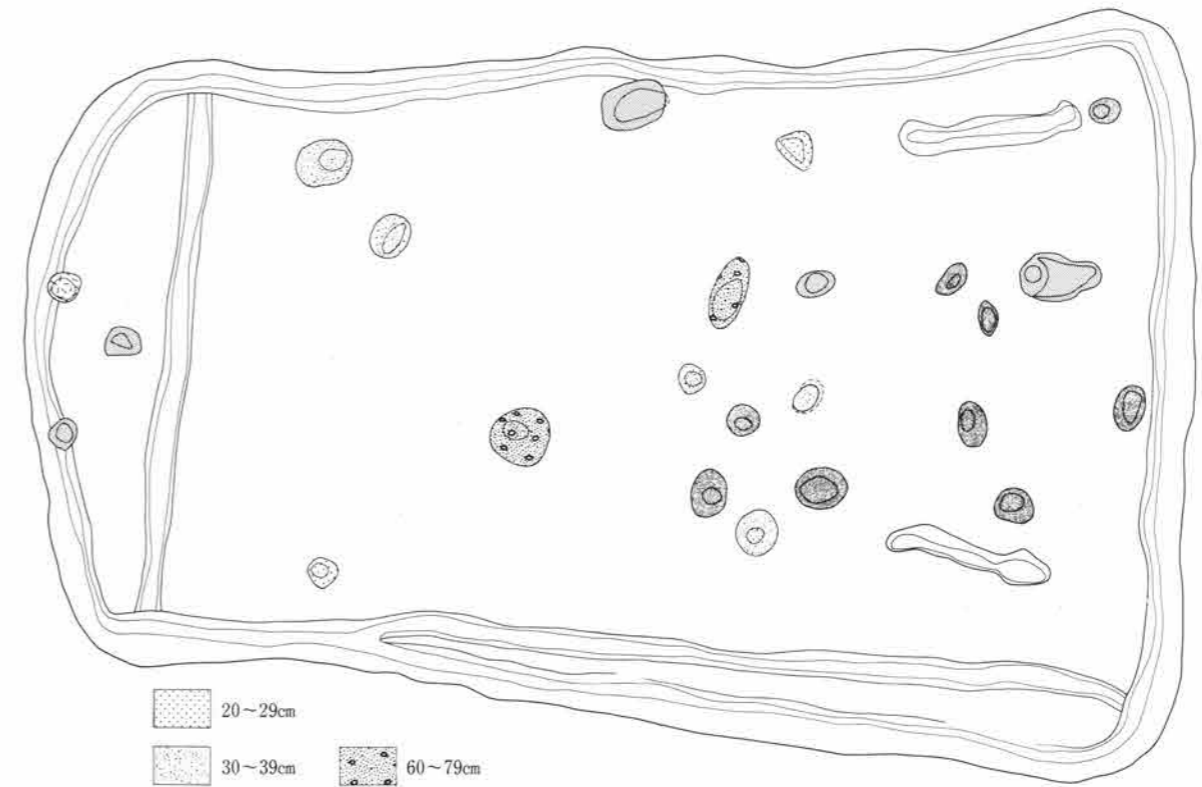
No.	上 長径×短径 (cm) 下 長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備 考
1	24×24cm 20×16cm	76cm	拡張後
2	24×22cm 14×13cm	52cm	〃
3	28×22cm 17×9cm	58cm	〃
4	44×36cm 22×16cm	38cm	
5	24×24cm 12×12cm	28cm	
6	36×30cm 28×12cm	31cm	
7	47×45cm 21×14cm	60cm	
8	52×36cm 44×22cm	52cm	
9	22×22cm 13×11cm	32cm	
10	38×28cm 15×14cm	40cm	
11	58×26cm 35×19cm	64cm	
12	26×26cm 14×9cm	47cm	

No.	上 長径×短径 (cm) 下 長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備 考
13	37×34cm 14×13cm	32cm	
14	30×26cm 24×14cm	22cm	
15	32×20cm 18×14cm	57cm	
16	24×16cm 30×18cm	39cm	
17	42×33cm 30×22cm	44cm	
18	30×18cm 13×7cm	42cm	
19	28×16cm 20×10cm	47cm	
20	36×23cm 16×10cm	42cm	
21	31×26cm 18×16cm	45cm	
22	55×38cm 13×13cm	55cm	
23	24×20cm 11×10cm	46cm	
24	36×24cm 24×13cm	43cm	

J-4号住居跡ピット計測表

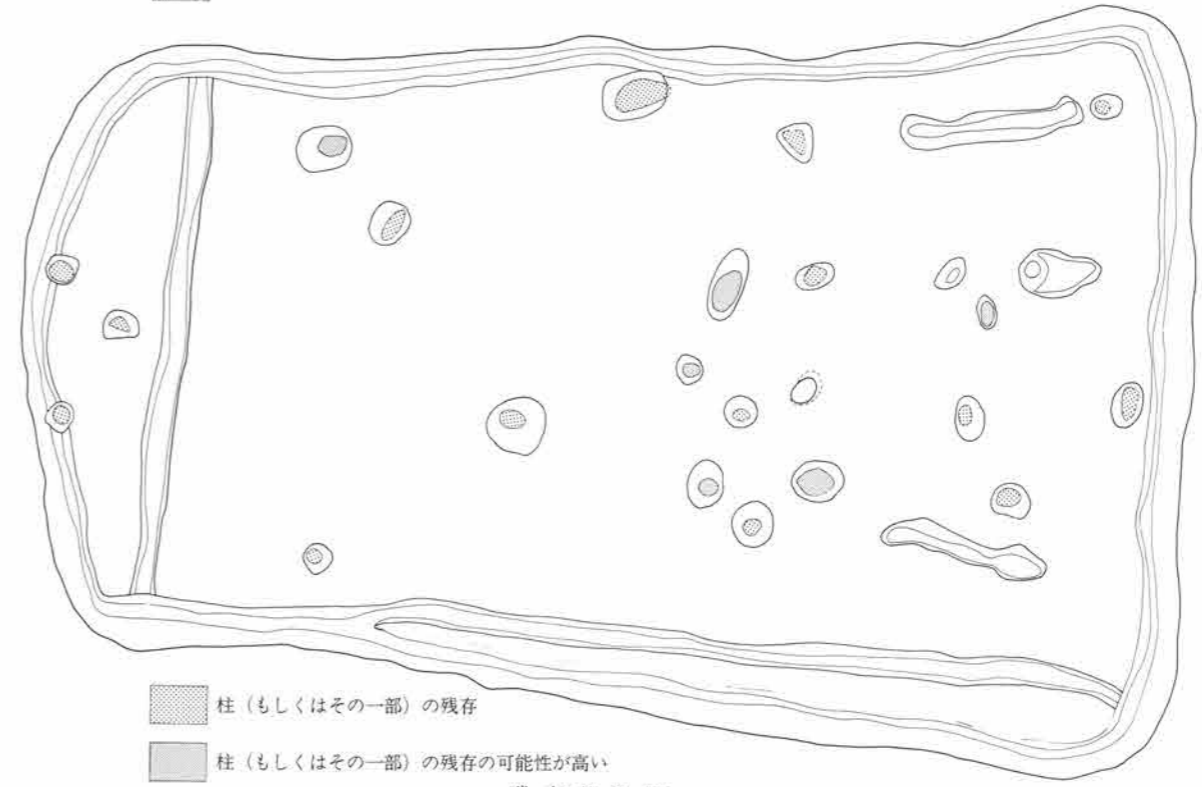


第27图 J-4号住居跡



- 20~29cm
- 30~39cm
- 40~49cm
- 50~59cm
- 60~79cm
- 70cm以上

ピット深度図



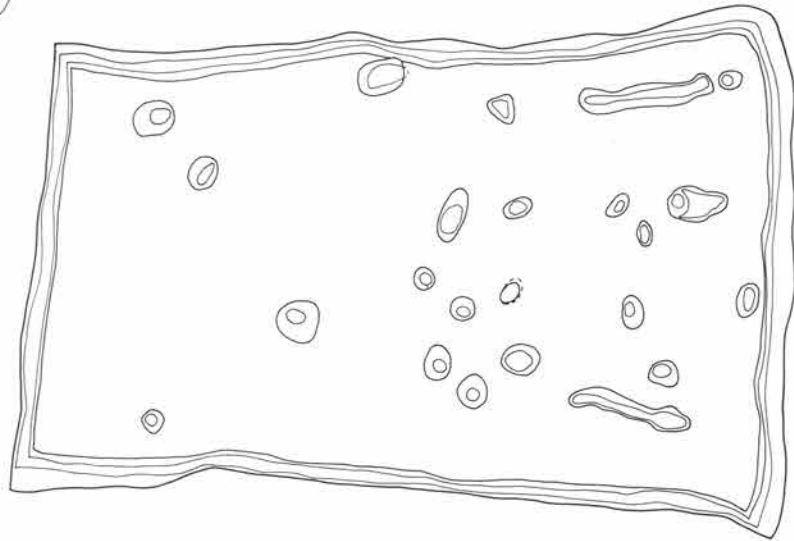
- 柱（もしくはその一部）の残存
- 柱（もしくはその一部）の残存の可能性が高い

残存状況図

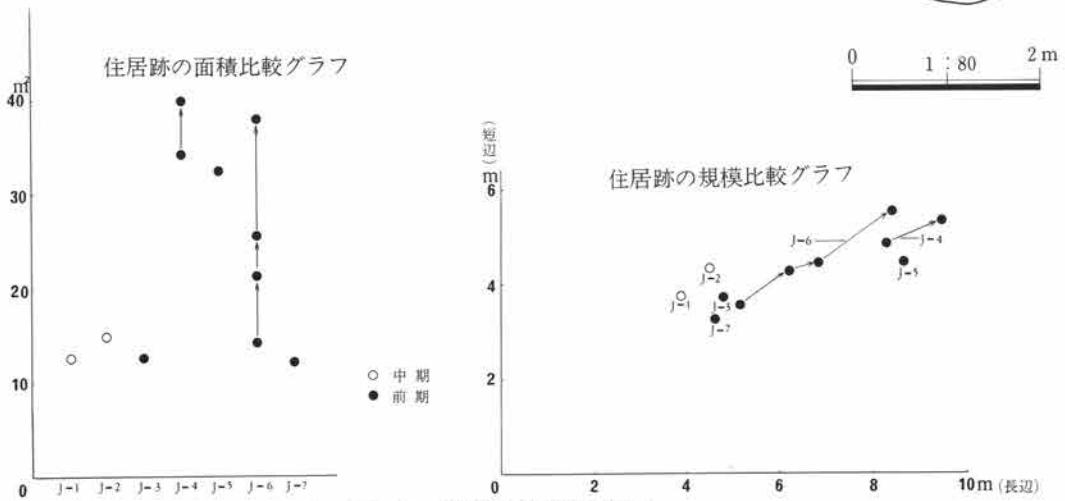
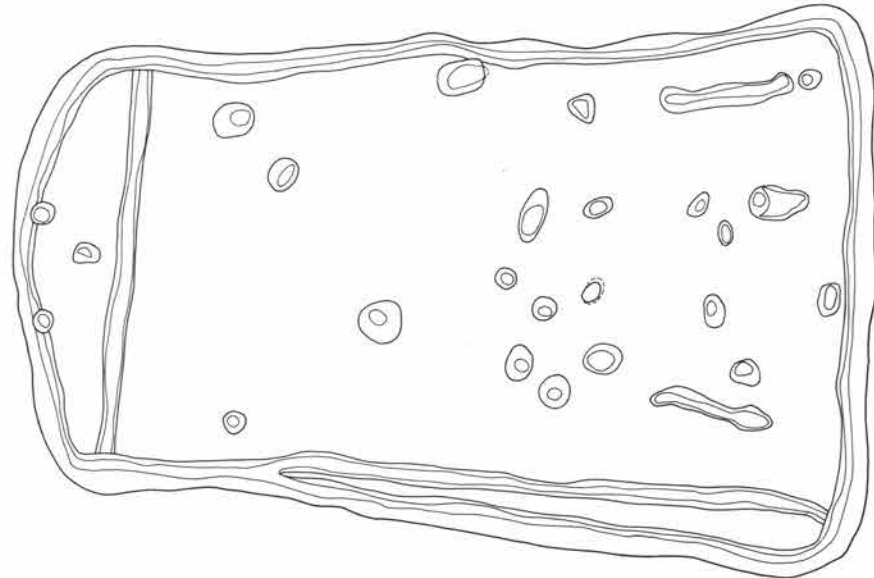
第28図 J-4号住居跡のピット深度・残存状況図



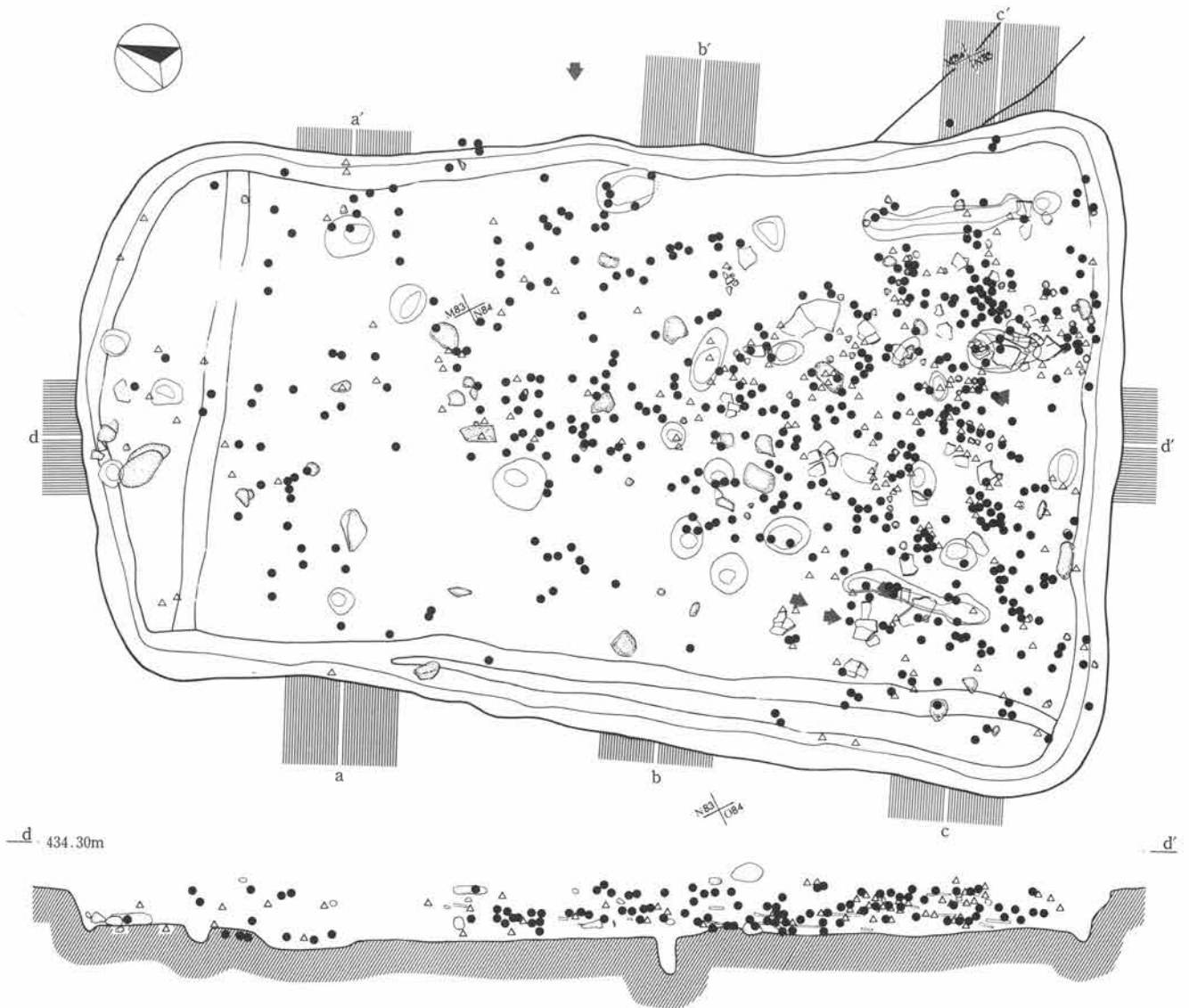
**拡張前データ**  
 形状 長辺8.3m  
 短辺は北壁で4.7m、中央で4.8m、南壁5.3m。  
 面積 34.2m<sup>2</sup>  
 周溝 東壁下は長さ7.5m、幅5～12cm、深さ14～26cm。  
 西壁下は長さ7.9m、幅5～15cm、深さ8～16cm。  
 南壁下は長さ5.3m、幅5～8cm、深さ8～13cm。  
 北壁下は長さ4.1m、幅10～18cm、深さ7～10cm。



**拡張後データ**  
 形状 長辺9.4m  
 短辺は北壁で4.7m、中央で5.4m、南壁で6m。  
 面積 40.1m<sup>2</sup>  
 周溝 東壁下長さ8m、西壁下長さ8.2m、幅5～10cm、深さ7～16cm、南壁下長さ5.7m、北壁下長さ5.3m、幅4～11cm、深さ4～7cm。



第29図 J-4号住居跡拡張変遷図



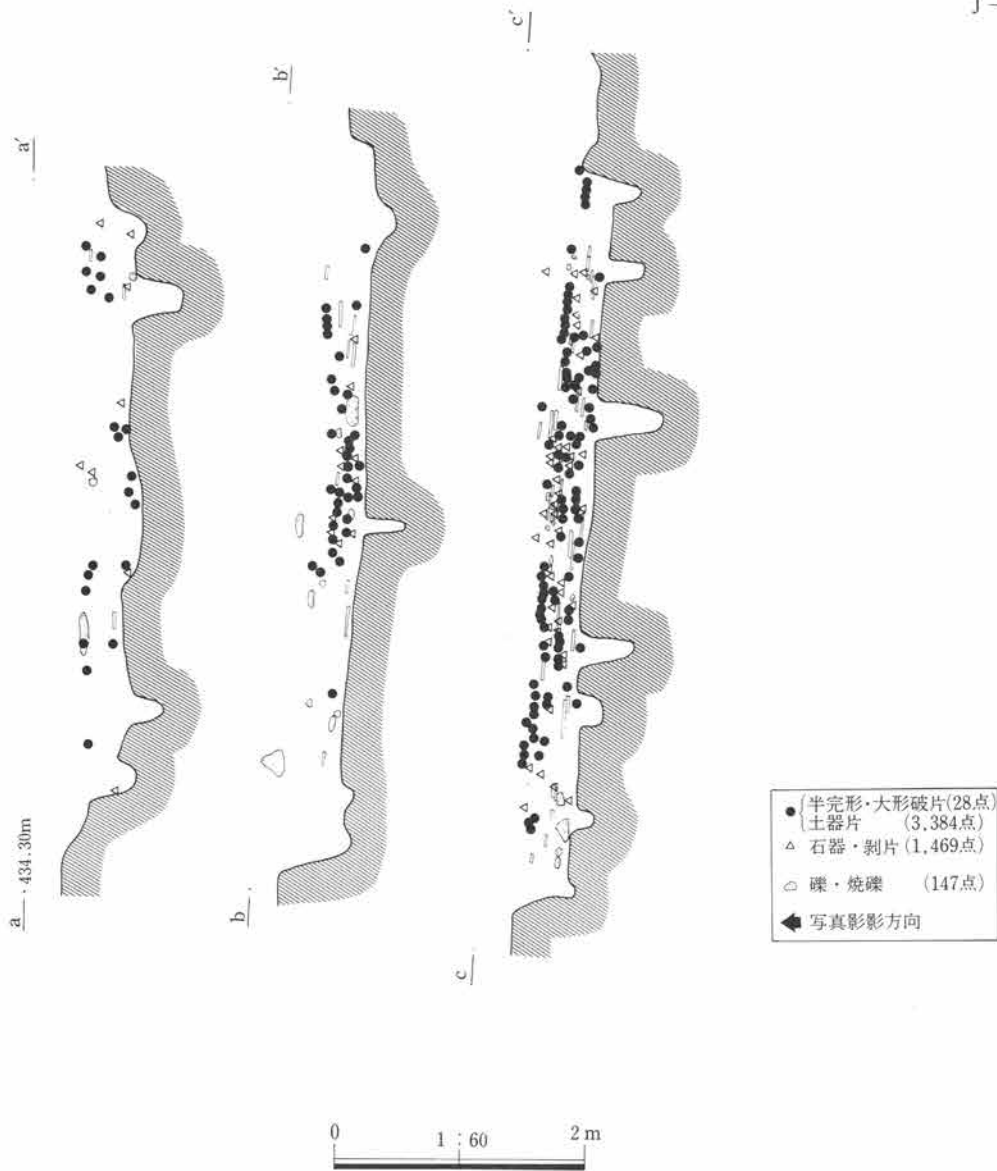
第30図 J-4号住居跡遺物出土状況

なかで一番深いピットはP<sub>1</sub>の76cm、次に60cm代がP<sub>7</sub>とP<sub>11</sub>の2個、50cm代がP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>15</sub>・P<sub>22</sub>の5個、40cm代はP<sub>10</sub>・P<sub>12</sub>・P<sub>17</sub>～P<sub>21</sub>・P<sub>23</sub>・P<sub>24</sub>の9個、30cm代はP<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>13</sub>・P<sub>16</sub>の5個、20cm代はP<sub>5</sub>・P<sub>14</sub>の2個であった。40cm代の深さをもつピットが比較的多く、24個のピット深度の平均は約46cmである。各ピットの配置をみると住居北半分になく南半分に集中している。また壁に接して配置されるピットは少なかった。

**炉** 検出できなかった。床面から焼土・炭化物等の痕跡を確認できなかったが、当住居跡は本来的に炉がなかったものとは断定できない。当遺跡検出の同時期集落を構成すると考えられる他の住居跡（J-5・6号）には地床炉が存在しているからである。そしていずれも北端に礫を配置することに共通性を認めることができる。当住居跡も炉が存在していたとすれば、P<sub>3</sub>～P<sub>7</sub>に囲まれた空白域に位置していた可能性がたかい。住居廃絶後のある時期に炉が破壊されてしまったものであろうか。

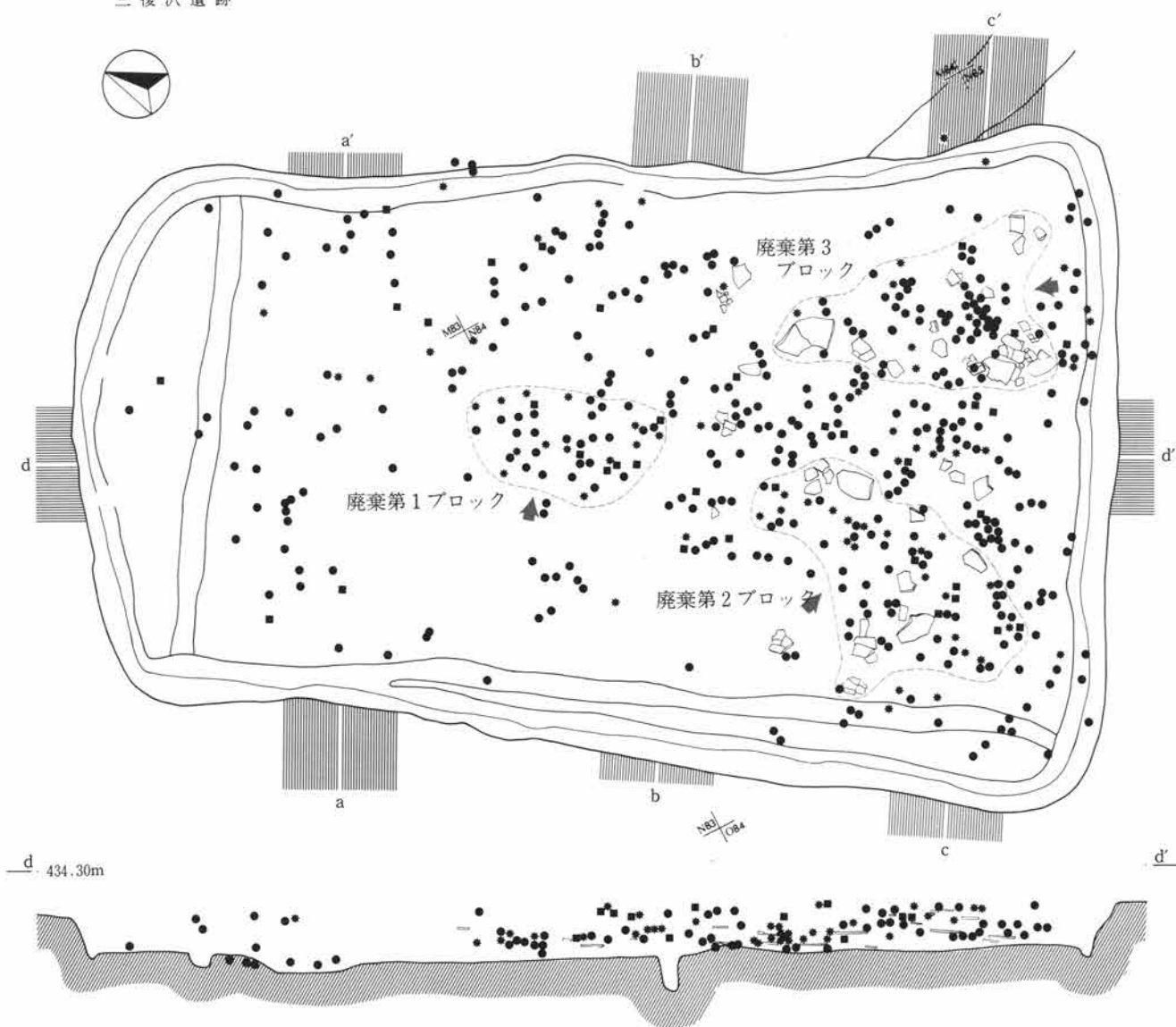
**間仕切り溝** 住居の間仕切りの溝と考えられるものが2本検出されている。東側の溝は上面で長辺146cm、短辺24cm、底面では長辺136cm、短辺10cm、深さ30cmを測る。西側の溝は上面で長辺134cm、短辺17cm、底面では長辺126cm、短辺9cm、深さ20cmを測る。

**遺物出土状況**（第30～33・53図、PL.7）



当住居跡覆土から出土した遺物は、半完形品・大形破片28個体、土器片3384点、石器類1616点であり、覆土第1・2層から集中的に検出された。とりわけ第2層では大形破片・半完形品が多かった。遺物の平面的分布は住居北半分では非常に少なく、南半分に集中的に出土している。住居が廃絶され、覆土第10・8・7・6・5・4・3層が順次堆積した後に、多量の遺物が投棄されたり、または自然営力により流入したものであろう。この段階では住居跡は播鉢状を呈しており、壁際で埋没（覆土）が進行しているものの住居中央部から南壁寄りにかけては、床面がほぼ露出にちかい状態であったものと思われる。遺物の垂直分布はまさにこの状況を示しているものであろう。住居の埋没土は、セクション図から判断すると、とりわけ北壁から西壁部分で堆積が早く進行していた模様である。遺物の平面的分布が南壁部分で広範囲な分布を示し、住居跡中央部に向かうにつれて先細りの分布を示すのは、埋没土の堆積状況と合地するものである。そして大形破片・半完形品は4×3mの範囲に集中して出土している。

なお、当住居跡の覆土最上層もしくは当住居跡が検出されたグリッドから多量の縄文時代中期の阿玉台式土器片が出土している。例えば、M-83グリッド82点、M-84グリッド71点、N-83グリッド28点、N-84グリッド334点であり、総数が515点にのぼっている。このことは縄文時代中期になっても、J-4号住居跡



第31図 J-4号住居跡土器（部位別）出土状況

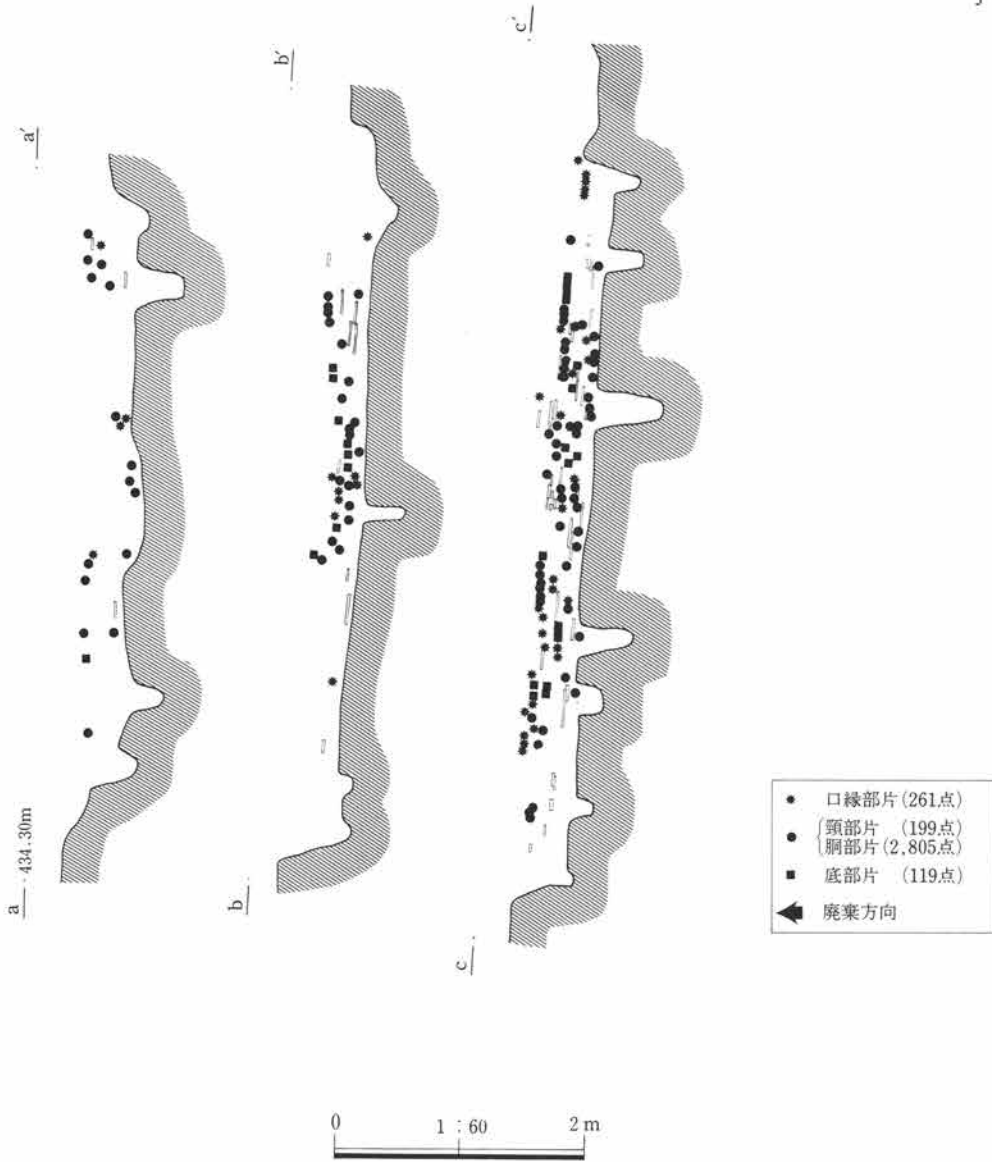
は完全に埋没しておらず、ある程度の窪地状態を呈していたのであろう。北西方向約6mのところ、J-2号住居跡（中期）が存在するが、この住居の遺物が窪地に投棄されたり、自然営力によって流入した結果を示すものと考えられる。

**遺物出土状況とピットについて（第28・30図）**

当住居跡から、総計24個のピットが検出されていることはすでに記した。これらピットと遺物の出土との密接な関係状況を示すのが第30図である。この図から理解できることは、 $P_1 \sim P_3 \cdot P_5 \sim P_8 \cdot P_{12} \sim P_{15} \cdot P_{20} \cdot P_{21} \cdot P_{23} \cdot P_{24}$ の15個（約62%）のピット上には遺物が重ならず、 $P_4 \cdot P_9 \sim P_{11} \cdot P_{16} \sim P_{19} \cdot P_{22}$ の9個（約37%）のピット上に遺物が重なることである。しかし、 $P_4 \cdot P_9 \sim P_{11} \cdot P_{17} \cdot P_{19}$ の5個のピットは遺物が重なるものわずかであることから、計21個（約88%）のピット上には遺物がのらないものと判断してさしつかえないと思う。これほどの多量の遺物が出土したにもかかわらず、ピット上に遺物がのらなかったのは何を意味するものであろうか。

住居が廃屋となり、埋没土の堆積、そして遺物が投棄されていく過程にあっても、廃屋の柱もしくは柱の一部が抜かれることなく残存していたものであろう。結果として柱の部分に遺物が入りこまなかった。すな



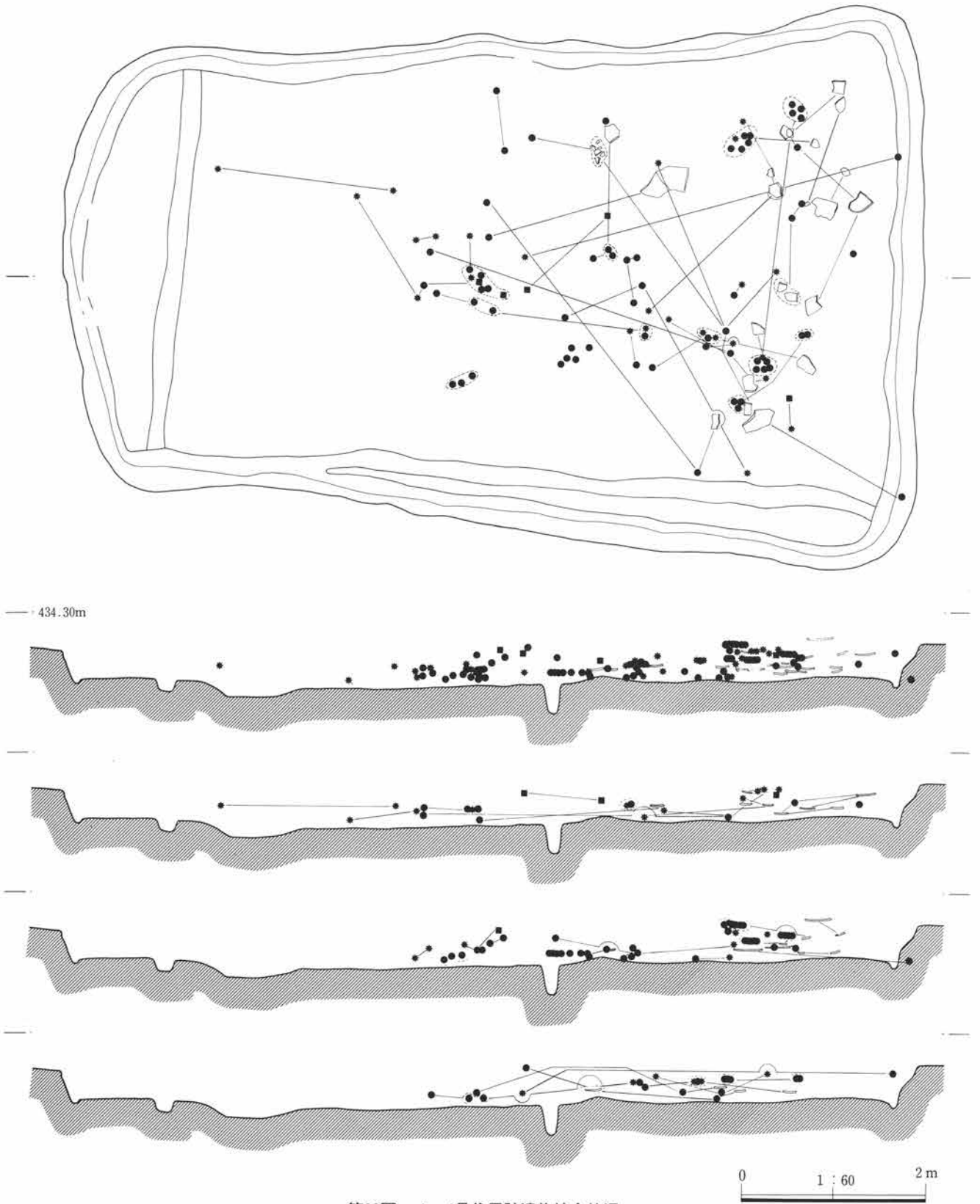


わち拡張後の住居跡にあつては、P<sub>16</sub>・P<sub>18</sub>・P<sub>22</sub>の3個のピットを除いたピットに柱（もしくはその一部）が残存していたと考えることができる。これらのピットから上屋構造を考えていかなければならない。

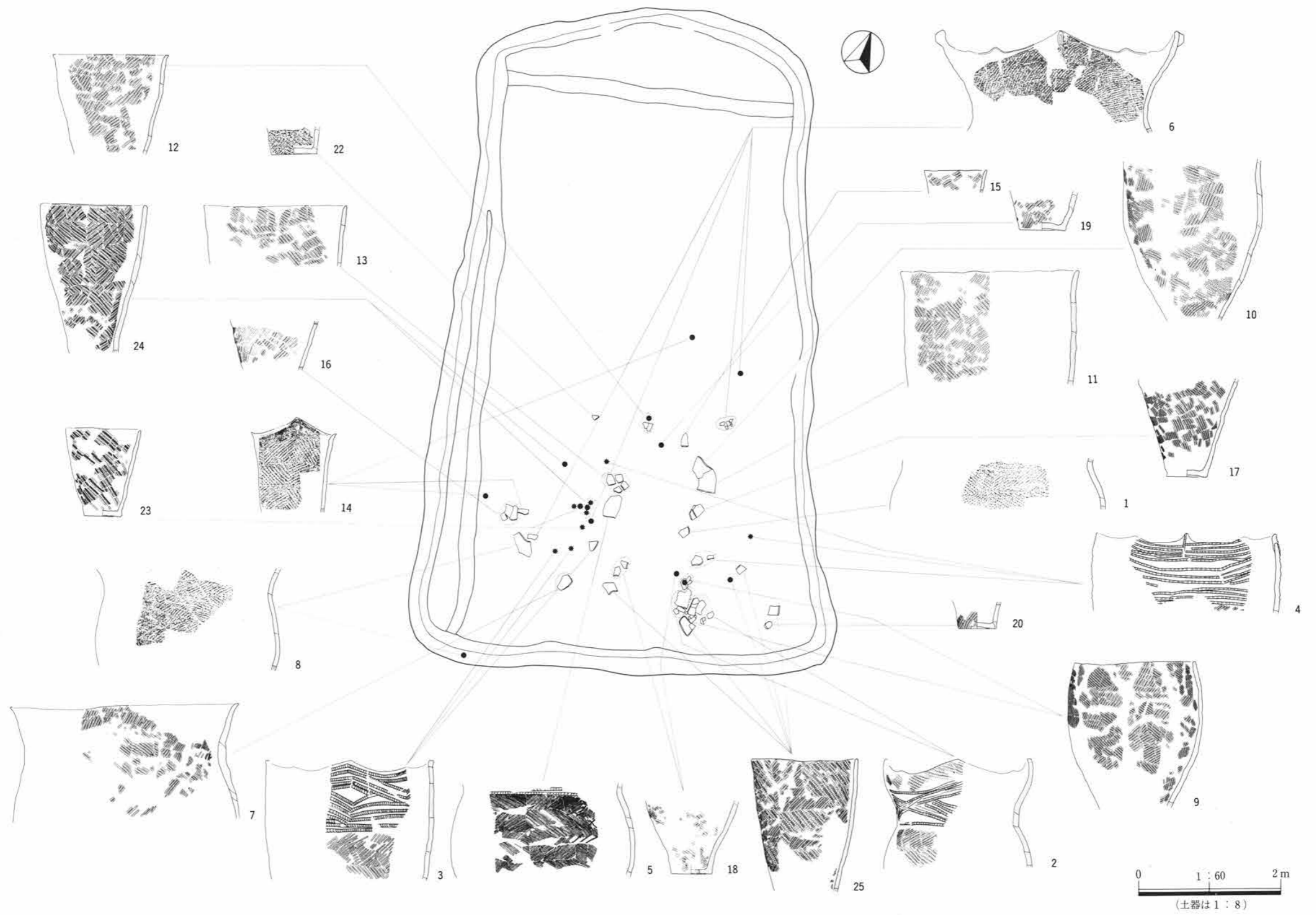
結局、P<sub>16</sub>・P<sub>18</sub>・P<sub>22</sub>の3個のピット上に遺物がのるが、P<sub>16</sub>の場合はピット上6～14cmに、P<sub>18</sub>はピット上24～28cmに、P<sub>22</sub>はピット上7～31cmに遺物が検出されている。以上から、これら3個のピットは拡張前の住居跡に伴うものと判断したい。また東側の間仕切り溝上にも4点ほどの遺物が7～22cmの範囲で重なる。西側の間仕切り溝上にも遺物が14～22cmの範囲で重なっている。

#### 土器（部位別）出土状況・個別別出土状況・接合関係について（第31～33図）

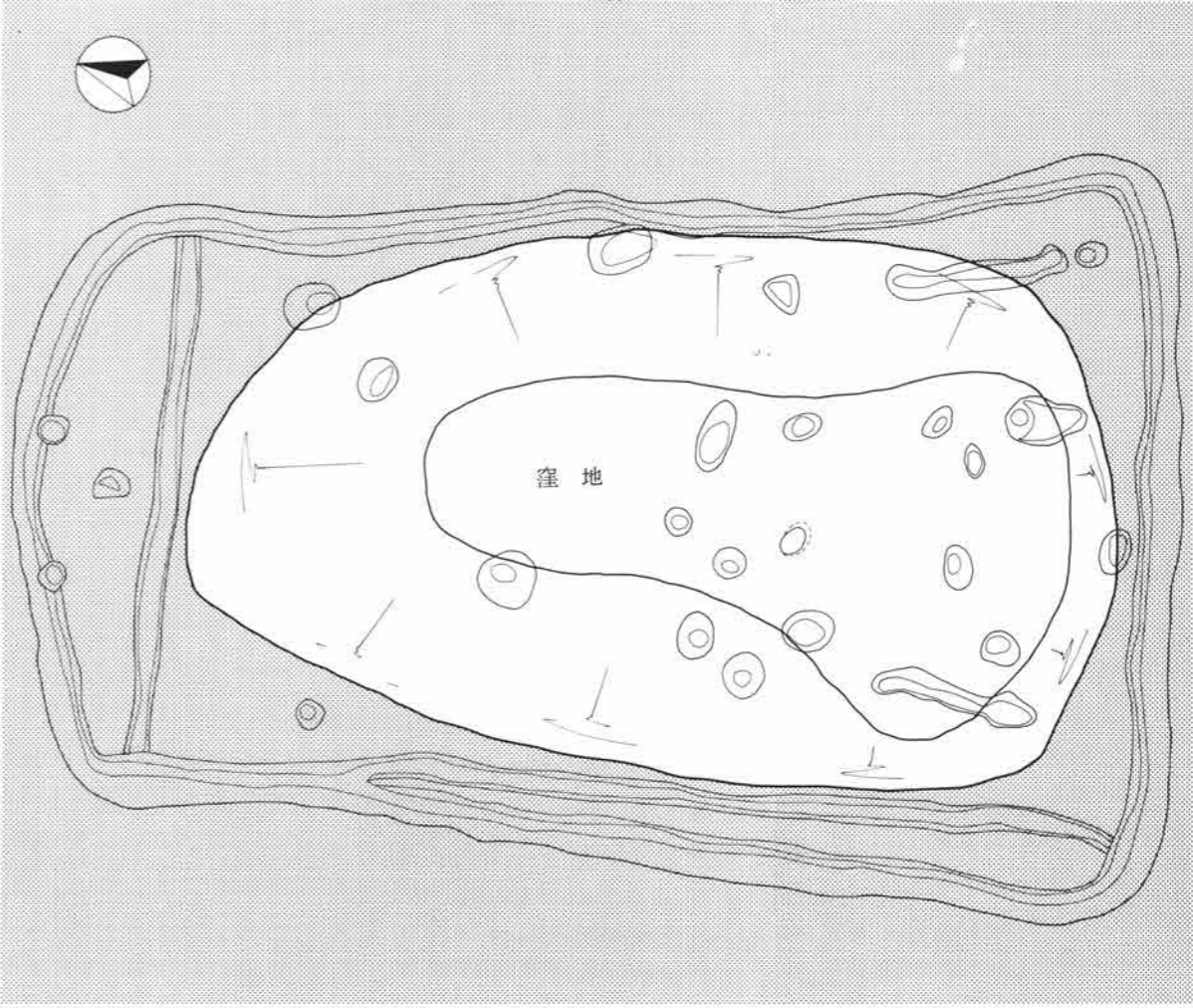
すでに遺物出土状況については記述してあるが、さらに土器片について詳述したい。出土した土器片3384点のうち部位別点数は、口縁部片261点、頸部片199点、胴部片2805点、底部片119点である。第31図の土器（部位別）の平面的分布をみると、口縁部・底部片の集中する範囲を読みとることができる。さらに大形破片・半完形品の個別別出土状況とあわせ考えると、住居跡内の投棄場所を少なくとも3ブロック想定できるものと思われる。第1ブロックは住居跡中央部分に認められ、大形破片は皆無にちかいが口縁部片、底部片がかなり密接に分布している。土器接合状況とあわせ考えると、投棄は西壁側から東方向といえるであろう。第



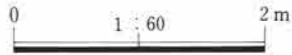
第32図 J-4号住居跡遺物接合状況



第33図 J-4号住居跡個体別出土状況



スクリーントーン個所は埋没が進行してほぼ平坦化した部分



第34図 J-4号住居跡埋没状況

2ブロックは住居南西コーナー内側約1.3mのところから北へ3mの楕円状に延びる一群である。大形破片・半完形品を中心としてまとまり、口縁部片・底部片も密に出土している。投棄も同じく西壁側から東方向といえる。第3ブロックは住居東南コーナー内側約1.2mのところから北西方向へ3mの楕円状に延びる一群である。第2ブロックと同様に大形破片・半完形品を中心としてまとまる。投棄は住居東南コーナー側から北西方向といえる。この他に自然営力によって流入したのもも相当量含まれるであろう。

なお、住居北部分に散漫的に分布する土器片は、その垂直分布から判断すると当住居跡が廃絶された早い段階に混入したものである。

**出土遺物**

**〔I〕土器（第36～52図、PL.40・42～46）**

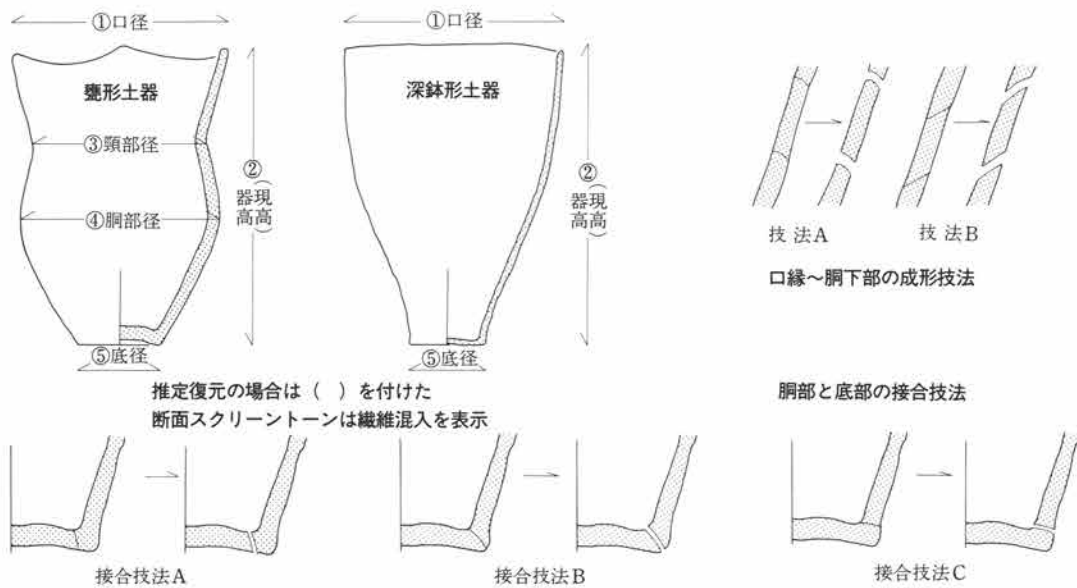
当住居跡からは前期中葉の半完形品・大形破片28個体、土器片3384点（口縁部片261点、頸部片199点、胴部片2805点、底部片119点）が出土している。この点数は可能なかぎりの接合、同一個体の見極めを行った後の数字ではあるが、胴部片においては同一個体の識別は不十分なものとなっていることは否めない。この他に、前期前葉の関山式土器片、後葉の諸磯式土器片が若干出土し、また覆土最上層や当住居跡が検出されたグリッドから中期の阿玉台式土器片がまとまって出土した。前期中葉の土器は、(1)口縁部文様帯をもつ土器群、(2)縄文のみ施文される土器群に分けられる。

**(1)口縁部文様帯をもつ土器群（第36・37・41～45図）**

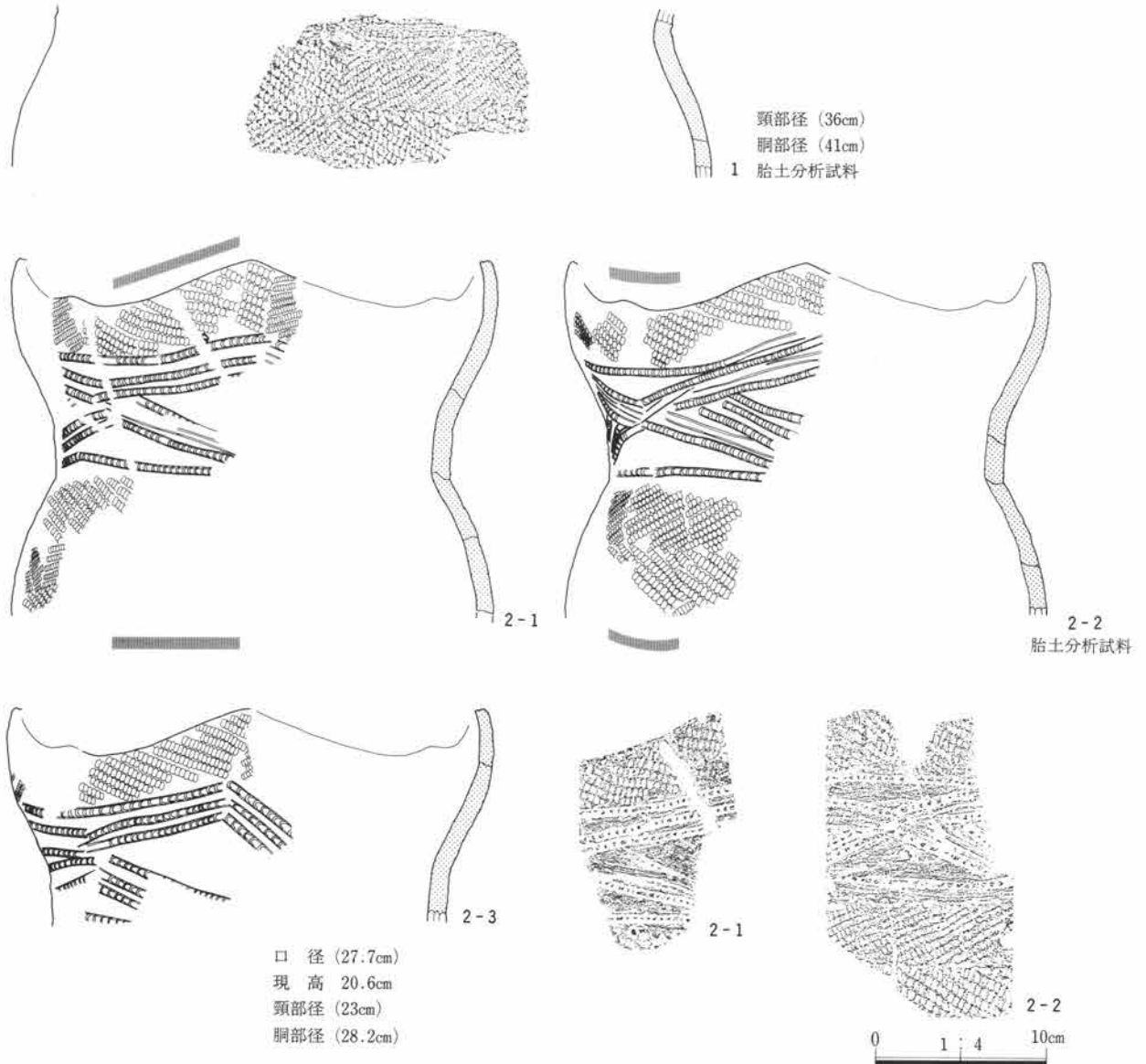
器形は甕形（1・2・5・26～78・80～136・143・144・146～160）、深鉢形（3・4・79・137～142・145）があり、浅鉢形は確認できなかった。口縁部は波状（内彎、外傾、外反）を呈し（26・27・79は平口縁か）、波底部に小突起を有するものもある（2～4・76）。口唇部は平坦が最も多く、次に丸味を呈す、内削ぎ状・内傾を呈す、沈線が巡る様な手法、外側につまみ出された様な手法が見られる。口縁から胴下部の成形（積みあげ技法）は圧倒的に技法A（第35図）が多いが、括れ部では技法Bも認められる。土器内面の調整は、徹底したミガキもしくは丁寧な調整が行われており、器内外面の繊維痕は縄文施文の土器群と比べると遙かに少ない。胴部以下は羽状縄文を施す。

口縁部文様帯は、施文原体により、櫛歯状工具による縦位・横位・斜位の刺突文（条線文を含む）によ

(⇒P.54)



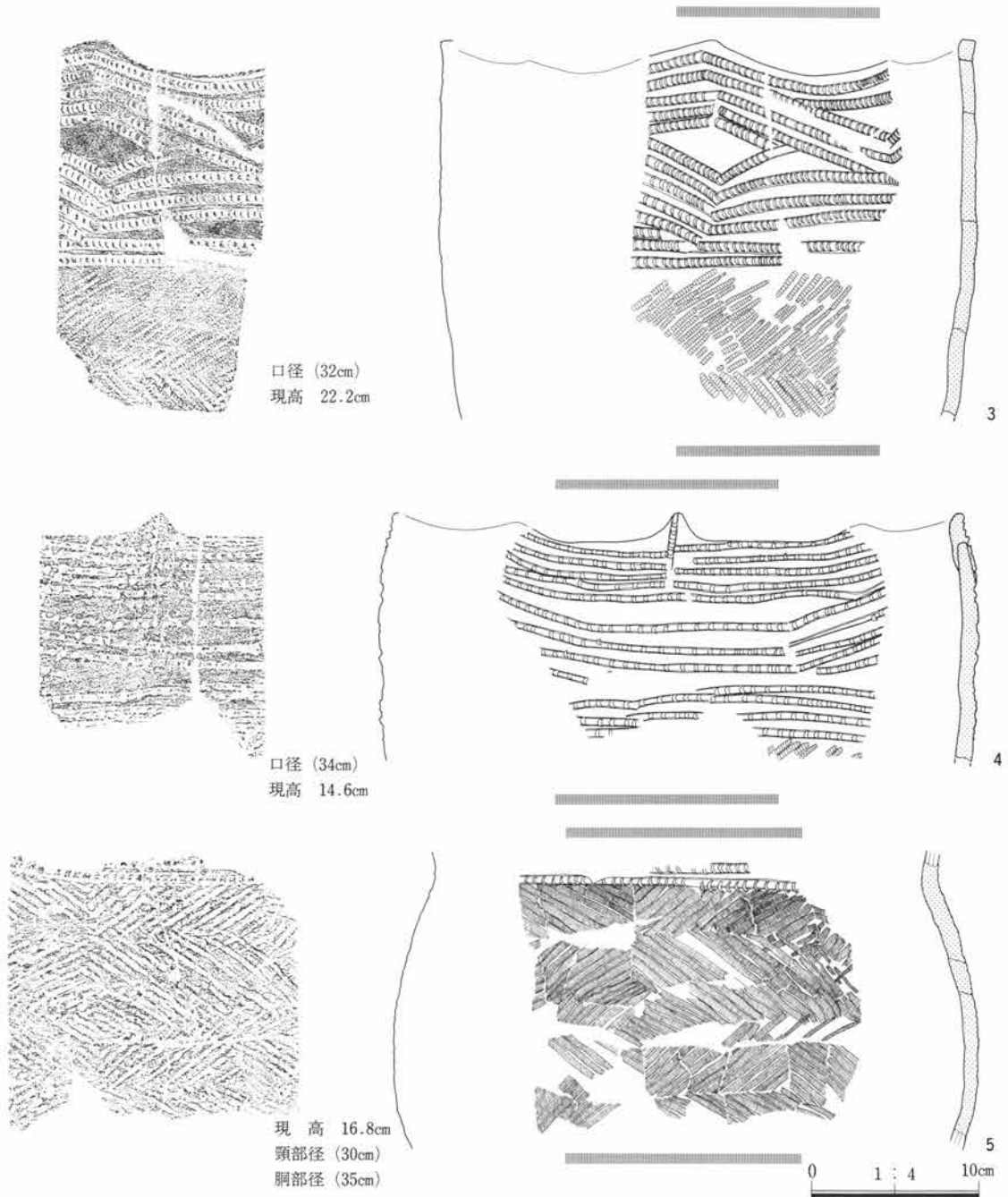
第35図 土器の計測と成形（積みあげ）技法



第36図 J-4号住居跡出土土器 (1)

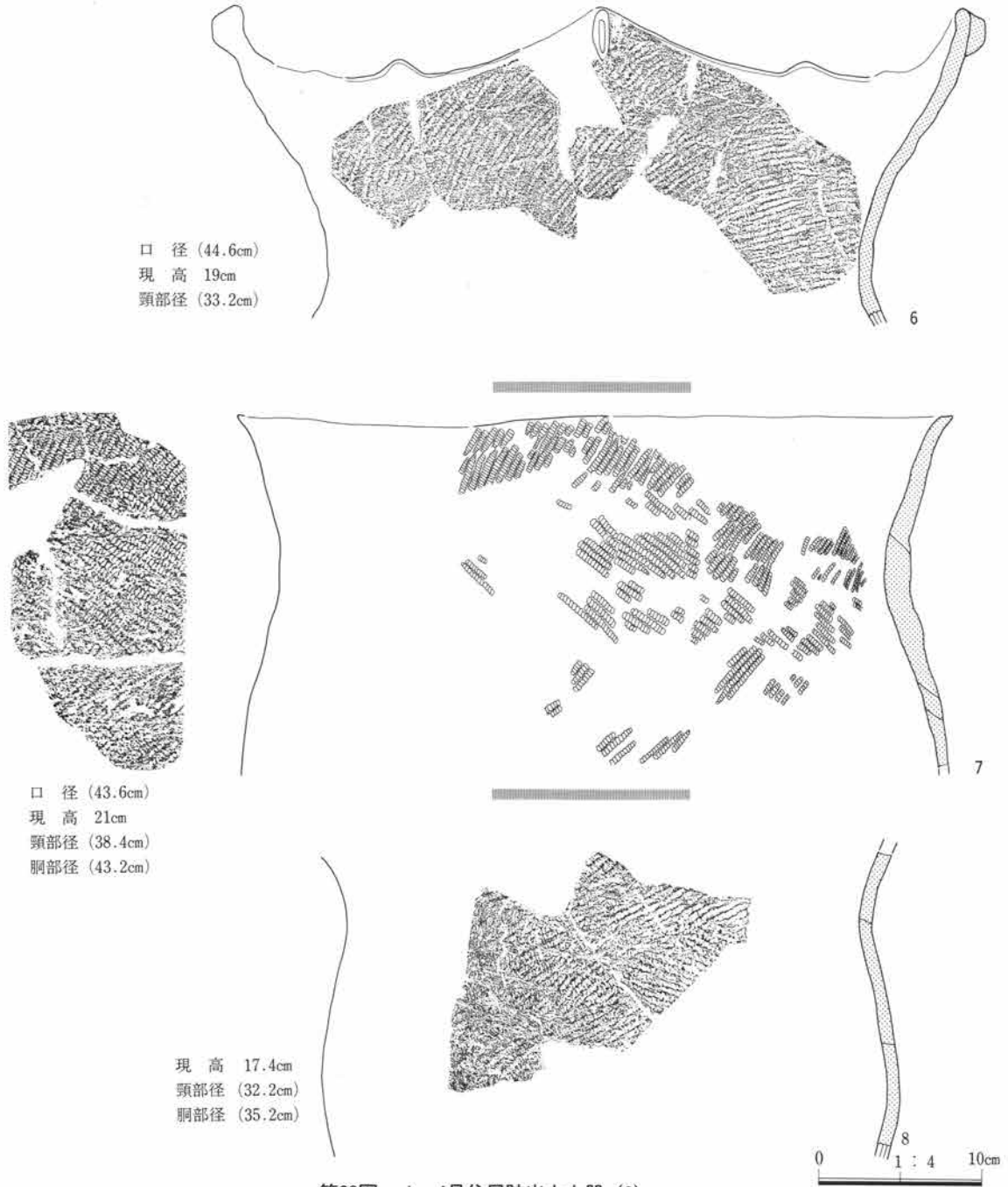
J-4号住居跡遺物観察表

図番 PL	器種	①胎土 ②焼成 (遺存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様 (その他)	出土状況
36-1 PL. 42 45	甕形	①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 黒褐色	波状口縁を呈する甕形土器の頸部片。器厚9mmで積みあげ技法A。内面横ミガキで一部に繊維痕が認められる。	胴部に縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条)とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段3条)で羽状・X状の交叉。縄文施文後、頸部に巾2mm・方形の先端をもつ櫛歯状工具による条線→縦位刺突が見られる。	廃棄第3ブロック
36-2 2-1~ 2-3は 同一個体 PL. 42 45	甕形	①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 赤褐色	4単位の波状口縁を呈し、波底部に小突起が見られる。口縁は内彎し、口唇部は内側と外側から成形し、それがはみ出して口唇部に溝が走る様な効果となっている。器厚は1cmで積みあげ技法A。内面に条痕風の調整痕を残す。	口唇部と胴部にR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条)とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)の縄文施文。その間を巾5mmの半載竹管による平行沈線・C字爪形文を上下1条施文し区画。区画内を同竹管による4単位の菱形のモチーフ→C字爪形文の充填。爪形の施文手法はAとCが混在しているがCが多い。	廃棄第3ブロック



第37図 J-4号住居跡出土土器(2)

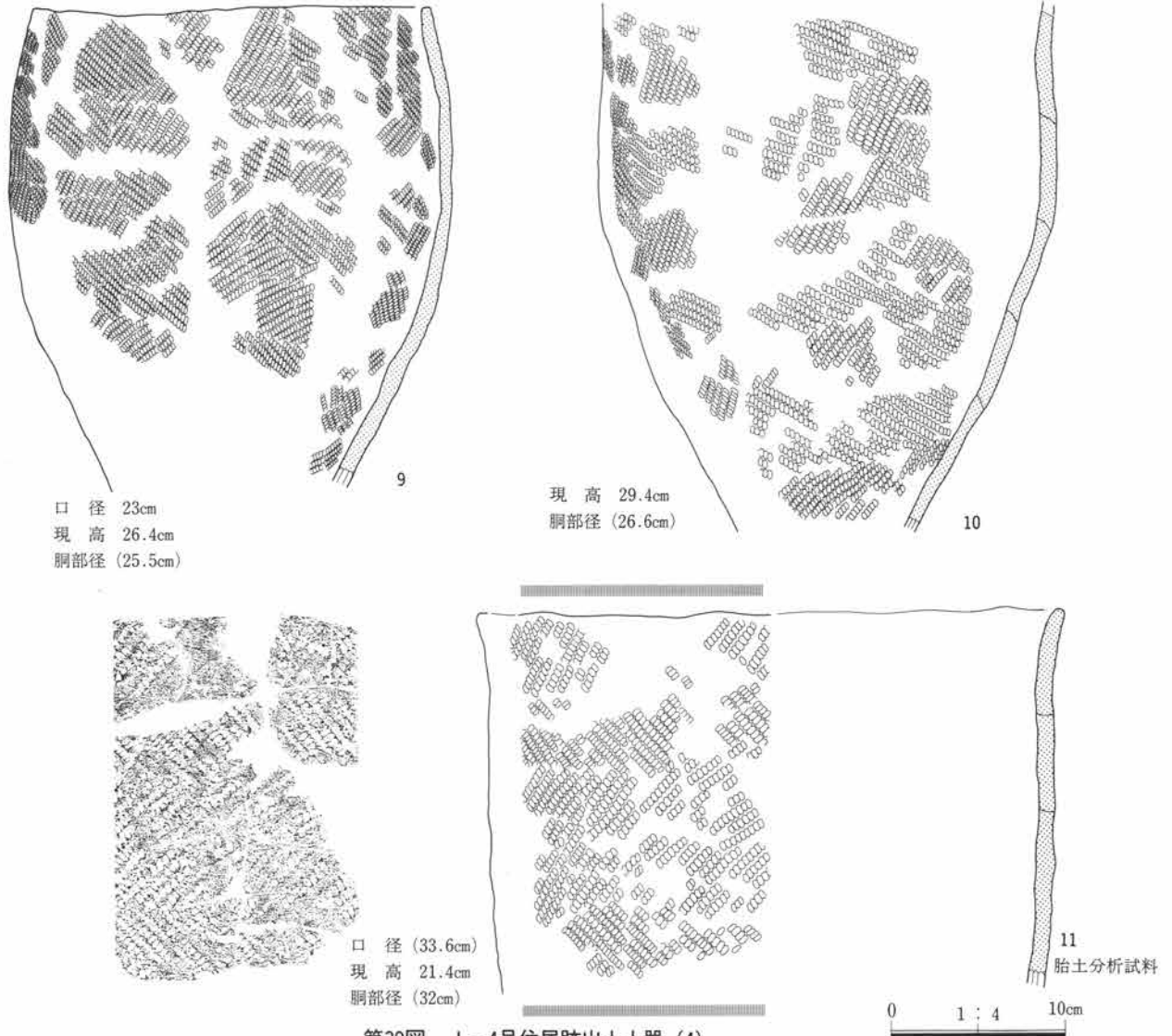
図番 PL	器種	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
37-3 PL. 42	深鉢形	①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 にぶい黄褐色	4単位の波状口縁を呈し、波底部に小突起が見られる。口縁部はやや内彎し、口唇部は平坦である。器厚8mmで積みあげ技法A。内面横ミガキ、一部に繊維痕が認められる。	胴部に縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)とR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条)。口唇部と胴部に巾7mmの半載竹管による平行沈線・C字爪形文を2条施文し区画。区画内を同竹管5条1単位として菱形構成→C字爪形文の充填。爪形の施文手法はC。	廃棄第2ブロック
37-4	深鉢形	①含繊維 ②やや良	4単位の波状口縁を呈し、また波底部にも小突起が見られる。口縁部は	胴部に縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)。口縁部には巾4mmの半載竹管により、口唇	廃棄第3ブロック



第38図 J-4号住居跡出土土器(3)

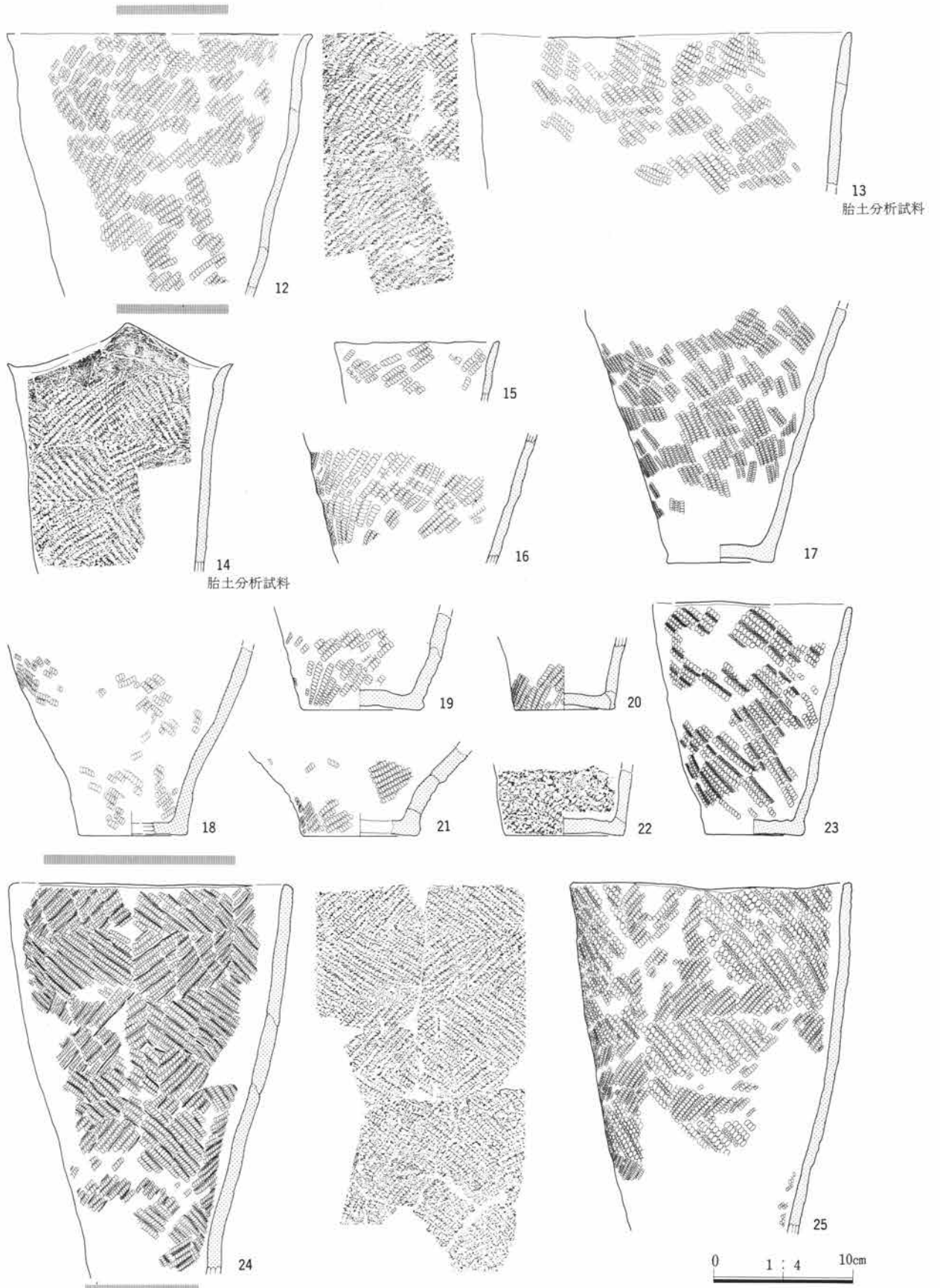
図番 PL.	器種	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
PL. 42 45		③外面 黒褐色 内面 灰黄褐色	やや内彎する。器厚は8mm。内面横ミ ガキ、外面一部繊維痕が認められる。	部から胴部にかけて5条、4条、4条を単 位として横走→C字爪形文の充填。また口 縁の波状突起に縦位施文。	
37-5 PL. 43 45	甕形	①含繊維 ②良 ③外面 濃い黄橙色 内面 濃い黄橙色	波状口縁を呈すると思われる甕形土器 の頸部から胴上半片。器厚8mmで積み あげ技法A。内面のミガキ丁寧。内外 面ともに一部繊維痕が認められる。	胴部に縄文施文。原体はL{ }とR{ }で羽 状。原体交換部で菱形・X状の交叉。頸部 には巾7mmの半截竹管よる平行沈線・C字 爪形文の充填。爪形の施文手法はA。	廃棄第2ブ ロック





第39図 J-4号住居跡出土土器 (4)

図番 PL.	器種	①胎土 ②焼成 (遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
38-6 PL. 43	甕形	①含繊維 ②良 ③外面 黄橙色 内面 黄橙色	4単位の波状口縁を呈し、波底部に小突起2個が、また波頂部にも小突起が見られる。口縁部は内彎する。器厚は7mm~1cm。内面は徹底した横ミガキが行われているが、剥落著しく繊維痕が顕著に認められる。	縄文施文。原体はL $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right\}$ (0段3条)。	廃棄第2ブロックと住居跡東壁寄り
38-7 PL. 43	甕形	①含繊維 ②やや良 ③外面 橙色 内面 黄橙色	甕形土器の口縁~胴部片。口縁部は外反し、口唇部は平坦である。器厚6mm~1.5cmで積みあげ技法A。内面は口唇部付近で横ミガキ、以下荒れていて繊維痕。外面にも繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\}$ (0段多条)とL $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right\}$ (0段多条)で羽状。胴部は荒れていて縄文不鮮明。	廃棄第2ブロック
38-8 PL. 43	甕形	①含繊維 ②不良 ③外面 黄橙色 内面 灰黄褐色	甕形土器の頸部~胴部片。器厚8mmで積みあげ技法A。内面は頸部付近で横ミガキが認められるが、胴部にかけては荒れていて繊維痕が顕著に認められる。外面も荒れていて繊維痕認められる。	縄文施文。原体は前々段反撚R $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \\ L \\ L \end{array} \right\}$ とL $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \\ R \\ R \end{array} \right\}$ で羽状。 縄の開端を別の条で縛る。	廃棄第2ブロックと住居跡南壁付近

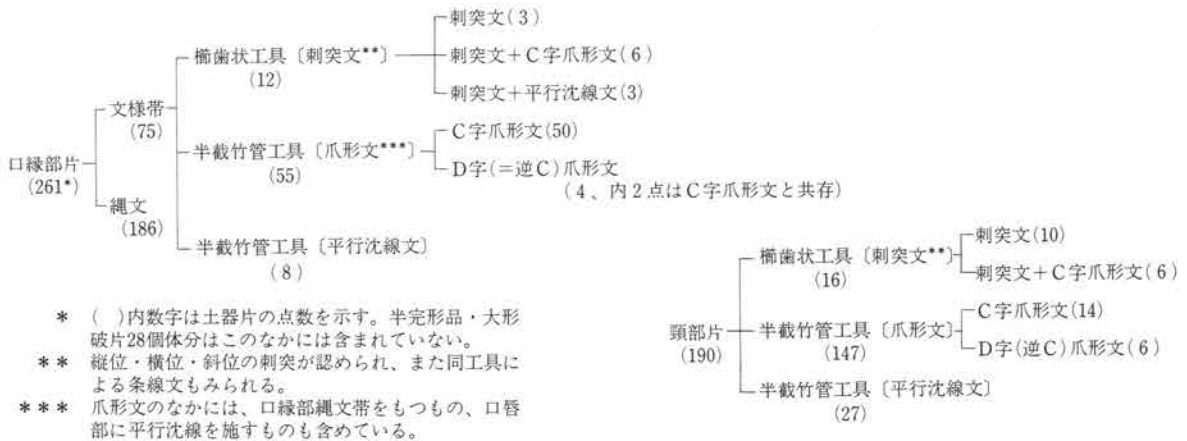


第40図 J-4号住居跡出土土器(5)

図番 PL.	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
39-9 PL. 43	深鉢形	① 23.0 ②(26.4) ④ 25.5	①含繊維 ②良 ③外面 におい黄橙色 内面 におい黄橙色	深鉢形土器の半完形品。口縁部は内彎し、胴部で膨らむ。口唇部はやや丸味をもつ。器厚6mm~1cm。内面はやや丁寧な調整が行われている。外面には黒斑、一部繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{2}\right\}$ (0段多条)とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。原体交換部の一部で菱形・X状の交叉。縄の開端を別の条で縛る。	廃棄第3ブロック
39-10 PL. 43	深鉢形	②(29.4) ④(26.6)	①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 褐色	深鉢形土器の大形破片。器厚6mm~1cmで積みあげ技法A。内面はやや丁寧な調整が行われているが一部繊維痕が認められる。外面にも繊維痕あり。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{2}\right\}$ (0段多条)とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。菱形・X状を意識した施文となっている。内面に一部煤が付着している。	廃棄第3ブロック
39-11 PL. 43	深鉢形	①(33.6) ②(21.4) ④(32.0)	①含繊維 ②やや良 ③外面 褐色 内面 におい褐色	深鉢形土器の大形破片。胴部で直立、口縁部ではやや外反する。口唇部はやや丸味をもつ。器厚9mm~1.1cmで積みあげ技法A。内面は粗い調整が行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{2}\right\}$ (0段3条)とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段3条)で羽状。	廃棄第3ブロック
40-12 PL. 43	深鉢形	①(22.0) ②(18.0)	①含繊維 ②良 ③外面 におい赤褐色 内面 褐灰色	底部から単純に開く深鉢形土器の大形破片。口唇部はやや平坦。器厚6mm~8mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。外面には繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段3条)。	住居跡中央部付近
40-13 PL. 43	深鉢形	①(27.4) ②(11.0)	①含繊維 ②不良 ③外面 褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部片で口唇部は先細り。器厚6mm~8mmで積みあげ技法A。内外面は荒れていて繊維痕顕著に認められる。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{2}\right\}$ 。	廃棄第2ブロック
40-14 PL. 43	小型の 深鉢形	① 16.2 ②( 7.4)	①含繊維 ②良 ③外面 褐灰色 内面 黒褐色	2単位の波状口縁を呈し、円筒状の器形となる。器厚7mm。内面は横ミガキが行われている。	口縁にそって1.2cm~3cmの無文部を残し、以下縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{2}\right\}$ (0段3条)とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段3条)で羽状。原体交換部で菱形・X状の交叉。	廃棄第2ブロックと住居跡中央部付近
40-15 PL. 44	小型の 深鉢形	①(11.7) ②( 4.0)	①含繊維 ②やや良 ③外面 におい黄橙色 内面 におい黄橙色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部片で口唇部は一部平坦。器厚5mm。内面は横ミガキが行われている。外面には一部繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ 。	廃棄第3ブロック付近
40-16 PL. 44	深鉢形	②( 9.0)	①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm。内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ 。 縄の開端を別の条で縛る。 内面に一部煤が付着している。	廃棄第2ブロック
40-17 PL. 44	深鉢形	②(18.2) ⑤ 7.7	①含繊維 ②良 ③外面 におい褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴下半部から底部片。底部から直線的に開いて立ち上がる。器厚6mm~9mm。内面は丁寧な調整。底面は上げ底でミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{2}\right\}$ 。	廃棄第3ブロック
40-18 PL. 44	胴下部 ~底部 片	②(13.2) ⑤ 7.8	①含繊維 ②不良 ③外面 橙色 内面 灰褐色	深鉢形土器の胴下部から底部片。底部から開いて立ち上がる。器厚9mm。内面は丁寧な調整。外面は荒れていて繊維痕顕著。底面は上げ底でミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{2}\right\}$ とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で羽状。	廃棄第3ブロックと住居跡南壁寄り
40-19 PL. 44	底部片	②( 7.0) ⑤ 8.6	①含繊維 ②やや良 ③外面 浅黄橙色 内面 におい黄橙色	上げ底で開いて立ち上がる。器厚1cmで積みあげ技法A。内外面と底面は粗い調整が行われている。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ 。 土器面は柔軟。 内面に煤が付着している。	住居跡中央部付近

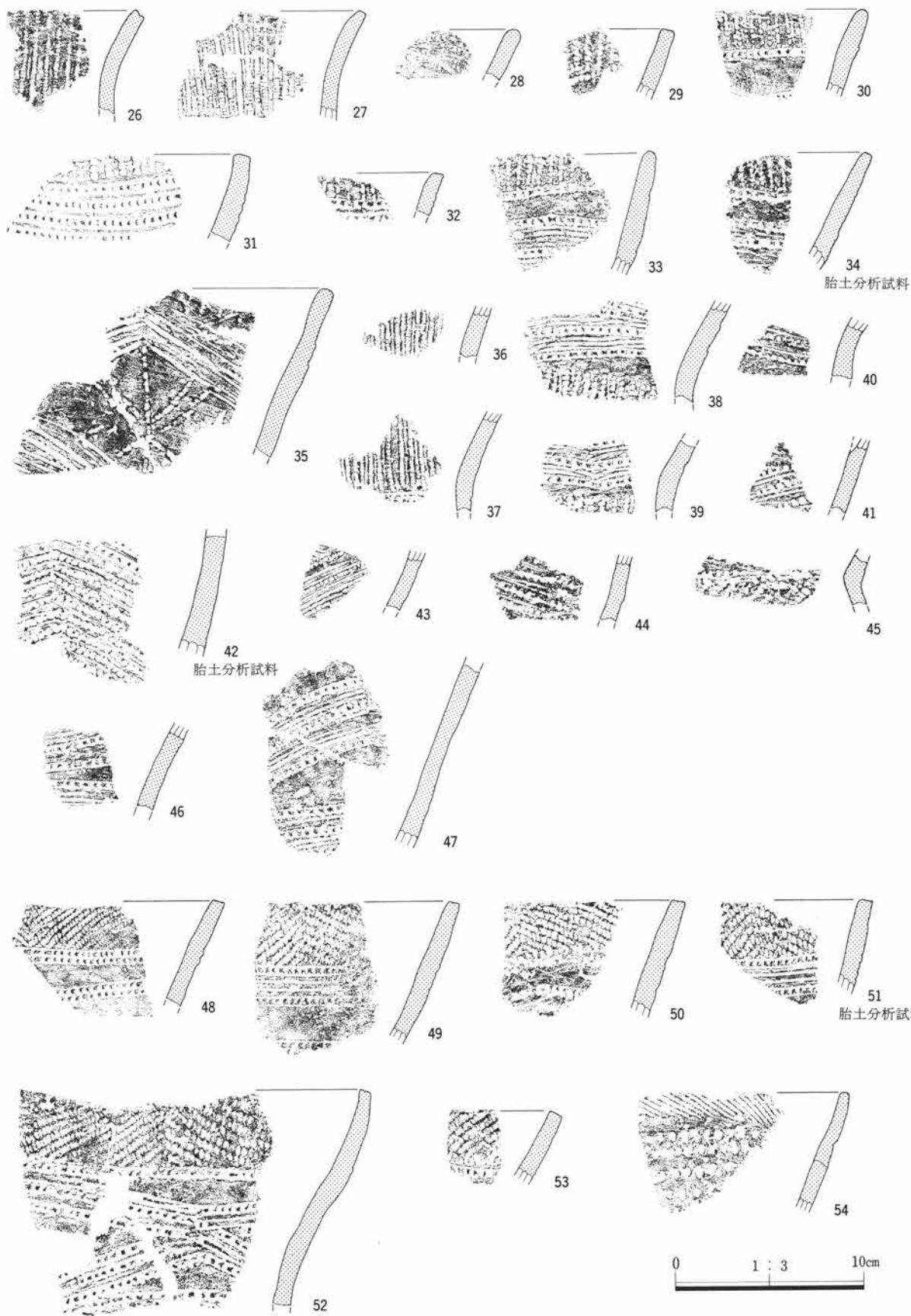
図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
40-20 PL. 44	底部片	②( 5.0) ⑤ 7.2	①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 褐灰色	上げ底でやや開いて立ち上がる。 器厚 8mm で接合技法A。内面は丁寧な調整が行われ、底面は徹底したミガキが行われている。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ 。	廃棄第3ブロック
40-21 PL. 44	底部片	②( 6.0) ⑤( 8.3)	①含繊維 ②やや良 ③外面 暗赤褐色 内面 黒色	上げ底でかなり開いて立ち上がる。 器厚 1cm で積みあげ技法A。 内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)。 土器面は凹凸がある。	覆土
40-22 PL. 44	底部片	②( 4.6) ⑤ 8.6	①含繊維 ②やや良 ③外面 にぶい赤褐色 内面 褐灰色	上げ底で垂直に近く立ち上がる。 器厚 7mm ~ 1cm で接合技法C。内外面は荒れていて繊維痕顕著に認められる。	縄文施文。原体は附加条第1種 R $\left\{\frac{L}{L}+L\right\}$ とL $\left\{\frac{R}{R}+R\right\}$ で羽状。 内面に一部煤が付着している。	住居跡中央部付近
40-23 PL. 44 45	小型の 深鉢形	①(14.4) ② 16.4 ⑤ 7.0	①含繊維 ②良 ③外面 にぶい橙色 内面 にぶい橙色	小型深鉢形土器の半完形品。底面から直線的に開いて口縁に達する。口唇部はやや平坦。器厚 5mm ~ 9mm。内面・底面は徹底したミガキが行われている。	縄文施文。原体は附加条第1種 R $\left\{\frac{L}{L}+\frac{R}{R}\right\}$ 。	廃棄第2ブロック
40-24 PL. 44 45	深鉢形	①(20.0) ②(27.4)	①含繊維 ②良 ③外面 灰褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の大形破片。口唇部はやや平坦。器厚 9mm で積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体は附加条第1種 R $\left\{\frac{L}{L}+r\right\}$ とL $\left\{\frac{R}{R}+r\right\}$ で羽状。 原体交換部で菱形状・X状の交叉。	廃棄第2ブロック
40-25 PL. 44 45	深鉢形	① 20.0 ②(24.0)	①含繊維 ②やや良 ③外面 暗褐色 内面 褐色	深鉢形土器のほぼ完形品であるが底部を欠失している。口唇部は平坦。器厚 7mm。内面は横・縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体は附加条第1種 R $\left\{\frac{L}{L}+L\right\}$ とL $\left\{\frac{R}{R}+R\right\}$ で羽状。原体交換部で菱形状・X状の交叉。	廃棄第3ブロックと住居跡南壁寄り

て文様の描かれるもの(1・26~47)、半截竹管による爪形文によって文様の描かれるもの(2~5・48~145)、半截竹管による平行沈線文によって文様の描かれるもの(146~160)、に大きく分けられる。



- \* ( )内数字は土器片の点数を示す。半完形品・大形破片28個体分はこのなかには含まれていない。
- \*\* 縦位・横位・斜位の刺突が認められ、また同工具による条線文もみられる。
- \*\*\* 爪形文のなかには、口縁部縄文帯をもつもの、口唇部に平行沈線を施すものも含めている。

半截竹管による爪形文の土器が多量に出土しているが、この爪形文の施文工程は、器面の調整→平行沈線施文→爪形文(幅4mm~7mmに集中)充填という工程をたどっている。爪形文は竹管の内側によるC字爪形文が圧倒的に多いが、D字(=逆C)爪形文も少量見られる。これは左利きの人による右から左へ施文されたものであろう。また爪形文には器面との押圧角度によって3種の施文手法が確認された。A手法=器面に対して直角あるいは直角前後にあてるもの、B手法=鈍角刺突。器面に突き刺すように刺突している、C手法=器面を引きずるような手法、である。C手法が圧倒的に多く、次にB手法が続く。A手法はわずかである。



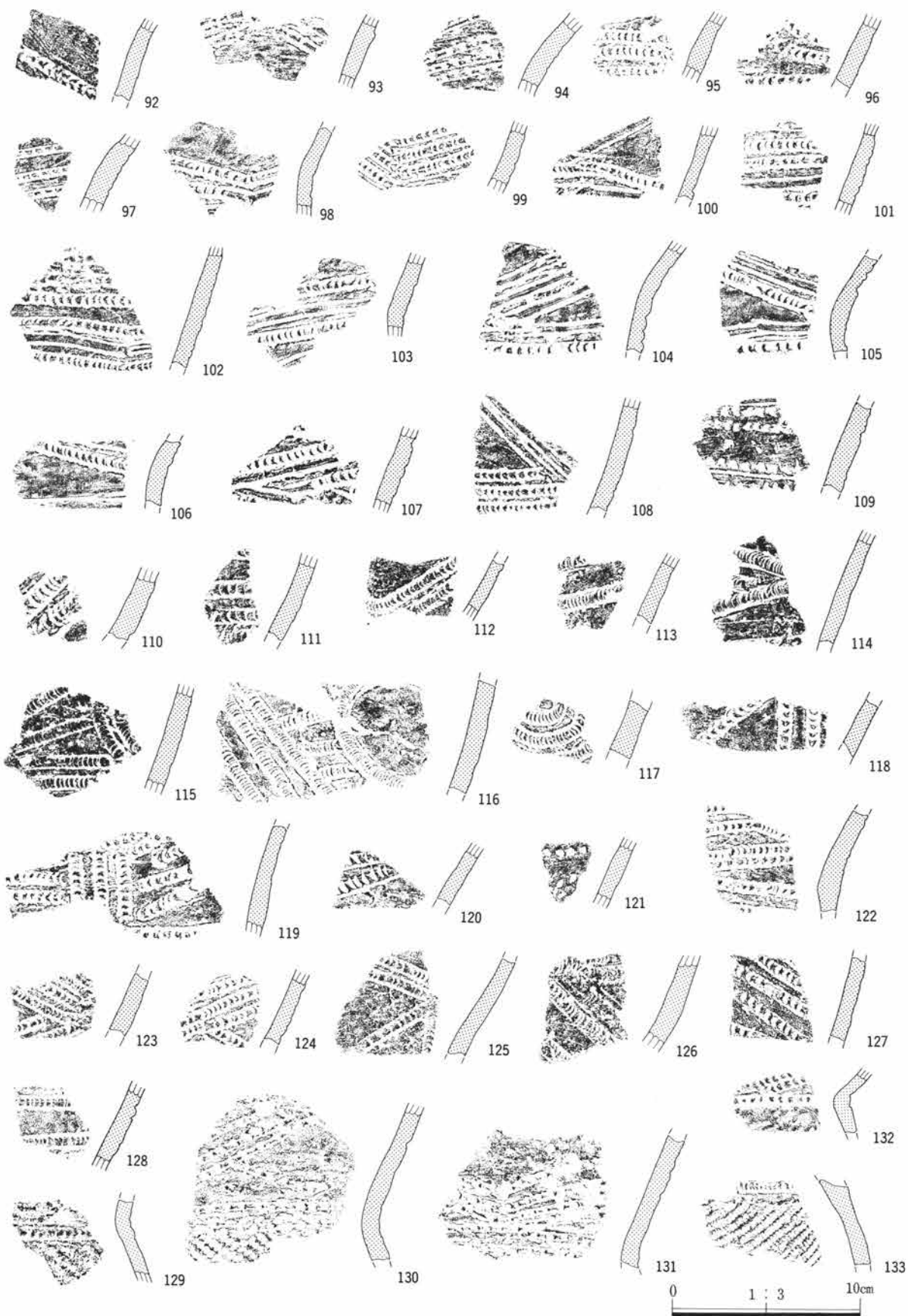
第41図 J-4号住居跡出土土器(6)



第42図 J-4号住居跡出土土器(7)

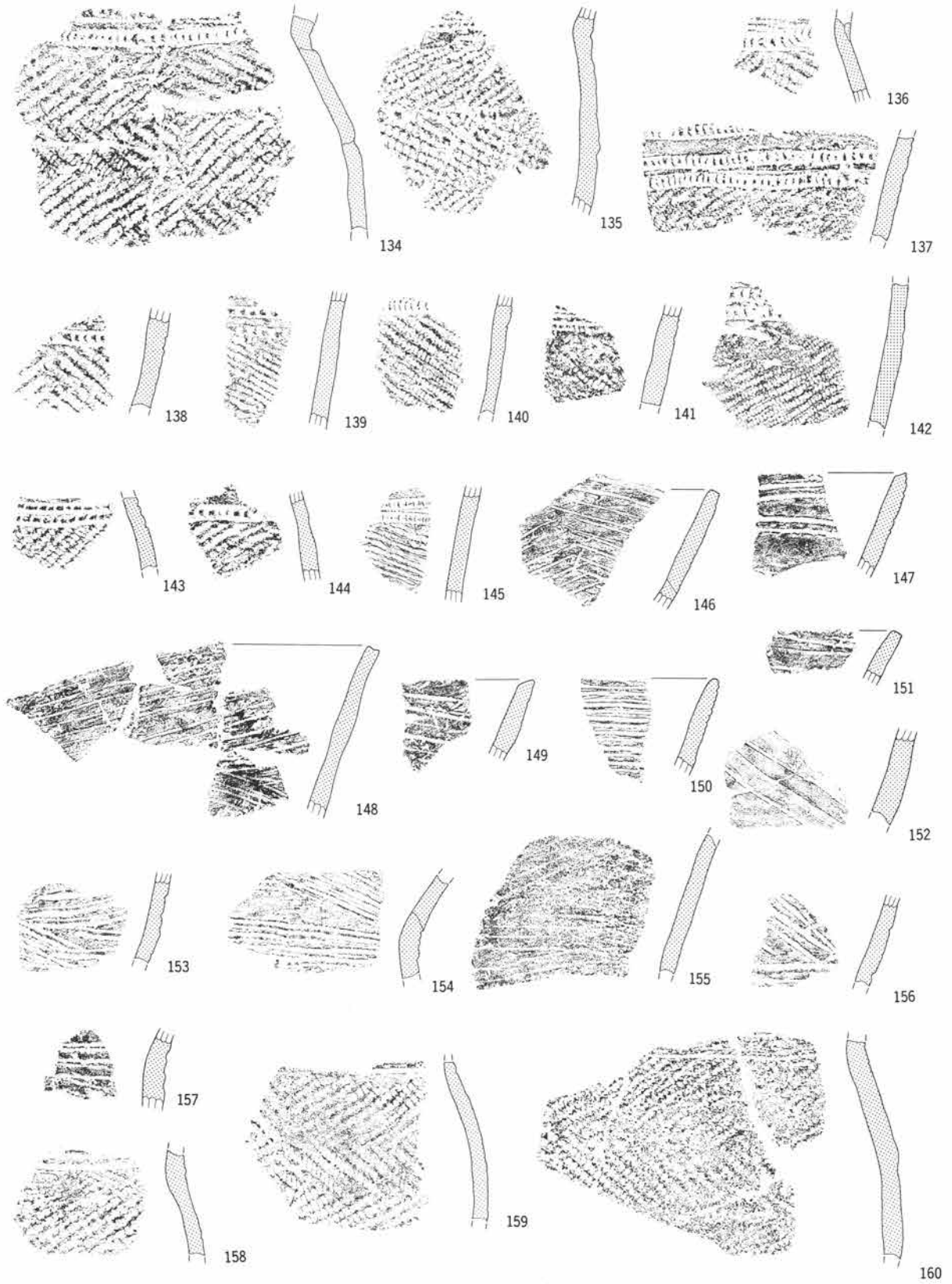


第43图 J-4号住居跡出土土器(8)



第44図 J-4号住居跡出土土器(9)





0 1 : 3 10cm

第45图 J-4号住居跡出土土器(10)

図 番 PL.	器 種 (部位)	法 量 (cm)	①胎土 ②焼成 (遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
41-26 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 淡黄色 内面 淡黄色	甕形土器の口縁部片。口唇部は内側と外側から成形して、それが口唇部にはみ出して沈線が巡る様な効果。器厚9mmで積みあげ技法A。内面横ミガキ。外面繊維痕顕著。	巾2mmの方形の先端をもつ櫛歯状工具(3本・長さ6mm)による縦位刺突6回が認められる。	覆土
41-27 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 淡黄色 内面 淡黄色	甕形土器の口縁部片で口唇部は平坦。器厚5mm~8mm。内面は条痕風の調整痕が認められる。	巾3mmの平行沈線を引いた後、巾2mmの方形の先端をもつ櫛歯状工具による縦位刺突。以下半載竹管による平行沈線・C字爪形文(手法A)充填。	廃棄第3ブロック
41-28 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐色 内面 ぶい黄橙色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は丸味をもつ。器厚8mmで積みあげ技法A。内面は繊維痕が認められる。	巾5mmの平行沈線を引いた後、巾2mmの円形の先端をもつ櫛歯状工具(5本・長さ1.8cm)による縦位刺突。	覆土
41-29 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 褐色 内面 暗褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は平坦。器厚8mm。内面はやや丁寧な調整が行われ、外面には繊維痕が認められる。	巾2mm~4mmの方形の先端をもつ櫛歯状工具(7本・長さ1.9cm)による縦位刺突。以下同工具による斜位刺突が認められる。	覆土
41-30 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 ぶい黄褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部はやや丸味をもつ。器厚8mm~1cm。内面は徹底した横ミガキが行われている。	巾2.5mmの円形の先端をもつ櫛歯状工具(6本・長さ1.6cm)による縦位刺突。以下巾6mmの半載竹管による平行沈線・C字爪形文(手法C)充填。	覆土
41-31 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②非常に良 ③外面 赤色 内面 赤色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は平坦。器厚9mm~1.2cmで積みあげ技法A。内面は条痕風の調整痕が認められる。	巾5mmの円形の先端をもつ櫛歯状工具(3本・長さ1cm)による縦位刺突。以下巾6mmの半載竹管による平行沈線・C字爪形文(手法C)充填。	覆土
41-32 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 ぶい黄橙色 内面 ぶい黄褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は平坦。器厚6mm~8mmで積みあげ技法A。内面はやや丁寧な調整が行われている。	巾5mmの半載竹管による平行沈線・C字爪形文(手法C)の充填→巾3mmの円形の先端をもつ櫛歯状工具(5本・長さ1.2cm)による縦位刺突。	覆土
41-33 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 ぶい黄褐色 内面 ぶい黄褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部はやや丸味をもつ。器厚8mm~1cm。内面は横ミガキ、外面には繊維痕顕著に認められる。	巾2mmの円形の先端をもつ櫛歯状工具(6本・長さ1.6cm)による縦位刺突、同工具による条線。以下巾4mmの平行沈線・C字爪形文(手法A)。	廃棄第3ブロック
41-34 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 ぶい黄褐色 内面 ぶい黄褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は平坦。器厚6mm~9mm。内面は横ミガキ、外面には繊維痕が認められる。	巾2mmの円形の先端をもつ櫛歯状工具(6本・長さ1.6cm)による縦位刺突。以下巾5mmの半載竹管による平行沈線・C字爪形文(手法C)充填。	
41-35 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 ぶい黄褐色 内面 ぶい黄褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は丸味をもつ。器厚8mm~1cmで積みあげ技法A。内面は横・縦ミガキが行われ、繊維痕認められる。	巾5mmと7mmの平行沈線で菱形構成。この区画内に巾3mmの櫛歯状工具(6本・長さ2.1cm)による縦位・斜位刺突が行われる。	南壁寄り (東西に接合)
41-36 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 灰褐色 内面 ぶい黄褐色	甕形土器の頸部片。器厚9mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	巾2mmの方形の先端をもつ櫛歯状工具による縦位刺突が行われている。	覆土
41-37 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 灰黄色	甕形土器の頸部片。器厚9mmで積みあげ技法A。内面は横ミガキが行われている。	巾2mm~3mmの方形の先端をもつ櫛歯状工具による縦位刺突。以下半載竹管による平行沈線・C字爪形文(手法A)充填。	覆土

図番 PL.	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
41-38 39 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 灰褐色 内面 にぶい黄褐色	38・39は同一個体。甕形土器の頸部片。器厚9mm~1cmで積みあげ技法A。内面は横ミガキ、一部繊維痕が認められる。	括れ部に巾2mm~3mmの方形の先端をもつ櫛歯状工具による縦位刺突、同工具による条線→巾5mmの平行沈線・C字爪形文(手法C)充填。	住居跡東壁中央寄り
41-40 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 にぶい黄褐色 内面 にぶい黄褐色	甕形土器の頸部片。器厚8mm~1cmで積みあげ技法A。内面は横ミガキが行われている。	巾6mmの半截竹管による平行沈線を引いた後、沈線内に巾3mmの方形の先端をもつ櫛歯状工具による斜位刺突が行われている。	覆土
41-41 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 明褐色 内面 灰黄褐色	甕形土器の頸部片。器厚8mmで積みあげ技法A。内面は横ミガキが行われている。	巾8mmの半截竹管による平行沈線を引いた後、沈線内外に巾3mmの方形の先端をもつ櫛歯状工具による斜位刺突が行われている。	覆土
41-42 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②非常に良 ③外面 赤色 内面 赤色	31と同一個体。甕形土器の頸部片。器厚1.1cm~1.3cmで積みあげ技法A。内面は条痕風の調整痕が認められる。	31参照。	住居跡東壁中央部付近
41-43 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 灰黄色 内面 黒褐色	甕形土器の頸部片。器厚8mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	巾6mmの半截竹管による平行沈線を引いた後、沈線内に巾2mmの方形の先端をもつ櫛歯状工具による斜位刺突が行われている。	覆土
41-44 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②不良 ③外面 赤褐色 内面 暗褐色	甕形土器の頸部片。器厚7mmで積みあげ技法A。内面はやや粗い調整が行われ、外面には繊維痕が認められる。	巾6mmの半截竹管による平行沈線を引いた後、沈線内に巾3mmの方形の先端をもつ櫛歯状工具による斜位刺突が行われている。	覆土
41-45 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 黒色 内面 にぶい黄褐色	甕形土器の頸部片。器厚7mm~1cmで積みあげ技法A。内面は横ミガキ。外面は荒れている。	括れ部に巾3mmの方形の先端をもつ櫛歯状工具による横位刺突が行われている。胴部には縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ 。	覆土
41-46 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 にぶい褐色 内面 にぶい黄褐色	46・47は同一個体。甕形土器の頸部片。器厚7mmで積みあげ技法A。内面は横ミガキが行われているが、繊維痕が認められる。	巾2mmの櫛歯状工具による条線文を施文後、巾4mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。	覆土
41-47 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 にぶい褐色 内面 にぶい黄褐色	甕形土器の頸部片。器厚9mmで積みあげ技法A。内面は横ミガキが行われている。外面は一部荒れている。	巾2mmの櫛歯状工具による条線文を施文後、巾4mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。	廃棄第2ブロック付近
41-48 PL. 46	口縁部片		①含繊維 ②良 ③外面 にぶい黄褐色 内面 明黄褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は平坦。器厚8mmで積みあげ技法A。内外面とも丁寧なミガキが行われている。	口唇部にR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条)とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)の縄文施文。縄文帯巾2.2cm。以下巾4mm、2条1単位の平行沈線を引いた後、C字爪形文(手法C)。	覆土
41-49 PL. 46	口縁部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 暗褐色 内面 暗褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は沈線が巡る様な手法。器厚7mm~9mm。内面は横ミガキで一部繊維痕が認められる。外面はザラザラしている。	口唇部にR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条)と前々段反撚L $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ の縄文施文。縄文帯巾3cm。以下巾5mm、3条1単位の平行沈線を引いた後、上下2条にC字爪形文(手法C)。	廃棄第3ブロック
41-50 PL. 46	口縁部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 にぶい赤褐色 内面 にぶい赤褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は平坦。器厚8mm~1.1cm。内面は横ミガキ。外面には繊維痕が認められる。	口唇部にR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条)とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)の縄文施文。縄文帯巾2.8cm。以下巾5mmの平行沈線を引いた後、C字爪形文(手法C)充填。	覆土

図番 PL.	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
41-51 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 極暗赤褐色 内面 におい赤褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部はほぼ平坦。器厚8mm。内面は丁寧な調整が行われている。	口唇部にR(1/2) (0段多条)とL(3/8) (0段多条)の縄文施文。縄文帯巾2.9cm。以下巾5mmの平行沈線とC字爪形文(手法C)の充填が交互に施文。	覆土
41-52 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 赤褐色 内面 赤褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は沈線が巡る様な手法。器厚6mm~1.1cmで積みあげ技法A。内面は横ミガキが行われている。	口唇部にR(1/2)とL(3/8) (0段多条)。縄文帯巾3.1~4cm。縄文帯下と括れ部に1条の平行沈線・C字爪形文で区画→区画内巾5mm・3条1単位C字爪形文(手法C)で菱形。	廃棄第3ブロック
41-53 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 におい黄褐色 内面 におい黄褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は平坦。器厚7mm~9mm。内面は横ミガキが行われている。	口唇部にL(3/8) (0段多条)の縄文施文。縄文帯巾2.8~3.1cm。以下巾5mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法A)充填。	覆土
41-54 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 暗褐色 内面 明赤褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は内削ぎ状。器厚5mm~8mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	口唇部にR(1/2)の縄文施文。縄文帯巾1.7cm。以下巾4mmの半截竹管によるC字爪形文(手法A)施文。	覆土
42-55 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 橙色	甕形土器の内彎する波状口縁部片で口唇部は内傾。器厚7mm~9mmで積みあげ技法A。内面は横ミガキが行われている。	口縁にそって3条の平行沈線(沈線巾1cm)・C字爪形文(手法B)の充填。以下3条の爪形文でくずれた菱形のモチーフ。爪形文の間隔は密。沈線の施文は、波頂部を開始点。	廃棄第1ブロック
42-56 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 赤褐色 内面 褐色	甕形土器の内彎する波状口縁部片で口唇部は内傾。器厚8mm。内面はザラザラしていて一部繊維痕が認められる。	口縁にそって3条の平行沈線(沈線巾5mm)・C字爪形文(手法B・C)。以下4条の爪形文でくずれた菱形のモチーフ。	廃棄第2ブロック
42-57 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 におい黄褐色	甕形土器の内彎する波状口縁部片で口唇部は沈線が巡る様な手法。器厚6mm~1cm。内面は条痕風の調整痕、外面には一部繊維痕。	口縁にそって3条の平行沈線(沈線巾4mm)・C字爪形文(手法C)の充填。以下3条の爪形文で菱形のモチーフ。爪形文の間隔は粗い。	住居跡南西コーナー
42-58 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②不良 ③外面 黒褐色 内面 明黄褐色	甕形土器の内彎する波状口縁部片で口唇部は内傾する。器厚6mm~9mmで積みあげ技法A。内面は横ミガキ。外面はかなり荒れている。	口縁直下と頸部に3条のC字爪形文(巾4mm・手法C)を配し、口縁部の文様区画内をくずれた菱形のモチーフが充填される。胴部縄文はR(1/2)。	廃棄第2ブロック
42-59 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 におい黄褐色 内面 におい黄褐色	甕形土器のやや内彎する波状口縁部片で口唇部はやや平坦。器厚6mm~9mmで積みあげ技法A。内面は条痕風の調整痕。	口縁にそって6条の平行沈線(沈線巾4mm)・C字爪形文(手法C)の充填。沈線の施文は波頂部を開始点としている。	住居跡南壁寄り。
42-60 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐色 内面 におい黄褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は内外面から粘土を盛り上げて来て口唇部には一本の沈線を巡らせる様な手法。内面は一部横ミガキ。	口縁にそって3条の平行沈線(沈線巾7mm)・C字爪形文(手法B)の充填。以下3条の爪形文で菱形のモチーフ。	覆土
42-61 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 淡赤褐色 内面 橙色	甕形土器の外傾する波状口縁部片で口唇部は平坦。器厚6mm~8mm。内面は丁寧な調整。外面は繊維痕顕著に認められる。	口縁にそって2条の平行沈線(沈線巾7mm)・C字爪形文(手法C)の充填。以下3条の爪形文で菱形を構成するものであろう。	覆土
42-62 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 黒褐色	甕形土器の外傾する波状口縁部片で口唇部はやや平坦。器厚7mm~9mmで積みあげ技法A。内面は徹底的な横ミガキが行われている。	口縁と頸部に2条の平行沈線(巾4mm)・C字爪形文(手法C)の充填。区画内を菱形のモチーフ。C字爪形文と平行沈線が交互に配される。	廃棄第2ブロック付近

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
42-63 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 暗褐色 内面 ぶい黄褐色	甕形土器の外傾する波状口縁部片で口唇部はやや丸味をもつ。器厚1cmで積みあげ技法B。内面は条痕風の調整痕。内外面に一部繊維痕。	口縁にそって4条の平行沈線(巾6mm)内にC字爪形文(手法A)、頸部には2条の平行沈線。区画内を3条の爪形文で菱形のモチーフ。	廃棄第2ブロック
42-64 65 PL. 46	口縁部 頸部片		①含繊維 ②非常に良 ③外面 ぶい褐色 内面 褐灰色	甕形土器のやや内彎する波状口縁部片で口唇部は平坦。器厚8mm~1cmで積みあげ技法A。内面は条痕風の調整痕が認められる。	口縁にそって6条の平行沈線(巾7mm)内にC字爪形文(手法C)の充填。沈線内に爪形文の空白部が認められる。	廃棄第2ブロック付近
43-66 67 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 ぶい黄褐色 内面 ぶい黄褐色	甕形土器の外傾する波状口縁部片で口唇部は外側につまみ出された様になっている。器厚1cmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整。	口縁にそって3条1単位、5条1単位、3条1単位の平行沈線(巾7mm)内にC字爪形文(手法AとC)の充填。外面に黒斑あり。	廃棄第1ブロック
43-68 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 暗褐色 内面 ぶい黄褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は外側につまみ出された様になっている。器厚7mm~1cm。内面は荒れていて繊維痕が認められる。	口縁にそって3条の平行沈線(巾8mm)内にC字爪形文(手法B)の充填。以下円形のD字爪形文(逆C・手法B)渦巻状のモチーフ。	廃棄第3ブロック
43-69 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 明赤褐色 内面 明黄褐色	甕形土器のやや内彎する波状口縁部片で口唇部は外側につまみ出された様になっている。器厚8mm~1cmで積みあげ技法A。	口縁にそって1条の平行沈線(巾7mm)内にC字爪形文(手法B)の充填。以下上帯ではC字爪形文、下帯でD字爪形文(逆C)の施文。	住居跡南壁際から中央にかけて接合
43-70 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 ぶい黄褐色 内面 明赤褐色	甕形土器の外傾する波状口縁部片で口唇部はやや平坦。器厚5mm~8mmで積みあげ技法A。内面は徹底したミガキが行われている。	口縁にそって2条の平行沈線(巾6mm)内にC字爪形文(手法B)の充填。以下平行沈線による菱形モチーフの施文か。	廃棄第2ブロック付近
43-71 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒色 内面 黒色	甕形土器の外傾する波状口縁部片で口唇部はやや丸味をもつ。器厚6mm~8mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	口縁にそって半截竹管による3条の平行沈線(巾6mm)・C字爪形文(手法B)の充填。	住居跡北東寄り
43-72 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 淡黄色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は内外面から粘土を盛り上げて来て口唇部に沈線が巡る様な手法。内面は丁寧な調整が行われている。	口縁にそって半截竹管による4条の平行沈線(巾7mm)・C字爪形文(手法B)の充填。	覆土
43-73 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 黒褐色 内面 褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部はやや平坦。器厚6mm~9mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	口縁にそって3条の平行沈線(巾3mm)・C字爪形文(手法A)の充填。以下4条の平行沈線・C字爪形文の充填が認められる。	覆土
43-74 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 ぶい黄褐色	甕形土器の外傾する波状口縁部片で口唇部は平坦。器厚7mm~9mmで積みあげ技法A。内面は条痕風の調整痕が認められる。	口縁にそって半截竹管による4条の平行沈線(巾4mm)・C字爪形文(手法C)の充填。	住居跡南壁際
43-75 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②不良 ③外面 明黄褐色 内面 明黄褐色	甕形土器の口縁部片で口唇部は丸味をもつ。器厚6mm~8mm。内外面ともザラザラで繊維痕が認められる。	巾5mmのC字爪形文が口唇部と口縁にそっては3条、さらに円形の爪形文モチーフが施文されている。平行沈線の施文は行われていない。	覆土
43-76 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 黄褐色 内面 黄褐色	甕形土器の口縁部片で小突起が存在する。口唇部は内削ぎ状。器厚9mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	口縁にそって半截竹管による4条の平行沈線(巾7mm)内にC字爪形文(手法B)の充填。	覆土

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
43-77 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 におい橙色 内面 におい橙色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は平坦。器厚7mm。内面は徹底した横ミガキが行われている。	口縁にそって半截竹管による2条の平行沈線(巾8mm)・C字爪形文(手法C)の充填。一部に爪形文の空白が見られる。	廃棄第1ブロック
43-78 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 におい黄橙色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は平坦。器厚6mm~8mm。内面は粗い調整が行われている。	口縁にそって半截竹管による2条の平行沈線(巾9mm)・C字爪形文(手法C)の充填。爪形文の施文は密である。	覆土
43-79 PL. 46	口縁部 ~胴部 片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐色 内面 におい黄橙色	深鉢形土器の直立する口縁部片で口唇部はやや平坦。器厚7mm。内面は丁寧な調整が行われている。	口唇部直下に2条の平行沈線(巾6mm)・C字爪形文(手法C)の充填。以下縄文。原体はL(Ⅱ)。施文順序は縄文→爪形文。	廃棄第2ブロック
43-80 81 82 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 明黄褐色 内面 におい黄橙色	80~82は同一個体。甕形土器の内彎する波状口縁部片で口唇部はやや丸味をもつ。器厚7mm~9mm。内面は条痕風の調整痕が認められる。	口縁にそって2条の平行沈線(巾7mm)・D字爪形文(逆C・手法B)の充填。以下4条の平行沈線・D字爪形文の施文。	廃棄第2・第3ブロック
43-83 PL. 46	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 におい黄橙色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部はやや内削ぎ状。器厚6mm~9mm。内面は条痕風の調整痕が認められる。	口縁にそって2条の平行沈線(巾7mm)・D字爪形文(逆C・手法B)の充填。以下1条の平行沈線・D字爪形文の施文が認められる。	住居跡北西コーナー寄り。
43-84 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 におい黄橙色 内面 におい黄橙色	甕形土器の頸部片。器厚9mm。内面は丁寧な調整が行われ、外面に一部繊維痕が認められる。	半截竹管による3条1単位の平行沈線(巾7mm)・C字爪形文(手法C)の充填。	廃棄第2ブロック
43-85 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 明赤褐色 内面 暗赤褐色	甕形土器の頸部片。器厚1.1cmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	巾8mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。爪形文の施文は密に行われている。	覆土
43-86 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②不良 ③外面 におい黄橙色 内面 橙色	甕形土器の頸部片。器厚8mm~1cm。内外面とも荒れていて繊維痕が認められる。	巾5mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法AとC)の充填。	廃棄第3ブロック付近
43-87 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 黒褐色 内面 褐色	甕形土器の頸部片。器厚7mm~1cm。内面は条痕風の調整痕。外面には一部繊維痕が認められる。	巾4mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法A)の充填。爪形文の施文は粗い。	廃棄第3ブロック
43-88 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 灰褐色 内面 におい黄橙色	甕形土器の頸部片。器厚8mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	巾7mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法A)の充填。爪形文の施文は粗い。	覆土
43-89 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 明褐色 内面 明黄褐色	甕形土器の頸部片。器厚9mmで積みあげ技法A。内面はやや丁寧な調整。外面は荒れていて繊維痕が認められる。	巾7mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法B)の充填。	廃棄第1ブロック
43-90 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②不良 ③外面 褐色 内面 灰黄褐色	甕形土器の頸部片。器厚9mmで積みあげ技法A。内外面は荒れていて一部繊維痕が認められる。	巾5mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。	廃棄第3ブロック付近

図番 PL.	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
43-91 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 明褐色 内面 黒褐色	甕形土器の頸部片。器厚8mmで積みあげ技法A。内面は条痕風の調整痕。外面は荒れていて繊維痕が認められる。	巾7mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法B)の充填。	廃棄第3ブロック付近
44-92 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 にぶい黄橙色 内面 にぶい黄橙色	甕形土器の頸部片。器厚7mm~9mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整。外面に一部繊維痕が認められる。	巾7mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法B)の充填。	覆土
44-93 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 にぶい黄橙色 内面 黄灰色	甕形土器の頸部片。器厚8mm。内面は徹底した横ミガキが行われている。	巾7mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法A)の充填。	覆土
44-94 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 暗褐色 内面 灰白色	甕形土器の頸部片。器厚8mm~1cm。内外面はザラザラしていて繊維痕が認められる。	巾5mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法A)の充填。	覆土
44-95 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 にぶい橙色 内面 黒褐色	甕形土器の頸部片。器厚9mm。内面は丁寧な調整が行われ、外面には一部繊維痕が認められる。	巾8mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。	覆土
44-96 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 明黄褐色 内面 明黄褐色	甕形土器の頸部片。器厚9mmで積みあげ技法A。内外面はザラザラしていて外面に一部繊維痕が認められる。	巾8mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法B)の充填。	廃棄第1ブロック
44-97 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 にぶい橙色 内面 にぶい橙色	甕形土器の頸部片。器厚1.1cm。内面はやや丁寧な調整が行われている。	巾5mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法A)の充填。	住居跡東壁寄り
44-98 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 にぶい黄褐色 内面 にぶい褐色	甕形土器の頸部片。器厚8mmで積みあげ技法A。内面はやや丁寧な調整が行われ、一部繊維痕が認められる。	巾7mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。一部爪形文の空白が認められる。	覆土
44-99 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 灰黄褐色 内面 褐色	甕形土器の頸部片。器厚9mm。内面は横ミガキが行われている。	巾7mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法B)の充填。一部爪形文の空白が認められる。	覆土
44-100 101 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 にぶい橙色 内面 にぶい黄褐色	100・101は同一個体。甕形土器の頸部片。器厚6mm~8mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整、外面に一部繊維痕が認められる。	巾8mmの半截竹管による平行沈線と沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。	廃棄第3ブロック
44-102 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 にぶい黄褐色 内面 灰黄褐色	甕形土器の頸部片。器厚8mmで積みあげ技法A。内面は横ミガキが行われている。	巾7mmの半截竹管による平行沈線1条と沈線内にC字爪形文(手法C)の充填が5条認められる。	覆土
44-103 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 にぶい橙色 内面 にぶい黄褐色	甕形土器の頸部片。器厚9mm。内外面は丁寧な調整が行われている。	巾8mmの半截竹管による平行沈線2条と沈線内にC字爪形文(手法C)の充填が2条認められる。	覆土

図 番 PL	器 種 (部位)	法 量 (cm)	①胎土 ②焼成 (遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
44-104 5 107 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 しぶい赤褐色 内面 しぶい橙色	104-107は同一個体。甕形土器の頸部片。器厚7mm~1cmで積みあげ技法A。内面は荒れていて繊維痕が認められる。	巾8mmの半截竹管による平行沈線とC字爪形文(手法C)の組合せ。	廃棄第3ブロック
44-108 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐色 内面 黒褐色	甕形土器の頸部片。器厚9mmで積みあげ技法A。内面は横ミガキが行われている。	巾7mmの半截竹管による平行沈線とC字爪形文(手法B)の組合せ。	覆土
44-109 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 しぶい黄橙色	甕形土器の頸部片。器厚1cmで積みあげ技法A。内面は徹底した横ミガキが行われている。	巾4mmの半截竹管によるC字爪形文(手法A)と巾6mmの平行沈線の施文。爪形文は沈線内には充填されていない。	廃棄第2ブロック
44-110 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 暗褐色 内面 暗赤褐色	甕形土器の頸部片。器厚1.1cmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	巾1.2cmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。巾広な爪形文である。	覆土
44-111 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 しぶい黄橙色 内面 橙色	甕形土器の頸部片。器厚9mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	巾8mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法B)の充填。	覆土
44-112 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 しぶい橙色	甕形土器の頸部片。器厚7mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	巾8mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法B)の充填。爪形文は密に施文されている。	覆土
44-113 114 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 橙色	113・114は同一個体。甕形土器の頸部片。器厚7mm~9mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	巾9mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法B)の充填。爪形文は密に施文されている。	覆土
44-115 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②不良 ③外面 明赤褐色 内面 しぶい褐色	甕形土器の頸部片。器厚9mm。内外面は荒れていてザラザラ。内面は繊維痕顕著に認められる。	巾8mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法A)の充填。爪形文は渦巻状モチーフを施文するものと思われる。	覆土
44-116 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 しぶい黄橙色 内面 しぶい黄橙色	甕形土器の頸部片。器厚1cmで積みあげ技法A。内面は粗い調整が行われている。	巾8mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法B)の充填。爪形文は円形のモチーフを一部施文している。	廃棄第1ブロック
44-117 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 赤褐色 内面 暗赤褐色	甕形土器の頸部片。器厚1.1cmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	巾8mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)とD字爪形文(逆C・手法B)の充填。爪形文は渦巻状モチーフを施文。	覆土
44-118 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 しぶい黄橙色 内面 しぶい黄橙色	甕形土器の頸部片。器厚9mmで積みあげ技法A。内外面は荒れていてザラザラ。外面に一部繊維痕が認められる。	巾8mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法B)の充填。爪形文は縦2条、斜位1条認められる。	廃棄第1ブロック
44-119 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒色 内面 明黄褐色	69と同一個体。甕形土器の頸部片。器厚7mm~9mmで積みあげ技法A。内面は粗い調整。外面には繊維痕が認められる。	巾7mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法B)の充填。爪形文は縦位3条、斜位の施文。	廃棄第2ブロック付近



図番 PL.	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
44-120 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 におい褐色 内面 におい褐色	甕形土器の頸部片。器厚8mmで積みあげ技法A。内外面は丁寧な調整が行われている。	巾8mmの半載竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法A)の充填。	覆土
44-121 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 におい赤褐色 内面 極暗赤褐色	甕形土器の頸部片か。器厚7mm。内面は横ミガキが行われている。	巾5mmの半載竹管によるC字爪形文(手法A)が施文されている。平行沈線は施文されていない。	覆土
44-122 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 灰黄褐色 内面 灰黄褐色	甕形土器の頸部片。器厚9mm~1.2cmで積みあげ技法AとB。内面はやや丁寧な調整が行われているが、一部繊維痕が認められる。	巾7mmの半載竹管による平行沈線内にD字爪形文(逆C・手法C)の充填。	覆土
44-123 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 暗褐色 内面 褐色	甕形土器の頸部片。器厚9mmで積みあげ技法A。内面は条痕風の調整痕が認められる。	巾7mmの半載竹管による平行沈線内にD字爪形文(逆C・手法B)の充填。	覆土
44-124 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 明褐色 内面 におい橙色	甕形土器の頸部片。器厚8mmで積みあげ技法A。内面は条痕風の調整痕が認められる。	巾7mmの半載竹管による平行沈線内にD字爪形文(逆C・手法B)の充填。	覆土
44-125 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 黄褐色 内面 暗褐色	甕形土器の頸部片。器厚7mm~9mmで積みあげ技法A。内面は条痕風の調整痕、外面には繊維痕が認められる。	巾7mmの半載竹管による平行沈線内にD字爪形文(逆C・手法B)の充填。爪形文は縦位、斜位に施文されている。	廃棄第2ブロック
44-126 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 におい橙色 内面 褐灰色	甕形土器の頸部片。器厚1cm。内面は剥落していて繊維痕が顕著に認められる。	巾1cmの半載竹管による平行沈線内にD字爪形文(逆C・手法B)の充填。	覆土
44-127 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 におい黄褐色 内面 淡黄色	甕形土器の頸部片。器厚8mmで積みあげ技法A。内面はやや丁寧な調整が行われているが、一部繊維痕が認められる。	巾8mmの半載竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。	覆土
44-128 PL. 46	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 におい橙色 内面 におい橙色	甕形土器の頸部片。器厚8mm。内面は丁寧な調整が行われている。	巾8mmの半載竹管による平行沈線内にD字爪形文(逆C・手法B)の充填。平行沈線は深く施文されている。	覆土
44-129 PL. 46	頸部~ 胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 明黄褐色 内面 におい黄褐色	甕形土器の括れ部。器厚8mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。外面は荒れていて繊維痕顕著。	巾7mmの半載竹管による平行沈線内にD字爪形文(逆C・手法B)の充填が2条横走。以下R{ $\frac{1}{2}$ }の縄文施文。施文順序は縄文→爪形文。	廃棄第3ブロック付近
44-130 PL. 46	頸部~ 胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 褐色 内面 灰白色	甕形土器の括れ部。器厚9mmで積みあげ技法B。内面は条痕風の調整痕、一部に繊維痕が認められる。	巾4mmの半載竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。括れ部に2条横走し区画内は菱形のモチーフ。胴部はR{ $\frac{1}{2}$ }縄文。	住居跡北壁寄り
44-131 PL. 46	頸部~ 胴部片		①含繊維 ②不良 ③外面 褐灰色 内面 灰白色	甕形土器の括れ部。器厚9mmで積みあげ技法A。内面は粗い調整。外面は荒れていて繊維痕が認められる。	巾4mmの半載竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。括れ部に2条横走し区画内は菱形のモチーフと思われる。胴部はR{ $\frac{1}{2}$ }縄文。	廃棄第2ブロック付近

図 番 PL.	器 種 (部位)	法 量 (cm)	①胎土 ②焼成 (遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
44-132 PL. 46	頸部～ 胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 ぶい黄褐色 内面 明褐色	甕形土器の括れ部。器厚6mm～9mmで積みあげ技法B。内面は丁寧な調整が行われている。	巾6mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填、括れ部に1条横走している。	覆土
44-133 PL. 46	頸部～ 胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 褐色	甕形土器の括れ部。器厚8mm～1.3cmで積みあげ技法A。内面は粗い調整が行われている。	巾6mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。以下縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)。	覆土
45-134	頸部～ 胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 黒褐色 内面 明黄褐色	甕形土器の括れ部。器厚7mm～1cmで積みあげ技法A。内外面は荒れていて繊維痕が認められる。	巾8mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。以下縄文施文。原体は0段多条のR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で羽状。原体交換部で菱形状・X状の交叉。	廃棄第3ブロック
45-135	頸部～ 胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 黒褐色 内面 ぶい褐色	甕形土器の括れ部。器厚7mm～1cm。内面はやや丁寧な調整が行われ、一部繊維痕が認められる。	巾5mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法A)の充填。以下縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条)とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	廃棄第3ブロック
45-136	頸部～ 胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 ぶい黄褐色 内面 橙色	甕形土器の括れ部。器厚8mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	巾1cmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法AとC)の充填。爪形文は巾広で密な施文。以下0段多条のR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で羽状。	覆土
45-137	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 ぶい黄褐色 内面 ぶい黄褐色	口縁部文様帯をもつ深鉢形土器の胴部片。器厚9mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整。外面は荒れていて繊維痕顕著。	巾7mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法A)の充填。以下縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)。	覆土
45-138	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 淡黄色 内面 ぶい黄褐色	口縁部文様帯をもつ深鉢形土器の胴部片。器厚9mm～1.1cmで積みあげ技法A。内面はやや丁寧な調整で一部繊維痕が認められる。	巾8mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。以下縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条)とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	覆土
45-139	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 明赤褐色 内面 ぶい黄褐色	口縁部文様帯をもつ深鉢形土器の胴部片。器厚7mm～9mm。内面は横ミガキが行われている。	巾6mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。以下縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条)。施文順序は縄文→爪形文。	廃棄第3ブロック付近
45-140	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 ぶい褐色	口縁部文様帯をもつ深鉢形土器の胴部片。器厚6mm～8mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	巾8mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。以下縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条)。施文順序は縄文→爪形文。	住居跡東壁中央寄り
45-141	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 淡黄色 内面 淡黄色	口縁部文様帯をもつ深鉢形土器の胴部片。器厚1cmで積みあげ技法A。内面はザラザラしている。外面には一部繊維痕が認められる。	巾4mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法B)の充填。以下縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ 。施文順序は縄文→爪形文。	覆土
45-142	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 ぶい黄褐色 内面 ぶい黄褐色	口縁部文様帯をもつ深鉢形土器の胴部片。器厚9mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。外面には一部繊維痕。	巾6mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。以下縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)。	住居跡東壁中央寄り
45-143	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 黒褐色 内面 褐色	甕形土器の頸部片。器厚8mmで積みあげ技法A。内面は荒れていて繊維痕が認められる。	巾6mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。以下縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ 。施文順序は縄文→爪形文。	覆土

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
45-144	頸部片		①含繊維 ②不良 ③外面 褐色 内面 明黄褐色	甕形土器の頸部片。器厚6mm~8mm。内面はやや丁寧な調整。外面は荒れている。	巾8mmの半載竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法B)の充填。以下縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ 。施文順序は縄文→爪形文。	覆土
45-145	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐色 内面 暗褐色	口縁部文様帯をもつ深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。内面は横ミガキが行われている。	巾5mmの半載竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法B)の充填。以下縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ 。施文順序は縄文→爪形文。	覆土
45-146 148	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 赤褐色	甕形土器の外傾する波状口縁部片で口唇部は平坦。器厚6mm~9mmで積みあげ技法A。内面は横・縦ミガキが行われている。	巾7mmの半載竹管による平行沈線が口縁にそって6条認められる。爪形文の充填はない。菱形のモチーフの施文と思われる。	覆土
45-147	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 ぶい黄橙色 内面 ぶい黄橙色	甕形土器の外傾する波状口縁部片で口唇部は内削ぎ状。器厚7mm~9mm。内面は横ミガキが行われている。	巾8mmの半載竹管による平行沈線が口縁にそって2条認められる。沈線は深く施文されている。	覆土
45-149	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 淡黄色 内面 ぶい黄橙色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は内削ぎ状。器厚8mm~1cm。内面は横ミガキが行われている。外面には繊維痕が認められる。	巾1cmの半載竹管による平行沈線が口縁にそって2条認められる。	覆土
45-150	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 暗赤褐色 内面 赤褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部はやや丸味をもつ。器厚5mm~8mm。内面は横ミガキが行われている。	巾5mmの半載竹管による平行沈線が口縁にそって密に施文されている。	覆土
45-151 152	口縁~ 頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 灰褐色 内面 ぶい橙色	151と152は同一個体。甕形土器の波状口縁部片で口唇部は平坦。器厚6mm~1.2cm。内面は横ミガキが行われている。	巾1.2cmの半載竹管による平行沈線を浅く施文している。	廃棄第2ブロック
45-153 154	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 ぶい赤褐色 内面 赤褐色	153と154は同一個体。甕形土器の頸部片。器厚7mm~1cmで積みあげ技法AとB。内面は横ミガキが行われているが一部荒れている。	巾5mmと1cmの半載竹管による平行沈線を括れ部に3条施文。区画内は菱形のモチーフと思われる。	住居跡南壁 中央寄り
45-155	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 明黄褐色 内面 明黄褐色	甕形土器の頸部片。器厚7mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整。外面は荒れていて繊維痕顕著に認められる。	巾7mmの半載竹管による平行沈線。菱形のモチーフ施文と思われる。	住居跡東壁 中央寄り
45-156	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒色 内面 ぶい橙色	甕形土器の頸部片。器厚8mmで積みあげ技法A。内面は横ミガキが行われている。	巾9mmの半載竹管による平行沈線が深く施文されている。	覆土
45-157	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 黄灰色 内面 褐色	甕形土器の頸部片。器厚9mm~1.1cm。内面は丁寧な調整。外面に一部繊維痕が認められる。	巾7mmの半載竹管による平行沈線が施文されている。	住居跡北壁 寄り
45-158	頸部~ 胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 褐色 内面 ぶい褐色	甕形土器の括れ部。器厚6mm~9mmで積みあげ技法A。内面は粗い調整で一部繊維痕が認められる。	巾8mmの半載竹管による平行沈線が括れ部に施文されている。以下縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ 。施文順序は縄文→平行沈線。	廃棄第3ブロック 付近

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
45-159	頸部～ 胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 褐色 内面 にぶい橙色	甕形土器の括れ部。器厚5mm～8mmで積みあげ技法A。内面は条痕風の調整痕で一部繊維痕が認められる。	半截竹管による平行沈線が括れ部に施文されている。以下縄文施文。原体は $R\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条)と $L\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。原体交換部で菱形状・X状の交叉。	住居跡南壁付近
45-160	頸部～ 胴部片		①含繊維 ②不良 ③外面 明赤褐色 内面 明褐色	甕形土器の括れ部。器厚1cmで積みあげ技法A。内外面は荒れていて繊維痕が顕著に認められる。	巾5mmの半截竹管による平行沈線が括れ部に施文されている。以下縄文施文。原体は $R\left\{\frac{L}{L}\right\}$ と $L\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で羽状。原体交換部で菱形状か。	廃棄第3ブロック

(2)縄文のみ施文される土器群 (第38～40・46～52図)

当住居跡から出土した口縁部片261点中、文様帯をもたない縄文施文だけの土器片は186点あった。また胴部片2805点も縄文施文のみであるが、このなかには明らかに口縁部文様帯をもつ土器の胴部片も含まれている。底部片も同様である。今、両者を識別することは困難ではあるが、参考までに記せば、口縁部文様帯をもつ土器の多くは内面に徹底したミガキが行われていることを特徴としている。このため器内外面に繊維痕が顕著に認められない。一方、縄文のみ施文される土器(甕形土器を除く)の多くは内面の調整が悪く、器内外面に無数の繊維痕が認められる。識別はこの相違に注目してよい。こうした差異は、土器製作上の違いと判断するよりは、土器使用時の差異にもとづくものと理解してよいものと思われる。すなわち、口縁部文様帯をもつ一群の土器と縄文施文の甕形土器の多くは、煮沸以外の用途、たとえば貯蔵用・祭祀用に供された土器群と判断してよいのではないだろうか。一方、縄文施文の深鉢形土器の多くは、煮沸用として日々の生活に使用されていたものであろう。結果として土器の遺存状況が悪く、土器内外面に無数の繊維痕が認められることになったものと思われる。

器形は甕形(6～8)、深鉢形(9～18・23～25)があり、甕形土器はいずれも大型である。波状口縁は甕形土器(6・179(?)・243(?)・290・304・305)と小型深鉢形土器(14)にみられる。口唇部は先端先細りが最も多く、次いで丸味を呈す、平坦、外側につまみ出された様な手法、などがみられる。口縁から胴下部の成形(積みあげ技法)は圧倒的に技法Aが多い。土器内面は丁寧な調整も認められるが、概して遺存状況が悪く、器内外面に無数の繊維痕が見られる。底部は上げ底が多く平底も認められる。胴部と底部の接合は、技法AとBが多く技法Cは少なかった。本報告では便宜上、縄文原体を中心に以下のように分類した。

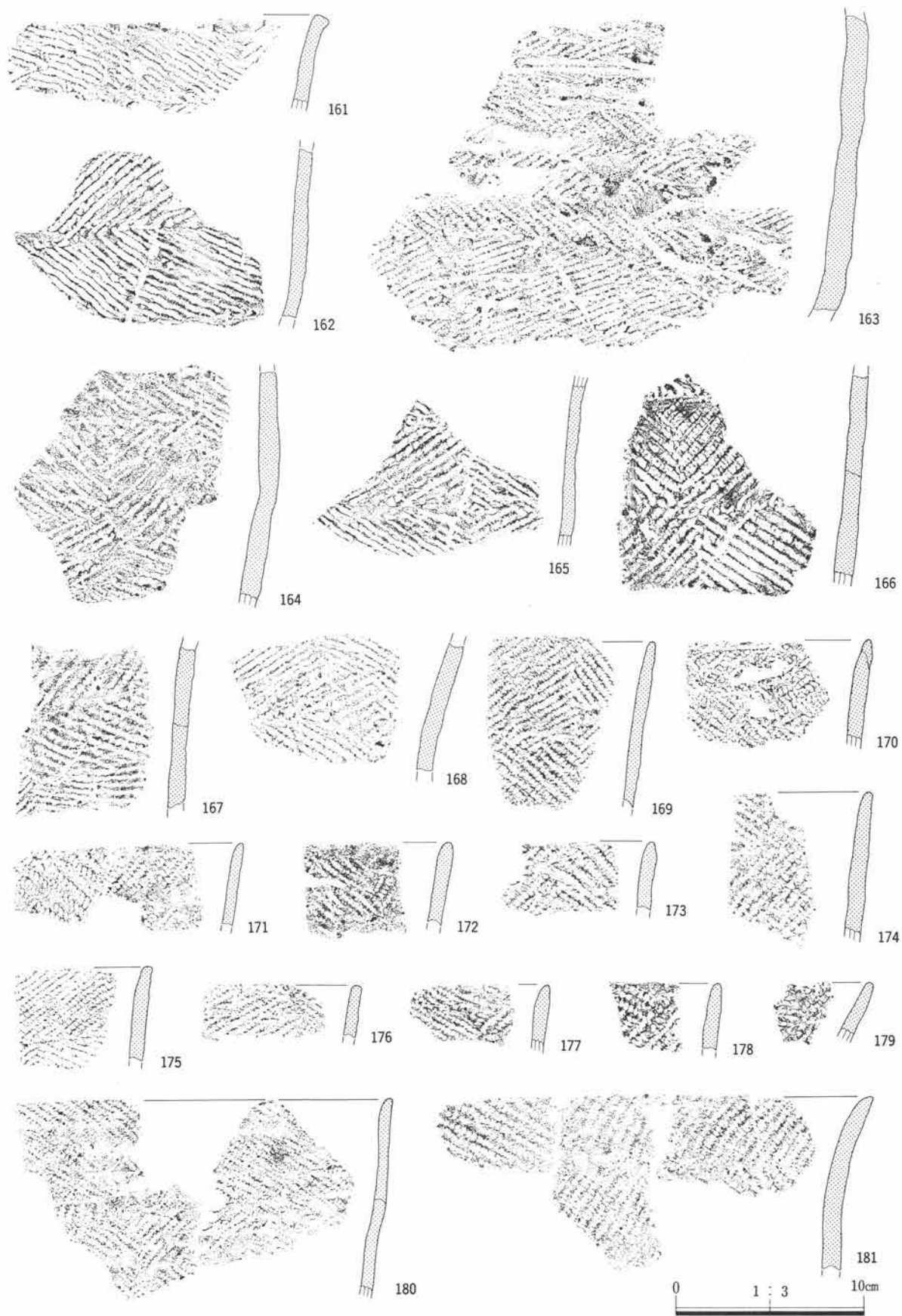
a. 羽状縄文を施文する土器

- ①無節斜縄文  $R\left\{\frac{L}{L}\right\}+L\left\{\frac{R}{R}\right\}$  (161～165・167・168)
- ②単節斜縄文  $R\left\{\frac{L}{L}\right\}+L\left\{\frac{R}{R}\right\}$  (7・9～11・14・18・166・169～240・264・320～324・327)
- ③複節斜縄文と単節斜縄文  $R\left\{\frac{L}{L}\frac{R}{R}\right\}+L\left\{\frac{R}{R}\right\}$  (241)
- ④前々段反撚  $R\left\{\frac{L}{L}\frac{L}{L}\right\}+L\left\{\frac{R}{R}\frac{R}{R}\right\}$  (8・242・243)
- ⑤附加条第1種  $R\left\{\frac{L}{L}+r\right\}+L\left\{\frac{R}{R}+r\right\}$  (24)
- $R\left\{\frac{L}{L}\right\}+L\left\{\frac{R}{R}\right\}$  (244)
- $R\left\{\frac{L}{L}\right\}+L\left\{\frac{R}{R}\right\}$  (22・25・245～250・308・317・318)

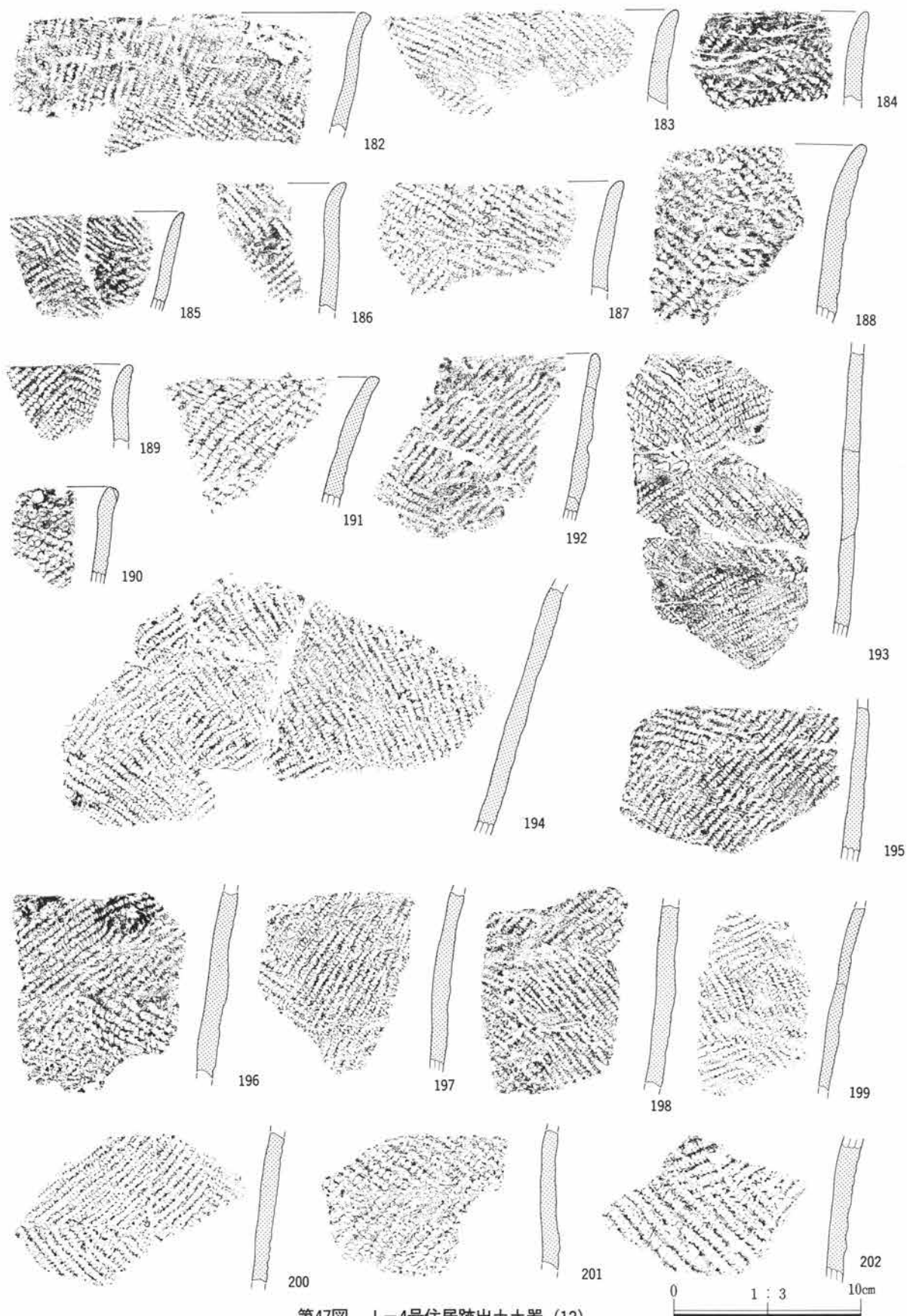
b. 斜縄文を施文する土器

- ①無節斜縄文  $R\left\{\frac{L}{L}\right\}$  (251～253)  $L\left\{\frac{R}{R}\right\}$  (254～256)
- ②単節斜縄文  $R\left\{\frac{L}{L}\right\}$  (13・17・257～263・265～279・328～334)
- $L\left\{\frac{R}{R}\right\}$  (6・12・15・16・19～21・280～303・316・335～340・342)
- ④前々段反撚  $R\left\{\frac{L}{L}\frac{L}{L}\right\}$  (341)  $L\left\{\frac{R}{R}\frac{R}{R}\right\}$  (304～307・325)
- ⑤附加条第1種  $R\left\{\frac{L}{L}+r\right\}$  (309)  $R\left\{\frac{L}{L}\right\}+R$  (326)
- $R\left\{\frac{L}{L}\right\}+R$  (23・310～312)  $R\left\{\frac{L}{L}\right\}+L$  (313)
- $R\left\{\frac{L}{L}\right\}+L$  (314・315)  $L\left\{\frac{R}{R}\right\}+R$  (319)

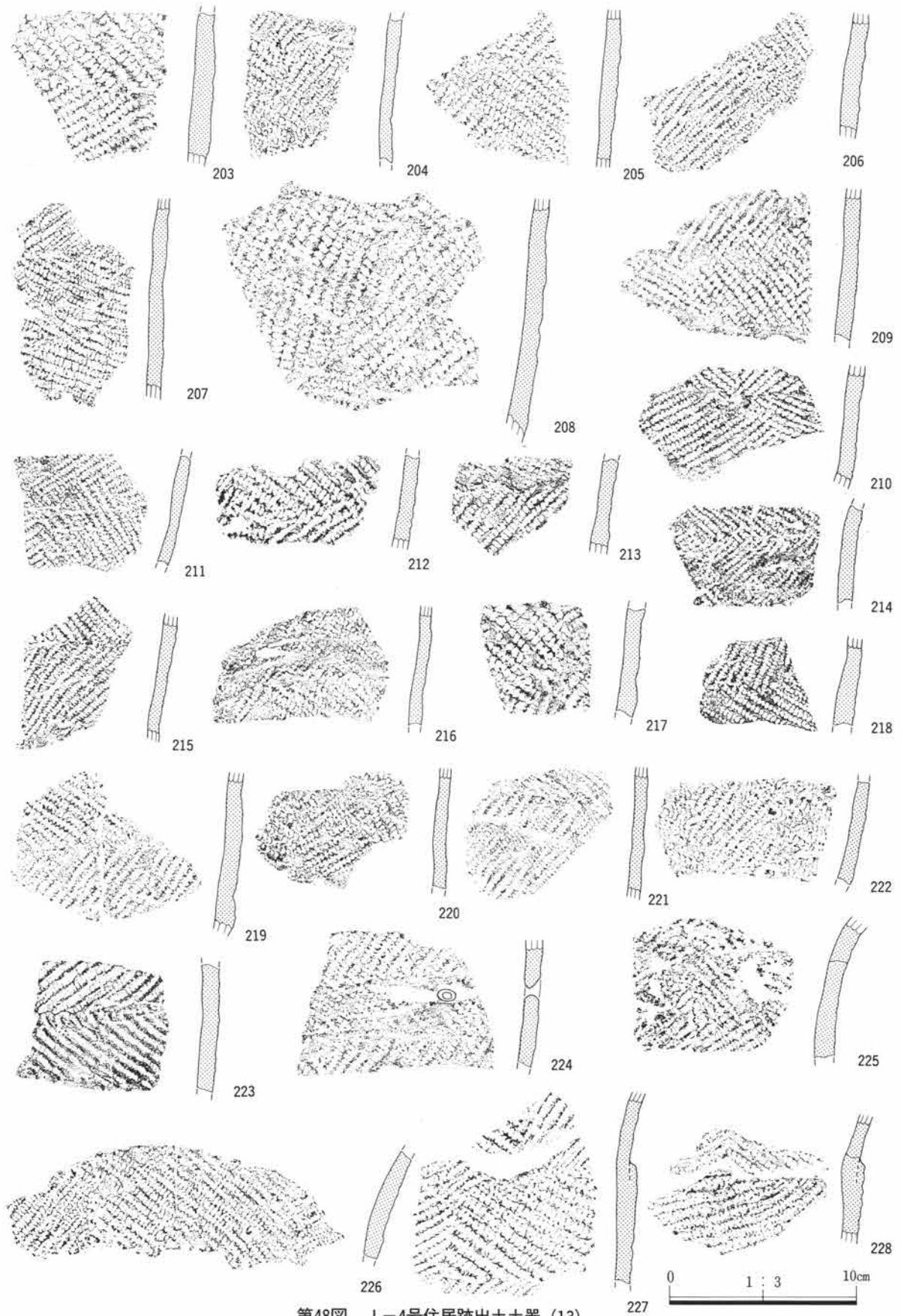
斜縄文土器の中には羽状縄文の破片もかなりの量含まれる。縄文原体は0段多条が圧倒的に多い。



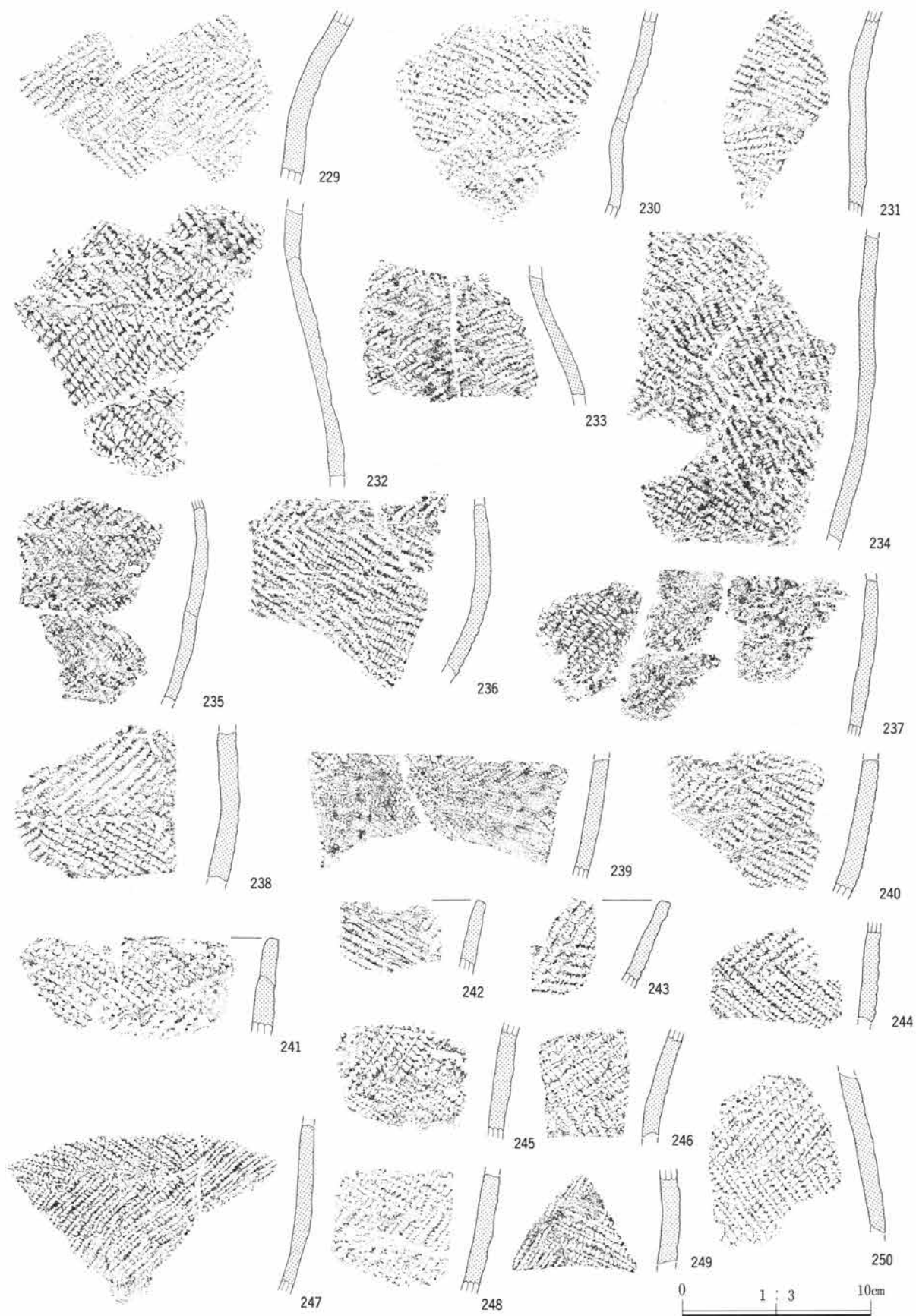
第46图 J-4号住居跡出土土器(11)



第47図 J-4号住居跡出土土器 (12)

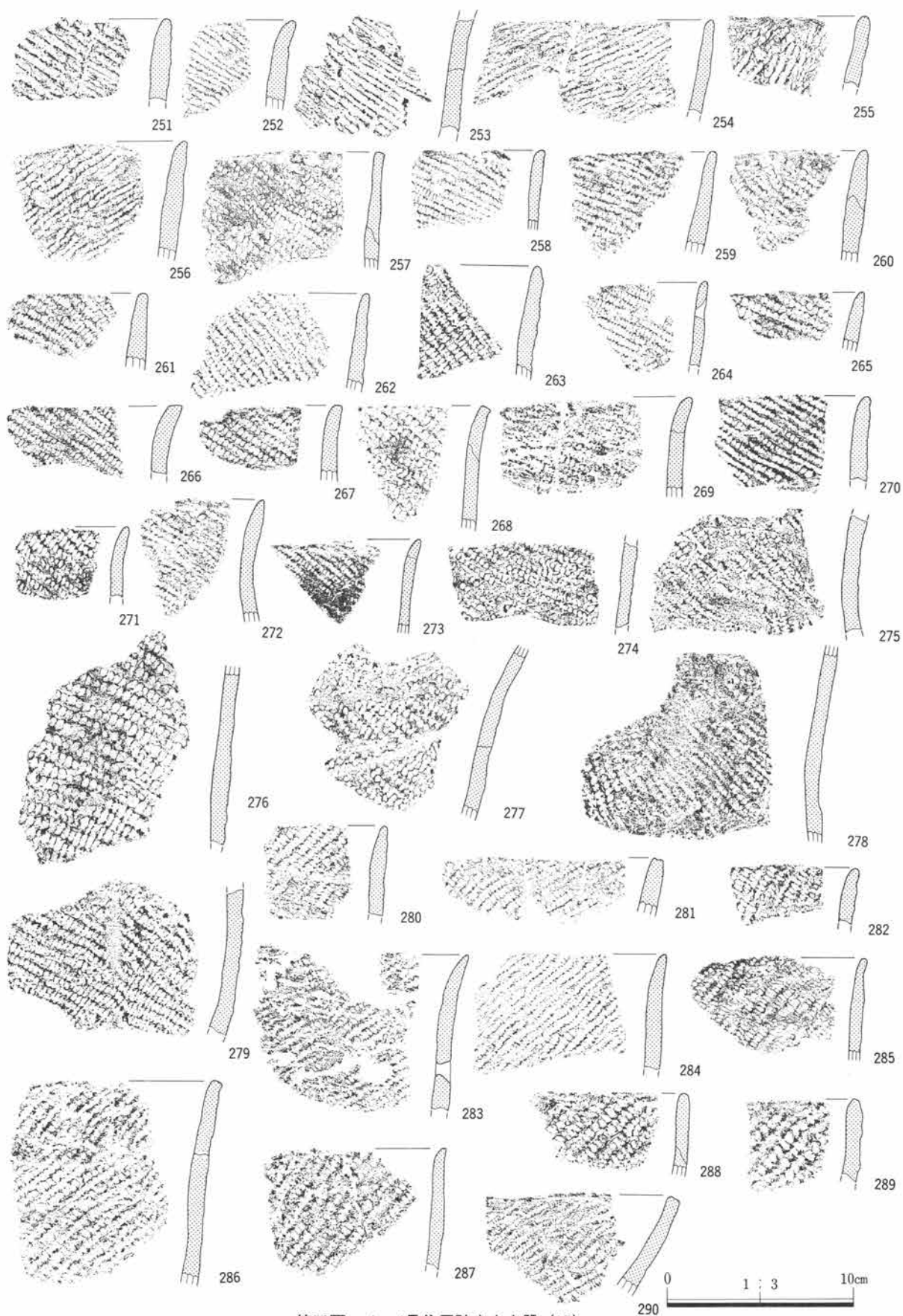


第48图 J-4号住居跡出土土器 (13)

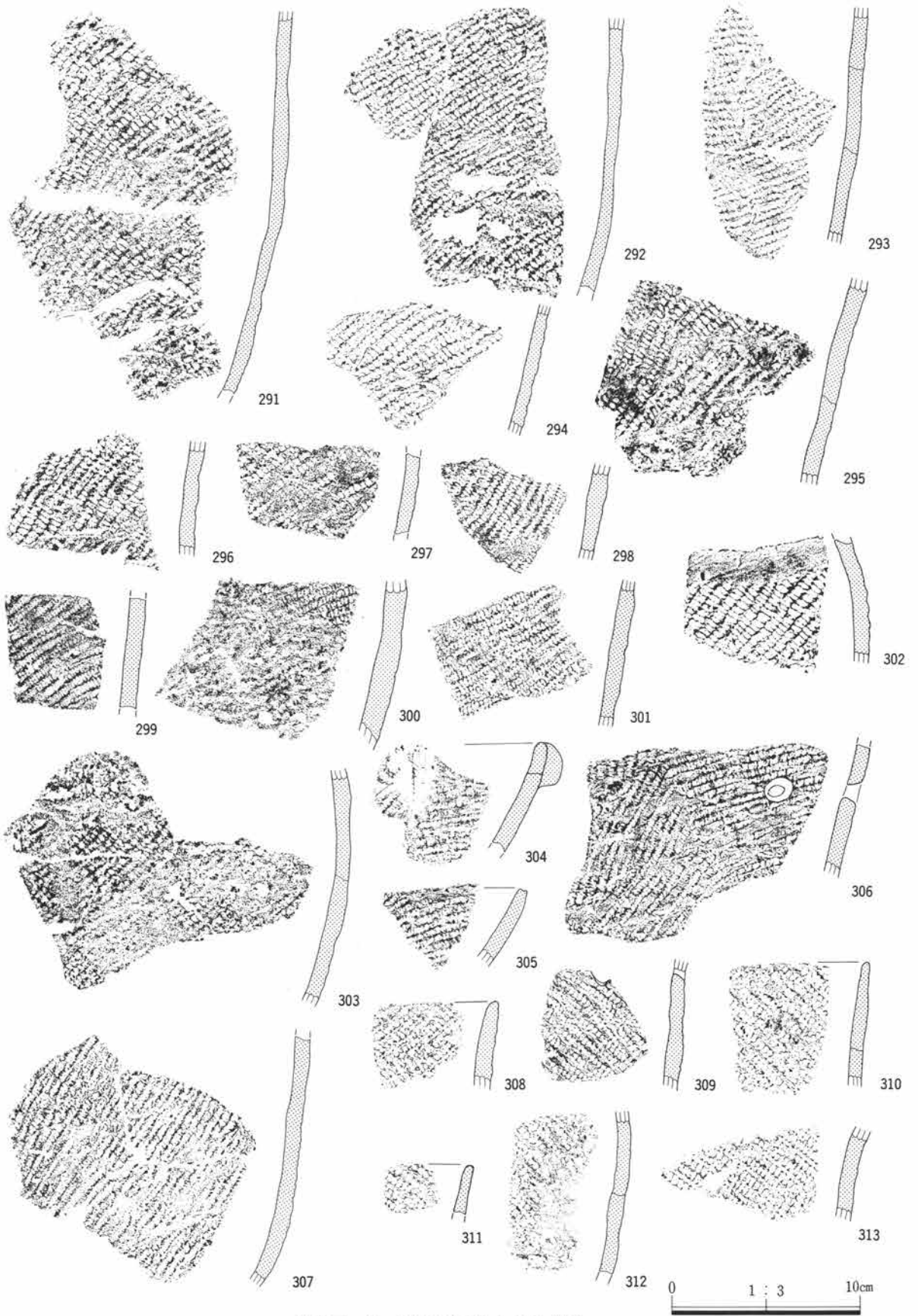


第49図 J-4号住居跡出土土器 (14)

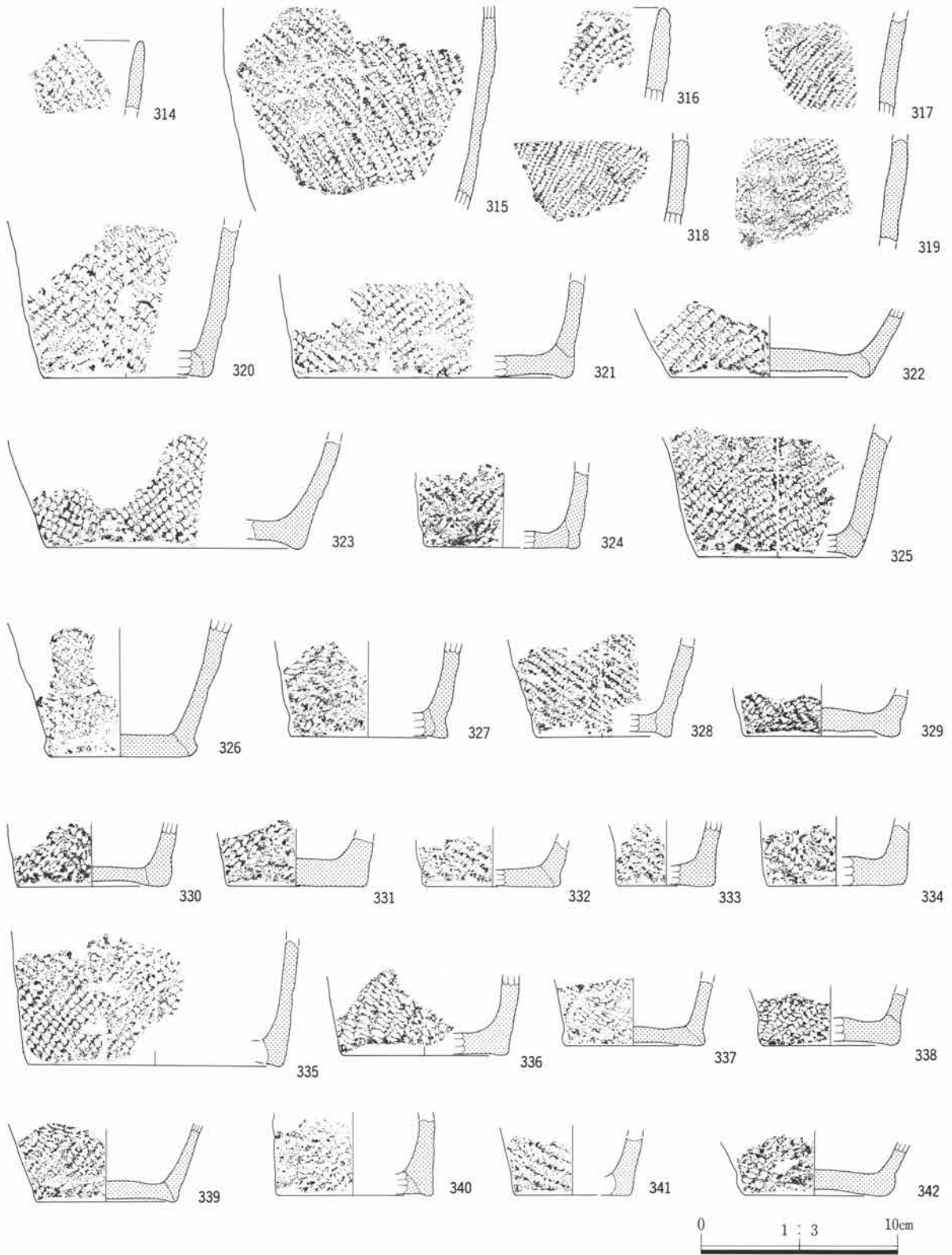




第50图 J-4号住居跡出土土器 (15)



第51図 J-4号住居跡出土土器 (16)



第52图 J-4号住居跡出土土器 (17)

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
46-161	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 ぶい黄橙色 内面 浅黄橙色	口唇部は外側につまみ出された様 になり平坦。器厚7mm。内面は横 ナデが認められる。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ とL $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ で 羽状。土器面は柔軟で押圧が強い。	住居跡南壁 付近と北壁 寄りて接合
46-162	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面ぶい黄橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mmで 積みあげ技法A。内面は乱雑なミ ガキ。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ とL $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ で 羽状。土器面は柔軟で押圧が強い。	廃棄第2ブ ロック付近
46-163	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面黒 褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚1.3cmで 積みあげ技法A。内外面は繊維痕 が顕著に認められる。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ とL $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ で 羽状。菱形状・X状を意識してい るか。	廃棄第2ブ ロック
46-164	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面に ぶい黄橙色内面褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚1cmで 積みあげ技法B。外面に繊維痕が 認められ内面は乱雑なミガキ。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ とL $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ で 羽状。原体交換部でX状の交叉。 内面に煤付着。	廃棄第2ブ ロック
46-165	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面ぶい黄橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚6mm。 外面に繊維痕が認められる。内面 に一部ミガキが認められる。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ とL $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ で 羽状。原体交換部で菱形状の交叉。 土器面は柔軟。	覆土
46-166	胴部片		①含繊維 ②不良 ③外面 ぶい黄褐色 内面 ぶい黄橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm～ 1cmで積みあげ技法A。内面は荒 れていてザラザラしている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ とL $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ で 羽状。	住居跡中央 部と東壁寄 りて接合
46-167	胴部片		①含繊維 ②不良 ③外面 橙 色 内面ぶい黄橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法AとB。内外面に繊 維痕認められ、内面荒れ著しい。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ とL $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ で 羽状。	住居跡東壁 寄り
46-168	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 橙色 内面浅黄橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mmで 積みあげ技法A。内面は繊維痕顕 著でザラザラしている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ とL $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ で 羽状。菱形状の交叉か。土器面は 柔軟で押圧が強い。	廃棄第2ブ ロック
46-169	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部 片で口唇部は先細り。器厚6mmで 積みあげ技法A。内面は丁寧な調 整。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ (0段多条)で羽状。原体 交換部で菱形状の交叉。	覆土
46-170	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面ぶい 黄橙色 内面褐灰色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部 片で口唇部は先細り。器厚5mm～ 7mm。内面はやや丁寧な調整。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ (0段多条)で羽状。	住居跡北壁 寄り
46-171	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面黒 褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部 片で口唇部は先細り。器厚5mmで 積みあげ技法A。内面に繊維痕。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ とL $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ で 羽状。	廃棄第2ブ ロック
46-172	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③ぶい 褐色 内面 褐色	深鉢形土器の外傾する口縁部片。 器厚7mmで積みあげ技法A。内面 は繊維痕がみられ荒れている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ (0段多条)で羽状。	覆土
46-173	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面極暗赤 褐色 内面暗赤褐色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部 片で口唇部は先細り。器厚7mmで 積みあげ技法A。内面横ミガキ。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ とL $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ (0 段多条)で羽状。 外面に一部煤付着。	覆土
46-174	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面灰 褐色 内面 赤褐色	深鉢形土器の外傾する口縁部片で 口唇部はやや丸味をもつ。器厚6 mm～8mm。内面はザラザラする。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ とL $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ で 羽状。	覆土
46-175	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③ 黒褐色 内面 ぶい黄橙色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部 片。器厚7mmで積みあげ技法A。 内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ とL $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ で 羽状。	廃棄第3ブ ロック

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
46-176	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 灰黄 褐色 内面 黄灰色	深鉢形土器の外傾する口縁部片。 器厚6mmで積みあげ技法A。内面 は横ミガキが認められる。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)とL(Ⅱ)で 羽状。	覆土
46-177	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面灰黄褐 色 内面にふい橙色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は 先細り。器厚7mm。内面は丁寧な 横ミガキ。外面に一部繊維痕。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)とL(Ⅱ)で 羽状。	覆土
46-178	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 ぶい赤褐色 内面 ぶい橙色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は やや丸味をもつ。器厚7mmで積み あげ技法A。内面はザラザラして いる。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)とL(Ⅱ)で 羽状。	覆土
46-179	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面黒褐色 内面 ぶい黄橙色	甕形土器の口縁部片で小突起があ る。器厚7mm。内面は丁寧な横ミ ガキ。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)とL(Ⅱ)で 羽状。 外面に一部煤付着。	覆土
46-180	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 褐灰 色 内面にふい橙色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部 片。器厚6mmで積みあげ技法A。 内面は非常に丁寧なミガキ。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)(0段多条) とL(Ⅱ)で羽状。器面に凹凸があ る。	覆土
46-181	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 橙色 内面 橙色	深鉢形土器の外反する口縁部片で 口唇部は先細り。器厚1cmで積み あげ技法A。内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)(0段多条) とL(Ⅱ)(0段多条)で羽状。	廃棄第3ブ ロック
47-182	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 ぶい黄橙色 内面 灰黄褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は 外側につまみ出された様になる。 器厚7mmで積みあげ技法A。内面 は丁寧な調整。外面は繊維痕あり。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)(0段多条) とL(Ⅱ)(0段多条)で羽状。土器 面は柔軟。	覆土
47-183	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 灰褐 色 内面 褐灰色	深鉢形土器の外反する口縁部片で 口唇部は先細り。器厚9mmで積み あげ技法A。内面横ミガキ丁寧。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)(0段多条) とL(Ⅱ)(0段多条)で羽状。	覆土
47-184	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 浅黄橙色 内面 ぶい黄橙色	深鉢形土器の外反する口縁部片で 口唇部は先細り。器厚9mmで積み あげ技法A。内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)とL(Ⅱ)で 羽状。	廃棄第3ブ ロック
47-185	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面 褐灰色	深鉢形土器の外傾する口縁部片で 口唇部は先細り。器厚6mm。 内面は縦ミガキが認められる。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)(0段多条) とL(Ⅱ)(0段多条)で羽状。	覆土
47-186	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面暗 褐色 内面灰黄褐色	深鉢形土器の口縁部片。器厚8mm で積みあげ技法A。内面はザラザ ラしている。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)(0段多条) とL(Ⅱ)(0段多条)で羽状。	覆土
47-187	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 ぶい黄褐色	深鉢形土器の外反する口縁部片で 口唇部は先細り。器厚8mmで積み あげ技法A。内面横ミガキ。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)(0段3条) とL(Ⅱ)(0段3条)で羽状。	廃棄第3ブ ロック
47-188	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面にぶい 褐色内面にぶい褐色	深鉢形土器の外反する口縁部片で 口唇部はやや丸味をもつ。器厚1 cm。内面は丁寧なミガキ。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)とL(Ⅱ)で 羽状。	覆土
47-189	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 浅黄 橙色 内面 褐灰色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は 先細り。器厚6mm~8mmで積みあ げ技法A。内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)(0段多条) とL(Ⅱ)(0段多条)で羽状。	覆土
47-190	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面 灰黄褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部に 刻目をもつ。器厚8mm。内面は丁 寧な調整。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)とL(Ⅱ)で 羽状。	覆土

図 番 PL	器 種 (部位)	法 量 (cm)	①胎土 ②焼成 (遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
47-191	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒色 内面 ぶい黄橙色	深鉢形土器の外反する口縁部片で 口唇部は平坦。器厚6mm~8mm。 内面は丁寧な横ミガキ。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	住居跡北壁 寄り
47-192	口縁部 片		①含繊維 ②不良 ③外面 ぶい黄褐色 内面 ぶい黄橙色	深鉢形土器の外傾する口縁部片で 口唇部はやや丸味をもつ。器厚6 mm~8mmで積みあげ技法A。内外 面は繊維痕顕著。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	廃棄第3ブ ロック
47-193	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面 灰黄色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法AとB。内面は丁寧 な調整。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。 原体交換部で菱形状、X状の交叉。	廃棄第2ブ ロック付近
47-194	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にぶい 黄褐色内面にぶい橙色	甕形土器の胴部片か。器厚9mmで 積みあげ技法A。内面は丁寧な縦 ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。 原体交換部で菱形状の交叉。	廃棄第3ブ ロック
47-195	胴部片		①含繊維 ②不良 ③外面 ぶい黄褐色 内面 ぶい黄褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm~ 9mmで積みあげ技法A。内面は繊 維痕顕著に認められる。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	廃棄第2ブ ロック
47-196	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 灰黄褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚1cmで 積みあげ技法A。内面はザラザラ している。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段3条)で羽状。	廃棄第3ブ ロック
47-197	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面にぶい黄褐色	深鉢形土器の胴部片か。器厚7mm ~9mmで積みあげ技法A。内面は 丁寧な縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。土器 面は柔軟で押圧が強い。	廃棄第2ブ ロック付近
47-198	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にぶい 黄褐色内面にぶい橙色	甕形土器の胴部片か。器厚9mmで 積みあげ技法A。内面は丁寧な縦 ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	住居跡南壁 付近
47-199	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面にぶい橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚6mmで 積みあげ技法AとB。内面は徹底 した横ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。 器面に凹凸がある。	覆土
47-200	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にぶい 橙色 内面暗赤褐色	甕形土器の胴部片。器厚8mmで積 みあげ技法A。内面は丁寧な縦ミ ガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段3条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。 縄の開端を別の条で縛る。	覆土
47-201	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 黒褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm~ 9mmで積みあげ技法A。内面は一 部繊維痕があり、ザラザラしてい る。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で 羽状。	廃棄第2ブ ロック
47-202	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にぶい 橙色内面にぶい黄褐色	甕形土器の胴部片か。器厚1cm。 内面は一部繊維痕が認められるが 丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。 土器面は柔軟で押圧が強い。	住居跡東壁 北側付近
48-203	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にぶい 黄褐色内面灰黄褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm~ 1.1cmで積みあげ技法A。内面は丁 寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。縄の開端を別 の条で縛る。外面に一部煤付着。	廃棄第3ブ ロック
48-204	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にぶい 橙色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mmで 積みあげ技法A。内面は一部繊維 痕が認められる。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	廃棄第2ブ ロック
48-205	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面暗赤褐 色 内面にぶい赤褐色	深鉢形土器の胴部片か。器厚6mm ~8mm。内面は非常に丁寧なミガ キが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段3条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。 縄の開端を別の条で縛る。	覆土

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
48-206	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面灰黄褐色 内面にふい橙色	甕形土器の胴部片か。器厚9mm。 内面は丁寧な縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	廃棄第2ブ ロック
48-207	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 橙色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚6mm～ 8mm。内面は丁寧な調整が行われ ている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。 外面に一部煤が付着している。	廃棄第2ブ ロック
48-208	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 灰黄褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚1cm。 内面は縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で 羽状。 内面に一部煤が付着している。	廃棄第2ブ ロック付近
48-209	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 黄橙色内面にふい黄褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法A。内面は丁寧な横 ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で 羽状。	廃棄第3ブ ロック付近
48-210	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は一部繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。 原体交換部でX状の交叉。	廃棄第2ブ ロック付近
48-211	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 灰黄 色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚6mmで 積みあげ技法A。内面は縦ミガキ が行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で 羽状。	覆土
48-212	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 明褐 色 内面 灰黄色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法A。内面は丁寧な調 整。一部繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。 土器面は柔軟。	覆土
48-213	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm～ 9mmで積みあげ技法A。内面は丁 寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。 内面は一部繊維痕が認められる。	廃棄第2ブ ロック付近
48-214	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 暗褐色 内面 褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法A。内面はザラザラ している。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	廃棄第2ブ ロック付近
48-215	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 黄橙色 内面褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm。 内面は丁寧な縦ミガキが行われて いる。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	覆土
48-216	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面暗 褐色 内面 暗褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mmで 積みあげ技法B。内面は一部繊維 痕があり、ザラザラしている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で 羽状。土器面は柔軟で押圧が強い。 外面に一部煤が付着している。	廃棄第2ブ ロック
48-217	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法A。内面は丁寧な縦 ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	覆土
48-218	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 橙色	甕形土器の胴部片。器厚8mm～1 cmで積みあげ技法B。内面は丁寧 な横ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	覆土
48-219	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 黒褐色	甕形土器の胴部片か。器厚8mm～ 1cm。内面は縦ミガキが行われて いる。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	廃棄第2ブ ロック付近
48-220	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片か。器厚6mm で積みあげ技法A。内面は丁寧な 調整が行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で 羽状。 内面に煤が付着している。	覆土

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
48-221	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 橙色内面にふい橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚6mm。 内面は横ミガキが認められる。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	覆土
48-222	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mmで 積みあげ技法A。内面は一部繊維 痕が認められる。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で 羽状。縄の開端を別の条で縛る。 内面に煤が付着している。	廃棄第2ブ ロック
48-223	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面橙 色 内面にふい橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mmで 積みあげ技法A。内面はザラザラ している。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	住居跡中央 南壁寄り
48-224	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 明赤褐色	甕形土器の胴部片か。器厚9mmで 積みあげ技法A。内面は非常に丁 寧な横ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。内外 面から径5mmの補修孔を作成。	廃棄第2ブ ロック
48-225	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 灰褐 色 内面 赤褐色	甕形土器の胴部片か。器厚1cmで 積みあげ技法B。内面は丁寧な横 ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	覆土
48-226	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面暗赤褐 色 内面 暗赤褐色	甕形土器の胴部片。器厚8mmで積 みあげ技法A。内面は非常に丁寧 な縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で 羽状。縄の開端を別の条で縛る。	住居跡南東 コーナー付 近
48-227 228	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 褐色 内面 灰白色	甕形土器の胴部片か。器厚7mm~ 1cmで積みあげ技法A。内面に一 部繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	住居跡中央 部
49-229	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐 色 内面 灰黄褐色	甕形土器の胴部片。器厚1cm。内 面は横ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	廃棄第3ブ ロック付近
49-230	胴部片		①含繊維 ②不良 ③外面 明褐色 内面 にふい褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚5mm~ 7mmで積みあげ技法A。内面は荒 れている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。土器 面は柔軟。 内面に煤が付着している。	覆土
49-231	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 褐色内面にふい黄褐色	甕形土器の胴部片か。器厚7mm~ 9mm。内面は丁寧な調整が行われ ている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	住居跡南壁 付近
49-232	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐 色 内面 暗赤褐色	甕形土器の胴部片。器厚7mm~1 cmで積みあげ技法A。内面は一部 繊維がみられるが、丁寧な調整。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段3条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	住居跡中央 部南北方向 で接合
49-233	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 灰褐色 内面 にふい黄褐色	甕形土器の胴部片か。器厚6mmで 積みあげ技法A。内面は縦・横ミ ガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で 羽状。	廃棄第1ブ ロック
49-234	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 黄褐色 内面褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法A。内面は丁寧な調 整が行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で 羽状か。	廃棄第2ブ ロック
49-235	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黄灰 色 内面にふい黄褐色	甕形土器の胴部片か。器厚7mmで 積みあげ技法A。内面は徹底した ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で 羽状。	覆土
49-236	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面明 黄褐色内面にふい黄褐色	甕形土器の胴部片。器厚6mm~8 mmで積みあげ技法A。内面は荒れ ていて繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で 羽状。	覆土



図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
49-237	胴部片		①含繊維 ②不良 ③外面 橙 色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚6mm～ 8mmで積みあげ技法A。内面はザ ラザラしている。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ )とL( $\frac{R}{R}$ )で 羽状。	廃棄第2ブ ロック
49-238	胴部片		①含繊維 ②不良 ③外面暗赤 褐色 内面にふい橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚1cmで 積みあげ技法A。内面は荒れてい て繊維痕顕著に認められる。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ )とL( $\frac{R}{R}$ )で 羽状。	住居跡南西 コーナー付 近
49-239	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 灰黄 褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法B。内面は縦ミガキ が行われている。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ )とL( $\frac{R}{R}$ )で 羽状。 条間があく。	覆土
49-240	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 褐色 内面 暗褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚1cmで 積みあげ技法B。内面は繊維痕顕 著に認められる。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ )とL( $\frac{R}{R}$ )で 羽状。	廃棄第2ブ ロック付近
49-241	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 暗褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は 平坦。器厚7mm～1.1cmで積みあげ 技法A。内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ )とL( $\frac{R}{R}$ )と L( $\frac{R}{R}$ )で羽状。	廃棄第3ブ ロック
49-242	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 黄橙色内面にふい黄橙色	深鉢形土器の外傾する口縁部片。 器厚6mm～8mm。内面は丁寧な調 整が行われている。	縄文施文。原体は前々段反撚 R( $\frac{L}{L}$ )とL( $\frac{R}{R}$ )で羽状。	覆土
49-243	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐 色 内面 褐色	甕形土器の波状口縁部片か。口唇 部は平坦。器厚7mm。内面は丁寧 な横ミガキが行われている。	縄文施文。原体は前々段反撚 R( $\frac{L}{L}$ )とL( $\frac{R}{R}$ )で羽状。	覆土
49-244	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 極暗赤褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm～ 9mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体は附加条第1種 R( $\frac{L}{L}$ +L)とL( $\frac{R}{R}$ )で羽状。	覆土
49-245	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 内面にふい黄橙色 内面 内面にふい黄橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は丁寧な調整が行われてい る。	縄文施文。原体は附加条第1種 R( $\frac{L}{L}$ +L)とL( $\frac{R}{R}$ +R)で羽状。	廃棄第1ブ ロック
49-246	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法B。内面は一部繊維 痕がありザラザラしている。	縄文施文。原体は附加条第1種 R( $\frac{L}{L}$ +L)とL( $\frac{R}{R}$ +R)で羽状。	廃棄第3ブ ロック
49-247	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 橙色 内面にふい褐色	甕形土器の胴部片か。器厚6mm～ 8mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な横・縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体は附加条第1種 R( $\frac{L}{L}$ +L)とL( $\frac{R}{R}$ +R)で羽状。	廃棄第3ブ ロック付近
49-248	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐 色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mmで 積みあげ技法A。内面は丁寧な調 整が行われている。	縄文施文。原体は附加条第1種 R( $\frac{L}{L}$ +L)とL( $\frac{R}{R}$ +R)で羽状。	廃棄第2ブ ロック付近
49-249	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面にふい橙色	甕形土器の胴部片か。器厚1cmで 積みあげ技法B。内面は丁寧な縦 ミガキが行われている。	縄文施文。原体は附加条第1種 R( $\frac{L}{L}$ +L)とL( $\frac{R}{R}$ +R)で羽状。	覆土
49-250	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 褐色 内面にふい橙色	甕形土器の胴部片か。器厚8mmで 積みあげ技法A。内面は丁寧な調 整が行われている。	縄文施文。原体は附加条第1種 R( $\frac{L}{L}$ +L)とL( $\frac{R}{R}$ +R)で羽状。	覆土
50-251	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 内面にふい黄橙色 内面 内面にふい褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は 先細り。器厚7mm～1cmで積みあ げ技法A。内面は丁寧な調整が行 われている。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ )。粘土の移 動による畝状の隆起がある。	住居跡東壁 北側寄り

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
50-252	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 におい黄橙色 内面 におい黄橙色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は 先細り。器厚7mm~1cm。内面は 丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ 。	覆土
50-253	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 明赤 褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm~ 1cmで積みあげ技法B。内面は縦 ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ 。一部粘土 の移動による畝状の隆起がある。	覆土
50-254	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 暗褐色 内面 褐色	深鉢形土器のやや内彎する口縁部 片。器厚5mm~7mmで積みあげ技 法A。内外面に繊維痕がある。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{r}{r}\right\}$ 。	廃棄第3ブ ロック
50-255	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器のやや内彎する口縁部 片で口唇部は丸味をもつ。器厚8 mmで積みあげ技法A。内面はザラ ザラしている。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{r}{r}\right\}$ 。 土器面は柔軟。	覆土
50-256	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 浅黄 橙色 内面 褐灰色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部 片で口唇部は先細り。器厚7mm~ 1cm。内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{r}{r}\right\}$ 。	覆土
50-257	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 暗赤 褐色 内面 赤褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は 平坦。器厚5mm~8mmで積みあげ 技法A。内面に一部繊維痕ある。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ 。 条間があく。	覆土
50-258	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面に おい赤褐色内面褐灰色	深鉢形土器のほぼ直立する口縁部 片。器厚5mm。内面はザラザラし ている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ (0段3 条)。	廃棄第3ブ ロック
50-259	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 灰褐 色 内面ににおい黄橙色	深鉢形土器の外傾する口縁部片で 口唇部は先細り。器厚5mm~9mm。 内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ 。	覆土
50-260	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 暗褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部 片で口唇部は先細り。器厚7mm~ 1cmで積みあげ技法A。内面はザ ラザラしている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ 。	覆土
50-261	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐 色 内面 黒褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は 丸味をもつ。器厚6mm~1cm。内 面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ (0段多 条)。	廃棄第3ブ ロック
50-262	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 におい黄褐色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部 片で口唇部は先細り。器厚5mm~ 7mm。内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ (0段多 条)。	覆土
50-263	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面 褐灰色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部 片で口唇部は先細り。器厚7mm~ 9mm。内面は横ミガキ。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ (0段多 条)。	廃棄第1ブ ロック
50-264	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面 黒褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は 内傾する。器厚5mmで積みあげ技 法A。内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で羽状。径4mmの補修孔を 内外面から作成している。	覆土
50-265	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 におい褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は 先細り。器厚5mm~8mm。内面は 丁寧な横ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ 。	廃棄第3ブ ロック
50-266	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面におい 橙色 内面ににおい橙色	甕形土器の口縁部片か。口唇部は 平坦。器厚9mmで積みあげ技法A。 内面は非常に丁寧な横ミガキ。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{1}\right\}$ 。	覆土

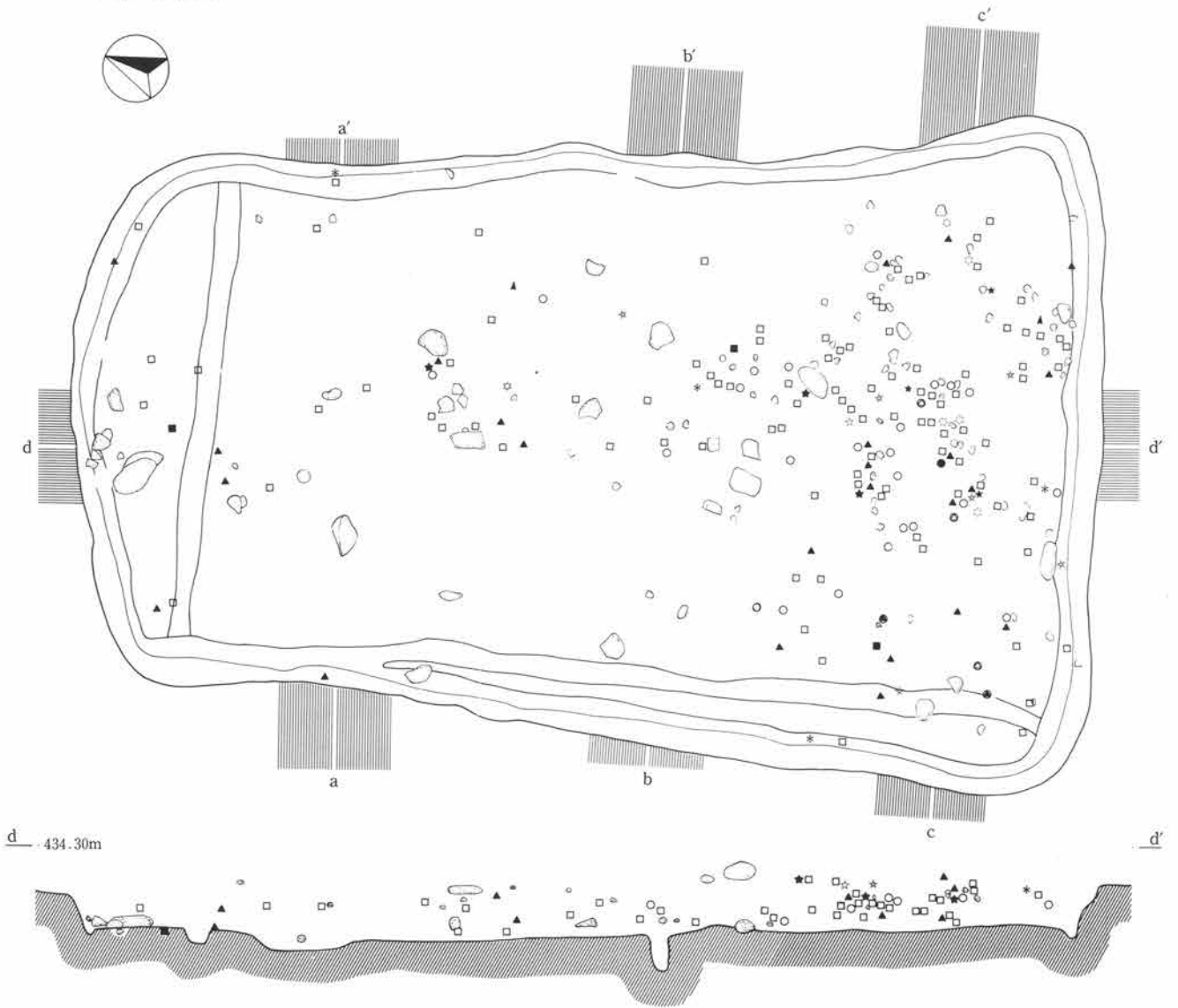
図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
50-267	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 黄橙色 内面褐灰色	深鉢形土器の外反する口縁部片で 口唇部はやや平坦。器厚6mm~9 mm。内面は丁寧な横ミガキ。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)。	覆土
50-268	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 橙色	深鉢形土器のやや外反する口縁部 片で口唇部は平坦。器厚7mmで積 みあげ技法A。内面丁寧な調整。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)。 土器面は柔軟。	廃棄第2ブ ロック付近
50-269	口縁部 片		①含繊維 ②不良 ③外面 暗 褐色 内面 褐色	深鉢形土器のやや外反する口縁部 片。器厚6mm~8mmで積みあげ技 法A。内面は繊維痕認められる。	縄文施文。外面は荒れていて観察 が不十分であるが、原体はR(Ⅰ)と 思われる。	廃棄第2ブ ロック付近
50-270	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面に ふい黄橙色内面浅黄橙	深鉢形土器のほぼ直立する口縁部 片。器厚6mm~9mmで積みあげ技 法A。内面はザラザラしている。	縄文施文。原体はR(Ⅰ) (0段多 条)。	廃棄第2ブ ロック
50-271	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 黒褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器のやや外反する口縁部 片で口唇部は先細り。器厚5mm~ 7mmで積みあげ技法A。内面は荒 れている。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)。	覆土
50-272	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面にふい褐色	深鉢形土器の外反する口縁部片で 口唇部は先細り。内面は丁寧な調 整が行われている。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)。	覆土
50-273	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 褐灰 色 内面にふい黄橙色	深鉢形土器のやや外反する口縁部 片。器厚5mmで積みあげ技法A。 内面は徹底した横ミガキ。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)。	覆土
50-274	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐 色 内面にふい黄橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mmで 積みあげ技法AとB。内面は丁寧 な横ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)。 土器面は柔軟。	廃棄第3ブ ロック
50-275	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 赤褐色	甕形土器の胴部片か。器厚9mmで 積みあげ技法A。内面は縦ミガキ が行われている。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)。	住居跡東壁 北側寄り
50-276	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 暗赤 褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm~ 9mmで積みあげ技法A。内面はや や丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)と0段多条 のR(Ⅰ)。 内面に一部煤が付着している。	廃棄第2ブ ロック
50-277	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 暗赤褐色	甕形土器の胴部片か。器厚6mm~ 8mmで積みあげ技法B。内面は徹 底した縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)。	住居跡西壁 付近
50-278	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 明褐色 内面 黒褐色	甕形土器の胴部片か。器厚8mm。 内面は丁寧な調整が行われてい る。外面に一部繊維痕が認められ る。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)。 内面に一部煤が付着している。	住居跡東壁 北側寄り
50-279	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐 色 内面 褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法AとB。内面に一部 繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR(Ⅰ) (0段多 条)。	廃棄第2ブ ロック
50-280	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面 暗赤褐色	深鉢形土器のほぼ直立する口縁部 片で口唇部は先細り。器厚4mm~ 8mm。内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体はL(Ⅱ) (0段多 条)。	覆土
50-281	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 褐灰色 内面 黒褐色	甕形土器の口縁部片か。口唇部は 内外面から粘土を盛り上げて一本 の沈線を巡らせる様な手法。器厚 7mm~1cm。内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体はL(Ⅱ) (0段多 条)。	廃棄第3ブ ロック

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
50-282	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面黒 褐色 内面灰黄褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は やや丸味をもつ。器厚5mm~7mmで 積みあげ技法A。内面はザラザラ。	縄文施文。原体はL/R (0段多 条)。 外面に一部煤が付着している。	覆土
50-283	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 におい 橙色 内面 におい 橙色	深鉢形土器の外反する口縁部片で 口唇部は先細り。器厚4mm~9mm で積みあげ技法A。外面は繊維痕 顕著。	縄文施文。原体はL/R。 内外面から径5mmの補修孔を作成 している。	覆土
50-284	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐 色 内面ににおい 橙色	深鉢形土器のやや外反する口縁部 片で口唇部は先細り。内面は丁寧 な縦・横ミガキが行われている。	縄文施文。原体はL/R (0段多 条)。	廃棄第2ブ ロック付近
50-285	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 淡黄 色 内面ににおい 黄褐色	深鉢形土器の口縁部片。器厚4mm ~6mm。内面は徹底した横・縦ミ ガキが行われている。	縄文施文。原体はL/R。	廃棄第3ブ ロック
50-286	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面 暗赤褐色	深鉢形土器の外傾する口縁部片で 口唇部は平坦。器厚7mm~9mmで 積みあげ技法A。内面丁寧な調整。	縄文施文。原体はL/R。	廃棄第3ブ ロック
50-287	口縁部 片		①含繊維 ②不良 ③外面 黒褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は 先細り。器厚7mmで積みあげ技法 A。内外面ザラザラ。また外面は 繊維痕顕著。	縄文施文。原体はL/R。	住居跡西壁 寄り
50-288	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 におい 黄褐色	深鉢形土器のほぼ直立する口縁部 片で口唇部は丸味をもつ。器厚6 mmで積みあげ技法A。内面は丁寧 な調整。	縄文施文。原体はL/R。	廃棄第2ブ ロック
50-289	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 褐色 内面 におい 黄褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は やや丸味をもつ。器厚8mmで積み あげ技法A。外面は繊維痕顕著。	縄文施文。原体はL/R。	廃棄第2ブ ロック付近
50-290	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黄褐 色 内面ににおい 黄褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部 は平坦。器厚7mm~9mm。内面は徹 底した横ミガキが行われている。	縄文施文。原体はL/R (0段多 条)。	覆土
51-291	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚5mm~ 8mmで積みあげ技法A。内面は丁寧 な調整が行われている。	縄文施文。原体はL/R (0段多 条)。	住居跡中央 部東西方向 に接合
51-292	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 黒褐色 内面 におい 褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mmで 積みあげ技法A。内面は非常に丁寧 な調整が行われている。外面は 荒れている。	縄文施文。原体はL/R (0段多 条)。 外面に一部煤が付着している。	廃棄第2・ 第3ブロッ クで接合
51-293	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面ににおい 橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法A。内面は横・縦ミ ガキが行われている。	縄文施文。原体はL/R (0段多条)。 一部粘土の移動による畝状の隆起 がある。	廃棄第2ブ ロック付近
51-294	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 暗赤 褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚6mm。 内面は縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体はL/R (0段3 条)。	住居跡南壁 付近
51-295	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 灰褐 色 内面 黒褐色	甕形土器の胴部片か。器厚9mmで 積みあげ技法A。内面は徹底した 縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体はL/R (0段多 条)。 土器面は柔軟で押圧が強い。	覆土
51-296	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐 色 内面 暗褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は丁寧な調整。外面に一部繊 維痕が認められる。	縄文施文。原体はL/R (0段多 条)。	住居跡中央 部

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
51-297	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 灰褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mmで積みあげ技法AとB。内面は縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体はL(R/R)。	廃棄第3ブロック付近
51-298	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 橙色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm~1cm。内面は丁寧な調整。一部繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はL(R/R) (0段多条)。	廃棄第3ブロック付近
51-299	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 黄橙色内面にふい黄橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mmで積みあげ技法A。内面はザラザラしている。	縄文施文。原体はL(R/R) (0段多条)。	覆土
51-300	胴部片		①含繊維 ②不良 ③外面 褐色 内面にふい黄褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚1cm~1.2cm。内外面荒れていて、外面は繊維痕が顕著である。	縄文施文。原体はL(R/R) (0段多条)。 内面に一部煤が付着している。	廃棄第1ブロック
51-301	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 橙色 内面にふい橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm~9mm。内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はL(R/R) (0段多条)。 土器面は柔軟で押圧が強い。 外面に一部煤が付着。	覆土
51-302	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 橙色 内面にふい橙色	甕形土器の胴部片。器厚8mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整。一部繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はL(R/R) (0段多条)。	廃棄第3ブロック
51-303	胴部片		①含繊維 ②不良 ③外面 黒褐色 内面 褐色	甕形土器の胴部片。器厚7mm~9mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整。外面は荒れていて繊維痕顕著。	縄文施文。原体はL(R/R)。	廃棄第2ブロック付近
51-304	口縁部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 黄橙色 内面灰黄褐色	甕形土器の波状口縁部片で波頂部に小突起が見られる。器厚8mmで積みあげ技法A。内面横ミガキ。	縄文施文。原体は前々段反撚 L(R/R/R)か。	廃棄第3ブロック付近
51-305	口縁部片		①含繊維 ②良 ③外面 灰黄褐色 内面 黄褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は沈線を巡らせる様な手法。器厚6mm~8mm。内面は徹底した横ミガキ。	縄文施文。原体は前々段反撚 L(R/R/R)か。	覆土
51-306	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黄褐色 内面 黄褐色	甕形土器の胴部片か。器厚8mmで積みあげ技法A。内面は徹底した横ミガキが行われている。	縄文施文。原体は前々段反撚 L(R/R/R) 径7mmの補修孔が外面から作成されている。	覆土
51-307	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面暗 褐色 内面にふい黄褐色	甕形土器の胴部片か。器厚8mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体は前々段反撚 L(R/R/R)。	住居跡中央東壁寄り
51-308	口縁部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器のやや外反する口縁部片で口唇部は先細り。器厚7mm~9mm。内面は徹底した横ミガキ。	縄文施文。原体は附加条第1種 R(L/L)+LとL(R/R)+Rで羽状。	廃棄第3ブロック
51-309	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐色 内面 褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm~9mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体は附加条第1種 R(L/L)+r。 外面から補修孔が作成されている。	覆土
51-310 311	口縁部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 橙色 内面 褐灰色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部片。器厚4mm~7mmで積みあげ技法A。内面は徹底した横ミガキ。	縄文施文。原体は附加条第1種 R(L/L)+R。	廃棄第2ブロック
51-312	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 褐灰色 内面 暗褐色	310・311と同一個体。深鉢形土器の胴部片。器厚7mmで積みあげ技法A。内面は縦ミガキ。	縄文施文。原体は附加条第1種 R(L/L)+R。	廃棄第2ブロック

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
51-313	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 褐色 内面にふい黄褐色	甕形土器の胴部片か。器厚8mm。 内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体は附加条第1種 $R\left\{\frac{L}{L}+L\right\}$ 。	覆土
52-314	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 黄褐色内面にふい黄褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は 先細り。器厚5mm~7mmで積みあ げ技法A。内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体は附加条第1種 $R\left\{\frac{L}{L}+\frac{L}{L}\right\}$ 。	覆土
52-315	胴部片	④(13.8)	①含繊維 ②良 ③外面にふい 黄褐色内面灰黄褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚6mm。 内面は徹底した縦ミガキが行われ ている。	縄文施文。原体は附加条第1種 $R\left\{\frac{L}{L}+\frac{L}{L}\right\}$ 。	覆土
52-316	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面黒 褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は 先細り。器厚7mm~1cm。内面は ザラザラしている。	縄文施文。原体は $L\left\{\frac{R}{R}\right\}$ 。	覆土
52-317	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 灰褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法B。内面は丁寧な調 整が行われている。	縄文施文。原体は附加条第1種 $R\left\{\frac{L}{L}+L\right\}$ と $L\left\{\frac{R}{R}+R\right\}$ で羽状か。 内面に一部煤が付着している。	覆土
52-318	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 にふい橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法B。内面は縦ミガキ が行われている。	縄文施文。原体は附加条第1種 $R\left\{\frac{L}{L}+L\right\}$ と $L\left\{\frac{R}{R}+R\right\}$ で羽状か。	覆土
52-319	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 橙色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mmで 積みあげ技法AとB。内面は丁寧 な調整が行われている。	縄文施文。原体は附加条第1種 $L\left\{\frac{R}{R}+R\right\}$ 。	覆土
52-320	底部片	⑤ 8.2	①含繊維 ②やや良 ③外面に ふい黄褐色内面褐灰色	上げ底。器厚7mm~1.1cmで接合技 法B。内外面は繊維痕顕著であり、 底面はミガキが行われている。	縄文施文。原体は $R\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) と $L\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)でX状に交叉。	住居跡中央 部付近
52-321	底部片	⑤(13.8)	①含繊維 ②やや良 ③外面褐 色 内面にふい黄褐色	上げ底で垂直に近く立ち上がる。 器厚7mm~9mmで接合技法C。内 面は繊維痕見られ、底面はミガキ。	縄文施文。原体は $R\left\{\frac{L}{L}\right\}$ と $L\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で 羽状。	廃棄第3ブ ロック付近
52-322	底部片	⑤ 10.0	①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 にふい黄褐色	上げ底でかなり開きながら立ち上 がる。器厚8mm~1.1cmで接合技法 B。内面は繊維痕あり、底面は徹 底したミガキ。	縄文施文。原体は $R\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) と $L\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	廃棄第2ブ ロック
52-323	底部片	⑤(13.0)	①含繊維 ②やや良 ③外面 にふい黄褐色 内面 にふい黄褐色	上げ底でかなり開きながら立ち上 がる。器厚7mm~1cmで接合技法 A。内面に繊維痕が見られる。	縄文施文。原体は $R\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) と $L\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	廃棄第3ブ ロック付近
52-324	底部片	⑤( 7.8)	①含繊維 ②良 ③外面 にふい橙色 内面 にふい橙色	平底で垂直に近く立ち上がる。器 厚7mm~1cmで接合技法A。内 面・底面は徹底したミガキが行わ れている。	縄文施文。原体は $R\left\{\frac{L}{L}\right\}$ と $L\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で 羽状。	覆土
52-325	底部片	⑤( 8.0)	①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 黒褐色	上げ底で開いて立ち上がる。器厚 9mmで接合技法C。内面は丁寧な 調整。底面は徹底したミガキ。	縄文施文。原体は前々段反撚 $L\left\{\frac{R}{R}\right\}$ $R\left\{\frac{R}{R}\right\}$	覆土
52-326	底部片	⑤ 7.0	①含繊維 ②不良 ③外面 暗赤褐色 内面 褐灰色	平底でかなり開いて立ち上がる。 器厚7mm~1.1cmで接合技法B。内 面は荒れ、底面はミガキが行われ ている。	縄文施文。原体は附加条第1種 $R\left\{\frac{L}{L}+R\right\}$ 。	廃棄第2・ 第3ブロッ クで接合
52-327	底部片	⑤( 7.8)	①含繊維 ②やや良 ③外面に ふい黄褐色内面褐灰色	上げ底で垂直に近く立ち上がる。 器厚7mm~1.2cmで接合技法A。内 面・底面は丁寧な調整。	縄文施文。原体は $R\left\{\frac{L}{L}\right\}$ と $L\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で 羽状。	住居跡北壁 付近

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
52-328	底部片	⑤(7.0)	①含繊維 ②やや良 ③外面に ぶい橙色内面にぶい橙色	上げ底で開いて立ち上がる。器厚 8mmで接合技法A。内面の調整悪 い。底面はミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多 条)。	覆土
52-329	底部片	⑤ 7.8	①含繊維 ②良 ③外面にぶい 黄橙色内面にぶい橙色	上げ底。器厚9mm~1.2cm。内面は 繊維痕顕著。底面はよくミガキが 行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多 条)。	住居跡中央 東壁寄り
52-330	底部片	⑤(7.5)	①含繊維 ②やや良 ③外面橙 色 内面にぶい橙色	上げ底で垂直に近く立ち上がる。 器厚8mmで接合技法A。内面は繊 維痕顕著。底面は徹底したミガキ。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ 。	覆土
52-331	底部片	⑤ 7.0	①含繊維 ②良 ③外面にぶい 黄橙色内面にぶい黄褐色	平底。器厚1.1cm~1.3cm。内面は 荒れていて、底面は徹底したミガ キが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ 。	廃棄第1ブ ロック
52-332	底部片	⑤(6.8)	①含繊維 ②やや良 ③外面 橙色 内面 黒褐色	平底。器厚9mmで接合技法B。内 面は荒れていて、底面は徹底した ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ 。	廃棄第2ブ ロック
52-333	底部片	⑤(4.8)	①含繊維 ②やや良 ③外面 橙色 内面 黒褐色	平底で垂直に近く立ち上がる。器 厚8mm~1cm。内面は荒れていて、 底面は徹底したミガキが行われて いる。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ 。	覆土
52-334	底部片	⑤(7.0)	①含繊維 ②やや良 ③外面 にぶい 橙色 内面 浅黄橙	平底で垂直に近く立ち上がる。器 厚9mm~1.5cm。内面は荒れてい て、底面は徹底したミガキが行わ れている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ 。	覆土
52-335	底部片	⑤(12.8)	①含繊維 ②やや良 ③外面 にぶい黄褐色 内面 にぶい黄褐色	上げ底で垂直に近く立ち上がる。 器厚7mm~1.3cmで接合技法A。内 面はやや丁寧な調整が行われてい る。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多 条)。	廃棄第3ブ ロック付近
52-336	底部片	⑤(8.2)	①含繊維 ②良 ③外面 赤褐 色 内面 黒褐色	上げ底で垂直に近く立ち上がる。 器厚1cm。内面はザラザラし、底面 は徹底したミガキが行われている。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段3 条)。	覆土
52-337	底部片	⑤ 7.0	①含繊維 ②良 ③外面にぶい 黄褐色内面にぶい黄褐色	上げ底で開いて立ち上がる。器厚 7mmで接合技法B。内面は丁寧な 調整。底面は徹底したミガキ。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ 。	覆土
52-338	底部片	⑤ 6.8	①含繊維 ②やや良 ③外面赤 褐色 内面 黒褐色	上げ底。器厚6mm~1.1cmで接合技 法C。内面は荒れていて、底面は ミガキが行われている。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ 。	覆土
52-339	底部片	⑤ 7.0	①含繊維 ②良 ③外面にぶい 赤褐色 内面灰褐色	上げ底でかなり開きながら立ち上 がる。器厚5mm~9mmで接合技法 B。内面・底面は丁寧な調整。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多 条)。	覆土
52-340	底部片	⑤(7.8)	①含繊維 ②良 ③外面にぶい 黄褐色 内面褐灰色	上げ底で垂直に近く立ち上がる。 器厚8mm~1.1cmで接合技法B。内 面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ 。	覆土
52-341	底部片	⑤(6.0)	①含繊維 ②良 ③外面暗赤褐 色 内面にぶい橙色	平底。器厚8mm~1.1cmで接合技法 A。内面・底面は丁寧な調整が行 われている。	縄文施文。原体は前々段反撚 R $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ 。	廃棄第3ブ ロック
52-342	底部片	⑤(7.0)	①含繊維 ②不良 ③外面明赤 褐色 内面 褐灰色	上げ底でかなり開いて立ち上 がる。器厚6mm~1.1cm。内面は荒れ ていて底面はザラザラ。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ 。	廃棄第3ブ ロック

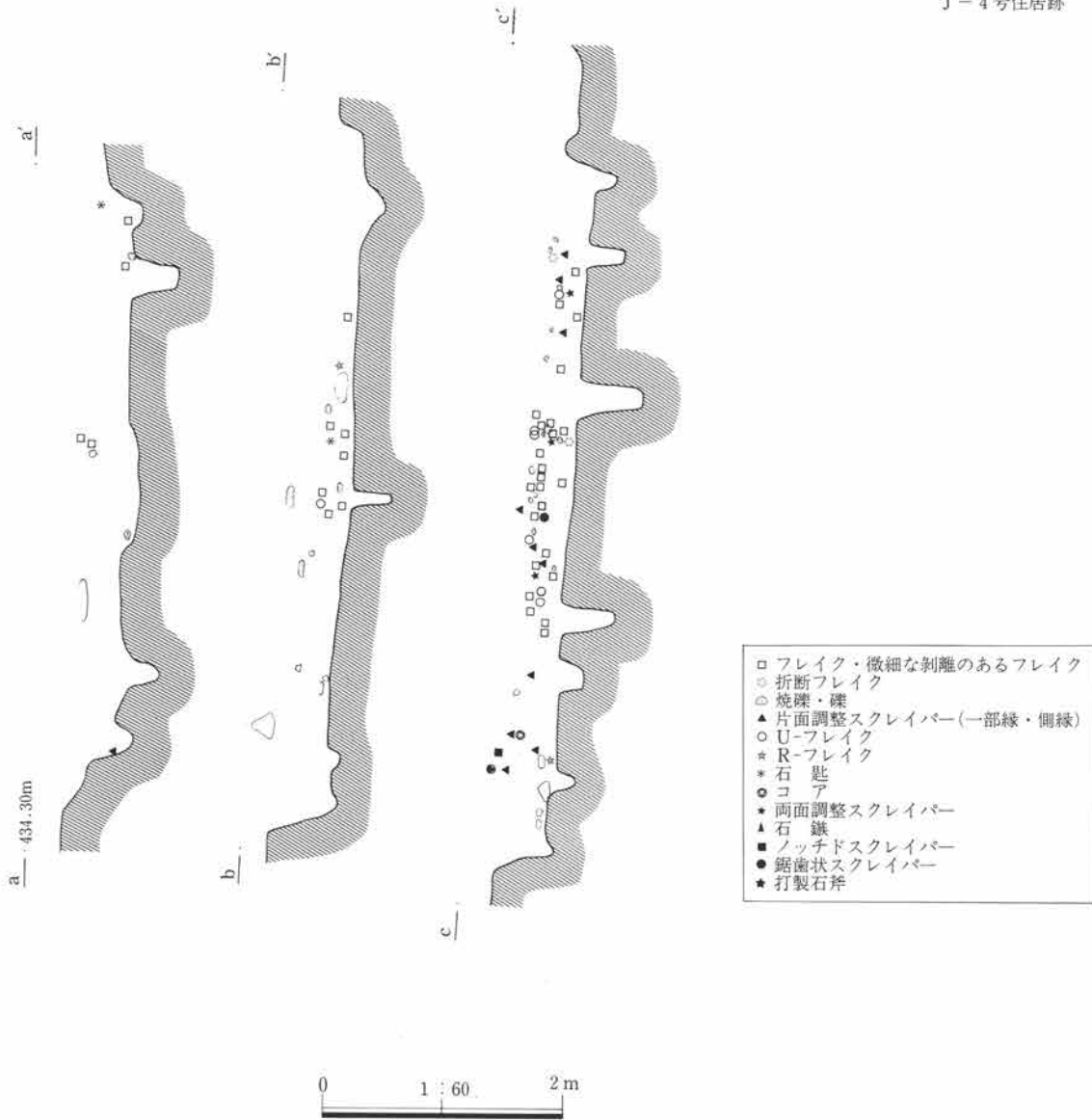


第53図 J-4号住居跡石器（器種別）出土状況

〔II〕石器類（第54～58図、PL.47）

J-4号住居跡からは土器とともに多量の石器・礫等が出土している。このうち、焼礫・礫とコア・フレイク・チップをのぞく加工された石器や明らかに使用された痕跡のある石器（磨石類等）は、343点を数える。内訳は、石鏃9点、石匙20点、ドリル5点、ピース・エスキュー13点、打製石斧6点、磨製石斧1点、エンド・スクレイパー1点、鋸歯状スクレイパー7点、両面調整スクレイパー11点、片面調整スクレイパー67点、礫器4点、R-フレイク31点、U-フレイク45点、折断フレイク108点、凹石4点、磨石2点、敲石1点、丸石1点である。そしてコア16点、フレイク（チップを含む）1110点、焼礫74点、礫73点が併せて出土し、総計1616点を数えた。この1616点を石材別に検討すると、1424点が黒色頁岩であり、88%の圧倒的多数を占めている。次いで安山岩40点で2.5%、黒色安山岩19点で1.2%、黒曜石16点で1.0%、石英閃緑岩16点・1.0%、流紋岩質凝灰岩15点・0.9%、頁岩13点・0.8%、石英安山岩10点・0.6%、チャート9点・0.6%となっている。この他にも多数の石材が認められるが、その数は少ない。器種別の石材を検討すると、やはり黒色頁岩が各器種のなかで圧倒的多数を占めるが、石鏃ではこの他に流紋岩質凝灰岩、チャート、珪質頁岩、緑色凝灰岩など多数の石材が使用されている。また凹石・磨石・敲石では、石英安山岩、玢岩、凝灰質砂岩、石英

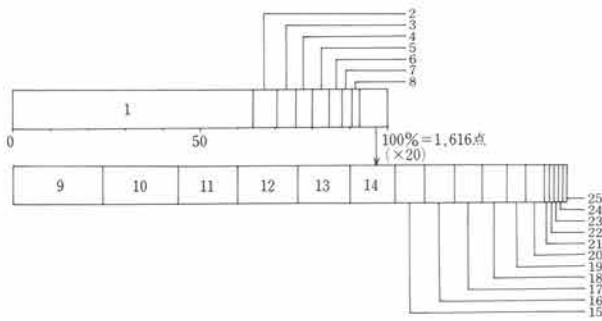




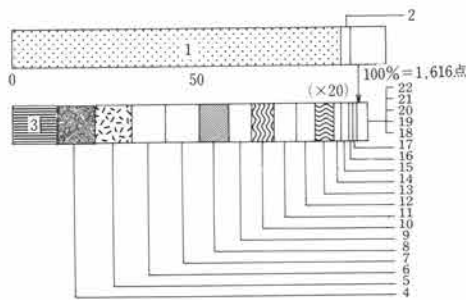
閃緑岩などの石材が選択されている。詳細は、第54・55図の器種別・石材別グラフを参照していただきたい。

なお、当住居跡出土の黒曜石16点（いずれもフレイク）中、7点を熱中性子放射化分析による原産地推定を依頼した結果、1点が神津島・砂糖崎産、4点が信州・星ヶ塔産、2点が信州和田峠産であった（4章〔2〕黒曜石分析参照）。神津島・砂糖崎産が検出されたことは注目されるものであろう。

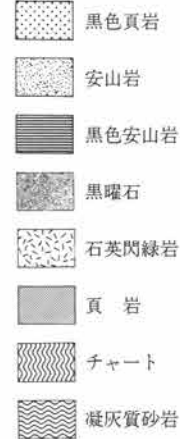
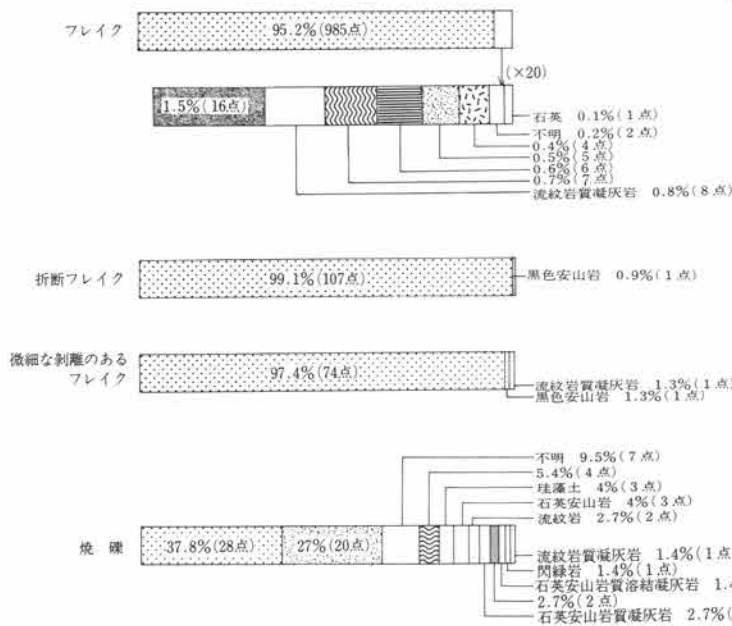
1616点にのぼる石器・礫等の出土状況は第53図に示した。住居廃絶後の凹地に廃棄もしくは流入した様子を読みとることができるが、土器の分布状況とあわせ検討すると、石器の出土状況は土器のそれと様相を異にしている様である。すなわち第31図で示した土器の廃棄第1ブロック～廃棄第3ブロックの狭まに石器の分布状況を把握できる。これは土器の廃棄とは場所を異にした結果であり、また廃棄の時間差に起因するものとも考えられる。



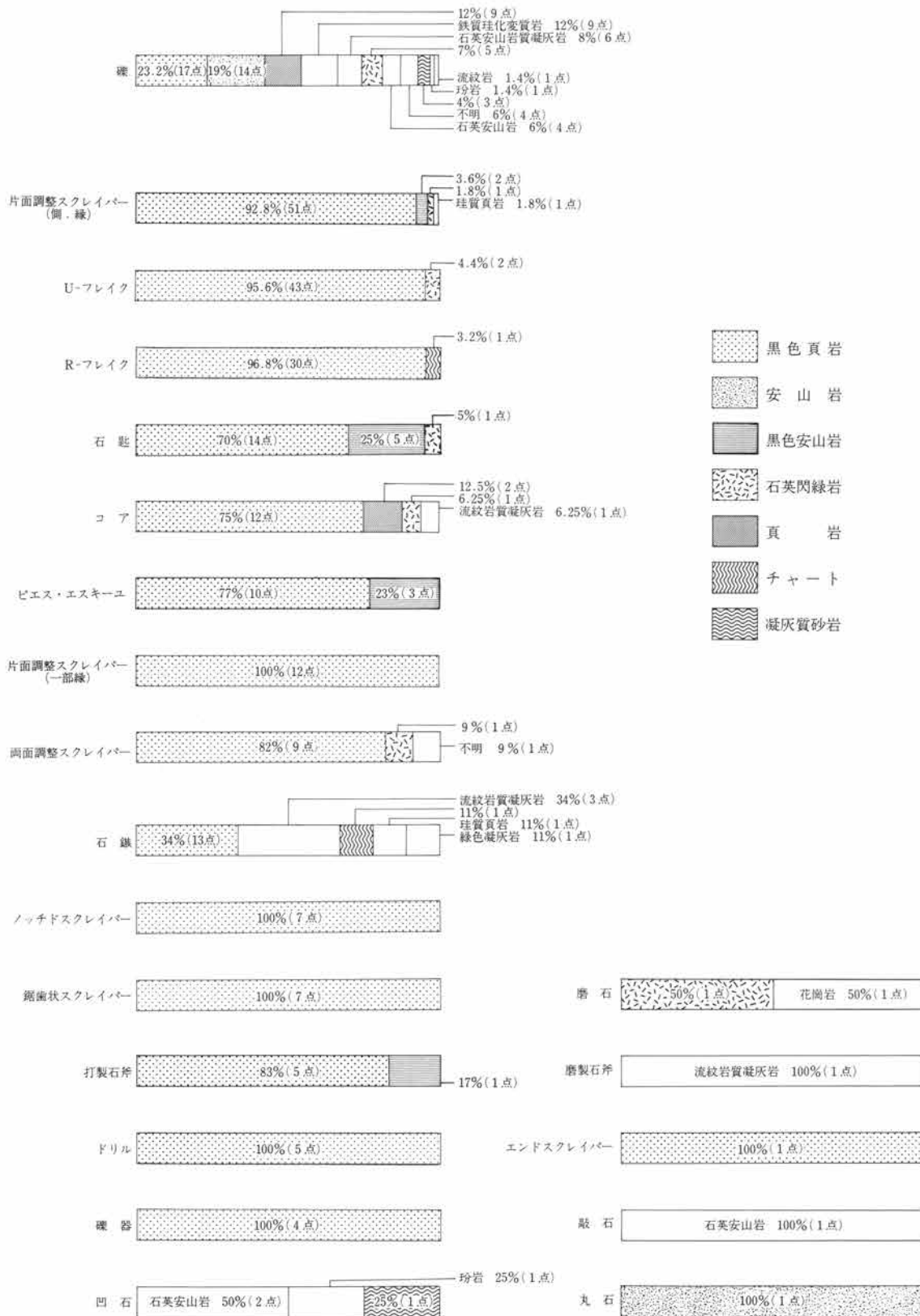
種別	種	%	点
1	フレイク	64.0	1,034
2	折断フレイク	6.7	108
3	微細な刻痕のあるフレイク	4.7	76
4	焼 礫	4.6	74
5	礫	4.5	73
6	片面調整スクレイパー(側縁)	3.4	55
7	U-フレイク	2.8	45
8	R-フレイク	1.9	31
9	石 匙	1.2	20
10	コ ア	1.0	16
11	ピエス・エスキュー	0.8	13
12	片面調整スクレイパー(一部縁)	0.8	12
13	両面調整スクレイパー	0.7	11
14	石 鏃	0.6	9
15	ノッチドスクレイパー	0.4	7
16	鋸歯状スクレイパー	0.4	7
17	打製石斧	0.4	6
18	ドリル	0.3	5
19	礫 器	0.23	4
20	凹 石	0.23	4
21	磨 石	0.1	2
22	磨製石斧	0.06	1
23	エンドスクレイパー	0.06	1
24	丸 石	0.06	1
25	敲 石	0.06	1
		100.00	1,616



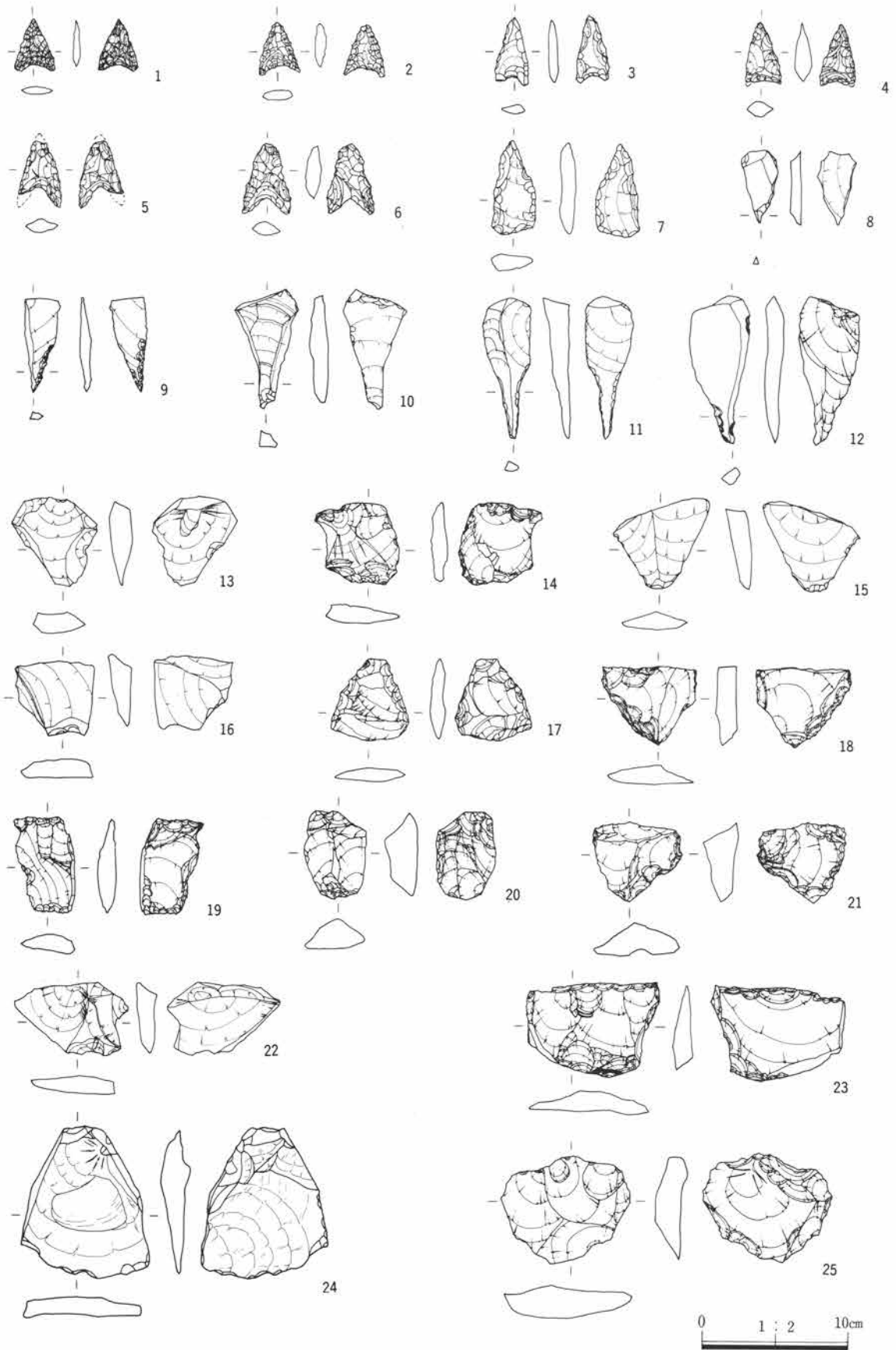
種別	材	%	点
1	黒色頁岩	88.0	1,424
2	安山岩	2.5	40
3	黒色安山岩	1.2	19
4	黒曜石	1.0	16
5	石英閃緑岩	1.0	16
6	流紋岩質凝灰岩	0.9	15
7	不 明	0.9	14
8	頁 岩	0.8	13
9	石英安山岩	0.6	10
10	チャート	0.6	9
11	鉄質珪化変質岩	0.6	9
12	石英安山岩質凝灰岩	0.5	8
13	凝灰質砂岩	0.5	8
14	珪藻土	0.2	3
15	流紋岩	0.2	3
16	珪 岩	0.1	2
17	珪質頁岩	0.1	2
18	石英安山岩質溶結凝灰岩	0.06	1
19	緑色凝灰岩	0.06	1
20	閃緑岩	0.06	1
21	花崗岩	0.06	1
22	石 英	0.06	1
		100.00	1,616



第54図 J-4号住居跡出土石器の器種別・石材別グラフ (1)



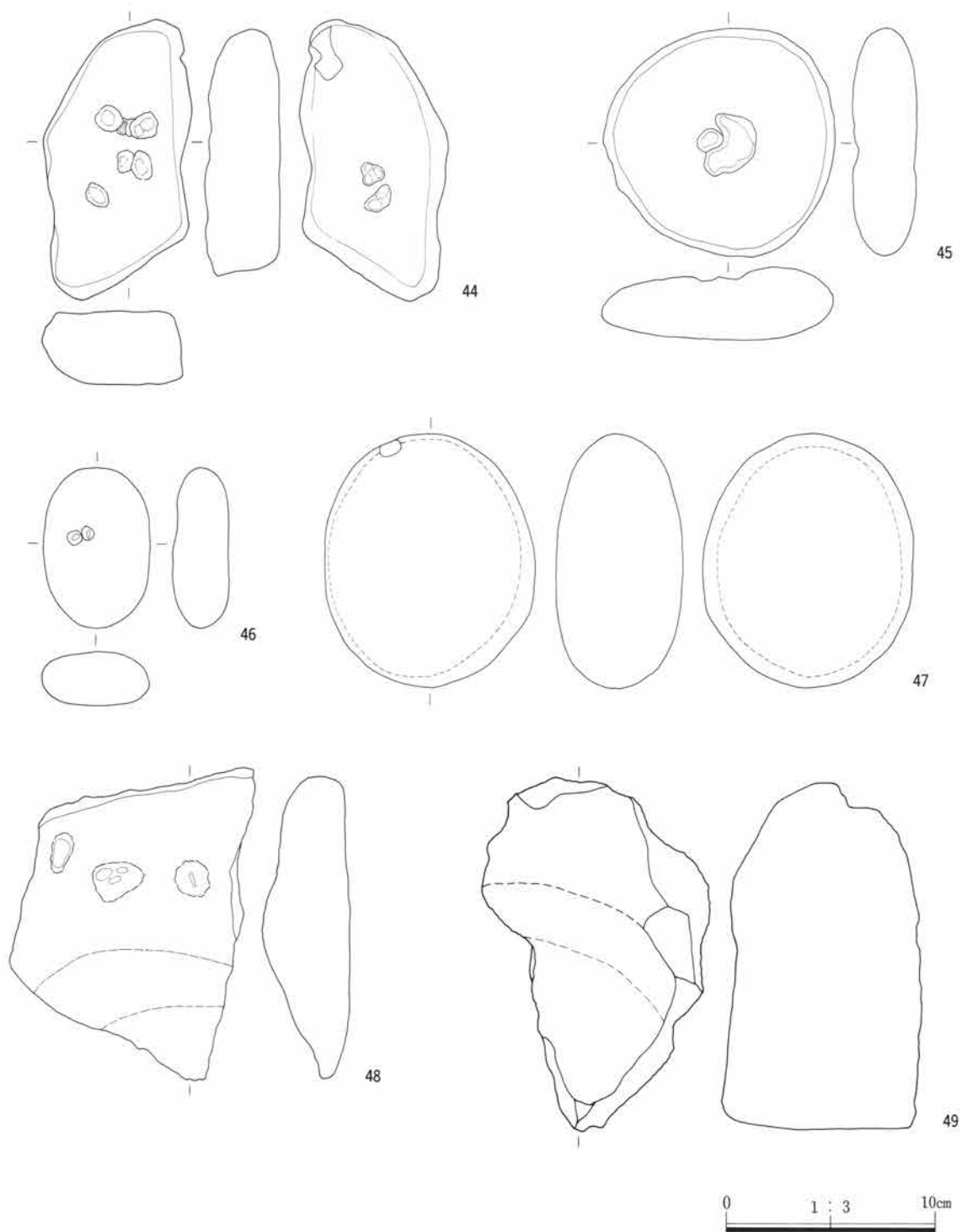
第55図 J-4号住居跡出土石器の器種別・石材別グラフ (2)



第56図 J-4号住居跡出土石器 (1)



第57图 J-4号住居跡出土石器(2)



第58図 J-4号住居跡出土石器 (3)

J-4号住居跡石器一覧表

(単位はcmおよびg、( )内は現存値)

図番 PL.	器種	遺存状況	石材	計測値				備考	出土状況
				全長	最大幅	最大厚	重量		
56-1 PL. 47	石 鏃	完 形	流紋岩質凝灰岩	1.8	1.4	0.2	0.3	側縁はほぼ直線をなし、基部の扱りは逆U字形をなす。	覆 土
56-2 PL. 47	石 鏃	完 形	珪質頁岩	1.8	1.5	0.4	0.7	"	覆 土
56-3 PL. 47	石 鏃	完 形	黒色頁岩	2.3	0.7	0.3	0.7	"	覆 土
56-4 PL. 47	石 鏃	完 形	黒色頁岩	2.1	1.2	0.6	1.0	"	覆 土
56-5 PL. 47	石 鏃	先端・脚部欠	流紋岩質凝灰岩	(2.3)	(1.5)	0.5	(0.7)	側縁は中央部で外側に彎曲し、基部の扱りは深く逆V字形。	覆 土
56-6 PL. 47	石 鏃	先端欠	流紋岩質凝灰岩	(2.4)	1.6	0.5	(0.8)	側面は中央部で内側に彎曲し、基部の扱りは逆V字形。	廃棄第3ブロック
56-7 PL. 47	石 鏃	完 形	緑色凝灰岩	3.1	1.4	0.5	1.8	側縁はほぼ直線をなし、基部の扱りはない。	覆 土
56-8 PL. 47	ドリル	完 形	黒色頁岩	2.5	1.2	0.4	1.3	小さな剥片を素材とし、一端を錐状に加工。	覆 土
56-9 PL. 47	ドリル	完 形	黒色頁岩	3.2	1.2	0.4	9.1	"	覆 土
56-10 PL. 47	ドリル	完 形	黒色頁岩	3.7	2.2	0.6	4.5	"	覆 土
56-11 PL. 47	ドリル	完 形	黒色頁岩	4.8	1.6	0.9	4.6	"	覆 土
56-12 PL. 47	ドリル	完 形	黒色頁岩	5.0	2.1	0.6	5.8	"	覆 土
56-13 PL. 47	ピエス・エスキーユ	完 形	黒色頁岩	2.9	2.9	0.7	6.8	縦長剥片を素材とし、調整加工は右側縁にみられる。	覆 土
56-14 PL. 47	ピエス・エスキーユ	完 形	黒色頁岩	2.7	2.5	0.6	3.1	縦長剥片を素材とし、上下両端に剥離痕がみられる。	覆 土
56-15 PL. 47	ピエス・エスキーユ	上半部欠	黒色安山岩	(2.7)	2.9	0.7	(5.7)	縦長剥片を素材とし、上半部欠損。下端に小剥離痕ある。	覆 土
56-16 PL. 47	ピエス・エスキーユ	完 形	黒色頁岩	2.5	2.7	0.7	6.5	横長剥片を素材とし、下端に剥離痕がみられる。	覆 土
56-17 PL. 47	石 鏃	完 形	黒色頁岩	2.8	2.8	0.5	3.2	両側縁はほぼ直線をなし、基部はゆるい孤状をなす。	覆 土
56-18 PL. 47	ピエス・エスキーユ	上半部欠	黒色安山岩	(2.7)	3.2	0.7	(6.6)	上半部欠損。下端は尖頭状を呈し、左側縁に小剥離痕。	覆 土
56-19 PL. 47	ピエス・エスキーユ	完 形	黒色頁岩	3.2	2.0	0.6	4.8	横長剥片を半分に折断。小剥離痕は上下両端にみられる。	覆 土
56-20 PL. 47	ピエス・エスキーユ	完 形	黒色頁岩	3.0	2.1	1.1	5.3	厚手の縦長剥片を素材とし、下端に小剥離痕がみられる。	覆 土
56-21 PL. 47	ピエス・エスキーユ	完 形	黒色頁岩	2.8	3.0	1.2	7.4	横長剥片を素材とし、下端に小剥離痕がみられる。	覆 土
56-22 PL. 47	ピエス・エスキーユ	上半部欠	黒色頁岩	(2.3)	3.9	0.7	(7.2)	縦長剥片を素材とし、上半部欠。下端に小剥離痕がある。	覆 土
56-23 PL. 47	ピエス・エスキーユ	完 形	黒色安山岩	4.5	3.0	0.7	12.3	縦長剥片を素材とし、下端は直線を呈す。	覆 土
56-24 PL. 47	片面調整スクレイパー (一部縁)	完 形	黒色頁岩	5.2	4.3	0.9	20.5	縦長剥片を素材とし、下端に刃部を有する。	覆 土
56-25 PL. 47	"	完 形	黒色頁岩	3.5	4.5	1.1	18.5	"	覆 土
57-26 PL. 47	石 匙	完 形	黒色頁岩	3.4	4.1	0.5	6.7	横型。横長剥片を素材とし、刃部は孤状を呈す。	覆 土
57-27 PL. 47	石 匙	つまみ欠	黒色頁岩	(3.6)	3.6	0.9	(7.2)	横型。縦長剥片を素材とし、刃部は直線状を呈す。	覆 土
57-28 PL. 47	石 匙	完 形	黒色頁岩	5.1	5.3	0.6	13.8	横型。縦長剥片を素材とし、刃部加工は不明確。	覆 土

図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値				備考	出土状況
				全長	最大幅	最大厚	重量		
57-29 PL. 47	石 匙	完 形	黒色頁岩	2.1	3.5	0.3	2.7	横型。縦長剥片を素材とし、刃部加工は不明確である。	覆 土
57-30 PL. 47	石 匙	完 形	黒色安山岩	2.8	3.7	0.3	5.3	横型。縦長剥片を素材とし、刃部は直線状を呈す。	覆 土
57-31 PL. 47	石 匙	下半部欠	黒色安山岩	(4.5)	3.2	0.4	(8.3)	縦型。縦長剥片を素材とし、下半部を欠損している。	覆 土
57-32 PL. 47	石 匙	完 形	黒色頁岩	4.7	2.9	0.4	7.2	縦型。横長剥片を素材とし、刃部加工は不明確である。	覆 土
57-33 PL. 47	石 匙	完 形	黒色頁岩	5.6	3.2	0.6	9.4	縦型。縦長剥片を素材とし、刃部加工は不明確である。	覆 土
57-34 PL. 47	石 匙	完 形	黒色安山岩	6.6	3.5	0.7	14.0	縦型。縦長剥片を素材とし、右側縁に刃部を有する。	覆 土
57-35 PL. 47	石 匙	完 形	黒色頁岩	6.8	2.2	0.8	12.0	縦型。縦長剥片を素材とし、刃部加工は不明確である。	覆 土
57-36 PL. 47	石 匙	完 形	黒色頁岩	7.2	3.1	0.7	21.3	縦型。 "	覆 土
57-37 PL. 47	石 匙	完 形	黒色安山岩	9.0	7.0	1.2	94.9	縦型。大形の縦長剥片を素材とし、左側縁に刃部加工。	住居跡南 壁付近
57-38 PL. 47	打製石斧	基部欠	黒色頁岩	(8.8)	5.5	1.5	(91.2)	短冊形。両側縁がほぼ直線的である。	覆 土
57-39 PL. 47	打製石斧	基部欠	黒色頁岩	(7.1)	4.9	1.2	(57.6)	短冊形。 "	廃棄第2 ブロック
57-40 PL. 47	打製石斧	中間部	黒色頁岩	(6.8)	4.4	1.4	(43.3)	短冊形。 "	覆 土
57-41 PL. 47	打製石斧	刃部欠	黒色頁岩	(7.5)	4.3	1.1	(53.0)	短冊形。 "	廃棄第2 プロ付近
57-42 PL. 47	打製石斧	完 形	黒色頁岩	10.5	5.4	1.5	101.9	撥形。両側縁が内側に彎曲している。	覆 土
57-43 PL. 47	打製石斧	完 形	黒色安山岩	10.4	4.9	1.8	100.3	短冊形。両側縁がほぼ直線的である。	廃棄第1 プロ付近
58-44 PL. 47	凹 石	完 形	石英安山岩	11.6	6.8	3.6	470	器面に敲打による凹みがある。	住居跡中 央部
58-45 PL. 47	凹 石	完 形	凝灰質砂岩	10.7	11.0	2.9	540	"	住居跡北 壁
58-46 PL. 47	凹 石	完 形	石英安山岩	7.6	5.1	2.6	170	"	住居跡中 央部
58-47 PL. 47	磨 石	完 形	石英閃緑岩	12.0	10.0	6.0	1040	器面全体に磨耗痕が観察される。	廃棄第2 プロ付近
58-48 PL. 47	石 皿	断 片	安山岩	(14.1)	(10.7)	4.2	(898)	使用面が大きく凹んでいる。縁辺部に凹み。火熱を受ける。	住居跡南 西コーナ
58-49 PL. 47	石 皿	断 片	大峰溶結凝灰岩	(16.4)	(10.8)	9.0	(1700)	使用面がやや凹んでいる。	住居跡中 央部



## J-5号住居跡 (第59~64・84図、PL.8~9)

**位置** N-86・87、O-86・87・88、P-87グリッドにかけて検出された。J-4号住居跡の南約7mのところに位置する。

**経過** J-4号住居跡検出時と同様に、O-87グリッド周辺から多量の縄文土器片が出土して住居跡の存在が予想された。住居跡プランを確認するために掘り下げを行い、この間出土した遺物はグリッド単位で取り上げた。6月25日になって住居跡プラン確認し、調査を開始した。J-4号住居跡同様に、覆土から多量の遺物が出土したために、遺物出土状況図を作成しながら掘り下げを続行した。この作業はJ-4号住居跡と併行して行い、7月2日の図面作成から最後の遺物取り上げが終了したのは7月15日であった。この間、完形品、半完形品38個体を含む遺物が取り上げられた。以後、床面の精査、ピットの検出作業、炉跡の調査、周構の調査を行い、各種図面の作成、写真撮影を行った。最後に床面下の掘り下げ調査をもって、当住居跡のすべての調査を終了した。7月21日のことである。

**重複** 北壁部分で61号土坑と73号土坑と重複している。いずれの土坑も当住居跡によって壊されている。61号土坑は前期関山期の土坑、73号土坑は風倒木と思われる。

**覆土** ローム層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

第1層 黒色土層 やや固く締り粘性が少しある。ローム粒子・赤色スコリア粒子を少量含む。

第2層 暗褐色土層 やや固く締り粘性が少しある。ローム粒子・赤色スコリア粒子を含む。多量の遺物含。

No.	上	長さ×短径(cm)	深さ(cm)	備考
	下			
1		44×38cm 26×24cm	17cm	
2		25×23cm 17×16cm	15cm	
3		38×26cm 20×9cm	38cm	
4		26×24cm 16×14cm	18cm	
5		34×30cm 27×19cm	33cm	
6		30×15cm 21×8cm	13cm	
7		77×39cm 54×30cm	19cm	
8		71×45cm 60×39cm	14cm	
9		28×22cm 16×8cm	18cm	
10		64×52cm 58×38cm	10cm	
11		32×30cm 27×26cm	21cm	
12		25×24cm 21×20cm	10cm	
13		54×53cm 39×34cm	30cm	
14		51×42cm 43×32cm	19cm	
15		50×36cm 46×28cm	8cm	
16		49×47cm 42×39cm	16cm	

J-5号住居跡ピット計測表

第3層 暗褐色土層 固く締り粘性が少しある。ローム粒子・赤色スコリア粒子を少量含む。多量の遺物が出土。

第4層 黒色土層 固く締り粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子・赤色スコリア粒子を含む。多量の遺物が出土しているが、完形品も多数含まれている。

第5層 茶褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。

ローム粒子・赤色スコリア粒子・炭化物粒子を少量含む。

第6層 茶褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。大粒のロームブロック・炭化物粒子を少量含む。また多量のローム粒子・赤色スコリア粒子・白色の軽石を含む。

第7層 黄褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。多量のローム粒子からなる。

以上、覆土は7層に分層されたが、第1~5層が遺物包含層である。とりわけ完形品・半完形品は第4層から出土している。第6・7層には遺物はほとんど含まれず、無遺物層と把握できるものである。

**形状** 長辺8.62m、短辺は北壁で4.09m、中央で4.43m、南壁で5.01mの北に向って狭まる台形を呈している。J-4号住居跡の拡張前住居跡とほぼ同一の規模であるが、拡張は認められなかった。面積約32.5㎡であるから、居住人員は約9.9人となる。

**壁高** グリットラインに沿った土層ベルトから判断すると

約70cmで床面に達している。ただ、住居跡プランが確実に検出された面からでは、東壁で13~46cm、西壁で45~50cm、南壁で43~51cm、北壁で42~46cmで床面に達している。すでにグリッド調査の段階で多量の遺物が出土し、住居跡の存在が予想されたものの、住居跡のプランを明確にすることができずに掘り下げた結果、セクションと残存壁高に差がでてきたものである。本来はさらに上位の面から掘り込まれていたものであろう。いずれにしても良好な壁の残存状況である。

**床面** ほぼ平坦であり、全体的に軟弱である。踏み固められた床面はほとんど検出できなかった。

**周構** 壁際に沿って幅約8cm、深さ約5cmのU字状の周構が全周している。

**柱穴** 総計16個のピットが検出された。J-4号住居跡のピットと比較すると、いずれも極端に浅い。一番深いピットでもP<sub>3</sub>が38cmであり、この他に30cm代はP<sub>5</sub>、P<sub>13</sub>だけである。次に20cm代はP<sub>11</sub>の1個である。圧倒的に多いのが10cm代であり、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>~P<sub>10</sub>・P<sub>12</sub>・P<sub>14</sub>・P<sub>16</sub>の合計11個を数える。そして一番浅いピットがP<sub>15</sub>の8cmである。10cm代のピットが圧倒的に多く、16個のピット深度の平均は約19cmであった。各ピットの配置をみると、数は少ないが住居北半分では炉を中心とした部分に、南半分では集中して検出された。また壁に接して配置されるピットはP<sub>1</sub>とP<sub>16</sub>の2個と少なかった。これらピットの配置はJ-4号住居跡のそれと非常に酷似するものである。住居北半分では数が少なく、南半分に集中すること、そして集中するピット群は、ほぼ楕円状に密接に配置されることである。J-4号住居跡と異なるところは、ピット数の少ないこと、さらに極端に浅いことであろうか。数の少ないことは当住居跡が拡張されていないことで納得され、またJ-4号住居跡のピット深度平均46cmに対して、当住居跡のそれが約19cmであるのは、ピット規模の相違に基づくものであろうか。すなわち当住居跡のピット規模は、上面では長径50~70cm以上、底面では40~60cmに及ぶものが比較的多いものに対して、J-4号住居跡では上面で30cm代、底面では10cm代の規模のピットが圧倒的に多いという事実である。J-4号住居跡では比較的細い柱を主体として、ピットを深く掘ることによって上屋構造を安定させたのに対して、当住居跡では浅いピットに太い柱を使用する構造をとったものであろうか。

**炉** 床面を掘り窪めた地床炉である。長径94cm、短径71cm、深さ10cmの楕円形を呈し、住居北壁寄りに位置している。また北端に礫1個を配置し、約0.58㎡の面積がある。覆土は4層に分かれた。

第1層 黒褐色土層 やわらかくて粘性が少しある。焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子を少量含む。

第2層 黄褐色土層 やや固く締り粘性がある。焼土ブロック・焼土粒子を少量、ローム粒子を多量に含む。

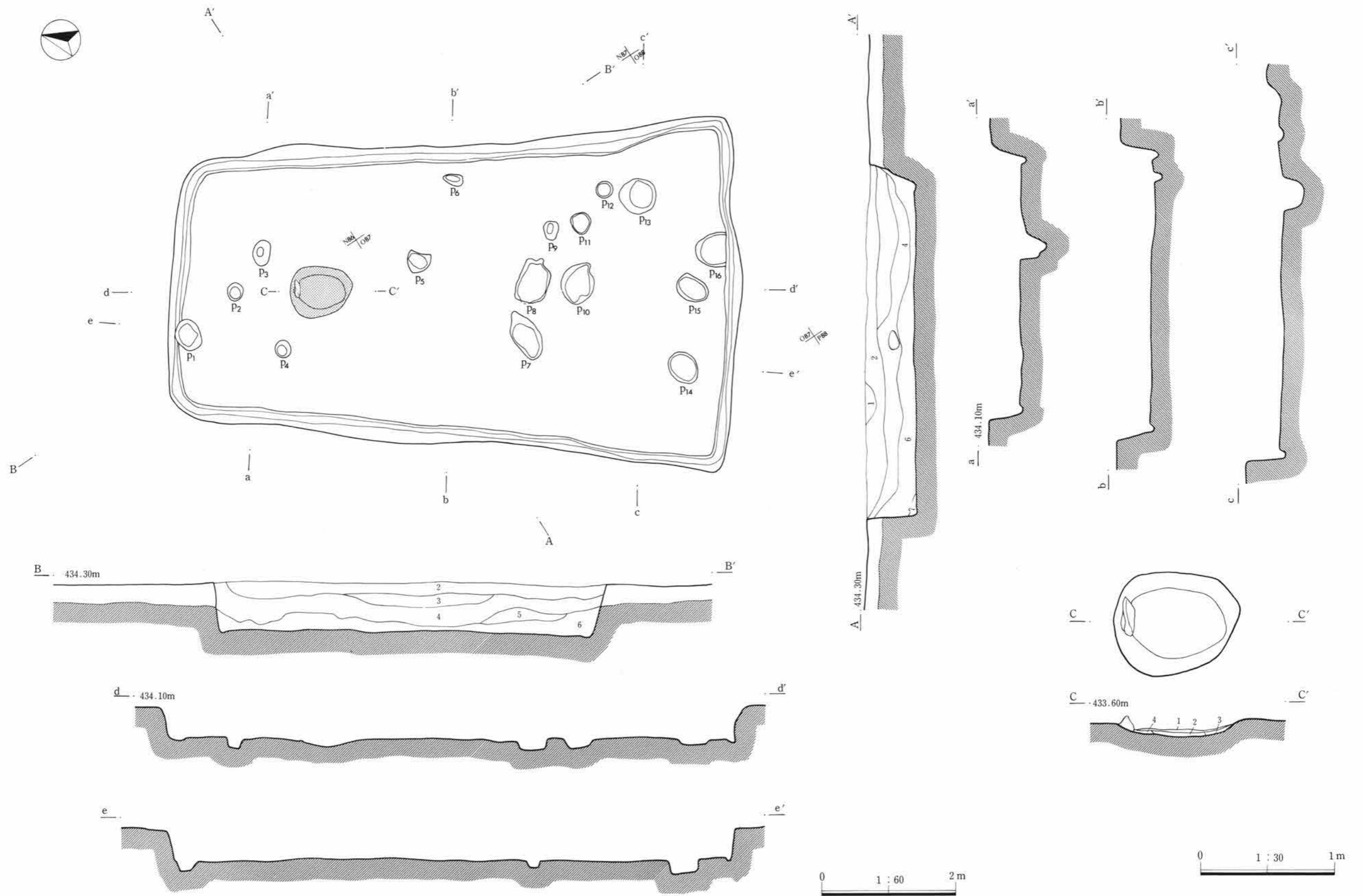
第3層 暗褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。焼土粒子・ローム粒子を含む。

第4層 黄褐色土層 やや固く締り粘性がある。ロームブロック・ローム粒子を多量に含み、わずかに黒色土を含む。

良好な残存状況であった。当住居跡と同時期集落を構成すると考えられるJ-4号住居跡に炉が検出できなかったのは不可解であるが、J-4号住居跡の拡張前住居が当住居跡と同一規模、同一構造で構築されていることを考えると、J-4号住居跡にも炉があった蓋然性が高い。すでに記してあるが、その位置はP<sub>3</sub>~P<sub>7</sub>に囲まれた空白域とすることができよう。J-4号住居跡の平面図をJ-5住居跡のそれに透視照合させると、やはりこの部分に炉が位置してくる。

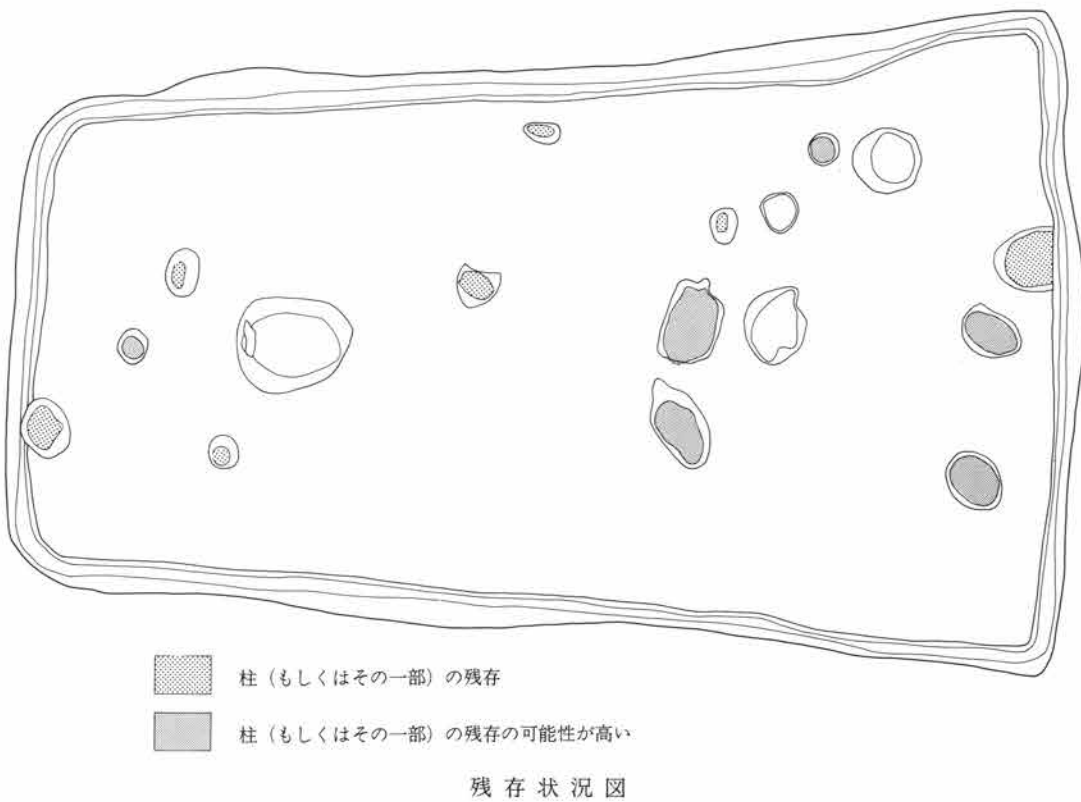
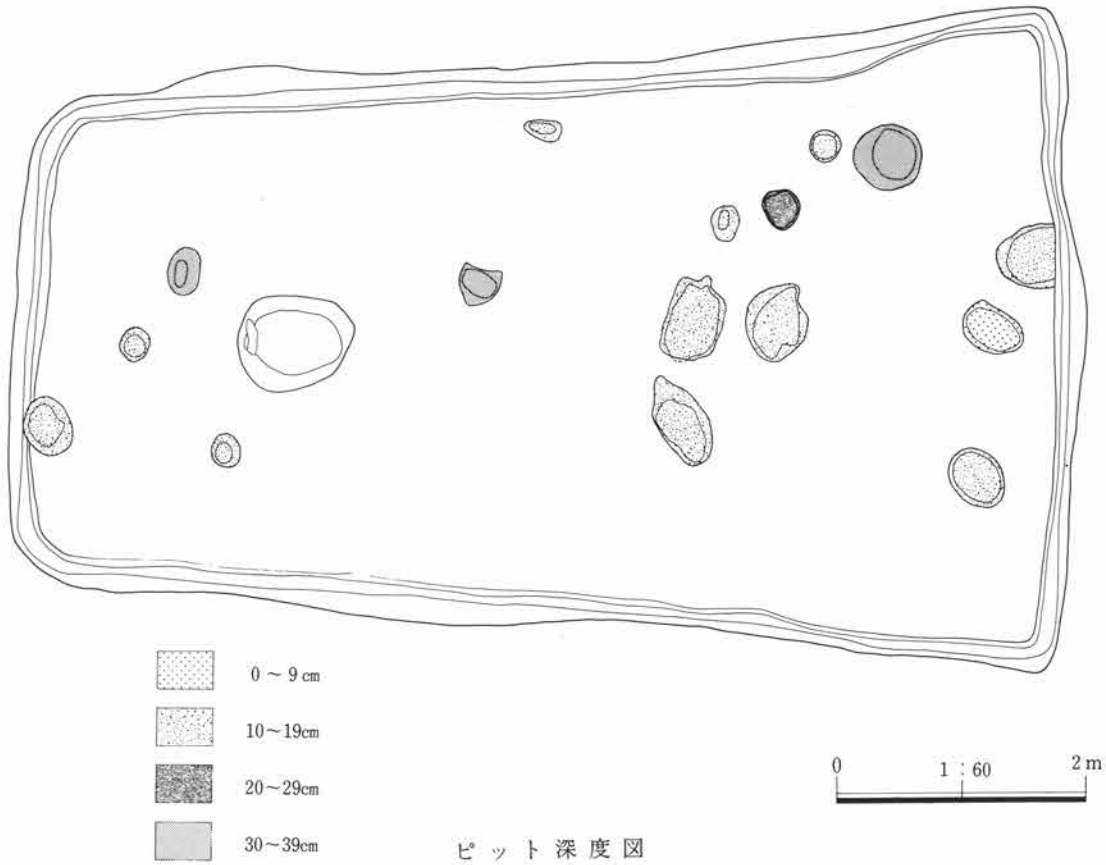
**遺物出土状況** (第61~64図・84図、PL.10)

当住居跡覆土から出土した遺物は、完形品・半完形品38個体、土器片3647点、石器類1816点であり、覆土第1~5層にかけて集中的に検出された。とりわけ第4層からは完形品・半完形品が多量に出土している。遺物の平面的分布は、住居各コーナーや壁際部分に空白部があるものの覆土からは万遍なく出土している。

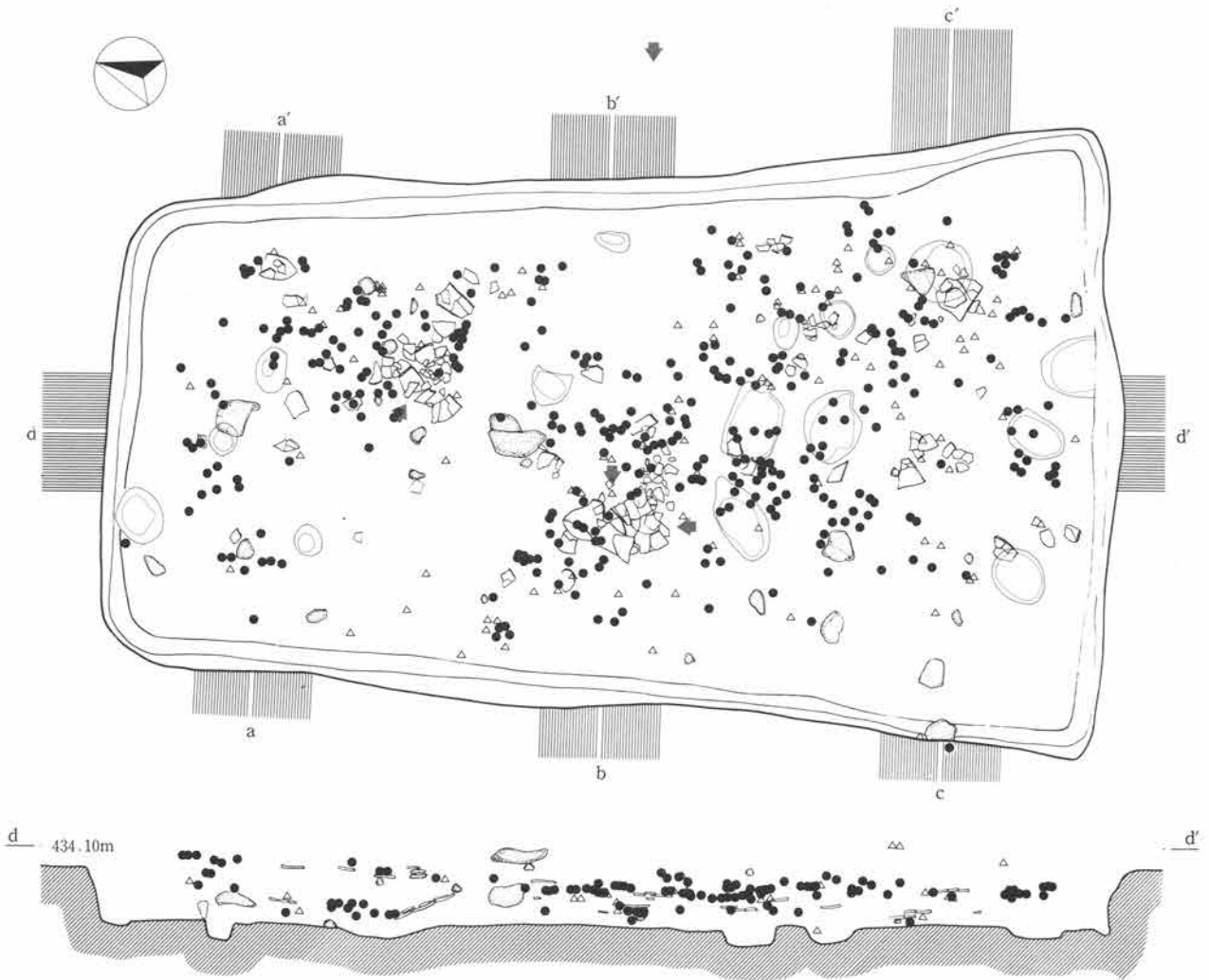


第59图 J-5号住居跡





第60図 J-5号住居跡のピット深度・残存状況図

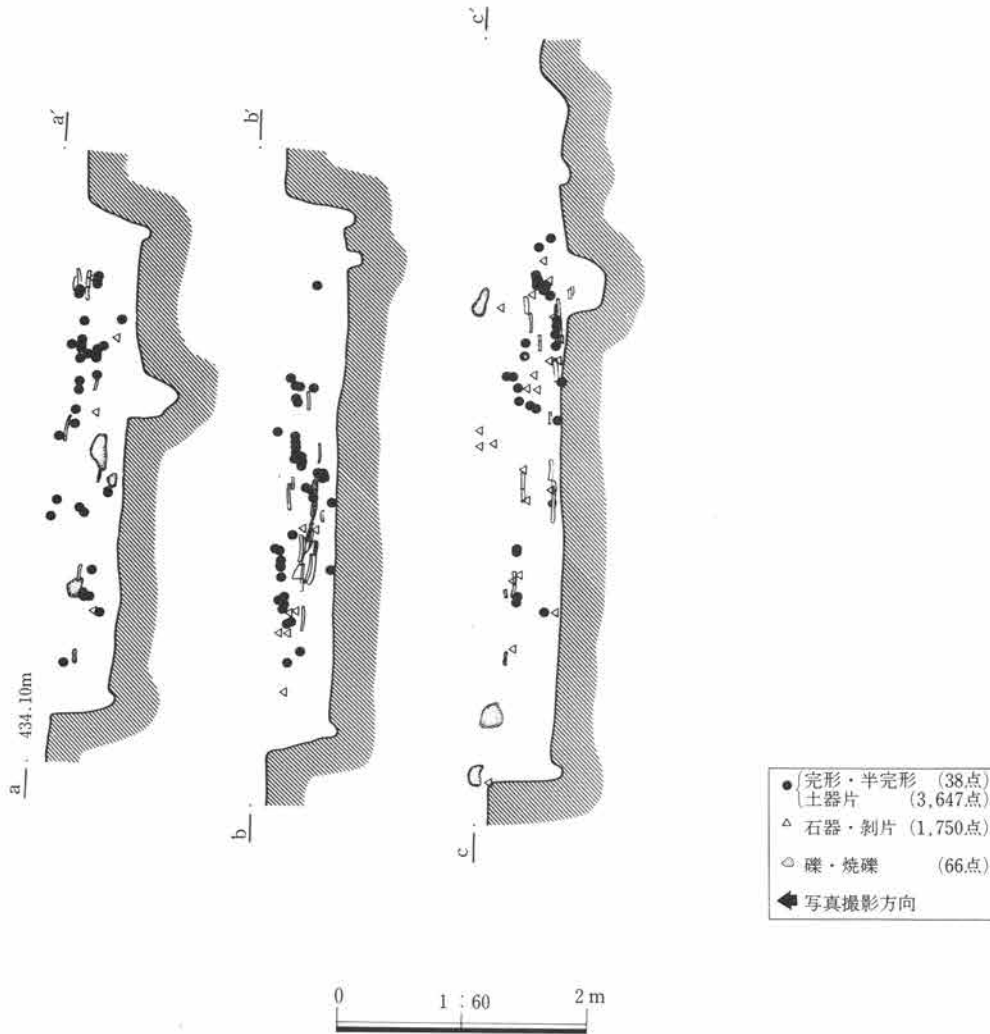


第61図 J-5号住居跡遺物出土状況

住居が廃絶され、覆土第7・6層が堆積した後に、完形品を中心とする多量の遺物が投棄されたり、または自然営力により流入したものであろう。この段階では住居跡は擂鉢状を呈しており、住居各コーナーや壁際で埋没（覆土第7・6層）が進行しているものの、住居中央部では約5～15cm程の堆積状況であったと思われる。すなわち床面の一部はほぼ露出にちかい状態であった。遺物の垂直分布はまさにこの状況を示しているものであろう。そしてこの窪地部分に完形品・半完形品を中心とする遺物が投棄されているが、投棄場所については3ブロックほど想定できる。なお、これについては後で詳述したい。

ところで、当住居跡の覆土最上層からは縄文時代中期土器片はわずかに3点が出土しているのみであった。また、当住居跡が検出されたグリッドからは、N-86グリッド5点、N・O-86グリッド5点、O-86グリッド14点、O-87グリッド5点、P-87グリッド35点が出土しており、グリッド出土総数は64点である。これに対してJ-4号住居跡の場合は覆土最上層は勿論のこと、住居跡が検出されたグリッドからも515点にのぼる多量の中期土器片が出土している。この両住居跡の相違は何を意味するものであろうか。

結論から言へば、住居廃絶時の時間差に起因するものと言えよう。すなわち、J-4号住居跡は縄文時代中期前葉の時期になっても完全には埋没しておらず、ある程度の窪地状態を呈していた。このため、J-2号住居跡の遺物がこの窪地に投棄されたり自然営力によって多量に流入したものであろう。ところがこの段階ではすでに当住居跡は完全に埋没してほぼ平坦化していた。結果として覆土もしくは周辺グリッドか

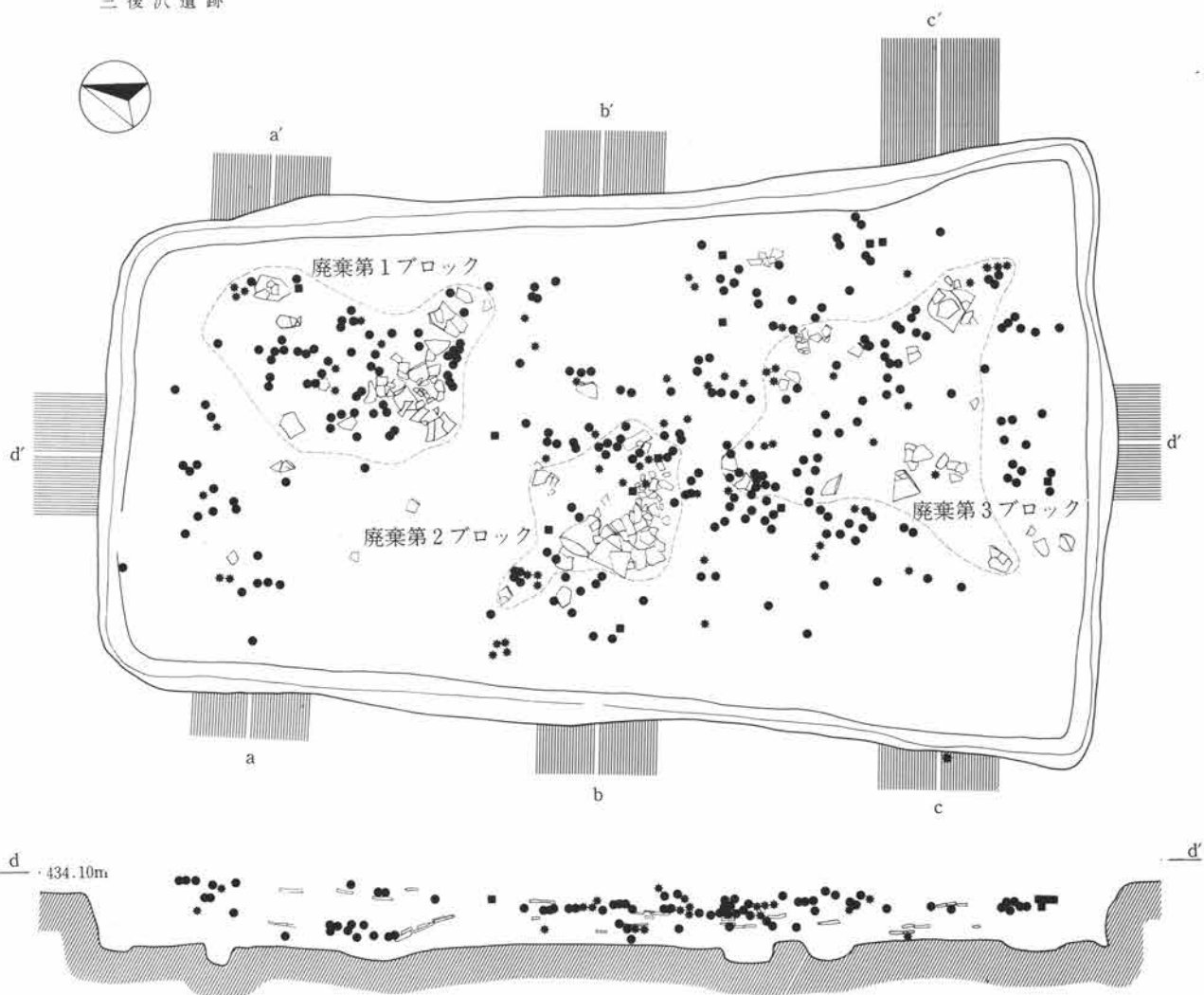


らは中期土器片はさほど出土することがなかった。

当住居跡とJ-4号住居跡の拡張前住居跡は、同一規格(同規模・同構造)を有する住居跡である。出土遺物からも判断すると、縄文時代前期中葉のある時期に集落内の共同作業として構築された可能性が高い。そして集落内での生活が営まれていく過程でJ-4号住居跡の拡張が行われた。ところが当住居跡は拡張されることなく廃絶され埋没していった。この段階で多量の遺物の投棄が行われている。一方、J-4号住居跡もやがては廃絶される運命になり、当住居跡と同様の過程を経て埋没していった。だが、住居の存続期間に差異があったために埋没過程も一様ではなく、少なくともJ-2号住居跡が構築された縄文時代中期前葉の時期には当住居跡は完全に埋没し、J-4号住居跡は完全には埋没しておらずある程度の窪地状態を呈していたものであろう。

#### 遺物出土状況とピットについて(第60・61図)

当住居跡から総計16個のピットが検出されていることはすでに記した。これらピットと遺物の出土との密接な関係状況を示すのが第61図である。この図から理解できることは、 $P_1 \cdot P_3 \sim P_6 \cdot P_9 \cdot P_{16}$ の7個(約43%)のピット上には遺物が重ならず、 $P_2 \cdot P_7 \cdot P_8 \cdot P_{12} \cdot P_{14} \cdot P_{15}$ の6個(約37%)のピットは遺物が重なるもののわずかであることから、計13個(約81%)のピット上には遺物がのらないものと判断してさしつかえない。この状況はJ-4号住居跡とほぼ同様の結果を示している。すなわち、住居が廃屋となり、埋没土の堆積、



第62図 J-5号住居跡土器（部位別）出土状況

そして遺物が投棄されていく過程にあっても、廃屋の柱もしくは柱の一部が抜かれることなく残存していたものであろう。さらに言えば、 $P_{10}$ ・ $P_{11}$ ・ $P_{13}$ の各ピットについても柱の存在は充分考えられるところから、当住居跡にあってはすべてのピットに柱（もしくはその一部）の残存を指摘できるものである。そしてこれらのピットの配置から上屋構造を考えていかなければならない。

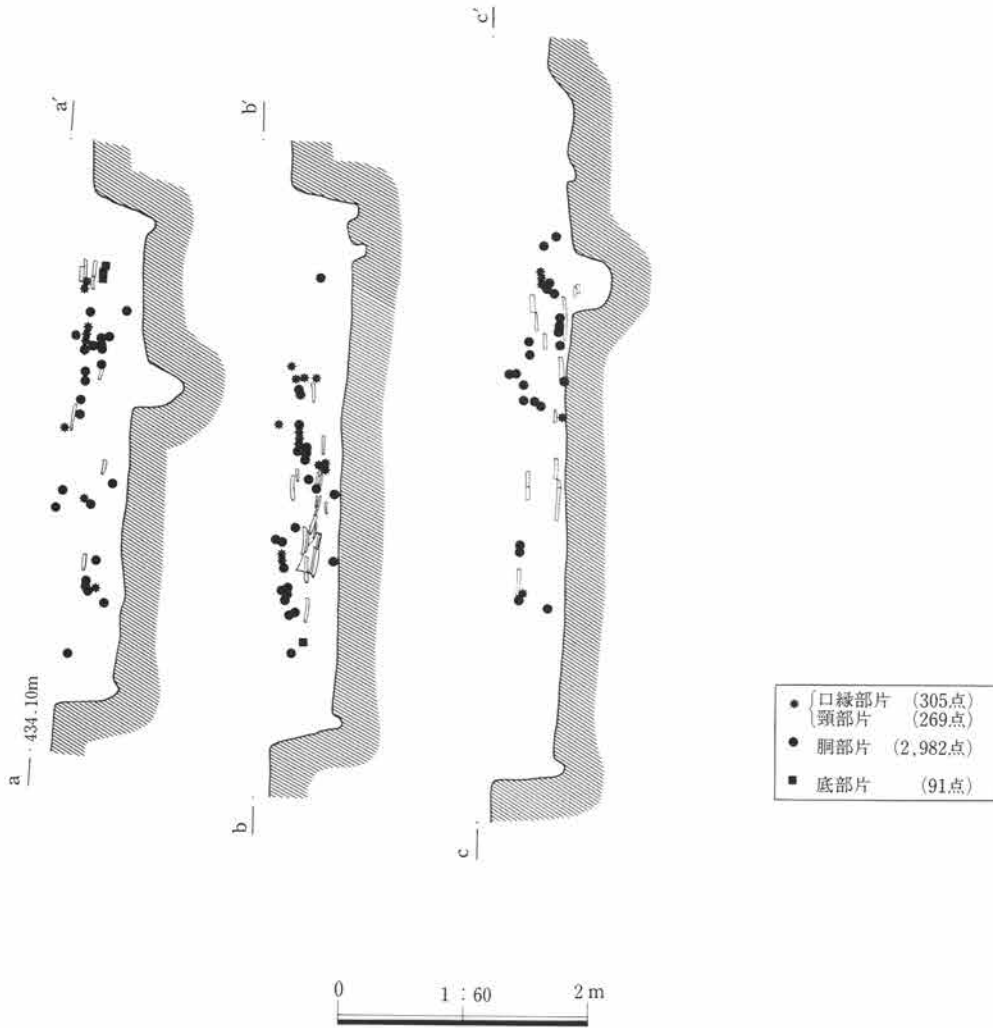
**土器（部位別）出土状況・個体別出土状況・接合関係について（第62～64図）**

すでに遺物出土状況について記述してあるが、さらに土器片について詳述したい。出土した土器片3647点のうち部位別点数は、口縁部片305点、頸部片269点、胴部片2982点、底部片91点である。この他に完形品・半完形品の38個体が出土している。第62図の土器（部位別）の平面的分布をみると、完形品を中心とした3つの廃棄ブロックを想定できる。

第1ブロックは住居跡北東部分に認められ、半完形品を中心にまとまっている。このブロックから出土した口縁部に文様帯をもつ土器は、いずれも波状口縁を呈し、頸部で括れ胴部で膨らむ甕形土器を呈している。櫛歯状工具による刺突文の施文された土器（1・3・4）、半截竹管によって爪形文、平行沈線文が施文された土器（9・10・11・15・17）が出土し、また縄文施文の深鉢形土器も出土しているが、総じて口縁部に文様体をもつ甕形土器の占める割合が高い。破片の接合関係もこのブロックを中心にまとまっている。

第2ブロックは住居跡中央部やや西壁寄りに認められ、完形品・半完形品を中心にまとまっている。土器



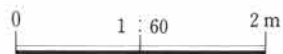
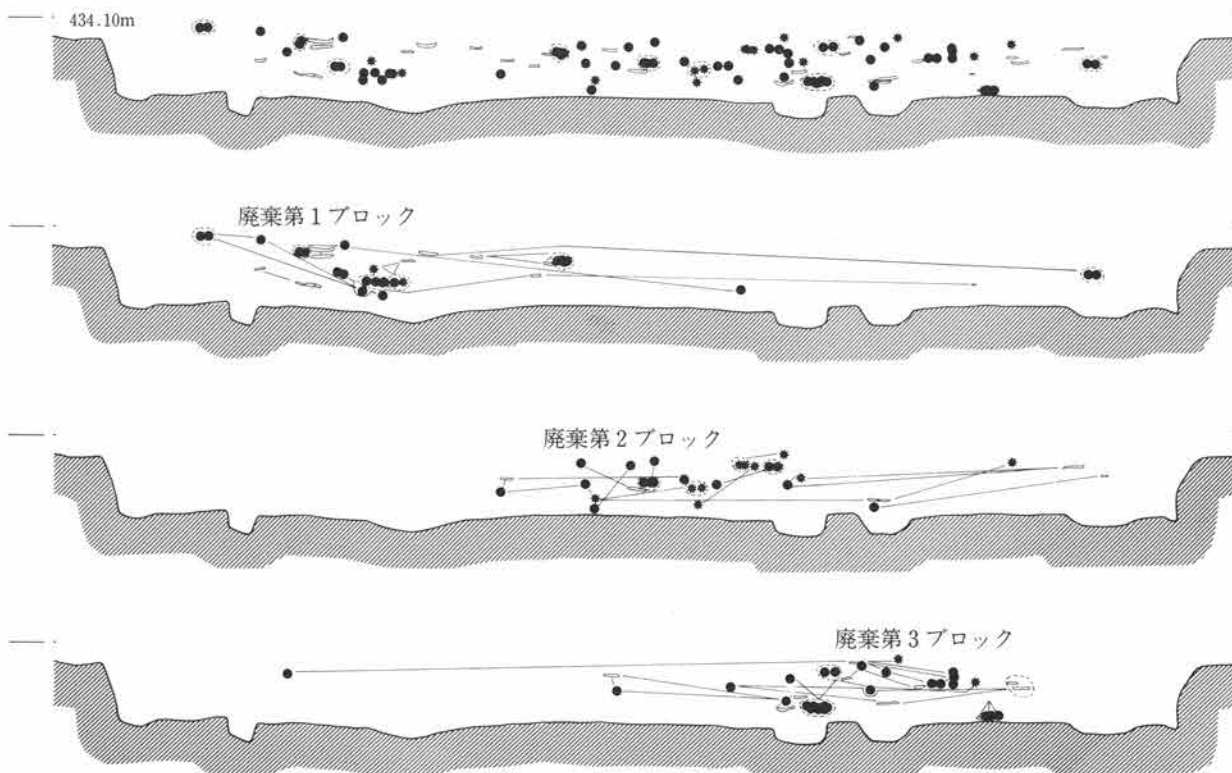
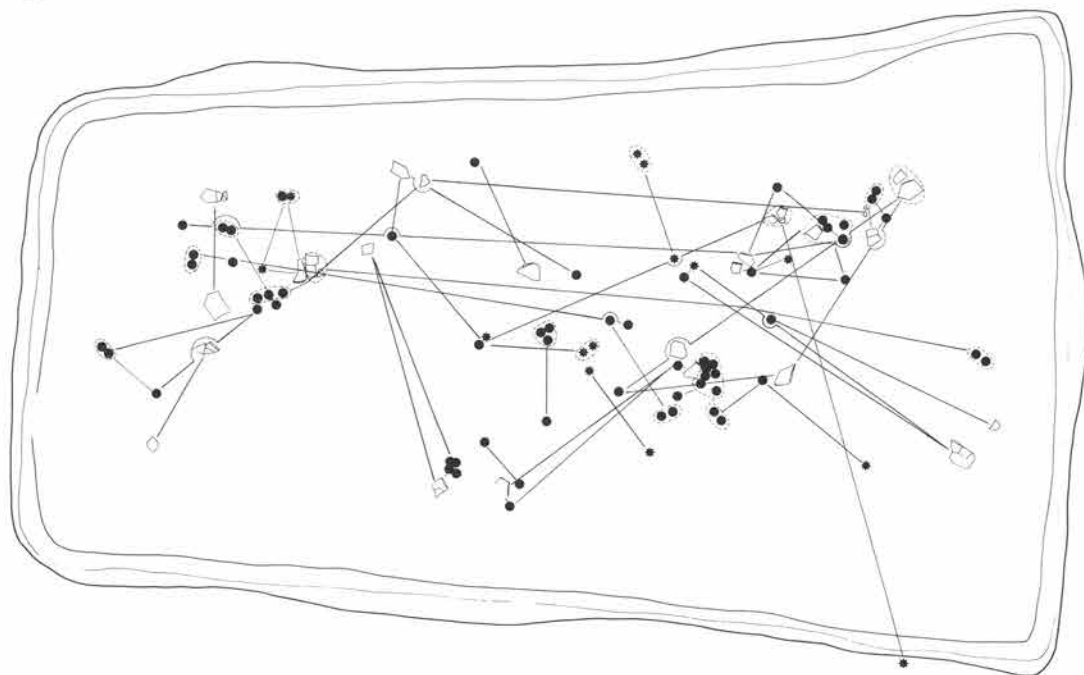


No.12・21・29の3個体の土器は、その出土状況から判断すると意図的に配置された模様であった。29の土器は補修孔があるものの完形品であり、12・21は底部が一部欠損しているだけである。このブロックから出土している土器は、口縁部に文様帯をもつものは比較的少なく、大型の縄文施文の土器が多い。また櫛歯状工具によって施文された土器の出土はなく、半截竹管によって爪形文、平行沈線文が施文された土器(8・12・15・19)が出土しているが、深鉢形であったり(12)、口縁が平縁である(19)など、第1ブロックから検出された土器群と若干様相を異にしている。

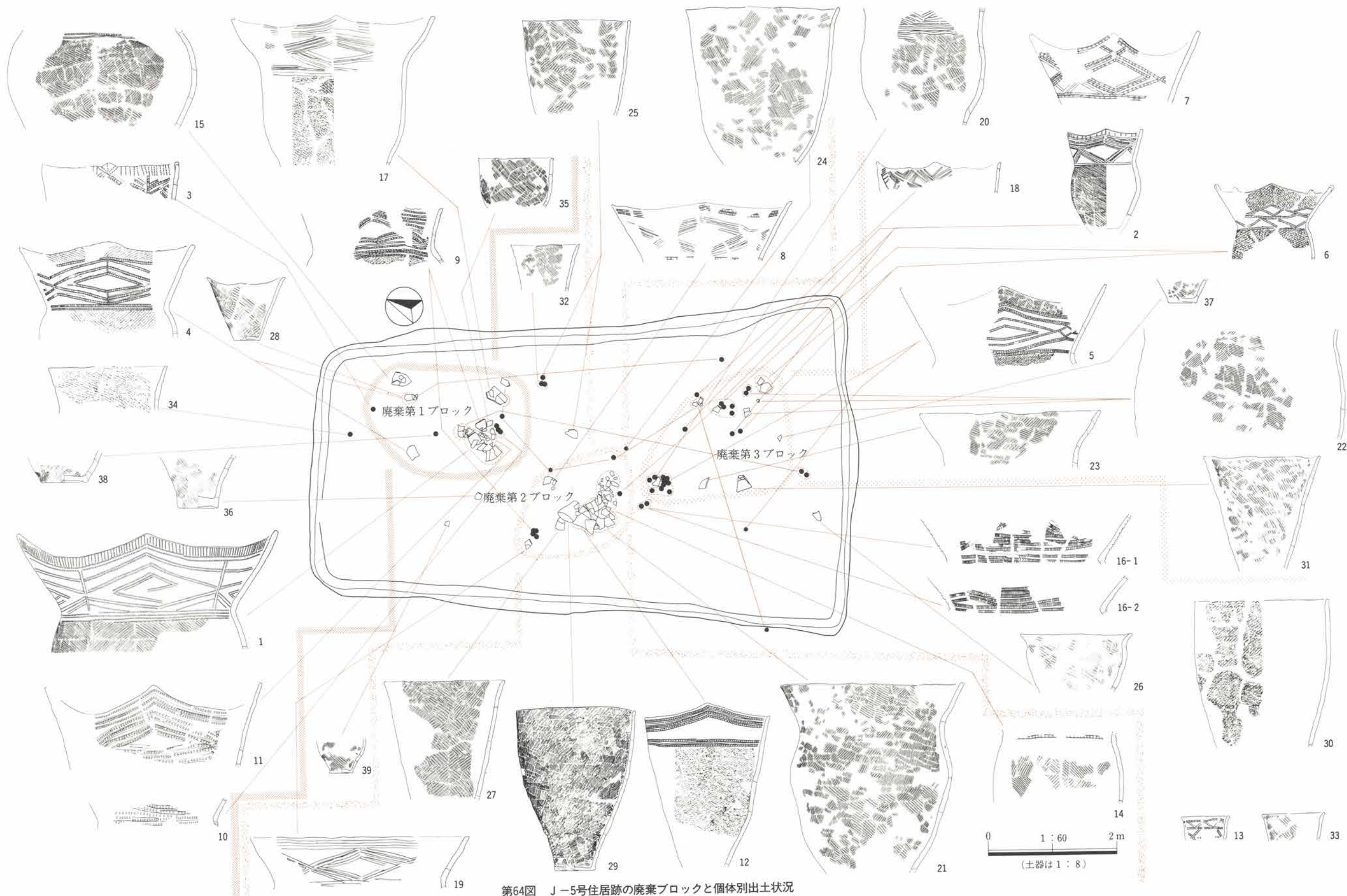
第3ブロックは住居跡南壁寄りに広範囲に認められる一群である。半完形品・大形破片を主体としているが、第1・2ブロックのような密な分布は示さない。出土した土器は口縁部に文様帯をもつ波状口縁の甕形土器と縄文施文の土器である。甕形土器には櫛歯状工具による刺突文の施文された土器(2)、半截竹管によって爪形文、平行沈線文が施文された土器(5・6・16・18・20)に分かれるが、第1ブロックとほぼ同一の様相を呈している。接合関係も広範囲のなかでのまとまりが認められる。

これら3つの廃棄ブロックは、J-5号住居跡が廃屋となり、埋没が進行していく過程において形成されたものであるが、この形成には若干の時間差があったものと思う。これは、櫛歯状工具によって施文された土器を伴う第1・第3ブロックと、こうした土器を伴わない第2ブロックの一群との差として把握できるものであろうか。

なお、この問題については5章〔4〕三後沢遺跡の集落変遷のなかで記したい。



第63図 J-5号住居跡遺物接合状況



第64図 J-5号住居跡の廃棄ブロックと個体別出土状況



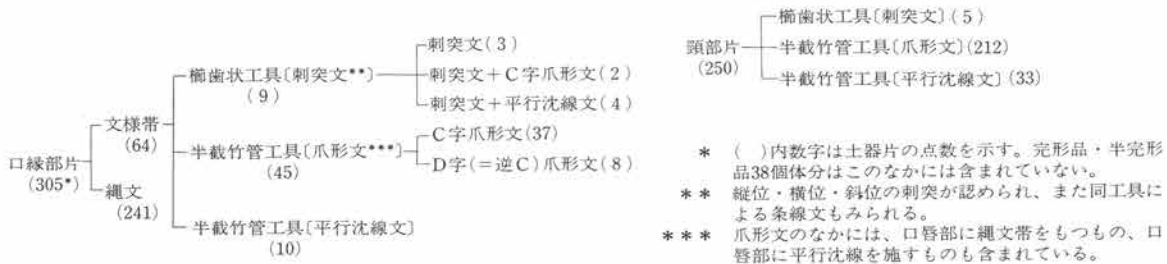
出土遺物

〔I〕土器（第66～83図、P.L. 48～55）

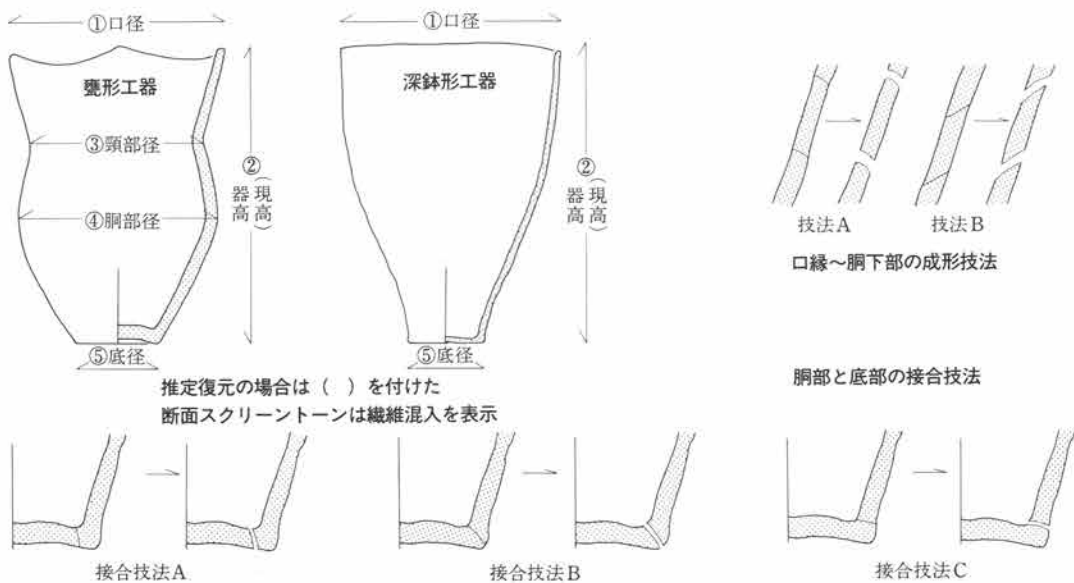
当住居跡からは前期中葉の完形品・半完形品38個体、土器片3647点（口縁部片305点、頸部片269点、胴部片2982点、底部片91点）が出土している。この点数は可能なかぎりの接合、同一個体の見極めを行った後の数字ではあるが、胴部片においては同一個体の識別は不十分なものとなっていることは否めない。この他に、前期初頭の花積下層式土器片、前期前葉の関山式土器片、前期後葉の諸磯式土器片が若干出土し、また覆土最上層や当住居跡が検出されたグリッドから、中期の阿玉台式土器片67点が出土している。前期中葉の土器は、(1)口縁部文様帯をもつ土器群、(2)縄文のみ施文される土器群に分けられる。

(1)口縁部文様帯をもつ土器群（第66～70・74～77図）

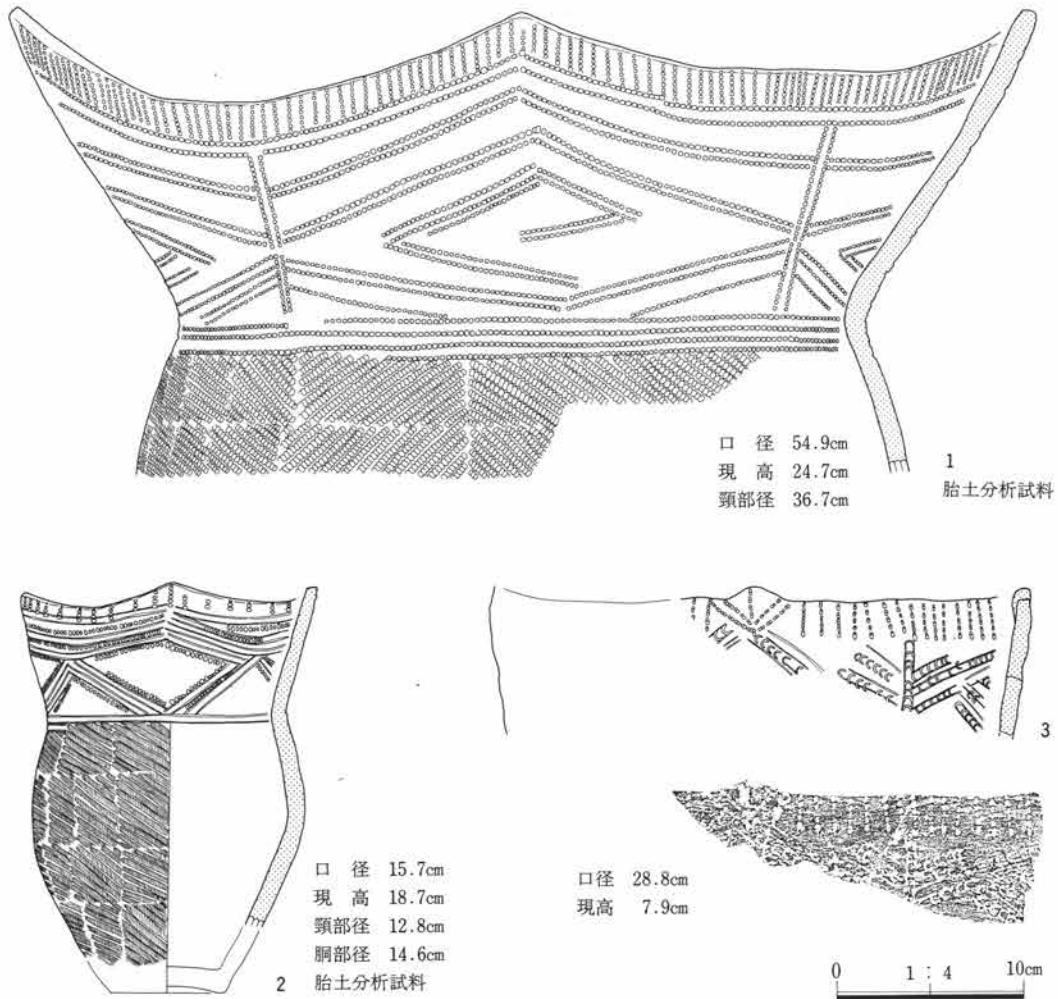
器形は甕形（1・2・4～11・14～17・19・20・42～66・68～120・122・128～140）、深鉢形（3?・12・13・18?・40・41・67・121・123～127）があり、浅鉢形は確認できなかった。口縁部は波状（外傾、内彎、外反）を呈するが、外傾するものが圧倒的に多い。波底部に小突起を有するもの(6)は非常に少なかった。口唇部は平坦が最も多く、次に丸味を呈す、沈線が巡る様な手法、内削ぎ状、内傾するものが見られる。口縁から胴下部の成形（積みあげ技法）は圧倒的に技法A（第65図）が多いが、括れ部では技法Bも認められる。土器内面の調整は、徹底したミガキもしくは丁寧な調整（条痕風の調整痕を残すものもある）が行われており、器内外面の繊維痕は縄文施文の土器群と比べると遙かに少ない。胴部以下は羽状縄文を施し、原体交換部で菱形・X状の交叉となるものが多い。口縁部文様帯は施文原体により、櫛歯状工具による縦位・横位・斜位の刺突文（条線文を含む）によって文様の描かれるもの（1～4・40～52）、半截竹管による爪形文によって文様の描かれるもの（5～16・53～128）、半截竹管による平行沈線によって文様の描かれるもの（17～20・130～141）に大きく分けられる。（⇒P.118）



\* ( )内数字は土器片の点数を示す。完形品・半完形品38個体分はこのなかには含まれていない。  
 \*\* 縦位・横位・斜位の刺突が認められ、また同工具による条線文もみられる。  
 \*\*\* 爪形文のなかには、口唇部に縄文帯をもつもの、口唇部に平行沈線を施すものも含まれている。



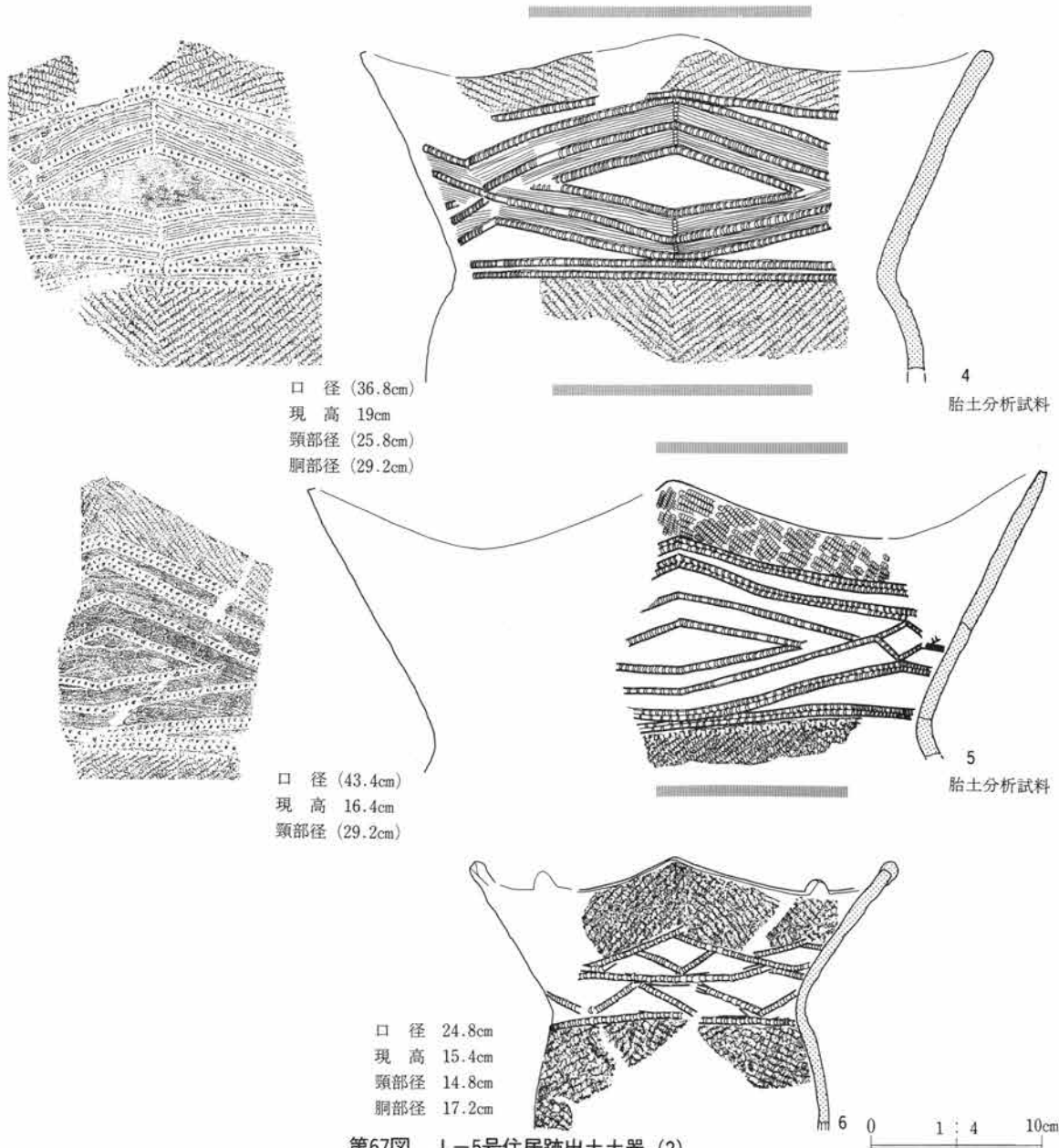
第65図 土器の計測と成形（積みあげ）技法



第66図 J-5号住居跡出土土器(1)

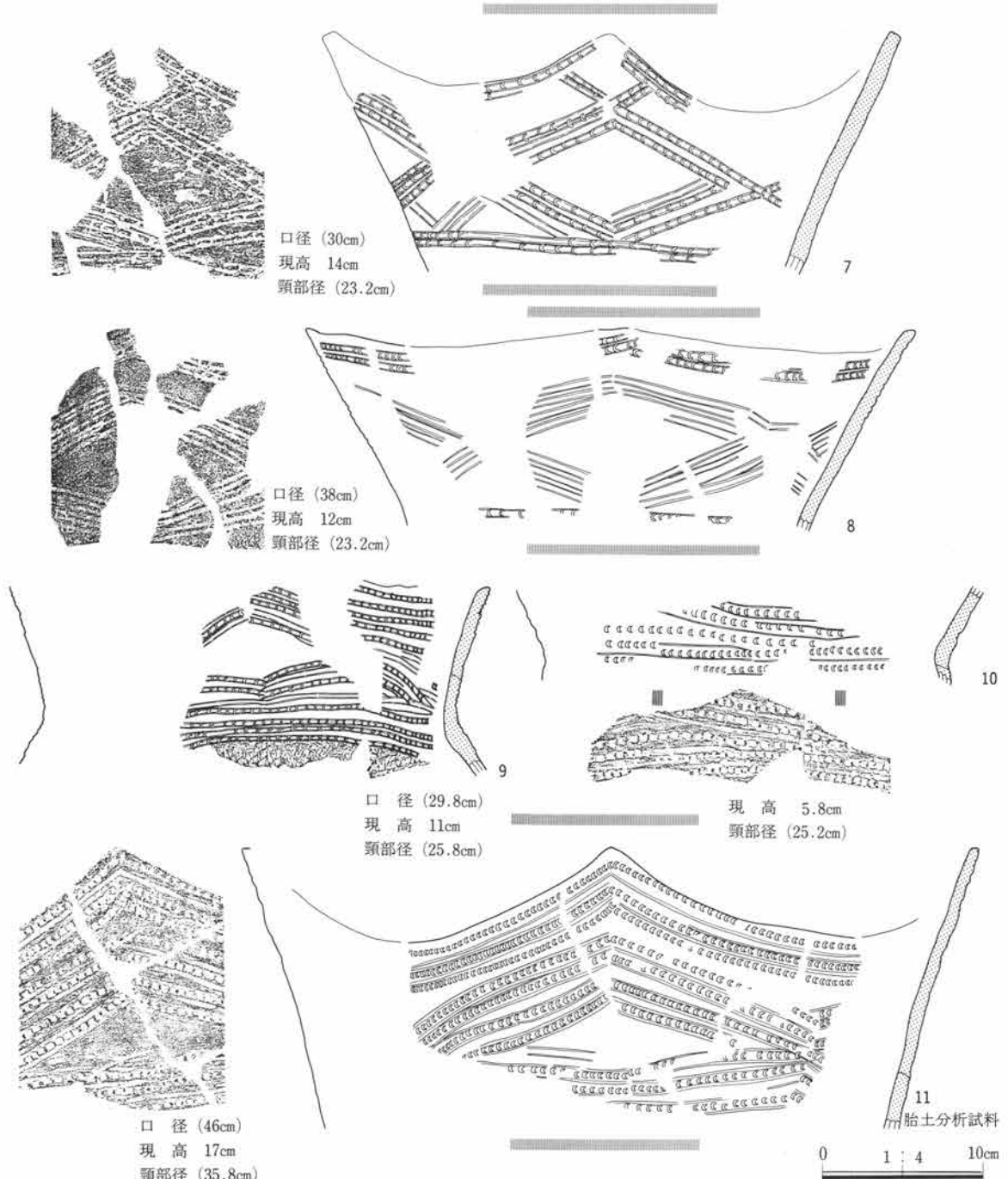
J-5号住居跡遺物観察表

図番 PL	器種	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
66-1 PL. 48 53	甕形	①含繊維 ②やや良 ③外面 ぶい褐色 内面 ぶい橙色	4単位の波状口縁を呈する甕形土器の半完形品。口縁部は外傾し、口唇部はやや丸味をもつ。器厚は1cm。内面は徹底したミガキが行われているが、一部剥落して繊維痕が認められる。	口唇部に巾2mmの櫛歯状工具(8本・長さ2cm)による縦位刺突。括れ部には巾2~4mmの方形の先端をもつ櫛歯状工具(8本・長さ2.4cm)による横位刺突4条。2条1単位の同工具による縦位刺突が波底部に、区画内を菱形モチーフ。胴部はR(1/2)(0段多条)とL(1/2)(0段多条)で羽状。	廃棄第1ブロック
66-2 PL. 48 53	甕形	①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 褐灰色	4単位の波状口縁を呈する小型甕形土器のはほぼ完形品。口縁部は外傾し、口唇部は内傾する。器厚7mm~9mm。内面は条痕風の調整痕が認められ、外面は底部付近がやや荒れている。	口唇部に巾3mmの方形の先端をもつ櫛歯状工具(5本・長さ1.3cm)による縦位刺突。巾5mmの平行沈線が口縁にそって2条、括れ部に1条施文。区画内を2条1単位の平行沈線と櫛歯状工具による斜位刺突で菱形のモチーフ。胴部はR(1/2)とL(1/2)で羽状。	廃棄第3ブロック
66-3 PL. 48	深鉢形(?)	①含繊維 ②良 ③外面 ぶい黄橙色 内面 ぶい橙色	平口縁の深鉢形(?)土器で一部小突起が見られる。口唇部は平坦。器厚8mmで積みあげ技法A。内面はやや丁寧な調整が行われ、外面は荒れていて繊維痕が認められる。	口唇部に巾2mmの円形の先端をもつ櫛歯状工具(12本・長さ2.2cm)による縦位・斜位刺突。以下巾6mmの平行沈線内にC字爪形文(手法B)の充填。縦に1条で区画し、区画内を菱形のモチーフ施文と思われる。施文順序は爪形文→櫛歯状刺突文。	廃棄第1ブロック



第67図 J-5号住居跡出土土器 (2)

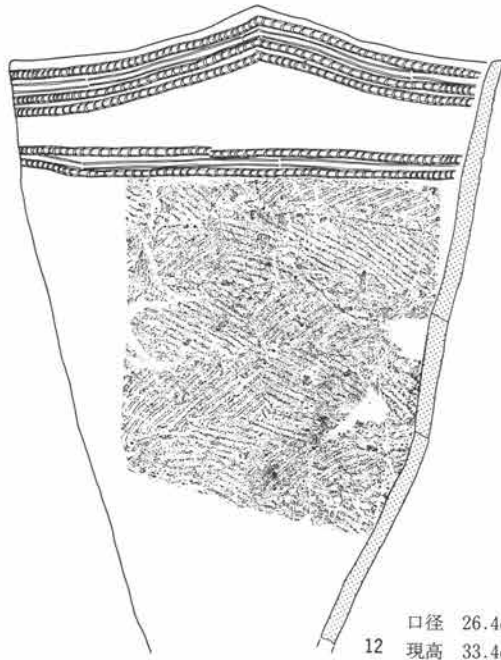
図番 PL	器種	①胎土 ②焼成 (遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
67-4 PL. 48 51	甕形	①含繊維 ②非常に良 ③外面 暗赤褐色 内面 赤褐色	4単位の波状口縁を呈する甕形土器の大形破片。口縁部は外傾し、口唇部は平坦。器厚1cmで積みあげ技法A。内面は徹底した横ミガキ、外面も非常に丁寧な調整が行われている。	口唇部と胴部に縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} \text{L} \\ \text{L} \end{array} \right\}$ (0段多条) と前々段反摺L $\left\{ \begin{array}{l} \text{R} \\ \text{R} \\ \text{R} \\ \text{R} \end{array} \right\}$ で羽状→巾5mmの平行沈線を口縁にそって1条、括れ部に2条施文、C字爪形文(手法C)の充填。区画内を巾2mmの方形の先端をもつ櫛歯状工具による縦位刺突と条線→3条1単位の爪形文で菱形モチーフ。	廃棄第1ブロック
67-5 PL. 48 51	甕形	①含繊維 ②良 ③外面 灰黄褐色 内面 にぶい黄橙色	4単位の波状口縁を呈する甕形土器の大形破片。口縁部は外傾し、口唇部は沈線が巡る様な手法。内面は徹底した横ミガキ、外面は一部荒れていて繊維痕が認められる。	口唇部と胴部に縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} \text{L} \\ \text{L} \end{array} \right\}$ (0段多条・環付) とL $\left\{ \begin{array}{l} \text{R} \\ \text{R} \end{array} \right\}$ (0段多条・環付) で羽状→巾5mmの平行沈線を口縁にそって2条・括れ部にも2条施文、C字爪形文(手法C)の充填。区画内を1条と2条1単位の爪形文で菱形のモチーフ施文。	廃棄第3ブロック



第68図 J-5号住居跡出土土器 (3)

図番 PL	器種	①胎土 ②焼成 (遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
67-6 PL. 48 51 53	甕形	①含繊維 ②良 ③外面 褐灰色 内面 褐灰色	4単位の波状口縁を呈し、波底部に小突起が見られる。口縁部は外傾し、口唇部は外側に向く。器厚5mm~7mm。内面は徹底した横ミガキが行われている。	口唇部と胴部に縄文施文。原体は前々段反撚R $\begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix}$ とL $\begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix}$ で羽状。括れ部と文様帯中央部に巾5mmの平行沈線内にC字爪形文 (手法C) の充填が1条。上下区画内をC字爪形文による菱形。三角形のモチーフ施文。	廃棄第3ブロック





12 口径 26.4cm  
現高 33.4cm  
胎土分析試料



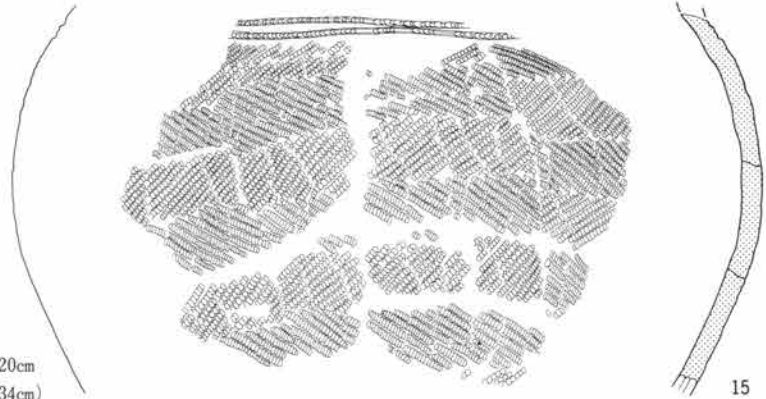
13 口径 10.2cm  
現高 4.8cm



14 現高 13.6cm  
頸部径 (23.8cm)  
胴部径 (27.2cm)



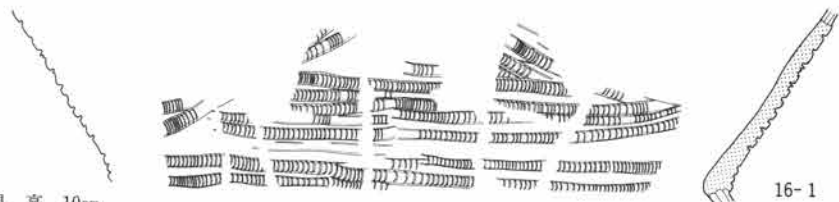
現高 20cm  
頸部径 (34cm)  
胴部径 (40cm)



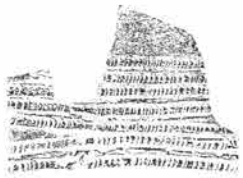
15



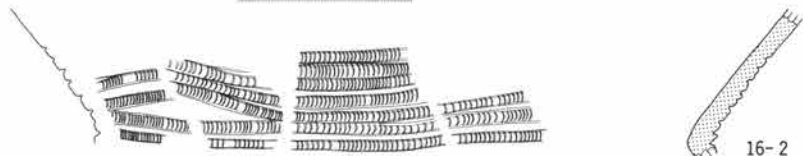
現高 10cm  
頸部径 (33cm)



16-1



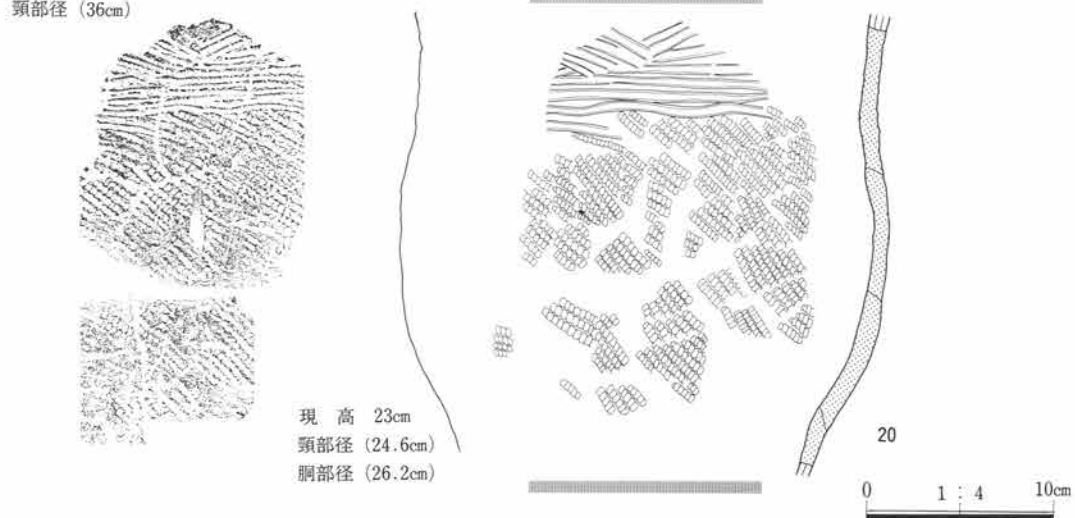
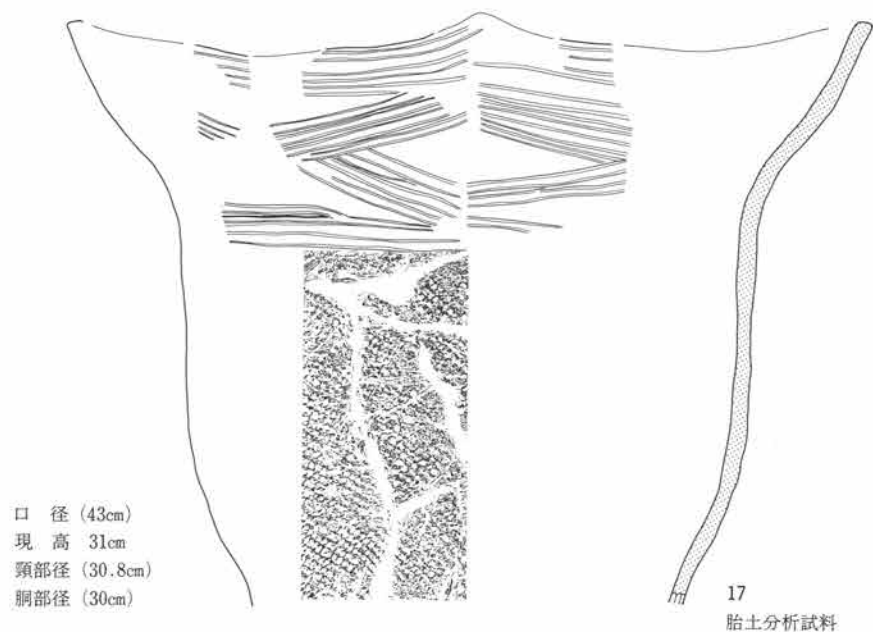
現高 10cm  
頸部径 (33cm)



16-2



第69図 J-5号住居跡出土土器 (4)



第70図 J-5号住居跡出土土器 (5)

図番 PL	器種	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様(その他)	出土状況
68-7 PL. 48	甕形	①含繊維 ②やや良 ③外面 黒褐色 内面 褐灰色	4単位の波状口縁を呈する甕形土器の口縁部。口縁部は外傾し、口唇部は外傾に向く。器厚9mm~1.1cm。内面は粗い調整が行われ、外面は荒れていて繊維痕が顕著に認められる。	口縁と括れ部に2条1単位の平行沈線(巾6mm)内にC字爪形文(手法B)の充填。区画内を2~3条1単位のC字爪形文で菱形のモチーフ。爪形文が充填されない沈線も見られる。沈線・爪形文の施文は乱雑。	廃棄第1・第3ブロック
68-8 PL. 48	甕形	①含繊維 ②良 ③外面 灰褐色 内面 にぶい橙色	4単位の波状口縁を呈する甕形土器の口縁部。口縁部は緩い波状で外傾し、口唇部は平坦。器厚7mm~9mm。内面は徹底した横ミガキが行われている。	口縁と括れ部に2条1単位の平行沈線(巾6mm)内にC字爪形文(手法B)の充填。区画内を3~4条1単位の平行沈線で菱形のモチーフ。爪形文・沈線の施文は波頂部を開始点としている。	廃棄第2ブロック
68-9 PL. 48 52	甕形	①含繊維 ②良 ③外面 褐灰色 内面 にぶい黄橙色	4単位の波状口縁を呈すると思われる甕形土器の口縁から胴部片。口縁部は外傾し、口唇部は内傾する。器厚6mm~1.1cmで積みあげ技法A。内面は徹底した横ミガキが行われている。	口縁と括れ部に4条1単位の平行沈線(巾4mm)内にC字爪形文(手法A)充填。区画内を平行沈線とC字爪形文で菱形のモチーフ。胴部に縄文施文。原体は附加条第1種R $\left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \\ L \end{matrix} \right\} + L$ (2本)と前々段反転L $\left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ R \\ R \end{matrix} \right\}$ で羽状。	廃棄第1・第2ブロック
68-10 PL. 48	甕形	①含繊維 ②良 ③外面 灰褐色 内面 にぶい橙色	甕形土器の括れ部。器厚7mm~9mmで積みあげ技法A。内面はやや粗い調整が行われている。	巾9mmの半截竹管による平行沈線内外に巾4mmのC字爪形文(手法C)の充填。	廃棄第1ブロック
68-11 PL. 49	甕形	①含繊維 ②良 ③外面 灰褐色 内面 にぶい橙色	4単位の波状口縁を呈する甕形土器の大形破片。口縁部は外傾し、口唇部は平坦。器厚6mm~9mmで積みあげ技法A。内面はやや荒れていて繊維痕が認められる。	口縁にそって巾9mmの平行沈線2条と巾4mmのC字爪形文(手法AとC)3条施文。区画内を3~4条1単位の爪形文で菱形のモチーフ。	廃棄第1ブロック
69-12 PL. 49 52 54	深鉢形	①含繊維 ②やや良 ③外面 暗褐色 内面 にぶい黄橙色	2単位の波状口縁を呈する深鉢形土器のほぼ完形品。底部は欠失している。口縁部は外傾し、口唇部は平坦。器厚7mm~1cmで積みあげ技法A。内面は荒れていて繊維痕が認められる。	口縁にそって4条の平行沈線(巾5mm)にC字爪形文(手法C)の充填が3条、胴部縄文との境には3条の平行沈線にC字爪形文の充填が2条行われている。胴部縄文の原体は前々段反転R $\left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \\ L \end{matrix} \right\}$ と附加条第1種L $\left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ R \\ R \end{matrix} \right\} + R$ (2本)で羽状。原体交換部で菱形・X状の交叉。	廃棄第2ブロック
69-13 PL. 49 52	小型土器	①含繊維 ②やや良 ③外面 灰黄褐色 内面 褐灰色	小型土器の口縁部。口縁部はやや外反する。器厚6mmで積みあげ技法A。内面はやや丁寧な調整が行われている。	口縁にそって3条の平行沈線(巾4mm)内にC字爪形文(手法A)の充填。区画内を平行沈線とC字爪形文で三角形のモチーフ2段。菱形を意識した施文と思われる。	覆土
69-14 PL. 49	甕形	①含繊維 ②やや良 ③外面 灰黄褐色 内面 にぶい橙色	甕形土器の括れ部から胴部片。器厚8mm~1cmで積みあげ技法A。内面は徹底した横ミガキ。外面は粗い調整が行われている。	巾6mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法B)の充填が括れ部に1条。以下縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \\ L \end{matrix} \right\}$ (0段多条)とL $\left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ R \\ R \end{matrix} \right\}$ (0段多条)で羽状。	廃棄第2ブロック
69-15 PL. 49 52	甕形	①含繊維 ②良 ③外面 にぶい赤褐色 内面 橙色	甕形土器の括れ部から胴部片。器厚1cmで積みあげ技法A。内面は徹底した横ミガキが行われている。	巾4mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法A)の充填が括れ部に2条。以下縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \\ L \end{matrix} \right\}$ (0段4条)とL $\left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ R \\ R \end{matrix} \right\}$ (0段多条)で羽状。原体交換部で菱形の交叉。縄の開端を別の条で縛る。	廃棄第1ブロック
69-16 PL. 49	甕形	①含繊維 ②やや良 ③外面 にぶい黄橙色 内面 にぶい黄褐色	第69図16-1、16-2は同一個体。甕形土器の頸部片。器厚7mm~1.3cm。内面は徹底した横ミガキが行われている。	巾8mmの半截竹管による平行沈線内にD字爪形文(逆C、手法B)の充填。沈線は深く、爪形文は密に施文されている。	廃棄第3ブロック付近
70-17 PL. 49	甕形	①含繊維 ②やや良 ③外面 にぶい橙色 内面 にぶい橙色	4単位の波状口縁を呈する甕形土器の半完形品。口縁部はやや内傾し、口唇部は一部平坦。器厚7mm~1cm。内面は荒れていて繊維痕顕著。	口縁と括れ部に3条1単位の平行沈線(巾5mm)の施文。区画内を3~4条1単位の平行沈線で菱形のモチーフ。胴部縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \\ L \end{matrix} \right\}$ 。施文順序は胴部縄文→平行沈線。	廃棄第1ブロック

図 番 PL	器種	①胎土 ②焼成 (遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
70-18 PL. 49	深鉢形?	①含繊維 ②やや良 ③外面 褐灰色 内面 にぶい黄褐色	4単位の小突起を有する深鉢形土器(?)の口縁部片。口唇部はやや丸味をもつ。器厚6mm。内面は横ミガキが行われている。	5条1単位の半截竹管による平行沈線(巾3mm)で菱形のモチーフ。	廃棄第3ブロック
70-19 PL. 49	甕形	①含繊維 ②やや良 ③外面 褐灰色 内面 にぶい褐色	平口縁を呈する甕形土器の口縁部 $\frac{1}{4}$ 。口縁部は外傾し、口唇部は沈線が巡る様な手法。器厚9mm~1.2cmで積みあげ技法A。内面は粗い調整で繊維痕顕著。	口縁と括れ部に2条1単位の平行沈線(巾6mm)を施文。区画内を2~4条の平行沈線で菱形のモチーフ。	廃棄第2ブロック
70-20 PL. 50	甕形	①含繊維 ②やや良 ③外面 橙色 内面 橙色	甕形土器の頸部から胴部片。器厚7mm~1cmで積みあげ技法A。内面は粗い調整で繊維痕が認められる。	括れ部に巾5mmの半截竹管による平行沈線を4条施文。区画内は菱形のモチーフ施文と思われる。胴部は縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{L}{L} \right\rangle$ 。施文順序は縄文→括れ部沈線→区画内沈線。縄の開端を別の条で縛る。	廃棄第3ブロック
71-21 PL. 50	甕形	①含繊維 ②良 ③外面 褐灰色 内面 にぶい橙色	平口縁を呈する甕形土器のはほぼ完形品。底部を欠失している。口縁部は外傾し、口唇部は平坦。器厚8mm~1.2cmで積みあげ技法A。内面は条痕風の調整痕を、外面は繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{L}{L} \right\rangle$ (0段多条)とL $\left\langle \frac{R}{R} \right\rangle$ (0段多条)で羽状。原体交換部で菱形・X状の交叉。	廃棄第2ブロック
71-22 PL. 50	甕形	①含繊維 ②良 ③外面 浅黄褐色 内面 にぶい橙色	甕形土器の頸部から胴部にかけての欠形破片。器厚6mm~8mmで積みあげ技法A。内面は徹底したミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{L}{L} \right\rangle$ (0段多条)とL $\left\langle \frac{R}{R} \right\rangle$ (0段多条)で羽状。原体交換部で菱形の交叉。	廃棄第3ブロック
71-23 PL. 50	甕形	①含繊維 ②やや良 ③外面 暗赤褐色 内面 にぶい赤褐色	平口縁を呈する甕形土器の口縁部片。器厚7mm~1cmで積みあげ技法A。内面は粗い調整で一部繊維痕が認められる。	縄文施文。原体R $\left\langle \frac{L}{L} \right\rangle$ (0段3条)とL $\left\langle \frac{R}{R} \right\rangle$ (0段多条)で羽状。	廃棄第3ブロック
72-24 PL. 50	深鉢形	①含繊維 ②不良 ③外面 にぶい橙色 内面 にぶい橙色	深鉢形土器の半完形品。口縁部は外反し、口唇部はやや丸味をもつ。器厚7mm~9mm。内外面は荒れていて繊維痕顕著に認められる。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{L}{L} \right\rangle$ とL $\left\langle \frac{R}{R} \right\rangle$ で羽状。原体交換部で菱形の交叉。	廃棄第2ブロック付近
72-25 PL. 50	深鉢形	①含繊維 ②やや良 ③外面 にぶい褐色 内面 灰褐色	深鉢形土器の半完形品。口縁部は直立にちかく、口唇部は平坦。器厚5mm~7mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{L}{L} \right\rangle$ とL $\left\langle \frac{R}{R} \right\rangle$ で羽状。原体交換部で菱形の交叉。	廃棄第1・第2ブロック付近
72-26 PL. 50	鉢形?	①含繊維 ②やや良 ③外面 灰黄褐色 内面 灰黄褐色	鉢(?)形土器の口縁部 $\frac{1}{4}$ 。器厚6mm~1cm。内面はやや丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{L}{L} \right\rangle$ (0段多条)とL $\left\langle \frac{R}{R} \right\rangle$ (0段多条)で羽状。原体交換部で菱形の交叉。	住居跡南壁付近
72-27 PL. 50 52	深鉢形	①含繊維 ②やや良 ③外面 にぶい黄褐色 内面 にぶい橙色	深鉢形土器の大形破片。口縁部は外傾し、口唇部は先細り。器厚7mm~1cmで積みあげ技法A。内面は粗い調整でザラザラ。繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{L}{L} \right\rangle$ とL $\left\langle \frac{R}{R} \right\rangle$ で羽状。原体交換部で菱形・X状の交叉。	廃棄第2ブロック
72-28 PL. 50	小型 土器	①含繊維 ②良 ③外面 にぶい褐色 内面 褐灰色	2単位の波状口縁を呈する小型土器の半完形品。波底部には小突起が見られる。器厚6mmで底部は上げ底。内面は横ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{L}{L} \right\rangle$ (0段多条)とL $\left\langle \frac{R}{R} \right\rangle$ (0段多条)で羽状。原体交換部で菱形の交叉。	廃棄第2ブロック
73-29 PL. 50 54	深鉢形	①含繊維 ②やや良 ③外面 にぶい褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の完形品。器厚5mm~9mmで積みあげ技法A。底部は平底である。胴上半から口縁にかけては荒れていて繊維痕顕著に認められる。胴下半から底面にかけては丁寧な調整。	縄文施文。原体はL $\left\langle \frac{F}{F} \right\rangle$ 。径7mm~1.1cmの補修孔が内外面から作成されている。胴下半に煤の付着が認められる。土器面は柔軟で押圧が強い。	廃棄第2ブロック



口径 38.4cm  
現高 39cm  
頸部径 30.2cm  
胴部径 34cm



21  
胎土分析試料



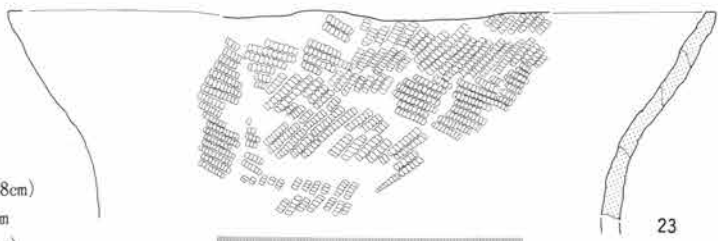
現高 22cm  
頸部径 (40cm)  
胴部径 (44.2cm)



22



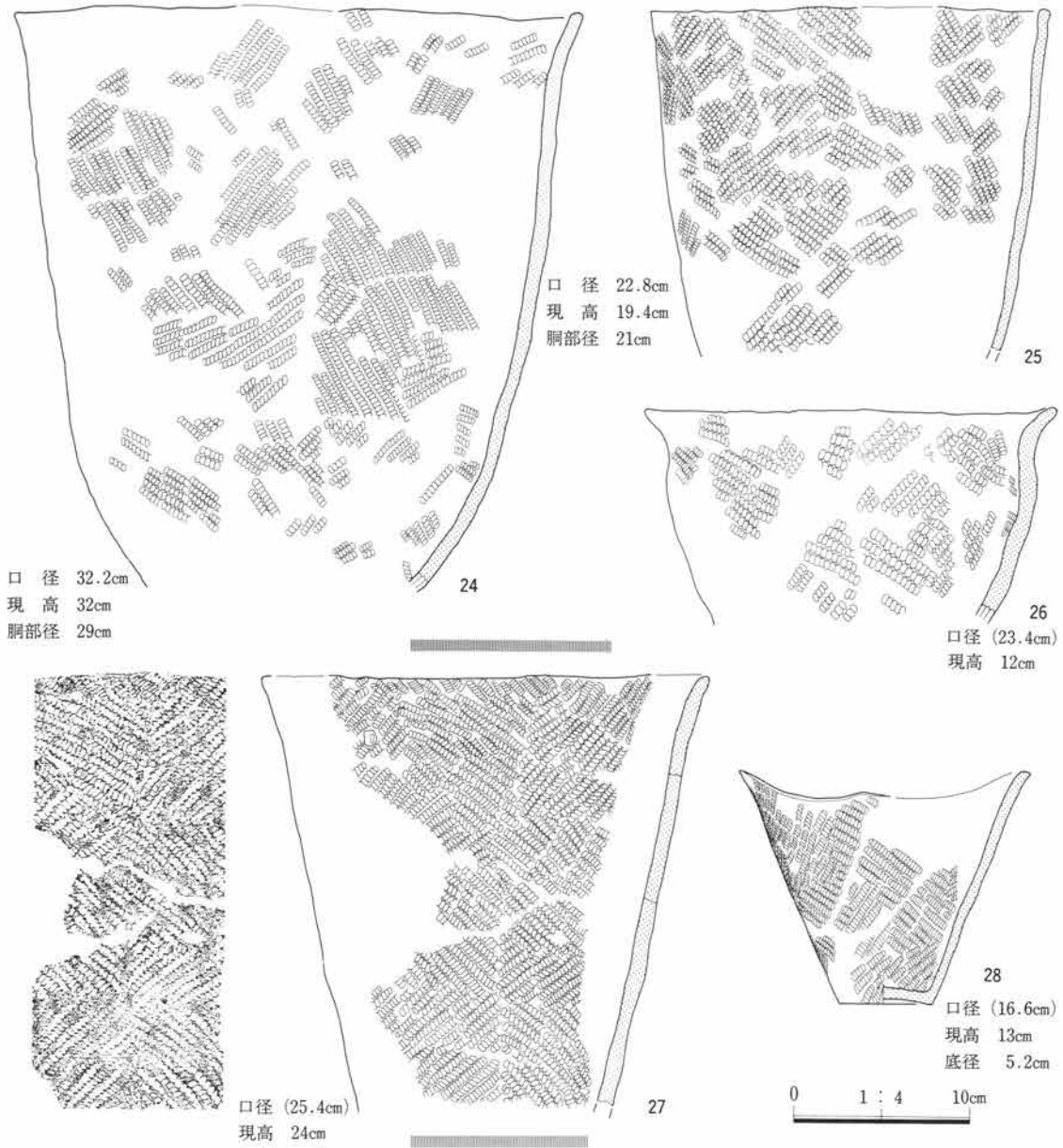
口径 (37.8cm)  
現高 11cm  
頸部径 (28cm)



23

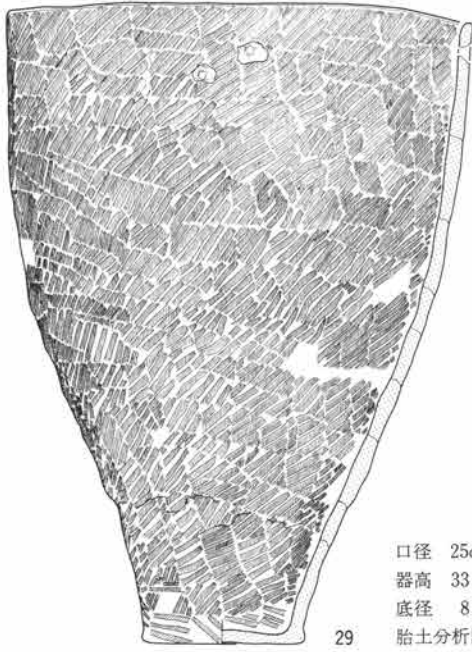
0 1 : 4 10cm

第71図 J-5号住居跡出土土器 (6)



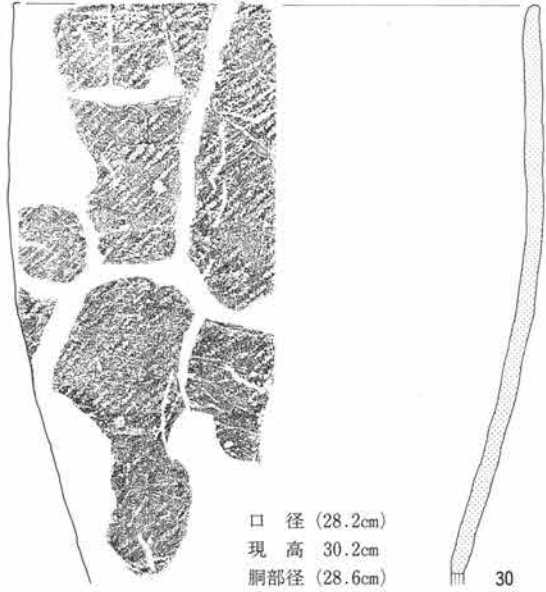
第72図 J-5号住居跡出土土器 (7)

図番 PL	器種	①胎土 ②焼成 (遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
73-30 PL. 51	深鉢形	①含繊維 ②やや良 ③外面 にふい黄橙色 内面 にふい黄橙色	深鉢形土器の半完形品。口縁部はほぼ直立し、口唇部はやや丸味をもつ。器厚9mm。内面は口縁部付近で横ミガキ、胴下半では縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ 。 外面に煤が付着している。	廃棄第1・第3ブロック付近で接合
73-31 PL. 51	深鉢形	①含繊維 ②やや良 ③外面 灰黄褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の大形破片。口縁部は外傾し、口唇部は先細り。器厚6mm~8mmで積みあげ技法A。内面はやや粗い調整が行われ、繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ 。 径8mmの補修孔が外面から作成されている。	廃棄第3ブロック



口径 25cm  
器高 33.8cm  
底径 8.6cm  
胎土分析試料

29



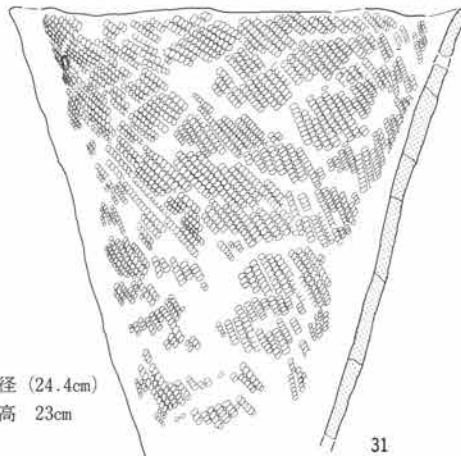
口径 (28.2cm)  
現高 30.2cm  
胴部径 (28.6cm)

30



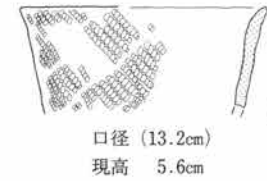
口径 (24.4cm)  
現高 23cm

31



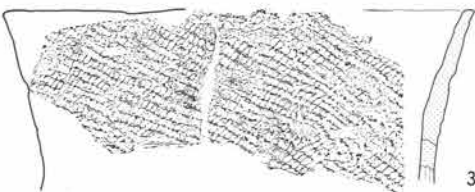
口径 (14.4cm)  
現高 9cm

32



口径 (13.2cm)  
現高 5.6cm

33



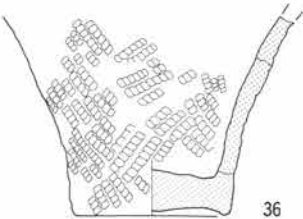
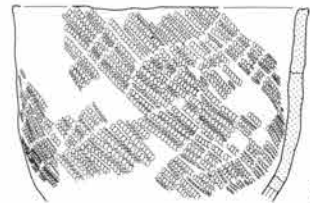
口径 (25.2cm)  
現高 9cm

34



口径 15.8cm  
現高 10cm

35



36



37



38



39

第73図 J-5号住居跡出土土器 (8)

図番 PL	器種	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様(その他)	出土状況
73-32 PL. 51	小型 土器	①含繊維 ②良 ③外面 におい褐色 内面 におい橙色	小型土器の口縁から胴部にかけて $\frac{1}{3}$ 。口縁部は外反し、口唇部は先細り。器厚6mm。内面は徹底した横・縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR( $\frac{1}{2}$ )。	廃棄第1ブ ロック付近
73-33 PL. 51	小型 土器	①含繊維 ②良 ③外面 におい褐色 内面 灰褐色	小型土器の口縁部 $\frac{1}{3}$ 。口唇部は先細り。器厚6mmで積みあげ技法A。内面は徹底した横ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR( $\frac{1}{2}$ )。	覆土
73-34 PL. 51	深鉢形	①含繊維 ②良 ③外面 におい黄褐色 内面 におい黄褐色	深鉢形土器の口縁部 $\frac{1}{3}$ 。口縁部は外反し、口唇部は平坦。器厚6mm~1cmで積みあげ技法A。内面は徹底した横ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR( $\frac{1}{2}$ ) (0段多条)。	住居跡北壁 付近
73-35 PL. 51 52		①含繊維 ②良 ③外面 におい褐色 内面 褐色	深鉢形土器の口縁から胴部にかけて $\frac{1}{2}$ 。口縁部は直立し、口唇部は沈線が巡る様な手法。内面は徹底した横・縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体は附加条第1種R( $\frac{1}{2}$ +L)。 外面に一部煤が付着している。	廃棄第1ブ ロック
73-36	底部片	①含繊維 ②やや良 ③外面 におい赤褐色 内面 褐色	上げ底で開いて立ち上がる。器厚8mm~1.2cmで接合技法C。内面・底面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR( $\frac{1}{2}$ )とL( $\frac{R}{2}$ )で羽状。 現高10.4cm、底径8.2cmを測る。	廃棄第1ブ ロック付近
73-37 PL. 51	底部片	①含繊維 ②良 ③外面 におい褐色 内面 におい黄褐色	上げ底で開いて立ち上がる。器厚6mm~8mmで積みあげ技法A。内面・底面はミガキが行われている。	縄文施文。原体はR( $\frac{1}{2}$ )とL( $\frac{R}{2}$ )で羽状。 現高4.8cm、底径6.0cmを測る。	廃棄第3ブ ロック
73-38 PL. 51	底部片	①含繊維 ②やや良 ③外面 灰褐色 内面 褐色	上げ底でかなり開いて立ち上がる。器厚8mm~1.1cmで接合技法A。内面は粗い調整で繊維痕が認められる。底面は徹底したミガキが行われている。	縄文施文。原体はR( $\frac{1}{2}$ ) (0段多条)。 現高5.4cm、底径9.8cmを測る。	廃棄第1ブ ロック
73-39 PL. 51	底部片	①含繊維 ②良 ③外面 におい黄褐色 内面 黒褐色	上げ底で開いて立ち上がる。器厚4mm~7mmで積みあげ技法A。内面・底面は徹底したミガキが行われている。	縄文施文。原体はR( $\frac{1}{2}$ ) (0段多条)とL( $\frac{R}{2}$ ) (0段多条)で羽状。 外面に一部煤が付着している。 現高6.8cm、底径5cmを測る。	廃棄第1ブ ロック付近

(≒ P.107)

櫛歯状工具による刺突文の施される土器は、まとまって出土しており、その量はJ-4号住居跡よりも多い。これはJ-4号住居跡とJ-5号住居跡の存続期間の差異と付号するものであろう。すなわち、同時期集落を構成する両住居跡ではあるが、早い段階で廃絶されたJ-5号住居跡に、櫛歯状工具による刺突文の施される土器が多く出土し、また口唇部に縄文帯をもつ土器も多い。しかし、J-5号住居跡出土土器にも櫛歯状工具による刺突文の施される土器を伴う廃棄第1・第3ブロックと、こうした土器を伴わない第2ブロックとが見られた。廃棄の時間差にもとづくものであろう。廃棄第2ブロックが後出である。

半截竹管によるC字爪形文の出土が圧倒的に多いが、D字 (=逆C) 爪形文も少量見られる。爪形文には器面との押圧角度によって3種の施文手法が確認された。A手法=器面に対して直角あるいは直角前後にあてるもの、B手法=鈍角刺突。器面に突き刺すように刺突している。C手法=器面を引きずるような手法、である。A・B・C手法ともほぼ同程度の量出土している。

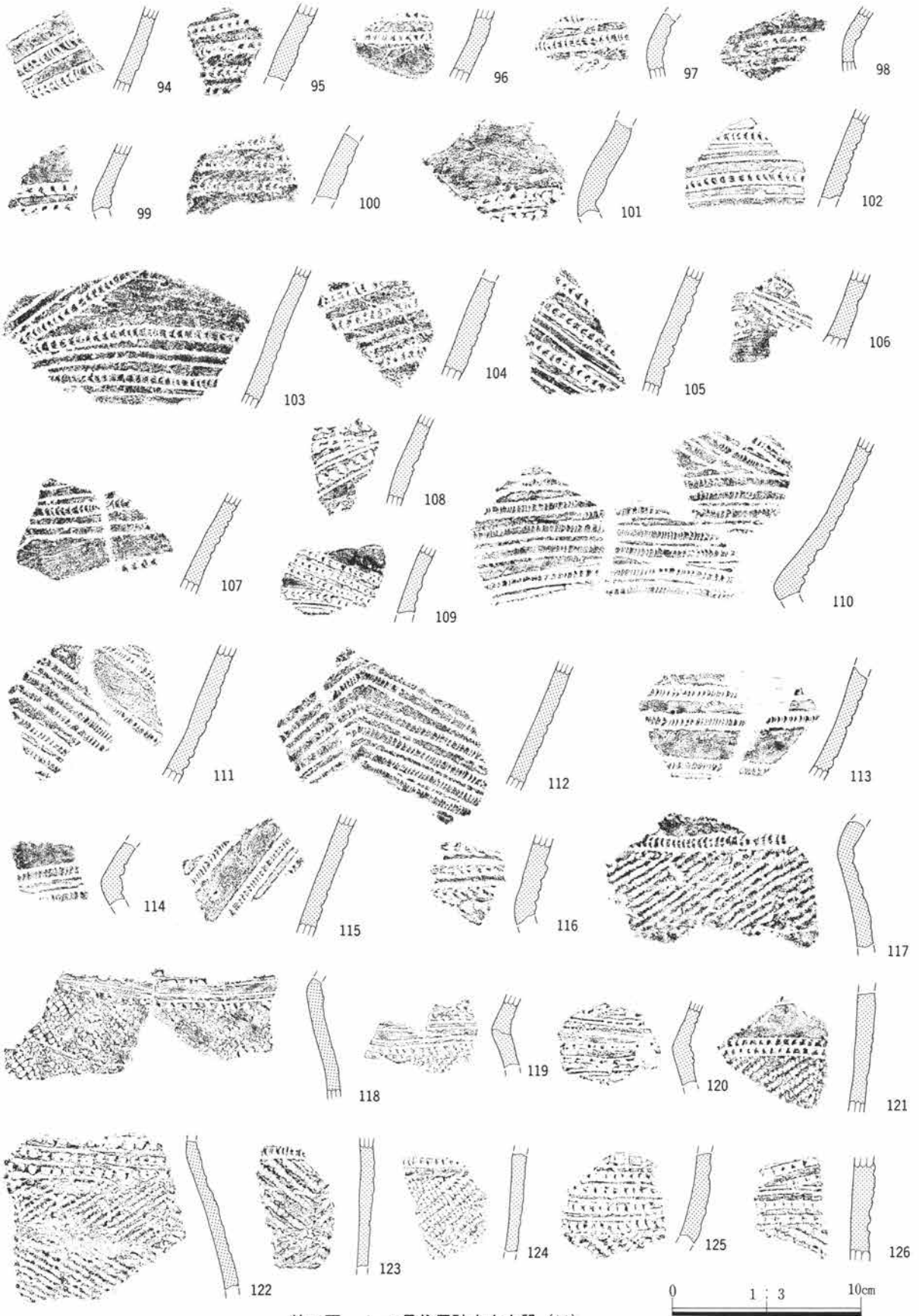




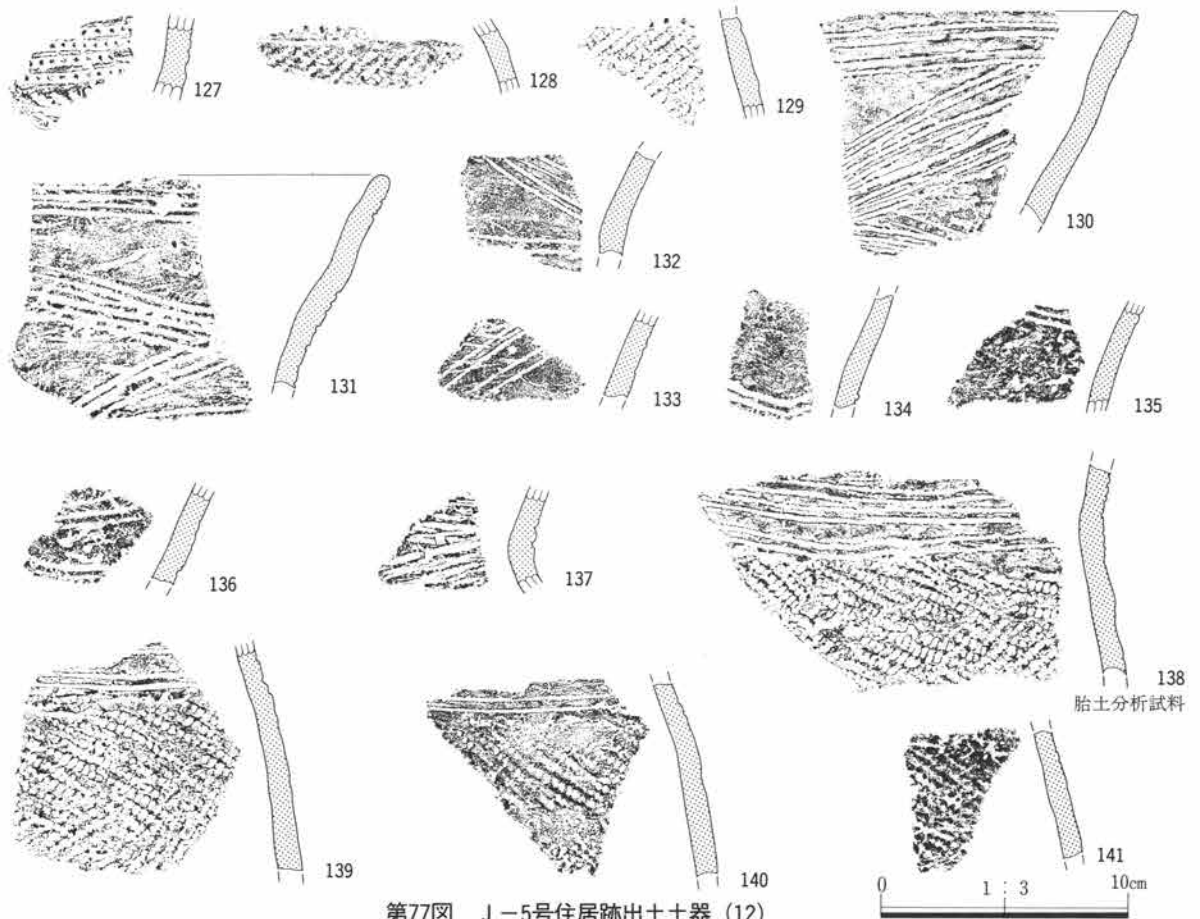
第74図 J-5号住居跡出土土器(9)



第75図 J-5号住居跡出土土器(10)



第76图 J-5号住居跡出土土器(11)



第77図 J-5号住居跡出土土器 (12)

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
74-40 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 赤褐色 内面 灰褐色	深鉢形土器の有段口縁部片。器厚 7mm~1cmで積みあげ技法A。内 面は丁寧な調整が行われている。	櫛歯状工具(4本・長さ1cm)に よる縦位刺突。 以下組紐。	覆土
74-41 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 暗褐色 内面 におい橙色	深鉢形土器の外傾する口縁部片 か。口唇部は平坦。器厚5mm~9 mmで積みあげ技法A。内面は丁寧 な調整が行われている。	巾3mmの方形の先端をもつ櫛歯状 工具(11本・長さ2.3cm)による斜 位刺突→縦位刺突。文様帯巾5cm。 以下縄文施文。原体はR(1/2)。	覆土
74-42 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 明赤褐色 内面 明赤褐色	甕形土器の波状口縁部片か。口唇 部は平坦。器厚9mm。内面はやや 丁寧な調整が行われている。	巾4mmの方形の先端をもつ櫛歯状 工具による斜位刺突。	覆土
74-43 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 暗赤褐色 内面 明赤褐色	甕形土器の内彎する波状口縁部片 で口唇部は平坦。器厚8mm。内面 は横ミガキが行われている。	巾3mmの円形の先端をもつ櫛歯状 工具(3本・長さ1cm)による縦位 刺突。以下巾5mmの半截竹管によ る平行沈線内にC字爪形文(手法 C)。	覆土
74-44 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 におい黄橙色 内面 におい黄橙色	甕形土器の内彎する波状口縁部片 で口唇部は沈線が巡る様な手法。 器厚9mm~1.2cmで積みあげ技法 A。内面は一部荒れていて繊維痕 が認められる。	口縁にそって2条の平行沈線(巾 7mm)・C字爪形文(手法B)の充 填。以下巾4mmの円形の先端をも つ櫛歯状工具による斜位刺突。	炉内出土

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
74-45 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黄灰色 内面 にぶい褐色	甕形土器の外傾する波状口縁部片で口唇部は平坦。器厚6mm~9mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	波頂部から縦位の平行沈線(巾6mm)→口縁にそって5条の平行沈線→沈線内に巾3mmの方形の先端をもつ櫛歯状工具による斜位刺突。	覆土
74-46 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 にぶい褐色 内面 にぶい橙色	甕形土器の外傾する波状口縁部片で口唇部はやや丸味をもつ。器厚6mm~8mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整。外面は荒れていて繊維痕顕著。	巾6mmの半載竹管による平行沈線内外に巾3mmの櫛歯状工具による刺突が行われている。	覆土
74-47 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 にぶい褐色 内面 にぶい褐色	甕形土器の内彎する波状口縁部片で口唇部は丸味をもつ。器厚7mm~9mm。内面はやや丁寧な調整。一部に繊維痕が認められる。	巾6mmと9mmの半載竹管による平行沈線で変形のモチーフ→巾2mmの円形の先端をもつ櫛歯状工具による縦位刺突。	廃棄第3ブロック
74-48 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 にぶい黄橙色 内面 明赤褐色	甕形土器の頸部片。器厚8mm~1cmで積みあげ技法AとB。内面は丁寧な調整が行われている。	巾3mmの方形の先端をもつ櫛歯状工具による斜位・横位刺突。	覆土
74-49 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 にぶい褐色 内面 にぶい橙色	甕形土器の頸部片。器厚8mm。内面は丁寧な調整が行われている。外面はザラザラ。	巾6mmの半載竹管による平行沈線にそって巾3mmの方形の先端をもつ櫛歯状工具による横位刺突。	炉内出土
74-50 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 にぶい黄橙色 内面 にぶい橙色	甕形土器の頸部片。器厚9mmで積みあげ技法A。内面は横ミガキが行われている。	巾2mmの方形の先端をもつ櫛歯状工具(5本・長さ1.5cm)による条線→横位刺突。巾6mmの平行沈線内にC字爪形文(手法A)の充填。	覆土
74-51 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 褐灰色 内面 にぶい黄橙色	甕形土器の頸部片。器厚8mmで積みあげ技法A。内面は横ミガキが行われている。	巾9mmの半載竹管による平行沈線内に巾3mmの方形の先端をもつ櫛歯状工具による横位刺突。	覆土
74-52 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 暗赤褐色 内面 極暗赤褐色	第67図4と同一個体。		廃棄第1ブロック
74-53 54 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 暗褐色 内面 にぶい黄橙色	第67図5と同一個体。		廃棄第3ブロック
74-55 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐色 内面 黒褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は沈線が巡る様な手法。器厚7mm。内面は横ミガキが行われている。	口唇部にR( $\frac{L}{L}$ (0段多条)の縄文施文。縄文帯巾3.3cm。以下巾5mmの半載竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法A)の充填。施文順序は縄文→爪形文。	覆土
74-56 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 にぶい赤褐色 内面 明赤褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は平坦。器厚7mm~9mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	口唇部に前々段反摺R( $\frac{L}{L}$ )の縄文施文。縄文帯巾3cm。以下巾5mmの平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。施文順序は縄文→爪形文。	覆土

図番 PL.	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
74-57 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 褐灰色 内面 褐灰色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部はやや丸味をもつ。器厚6mm。内面は横ミガキが行われている。	口唇部に前々段反撚R <sub>L</sub> (L <sub>L</sub> とL <sub>L</sub> )とL <sub>R</sub> (R <sub>R</sub> とR <sub>R</sub> )の縄文施文。縄文帯巾2.5cm。以下巾4mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。外面から径6mm~1cmの補修孔作成。	覆土
74-58 ↓ 61 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 褐灰色 内面 にぶい黄橙色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は肥厚し平坦。器厚7mm~1.2cm。内面は徹底した横ミガキが行われている。	口唇部に巾8mmの平行沈線を縦位施文。巾9mm~2.2cm。以下同工具による平行沈線内にD字爪形文(逆C・手法B)の充填。沈線は深く施文。施文順序は爪形文→沈線。	覆土
74-62 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 にぶい黄橙色 内面 にぶい黄橙色	甕形土器の外傾する波状口縁部片で口唇部は平坦。波頂部は丸味をもつ。器厚8mm。内面は丁寧な調整が行われている。	口唇部に巾4mmの平行沈線を縦位施文。巾8mm。以下巾8mmの平行沈線内にD字爪形文(逆C・手法B)の充填。沈線は深く施文。施文順序は爪形文→沈線。	廃棄第2ブロック
75-63 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 灰褐色 内面 灰褐色	甕形土器の内彎する波状口縁部片で口唇部は平坦。器厚7mm~9mmで積みあげ技法A。内面は横ミガキが行われている。	口縁にそって8条の平行沈線(巾4mm)内にC字爪形文(手法A)の充填。但し4条目と7条目の一部は爪形文の充填は行われていない。	覆土
75-64 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 にぶい黄橙色 内面 にぶい橙色	甕形土器の外傾する波状口縁部片で口唇部はやや丸味をもつ。器厚6mm~8mmで積みあげ技法A。内面は粗い調整。一部繊維痕が認められる。	口縁にそって巾8mmの平行沈線が4条、沈線内には巾5mmのC字爪形文(手法A)の充填。但し3条目の爪形文は沈線内には施文されていない。	廃棄第2ブロック付近
75-65 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 にぶい褐色	甕形土器の外傾する波状口縁部片で口唇部は平坦。器厚6mm~8mmで積みあげ技法A。内面は横ミガキが行われている。	口縁にそって3条の平行沈線(巾5mm)内にC字爪形文(手法AとC)の充填。以下2条の爪形文で菱形のモチーフ施文か。	覆土
75-66 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 にぶい黄橙色 内面 にぶい黄橙色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は平坦。器厚8mm。内面は粗い調整で繊維痕が認められる。	口縁にそって3条の平行沈線(巾6mm)内にC字爪形文(手法B)の充填。	覆土
75-67 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 暗褐色 内面 黒褐色	第69図12と同一個体。深鉢形土器の波状口縁部片で口唇部は沈線が巡る様な手法。器厚7mm。内面は横ミガキが行われている。	口縁にそって3条の平行沈線(巾5mm)の1条・3条目にC字爪形文(手法A)の充填。	覆土
75-68 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 にぶい褐色 内面 にぶい橙色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部はやや丸味をもつ。器厚5mm~8mmで積みあげ技法A。内面は横ミガキが行われている。	口縁にそって2条の平行沈線(巾4mm)内にC字爪形文(手法C)の充填。以下3条(?)の爪形文で菱形のモチーフ施文か。	覆土
75-69 72 76-100 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 黒褐色 内面 にぶい黄橙色	第75図72・第76図100と同一個体。甕形土器の外傾する波状口縁部片で口唇部はやや平坦。器厚6mm~9mmで積みあげ技法A。内面はザラザラしている。	口縁にそって5条の平行沈線(巾6mm)内にC字爪形文(手法B)の充填。	覆土
75-70 73 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 にぶい褐色 内面 にぶい橙色	第75図73と同一個体。甕形土器の波状口縁部片で口唇部は平坦。器厚7mm~1.1cm。内面は横ミガキが行われている。一部繊維痕が認められる。	口縁にそって5条の平行沈線(巾4mm)内にC字爪形文(手法C)の充填。	覆土
75-71 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 浅黄橙色 内面 にぶい黄橙色	甕形土器の外傾する波状口縁部片で口唇部は内削ぎ状。器厚9mmで積みあげ技法A。内面は徹底した横ミガキが行われている。	口縁にそって4条の平行沈線(巾7mm)内にC字爪形文(手法A)の充填。	覆土

図番 PL.	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
75-74 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 褐灰色 内面 にぶい橙色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は沈線が巡る様な手法。器厚6mm～8mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	口縁にそって3条の平行沈線(巾6mm)内にC字爪形文(手法A)の充填。	廃棄第2ブロック
75-75 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 暗赤褐色 内面 暗赤褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部に小突起が認められる。器厚9mm。内面は横ミガキが行われている。	口縁にそって6条の平行沈線(巾4mm)内にC字爪形文(手法C)の充填。爪形文の施文は乱雑である。	覆土
75-76 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 褐灰色 内面 にぶい黄橙色	甕形土器の外傾する波状口縁部片で口唇部は平坦。器厚6mm～8mm。内面は横ミガキが行われている。	口縁にそって2条の平行沈線(巾4mm)内にC字爪形文(手法C)の充填。	覆土
75-77 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 にぶい黄橙色 内面 にぶい黄橙色	甕形土器の外傾する波状口縁部片で口唇部は内削ぎ状。器厚8mm。内面は横ミガキが行われている。	口縁にそって3条1単位のC字爪形文(巾5mm・手法B)を2単位描いている。一部は平行沈線内に充填されている。	廃棄第3ブロック付近
75-78 79 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 橙色 内面 橙色	甕形土器のやや内彎する波状口縁部片で口唇部は平坦。器厚7mm～1cmで積みあげ技法A。内面はやや丁寧な調整。一部に繊維痕が認められる。	口縁にそって3条1単位の平行沈線(巾8mm)を2単位描いている。沈線内にD字爪形文(逆C・手法B)の充填。沈線の施文は深い。	廃棄第2ブロック付近
75-80 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 にぶい赤褐色 内面 褐灰色	甕形土器の頸部片。器厚8mmで積みあげ技法AとB。内面は縦ミガキが行われ、一部繊維痕が認められる。	括れ部に1条の平行沈線(巾5mm)内にC字爪形文(手法C)の充填。区画内を3条1単位の爪形文で菱形のモチーフ施文と思われる。	覆土
75-81 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 灰黄褐色 内面 にぶい橙色	甕形土器の頸部片。器厚1cm～1.2cm。内面はやや丁寧な調整。一部繊維痕が認められる。	巾4mmの半載竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。爪形文の充填されない沈線もある。菱形のモチーフ施文と思われる。	廃棄第3ブロック付近
75-82 76-99 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②不良 ③外面 浅黄橙色 内面 にぶい黄橙色	第76図99と同一個体。甕形土器の頸部片。器厚7mm～9mm。内面は荒れていて繊維痕が認められる。	巾5mmと6mmの半載竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法A)の充填。	覆土
75-83 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐色 内面 暗赤褐色	甕形土器の頸部片。器厚1cmで積みあげ技法AとB。内面は横ミガキが行われている。一部繊維痕が認められる。	巾5mmの半載竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。	覆土
75-84 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 にぶい褐色 内面 にぶい褐色	甕形土器の頸部片。器厚9mm。内面は丁寧な調整が行われている。	巾8mmの半載竹管による平行沈線内にD字爪形文(手法B)の充填。沈線は深く、爪形文は密に施文されている。	廃棄第2ブロック付近
75-85 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 褐灰色 内面 にぶい橙色	甕形土器の頸部片。器厚1.1cmで積みあげ技法A。内面は粗い調整が行われている。	巾4mmの半載竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法A)の充填。菱形のモチーフを施文。	廃棄第3ブロック付近
75-86 76-95 96 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 黒褐色 内面 黒褐色	第76図95・96と同一個体。甕形土器の括れ部。器厚1.1cmで積みあげ技法AとB。内外面ともザラザラしている。	巾6mmの半載竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法A)の充填。括れ部には2条施文されている。	覆土

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
75-87 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 灰白色 内面 ぶい褐色	甕形土器の頸部片。器厚7mm~9mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	巾6mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。	覆土
75-88 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 ぶい黄橙色 内面 灰黄褐色	甕形土器の頸部片。器厚1.1cmで積みあげ技法A。内外面はザラザラしている。	巾6mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法B)の充填。	廃棄第3ブロック
75-89 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 ぶい橙色 内面 暗赤褐色	甕形土器の頸部片。器厚1cm。内面は丁寧な調整が行われている。	巾8mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法B)の充填。渦巻状のモチーフ施文。	覆土
75-90 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 暗褐色 内面 ぶい黄橙色	甕形土器の頸部片。器厚6mm~9mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	巾6mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。	覆土
75-91 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②不良 ③外面 褐色 内面 黒褐色	甕形土器の頸部片。器厚9mm~1.1cmで積みあげ技法A。内外面は荒れていてザラザラ。繊維痕が認められる。	巾6mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法A)の充填。	覆土
75-92 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 褐灰色 内面 灰褐色	甕形土器の頸部片。器厚9mmで積みあげ技法A。内面は徹底したミガキが行われている。	巾5mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。	覆土
75-93 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 ぶい褐色 内面 褐灰色	甕形土器の頸部片。器厚1cmで積みあげ技法A。内面はザラザラしている。	巾8mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。	覆土
76-94 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐色 内面 暗赤褐色	甕形土器の頸部片。器厚7mm。内面は横ミガキが行われている。	巾1cmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法B)の充填。爪形文は密に施文されている。	廃棄第3ブロック
76-97 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 ぶい黄橙色 内面 ぶい赤褐色	甕形土器の括れ部。器厚6mm~8mmで積みあげ技法A。内面は粗い調整が行われている。一部繊維痕が認められる。	巾8mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法B)の充填。括れ部に2条認められる。	覆土
76-98 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 暗褐色 内面 暗褐色	甕形土器の括れ部。器厚7mm。内面は粗い調整。外面は荒れている。	巾6mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法A)の充填。	覆土
76-101 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 ぶい黄橙色 内面 ぶい黄褐色	甕形土器の頸部片。器厚1cmで積みあげ技法AとB。内外面は粗い調整で繊維痕が認められる。	巾5mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。	覆土
76-102 PL. 55			①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 黒褐色	甕形土器の頸部片。器厚9mmで積みあげ技法B。内面は徹底した横ミガキが行われている。	巾7mmの半截竹管による平行沈線とC字爪形文(手法C)の充填が交互に施文されている。	住居跡東壁寄り



図番 PL.	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
76-103 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 におい黄橙色 内面 におい黄橙色	甕形土器の頸部片。器厚8mm。内面はミガキが行われているが、一部荒れていて繊維痕が認められる。	巾7mmの半截竹管による平行沈線とC字爪形文(手法A)の充填が交互に施文されている。	廃棄第2ブロック
76-104 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②不良 ③外面 におい黄橙色 内面 におい黄褐色	甕形土器の頸部片。器厚1cmで積みあげ技法A。内面は粗い調整。外面は荒れていて繊維痕が認められる。	巾7mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法B)の充填。爪形文の充填のない沈線が1条認められる。	廃棄第3ブロック
76-105 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 褐灰色 内面 灰黄褐色	甕形土器の頸部片。器厚8mm。内面は横ミガキが行われている。	巾7mmの半截竹管による平行沈線とC字爪形文(手法AとC)の充填が交互に施文されている。	廃棄第2ブロック
76-106 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 褐灰色 内面 におい黄橙色	甕形土器の頸部片。器厚1cm。内面は横ミガキが行われている。	巾5mmの半截竹管による平行沈線とC字爪形文(手法A)の充填。	覆土
76-107 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 におい黄橙色 内面 灰黄褐色	甕形土器の頸部片。器厚8mm。内面は横ミガキが行われ、外面はザラザラして一部繊維痕が認められる。	巾7mmの半截竹管による平行沈線とC字爪形文(手法B)の充填が交互に施文されている。	覆土
76-108 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 灰黄褐色 内面 におい黄褐色	甕形土器の頸部片。器厚7mm~9mm。内面は横ミガキが行われている。	巾6mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法A)の充填。但し爪形文が充填されない沈線が1条認められる。	覆土
76-109 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 灰褐色 内面 灰褐色	甕形土器の頸部片。器厚7mm~9mmで積みあげ技法B。内面は徹底した横ミガキが行われている。	巾4mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。但し爪形文が充填されない沈線が1条認められる。	覆土
76-110 ↓ 113 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 におい橙色 内面 におい黄褐色	110~113は同一個体。甕形土器の頸部片。器厚8mm~1.2cmで積みあげ技法AとB。内面は徹底した横ミガキが行われている。	巾8mmの半截竹管による平行沈線内にD字爪形文(逆C・手法B)の充填。沈線は深く、爪形文は密に施文されている。	廃棄第2ブロック付近
76-114 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 橙色 内面 におい橙色	甕形土器の括れ部。器厚7mm~1cmで積みあげ技法AとB。内面はやや丁寧な調整が行われている。	巾7mmの半截竹管による平行沈線内にD字爪形文(逆C・手法B)の充填。沈線は深く、爪形文は密に施文されている。	廃棄第2ブロック付近
76-115 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 褐灰色 内面 におい黄褐色	甕形土器の頸部片。器厚9mm。内面は徹底した横ミガキが行われている。	巾8mmの半截竹管による平行沈線内にD字爪形文(逆C・手法B)の充填。沈線は深く、爪形文は密に施文されている。	覆土
76-116 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 におい黄褐色 内面 におい黄褐色	甕形土器の括れ部。器厚1cmで積みあげ技法B。内面は粗い調整が行われている。	巾7mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法B)の充填。	覆土
76-117 PL. 55	頸部~ 胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 褐灰色 内面 におい橙色	甕形土器の括れ部。器厚7mm~1cmで積みあげ技法A。内面は粗い調整が行われている。	巾8mmの半截竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法B)の充填。括れ部に1条認められる。以下縄文施文。原体はL(Ⅰ)か。	覆土

図 番 PL.	器 種 (部位)	法 量 (cm)	①胎土 ②焼成 (遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
76-118 119 PL. 55	頸部～ 胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 褐灰色 内面 ぶい黄橙色	118・119は同一個体。甕形土器の 括れ部。器厚7mmで積みあげ技法 AとB。内面は徹底した横ミガキ が行われている。	巾5mmの半截竹管による平行沈線 1条とC字爪形文(手法C)の充 填。2条が括れ部に施文されて いる。以下縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ 。 施文順序は縄文→爪形文。	住居跡東壁 寄り
76-120 PL. 55	頸部～ 胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 灰黄褐色 内面 ぶい黄橙色	甕形土器の括れ部。器厚6mm～1 cmで積みあげ技法B。内面は丁寧 な調整が行われている。	巾4mmの半截竹管による平行沈線 内にC字爪形文(手法A)の充填。 一部に爪形文の空白が認められ る。	覆土
76-121 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 ぶい橙色 内面 暗赤褐色	深鉢形土器の口縁部文様帯部分。 器厚8mm～1cmで積みあげ技法 B。内面は横ミガキが行われてい る。	巾5mmの半截竹管による平行沈線 内にC字爪形文(手法C)の充填。 以下縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ と前々 段反燃L $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で羽状。	覆土
76-122 PL. 55	頸部～ 胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 暗赤褐色 内面 ぶい赤褐色	甕形土器の括れ部から胴部片。器 厚6mm～8mmで積みあげ技法A。 内面は荒れていて繊維痕が認めら れる。	巾9mmの半截竹管による平行沈線 内に巾5mmのC字爪形文(手法C) の充填。括れ部に3条。以下縄文施 文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ とL $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ で羽状。	廃棄第2ブ ロック
76-123 PL. 55	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 ぶい黄橙色 内面 褐灰色	口縁部文様帯をもつ深鉢形土器の 胴部片。器厚5mm～7mmで積みあ げ技法B。内面はやや粗い調整。 一部に繊維痕が認められる。	巾6mmの半截竹管による平行沈線 内にC字爪形文(手法B)の充填。 以下縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ と L $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で羽状。施文順序は縄文→爪 形文。	廃棄第3ブ ロック
76-124 PL. 55	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 明赤褐色 内面 橙色	口縁部文様帯をもつ深鉢形土器の 胴部片。器厚7mmで積みあげ技法 A。内面は丁寧な調整が行われて いる。	巾5mmの半截竹管による平行沈線 内にC字爪形文(手法A)の充填。 以下縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ と L $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段3条)で羽状。	覆土
76-125 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 暗赤褐色	深鉢形土器の口縁部文様帯部分。 器厚7mm～9mmで積みあげ技法A とB。内面は横ミガキが行われて いる。	巾3mmの円形の先端をもつ櫛歯状 工具による縦位刺突。以下巾6mm の平行沈線内にC字爪形文(手法 C)の充填4条。胴部縄文はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ 。	覆土
76-126 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 暗赤褐色 内面 ぶい橙色	深鉢形土器の口縁部文様帯部分。 器厚1.1cm。内面は丁寧な調整が行 われている。	巾4mmの半截竹管による平行沈線 内にC字爪形文(手法A)の充填。 爪形文の充填されない沈線が1条 認められる。胴部縄文はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ 。	覆土
77-127 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 ぶい橙色 内面 明赤褐色	深鉢形土器の口縁部文様帯部分。 器厚1cm。内面は徹底した横ミガ キが行われている。	巾4mmの半截竹管による平行沈線 内にC字爪形文(手法C)の充填。 以下縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ 。	廃棄第1ブ ロック
77-128 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②不良 ③外面 ぶい黄橙色 内面 ぶい橙色	甕形土器の頸部片。器厚7mm。内 面は荒れていて繊維痕が認められ る。	巾4mmの半截竹管による平行沈線 内にC字爪形文(手法A)の充填。 以下縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ 。	廃棄第1ブ ロック
77-129 PL. 55	頸部片			第67図6と同一個体。		廃棄第3ブ ロック
77-130 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 褐灰色 内面 灰褐色	甕形土器の外傾する波状口縁部片 で口唇部は沈線が巡る様な手法。 器厚8mm～1.1cmで積みあげ技法 A。内面は荒れていて繊維痕が認 められる。	口縁にそって2条の平行沈線(巾 6mm)。区画内を4条1単位の平行 沈線で菱形のモチーフ施文と思わ れる。	廃棄第3ブ ロック付近

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
77-131 136 PL. 55	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 褐色 内面 ぶい橙色	甕形土器の外傾する波状口縁部片で口唇部はやや丸味をもつ。器厚8mm~1cmで積みあげ技法A。内面は荒れていて繊維痕顕著に認められる。	口縁にそって2条の平行沈線(巾5mm)。区画内を2条から3条の平行沈線で菱形のモチーフ施文と思われる。	廃棄第2・第3ブロック
77-137 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面褐色 内面 ぶい黄褐色	甕形土器の括れ部。器厚9mm。内面は粗い調整。一部繊維痕が認められる。	巾8mmの半截竹管による平行沈線が施文されている。	覆土
77-138 139 141 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 ぶい黄褐色 内面 ぶい橙色	甕形土器の括れ部。器厚9mmで積みあげ技法A。内外面は荒れていて繊維痕が認められる。	巾6mmの半截竹管による平行沈線が括れ部に施文されている。以下縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} L \\ R \end{array} \right.$ とL $\left\{ \begin{array}{l} L \\ R \end{array} \right.$ で羽状。	廃棄第2ブロック
77-140 PL. 55	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面褐色 内面 ぶい黄褐色	甕形土器の括れ部。器厚9mmで積みあげ技法A。内面は荒れていて繊維痕が認められる。	巾6mmの半截竹管による平行沈線が括れ部に施文されている。以下縄文施文。原体はR $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right.$ 。	廃棄第3ブロック

## (2)縄文のみ施文される土器群 (第71~73・78~83図)

当住居跡から出土した口縁部305点中、文様帯をもたない縄文施文だけの土器片は241点あった。また胴部片2982点も縄文施文のみであるが、このなかには明らかに口縁部文様帯をもつ胴部片も含まれている。底部片も同様である。J-4号住居跡の項(P.70)でも触れたが、口縁部文様帯をもつ土器の多くは内面に徹底したミガキが行われている。このため器内外面に繊維痕は顕著に認められない。一方、縄文のみ施文される土器(甕形土器を除く)の多くは内面の調整が悪く、器内外面に無数の繊維痕が認められる。土器使用時の差異にもとづくものと理解したい。

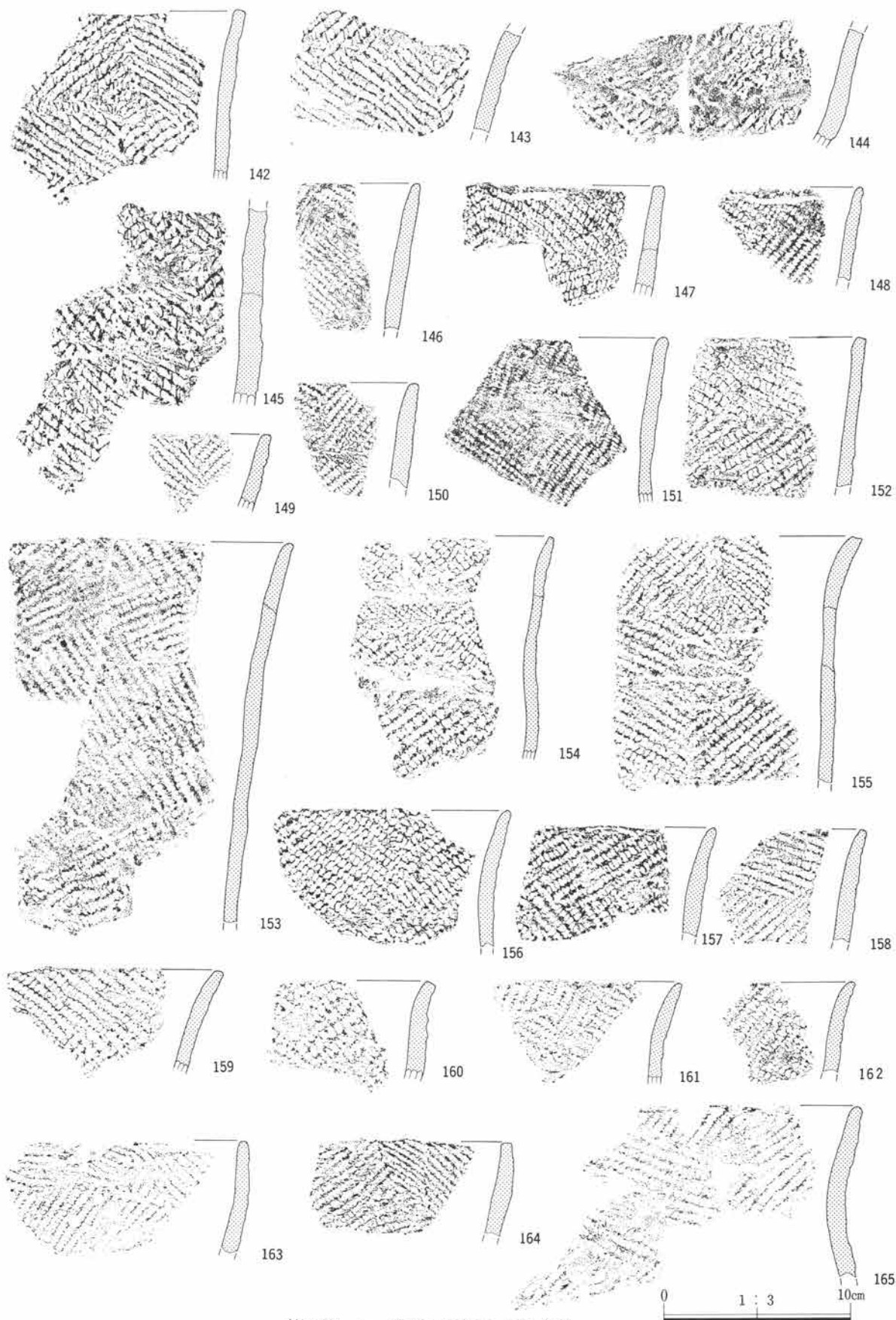
器形は甕形(21~23)、深鉢形(24・25・27・29~31)、鉢形(26)があり、甕形土器はいずれも大型である。波状口縁は小型深鉢形土器(28)にみられる。口唇部は先端先細りが最も多く、次いで平坦、丸味を呈す、などがみられる。口縁部文様帯をもつ土器群と口唇部の作出において相違が認められる。口縁から胴下部の成形(積みあげ技法)は圧倒的に技法Aが多い。土器内面は丁寧な調整も認められるが、概して遺存状況が悪く、器内外面に無数の繊維痕が見られる。底部は上げ底が圧倒的に多いが、平底も認められる。胴部と底部の接合は、技法Aが圧倒的に多く、技法B・Cは非常に少なかった。本書は便宜上、縄文原体を中心に以下のように分類した。

### a. 羽状縄文を施文する土器

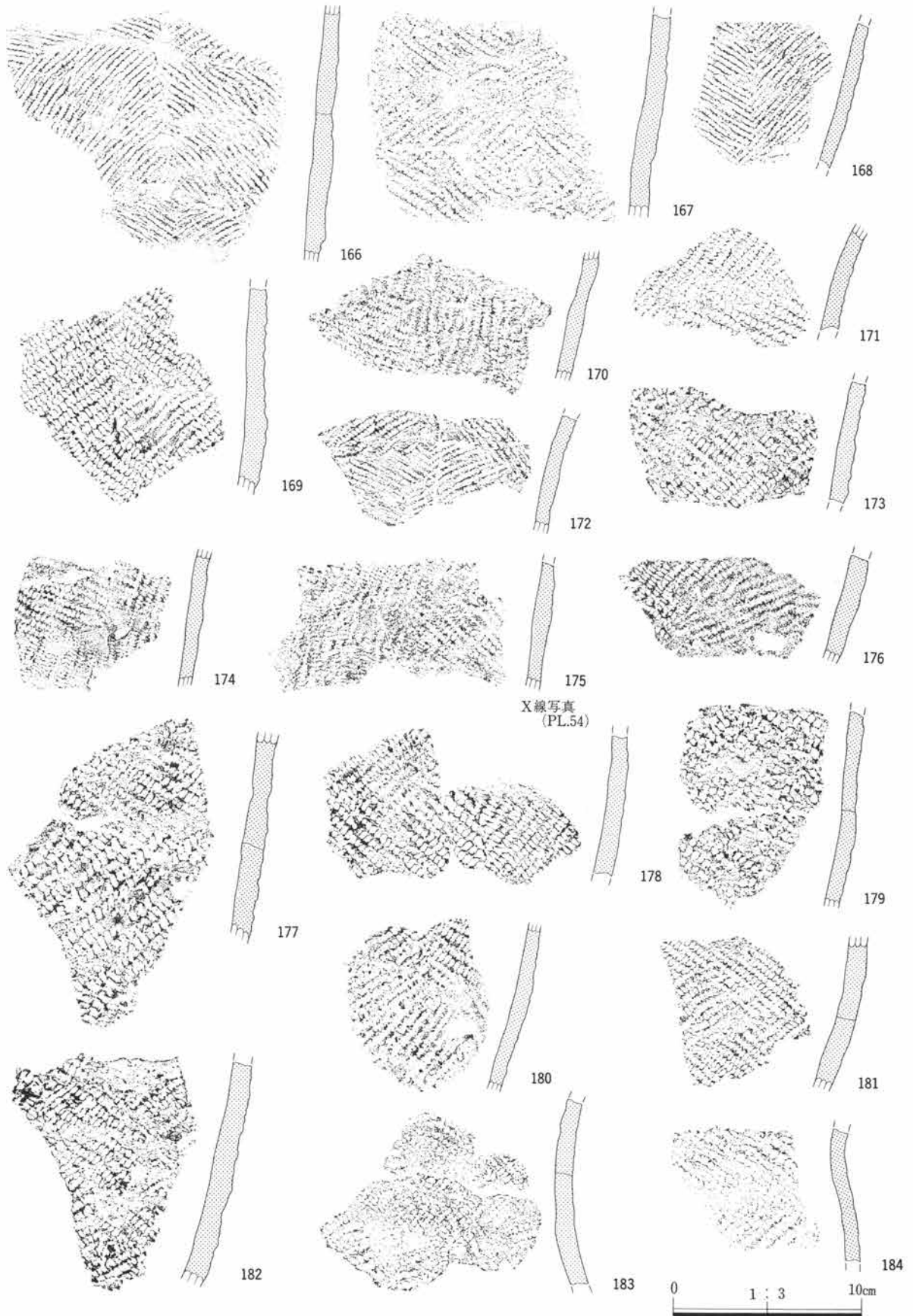
- ①無節斜縄文 R $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right.$  + L $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right.$  (142~145)
- ②単節斜縄文 R $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right.$  + L $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right.$  (21~28・36・37・39・146~185・272~277・288)
- ③前々段反撚と単節斜縄文 R $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \\ L \\ L \end{array} \right.$  + L $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right.$  (186・187)
- L $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \\ R \\ R \end{array} \right.$  + R $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right.$  (188・189)
- ④前々段反撚 R $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \\ L \\ L \end{array} \right.$  + L $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \\ R \\ R \end{array} \right.$  (190~193・278)
- (⇒P.135)

### b. 斜縄文を施文する土器

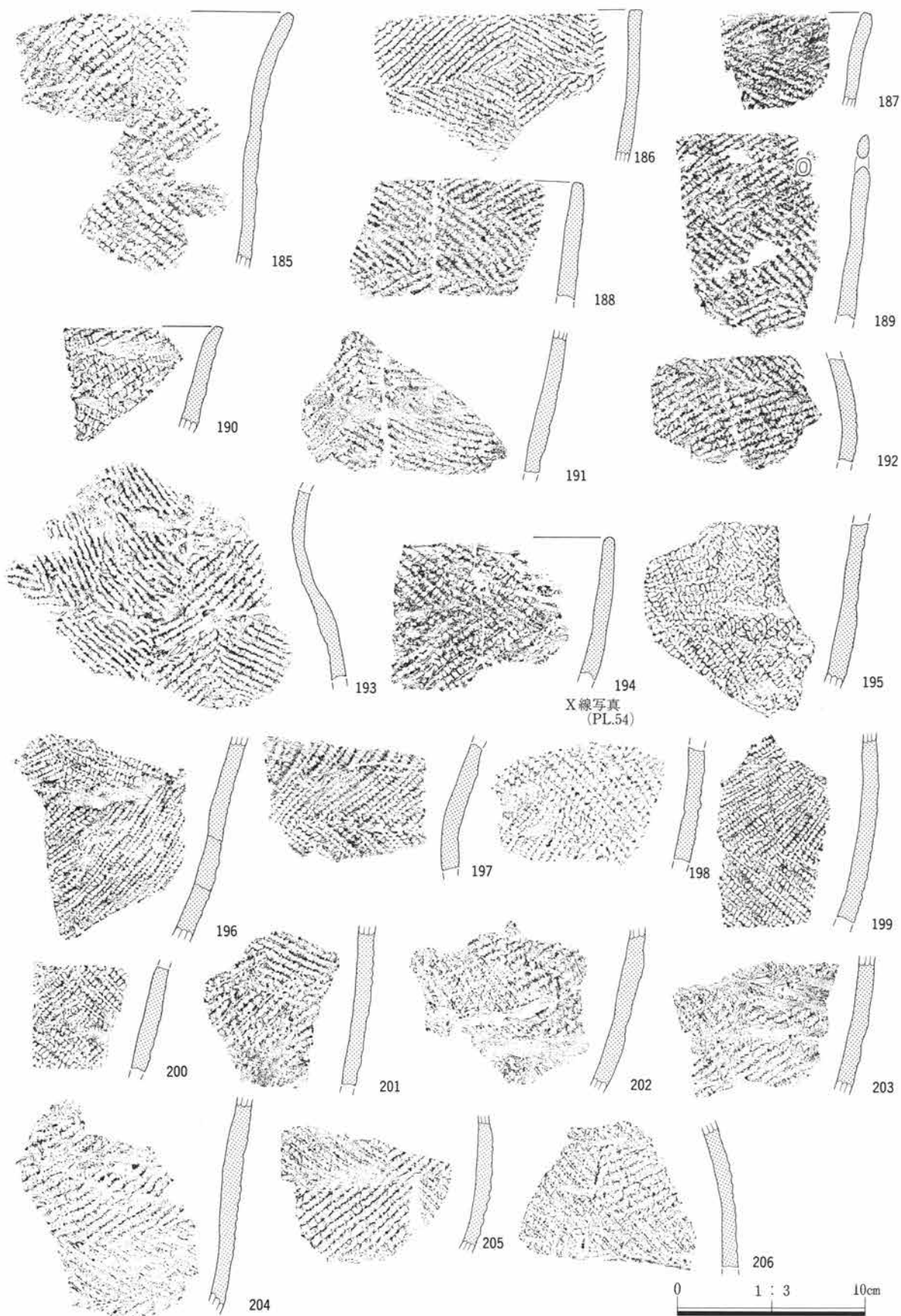
- ①無節斜縄文 R $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right.$  (207~210・279~281) L $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right.$  (29・211~214)
- ②単節斜縄文 R $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right.$  (31~34・38・215~244・282~287・289・293・294)
- L $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right.$  (30・245~259・261~268・290~292)
- ③複節斜縄文 R $\left\{ \begin{array}{l} L \\ R \\ R \\ R \end{array} \right.$  (269)
- ④前々段反撚 L $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \\ R \\ R \end{array} \right.$  (260・296)
- ⑤附加条第1種  $\left\{ \begin{array}{l} L \\ R \\ R + r \end{array} \right.$  (271) R $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right.$  (35)
- R $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \\ L \end{array} \right.$  (295)



第78図 J-5号住居跡出土土器 (13)



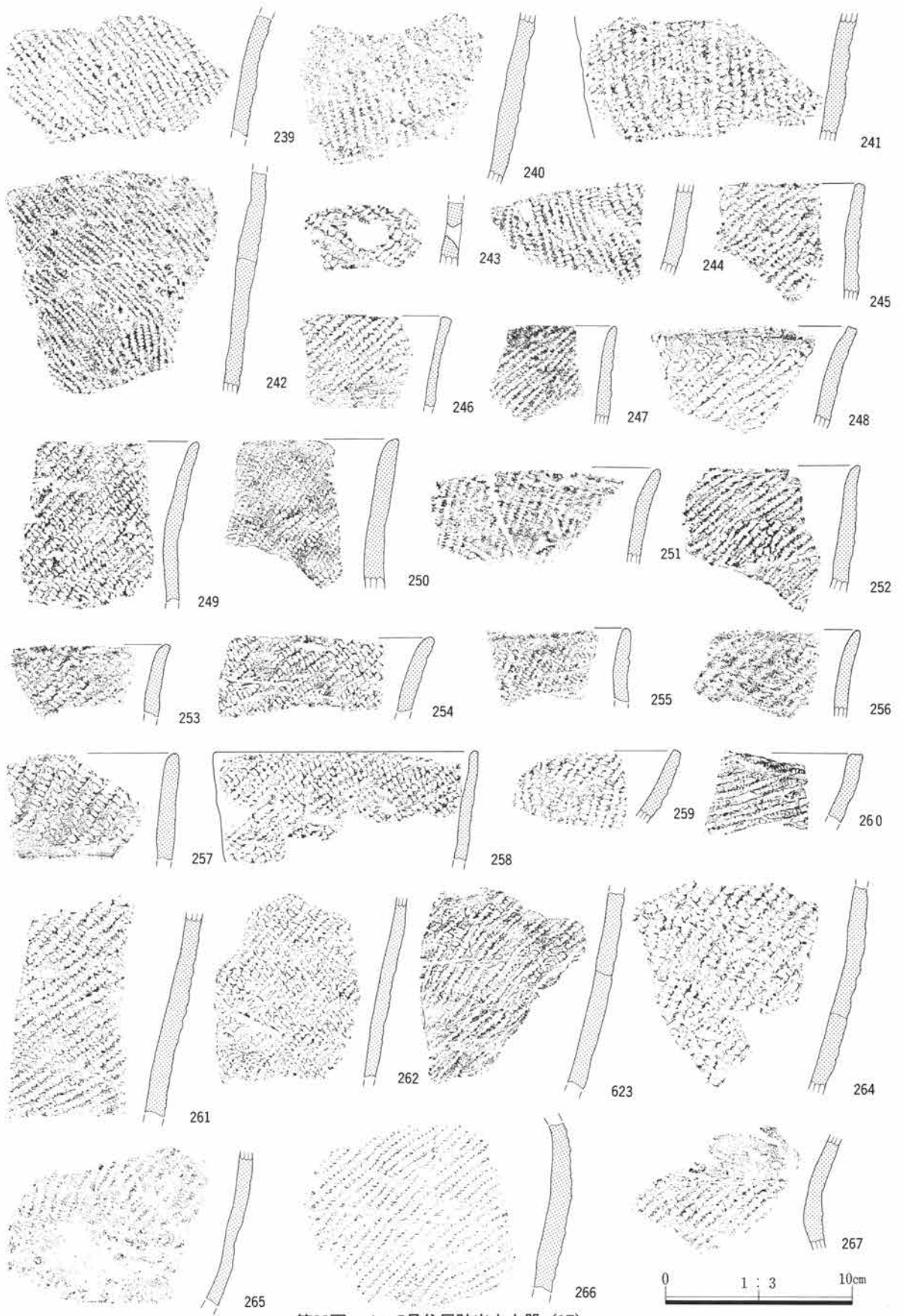
第79図 J-5号住居跡出土土器 (14)



第80図 J-5号住居跡出土土器 (15)

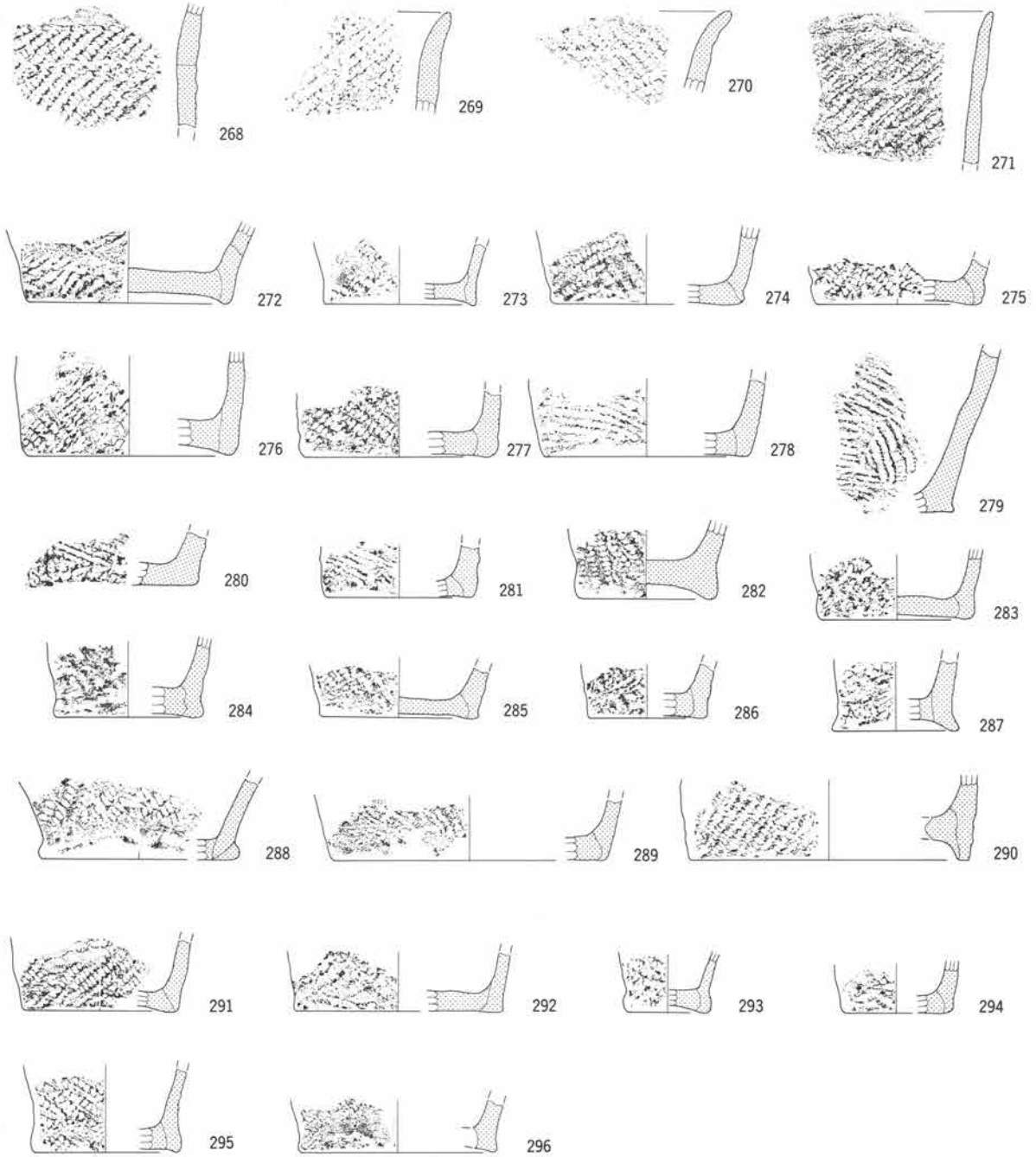


第81図 J-5号住居跡出土土器 (16)



第82図 J-5号住居跡出土土器 (17)





第83図 J-5号住居跡出土土器 (18)

⑤附加条第1種

- $L \left\{ \begin{matrix} R \\ R+r \end{matrix} \right. \text{と} R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right. \text{ (194)}$
- $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L+1 \end{matrix} \right. \text{と} L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right. \text{ (270)}$
- $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L+L \end{matrix} \right. \text{と} L \left\{ \begin{matrix} R \\ R+R \end{matrix} \right. \text{ (195~200)}$
- $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right. \text{と} L \left\{ \begin{matrix} R \\ R+r \end{matrix} \right. \text{ (201)}$
- $L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right. \text{と} R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right. + L \text{ (2本) (202~206)}$

(≪P.129)

斜縄文土器の中には羽状縄文土器の破片もかなりの量含まれる。原体は0段多条が多様される。前々段反撚の原体も特徴的である。

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
78-142	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 褐色 内面にふい 橙色	深鉢形土器のやや外反する口縁部 片で口唇部は平坦。器厚7mm。内 面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR(1)とL(7)で 羽状。原体交換部で菱形状の交叉。 一部粘土の移動による畝状の隆 起。	廃棄第3ブ ロック付近
78-143	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 褐色 内面 にふい 橙色	142と同一個体。深鉢形土器の胴部 片。器厚8mm～1cmで積みあげ技 法A。内面は繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR(1)とL(7)で 羽状。原体交換部で菱形状の交叉。 土器面は柔軟で押圧が強い。	覆土
78-144 -145	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 橙色 内面 灰褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm～ 1cmで積みあげ技法A。内面は丁 寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR(1)とL(7)で 羽状。 内面に一部煤が付着している。	廃棄第1・ 第3ブロッ ク
78-146	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐色 内面 暗褐色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部 片で口唇部はやや丸味をもつ。器 厚6mm～9mmで積みあげ技法A。 内面には一部繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR(1)とL(8)で 羽状。 縄の開端を別の条で縛る。	覆土
78-147	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 にふい 褐色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部 片で口唇部は平坦。器厚7mm～9 mmで積みあげ技法B。内面は徹底 した横ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR(1)とL(8)で 羽状。 L(8) (0段3条)とL(8) (0段3条)で羽状。	覆土
78-148	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 にふい 橙色 内面 にふい 褐色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部 片で口唇部は先細り。器厚5mm～ 7mmで積みあげ技法A。内面はザ ラザラしている。	縄文施文。原体はR(1)とL(8) (0 段多条)で羽状。	廃棄第3ブ ロック
78-149	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 灰褐 色 内面 にふい 褐色	甕形土器の口縁部片か。器厚6mm ～8mm。内面は徹底した横ミガキ が行われている。	縄文施文。原体はR(1) (0段多条) とL(8) (0段多条)で羽状。 外面に一部煤が付着している。	覆土
78-150	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 黒褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部 片で口唇部は丸味をもつ。器厚8 mm～1cmで積みあげ技法A。内面 は繊維痕顕著に認められる。	縄文施文。原体はR(1) (0段多条) とL(8) (0段3条)で羽状。 縄の開端を別の条で縛る。	覆土
78-151	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 橙色 内面 褐灰色	深鉢形土器のやや外反する口縁部 片で口唇部は丸味をもつ。器厚6 mm～8mm。内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体はR(1)とL(8) (0 段多条)で羽状。	廃棄第3ブ ロック
78-152	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面に ふい褐色内面にふい 褐色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部 片で口唇部は沈線が巡る様な手 法。内面はザラザラしている。	縄文施文。原体はR(1) (0段多条) とL(8) (0段多条)で羽状。 土器面は柔軟で押圧が強い。	廃棄第2ブ ロック付近
78-153	口縁部 ～胴部 片		①含繊維 ②良 ③外面 にふい 褐色 内面 灰褐色	深鉢形土器の外反する口縁部片で 口唇部は先細り。器厚6mm～8mm で積みあげ技法A。内面は丁寧な 調整が行われている。	縄文施文。原体はR(1)とL(8)で 羽状。菱形状の交叉を意識してい る。	廃棄第1ブ ロック
78-154	口縁部 片		①含繊維 ②不良 ③外面 にふい 褐色 内面 にふい 黄褐色	深鉢形土器のやや外反する口縁部 片で口唇部は平坦。器厚5mm～7 mmで積みあげ技法A。内面は丁寧 な調整、外面は荒れている。	縄文施文。原体はR(1) (0段多条) とL(8) (0段多条)で羽状。	廃棄第3ブ ロック
78-155	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の外反する口縁部片で 口唇部は肥厚し、沈線が巡るよう な手法。器厚5mm～9mmで積みあ げ技法A。内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体はR(1) (0段多条) とL(8) (0段多条)で羽状。原体 交換部で菱形状の交叉。 一部粘土の移動による畝状の隆起。	廃棄第2ブ ロック
78-156	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 にふい 黄褐色 内面 にふい 褐色	甕形土器の口縁部片か。口唇部は やや丸味をもつ。器厚6mm～8mm で積みあげ技法A。内面は丁寧な 調整が行われている。	縄文施文。原体はR(1) (0段3条) とL(8) (0段3条)で羽状。 縄の開端を別の条で縛る。	住居跡中央 部付近
78-157	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 にふい 赤褐色	深鉢形土器のやや外反する口縁部 片で口唇部は先細り。器厚6mm～ 9mmで積みあげ技法A。内面は丁 寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR(1) (0段多条) とL(8) (0段多条)で羽状。	廃棄第1ブ ロック

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
78-158	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 黄橙色 内面浅黄橙色	甕形土器の口縁部片か。口唇部は 平坦。器厚6mm~9mmで積みあげ 技法A。内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段4条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段4条)で羽状。 土器面は柔軟で押圧が強い。	覆土
78-159	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 黄橙色内面にふい黄橙色	深鉢形土器の外反する口縁部片で 口唇部は平坦。器厚7mm。内面は 丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	覆土
78-160	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器のやや外反する口縁部 片で口唇部は平坦。器厚7mm~9 mm。内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で 羽状。	覆土
78-161	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐 色 内面 灰黄褐色	深鉢形土器の外反する口縁部片。 器厚5mm~7mm。内面は丁寧な調 整、外面に一部繊維痕。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。土器 面は柔軟。	廃棄第3ブ ロック
78-162	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 暗赤褐色 内面 灰黄褐色	深鉢形土器の外反する口縁部片で 口唇部は先細り。器厚6mm~8mm で積みあげ技法B。内面は徹底し たミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で 羽状。	覆土
78-163	口縁部 片		①含繊維 ②不良 ③外面 明赤褐色 内面 にふい橙色	深鉢形土器の内彎する口縁部片で 口唇部は沈線が巡る様な手法。器 厚6mm~8mmで積みあげ技法A。 内面は条痕風の調整痕。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	覆土
78-164	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面にふい橙色	深鉢形土器の内彎する口縁部片で 口唇部は平坦。器厚6mm~1cmで 積みあげ技法A。内面はザラザラ。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。 粘土の移動による畝状の隆起。	廃棄第1ブ ロック
78-165	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 褐色 内面 灰褐色	深鉢形土器の外反する口縁部片で 口唇部は丸味をもつ。器厚8mm~ 1cmで積みあげ技法A。内面は繊 維痕が認められる。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。外面 に一部煤が付着している。	廃棄第3ブ ロック付近
79-166	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm~ 1cmで積みあげ技法A。内面は徹 底した縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。原体交 換部で菱形状の交叉。内面煤付着。	廃棄第1ブ ロックと住 居跡中央部
79-167	胴部片		①含繊維 ②不良 ③外面にふ い橙色内面にふい黄橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚1cmで 積みあげ技法A。内面は荒れてい て繊維痕顕著に認められる。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ で 羽状。原体交換部で菱形状・X状 の交叉。	廃棄第2ブ ロック
79-168	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 黄橙色内面にふい黄橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mmで 積みあげ技法A。内面は丁寧な調 整が行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。 縄の開端を別の条で縛る。	住居跡中央 部
79-169	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm~ 1.1cmで積みあげ技法A。内面はザ ラザラで一部繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。原体 交換部で菱形状の交叉。	廃棄第1ブ ロック
79-170	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面に ふい橙色内面にふい褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面はザラザラ、一部繊維痕が認 められる。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。	廃棄第3ブ ロック
79-171	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面 暗褐色	甕形土器の胴部片か。器厚8mmで 積みあげ技法B。内面は非常に丁 寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。 縄の開端を別の条で縛る。	廃棄第1ブ ロック
79-172	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法A。内面は徹底した ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条) とL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条)で羽状。原体交 換部で菱形状の交叉。内面に煤付 着。	覆土

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
79-173	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法A。内面は丁寧な調 整が行われている。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ (0段多条) とL( $\frac{R}{R}$ (0段多条)で羽状。	廃棄第1ブ ロック
79-174	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 橙色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm。 内面は丁寧な調整。一部繊維痕が 認められる。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ )とL( $\frac{R}{R}$ )で 羽状。	廃棄第2ブ ロック付近
79-175	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 にふい橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm～ 1cmで積みあげ技法A。内外面に 繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ )とL( $\frac{R}{R}$ )で 羽状。	覆土
79-176	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面に ふい黄褐色内面褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚1cmで 積みあげ技法A。内面は丁寧な調 整が行われている。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ (0段多条) とL( $\frac{R}{R}$ (0段多条)で羽状。	覆土
79-177	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面暗 褐色 内面灰黄褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm～ 1.2cmで積みあげ技法A。内外面と も繊維痕顕著に認められる。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ (0段多条) とL( $\frac{R}{R}$ (0段多条)で羽状。	覆土
79-178	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐 色 内面 暗赤褐色	甕形土器の胴部片か。器厚8mm～ 1cmで積みあげ技法A。内面は丁 寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ )とL( $\frac{R}{R}$ (0 段多条)で羽状。原体交換部で菱 形状の交叉。外面に一部煤付着。	覆土
79-179	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法A。内面はやや荒い 調整が行われている。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ )とL( $\frac{R}{R}$ )。 乱雑な施文である。 土器面は柔軟。	覆土
79-180	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 褐色内面にふい黄褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は丁寧な縦ミガキが行われて いる。外面に一部繊維痕。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ (0段多条) とL( $\frac{R}{R}$ (0段多条)で羽状。土器 面は柔軟。内面に一部煤が付着。	住居跡東壁 付近
79-181	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面 暗褐色	甕形土器の胴部片か。器厚1cmで 積みあげ技法A。内面は丁寧な調 整が行われている。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ (0段多条) とL( $\frac{R}{R}$ (0段多条)で羽状。原体 交換部で菱形の交叉。	廃棄第1ブ ロック付近
79-182	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面明 褐色 内面 褐灰色	甕形土器の胴部片か。器厚1.2cmで 積みあげ技法A。内面はザラザラ し、一部繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ (0段多条)と L( $\frac{R}{R}$ (0段多条)で羽状。土器面は柔 軟で押圧が強い。外面に一部煤が付着。	廃棄第3ブ ロック
79-183	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 褐灰 色 内面 褐灰色	甕形土器の頸部片。器厚1cmで積 みあげ技法A。内面は横ミガキが 行われているが、一部繊維痕顕著。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ )とL( $\frac{R}{R}$ )で やや乱雑な施文。 外面に一部煤が付着している。	住居跡北西 コーナー付 近
79-184	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 黄褐色 内面褐灰色	甕形土器の胴部片。器厚7mmで積 みあげ技法A。内面は丁寧な調整、 外面に一部繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ )とL( $\frac{R}{R}$ )で 羽状。	覆土
80-185	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面に ふい褐色内面にふい橙色	深鉢形土器の外反する口縁部片で 口唇部はやや平坦。器厚7mm。内 外面に繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ (0段多条) とL( $\frac{R}{R}$ (0段多条)で羽状。原体 交換部で菱形の交叉。	廃棄第3ブ ロック
80-186	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 にふい黄褐色 内面 にふい黄褐色	深鉢形土器のやや内彎する口縁部 片で口唇部は平坦。器厚7mm。内 面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体は前々段反燃 R( $\frac{L}{L}$ とL( $\frac{R}{R}$ (0段4条)で羽 状。原体交換部で菱形の交叉。縄 の開端を別の条で縛る。外面に煤 付着。	住居跡中央 部
80-187	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面明 褐色 内面 明褐色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部 片で口唇部は平坦。器厚7mm。内 外面はザラザラしている。	縄文施文。原体は前々段反燃 R( $\frac{L}{L}$ とL( $\frac{R}{R}$ )で羽状。	廃棄第2ブ ロック

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
80-188	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 におい黄橙色 内面 におい黄橙色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部 片で口唇部はやや丸味をもつ。器 厚7mm~9mmで積みあげ技法A。 内面はザラザラしている。	縄文施文。原体は前々段反燃 $L \left\langle \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right\rangle$ と $R \left\langle \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right\rangle$ で羽状。	住居跡北西 コーナー付 近
80-189	口縁部 片		①含繊維 ②不良 ③外面 におい黄橙色 内面 におい黄橙色	188と同一個体。口唇部は内削ぎ状 を呈する。内面はザラザラで繊維 痕が認められる。	縄文施文。原体は前々段反燃 $L \left\langle \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right\rangle$ と $R \left\langle \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right\rangle$ で羽状。 内外面から径4mmの補修孔が作成 されている。	廃棄第2ブ ロック付近
80-190	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面におい黄橙色 内面 におい黄橙色	甕形土器の口縁部片か。口唇部は 平坦。内面は徹底した横ミガキが 行われている。	縄文施文。原体は前々段反燃 $R \left\langle \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right\rangle$ と $R \left\langle \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right\rangle$ で羽状。 土器面は柔軟で押圧が強い。	覆土
80-191	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法A。内面は丁寧な調 整が行われている。	縄文施文。原体は前々段反燃 $R \left\langle \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right\rangle$ と $L \left\langle \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right\rangle$ で羽状。	住居跡北壁 付近
80-192	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 におい橙色 内面 褐灰色	甕形土器の胴部片か。器厚8mmで 積みあげ技法A。内面は徹底した 横ミガキが行われている。	縄文施文。原体は前々段反燃 $R \left\langle \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right\rangle$ と $L \left\langle \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right\rangle$ で羽状。 外面に一部煤が付着している。	廃棄第3ブ ロック
80-193	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 褐灰色	甕形土器の胴部片。器厚6mm~9 mmで積みあげ技法A。内面は丁寧 な調整が行われている。	縄文施文。原体は前々段反燃 $R \left\langle \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right\rangle$ と $L \left\langle \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right\rangle$ で羽状。 内面に一部煤が付着している。	廃棄第3ブ ロック
80-194	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 浅黄橙色 内面 におい黄橙色	深鉢形土器のやや内彎する口縁部 片で口唇部はやや丸味をもつ。器 厚6mm~9mmで積みあげ技法A。 内面はやや丁寧な調整。	縄文施文。原体は附加条第1種 $L \left\langle \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right\rangle + r$ と $R \left\langle \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right\rangle$ で羽状。	廃棄第2ブ ロック
80-195	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒色 内面 におい赤褐色	甕形土器の胴部片か。器厚7mm~ 1.1cmで積みあげ技法B。内面は徹 底したミガキが行われている。	縄文施文。原体は附加条第1種 $R \left\langle \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right\rangle + L$ と $L \left\langle \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right\rangle + R$ で羽状。	住居跡東壁 付近
80-196	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面におい 黄橙色内面灰黄褐色	甕形土器の胴部片か。器厚8mm~ 1cmで積みあげ技法A。内面は縦 ミガキが行われている。	縄文施文。原体は附加条第1種 $R \left\langle \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right\rangle + L$ と $L \left\langle \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right\rangle + R$ で羽状。	住居跡西壁 寄り
80-197	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面褐 色 内面におい橙色	甕形土器の頸部片。器厚7mm~9 mmで積みあげ技法AとB。内面は ザラザラして一部繊維痕あり。	縄文施文。原体は附加条第1種 $R \left\langle \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right\rangle + L$ と $L \left\langle \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right\rangle + R$ で羽状。	廃棄第3ブ ロック
80-198	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面明赤褐 色 内面におい黄橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm~ 9mmで積みあげ技法A。内面は条 痕風の調整痕で一部繊維痕あり。	縄文施文。原体は附加条第1種 $R \left\langle \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right\rangle + L$ と $L \left\langle \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right\rangle + R$ で羽状。	廃棄第1ブ ロック
80-199	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面におい 黄橙色内面灰黄褐色	甕形土器の胴部片か。器厚8mm~ 1cmで積みあげ技法A。内面は縦 ミガキが行われている。	縄文施文。原体は附加条第1種 $R \left\langle \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right\rangle + L$ と $L \left\langle \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right\rangle + R$ で羽状。	廃棄第3ブ ロック
80-200	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 明褐 色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法A。内面は丁寧な調 整が行われている。	縄文施文。原体は附加条第1種 $R \left\langle \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right\rangle + L$ と $L \left\langle \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right\rangle + R$ で羽状。原 体交換部で菱形の交叉。	覆土
80-201	胴部片		①含繊維 ②不良 ③外面 明褐色 内面 橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法A。内外面は繊維痕 顕著に認められる。	縄文施文。原体は前々段反燃 $R \left\langle \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right\rangle$ と附加条第1種 $L \left\langle \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right\rangle + r$ で羽状。	廃棄第1ブ ロック付近
80-202 -203 -204 -206	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 明褐色 内面 褐灰色	甕形土器の胴部片。器厚7mm~9 mm。内面は丁寧な横ミガキが行わ れている。	縄文施文。原体は前々段反燃 $L \left\langle \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right\rangle$ と附加条第1種 $R \left\langle \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right\rangle$ +L(2本)で羽状。内面に煤が付着。	廃棄第2・ 第3ブロッ ク

図 番 PL	器 種 (部位)	法 量 (cm)	①胎土 ②焼成 (遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
80-205	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 灰褐色 内面 明黄褐色	甕形土器の胴部片。器厚7mm。内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体は前々段反撚 $L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right.$ と附加条第1種 $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} \right.$ +L (2本) で羽状。 一部粘土の移動による畝状の隆起。	住居跡南壁 付近
81-207	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 褐灰 色 内面 黒褐色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部片。器厚5mm～9mmで積みあげ技法B。内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{matrix} \end{matrix} \right.$ 。	覆土
81-208	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 にぶい黄橙色 内面 橙色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部片で口唇部は丸味をもつ。器厚6mm～1cmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{matrix} \end{matrix} \right.$ 。	覆土
81-209	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 極暗褐色 内面 暗赤褐色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部片で口唇部は平坦。器厚6mm～8mmで積みあげ技法B。内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{matrix} \end{matrix} \right.$ 。	覆土
81-210	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 にぶい橙色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm～1.3cm。内面は縦ミガキが行われ、外面には繊維痕が顕著に認められる。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{matrix} \end{matrix} \right.$ 。	廃棄第3ブ ロック
81-211	口縁部 片		①含繊維 ②不良 ③外面にぶ い橙色内面にぶい褐色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部片で口唇部はやや丸味をもつ。器厚6mm～8mm。内面は荒い調整。	縄文施文。原体は $L \left\{ \begin{matrix} F \\ F \end{matrix} \right.$ 。 土器面は柔軟。 外面に一部煤が付着している。	廃棄第3ブ ロック
81-212	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面暗 褐色 内面明赤褐色	甕形土器の口縁部片か。口唇部は平坦。器厚7mm～9mm。内面はやや丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体は $L \left\{ \begin{matrix} F \\ F \end{matrix} \right.$ 。	覆土
81-213 -214	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面明 赤褐色 内面にぶい橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体は $L \left\{ \begin{matrix} F \\ F \end{matrix} \right.$ 。 土器面は柔軟で押圧が強い。	覆土
81-215	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 にぶい赤褐色	甕形土器の口縁部片か。口唇部は沈線が巡る様な手法。器厚7mm～9mmで積みあげ技法A。内面は徹底した横ミガキが行われている。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right.$ 。	覆土
81-216	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 にぶい橙色	甕形土器の口縁部片か。口唇部は平坦。器厚6mm。内面は徹底した横ミガキが行われている。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right.$ 。	覆土
81-217	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 褐灰 色 内面 褐灰色	甕形土器の口縁部片か。口唇部は平坦。器厚6mmで積みあげ技法A。内面は徹底した横ミガキ。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right.$ 。	覆土
81-218	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 褐灰 色 内面にぶい褐色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部片で口唇部は平坦。器厚6mm～8mm。内面は徹底した横ミガキ。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right.$ (0段多 条)。	覆土
81-219	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面 明褐色	甕形土器の口縁部片で口唇部は平坦。器厚7mm～9mm。内面は徹底した横ミガキが行われている。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right.$ (0段多 条)。 縄の開端を別の条で縛る。	覆土
81-220	口縁部 片		①含繊維 ②不良 ③外面 に ぶい黄橙色 内面 黒褐色	深鉢形土器のやや外反する口縁部片で口唇部は丸味をもつ。器厚7mm～9mm。内外面に繊維痕顕著でザラザラしている。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right.$ (0段多 条)。	覆土
81-221	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 にぶい黄橙色	深鉢形土器のやや外反する口縁部片で口唇部は丸味をもつ。器厚5mm～7mmで積みあげ技法A。内面は徹底した横ミガキ。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right.$ (0段多 条)。	覆土

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
81-222	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面褐 灰色 内面灰黄褐色	深鉢形土器の外傾する口縁部片で 口唇部は平坦。器厚6mm~9mm。 内外面に繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{1}{2} \right\rangle$ (0段多 条)。	覆土
81-223	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 におい黄橙色 内面 におい黄褐色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部 片で口唇部はやや丸味をもつ。器 厚5mm~8mm。内面はザラザラし ている。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{1}{2} \right\rangle$ 。	廃棄第3ブ ロック
81-224	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 褐灰 色 内面におい黄褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は 先細り。器厚4mm~6mmで積みあげ 技法B。内面は徹底した横ミガキ。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{1}{2} \right\rangle$ (0段多 条)。	廃棄第1・ 第3ブロッ ク付近
81-225	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面赤 褐色 内面明赤褐色	深鉢形土器のやや外反する口縁部 片。器厚5mm~8mmで積みあげ技 法A。内面はザラザラしている。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{1}{2} \right\rangle$ (0段多 条)。 外面に一部煤が付着している。	覆土
81-226	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 におい褐色 内面 におい橙色	深鉢形土器のやや外反する口縁部 片で口唇部は先細り。器厚5mm~ 7mmで積みあげ技法A。内面に繊 維痕が認められる。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{1}{2} \right\rangle$ (0段多 条)。 土器面は柔軟で押圧が強い。	住居跡西壁 南側
81-227	口縁部 ~胴部 片	①(9.1) ②(11.0)	①含繊維 ②良 ③外面 明赤褐色 内面 橙色	小型土器。器厚6mmで積みあげ技 法B。内面は口唇部付近で横ミガ キ、以下縦ミガキが徹底して行わ れている。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{1}{2} \right\rangle$ (0段多 条)。	覆土
81-228	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 におい黄褐色 内面 におい黄褐色	深鉢形土器のやや外反する口縁部 片で口唇部は丸味をもつ。器厚8 mmで積みあげ技法A。内面は丁寧 な横ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{1}{2} \right\rangle$ (0段多 条)。	覆土
81-229	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面暗 褐色 内面におい褐色	深鉢形土器のやや外反する口縁部 片で口唇部は先細り。器厚5mm~ 7mm。内面はザラザラしている。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{1}{2} \right\rangle$ (0段多 条)とL $\left\langle \frac{R}{2} \right\rangle$ で羽状。	覆土
81-230	口縁部 ~胴部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面黒 褐色内面におい黄褐色	深鉢形土器の口縁部から胴部片。 器厚7mm~1.1cm。内面はザラザラ で繊維痕顕著に認められる。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{1}{2} \right\rangle$ (0段多 条)。	覆土
81-231	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面暗 褐色 内面 明褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は 先細り。器厚5mm~7mm。内面は ザラザラしていて繊維痕顕著。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{1}{2} \right\rangle$ 。	廃棄第2ブ ロック
81-232	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面黒 褐色内面におい赤褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は やや平坦。器厚5mm~1cm。内面 は繊維痕が顕著に認められる。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{1}{2} \right\rangle$ (0段多 条)。	覆土
81-233	口縁部 片		①含繊維 ②不良 ③外面 暗 褐色 内面 褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は 先細り。器厚6mmで積みあげ技法 A。内外面は荒れていて繊維痕顕著。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{1}{2} \right\rangle$ 。	覆土
81-234	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 明褐 色 内面 灰褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法A。内面は徹底した 縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{1}{2} \right\rangle$ 。 内面に一部煤が付着している。	住居跡東壁 寄り
81-235	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面に おい黄褐色内面灰黄褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面はザラザラで一部繊維痕が認 められる。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{1}{2} \right\rangle$ 。	廃棄第1ブ ロック
81-236	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面褐 灰色 内面におい褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚6mm~ 8mmで積みあげ技法B。内面はザ ラザラしている。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{1}{2} \right\rangle$ 。 土器面は柔軟で押圧が強い。	廃棄第1ブ ロック

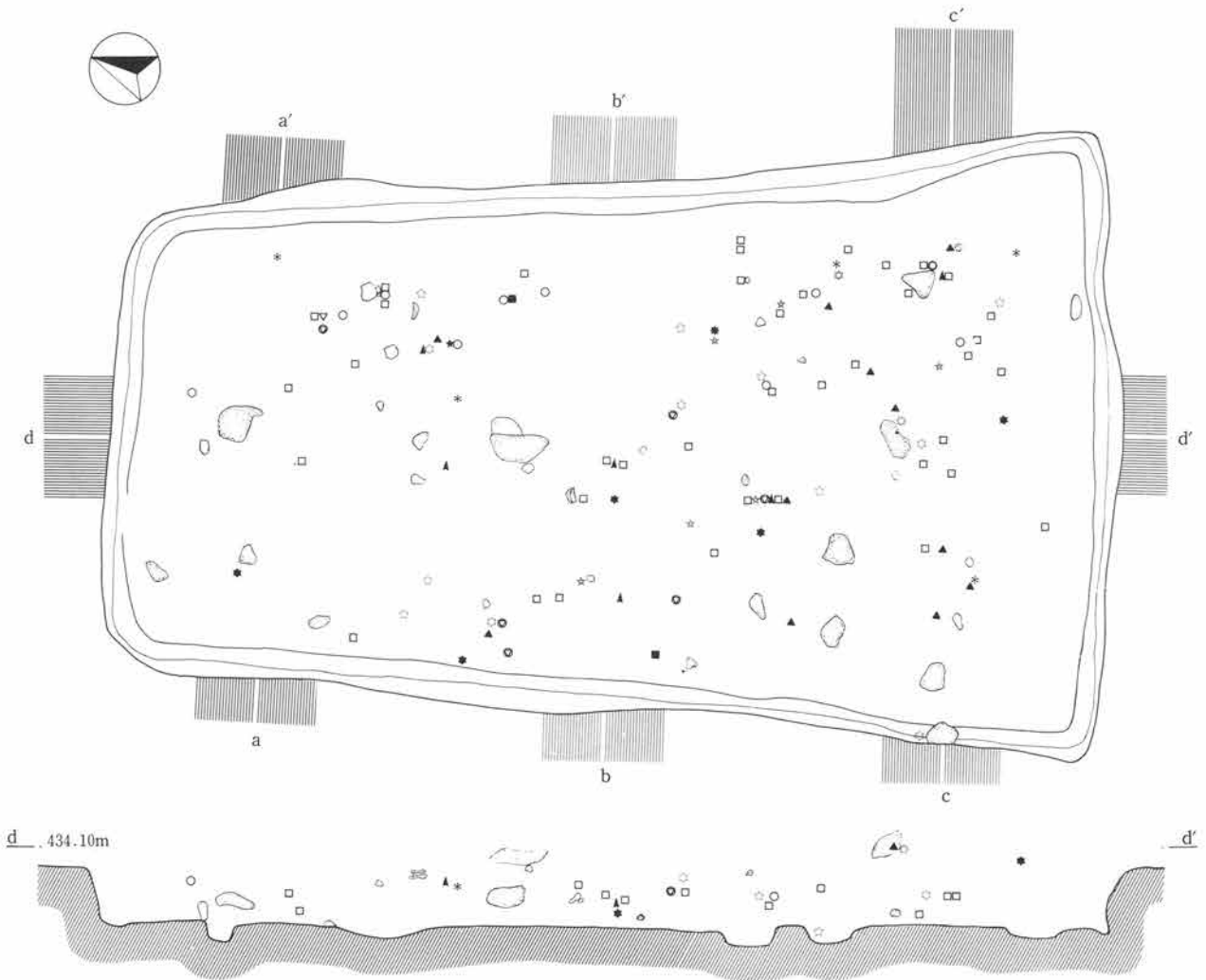
図 番 PL	器 種 (部位)	法 量 (cm)	①胎土 ②焼成 (遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
81-237	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 橙色内面にふい黄橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mmで 積みあげ技法A。内面は丁寧な調 整が行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ 。 土器面は柔軟で押圧が強い。	廃棄第2ブ ロック
81-238	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 橙色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚1.1cmで 積みあげ技法A。内面は丁寧な調 整、外面には繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多 条)。	覆土
82-239	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面に ふい褐色内面灰褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法A。内面は丁寧な調 整が行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多 条)。	覆土
82-240	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 黄橙色 内面褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm～ 1cm。内面は丁寧な調整が行われ ている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多 条)。 内面に一部煤が付着している。	廃棄第3ブ ロック
82-241	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は丁寧な調整が行われてい る。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ 。	住居跡東壁 寄り。
82-242	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 灰黄色 内面灰白色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm～ 1cmで積みあげ技法A。内面は荒 れている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多 条)。 内面に一部煤が付着している。	廃棄第1ブ ロックと北 壁付近
82-243	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面黒 褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法A。内面は荒れてい て、繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ 。 径5mmの補修孔が外面から作成さ れている。	廃棄第3ブ ロック
82-244	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 にふい橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{L}{L}\right\}$ 。	覆土
82-245	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面に ふい黄橙色内面灰黄褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は やや丸味をもつ。器厚7mm。内外 面に繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多 条)。	覆土
82-246	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 明褐色 内面 灰褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は 肥厚・平坦。器厚4mm～6mmで積 みあげ技法A。内面に一部繊維痕 が認められる。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多 条)。	覆土
82-247	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面暗 褐色 内面にふい褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は 先細り。器厚5mm～7mm。内面は 徹底したミガキが行われている。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多 条)。	覆土
82-248	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面に ふい褐色 内面橙色	甕形土器の口縁部片か。口唇部は 沈線が巡る様な手法。器厚6mm～ 8mm。内面は粗い調整。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ 。 土器面は柔軟。	覆土
82-249	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 橙色 内面 灰白色	深鉢形土器の外反する口縁部片で 口唇部は先細り。器厚5mm～7mm で積みあげ技法B。内面は繊維痕 が認められる。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多 条)。	廃棄第2ブ ロック
82-250	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 褐灰 色 内面 褐灰色	甕形土器の口縁部片か。口唇部は 先細り。器厚1cm。内面は徹底し た横ミガキが行われている。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ 。	住居跡北壁 寄り
82-251	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面明 褐色 内面 暗褐色	深鉢形土器のやや外反する口縁部 片で口唇部は先細り。器厚5mm～ 7mm。内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多 条)。 外面に一部煤が付着している。	覆土



図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
82-252	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 褐灰色 内面 橙色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は 先細り。器厚6mm~9mm。内面は 丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はL(R(0段多 条)。 外面に一部煤が付着している。	廃棄第2ブ ロック付近
82-253	口縁部 片		①含繊維 ②不良 ③外面 におい橙色 内面 橙色	深鉢形土器のやや外反する口縁部 片で口唇部はやや内削ぎ状。器厚 6mm~8mmで積みあげ技法A。内 面は荒れている。	縄文施文。原体はL(R。	廃棄第2ブ ロック
82-254	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 におい黄橙色 内面 におい黄橙色	深鉢形土器のやや外反する口縁部 片で口唇部は先細り。器厚8mmで 積みあげ技法B。内面はやや丁寧 な調整が行われている。	縄文施文。原体はL(R(0段多 条)。 土器面は柔軟で押圧が強い。	廃棄第2ブ ロック
82-255	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐 色 内面 赤褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は やや丸味をもつ。器厚7mmで積み あげ技法A。内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体はL(R(0段多 条)。	覆土
82-256	口縁部 片		①含繊維 ②不良 ③外面 におい橙色 内面 におい黄橙色	深鉢形土器のやや外反する口縁部 片で口唇部は先細り。器厚5mm~ 7mm。内面は荒れ、外面に繊維痕 顕著に認められる。	縄文施文。原体はL(R。	覆土
82-257	口縁部 片		①含繊維 ②不良 ③外面 橙色 内面 におい黄橙色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は やや丸味をもつ。器厚8mm~1cm で積みあげ技法A。内面は繊維痕 顕著に認められる。	縄文施文。原体はL(R。 外面に煤が付着している。	覆土
82-258	口縁部 片	①(14.0)	①含繊維 ②やや良 ③外面 暗褐色 内面 暗褐色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部 片で口唇部はやや平坦。器厚5mm ~7mmで積みあげ技法A。内面は 丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はL(R(0段多 条)。 粘土の移動による畝状の隆起があ る。	住居跡北壁 付近
82-259	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面におい 黄橙色 内面暗褐色	甕形土器の波状口縁部片。器厚6 mm~8mm。内面は丁寧な調整が行 われている。	縄文施文。原体はL(R(0段多 条)。	覆土
82-260	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 褐灰 色 内面におい黄橙色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部 は平坦。器厚8mmで積みあげ技法 A。内面は丁寧な横ミガキ。	縄文施文。原体は前々段反摺 L(R(R。 R(R。	廃棄第2ブ ロック
82-261	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面 褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm~ 1cmで積みあげ技法A。内面は丁 寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はL(R(0段多 条)。 縄の開端を別の条で縛る。	住居跡北西 コーナー
82-262	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面 暗褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mmで 積みあげ技法B。内面は非常に丁 寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はL(R(0段多 条)。	廃棄第1ブ ロック
82-263	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 黒褐色 内面 橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mmで 積みあげ技法A。内面はザラザラ し、一部繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はL(R(0段多 条)。 縄の開端を別の条で縛る。 外面に一部煤が付着している。	覆土
82-264	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面灰黄褐 色 内面におい黄橙色	甕形土器の胴部片か。器厚8mm~ 1cmで積みあげ技法A。内面は徹 底したミガキが行われている。	縄文施文。原体はL(R(0段多 条)。	覆土
82-265	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面明 褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mmで 積みあげ技法A。内面はやや丁寧 な調整が行われている。	縄文施文。原体はL(R(0段多 条)。 内面に煤が付着している。	廃棄第3ブ ロック
82-266	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 浅灰色 内面 褐灰色	甕形土器の胴部片。器厚9mm~1.1 cmで積みあげ技法AとB。内面は 丁寧な調整。内外面に一部繊維痕 が認められる。	縄文施文。原体はL(R(0段多 条)。	住居跡西壁 寄り

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
82-267	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面褐 灰色内面にふい黄橙色	甕形土器の頸部片。器厚7mm~1 cm。内面は丁寧な調整、外面には 繊維痕が認められる。	縄文施文。原体は $L\left(\frac{R}{R}\right)$ 。	住居跡中央 部
83-268	胴部片		①含繊維 ②不良 ③外面灰黄 褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mmで 積みあげ技法A。内面は荒れてい て繊維痕が認められる。	縄文施文。原体は $L\left(\frac{R}{R}\right)$ (0段多 条)。	廃棄第1フ ロック
83-269	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 灰黄 色 内面 灰黄褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は 先細り。器厚7mm~1cm。内面は徹 底した横ミガキが行われている。	縄文施文。原体は $R\left(\frac{L}{L}\frac{R}{R}\right)$ 。	覆土
83-270	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 明褐色 内面 明黄褐色	深鉢形土器の口縁部片。器厚5mm ~9mm。内面は丁寧な調整が行わ れている。	縄文施文。原体は附加条第1種 $R\left(\frac{L}{L}+1\right)$ と $L\left(\frac{R}{R}\right)$ で羽状。	覆土
83-271	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 灰黄色 内面 褐灰色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は 先細り。器厚4mm~6mmで積みあ げ技法A。内面は横・縦ミガキが 行われている。	縄文施文。原体は附加条第1種 $L\left(\frac{R}{R}+r\right)$ 。 外面に一部煤が付着している。	覆土
83-272	底部片	⑤(9.4)	①含繊維 ②不良 ③外面 褐 色 内面にふい黄橙色	上げ底でかなり開いて立ち上がる。 器厚8mm~1cmで接合技法A。 内外面は荒れていて繊維痕顕著。	縄文施文。原体は $R\left(\frac{L}{L}\right)$ と $L\left(\frac{R}{R}\right)$ で 羽状。	住居跡中央 部
83-273	底部片	⑤(7.0)	①含繊維 ②やや良 ③外面 内面にふい黄橙色 内面 内面にふい黄橙色	上げ底で開いて立ち上がる。器厚 5mm~7mmで接合技法A。内外面 は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体は $R\left(\frac{L}{L}\right)$ と $L\left(\frac{R}{R}\right)$ 。	覆土
83-274	底部片	⑤(8.5)	①含繊維 ②良 ③外面にふい 黄橙色 内面褐灰色	平底でやや開いて立ち上がる。器 厚7mm~9mmで接合技法B。底 面・内面はミガキが行われている。	縄文施文。原体は $R\left(\frac{L}{L}\right)$ と $L\left(\frac{R}{R}\right)$ で 羽状。	覆土
83-275	底部片	⑤(7.5)	①含繊維 ②やや良 ③外面 内面にふい黄橙色 内面 内面にふい黄橙色	上げ底。器厚9mmで接合技法A。 底面・内面はやや丁寧な調整が行 われている。	縄文施文。原体は $R\left(\frac{L}{L}\right)$ と $L\left(\frac{R}{R}\right)$ で 羽状。	住居跡東壁 南側寄り
83-276	底部片	⑤(9.6)	①含繊維 ②やや良 ③外面に ふい黄褐色内面褐灰色	上げ底で垂直に近く立ち上がる。 器厚8mm~1.2cmで接合技法A。底 面・内面はやや丁寧な調整。	縄文施文。原体は $R\left(\frac{L}{L}\right)$ (0段多条) と $L\left(\frac{R}{R}\right)$ (0段多条)で羽状。	覆土
83-277	底部片	⑤(8.8)	①含繊維 ②やや良 ③外面 橙色 内面 褐灰色	上げ底で垂直に近く立ち上がる。 器厚8mm~1cmで積みあげ技法 A。底面・内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体は $R\left(\frac{L}{L}\right)$ (0段多条) と $L\left(\frac{R}{R}\right)$ (0段多条)で羽状。	覆土
83-278	底部片	⑤(9.5)	①含繊維 ②やや良 ③外面明 赤褐色内面にふい橙色	上げ底でやや開いて立ち上がる。 器厚7mm~1cmで接合技法A。底 面・内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体は前々段反撚 $R\left(\frac{L}{L}\frac{L}{L}\right)$ と $L\left(\frac{R}{R}\frac{R}{R}\right)$ で羽状。	覆土
83-279	底部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 褐色 内面 黒褐色	平底で開いて立ち上がる。器厚8 mm~1cm。内面は縦ミガキ、底面 もミガキが行われている。	縄文施文。原体は $R\left(\frac{L}{L}\right)$ 。	覆土
83-280	底部片		①含繊維 ②やや良 ③外面に ふい褐色内面暗褐色	上げ底で開いて立ち上がる。器厚 1cm。底面は徹底したミガキが行 われ、内面は繊維痕顕著。	縄文施文。原体は $R\left(\frac{L}{L}\right)$ 。	覆土
83-281	底部片	⑤(6.9)	①含繊維 ②良 ③外面 明褐 色 内面 黒褐色	平底で垂直に近く立ち上がる。器 厚9mmで接合技法A。底面・内面 はミガキが行われている。	縄文施文。原体は $R\left(\frac{L}{L}\right)$ 。	覆土

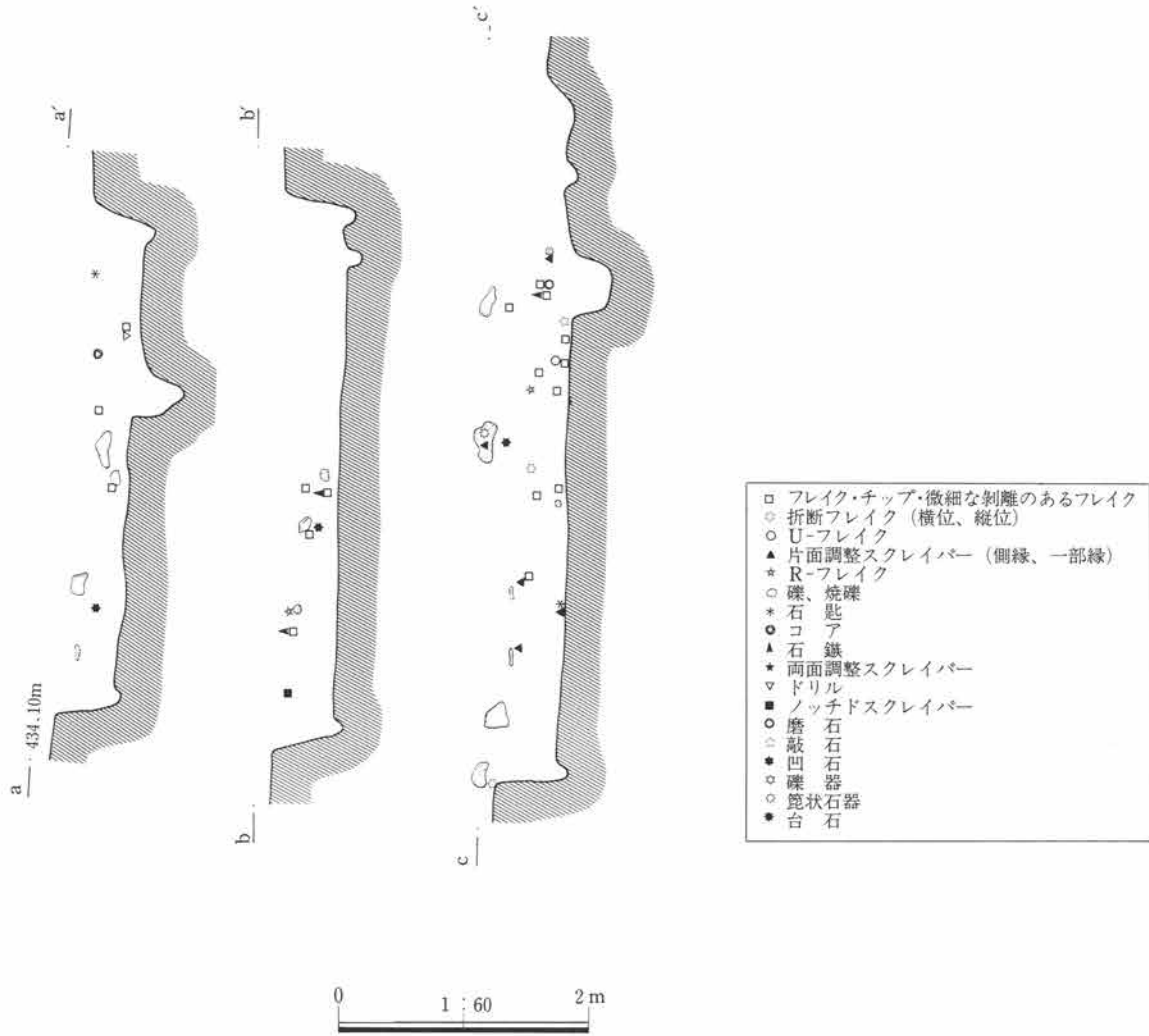
図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
83-282	底部片	⑤ 6.3	①含繊維 ②不良 ③外面浅黄 橙色内面にふい黄橙色	上げ底で開いて立ち上がる。器厚 9mm~1.1cm。底面・内面とも荒れ ていて繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{L}{L} \right\rangle$ 。	廃棄第2ブ ロック
83-283	底部片	⑤ 7.0	①含繊維 ②良 ③外面 暗褐色 内面 褐色	上げ底でやや開いて立ち上がる。 器厚6mm~9mmで接合技法A。底 面・内面とも丁寧なミガキが行わ れている。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{L}{L} \right\rangle$ 。 内面に一部煤が付着している。	覆土
83-284	底部片	⑤(6.8)	①含繊維 ②やや良 ③外面 にふい橙色 内面 にふい黄橙色	上げ底でやや開いて立ち上がる。 器厚7mm~1.2cmで接合技法A。底 面・内面はやや丁寧な調整が行わ れている。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{L}{L} \right\rangle$ 。	覆土
83-285	底部片	⑤(7.2)	①含繊維 ②良 ③外面 にふい橙色 内面 にふい黄橙色	上げ底で開いて立ち上がる。器厚 8mm~1cmで接合技法A。底面・ 内面とも丁寧なミガキが行われて いる。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{L}{L} \right\rangle$ 。	覆土
83-286	底部片	⑤(5.4)	①含繊維 ②やや良 ③外面に ふい黄橙色内面黒褐色	やや上げ底で開いて立ち上がる。 器厚7mm~1cmで接合技法A。底 面はミガキ、内面はザラザラ。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{L}{L} \right\rangle$ 。	覆土
83-287	底部片	⑤(5.7)	①含繊維 ②不良 ③外面暗赤 褐色 内面 赤褐色	上げ底で垂直に近く立ち上がる。 器厚8mm~1cmで接合技法A。内 面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{L}{L} \right\rangle$ 。	覆土
83-288	底部片	⑤(9.0)	①含繊維 ②やや良 ③外面 橙色 内面 黒褐色	平底でかなり開いて立ち上がる。 器厚7mmで接合技法A。内面は粗 い調整が行われている。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{L}{L} \right\rangle$ (0段多条) とL $\left\langle \frac{R}{R} \right\rangle$ (0段多条)で羽状。 内面に煤が付着している。	覆土
83-289	底部片	⑤(12.6)	①含繊維 ②不良 ③外面 にふい黄橙色 内面 にふい黄橙色	平底で開いて立ち上がる。器厚7 mm~1.1cmで接合技法A。内・外面 とも荒れていて繊維痕が認められ る。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{L}{L} \right\rangle$ 。	覆土
83-290	底部片	⑤(12.9)	①含繊維 ②良 ③外面にふい 褐色 内面にふい橙色	上げ底で垂直に近く立ち上がる。 器厚8mm~1.1cmで接合技法A。底 面は徹底したミガキが行われている。	縄文施文。原体はL $\left\langle \frac{R}{R} \right\rangle$ (0段多 条)。	覆土
83-291	底部片	⑤(7.2)	①含繊維 ②良 ③外面にふい 橙色 内面 褐灰色	上げ底でやや開いて立ち上がる。 器厚6mm~9mmで接合技法B。底 面・内面はミガキが行われている。	縄文施文。原体はL $\left\langle \frac{R}{R} \right\rangle$ (0段多 条)。 内面に一部煤が付着している。	覆土
83-292	底部片	⑤(9.7)	①含繊維 ②良 ③外面 にふい黄橙色 内面 褐灰色	平底でやや開いて立ち上がる。器 厚6mm~9mmで接合技法A。底 面・内面は丁寧なミガキが行われ ている。	縄文施文。原体はL $\left\langle \frac{R}{R} \right\rangle$ 。	覆土
83-293	底部片	⑤(3.8)	①含繊維 ②不良 ③外面にふ い黄橙色内面灰黄褐色	上げ底でやや開いて立ち上がる。 器厚4mm~9mmで接合技法A。底 面・内面とも粗い調整。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{L}{L} \right\rangle$ 。	覆土
83-294	底部片	⑤(4.6)	①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 黒褐色	平底で垂直に近く立ち上がる。器 厚7mm~9mmで接合技法A。底 面・内面とも丁寧なミガキが行わ れている。	縄文施文。原体はR $\left\langle \frac{L}{L} \right\rangle$ 。	覆土
83-295	底部片	⑤(6.6)	①含繊維 ②良 ③外面 にふい褐色 内面 灰褐色	上げ底でやや開いて立ち上がる。 器厚5mm~1cmで接合技法A。底 面・内面とも丁寧なミガキが行わ れている。	縄文施文。原体は附加条第1種 R $\left\langle \frac{L}{L} + \frac{L}{L} \right\rangle$ 。 内面に一部煤が付着している。	覆土
83-296	底部片	⑤(9.0)	①含繊維 ②良 ③外面 褐灰色 内面 褐灰色	上げ底でやや開いて立ち上がる。 器厚7mm~1cmで接合技法A。底 面・内面とも丁寧なミガキが行わ れている。	縄文施文。原体は前々段反燃 L $\left\langle \frac{R}{R} \right\rangle$ 。	覆土



第84図 J-5号住居跡石器(器種別)出土状況

〔II〕石器類 (第85～89図、PL.56)

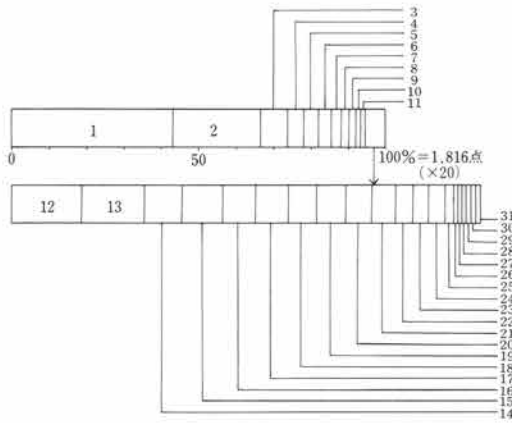
J-5号住居跡からはJ-4号住居跡と同様に土器とともに多量の石器・礫等が出土している。このうち、焼礫・礫とコア・フレイク・チップをのぞく加工された石器や明らかに使用された痕跡のある石器(石皿・磨石等)は、463点を数える。内訳は、石鏃15点、尖頭器1点、石匙22点、ドリル9点、ピース・エスキュー4点、打製石斧1点、磨製石斧1点、エンド・スクレイパー1点、ノッチドスクレイパー8点、鋸歯状スクレイパー6点、両面調整スクレイパー10点、片面調整スクレイパー106点、礫器4点、R-フレイク39点、U-フレイク80点、折断フレイク131点、石皿1点、台石1点、凹石6点、磨石8点、敲石7点、丸石2点である。そしてコア17点、フレイク854点、チップ409点、礫39点、焼礫27点が併せて出土し、総計1816点を数えた。この1816点を石材別に検討すると、1629点が黒色頁岩であり、89.7%の圧倒的多数を占めている。次いで黒色安山岩68点・3.73%、安山岩18点・0.99%、黒曜石16点・0.88%、珪化木15点・0.83%、珪化変質岩14点・0.77%、石英閃緑岩10点・0.55%、頁岩9点・0.5%、凝灰質砂岩6点・0.33%、酸化鉄質岩片5点・0.27%、チャート4点・0.22%となっている。この他にも多数の石材が認められるが、その数は少ない。器種別の石材を検討すると、やはり黒色頁岩が各器種のなかで圧倒的多数を占めるが、石鏃ではこの他に黒曜石、チャート、緑色凝灰岩、珪質頁岩など多数の石材が使用されている。また磨石・敲石・凹石では、凝灰質砂岩、石英閃緑岩、安山岩などの石材が選択されている。詳細は、第85・86・87図の器種別・石材別グラフを参照し



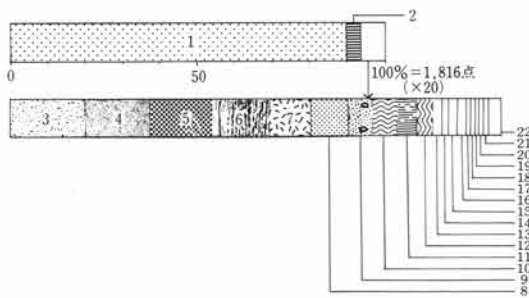
ていただきたい。J-4号住居跡出土の石器類の総点数、さらに器種・石材組成もほぼ同一であることは興味深い事実である。

なお、当住居跡出土の黒曜石16点（石鏃・チップ等）中、3点をJ-4号住居跡出土黒曜石と同様に熱中性子放射化分析による原産地推定を依頼した結果、2点が神津島・砂糖崎産、1点が信州・星ヶ塔産であった（4章〔2〕黒曜石分析参照）。神津島・砂糖崎産が検出されたことは、J-4号住居跡とともに注目されるものであろう。

1816点にのぼる石器・礫等の出土状況は第84図に示した。住居廃絶後の凹地に廃棄もしくは流入した様子を読みとることができるが、土器の廃棄ブロックの様なまとまりはみられない。

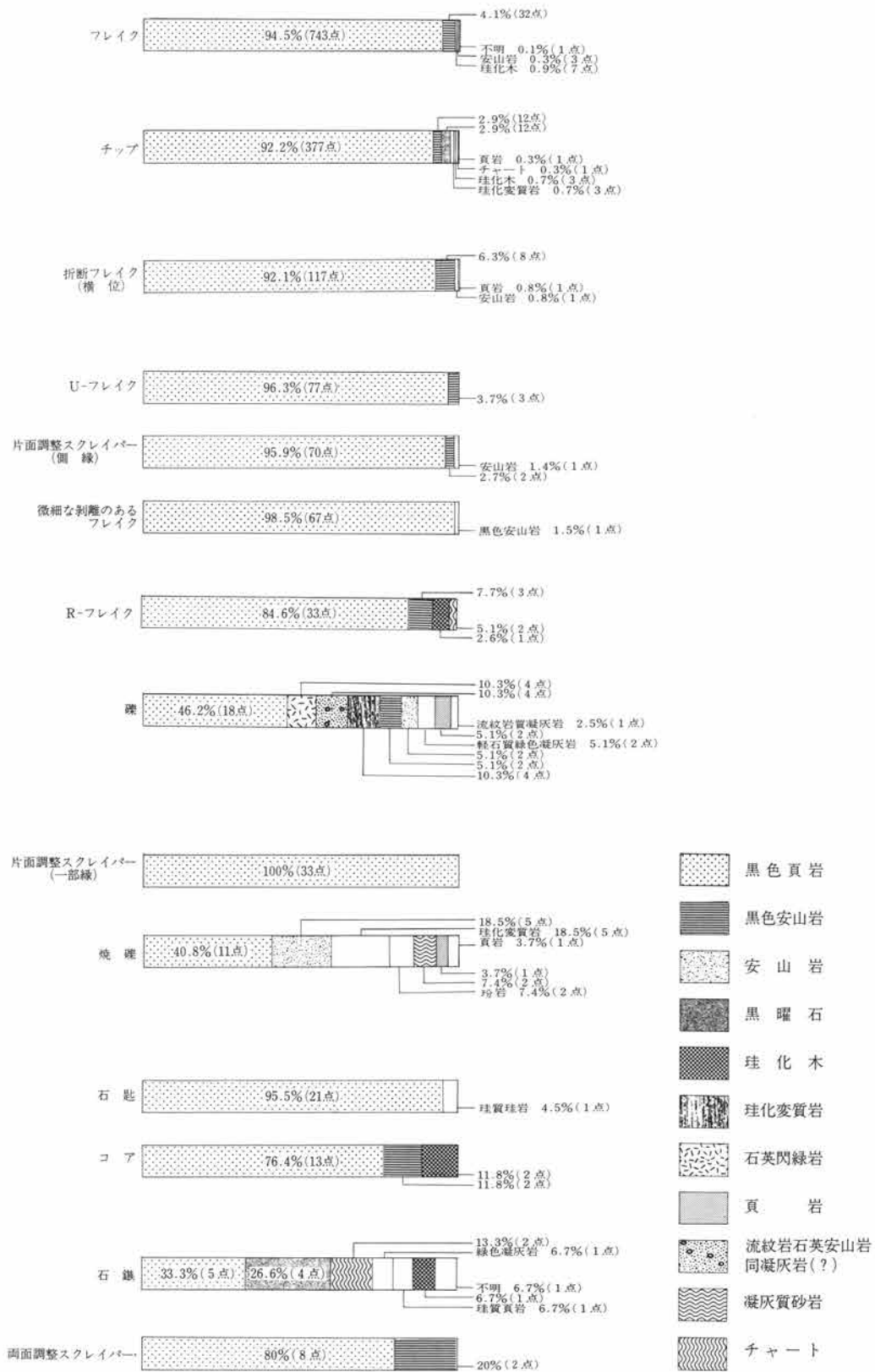


器種	%	点
1 フレイク	43.3	786
2 チップ	22.5	409
3 折断フレイク(横位)	7.0	127
4 U-フレイク	4.4	80
5 片面調整スクレイパー(側縁)	4.02	73
6 微細な剥離のあるフレイク	3.74	68
7 R-フレイク	2.12	39
8 礫	2.12	39
9 片面調整スクレイパー(一部縁)	1.82	33
10 焼 礫	1.50	27
11 石 匙	1.21	22
12 コア	0.94	17
13 石 錐	0.83	15
14 両面調整スクレイパー	0.55	10
15 ドリル	0.50	9
16 ノッチドスクレイパー	0.44	8
17 磨 石	0.44	8
18 敲 石	0.39	7
19 その他	0.39	7
20 鋸歯状スクレイパー	0.33	6
21 凹 石	0.33	6
22 ビエス・エスキュー	0.22	4
23 礫 器	0.22	4
24 折断フレイク(縦位)	0.22	4
25 丸 石	0.11	2
26 磨製石斧	0.06	1
27 尖頭石器	0.06	1
28 エンドスクレイパー	0.06	1
29 篋状石器	0.06	1
30 石 皿	0.06	1
31 台 石	0.06	1
	100.00	1,816

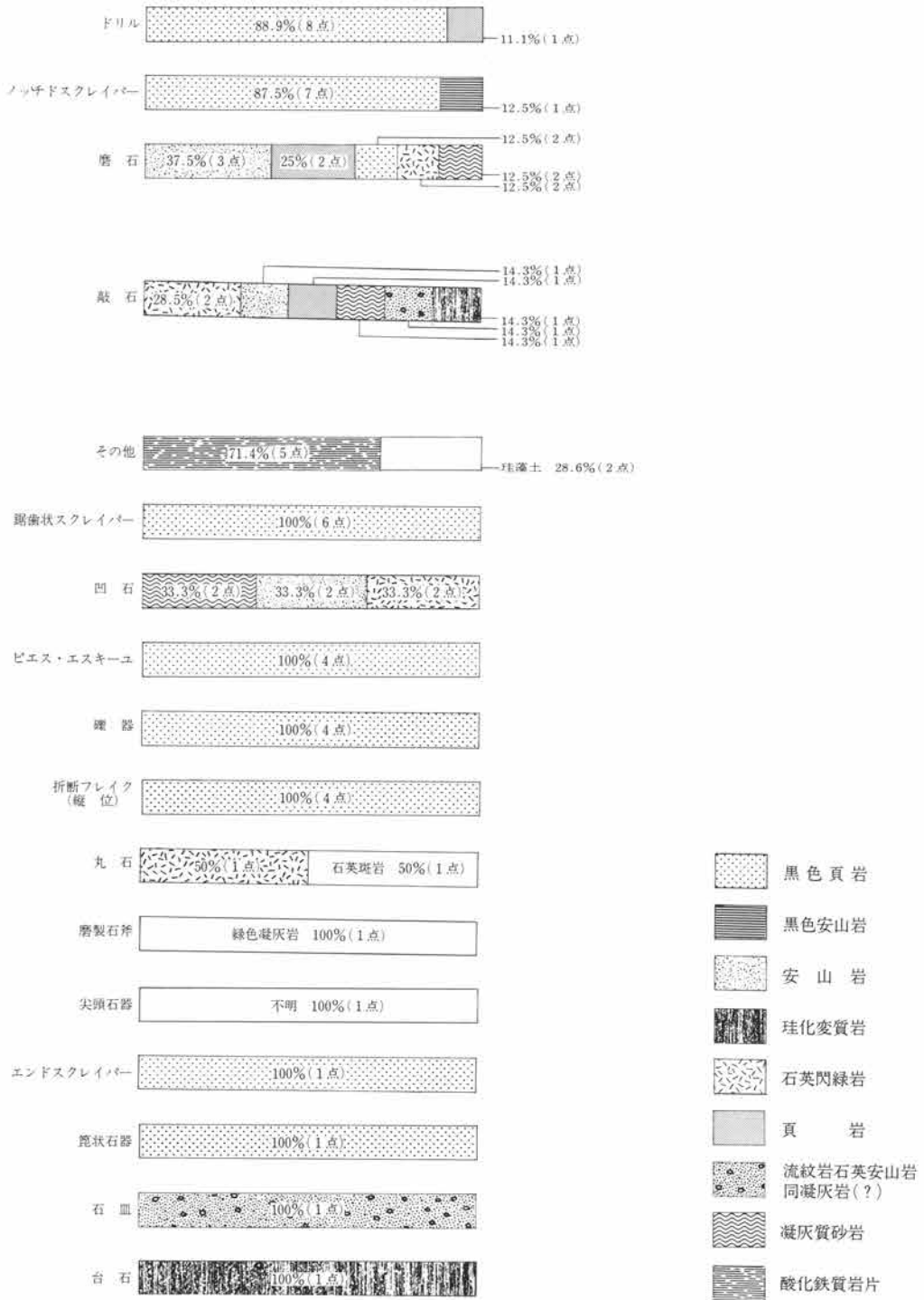


石 材	%	点
1 黑色頁岩	89.7	1,629
2 黑色安山岩	3.73	68
3 安山岩	0.99	18
4 黒曜石	0.88	16
5 珪化木	0.83	15
6 珪化変質岩	0.77	14
7 石英閃緑岩	0.55	10
8 頁 岩	0.50	9
9 流紋岩石英安山岩同凝灰岩(?)	0.33	6
10 凝灰質砂岩	0.33	6
11 酸化鉄質岩片	0.27	5
12 チャート	0.22	4
13 珪藻土	0.11	2
14 珩 岩	0.11	2
15 軽石質緑色凝灰岩	0.11	2
16 緑色凝灰岩	0.11	2
17 珪質頁岩	0.06	1
18 珪質珪岩	0.06	1
19 石英斑岩	0.06	1
20 溶結凝灰岩	0.06	1
21 流紋岩質凝灰岩	0.06	1
22 不 明	0.16	3
	100.00	1,816

第85図 J-5号住居跡出土石器の器種別・石材別グラフ (1)

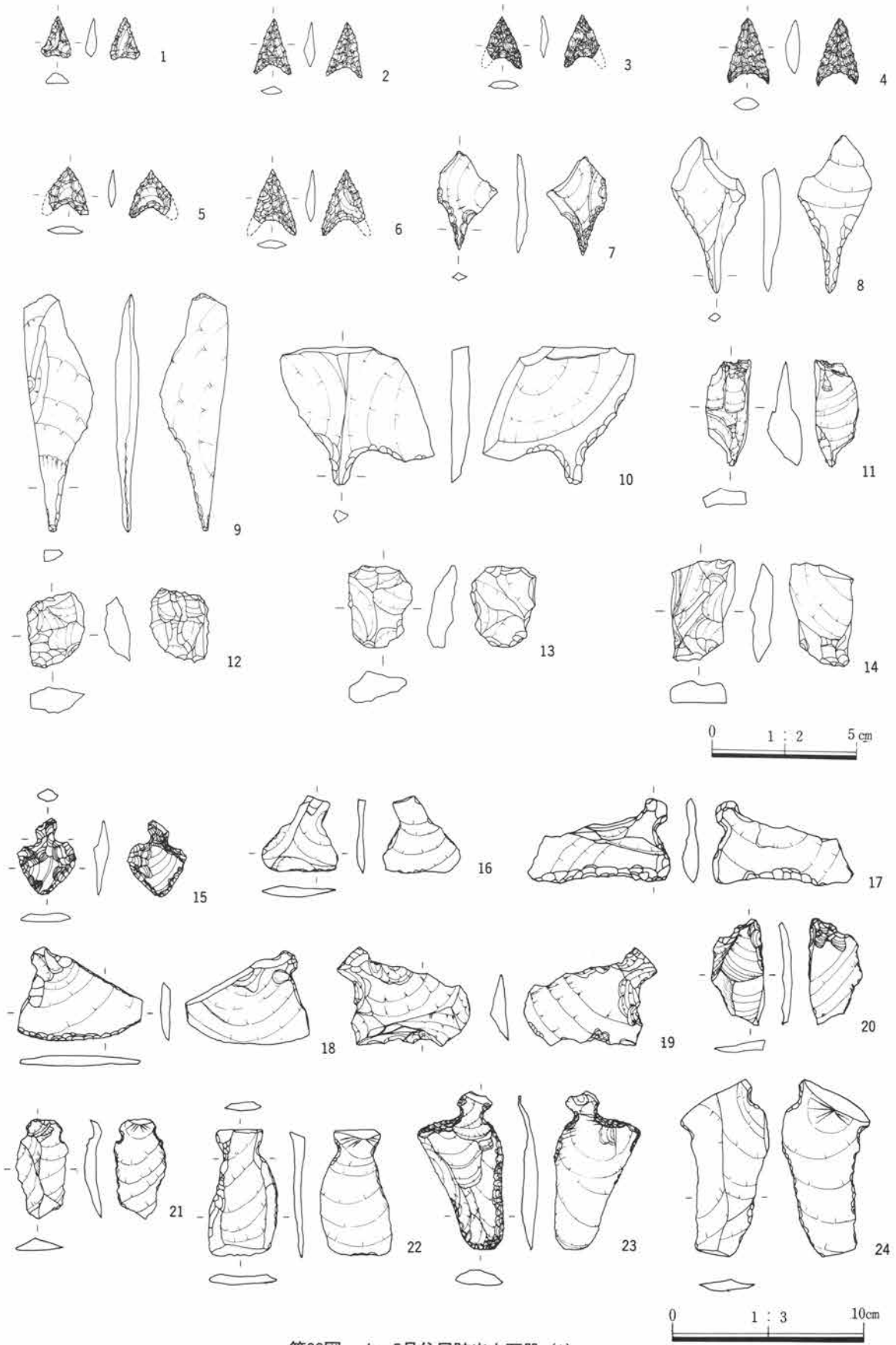


第86図 J-5号住居跡出土石器の器種別・石材別グラフ (2)

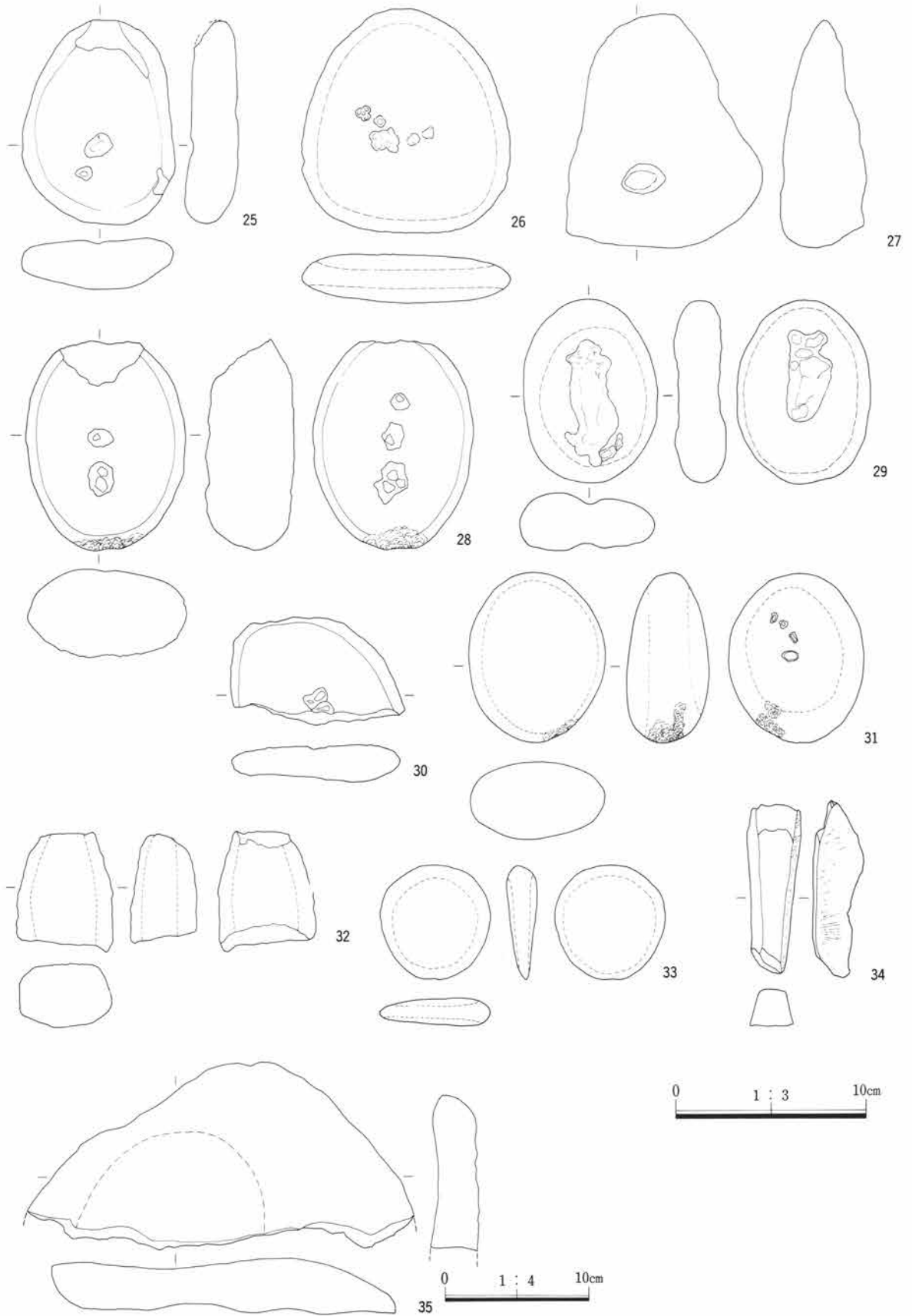


第87図 J-5号住居跡出土石器の器種別・石材別グラフ (3)





第88图 J-5号住居跡出土石器(1)



第89図 J-5号住居跡出土石器(2)

J-5号住居跡石器一覧表

〔単位はcmおよびg、( )は現存値〕

図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値				備考	出土状況
				全長	最大幅	最大厚	重量		
88-1 PL.56	石 鎌	完 形	黒色頁岩	1.4	1.0	0.3	0.4	側縁はほぼ直線をなし、基部の扱りは逆U字形をなす。	廃棄第3 ブロック
88-2 PL.56	石 鎌	完 形	珪質頁岩	1.9	1.3	0.3	0.4	側縁はほぼ直線をなし、基部の扱りは逆V字形をなす。	廃棄第1 ブロック近
88-3 PL.56	石 鎌	脚部欠	黒曜石	1.8	(1.0)	0.3	(0.5)	側縁は中央部で外側に彎曲し、基部の扱りは逆V字形をなす。	廃棄第2 ブロック近
88-4 PL.56	石 鎌	完 形	黒曜石	2.3	1.4	0.4	0.7	側縁はほぼ直線をなし、基部の扱りは逆U字形をなす。	廃棄第1 ブロック
88-5 PL.56	石 鎌	脚部欠	チャート	(1.7)	(1.5)	0.2	(0.4)	側縁は中央部で外側に彎曲し、基部の扱りは逆V字形をなす。	廃棄第2 ブロック近
88-6 PL.56	石 鎌	脚部欠	黒色頁岩	(1.8)	(1.3)	0.3	(0.5)	側縁はほぼ直線をなし、基部の扱りは逆U字形をなす。	覆 土
88-7 PL.56	ドリル	完 形	黒色頁岩	3.4	2.1	0.3	2.2	小さな剥片を素材とし、一端を錐状に加工している。	覆 土
88-8 PL.56	ドリル	完 形	黒色頁岩	5.4	2.6	0.6	5.8	"	廃棄第1 ブロック近
88-9 PL.56	ドリル	完 形	黒色頁岩	8.2	2.2	0.8	10.7	剥片を素材とし、一端を錐状に加工している。	覆 土
88-10 PL.56	ドリル	舌部欠	黒色頁岩	(4.7)	5.4	0.7	(21.2)	"	覆 土
88-11 PL.56	ピエス・エスキュー	右側縁・ 下端欠	黒色頁岩	3.5	(1.5)	1.2	(3.4)	縦長剥片を素材とし、右側縁および下端を欠損している。	覆 土
88-12 PL.56	ピエス・エスキュー	完 形	黒色頁岩	2.3	2.0	0.9	3.8	上下両端に小剥離痕がみられる。	覆 土
88-13 PL.56	ピエス・エスキュー	完 形	黒色頁岩	2.8	2.2	0.8	6.5	横長剥片を素材とし、上下両端に小剥離痕がみられる。	覆 土
88-14 PL.56	ピエス・エスキュー	両側縁欠	黒色頁岩	3.4	(2.2)	0.8	(6.9)	横長剥片を素材とし、両側縁を切断している。	覆 土
88-15 PL.56	石 匙	完 形	黒曜石	3.9	3.0	0.7	5.7	縦型。縦長剥片を素材とし、下部は尖頭状になる。	廃棄第1 ブロック近
88-16 PL.56	石 匙	完 形	黒色頁岩	4.0	4.0	0.5	7.1	横型。縦長剥片を素材とし、刃部は直線状を呈する。	廃棄第3 ブロック近
88-17 PL.56	石 匙	完 形	黒色頁岩	4.3	7.4	0.8	25.2	横型。横長剥片を素材とし、刃部はゆるく内彎する。	覆 土
88-18 PL.56	石 匙	完 形	黒色頁岩	4.7	6.3	0.5	19.7	横型。横長剥片を素材とし、刃部はゆるい弧状を呈す。	覆 土
88-19 PL.56	石 匙	完 形	黒色頁岩	5.1	6.1	0.8	31.0	横型。縦長剥片を素材とし、刃部加工は一部にみられる。	覆 土
88-20 PL.56	石 匙	完 形	珪質頁岩	5.5	2.7	0.4	10.3	縦型。縦長剥片を切断して素材。刃部加工は不明確。	覆 土
88-21 PL.56	石 匙	完 形	黒色頁岩	5.1	2.6	0.6	7.9	縦型。縦長剥片を素材とし打面を残す。刃部加工は左側縁。	覆 土
88-22 PL.56	石 匙	完 形	黒色頁岩	6.5	3.5	0.7	14.3	縦型。縦長剥片を素材とし打面を残す。刃部加工は不明確。	覆 土
88-23 PL.56	石 匙	完 形	黒色頁岩	8.1	3.8	0.9	24.6	縦型。縦長剥片を素材とし、右側縁に丁寧な刃部加工。	覆 土
88-24 PL.56	石 匙	完 形	黒色頁岩	8.7	4.5	0.5	33.8	縦型。縦長剥片を素材とし打面残。刃部加工は右側縁一部。	廃棄第3 ブロック近
89-25 PL.56	凹 石	完 形	石英閃緑岩	10.5	7.9	2.7	340	器面に敲打による凹みがある。	覆 土
89-26 PL.56	凹 石	完 形	凝灰質砂岩	11.6	10.8	2.4	480	器面に磨耗痕と敲打による凹みがある。	廃棄第3 ブロック近
89-27 PL.56	凹 石	完 形	安山岩	12.0	10.1	4.3	600	器面に敲打による凹みがある。	住居北西 コーナ寄り
89-28 PL.56	凹 石	一部欠	石英閃緑岩	(10.9)	8.4	4.4	(600)	器面に敲打による凹みと、著しい敲打痕がある。	廃棄第3 ブロック近
89-29 PL.56	凹 石	完 形	安山岩	9.5	7.0	2.7	220	器面に磨耗痕と敲打による凹みがある。	住居跡西 壁付近
89-30 PL.56	凹 石	½	凝灰質砂岩	(5.5)	(8.9)	1.7	(100)	器面に敲打による凹みがある。火熱を受けている。	廃棄第2 ブロック
89-31 PL.56	磨 石	完 形	石英閃緑岩	8.8	7.1	4.2	240	器面全体に磨耗痕と敲打痕がある。	廃棄第3 ブロック近
89-32 PL.56	磨 石	½	凝灰質砂岩	(5.8)	(5.0)	3.4	(160)	器面に磨耗痕がみられる。	覆 土
89-33 PL.56	磨 石	完 形	頁 岩	5.9	5.7	1.6	80	器面に磨耗痕がみられる。	覆 土
89-34 PL.56	磨 石	½	黒色頁岩	(8.7)	2.8	2.4	(70)	棒状の磨石。器面に磨耗痕がみられる。	覆 土
89-35 PL.56	石 皿	½	石英安山岩	(12.2)	(26.9)	(3.5)	(1820)	使用面がやや凹んでいる。火熱を受ける。	廃棄第1 ブロック

J-6号住居跡 (第90~92図、PL.11)

**位置** L-89・90、M-89・90、N-89・90グリッドにかけて検出された。J-5号住居跡の東約10mのところに位置する。

**経過** Y-2号住居跡の調査中に確認され、Y-2号住居跡の調査終了をまって当住居跡の発掘が開始された。覆土からはJ-4号住居跡・J-5号住居跡と同時期の遺物が出土しているが、床面まで非常に浅く、J-4・5号住居跡から比べるとその量は極端に少なかった。覆土の大半が削平されてしまったためであろう。遺物出土状況図を始め、各種図面の作成、写真撮影を行ったが、8月1日の台風襲来のために遺跡は冠水。当住居跡も水没して調査は一時中断した。その後、床面の精査を行う過程で、拡張の痕跡を示す周溝と多数のピットが検出された。以後、この周溝の検出を中心に調査を進めた結果、当住居跡は3回の拡張が行われていることが判明した。住居跡の全貌が把握されるまでには、かなりの調査時間が費やされた。

**重複** Y-2号住居跡と重複。当住居跡の南西部分が壊されている。また住居内に桑溝が多数横断しているために、床面の破壊部分も多い。

**覆土** ローム層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

第1層 黒褐色土層 固く締め粘性が非常にある。ローム粒子・赤色スコリア粒子・焼土粒子を含む。

第2層 暗褐色土層 やや固く、粘性が非常にある。ローム粒子・赤色スコリア粒子・焼土粒子を含む。

第3層 茶褐色土層 固く締め粘性が非常にある。ローム粒子を多量に、赤色スコリア粒子・焼土粒子・炭化物粒子を少量含む。

第4層 黒褐色土層 固く締め粘性が非常にある。ローム粒子・赤色スコリア粒子・炭化物粒子を含む。

第5層 黄褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

**形状** 当住居跡は3回の拡張が行われている。この拡張の変遷を追ったのが第91図である。この図を参考にしながら住居の変遷をあとづけたい。

〔第1期〕 拡張前の住居跡。長辺5.16m、短辺は北壁で3.45m、南壁では3.78mの北に向かってわずかに狭まる隅丸方形を呈している。この段階での面積は約14.3㎡であるから、居住人員は約4.3人となる。

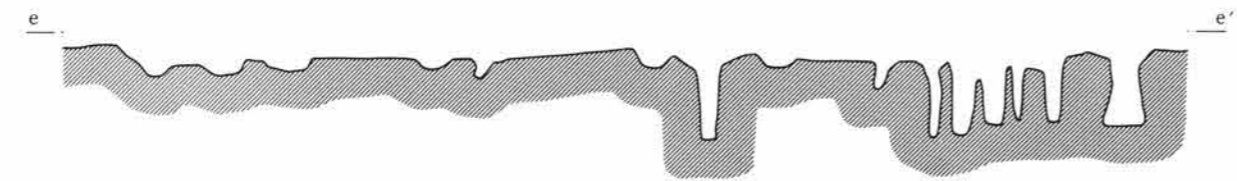
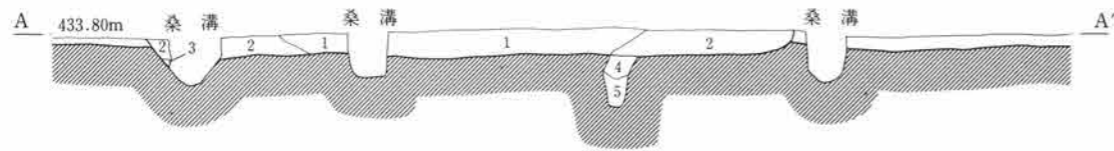
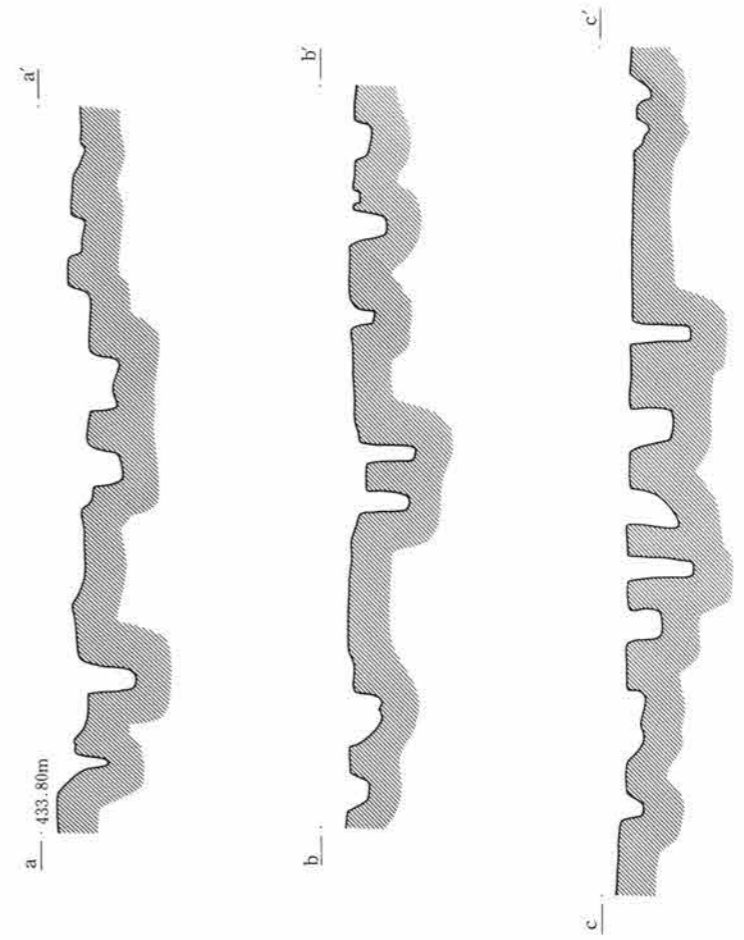
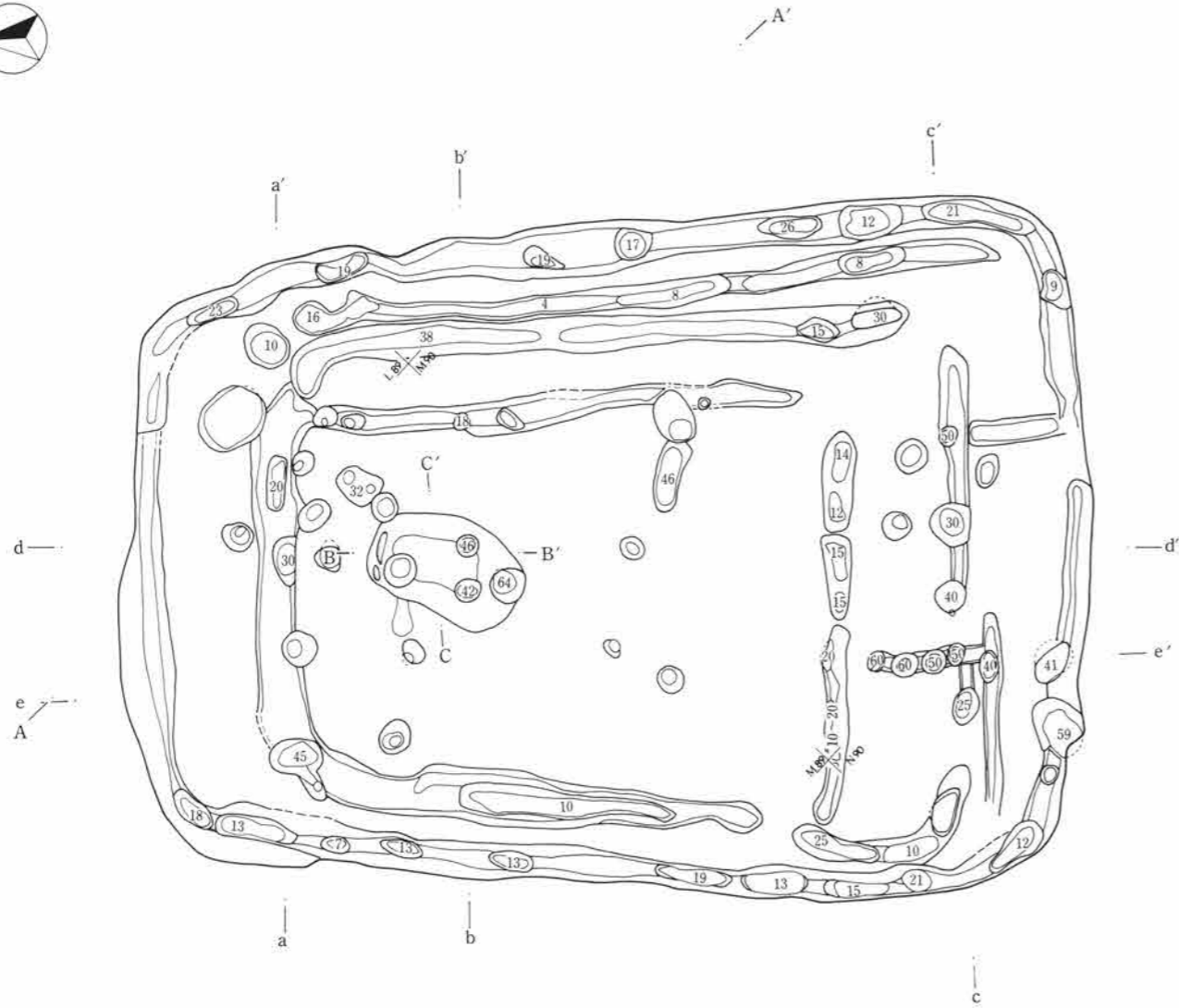
〔第2期〕 1回目の拡張が行われた住居跡である。長辺6.17m、短辺は北壁で4.15m、南壁では4.28mのやはり北に向かって狭まる隅丸の台形を呈している。面積約21.6㎡であるから、居住人員は約6.5人となる。拡張は東壁と南壁方向部分であり、北壁・西壁は第1期の住居跡と共有している。拡張面積は約7.3㎡であるから約2.2人の増員となる。

〔第3期〕 2回目の拡張が行われた住居跡である。長辺6.17m、短辺は北壁で4.45m、南壁では5.23mの台形を呈している。面積約25.4㎡であるから、居住人員は約7.7人となる。拡張は第2期と同様に、東壁及び南壁方向で行われている。拡張面積は約3.8㎡であるから、約1.2人の増員となる。なお、この段階で南壁周溝から間仕切りの溝と思われる幅15cmの溝が、北へ約1m延びている。

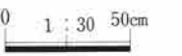
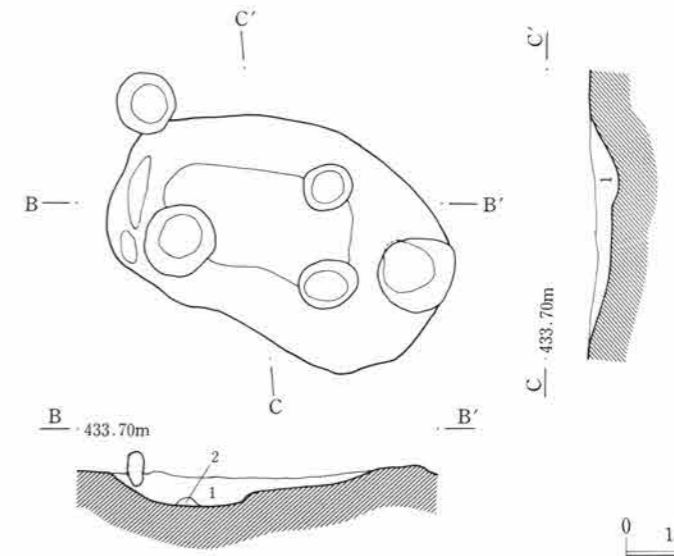
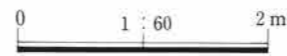
〔第4期〕 拡張の終了した最終の住居跡である。長辺8.37m、短辺は北壁で5.19m、中央で5.51m、南壁で6.02mの隅丸の台形を呈している。面積約38.3㎡であるから、居住人員は約11.6人となる。拡張はすべての壁方向で行われている。拡張面積は約12.8㎡であるから、約3.9人の増員となる。

以上が当住居跡で認められた拡張の変遷であるが、第1期の住居跡と第4期の住居跡とを比較すると、面積で約2.7倍、居住人員では7名程の増員となっている。

**壁高** 東壁では壁の残存を確認できなかったが、西壁では2~16cm、南壁では4~15cm、北壁では2~13cmの壁残存が確認された。J-4・J-5号住居跡と比べるとその残存状況は非常に悪い。



ピット内の数字は  
ピットの深さを表示



第90図 J-6号住居跡



**床面** 凹凸が認められ全体的に軟弱である。また多教の桑溝が横断していたために良好な状態での検出ではなかった。なお、平面図からは煩雑さを避けるために桑溝は省略してある。

**周溝** 全周もしくはほぼ全周する4本の周溝が検出された。当住居跡が3回にわたり拡張された根拠となるものである。第1期から第4期にわけて記述したい。

〔第1期〕 東南コーナーと南西コーナーで途切れているほかは全周している。東側周溝は幅16～30cm、深さ20cm、西側周溝は幅14～49cm、深さ24cm、南側周溝は幅15～28cm、深さ15～20cm、北側周溝は幅32～44cm、深さ10～35cmをそれぞれ測る。また各周溝内にはピットが認められ、東側周溝内では5個、西側では細長いピットが1個、南側は7個、北側は4個存在する。壁柱穴を構成するものであろう。

〔第2期〕 東南コーナーと、南・西の一部が途切れている。東側周溝は幅22～36cm、深さ25cm、西側周溝は幅14～49cm、深さ24cmであり第1期の周溝を利用して一部を延長している。南側周溝は幅13～25cm、深さ8cm、北側周溝は第1期の周溝をそのまま利用している。また各周溝内にはピットが認められ、東側では確実なもの2個、西側は4個、南側4個、北側4個である。壁柱穴を構成するものである。

〔第3期〕 北東コーナーと、南側の $\frac{3}{5}$ 、西側の一部が途切れている。東側周溝は幅12～30cm、深さ5～10cm、西側周溝は第1期・第2期の周溝を利用し、北側も同様である。なお、南側の周溝から幅15cm、長さ1mの溝が北に延びている。周溝内には深さ35～50cmのピット4個が存在する。間仕切りの溝と考えられ、当住居跡の出入口部に相当する個所であろう。

〔第4期〕 南側で周溝のごく一部が切れている。東側周溝は幅18～46cm、深さ約15cm、西側は幅18～31cm、深さ15～25cm、南側周溝は幅20～28cm、深さ約5cm、北側周溝は幅22～44cm、深さ約10cmである。また各周溝内にはピットが認められ、東側は7個、西側は10個、南側4個、北側1個である。壁柱穴を構成するものであろう。なお、南側周溝から幅20cm、長さ80cmの溝が北に向かって延びている。第3期の溝と同様に間仕切りの溝と考えられ、出口部に相当する個所であろう。

以上、周溝の変遷ならびに間仕切りの溝の存在、さらに炉の位置から総合的に判断すると、当住居跡（第1期から第4期まで）の出入口部は南壁に存在したものであろう。さらに言えば、同時期集落を構成するJ-4号・J-5号住居跡の出入口部も南壁に存在した可能性が高いものと判断される。

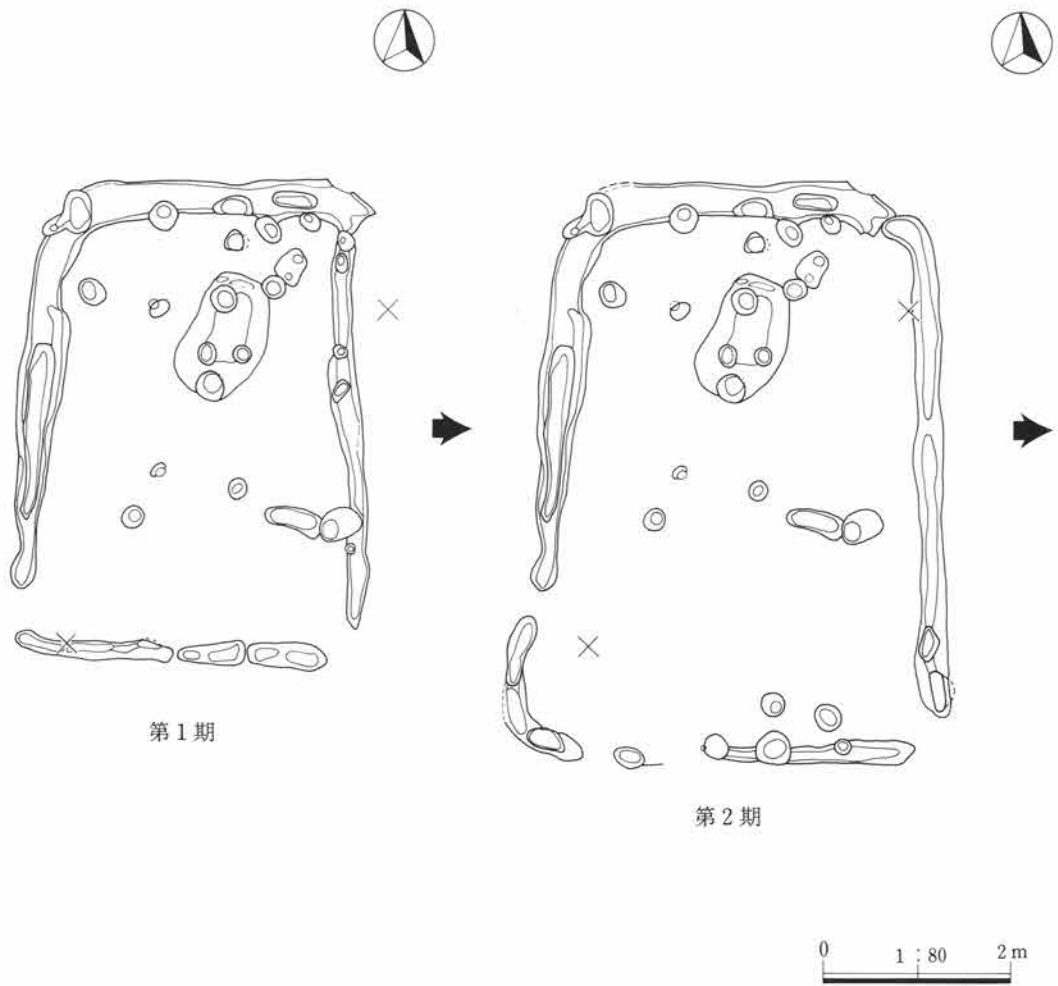
**柱穴** 当住居跡は壁柱穴を基本として構築されている。

〔第1期〕 各周溝内に壁柱穴が認められるが、その深さは北側のピットで20～40cm、南側では浅く15～20cmである。ピット数は東側5個、西側1個、南側7個、北側4個である。

〔第2期〕 壁柱穴で構成される。東側周溝内のピットの深さは15～38cm、西側は10～45cm、南側は25～50cmと深く、北側は第1期と同じ。ピット数は東側で確実なもの2個、西側4個、南側4個、北側4個である。

〔第3期〕 やはり壁柱穴で構成される。東側周溝内のピットの深さは8～16cm、西側は第2期と同じ、南側は40cm、北側は第1・2期と同じである。また南側に認められる間仕切り溝内のピットの深さは35～50cmである。ピット数は東側で3個、西側は第2期と同じ。南側は確実なものは1個であるが、周溝の途切れている部分に存在するピットも当住居跡に伴うものかもしれない。北側も第2期と同じであるが、さらに北東コーナーに存在する深さ10cmのピットも含められると思う。

〔第4期〕 壁柱穴で構成されるが、第1～3期までの住居跡とは若干の異なりが認められる。それは東側周溝内、西側周溝内で多数のピットが検出されているが、北側及び南側周溝内ではピットがほとんどみられないことである。東側周溝内からは7個のピットが検出され、深さ12～23cm、その平均は約20cmである。西側周溝内からは10個のピットが検出され、深さ7～21cm、その平均は約14cmである。ところが南側周溝内に



第91図 J-6号住居跡拡張変遷図

は4個のピットが検出されているが、周溝中央では確認されなかった。また西に位置するピット2個は、深さ41cmと59cmを測り、他のピットよりも一段と深くなっている。さらに間仕切り溝の存在から、この部分を出入口部とする十分な根拠があるものと思う。北側周溝では壁柱穴は全く検出されなかった。

以上の壁柱穴の他に床面から総計20個のピットが検出されている。

**炉** 床面を掘り窪めた地床炉である。長径137cm、短径85cm、深さ20cmの長楕円形を呈し、住居北壁寄りに位置している。また北壁に礫2個を配置し、約0.98㎡の面積がある。覆土は2層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子を極少量含む。

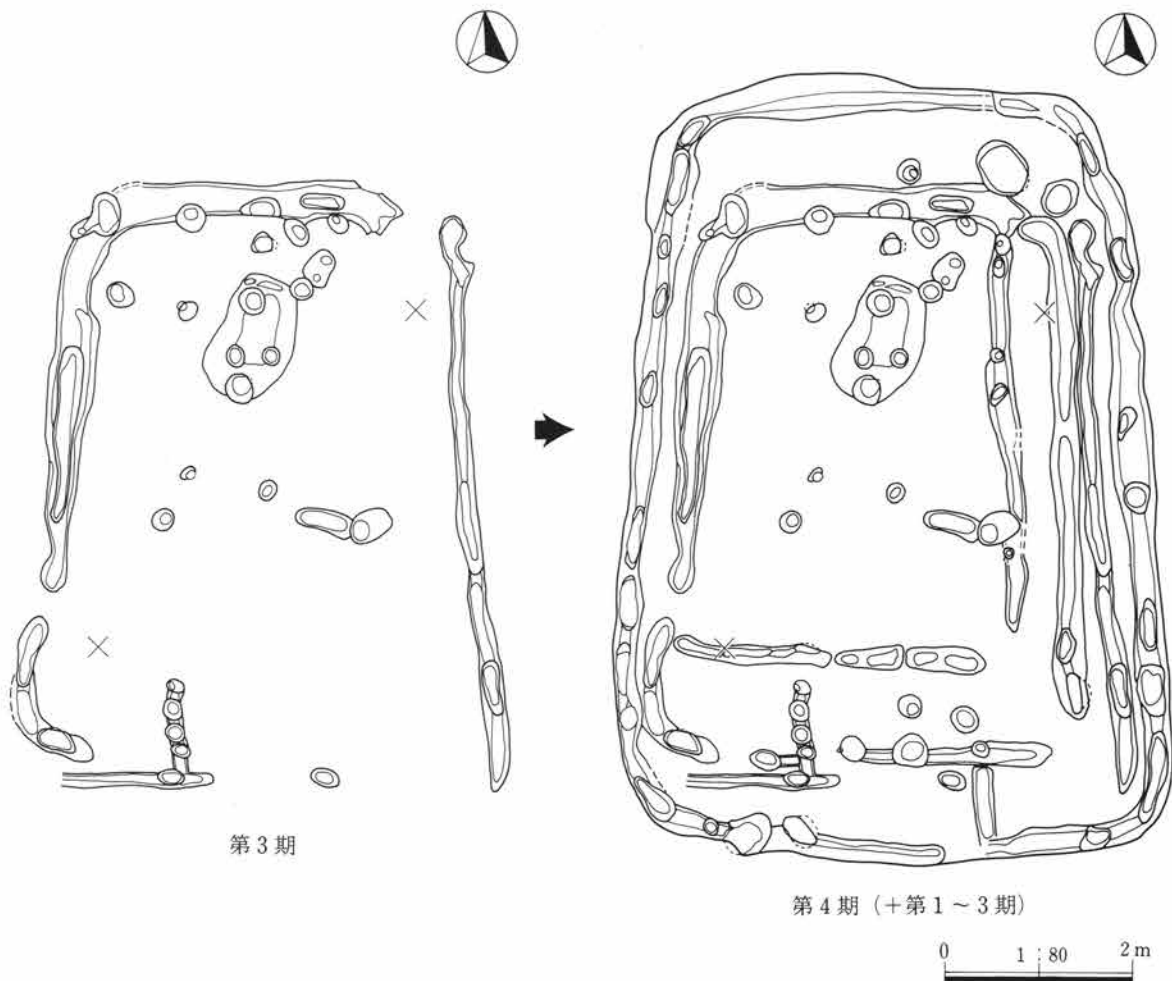
第2層 暗褐色土層 ロームブロックからなる。

この炉以外に床面から焼土の痕跡は認められなかった。第1期の住居跡からすでにこの位置に炉が存在し、住居が順次拡張されていくなかでも、炉は引き続き使用されていった結果であろう。ただし第1期の住居に対し炉の占める割合が大きいことから、住居の拡張に伴い炉本体も若干の拡大が図られたものであろうか。

#### 住居の拡張と存続期間

当住居跡は3回の拡張が行われているために、第1期から第4期にわけて考えることができた。これら各期の住居跡は継続して営まれたのか、あるいはそこに断絶が存在したもののなのかは、にわかに決し難い問題である。しかし第1期住居跡の壁柱穴を基本として北壁で若干狭まる形態が、その後第4期住居跡に至るま





で基本的に踏襲されていること、さらに言えば北側及び西側周溝が第3期住居跡まで共有され、炉もまた第1期から第4期まで規模の拡大が若干図られたであろうが、その位置は不変であること、等から総合的に判断すると、断絶を認めるよりも積極的に継続使用（連続居住）を考えた方がよいかもかもしれない。勿論、継続使用（連続居住）の場合でもそこには断続使用（反復居住）も考慮していかなければならないではあろうが。すなわち集落の移住に伴う廃棄—修復のサイクルを想定した場合である。しかしこの場合でも第1期住居を設計・構築した集落構成員の技術・伝統が消失することなく第4期住居に生かされていることを考えれば、集落構成員の断絶は認めることはできず、そこには技術・伝統を保持しつづけた同じ系譜に帰属する住民の介在を認めざるを得ないのである。

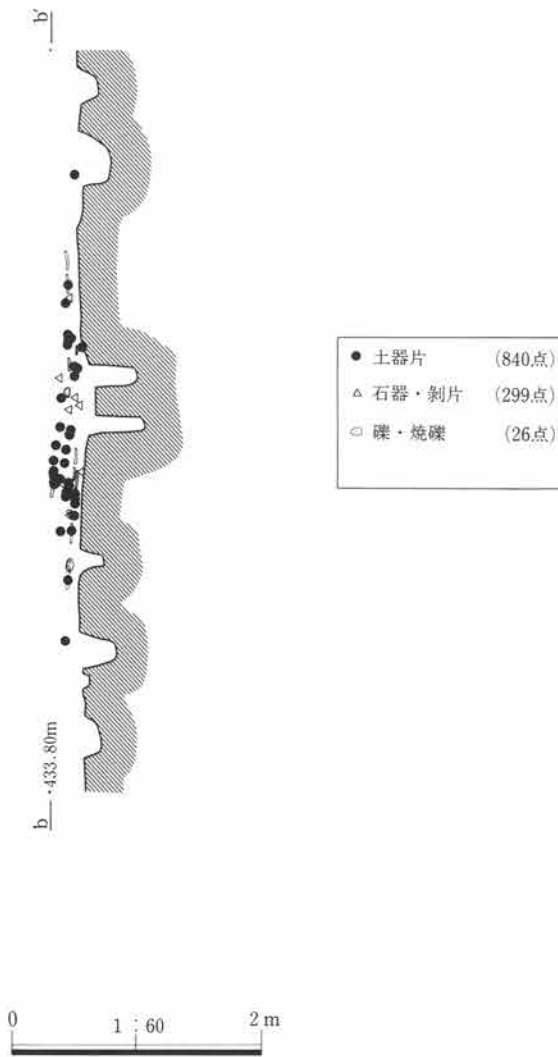
ところで第1期住居の構築された時期はどのくらいに求められるであろうか。当遺跡のかぎられた発掘区から判断することは非常に危険ではあるが、J-3号住居跡及びJ-7号住居跡とともに同時期集落を構成していたものと考えている。J-7号住居跡はその出土遺物から判断すると前期前葉の関山式期に属する。J-3号住居跡からは残念ながらほとんど遺物は出土しなかった。当住居跡からはJ-4号住居跡・J-5号住居跡と同時期の前期中葉有尾系土器が出土している。しかしこれは第4期住居に伴うものであろう。少なくとも第1期住居の構築は第4期住居跡出土遺物（前期中葉有尾系土器）以前に設定できそうである。さらに住居の形態・規模からもJ-3・J-7号住居跡と同時期性を把握できるものと考えている。いずれの住居跡も隅丸方形を基本とし、J-3号住居跡の面積は約12.7㎡、J-6号住居跡第1期は約14.3㎡、J



第92図 J-6号住居跡遺物出土状況

—7号住居跡は約12.3㎡であり、居住人員に換算した場合は、約4人、約4.3人、約3.7人となる。3軒とも、4人程の居住可能面積を有する住居であった。住居内部構造のうえからは、J-3号住居跡では北端に礫を配置した地床炉、4本柱、周溝、貯蔵穴を基本とし、J-6号住居跡第1期では北端に礫を配置した地床炉—勿論、これは第4期住居に直接伴うものであるが、第1期でも同様な形態であった可能性は否定できない—、壁柱穴を有する周溝、J-7号住居跡では埋甕炉、4本柱を基本として若干の壁柱穴を有する周溝、貯蔵穴となる。以上を整理すると次のようになる。

	J-3号住居跡	J-6号住居跡第1期	J-7号住居跡
形態	隅丸方形(南壁若干狭い)	隅丸方形(北壁若干狭い)	隅丸方形(北壁若干狭い)
面積	約12.7㎡ (4人)	約14.3㎡ (4.3人)	約12.3㎡ (3.7人)
主軸方向	N-1°-W	N-3°-W	N-34°-W
炉	地床炉(礫配置)	地床炉(礫配置)	埋甕炉
柱穴	4本	壁柱穴	4本+壁柱穴
周溝	あり	あり	あり
貯蔵穴	あり	なし	あり
出入口部	南壁	南壁	南壁



3軒に共通する要素、また2軒にのみ共通する要素が認められるが、なかでも大きな相違は埋甕炉と地床炉、主軸方向の違いに絞られる。言い換えればこれはJ-7号住居跡とJ-3号住居跡・J-6号住居跡第1期の相違として把握されるものである。少なくとも当遺跡にあっては前期中葉の住居には埋甕炉は取り入れられていないことを考えれば、埋甕炉は古い炉形態を示しているものと思われる。またJ-7号住居跡にみられた支柱穴4本+壁柱穴の構造が、J-3号住居跡には支柱穴4本として、J-6号住居跡第1期には壁柱穴としてうけつがれていったものという解釈もなりたつ。さらにJ-6号住居跡自身、その後拡張されながら、前期中葉にいたってJ-4号住居跡・J-5号住居跡と同時期集落を構成することを考えると、J-6号住居跡の第1期住居は、J-3・J-7号住居跡と同時期集落を構成するものの、J-3号住居跡と同様にJ-7号住居跡から派生した住居ととらえるこ

とができる。J-7号住居跡から分立した世帯といえようか。

#### 遺物出土状況 (第92図)

当住居跡から出土した遺物は、実測個体13点、土器片840点、石器類325点であり、覆土第1・2層から出土している。J-4・J-5号住居跡と比較すれば出土した遺物は極端に少ない。これは住居跡の残存状況の悪さに起因するものであろう。覆土から約20cm程で床面に達しているが、この層厚からではJ-4・J-5号住居跡といえども、さほど遺物は出土していなかった。本来どのくらいの壁が存在したものかは難かしい問題であるが、すくなくとも当住居跡の床面レベルが、J-4・J-5号住居跡と全く同一の標高であることから判断すれば、両住居跡で確認された壁の残存はあったものと考えられる。当住居跡が検出されたグリッド周辺から遺物が多量に出土していることから納得されるであろう。遺物の平面的な分布は炉跡上の北東部分に集中し、また垂直分布からは、当住居跡(第4期)が廃絶された後の窪地部分から出土していることを明瞭に読みとれる。

#### 出土遺物

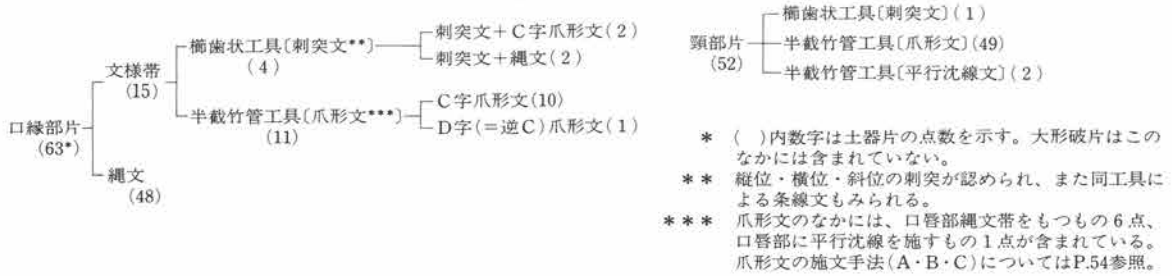
##### 〔I〕土器 (第94~97図、PL.57)

当住居跡からは前期中葉の土器大形破片と土器片840点(口縁部片63点、頸部片52点、胴部片682点、底部

片43点)が出土している。前期中葉の土器は、J-4・J-5号住居跡と同様に、(1)口縁部文様帯をもつ土器群、(2)縄文のみ施文される土器群に分けられる。

(1)口縁部文様帯をもつ土器群 (第94図8~25・95図26~40)

器形は甕形が主体となる。資料的制約からか、深鉢形・浅鉢形は確認できなかった。口縁部は波状(内彎、外反、外傾)を呈し、波底部に小突起を有するものもある(23)。口縁部は平坦が最も多く、次に沈線が巡る様な手法、丸味を呈す、内傾を呈するものが見られる。口縁から胴下部の成形(積みあげ技法)は圧倒的に技法A(第93図)が多いが、技法Bも認められる。土器内面の調整は、徹底したミガキもしくは丁寧な調整、あるいは条痕風の調整が行われている。胴部以下は羽状縄文を施す。



(2)縄文のみ施文される土器群 (第94図1~7・第95図41~120)

当住居跡から出土した口縁部片63点中、縄文施文だけの土器片は48点あった。また胴部片682点もまた縄文施文の破片である。本書では便宜上、縄文原体を中心に以下のように分類した。

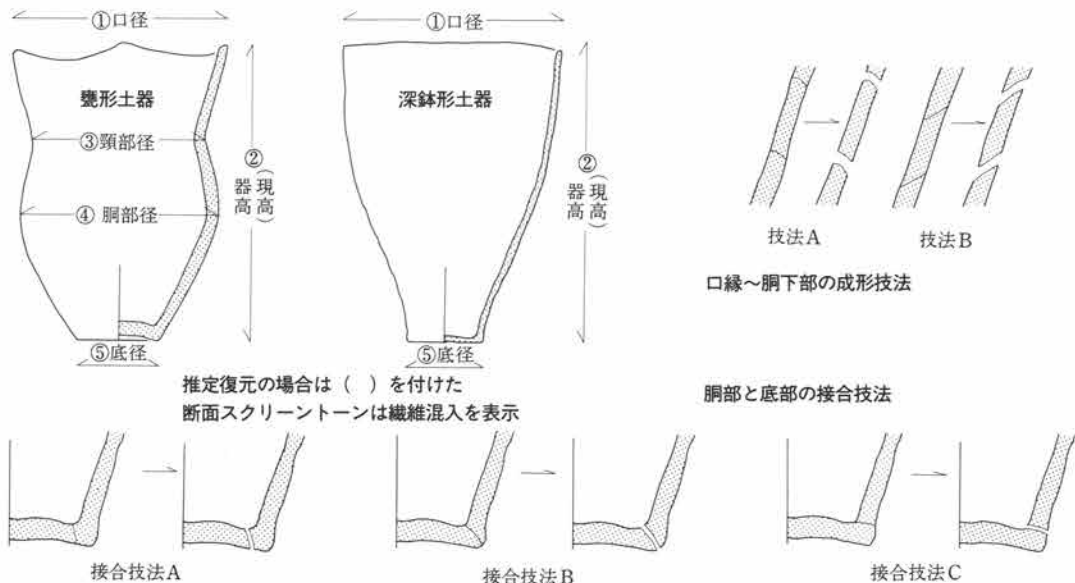
a. 羽状縄文を施文する土器

- ①単節斜縄文と無節斜縄文  $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} + L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right. \right. (5)$
- ②単節斜縄文  $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} + L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right. \right. (2 \cdot 4 \cdot 41 \sim 68 \cdot 99 \cdot 106 \cdot 113)$
- ③前々段反撚  $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \end{matrix} + L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right. \right. (69 \sim 71 \cdot 73 \sim 77)$
- ④附加条第1種  $\begin{cases} R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} + L \text{ と } L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right. \right. (78) \\ R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} + L \text{ と } L \left\{ \begin{matrix} R \\ R + R \end{matrix} \right. \right. (79) \end{cases}$

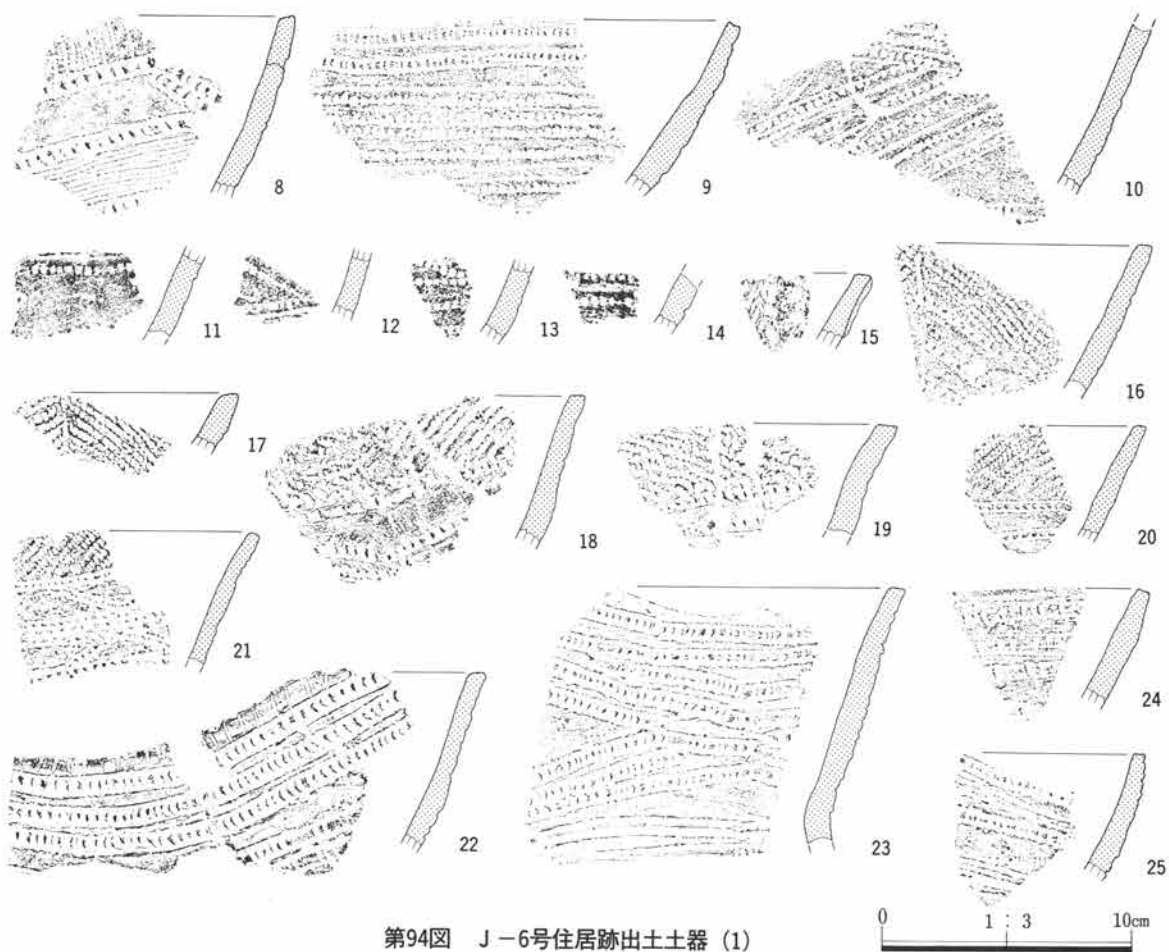
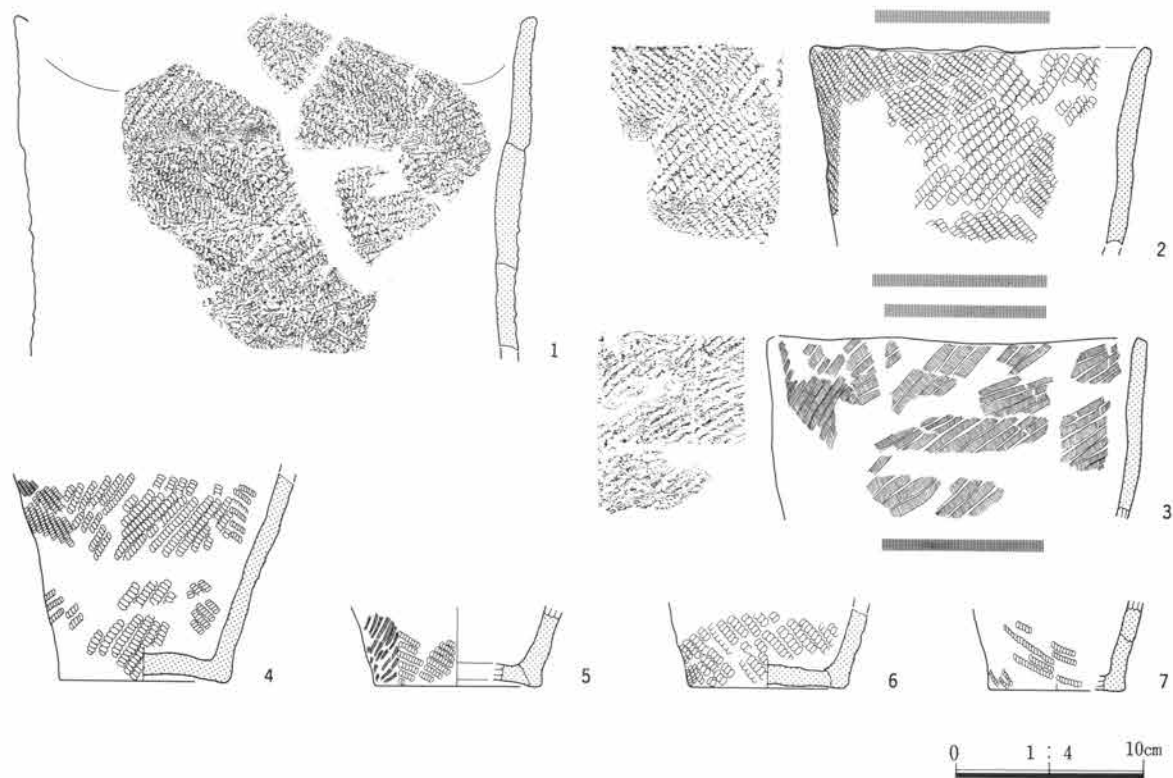
b. 斜縄文を施文する土器

- ①無節斜縄文  $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right. (81) \quad L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right. (3 \cdot 80 \cdot 114)$
- ②単節斜縄文  $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right. (6 \cdot 7 \cdot 82 \sim 94 \cdot 116)$
- $L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right. (95 \sim 98 \cdot 100 \sim 105 \cdot 107 \sim 111)$
- ③前々段反撚  $L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ R \end{matrix} \right. (115)$

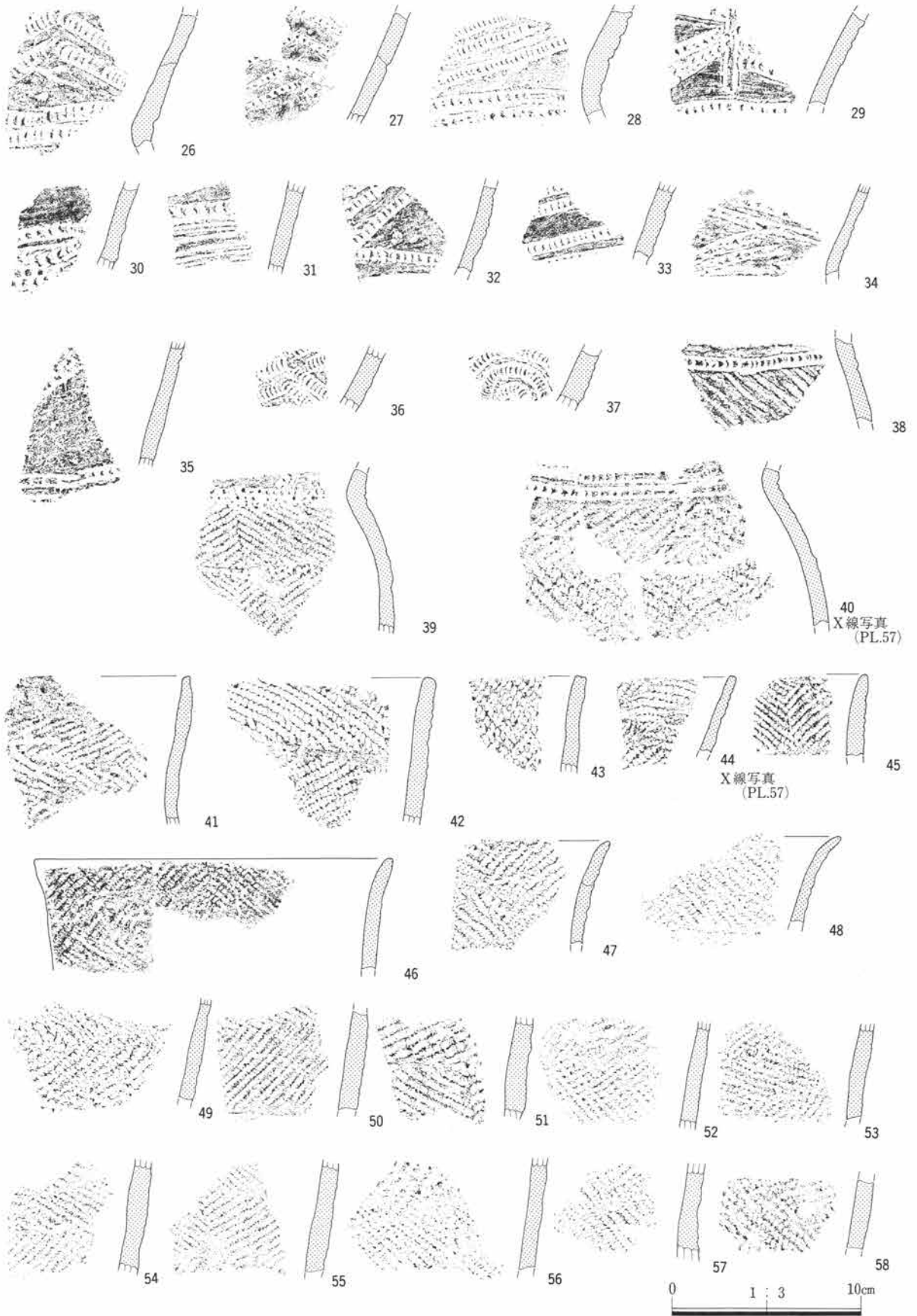
斜縄文土器の中には羽状縄文土器の破片もかなりの量含まれる。縄文原体は0段多条が圧倒的に多い。



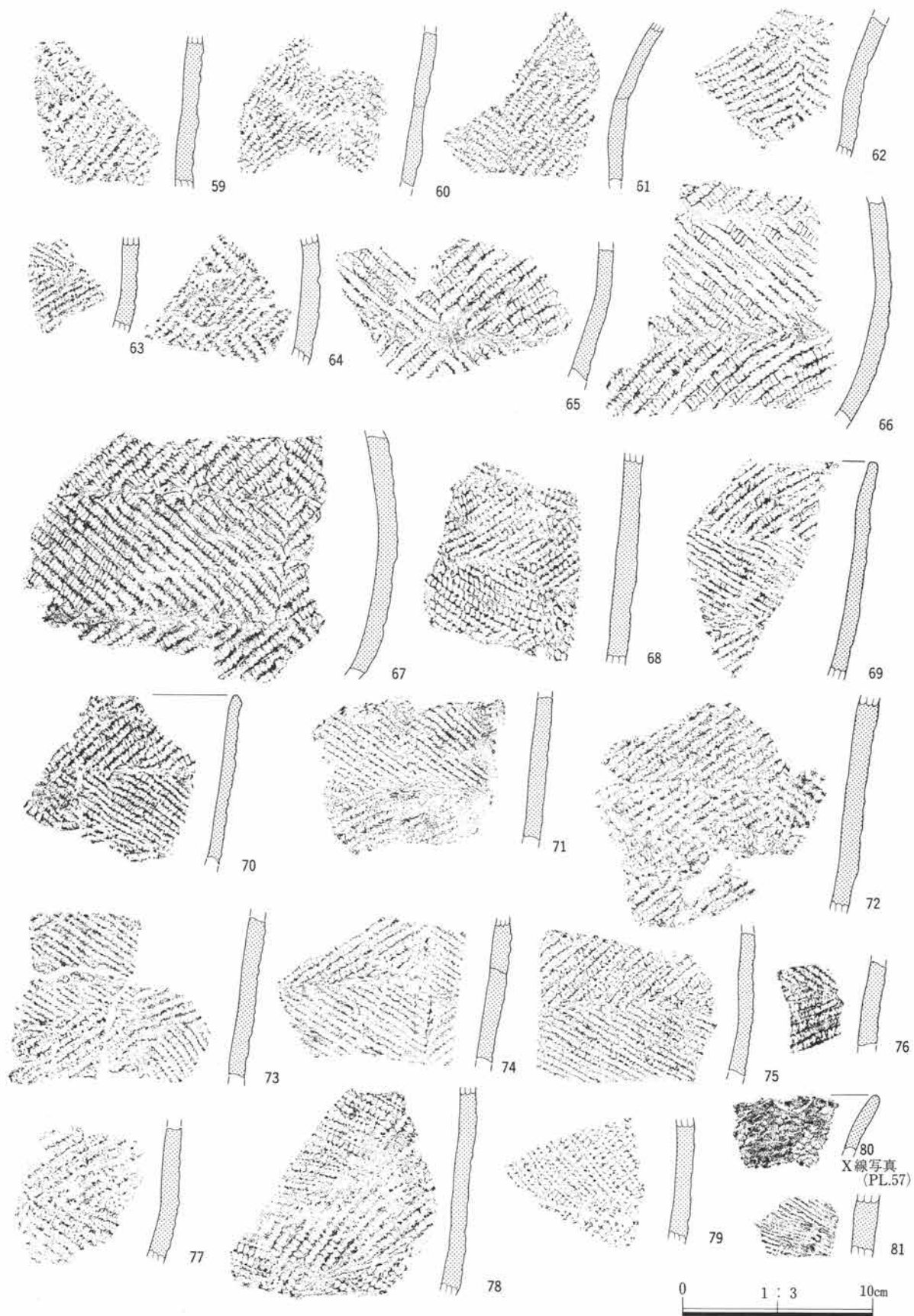
第93図 土器の計測と成形(積みあげ)技法



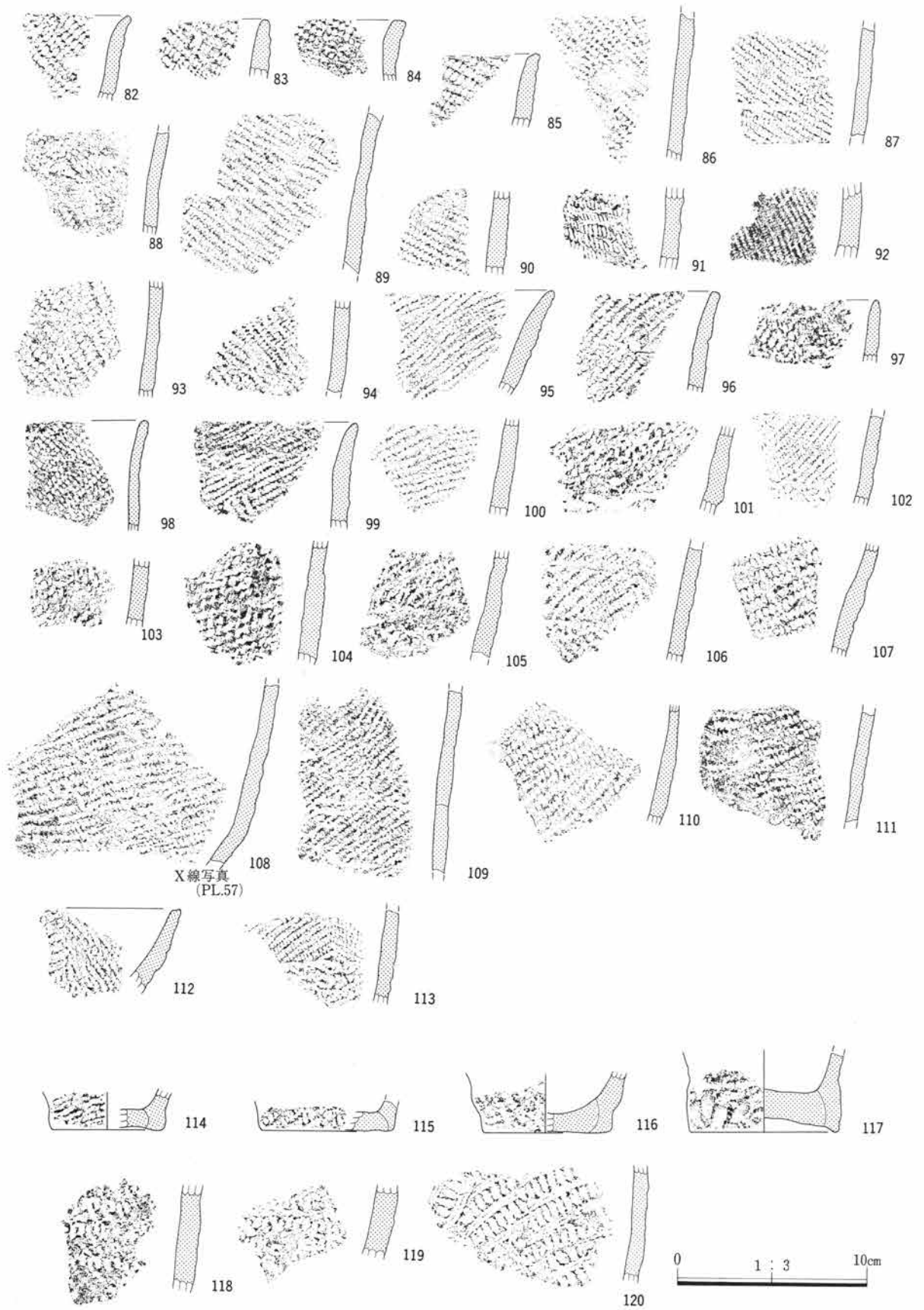
第94图 J-6号住居跡出土土器(1)



第95図 J-6号住居跡出土土器(2)



第96図 J-6号住居跡出土土器 (3)



第97図 J-6号住居跡出土土器(4)



J-6住居跡遺物観察表

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
94-1 PL. 57	深鉢形 (口縁か ら胴部)	①(27.8) ②(18)	①含繊維 ②良 ③外面 暗褐色 内面 赤褐色	4単位の波状口縁を呈すると思われる。口縁部はほぼ直立している。器厚1cmで積みあげ技法A。内面横ミガキで一部繊維痕がある。	口縁から胴部にかけて縄文施文。原体は不明。原体交換部で菱形状の交叉。	住居跡北壁付近で接合
94-2 PL. 57	深鉢形 (口縁か ら胴部)	①(18) ②(10.2)	①含繊維 ②良 ③外面 ぶい黄橙色 内面 ぶい黄褐色	口縁から胴部にかけて1/2。口縁部はやや外反し、口唇部は平坦である。器厚8mm~1cm。内面は横ミガキで一部縦ミガキ、内外面繊維痕。	縄文施文。原体はR(1/2)(0段多条)とL(1/2)(0段多条)で羽状。原体交換部でX状の交叉。	住居跡中央部で接合
94-3 PL. 57	深鉢形 (口縁か ら胴部)	①(20.2) ②(19.4)	①含繊維 ②やや良 ③外面 暗褐色 内面 灰褐色	口縁から胴部にかけて1/2。口縁部はやや外反し胴部でややふくらむ。口唇部はほぼ平坦である。内外面ともに繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はL(1/2)。一部粘土の移動による畝状の隆起がある。	住居跡中央やや南壁寄り
94-4 PL. 57	底部片	②(11) ⑤ 9	①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 黒褐色	上げ底であり、開き気味に胴部へ移行する。器厚1cmで積みあげ技法A。内面の調整は丁寧である。	縄文施文。原体はR(1/2)(0段多条)とL(1/2)(0段多条)で羽状。	炉付近
94-5 PL. 57	底部片	②(4.2) ⑤(9)	①含繊維 ②良 ③外面にぶい 黄褐色 内面黒褐色	上げ底であり、開き気味に胴部へ移行する。器厚8mmで接合技法A。内面・底面は徹底したミガキ。	縄文施文。原体はR(1/2)とL(1/2)で羽状。	炉付近
94-6 PL. 57	底部片	②(4.2) ⑤(8.4)	①含繊維 ②良 ③外面にぶい 橙色 内面 灰褐色	上げ底であり、開き気味に胴部へ移行する。器厚8mm~1cmで接合技法A。底面のミガキ丁寧である。	縄文施文。原体はR(1/2)(0段多条)。	住居跡中央やや南壁寄り
94-7 PL. 57	底部片	②(4.4) ⑤(7.2)	①含繊維 ②良 ③外面 暗赤 褐色 内面 黒褐色	平底になるか。器厚8mmで積みあげ技法A。内面・底面のミガキは丁寧である。	縄文施文。原体はR(1/2)。	覆土
94-8	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 ぶい橙色	甕形土器の波状口縁部片。口縁部は内彎し口唇部は内傾する。器厚8mmで積みあげ技法A。内面は条痕風の調整痕を残す。	口唇部に巾1.5mmの櫛歯状工具による縦位刺突(方形先端・8本)。同工具による条線→巾7mmの平行沈線後C字爪形文(手法C)充填。	覆土
94-9	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 ぶい褐色 内面 ぶい橙色	甕形土器の波状口縁部片。口縁部は内彎し口唇部は溝が走る様な効果となっている。器厚6mm~1.2cm。内面は条痕風の調整痕を残す。	口唇部に巾6mmの半截竹管による平行沈線・C字爪形文(手法A)を2条施文。以下巾6mmの平行沈線と巾3mmの櫛歯状工具の横位刺突。	住居跡北西コーナー
94-10~12	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 ぶい褐色 内面 ぶい橙色	9と同一個体。甕形土器の頸部片。	巾6mmの半截竹管による平行沈線を引いた後に、巾3mmの方形の先端をもつ櫛歯状工具(7本・長さ2.3cm)による斜位刺突。	住居跡北西コーナー
94-13 14	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 橙色 内面 橙色	13・14は同一個体。甕形土器の頸部片。器厚9mmで積みあげ技法A。	巾3mmの方形の先端をもつ櫛歯状工具による横位刺突。	床面から出土
94-15	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面に ぶい橙色内面灰褐色	甕形土器の口縁部片。口唇部は平坦である。器厚6mm~8mm。	口唇部から断面三角形の微隆起帯が垂下。両脇は巾4mmの円形竹管による刺突。	覆土
94-16 17	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 ぶい黄褐色	16・17は同一個体。甕形土器の波状口縁部片で、口縁部はやや内彎し口唇部は平坦。器厚8mmで積み	口唇部にR(1/2)(0段多条)とL(1/2)の縄文施文。縄文帯巾2cm。→波頂部に巾2mmの櫛歯状工具に	炉付近

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
			内面 ぶい黄橙色	あげ技法A。内面は横ミガキが行われている。	よる縦位刺突→巾4mmの平行沈線後にC字爪形文(手法C)充填。	
94-18	口縁部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 黒褐色 内面 ぶい黄橙色	甕形土器の波状口縁部片で、口縁部は外傾し口唇部は平坦。器厚7mm~1cm。内面は横ミガキが行われている。	口唇部にL $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right.$ とR $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right.$ の縄文施文。縄文帯巾2.8cm。以下巾5mmの半載竹管による平行沈線・C字爪形文(手法AとC)の充填。	炉付近
94-19	口縁部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 ぶい黄橙色	18と同一個体か。甕形土器の波状口縁部片で、口縁部は外反し口唇部は平坦。器厚8mm~1.1cmで積みあげ技法A。内面は横ミガキが行われている。	口唇部に前々段反転R $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right.$ の縄文施文。縄文帯巾2.9cm。以下巾5mmの半載竹管による平行沈線・C字爪形文(手法A)の充填。	炉付近
94-20	口縁部片		①含繊維 ②良 ③外面 明黄褐色 内面 ぶい黄橙色	甕形土器の波状口縁部片で、口縁部は外傾し口唇部はほぼ平坦。器厚6mm~8mm。内面は条痕風の調整痕を残す。	口唇部にL $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right.$ (0段多条)の縄文施文。縄文帯巾3cm。以下巾5mmの半載竹管による平行沈線・C字爪形文(手法A)の充填。	炉付近
94-21	口縁部片		①含繊維 ②良 ③外面 浅黄色 内面 ぶい黄橙色	甕形土器の波状口縁部片で、口縁部は外反し口唇部はやや丸味をもつ。器厚6mm。内面は横ミガキが行われている。	口唇部にL $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right.$ (0段多条)の縄文施文。縄文帯巾1.7cm。以下巾4mmの半載竹管による平行沈線・C字爪形文(手法C)の充填。	炉付近
94-22	口縁部片		①含繊維 ②良 ③外面 暗赤褐色 内面 暗赤色	甕形土器の波状口縁部片で、口縁部はやや内彎し口唇部は平坦で外側にややつまみ出された様になる。器厚8mm。内面丁寧な横ミガキ。	巾8mmの半載竹管による平行沈線・C字爪形文(手法C)の充填。次に口唇部に同半載竹管による縦位の平行沈線。巾9mm。	住居跡中央部付近
94-23	口縁部片		①含繊維 ②良 ③外面 灰黄褐色 内面 ぶい黄橙色	甕形土器の波状口縁部片で、波底部に小突起がある。口縁部は外反し口唇部は平坦。器厚8mm~1.1cmで積みあげ技法B。内面に繊維痕。	巾7mmの半載竹管による平行沈線・D字(逆C・手法C)爪形文の充填。頸部は平行沈線主体で爪形文の充填は極一部。	住居跡中央部
94-24	口縁部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 ぶい褐色	甕形土器の波状口縁部片で、口縁部はやや内彎し口唇部は溝が走る様な効果となっている。器厚7mm~9mm。内面は丁寧な調整。	巾6mmの半載竹管による平行沈線・C字爪形文(手法A)の充填。爪形の間隔は粗く浅い押圧。	覆土
94-25	口縁部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 灰褐色	甕形土器の波状口縁部片で、口縁部は内彎し口唇部は溝が走る様な効果となっている。器厚6mm~9mm。内面は丁寧な調整。	巾6mmの半載竹管による平行沈線・C字爪形文(手法A)の充填となるが、爪形施文は2条だけで他は平行沈線のみ。	炉付近
95-26	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 ぶい黄橙色 内面 ぶい黄橙色	甕形土器の頸部片。器厚8mm~1cmで積みあげ技法B。内面は丁寧な調整が行われている。	巾9mmの半載竹管による平行沈線・C字爪形文(手法C)の充填。竹管は巾広く、爪形の施文は浅い押圧。	覆土
95-27	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐色 内面 ぶい黄橙色	甕形土器の頸部片。器厚8mmで積みあげ技法A。内面は一部横ミガキが認められる。また繊維痕も認められる。	巾4mmの半載竹管による平行沈線・C字爪形文(手法C)の充填。非常に細い竹管が使用されている。菱形構成か。	覆土
95-28	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 黄灰色 内面 黄灰色	甕形土器の頸部片。器厚9mm~1.1cmで積みあげ技法B。内面には繊維痕が認められる。	巾7mmの半載竹管による平行沈線・C字爪形文(手法C)の充填。密に施文されている。	覆土

図番 PL.	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
95-29 30	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 におい赤褐色 内面 におい赤褐色	29・30は同一個体。甕形土器の頸部片。器厚8mmで積みあげ技法A。内面には条痕風の調整痕を残している。	巾8mmの半載竹管による縦位の平行沈線→同竹管による斜位・横位の平行沈線・C字爪形文(手法C)の充填。深く押圧。	覆土
95-31	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 橙色 内面 橙色	甕形土器の頸部片。器厚8mm。内面は丁寧な調整が行われている。	巾7mmの半載竹管による平行沈線・C字爪形文(手法C)の充填であるが、爪形が施文されない平行沈線もある。	住居跡中央南壁寄り
95-32	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 におい黄褐色 内面 におい黄褐色	甕形土器の頸部片。器厚7mmで積みあげ技法A。内外面ともに繊維痕が認められる。	巾7mmの半載竹管による平行沈線・C字爪形文(手法A)の充填。	炉付近
95-33	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 におい黄褐色	甕形土器の頸部片。器厚9mmで積みあげ技法A。内面に一部繊維痕が認められる。	巾7mmの半載竹管による平行沈線を引いた後に、巾5mmと7mmの爪形文(手法C)を充填。2種類の半載竹管工具を使用している。	覆土
95-34	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 褐色 内面 黒褐色	甕形土器の頸部片。器厚6mmで積みあげ技法B。内外面ともに繊維痕が認められる。	巾6mmの半載竹管による平行沈線・C字爪形文(手法B)の充填。雑な施文である。	炉付近
95-35	頸部片		①含繊維 ②不良 ③外面 褐色 内面 暗赤褐色	甕形土器の頸部片。器厚8mm。外面に一部繊維痕が認められ、内面は丁寧な調整が行われている。	巾7mmの半載竹管による平行沈線・C字爪形文の充填。爪形の施文手法はBとCが混在している。	炉付近
95-36	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 におい褐色 内面 におい褐色	甕形土器の頸部片。器厚9mm。内面は丁寧な調整が行われている。	巾8mmの半載竹管による平行沈線・C字爪形文(手法B)の充填。密に施文されている。	覆土
95-37	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面 暗赤褐色 内面 赤褐色	甕形土器の頸部片。器厚1cmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	巾8mmの半載竹管による渦巻状のモチーフ・C字爪形文(手法B)の施文。	覆土
95-38	頸部～ 胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 におい黄褐色 内面 におい黄褐色	甕形土器の頸部から胴部にかけての破片。器厚9mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	胴部に縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{1}$ }。→括れ部に巾7mmの半載竹管による平行沈線・D字爪形文(逆C・手法C)の充填。	覆土
95-39	頸部～ 胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 黒褐色	甕形土器の頸部から胴部にかけての破片。器厚8mm～1cmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整。一部繊維痕が認められる。	胴部に縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{1}$ } (0段多条)とL{ $\frac{R}{R}$ } (0段多条)の環付で羽状。原体交換部で変形状の交叉。→括れ部に巾4mmの平行沈線2条、C字爪形文(手法C)の充填。	覆土
95-40	頸部～ 胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黄褐色 内面 におい黄褐色	甕形土器の頸部から胴部にかけての破片。器厚8mmで積みあげ技法A。外面は繊維痕顕著。内面は条痕風の調整痕を残す。	胴部に縄文施文。不鮮明であるがR{ $\frac{1}{1}$ }とL{ $\frac{R}{R}$ }と思われる。原体交換部で変形状の交叉→括れ部に巾7mmの平行沈線2条。D字爪形文(逆C・手法C)の充填。	住居跡北壁寄り
95-41	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面暗 褐色内面におい黄褐色	深鉢形土器の内彎する口縁部片で口唇部は先細り。内面は繊維痕顕著でザラザラしている。	縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{1}$ }とL{ $\frac{R}{R}$ }で羽状。	覆土

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
95-42	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐色 内面 灰黄褐色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部 片で口唇部は波形。器厚9mm。内面 は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR(L)とL(R) とL(R) (0段多条)で羽状。	住居跡北西 コーナー
95-43	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面にふい黄橙色	深鉢形土器のやや外反する口縁部 片で口唇部はほぼ平坦。器厚8mm。 内面は横ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR(L)とL(R)で 羽状。	覆土
95-44	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面にふい黄橙色	深鉢形の外傾する口縁部片で口唇 部は先細り。器厚5mmで積みあげ 技法A。内面は横・斜位のミガキ。	縄文施文。原体はR(L)とL(R)。	覆土
95-45	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 黄灰色	深鉢形土器の外反する口縁部片で 口唇部は内傾。器厚7mm～9mmで 積みあげ技法A。内面丁寧な調整。	縄文施文。原体はR(L)とL(R)で 羽状。	覆土
95-46	口縁部 片	①(18.8)	①含繊維 ②やや良 ③外面黒 褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の外反する口縁部片で 口唇部は先細り。器厚6mm～8mm で積みあげ技法B。内外面繊維痕。	縄文施文。原体はR(L)とL(R)で 羽状。	覆土
95-47	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐色 内面 褐色	深鉢形土器の外反する口縁部片で 口唇部は内削ぎ状。器厚6mmで積 みあげ技法A。内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体はR(L) (0段多条) とL(R)で羽状。	覆土
95-48	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 黄橙色 内面黒褐色	甕形土器の外反する口縁部片か。 口唇部は先細り。器厚3mm～6mmで 積みあげ技法A。内面丁寧なミガキ。	縄文施文。原体はR(L)とL(R)で 羽状。	住居跡西壁 北側寄り
95-49	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 灰褐色 内面にふい黄橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚6mm～ 8mmで積みあげ技法A。内面は丁 寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR(L)とL(R)で 羽状。	住居跡中央 東側寄り
95-50	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚1cmで 積みあげ技法A。内外面に一部繊 維痕が認められる。	縄文施文。原体はR(L)とL(R) (0 段多条)で羽状。	炉付近
95-51	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 黄褐色内面灰黄褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚1cm。 内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR(L) (0段多条) とL(R) (0段多条)で羽状。	覆土
95-52	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚6mm～ 8mm。内面に縦ミガキが行われて いる。	縄文施文。原体はR(L)とL(R)で 羽状。 内面に煤の付着が認められる。	住居跡北西 コーナー
95-53	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 橙色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法B。内面に縦ミガキ、 繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR(L)とL(R)で 羽状。	住居跡北西 コーナー
95-54	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 黄橙色内面にふい黄橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚1cm。 内面は繊維痕顕著に認められる。	縄文施文。原体はR(L)とL(R)で 羽状。	炉付近
95-55	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 にふい褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚1cmで 積みあげ技法B。内面に横ミガキ が行われている。	縄文施文。原体はR(L)とL(R) (0 段多条)で羽状。原体交換部で菱 形状の交叉。	炉付近
95-56	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐色 内面 暗褐色	甕形土器の胴部片か。器厚8mmで 積みあげ技法B。内面は縦ミガキ が行われている。	縄文施文。原体はR(L)とL(R)で 羽状。	覆土

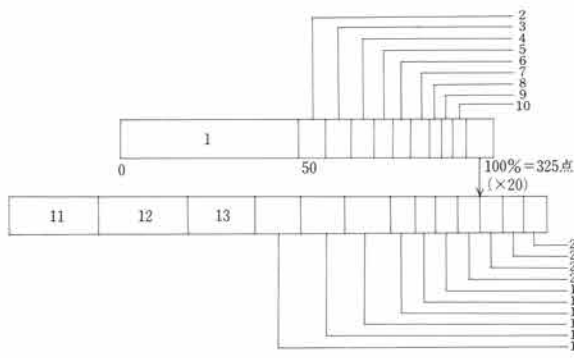
図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
95-57	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 にぶい赤褐色	甕形土器の胴部片。器厚9mm~1.1cm。内面は横ミガキが丁寧に行われている。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ )とL( $\frac{R}{R}$ )で羽状。	住居跡中央部
95-58	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 にぶい褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ )とL( $\frac{R}{R}$ )で羽状。	覆土
96-59	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 にぶ い褐色内面にぶい黄褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。内面は横ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ (0段多条)とL( $\frac{R}{R}$ (0段多条)で羽状。	覆土
96-60	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 灰褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚6mm~8mmで積みあげ技法A。内面には縦・横ミガキが認められる。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ (0段多条)とL( $\frac{R}{R}$ (0段多条)で羽状。粘土の移動による畝状の隆起。外面に煤の付着。	住居跡西壁寄り
96-61	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面 灰黄褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚6mm~8mmで積みあげ技法A。内面は繊維痕が認められザラザラしている。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ (0段多条)とL( $\frac{R}{R}$ (0段多条)で羽状。縄の開端を別の条で縛る。	覆土
96-62	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで積みあげ技法A。内面には繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ (0段多条)とL( $\frac{R}{R}$ (0段多条)で羽状。	覆土
96-63	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 橙色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。内面には一部繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ (0段多条)L( $\frac{R}{R}$ (0段多条)の環付で羽状。	覆土
96-64	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面灰黄褐 色内面にぶい黄褐色	甕形土器の胴部片。器厚8mm~1cm。内面には縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ (0段多条)とL( $\frac{R}{R}$ (0段多条)で羽状。	炉付近
96-65-67	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 にぶい赤褐色 内面 暗赤色	65-67は同一個体。甕形土器の胴部片。器厚1cmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ (0段多条)とL( $\frac{R}{R}$ (0段多条)で羽状。原体交換部で菱形・X状の交叉。縄の開端を別の条で縛る。	住居跡西壁寄り
96-68	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm~1.1cm。内面はややザラザラしている。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ (0段3条)とL( $\frac{R}{R}$ (0段多条)で羽状。原体交換部で菱形の交叉。	住居跡中央南壁寄り
96-69	口縁部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 にぶい黄褐色	深鉢形土器のやや外反する口縁部片で口唇部は平坦。器厚6mm~8mm。内面は繊維痕顕著でザラザラしている。	縄文施文。原体は前々段反撚R( $\frac{L}{L}$ とL( $\frac{R}{R}$ )で羽状。縄の開端を別の条で縛る。	住居跡北壁寄り
96-70	口縁部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 にぶい黄褐色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部片で口唇部は外削ぎ状。器厚6mm。内面は一部横ミガキが行われている。	縄文施文。原体は前々段反撚R( $\frac{L}{L}$ とL( $\frac{R}{R}$ )で羽状。縄の開端を別の条で縛る。	住居跡北壁と南壁寄りで接合
96-71	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 にぶい黄褐色 内面 黄灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mmで積みあげ技法A。内面は縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体は前々段反撚R( $\frac{L}{L}$ とL( $\frac{R}{R}$ )で羽状。縄の開端を別の条で縛る。	住居跡西壁寄り
96-72	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐 色 内面 赤褐色	1と同一個体。波状口縁を呈する深鉢形土器の胴部片。器厚9mm~1.1cm。内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体は不明。原体交換部で菱形の交叉。	住居跡東壁寄り
96-73	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 にぶい黄褐色 内面 黄灰色	71と同一個体か。深鉢形土器の胴部片。器厚9mmで積みあげ技法A。内面は縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体は前々段反撚R( $\frac{L}{L}$ とL( $\frac{R}{R}$ )で羽状。原体交換部でX状の交叉。縄の開端を別の条で縛る。内面に一部煤が付着している。	住居跡北壁寄り

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
96-74	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 ぶい黄橙色 内面 ぶい黄橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mmで積みあげ技法A。内外面に繊維痕が認められる。	縄文施文。原体は前々段反撚 $R \left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\} \text{と} L \left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right\}$ で羽状。 原体交換部で菱形の交叉。縄の 開端を別の条で縛る。粘土の移動 による畝状の隆起。	住居跡南壁 寄り
96-75	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 ぶい黄橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mmで 積みあげ技法A。内面に一部繊維 痕が認められる。	縄文施文。原体は前々段反撚 $R \left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\} \text{と} L \left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right\}$ で羽状。 縄の開端を別の条で縛る。外面に 一部煤が付着。	炉付近
96-76	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 褐灰色	甕形土器の胴部片か。器厚8mm～ 1cmで積みあげ技法A。内面は丁 寧な調整が行われている。	縄文施文。原体は前々段反撚 $R \left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\} \text{と} L \left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right\}$ で羽状。 縄の開端を別の条で縛る。	住居跡中央 東壁寄り
96-77	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 黒褐色 内面 暗褐色	甕形土器の胴部片。器厚1cmで積 みあげ技法A。内面は縦ミガキ、 繊維痕が認められる。	縄文施文。原体は前々段反撚 $R \left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\} \text{と} L \left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right\}$ で羽状。	覆土
96-78	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐 色 内面 ぶい黄橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面に一部横ミガキが行われてい る。	縄文施文。原体は附加条第1種 $R \left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\} + L \text{と} L \left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right\}$ で菱形の交叉 か。	炉付近
96-79	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 ぶい 黄褐色 内面 ぶい黄橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面に一部繊維痕が認められる。	縄文施文。原体は附加条第1種 $R \left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\} + L \text{と} L \left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right\} + R$ で羽状。	住居跡中央 南壁寄り
96-80	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 ぶい 黄褐色 内面 褐灰色	甕形土器の外反する波状口縁部片 か。器厚6mmで積みあげ技法B。 内面は条痕風の調整痕を残す。	縄文施文。原体は $L \left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\}$ 。	覆土
96-81	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 橙 色 内面 ぶい黄橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚1.2cm。 内面は繊維痕顕著である。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\}$ 。	覆土
97-82	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 ぶい黄褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は 先細り。器厚4mm～6mm。内面は 繊維痕が認められる。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\}$ (0段多 条)。	炉付近
97-83	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面 浅黄色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は やや平坦。器厚5mm～1cm。内面 は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\}$ (0段多 条)。	住居跡西壁 寄り
97-84	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐 色 内面 黒褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は 平坦。器厚6mm～8mm。内面は横 ミガキが行われている。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\}$ 。	住居跡北壁 寄り
97-85	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面 ぶい橙 色	深鉢形土器のやや外反する口縁部 片。器厚6mm～9mm。内面は繊維 痕が認められる。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\}$ (0段多 条)。 外面に煤の付着が顕著である。	炉付近
97-86	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 浅黄色 内面 浅黄色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法A。内面は繊維痕顕 著である。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\}$ 。	覆土
97-87	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 褐 色 内面 ぶい橙 色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm。 積みあげ技法A。内面は縦・横ミ ガキが行われている。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\}$ (0段多 条)。	覆土
97-88	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 ぶい黄褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm。 積みあげ技法B。内外面に繊維痕 が認められる。	縄文施文。原体は $R \left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\}$ 。	覆土

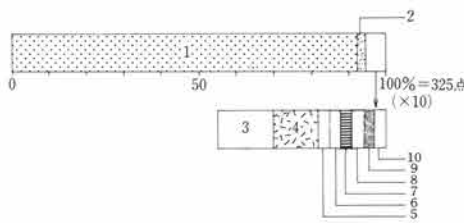
図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
97-89	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚6mm~ 8mmで積みあげ技法A。内面は繊 維痕顕著でザラザラしている。	縄文施文。原体はR(1/2(0段多 条)。 外面にごく一部煤の付着が認めら れる。	覆土
97-90	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm~ 1cm。内面は縦ミガキが行われて いる。	縄文施文。原体はR(1/2(0段多 条)。	覆土
97-91	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面 暗褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面には条痕風の調整痕が認めら れる。	縄文施文。原体はR(1/2(0段4 条)。	覆土
97-92	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面暗 褐色 内面暗赤褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚1cm。 内面には条痕風の調整痕が認めら れる。	縄文施文。原体はR(1/2)。	覆土
97-93	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 褐灰 色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm。 内面は縦ミガキ、繊維痕が一部認 められる。	縄文施文。原体はR(1/2(0段多 条)。	住居跡北壁 寄り
97-94	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 灰黄 色 内面にふい黄褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法A。内面は縦ミガキ が行われている。	縄文施文。原体はR(1/2(0段多 条)。	覆土
97-95	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面	深鉢形土器の外反する口縁部片で 口唇部は先細り。内面は横・縦ミ ガキが行われている。	縄文施文。原体はL(3/8(0段多 条)。	炉付近
97-96	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面に ふい橙色内面灰褐色	深鉢形土器の外反する口縁部片で 口唇部は平坦。器厚5mm~8mm。 内外面に繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はL(3/8(0段多 条)。	覆土
97-97	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面褐 灰色内面にふい黄褐色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部 片で口唇部は先細り。器厚5mm~ 7mm。内外面に繊維痕顕著。	縄文施文。原体はL(3/8)。	炉付近
97-98	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 黄褐色内面灰黄褐色	深鉢形土器の外反する口縁部片で 口唇部はやや丸味をもつ。器厚5 mm~6mm。内面は横・縦ミガキ。	縄文施文。原体はL(3/8)。	覆土
97-99	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面に ふい黄褐色内面灰黄色	深鉢形土器のやや外反する口縁部 片で口唇部先細り。器厚6mm~8 mm。内外面は繊維痕顕著である。	縄文施文。原体はR(1/2(0段多条) とL(3/8(0段多条)で羽状。	床面から出 土
97-100	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面 暗褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は縦ミガキが丁寧に行われて いる。	縄文施文。原体はL(3/8(0段多 条)。	覆土
97- 101・103 ~105	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面褐 灰色内面にふい黄褐色	97と同一個体。深鉢形土器の胴部 片。器厚7mm~1cm。内面は繊維 痕顕著で凹凸が激しい。	縄文施文。原体はL(3/8)。	炉付近
97-102	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 黄褐色内面にふい黄褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm。 内面は縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体はL(3/8(0段多 条)。	炉付近
97-106	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 明褐 色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで 積みあげ技法A。内面はザラザラ している。	縄文施文。原体はR(1/2(0段多条) とL(3/8(0段多条)で羽状。	炉付近

図 番 PL	器 種 (部位)	法 量 (cm)	①胎土 ②焼成 (遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
97-107	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黄灰色 内面 黄灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は丁寧な縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体は $L\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多 条)。	炉付近
97-108	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 明褐色 内面 褐色	深鉢形土器の胴部片。底部にちか い。器厚8mmで積みあげ技法A。 内外面ともザラザラしている。	縄文施文。原体は $L\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多 条)。 外面に一部煤が付着している。	住居跡中央 東壁寄り
97-109	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐色 内面 暗褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mmで 積みあげ技法A。内面は丁寧な縦 ミガキが行われている。	縄文施文。原体は $L\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多 条)。	住居跡中央 部
97-110	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐色 内面 暗赤褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚5mm～ 8mm。内面には横・縦ミガキが行 われている。	縄文施文。原体は $L\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多 条)。 外面に一部煤が付着している。	住居跡中央 部
97-111	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 ぶい橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚6mmで 積みあげ技法AとB。内面は丁寧 な調整が行われている。	縄文施文。原体は $L\left\{\frac{R}{R}\right\}$ 。	覆土
97-112	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 ぶい黄橙色	甕形土器の波状口縁部で口唇部は 内傾。内面は丁寧なミガキが行わ れている。	口唇部に前々段反撚 $R\left\{\frac{L}{L}\right\}$ と $L\left\{\frac{R}{R}\right\}$ 。以下巾5mmの平行沈 線・C字爪形文(手法A)の充墳。	炉付近
97-113	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にぶい 黄褐色内面にぶい黄褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mmで 積みあげ技法A。内面は縦ミガキ が行われている。	縄文施文。原体は $R\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (0段多条・ 環付)と $L\left\{\frac{R}{R}\right\}$ (0段多条・環付)で 羽状。	炉付近
97-114	底部片	⑤( 6.0)	①含繊維 ②良 ③外面にぶい 黄橙色 内面褐灰色	上げ底。器厚8mmで接合技法A。 底面は丁寧なミガキが行われてい る。	縄文施文。原体は $L\left\{\frac{R}{R}\right\}$ 。	覆土
97-115	底部片	⑤( 7.0)	①含繊維 ②良 ③外面 暗赤褐色 内面 暗赤褐色	平底。器厚8mm～1cmで接合技法 B。底面はミガキが行われている。	縄文施文。原体は前々段反撚 $L\left\{\frac{R}{R}\right\}$ 。 内面に煤が付着している。	炉付近
97-116	底部片	⑤( 6.7)	①含繊維 ②やや良 ③外面橙 色 内面 黒褐色	平底で開き気味に胴部へ移行す る。器厚9mm～1.2cmで接合技法 A。外面に繊維痕が認められる。	縄文施文。原体は $R\left\{\frac{L}{L}\right\}$ 。 内面に煤が付着している。	炉付近
97-117	底部片	⑤( 7.8)	①含繊維 ②やや良 ③外面に ぶい黄褐色内面褐灰色	上げ底で開き気味に胴部へ移行す る。器厚6mm～1.5cmで接合技法A。 底面はミガキ、内面繊維痕顕著。	器面荒れていて不明。	覆土
97-118	胴部片 (関山式)		①含繊維 ②良 ③外面 褐色 内面 灰黄褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚1cm。 内外面に繊維痕が認められる。	$R\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (環付末端)で横位多段施文。	覆土
97-119	胴部片 (関山式)		①含繊維 ②良 ③外面 褐灰 色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚1.2cm。 内外面に繊維痕が認められる。	$R\left\{\frac{L}{L}\right\}$ (環付末端)で横位多段施文。	覆土
97-120	胴部片 (関山式)		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 明黄褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体は直前段合撚 $L\left\{\frac{R}{L}\right\}$ 。 内面に煤が付着している。	住居跡北西 コーナー

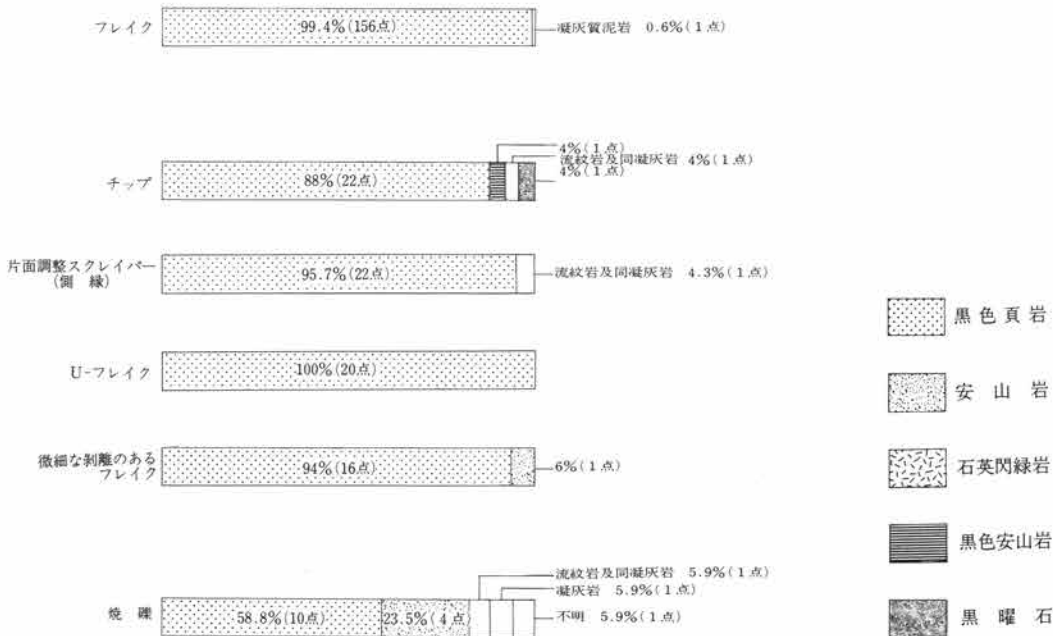




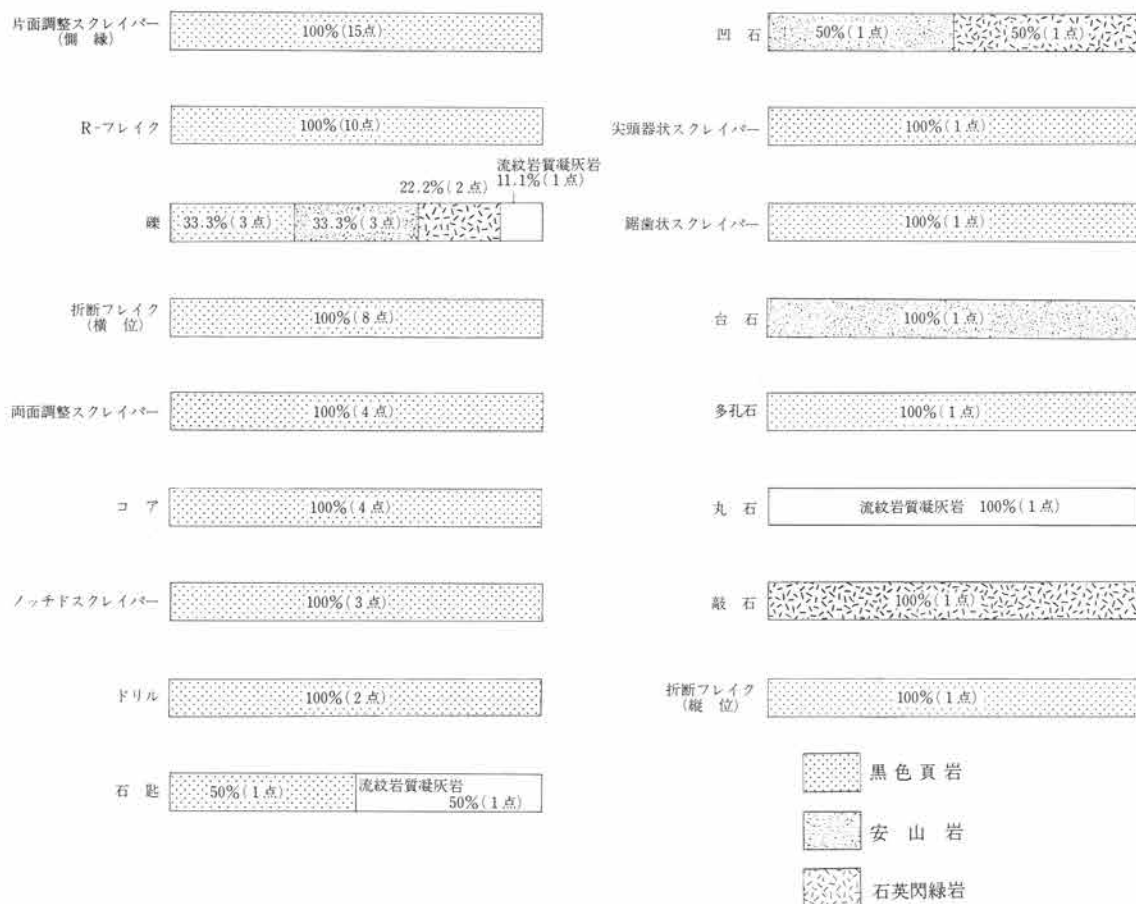
器種	%	点
1 フレイク	48.3	157
2 チップ	7.1	25
3 片面調整スクレイパー(一部縁)	7.1	23
4 U-フレイク	6.2	20
5 微細な剥離のあるフレイク	5.2	17
6 焼燧	5.2	17
7 片面調整スクレイパー(一部縁)	4.6	15
8 R-フレイク	3.1	10
9 燧	2.9	9
10 折断フレイク(横位)	2.5	8
11 両面調整スクレイパー	1.2	4
12 コア	1.2	4
13 ノッチドスクレイパー	0.9	3
14 ドリル	0.6	2
15 石匙	0.6	2
16 凹石	0.6	2
17 尖頭器状スクレイパー	0.3	1
18 鋸歯状スクレイパー	0.3	1
19 台石	0.3	1
20 多孔石	0.3	1
21 丸石	0.3	1
22 敲石	0.3	1
23 折断フレイク(縦位)	0.3	1
	100.0	325



石材	%	点
1 黒色頁岩	92.3	300
2 安山岩	3.1	10
3 流紋岩及同凝灰岩	1.5	5
4 石英閃緑岩	1.3	4
5 流紋岩質凝灰岩	0.3	1
6 凝灰質泥岩	0.3	1
7 黒色安山岩	0.3	1
8 凝灰岩	0.3	1
9 黒曜石	0.3	1
10 不明	0.3	1
	100.0	325



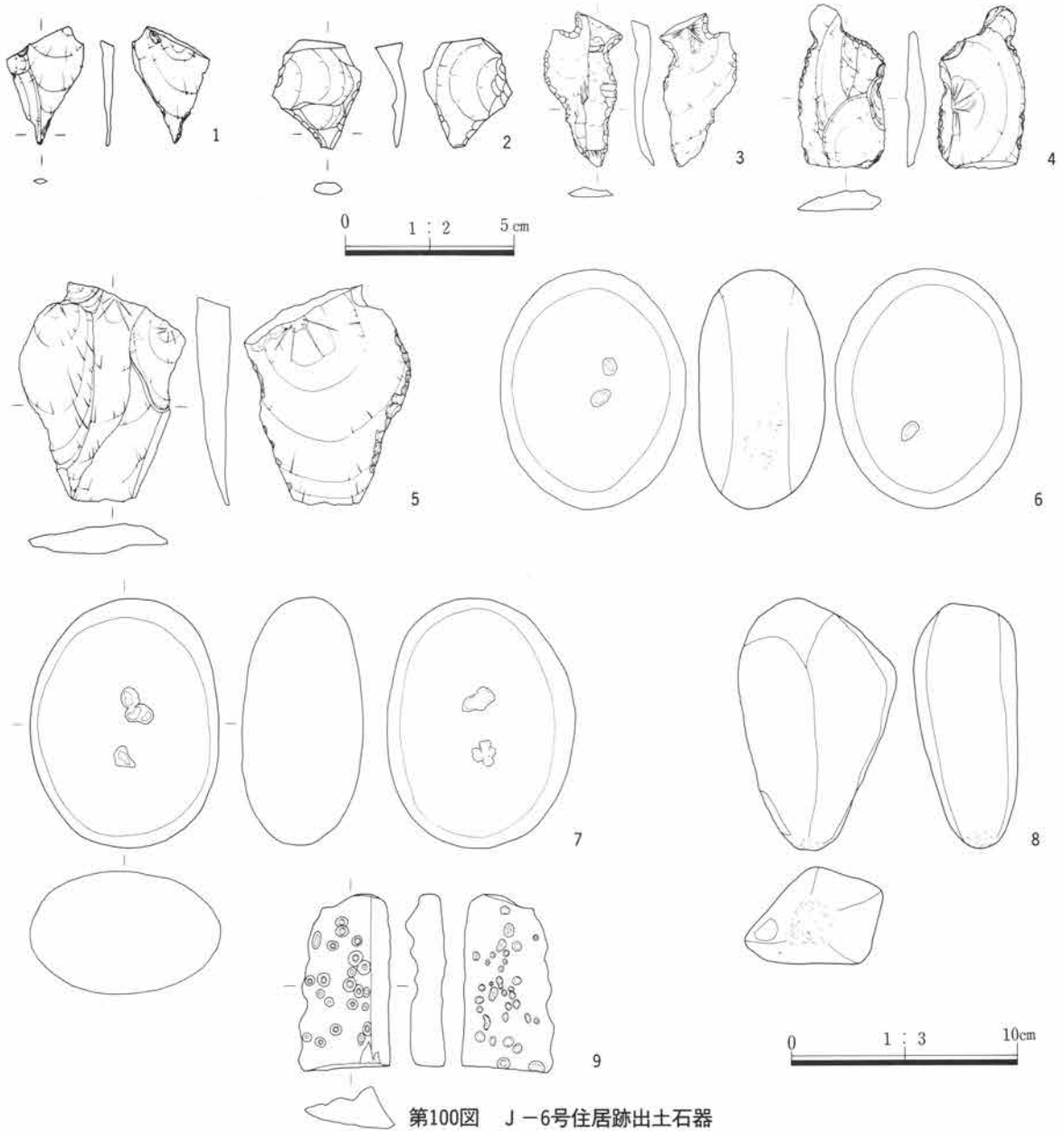
第98図 J-6号住居跡出土石器の器種別・石材別グラフ (1)



第99図 J-6号住居跡出土石器の器種別・石材別グラフ (2)

〔II〕石器類 (第98～100図、PL.57)

J-6号住居跡からは土器とともに多量の石器・礫等が出土している。このうち焼礫・礫とコア・フレイク・チップをのぞく加工された石器や明らかに使用された痕跡のある石器 (凹石・多孔石・敲石) は、96点を数える。内訳は、尖頭器1点、石匙2点、ドリル2点、ノッチドスクレイパー3点、鋸歯状スクレイパー1点、両面調整スクレイパー4点、片面調整スクレイパー38点、R-フレイク10点、U-フレイク20点、折断フレイク9点、台石1点、多孔石1点、凹石2点、敲石1点、丸石1点である。そしてコア4点、フレイク174点、チップ25点、焼礫17点、礫9点が併せて出土し、総計325点を数えた。この325点を石材別に検討すると、300点が黒色頁岩であり、92.3%の圧倒的多数を占めている。次いで安山岩10点・3.1%、石英閃緑岩4点・1.3%、流紋岩質凝灰岩・凝灰質泥岩・黒色安山岩・凝灰岩・黒曜石が各1点・0.3%となっている。器種別の石材を検討すると、やはり黒色頁岩が各器種のなかで圧倒的多数を占めるが、凹石・台石・敲石には安山岩・石英閃緑岩などの石材が選択されている。詳細は、第98・99図の器種別・石材別グラフを参照していただきたい。



第100図 J-6号住居跡出土石器

J-6号住居跡石器一覧表

(単位はcmおよびg、( )内は現存値)

図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値				備考	出土状況
				全長	最大幅	最大厚	重量		
100-1 PL. 57	ドリル	完形	黒色頁岩	3.1	2.2	0.4	2.0	小さな剥片を素材とし、一端を錐状に加工。	床面
100-2 PL. 57	ドリル	舌部欠	黒色頁岩	(3.1)	2.5	0.7	(4.2)	”	覆土
100-3 PL. 57	石匙	完形	流紋岩質凝灰岩	6.4	3.1	0.8	11.8	縦型。縦長剥片を素材とし打面残。刃部加工は両側縁に丁寧。	覆土
100-4 PL. 57	石匙	完形	黒色頁岩	7.1	3.7	0.8	27.7	縦型。横長剥片を素材とし打面残。刃部加工は左側縁。	覆土
100-5 PL. 57	石匙	完形	黒色頁岩	9.5	7.0	1.5	99.8	縦型。縦長剥片を素材とし、打面残。つまみ部粗雑。	床面
100-6 PL. 57	凹石	完形	安山岩	10.4	8.2	5.5	710	器面に敲打による凹みと、側縁に敲打痕がある。	住居跡北東コーナー
100-7 PL. 57	凹石	完形	石英閃緑岩	11.1	8.4	5.4	620	器面に敲打による凹みがある。	住居跡北壁寄り
100-8 PL. 57	敲石	完形	石英閃緑岩	11.0	7.0	4.5	420	下端に著しい敲打痕がみられる。	ピット内
100-9 PL. 57	多孔石	一部欠	黒色頁岩	(7.6)	4.0	1.6	(60)	器面に多数の凹みがみられる。	覆土

J-7号住居跡 (第101・102図、PL.12)

**位置** K-94・95、L-95グリッドにかけて検出された。J-6号住居跡の東約21mのところ

**経過** 9月14日に住居跡プランの一部を確認。発掘区を若干拡張し、住居跡の全貌を確認したのは27日になってからであった。調査は10月12日から開始し、覆土からは有尾系土器・関山式土器片が出土した。遺物出土状況図等の作成を行い、最後に埋甕炉の調査をもって当住居跡の発掘を完了した。

**覆土** ローム層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

第1層 黒色土層 少量のローム粒子を含んでいる。

第2層 黒褐色土層 多量のローム粒子を含んでいる。

第3層 黒褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を含んでいる。

第4層 黄褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を中心として少量の黒色土を含んでいる。

以上、覆土は4層に分層されたが、第1・2層を中心に遺物が出土している。

**形状** 長辺4.6m、短辺3.24mの隅丸方形を呈するが、北壁で若干狭まっているようである。面積約12.3m<sup>2</sup>

No.	上 長径×短径 (cm)		深さ (cm)	備考
	下 長径×短径 (cm)			
1	50×38cm	34×32cm	42cm	主柱穴
2	49×45cm	30×28cm	45cm	〃
3	43×36cm	15×13cm	41cm	〃
4	40×37cm	25×19cm	41cm	〃
5	14×13cm	9×8cm	28cm	出入口部
6	16×14cm	8×7cm	31cm	〃
7	27×15cm	14×11cm	32cm	壁柱穴
8	71×36cm	64×25cm	38cm	
9	34×33cm	40×32cm	51cm	
10	19×16cm	12×8cm	8cm	壁柱穴
11	36×9cm	32×8cm	25cm	〃
12	30×28cm	14×9cm	28cm	
13	15×14cm	6×6cm	28cm	
14	19×18cm	14×11cm	17cm	
15	14×12cm	7×6cm	33cm	壁柱穴
16	32×26cm	28×21cm	40cm	
17	17×16cm	20×18cm	24cm	
18	28×27cm	20×15cm	32cm	
19	62×37cm	33×29cm	53cm	

J-7号住居跡ピット計測表

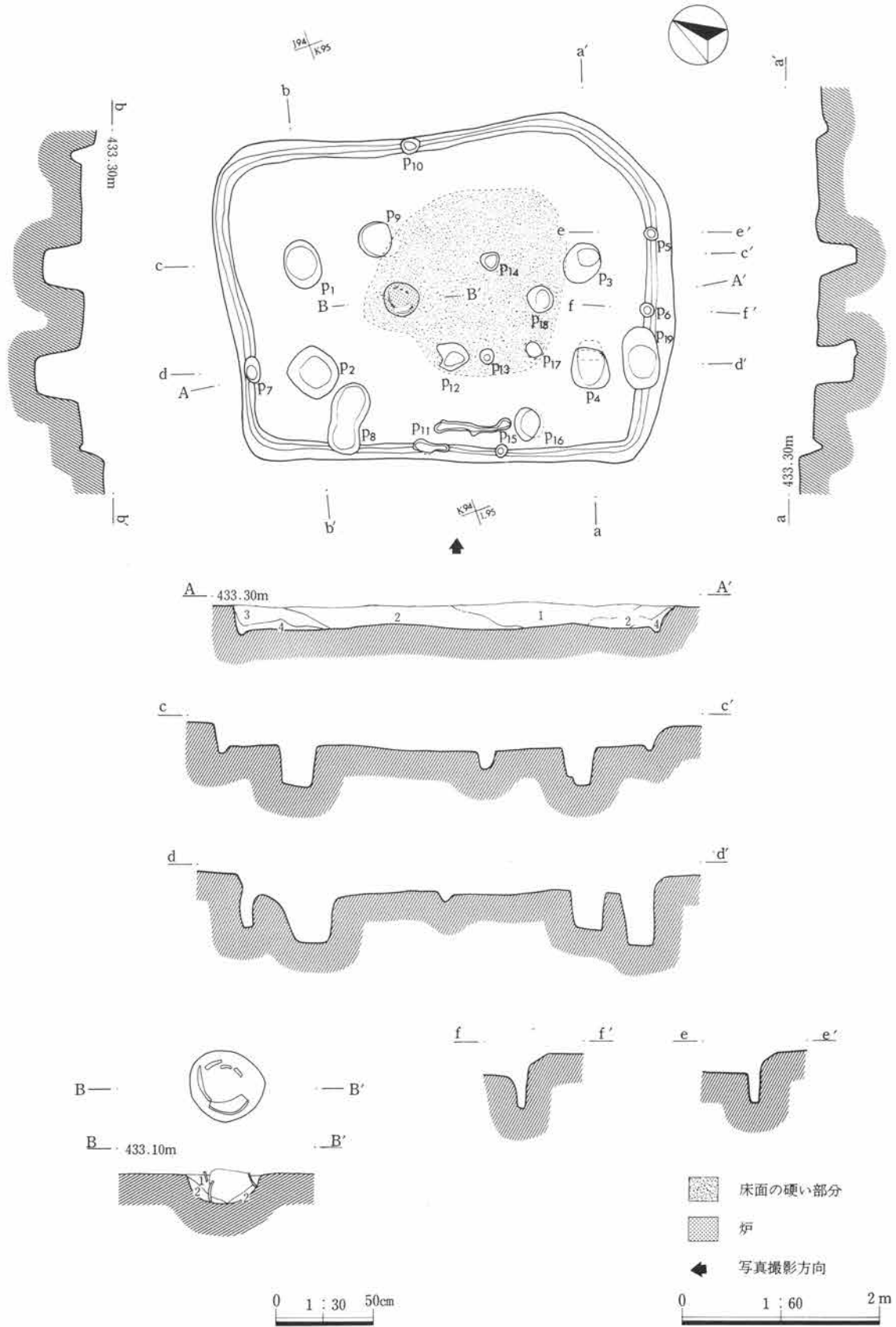
あるから、居住人員は約3.7人となる。

**壁高** 住居跡確認面より約11~23cmで床面に達している。東壁の残存状況がやや悪かった。

**床面** ほぼ平坦であり、全体的に硬い床面であるが、とりわけ硬い範囲をスクリーントーンで表示した。それは埋甕炉の南からP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>までの部分に認められた。

**周溝** 幅3~8cm、深さは東壁下で4.3~11cm、西壁下3.5~8.5cm、南壁下4.7~11cm、北壁下3.7~8.5cmを測る周溝が全周している。周溝内からはピットが検出されている。東壁で1個、西壁2個、南壁2個、北壁1個である。

**柱穴** 総計19個のピットが検出された。このうちP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は主柱穴に、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>は出入口部施設に、そしてP<sub>7</sub>・P<sub>10</sub>・P<sub>11</sub>・P<sub>15</sub>は壁柱穴になると考えられる。主柱穴の深さはP<sub>1</sub>42cm、P<sub>2</sub>45cm、P<sub>3</sub>41cm、P<sub>4</sub>41cmであり、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間距離110cm、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間距離も110cm、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>間距離292cm、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>間距離284cmをそれぞれ測る。P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>はその検出位置から判断して出入口部分に相当すると思われる。P<sub>5</sub>の深さ28cm、P<sub>6</sub>の深さ31cmであり、その間隔は80cmを測る。壁柱穴は4個検出された。東壁下中央に存在するP<sub>10</sub>は深さ8cm、西壁下中央に存在するP<sub>11</sub>は深さ25cm、P<sub>15</sub>は33cmであり、P<sub>11</sub>・P<sub>15</sub>の間隔は約80cmを測る。北壁下のP<sub>7</sub>は深さ32cmであり、西壁寄りに位置している。P<sub>19</sub>は上面で長径62cm、短径37cm、底面では長径33cm、短径29cm、深さは53cmを測る規模のやや大きなピットであること、またその検出位置等から考えると貯蔵穴の可能性を指摘できるものと思う。他のP<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>12</sub>~P<sub>14</sub>・P<sub>16</sub>~P<sub>18</sub>の各ピットについては当住居跡に直接伴うものなのか、また伴うとすればどの



第101図 J-7号住居跡



第102図 J-7号住居跡遺物出土状況

ような機能を有していたものなのかは難しい問題である。ただP<sub>12</sub>・P<sub>13</sub>・P<sub>17</sub>の各ピットは深さ20cm代で直線的に配置されていること、さらに西壁中央寄りに認められる溝の存在を考慮すれば、この溝とともに間仕切りの機能をはたしていたものであろうか。

**炉** 長径34cm、短径33cm、深さ18cmのピットを掘り、そこに口縁から胴部上半にかけての関山式土器片が埋設されていた。住居中央やや北壁寄りに位置し、面積約0.10㎡である。覆土は2層に分かれた。

第1層 茶褐色土層 ロームと粘土混じり。炉内の埋設土器を固定している。

第2層 黄褐色土層 ロームブロックからなる。やはり埋設土器を固定するためにつめこんだ層である。

以上がピット内の覆土であるが、土器内部は黒褐色土とロームからなりわずかに焼土ブロックを含む。

#### 遺物出土状況（第102図）

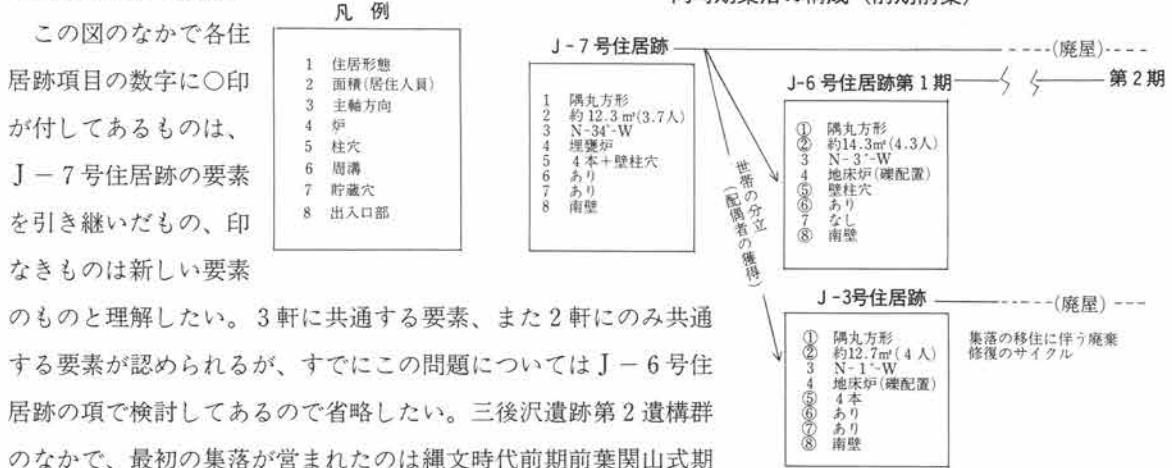
当住居跡からは実測個体8点を含め、土器片470点、石器類290点が覆土第1・2層を中心にして出土し、また床面上からも出土している。遺物の平面的分布は支柱穴に囲まれた範囲に集中し、また垂直分布からは、当住居跡が廃屋となって覆土第4・3層が堆積した後に、多量の遺物が入りこんでいることが理解できる。覆土から多量の前期中葉有尾系土器片が出土していることから、当住居跡は前期中葉の集落（J-4・5・6号住居跡第4期）が営まれていた時期には窪地状況を呈していたものであろう。

#### J-3号住居跡・J-6号住居跡第1期との関連について

当住居跡とJ-3号住居跡・J-6号住居跡第1期は、縄文時代前期前葉の関山式期に同時期集落を構成する住居跡群である。このことはすでにJ-6号住居跡のところでも述べた。ここではJ-7号住居跡に焦点をあて検討したい。

J-7号住居跡は北壁で若干狭まる隅丸方形を呈し、面積約12.3㎡であった。居住人員に換算すれば約3.7

人となる。J-3号住居跡、J-6号住居跡第1期と同形態・同一規模を有する住居である。時期は炉体土器や床面出土の土器から前期前葉関山式期に属する。各住居跡間の距離はJ-7号住居跡とJ-6号住居跡第1期は約21m、J-6号住居跡第1期とJ-3号住居跡は約40mの隔たりがあった。そしていずれの住居跡も南側に出入口部をもち、北側に向かって展開する集落構造であったものと考えられる。ところで集落を構成する3軒の住居跡のなかにも動きが認められる。世帯の分立として理解してよいものであろうか。限られた発掘区から、また集落の全貌を把握していない段階で断定することは非常に危険ではあるが、以下のように図式化してみた。

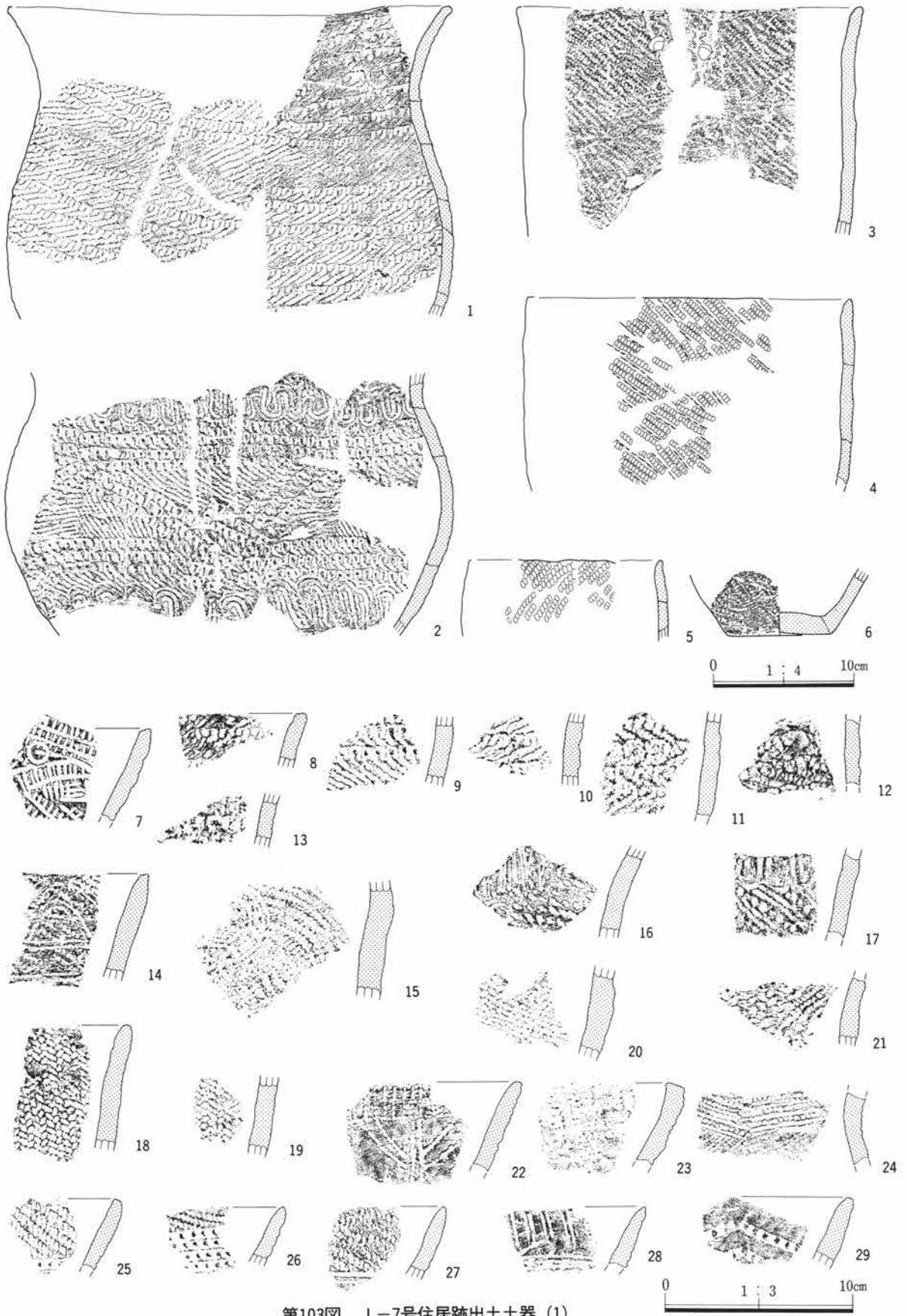


この図のなかで各住居跡項目の数字に○印が付してあるものは、J-7号住居跡の要素を引き継いだもの、印なきものは新しい要素のものとして理解したい。3軒に共通する要素、また2軒にのみ共通する要素が認められるが、すでにこの問題についてはJ-6号住居跡の項で検討してあるので省略したい。三後沢遺跡第2遺構群のなかで、最初の集落が営まれたのは縄文時代前期前葉関山式期の段階であった。この際、集落の基礎作りに中心的役割を担ったのはJ-7号住居跡であろう。そしてこの住居跡から派生した世帯が、J-6号住居跡第1期とJ-3号住居跡であり、同時期集落を形成していった。世帯分立の背景には配偶者の獲得がまず考えられるであろう。少なくとも前期前葉の集落にあっては、世帯構成員4人程で統一された村落構成原理が働いていたものと理解できる。

#### 出土遺物 (第103・104・107・108図、PL.58)

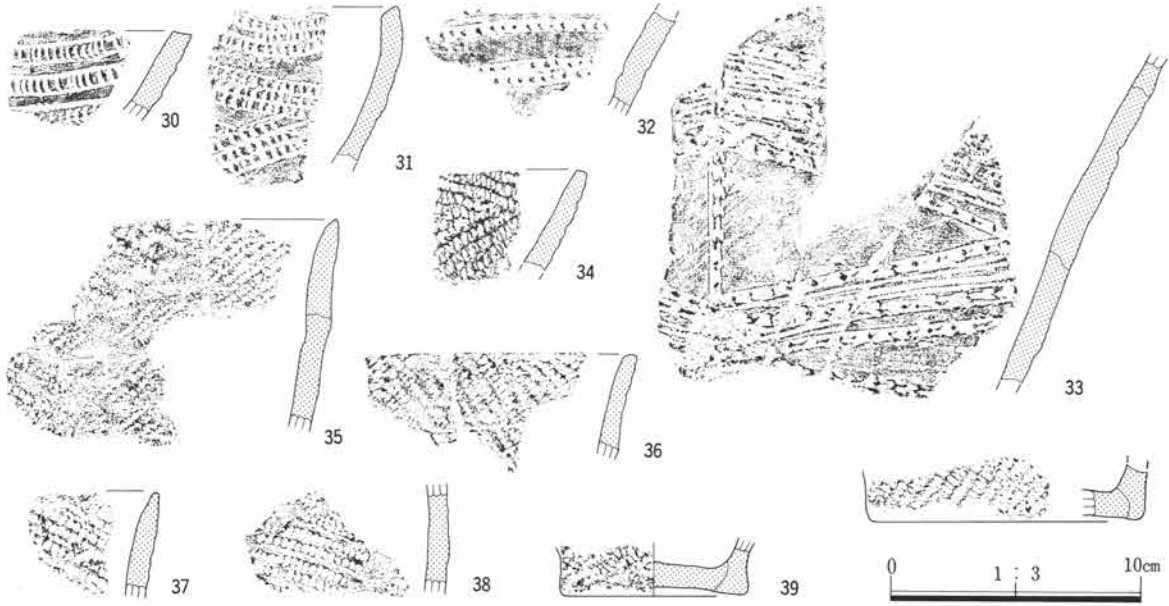
当住居跡からは総数470点にのぼる土器片が出土している。その部位別点数は口縁部片44点、頸部片20点、胴部片394点、底部片12点である。時期別にみると前期前葉の関山式土器と前期中葉の有尾系土器がほぼ同程度出土している。第103図1・2、7~21は関山式土器片、第103図22~29、第104図30~33は有尾系土器片である。また当住居跡周辺からも関山II式土器片が比較的多く出土している。一方石器・礫等は290点出土している。このうち、焼礫・礫とコア・フレイク・チップをのぞく加工された石器や使用された痕跡のある石器(磨石類等)は、81点を数える。内訳は、石鏃1点、石匙1点、ピエス・エスキューユ4点、ノッチドスクレイパー2点、両面調整スクレイパー1点、片面調整スクレイパー27点、礫器1点、R-フレイク6点、U-フレイク15点、折断フレイク12点、台石2点、凹石3点、磨石3点、敲石1点、砥石1点、丸石1点である。290点を石材別に検討すると、259点が黒色頁岩であり、89.3%の圧倒的多数を占めている。次いで頁岩9点・3.3%、安山岩5点・1.9%、流紋岩4点・1.35%、石英閃緑岩・大峰溶結凝灰岩が各3点・1%となっている。この他にも若干の石材使用が認められる。器種別の石材を検討すると、やはり黒色頁岩が各器種のなかで圧倒的多数を占めるが、石鏃では赤色珪質岩、凹石・磨石・台石・敲石・砥石では石英閃緑岩・石英安山岩・頁岩・大峰溶結凝灰岩・凝灰質砂岩などの石材が選択されている。詳細は第105・106図を参照していただきたい。

【時期】 炉に埋設された土器や床面出土土器から判断すると、当住居跡は縄文時代前期前葉関山II式土器の段階に相当する。



第103図 J-7号住居跡出土土器(1)





第104図 J-7号住居跡出土土器(2)

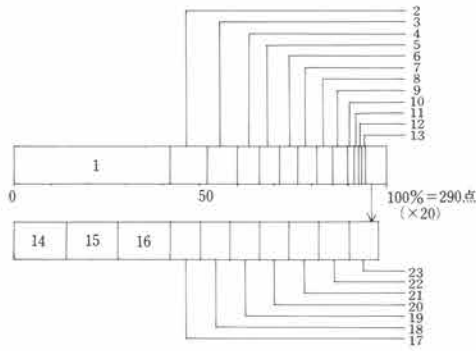
J-7号住居跡遺物観察表

(法量: ①口径②現高③頸部径④胴部径⑤底径)

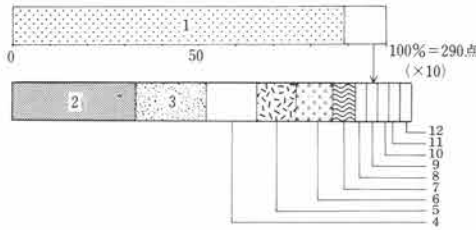
図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
103-1 PL. 58	甕形	①(31.1)	①含繊維 ②やや良 ③外面 ぶい黄褐色 内面 ぶい黄褐色	甕形土器の口縁から胴上半。口縁部は外反し、口唇部は内削ぎ状。器厚6mmで積みあげ技法A。内面は荒れている。	口唇部に巾5mmの無文帯を置いてL $\left\{\frac{F}{r}\right\}$ (環付末端)を多段施文。	炉体土器
103-2 PL. 58	甕形	②(14.0) ③(20.6) ④(23.8)	①含繊維 ②良 ③外面 ぶい黄褐色 内面 ぶい黄褐色	甕形土器の頸部から胴部片。器厚mmで積みあげ技法A。内面はやや丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{F}{r}\right\}$ (環付末端)を多段、胴中位で斜位施文。頸部と胴下部にコンパス文が巡る。	床面
103-3 PL. 58	深鉢形	①(24.5) ②(15.3)	①含繊維 ②やや良 ③外面 淡黄色 内面 褐灰色	深鉢形土器の口縁から胴上半。口縁部はほぼ直立し、口唇部はやや丸味をもつ。器厚9mm。内面は粗い調整が行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{F}{r}\right\}$ 。径8mmの補修孔が内外面から作成されている。	住居跡中央 西壁寄り
103-4 PL. 58	深鉢形	①(22.7) ②(13.2)	①含繊維 ②やや良 ③外面 灰褐色 内面 ぶい赤褐色	深鉢形土器の口縁部片。口縁部はほぼ直立し、口唇部は先細り。器厚7mm~9mmで積みあげ技法A。内面は横・縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体は附加条第1種R $\left\{\frac{F}{r}+1\right\}$ 。	住居跡南壁 寄り
103-5 PL. 58	口縁部 片	①(13.5)	①含繊維 ②良 ③外面 ぶい赤褐色 内面 ぶい赤褐色	深鉢形土器の口縁部片。口縁部はほぼ直立し、口唇部は先細り。器厚6mmで積みあげ技法A。内面は横・縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体はL $\left\{\frac{R}{r}\right\}$ 。	住居跡中央 南壁寄り
103-6 PL. 58	底部片	⑤ 7.0	①含繊維 ②不良 ③外面 ぶい黄褐色 内面 ぶい黄褐色	上げ底で開いて立ち上がる。器厚9mm~1.5cmで接合技法B。内面・底面は粗い調整が行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{F}{r}\right\}$ 。	住居跡南壁 寄り
103-7	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 浅黄褐色 内面 ぶい黄褐色	波状口縁部片。口唇部は内削ぎ状。器厚7mmで積みあげ技法A。内面は徹底したミガキが行われている。	梯子状沈線文により文様が描かれ円形竹管文が施される。平行沈線の施文具は半載竹管ではない。	炉付近
103-8	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 ぶい褐色	甕形土器の口縁部片で口唇部はほぼ平坦。器厚8mm。内面は丁寧な調整が行われている。	L $\left\{\frac{F}{r}\right\}$ (環付末端)を多段に施文。	覆土

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
103-9	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面褐 灰色内面にふい黄橙色	器厚9mmで内面は粗い調整が行わ れている。	R( $\frac{1}{2}$ ) (環付末端)を多段に施文。	住居跡北東 コーナー寄 り
103-10	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面灰黄褐 色内面にふい黄橙色	甕形土器の胴部片。器厚8mm。内 面はやや丁寧な調整が行われてい る。	L( $\frac{1}{2}$ ) (環付末端)を多段に施文。	覆土
103-11	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 褐灰色	器厚7mm~9mmで積みあげ技法 A。内面は徹底したミガキが行わ れている。	R( $\frac{1}{2}$ )とL( $\frac{1}{2}$ )の環付の縄文を多段 に施文。	覆土
103-12	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面黒 褐色内面にふい橙色	器厚7mmで積みあげ技法A。内面 は徹底したミガキが行われ、外面 は荒れている。	R( $\frac{1}{2}$ )とL( $\frac{1}{2}$ )の環付の縄文を多段 に施文。	覆土
103-13	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面浅黄橙 内面 にふい黄橙色	器厚8mm。内面は徹底したミガキ が行われている。	R( $\frac{1}{2}$ ) (0段多条)とL( $\frac{1}{2}$ ) (0段 多条)の環付の縄文を多段に施文。	覆土
103-14 15	口縁部 胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 灰黄褐色 内面 にふい黄橙色	14・15は同一個体。深鉢形土器の 口縁部片で口唇部は平坦。器厚6 mm~1.3cm。内面は横ミガキが行わ れている。	縄文施文。原体はR( $\frac{1}{2}$ ) (0段多 条)。口縁部には半載竹管による平 行沈線が施文されている。	覆土
103-16	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面灰 黄褐色内面浅黄橙色	器厚1cm。内面は粗い調整で繊維 痕が認められる。	半載竹管による平行沈線が施文さ れている。	覆土
103-17	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面に ふい褐色内面にふい褐色	器厚9mmで積みあげ技法A。内面 は粗い調整が行われている。	直前段合燃R( $\frac{1}{2}$ ) ( $\frac{R}{L}$ )を地文とし、 コンパス文が巡る。	覆土
103-18	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 にふい赤褐色 内面 にふい橙色	深鉢形土器の口縁部片。器厚1cm。 内面はやや粗い調整が行われてい る。	組紐。	覆土
103-19 20	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面明 赤褐色内面にふい褐色	19・20は同一個体。深鉢形土器の 胴部片。器厚1cm~1.3cm。内面は 丁寧な調整が行われている。	組紐。	覆土
103-21	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐 色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm~ 1cm。内面は横ミガキが行われて いる。	縄文施文。原体はR( $\frac{1}{2}$ )と組紐。	覆土
103-22	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 赤褐色 内面褐灰色	甕形土器の外傾する口縁部片で口 唇部は平坦。器厚8mmで積みあげ 技法A。内面は横ミガキ。	巾2mmの円形の先端をもつ櫛歯状 工具(8本・長さ1.6cm)による縦 位・斜位・横位刺突。	覆土
103-23	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 明赤 褐色 内面 赤褐色	甕形土器の波状口縁部片。器厚8 mm~1cmで積みあげ技法A。内面 は丁寧な調整が行われている。	巾3mm~5mmの方形の先端をもつ 櫛歯状工具(7本?)による縦位・ 斜位刺突が行われている。	覆土
103-24	頸部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 黄褐色内面にふい赤褐色	甕形土器の括れ部。器厚1cmで積 みあげ技法AとB。内面は条痕風 の調整痕が認められる。	巾7mmの平行沈線内に巾2mmの円 形の先端をもつ櫛歯状工具(7 本・長さ1.8cm)による斜位刺突。	覆土
103-25	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 明赤褐色 内面 黒褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部 に小突起2個。器厚7mmで積みあ げ技法A。内面は横ミガキが行わ れている。	口唇部に縄文施文。原体は不明。 以下巾6mmの半載竹管による平行 沈線内にC字爪形文(手法C)の 充填。	覆土

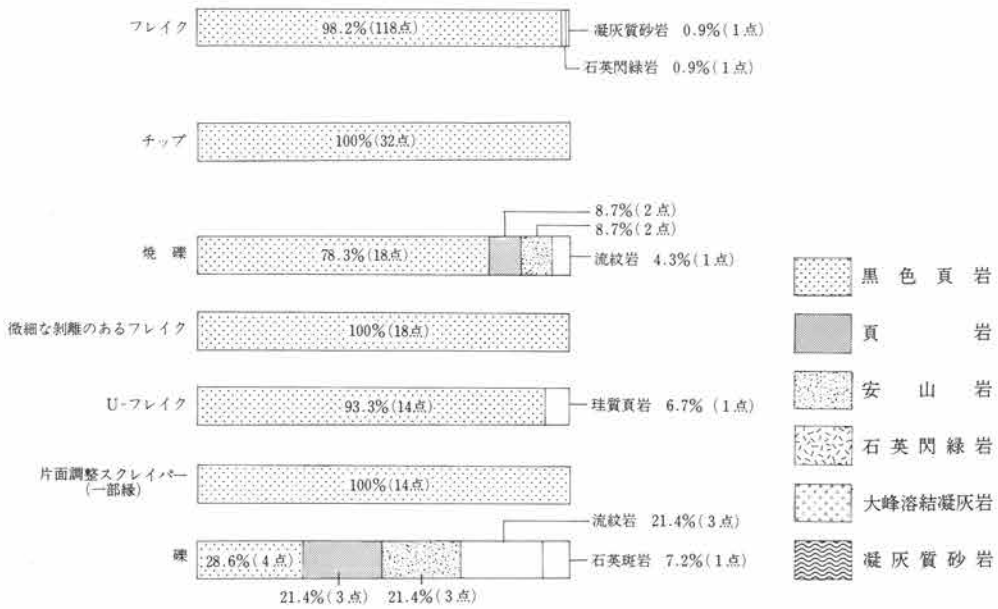
図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
103-26	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 ぶい黄橙色 内面 灰黄褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は先細り。器厚7mm。内面はやや丁寧な調整が行われている。	口唇部に縄文施文。原体はR $\left\langle \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\rangle$ (0段多条)。以下巾5mmの半載竹管によるC字爪形文(手法C)の充填。	覆土
103-27	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 ぶい橙色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は先細り。器厚6mm~8mm。内面は横ミガキが行われている。	口唇部に縄文施文。原体は前々段反撚R $\left\langle \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\rangle$ 。以下巾6mmの半載竹管による平行沈線の施文。	覆土
103-28	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面に ぶい褐色内面にぶい褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は先細り。器厚6mm~9mmで積みあげ技法A。内面は粗い調整。	口唇部に巾4mmの平行沈線。以下巾7mmの平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。	住居跡北壁 寄り
103-29	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面にぶい 黄橙色内面にぶい褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は平坦。器厚7mm~1cm。内面は丁寧な調整が行われている。	口縁にそって巾5mmの半載竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填が2条認められる。	覆土
104-30	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面にぶい 赤褐色内面暗赤褐色	甕形土器の波状口縁部片で口唇部は平坦。器厚8mm。内面は徹底した横ミガキが行われている。	口縁にそって巾8mmの半載竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法A)の充填が3条認められる。	覆土
104-31	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 ぶい黄橙色 内面 褐灰色	甕形土器の内彎する波状口縁部片で口唇部は内削ぎ状。器厚8mmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	口縁にそって巾5mmの平行沈線内にC字爪形文(手法A)の充填。以下3条1単位の爪形文で菱形のモチーフか。	覆土
104-32	頸部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 ぶい黄橙色 内面 ぶい黄橙色	甕形土器の頸部片。器厚8mm~1cmで積みあげ技法A。内面は粗い調整が行われている。	巾5mmの半載竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法A)の充填。	覆土
104-33	頸部片		①含繊維 ②不良 ③外面灰黄 褐色 内面灰黄褐色	甕形土器の頸部片。器厚8mm~1cmで積みあげ技法A。内面は荒れていてザラザラしている。	巾4mmの半載竹管による平行沈線内にC字爪形文(手法C)の充填。爪形文の充填されない沈線もある。	住居跡北壁 寄り
104-34	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 ぶい黄橙色	甕形土器の波状口縁部片か。口唇部は平坦。器厚7mm~9mmで積みあげ技法A。内面は徹底した横ミガキが行われている。	縄文施文。原体は前々段反撚R $\left\langle \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\rangle$ とL $\left\langle \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right\rangle$ で羽状。	覆土
104-35	口縁部 片		①含繊維 ②不良 ③外面灰黄 褐色 内面 淡黄色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は先細り。器厚6mm~1cmで積みあげ技法A。内外面はザラザラ。	縄文施文。原体はR $\left\langle \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\rangle$ とL $\left\langle \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right\rangle$ で羽状。	覆土
134-36	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面灰 黄褐色内面にぶい黄橙色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は平坦。器厚7mm。内面は横ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\langle \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\rangle$ 。	住居跡南壁 寄り
104-37	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面暗 褐色 内面暗赤褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は先細り。器厚5mm~8mm。内面は横ミガキが行われている。	縄文施文。原体は附加条第1種R $\left\langle \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\rangle + L$ 。	覆土
104-38	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 灰黄 褐色 内面 灰褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。内面は縦・横ミガキが行われている。	縄文施文。原体は附加条第1種R $\left\langle \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\rangle + 1$ 。	覆土
104-39	底部片	⑤(7.5)	①含繊維 ②やや良 ③外面に ぶい橙色内面褐灰色	上げ底で開いて立ち上がる。器厚6mm~9mmで接合技法A。内面は繊維痕顕著。底面はミガキ。	縄文施文。原体はL $\left\langle \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right\rangle$ 。	覆土
104-40	底部片	⑤(10.9)	①含繊維 ②良 ③外面にぶい 黄橙色内面にぶい褐色	上げ底で開いて立ち上がる。器厚1cmで接合技法A。内面・底面はミガキが行われている。	縄文施文。原体はL $\left\langle \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right\rangle$ (0段多条)。	覆土



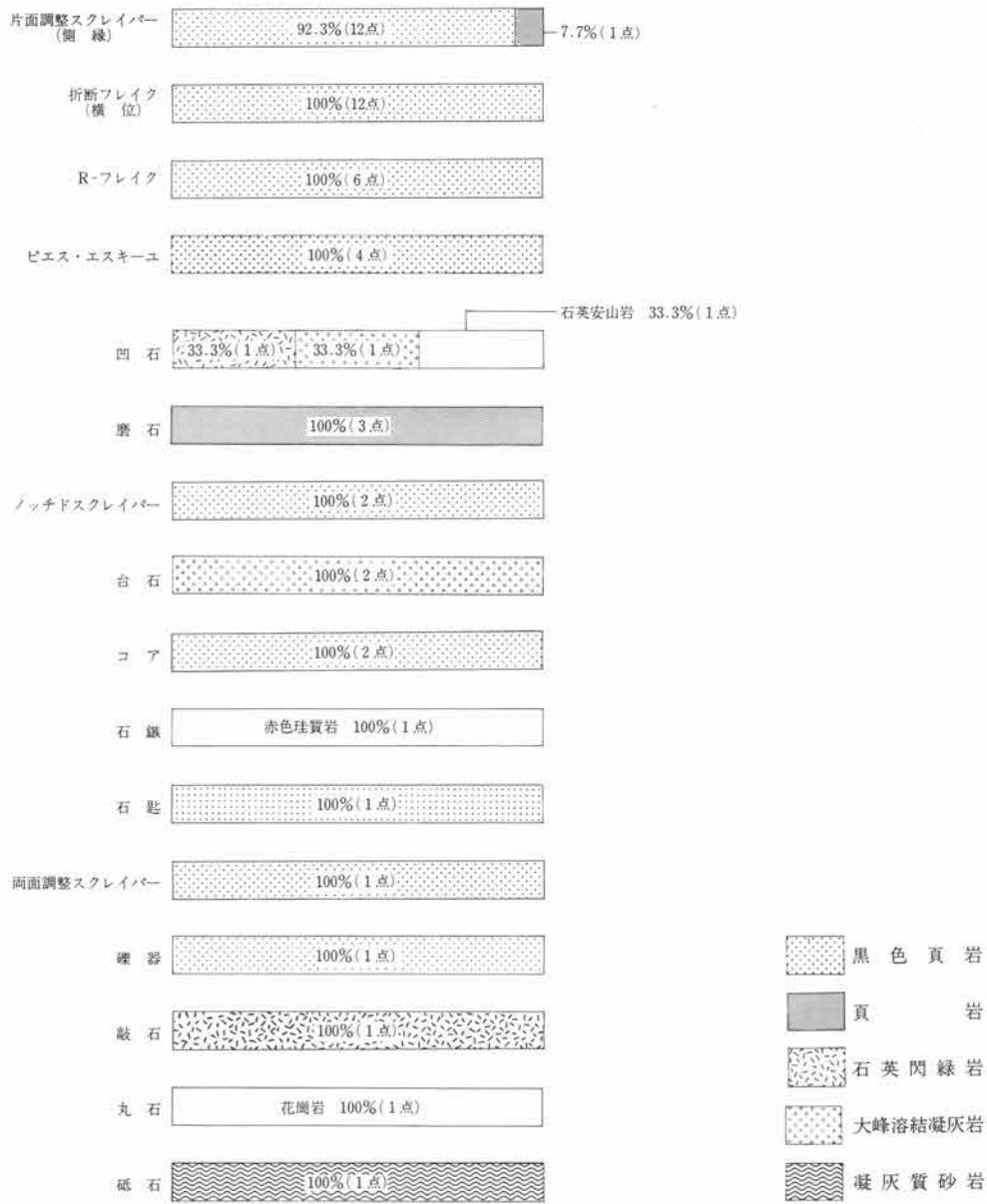
器種	%	点
1 フレイク	41.4	120
2 チップ	11.0	32
3 焼 礫	8.0	23
4 微細な剥離のあるフレイク	6.0	18
5 U-フレイク	5.2	15
6 片面調整スクレイパー(一部縁)	5.0	14
7 礫	5.0	14
8 片面調整スクレイパー(側縁)	4.5	13
9 折断フレイク(横位)	4.0	12
10 R-フレイク	2.0	6
11 ビエス・エスキュー	1.0	4
12 凹 石	1.0	3
13 磨 石	1.0	3
14 ノッチドスクレイパー	0.7	2
15 台 石	0.7	2
16 コ ア	0.7	2
17 石 鎌	0.4	1
18 石 匙	0.4	1
19 両面調整スクレイパー	0.4	1
20 礫 器	0.4	1
21 敲 石	0.4	1
22 丸 石	0.4	1
23 砥 石	0.4	1
	100.0	290



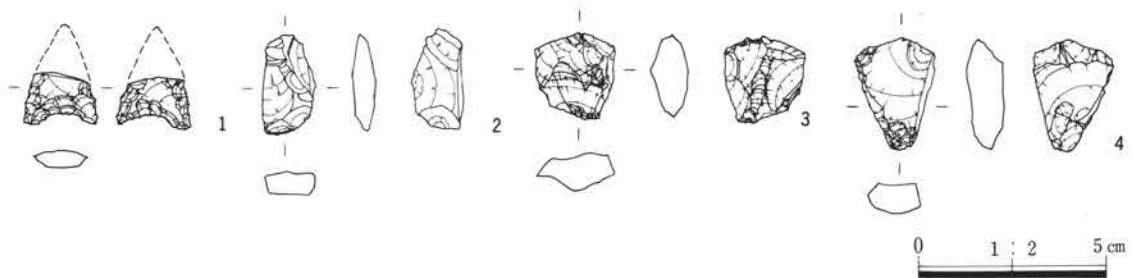
石 材	%	点
1 黒色頁岩	89.3	259
2 頁 岩	3.3	9
3 安山岩	1.9	5
4 流紋岩	1.35	4
5 石英閃緑岩	1.0	3
6 大峰溶結凝灰岩	1.0	3
7 凝灰質砂岩	0.65	2
8 石英安山岩	0.3	1
9 赤色珪質岩	0.3	1
10 珪質頁岩	0.3	1
11 石英斑岩	0.3	1
12 花崗岩	0.3	1
	100.00	290



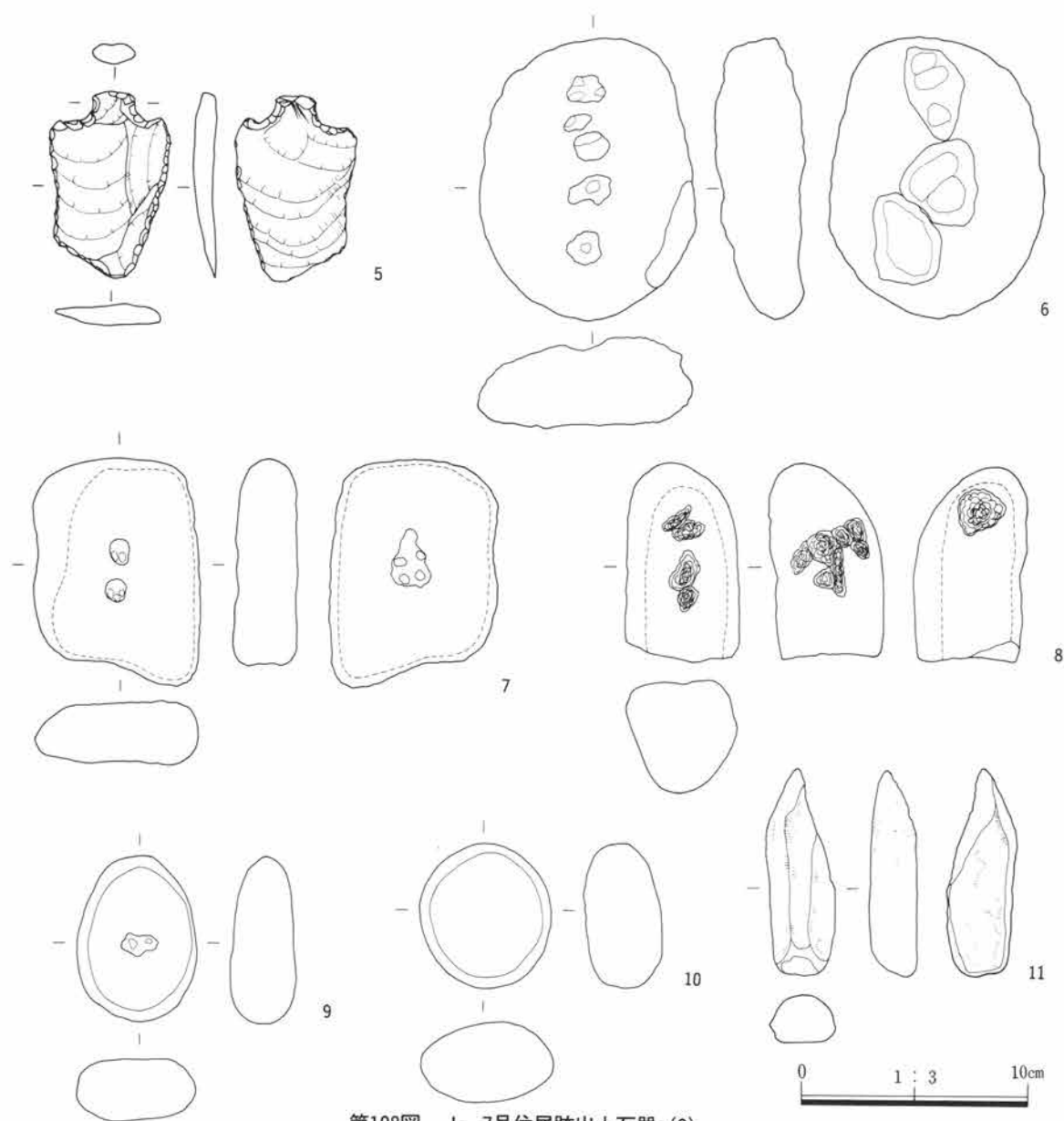
第105図 J-7号住居跡出土石器の器種別・石材別グラフ (1)



第106図 J-7号住居跡出土石器の器種別・石材別グラフ (2)



第107図 J-7号住居跡出土石器 (1)



第108図 J-7号住居跡出土石器 (2)

J-7号住居跡石器一覧表

(単位はcmおよびg、( )内は現存値)

図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値				備考	出土状況
				全長	最大幅	最大厚	重量		
107-1 PL. 58	石 鎌	先端欠	赤色珪質岩	(1.0)	1.9	0.5	(1.2)	側縁はほぼ直線をなし、基部の扱りは逆U字形をなす。	覆 土
107-2 PL. 58	ピエス・エスキーユ	完 形	黒色頁岩	2.6	1.4	0.6	2.4	横長剥片を切断し、上下両端に小剥離痕を残す。	覆 土
107-3 PL. 58	ピエス・エスキーユ	完 形	黒色頁岩	2.3	2.1	1.0	4.4	横長剥片を素材とし、縦断面は楔状を呈する。	覆 土
107-4 PL. 58	ピエス・エスキーユ	完 形	黒色頁岩	3.0	2.1	0.9	6.5	縦長剥片を素材とし、下端に小剥離痕を残す。	覆 土
108-5 PL. 58	石 匙	完 形	黒色頁岩	8.1	5.3	1.0	44.2	縦型。縦長剥片を素材とし打面残。刃部加工は両側縁・下端縁。	覆 土
108-6 PL. 58	凹 石	完 形	石英閃緑岩	12.3	9.5	3.8	620	器面に敲打による凹みがある。	住居跡南壁寄り
108-7 PL. 58	凹 石	完 形	石英閃緑岩	9.7	7.1	2.8	360	器面に磨耗痕と敲打による凹みがある。	住居跡中央部
108-8 PL. 58	凹 石	1/2	石英閃緑岩	(8.5)	4.9	4.7	(310)	"	覆 土
108-9 PL. 58	凹 石	完 形	大峰溶結凝灰岩	7.2	5.2	2.9	140	器面に敲打による凹みがある。	覆 土

図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値				備考	出土状況
				全長	最大幅	最大厚	重量		
108-10 PL. 58	磨石	完形	花崗岩	6.3	5.8	3.4	160	器面に磨耗痕がみられる。	覆土
108-11 PL. 58	磨石	一部欠	頁岩	(9.0)	2.7	2.1	(80)	棒状の磨石。器面に磨耗痕がみられる。	覆土

## b. 縄文時代の土坑

### (1) 陥し穴（第109～112図、PL.13）

#### 48号土坑

M-80グリッドにおいてローム層直上で検出された。J-2号住居跡とほぼ接している。上面の規模は203×100cm、底面は160×40cm、確認面からの深さは110cmである。面積約0.7㎡であり、主軸方向はN-69°-E。底面中央からピット1個を検出した。ピットの大きさは上面で17×16cm、底面は7×6cm、深さ44cmを測る。陥し穴覆土は5層に分かれた。

- 第1層 黒色土層 固く締め粘性が少しある。ローム粒子を含む。
- 第2層 黄褐色土層 やや固く締め粘性がある。多量のロームブロック・ローム粒子からなる層。
- 第3層 茶褐色土層 やわらかくて粘性が少しある。ローム粒子を含む。
- 第4層 黄褐色土層 ほとんどロームからなり、わずかに黒色土を含む。やわらかくて非常に粘性がある。
- 第5層 暗褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。多量のローム粒子を含む。

覆土からは縄文時代前期（繊維）土器片8点、中期土器片2点、弥生土器片2点が出土している。

#### 50号土坑

M-82グリッドにおいてローム層直上で検出された。上面の規模は128×80cm、底面は100×59cm、確認面からの深さは61cmである。面積約0.47㎡であり、主軸方向はN-44°-W。底面中央からピット1個を検出した。陥し穴覆土は3層に分かれた。

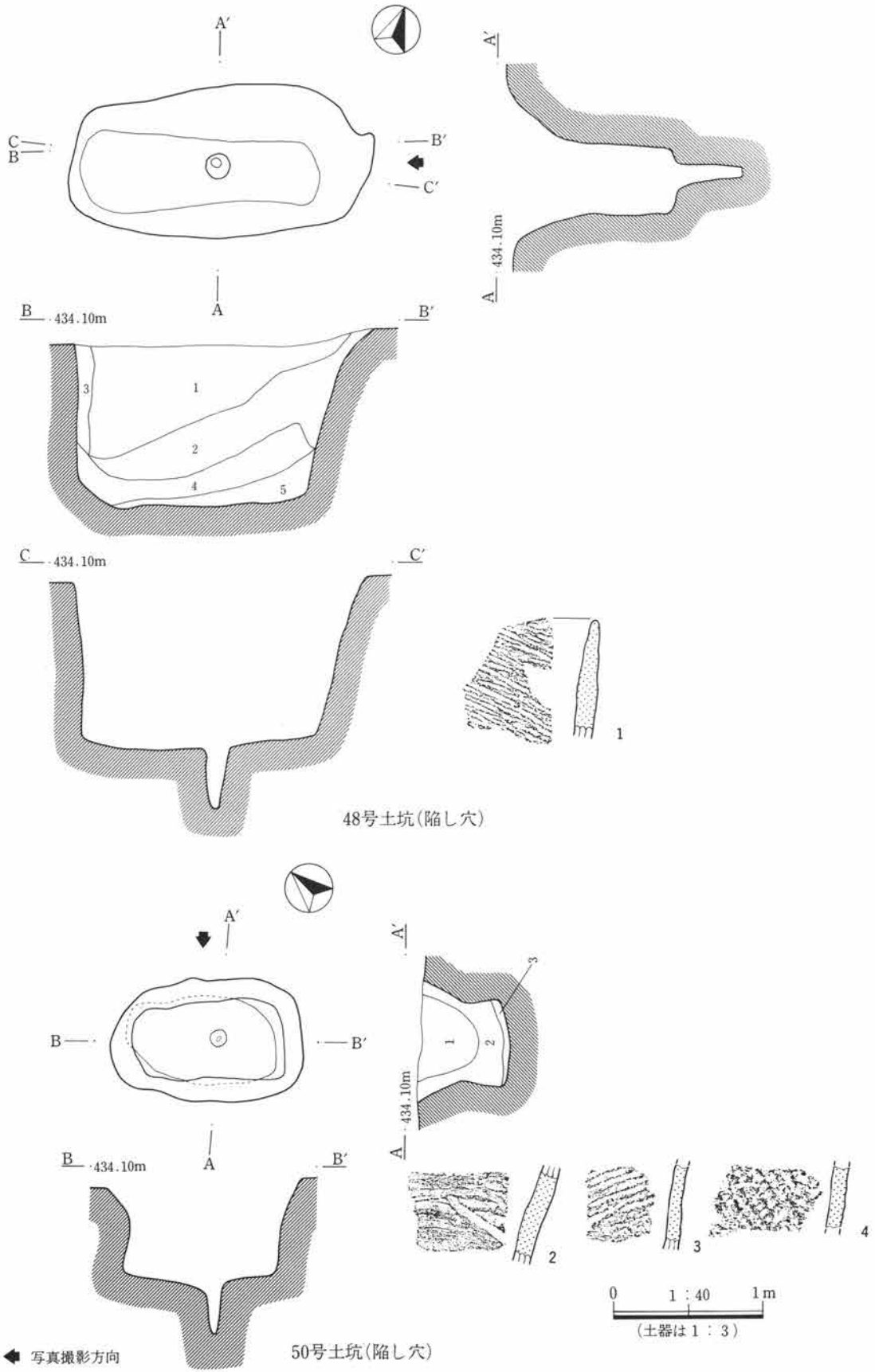
- 第1層 黒色土層 固く締め粘性が非常にある。ローム粒子をわずかに含む。
- 第2層 暗褐色土層 固く締め粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を含む。
- 第3層 黄褐色土層 やや固く粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を含む。

覆土上層からは縄文時代前期（繊維）土器片10点が出土している。

#### 56号土坑

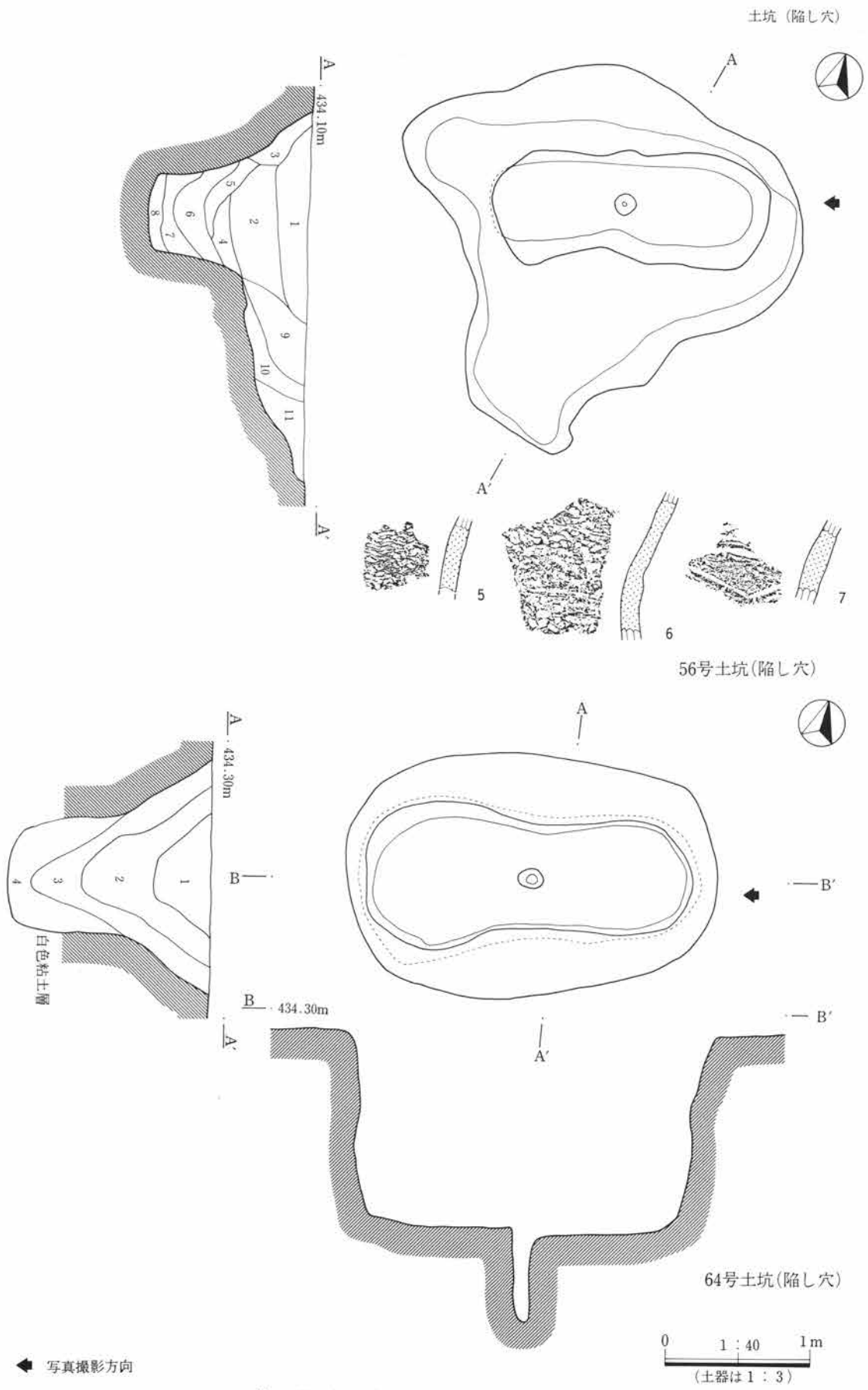
O-83、P-83グリッドにかけてローム層直上で検出された。風倒木と重複し、風倒木の覆土を掘り込んで陥し穴は構築されている。上面の規模は257×217cm、底面は182×46cm、確認面からの深さは113cmである。面積約0.88㎡であり、主軸方向はN-80°-E。底面中央からピット1個を検出した。ピットの大きさは上面で15×13cm、底面は3×3cm、深さ37cmを測る。陥し穴覆土は8層に分かれた。

- 第1層 暗褐色土層 やや固く締め粘性がある。ローム粒子・赤色スコリア粒子・炭化物粒子を少量含む。
- 第2層 黒褐色土層 やや固く締め粘性が非常にある。ローム粒子・赤色スコリア粒子・炭化物粒子を含む。
- 第3層 暗褐色土層 やや固く締め粘性はほとんどない。ロームと黒色土の混合土。
- 第4層 黄褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。
- 第5層 黒褐色土層 やや固く締め粘性が非常にある。ローム粒子をやや多く含み、赤色スコリア粒子を少量含む。
- 第6層 茶褐色土層 固く締め粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。
- 第7層 黄褐色土層 固く締め粘性が非常にある。ローム主体の層。
- 第8層 暗褐色土層 固く締め粘性が非常にある。ローム粒子を多量に、白色粘土を少量含む。

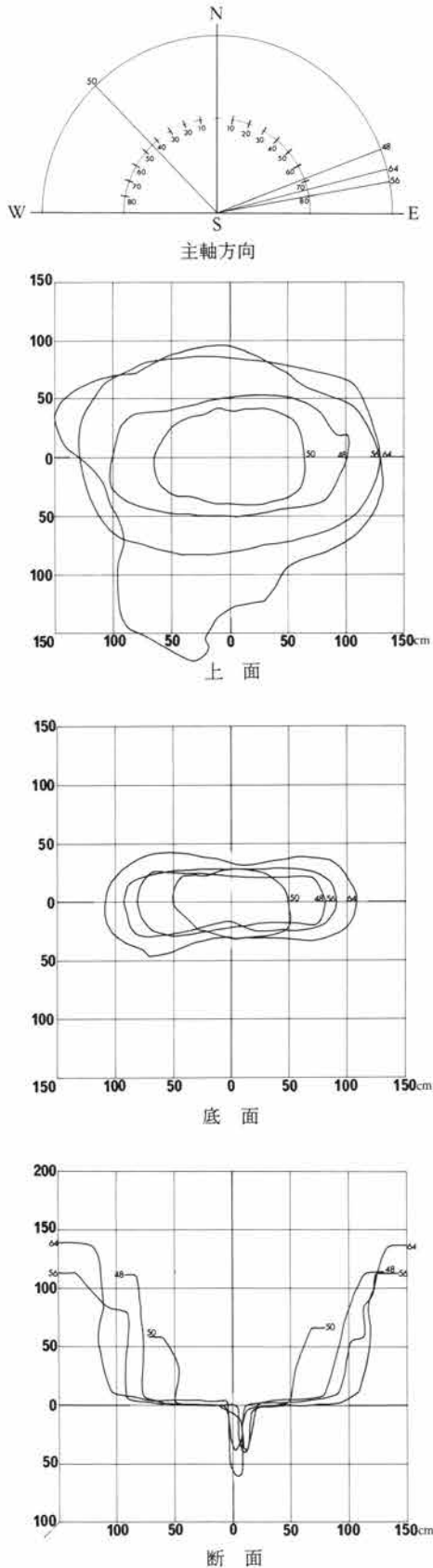


第109図 縄文時代の陥し穴 (48・50号)





第110図 縄文時代の陥し穴 (56・64号)



第111図 陥し穴の平面・断面形図

以上が陥し穴の覆土となる。底面に暗褐色土が堆積し、その上層に黄褐色土が堆積する陥し穴の典型的な埋没状況を示している。覆土上層からは縄文時代前期（繊維）土器片17点と中期土器片3点が出土した。前期土器片中4点は関山式土器であった。

第9層から11層は陥し穴と重複している風倒木の覆土である。第9層は黒褐色土層、第10層は黄褐色土層、第11層は暗褐色土層である。

#### 64号土坑

L-78・79グリッドにかけてローム層直上で検出された。63号土坑の北に位置する。上面の規模は258×165cm、底面は216×62cm、確認面からの深さは138cmであり、ローム層下の白色粘土層まで掘り下げて構築されていた。面積約1.4㎡であり、主軸方向はN-76°-E。底面中央からピット1個を検出した。ピットの大きさは上面で18×14cm、底面は8×6cm、深さ65cmを測る。陥し穴覆土は4層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて締り悪い。粘性がある。ローム粒子・炭化物粒子を含む。

第2層 黒色土層 やや固く締り粘性が非常にある。ローム粒子・炭化物粒子を多量に含む。

第3層 暗褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。黄褐色にちかい層。

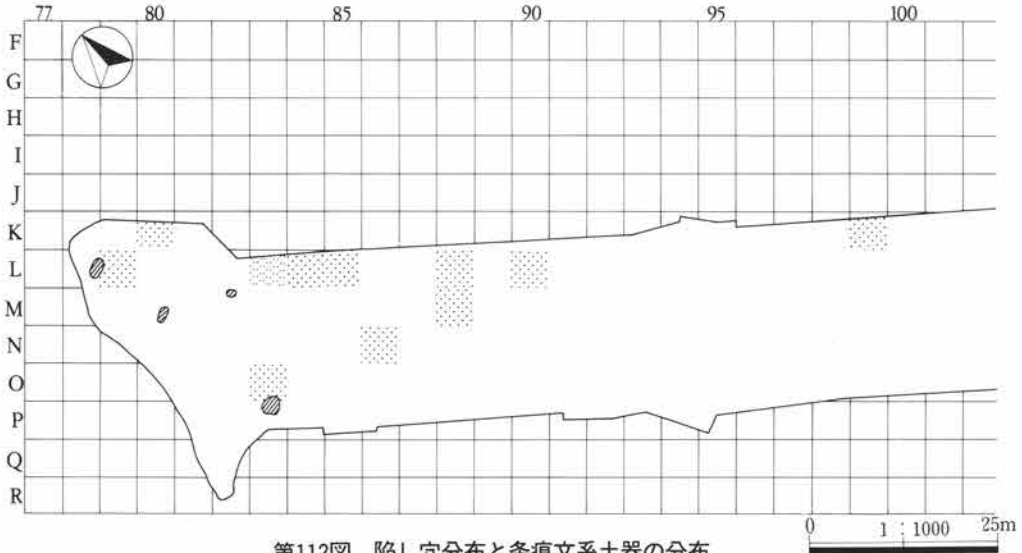
第4層 黄褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。ロームを主体とする層であり、わずかに白色粘土・黒色土を含む。覆土からは遺物の出土はなかった。

#### まとめ

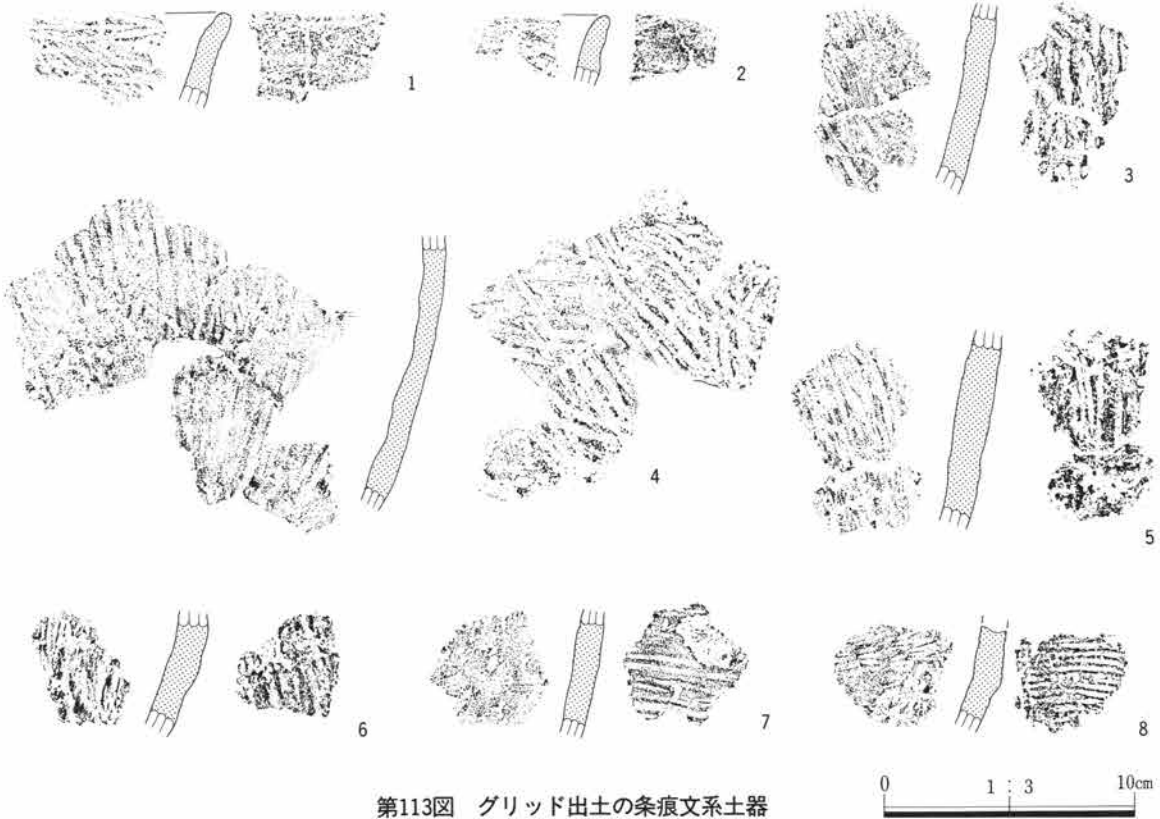
三後沢遺跡第2遺構群から検出された陥し穴は4基である。調査当初において50号土坑は、他の陥し穴と規模が著しく異なることから陥し穴と考えるにはいたらなかった。が、底面を精査するに及んで、小ピットが検出されたことから陥し穴と判断された。

当遺跡検出の陥し穴を整理すると、48・56・64号土坑の3基は主軸方向もほぼ同一にまとまり、また底面も大小の差はあるものの、ほぼ同一規格で構築されていることがわかる。これに対して50号土坑は、主軸方向、規模も他の3基と著しく異なり、3基とともに同一群を構成するものではないと考える。構築の時間差に起因するものであろうか。

こうした陥し穴の覆土上層からは、縄文時代前期前・中葉の土器片、また少数の中期土器片が出土している。周辺に該期の住居跡が存在することを考えると当然の結果といえよう。すくなくともこうした陥し穴は、縄文時代前期以前に構築された可能性が考えられる。事実、陥し穴周辺グリッドから縄文時代早期後半の条痕文系土器片（第113図）が多数出土していることを考えると、短絡的に結びつけるのは危険ではあるが、早期後半にその構築時期を求めることも可能と思われる。少なくとも条痕文系土器が出土することじたい、何らかの該期の活動痕跡があったことの証左であり、南関東地方で多数検出されている陥し穴の構築時期が該期に集中していることもあわせ考えると、あながち無理な結びつきとは言えないであろう。



第112図 陥し穴分布と条痕文系土器の分布



第113図 グリッド出土の条痕文系土器

陥し穴出土遺物と条痕文系土器観察表

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
109-1	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面黒 褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は 先細り。器厚5mm~1cm。内面は ザラザラで繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR(1/1)。	48号土坑 (陥し穴)覆 土上層
109-2	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 におい黄橙色 内面 におい黄橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は横ミガキが行われている。	巾1.3cmの平行沈線が施文されて いる。	50号土坑 (陥し穴)覆 土上層
109-3	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 灰黄 褐色 内面 暗褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mmで 積みあげ技法A。内面は縦ミガキ が行われている。	縄文施文。原体はL(5/5)。	50号土坑 (陥し穴)覆 土上層
109-4	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面明 赤褐色 内面灰褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mmで 積みあげ技法A。内面はやや丁寧 な調整が行われている。	縄文施文。原体はR(1/7)。	50号土坑 (陥し穴)覆 土上層
110-5	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 におい黄橙色 内面 におい黄橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mmで 積みあげ技法A。内面は丁寧な調 整が行われている。	組紐。	56号土坑 (陥し穴)覆 土上層
110-6	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 灰褐 色 内面におい黄橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm~ 1cm。内面は丁寧な調整。外面は 剥落していて繊維痕顕著。	組紐。	56号土坑 (陥し穴)覆 土上層
110-7	胴部片		①含繊維 ②不良 ③外面 におい黄橙色 内面 におい黄橙色	甕形土器の頸部片。器厚9mm~1.1 cm。内面は荒れていて繊維痕が認 められる。	巾7mmの半截竹管による平行沈線 が施文されている。	56号土坑 (陥し穴)覆 土上層
113-1	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面 褐灰色 内面 灰黄褐色	深鉢形土器の口縁部片。口唇部は やや丸味をもつ。器厚8mm~1.1 cm。内外面は繊維痕顕著に認めら れる。	器内外面にアナグラ属の貝殻ある いはそれに類似する施文具で横位 に条痕を施している。	M-88 グリッド
113-2	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面褐 灰色 内面 褐灰色	深鉢形土器の口縁部片。口唇部は 一部平坦。器厚6mm~1cm。内面 に繊維痕が認められる。	〃	M-88 グリッド
113-3 4	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面暗 赤褐色 内面黒褐色	3・4は同一個体。深鉢形土器の 胴部片。器厚8mm~1.1cm。内面に 繊維痕が認められる。	器外面で縦位、内面では横位・斜 位に条痕を施している。 内面に煤が付着している。	L-83-85 グリッド
113-5 6	胴部片		①含繊維 ②不良 ③外面にお い橙色内面におい黄橙色	5・6は同一個体。深鉢形土器の 胴部片。器厚1cm~1.4cm。内面は 繊維痕顕著に認められる。	器内外面に縦位の条痕が施されて いる。	K-88、 L-88 グリッド
113-7	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面に おい橙色内面褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚1cm。 外面は繊維痕顕著に認められる。	器外面は斜位、内面は横位の条痕 が施されている。	N-86 グリッド
113-8	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面に おい黄橙色内面浅黄橙	深鉢形土器の胴部片。器厚1cm。 内外面は繊維痕顕著に認められ る。	器内外面に横位の条痕が施されて いる。	O-83 グリッド

## (2)土坑 (第114図、PL.14)

## 52号土坑

O-81・82グリッドにかけて検出された。J-3号住居跡に接して構築されている。上面は102×90cm、底面は94×82cm、深さ11~22cmの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦であり、面積約0.64㎡である。覆土は2層に分かれた。

第1層 黒色土層 やや固く締り粘性がある。ロームブロック・ローム粒子を含む。

第2層 黒褐色土層 やや固く締り粘性がある。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

覆土からは遺物の出土はなかったが、形態や覆土の層相から判断して、縄文時代の所産であると考えられる。

## 53号土坑

O-81、P-81グリッドにかけて検出された。北側にJ-3号住居跡が存在し、ほぼ近接するように構築されている。上面は174×138cm、底面は139×134cm、深さ21~43cmの袋状土坑である。底面はほぼ平坦であり、面積約1.51㎡である。覆土は4層に分かれた。

第1層 黒色土層 やや固く締り粘性がある。ロームブロック・ローム粒子を含む。

第2層 黒褐色土層 やや固く締り粘性がある。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

第3層 黄褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。ローム粒子を多量に含む。

第4層 黄褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子からなる層。

覆土からは縄文時代土器細片と礫が出土している。

## 58号土坑

L-85、M-85グリッドにかけて検出された。上面は133×116cm、底面は110×96cm、深さ10~22cmの楕円形を呈する。底面はやや皿状を呈し、面積約0.82㎡である。覆土は2層に分かれた。

第1層 黒褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。ローム粒子・赤色スコリア粒子を少量含む。

第2層 暗褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を含む。

覆土からは縄文時代前期(繊維)土器片12点、中期土器片2点、石鏃2点、片面調整スクレイパー1点、コア・フレイク・チップ等が出土している。出土土器や覆土から判断して縄文時代前期中葉の土坑であろう。

## 59号土坑

O-88グリッドにおいて検出された。北西にJ-5号住居跡が存在する。上面は134×123cm、底面は120×115cm、深さ40~44cmのほぼ円形を呈する。底面は平坦であり、面積約1.1㎡である。覆土は3層に分層。

第1層 黒褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。ローム粒子・赤色スコリア粒子・炭化物を少量含む。

第2層 暗褐色土層 固く締り粘性が非常にある。ロームブロック・粒子、赤色スコリア粒子・炭化物多量。

第3層 暗褐色土層 固く締り粘性が非常にある。ロームブロック・粒子を多量に、赤色スコリア粒子少量含む。

覆土からはフレイク2点、焼礫1点が出土している。

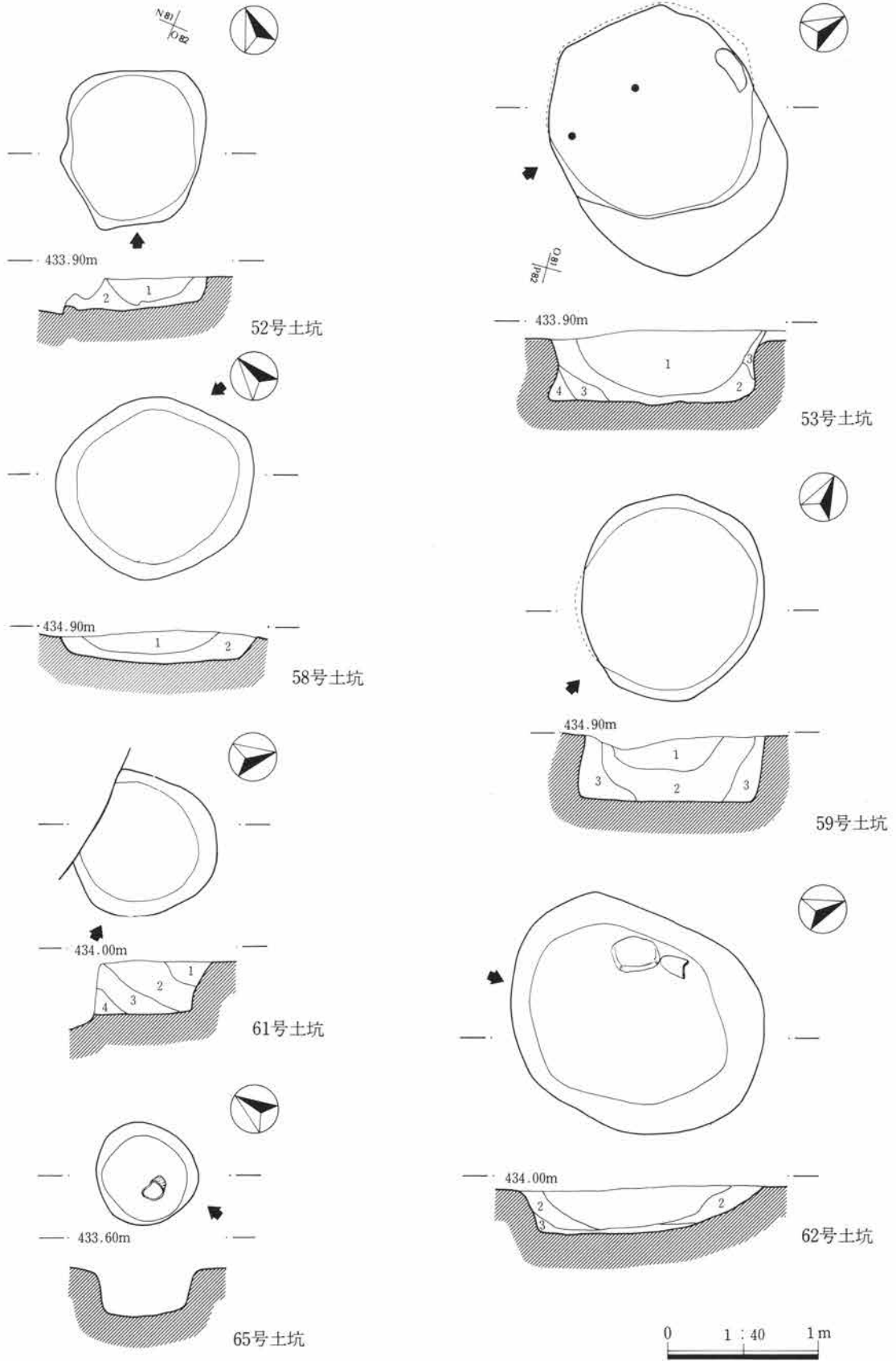
## 61号土坑

N-86号グリッドにおいて検出された。J-5号住居跡によって壊されている。上面は96×95cm、底面は79×79cm、深さ21~33cmのほぼ円形を呈するものと思われる。底面は平坦であり、現状での面積は約0.5㎡である。覆土は4層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。ローム粒子を含む。

第2層 黒褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。ローム粒子を多量に、赤色スコリア粒子を少量含む。

第3層 暗褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。ローム粒子を多量に、ロームブロックを少量含む。



◀ 写真撮影方向

第114図 縄文時代の土坑 (52・53・58・59・61・62・65号)

第4層 茶褐色土層 固く締め粘性が非常にある。ロームブロック・粒子を多量に、赤色スコリア粒子を少量含む。

覆土からは縄文時代前期関山式土器片4点、フレイク3点が出土している。当土坑はJ-5号住居跡（前期中葉）の住居跡によって壊されていること、覆土からは関山式土器片が出土していること等から判断して、関山期に構築されたものと考えられる。

#### 62号土坑

N-80グリッドにおいて検出された。東側にJ-2号住居跡が存在する。上面は180×140cm、底面は142×110cm、深さ24~31cmの楕円形を呈する。底面は皿状を呈し、面積約1.2㎡である。覆土は3層に分層。

第1層 黒色土層 やわらかくて粘性が非常にある。ローム粒子をわずかに含む。

第2層 暗褐色土層 やや固く締め粘性が非常にある。ローム粒子を多量に、ロームブロックを少量含む。

第3層 黄褐色土層 やわらかくて締め悪い。非常に粘性がある。ロームブロック・ローム粒子からなる層。

覆土からは礫2点が出土している。

#### 65号土坑

L-90グリッドにおいて茶褐色土層中から検出された。西側にJ-6号住居跡が存在する。上面は68×66cm、底面は56×54cm、深さ24~31cmのほぼ円形を呈する。底面は平坦であり、面積約0.23㎡である。覆土は3層に分かれた。

第1層 茶褐色土層 粘性がつよく、ロームブロックをわずかに含む。

第2層 茶褐色土層 やや粘性がある。ロームブロックをわずかに含む。

第3層 黄褐色土層 わずかにロームブロックを含む。

覆土からは縄文時代前期中葉の土器片2点が出土している。

### 三後沢遺跡第2遺構群検出の土坑一覧表 (1)

#### (1) 縄文時代の陥し穴

No.	グリッド	上面 cm (長径×短径)	底面 cm (長径×短径)	上面 長径/短径	底面積(m <sup>2</sup> )	底面 長径/短径	深さ(cm)	主軸方向	ビット数
48	M-80	(203×100)	(160×40)	2.03	0.7	4	110	N-69°-E	1
50	M-82	(128×80)	(100×59)	1.6	0.5	1.69	61	N-44°-W	1
56	O-83 P-83	(257×217)	(182×46)	1.18	0.9	3.96	113	N-80°-E	1
64	L-78・79	(258×165)	(216×62)	1.56	1.4	3.48	138	N-76°-E	1

#### (2) 縄文時代の土坑

No.	グリッド	上面 cm (長径×短径)	底面 cm (長径×短径)	上面 長径/短径	底面積(m <sup>2</sup> )	底面 長径/短径	深さ(cm)	備 考
52	O-81・82	(102×90)	(94×82)	1.13	0.64	1.15	11~22	J-3住と接する。
53	O-81 P-81	(174×138)	(139×134)	1.26	1.52	1.04	21~43	J-3住と近接。
58	L-85 M-85	(133×116)	(110×96)	1.15	0.82	1.15	10~22	前期中葉
59	O-88	(134×123)	(120×115)	1.09	1.09	1.04	40~44	フレイク・焼礫出土
61	N-86	(96×95)	(79×79)	1.01	0.48	1.0	21~33	前期前葉関山期
62	N-80	(180×140)	(142×110)	1.29	1.20	1.29	24~31	礫2点出土
65	L-90	(68×66)	(56×54)	1.03	0.23	1.04	24~31	前期中葉

C. 弥生時代の住居跡

Y-1号住居跡 (第115~117図、PL.15)

**位置** O-84・85、P-84・85グリッドにかけて検出された。北東方向にJ-4号住居跡が存在する。

**経過** 5月10日に住居跡のプランを確認し、11日から調査を開始した。調査5日目には住居跡覆土・床面上から壺・小型土器等が出土。以後、各種図面の作成・写真撮影等を行い、6月9日をもって調査を終了した。

**覆土** ローム層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

- 第1層 暗褐色土層 やわらかくて締り悪い。粘性が少しある。榛名二ツ岳軽石・ローム粒子を少量含む。
- 第2層 黒褐色土層 固く締り粘性がある。ローム粒子を多量に含む。
- 第3層 褐色土層 固く締り粘性が非常にある。ローム粒子を多量に、炭化物粒子を少量含む。
- 第4層 黒褐色土層 やわらかくて粘性がある。ローム粒子を含む。2層よりやや明るい色調である。

**形状** 長辺6.6m、短辺4.05mの長方形を呈する。面積は約21㎡である。

**壁高** 住居跡確認面より約30~48cmで床面に達する。南壁で深く、東壁でやや浅かった。

**床面** 平坦であり、住居跡中央部分が硬く踏みかためられている。

**周溝** 東壁・西壁そして北壁の一部に周溝が認められるが、南壁では検出することができなかった。東壁の周溝は幅5~9cm、深さ2cm、西壁のそれは4~6cm、深さ5cm、北壁では幅6cm、深さ3cmをそれぞれ測る。なお周溝の幅は上端で計測した。

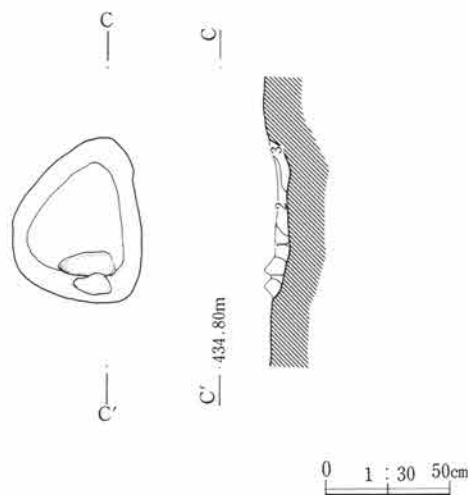
**柱穴** 総計8個のピットが検出された。このうちP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は支柱穴になる。P<sub>1</sub>の深さ35cm、P<sub>2</sub>深さ39cm、P<sub>3</sub>深さ44cm、P<sub>4</sub>深さ44cmであり、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間距離は140cm、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間距離150cm、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>間距離310cm、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>間距離も同じく310cmを測る。P<sub>5</sub>~P<sub>7</sub>は出入口部施設になり、P<sub>5</sub>深さ45cm、P<sub>6</sub>深さ46cmでその間隔は95cmを測る。いずれも壁寄りに傾いている。P<sub>7</sub>は方形にちかいピットであり、深さ39cmを測る。P<sub>8</sub>は深さ14cmの浅いピットである。

**炉** 床面を掘り窪めた地床炉である。長径65cm、短径52cm、深さ11cmの三角形を呈し、支柱穴P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>のほぼ中間に位置している。また南端に礫2個を配置し、約0.27㎡の面積がある。覆土は3層に分かれた。

- 第1層 黒色土層 締り悪い。
- 第2層 黄褐色土層 締り悪い。
- 第3層 黄褐色土層 ロームブロックを含む。底面には焼土がみられる。

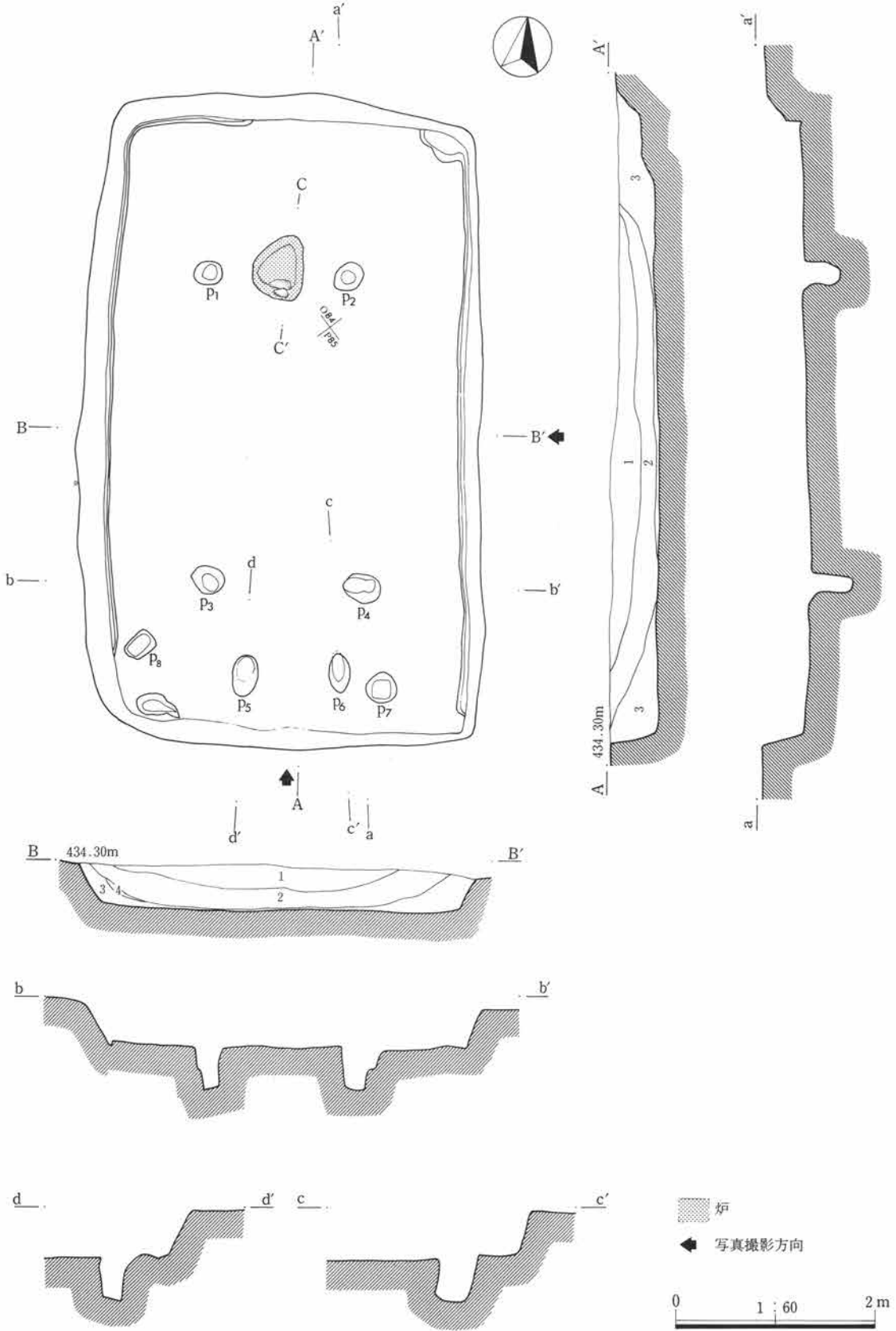
No.	上	長さ×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
	下			
1		27×23cm 15×14cm	35cm	支柱穴
2		30×26cm 14×12cm	39cm	"
3		30×28cm 20×15cm	44cm	"
4		38×28cm 23×14cm	44cm	"
5		40×26cm 20×12cm	45cm	出入口部
6		40×20cm 30×12cm	46cm	"
7		30×30cm 19×18cm	39cm	"
8		30×22cm 24×14cm	14cm	

Y-1号住居跡ピット計測表

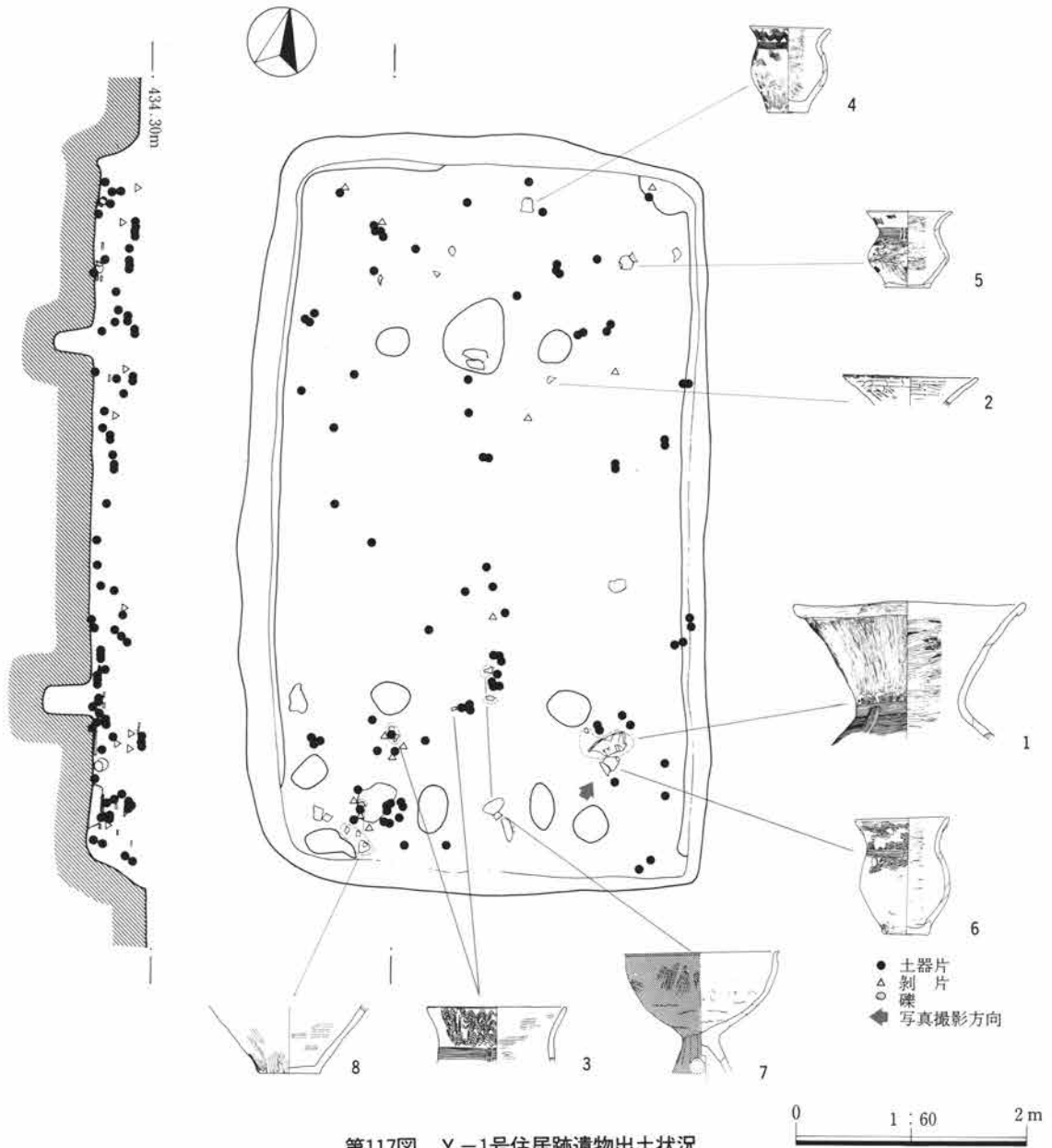


第115図 Y-1号住居跡炉





第116图 Y-1号住居跡



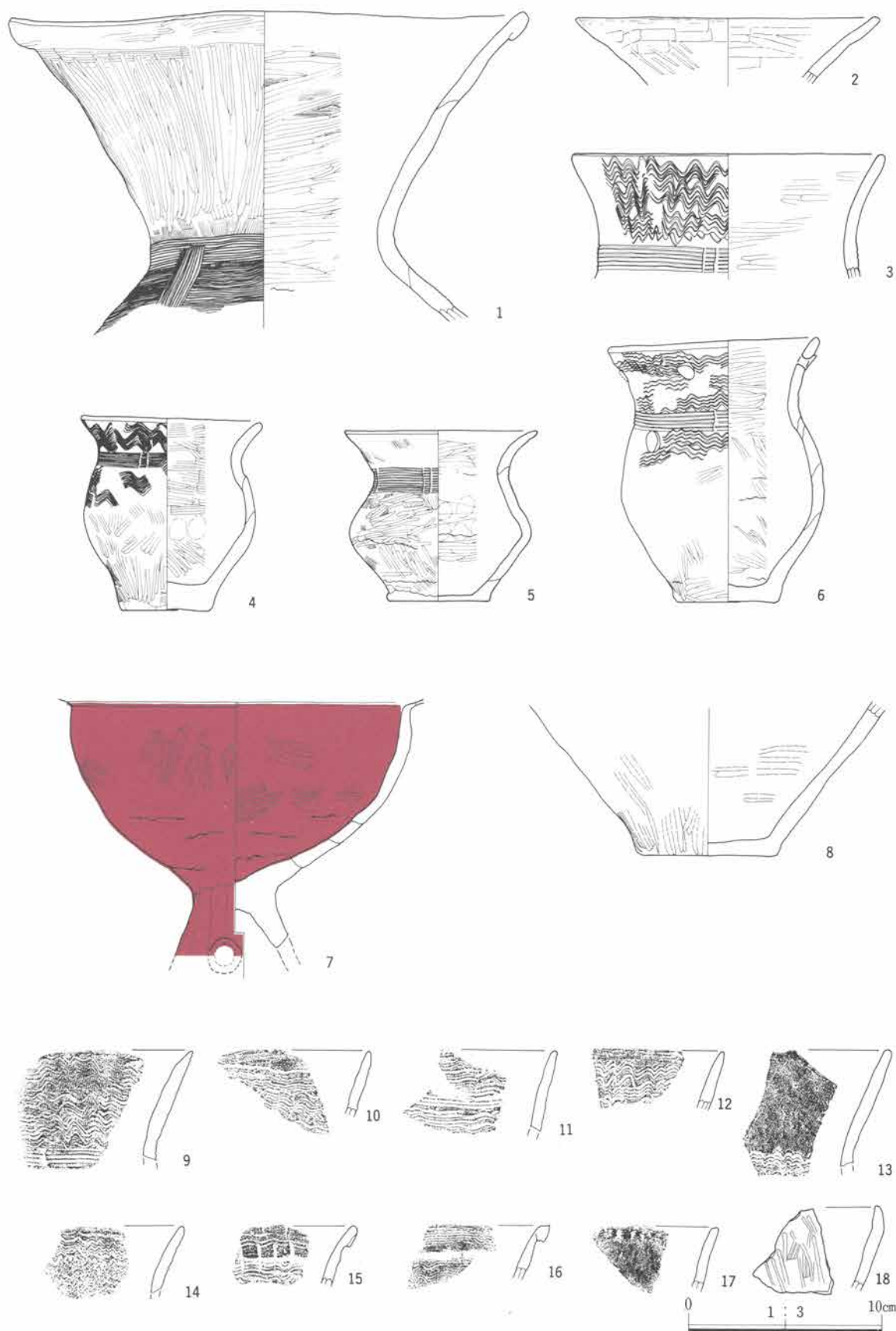
第117図 Y-1号住居跡遺物出土状況

**遺物出土状況** 覆土・床面上から遺物が出土しているが、住居跡中央部では少なく、炉跡の北側や主柱穴P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>の南側に集中して検出された。壺・甕・完形の小型土器はほぼ床面上より出土している（第117図）。

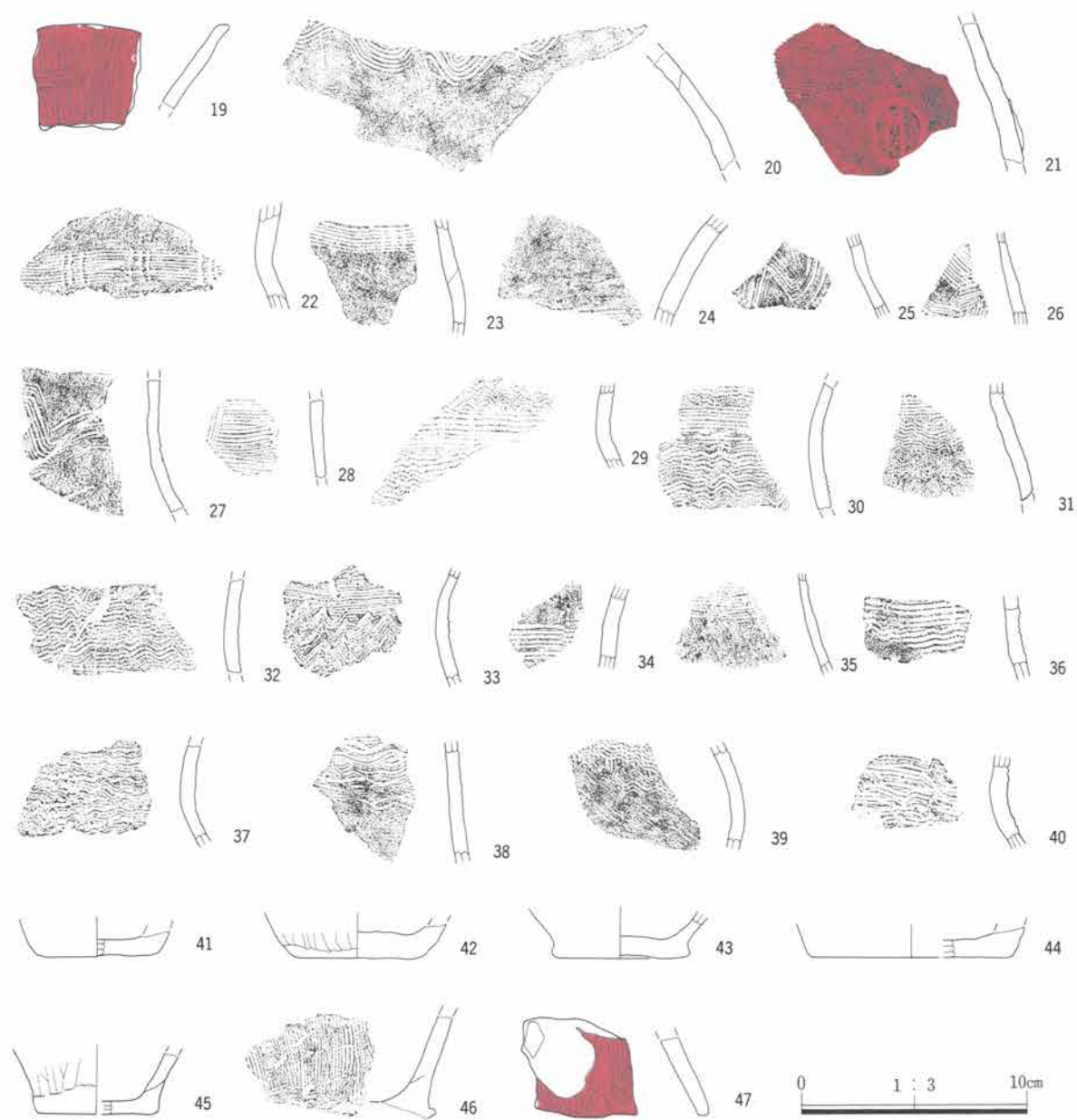
**出土遺物**（第118・119図、PL.59）

当住居跡から出土した遺物のうち実測した土器の内訳は、壺2点、甕2点、高杯1点、小型甕形土器3点、底部片6点、脚・台部片1点である。この他に口縁部片31点、頸部片46点、底部片4点、胴部片177点が出土している。このうち口縁部片11点、頸部片21点を拓本で図示した。また覆土には縄文時代前期土器片45点、中期土器片45点が混入していた。

**時期** 出土遺物から判断すると、当住居跡は弥生時代後期樽式期に相当する。



第118图 Y-1号住居跡出土土器 (1)



第119図 Y-1号住居跡出土土器 (2)

Y-1号住居跡遺物観察表

〔法量：①口径②頸部径③胴部径④底径⑤器高〕

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
118-1 PL. 59	壺	①26.6 ②12.8	床直 頸部~口 縁	①白色粒子、小礫混入。 ②堅く焼きしまる。 ③にふい黄橙 10YR7/3	頸部から口縁部にかけて外反する。口縁部は折り返しを呈す。外面は縦方向、内面は横方向に筥磨き。	櫛状工具による横線文が連続して三段は確認できる。一周4区切のT字文が入る。
118-2 PL. 59	壺	①15.8?	覆土 口縁部	①白色粒子、黒色粒子が混入する。②堅い。 ③にふい橙 7.5YR7/4	口縁部の破片である。外面口縁部付近は横撫で、頸部に向け筥磨き。内面は横方向の撫で調整。	
118-3 PL. 59	甕	①16.0 ②13.4	覆土 口縁部	①黒色粒子と白色小礫を含む。②僅かにあまい。 ③浅黄橙 7.5YR8/6	頸部から口縁部にかけて外反しながら立ち上がる。頸部のしまりは緩い。	頸部には右まわり2連止めの籐状文。頸部から口縁部には櫛描波状文が3段施文。

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
118-4 PL.59	小型 甕	①9.2②7.4 ③8.9④4.5 ⑤9.9	床直 ほぼ完形	①白色粒子を含む。 ②僅かに器面が荒れる。 ③にぶい褐色7.5YR6/3	胴部は緩く曲線状を呈し、頸部は僅かにくびれる。口縁部は外反する。胴下半は縦方向に調整。	頸部には右まわりの2連止め簾状文が1周6区切でまわる。胴上半と口縁部に櫛描波状文。
118-5 PL.59	小型 甕	①9.9②7.0 ③9.5④5.2 ⑤8.8	覆土 口縁 $\frac{1}{2}$ 欠損、他完形	①白色粒子を含む。 ②堅く焼きしめる。 ③にぶい橙7.5YR7/4	胴部は大きく張り頸部に向う。頸部から口縁部にかけて大きく外反する。胴部は縦、口縁部は横方向に器面調整。	頸部には右まわりに簾状文が施文されている。9条1単位の櫛状工具である。簾状文の止め方は不統一である。
118-6 PL.59	小型 甕	①10.6②8.5 ③10.5④5.0 ⑤13.3	床直 ほぼ完形	①白色粒子を含む。 ②器面が荒れている。 ③淡赤橙2.5YR7/4	胴部は緩く曲線状を呈し、頸部から口縁部に向い外反する。内面口縁部は横方向に笥磨き。	頸部に簾状文をはさみ、胴上半と口縁部に各2段の櫛描波状文、口縁部と肩部にボタン状貼付文が3:4で有り、1ヶ所穿孔。
118-7 PL.59	高杯	①19.0 ②4.2	覆土 杯部 $\frac{2}{3}$ 脚部下半欠	①黒色粒子を含む。 ②器面が荒れている。 ③内外面とも赤色塗彩。	脚部は大半を欠損し、杯部近接部に円形の透しが4ヶ所に入る。杯部は椀状を呈し、口縁部は外反。	
118-8 PL.59	甕	④7.1	覆土 胴部下位	①小礫を混入する。 ②器面が荒れている。 ③浅黄橙10YR8/3	底部から胴部最大幅部にかけて大きく張り出す。外面は縦、内面は横方向に器面調整。	胴部に炭素が付着している。断面にも付着が見られることより破損後に火をうけたことになる。
118-9	甕		覆土 口縁小片	①白色粒子を含む。 ②堅く焼かれている。 ③にぶい橙7.5YR7/4	口縁部は外反し、口縁部は細く丸みをもつ。内面は横方向に器面調整が行なわれている。	頸部は右まわりに簾状文が施文され、口縁部は3段にわたり櫛描波状文が施文されている。
118-10	甕		覆土 口縁小片	①白色粒子、石英粒子混入。 ②僅かに荒れている。 ③にぶい橙7.5YR6/4	口縁部の破片であり僅かに外反。口縁部は薄く丸身を呈す。内面は横方向に笥磨き。	5条1単位と観察できる櫛状工具により、3段の波状文が確認できる。
118-11	甕		覆土 口縁小片	①白色粒子の混入。 ②堅くしまっている。 ③灰黄褐10YR5/2	口縁部の破片である。僅かに外反するものと考えられる。内面は横撫で調整が行なわれている。	粗く櫛描波状文が施文されている。
118-12	甕		覆土 口縁小片	①白色粒子を含む。 ②堅くしまっている。 ③灰黄褐10YR5/2	口縁部は僅かに外反するものと思われる。内面は横方向の器面調整が行なわれている。	2段の櫛描波状文が施文されているのが確認できる。
118-13	甕		覆土 口縁小片	①白色粒子を含む。 ②焼きしまっている。 ③にぶい橙7.5YR7/4	口縁部は外反する。内外面とも横方向に撫でによる器面調整が行なわれている。	頸部に櫛描波状文が施文されている。表面に炭素の付着が認められる。
118-14	甕		覆土 口縁小片	①白色粒子を多量に含む。②器面は荒れている。③にぶい褐色7.5YR6/3	口縁部は外反する。内面は横撫でと笥磨きが行なわれている。	櫛描波状文が3段確認できる。
118-15	甕		覆土 口縁小片	①白色粒子を多量に含む。②僅かに荒い。③にぶい褐色7.5YR6/3	折り返し口縁を呈す。内面は横方向の器面調整が行なわれている。	櫛描波状文がある。折り返し部分には笥状工具と思われる道具により縦方向におさえ痕がある。
118-16	甕		覆土 口縁小片	①白色粒子を多量に含む。②焼きしまっている。③褐色7.5YR4/1	折り返し口縁を呈す。内面は横方向に器面調整が行なわれている。	粗い櫛描波状文が施文されている。
118-17	小型 甕		覆土 口縁小片	①白色粒子を含む。 ②器面が僅かに荒れている。 ③にぶい橙7.5YR7/4	口縁部は大きく外反する。口縁部付近は横撫でが行なわれ、頸部は縦方向に器面調整が行なわれている。内面は横撫で整形。	無文

図 番 PL	器種	法 量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文 様 (その他)
118-18	壺		覆 土 口縁小片	①白色粒子を含む。 ②堅い。 ③橙7.5YR7/6	外面口縁部横方向の磨きが主である。頸部に向い縦方向に笥磨き、内面は横方向に器面調整。	
119-19	高杯		覆 土 口縁小片	①白色粒子を含む。 ②器面は僅かに荒れている。③赤色塗彩	高杯の杯口縁部付近の破片。口縁端部はほぼ平坦である。内外面とも横方向の器面調整。	内外面とも赤色塗彩が行なわれている。
119-20	壺		覆 土 頸部小片	①白色粒子を含む。 ②焼きしまっている。 ③浅黄橙10YR8/3	壺形土器の肩部の破片と思われる。外面は多方向に笥磨きが行なわれている。内面には輪積痕が残る。	肩部に櫛描波状文が施文されている。波状文施文後笥磨きが行なわれている。
119-21	壺		覆 土 頸部小片	①小礫が混入する。 ②焼きしまっている。 ③浅黄橙7.5YR8/3。 部分的に赤色塗彩を塗り分けている。	肩部から頸部にかけての曲線を描く。内面は横撫でが行なわれている。	頸部に簾状文、肩部に8条1単位の櫛描波状文を施文後T字文を施文。肩部にボタン状貼付文があり縦2列に櫛歯状刺突文と3列に円形刺突文がある。
119-22	壺		覆 土 頸部小片	①白色粒子を多量に含む。 ②堅く焼きしめる。 ③橙5YR6/6	頸部の破片である。内面は横方向に器面調整が行なわれている。	頸部は3連止めの簾状文が右まわりに施文。肩部には櫛描波状文の施文が行なわれている。
119-23	甕		覆 土 頸部小片	①白色粒子を多量に含む。②堅く焼きしめる。 ③にぶい橙7.5YR7/3	肩部から頸部にかけての破片である。頸部は僅かなくびれを呈す。内外面とも横方向の器面調整。	頸部には櫛状工具による簾状文が行なわれているが鮮明では無い。
119-24	壺		覆 土 頸部小片	①白色粒子、石英を含む。②僅かに荒れている。 ③橙7.5YR7/6	口縁部は大きく外反する。外面は横撫で後、縦方向に笥磨きが行なわれている。	頸部は横方向に櫛状工具により施文されている。
119-25	壺		床 直 頸部小片	①白色粒子と小礫を含む。②良好。 ③浅黄橙7.5YR8/4	壺形土器の頸部破片と考えられる。外面は縦、内面は横方向の器面調整が行なわれている。	頸部には粗く櫛描波状文が施文されている。 27と同一個体と考えられる。
119-26	壺? 甕?		覆 土 頸部小片	①白色粒子と雲母を含む。 ②堅くしまっている。 ③にぶい橙7.5YR7/4	頸部の破片である。外面は縦方向、内面は斜方向の器面調整が行なわれている。	櫛状工具により頸部は横線文系の文様を施文後、肩部側に波状文が施文されている。
119-27	壺		覆 土 頸部小片	①白色粒子と小礫を含む。②良好。 ③浅黄橙7.5YR8/3	壺形土器の頸部破片と考えられる。内面は櫛状工具により斜方向に器面調整が行なわれている。	櫛状工具による波状文が2段施文されている。 25と同一個体と考えられる。
119-28	壺?		覆 土 頸部小片	①白色粒子を含む ②堅くしまっている ③黒7.5YR2/1	内面は横方向に櫛状工具による器面調整が行なわれている。	櫛描による横線文が3段確認できる。その後縦方向にT字文が施文されている。
119-29	甕		覆 土 頸部小片	①白色粒子と小礫を含む。②堅く焼きしまっている。 ③橙5YR6/6	頸部は僅かにくびれる。内面は横方向に器面調整が行なわれている。	頸部に簾状文を施文後、口縁部と肩部に櫛描波状文が施文されている。
119-30	甕		覆 土 頸部小片	①白色・茶色粒子を含む。②良好。 ③にぶい黄橙 10YR7/3	頸部は緩やかに彎曲する。内面は横方向に器面調整が行なわれており光沢をもつ。	頸部に櫛描横線文?を施文後、口縁部、肩部に波状文が施文されている。
119-31	甕		床 直 頸部小片	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③灰黄色10YR6/2	頸部は僅かに彎曲する。外面は文様施文後笥磨き、内面は横撫でが行なわれている。	頸部に簾状文施文後、肩部に櫛描波状文2段の施文が確認できる。

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
119-32	甕		覆土 頸部小片	①小礫が混入する。 ②外面は僅かに荒れている。 ③にぶい橙7.5YR7/4	頸部から口縁部側の破片である。内面は左方向に器面の整形が行なわれている。	頸部には簾状文の一部が確認できる。三連止めである。その後口縁部にかけ櫛描波状文を施文。
119-33	甕		覆土 頸部小片	①夾雑物混入。②良好。③浅黄橙10YR8/3	頸部付近の破片。内面の一部に横方向の調整痕がある。	頸部は簾状文最初に施文した後、上下部分に櫛描波状文を施文。
119-34	壺		覆土 頸部小片	①細かい粒子がある。 ②良好。 ③明褐灰7.5YR7/2	頸部の破片。口縁部に向い外反をはじめる。外面は縦、内面は横方向に器面調整が行なわれている。	頸部には簾状文が施文されている。右まわり。
119-35	甕		覆土 頸部小片	①白色粒子と小礫を含む。②良好。 ③にぶい黄褐10YR5/3	頸部の破片。外面は縦方向、内面は横と斜方向に器面調整が行なわれている。	頸部に櫛描横線文?が施文されている。
119-36	甕		床直 頸部小片	①砂粒混入。②堅い。 ③にぶい黄橙7.5YR7/3	頸部の破片、内面は横方向、斜方向の器面調整が行なわれ、肩部に櫛描波状文施文後、筥磨き。	頸部には右まわりの簾状文施文後、肩部に櫛描波状文を施文している。
119-37	甕?		覆土 頸部小片	①白色粒子を多量に含む。②良好。 ③明赤褐5YR5/6	頸部の破片。内面は横方向に器面調整が行なわれ、光沢をもつ。	8条1単位の櫛描波状文が4段分施文されていることを確認。
119-38	?		覆土 頸部小片	①白色粒子を多量に含む。②堅い。 ③灰黄褐10YR6/2	頸部付近の破片と思われる。内面は横撫で調整、外面は文様施文後に筥磨きが斜方向に入る。	櫛描波状文が乱雑に施文されている。
119-39	壺		覆土 頸部小片	①白色粒子を含む。 ②僅かに表面が荒れている。③灰黄2.5YR7/2	外面は櫛状工具により斜方向に器面調整を行ない内面は横撫でが行なわれている。胴部の破片である。	肩部寄りに櫛描波状文を施文している。胴部にも波状文が施文されたが調整痕で消されている。
119-40	甕		覆土 頸部小片	①夾雑物混入。 ②外面は荒れている。 ③にぶい橙7.5YR7/4	頸部の破片、内面は横方向に器面調整が行なわれている。	櫛状工具による横線文、波状文が施文されているが、乱れている。
119-41		④5.2	覆土 底部小片	①白色粒子を含む。 ②外面は荒れている。 ③灰黄褐10YR6/2		
119-42		④5.6	覆土 底部小片	①砂礫を含む。②良好。 ③灰褐7.5YR4/2	外部底面は荒れている。内部底面は円を描くように調整されている。	
119-43		④6.0	床直 底部小片	①白色粒子を含む。②堅い。③灰褐7.5YR5/2	底部外面は不定方向へ器面調整。内面は円を描く様に調整している。	
119-44		④8.8	覆土 底部小片	①夾雑物を含む。 ②僅かに荒れている。 ③にぶい黄橙10YR7/3	外面は荒れている。内面底部は櫛状工具により調整されている。	
119-45		④5.2	覆土 底部小片	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③にぶい黄橙10YR7/3	外面底部付近は底部を胴部側へ貼りつけている様子がうかがえる。内面胴下部は横撫で調整。	
119-46			覆土 底部小片	①小礫が混入する。 ②強く焼きしめる。 ③にぶい黄橙10YR7/4	外面は縦方向に櫛状工具による器面調整が行なわれ、内面は横方向に器面調整が行なわれ光沢がある。	
119-47	高杯		覆土 脚部小片	①夾雑物を含む。 ②外面が僅かに荒れている。 ③外面朱	脚部裾付近の破片である。端部は平坦である。外面は縦方向に筥磨き、裾部は横撫で。	外面は赤色塗彩が行なわれている。

Y-2号住居跡 (第120~122図、PL. 16)

**位置** M-90、N-89・90・91、O-90・91グリッドにかけて検出された。J-6号住居跡と北東コーナーで重複している。また住居北側部分を桑溝によって壊されている。

**経過** 5月12日に住居跡を検出した。調査は6月9日から開始したが、確認面から床面までは非常に浅く約10cm程であった。床面直上からは多量の遺物が出土した。6月末日までに各種図面の作成・写真撮影を行い調査を終了した。

**覆土** ローム層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

**第1層** 暗褐色土層 やや固く締り、粘性がある。ロームブロック・ローム粒子を多量に含み、赤色スコリア粒子を少量含む。

**第2層** 黒褐色土層 やや固く締り、粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を少量含む。

**第3層** 茶褐色土層 やや固く締り、粘性はあまりない。ロームブロック・ローム粒子・赤色スコリア粒子を少量含む。

**形状** 長辺7.9m、短辺5.4mの隅丸長方形を呈する。面積は約37.4㎡である。

**壁高** 住居跡確認面より約2~20cmで床面に達する。東壁の残存状況がややよかった。

**床面** ほぼ平坦であり、一部が踏みかためられている。とりわけ出入口部分と考えられるところが硬い。

**周溝** 南壁の一部、北壁の一部で確認することができなかった。東壁の周溝は幅4~11cm・深さ2~5cm、西壁下では幅5~12cm・深さ3~6cm、南壁下では幅4~9cm・深さ3cm、北壁下では幅5cm・深さ2cm。

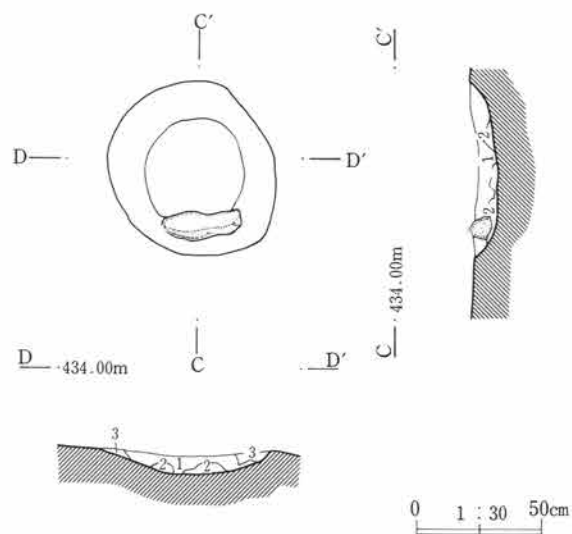
**柱穴** 総計8個のピットが検出された。このうちP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は主柱穴になる。P<sub>1</sub>の深さ78cm、P<sub>2</sub>深さ77cm、P<sub>3</sub>深さ80cm、P<sub>4</sub>深さ80cmであり、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間距離は170cm、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間距離も同じく170cm、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>間距離415cm、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>間距離420cmを測る。P<sub>5</sub>~P<sub>7</sub>は出入口部施設になり、P<sub>5</sub>深さ57cm、P<sub>6</sub>深さ68cmでその間隔は1mを測る。いずれも壁よりに傾いている。P<sub>7</sub>は楕円形を呈し、深さ79cmを測る。P<sub>8</sub>は深さ8cmの浅いピットである。

**炉** 床面を掘り窪めた地床炉である。長径71cm、短径68cm、深さ8cmの楕円形を呈し、主柱穴P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の中間に位置している。また南端に礫1個を配置し、約0.36㎡の面積がある。覆土は3層に分かれた。

**第1層** 茶褐色土層 わずかに炭化物粒子を含む。**第2層** 赤褐色土層 焼土ブロックの層。**第3層** ロームブロックの層。

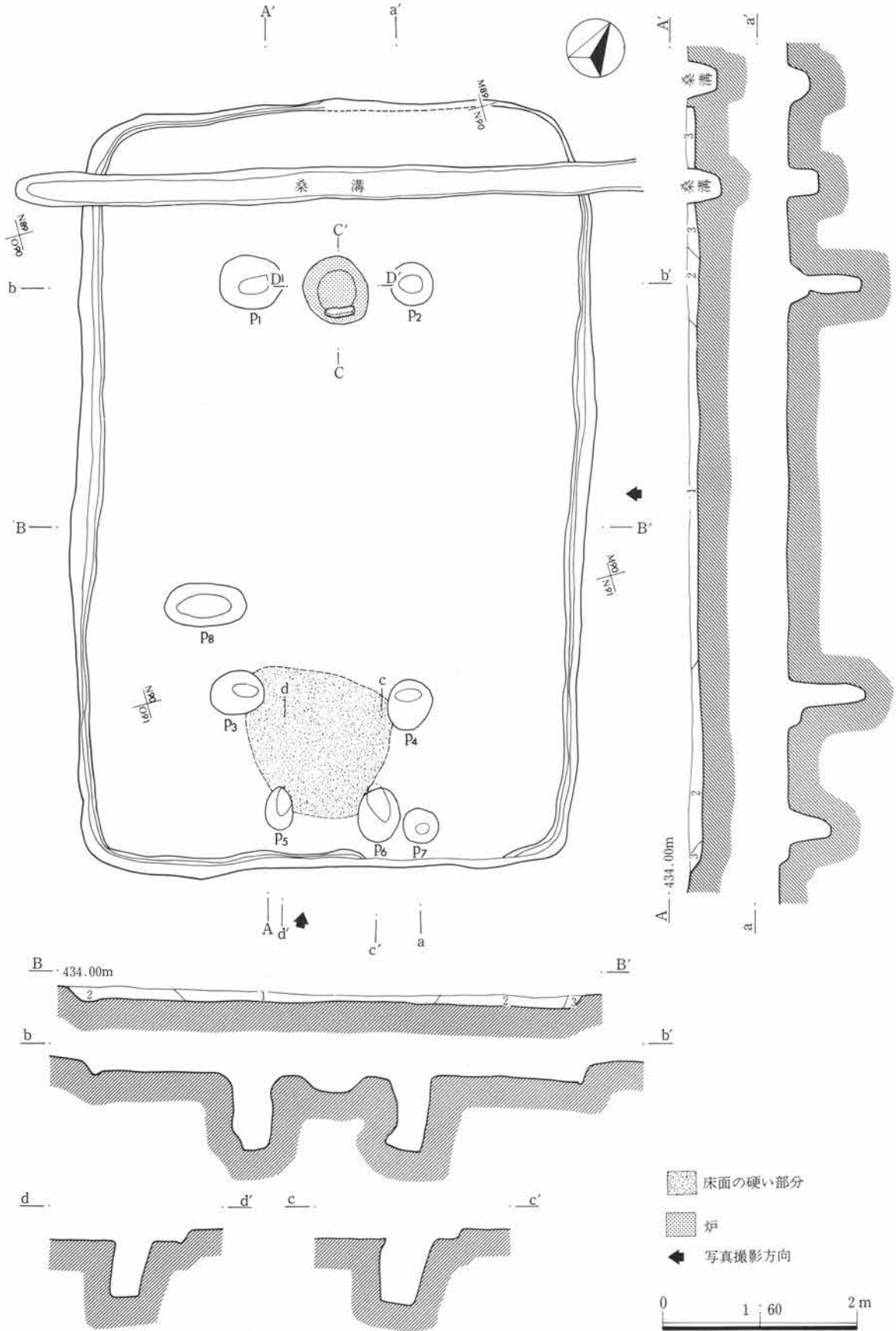
No.	上 長径×短径(cm)		深さ(cm)	備考
	下 長径×短径(cm)			
1	65×54cm	31×17cm	78cm	主柱穴
2	44×44cm	24×19cm	77cm	"
3	56×44cm	26×14cm	80cm	"
4	50×46cm	28×13cm	80cm	"
5	44×28cm	30×15cm	57cm	出入口部
6	55×43cm	42×20cm	68cm	"
7	38×34cm	14×12cm	79cm	"
8	86×44cm	58×24cm	8cm	

Y-2号住居跡ピット計測表

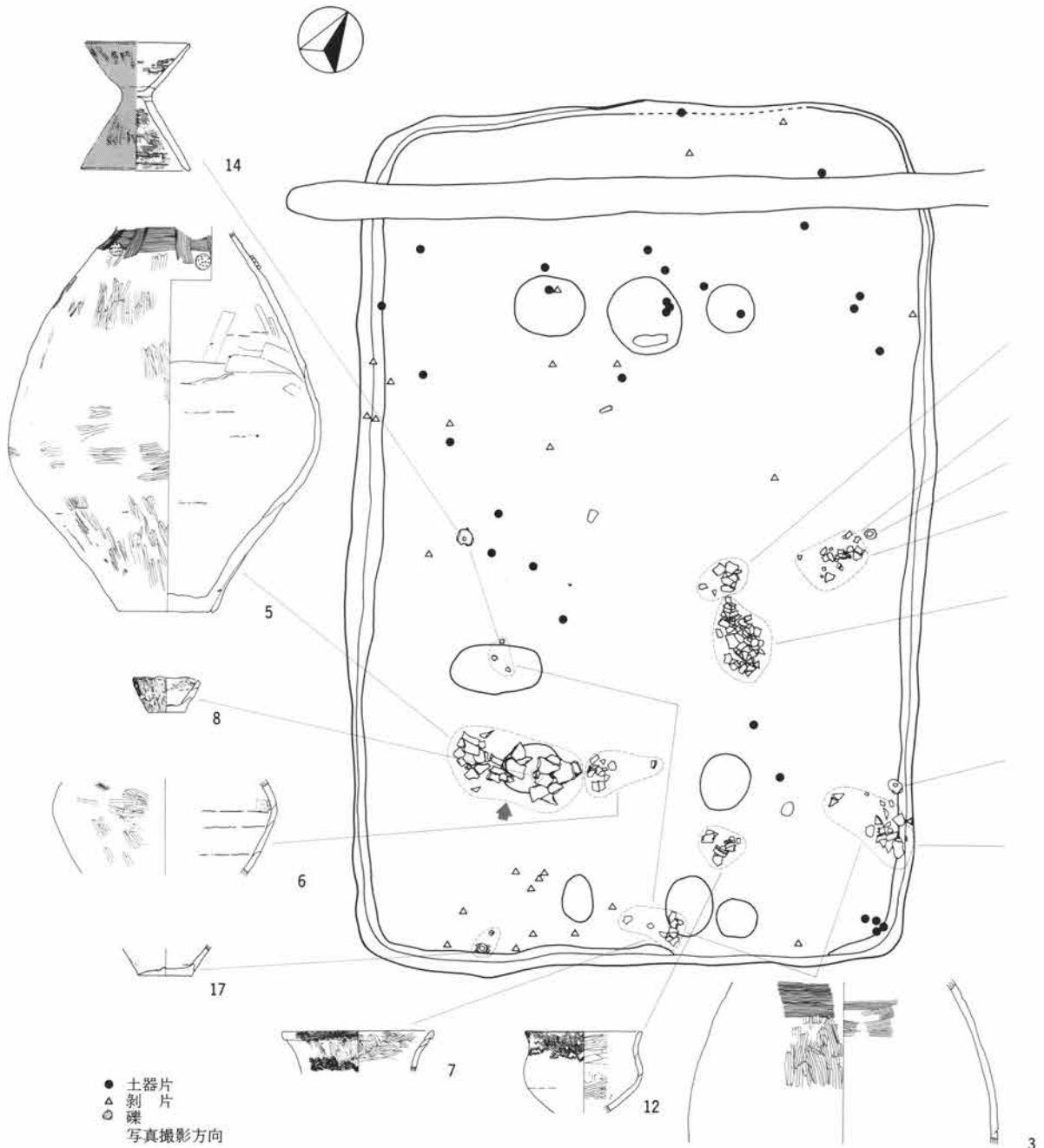


第120図 Y-2号住居跡炉





第121図 Y-2号住居跡



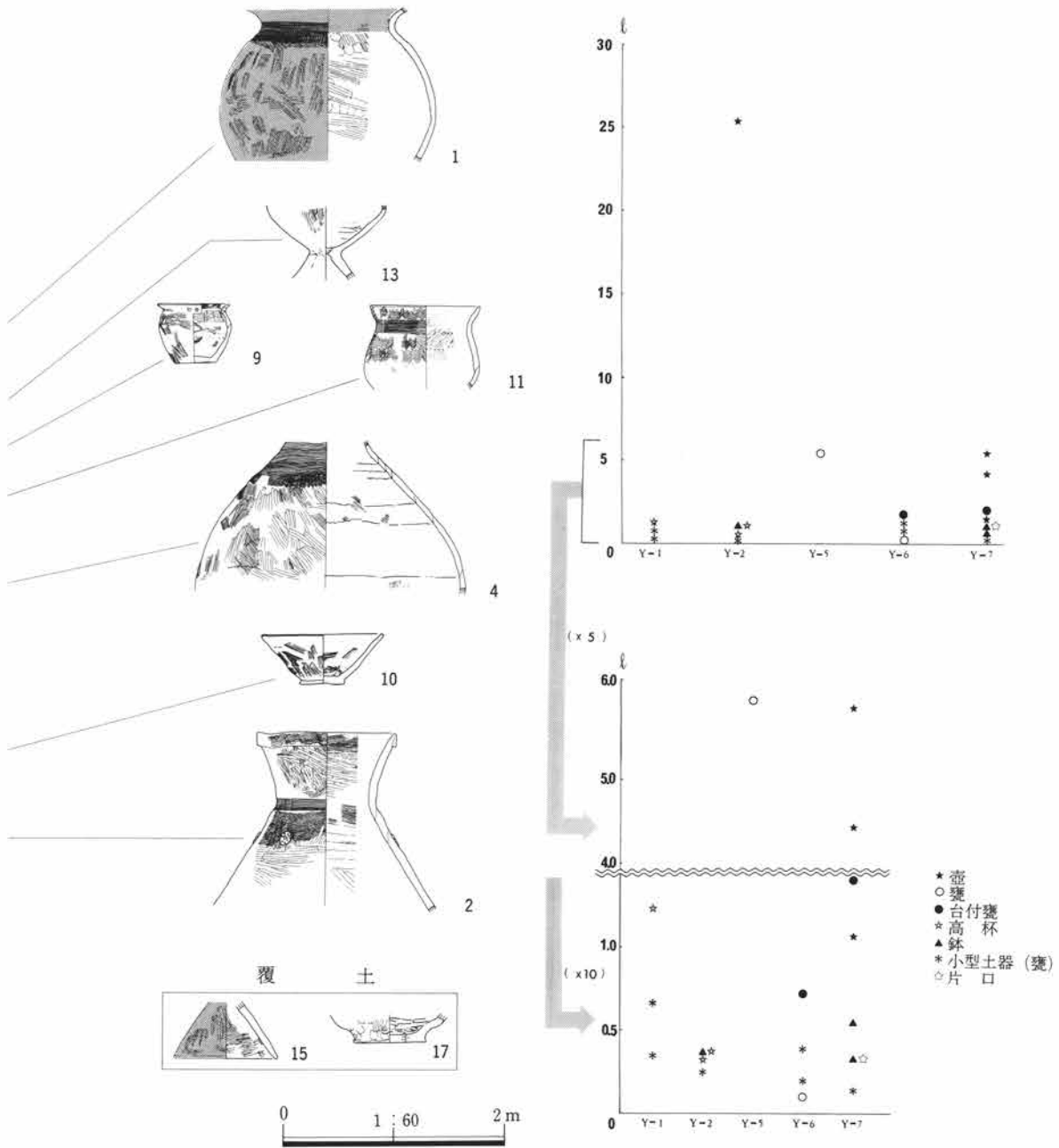
第122図 Y-2号住居跡遺物出土状況

**遺物出土状況** 覆土・床面上から多量の遺物が出土しているが、完形品を含め圧倒的に床面上からの検出が多かった。その分布は住居跡南半分集中している（第122図）。

**出土遺物**（第124～127図、PL. 59・60）

当住居跡から出土した遺物のうち実測した土器の内訳は、壺5点、甕3点、台付甕2点、鉢2点、高杯2点、小型甕形土器1点、底部片8点、脚・台部片1点である。この他に口縁部片19点、頸部片34点、底部片1点、脚・台部片1点、胴部片291点が出土している。このうち口縁部片6点、頸部・肩部片17点、胴部片2点を拓本で図示した。また覆土には縄文時代前期土器片68点、中期土器片17点が混入していた。

**時期** 出土遺物から判断すると、当住居跡は弥生時代後期樽式期に相当する。

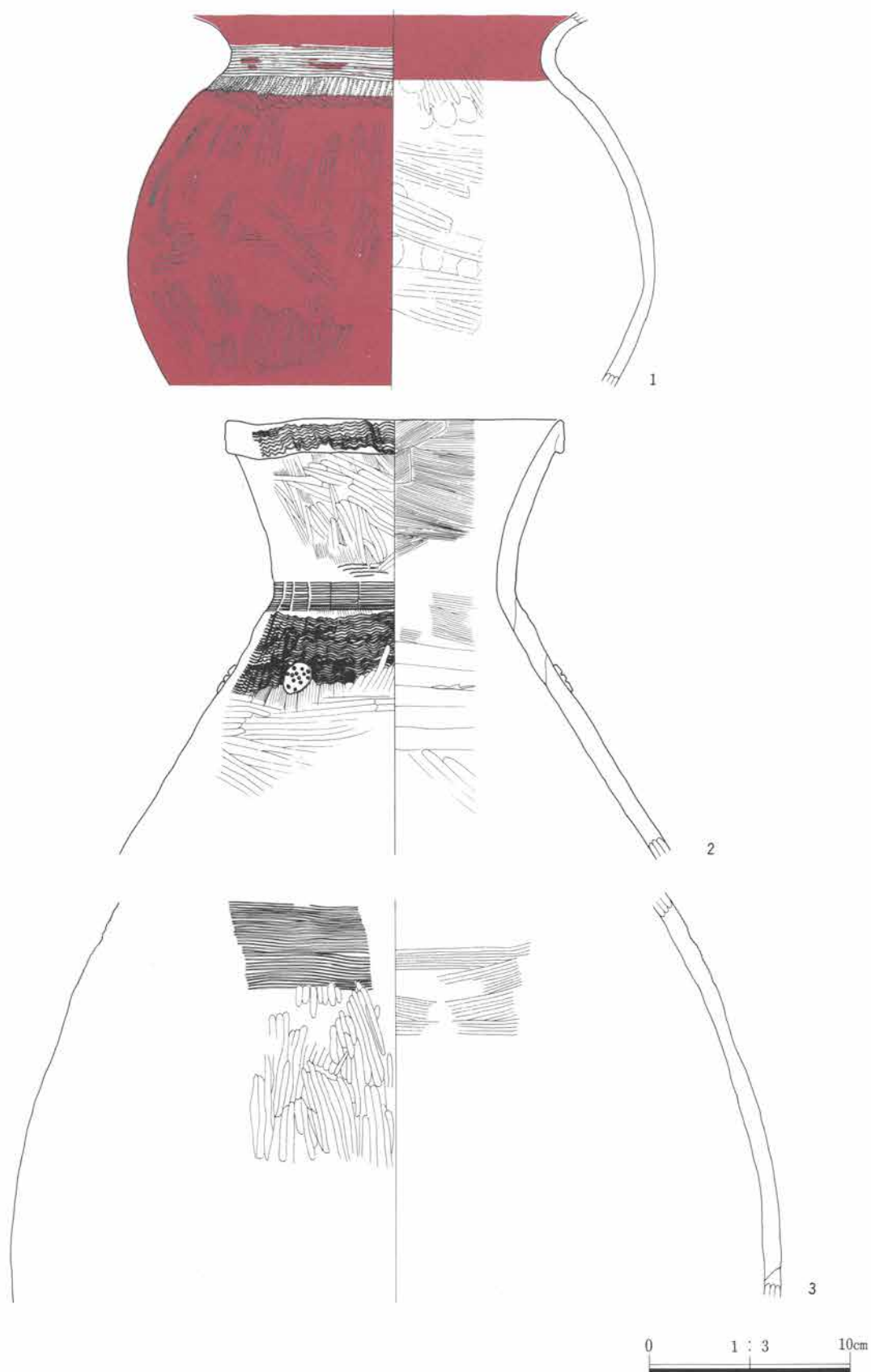


第123図 各住居跡出土土器の容量グラフ

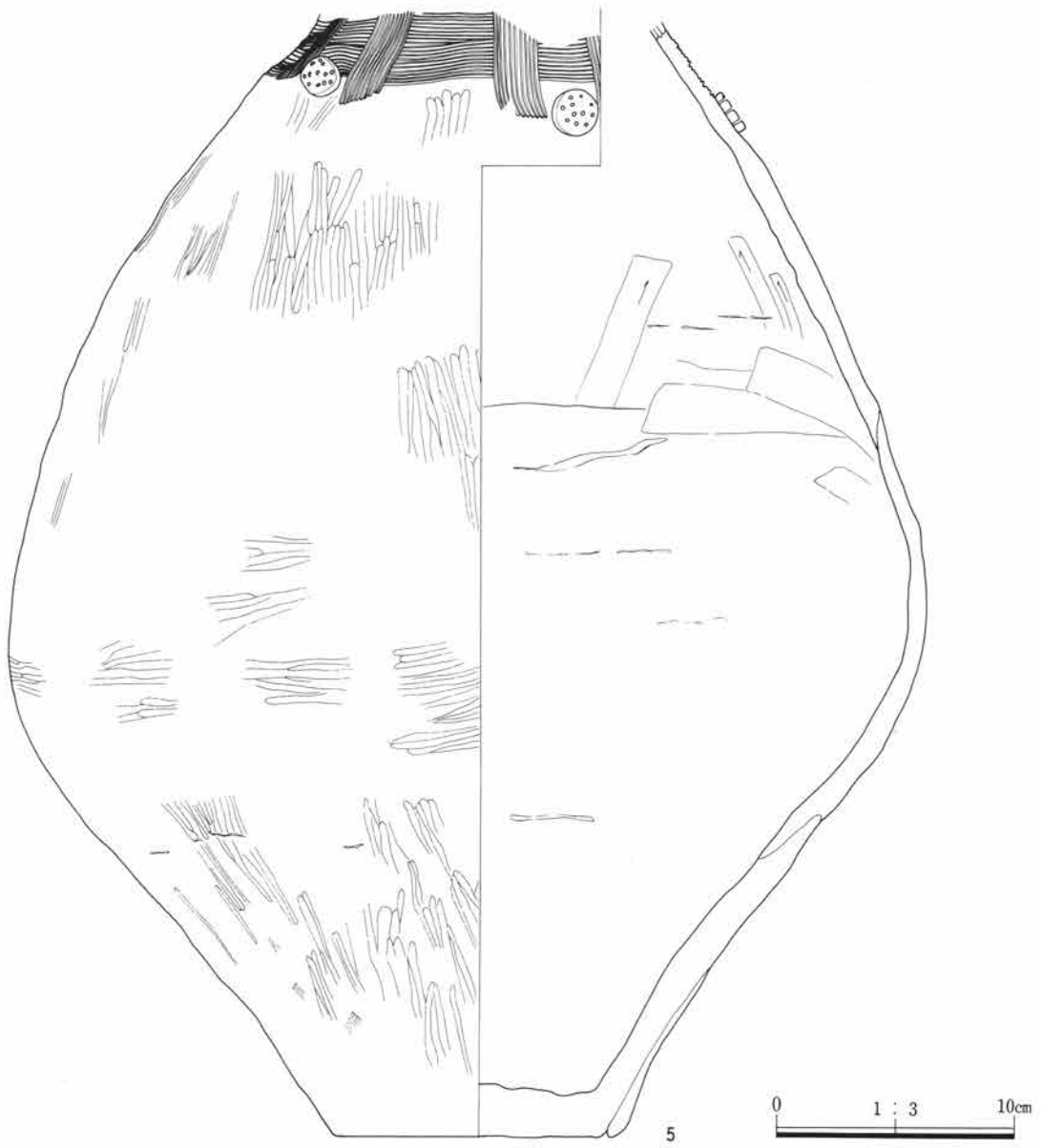
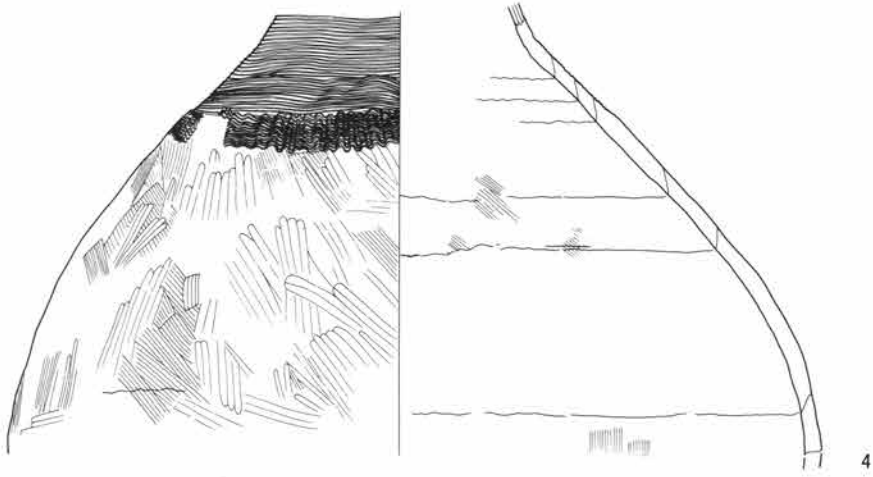
Y-2号住居跡遺物観察表

[法量：①口径②頸部径③胴部径④底径⑤器高]

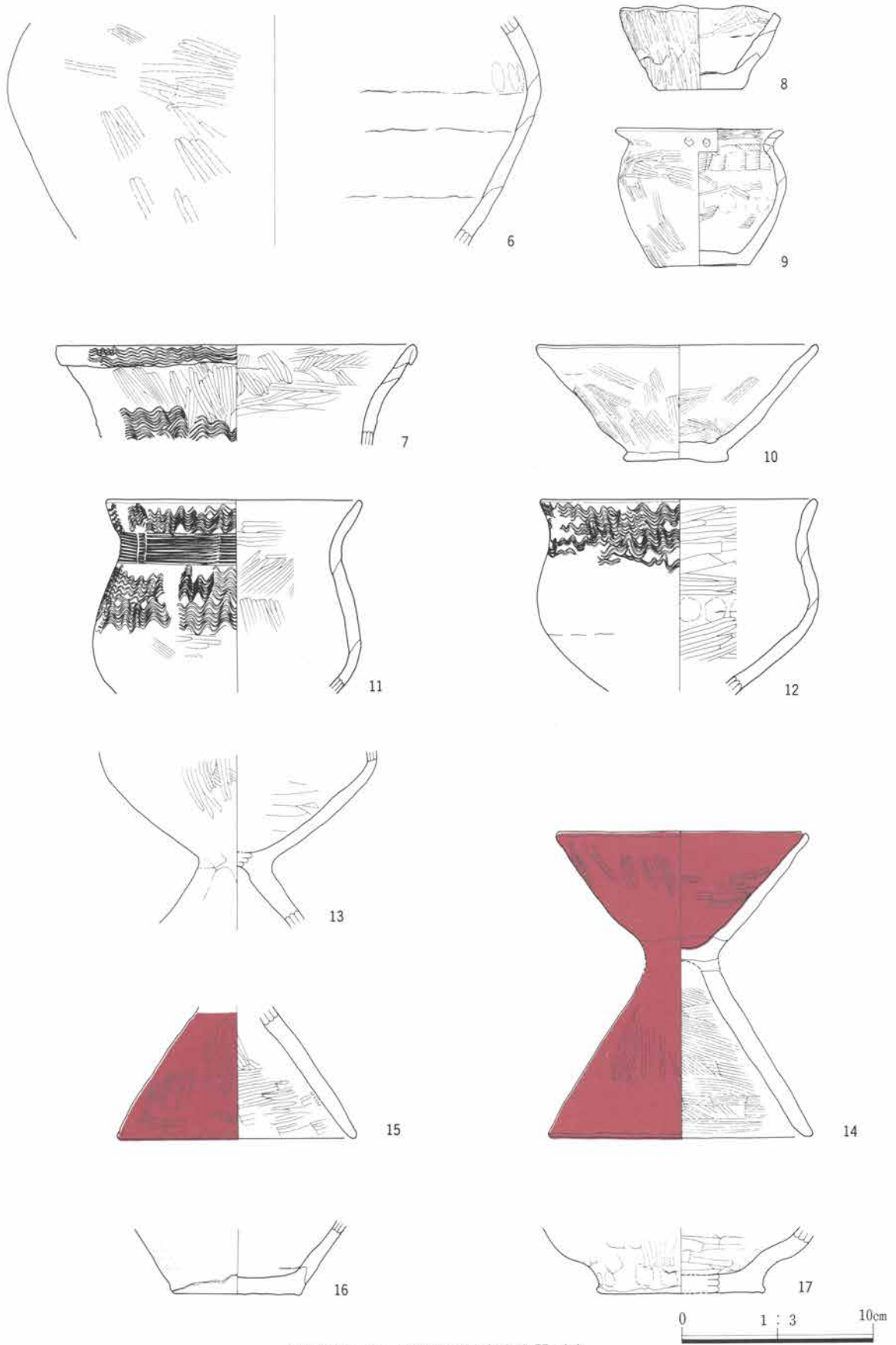
図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
124-1	甕	②16.2 ③26.1	床直 口縁～胴 下半½	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③塗彩	口縁端部と胴下半部を欠損する。 胴部は中央部で球形を呈し、口 縁部は大きく外反する。外面は筥 磨き、内面は撫でによる調整。	頸部には櫛状工具により横線文 が描かれ、直下に櫛歯を押して いる。櫛状工具による施文部を 除き赤色塗彩が行なわれている。



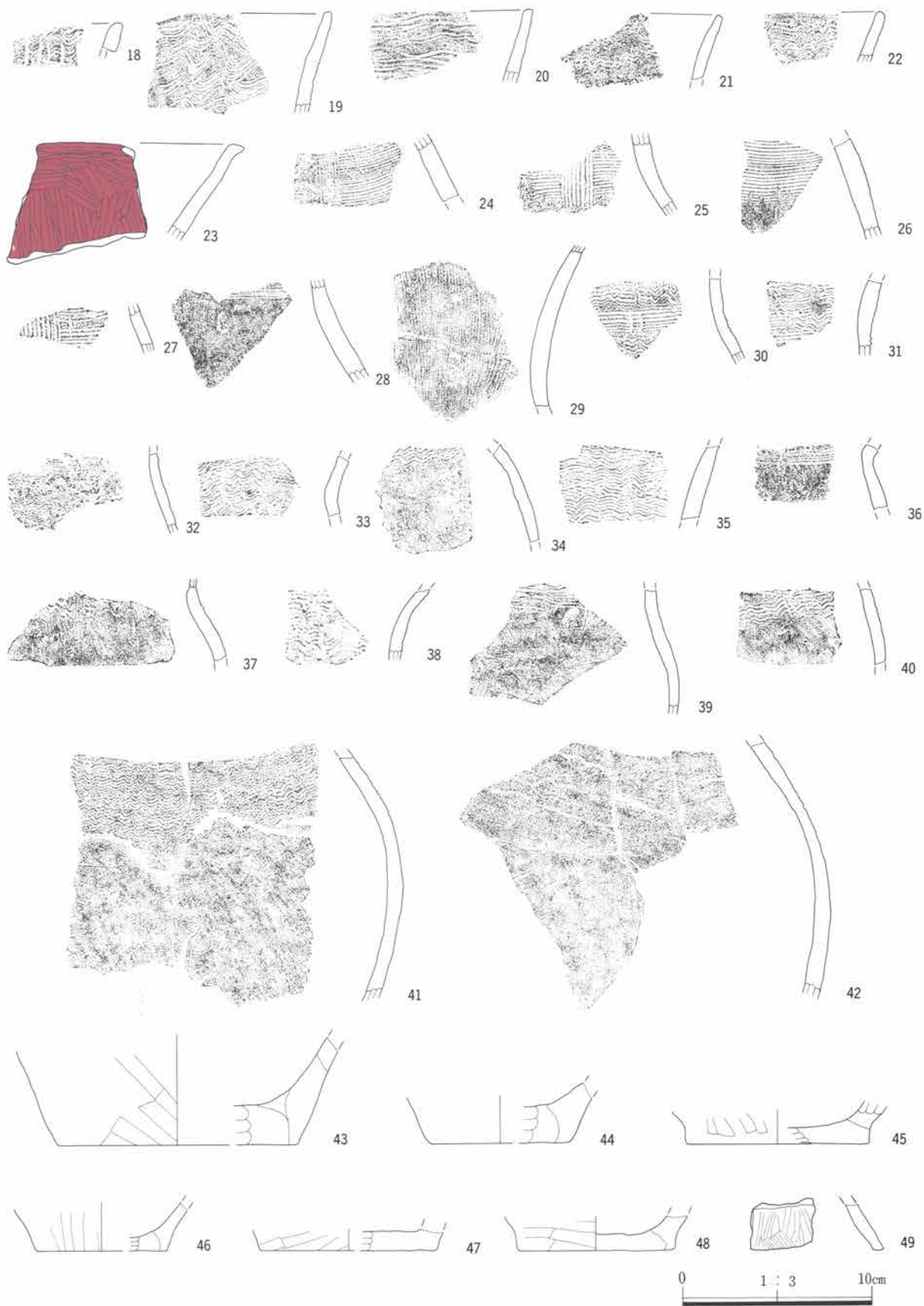
第124図 Y-2号住居跡出土土器 (1)



第125図 Y-2号住居跡出土土器 (2)



第126図 Y-2号住居跡出土土器 (3)



第127图 Y-2号住居跡出土土器(4)

図 番 PL	器種	法 量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文 様 (その他)
124-2	壺	①16.8 ②12.0	床 直 口縁 $\frac{1}{4}$ 肩部 $\frac{1}{2}$	①小礫が混入する。 ②堅く焼きしまっている。 ③浅黄橙7.5YR8/4	口縁部から胴上半部にかけての破片である。口縁部は折り返し口縁である。外面頸部から口縁部にかけて櫛状工具により縦方向に器面調整後、一部磨きが行なわれる。	頸部は等間隔止め簾状文が右まわりに施文され、口縁部に1段肩部に3段の櫛描波状文が施文された上にボタン状貼付文に円形刺突が行なわれている。
124-3	壺	③37.5	床 直 肩部～胴部 $\frac{1}{2}$	①夾雑鉱物を含む。 ②内面は荒れている。 ③にぶい黄橙10YR7/4	壺形土器肩部の破片である。外面は縦方向に磨きが行なわれている。内面は横撫で痕が一部に残る。	肩部上位に櫛状工具による横線文3段分が連続して施文されているのが確認できる。
125-4	壺	②10.5 ③32.0	床 直 頸部～胴部完形	①小礫が混入している。 ②内面は荒れている。 ③にぶい黄橙10YR7/4	頸部から胴中位部分にかけて残存する。胴部は櫛状工具により斜方向に整形後磨きが行なわれている。内面には輪積痕が残る。	頸部から肩部にかけて櫛状工具により3段に横線文が施文され、その下部に櫛描波状文が1段施文されている。
125-5	壺	③38.4 ④12.0	床 直 頸部～底部ほぼ完形	①白色粒子を含む。 ②堅く焼きしまっている。 ③にぶい橙7.5YR7/4	底部から頸部付近までが残存する。外面は磨き細かく行なわれており光沢がある。内面は輪積痕が残る。	底部付近に櫛状工具による横線文が2段確認でき、10区画縦方向にT字文の疑似文様が入る。この下部にボタン状貼付文に円形刺突文を加えた文様が5ヶ所に配列されている。
126-6	壺	③27.8	床 直 胴部 $\frac{1}{2}$	①白色粒子、小礫混入。 ②内外面とも僅かに荒れる。 ③にぶい黄橙10YR7/4	胴部の破片である。内面には輪積痕が残る。外面は横方向が主だが一部縦方向に磨き痕がある。	
126-7	甕	①19.0	床 直 口縁部 $\frac{1}{4}$	①夾雑鉱物を含む。 ②堅く焼きしまる。 ③灰褐7.5YR6/2	口縁部は折り返しである。頸部は緩やかに曲線を描く。	口縁部折り返し部分と頸部付近に櫛状文が施文されている。
126-8	鉢	①8.4 ④4.4 ⑤4.2	床 直 完形	①小礫が混入する。 ②良好。 ③灰白10YR8/1	小型鉢形土器である。口縁部付近は横撫でが行なわれ、胴部は内面で横、外面は縦方向に器面調整。	
126-9	小型甕	①8.5 ②7.6 ③8.8 ④4.9 ⑤7.1	床 直 ほぼ完形	①白色粒子、小礫を混入。 ②堅く焼きしまる。 ③明褐灰7.5YR7/2	内面は櫛状工具により器面調整が行なわれ、外面は頸部より上位は横撫で、胴部は磨き。	外面は光沢をもつ。頸部には2個の穴が相對している。口縁内面は赤色塗彩が行なわれている。
126-10	鉢	①14.5 ④ 5.4 ⑤ 6.0	床 直 口縁 $\frac{1}{2}$ を欠損	①夾雑鉱物を含む。 ②良好。 ③にぶい黄橙10YR7/3	内外面とも櫛状工具により斜方向に器面を整えている。内面は主として横方向に整形している。	
126-11	甕	①13.2 ②11.6 ③14.0	床 直 口縁～胴下半ほぼ完形	①白色粒子を多量に含む。 ②外面は荒れている。 ③橙2.5YR6/6	外面は荒れており不明確である。内面は横方向に器面調整が行なわれている。	頸部に右まわりの簾状文2連止め施文後、口縁部に1段、肩部から胴部に数段の櫛描波状文が施文されている。
126-12	台付甕		床 直 口縁～胴下半完形	①夾雑鉱物を含む。 ②外面は荒れている。 ③にぶい橙2.5YR6/4	甕部底部以下を欠損する。外面は荒れている。内面は横方向に器面調整が行なわれている。	口縁部から頸部にかけて2段で櫛描波状文が施文されている。口縁部施文後頸部に施文。
126-13	台付甕	くびれ部3.8	床 直 甕部 $\frac{1}{2}$ 脚部 $\frac{1}{2}$	①小礫を多量に混入。 ②内外面とも荒れている。 ③にぶい橙2.5YR6/4	頸部は大きくくびれる。脚部は縦方向に磨削が行なわれている。	
126-14	高杯	①13.0 くびれ部3.6 ⑤16.0	床 直 杯ほぼ完形脚部 $\frac{1}{4}$	①白色粒子を僅かに含む。 ②良好。 ③赤色塗彩	同一個体と思われる脚を推定復元した。杯部外面は縦方向、内面は横方向に器面調整が行なわれている。	内外面とも赤色塗彩。



図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
126-15	高杯	裾径12.6	覆土 脚部片	①夾雑鉱物を含む。 ②器面は僅かに荒れる。 ③内面 ぶい橙 7.5 YR7/3	脚端部は平たい。外面は縦方向に 笥磨き、外面裾は横方向に櫛状工 具で整形が行なわれている。	外面は赤色塗彩。
126-16		④6.8	床直 底部	①白色粒子を含む。 ②全面が荒れている。 ③淡橙5YR8/4	外面に僅かに縦方向の器面調整が 行なわれている。	
126-17	壺	④8.6	覆土 底部～胴 下半部片	①白色粒子を含む。 ②強く焼きしまる。 ③ぶい橙5YR6/4	大きく外にまるみをもちながら張 り出す。底部付近は工具でおさえ 外面は縦、内面は横方向に調整。	
127-18	甕		床直 口縁部小 片	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③灰黄褐10YR6/2	折り返し口縁部のみ残存する。内 面は横撫で整形が行なわれてい る。	櫛描波状文が施文された後、櫛 状工具が刺突されている。
127-19	壺		床直 口縁部小 片	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③明黄褐10YR7/6	口縁端部は僅かに内彎する。内面 口縁部付近は横撫で整形が行なわ れている。	数段にわたり櫛描波状文が施文 されている。
127-20	甕		床直 口縁部小 片	①砂質。 ②器面は僅かに荒れる。 ③ぶい橙 7.5YR7/4	内面は横撫で整形が行なわれてい る。	粗い波状文が施文されている。
127-21	甕		床直 口縁部小 片	①白色粒子を含む。 ②器面が荒れる。 ③ぶい黄橙 10YR7/2	口縁部の破片である。内面は横方 向に撫で整形が行なわれている。	櫛描波状文が施文されている。
127-22	甕		床直 口縁部小 片	①白色粒子を含む。 ②強く焼きしまる。 ③灰黄褐10YR5/2	内面は横方向に器面調整が行なわ れている。	櫛描波状文が施文されている。
127-23	高杯		床直 杯部小片	①長石、石英粒を含む。 ②強く焼きしまる。 ③赤色塗彩	杯部の破片である。口縁端部は平 たく、外方向へ突出する。	内外面とも赤色塗彩が行なわれ ている。
127-24	甕?		床直 肩部小片	①小礫が混入する。 ②器面が荒れている。 ③ぶい黄橙 10YR7/4	甕の肩部破片と考えられる。	櫛描横線文を数段階に施文後、 縦方向に櫛描の区画文が施文さ れている。
127-25	壺		床直 頸部小片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③橙 7.5YR7/6	外面は櫛状工具を撫で整形に用 い、内面は横撫でが行なわれてい る。	頸部は櫛描横線文を施文後、縦 方向に櫛描の区画文を施文。肩 部には櫛描波状文を施文。
127-26	甕?		床直 肩部小片	①小礫が混入する。 ②内面が荒れる。 ③ぶい黄橙。		10、24と同一個体と考えられる。
127-27	壺		床直 頸部小片	①白色粒子を含む。 ②内面には光沢をもつ。 ③ぶい橙 5YR6/3	頸部の破片である。内面は横方向 に笥磨きが行なわれている。	櫛描横線文を施文後、縦方向に 櫛描の区画文が施文されている。
127-28	壺		床直 頸部小片	①長石、石英粒混入。 ②器面が荒れる。 ③浅黄橙 7.5YR8/3		
127-29	壺		床直 頸部小片	①小礫が混入する。 ②表面が僅かに荒れる。 ③黄橙 10YR8/3	外面は縦方向に櫛状工具による器 面調整、内面は横方向に同様の調 整が行なわれている。	頸部に横方向の施文が行なわれ ているが文様は不明。

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
127-30	甕		床直 頸部小片	①白色粒子が混入する。②良好。 ③灰褐7.5YR4/2	内面は横方向の撫でが行なわれている。	頸部は6条1単位の2連止め簾状文を右まわりに施文後、波状文を肩部と口縁部に施文。
127-31	甕?		床直 頸部小片	①小礫が混入する。 ②良好。 ③灰褐7.5YR6/2	内面は横方向の器面調整が行なわれている。	頸部に櫛描横線文(簾状文)施文後、口縁部に櫛描波状文を施文。
127-32	甕		床直 頸~肩部 小片	①小礫が混入する。 ②表面は荒れる。 ③にぶい橙5YR7/4	内面は横方向に器面調整が行なわれている。	頸部に櫛描横線文(簾状文)を施文、肩部は櫛描波状文を数段にわたり施文が行なわれている。
127-33	甕		床直 口縁~肩 部小片	①白色粒子が混入する。②良好。 ③にぶい褐7.5YR5/3	内面口縁部は横撫で調整、肩部は櫛状工具による横撫でが行なわれている。	1単位6条の櫛描波状文が施文されている。
127-34	高杯					23と同一個体
127-35	壺		床直 頸部小片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③にぶい橙7.5YR7/4	頸部は僅かに外反する。内面は横方向の器面調整が行なわれており光沢をもつ。	1単位8条の櫛描波状文が施文されている。
127-36	甕		床直 頸~肩部 小片	①小礫が混入する。 ②器面は荒れている。 ③浅黄橙7.5YR8/3	器面は荒れており内面の器面調整は横方向の櫛状工具による。	櫛描横線文(簾状文)が頸部に施文されている。
127-37	甕		床直 頸~肩部 小片	①白色粒子を含む。 ②表面が僅かに荒れる。 ③灰褐7.5YR6/2	外面は施文後、縦方向に笥削りを行なっている。内面は横方向に器面調整が行なわれている。	頸部に櫛描波状文が施文されている。
127-38			床直 口縁~頸 部小片	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③明褐灰7.5YR7/2	内面は横方向に器面調整が行なわれている。	口縁部から頸部にかけて櫛描波状文が4段施文されている。
127-39			床直 頸~肩部 片	①砂粒混入。 ②器面が僅かに荒れる。 ③にぶい橙7.5YR7/3	外面は横方向に荒く笥削りが行なわれている。内面は横撫でが行なわれている。	頸部に櫛状工具による文様が施文されている。外面には煤が付着している。
127-40			床直 頸部小片	①白色粒子が混入する。 ②外面は僅かに荒れる。 ③にぶい褐7.5YR6/3	外面は縦方向に器面調整、内面は横方向に器面調整が行なわれている。内面は光沢をもつ。	頸部は右まわりの簾状文を施文後、6条1単位の櫛描波状文が施文されている。
127-41	甕		床直 頸~胴部 上半片	①白色粒子が混入する。 ②外面は僅かに荒れる。 ③にぶい橙7.5YR6/4	外面胴中位は横、胴下半部は縦、内面は横方向に器面調整が行なわれている。	頸部には簾状文を施文後、胴上半部は4段にわたり櫛描波状文が施文されている。
127-42	壺		床直 胴部小片	①白色粒子を含む。 ②器面は荒れている。 ③にぶい橙7.5YR6/4	外面胴部は縦方向に磨きが行なわれている。	胴上位には2本の波状沈線文と1本の横線文が見られる。胴下半部は煤の付着がある。
127-43		④12.6	床直 胴下部~ 底部 $\frac{1}{2}$	①白色粒子を多量に含む。 ②器面は荒れている。 ③にぶい黄橙10YR7/3	厚い底部をもつ。外面は縦方向に器面調整が行なわれている。	一部に煤が付着する。
127-44		④7.4	床直 胴下部~ 底部 $\frac{1}{2}$	①長石、石英粒を含む。 ②内面は僅かに荒れる。 ③浅黄橙10YR8/3	底部は厚みをもつ。	

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
127-45		④ 9.6	床直 底部½	①白色粒子を含む。 ②内面は僅かに荒れる。 ③灰黄褐10YR6/2	外面は窠おさえ痕が僅かに残る。	
127-46		④ 6.8	床直 胴下部～ 底部½	①白色粒子を含む。 ②器面は荒れている。 ③にぶい褐7.5YR5/3	外面は僅か縦方向に器面調整が行なわれている。	
127-47		④ 9.2	床直 底部½	①長石、石英を含む。 ②良好。 ③にぶい黄橙10YR7/3	底部付近は横方向の器面調整が行なわれている。	
127-48		④ 8.2	床直 底部½	①白色粒子、礫を含む。 ②器面は僅かに荒れる。 ③にぶい黄橙10YR7/3	胴下部は横方向の器面調整が行なわれている。	
127-49	台付 甕		床直 台部小片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③にぶい赤褐5YR5/3	脚部の破片、脚端部は平たい。外面は櫛状工具により器面調整。内面も同様器面調整が行なわれる。	

## Y-3号住居跡 (第128・129図、PL. 17)

**位置** O-91・92、P-91・92グリッドにかけて検出された。北側に近接してY-2号住居跡が存在する。

**経過** 5月27日に住居跡プランを確認。発掘区を西側に一部分拡張して住居跡の全容を掘んだ後、調査を開始した。床面まで浅く遺物の出土も少量である。6月いっぱいをもって各種図面の作成・写真撮影を行った。

**覆土** ローム層上の茶褐色土層からローム層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

第1層 黒色土層 粘性が少しある。白色粒子を少量含む。

第2層 黒褐色土層 粘性が少しある。ロームブロックを含む。

**形状** 長辺5.8m、短辺4.02mの隅丸長方形を呈する。面積は約21㎡である。

**壁高** 住居跡確認面より約8～20cmで床面に達する。南壁はトレンチによって一部分壊されている。

**床面** 住居跡中央部分と南側ピットに囲まれた部分が硬く踏みかためられ、後者の床面は黒く汚れている。

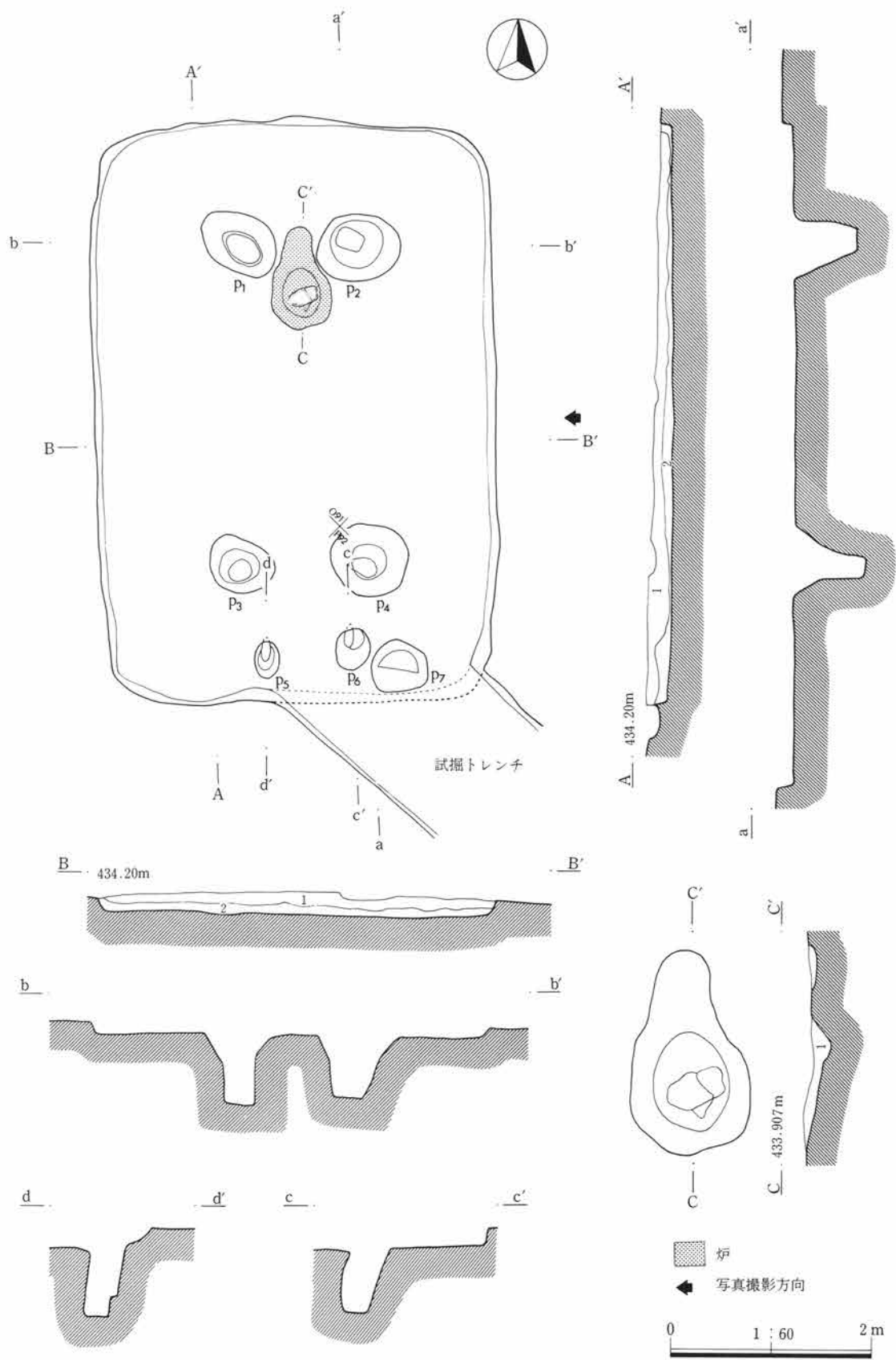
**周溝** 検出できなかった。

**柱穴** 総計7個のピットが検出された。このうちP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は主柱穴になる。P<sub>1</sub>の深さ70cm、P<sub>2</sub>深さ63cm、P<sub>3</sub>深さ72cm、P<sub>4</sub>深さ70cmであり、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間距離110cm、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間距離125cm、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>間距離320cm、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>間距離325cmを測る。P<sub>5</sub>～P<sub>7</sub>は出入口施設になり、P<sub>5</sub>深さ68cm、P<sub>6</sub>深さ63cmでその間隔は85cmを測る。いずれも壁寄りに傾いている。P<sub>7</sub>は楕円形を呈し、深さ60cmを測る。

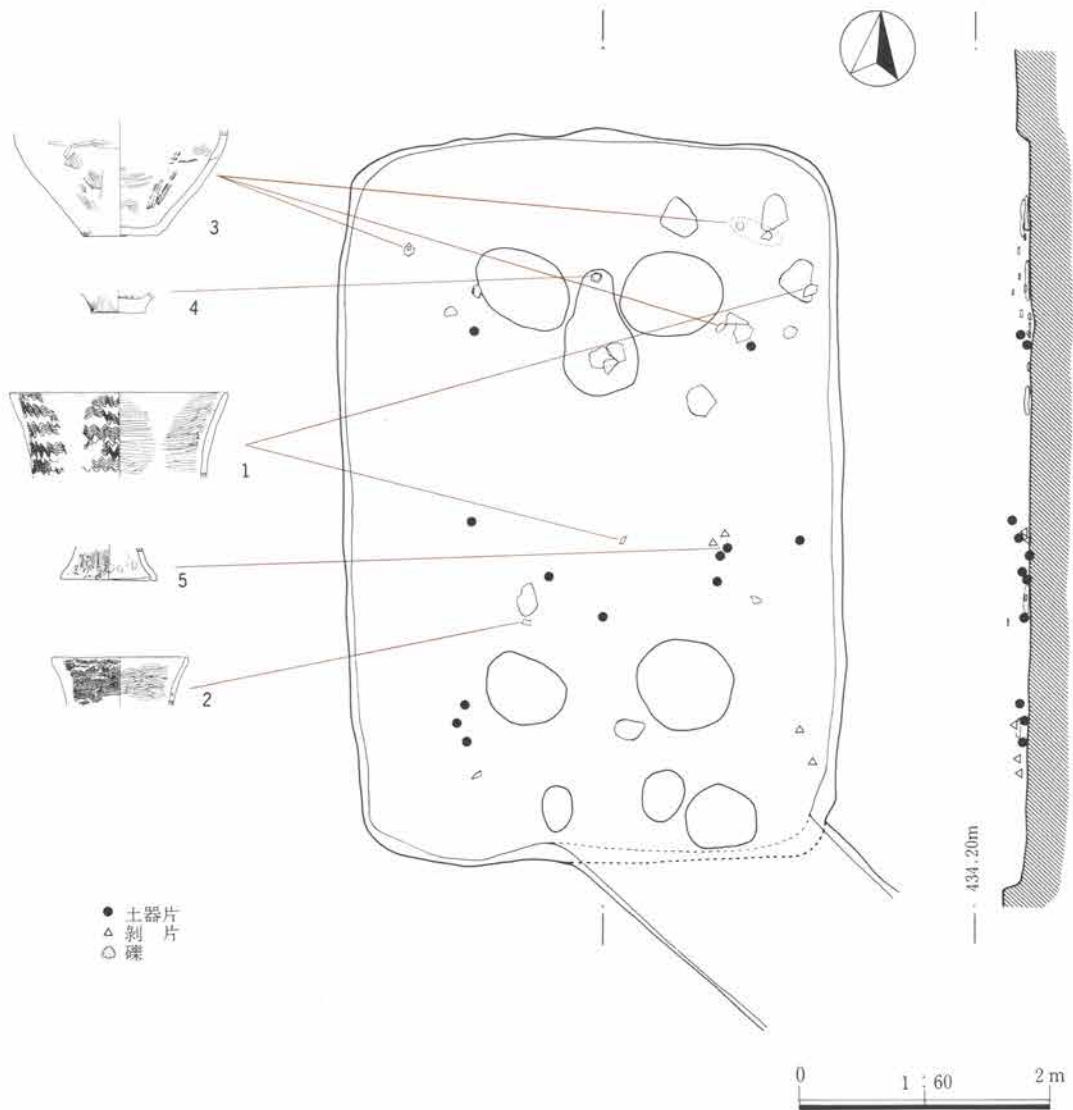
**炉** 床面を掘り窪めた地床炉である。長径100cm、短径60cm、深さ18cmの不正形を呈し、主柱穴P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の中間やや南側に位置している。また南端に礫1個を配置し、約0.42㎡の面積がある。覆土は次のとおりである。

No.	上 長径×短径 (cm) 下 長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	83×56cm 36×24cm	70cm	主柱穴
2	82×66cm 27×20cm	63cm	"
3	64×53cm 22×22cm	72cm	"
4	79×71cm 28×18cm	70cm	"
5	36×25cm 23×9cm	68cm	出入口部
6	40×34cm 24×9cm	63cm	"
7	56×50cm 40×20cm	60cm	"

Y-3号住居跡ピット計測表



第128図 Y-3号住居跡



第129図 Y-3号住居跡遺物出土状況

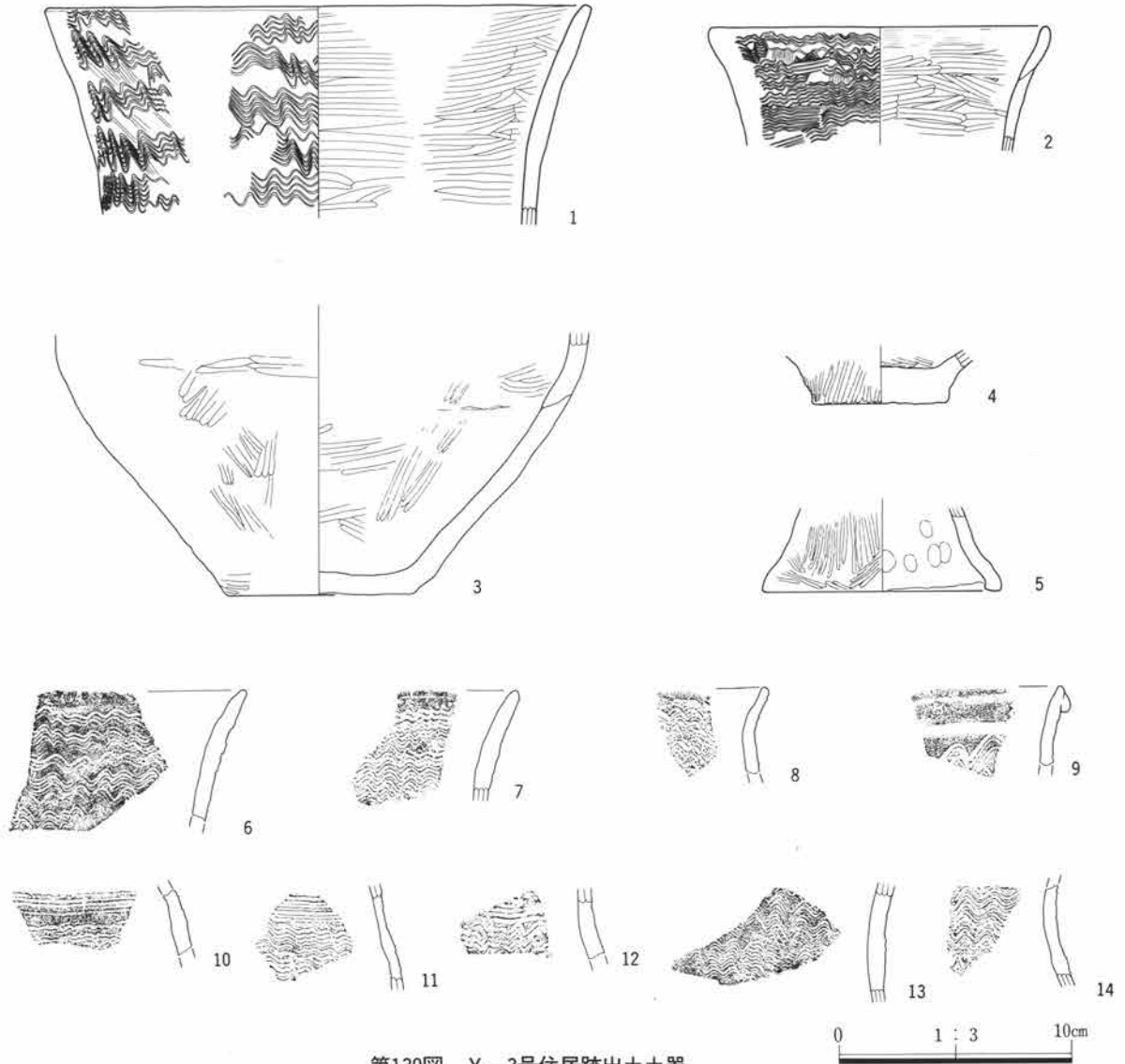
第1層 暗褐色土層 ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子をわずかに含む。

遺物出土状況 覆土・床面からは少量の遺物しか出土しなかった。が、住居北東コーナーに礎多数が出土している（第129図）。

出土遺物（第130図、PL. 60）

当住居跡から出土した遺物のうち実測した土器の内訳は、壺1点、甕2点、台付甕1点、底部1点である。この他に口縁部片7点、頸部片10点、胴部片41点が出土している。このうち口縁部片4点、頸部片・肩部片5点を拓本で図示した。また覆土には縄文時代前期土器片6点、中期土器片3点が混入していた。

時期 出土遺物から判断すると、当住居跡は弥生時代後期樽式期に相当する。



第130図 Y-3号住居跡出土土器

Y-3号住居跡遺物観察表

[法量：①口径②頸部径③胴部径④底径⑤器高]

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様(その他)
130-1	甕	①23.5 ② 4.6	覆土 口縁部 $\frac{1}{2}$	①砂粒混入。 ②強く焼きしめる。 ③灰褐7.5YR5/2	頸部のくびれは弱い。内面は横方向に笥磨きが行なわれている。	5条1単位の櫛描波状文が5段に渡り、頸部から口縁部にかけて施文されている。
130-2	甕	①14.3 ② 2.9	覆土 口縁小片	①砂粒混入。 ②強く焼きしまっている。 ③にふい褐7.5YR6/3	外面は櫛描波状文施文後、縦方向の撫で痕がある。内面・口縁部は横撫で、頸部は横方向の笥磨き。	5段階に櫛描波状文が施文されているが、施文は乱れている。
130-3	壺	③ 5.7 ④ 8.0	覆土 胴部 $\frac{1}{2}$ 底部	①白色粒子を多量に含む。②内外面とも荒れている。 ③にふい赤褐5YR5/4	内外面とも縦方向、横方向に器面調整が行なわれている。	
130-4		④ 5.8	覆土 底部	①砂粒子混入。 ②強く焼きしめる。 ③にふい黄橙10YR7/3	底部が残存する。内面底部は円を描くように整形、外面底部は多方向に笥削りが行なわれている。	

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
130-5	台付 甕	裾径10.2	覆土 台部1/8	①白色粒子を多量に含む。②堅くしまっている。③にぶい赤褐2.5YR5/4	台付脚部の破片である。脚部はひらき、脚端部は平たい。外面は縦方向に筥磨きが行なわれている。	
130-6	甕		覆土 口縁部片	①夾雑鉱物を含む。②器面は僅かに荒れる。③橙7.5YR7/6	口縁部破片である。口縁部は僅かに外反する。内面は横方向に筥磨きが行なわれている。	頸部から口縁部にかけて櫛描波状文が5段にわたり施文されているのが確認できる。
130-7	甕		覆土 口縁部片	①砂粒子を含む。②器面は僅かに荒れる。③にぶい橙7.5YR7/3	口縁部は僅かに外反する。内面は横方向に撫でられている。	頸部から口縁部にかけて櫛描波状文が4段にわたり施文されているのが確認できる。
130-8	甕		覆土 口縁部片	①白色粒子が混入する。②外面が僅かに荒れる。③灰褐5YR6/2	口縁部は丸みをもつ。内面は横撫でと横方向の筥磨きが行なわれている。	櫛描波状文が施文されている。施文は乱れている。
130-9	甕		覆土 口縁部片	①白色粒子が混入する。②外面が僅かに荒れる。③にぶい橙7.5YR7/3	口縁部は折り返し口縁である。口縁部は横撫でが行なわれている。	口縁部から頸部にかけて櫛描波状文が施文されている。比較的大めの工具である。
130-10	甕		覆土 肩部小片	①砂粒子が混入する。②外面が僅かに荒れる。③にぶい褐7.5YR6/3	内面は横方向に器面調整が行なわれている。	肩部付近の破片と思われる。肩部上位には簾状文、その下位に櫛描波状文が施文されている。
130-11	甕		覆土 頸部小片	①白色粒子を含む。②良好。③灰褐7.5YR5/2	内面は横方向に筥磨きが行なわれている。	頸部は櫛描横線文(簾状文?)を施文後、肩部に櫛描波状文が施文されている。
130-12	甕		覆土 頸部小片	①白色粒子を含む。②ほぼ良い。③にぶい橙5YR6/3	甕の頸部と思われる。内面は横方向に筥磨きが行なわれている。	頸部に簾状文を施文後、肩部には櫛描波状文が施文されている。工具は太めである。
130-13	甕		床直 肩部片	①砂粒子が混入する。②器面は僅かに荒れる。③にぶい橙7.5YR6/4	内面横方向に筥磨きが行なわれている。	連続的に間隔が無い様に櫛描波状文が施文されている。
130-14	甕		覆土 肩部片	①砂粒子が混入する。②堅い。③浅黄橙10YR8/3	内面は横方向に器面調整が行なわれている。	連続的に間隔が無い様に櫛描波状文が施文されている。

Y-4号住居跡 (第131図、PL. 17)

**位置** O-94・95、P-94・95グリッドにかけて検出された。北西方向にY-3号住居跡が存在する。

**経過** 第2遺構群のなかで最初に調査された住居跡である。攪乱によって大部分を壊されていたために、住居跡の残存状況は非常に悪く遺物はほとんど出土しなかった。

**覆土** III層 (黒色土層 締りよくローム粒子を極少量含む) からローム層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

**第1層** 黒色土層 粒子密で固く締っている。当住居跡は攪乱によってだいぶ壊されている。このため住居跡覆土は住居の北側、南側の一部でわずかに検出されたにとどまった。

**形状** 長辺6.78m、短辺4.17mの長方形を呈する。面積は約25.6㎡である。

**壁高** セクションから判断すると、掘り込みから床面までは約30~40cmである。

**床面** 住居跡南半分や北側の一部に攪乱が存在するため、良好な床面を検出したのはわずかである。

**周溝** 検出された周溝は北壁と西壁に沿ってである。北壁下では幅5~10cm、深さ2cm、西壁下では幅6~11cm、深さ3~7cmである。

**柱穴** 総計7個のピットが検出された。このうちP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は支柱穴になる。P<sub>1</sub>の深さ66cm、P<sub>2</sub>深さ72cm、P<sub>3</sub>深さ62cm、P<sub>4</sub>深さ70cmであり、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間距離160cm、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間距離も同じく160cm、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>間距離325cm、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>間距離330cmを測る。P<sub>5</sub>~P<sub>7</sub>は出入口部施設になり、P<sub>5</sub>深さ37cm、P<sub>6</sub>深さ43cmでその間隔は85cmを測る。いずれも壁よりに傾いている。P<sub>7</sub>は円形を呈し、深さ40cmを測る。

**炉** 床面を掘り窪めた地床炉であるが、一部を攪乱によって壊されている。推定長径62cm、短径46cm、深さ14cmの楕円形を呈し、支柱穴P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の中間やや北側に位置している。推定面積約0.21㎡である。

**遺物出土状況** 覆土・床面上からの遺物の出土はほとんどなかった。その原因は覆土の大部分、床面の一部に攪乱が存在していたためである。

**出土遺物 (第132図、PL.60)**

当住居跡から出土した遺物のうち実測した土器の内訳は、壺1点、高杯1点、底部3点である。この他に口縁部片9点、頸部片15点、脚・台部片1点、胴部片47点が出土している。このうち口縁部片6点、頸部・肩部片8点、脚・台部片1点を拓本で図示した。また覆土には縄文時代前期土器片6点、中期土器片3点が混入していた。

**時期** 出土遺物から判断すると、当住居跡は弥生時代後期樽式期に相当する。

No.	長径×短径 (cm)		深さ (cm)	備考
	上	下		
1	41×38	23×13	66	支柱穴
2	41×34	21×11	72	"
3	48×30	30×18	62	"
4	54×52	34×20	70	"
5	32×21	29×15	37	出入口部
6	43×21	33×13	43	"
7	41×41	16×14	40	"

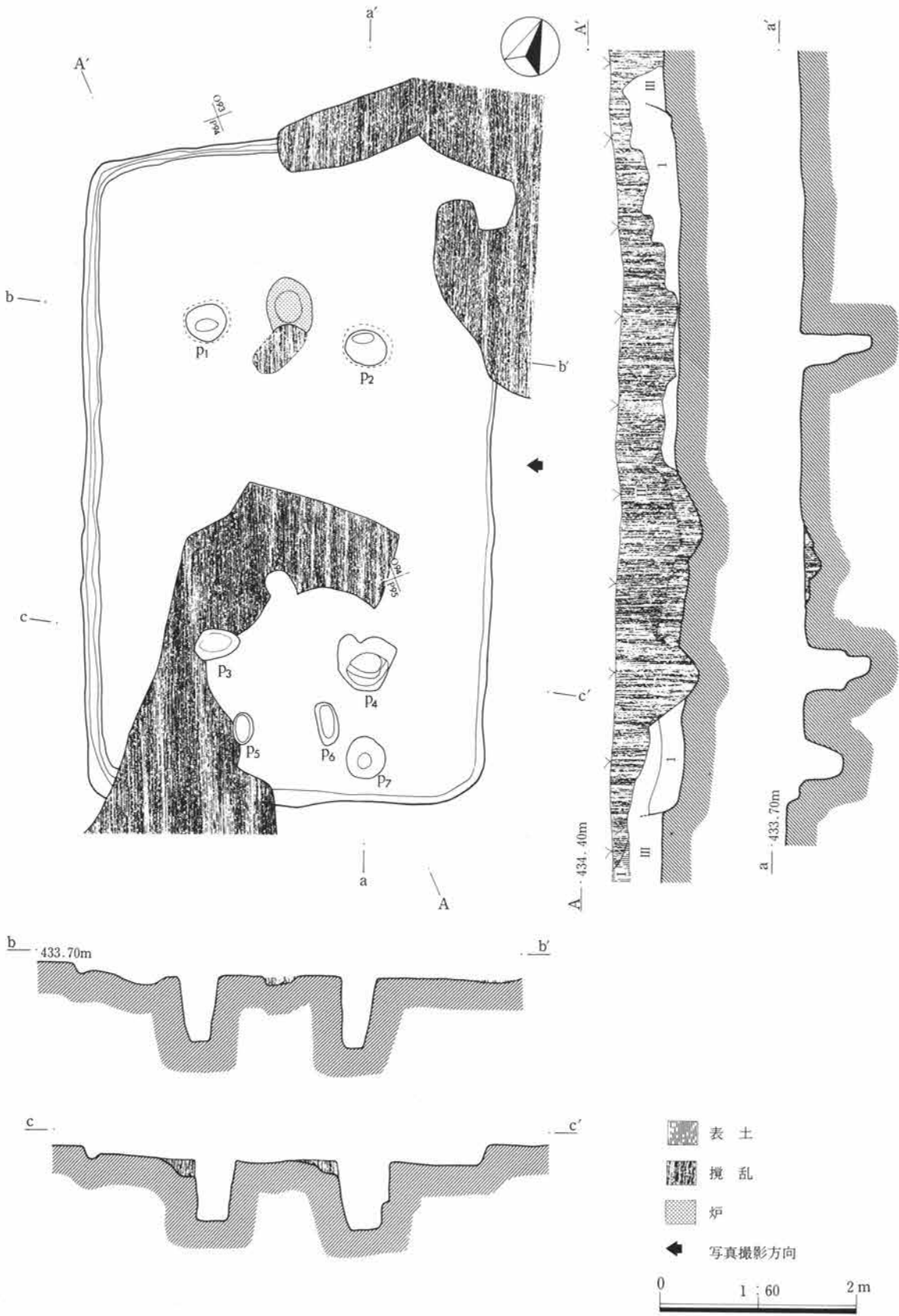
Y-4号住居跡ピット計測表

Y-4号住居跡遺物観察表

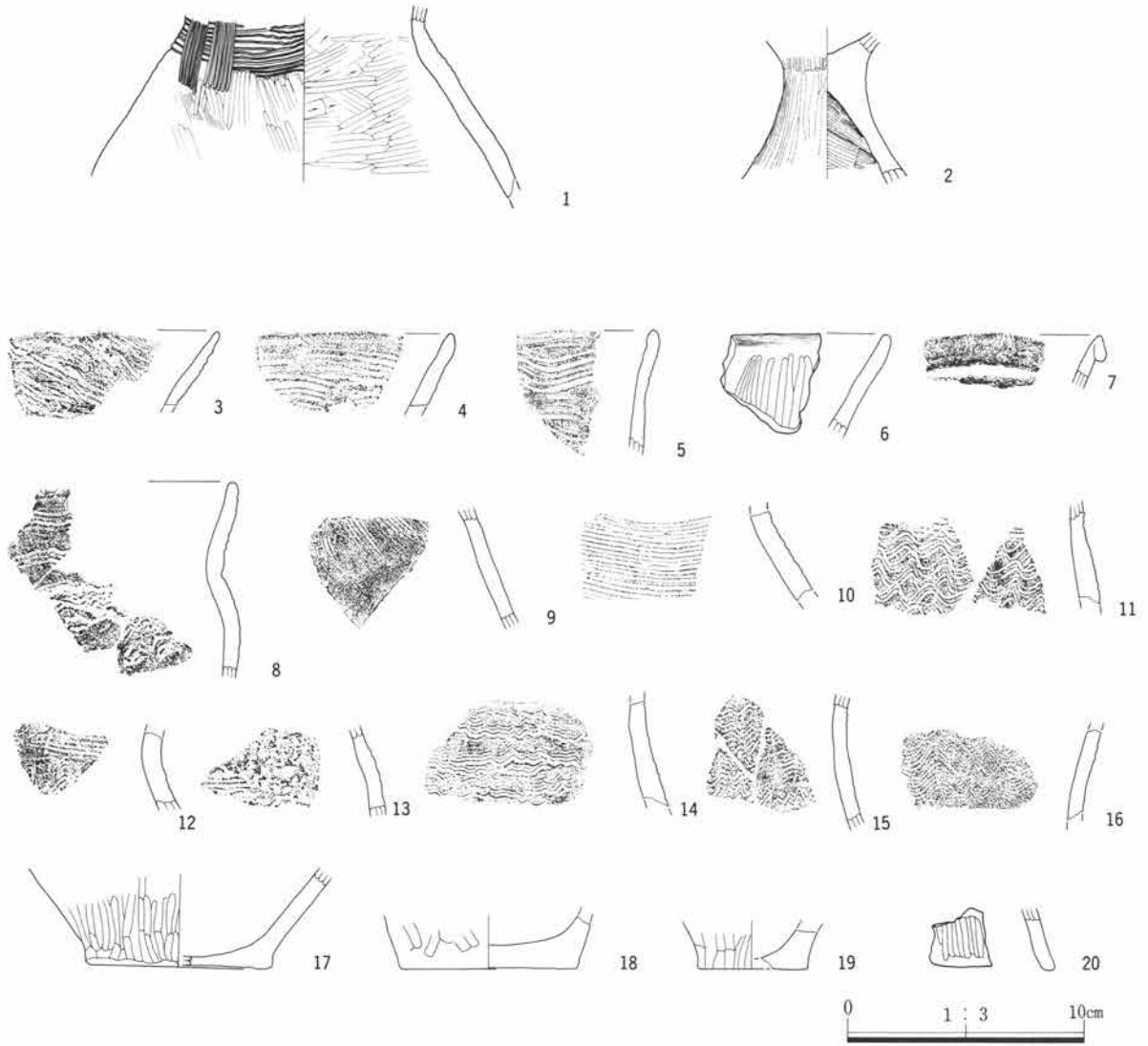
[法量：①口径②頸部径③胴部径④底径⑤器高]

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
132-1	壺	②10.2	覆土 頸部~肩 部片	①砂粒子が混入する。 ②強く焼きしまる。 ③にぶい黄橙 10YR7/3	壺形土器の肩部から頸部にかけての破片である。外面は縦方向、内面は横方向に筥磨き痕がある。	頸部には櫛状工具により横線文施文後、縦方向にT字文状に2列の櫛描文を施文。1単位5条。





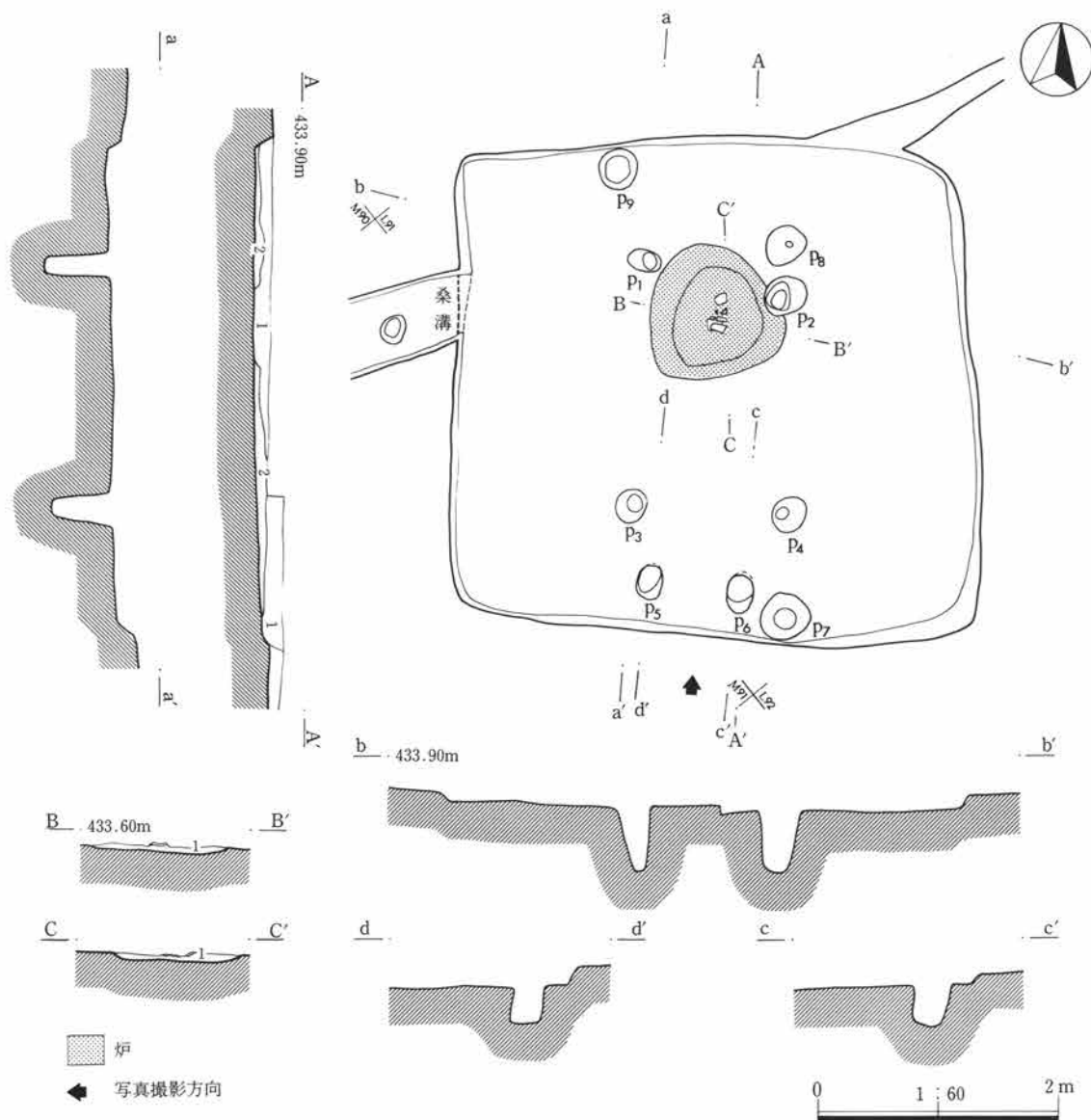
第131图 Y-4号住居跡



第132図 Y-4号住居跡出土土器

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
132-2	高杯	くびれ部 3.5	覆土 裾部の他 脚部完形	①白色粒子を多量に含む。②良好。 ③明赤褐2.5YR5/6	外面は縦方向に篋磨き。脚部内面は横方向に櫛状工具により器面調整を行なっている。	
132-3	甕		覆土 口縁小片	①白色粒子を僅かに含む。②良好。 ③にぶい橙5YR6/4	甕形土器と思われる。内面は横方向に撫で痕がある。	外面に櫛状工具による波状文のくずれた文様がある。
132-4	甕		覆土 口縁小片	①小礫が混入する。②良好。 ③にぶい橙5YR6/4	内面は横撫で後、篋磨きが行なわれている。	櫛状工具による横方向への施文が行なわれているが、波状文になるか横線文か不明である。
132-5	甕		覆土 口縁～頸部小片	①極細白色粒子混入。②良好。 ③にぶい赤褐2.5YR5/4	頸部は比較的上位にある。内面は横方向に篋磨きが行なわれている。	口縁部には5条1単位の太い櫛描波状文が施され、頸部に乱れた櫛描文がある。

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
132-6	甕?		覆土 口縁小片	①白色粒子を含む。 ②堅く焼かれている。 ③にぶい橙5YR7/4	内外面とも横撫でが行なわれ、外面はその後、縦方向に篋磨きが行なわれている。	
132-7	甕		覆土 口縁小片	①白色粒子を含む。 ②良い。 ③にぶい橙7.5YR7/4	折り返し口縁を呈す。内面は横方向に撫で痕がある。	
132-8	甕		覆土 口縁～胴 上部小片	①白色粒子を含む。 ②器面が荒れている。 ③にぶい橙5YR7/4	内面は横方向に篋磨きが行なわれている。 口縁部は荒い施文である。	口縁部は5条1単位と3条1単位の櫛描波状文。胴上位は5条1単位の櫛描波状文3段がある。
132-9	壺		覆土 肩部小片	①白色粒子を含む。 ②器面が荒れている。 ③にぶい橙7.5YR7/4	外面は縦方向、内面は横方向に篋磨が行なわれている。	内面は吸炭し、内黒状を呈す。外面肩部上位には斜方向の櫛目がみられる。
132-10	壺		覆土 頸部小片	①小礫を混入する。 ②良い。 ③にぶい橙7.5YR6/4	内面は横方向に器面調整が行なわれている。頸部は僅かに外反をはじめる。	櫛状工具により横線文が施文されている。
132-11	甕		覆土 胴～頸部 小片	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③灰褐5YR5/2	胴上半部から頸部にかけての破片である。内面は横方向に器面調整が行なわれている。	頸部は櫛描横線文か簾状文が施文され、胴上位は櫛描波状文が3段連続で施文されている。
132-12	甕		覆土 頸部小片	①白色粒子を含む。 ②良い。 ③にぶい褐7.5YR6/3	頸部付近の破片である。内面の一部に横方向の篋磨き痕がある。	頸部には簾状文か櫛描横線文が施文され、直下にこの文様を切って櫛描波状文が施文。
132-13	小型 甕		覆土 肩部小片	①夾雑鉱物を含む。 ②外面は荒れている。 ③にぶい赤褐2.5YR5/4	内面は横方向に撫でられた様相がうかがえる。	肩部に右まわりの簾状文が施文されている。
132-14	甕		覆土 頸部小片	①白色粒子を含む。 ②良い。 ③にぶい褐7.5YR6/3	頸部付近の破片と思われる。内面は横方向に整形されている。	8条1単位と思われる櫛状工具により波状文が施文されている。
132-15	甕		覆土 頸部小片	①白色粒子を含む。 ②外面は荒れている。 ③にぶい橙7.5YR7/3	内面は横方向に器面調整され、僅かに光沢をもつ。	外面頸部付近に櫛描波状文が数段施文されている。
132-16	甕		覆土 頸部小片	①白色鉱物、雲母を含む。②外面は荒れている。③にぶい黄橙10YR7/4	内面は横方向に撫でられている。	櫛描波状文が切り合いながら4段確認できる。
132-17		④ 7.8	覆土 胴下部～ 底部 $\frac{1}{2}$	①白色粒子を含む。 ②内外面とも荒れている。 ③橙7.5YR7/6	外面は縦方向に篋磨きが行なわれている。	
132-18		④ 7.4	覆土 底部 $\frac{1}{2}$	①小礫が混入する。 ②外面が荒れている。 ③浅黄橙10YR8/3	内面底部は篋磨きにより光沢をもつ。	
132-19		④ 4.6	覆土 底部 $\frac{1}{2}$	①白色粒子を多量に含む。②器面が荒れている。 ③黄灰2.5YR5/1	外面は底部付近に縦方向の器面整形痕がある。	
132-20	台付 甕		覆土 脚部小片	①夾雑鉱物を含む。 ②器面が荒れている。 ③浅黄橙10YR8/3	脚部底面は平たい。外面は縦方向に篋磨き、内面は横方向の整形痕がある。	



第133図 Y-5号住居跡

Y-5号住居跡 (第133・134図、PL.18)

**位置** L-91・92、M-91グリッドにかけて検出された。西側にJ-6号住居跡・Y-2号住居跡が存在する。また67・68号土坑(風倒木)と重複しているが、当住居跡が新しい。

**経過** 7月下旬から調査にはいったが、8月1日の台風によって冠水状態になったために一時調査を中断。5日から調査を再開し、各種図面の作成・写真撮影等を行い12日に終了した。

**覆土** 暗褐色土層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

第1層 黒褐色土層 やや粘性がある。1~2mmの白色粒子を含む。

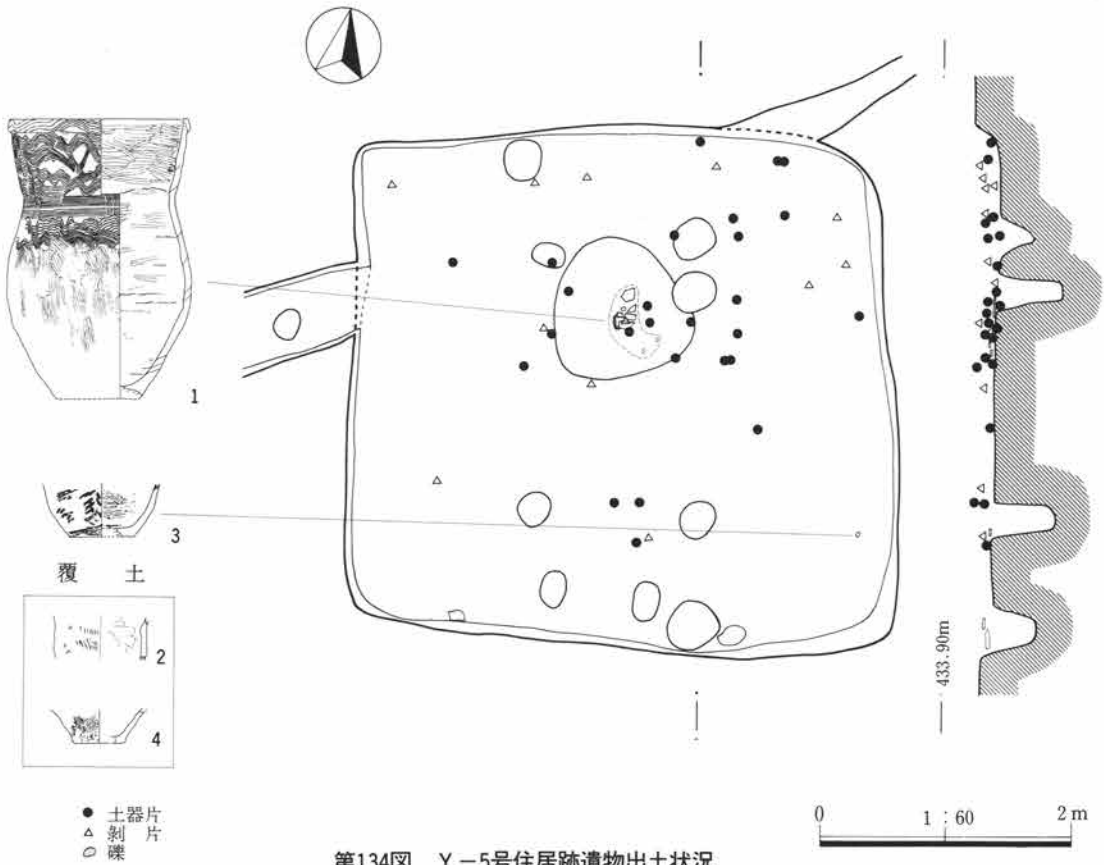
第2層 暗褐色土層 わずかに粘性がある。

**形状** 長辺4.38m、短辺4.17mの方形を呈する。面積は約16.3m<sup>2</sup>である。

**壁高** 住居跡確認面より約4~16cmで床面に達する。また北壁・西壁の一部を桑溝によって壊されている。

**床面** ほぼ平坦である。

**周溝** 検出できなかった。



第134図 Y-5号住居跡遺物出土状況

**柱穴** 総計9個のピットが検出された。このうちP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は主柱穴になる。P<sub>1</sub>の深さ54cm、P<sub>2</sub>深さ52cm、P<sub>3</sub>深さ50cm、P<sub>4</sub>深さ50cmであり、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間距離112cm、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間距離124cm、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>間距離200cm、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>間距離180cmを測る。P<sub>5</sub>~P<sub>7</sub>は出入口部施設になり、P<sub>5</sub>深さ30cm、P<sub>6</sub>深さ34cmでその間隔は75cmを測る。いずれも壁寄りに傾いている。P<sub>7</sub>は楕円形を呈し、深さ34cmを測る。P<sub>8</sub>は深さ26cm、P<sub>9</sub>は深さ18cmである。他のピットにくらべていずれも浅い。

**炉** 床面を掘り窪めた地床炉である。長径114cm、短径107cm、深さ7cmの不正形を呈し、主柱穴P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の中間やや南寄りに位置しているが、焼土がP<sub>2</sub>に接している。面積は約1.03㎡である。弥生時代の他の住居跡の炉に較べて規模において著しい相違が認められるが、さらに住居の規模に対して炉の占める割合が大きいことも大きな特徴となっている。覆土は次のとおりである。

第1層 黒褐色土層 焼土・炭化物がわずかに含まれる。

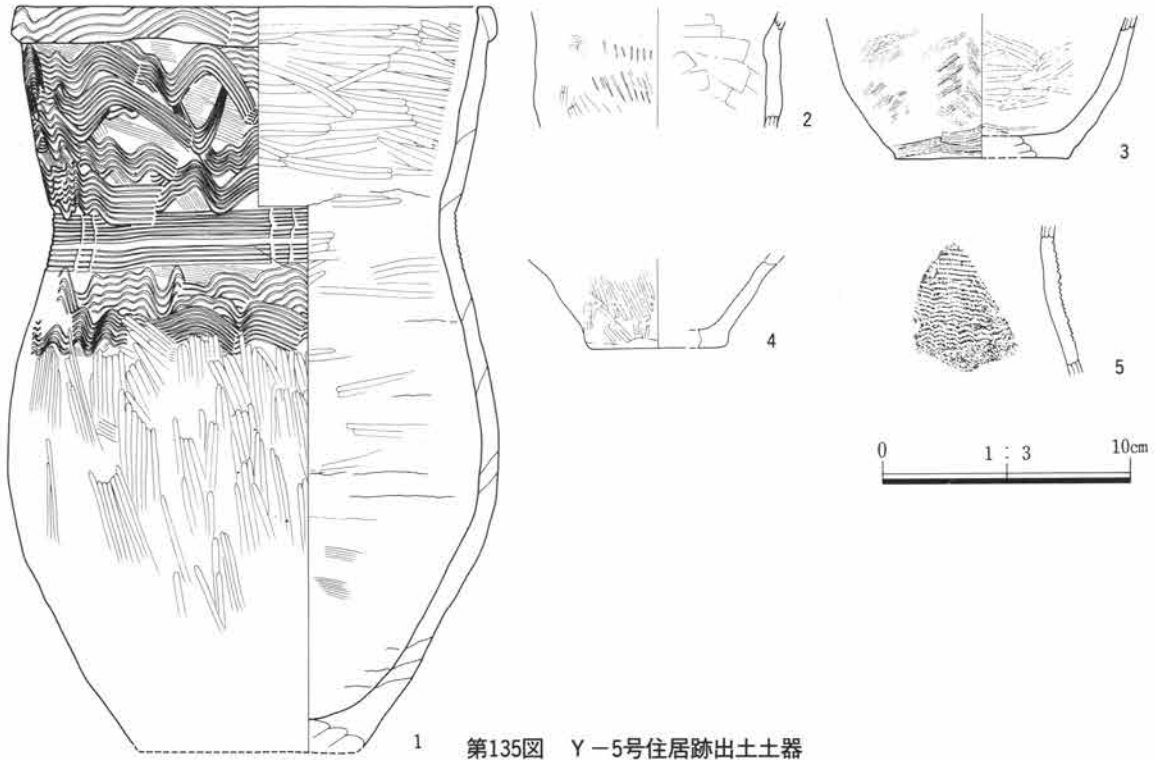
**遺物出土状況** 覆土・床面上からの遺物の出土はさほど多くなかったが、住居跡北東床面直上にややまとまって出土している(第134図)。

**出土遺物** (第135図、PL.60)

当住居跡から出土した遺物のうち実測した土器の内訳は甕

No.	上 長径×短径(cm)		深さ(cm)	備考
	下 長径×短径(cm)			
1	28×18cm	12×12cm	54cm	主柱穴
2	36×30cm	24×18cm	52cm	"
3	28×26cm	14×12cm	50cm	"
4	28×28cm	11×9cm	50cm	"
5	30×21cm	26×15cm	30cm	出入口部
6	30×22cm	25×21cm	34cm	"
7	42×38cm	18×18cm	34cm	"
8	34×30cm	6×6cm	26cm	
9	34×31cm	22×20cm	18cm	

Y-5号住居跡ピット計測表



第135図 Y-5号住居跡出土土器

1点、小型甕1点、底部2点である。この他に口縁部片1点、頸部片2点、胴部片12点が出土している。このうち頸部片1点を拓本で図示した。また覆土には縄文時代前期土器片25点が混入していた。

時期 出土遺物から判断すると、当住居跡は弥生時代後期樽式期に相当する。

Y-5号住居跡遺物観察表

〔法量：①口径②頸部径③胴部径④底径⑤器高〕

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様(その他)
135-1	甕	①19.0 ②16.4 ③19.7 ④約 8.8 ⑤約28.4	床直 口縁～胴部 底部欠損	①白色粒子を含む。 ②強く焼きしまる。 ③にぶい橙7.5YR6/6	折り返し口縁である。頸部は僅かにくびれる。内面には輪積痕が残る。外面頸部は櫛状工具による器面調整、胴下半部は文様施文後、縦方向に篋磨きが行なわれている。	頸部には2段の2連止め簾状文が施文されている。この簾状文を切って櫛描波状文が頸部4段、肩部2段、口縁部1段が施文されている。簾状文は右まわりである。
135-2	小型甕		覆土 頸部小片	①白色粒子を含む。 ②強く焼きしまる。 ③にぶい橙7.5YR7/3	頸部付近の破片である。外面は縦方向に櫛状工具で器面調整後、篋磨き。内面は横方向に器面調整。	
135-3		⑤ 7.0	床直 胴部～底部 小片	①白色粒子を多く含む。 ②良好。 ③にぶい橙7.5YR6/4	内外面とも横方向に器面調整が行なわれている。	
135-4		⑤約 5.4	覆土 胴～底部 小片	①長石、石英粒を含む。 ②内面が荒れている。 ③にぶい橙7.5YR7/3	外面は縦方向に篋磨きが行なわれている。	
135-5	甕		床直 頸部小片	①白色粒子を含む。 ②器面が荒れている。 ③にぶい橙7.5YR7/3	頸部破片であり、外面は横方向に撫で痕がある。	右まわりの簾状文が頸部に施文されている。簾状文の下位に2段の櫛描波状文が施文される。

## Y-6号住居跡 (第136・137図、PL.18・19)

**位置** L-94・95、M-94・95グリッドにかけて検出された。東側に近接してJ-7号住居跡、西側にはY-7住居跡が存在する。

**経過** 8月上旬に調査を開始。セクション図・遺物出土状況図を作成したが、十二原II遺跡に調査の主力を移動したため、一時調査を中断した。10月中旬に入り調査を再開し、25日をもって終了した。

**覆土** 暗褐色土層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

第1層 黒色土層 ロームブロックを少量含む。

第2層 黄褐色土層 ロームブロックを含む。

第3層 黒褐色土層 やや固く締り、粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を含む。

**形状** 長辺4.53m、短辺3.5mの長方形を呈する。面積は約14.4㎡である。

**壁高** 住居跡確認面より約1~15cmで床面に達する。西壁ではわずかに立ちあがり確認されたにすぎない。

**床面** ほぼ平坦である。

**周溝** 検出できなかった。

**柱穴** 総計16個のピットが検出された。これらのピットを深さ・位置等から判断して、主柱穴・出入口部施設を特定した。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が主柱穴に、P<sub>5</sub>~P<sub>7</sub>が出入口部施設と考えられる。P<sub>1</sub>の深さ69cm、P<sub>2</sub>深さ54cm、P<sub>3</sub>深さ50cm、P<sub>4</sub>深さ58cmであり、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間距離112cm、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間距離112cm、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>間距離215cm、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>間距離215cmを測る。P<sub>5</sub>~P<sub>7</sub>は出入口部施設になり、P<sub>5</sub>深さ41cm、P<sub>6</sub>深さ44cmでその間隔は62cmを測る。いずれも壁寄りに傾いている。P<sub>7</sub>は不正形を呈し、深さ34cmを測る。他のピットは深さ9~30cm程であり、その平均は約17cmである。いずれも主柱穴・出入口部施設のピットよりも浅く、またその配置から当住居跡に直接伴うものではないと考えられる。

**炉** 焼土を伴う明確な炉は検出できなかったが、主柱穴の位置から類推すると、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の中間ややP<sub>2</sub>よりに位置するピットが炉跡に該当すると考えられる。床面を掘り窪めた地床炉の形態となる。長径40cm、短径34cm、深さ14cmの楕円形を呈する。覆土からは焼土・炭化物等は検出できなかった。

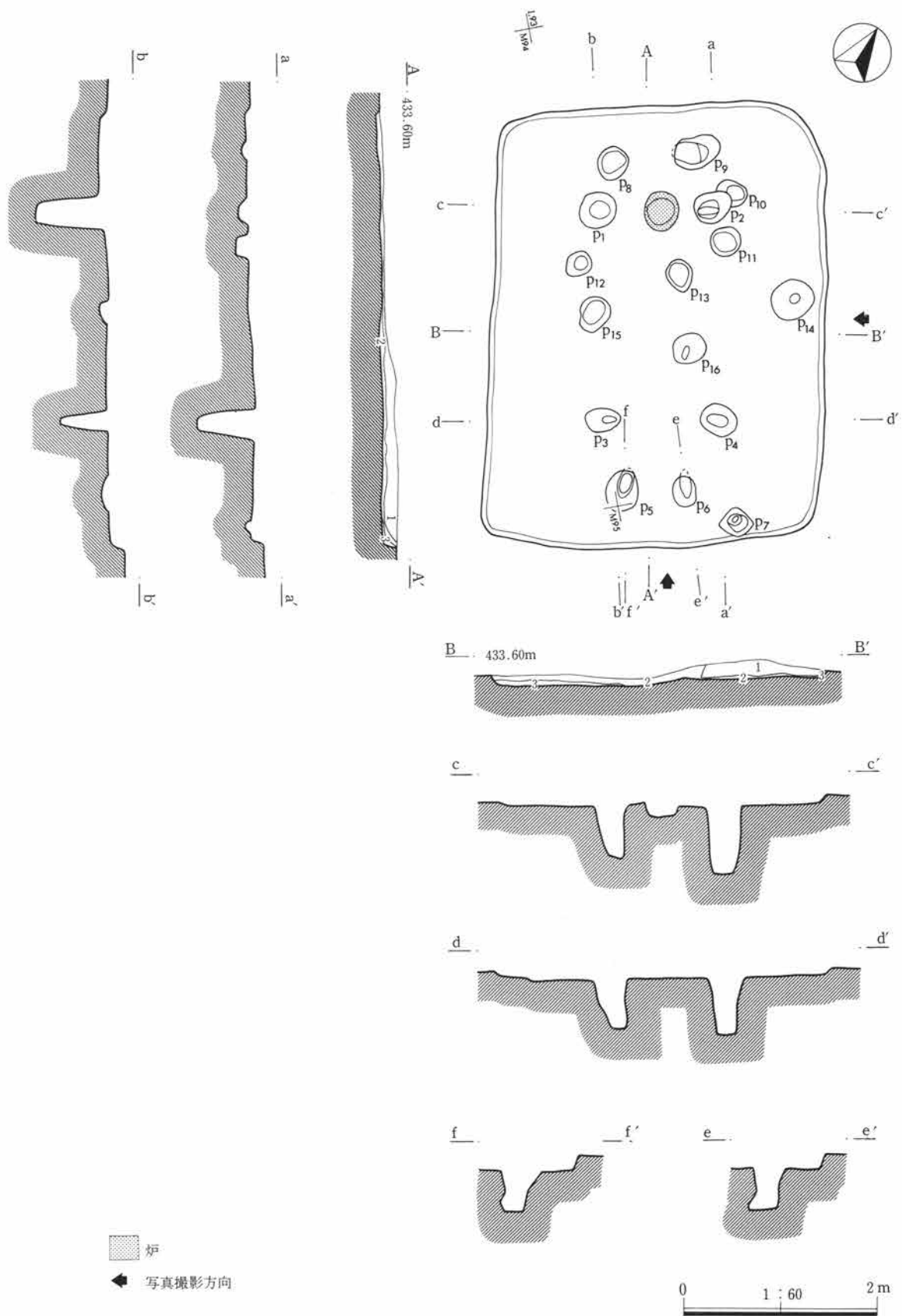
**遺物出土状況** 覆土・床面上から完形品を含む多数の遺物が出土した。その出土位置は住居跡南東コーナーに集中している(第137図)。

**出土遺物** (第138・139図、PL.60・61)

当住居跡から出土した遺物のうち実測した土器の内訳は、壺5点、甕3点、小型甕2点、台付甕4点、小型台付甕1点、底部1点、脚部3点などである。この他に口縁部片3点、頸部片6点、底部片1点、脚・台部片1点、胴部片127点が出土している。このうち口縁部片1点、頸部片6点を拓本で図示した。また覆土には縄文時代前期土器片14点、中期土器片47

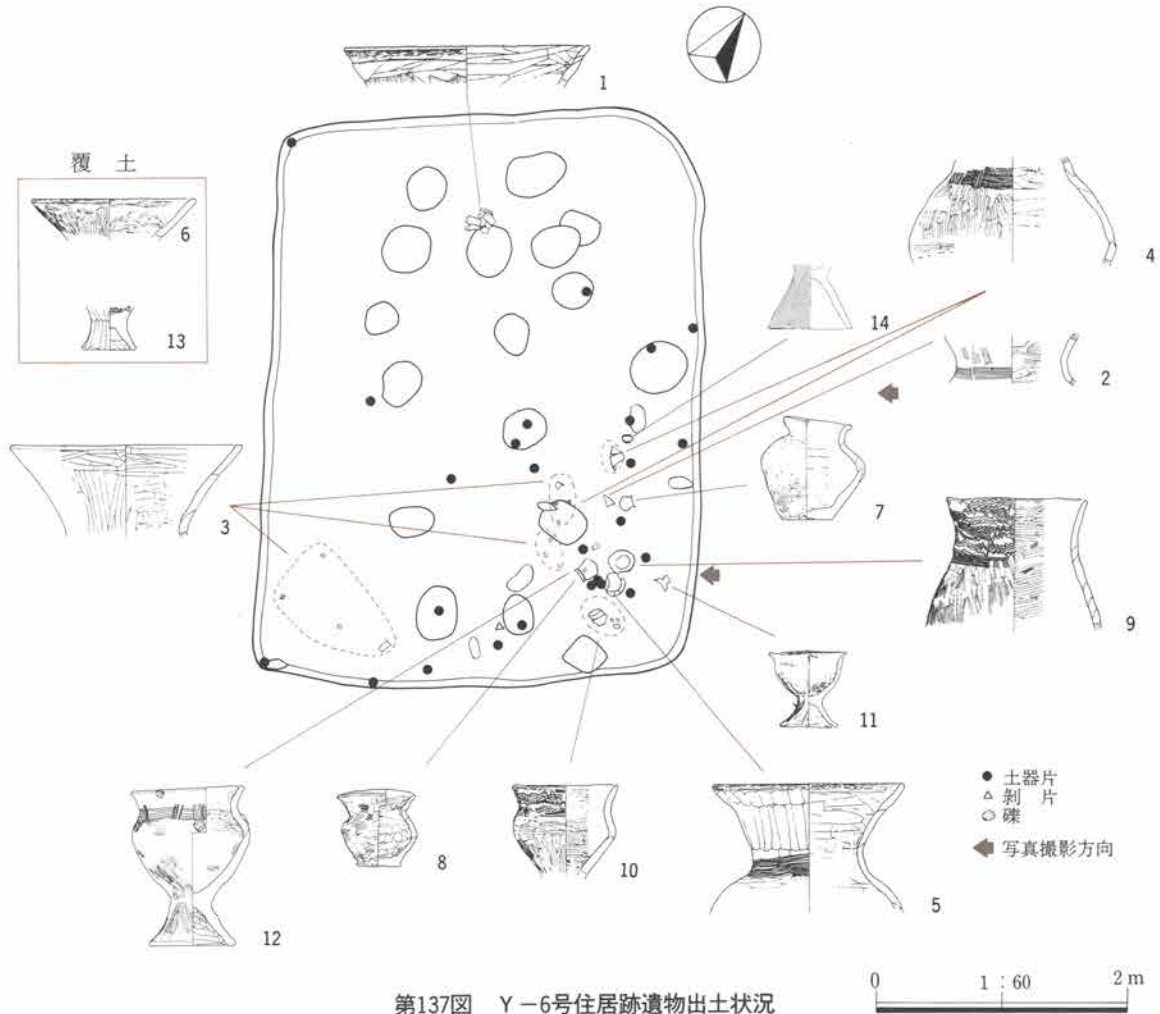
No.	上	深さ(cm)	備考
	長径×短径(cm)		
下			
長径×短径(cm)			
1	37×37cm 21×18cm	69cm	主柱穴
2	40×31cm 22×12cm	54cm	"
3	36×24cm 14×7cm	50cm	"
4	38×30cm 20×12cm	58cm	"
5	42×32cm 21×11cm	41cm	出入口部
6	32×23cm 30×11cm	44cm	"
7	28×26cm 13×10cm	34cm	"
8	34×32cm 26×20cm	30cm	
9	48×32cm 29×22cm	22cm	
10	32×24cm 17×15cm	15cm	
11	31×29cm 22×20cm	9cm	
12	27×24cm 14×13cm	20cm	
13	36×27cm 26×21cm	13cm	
14	46×38cm 12×8cm	16cm	
15	36×29cm 26×18cm	18cm	
16	33×30cm 14×6cm	14cm	

Y-6号住居跡ピット計測表



第136图 Y-6号住居跡





第137図 Y-6号住居跡遺物出土状況

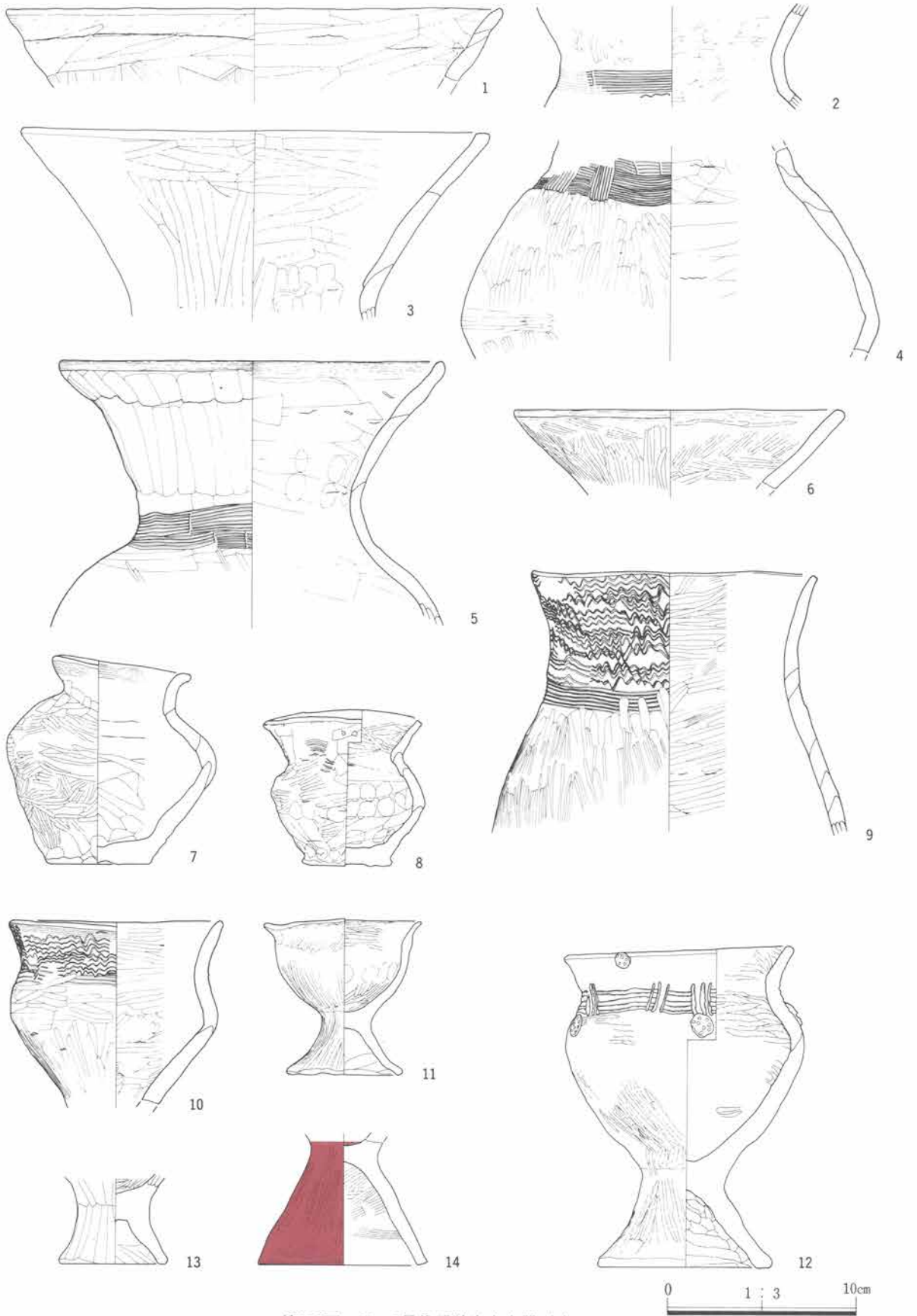
点が混入していた。

時期 出土遺物から判断すると、当住居跡は弥生時代後期樽式期に相当する。

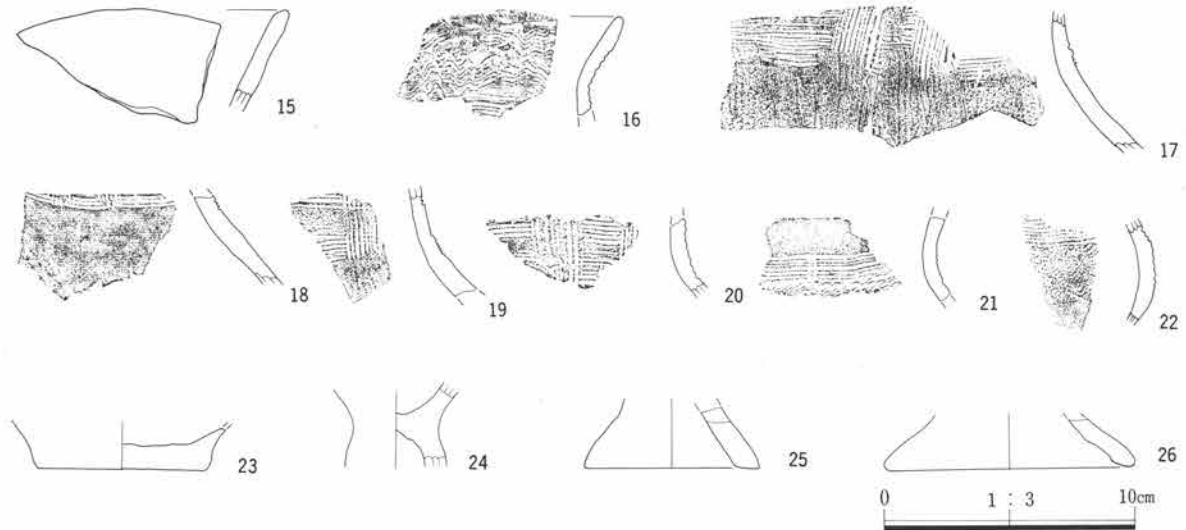
Y-6号住居跡遺物観察表

[法量：①口径②頸部径③胴部径④底径⑤器高]

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様(その他)
138-1	甕	①13.1	床直 口縁部片	①夾雑鉱物を含む。 ②良好。 ③にぶい黄橙10YR7/3	口縁部の破片である。口縁部は僅かに段をもつ。内外面とも斜方向に撫で、外面下部は縦方向に調整。	
138-2	甕	②11.8	床直 口縁部片	①白色粒子を含む。 ②内外面とも僅かに荒れる。 ③にぶい黄橙10YR7/2	外面は横撫で後、縦方向に笕磨き、内面は横方向に器面調整が行なわれている。	頸部には8条1単位の簾状文が右まわりで施文され、これに接して肩部に櫛描波状文が施文されている。
138-3	壺	①23.9 ②13.0	床直 口縁部片	①白色粒子と雲母を含む。②良好。 ③明褐灰7.5YR7/2	内外面の口縁部は横撫で、外面頸部は縦方向と一部横方向に櫛目痕のつく器面調整が行なわれている。	
138-4	壺	②約12.0 ③22.0	床直 頸部-胴部片	①夾雑鉱物を含む。 ②堅く焼きしめる。 ③明褐灰7.5YR7/2	内面は横方向に笕状工具と思われる調整痕がある。外面肩部は縦、胴最大幅部は横方向の笕磨きが行なわれている。	頸部には1単位7条の櫛条工具による簾状文と横線文が右まわりに施文され、間を縦方向に切る櫛描文がある。



第138図 Y-6号住居跡出土土器 (1)



第139図 Y-6号住居跡出土土器 (2)

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
138-5	壺	①20.4 ②11.9	床直 口縁～肩 部残存	①夾雑鉱物を含む。 ②強く焼きしまる。 ③にぶい橙7.5YR7/3	口縁部は大きく外反する。口縁部は内外面とも横撫で後、内面は横、外面は縦方向に櫛状工具により器面調整が行なわれている。	頸部には2段にわたり簾状文が施文されている。施文は粗く均一性は無い。
138-6	壺	①16.8	床直 口縁部	①白色粒子を含む。 ②外面が荒れている。 ③灰白10YR8/2	口縁部付近は内外面とも横撫でが行なわれ、内外面は縦、横に器面調整が行なわれている。	
138-7	小型 甕	①7.4 ②6.0 ③11.0 ④5.4 ⑤11.1	床直 口縁～胴 部	①長石、石英、雲母粒を含む。 ②焼きしまっている。 ③にぶい橙7.5YR7/4	歪んでいる。内面には輪積痕が明瞭にのこる。口縁部は内外面とも横撫で、他は多方向に筥磨きが行なわれている。	
138-8	小型 甕	①7.9 ②6.2 ③8.1 ④4.7 ⑤8.2	床直 完形	①白色粒子と雲母を含む。②良好。 ③明褐灰7.5YR7/2	頸部に櫛描波状文が一部に確認できるが横撫でにより消されている。胴部は斜方向に器面調整。	口縁部に2個の穴があるが、未貫通である。口縁部に刻み目がある。
138-9	甕	①14.8 ②13.5	床直 完形	①白色粒子を含む。 ②強く焼かれている。 ③にぶい黄橙10YR7/2	頸部は緩やかにくびれる。外面は縦方向に筥磨き、内面は横方向に磨かれ光沢がある。	頸部には6条1単位の櫛状工具による横線文、頸部から口縁部にかけて4段の櫛描波状文が施文されている。
138-10	台付 甕	①11.3 ②9.8 ③11.0	床直 甕部	①白色粒子を多量に含む。 ②強く焼かれている。 ③にぶい橙7.5YR7/3	外面口縁部は横撫で、胴最大幅部は横、下半部は縦、内面は主として横方向に磨きが行われている。	頸部には右まわりの簾状文が施文、頸部から口縁部にかけて2段の櫛描波状文が施文されている。
138-11	小型 台付 甕	①8.0くびれ2.6 裾6.2 ⑤8.2	床直 ほぼ完形	①夾雑鉱物を混入する。②良好。 ③にぶい橙7.5YR7/3	内外面とも口縁部に横撫で痕が一部残る。胴部、脚部は縦方向に筥磨き痕がある。	
138-12	台付 甕	①11.4②10.5 ③12.6くびれ 4.4 裾8.9 ⑤16.9	床直 ほぼ完形	①夾雑鉱物を含む。 ②外面胴中央部は荒れている。 ③にぶい橙7.5YR7/3	外面口縁部は横撫で、胴、脚部は縦方向の筥磨き、内面横方向の調整、脚内面は横撫でが行なわれている。	頸部は3条1単位の太い櫛状工具による横線文とT字文状の縦方向の櫛目が入る。口縁部と肩部にボタン状貼付文に刺突文が施文されている。

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
139-13	台付 甕	くびれ3.8 裾5.5	床直 脚部	①小礫が混入する。 ②良好。 ③にぶい橙7.5YR7/4	外面裾部は縦方向に笥削り後、く びれ部は縦方向に撫で、杯内面は 撫で、裾内面は撫でおろしの整形 が行なわれている。	
139-14	台付 甕	くびれ3.5 裾8.4	床直 脚部	①長石、石英、雲母を 含む。 ②良好。 ③赤色塗彩	外面は主として縦方向に磨きがあ り、裾部は横方向に一部調整され ている。脚内面は横方向に櫛状工 具により撫でられている。	外面及び、杯内面は赤色塗彩が 行なわれている。
139-15	壺		覆土 口縁小片	①夾雑鉱物を含む。 ②強く焼きしまる。 ③にぶい橙7.5YR7/3	内外面とも口縁部は横方向に撫で 痕が残る。	
139-16	甕		覆土 口縁～頸 部小片	①長石、石英粒を含む。 ②器面が荒れている。 ③にぶい黄橙10YR7/2	内面と外面口縁部付近は横撫でが 行なわれ、内面頸部付近は笥磨き 痕が僅かに残る。	頸部には簾状文が施文され、口 縁部には2段階に渡り櫛描波状 文が施文されている。
139-17	甕		覆土 頸部片	①白色鉱物を多量に含 む。②強く焼きしまっ ている。 ③にぶい黄橙10YR7/2	外面は文様を施文後、縦方向に木 口状工具にて器面調整、内面は横 方向に撫で調整が行なわれている。	頸部に櫛描横線文施文後、縦方 向にT字文状に櫛目文様が入 る。櫛状工具は1単位10条であ る。
139-18	壺		覆土 頸部片	①長石、石英粒を含む。 ②強く焼きしまる。 ③浅黄橙7.5YR8/3	外面は縦方向に整形後、肩部付近 は横方向に撫でが行なわれ、内面 は横方向の撫で痕が残る。	頸部には簾状文の施文後、T字 文状に櫛目文様が入る。櫛状工 具は1単位6条である。
139-19	壺		覆土 頸部片	①夾雑鉱物を含む。 ②強く焼きしまる。 ③浅黄橙10YR8/3	外面は縦方向の器面調整が行なわ れ、内面は横方向に笥状工具によ る押え痕と横撫で痕が残る。	頸部には2段の櫛描横線文を施 文後、T字文状に櫛目文様が入 る。
139-20	壺		覆土 頸部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③にぶい褐7.5YR6/3	内面は僅かに荒れているが横方向 の撫で痕が残る。	頸部には櫛描横線文を施文後、 縦方向にT字文状の櫛目文様が入 る。
139-21	甕		覆土 口縁部～ 頸部片	①砂質であり、白色粒 子を含む。②良好。 ③にぶい褐7.5YR6/3	外面は横方向に撫で、内面は口縁 部を横方向の撫で、頸部は工具に よる横撫で痕が残る。	頸部は2連止めの簾状文が右ま わりで施文された後に櫛描波状 文が肩部に施文されている。
139-22	小型 甕		覆土 口縁部～ 胴部片	①砂質である。 ②外面が荒れる。 ③灰褐7.5YR6/2	外面胴部最大部分は横方向の撫 で、内面は横方向の撫で痕が残り 光沢がある。	頸部には櫛描の簾状文が入り、 胴上半部分には櫛描波状文が施 文されている。
139-23		④ 6.8	覆土 底部片	①小礫を多量に含む。 ②外面が荒れる。 ③褐灰7.5YR5/1	外面は縦方向に器面調整。 底部がはがれた状況が観察でき る。	外面底部には白色の有機物が付 着している。
139-24	台付 甕	くびれ部径 3.5	覆土 脚部片	①白色粒子と雲母を含 む。②器面が荒れる。 ③明褐灰7.5YR7/2	外面は縦方向に器面調整、内面は 横方向に器面調整が行なわれてい る。甕部は丹念に調整される。	
139-25	台付 甕	脚部径7.2	覆土 脚部片	①白色粒子を含む。 ②器面は荒れる。 ③にぶい橙5YR7/3	底部は平坦である。外面は縦方向 に器面調整が行なわれている。	
139-26	台付 甕	脚部径10.2	覆土 脚部片	①夾雑鉱物を含む。 ②器面は僅かに荒れる。 ③にぶい橙5YR6/3	外面は粗く調整された後裾部分と 横方向に調整、内面は横方向に調 整。底部は平坦である。	

## Y-7号住居跡 (第140・141図、PL.20・21)

**位置** M-92・93、N-92・93グリッドにかけて検出された。Y-6号住居跡の西側に位置している。

**経過** 10月14日、住居跡プランを確認し調査を開始。18日から遺物の取りあげ、各種図面の作成・写真撮影を行った。26日には主柱穴を確認するために床面を全面5cm程掘り下げたが残念ながら検出することはできなかった。

**覆土** 暗褐色土層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

第1層 褐色土層 やわらかくて粘性がある。ローム粒子を含む。

第2層 黒色土層 やや固く締り、粘性がある。ロームブロック・ローム粒子を含む。

第3層 黒褐色土層 やや固く締り、粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を少量含む。

第4層 黒褐色土層 やや固く締り、粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を含む。

第5層 黄褐色土層 やや固く、粘性がある。ロームブロックを多量に含む。

**形状** 長辺4.42m、短辺3.65mの不正形を呈している。面積は約14.2㎡である。

**壁高** 住居跡確認面より約5～19cmで床面に達する。西壁の残存状況は他の壁よりもやや良好であった。

**周溝** 検出できなかった。

**柱穴** 総計11個のピットが検出された。しかし主柱穴を確認することはできなかったが、出入口部施設については判明している。P<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>11</sub>がこれにあたる。P<sub>8</sub>は深さ42cm、P<sub>9</sub>深さ37cmでありその間隔は82cmを測る。いずれも壁寄りに傾いている。P<sub>11</sub>は楕円形を呈し、深さ34cmを測る。他のピットのなかでは、深さ、位置から判断して主柱穴の一部に相当するものがP<sub>6</sub>であろうと考えられる。しかし多くのピットはいずれも浅く、またその位置から判断しても主柱穴に該当するものはないと思う。このため調査終了時に床面を全面5cm程掘り下げてその検出に努めたが、残念ながら検出することはできなかった。

**炉** 床面を掘り窪めた地床炉である。長径80cm、短径59cm、深さ10cmの楕円形を呈し、住居跡中央北壁寄りに位置している。また南端に磔2個を配置し、約0.4㎡の面積がある。覆土は次のとおりである。

第1層 暗褐色土層 一部焼土が認められる。

**遺物出土状況** 覆土・床面上から完形品を中心に多量の遺物が出土している。とりわけその出土位置はY-6号住居跡と同様に住居跡南東コーナーに集中する傾向にある。また西壁、炉の周辺にややまとまりをもって出土している。また壺内部から鉄鏃1点が検出された(第141図)。

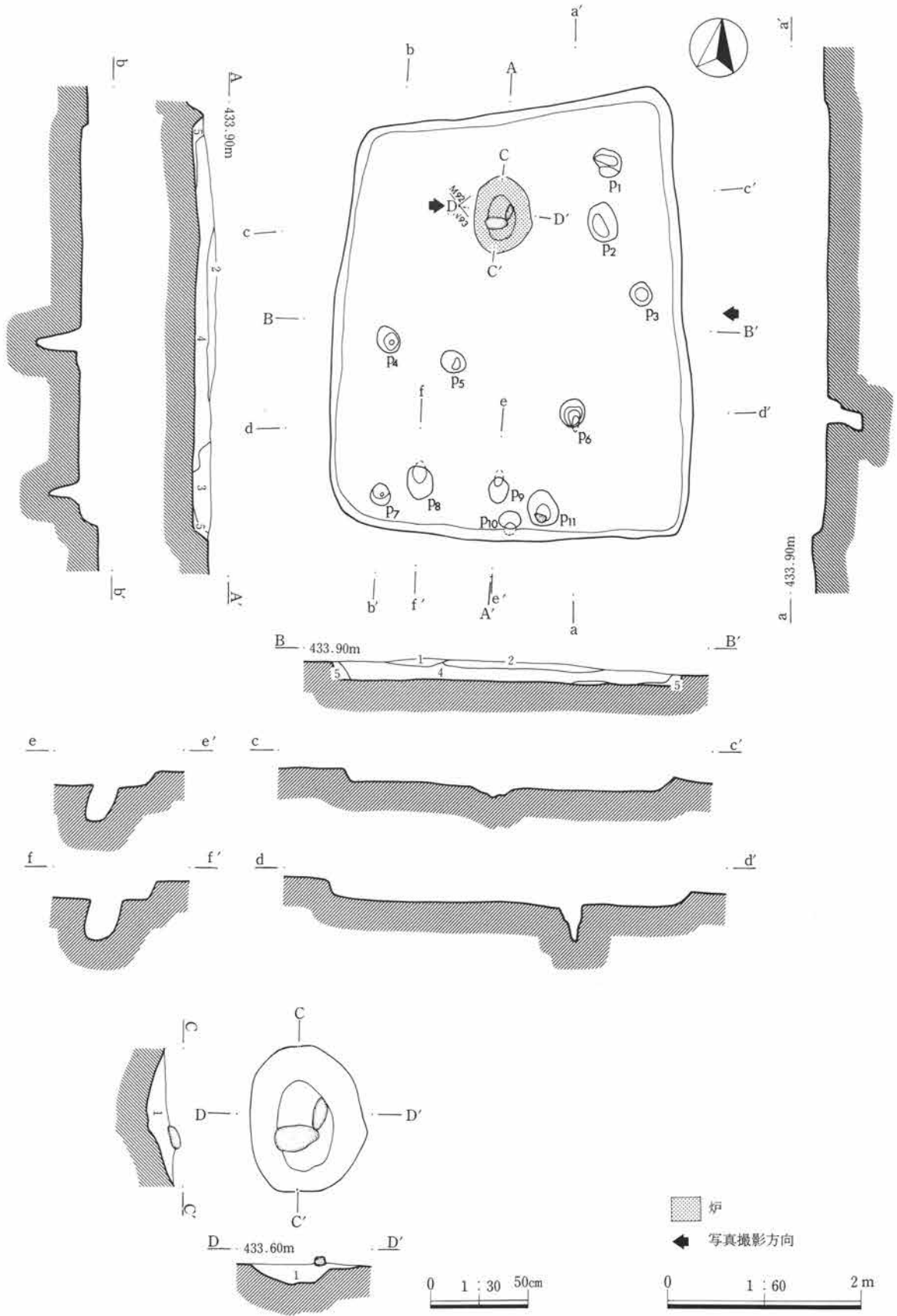
**出土遺物** (第142～144図、PL.61・62)

当住居跡から出土した遺物のうち実測した土器の内訳は、壺5点、甕1点、鉢3点、小型鉢1点、高杯2点、蓋1点、片口1点、底部2点である。この他に口縁部片14点、頸部片30点、底部片1点、脚・台部片1点、胴部片127点が出土している。このうち口縁部片5点、頸部・肩部片12点、胴部片1点を拓本で図示した。また覆土には縄文時代前期土器片14点、中期土器片47点が混入していた。

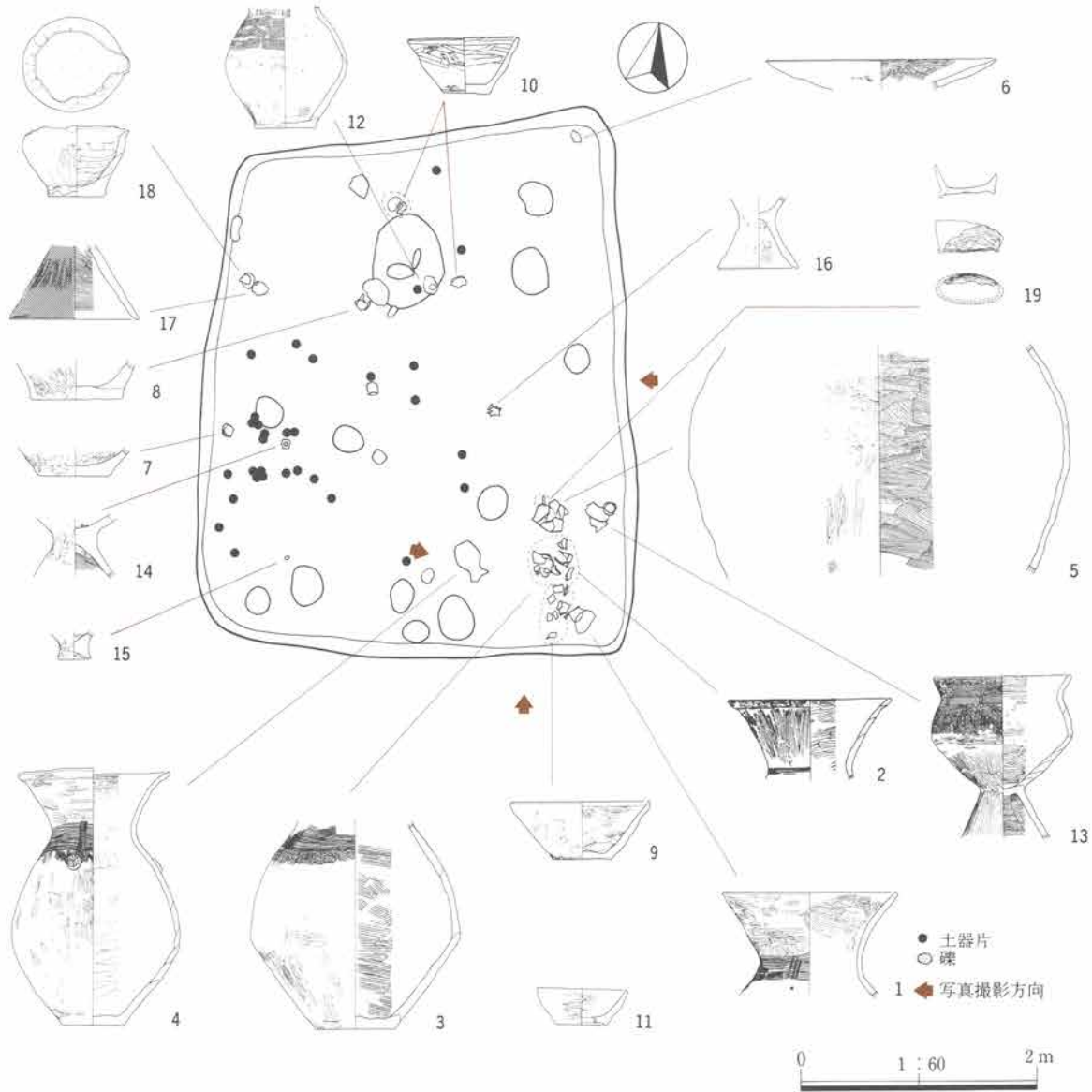
**時期** 出土遺物から判断すると、当住居跡は弥生時代後期樽式期に相当する。

No.	上	深さ (cm)	備考
	長径×短径 (cm)		
下			
長径×短径 (cm)			
1	29×27cm 23×9cm	11cm	
2	39×30cm 24×12cm	16cm	
3	23×22cm 14×12cm	16cm	
4	28×23cm 5×4cm	45cm	
5	26×22cm 12×6cm	16cm	
6	28×25cm 16×6cm	36cm	
7	22×20cm 16×16cm	30cm	
8	34×26cm 21×14cm	42cm	出入口部
9	28×20cm 17×10cm	37cm	"
10	22×18cm 13×12cm	58cm	
11	37×30cm 18×14cm	34cm	出入口部

Y-7号住居跡ピット計測表



第140図 Y-7号住居跡

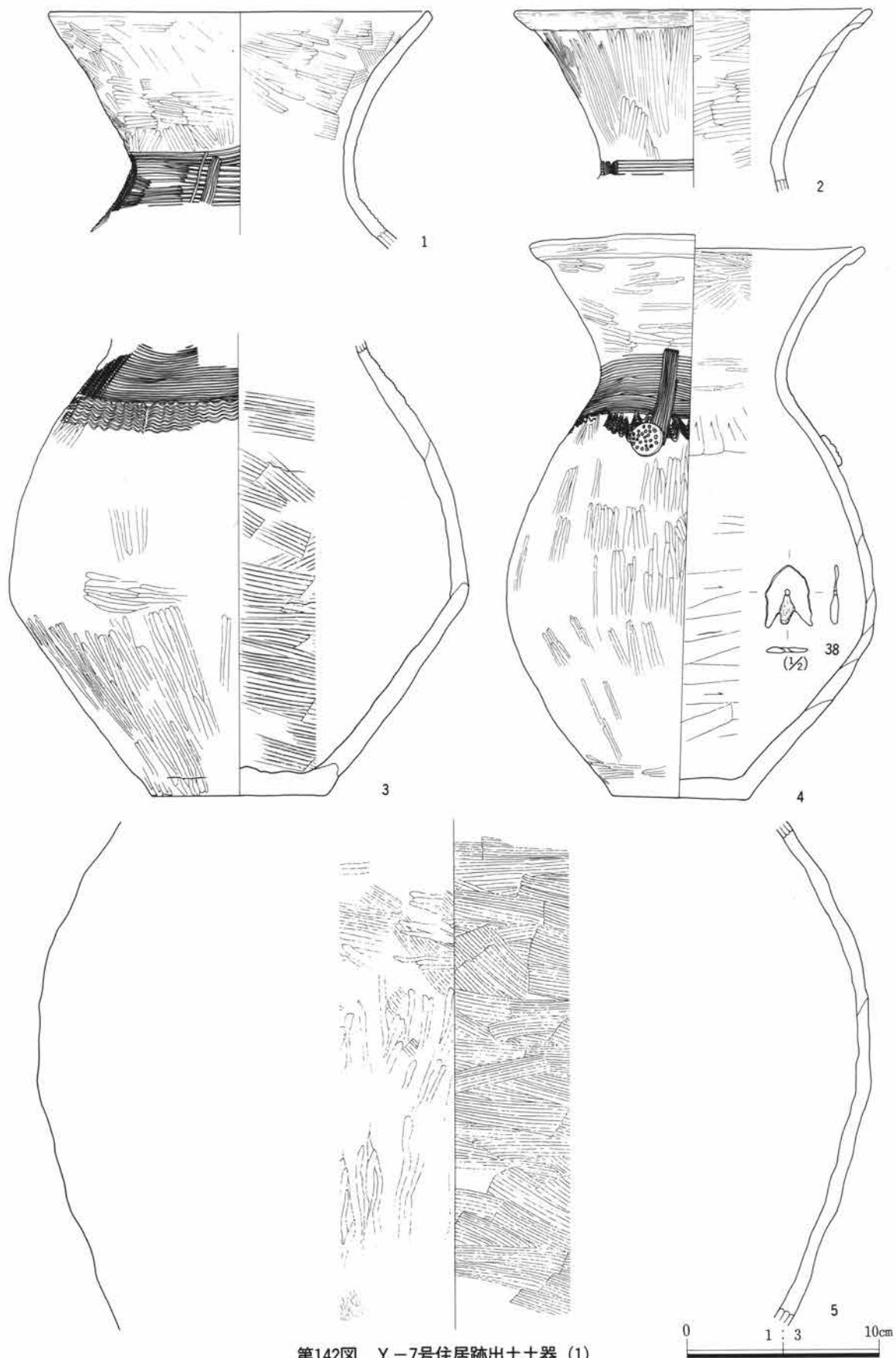


第141図 Y-7号住居跡遺物出土状況

Y-7号住居跡遺物観察表

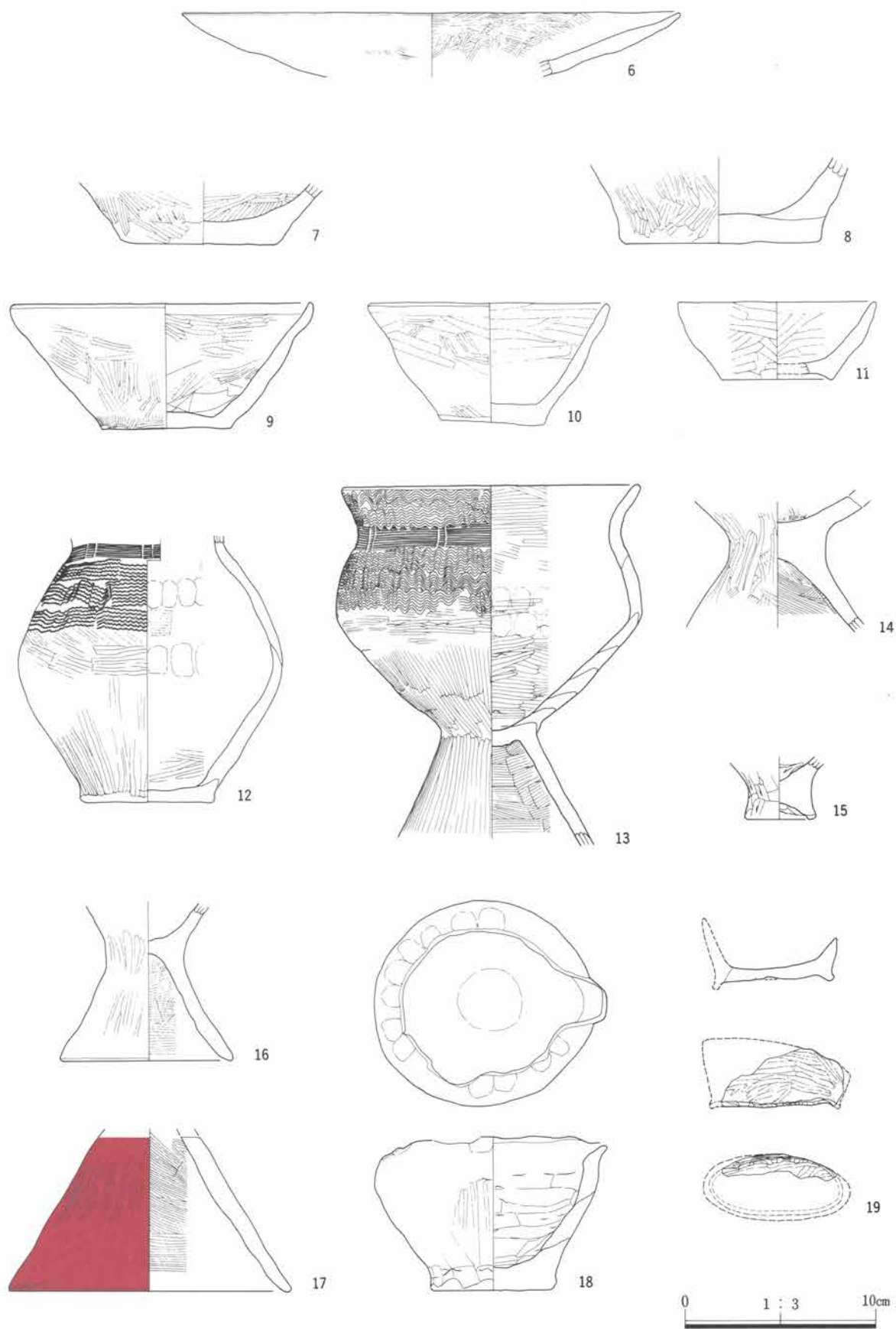
(法量：①口径②頸部径③胴部径④底径⑤器高)

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
142-1	壺	①20.0 ②11.6	床直 口縁～頸部 残存	①砂粒、白色粒子混入。 ②堅く焼きしまる。 ③灰褐色7.5YR6/2	口縁部は大きく外反する。内面は主として横方向へ櫛状工具により器面調整、外面は斜方向に筥削り、磨きが行なわれている。	頸部は櫛状工具により横線文が数段施文され、T字文状に7区画の罫目が入る。施文は粗い。
142-2	壺	①18.6 ② 9.6	床直 口縁～頸部 残存	①長石、雲母を含む。 ②堅く焼きしまり一部が火を受け荒れる。 ③にぶい橙5YR6/4	口縁部は大きく外反する。口縁端部付近は強い力を入れ横撫でを行っている。外面は縦、内面は横方向に器面調整が行なわれている。	頸部に櫛描横線文を施文後、櫛状工具によりT字文状に区画する。
142-3	壺	②約13.0 ③23.0 ④18.8	床直 肩部～底部 1/2	①砂質であり、長石、雲母を含む。②良好。 ③にぶい橙5YR7/4	内面は櫛状工具により横方向に器面調整、外面胴下半部は縦方向に磨きがある。	肩部には櫛状工具により横線文を施文後、すぐ下位に波状文、次にT字文状の区画文が施文。

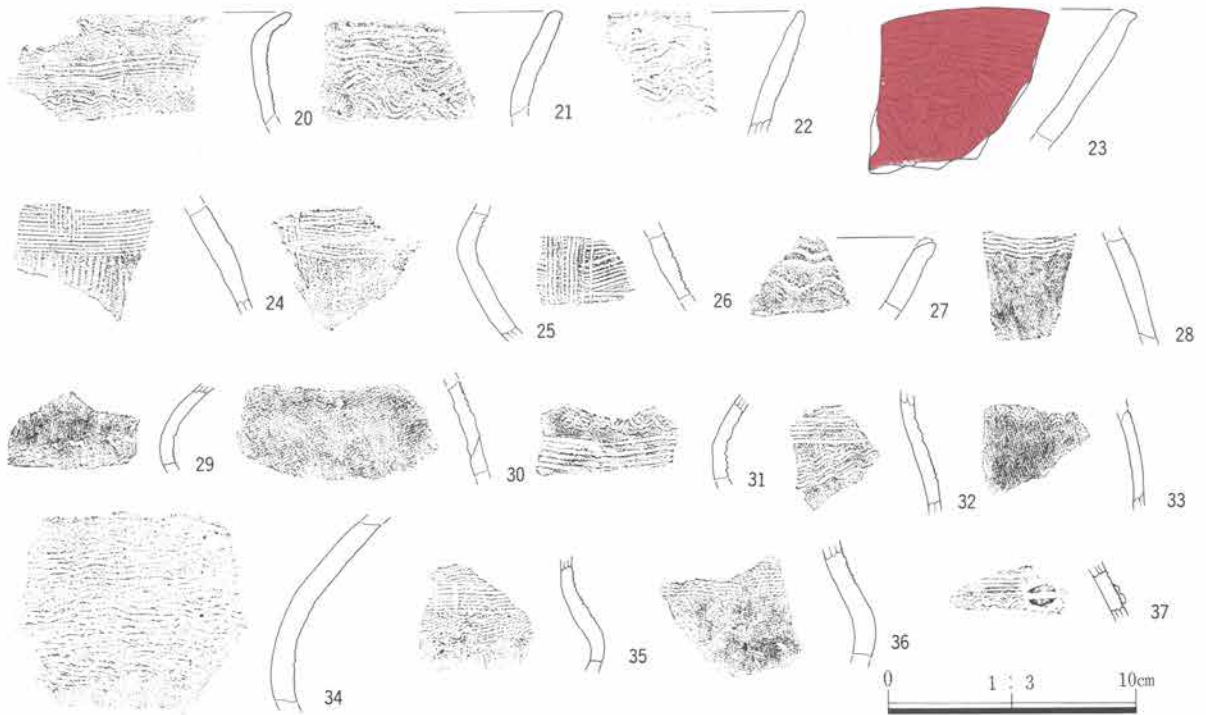


第142図 Y-7号住居跡出土土器 (1)





第143图 Y-7号住居跡出土土器 (2)



第144図 Y-7号住居跡出土土器(3)

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様(その他)
						横線文は3段階まで施文していることが読みとれる。
142-4	壺	①17.3 ② 9.6 ③19.2 ④ 7.0 ⑤29.1	床直 ほぼ完形	①砂粒を混入する。 ②強く焼きしまり光沢をもつ。 ③橙5YR6/6	折り返し口縁をもつ。外面口縁部から頸部にかけては横方向に篋磨きが行なわれ、内面胴部は篋状工具により深く粗い整形が行なわれている。	頸部は3段の櫛描横線文を施文後、肩部に波状文、次にT字文状に櫛描の区画文を4分割状に配し、この下端を円形刺突文を施こしたボタン状貼付文を入れる。内部から鉄鏝を検出した。
142-5	壺	③約43.2	床直 胴部片	①白色粒子を含む。 ②強く焼きしまる。 ③灰黄褐10YR6/2	大型の壺形土器の破片と考えられる。内外面とも櫛状工具により撫で整形後、篋磨きは表面のみ行なわれている。	
143-6		①26.2	床直 口縁部片	①白色鉱物を多量に含む。②強く焼きしまる。 ③灰黄褐10YR6/2	口縁部は僅かに歪む。内面は横方向に櫛状工具により器面調整が行なわれている。	
143-7		④ 8.3	床直 底部	①砂粒を含む。②良好。 ③浅黄橙10YR8/3	底部のみ残存する。外面は僅かに荒れている。	
143-8		④10.3	床直 胴下部～ 底部片	①白色粒子を多量に含む。②内面は僅かに荒れている。 ③にぶい橙7.5YR6/4	外面底部は平たく光沢をもつ。胴最下部は縦方向に篋磨きが行なわれている。	
143-9	鉢	①15.8 ④ 6.9 ⑤ 6.5	床直 ほぼ完形	①長石、石英、雲母を含む。②光沢をもち良好。 ③にぶい黄橙10YR7/2	外面は縦方向に櫛状工具により器面調整後、横撫で調整。内面も同様横撫で調整が行なわれている。	

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
143-10	鉢	①12.6 ④ 5.5 ⑤ 6.1	床直 口縁一部 欠損	①長石、石英粒を含む。 ②良好であり光沢をもつ。③にふい橙5YR7/4	内外面とも横方向に器面調整が行なわれている。外面底部は僅かに荒れている。	内面下位3分の1は器面が荒れている。使用時における器面の剥れと考えられる。
143-11	鉢	①約10.3 ④約 5.8 ⑤4.0	床直 口縁～底 部小片	①長石、石英粒を僅かに含む。 ②強く焼きしまる。 ③浅黄橙10YR8/3	内外面とも横方向に器面調整が行なわれている。底部は上げ底状を呈す。	
143-12	甕	② 8.2 ③13.9 ④ 7.1	床直 頸～胴部	①砂粒が混入する。 ②内面は僅かに荒れる。③淡橙5YR8/4	内外面とも櫛状工具による撫で整形が行なわれている。	頸部は右まわりの2連止め簾状文、胴上半は1単位6条の櫛描波状文が3段に渡り施文。
143-13	台付 甕	①15.4 ② 7.8 ③ 16.0 くびれ部5.0	床直 ほぼ完形	①長石、石英、雲母を含む。 ②強く焼きしまる。 ③橙5YR6/6	脚裾部を欠損する。内外面とも器面調整は良く、光沢をもつ。脚部内面は横方向に櫛状工具による調整痕が明瞭に残る。	頸部は右まわりに2連止め10ヶ所、単連止め1ヶ所で1周する。1単位9条の櫛状工具で口縁部2段、胴上半部3段の波状文。
143-14	台付 甕	くびれ部5.0	床直 裾部欠損	①白色鉱物を含む。 ②良好で光沢がある。 ③橙5YR6/6	外面は縦方向に筥磨き、内面杯部は横方向に研磨、脚部は櫛状工具により横方向に器面調整を行なう。	
143-15	蓋	摘部径3.7	床直 摘部	①白色鉱物と雲母を含む。②強く焼きしまる。 ③浅黄橙7.5YR8/4	外面は縦方向に筥撫でが行なわれている。	
143-16	高杯	くびれ部4.0 脚部径9.0	床直 脚部	①長石、石英粒を含む。 ②器面は荒れる。 ③橙5YR7/6	外面脚部は縦方向に筥磨き。脚内面は櫛状工具により横方向に器面調整が行なわれている。	
143-17	高杯	脚裾部径約 14.6	床直 脚部 $\frac{1}{2}$	①長石、石英粒を含む。 ②外面は荒れる。 ③外面は赤色塗彩	外面は縦方向に器面調整が行なわれている。内面は横方向に櫛状工具により撫で整形。	外面脚部は赤色塗彩が行なわれている。
143-18	片口	①10.9 ②11.7 ④6.4 ⑤ 8.0	床直 完形	①砂粒混入。 ②外面が僅かに荒れる。 ③浅黄橙10YR8/3	片口が付く軸が僅かに長い。口縁部は指押え、外面は縦方向に器面調整、内面は横方向に撫で痕がある。	
143-19	小型 鉢	⑤ 3.0	床直 口縁～底 部小片	①夾雑鉱物が混入。 ②良好。 ③浅黄橙10YR8/3	高台状の底部をもつ。	
144-20	甕		覆土 口縁～肩 部小片	①白色粒子を含む。 ②強く焼きしまる。 ③にふい褐7.5YR5/4	口縁部から肩部の破片である。内面は横方向に器面調整が行なわれている。	頸部は7条1単位の簾状文を右まわりに施文した後、口縁部と肩部に波状文を施文する。
144-21	甕		覆土 口縁小片	①夾雑鉱物を混入する。 ②強く焼きしまる。 ③にふい橙7.5YR7/4	内面は横方向に器面調整が細かく行なわれている。	櫛描波状文が乱れて施文されている。
144-22	甕		覆土 口縁小片	①白色粒子を含む。 ②強く焼きしまる。 ③灰褐7.5YR4/2	口縁部の破片である。口縁端部に内傾傾向になる。内面は横撫でが行なわれている。	口縁部には3段の櫛描波状文が施文されている。
144-23	高杯		覆土 口縁小片	①長石、石英粒を含む。 ②僅かに荒れている。 ③赤色塗彩	内面は横方向に櫛状工具により撫でが行なわれ、外面は多方向に磨き痕がある。	内外面とも赤色塗彩が行なわれている。

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
144-24	?		覆土 頸部小片	①砂粒子混入。 ②内面が荒れている。 ③にぶい橙7.5YR7/4	内面は横、外面は縦方向に櫛状工具による撫で痕がある。	櫛描横線文と縦方向にT字文状に櫛状工具により区画状の施文が行なわれている。
144-25	壺		覆土 頸部小片	①砂粒子混入。 ②僅かに器面が荒れる。 ③浅黄橙10YR8/4	頸部付近の破片である。内面は縦方向に櫛状工具により撫で痕がある。	頸部に櫛描横線文を施文し、縦方向にT字文状に櫛状工具により区画状の施文がなされる。
144-26	?		覆土 頸部小片	①白色粒子を僅かに含む。 ②堅く焼きしまる。 ③にぶい橙7.5YR6/4	頸部付近の破片と思われる。内面は横方向に器面調整が行なわれている。	櫛状工具による横線文を施文後、縦方向にT字文状に櫛状工具により区画状文を施文。
144-27	甕		覆土 口縁部片	①石英粒を含む。 ②内外面とも荒れている。 ③淡黄2.5Y8/3	口縁部の破片と思われる。	外面口縁部付近には2本1単位の波状沈線文、口縁部中に1本の波状文が入る。
144-28	壺		覆土 肩部小片	①長石、石英を含む。 ②僅かに磨耗をうける。 ③淡黄2.5Y8/3	肩部付近の破片と思われる。外面は縦、内面は横方向に器面調整が行なわれている。	櫛描波状文が施文されている。
144-29			覆土 頸部小片	①夾雑鉱物を含む。 ②良好。 ③にぶい橙7.5YR7/4	外面は縦、内面は横方向に撫でによる器面調整が行なわれている。	頸部には櫛描波状文が施文されている。
144-30	甕		覆土 頸部小片	①夾雑鉱物を含む。 ②良好。 ③にぶい黄橙10YR7/3	外面は斜方向に器面調整。内面は櫛状工具による横撫で整形が行なわれている。	簾状文を頸部付近に施文後、櫛描波状文が施文されている。
144-31	甕		覆土 頸部小片	①長石、石英粒を含む。 ②良好であり内面に光沢をもつ。 ③黒褐10YR3/1	頸部の破片である。内面は横方向に器面調整が行なわれている。	7条1単位の櫛状工具により簾状文が右まわりで施文された後、口縁、肩部に櫛描波状文が施文されている。
144-32	甕		覆土 頸部小片	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③にぶい褐7.5YR6/3	内面、外面とも横方向に器面調整が行なわれている。	頸部には櫛描横線文(簾状文?)が施文され、肩部には櫛描波状文が施文されている。
144-33	甕		覆土 胴部小片	①白色粒子を多量に含む。 ②堅く焼け外面は光沢をもつ。 ③灰褐5YR4/2	外面は縦方向に器面調整が行なわれ、内面は横撫で調整が行なわれている。	胴中央部と思われる部分に櫛描波状文が施文されている。
144-34	壺		覆土 口縁～頸部小片	①白色粒子を含む。 ②内外面とも荒れる。 ③にぶい橙7.5YR7/4	内面は横方向に撫でによる器面調整が行なわれている。	口縁部から頸部にかけて櫛描波状文が数段にわたり施文されている。
144-35	甕		覆土 口縁～胴部小片	①白色粒子を含む。 ②良好。外面は僅かに荒れる。 ③にぶい褐7.5YR6/3	外面胴下半部は縦方向、内面は横方向に器面調整が行なわれている。	頸部には櫛描波状文施文後、頸部に右まわりの簾状文を施文。胴上位に櫛描波状文を施文。内面に赤色顔料が付着している。
144-36	甕		覆土 頸部～胴部小片	①長石、石英粒を含む。 ②良好、光沢をもつ。 ③明赤褐5YR5/6	外面胴下半部は縦方向、内面は横方向に器面調整が行なわれている。	頸部には櫛描横線文(簾状文)が施文されている。
144-37	甕		覆土 頸部～肩部小片	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③灰褐5YR5/2	内面は横方向に器面調整が行なわれ、光沢がある。	頸部には右まわりの簾状文、肩部には櫛描波状文を施文、ボタン状貼付文がある。貼付文内の横線は櫛状工具の押捺。
142-38	鉄鏃	長さ(2.1cm) 厚さ(0.1cm) 孔径(0.15cm)	土器内 完形			7-4の土器内から検出された有孔夾根腸状形式の鉄鏃である。柄を付けた木質が一部に見られる。

## d. 土坑

## (1) 時期不明の土坑 (第145・146図)

## 46号土坑

L-80グリッドにおいて検出された。東側に47号土坑が存在する。上面は79×71cm、底面は68×58cm、深さ4～9cmの楕円形を呈する。底面は皿状を呈し、面積約2.9㎡である。覆土は2層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やや固く締り、粘性が少しある。ローム粒子を含む。

第2層 黄褐色土層 やや固く締り、粘性が少しある。ロームブロック・ローム粒子を含む。

覆土からは遺物の出土はなかった。

## 47号土坑

K-80・L-80グリッドにかけて検出された。西側に46号土坑が存在する。上面は116×92cm、底面は107×76cm、深さ2～8cmの長楕円形を呈する。底面はやや平坦であり、面積約0.6㎡である。覆土は2層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やや固く締り、粘性が少しある。ロームブロック・ローム粒子を含む。

第2層 黄褐色土層 やや固く締り、粘性がある。ロームブロック・ローム粒子主体の層。黒色土を少量含む。

覆土からは遺物の出土はなかった。

## 51号土坑

N-81・82、O-81・82グリッドにかけて検出された。南にほぼ接して52号土坑が存在する。上面は178×99cm、底面は162×86cm、深さ3～15cm、中央部では28cmを測り、長楕円形を呈する。底面は2段に掘り込まれており、面積は約1㎡である。覆土は3層に分かれた。

第1層 黒褐色土層 やや固く締り、粘性が少しある。ロームブロック・ローム粒子を含む。

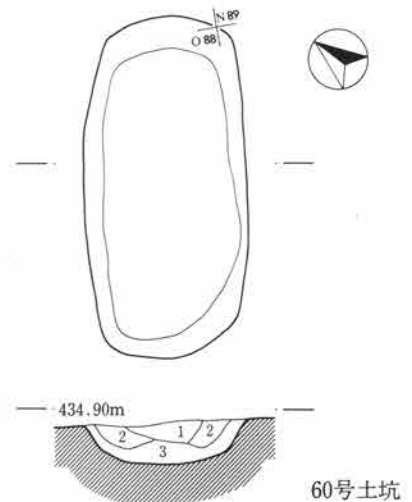
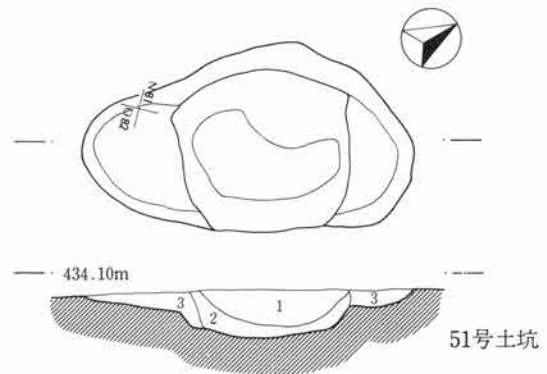
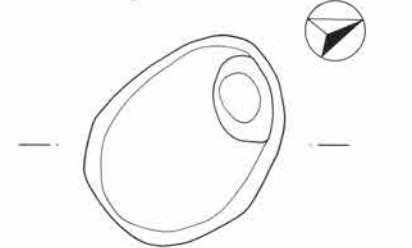
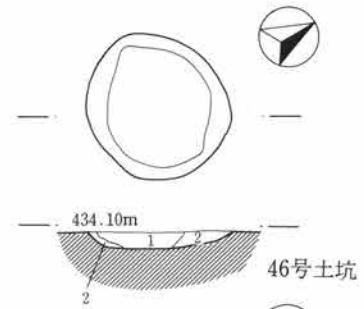
第2層 暗褐色土層 やや固く締り、粘性はほとんどない。ロームブロック・ローム粒子をやや多く含む。

第3層 茶褐色土層 やや固く締り、粘性はほとんどない。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

覆土からは遺物の出土はなかった。

## 60号土坑

N-88、O-88・89グリッドにかけて検出された。西に接して59号土坑が存在する。上面は180×87cm、底面は153



0 1 : 40 1m

第145図 時期不明の土坑 (46・47・51・60号)

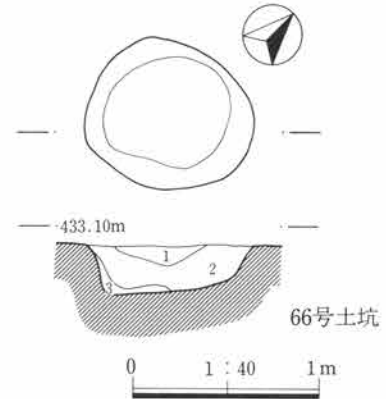
×70cm、深さ8～21cmの隅丸長方形を呈する。底面はやや皿状を呈し、面積約0.9㎡である。覆土は3層に分かれた。

第1層 黒褐色土層 やわらかくて粘性がある。ローム粒子をわずかに含む。

第2層 暗褐色土層 やわらかくて締り悪い。粘性はあまりない。ロームブロックと黒色土の混り層である。

第3層 暗褐色土層 やや固く締り、粘性がある。ロームブロック・ローム粒子を含む。

覆土からは砥石片1点、焼礫2点、フレイク6点が出土している。



第146図 時期不明の土坑

#### 66号土坑

L-102、M-102グリッドにかけて検出された。上面は90×78cm、底面は66×57cm、深さ20～29cmの楕円形を呈する。底面は坂状平坦で、面積約0.3㎡である。覆土は3層に分かれた。

第1層 黒褐色土層 わずかに粘性がある。 第2層 黒褐色土層 ロームブロック・白色粘土ブロックをわずかに混入している。 第3層 白色粘土層 白色粘土を主体とする層。

覆土からは遺物の出土はなかった。

#### (2)風倒木・木痕

##### 49号土坑

L-82グリッドにおいて検出された。南側に50号土坑が存在する。上面は190×121cm、底面は169×100cm、深さ8～34cmの楕円形を呈している。底面は凹凸が激しい。覆土は3層に分かれた。

第1層 黄褐色土層 やわらかくて粘性が少しある。ローム主体の層でわずかに黒色土を含んでいる。

第2層 黒色土層 やわらかくて粘性が非常にある。ローム粒子を多量に、ロームブロックを少量含む。

第3層 黄褐色土層 やや固く締り、粘性が少しある。ロームと黒色土からなる。

覆土からは縄文時代前期土器片8点、中期土器片1点が出土している。

##### 54号土坑

O-82・83、P-82・83グリッドにかけて検出された。南側に56号土坑が存在している。上面は236×197cm、底面は168×135cm、深さ16～59cmの不正形を呈している。底面の高低差が著しい。覆土は2層に分かれた。

第1層 黒褐色土層 やや固く締り、粘性が少しある。ロームブロック・ローム粒子を少量含む。

第2層 黄褐色土層 固く締り、粘性が少しある。ローム主体の層。わずかに黒色土を含む。

覆土からは遺物の出土はなかった。

##### 55号土坑

P-82・83グリッドにかけて検出された。東に56号土坑が存在する。上面は132×104cm、底面は59×21cm、深さ12～21cmの楕円形を呈している。底面中央に落ち込みがあり凹凸が激しい。覆土は4層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やや固く締り、粘性はあまりない。ローム粒子を少量含む。

第2層 黒褐色土層 やわらかくて粘性がある。大粒のロームブロックとローム粒子を含む。

第3層 茶褐色土層 やや固く締り、粘性が少しある。ローム粒子を多量に含む。

第4層 黄褐色土層 ロームブロックを多量に含み、わずかに黒色土を含む。

覆土からは遺物の出土はなかった。

## 57号土坑

P-83・84グリッドにかけてローム層直上で検出された。上面は102×66cm、底面は87×50cm、深さ9～20cmの楕円形を呈する。底面は凹凸が激しい。覆土は3層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 固く締め粘性はほとんどない。ロームブロック・粒子、赤色スコリア粒子を含む。

第2層 茶褐色土層 やや固く締め、粘性が少しある。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

第3層 黄褐色土層 やや固いが締め悪い。ロームブロックを多量に、黒色土をわずかに含む。

覆土からは縄文時代前期土器片2点、弥生土器片2点が出土している。

## 63号土坑

L-79グリッドにおいて検出された。北側に64号土坑が存在する。上面は105×96cm、底面は87×75cm、深さ14～20cmのほぼ円形を呈する。底面は皿状を呈し、中央西よりに深さ38cmの小ピットが存在する。覆土は3層に分かれた。

第1層 黒褐色土層 やわらかくて非常に粘性がある。ローム粒子・炭化物粒子を含む。

第2層 暗褐色土層 やや固く締め、粘性がある。ローム粒子を多量に含む。

第3層 黄褐色土層 やわらかくて締め悪い。ロームブロック・粒子を多量に含み、わずかに黒色土を含む。

覆土からは遺物の出土はなかった。

## 67号土坑

L-90・91グリッドにかけて検出された。Y-5号住居跡と重複しているが、当土坑の方が古い。上面は310×228cm、底面は209×172cm、深さ30～43cmの不正形を呈している。底面は凹凸が激しい。覆土は5層に分かれた。第3層が黒色土であるほかは、すべてローム主体の層である。第4層はローム主体の層に、粘土・黒色土の混入が認められ、第5層はローム主体の層に粘土が混入した層である。覆土の堆積状況は典型的な風倒木の土層を示している。覆土からは遺物の出土はなかった。

## 68号土坑

L-91・92、M-91・92グリッドにかけて検出された。Y-5号住居跡と重複しているが、当土坑の方が古い。上面は350×248cm、底面は298×180cm、深さ20～37cmの長楕円形を呈している。底面は比較的平坦である。覆土は7層に分かれた。第3・5・6・7層はローム主体の層であり、わずかに黒色土と粘土ブロックを混入している。第1・2層は黒褐色土層、第4層は暗褐色土層である。やはり典型的な風倒木の土層を示している。覆土からは遺物の出土はなかった。

## 69号土坑

L-93・94、M-93・94グリッドにかけて検出された。Y-6号住居跡と重複しているが、当土坑の方が古い。上面は662×508cm、底面は512×272cm、深さ44～72cmの楕円形を呈している。底面は皿状を呈する。覆土は8層に分かれた。第1・2・3・7の各層がローム主体の層である。また第4・8号はローム層下に堆積する凝灰質粘土層を主体とする層であり、第5・6層は黒色土層を基本とする層である。やはり典型的な風倒木の堆積状況を示している。覆土からは遺物の出土はなかった。

## 三後沢遺跡第2遺構群検出の土坑一覧表 (2)

## (1) 時期不明の土坑

No.	グリッド	上面 cm (長径×短径)	底面 cm (長径×短径)	上面 長径/短径	底面積(m <sup>2</sup> )	底面 長径/短径	深さ(cm)	備 考
46	L-80	(79×71)	(68×58)	1.11	2.9	1.17	4~9	
47	K-80 L-80	(116×92)	(107×76)	1.26	0.6	1.41	2~8	
51	N-81・82 O-81・82	(178×99)	(162×86)	1.80	1.0	1.88	3~15	
60	N-88 O-88・89	(180×87)	(153×70)	2.07	0.9	2.19	8~21	
66	L-102 M-102	(90×78)	(66×57)	1.15	0.3	1.16	20~29	

## (2) 風倒木・木痕

No.	グリッド	上面 cm (長径×短径)	底面 cm (長径×短径)	上面 長径/短径	底面積(m <sup>2</sup> )	底面 長径/短径	深さ(cm)	備 考
49	L-82	(190×121)	(169×100)	1.57	1.6	1.69	8~34	実測図未掲載
54	O-82・83 P-82・83	(236×197)	(168×135)	1.20	1.9	1.24	16~59	"
55	P-82・83	(132×104)	(59×21)	1.27	0.7	2.81	12~21	"
57	P-83・84	(102×66)	(87×50)	1.55	0.3	1.74	9~20	"
63	L-79	(105×96)	(87×75)	1.09	0.5	1.16	14~20	"
67	L-90・91	(310×228)	(209×172)	1.36	2.6	1.22	30~43	Y-5住と重複
68	L-91・92 M-91・92	(350×248)	(298×180)	1.41	4.3	1.66	20~37	Y-5住と重複
69	L-93・94 M-93・94	(662×508)	(512×272)	1.30	11.3	1.88	44~72	Y-6住と重複
70	K-96・97 L-96・97	(630×550)	(500×450)	1.15	18.5	1.11	20~27	実測図未掲載
71	K-97・98 L-97・98	(682×530)	(575×413)	1.29	17.5	1.40	13~26	"
72	P-83	56号土坑と重複しているために計測不可能						"
73	N-85・86 O-85・86	(340×280)	(300×210)	1.21	7.5	1.43		"



### 3章 十二原II遺跡



— 凡例補則 —

縄文土器と弥生土器の観察表項目の相違は、執筆者（観察者）の意図を尊重した結果である。

縄文土器の観察視点のなかで、焼成（遺存状況）の判定については、便宜的に非常に良・良・やや良・不良の4分類している。これは上條朝宏氏\*の分類に従っている。

非常に良→内・外面ともていねいに調整されており、光沢のある土器片。

良 → 次のやや良との中間的な土器で光沢のない土器片。

やや良→手で触れると細かい粘土粒子が指先につく土器片。

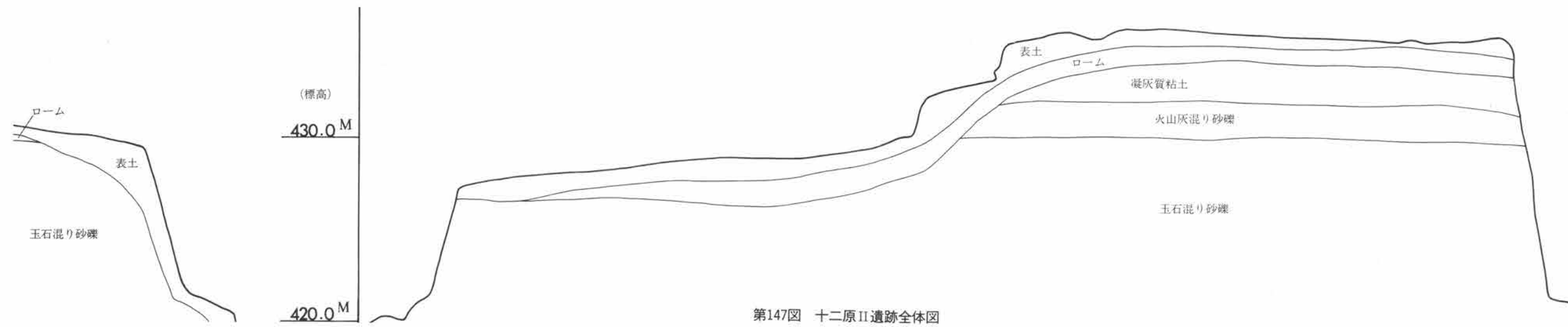
不良→注意して持たないと破損する土器片。

\* 上條朝宏「胎土分析Ⅰ」『縄文文化の研究 第5巻 縄文土器Ⅲ』1983

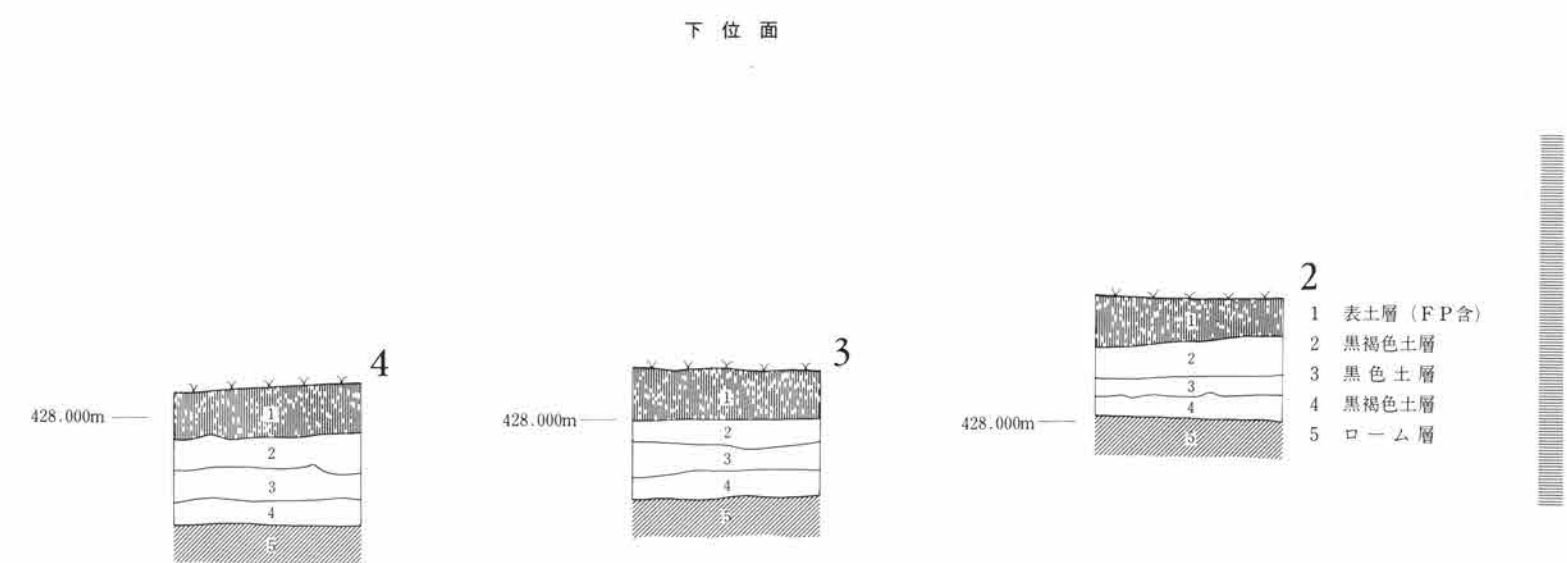
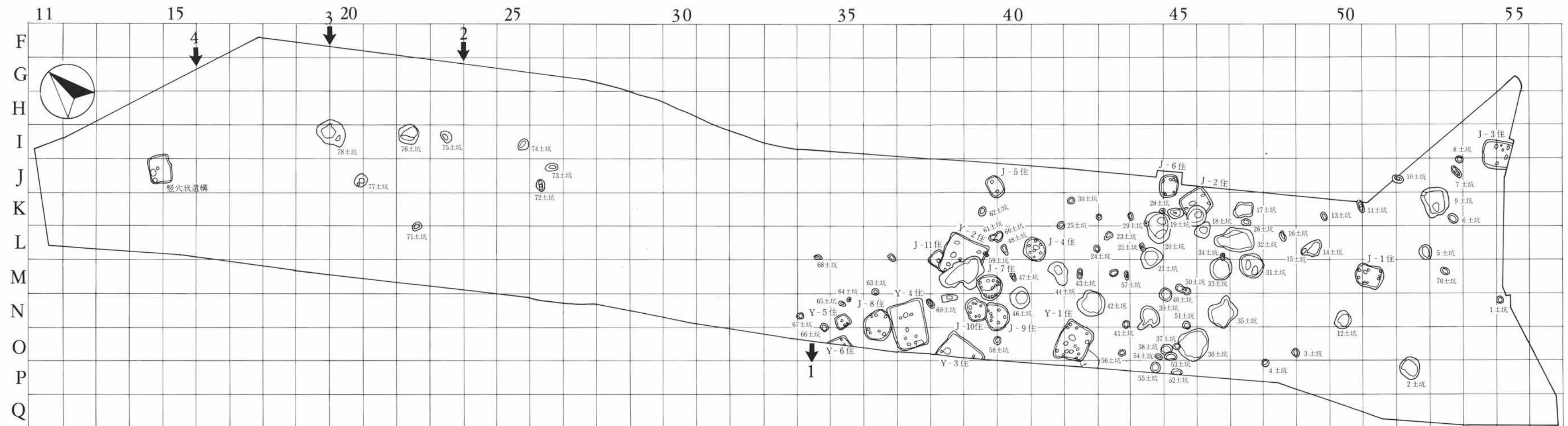
我国における考古学的航空写真の撮影は、今から61年前の大正14（1925）年にさかのぼる。この年の秋、朝鮮楽浪古墳群の一部が東京帝国大学文学部により調査された際、平壤航空隊第6連隊石川中尉が撮影を実施している。50mないし200mの低空から撮影したもので、いずれも斜写真であった。翌年には、千葉県姥山貝塚を東京帝国大学理学部人類学教室が発掘した際に、下志津飛行学校写真班（航空大尉 近藤時習）により、竪穴住居跡を中心とした垂直写真、附近地形の空中観察が行われている。

こうした実績を背景に昭和6（1931）年、森本六爾は『飛行機と考古学』を著し、考古学的調査における航空機の活用を考えている。『航空写真は単なる野外作業の「一代理者」たるのみならず、遺跡考古学にとっては、無二の「味方」であり、「協力者」であることを忘れてはならぬ。』（森本六爾『飛行機と考古学』）しかし当時の撮影は、航空隊の協力なしには行えず、また軍機上からも撮影が実施されることはほとんどなかった。航空写真の活用は戦後まで待たねばならなかった。

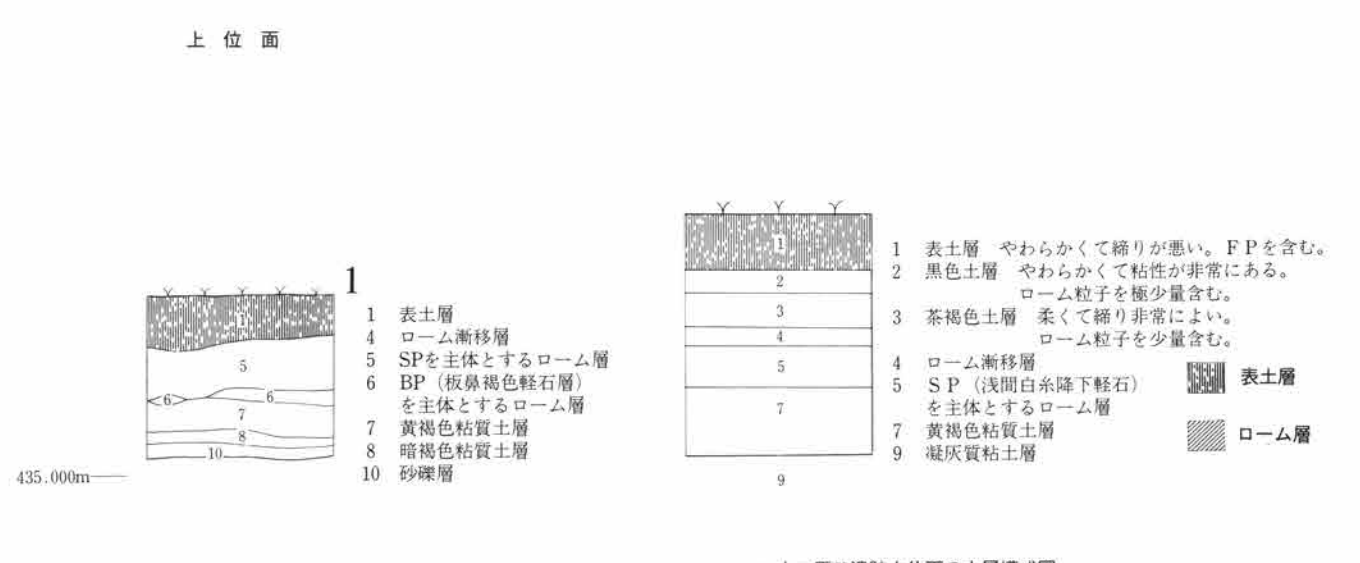
なお、前ページの斜写真は、遺跡の立地を観察する目的で高度約2,000mの上空から撮影したものである。



第147図 十二原II遺跡全体図



第148図 十二原II遺跡の遺構配置図と土層図



十二原II遺跡上位面の土層模式図

十二原II遺跡は群馬県利根郡月夜野町大字上津字十二原に所在し、中後沢と原沢とに挟まれた河岸段丘上に位置している。三後沢遺跡から西約130mのところに位置する遺跡である。当遺跡の調査も三後沢遺跡と同様に、一般国道17号月夜野バイパス道路建設に伴う第2年度の発掘にあたり、三後沢遺跡の調査と併行して進められた。発掘対象面積は長さ約225m、幅28～52mの路線区域であり、約6870m<sup>2</sup>に及んだ。

調査は台地東側から順次実施され、竪穴住居跡と多数の土坑が検出された。当初、調査予定区域は台地東端から中央部までの高い面に限られていたが、下位面に試掘トレンチを入れたところ、土坑らしき落ち込みが確認され、全面調査の運びとなった。この結果、竪穴状遺構・陥し穴等の遺構が検出された。

当遺跡から検出された住居跡の総数は17軒で、その内訳は縄文時代前期4軒、中期7軒、弥生時代後期6軒である。

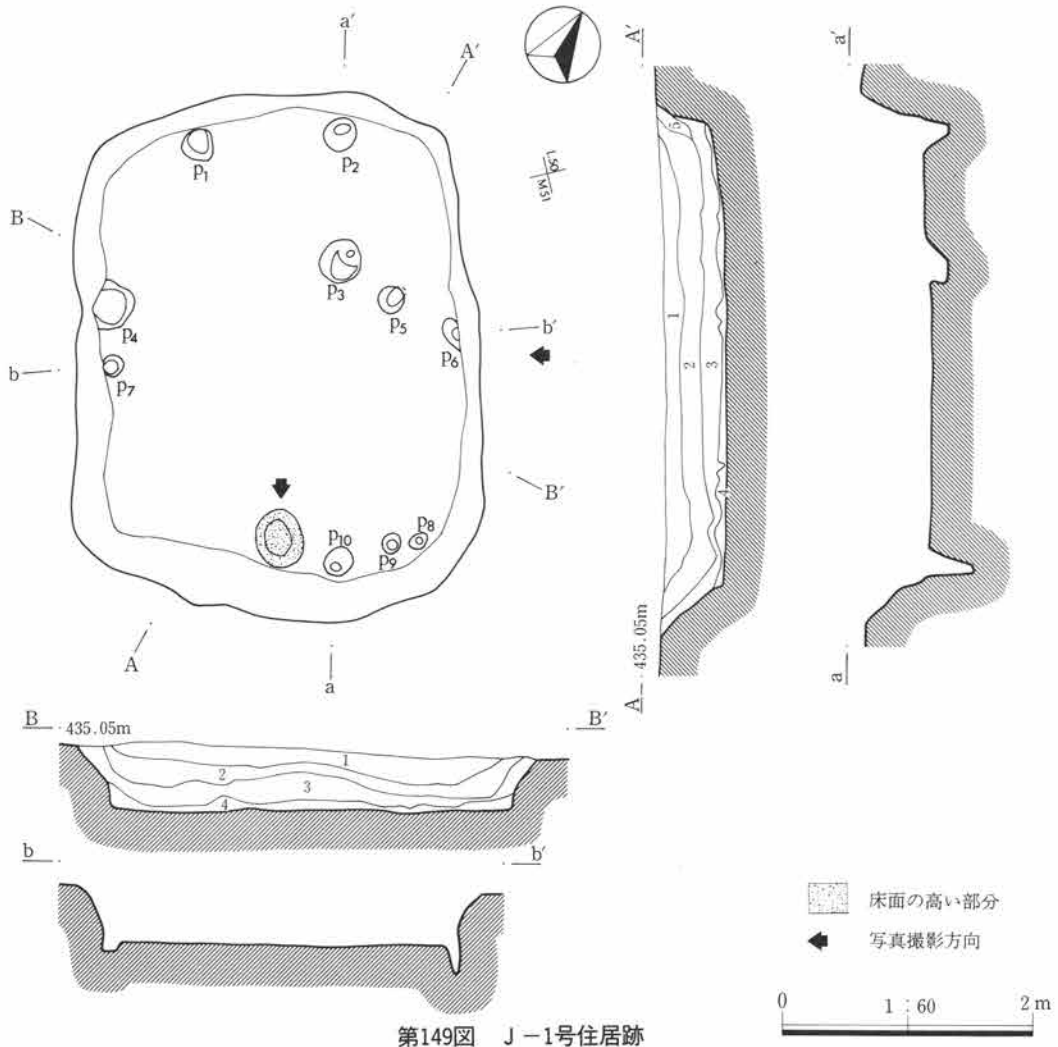
縄文時代前期の住居跡は、J-1号住居跡・J-2号住居跡・J-3号住居跡・J-11号住居跡の4軒である。J-3号住居跡の遺存状況は非常に悪く、またJ-11号住居跡はその大半をY-2号住居跡によって壊されているものの、4軒の住居跡はいずれも前期前葉の関山I式期に属するものと思われる。また17号土坑も該期に属するものである。前期の集落は上位面のなかでもやや低い部分（標高435m付近）に営まれ、幅90mにわたって展開している。住居の配置、土器の分布等から集落の西端を調査したものと思われる。

縄文時代中期の住居跡は、J-4号住居跡・J-5号住居跡・J-6号住居跡・J-7号住居跡・J-8号住居跡・J-9号住居跡・J-10号住居跡の7軒である。いずれも中期前半に属する。このなかでJ-9号住居跡とJ-10号住居跡は重複関係にある。またJ-4号住居跡・J-6号住居跡は地床炉をもつ住居跡であるが、他の5軒は床面から炉を検出することはできなかった。なお、J-8号住居跡・J-9号住居跡は住居廃絶後、廃屋墓として利用された。当遺跡検出の集落は、居住域と土坑・配石分布域が明確に分離した姿をみせている。居住域は、土坑・配石分布域の北側に位置し、東から西に帯状に分布している。そしてその南側（内側）に土坑・配石から構成される分布域が認められ、中期集落の典型的な姿となっている。

弥生時代後期の住居跡は、Y-1号住居跡からY-6号住居跡までの6軒が検出された。Y-2号住居跡は後世の墓地によってその1/3程度を壊されている。またY-3号住居跡・Y-6号住居跡は完掘することができなかった。6軒の住居跡は、縄文時代前期・中期の集落立地と異なっており、上位面のなかでも、もっとも高い部分（標高435.5m～436m）のところで集中的に検出された。そしてY-3号住居跡・Y-4号住居跡が非常に近接して構築されていること、また住居形態や覆土中の遺物に古式土師器を含む住居跡の存在等から考えて、少なくとも2段階に別けることは可能と思われる。すなわち当遺跡の弥生時代後期の住居跡のなかで古い段階に属するものがY-4号住居跡とY-5号住居跡、新しい段階の住居跡がY-1・2・3・6号住居跡の4軒である。集落は西に広がりをもつと考えられる。

以上のほかに、下位面の西端から時期不明の竪穴状遺構1基が検出された。また、土坑は78基検出され、縄文時代の陥し穴17基、縄文時代の土坑14基、時期不明の土坑19基、そして風倒木多数であった。

縄文時代の陥し穴17基は、土坑の形態や規模、配置等から考えると、3群にわけることができる。A群は11基から構成され、B群は2基構成、C群は下位面に存在して4基構成であった。ただし、B群は発掘区から北東に向かって展開するものと思われ、そのうちの一部分が調査されたにすぎないのであろう。縄文時代の土坑は配石遺構と密接な関係を有し、貯蔵穴と考えられるものも含まれているが、覆土に焼土が堆積しているもの、礫が配置されるなど土壙墓の様相の強いものが多い。



#### J-1号住居跡 (第149・150図、PL.22)

**位置** M-50・51グリッドにかけて検出された。

**経過** 8月11日から調査を開始した。覆土からはあまり遺物は出土しなかった。床面から炉を検出できず困惑したが、南壁下中央部に床面の高まりが認められ興味を引かれた。各種図面の作成・写真撮影を行い、9月6日に調査を終了した。

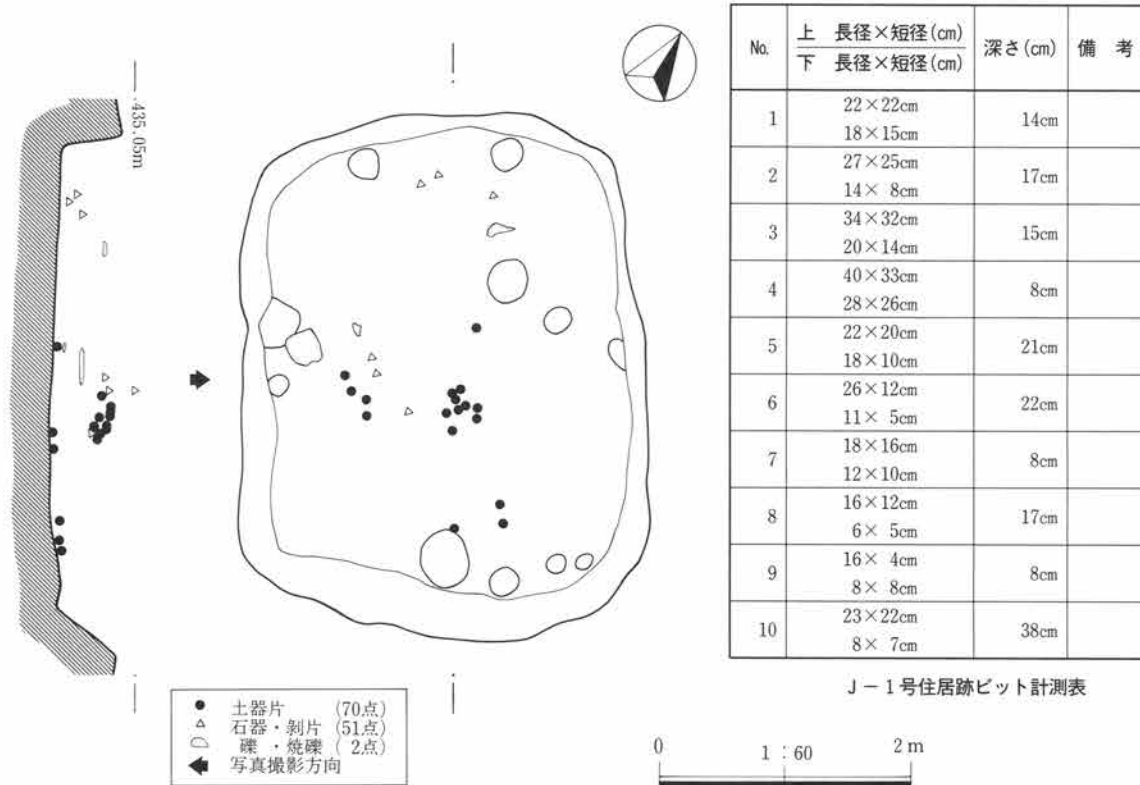
**覆土** ローム層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

- 第1層 黒色土層 粒子やや粗く締り良くない。ロームブロックをわずかに含む。
- 第2層 黒色土層 粒子やや粗く締り少しある。ロームブロックをわずかに含む。
- 第3層 黒褐色土層 粒子やや細かく締りがある。ロームブロックを含み、全体に黄色味を帯びる。
- 第4層 黄褐色土層 粒子は粗いが締りはある。ロームと黒色土の混合土。
- 第5層 黒褐色土層 第2・3層の間で壁際にロームブロック混入がめだつ。

以上、5層に分かれたが、第1・2層を中心に遺物が出土している。

**形状** 長辺4.16m、短辺3.23mの隅丸方形を呈する。面積は約9.5m<sup>2</sup>であるから、居住人員は約2.9人となる。

**壁高** 住居跡確認面より約35~51cmで床面に達する。床面から10cm程はほぼ垂直に立ちあがり、その後ゆる



第150図 J-1号住居跡遺物出土状況

やかに立ちあがっている。

**床面** ほぼ平坦であるが、踏み固められた硬い面を認めることはできなかった。また南壁下中央部に床面の高まりが認められた。長径48cm、短径38cmの規模で、床面との高低差は2～5cm程である。おそらく出入口部に相当するものであろう。同様な事例はJ-2号住居跡にもみられた。

**周溝** 検出できなかった。

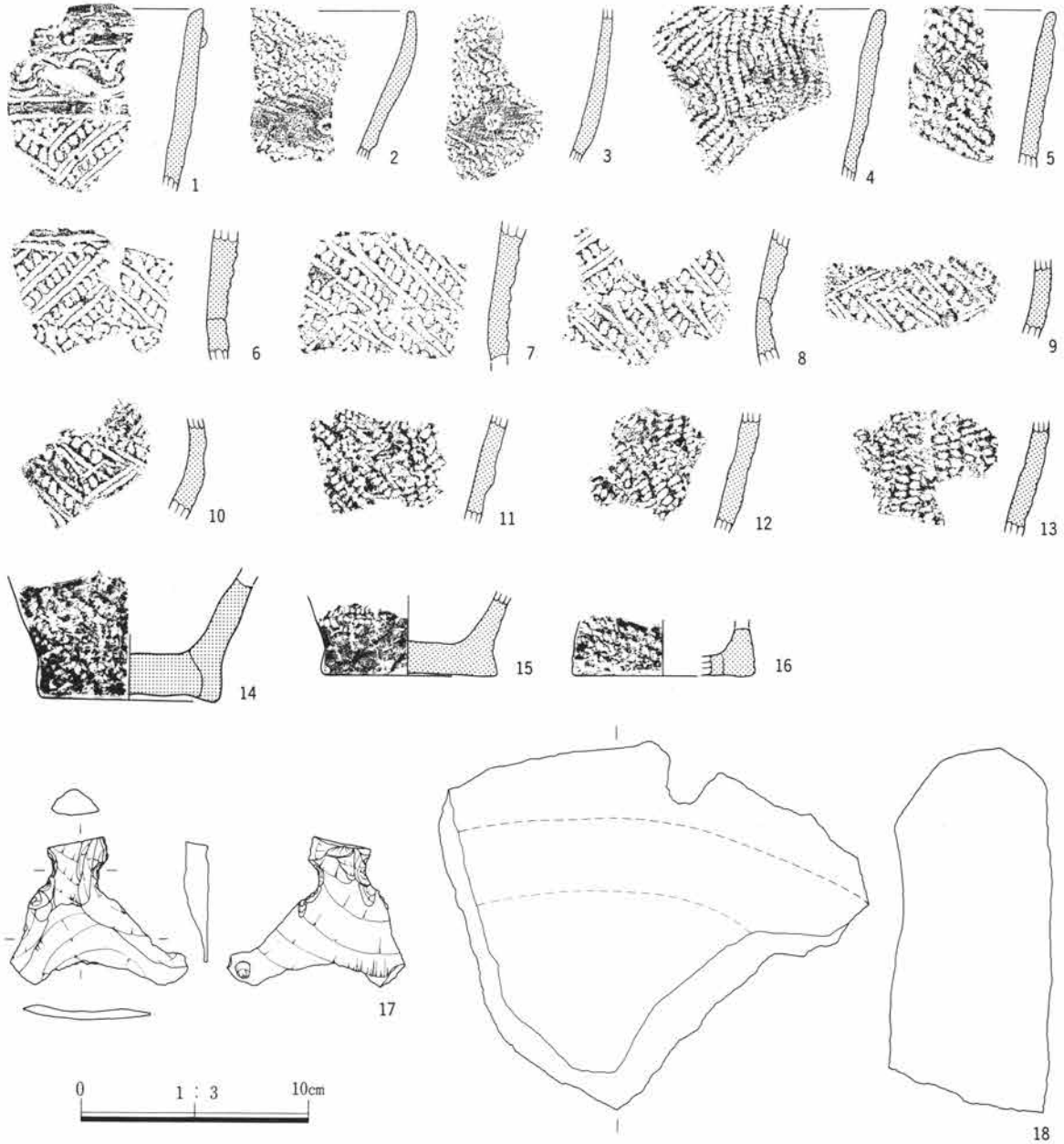
**柱穴** 総計10個のピットが検出された。P<sub>3</sub>・P<sub>5</sub>を除いたピットの位置は、いずれも壁際に接して配置されている。東壁下中央に1個、西壁下中央に2個、南壁下の東壁寄りに3個、北壁下に2個であった。P<sub>1</sub>の深さ14cm、P<sub>2</sub>は17cm、P<sub>3</sub>15cm、P<sub>4</sub>8cm、P<sub>5</sub>21cm、P<sub>6</sub>22cm、P<sub>7</sub>8cm、P<sub>8</sub>17cm、P<sub>9</sub>8cm、P<sub>10</sub>38cmをそれぞれ測る。浅いピットで8cm、深いもので38cmと幅があり、その平均は約17cm程である。三後沢遺跡J-7号住居跡の壁柱穴とほぼ同様なピットの配置になっている。

**炉** 検出できなかった。床面に焼土の痕跡を確認することは残念ながらできなかった。

**遺物出土状況** 覆土上層および床面上から出土しているが、その量は比較的少なかった。平面的分布は住居跡中央部分にややまとまりをみせている（第150図）。

**出土遺物**（第151図、PL.62）

覆土および床面上から出土した縄文時代前期土器片の総点数は70点であった。その内訳は、口縁部片6点、胴部片60点、底部片4点であり、いずれも胎土に繊維を含んでいる。また中期土器片5点も混入していた。石器・礫類は53点出土し、フレイク・チップが圧倒的に多く、次いでスクレイパーとなっている。また凹石2点、石匙・石皿が各1点出土している。使用された石材は黒色頁岩が圧倒的に多く約80%を占めている。また凹石には石英閃緑岩が、石皿には大峰溶結凝灰岩が使用されている。なお、詳細は第152図の器種別・石材別グラフに示してある。



第151図 J-1号住居跡出土遺物

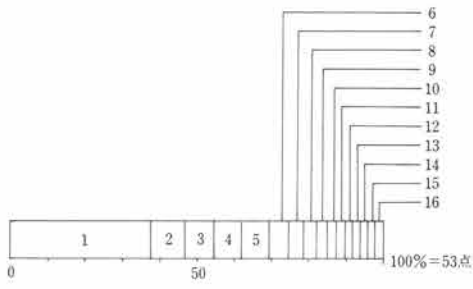
時期 出土遺物から判断すると、当住居跡は縄文時代前期前葉関山I式土器の段階に相当する。

J-1号住居跡遺物観察表

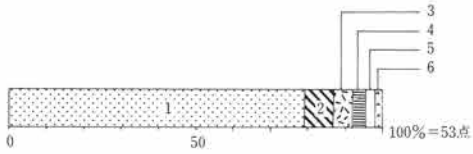
(法量：⑤底径) \*第35図参照

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
151-1 PL. 62	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 橙色 内面 灰褐色	深鉢形土器の口縁部片。口唇部は内削ぎ状。器厚7mm~9mm。内面は丁寧な調整が行われている。	口唇部直下と胴部縄文帯との境に1条の平行沈線。区画内にコンパス文と貼付文。胴部縄文は直前段合燃R(L <sub>R</sub> <sup>R</sup> / <sub>L</sub> <sup>R</sup> )とL(L <sub>L</sub> <sup>L</sup> / <sub>R</sub> <sup>L</sup> )で羽状。	住居跡中央部床面
151-2 3 PL. 62	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面におい 赤褐色 内面褐灰色	2・3は同一個体。内彎する口縁部片で口唇部は平坦。器厚4mm~8mm。内面は横ミガキ。	R(L <sub>R</sub> <sup>R</sup> / <sub>L</sub> <sup>R</sup> )の環付の縄文を多段に施文し、円形竹管文が施される。	覆土

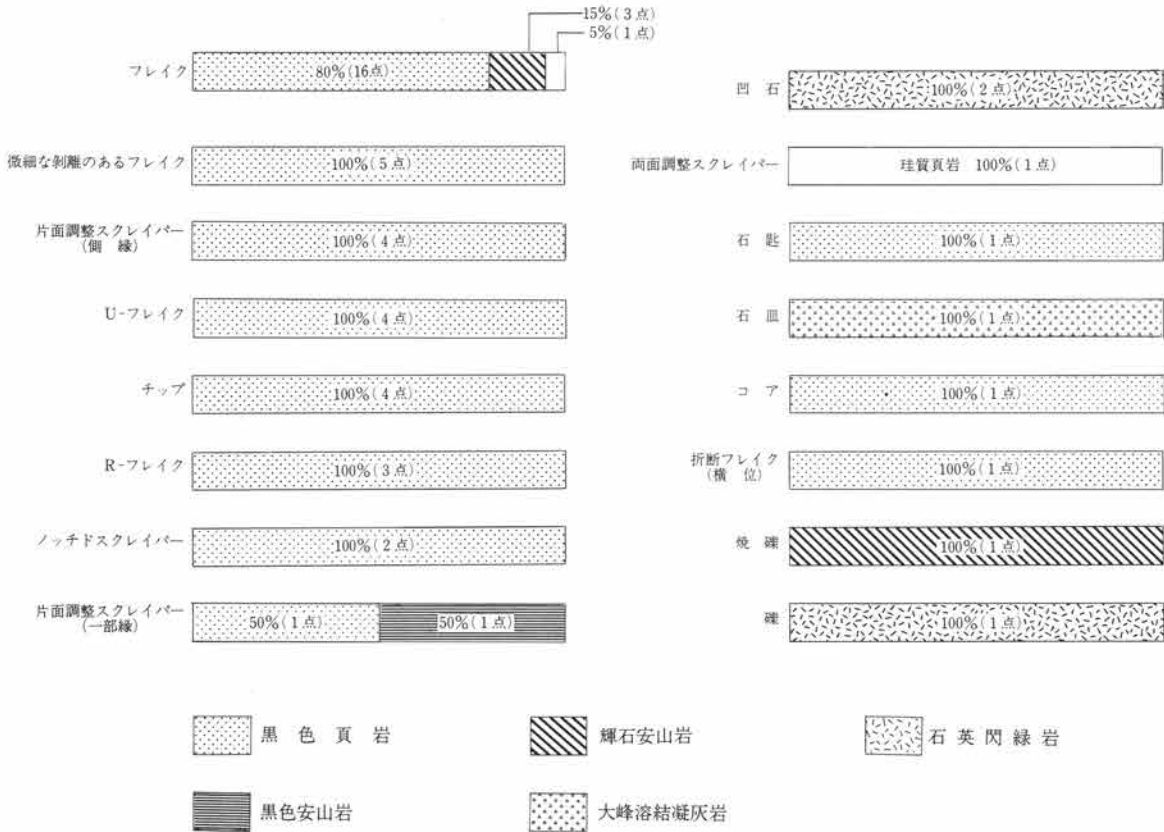




器種	%	点
1 フレイク	37.7	20
2 微細な剥離のあるフレイク	9.4	5
3 片面調整スクレイパー(側縁)	7.5	4
4 U-フレイク	7.5	4
5 チップ	7.5	4
6 R-フレイク	5.7	3
7 ノッチドスクレイパー	3.8	2
8 片面調整スクレイパー(一部縁)	3.8	2
9 凹石	3.8	2
10 両面調整スクレイパー	1.9	1
11 石匙	1.9	1
12 石皿	1.9	1
13 コア	1.9	1
14 折断フレイク(横位)	1.9	1
15 焼礫	1.9	1
16 礫	1.9	1
	100.0	53



石材	%	点
1 黒色頁岩	79.25	42
2 輝石安山岩	7.55	4
3 石英閃緑岩	5.67	3
4 黒色安山岩	3.77	2
5 珩質頁岩	1.88	1
6 大峰溶結凝灰岩	1.88	1
	100.00	53



第152図 J-1号住居跡出土石器の器種別・石材別グラフ

十二原II遺跡

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
151-4 PL. 62	口縁部 片		①含繊維 ②やや良 ③外面灰 黄褐色 内面褐灰色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は丸味をもつ。器厚5mm~7mm。内面には繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はL( $\frac{R}{R}$ )。	住居跡中央部
151-5 PL. 62	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐色 内面 褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部には刺突が加えられ小突起状になっている。内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ )。	覆土
151-6 7 PL. 62	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 暗褐色 内面 褐色	6・7は同一個体。深鉢形土器の胴部片。器厚8mm~1.1cm。内面はやや丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体は直前段合燃R( $\frac{L}{R}$ )とL( $\frac{L}{R}$ )で羽状。	住居跡中央部
151-8 PL. 62	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面暗赤褐色内面にふい赤褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚6mm~8mm。内面はやや丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体は直前段合燃R( $\frac{L}{R}$ )とL( $\frac{L}{R}$ )で羽状。	住居跡南壁寄り床面
151-9 10 PL. 62	胴部片		①含繊維 ②不良 ③外面明赤褐色 内面 褐灰色	9・10は同一個体。深鉢形土器の胴部片。器厚7mm。内外面は荒れている。	縄文施文。原体は直前段合燃R( $\frac{L}{R}$ )とL( $\frac{L}{R}$ )で羽状。	住居跡南壁寄り床面
151-11 13 PL. 62	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 にふい橙色 内面 褐灰色	11~13は同一個体。深鉢形土器の胴部片で器厚6mm~8mm。内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ )。内面に煤が付着している。	住居跡中央部
151-14 PL. 62	底部片	⑤ 7.6	①含繊維 ②やや良 ③外面 にふい橙色 内面 褐灰色	上げ底で開いて立ち上がる。器厚8mm~1.3cmで接合技法A*。内面・底面はやや丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ )。内面に一部煤が付着している。	覆土
151-15 PL. 62	底部片	⑤ 7.8	①含繊維 ②良 ③外面にふい橙色 内面 黒褐色	平底で開いて立ち上がる。器厚7mm~1.4cmで接合技法A。内面は粗い調整で底面はミガキ。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ )。	覆土
151-16 PL. 62	底部片	⑤( 8.0)	①含繊維 ②良 ③外面にふい黄橙色内面にふい橙色	平底で垂直にちかく立ち上がる。器厚7mm~1.3cmで接合技法A。内面は丁寧な調整。底面はミガキ。	縄文施文。原体はR( $\frac{L}{L}$ )。	覆土

(単位はcmおよびg、( )内は現存値)

図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計 測 値				備 考	出土状況
				全 長	最大幅	最大厚	重量		
151-17 PL. 62	石 匙	完 形	黒色頁岩	6.5	7.8	1.1	26.3	横型。	覆土
151-18 PL. 62	石 皿	断 片	大峰溶結凝灰岩	(18.1)	(15.7)	(7.0)	2460	使用面がやや凹んでいる。	住居跡北壁付近

J-2号住居跡 (第153~155図、PL.23・24)

位置 J-45・46、K-45・46グリッドにかけて検出された。近接してJ-6号住居跡が存在する。

経過 三後沢遺跡の調査と併行して、7月上旬から十二原II遺跡の試掘を開始した。15日には当住居跡のプランを確認し、8月から調査に入った。覆土最上層から礫が多数出土したが、これら礫は縄文時代中期の配石遺構を構成する礫群であることが後に判明した。覆土からはあまり遺物は出土しなかったが、床面からは炉体土器や石皿・磨石がセットで出土している。調査がすべて終了したのは10月上旬であった。

**重複** 風倒木と重複しているが、当住居跡が新しい。

**覆土** ローム層を掘り込んで堅穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

第1層 黒色土層 やわらかくて締り良い。粘性が非常にある。ローム粒子・炭化物・赤色スコリア粒子を含んでいる。

第2層 暗褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。ローム粒子・炭化物粒子・赤色スコリア粒子を含む。

第3層 暗褐色土層 固く締り粘性が非常にある。ローム粒子を多量に、炭化物粒子・赤色スコリア粒子を少量含んでいる。

第4層 黒色土層 やや固く締り粘性が非常にある。ローム粒子・炭化物粒子・赤色スコリア粒子を含む。

第5層 黄褐色土層 固く締り粘性が非常にある。ローム粒子を多量に含む。

**形状** 長辺4.5m、短辺4mの隅丸方形を呈する。面積約13.7m<sup>2</sup>であるから、居住人員は約4.2人となる。

**壁高** 住居跡確認面より約16~53cmで床面に達している。北壁の残存状況がやや悪かった。また南壁から西壁の一部にかけては風倒木と重複していたために明確な壁を検出することはできなかった。

**床面** 全体的に軟弱であった。東壁下中央部に長径50cm、短径44cmの範囲にわたり、約5m程の床面の高まりが認められた。おそらくは出入口部に相当するものであろう。同様な事例はJ-1号住居跡にもみられた。

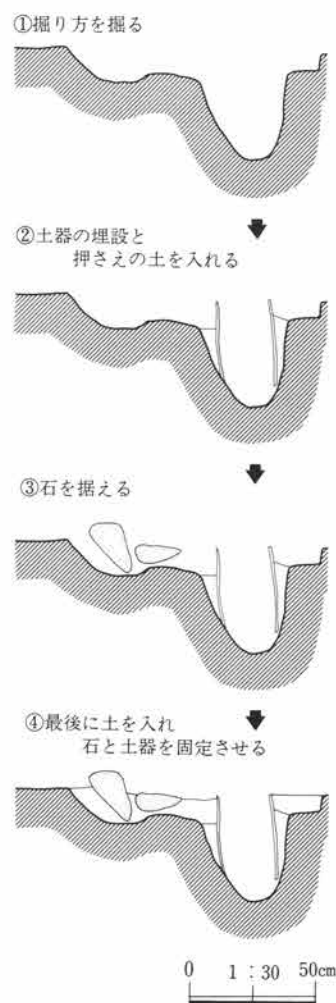
**周溝** 検出できなかった。

**柱穴** 総計5個のピットが検出された。住居跡中央部からの検出はなく、いずれも壁際に位置している。P<sub>1</sub>の深さは15cm、P<sub>2</sub>深さ10cm、P<sub>3</sub>深さ46cm、P<sub>4</sub>深さ34cm、P<sub>5</sub>深さ15cmをそれぞれ測る。P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>はいずれも深いピットであり、床面の高まりを考慮すれば出入口部の柱穴になると考えられる。他はいずれも10cm代のピットであり、J-1号住居跡のそれとほぼ同様な深さであった。

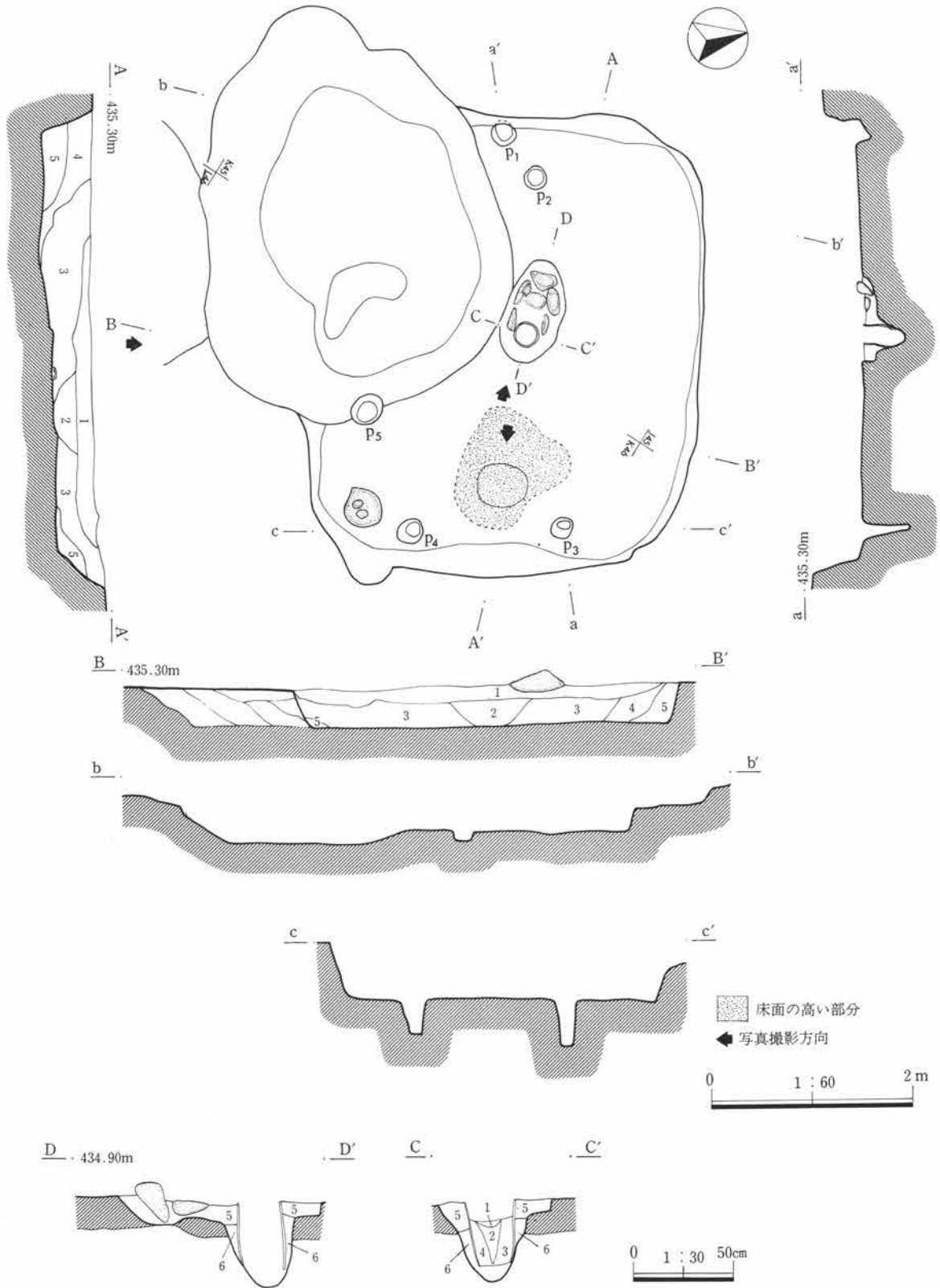
**炉** 石囲いに炉体土器を伴うものであり、底部を欠損した関山I式土器が埋設されていた。長径103cm、短径56cmの規模であり、磔6個を使用している。面積約0.47m<sup>2</sup>である。この炉の構築は、①床面を掘り下げる。石を配置する部分はローム層まで掘り下げ、土器を埋設する部分はローム層下の白色粘土層まで掘り下げている。②土器を埋設し、周囲を茶褐色土（人為的埋土）で押さえる。③石を配置する。④最後に暗褐色土（人為的埋土）で土器と石を固定させる。以上の過程をへて行われたものである（第153図）。炉体土器内の覆土は4層に分かれた。

No.	上	長さ×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
	下			
1	24×23cm	20×16cm	15cm	
2	24×21cm	16×16cm	10cm	
3	21×20cm	13×8cm	46cm	出入口部
4	26×24cm	14×13cm	34cm	"
5	34×28cm	22×18cm	15cm	

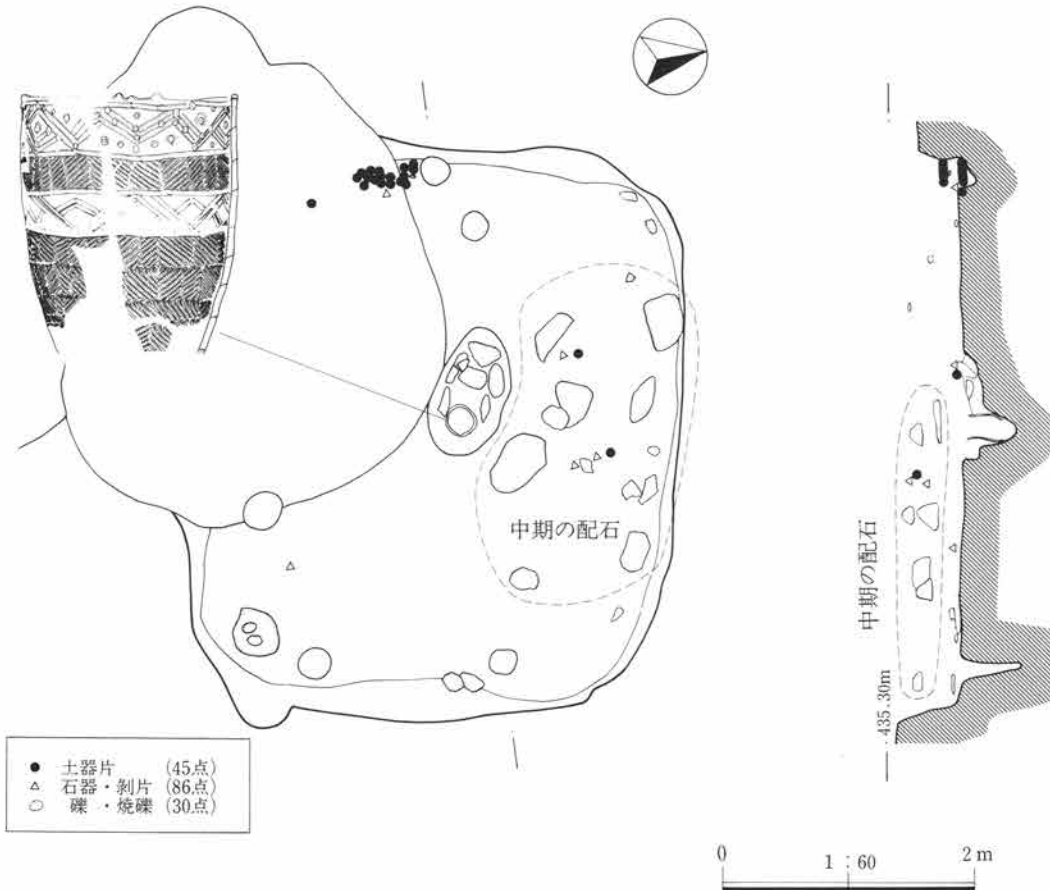
J-2号住居跡ピット計測表



第153図 炉の構築方法



第154図 J-2号住居跡



第155図 J-2号住居跡遺物出土状況

第1層 黒色土層 やわらかくて非常に粘性がある。ローム粒子を少量含む。

第2層 暗褐色土層 やや固く締り、粘性が非常にある。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を少量含む。

第3層 茶褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。ローム粒子・焼土粒子・白色粘土粒子を少量含む。

第4層 暗褐色土層 やや固く締り、粘性が非常にある。ローム粒子を少量含む。

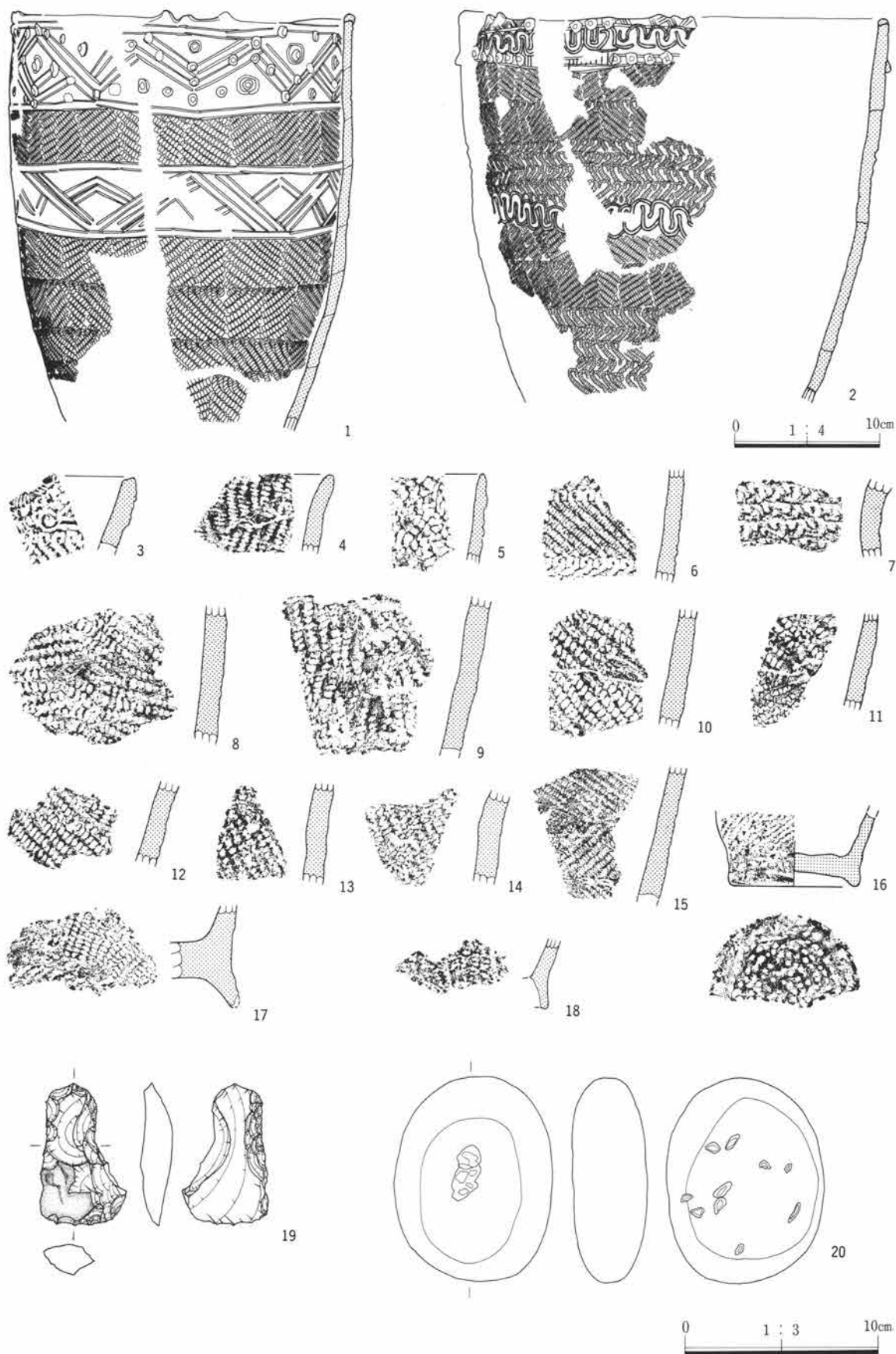
炉体土器内の覆土は焼土粒子・炭化物粒子の混入は非常に少なかった。第5・6層は人為的埋土。

**遺物出土状況** 覆土上層から礫多数が出土しているが、これらは縄文時代中期の配石遺構を構成する礫群の一部であると考えられる。当初住居跡上にあったものが、土圧等の影響によって覆土内にさがったものと判断される。この他に床面上から土器・石器等が出土しているが、その量は比較的少なかった。なお住居跡東南隅の床直からは伏せた石皿とその上に磨石2個がセットで出土している（第155図）。

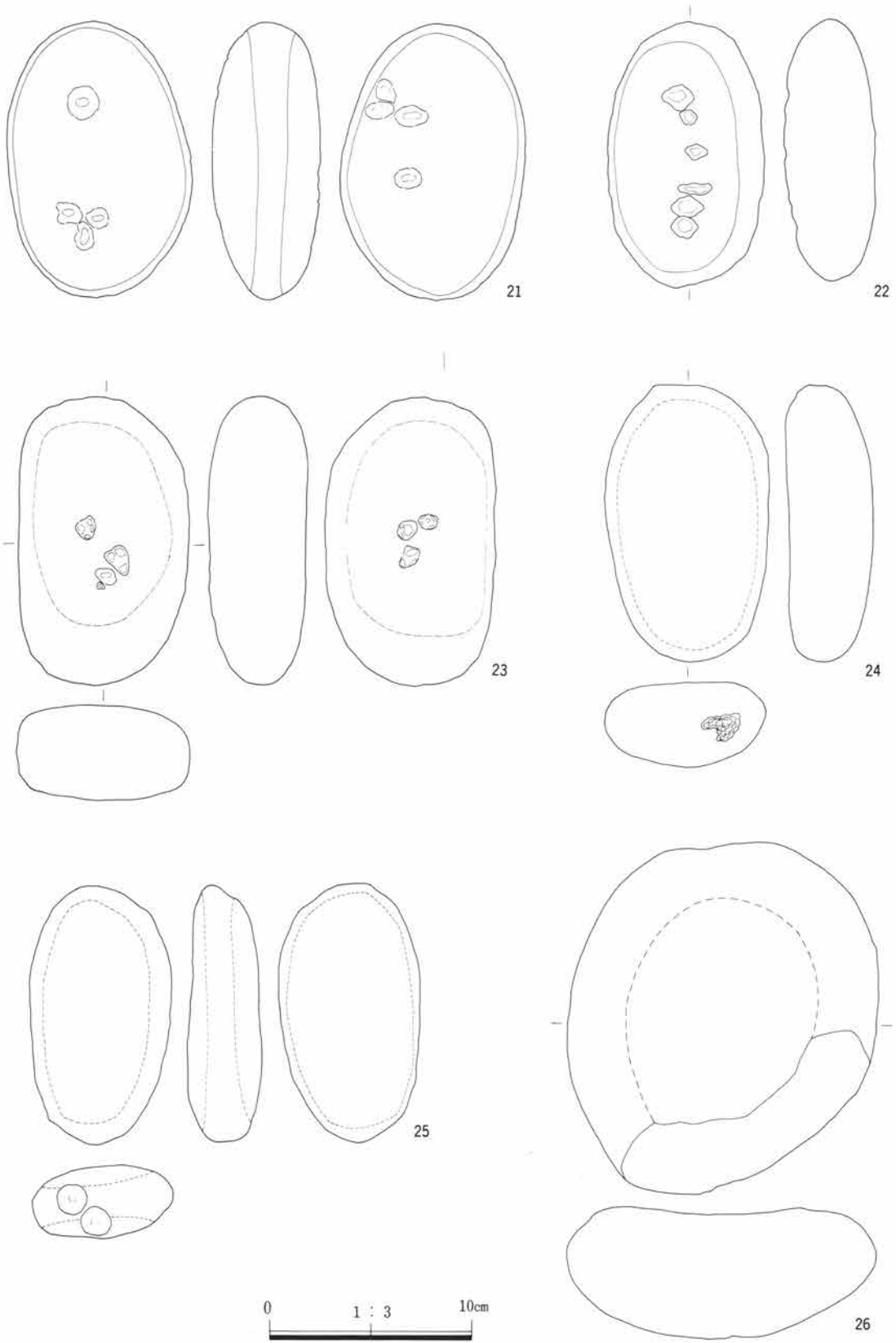
#### 出土遺物（第156～158図、PL.63）

炉体土器のほかに覆土および床面上から出土した縄文時代前期土器片の総点数は45点であった。その内訳は、口縁部片4点、胴部片39点、底部片2点であり、いずれも胎土に繊維を含んでいる。また中期土器片86点、弥生土器片1点が混入していた。石器・礫類は116点出土し、フレイク・チップ・礫が多数を占めている。ただし焼礫・礫の多くは中期の配石遺構を構成する一群のものである。焼礫が多いことは注意すべきであろう。この他に凹石・スクレイパー・石皿等が出土している。使用された石材は黒色頁岩が多く60%以上を占めている。次いで、輝石安山岩・黒曜石の順となる。なお、詳細は第159・160図の器種別・石材別グラフに示してある。

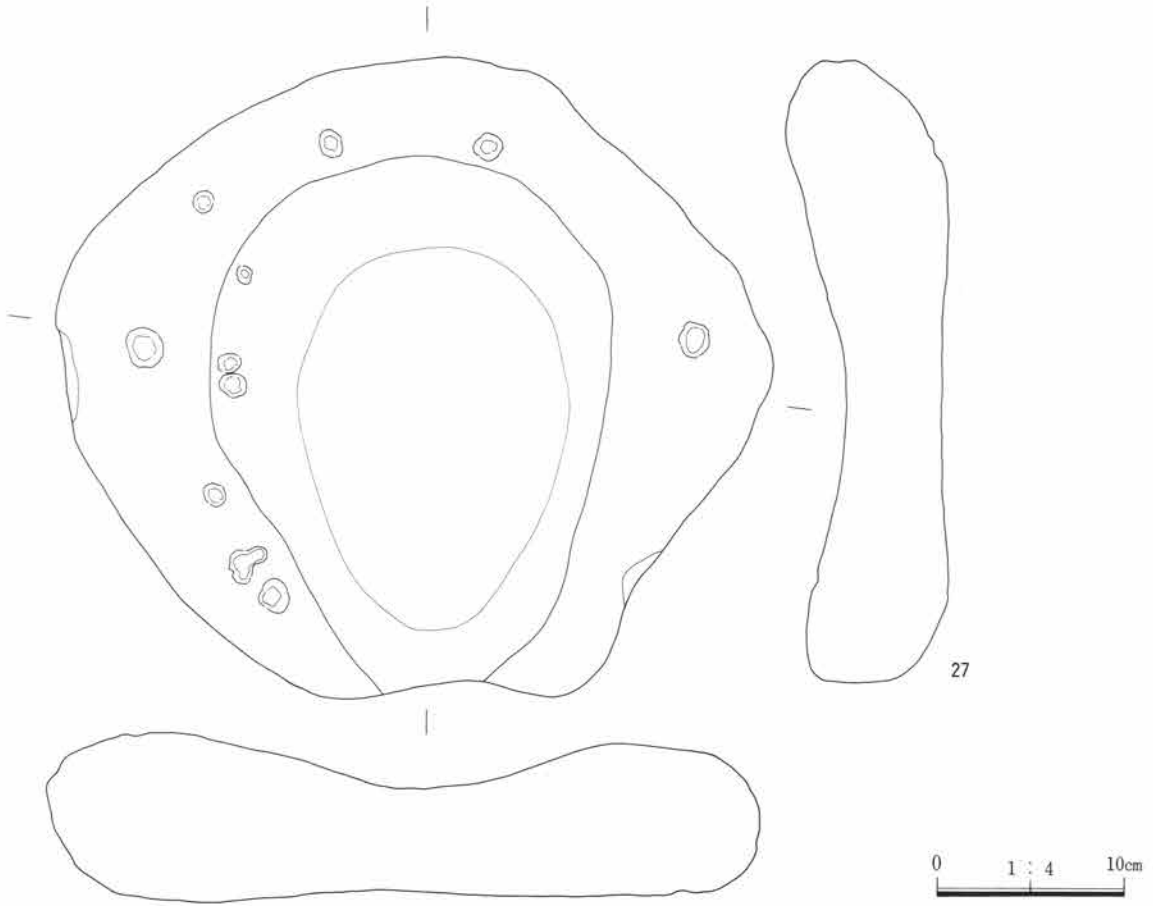
**時期** 出土遺物から判断すると、当住居跡は縄文時代前期前葉関山I式土器の段階に相当する。



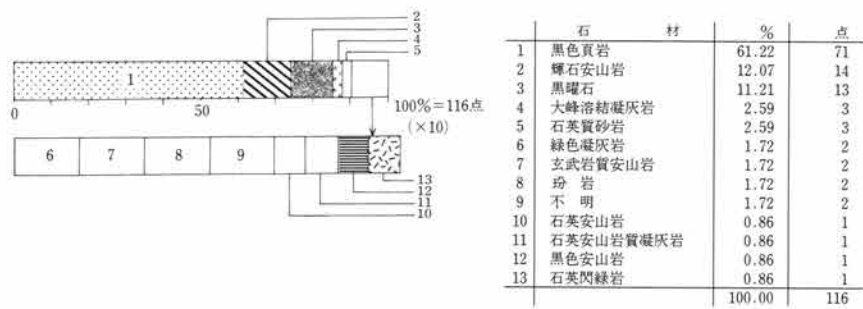
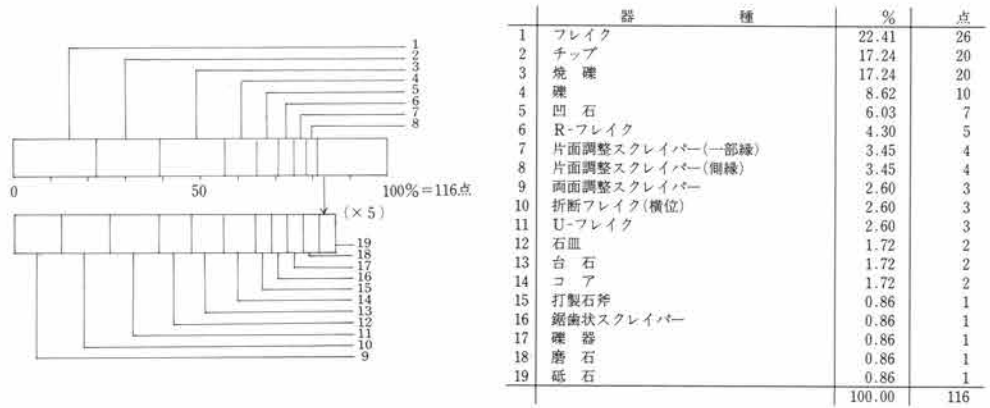
第156图 J-2号住居跡出土遺物(1)



第157图 J-2号住居跡出土遺物(2)



第158図 J-2号住居跡出土遺物 (3)



第159図 J-2号住居跡出土石器の器種別・石材別グラフ (1)





第160図 J-2号住居跡出土石器の器種別・石材別グラフ (2)

## J-2号住居跡遺物観察表

〔法量：①口径②器高(現高)⑤底径〕\*第35図参照

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
156-1 PL. 63	深鉢形	① 23.4 ② (28.1)	①含繊維 ②不良 ③外面 におい褐色 内面 におい褐色	底部欠失。口縁部は直立し口唇部は内傾。3個1単位の小突起が施される。器厚6mm~8mmで積みあげ技法B*。内外面は荒れている。	口唇上に山形の小突起。文様帯上下を半截竹管による平行沈線で区画し、区画内に鋸歯状文・貼付文が施される。胴部にはR(ㄥとL(ㄩの環付の縄文で羽状。胴部中位には半截竹管による鋸歯状文が施文されている。	炉体土器
156-2 PL. 63	深鉢形	①(28.8) ②(26.0)	①含繊維 ②やや良 ③外面 橙色 内面 橙色	深鉢形土器の大形破片。口唇部は内削ぎ状で小突起が施される。器厚8mm。内面は荒れていて繊維痕が認められる。	口唇上に山形の小突起。文様帯上下を半截竹管による平行沈線で区画し、区画内にコンパス文・貼付文。口唇直下に4条1単位の鋸歯状文、平行沈線内には一部刻目。胴部はR(ㄥ(0段多条)とL(ㄩ(0段4条)の環付縄文で羽状。環付末端で多段施文。胴部中位にはコンパス文。	住居跡西壁 床面直上
156-3 PL. 63	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 暗赤褐色 内面 暗赤褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は内削ぎ状。器厚9mmで積みあげ技法A。内面は粗い調整が行われている。	R(ㄥとL(ㄩの環付の縄文で羽状。半截竹管による平行沈線・円文が描かれ、口唇直下に4条1単位の鋸歯状文。	覆土
156-4 PL. 63	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 褐灰色 内面 褐灰色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は丸味をもつ。器厚8mm。内面はやや丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はL(ㄩ。	覆土
156-5 PL. 63	口縁部 片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は先細り。器厚4mm~6mm。内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR(ㄥ。	覆土
156-6 PL. 63	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 橙色 内面 橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。内面は粗い調整で繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR(ㄥとL(ㄩの環付の縄文で羽状に施される。	覆土
156-7 PL. 63	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 におい黄褐色 内面 におい黄褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚1cm。内面はザラザラで繊維痕が認められる。	L(ㄩ(環付末端)を多段に施文。	覆土
156-8 ↓ 10 PL. 63	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 におい黄褐色 内面 におい黄褐色	8~10は同一個体。深鉢形土器の胴部片。器厚9mm~1.1cmで積みあげ技法A。内面は縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR(ㄥ。	覆土
156-11 PL. 63	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 褐灰色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm~9mm。内面はやや丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR(ㄥとL(ㄩ。	覆土
156-12 PL. 63	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面 黒褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚1cm。内面はミガキが行われている。	縄文施文。原体はR(ㄥ。	覆土
156-13 14 PL. 63	胴部片		①含繊維 ②やや良 ③外面 におい橙色 内面 におい橙色	13・14は同一個体。深鉢形土器の胴部片。器厚1cm。内面はザラザラしていて一部繊維痕が認められる。	縄文施文。原体はR(ㄥ。	覆土

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況			
156-15 PL. 63	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 橙色 内面にふい橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm～ 1.1cmで積みあげ技法A。内面は丁 寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR( $\frac{1}{7}$ )とL( $\frac{R}{R}$ (0 段多条)で羽状。 外面に一部煤が付着している。	覆土			
156-16 PL. 63	底部片	⑤ 6.5	①含繊維 ②良 ③外面 浅黄 橙 内面 褐灰色	上げ底で開いて立ち上がる。器厚 6mm～1cm。内面は粗く、底面は 丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はL( $\frac{F}{F}$ )。縄文下と 底面に棒状工具による刺突が行わ れている。底面では渦巻状の刺突。	覆土			
156-17 PL. 63	底部片		①含繊維 ②やや良 ③外面に ふい黄橙色内面黒褐色	上げ底でやや開いて立ち上がる。 器厚1.1cm～1.8cm。内面は粗い調 整、底面はミガキが行われている。	縄文施文。原体はL( $\frac{R}{R}$ )。	覆土			
156-18 PL. 63	底部片		①含繊維 ②やや良 ③外面に ふい橙色内面褐灰色	上げ底で開いて立ち上がる。器厚 6mm～1cmで接合技法A。内面・ 底面は粗い調整が行われている。	縄文施文。原体はR( $\frac{1}{7}$ )。	覆土			
図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 ( )内は現存値				備 考	出土状況
				全 長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)		
156-19 PL. 63	打製石 斧	完 形	黒色頁岩	7.0	4.5	1.6	46.4	撥形。一側面が内側に彎曲してい る。	覆土
156-20 PL. 63	凹 石	完 形	石英質砂岩	10.4	8.2	3.8	500	器面に敲打による凹みがある。	住居跡南西 コーナ付近 石皿上
157-21 PL. 63	凹 石	完 形	輝石安山岩	13.4	9.1	5.2	920	"	"
157-22 PL. 63	凹 石	完 形	大峰溶結凝灰岩	12.9	7.6	4.5	540	"	石皿上
157-23 PL. 63	凹 石 (磨石)	完 形	石英質砂岩	14.0	8.4	4.7	920	器面に磨耗痕と敲打による凹みが ある。	住居跡北壁 寄り
157-24 PL. 63	磨 石 (敲石)	完 形	大峰溶結凝灰岩	13.4	7.9	4.2	710	器面に磨耗痕と敲打痕がある。	覆土
157-25 PL. 63	磨 石	完 形	輝石安山岩	12.5	6.9	3.4	480	器面に磨耗痕がある。	覆土
157-26 PL. 63	石 皿	一部欠	石英質砂岩	(15.9)	15.2	6.2	(2190)	使用面がやや凹んでいる。火熱を 受ける。	住居跡東壁
158-27 PL. 63	石 皿	完 形	大峰溶結凝灰岩	38.2	32.8	5.5	14.12kg	使用面が大きく凹んでいる。 縁辺部に凹みがある。	床直上

## J-3号住居跡(第161図、PL.25)

**位置** I-54・55、J-54・55グリッドにかけてローム層直上で検出された。J-1号住居跡東約22mのところに位置する。

**経過** 7月28日に住居跡プランを確認した。覆土からは遺物はほとんど出土せず、時期把握は困難をきわめた。わずかに出土した土器から判断して縄文時代前期の住居跡であることが判明した。住居跡の遺存状況は非常に悪く、また完掘することもできなかった。

**覆土** ローム層を掘り込んで堅穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

第1層 黒褐色土層 やわらかくて締り良い。粘性が非常にある。ローム粒子を多量に含んでいる。

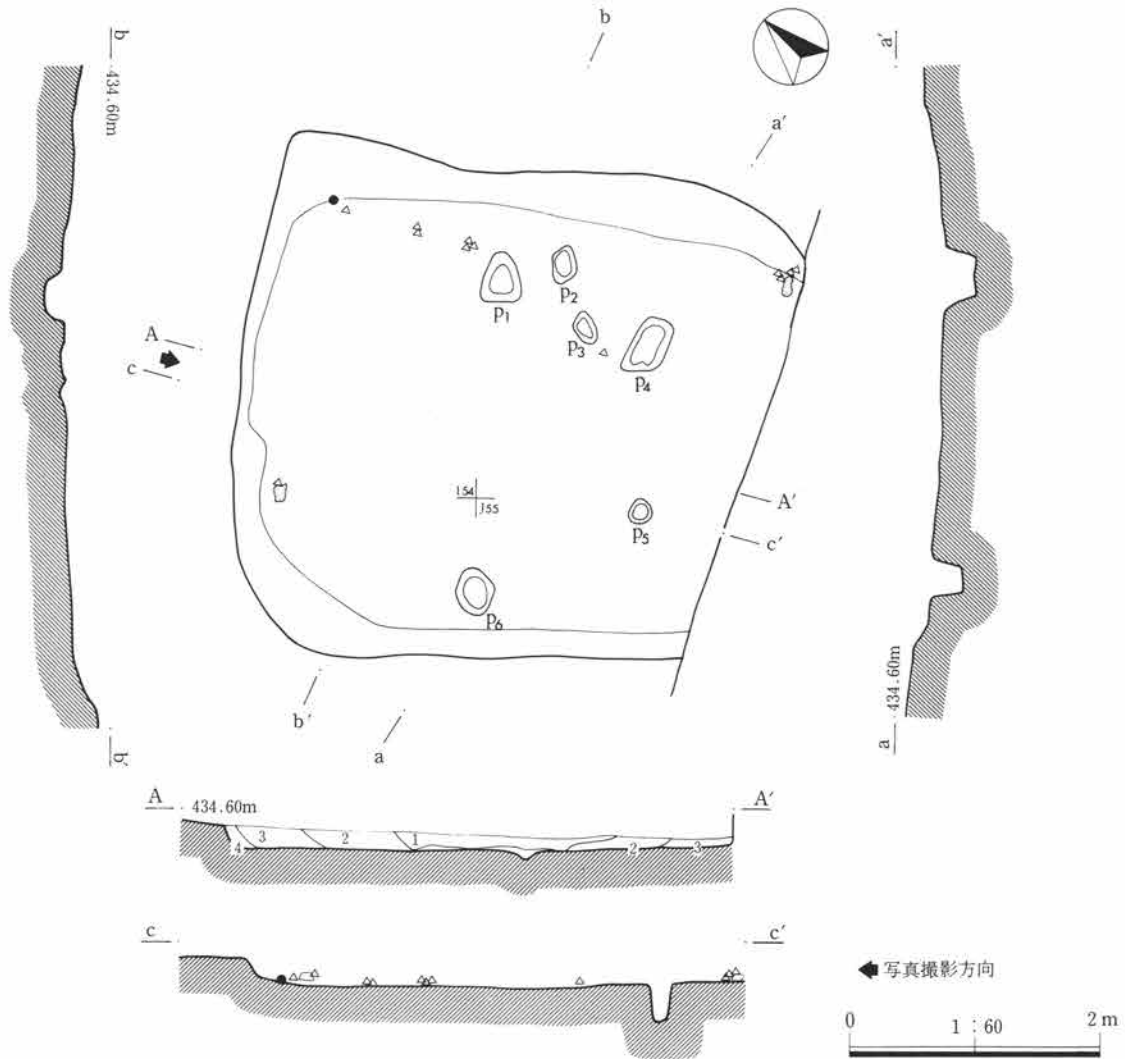
第2層 暗褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。ローム粒子を多量に、赤色スコリア粒子を少量含む。

第3層 暗褐色土層 やわらかくて締り良い。粘性が非常にある。ローム粒子を多量に、また少量の赤色スコリア粒子・炭化物粒子を含む。2層よりやや明るい色調。

第4層 黄褐色土層 やわらかくて締り良い。粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

**形状** 完掘できなかったために現状での規模は、長辺4.24m、短辺3.86mであり、隅丸方形を呈するものと思われる。推定面積約12.6m<sup>2</sup>であるから、居住人員は約3.8人となる。

**壁高** 住居跡確認面より約9～24cmで床面に達している。残存状況は非常に悪かった。



第161図 J-3号住居跡

**床面** 全体的に軟弱であり、凹凸が認められる。

**周溝** 検出できなかった。

**柱穴** 総計6個のピットが検出された。しかしいずれのピットもその配置に規則性は認められないが、東壁

寄りにやや集中している。ピットの深さは、P<sub>1</sub>16cm、P<sub>2</sub>9cm、P<sub>3</sub>28cm、P<sub>4</sub>23cm、P<sub>5</sub>30cm、P<sub>6</sub>25cmを測り、P<sub>2</sub>が極端に浅い。

**炉** 検出できなかった。床面に焼土の痕跡はなかった。

**遺物出土状況** 覆土、床面からはほとんど出土しなかった。

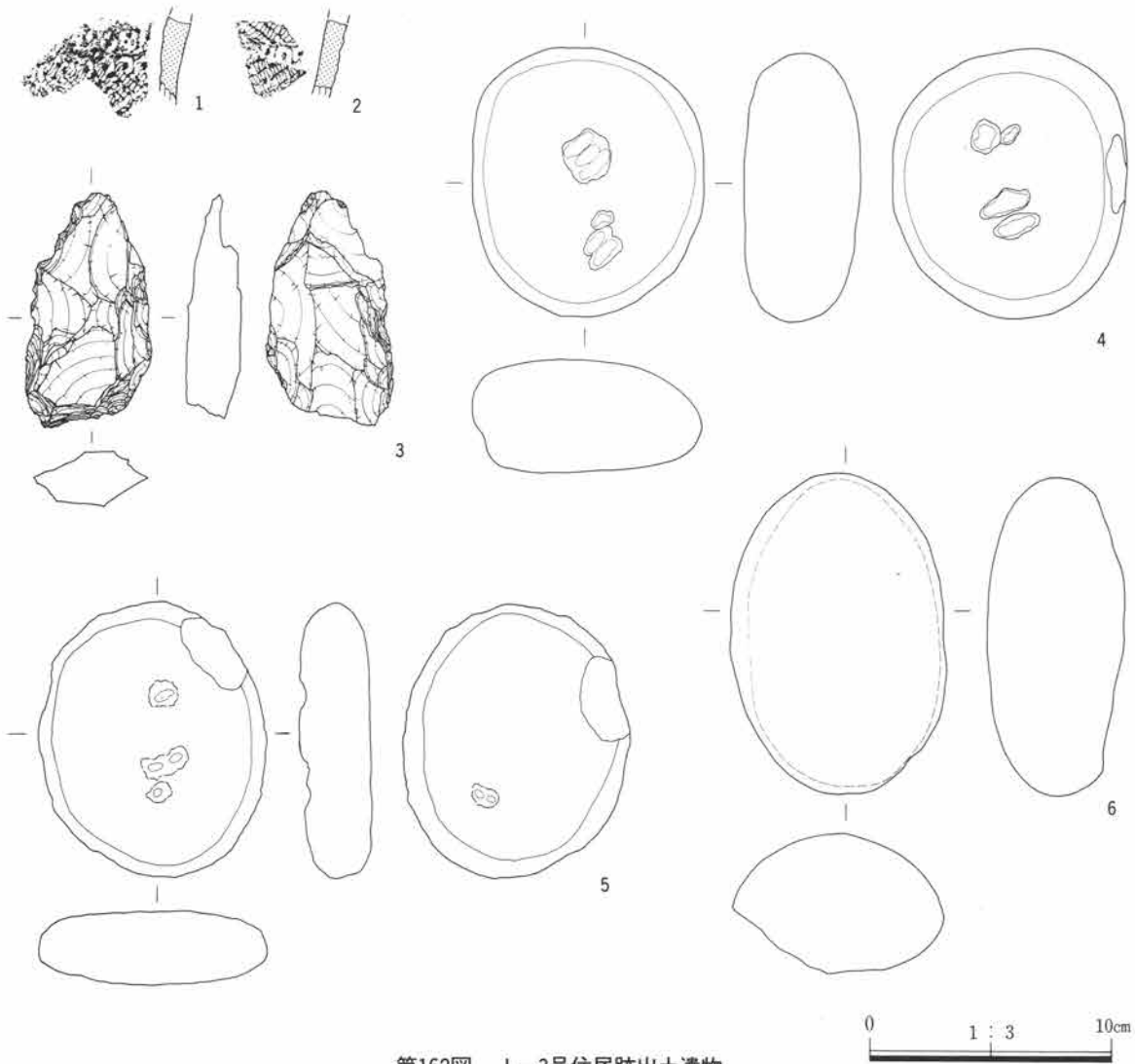
**出土遺物** (第162図、PL.64)

縄文時代前期土器片8点が出土し、胎土に繊維を含んでいた。また17点の石器・礫等が出土し、詳細は第163図に示してある。

**時期** 出土遺物から判断して、当住居跡は縄文時代前期前葉関山式土器の段階に相当する。

No.	上	深さ (cm)	備考
	長径×短径 (cm)		
1	39×31cm	16cm	
	22×19cm		
2	22×19cm	9cm	
	18×17cm		
3	22×17cm	28cm	
	17×9cm		
4	46×29cm	23cm	
	31×15cm		
5	20×18cm	30cm	
	13×11cm		
6	38×31cm	25cm	
	24×18cm		

J-3号住居跡ピット計測表



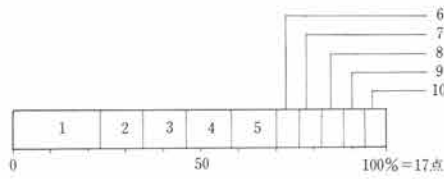
第162図 J-3号住居跡出土遺物

J-3号住居跡遺物観察表

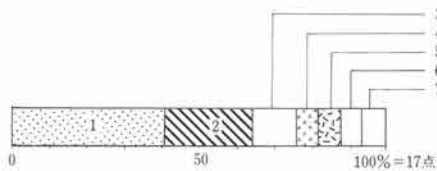
図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
162-1 2 PL. 64	胴部片		①含繊維 ②良 ③外面にふい 橙色 内面にふい 橙色	1・2は同一個体。深鉢形土器の 胴部片。器厚7mm~1cmで積みあ げ技法A。内面は丁寧な調整。	縄文施文。原体はR(0段多条) とL(0段4条)の環付で羽状。	覆土

[単位はcmおよびg、( )内は現存値]

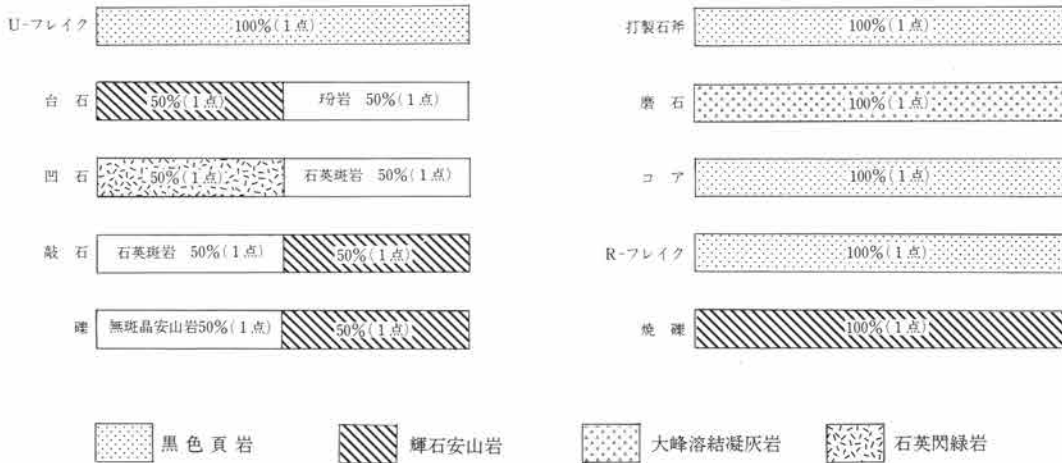
図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計 測 値				備 考	出土状況
				全 長	最大幅	最大厚	重量		
162-3 PL. 64	打製石 斧	完 形	黒色頁岩	9.1	4.7	2.3	121.6	短冊形。基部付近を部分的に細く している。	住居跡東南 コーナー
162-4 PL. 64	凹 石	完 形	石英閃緑岩	11.0	9.6	4.8	780	器面に敲打による凹みがある。	住居跡東壁 寄り
162-5 PL. 64	凹 石	完 形	石英斑岩	12.0	9.4	3.0	445	"	"
162-6 PL. 64	磨 石	完 形	大峰溶結凝灰岩	13.1	8.8	5.7	900	器面に磨耗痕が観察される。	"



器種	%	点
1	23.3	4
2	11.8	2
3	11.8	2
4	11.8	2
5	11.8	2
6	5.9	1
7	5.9	1
8	5.9	1
9	5.9	1
10	5.9	1
合計	100.0	17



石材	%	点
1	41.18	7
2	23.53	4
3	11.77	2
4	5.88	1
5	5.88	1
6	5.88	1
7	5.88	1
合計	100.00	17



第163図 J-3号住居跡出土石器の器種別・石材別グラフ

J-4号住居跡 (第164・165図、PL.25・26)

**経過** 9月8日から調査を開始した。比較的小型の住居跡であり、覆土最上層からは遺物がまとまって出土した。床面には炉跡を壊している土坑が認められたが、覆土からはその掘り込みを確認できなかった。

**覆土** ローム層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

第1層 黒褐色土層 やわらかくて締り良くない。ローム粒子を多量に、炭化物粒子を少量含む。

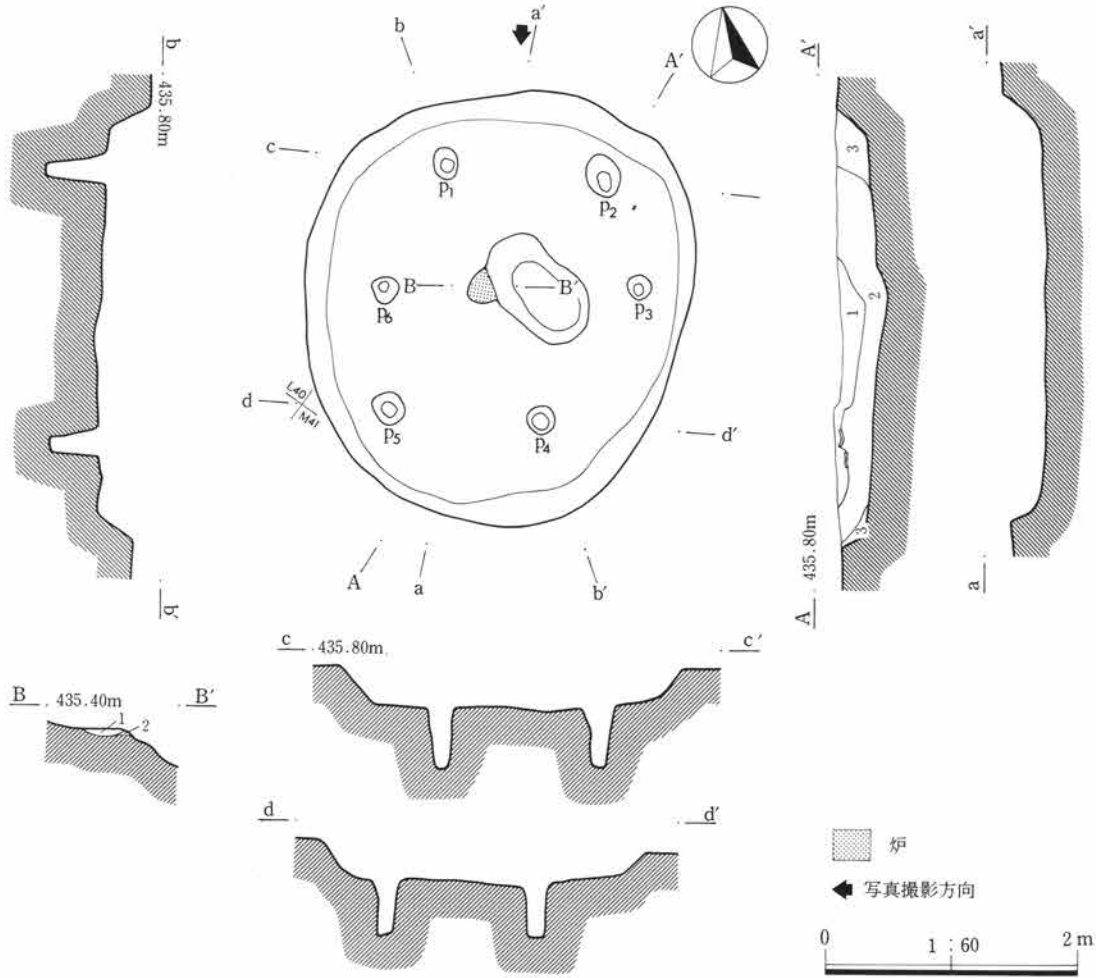
第2層 暗褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を多量に含み、炭化物粒子を少量含む。

第3層 黄褐色土層 やや固く締り粘性が少しある。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

遺物は第1層の黒褐色土層中からまとまって出土している。

**形状** 長径3.49m、短径3.11mのほぼ円形を呈している。面積約7m<sup>2</sup>であるから、居住人員は約2.1人となる。

**壁高** 住居跡確認面より約20~31cmで床面に達する。床面からゆるやかに立ちあがっている。



第164図 J-4号住居跡

**床面** 一部硬く踏み固められているが、壁寄りには軟弱である。また凹凸が認められる。床面中央部に炉を壊して土坑が存在するが、覆土からはその掘り込みを確認することはできなかった。土坑覆土から判断すると、比較的新しい時期のものである。

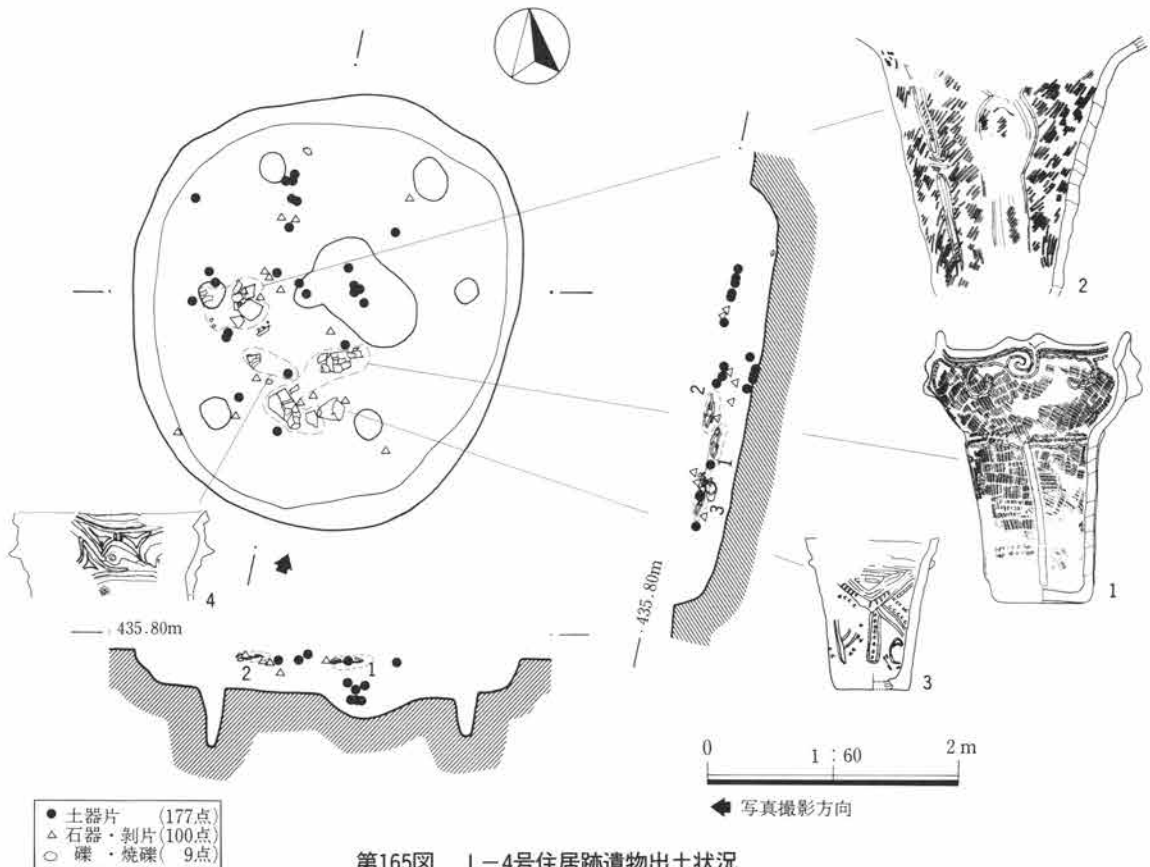
**周溝** 検出できなかった。

**柱穴** 総計6個のピットが検出された。いずれのピットも支柱穴を構成するものである。ピットの深さは、P<sub>1</sub>48cm、P<sub>2</sub>48cm、P<sub>3</sub>34cm、P<sub>4</sub>42cm、P<sub>5</sub>42cm、P<sub>6</sub>48cmであり、ほぼ同じ深さを測る。また、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間距離126cm、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>間距離90cm、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間距離130cm、P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>間距離124cm、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>間距離100cm、P<sub>6</sub>・P<sub>1</sub>間距離108cmをそれぞれ測る。出入口部については明らかにすることはできなかった。

**炉** 床面を掘り窪めた地床炉である。土坑によって壊されているために規模は不明であるが、現状では長径21cm、短径26cm、深さ5cmを測り、楕円形を呈していたものと思われる。また、その位置は中央部からやや北寄りに存在している。

No.	上	深さ(cm)	備考
	長径×短径(cm)		
1	25×20cm	48cm	支柱穴
	10×10cm		
2	36×26cm	48cm	"
	16×10cm		
3	19×19cm	34cm	"
	10×8cm		
4	23×22cm	42cm	"
	13×12cm		
5	25×22cm	42cm	"
	12×11cm		
6	22×20cm	48cm	"
	8×8cm		

J-4号住居跡ピット計測表



第165図 J-4号住居跡遺物出土状況

覆土は2層に分かれ、第1層は赤褐色土層、第2層は焼土層である。

**遺物出土状況** 覆土第1層からほぼ完形品を含む遺物が出土している。一部は炉を壊している土坑の底面ちかくから出土しているが、これらは土坑の掘り込みにともなう混入であろう。平面的分布は住居跡南西部に集中する傾向が認められる(第165図)。

**出土遺物**(第166・167図、PL.64)

覆土からは大木7b式土器(第166図-1)をはじめ177点の縄文時代中期土器片が出土している。その部位別点数は口縁部片47点、胴部片126点、底部片4点である。また前期土器片5点も混入していた。第166図3・5～7は勝坂式、2・4・8～11は五領ヶ台式、12は阿玉台式土器である。石器・礫等は109点出土し、チップ・フレイクで40%以上占め、他にスクレイパー・打製石斧・石匙等が出土している。使用石材は黒色頁岩が圧倒的に多く、約90%ちかくを占めている。詳細は第168図の器種別・石材別グラフに示した。

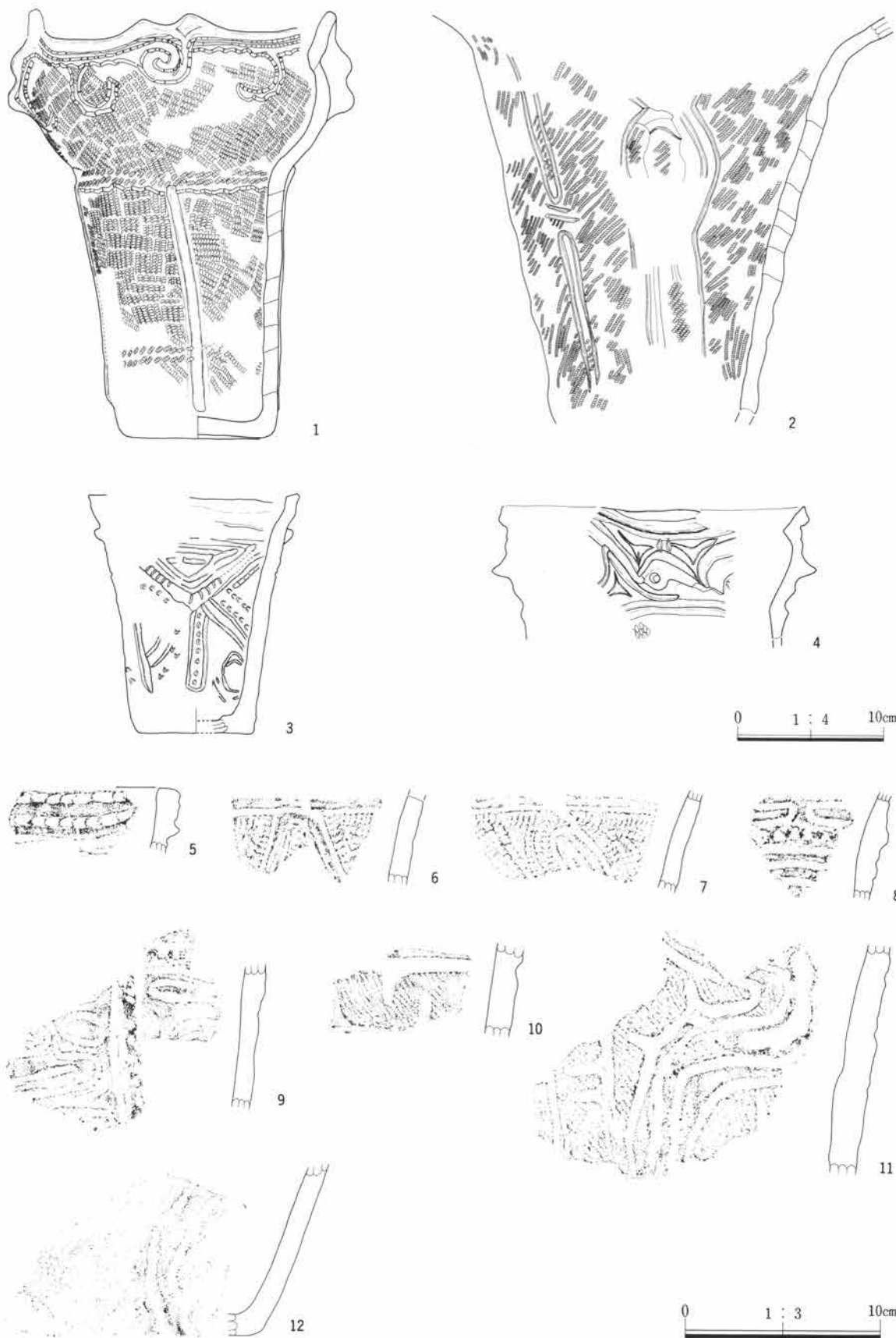
**時期** 出土遺物から判断すると、当住居跡は縄文時代中期前半の段階に相当する。

J-4号住居跡遺物観察表

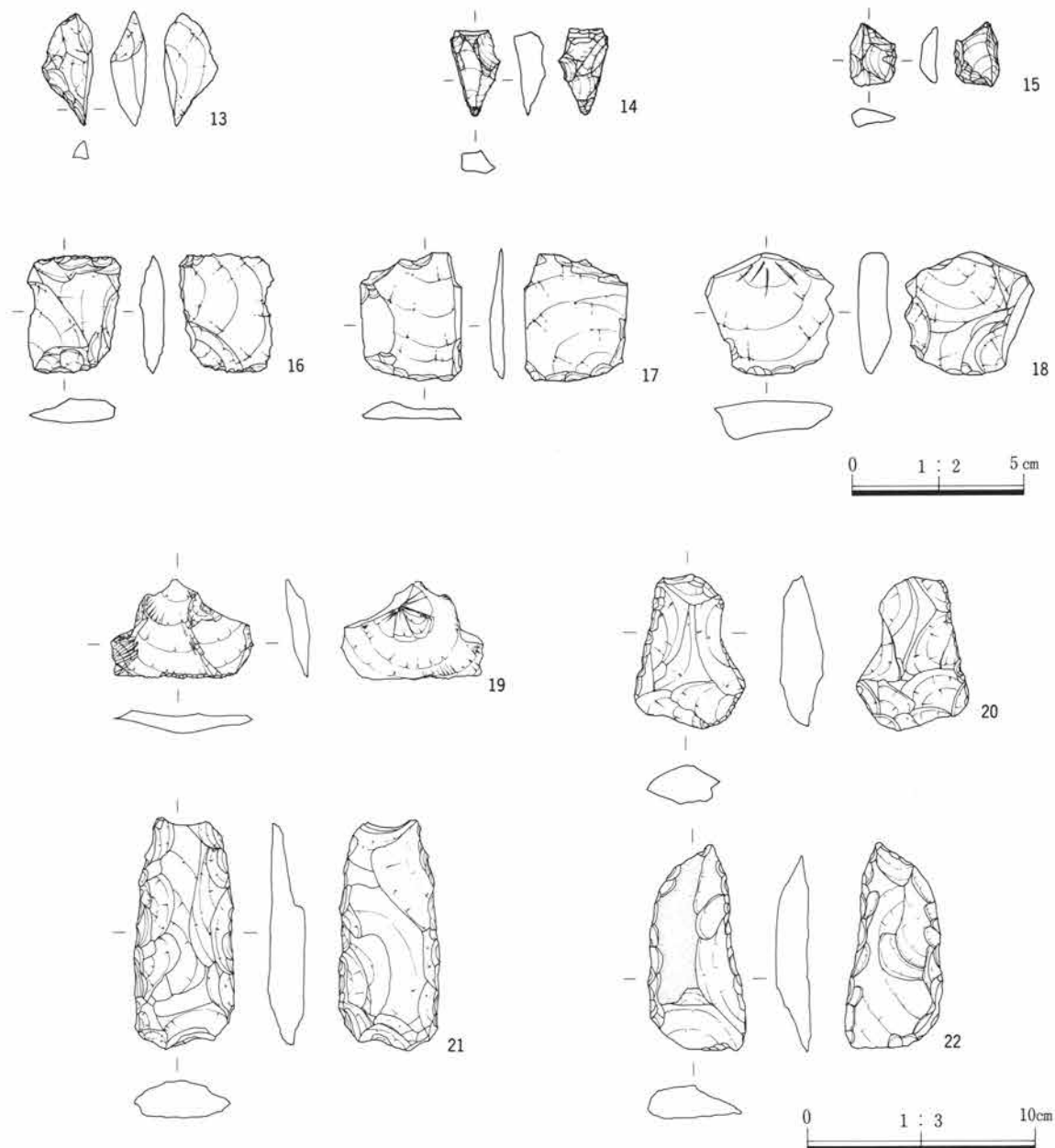
(法量: ①口径②器高(現高)⑤底径) \*第35図参照

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
166-1 PL.64	深鉢形	① 20.9 ② 29.1 ⑤ 10.0	①雲母を含む ②良 ③外面 濃い褐色 内面褐灰色	口縁部に小突起。器厚5mm～9mm。内面は丁寧な調整が行われている。	R <sub>1</sub> の縄文施文後、括れ部と胴下部に2列の縄文原体圧痕。隆帯に沿って2列の角押文。	覆土
166-2 PL.64	深鉢形	②(27.4)	①粗砂を含む ②良 ③外面 赤褐色 内面 赤褐色	胴部約 $\frac{1}{2}$ 。器厚1cm～1.2cm。内面は粗い調整が行われている。輪積み痕が残っている。	R <sub>1</sub> の縄文施文後、隆帯。隆帯に沿って棒状工具による沈線が施されている。	覆土



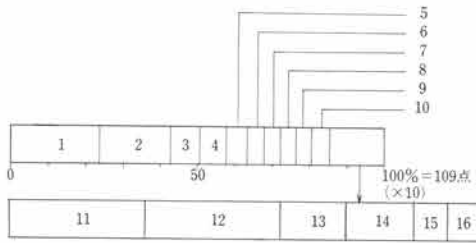


第166图 J-4号住居跡出土遺物(1)

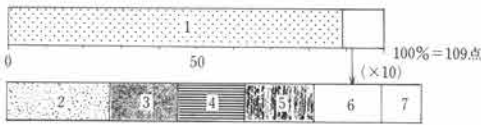


第167図 J-4号住居跡出土遺物(2)

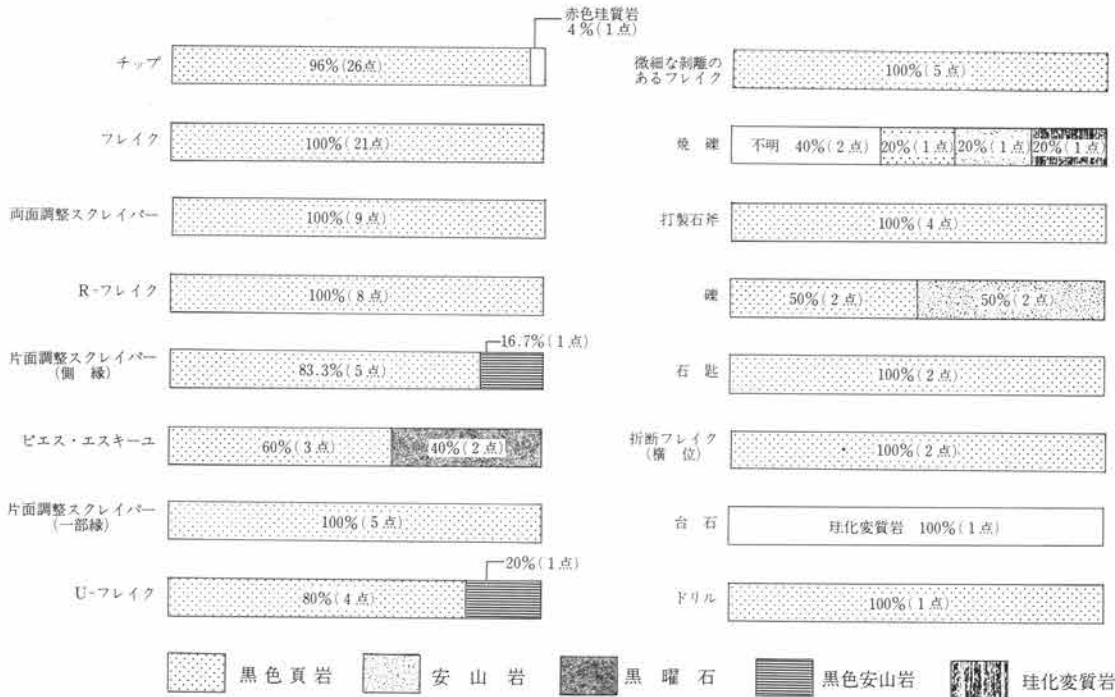
図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
166-3 PL. 64	深鉢形	① 14.7 ② 16.0 ⑤ 8.0	①細礫を含む ②良 ③外面 赤褐色 内面 暗赤褐色	ほぼ完形品。器厚6mm~9mm。内 面は粗い調整が行われている。	口唇部に無文帯。刻目を有する隆 帯に沿って棒状工具による沈線、 半載竹管による刺突。	覆土
166-4	深鉢形	①(20.8) ②(9.0)	①粗砂を含む ②良 ③外面 暗赤 褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の口縁部片で器厚7mm ~9mm。内面は丁寧な調整が行わ れている。	隆帯に沿って沈線、三叉文。胴部 にはR(1/2)の縄文が施文されてい る。	覆土
166-5	口縁部 片		①粗砂を含む ②良 ③外面にふい 橙色 内面 褐灰色	器厚7mm~1cmで口唇部はやや丸 味をもつ。内面は横ミガキが行わ れている。	隆帯に沿って沈線と先端が丸いへ ら状工具を横位に押し引きながら 刺突している。	覆土



器種	%	点
1 チップ	23.85	26
2 フレイク	19.27	21
3 両面調整スクレイパー	8.25	9
4 R-フレイク	7.34	8
5 片面調整スクレイパー(側縁)	5.50	6
6 ビエス・エスキーユ	4.59	5
7 片面調整スクレイパー(一部縁)	4.59	5
8 U-フレイク	4.59	5
9 微細な剥離のあるフレイク	4.59	5
10 焼礫	4.59	5
11 打製石斧	3.67	4
12 礫	3.67	4
13 石匙	1.83	2
14 折断フレイク(横位)	1.83	2
15 台石	0.92	1
16 ドリル	0.92	1
	100.00	109



石材	%	点
1 黒色頁岩	88.99	97
2 安山岩	2.76	3
3 黒曜岩	1.83	2
4 黒色安山岩	1.83	2
5 珪化変質岩	1.83	2
6 不明	1.83	2
7 赤色珪質岩	0.93	1
	100.00	109



第168図 J-4号住居跡出土石器の器種別・石材別グラフ

図番 PL	器種 (部位)	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 (遺存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様 (その他)	出土状況
166-6 7	胴部片		①細砂を含む ②良 ③外面 暗褐色 内面 黒褐色	6・7は同一個体。深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。内面は丁寧な調整が行われている。	沈線を施した後に、ペン先状の刺突と幅広の竹管による刺突が行われている。	覆土
166-8	胴部片		①粗砂を含む ②良 ③外面 暗褐色 内面 黒褐色	8・9は同一個体。深鉢形土器の胴部片。器厚7mm~9mm。内面は丁寧な調整が行われている。	隆帯に沿って棒状工具による沈線が施されている。隆帯上には刺突。	覆土

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況			
166-9	胴部片		①雲母を含む ②良 ③外面 暗褐色 内面 灰褐色	8・9は同一個体。深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。内面は丁寧な調整が行われている。	隆帯に沿って棒状工具による沈線が施されている。内面に一部煤が付着している。	覆土			
166-10	胴部片		①雲母を含む ②良 ③外面 暗赤褐色 内面 赤褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚1cm。内面は荒れている。	R <sub>1</sub> の縄文施文後、棒状工具による沈線が施されている。	覆土			
166-11	胴部片		①雲母を含む ②良 ③外面にふい 橙色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚1.4cm。内面は丁寧な調整が行われている。	R <sub>1</sub> の縄文施文後、隆帯に沿って棒状工具による沈線が施されている。	住居跡中央部			
166-12	底部片		①石英を含む ②良 ③外面にふい 橙色 内面 褐灰色	深鉢形土器の底部片で開いて立ち上がる。器厚1cm。内面は丁寧な調整が行われている。	隆帯に沿って沈線が施されている。	覆土			
図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 ( )は現存値				備 考	出土状況
				全長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
167-13 PL. 64	ドリル	完形	黒色頁岩	3.3	1.5	0.9	3.3	小さな剥片を素材とし、一端を錐状に加工。	覆土
167-14 PL. 64	ピエス・エ スキーユ	完形	黒曜石	2.4	1.3	0.8	2.1	縦長剥片を素材とし、上下両端に剥離痕がみられる。	覆土
167-15 PL. 64	ピエス・エ スキーユ	完形	黒曜石	1.7	1.3	0.5	1.0	縦長剥片を素材とし、下端に小剥離痕がみられる。	覆土
167-16 PL. 64	ピエス・エ スキーユ	完形	黒色頁岩	3.4	2.7	0.7	8.3	横長剥片を素材とし、上下両端に小剥離痕がみられる。	覆土
167-17 PL. 64	ピエス・エ スキーユ	完形	黒色頁岩	3.7	2.9	0.4	6.9	縦長剥片を素材とし、下端に剥離痕がみられる。	覆土
167-18 PL. 64	ピエス・エ スキーユ	完形	黒色頁岩	3.5	3.7	0.9	16.7	縦長剥片を素材とし、下端に剥離痕がみられる。	覆土
167-19 PL. 64	石匙	完形	黒色頁岩	4.3	6.2	0.8	20.2	横型。縦長剥片を素材とし、刃部は直線状を呈す。	覆土
167-20 PL. 64	石匙	完形	黒色頁岩	6.7	4.7	1.7	45.5	縦型。左側縁に刃部加工。	住居跡南壁寄り
167-21 PL. 64	打製石 斧	完形	黒色頁岩	10.0	4.3	1.6	78.9	短冊形。両側縁がほぼ直線的である。	住居跡南壁寄り
167-22 PL. 64	打製石 斧	完形	黒色頁岩	8.9	4.1	1.4	61.9	短冊形。両側縁がほぼ直線的である。	覆土

## J-5号住居跡(第169・170図、PL.26)

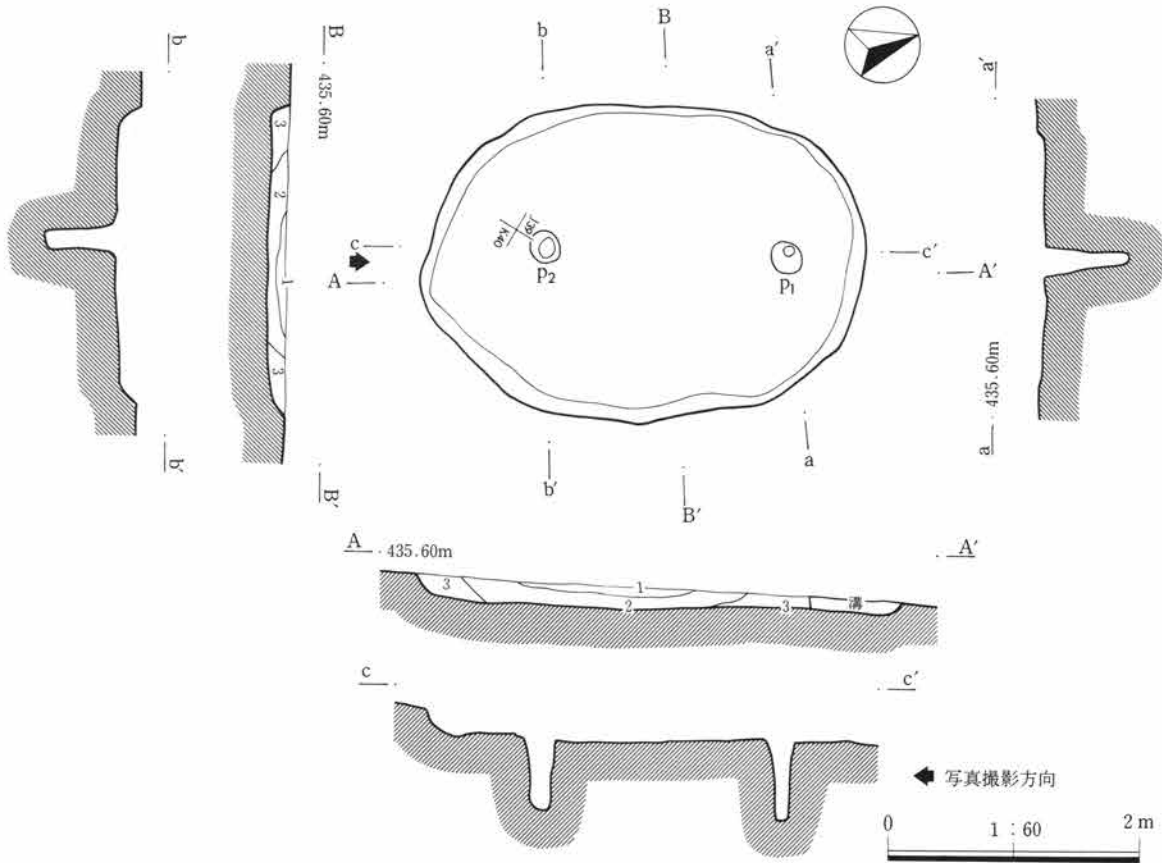
**位置** J-39・40、K-39・40グリッドにかけてローム層直上で検出された。J-4号住居跡の北約8mのところに位置する。

**経過** 9月16日から調査を開始した。床面まで比較的浅く、また規模も小さかったために調査時間はさほどかからなかった。しかし遺物の出土状況、ならびに住居構造等から特異な住居跡との観を受けた。

**覆土** ローム層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

**第1層** 黒褐色土層 やや固く粘性はあまりない。ローム粒子を多量に、炭化物粒子・赤色スコリア粒子を少量含む。

**第2層** 暗褐色土層 やや固く締り粘性がある。ロームブロック・ローム粒子を多量に、赤色スコリア粒子



第169図 J-5号住居跡

を少量含む。

第3層 黄褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を多量に、赤色スコリア粒子を少量含む。

覆土はJ-4号住居跡とほぼ同一層であった。

形状 長径3.54m、短径2.46mの楕円形を呈している。面積約6.24m<sup>2</sup>であるから、居住人員は約2人となる。

壁高 住居跡確認面より約4~16cmで床面に達する。床面からゆるやかに立ちあがっている。壁の残存状況は非常に悪かった。床面 ほぼ平坦である。住居北側に新しい溝が存在するが、平面図からは除外した。

周溝 検出できなかった。

柱穴 ピット2個が検出された。P<sub>1</sub>の深さは64cm、P<sub>2</sub>は56cmであり、両者の間隔は195cmを測る。2本柱の竪穴住居跡となる。

炉 検出できなかった。床面に焼土の痕跡は全く認められなかった。

遺物出土状況 覆土・床面から出土した遺物は非常に少なかった。土器の出土は全くなく、石器・礫等が出土しただけであった(第170図)。

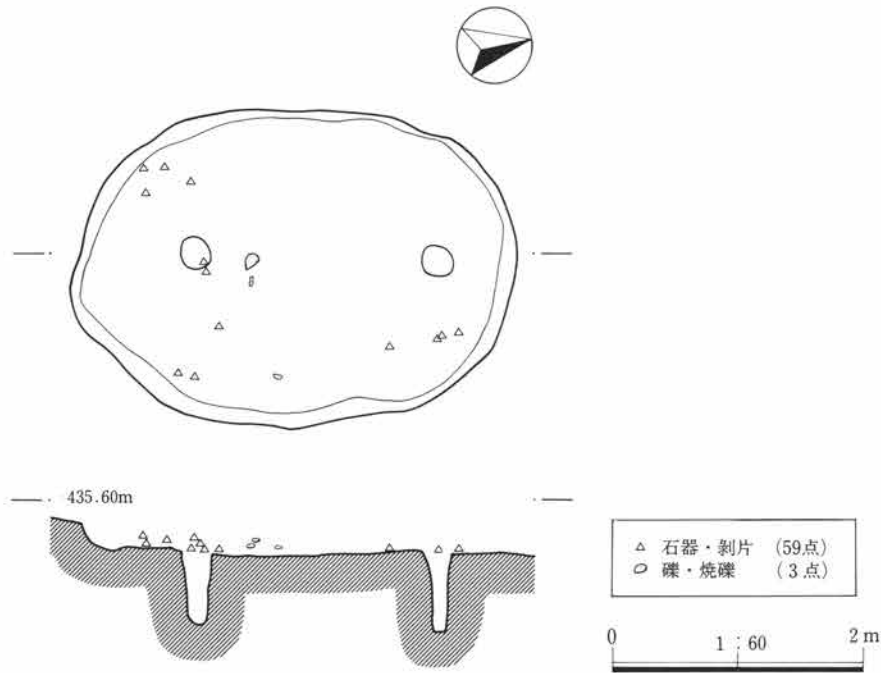
出土遺物(第171図、PL.65)

覆土・床面から62点の石器・礫等が出土した。54%以上がチップであり、この他にスクレイパー・石鏃・打製石斧等が出土している。使用石材は95%以上を黒色頁岩が占めている。

なお、詳細は第172図の器種別・石材別グラフに示した。

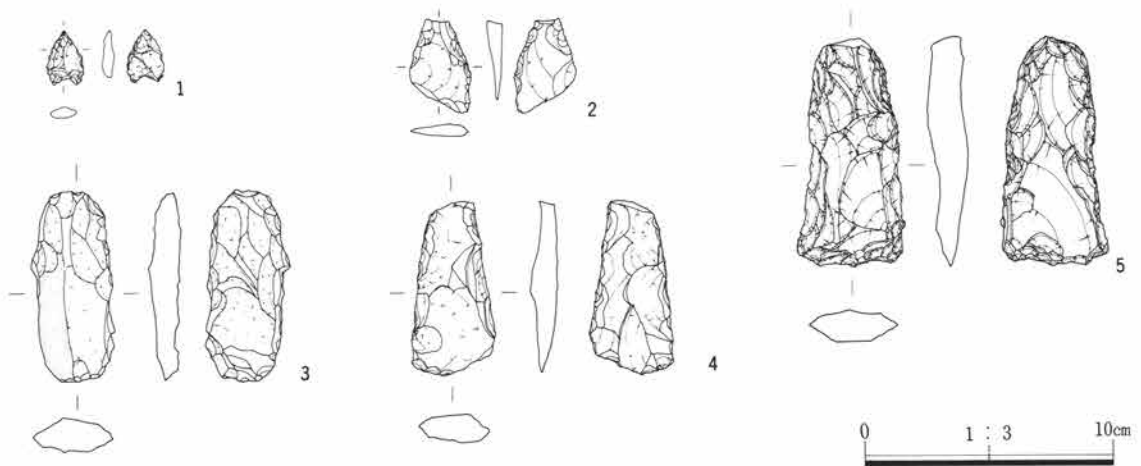
No.	上	長さ×短径(cm)	深さ(cm)	備考
	下			
1	27×24cm 8×8cm		64cm	支柱穴
2	25×24cm 15×13cm		56cm	〃

J-5号住居跡ピット計測表



第170図 J-5号住居跡遺物出土状況

**時期** 当住居跡からは土器の出土は全くなかったが、覆土がJ-4号住居跡と同一であること、また住居構造等から判断して、縄文時代中期前半（阿玉台II式期）の所産であることは間違いのないであろう。しかし石器のみの出土や2本柱で炉を持たないことから考えると、一般的な住居と考えるよりも作業小屋もしくはそれに近い使用目的の小屋と考えられるかもしれない。

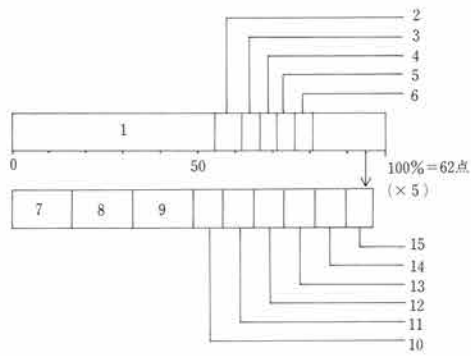


第171図 J-5号住居跡出土遺物

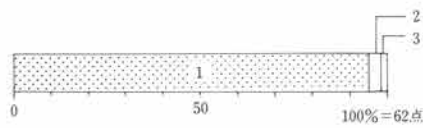
J-5号住居跡石器一覧表

[単位はcmおよびg、( )内は現存値]

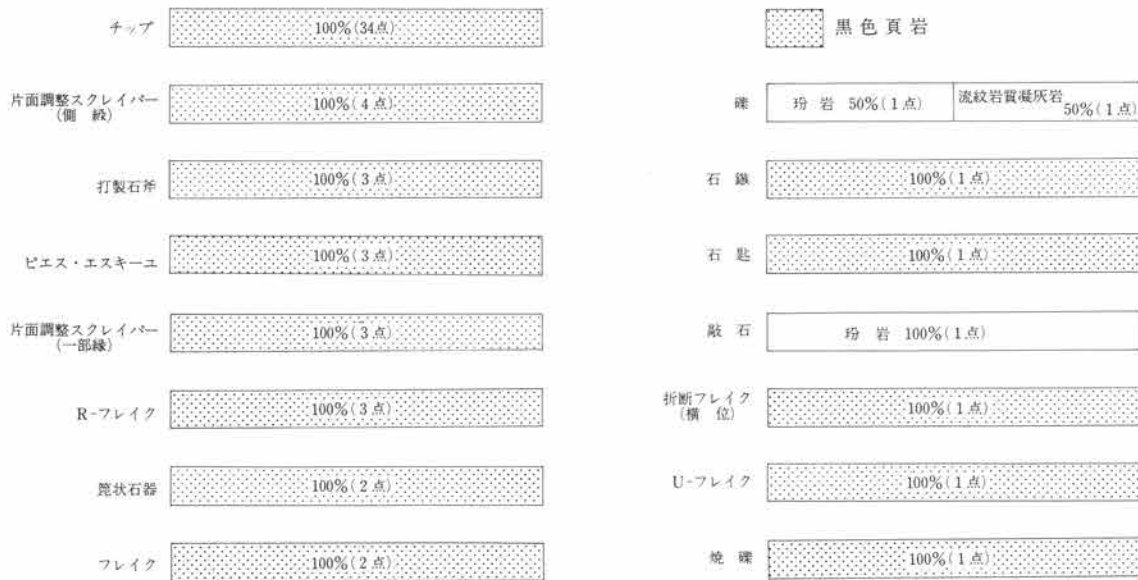
図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計 測 値				備 考	出土状況
				全長	最大幅	最大厚	重量		
I71-1 PL. 65	石 鎌	完 形	黒色頁岩	2.1	1.5	0.4	1.2	側縁は中央部で外側に彎曲し、基部の挟りは逆U字形をなす。	覆 土



器種	%	点
1 チップ	54.85	34
2 片面調整スクレイパー(側縁)	6.47	4
3 打製石斧	4.84	3
4 ビエス・エスキュー	4.84	3
5 片面調整スクレイパー(一部縁)	4.84	3
6 R-フレイク	4.84	3
7 筥状石器	3.22	2
8 フレイク	3.22	2
9 礫	3.22	2
10 石 鏃	1.61	1
11 石 匙	1.61	1
12 敲 石	1.61	1
13 折断フレイク(横位)	1.61	1
14 U-フレイク	1.61	1
15 焼 礫	1.61	1
	100.00	62

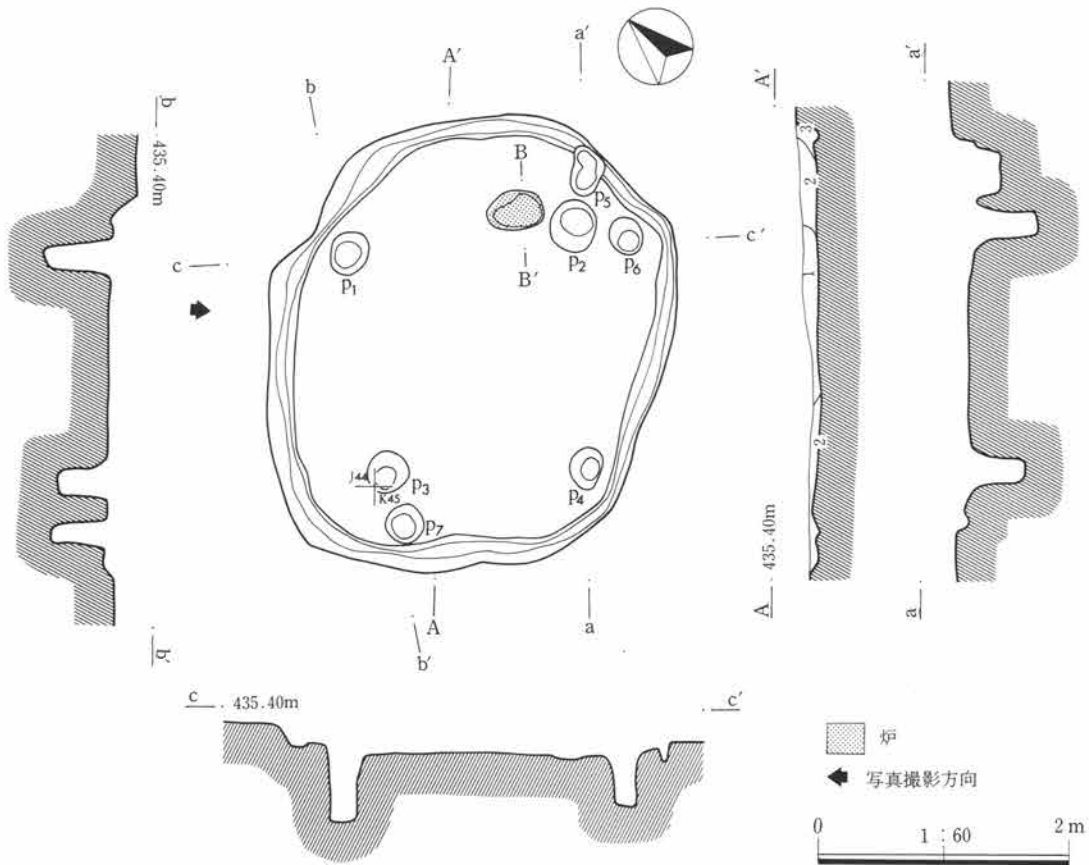


石 材	%	点
1 黒色頁岩	95.17	59
2 珩 岩	3.21	2
3 流紋岩質凝灰岩	1.62	1
	100.00	62



第172図 J-5号住居跡出土石器の器種別・石材別グラフ

図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計 測 値				備 考	出土状況
				全長	最大幅	最大厚	重量		
171-2 PL. 65	石 匙	つまみ欠	黒色頁岩	(3.3)	2.5	0.6	(4.7)	縦型。横長剥片を素材とし、右側縁に刃部加工。	覆 土
171-3 PL. 65	打製石斧	完 形	黒色頁岩	7.6	3.2	1.2	34.9	短冊形。両側縁がほぼ直線である。	住居跡北東コーナー
171-4 PL. 65	打製石斧	基部欠	黒色頁岩	(6.8)	3.3	1.0	(28.3)	短冊形。"	住居跡南西コーナー
171-5 PL. 65	打製石斧	完 形	黒色頁岩	9.0	4.2	1.5	67.9	短冊形。"	住居跡南西コーナー



第173図 J-6号住居跡

J-6号住居跡 (第173・174図、PL.27)

**位置** J-44・45、K-44・45グリッドにかけて検出された。近接してJ-2号住居跡が存在する。

**経過** 9月18日に住居跡を確認し、調査を開始した。遺構が路線外に伸びていたために、借地を行って完掘することができた。覆土からは遺物の出土はほとんどなかった。

**覆土** ローム層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

第1層 黒褐色土層 締り良い。 第2層 茶褐色土層 締り良い。 第3層 黄褐色土層 締り良くロームブロックを含んでいる。

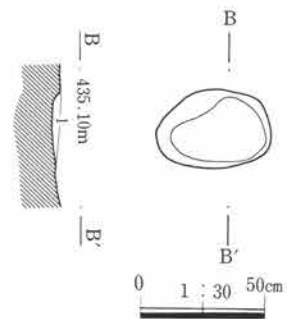
**形状** 長径3.86m、短径3.13mの楕円形を呈している。面積約7.7m<sup>2</sup>であるから、居住人員は約2.3人となる。

**壁高** 住居跡確認面より約5～18cmで床面に達する。床面からゆるやかに立ちあがる。

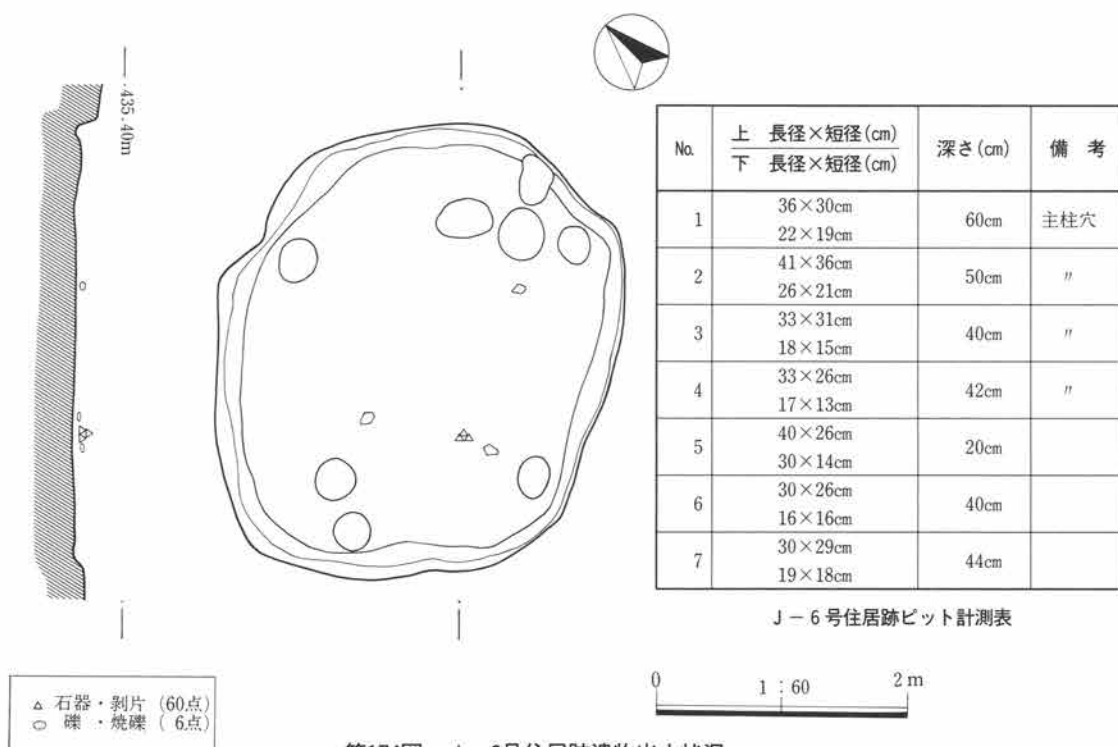
**床面** ほぼ平坦である。

**周溝** 幅8～19cm、深さ3～10cmの周溝が全周している。

**柱穴** 総計7個のピットが検出された。P<sub>5</sub>は深さ20cmであり、他のピットに比べると浅く主柱穴とはなり得ない。またP<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>はそれぞれ40cm、44cmの深さがあるので主柱穴となり得るが、その位置から判断すると否定的である。結局P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4個のピットが主柱穴になると考えられる。P<sub>1</sub>の深さは60cm、P<sub>2</sub>50cm、P<sub>3</sub>40cm、P<sub>4</sub>42cmであり、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間距離185cm、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間距離165cm、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>間距離180cm、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>間距離200cmをそ







第174図 J-6号住居跡遺物出土状況

れぞれ測る。P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間距離がP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間距離に比べてやや狭いこと、また深さも浅く、さらに炉の位置から総合的に判断すると、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間が当住居跡の出入口部にあたると思われる。

**炉** 床面を掘り窪めた地床炉である。長径46cm、短径31cm、深さ4cmの楕円形を呈し、面積約0.08m<sup>2</sup>である。住居北側に位置し、P<sub>2</sub>に近接して構築されている。覆土は次のとおりである。

**第1層 赤褐色土層** やや固いが締り悪い。粘性が少しある。焼土・ローム・黒色土の混合土であり、底面は焼けている。

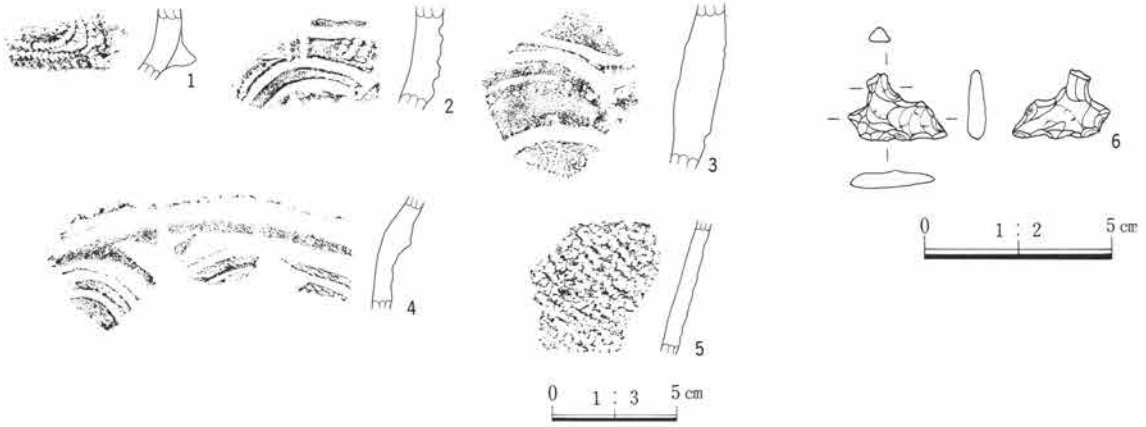
**遺物出土状況** 覆土・床面から出土した遺物の量は非常に少なかった。出土した土器片は中期41点、前期14点、弥生6点であり、石器・礫等は66点であった。いずれも覆土から散漫的に出土した(第174図)。

#### 出土遺物 (第175図、PL.65)

当住居跡から出土した土器の内訳は、中期土器片41点、前期土器片14点、弥生土器片6点であった。中期土器片の部位別点数は、口縁部片2点、胴部片39点であり、いずれも細片であった。このうちの5点を拓本で図示した。第175図1は勝坂式、2・3は五領ヶ台式、4は阿玉台式土器である。

石器・礫等は66点出土している。フレイク26点、片面調整スクレイパー(側縁)7点、U-フレイク7点、チップ7点、礫5点、両面調整スクレイパー3点、折断フレイク(横位)3点、打製石斧2点、R-フレイク2点、石匙・砥石・コア・焼礫がそれぞれ1点であった。また使用された石材は黒色頁岩が圧倒的に多く52点(78.79%)を占めている。次に黒色安山岩と安山岩が同数の5点(7.58%)となり、他に赤色珪質岩・輝緑岩が使用されている。詳細は第177図の器種別・石材別グラフに示してある。

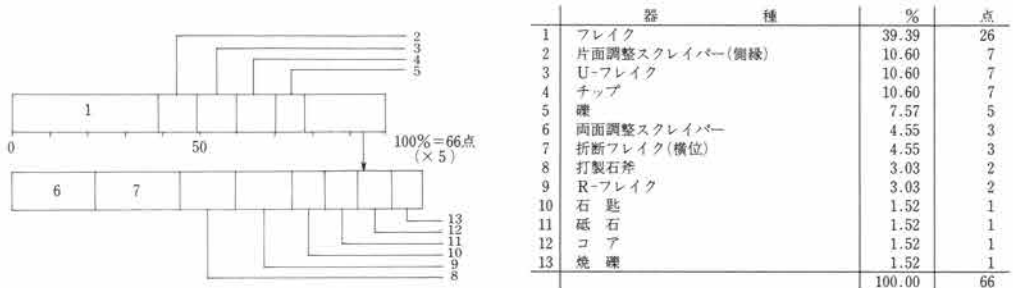
**時期** 出土遺物から判断すると、当住居跡は縄文時代中期前半の段階に相当する。



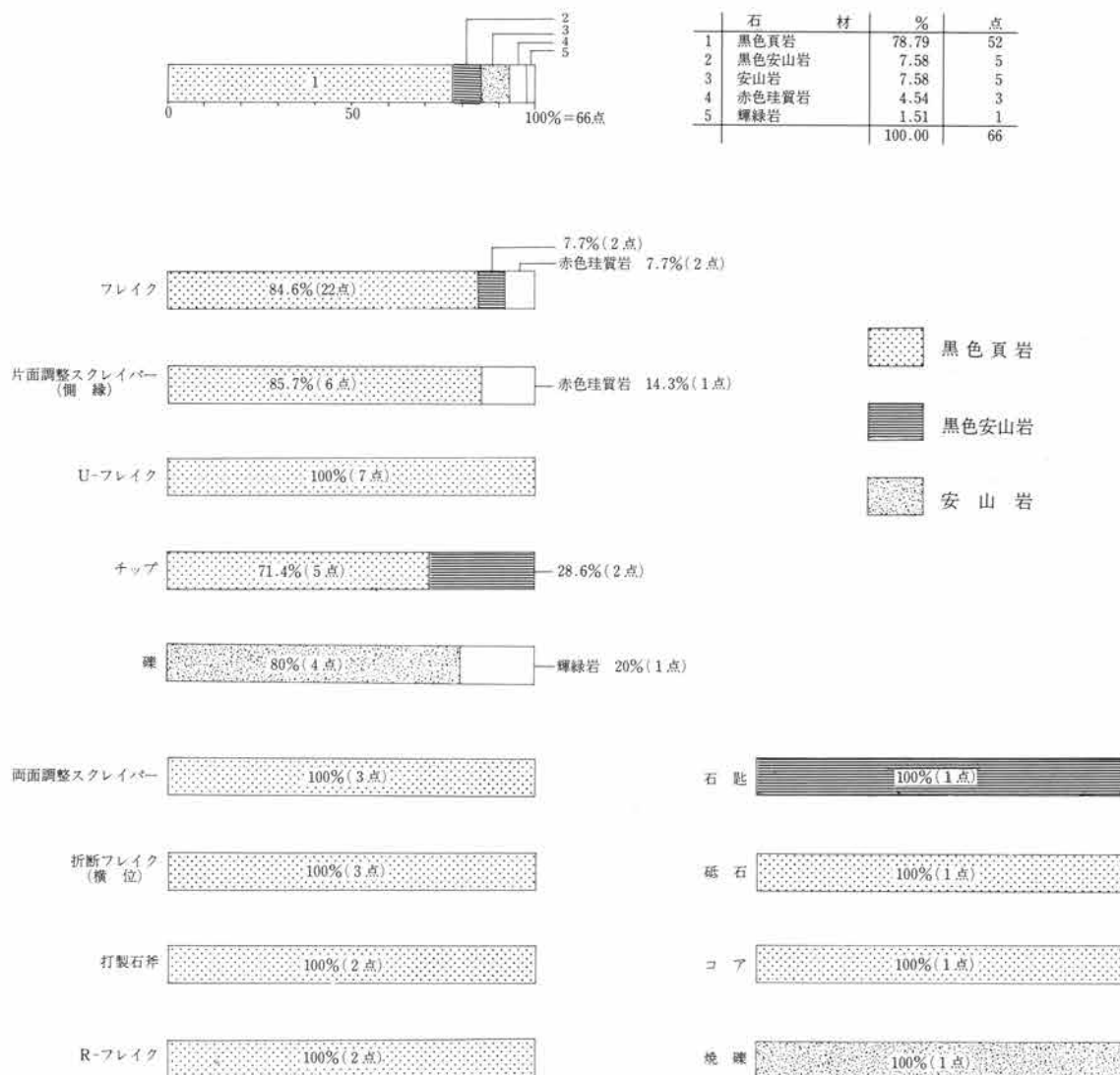
第175図 J-6号住居跡出土遺物

J-6号住居跡遺物観察表

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
175-1 PL. 65	頸部片		①粗砂を含む ②良 ③外面赤褐色 内面 ぶい赤褐色	深鉢形土器の頸部片。器厚9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。	隆帯に沿って先端を有するへら状 工具による連続刺突が施されてい る。	覆土
175-2 PL. 65	胴部片		①雲母を含む ②良 ③外面 暗赤 褐色 内面暗赤褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm～ 1.1cm。内面は丁寧な調整が行われ ている。	R(1/2)の縄文施文後、棒状工具によ る沈線が施されている。	覆土
175-3 PL. 65	胴部片		①雲母・石英を含む ②やや良 ③外面暗 赤褐色 内面赤褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚1.1cm。 内面は荒れている。	棒状工具による沈線・三叉文が施 されている。	覆土
175-4 PL. 65	胴部片		①雲母を含む ②良 ③外面 暗赤 褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は丁寧な調整が行われている。	隆帯に沿って棒状工具による沈線 が施されている。	覆土
175-5 PL. 65	胴部片		①雲母・細礫を含む ②良 ③外面にぶい 橙色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚6mm。 内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR(1/2)。	覆土
175-6 PL. 65	石 匙	完 形	黒色安山岩	1.8 2.3 0.4 1.7	横型。刃部は直線状を呈す。	覆土



第176図 J-6号住居跡出土石器の器種別・石材別グラフ (1)



第177図 J-6号住居跡出土石器の器種別・石材別グラフ (2)

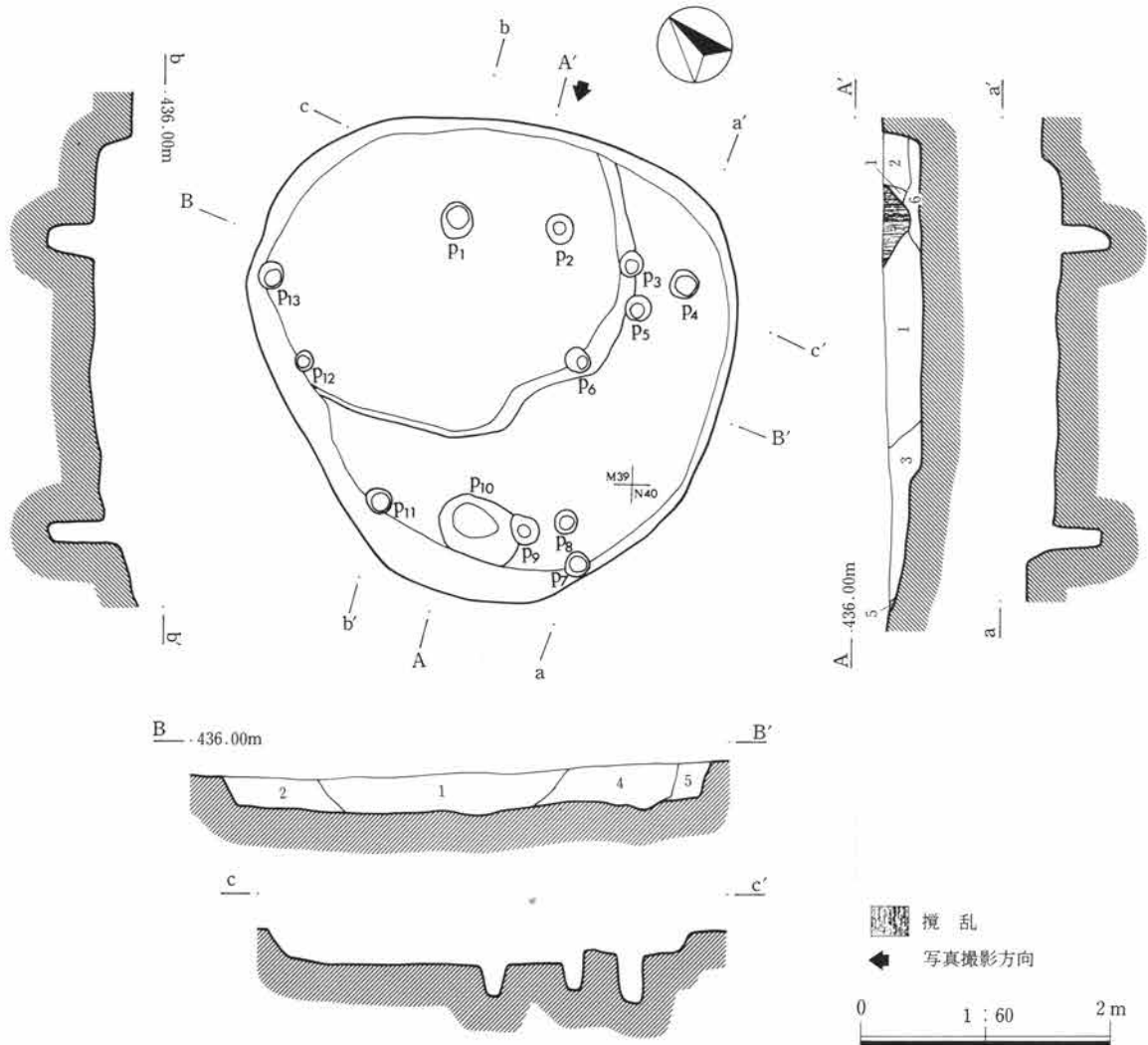
J-7号住居跡 (第178・179図、PL.27)

位置 M-39・40、N-39・40グリッドにかけて検出された。J-4号住居跡の西約5mのところに位置し、またJ-9号住居跡、J-10号住居跡に近接している。

経過 10月1日から調査を開始した。下旬には調査を終了したが、当住居跡には床面に段差が認められるなど検討すべき事項があった。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

- 第1層 暗褐色土層 やや固く締り粘性がある。ロームブロック・ローム粒子・炭化物粒子を多量に含む。
- 第2層 茶褐色土層 やや固く締り粘性はあまりない。ロームブロック・粒子を多量に、炭化物を少量含む。
- 第3層 暗褐色土層 やや固く締り粘性がある。ローム粒子を多量に、ロームブロック・炭化物粒子・赤色



第178図 J-7号住居跡

スコリア粒子を少量含む。1層よりもやや明るい色調。

第4層 黒褐色土層 やや固く締り粘性がある。ローム粒子・炭化物粒子・赤色スコリア粒子を少量含む。

第5層 黄褐色土層 やや固く締り粘性がある。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

第6層 暗褐色土層 やわらかくて締り悪い。粘性が非常にある。炭化物粒子を多量に、ローム粒子も含む。

形状 長径3.93m、短径3.8mの楕円形を呈している。面積約9.9m<sup>2</sup>であるから、居住人員は約3人となる。

壁高 住居跡確認面より約15~25cmで床面に達する。床面からゆるやかに立ちあがる。

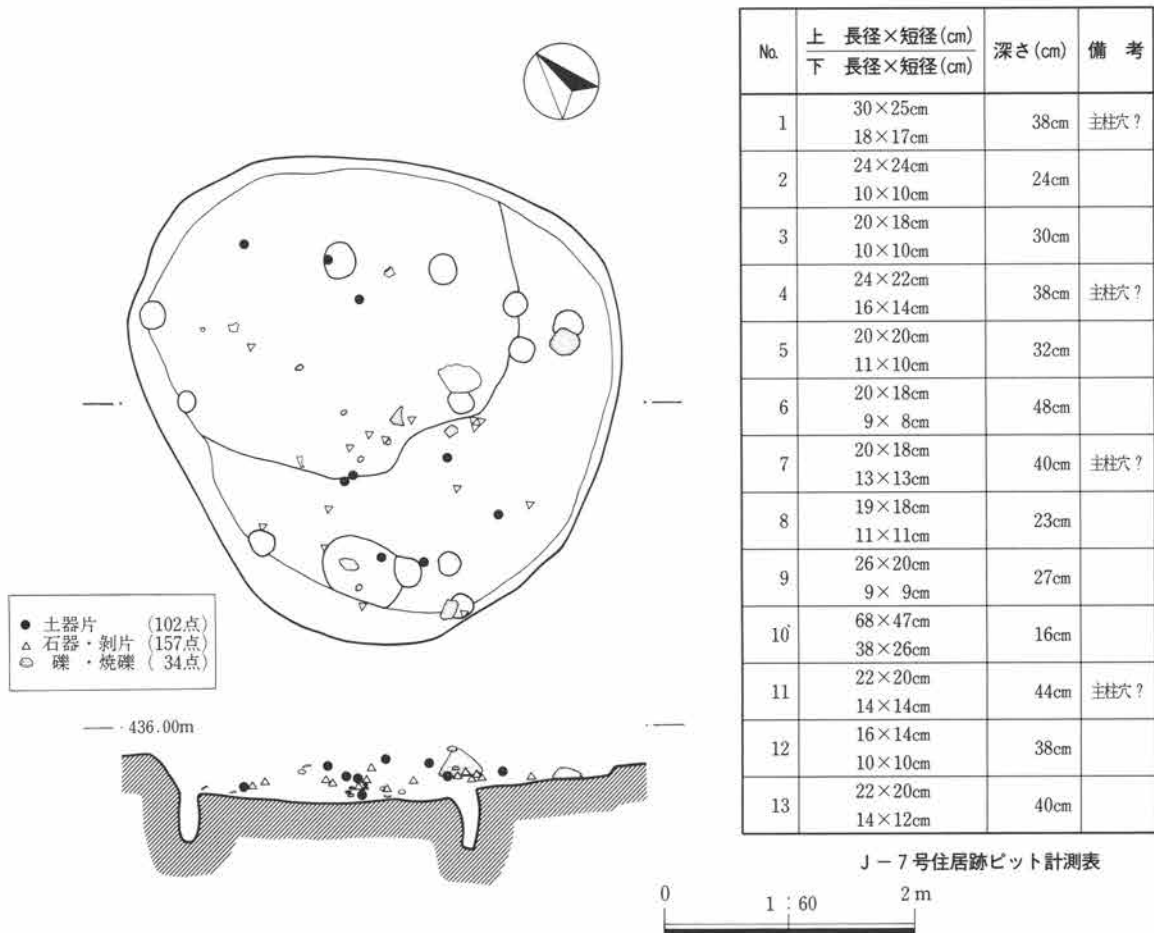
床面 段差が認められた。全体的に硬い床面である。段差の問題については後で触れたい。

周溝 検出できなかった。

柱穴 総計13個のピットが検出された。一番浅いピットはP<sub>10</sub>の16cm、次に20cm代はP<sub>8</sub>の23cm、P<sub>2</sub>24cm、P<sub>9</sub>27cmであり、他のピットは30cmを超えるものである。このなかで主柱穴となり得るものはどれか判断に苦しむが、P<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>11</sub>が該当するものであろうか。

炉 検出できなかった。床面に焼土の痕跡はなかった。

遺物出土状況 覆土・床面上から遺物が出土しているが、その量は比較的少なかった(第179図)。

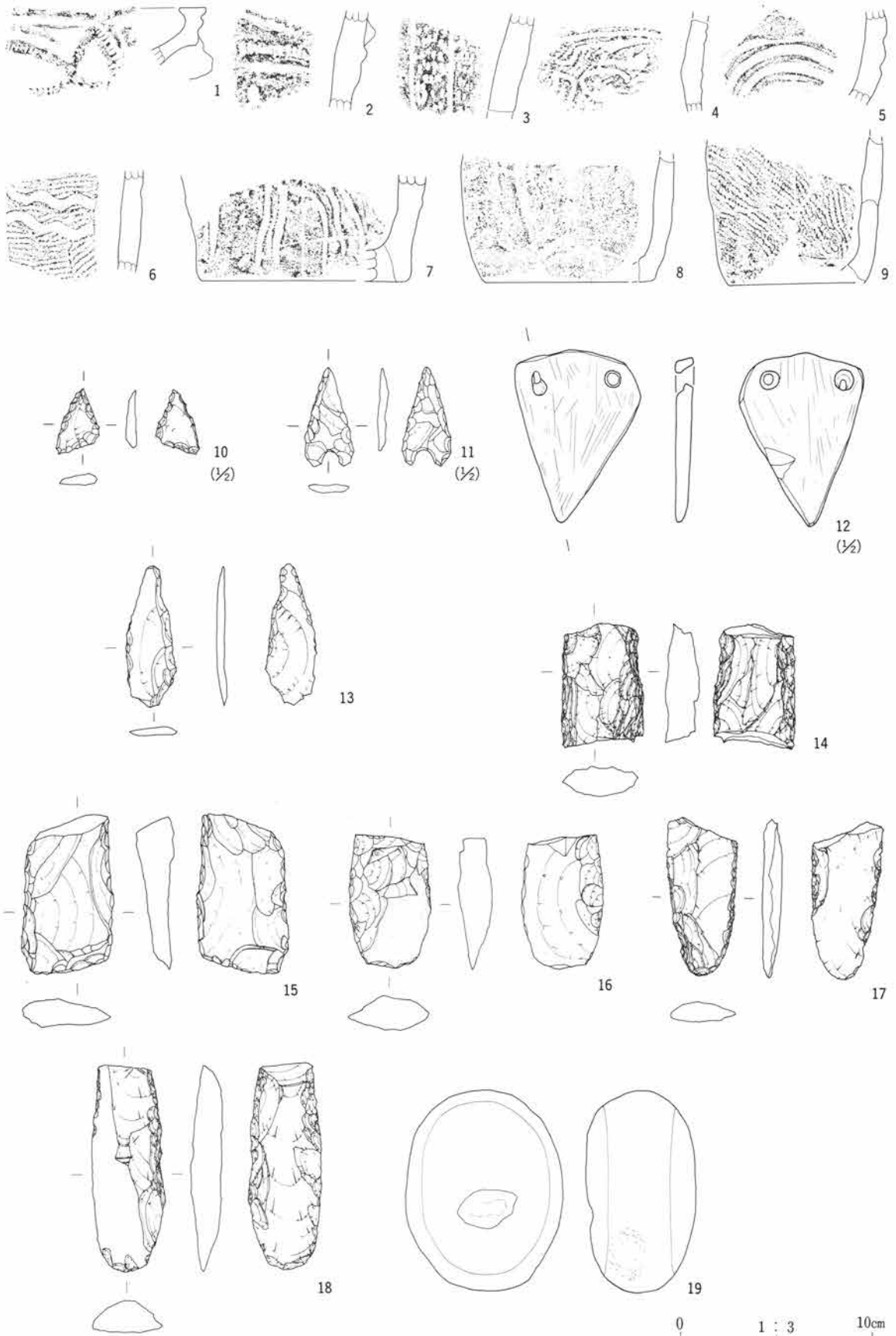


第179図 J-7号住居跡遺物出土状況

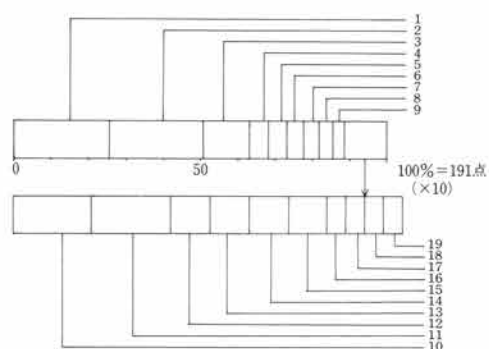
## 出土遺物 (第180図、PL.65)

当住居跡から出土した土器の内訳は、中期土器片102点、前期土器片15点、弥生土器片3点であった。中期土器片の部位別点数は、口縁部片13点、胴部片81点、底部片8点であるが、いずれも細片であるために9点だけを拓本で図示した。第180図1・4・5～7は五領ヶ台式、2・7・9は勝坂式、8は阿玉台式土器である。また石器・礫等は191点出土し、フレイク・チップで50%以上を占め、この他に両面・片面調整スクレイパー、打製石斧、石鏃、垂飾品等が出土した。使用された石材は黒色頁岩が圧倒的に多く、86%以上を占めている。詳細は第181図の器種別・石材別グラフに示してある。

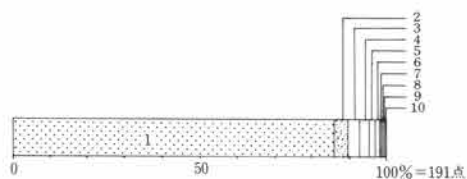
**時期** 出土遺物から判断すると、当住居跡は縄文時代中期前半の段階に相当する。なお、当住居跡は床面の段差と多数のピットの存在から2軒の住居跡の重複ととらえることも可能であった。すなわちP<sub>2</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>12</sub>・P<sub>13</sub>のピットをもつ内側の住居跡と、P<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>11</sub>のピットをもつ外側の住居跡の存在である。まず考えられることは、内側の住居跡が構築される。その後、外側の住居跡が構築されるが、最初の住居跡の床面が深いために、この部分を埋め戻して床とする。調査ではロームの床面が検出されなかったために、最初の住居の床面まで検出した。その結果は、床面の段差となって表われた。ともに4本柱の住居跡となる。しかし、縄文時代中期前半の住居跡には炉をもたず、床面に段差の認められるものが多数知られていることを考えると、無理に分離することもないのであろうか。とりあえず当住居跡は一軒として報告したい。



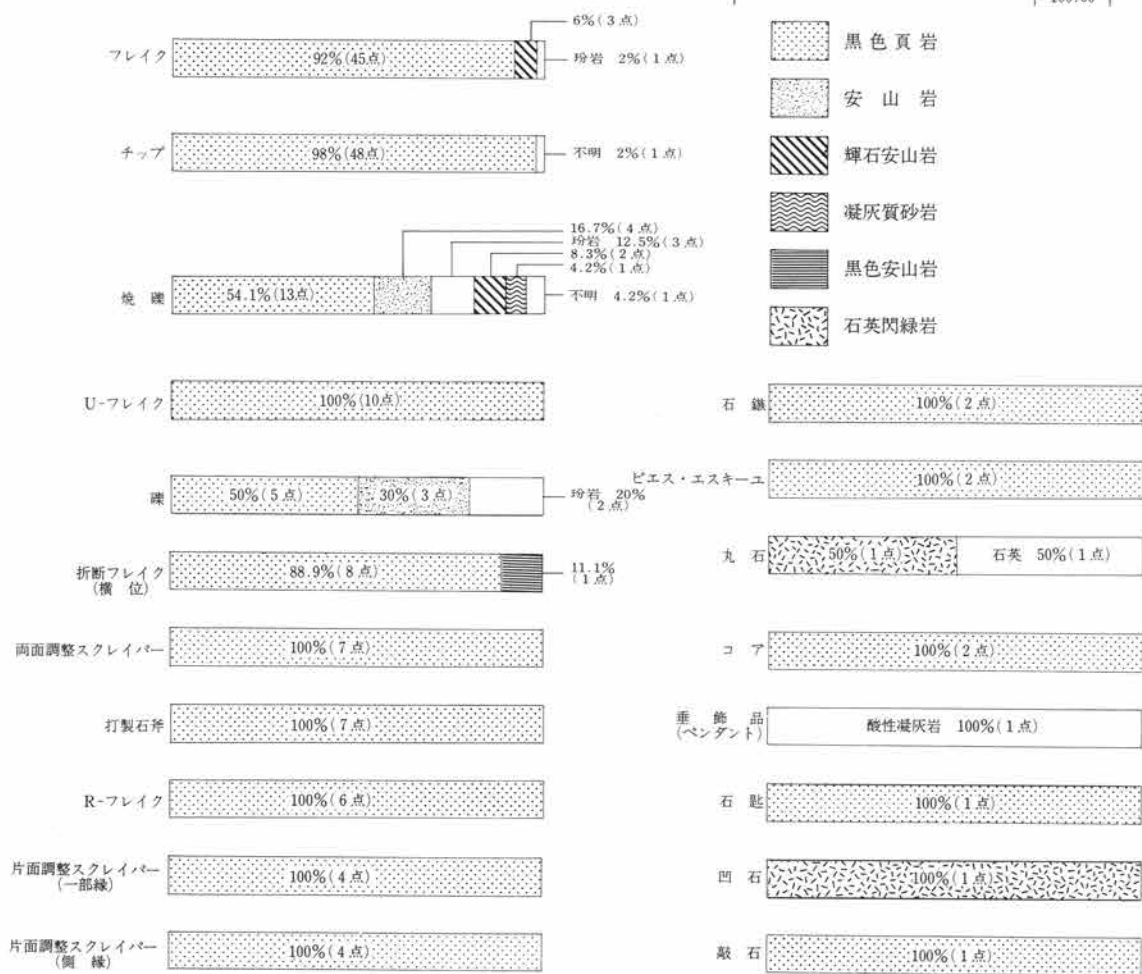
第180図 J-7号住居跡出土遺物



器種	%	点
1 フレイク	25.66	49
2 チップ	25.66	49
3 焼 礫	12.57	24
4 U-フレイク	5.24	10
5 礫	5.24	10
6 折断フレイク(横位)	4.71	9
7 両面調整スクレイパー	3.67	7
8 打製石斧	3.67	7
9 R-フレイク	3.10	6
10 片面調整スクレイパー(一部縁)	2.10	4
11 片面調整スクレイパー(側縁)	2.10	4
12 石 鏃	1.05	2
13 ビエス・エスキュー	1.05	2
14 丸 石	1.05	2
15 コア	1.05	2
16 垂飾品(ペンダント)	0.52	1
17 石 匙	0.52	1
18 凹 石	0.52	1
19 敲 石	0.52	1
	100.00	191



石 材	%	点
1 黒色頁岩	86.08	165
2 安山岩	3.78	7
3 珩 石	3.12	6
4 輝石安山岩	2.70	5
5 石英閃緑岩	1.08	2
6 不 明	1.08	2
7 黒色安山岩	0.54	1
8 酸性凝灰岩	0.54	1
9 石 英	0.54	1
10 凝灰質砂岩	0.54	1
	100.00	191



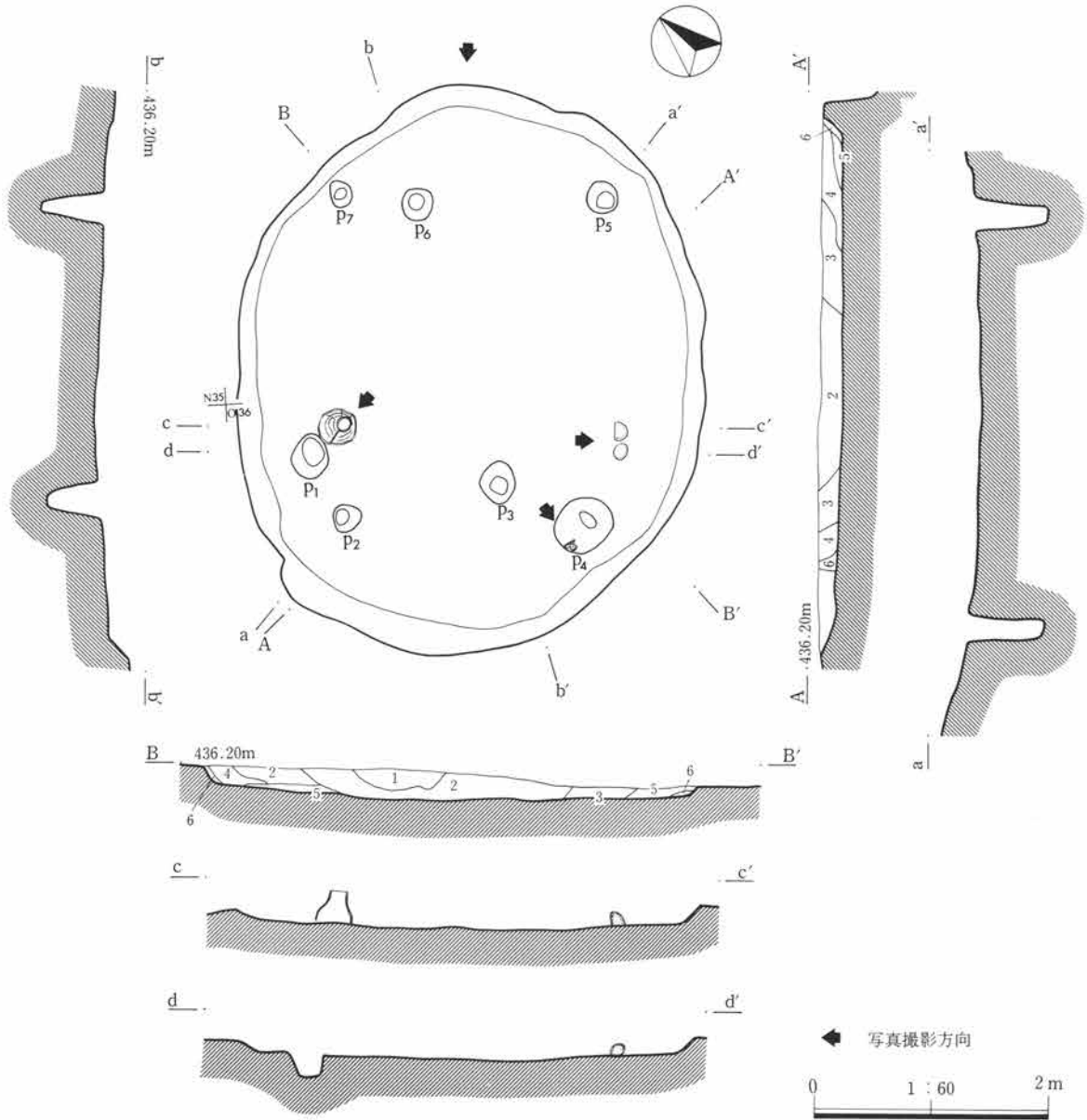
第181図 J-7号住居跡出土石器の器種別・石材別グラフ

J-7号住居跡遺物観察表

〔法量：⑤底径〕 \*第35図参照

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況			
							計 測 値 ( )は現存値	備 考	
			石 材	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)		
180-1 PL. 65	口縁部 片		①粗砂を含む ②良 ③外面 明赤 褐色 内面 褐色	器厚5mm。口唇部は平坦。内面は 丁寧な調整が行われている。	隆帯上に刻目。三叉文が施されて いる。内面に炭化物が付着して いる。	南壁寄り			
180-2 PL. 65	胴部片		①粗砂を含む ②やや良 ③外面 橙色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚1cm。 内面は丁寧な調整が行われてい る。	隆帯に沿ってキョクピラ文が施さ れている。	覆土			
180-3 PL. 65	胴部片		①粗砂を含む ②やや良 ③外面暗 赤褐色 内面 褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚1cm~ 1.2cm。内外面ともザラザラして いる。	隆帯に沿って沈線、刺突が施され ている。	覆土			
180-4 PL. 65	胴部片		①粗砂を含む ②良 ③外面にふい 橙色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は粗い調整が行われている。	L/Rの縄文施文後、沈線、三叉文 が施されている。	覆土			
180-5 PL. 65	胴部片		①雲母を含む ②良 ③外面 褐灰 色 内面にふい橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚1cm。 内面は丁寧な調整が行われてい る。	棒状工具による沈線が施されてい る。	覆土			
180-6 PL. 65	胴部片		①粗砂を含む ②良 ③外面 暗赤 褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は粗い調整が行われている。	L/Rの縄文施文後、沈線が波状に 施されている。	住居跡西壁 寄り			
180-7 PL. 65	底部片	⑤(10.5)	①細礫を含む。 ②良 ③外面にふい 赤褐色 内面黒褐色	平底で垂直に近く立ち上がる。器 厚1.1cm~1.7cm。内面は粗い調整 が行われている。	棒状工具による沈線が施されてい る。内面に炭化物が付着している。	覆土			
180-8 PL. 65	底部片	⑤( 8.8)	①雲母を含む ②良 ③外面にふい 橙色 内面 褐灰色	平底で垂直に近く立ち上がる。器 厚8mm~1.2cm。内面は丁寧な調整 が行われている。	垂下する隆帯が施されている。	覆土			
180-9 PL. 65	底部片	⑤( 7.0)	① ②良 ③外面にふい 黄橙色 内面褐灰色	平底で垂直に近く立ち上がる。器 厚9mm~1.2cm。内面は丁寧な調整 が行われている。	縄文施文。原体はL/R。内面に炭 化物が付着している。	覆土			
図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 ( )は現存値				備 考	出土状況
				全長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)		
180-10 PL. 65	石鎌	脚部欠	黒色頁岩	2.2	(1.3)	0.3	(2.0)	側縁はほぼ直線をなす。	覆土
180-11 PL. 65	石鎌	完形	黒色頁岩	3.3	1.7	0.3	1.7	側縁はほぼ直線をなし、基部の抉 りは逆U字形をなす。	覆土
180-12 PL. 65	垂飾品	完形	酸性凝灰岩	6.0	4.2	0.5	17	2孔ある。	覆土
180-13 PL. 65	石匙	完形	黒色頁岩	2.5	7.2	0.4	9.9	縦型。横長剥片を素材とし、刃部 加工は上半。	覆土
180-14 PL. 65	打製石 斧	中間部	黒色頁岩	(6.0)	(4.2)	1.8	(67.6)	短冊形。両側縁がほぼ直線的であ る。	覆土
180-15 PL. 65	打製石 斧	基部欠	黒色頁岩	(7.9)	4.7	2.0	(76.3)	短冊形。両側縁がほぼ直線的であ る。	覆土
180-16 PL. 65	打製石 斧	基部欠	黒色頁岩	(6.7)	4.2	1.7	(59.4)	短冊形。両側縁がほぼ直線的であ る。	覆土
180-17 PL. 65	打製石 斧	基部欠	黒色頁岩	(7.5)	3.6	1.0	(32.7)	短冊形。両側縁がほぼ直線的であ る。	覆土
180-18 PL. 65	打製石 斧	基部欠	黒色頁岩	(10.5)	3.6	1.6	(78.0)	短冊形。両側縁がほぼ直線的であ る。	覆土
180-19 PL. 65	凹石	完形	石英閃緑岩	10.4	8.2	5.6	720	器面に敲打による凹みがある。	住居跡南壁 寄り





第182図 J-8号住居跡

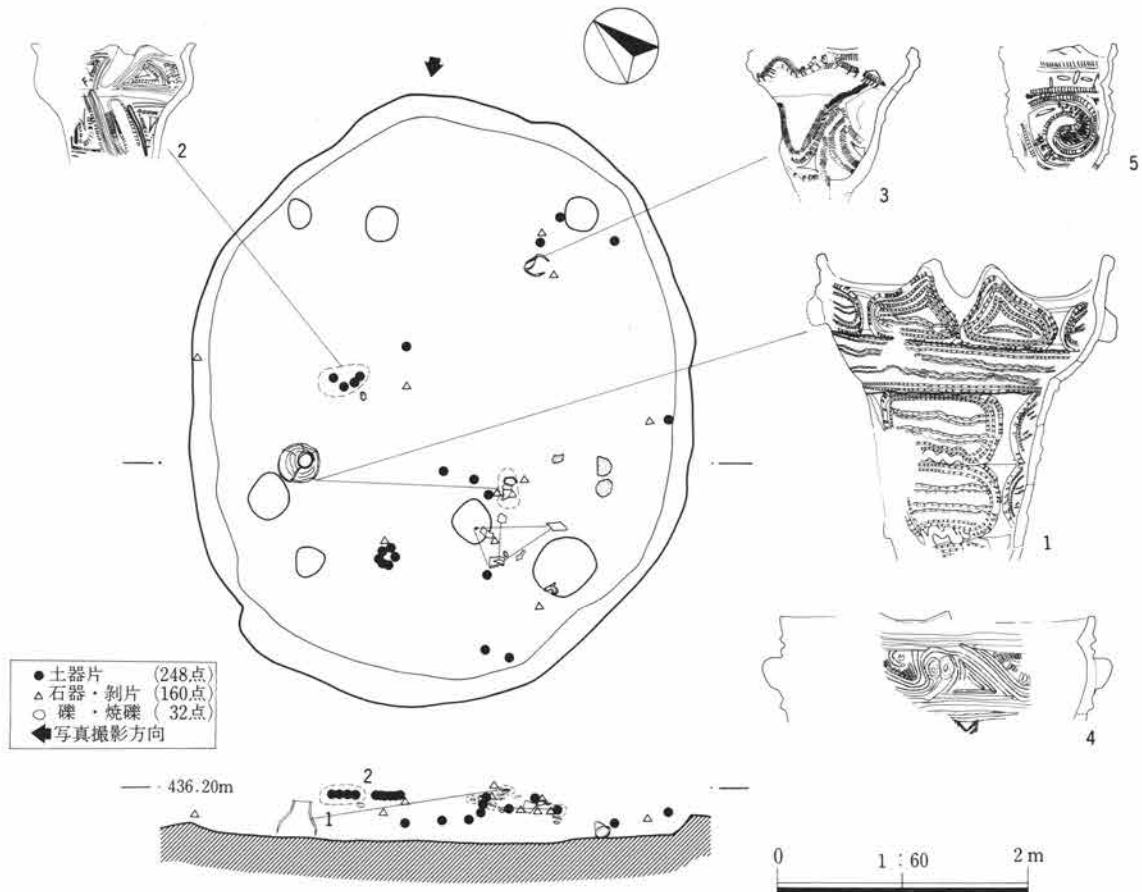
J-8号住居跡 (第182・183図、PL.28)

**位置** N-36・O-36グリッドにかけて検出された。J-10号住居跡の北西約11mのところに位置し、南に接してY-4号住居跡が存在する。

**経過** 9月28日から調査を開始した。覆土上層から、また床面上から遺物が出土したが、なかでも注目されたのは床面上から出土した倒置土器と丸石・顔面把手のセットであった。特異な出土状況であった。

**覆土** ローム層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

- 第1層 茶褐色土層 やや固く粘性はない。ローム粒子を多量に、炭化物粒子・赤色スコリア粒子を少量含。
- 第2層 黒褐色土層 やや固く締めり粘性がある。ローム粒子・炭化物粒子を少量含む。遺物の出土が多い。
- 第3層 暗褐色土層 やや固く締めり粘性はあまりない。ローム粒子・炭化物粒子を少量含む。
- 第4層 黒褐色土層 やわらかくて粘性がある。ローム粒子・炭化物粒子を極少量含む。
- 第5層 黒褐色土層 やや固く締めり粘性がある。ローム粒子を多量に含む。



第183図 J-8号住居跡遺物出土状況

第6層 黄褐色土層 固く締め粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

形状 長径4.84m、短径4.05mの楕円形を呈する。面積約13.3m<sup>2</sup>であるから、居住人員は約4人となる。

壁高 住居跡確認面より約15cmで床面に達する。床面からゆるやかに立ちあがる。遺物の出土から考えると、本来の壁はもっと高かったものと思われる。

床面 全体的に軟弱であり、ほぼ平坦である。 周溝 検出できなかった。

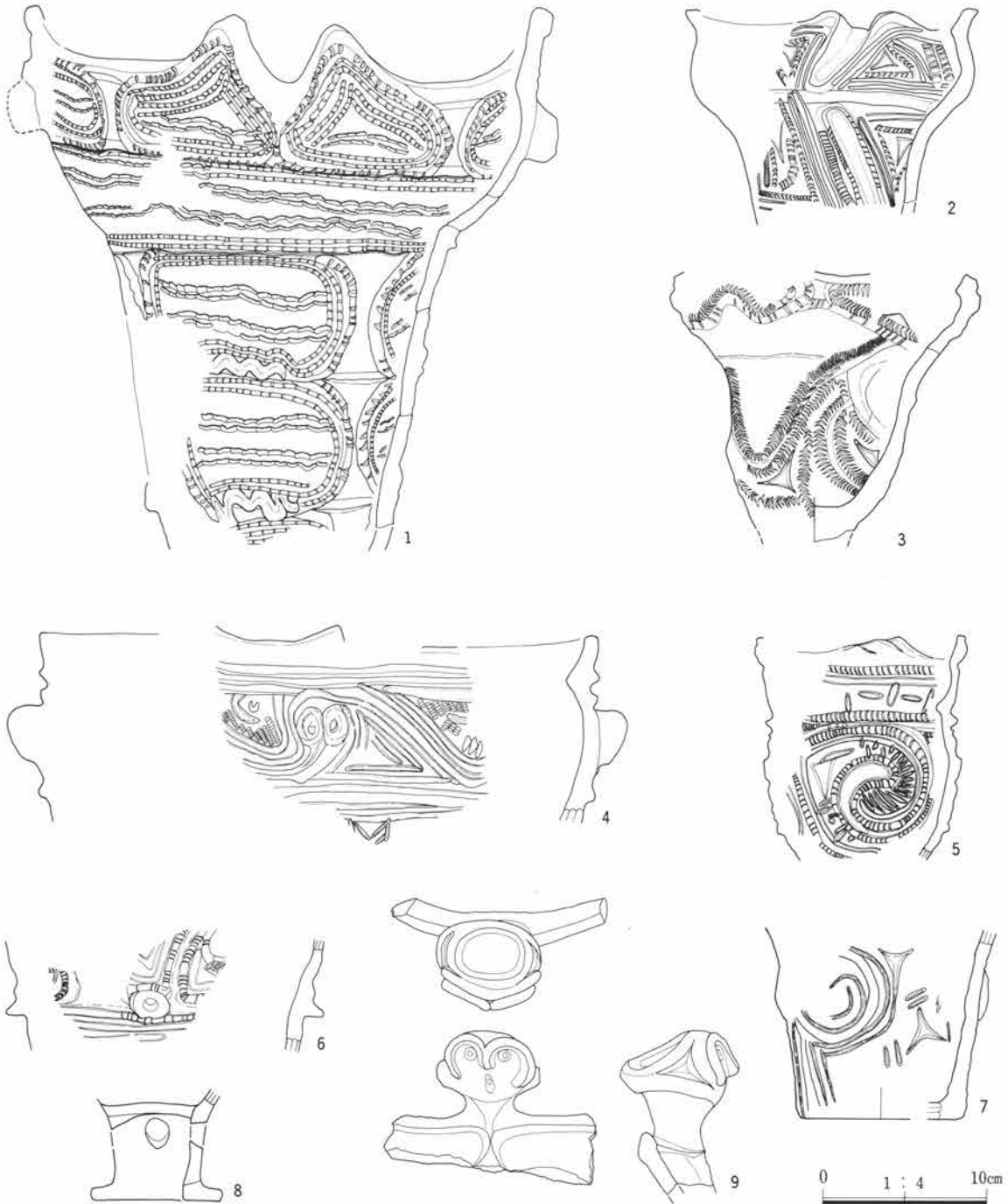
柱穴 総計7個のピットが検出された。このなかでP<sub>1</sub>は深さ18cmと浅いために主柱穴とはなり得ない。P<sub>2</sub>～P<sub>7</sub>が主柱穴であり6本柱の住居跡となる。P<sub>2</sub>は深さ66cm、P<sub>3</sub>47cm、P<sub>4</sub>44cm、P<sub>5</sub>60cm、P<sub>6</sub>52cm、P<sub>7</sub>81cmをそれぞれ測る。大きさ・深さともにしっかりした柱穴である。またP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>間距離140cm、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間距離85cm、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>間距離165cm、P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>間距離65cmを測り、中央2個の柱穴がどちらか一方の柱穴に接近して、また若干内側に配置されているなど特徴的な構造となっている。

炉 検出できなかった。床面に焼土の痕跡は全く認められなかった。当遺跡検出の縄文時代中期の住居跡で炉が検出できなかった住居は、J-5、J-7、J-9、J-10の各住居跡と当住居の計5軒である。

遺物出土状況 覆土第2層を中心に遺物の出土がみられた。また床面からわずかに浮いた状態で顔面把手が、床面から口縁を下にし、底部を欠損した阿玉台II式土器が検出されている。さらに住居南壁寄りからは、丸石・礫が床に配置された状態で出土した（第183図）。

床面倒置土器と甕被葬について

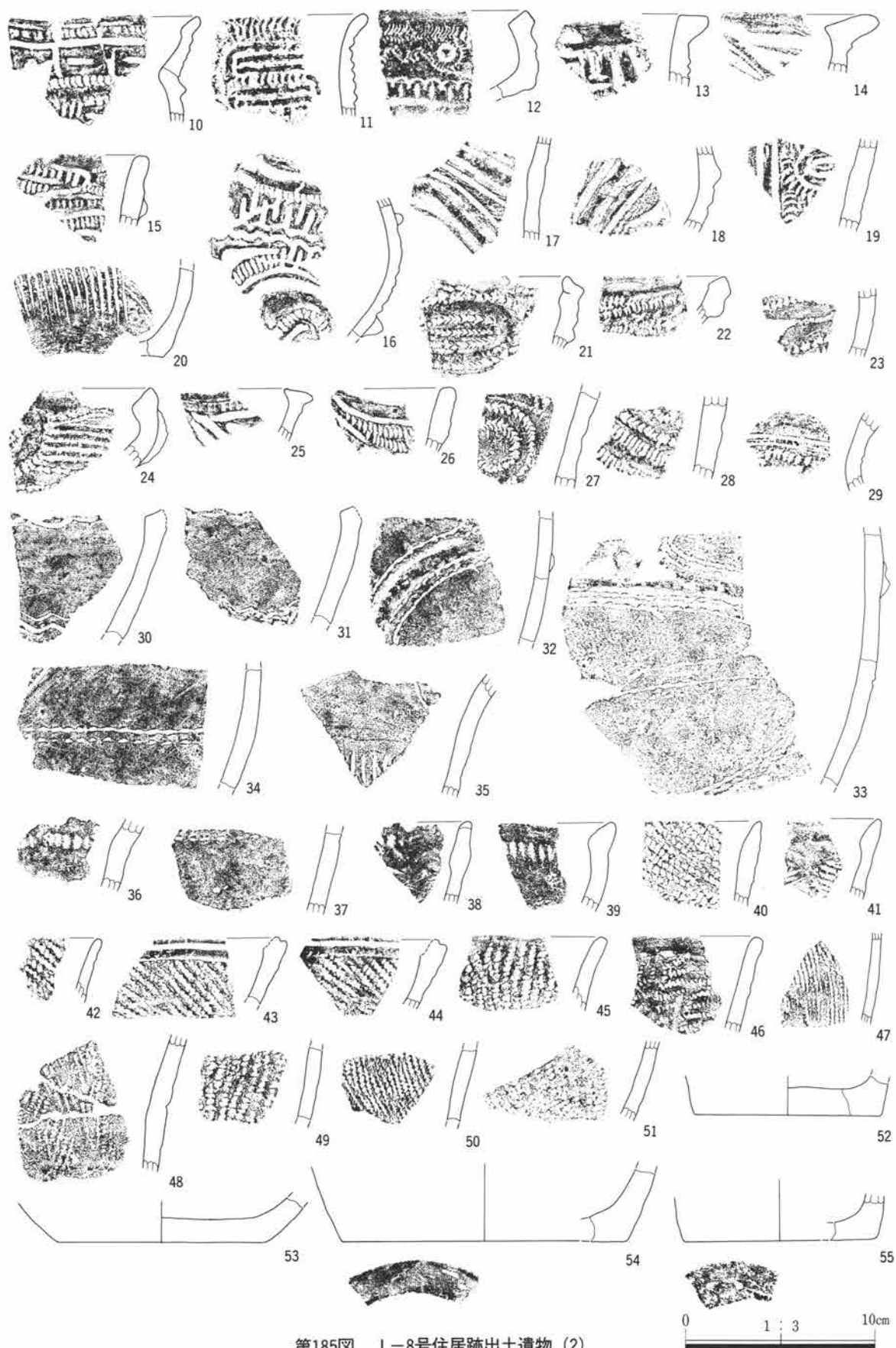
このなかでとりわけ注目したいのは、日常使用していた土器の底部を意図的に欠損して、床面に逆さに配



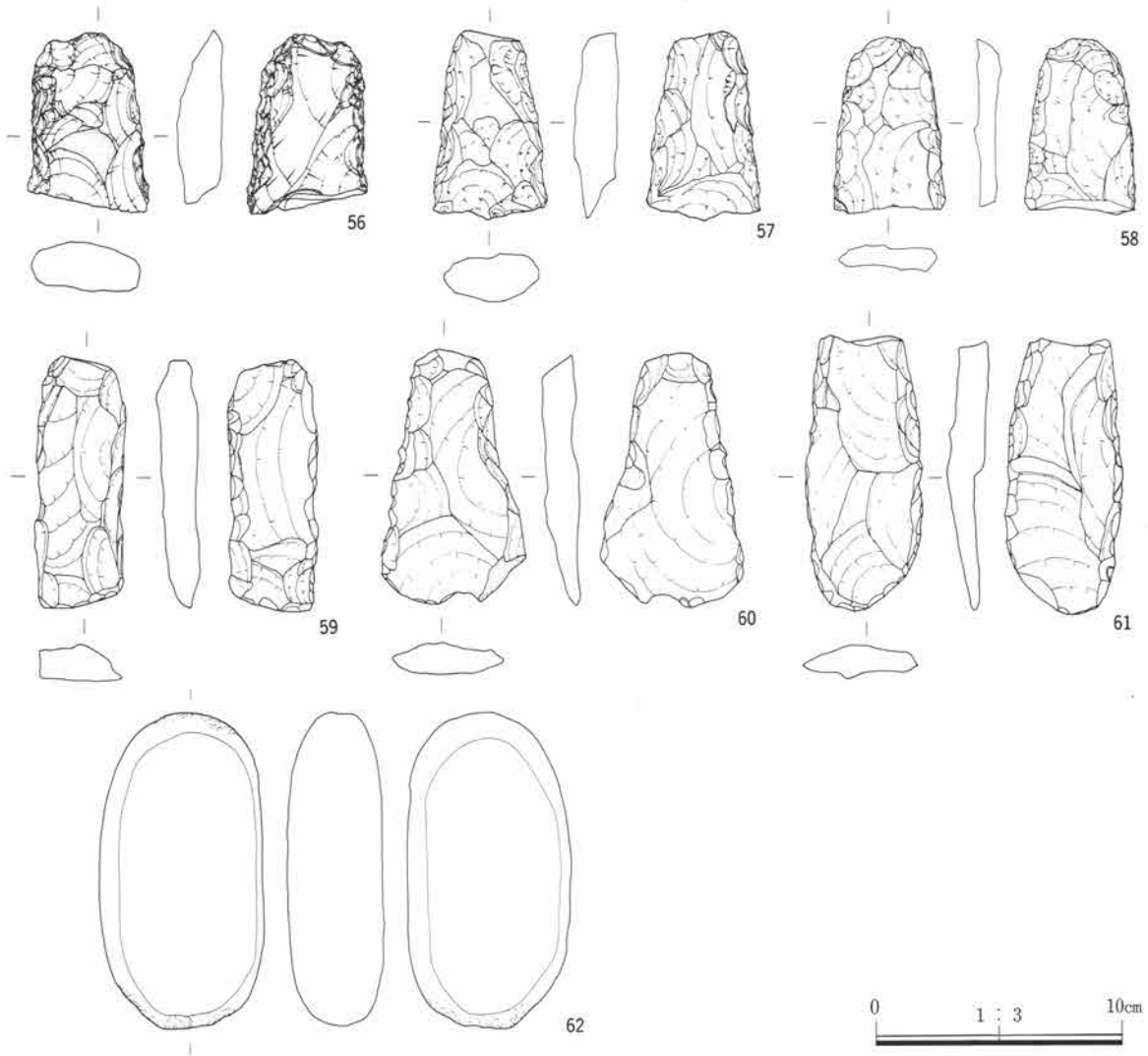
第184図 J-8号住居跡出土遺物 (1)

置した土器の存在である。このような遺存状態を示す土器を床面倒置土器と呼びたい。おそらくは甕被葬に使用されたものであろう。

甕被葬とは、死亡した人の頭部を深鉢形土器で被う風習である。小金井良精によって命名されたものであり、縄文時代中期に見られる葬法の一つである。今日、かかる事例は人骨の遺存に好条件を与える貝塚地帯を中心にみられるが、内陸部にあっても、酸性土壌のゆえに人骨は跡形もなく消滅してしまっているが、おそらくこの種の葬法に使用されたと考えられる床面倒置土器は、関東・中部地方を中心に比較的多数検出されている。当住居跡出土の土器もまたこの種の葬法に使用されたものであると考えている。そして床面に配



第185图 J-8号住居跡出土遺物 (2)



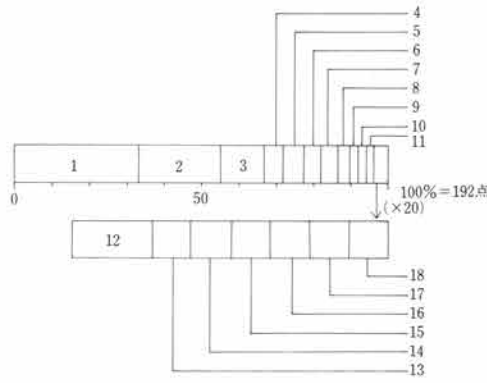
第186図 J-8号住居跡出土遺物(3)

置されていることからみても、被葬者はこの竪穴住居跡の構成員であったと推測できる。さらに土器とともに出土した丸石・顔面把手もこの種の葬法または被葬者と密接な関係にあったものと解釈できる。今後、丸石・顔面把手からのアプローチも必要とされてこよう。

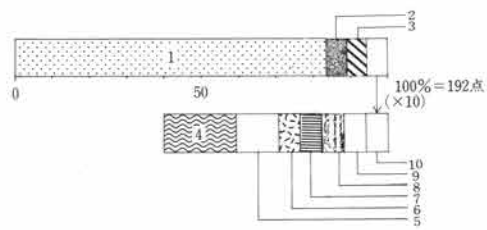
#### 出土遺物(第184~186図、PL.65・66)

当住居跡から出土した遺物の内訳は、実測個体8点の他に、中期土器片248点、前期土器片4点、弥生土器片50点であった。中期土器片の部位別点数は口縁部片40点、胴部片200点、底部片8点であり、このうち46点を拓本で図示した。第184図1は阿玉台II式、2・3・5・6・9は勝坂式、4は五領ヶ台式である。第185図10~20は五領ヶ台式、21~29は勝坂式、30~39は阿玉台式土器である。また石器・礫等は192点出土し、フレイク・チップで106点(55.19%)を占め、この他に片面調整スクレイパー、打製石斧、両面調整スクレイパー、石匙等が出土している。また焼礫が23点(11.97%)と多いことも注意される。また使用された石材は黒色頁岩が圧倒的に多く160点(83.36%)を占めている。次ぎに黒曜石の11点(5.72%)となり、他に輝石安山岩、凝灰質砂岩、玢岩、石英閃緑岩、黒色安山岩、珪化変質岩、赤色珪質岩となっている。輝石安山岩、凝灰質砂岩は礫を主体に認められる。詳細は第187図の器種別・石材別グラフに示してある。

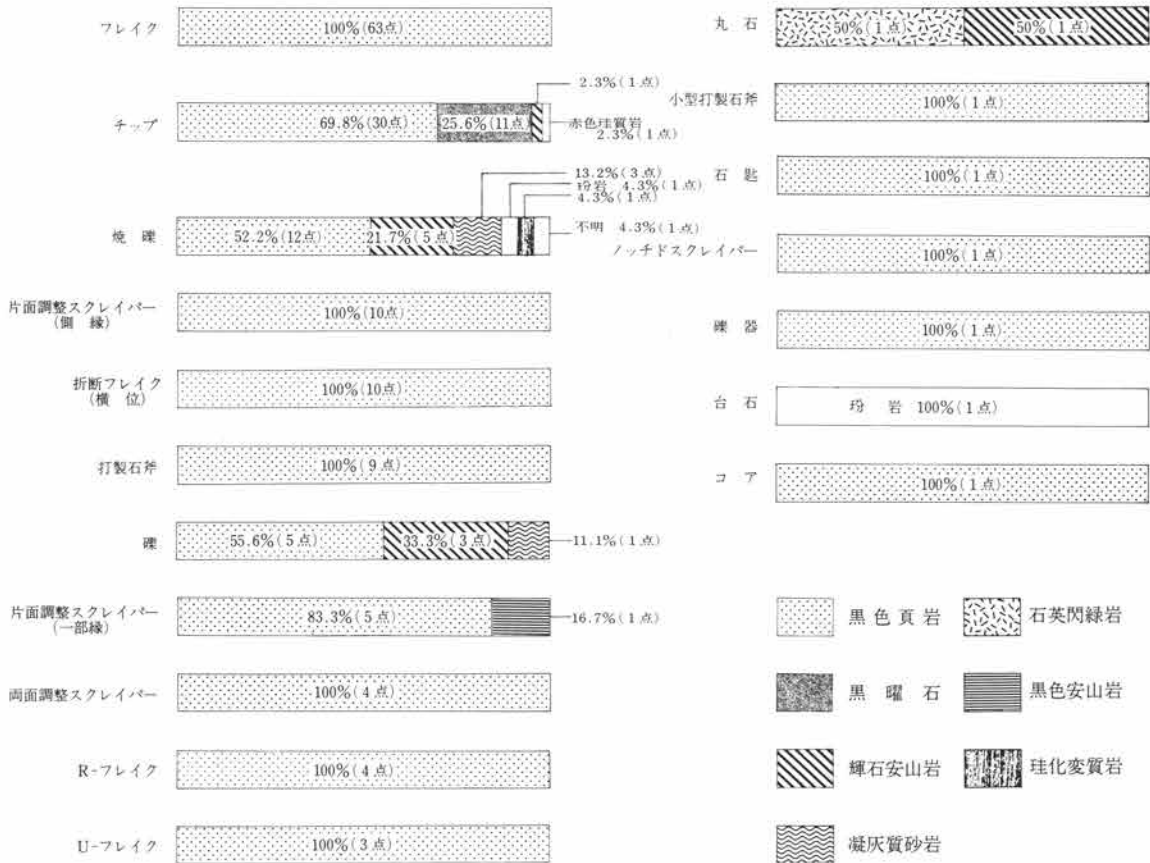
**時期** 出土遺物から判断すると、当住居跡は縄文時代中期前半阿玉台式土器の段階に相当する。



器種	%	点
1	32.80	63
2	22.39	43
3	11.97	23
4	5.20	10
5	5.20	10
6	4.68	9
7	4.68	9
8	3.12	6
9	2.08	4
10	2.08	4
11	1.56	3
12	1.06	2
13	0.53	1
14	0.53	1
15	0.53	1
16	0.53	1
17	0.53	1
18	0.53	1
合計	100.00	192



石材	%	点
1	83.36	160
2	5.72	11
3	5.2	10
4	2.08	4
5	1.04	2
6	0.52	1
7	0.52	1
8	0.52	1
9	0.52	1
10	0.52	1
合計	100.00	192



第187図 J-8号住居跡出土石器の器種別・石材別グラフ

J-8号住居跡遺物観察表

〔法量：①口径②器高(現高)⑤底径〕 \*第35図参照

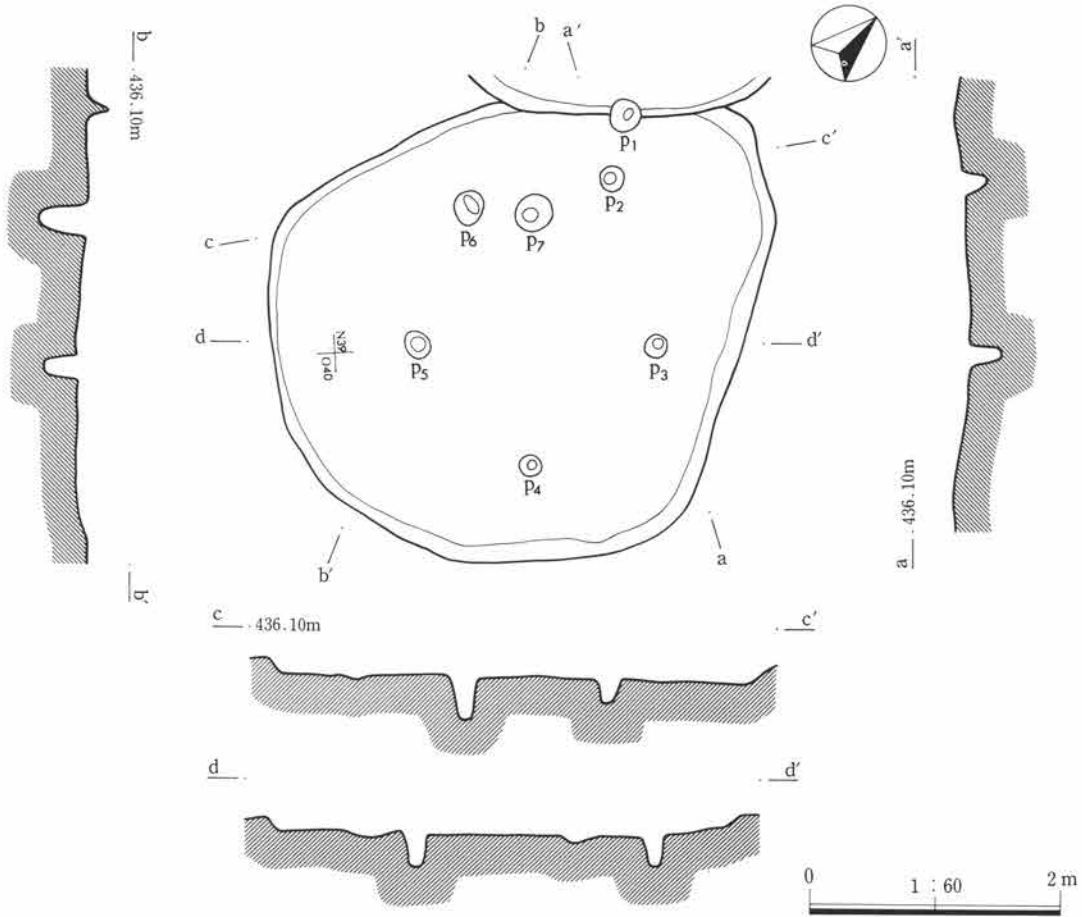
図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
184-1 PL. 65 66	深鉢形	① 32.0 ②(32.0)	①金雲母を含む ②良 ③外面 灰褐色 内面 灰褐色	口縁部に突起。器高7mm~1.2cm。 底部欠損。内面は丁寧な調整が行 われている。	断面三角形の隆帯上に刻目。隆帯 に沿って2列の角押文・波状文。 胴部は楕円区画。	床面
184-2	深鉢形	①(17.8) ②(12.0)	①石英を含む ②良 ③外面 赤褐色 内面 暗赤褐色	深鉢形土器の口縁部 $\frac{1}{4}$ 。器厚7mm ~9mm。内面は丁寧な調整が行われ ている。一部輪積痕が認められる。	隆帯に沿って半截竹管による平行 沈線で三角形の区画文。区画内に 幅広・ペン先状の刺突、三叉文。	覆土
184-3 PL. 65	深鉢形	①(18.4) ②(16.3)	①雲母・細礫を含む ②良 ③外面 赤褐色 内面 黒褐色	器厚7mm~2.2cm。底部欠損。内面 は丁寧な調整が行われている。	隆帯に沿って先端を有するヘラ状 工具による連続刺突、三叉文が施 されている。	覆土
184-4	深鉢形	①(34.0) ②(13.4)	①雲母を含む。 ②良 ③外面 にぶい赤褐色 内面 にぶい橙色	深鉢形土器の口縁部 $\frac{1}{4}$ 。器厚9mm ~1.1cm。内面は丁寧な調整が行わ れている。	口縁部にR( $\frac{1}{4}$ )の縄文施文後、隆帯 に沿って棒状工具による2条の沈 線。突起が付される。	覆土
184-5	深鉢形	①(12.7) ②(13.0)	①雲母を含む。 ②良 ③外面 にぶい赤褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の口縁~胴部にかけて $\frac{1}{4}$ 。器厚5mm~7mm。内面はやや 丁寧な調整が行われている。	隆帯に沿って幅狭の竹管文、幅広 の竹管文による刺突、三叉文が施 されている。口唇部の作出は特徴 的である。	覆土
184-6	胴部片		①雲母を含む。 ②良 ③外面 にぶい橙色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚6mm~ 9mm。内面はやや丁寧な調整が行 われている。	隆帯に沿ってキャタピラ文、沈線 がめぐる。小突起が付される。内 面に炭化物が付着している。	覆土
184-7	底部片	⑤(9.8)	①雲母・細礫を含む。 ②良 ③外面 橙色 内面 黒褐色	平底でやや開いて立ち上がる。器 厚8mm~1.2cm。内面は粗い調整が 行われている。	隆帯に沿って棒状工具による沈 線、三叉文が施されている。一部 に縄文が施文されているが判読不 可能である。	覆土
184-8			①金雲母を含む。 ②良 ③外面 にぶい赤褐色 内面 赤褐色	器厚7mm~1cm。内面は粗い調整 が行われている。	径1.5cmの円孔が施されている。	覆土
184-9 PL. 65	顔面把 手		①金雲母を含む ②良 ③外面 にぶい赤褐色 内面 にぶい黄褐色	内外面とも丁寧な調整が行われて いる。	頭頂部に一部赤色塗彩が認められ る。	床面直上
185-10	口縁部 片		①金雲母を含む。 ②良 ③外面 暗赤 褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の口縁部片。器厚7mm ~1.2cm。内面は丁寧な調整が行わ れている。	半截竹管による連続刺突と棒状工 具による沈線が施されている。内 面に炭化物が付着している。	覆土
185-11	口縁部 片		①細礫を含む。 ②良 ③外面 にぶい黄褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の口縁部片。器厚8mm ~1cm。内面は丁寧な調整が行わ れている。	口唇部に半截竹管によるC字爪形 文。以下半截竹管による平行沈線、 沈線内に一部C字爪形文。煤が付 着している。	覆土
185-12	口縁部 片		①細礫を含む ②やや良 ③外面 赤褐色 内面 にぶい赤褐色	深鉢形土器の口縁部片。器厚9mm。 内面は丁寧な調整が行われてい る。	半截竹管による連続刺突、円形竹 管文が施されている。	覆土
185-13	口縁部 片		①金雲母・細礫を含 ②良 ③外面 にぶい橙色 内面 にぶい黄褐色	深鉢形土器の口縁部片。器厚6mm。 内面は丁寧な調整が行われてい る。	半截竹管による幅1.1cmと6mmの 平行沈線が施されている。	覆土
185-14	口縁部 片		①金雲母を含む。 ②良 ③外面 にぶい赤褐色 内面 にぶい赤褐色	深鉢形土器の口縁部片。器厚9mm ~1.5cm。内面は丁寧な調整が行わ れている。	棒状工具による沈線が施されてい る。	覆土
185-15	口縁部 片		①細礫を含む。 ②良 ③外面 黒褐 色 内面 黒褐色	深鉢形土器の口縁部片。器厚6mm ~1cm。内面はやや丁寧な調整が 行われている。	隆帯上に刻目。先端丸味をもつヘ ラ状工具による連続刺突が施され ている。	覆土

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
185-16	胴部片		①金雲母を含む。 ②良 ③外面 暗赤褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm。 内面は縦ミガキが行われている。	先端丸味をもつへら状工具による連続刺突が隆帯に沿って施される。棒状工具による波状沈線もみられる。	覆土
185-17	胴部片		①雲母を含む。 ②良 ③外面 暗赤褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚6mm～8mm。内面は粗い調整が行われている。	隆帯に沿って棒状工具による沈線が施されている。内面に一部煤が付着している。	覆土
185-18	胴部片		①金雲母を含む。 ②良 ③外面 極暗赤褐色 内面 におい赤褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm～1cm。内面は丁寧な調整が行われている。	隆帯に沿って棒状工具による沈線が施されている。縄文が施文されているが判読は不可能である。	覆土
185-19	胴部片		①雲母を含む。 ②良 ③外面 明赤褐色 内面 橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は粗い調整でザラザラしている。	半截竹管による平行沈線、先端丸味をもつへら状工具による連続刺突が施されている。	覆土
185-20	底部片		①金雲母を含む。 ②良 ③外面 暗赤褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の底部片でわずかに開いて立ち上がる。器高8mm～1cm。 内面は丁寧な調整が行われている。	平行集合沈線が施されている。	覆土
185-21	口縁部片		①粗砂を含む。 ②良 ③外面 暗赤褐色 内面 暗赤褐色	深鉢形土器の口縁部片。器厚8mm～1.1cm。内面は粗い調整が行われている。	隆帯に沿って先端を有するへら状工具による連続刺突が施されている。	覆土
185-22	口縁部片		①砂礫を含む。 ②良 ③外面 暗赤褐色 内面 暗褐色	深鉢形土器の口縁部片。器厚1.1cm。内面はやや丁寧な調整が行われている。	隆帯に沿って先端を有するへら状工具による連続刺突が施されている。	覆土
185-23	胴部片		①粗砂を含む。 ②良 ③外面 におい赤褐色 内面 におい赤褐色	深鉢形土器の胴部片。器高8mm～1cm。内面は粗い調整が行われている。	先端を有するへら状工具による連続刺突が施されている。	覆土
185-24	口縁部片		①粗砂を含む。 ②良 ③外面 暗赤褐色 内面 暗赤褐色	深鉢形土器の口縁部片。器厚7mm～1cm。内面は丁寧な調整が行われている。	半截竹管による横位の平行沈線。幅広の竹管、先端を有するへら状工具による連続刺突が施されている。	覆土
185-25	口縁部片		①砂礫を含む ②良 ③外面 におい橙色 内面 暗赤褐色	深鉢形土器の口縁部片。器厚6mm。 内面は粗い調整が行われている。	押し引文、へら状工具による沈線が施されている。口唇部に煤が付着している。	覆土
185-26	口縁部片		①粗砂を含む ②良 ③外面 暗赤褐色 内面 暗赤褐色	深鉢形土器の口縁部片。器厚6mm～9mm。内面はやや丁寧な調整が行われている。	棒状工具による沈線内に竹管による連続刺突が施されている。	覆土
185-27	胴部片		①雲母を含む ②良 ③外面 暗赤褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。	先端を有するへら状工具による連続刺突が施されている。	住居跡中央部
185-28	胴部片		①雲母を含む。 ②良 ③外面 におい赤褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚1cm。 内面は丁寧な調整が行われている。	隆帯に沿って幅広の竹管と先端を有するへら状工具による沈線が施されている。	覆土
185-29	胴部片		①砂礫を含む。 ②良 ③外面 暗赤褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm～1cm。内面は丁寧な調整が行われている。	半截竹管による平行沈線と先端を有するへら状工具による連続刺突が施されている。	住居跡中央部
185-30 31	胴部片		①金雲母を含む ②良 ③外面におい 橙色 内面 褐灰色	深鉢形土器の深鉢形土器の胴部片。器厚9mm～1.1cm。内面は丁寧な調整が行われている。	波状する沈線が施されている	住居跡中央部



図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
185-32 33 34	胴部片		①金雲母を含む。 ②良 ③外面 暗褐色 内面 褐灰色	32・33・34は同一個体。深鉢形土器の胴部片。器厚6mm～8mm。内面は丁寧な調整が行われている。	断面三角形の隆帯に沿って、結節沈線が2列巡る。	住居跡南壁寄り
185-35	胴部片		①金雲母を含む。 ②良 ③外面 黒褐色 内面 暗赤褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm。内面は丁寧な調整が行われている。	幅広の竹管による横位の刺突が施されている。	住居跡南壁際
185-36	胴部片		①砂礫を含む。 ②良 ③外面 暗赤褐色 内面 暗赤褐色	深鉢形土器の胴部片。器高8mm～1cm。内面は丁寧な調整が行われている。	幅広の竹管による横位の刺突が施されている。	覆土
185-37	胴部片		①金雲母を含む。 ②良 ③外面 にぶい赤褐色 内面 灰褐色	深鉢形土器の胴部片。器高8mm。内面はやや丁寧な調整が行われている。		覆土
185-38	口縁部片		①砂礫を含む。 ②良 ③外面 暗褐色 内面 灰褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は小波状を呈する。器厚6mm～8mm。内面は丁寧な調整が行われている。	口唇部は小波状を呈する。	覆土
185-39	口縁部片		①金雲母を含む。 ②やや良 ③外面 にぶい橙色 内面 にぶい橙色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部に刻目。器厚7mm～1cm。内面は粗い調整が行われている。	口唇部に刻目。幅広の竹管による横位の刺突が施されている。	覆土
185-40	口縁部片		①粗砂を含む。 ②良 ③外面 にぶい橙色 内面 にぶい赤褐色	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は先細り。器厚5mm～6mm。内面は横ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR(1/2)。	覆土
185-41	口縁部片		①雲母を含む。 ②良 ③外面 灰褐色 内面 灰褐色	深鉢形土器の口縁部片。器厚5mm～1cm。内面は丁寧な調整が行われている。	R(1/2)の縄文施文後、半截竹管による平行沈線が施されている。	覆土
185-42	口縁部片		①細礫を含む。 ②良 ③外面 にぶい黄橙色 内面 にぶい橙色	深鉢形土器の口縁部片。器厚5mm～7mm。内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR(1/2)。	覆土
185-43 44	口縁部片		①金雲母を含む。 ②良 ③外面 にぶい橙色 内面 褐灰色	43・44は同一個体。口縁部片で器厚8mm～1cm。内面は丁寧な調整が行われている。	口唇部に半截竹管による平行沈線。以下縄文施文。原体はR(1/2)。	覆土
185-45	口縁部片		①細砂を含む。 ②良 ③外面 褐灰色 内面 灰褐色	深鉢形土器の口縁部片。器厚6mm～8mm。内面は横ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR(1/2)。	覆土
185-46	口縁部片		①雲母・細礫を含む。 ②やや良 ③外面 赤褐色 内面 暗赤褐色	深鉢形土器の口縁部片。器厚5mm～7mm。内外面はガラガラしている。	縄文施文。原体はR(1/2)。	覆土
185-47	胴部片		①細砂を含む。 ②非常に良 ③外面 灰褐色 内面 灰褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚4mm～6mm。内面は縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR(1/2)。	覆土
185-48	胴部片		①金雲母を含む。 ②良 ③外面 にぶい赤褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm～1cm。内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR(1/2)。	覆土
185-49	胴部片		①雲母を含む。 ②良 ③外面 にぶい黄橙色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部片。器厚6mm～8mm。内面は縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR(1/2)。	覆土

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況			
185-50	胴部片		①細砂を含む。 ②非常に良 ③外面 灰褐色 内面 灰褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚6mm。 内面は横ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{2}\right\}$ 。	覆土			
185-51	胴部片		①雲母を含む。 ②良 ③外面 にぶい褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm。 内面は縦ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{\frac{1}{2}\right\}$ 。	覆土			
185-52	底部片	⑤ 9.8	①雲母を含む。 ②やや良 ③外面 明赤褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の底部片で垂直に近く 立ち上がる。器厚5mm~8mm。内 面は粗い調整が行われている。底 面は荒れている。		覆土			
185-53	底部片	⑤(11.0)	①雲母を含む。 ②良 ③外面 にぶい赤褐色 内面 にぶい橙色	浅鉢形土器の底部片。器厚6mm。 内面は丁寧な調整が行われてい る。底面は荒れている。		覆土			
185-54	底部片	⑤(15.0)	①金雲母を含む。 ②良 ③外面 にぶい赤褐色 内面 にぶい赤褐色	深鉢形土器の底部片でやや開いて 立ち上がる。器厚1cm~1.3cm。内 面は粗い調整が行われている。		覆土			
185-55	底部片	⑤(10.0)	①細礫を含む。 ②やや良 ③外面 にぶい赤褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の底部片。器厚1cm。 内面は粗い調整が行われている。 底面は荒れている。		覆土			
図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 ( )内は現存値				備 考	出土状況
				全長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
186-56 PL. 66	打製石 斧	刃部欠	黒色頁岩	( 7.0)	( 4.9)	1.8	(86.0)	短冊形。両側縁がほぼ直線的である。	覆土
186-57 PL. 66	打製石 斧	刃部欠	黒色頁岩	( 7.5)	( 4.6)	1.8	(77.1)	短冊形。両側縁がほぼ直線的である。	住居跡東壁 寄り
186-58 PL. 66	打製石 斧	刃部欠	黒色頁岩	( 6.9)	( 4.6)	1.0	(42.3)	短冊形。両側縁がほぼ直線的である。	覆土
186-59 PL. 66	打製石 斧	完 形	黒色頁岩	10.2	3.5	1.6	91.2	短冊形。両側縁がほぼ直線的である。	覆土
186-60 PL. 66	打製石 斧	完 形	黒色頁岩	10.3	5.9	1.5	85.4	撥形。両側縁が内側に彎曲している。	覆土
186-61 PL. 66	打製石 斧	基部欠	黒色頁岩	(10.9)	4.7	1.4	(88.0)	短冊形。両側縁がほぼ直線的である。	住居跡北壁 寄り
186-62	敲石	完 形	石英質砂岩	12.8	6.8	3.9	510.0	器面に敲打痕がある。	覆土



第188図 J-9号住居跡

J-9号住居跡 (第188・189図、PL.29)

**位置** N-39・40、O-39・40グリッドにかけて検出された。J-10号住居跡と重複している。

**経過** 10月16日に調査を開始した。覆土からは遺物はほとんど出土せず、またJ-10号住居跡と重複関係にあったことから遺構把握は困難をきわめた。11月上旬までには各種図面の作成・写真撮影を行い調査を終了。

**重複** J-10号住居跡と北壁の一部で重複している。当住居跡が壊されている。

**覆土** 暗褐色土層（やや固く締め粘性はほとんどない。ローム粒子を極少量含む。）でほぼ統一されていた。

**形状** 長径3.81m、短径3.57mの不正形を呈している。現状での面積は約10.6m<sup>2</sup>であるから、居住人員は約3.2人となる。

**壁高** 住居跡確認面より約11cmで床面に達する。床面からゆるやかに立ちあがる。遺物の出土状況から考えると、本来の壁はさらに高かったものと思う。残存状況が悪かった。

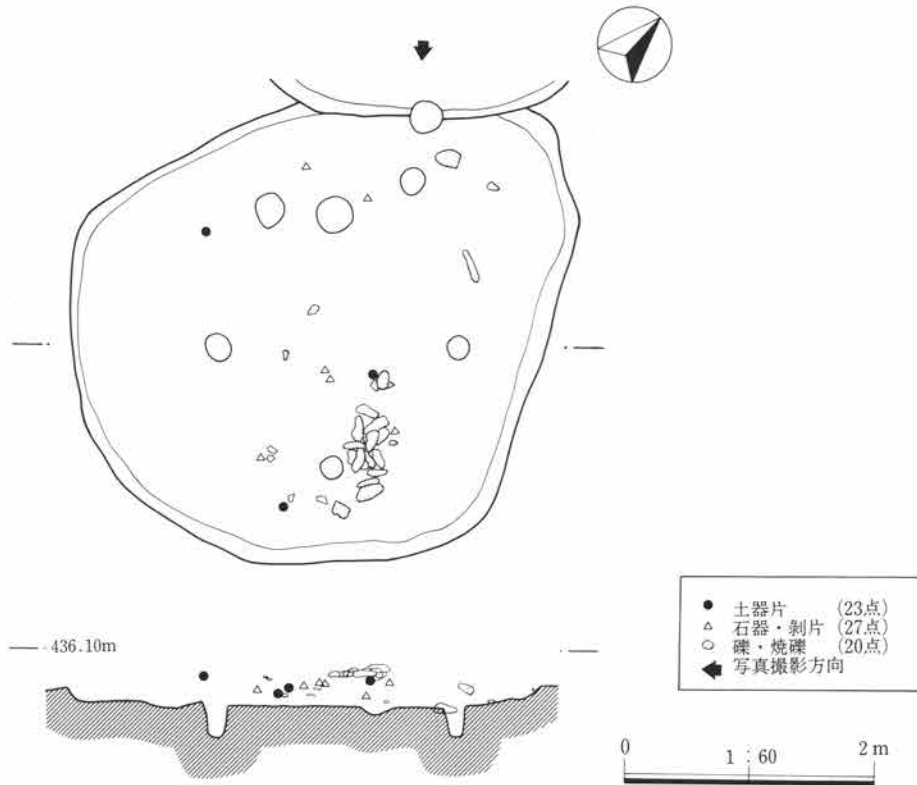
**床面** 全体的に軟弱であり、やや凹凸が認められる。

**周溝** 検出できなかった。

**柱穴** 総計7個のピットが検出された。それぞれのピットの深さは、P<sub>1</sub>40cm、P<sub>2</sub>19cm、P<sub>3</sub>24cm、P<sub>4</sub>26cm、P<sub>5</sub>28cm、P<sub>6</sub>34cm、P<sub>7</sub>40cmを測る。このなかでP<sub>2</sub>は19cmと浅く主柱穴か

No.	上 長径×短径 (cm)		深さ (cm)	備考
	下 長径×短径 (cm)			
1	25×25cm	11×7cm	40cm	主柱穴?
2	20×20cm	9×9cm	19cm	
3	19×18cm	8×8cm	24cm	主柱穴?
4	18×18cm	8×7cm	26cm	"
5	22×19cm	12×11cm	28cm	"
6	24×24cm	16×8cm	34cm	"
7	30×29cm	13×12cm	40cm	"

J-9号住居跡ピット計測表



第189図 J-9号住居跡遺物出土状況

らは除外される。また、P<sub>1</sub>・P<sub>6</sub>の2個のピットはその位置がやや不規則であり、結局、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>の4個のピットが主柱穴を構成すると考えられる。4本柱の住居跡となる。P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間距離140cm、P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>間距離130cm、P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>間距離135cm、P<sub>7</sub>・P<sub>3</sub>間距離145cmを測り、ほぼ等距離に配置されている。

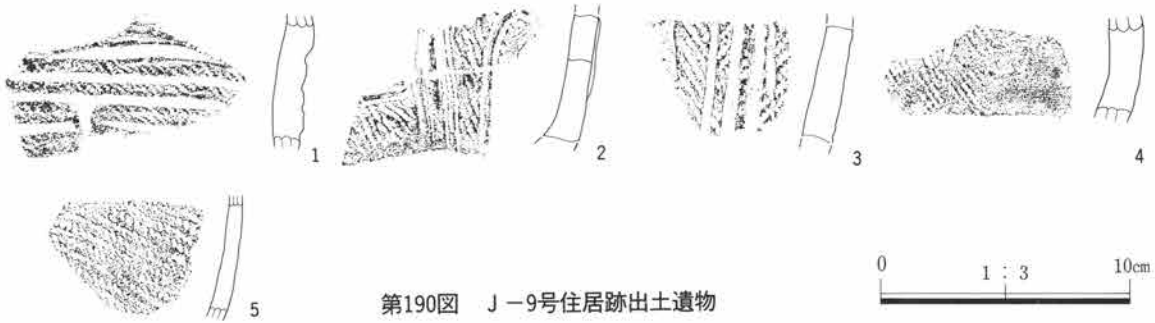
炉 検出できなかった。床面に焼土の痕跡は全く認められなかった。

遺物出土状況 覆土・床面からの遺物の出土は非常に少なかった。そうしたなかで住居跡東南部覆土最上層から出土した集石は注目されていよい（第189図）。その出土状況から判断すると、廃絶後の窪地化した住居跡に人為的に形成されたものと考えられる。少なくとも住居廃絶後に礫が廃棄された状況での出土ではなかった。集石は16個の礫から構成されており、その規模は長さ120cm、幅40cmである。

#### 屋内集石遺構について

廃絶後の窪地化した住居跡に人為的に形成された「屋内集石遺構」については、すでに金井安子氏の論文<sup>\*</sup>がある。これによると現在のところ「屋内集石遺構」の時期的分布は、早期末の中部地方において出現し、中期後半の中部・関東地方を中心に盛行したものと把握されている。集石を構成する礫は拳大から人頭大までさまざまな大きさであるというが、当遺構では長さ約17cm、幅約8cmの大きさに集中していた。そして火熱を受けた痕跡の認められた礫は16個中6個であった。規模は長さ120cm、幅40cmであるが、礫の集中範囲は若干せばまり、長さ80cm、幅40cmとなる。周辺からは焼土・灰・炭化物等は認められなかった。この「集石遺構」とJ-9号住居跡とのかかわりは、金井氏の言うように住居が廃屋となって埋没土が堆積していく過程で形成されたものなのか、あるいは住居を何らかの理由によって廃屋として、そこに集石するという一連の行為を想定して考える必要があるのかは検討すべきであろう。この点については、当遺構の場合は埋没土が堆積していく過程で形成されたものと解釈したいが、覆土の状況を詳細に観察しえなかったことはくやまれる。

<sup>\*</sup>金井安子「縄文時代における廃屋の様相」『長野県考古学会誌』47号 1983



第190図 J-9号住居跡出土遺物

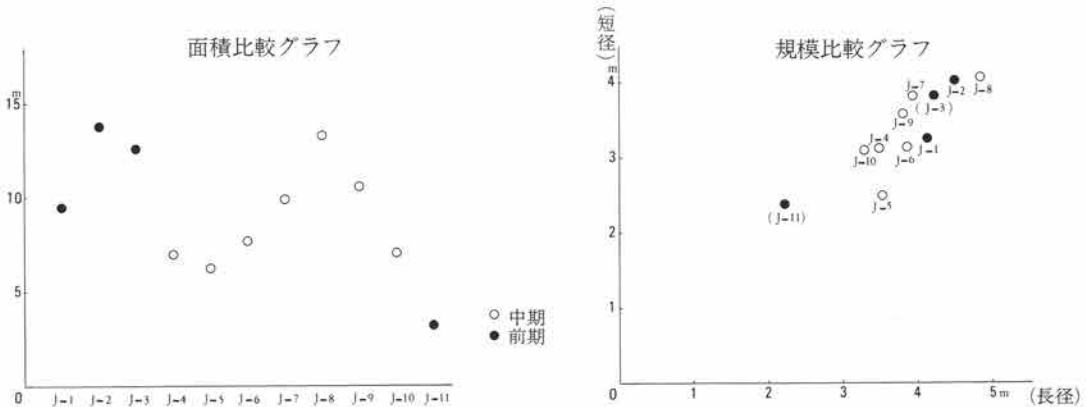
J-9号住居跡遺物観察表

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
190-1 PL.66	頸部片		①石英・粗砂を含む ②やや良 ③外面褐 灰色 内面にふい橙色	深鉢形土器の頸部片。器厚1cm。 内面はザラザラしている。	R(Ⅰ)の縄文施文後、棒状工具による沈線が横位に施されている。	住居跡南壁 寄り
190-2 PL.66	胴部片		①石英を含む ②良 ③外面にふい 褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm~ 1.5cmで積みあげ技法A。内面は丁寧な調整が行われている。	R(Ⅰ)の縄文施文後、隆帯に沿って 半截竹管による幅5mmの平行沈線 が施されている。	覆土
190-3 PL.66	胴部片		①細礫を含む ②やや良 ③外面に ふい黄橙色内面褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚1cm~ 1.4cmで積みあげ技法A。内面は粗 い調整が行われている。	R(Ⅰ)とL(Ⅱ)の縄文施文後、隆帯 に沿って棒状工具による垂下する 沈線が施されている。	住居跡南壁 寄り
190-4 PL.66	胴部片		①細礫を含む ②良 ③外面 黒色 内面 黒色	深鉢形土器の胴部片。器厚1.3cm。 内面は丁寧な調整が行われている。	R(Ⅰ)の縄文施文後、棒状工具による沈線が施されている。	住居跡南壁 寄り
190-5 PL.66	胴部片		①石英を含む ②良 ③外面 灰黄 褐色 内面にふい橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚5mm~ 7mm。内面は丁寧なミガキが行わ れている。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)。	覆土

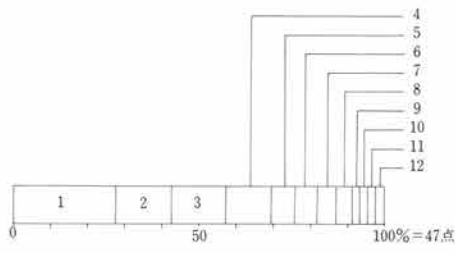
出土遺物(第190図、PL.66)

当住居跡から出土した遺物の内訳は、中期土器片23点であるが、いずれも細片であるため5点を拓本で図示した。第190図1~5は五領ヶ台式土器である。また石器・礫等は47点出土し、器種別・石材別グラフは第192図に示した。

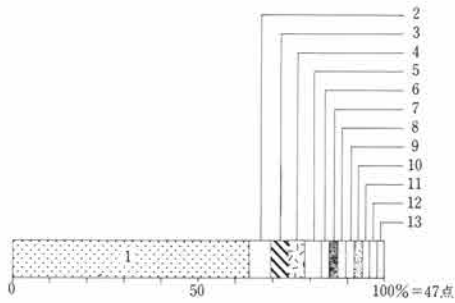
時期 J-10号住居跡に壊されていることや、五領ヶ台式土器が出土していることから、当住居跡は縄文時代中期初頭、五領ヶ台式土器の段階に相当するか？



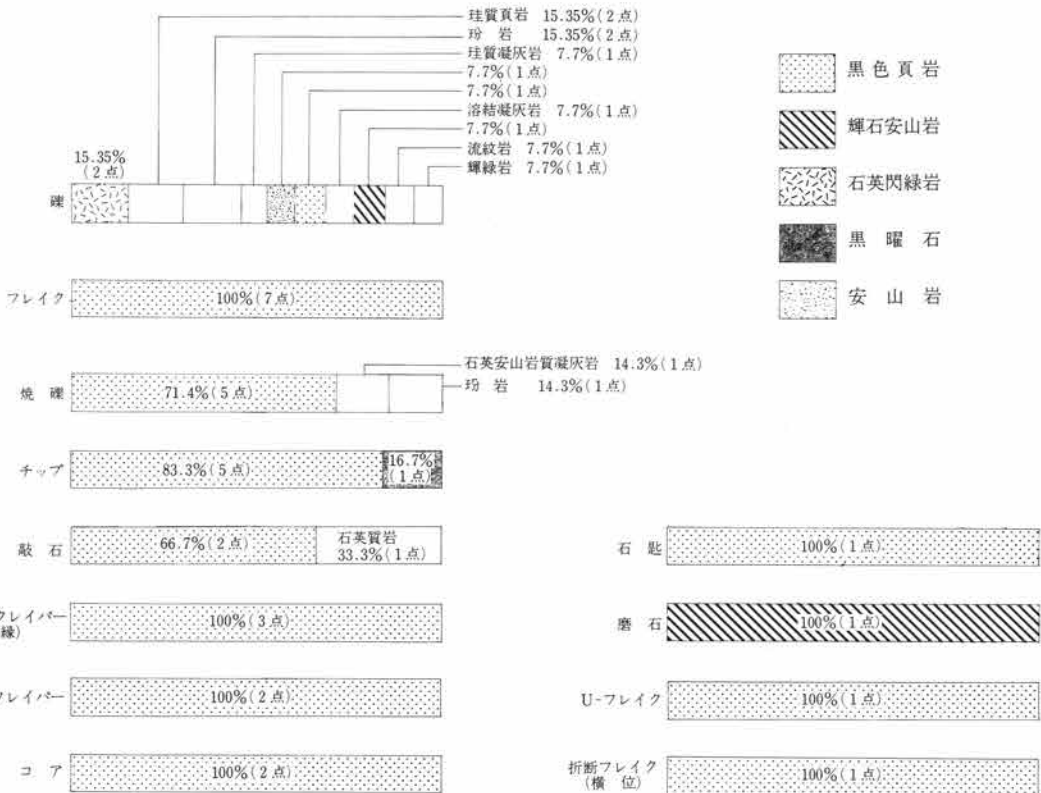
第191図 縄文時代住居跡の面積・規模比較グラフ



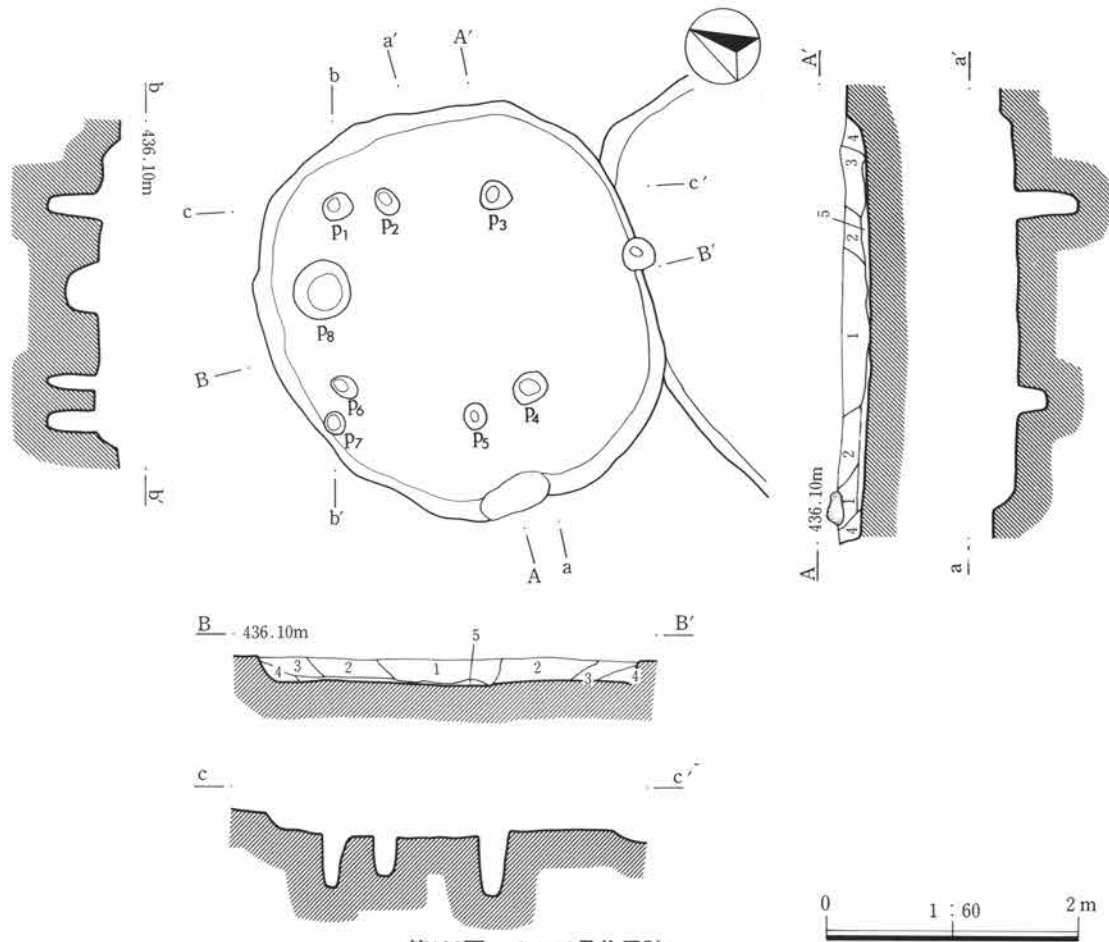
器種	%	点
1 礫	27.67	13
2 フレイク	14.90	7
3 焼礫	14.90	7
4 チップ	12.77	6
5 敲石	6.39	3
6 片面調整スクレイパー(側縁)	6.39	3
7 両面調整スクレイパー	4.25	2
8 コア	4.25	2
9 石匙	2.12	1
10 磨石	2.12	1
11 U-フレイク	2.12	1
12 折断フレイク(横位)	2.12	1
	100.00	47



石種	%	点
1 黒色頁岩	63.86	30
2 珩岩	6.40	3
3 輝石安山岩	4.26	2
4 石英閃緑岩	4.26	2
5 珩質頁岩	4.26	2
6 石英質岩	2.12	1
7 黒曜石	2.12	1
8 石英安山岩質凝灰岩	2.12	1
9 珩質凝灰岩	2.12	1
10 安山岩	2.12	1
11 溶結凝灰岩	2.12	1
12 流紋岩	2.12	1
13 輝緑岩	2.12	1
	100.00	47



第192図 J-9号住居跡出土石器の器種別・石材別グラフ



第193図 J-10号住居跡

## J-10号住居跡 (第193・194図、PL.29)

**位置** N-39グリッドにおいて検出された。J-9号住居跡と重複している。

**経過** 10月18日に住居跡プランを確認し調査にはいった。J-9号住居跡の調査と併行して進められ、新旧関係の把握に努め、そして各種図面の作成・写真撮影を行い、11月6日に調査を終了した。

**重複** J-9号住居跡の一部を壊して構築されている。

**覆土** ローム層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

第1層 黒褐色土層 固く締め粘性が少しある。炭化物粒子を多量に、ローム粒子を少量含む。

第2層 暗褐色土層 固く締め粘性が少しある。ローム粒子・炭化物粒子を多量に含む。

第3層 暗褐色土層 やわらかくてサラサラしている。粘性はない。ローム粒子・炭化物粒子を少量含む。

第4層 黄褐色土層 固いが締め悪い。粘性はほとんどない。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

第5層 黄褐色土層 固く締め粘性が少しある。ローム粒子を多量に、黒色土を少量、また炭化物粒子も少量含む。

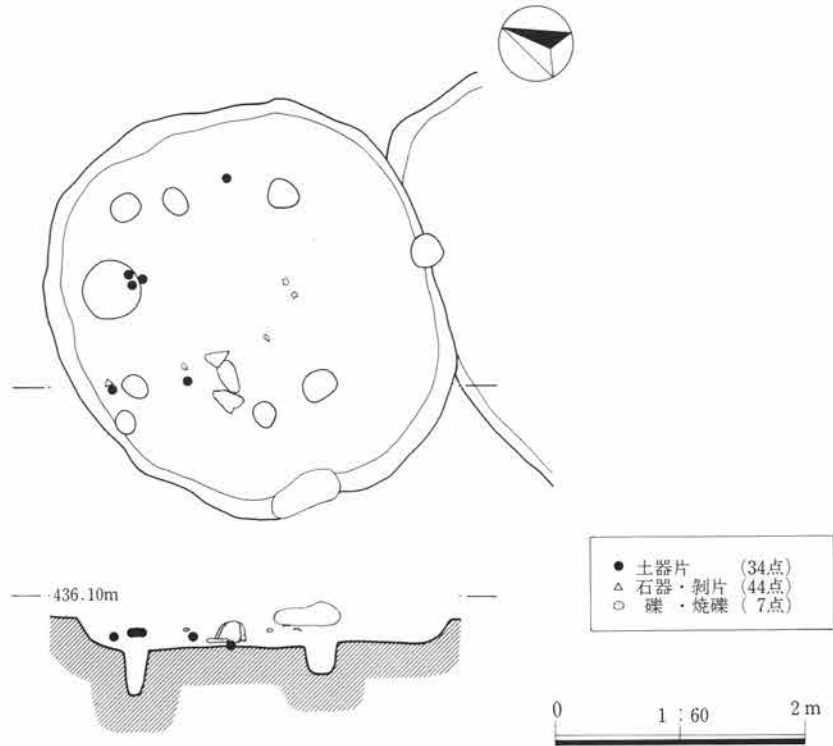
**形状** 長径3.28m、短径3.07mのほぼ円形を呈する。面積約7.1m<sup>2</sup>であるから、居住人員は約2.2人となる。

**壁高** 住居跡確認面より約9~20cmで床面に達する。床面からゆるやかに立ちあがる。

**床面** 全体的に軟弱であり、ほぼ平坦である。

**周溝** 検出できなかった。

**柱穴** 総計8個のピットが検出された。このうちP<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>は支柱穴になると考えられ、6本柱の竪穴住居



第194図 J-10号住居跡遺物出土状況

跡となる。それぞれのピットの深さは、P<sub>1</sub>42cm、P<sub>2</sub>32cm、P<sub>3</sub>52cm、P<sub>4</sub>24cm、P<sub>5</sub>51cm、P<sub>7</sub>40cmであり、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間距離40cm、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>間距離85cm、P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>間距離50cm、P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>間距離110cmを測る。片側3個のピットのうち2個は近接して配置されるなど、J-8号住居跡のピット配置とほぼ同様である。P<sub>6</sub>の深さは36cm、P<sub>8</sub>の深さは27cmを測る。

炉 検出できなかった。床面に焼土の痕跡は全く認められなかった。

遺物出土状況 覆土・床面からの遺物の出土はほとんどなかった（第194図）。

出土遺物（第195図、PL.66）

当住居跡から出土した遺物の内訳は、中期土器片34点、前期土器片1点、弥生土器片15点であった。中期土器片の部位別点数は、口縁部片3点、胴部片30点、底部片1点であり、いずれも細片であった。このうちの5点を拓本で図示した。1・4・5は五領ヶ台式、2・3は阿玉台式土器である。

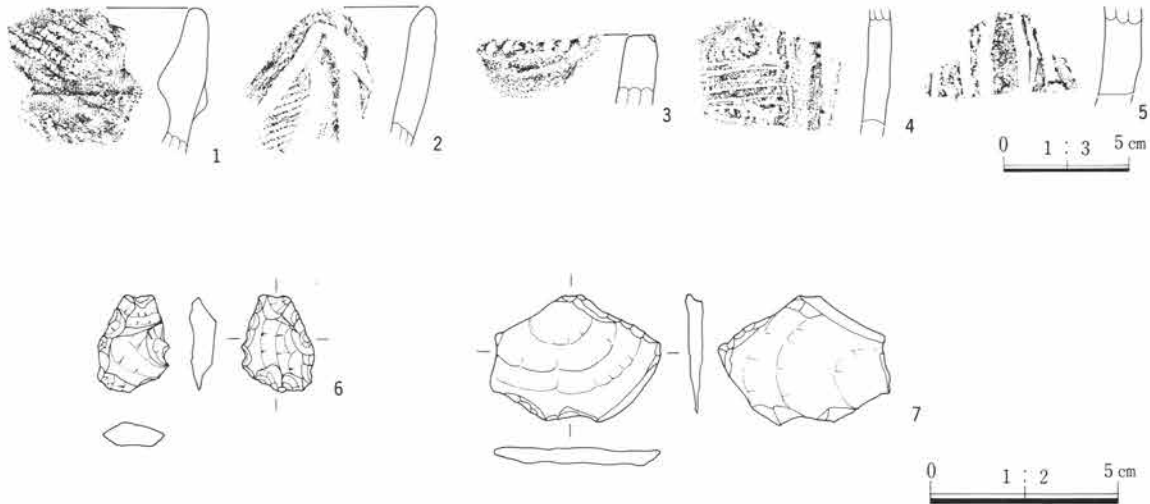
石器・礫等は51点出土している。フレイク・チップで23点（45.09%）を占めている。この他に両面調整スクレイパー、片面調整スクレイパー、ピエス・エスキュー、磨石等が出土している。使用石材は黒色頁岩が圧倒的に多く、41点（80.4%）を占めている。この他に黒色安山岩、緑色凝灰岩、輝石安山岩、流紋岩がみられた。詳細は第196図の器種別・石材別グラフに示した。

時期 出土遺物や住居形態から判断すると、当住居跡は縄文時代中期前半（阿玉台式期）の段階に相当する。

No.	上	長さ×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
	下			
1	24×20cm 10×10cm		42cm	支柱穴
2	23×18cm 13×10cm		32cm	"
3	25×24cm 14×11cm		52cm	"
4	28×23cm 15×13cm		24cm	"
5	20×18cm 9×6cm		51cm	"
6	22×16cm 12×9cm		36cm	" ?
7	17×16cm 12×11cm		40cm	" ?
8	47×45cm 28×26cm		27cm	

J-10号住居跡ピット計測表

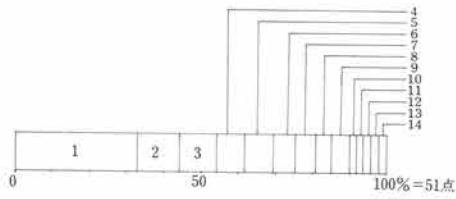




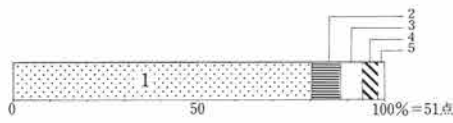
第195図 J-10号住居跡出土遺物

J-10号住居跡遺物観察表

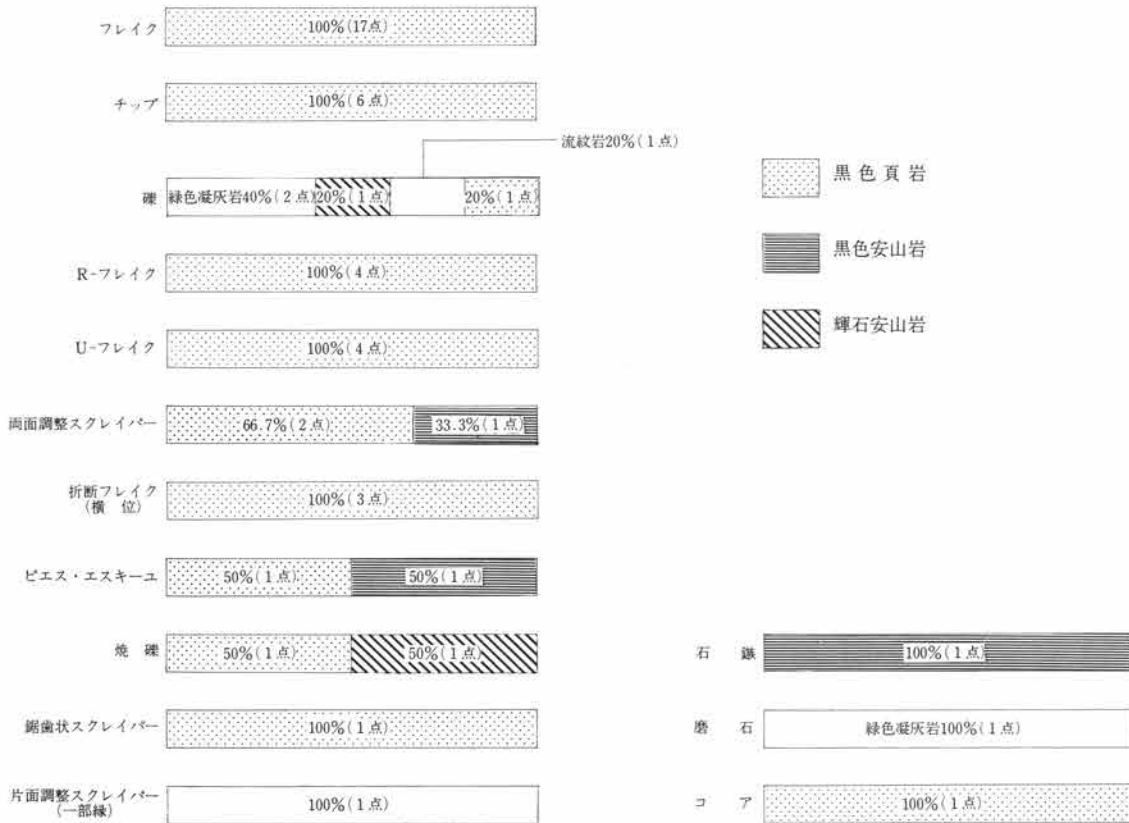
図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況			
							計測値( )内は現存値	備考	出土状況
	器種	遺存状況	石 材	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
195-1 PL. 66	口縁部片		①細礫を含む ②良 ③外面 黒褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の複合口縁部片。器厚9mm~1.4cm。内面は横ミガキが行われている。	縄文施文。原体はR(1/2)。	住居跡中央部			
195-2 PL. 66	口縁部片		①粗砂を含む ②良 ③外面 黒褐色 内面にふい黄橙色	深鉢形土器の口縁部片。器厚1cm。内面は剥落している。	R(1/2)の縄文施文後、隆帯に沿って沈線が施されている。	覆土			
195-3 PL. 66	口縁部片		①細礫を含む ②やや良 ③外面 にふい黄橙色 内面 にふい黄橙色	深鉢形土器の口縁部片。口唇部は平担で器厚1.2cm。内面は粗い調整が行われている。	口唇部に刺突が施されている。	覆土			
195-4 PL. 66	胴部片		①石英を含む ②やや良 ③外面 にふい黄橙色 内面 にふい橙色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mmで積みあげ技法A。内面は荒れている。	隆帯に沿って半截竹管による幅4mmの平行沈線を垂下。横位に沈線を施した後、同工具による刺突が施されている。	覆土			
195-5 PL. 66	胴部片		①粗砂を含む ②やや良 ③外面 赤褐色 内面 黒褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚1.2cmで積みあげ技法B。内面は粗い調整が行われている。	隆帯に沿って棒状工具による沈線を垂下。内面に煤が付着している。	住居跡中央部			
196-6 PL. 66	石鎌	先端欠	黒色安山岩	(2.5)	1.8	0.7	(3.2)	側縁は中央部で外側に彎曲している。	覆土
196-7 PL. 66	ピエス・エスキュー	完形	黒色頁岩	3.3	4.5	0.4	8.8	横長剥片を素材とし、下端に小剥離痕がある。	覆土



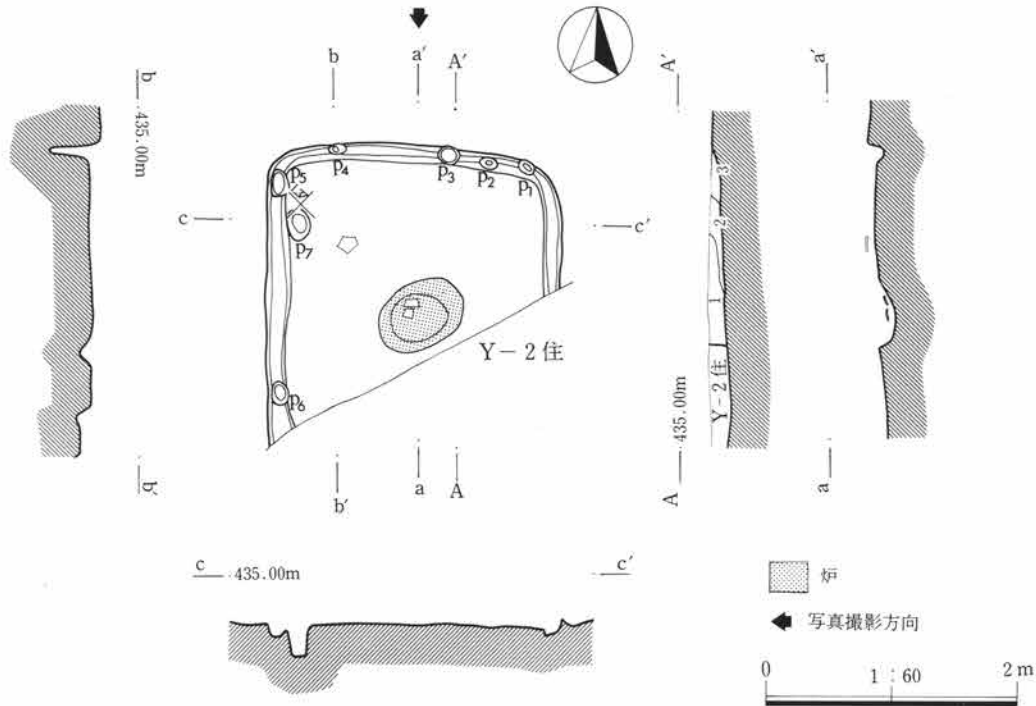
器種	%	点
1 フレイク	33.33	17
2 チップ	11.76	6
3 礫	9.80	5
4 R-フレイク	7.84	4
5 U-フレイク	7.84	4
6 両面調整スクレイパー	5.88	3
7 折断フレイク(横位)	5.88	3
8 ビエス・エスキュー	3.91	2
9 焼 礫	3.91	2
10 鋸歯状スクレイパー	1.97	1
11 片面調整スクレイパー	1.97	1
12 石 鏃	1.97	1
13 磨 石	1.97	1
14 コ ア	1.97	1
	100.00	51



石 材	%	点
1 黒色頁岩	80.4	41
2 黒色安山岩	7.84	4
3 緑色凝灰岩	5.88	3
4 輝石安山岩	3.92	2
5 流紋岩	1.96	1
	100.00	51



第196図 J-10号住居跡出土石器の器種別・石材別グラフ



第197図 J-11号住居跡

J-11号住居跡 (第197図、PL.29)

**位置** L-37・38、M-37・38グリッドにかけて検出された。Y-2号住居跡と重複関係にある。

**経過** 11月1日から調査を開始した。Y-2号住居跡と重複しているために全容をつかむことはできなかった。覆土からはほとんど遺物が出土せず、わずかに炉跡内から出土したにとどまった。

**重複** Y-2号住居跡と重複しており、当住居跡の1/3程度が壊されているものと考えられる。

**覆土** ローム層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

**第1層** 暗褐色土層 やや固く締り良い。粘性はほとんどない。ロームブロック・ローム粒子を多量に含み、炭化物粒子を少量含む。

**第2層** 黄褐色土層 固く締り悪い。粘性はほとんどない。ロームブロック・ローム粒子を少量含む。

**第3層** 暗褐色土層 固く締り悪い。粘性はほとんどない。

ローム粒子を多量に含み、炭化物粒子を少量含む。

**形状** 現状での長辺は2.23m、短辺は2.38mを測り、おそらく隅丸長方形を呈していたものと考えられる。また現状での面積は約3.22m<sup>2</sup>である。

**壁高** 住居跡確認面より約10cmで床面に達している。残存状況は非常に悪かった。

**床面** ほぼ平坦であり、良く踏み固められている。

**周溝** 東壁下幅10~12cm、西壁下幅12~16cm、北壁下幅10cmの周溝が全周していたものと考えられる。深さは約7cm程である。また北壁下の周溝内にピット4個(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)、西壁下の周溝内にピット2個(P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>)が存在する。

No.	長径×短径 (cm)		深さ (cm)	備考
	上	下		
1	14×9	8×4	9	壁柱穴
2	16×9	6×3	21	〃
3	16×14	13×11	12	〃
4	14×8	4×4	24	〃
5	20×14	17×10	11	〃
6	18×14	12×8	31	〃
7	24×20	14×12	24	〃

J-11号住居跡ピット計測表

**柱穴** 総計7個のピットが検出された。P<sub>7</sub>を除いたP<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>は壁柱穴を構成するものであろう。それぞれのピットの深さは、P<sub>1</sub>9cm、P<sub>2</sub>21cm、P<sub>3</sub>12cm、P<sub>4</sub>24cm、P<sub>5</sub>11cm、P<sub>6</sub>31cmを測る。浅いピットと深いピットが交互に配置されている。P<sub>7</sub>は深さ24cmであり、床面に存在する唯一のピットである。

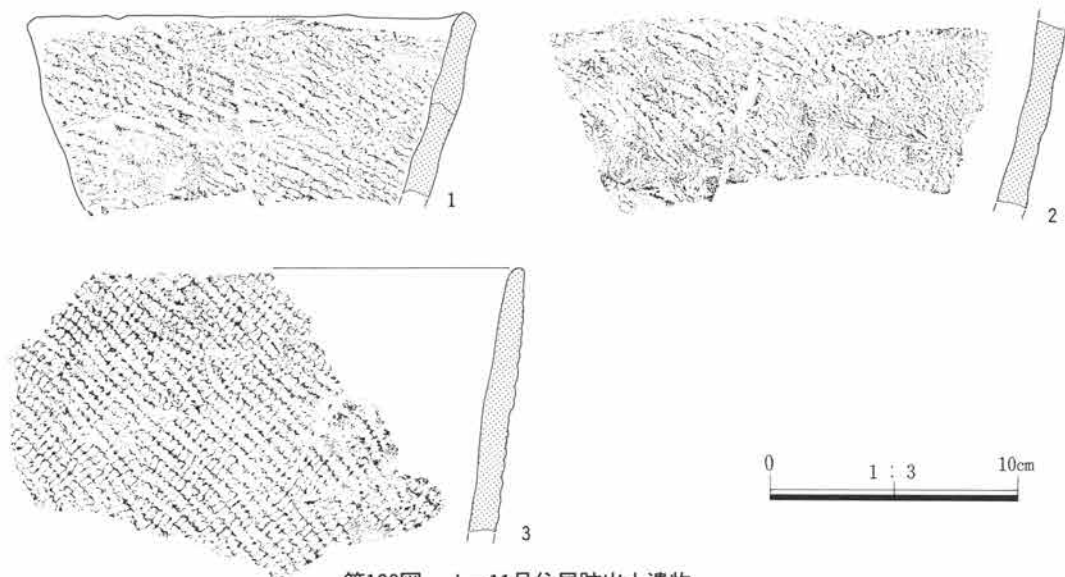
**炉** 長径74cm、短径52cm、深さ12cmの楕円形を呈している。面積は約0.32m<sup>2</sup>である。炉壁面にほぼ接して土器2点が出土した。

**遺物出土状況** 炉内から2点、覆土から1点の縄文時代前期土器片が出土しただけである。

**出土遺物 (第198図、PL.66)**

当住居跡から出土した遺物は、すでに記したとおり縄文時代前期土器片3点であった。いずれも胎土に繊維を含んでいる。

**時期** 出土遺物や住居跡の形態から判断すると、当住居跡は縄文時代前期前葉の段階に相当するものである。



第198図 J-11号住居跡出土遺物

J-11号住居跡遺物観察表

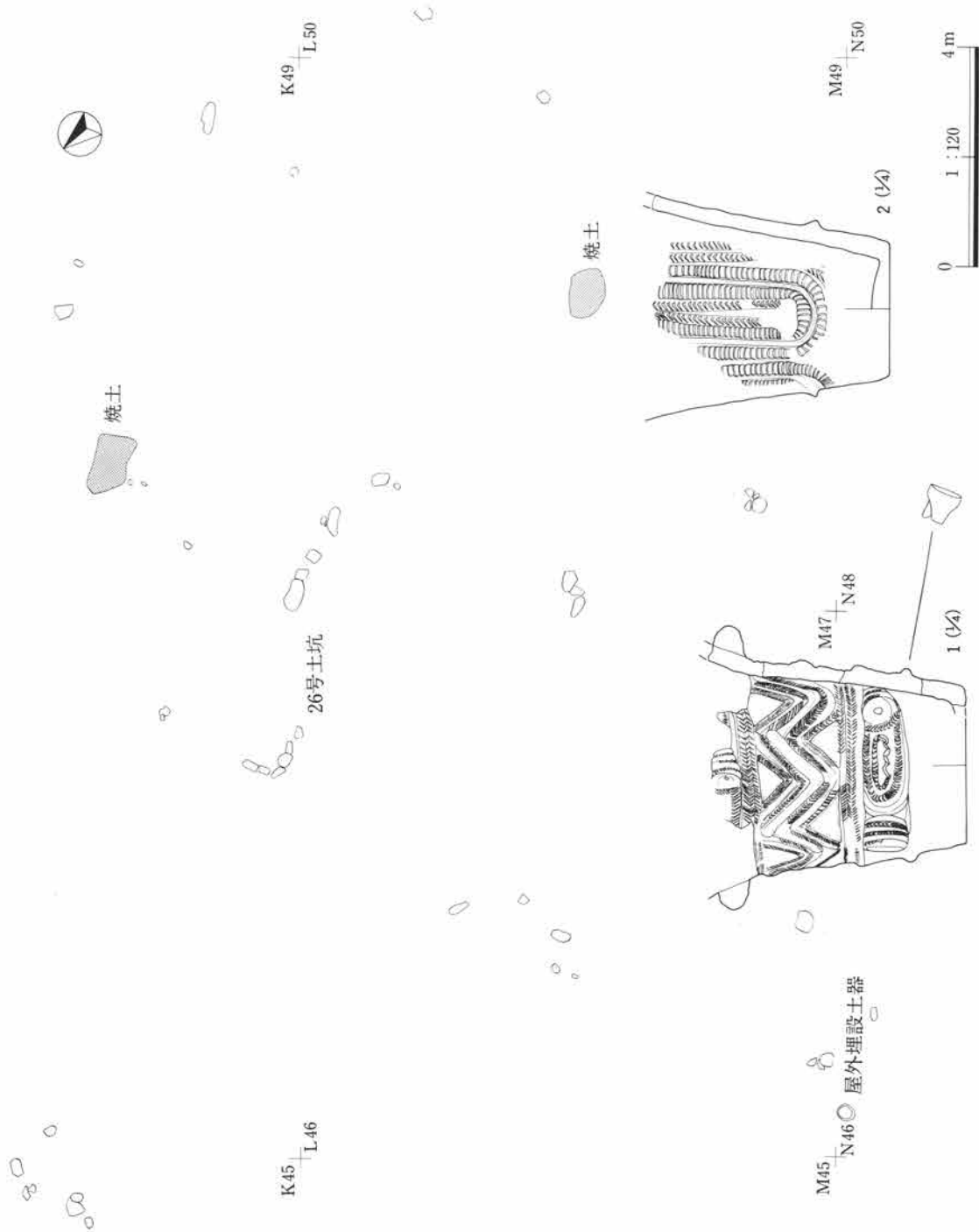
(法量：①口径②器高(現高)) \*第35図参照

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文様(その他)	出土状況
198-1 2 PL.66	深鉢形	①(17.2) ②(7.2)	①含繊維 ②良 ③外面 褐灰色 内面 ぶい橙色	深鉢形土器の口縁部 $\frac{1}{3}$ 。口縁部は外傾し、口唇部は角頭状。器厚8mm~1.2cmで積みあげ技法A。内面は粗い調整が行われている。	縄文施文。原体は附加条第1種R{ $\frac{1}{2}$ +L。外面に煤が付着している。	炉内
198-3 PL.66	深鉢形		①含繊維 ②良 ③外面 ぶい黄橙色 内面 ぶい黄橙色	深鉢形土器のやや外傾する口縁部片。器厚8mm~1cmで積みあげ技法B。内面は丁寧な調整が行われている。	縄文施文。原体はR{ $\frac{1}{2}$ 。	

## 3 縄文時代の配石・土坑

## (1) 配石遺構 (第199図、PL.28・66)

長径22m、短径18mの範囲に礫が散漫的に配置されている。この礫の配置を仔細に検討すると、内側と外側に配された2つの礫群に分解できそうである。内側は8×6m程の規模を有し、外側で22×18mの規模となっている。そしてこの配石間に、焼土の堆積2ヶ所が認められた。いずれも1×0.65m程の範囲である。内側の配石には、26号土坑(配石墓)が、外側の配石には屋外埋設土器遺構が存在するなど、特徴的である。



第199図 配石遺構と出土土器

この配石遺構は北西部分で途切れて、中期前半の居住域と結ばれるなど非常に興味深い構造となっている。そしてこの配石を取り囲むように縄文時代の土坑が存在することも重要な事実であろうと思われる。

## (2) 土坑 (第200~203図、PL.29~31)

### 3号土坑

O-48・49グリッドにかけて検出された。4号土坑の東4mのところの位置する。上面は110×105cm、底面は104×92cm、深さ5~8cmのほぼ円形を呈する。底面はほぼ平坦であり、面積約0.7m<sup>2</sup>である。覆土は2層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やや固く締りロームブロックをわずかに含む。

第2層 暗褐色土層 やや固く締りロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

覆土からは縄文時代中期の浅鉢形土器と小型土器2個体が押し潰された状態で出土した。

### 4号土坑

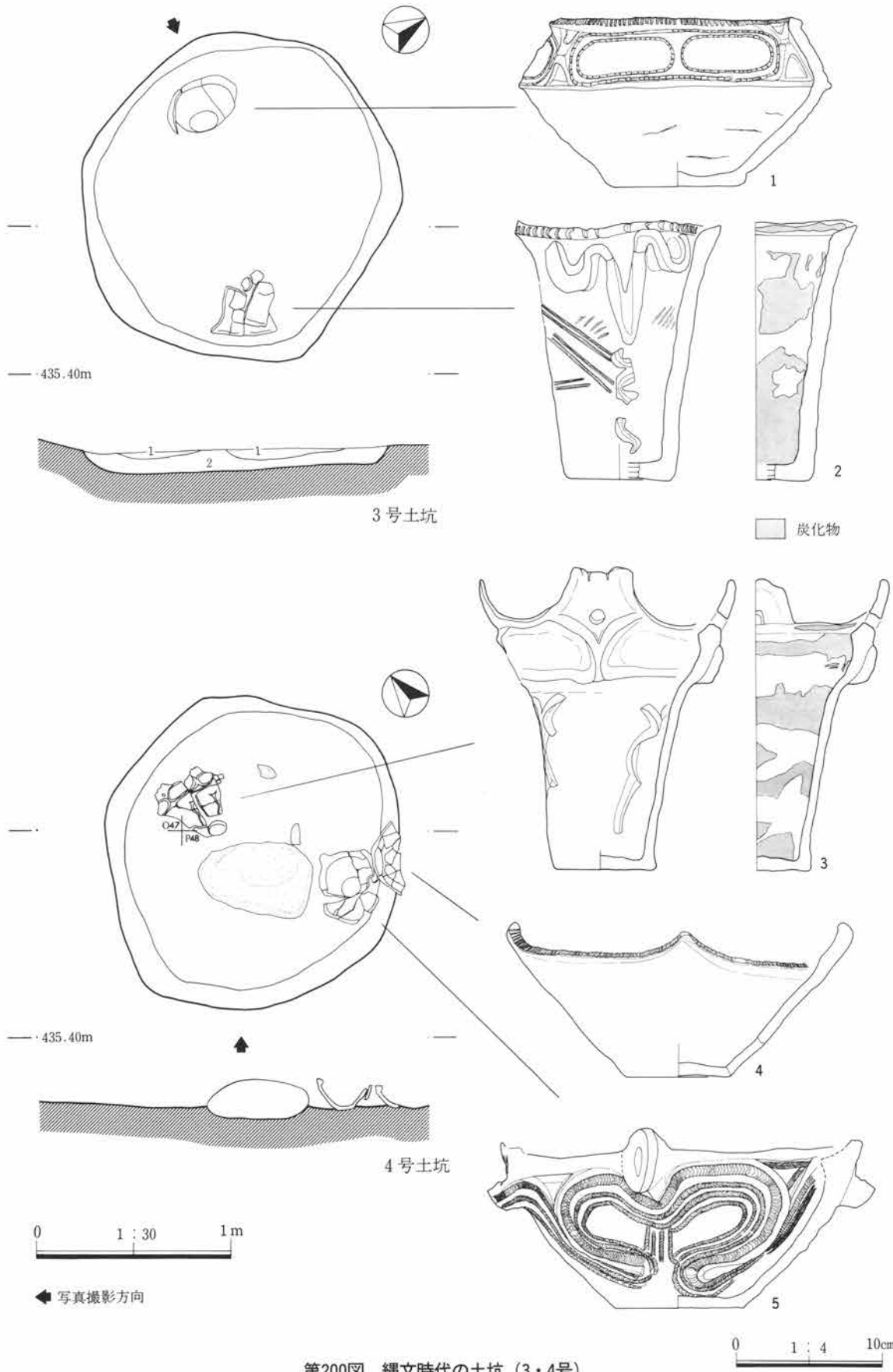
O-47・48、P-47・48グリッドにかけて検出された。3号土坑の西4mのところの位置する。上面は160×105cm、底面は97×90cm、深さ4~11cmのほぼ円形を呈している。底面はほぼ平坦であり、面積約0.7m<sup>2</sup>である。底面からは縄文時代中期の浅鉢形土器2個体、小型土器1個体、そして礫が出土した。浅鉢2個体は接して、そして小型土器は対面する壁寄りから、いずれも押し潰されたような状態で出土している。3号土坑と同一の出土状況を示している。

3・4号土坑は、形態や規模において、また遺物出土状況が酷似するなど、同一時期に構築され何らかの目的をもって完形土器が土坑底面に配置されたものであろう。

## 配石・土坑遺物観察表

(法量：①口径②器高(現高)⑤底径) \*第35図参照

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況
199-1 PL. 66	深鉢形	②(15.4) ⑤ 9.6	①細礫を含む ②やや良 ③外面 明赤褐色 内面 褐灰色	深鉢形土器の胴部~底部片。器厚 8mm~1cm。内面は丁寧な調整が 行われている。	隆帯が鋸歯状に巡り、これに沿っ て2列の先端を有するへら状工具 による連続刺突。楕円区画内も同 様な施文。	配石下
199-2 PL. 66	深鉢形	②(14.5) ⑤ 8.0	①雲母を含む ②良 ③外面 明赤 褐色 内面 灰赤色	深鉢形土器の胴部~底部片。器厚 6mm~1.1cm。内面は丁寧な調整。 底面は荒れている。	隆帯に沿って幅広の竹管による刺 突、先端を有するへら状工具によ る連続刺突が施されている。	配石
200-1 PL. 67 68	浅鉢形	① 17.2 ② 11.4 ⑤ 9.0	①金雲母・細礫を含 ②良 ③外面 ぶい褐色 内面 ぶい褐色	完形品。器厚7mm~1cm。内外面 は丁寧な調整が行われているが、 一部に輪積み痕が認められる。	口唇部に刻目。赤色塗彩が認めら れる。隆帯で画された杵状文の内 側に2列の角押文が配されてい る。	3号土坑底 面
200-2 PL. 67	小型深 鉢形	① 14.0 ② 17.3 ⑤ 7.0	①細礫を含む ②良 ③外面 淡黄色 内面 黒褐色	ほぼ完形品。器厚1cm~1.3cm。内 面は粗い調整が行われている。	口唇部に半載竹管によるC字爪形 文。胴部にL字をまばらに施文 後、隆帯・半載竹管による平行沈 線。内面に炭化物が多量に附着。	3号土坑底 面
200-3 PL. 67 68	小型深 鉢形	① 17.5 ② 20.5 ⑤ 6.8	①金雲母を含む ②良 ③外面にぶい 褐色 内面 褐灰色	完形品。波状口縁部で波頂部下に 径1cmの円孔。器厚5mm~1cm。 内面は丁寧な調整が行われている。	口縁部に断面三角形の隆帯による 楕円区画。胴部では垂下している。 内面に炭化物が多量に附着。	4号土坑底 面
200-4 PL. 67	浅鉢形	① 22.6 ② 10.0 ⑤ 7.0	①金雲母を含む ②良 ③外面にぶい赤 褐色内面にぶい赤褐色	完形品。器厚6mm~1cm。内面は 丁寧な調整が行われている。	口唇部に刻目が施されている。	4号土坑底 面
200-5 PL. 67 68	浅鉢形	① 24.8 ② 12.2 ⑤ 8.8	①細礫を含む ②良 ③外面にぶい赤 褐色内面にぶい赤褐色	完形品。口縁部に4個の突手。器 厚7mm~1.5cm。内面は丁寧な調 整。底面は荒れている。	隆帯に沿って幅広の竹管と2列の 先端を有するへら状工具による連 続刺突が施されている。	4号土坑底 面



第200図 縄文時代の土坑 (3・4号)

### 5号土坑

L-52・53グリッドにかけて検出された。6号土坑の西5mのところに位置する。上面は216×180cm、底面は204×168cm、深さ23～32cmの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦であり、面積約2.4m<sup>2</sup>である。覆土は3層に分かれた。

第1層 赤褐色土層 やや固く締め粘性は少しある。焼土を多量に含む。

第2層 黒褐色土層 やや固く締め粘性が非常にある。ローム粒子・焼土粒子を少量含む。

第3層 茶褐色土層 やや固く締め粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を含む。

覆土最上層からは縄文時代中期土器片5点と焼礫4個が出土している。覆土第1層の焼土を多量に含む土とこの焼礫は密接な関係にあるものと考えられる。

### 6号土坑

K-53グリッドにおいて検出された。5号土坑の東5mのところに位置する。上面は205×149cm、底面は164×124cm、深さ22～51cmの楕円形を呈する。底面には小ピット2個が存在し、また土坑断面は皿状を呈している。面積約1.6m<sup>2</sup>である。覆土は6層に分かれた。

第1層 赤褐色土層 焼土層。黒色土をわずかに含んでいる。

第2層 黒褐色土層 粒子やや粗く締め良くない。焼土をわずかに含む。

第3層 黒色土層 粒子やや粗く締め良くない。焼土粒子をわずかに含む。

第4層 暗褐色土層 粒子やや粗く締め良くない。ローム粒子をわずかに含む。

第5層 黄褐色土層 粒子粗く締め悪い。ローム粒子を多量に含む。

第6層 黄褐色土層 固く締っている。ロームを主体にわずかに黒色土を含んでいる。

覆土からは縄文時代中期土器片2点が出土している。土坑の規模や覆土最上層に焼土が認められるなど5号土坑と共通性が認められる。なお、焼土の分布範囲をスクリーントーンで表示した。

### 26号土坑

K-47グリッドにおいて黒色土層中から検出された。近接して17号土坑が存在する。上面は123×82cm、底面は102×64cm、深さ6～12cmの隅丸方形を呈する。底面はほぼ平坦であり、面積約0.48m<sup>2</sup>である。北壁・西壁に礫が意図的に配置されており、その数は7個であった。覆土は次のとおりである。

第1層 茶褐色土層 やや固く締め粘性が少しある。焼土粒子を多量に、ローム粒子を少量含む。

覆土からは遺物の出土はなかったが、焼土の検出、礫の配置などから縄文時代の配石墓として理解できるものである。5号土坑も同様な遺構であろうか。

### 28号土坑

K-44・45グリッドにかけて検出された。当土坑は20号土坑(風倒木)を壊して構築されている。上面は81×66cm、底面は66×52cm、深さ30～48cmのほぼ円形を呈する。底面はほぼ平坦であり、面積約0.25m<sup>2</sup>である。覆土は4層に分かれた。

第1層 黒色土層 少量のローム粒子を含む。 第2層 黒色土層 極少量のローム粒子を含む。

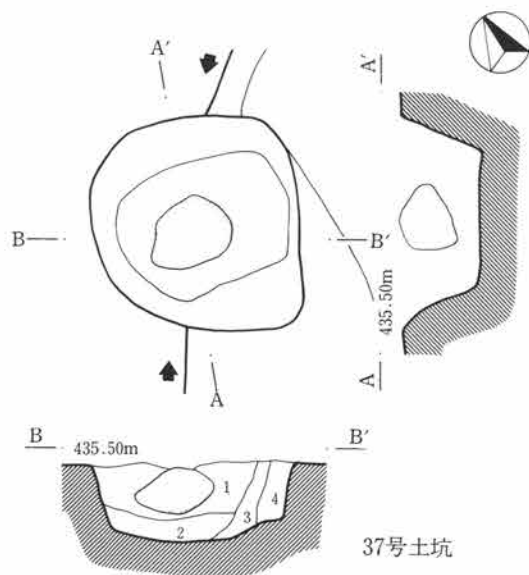
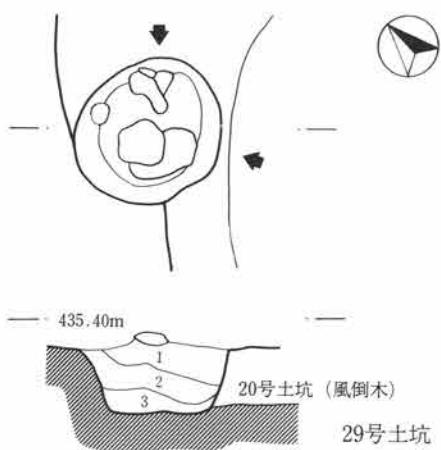
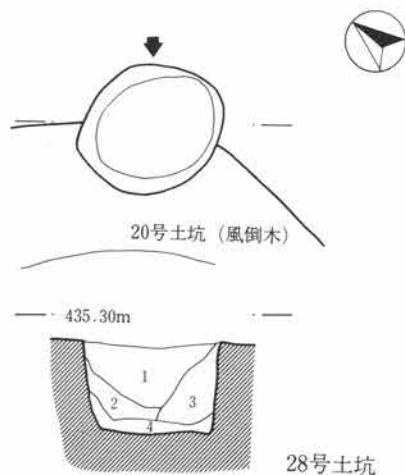
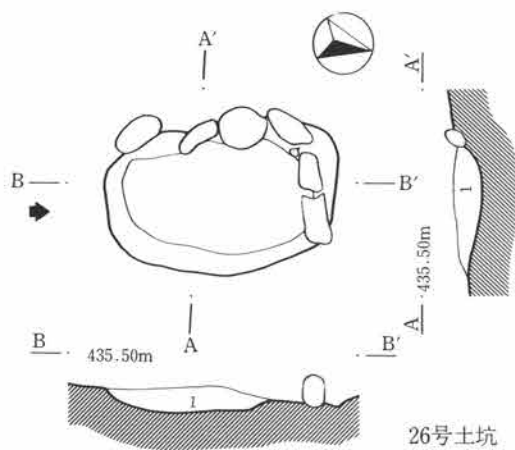
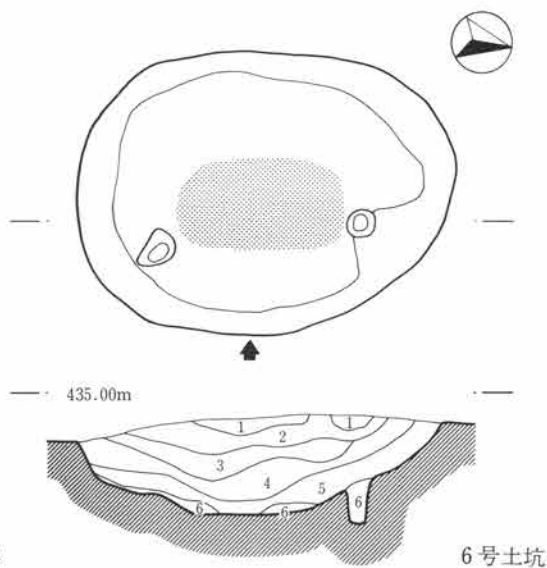
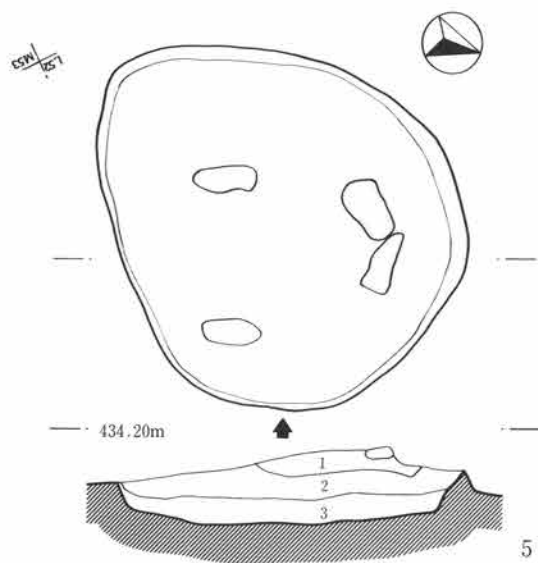
第3層 黒褐色土層 ローム粒子を含む。 第4層 黒褐色土層 3層よりローム粒子の混入は多くない。

覆土からは縄文時代中期土器片1点が出土している。

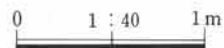
### 29号土坑

K-44グリッドにおいてローム層直上で検出された。28号土坑と同様に20号土坑と重複関係にあり、当土坑もまた20号土坑を壊して構築されている。上面は82×72cm、底面は61×55cm、深さ30～33cmのほぼ円形を

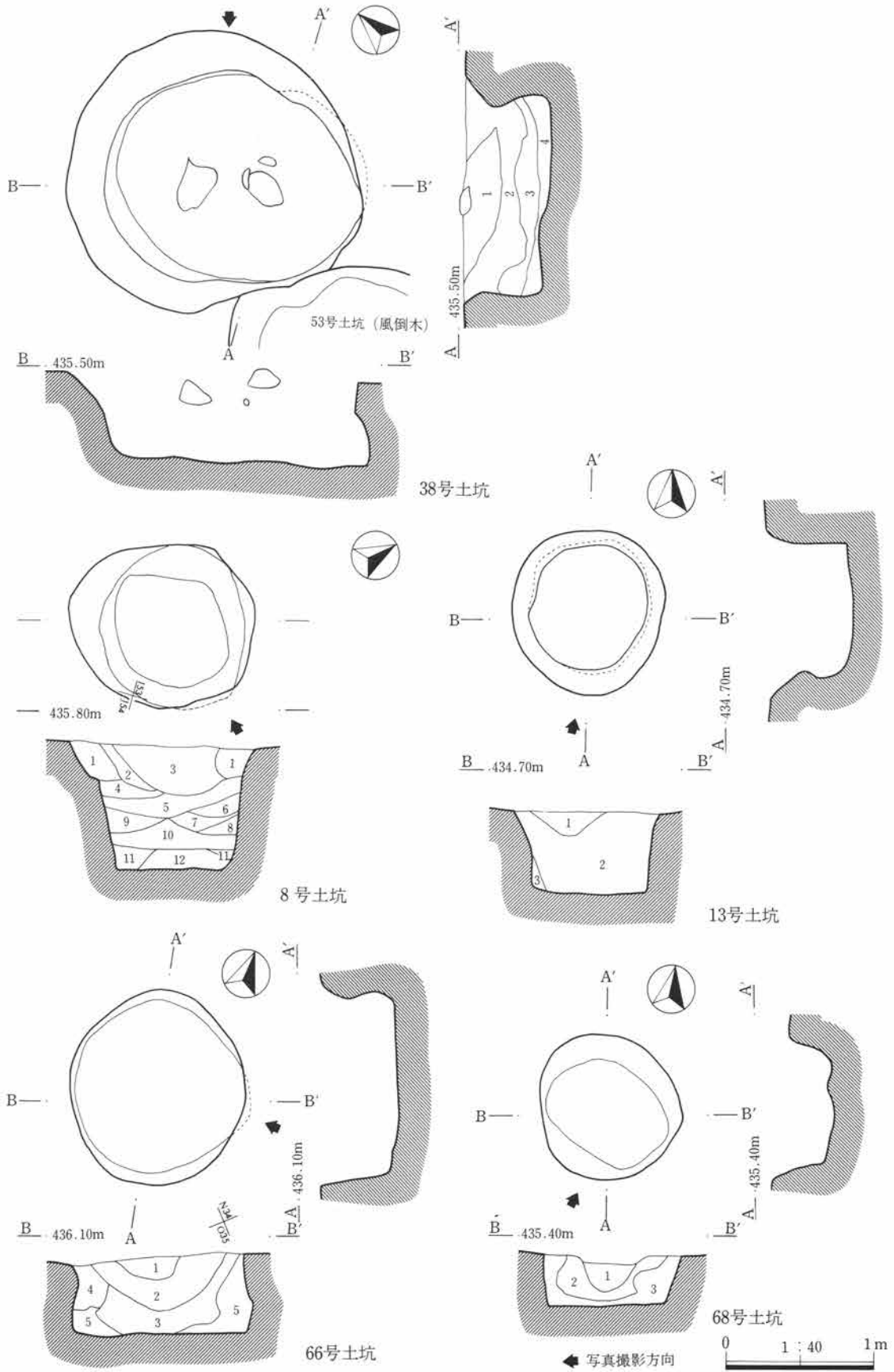




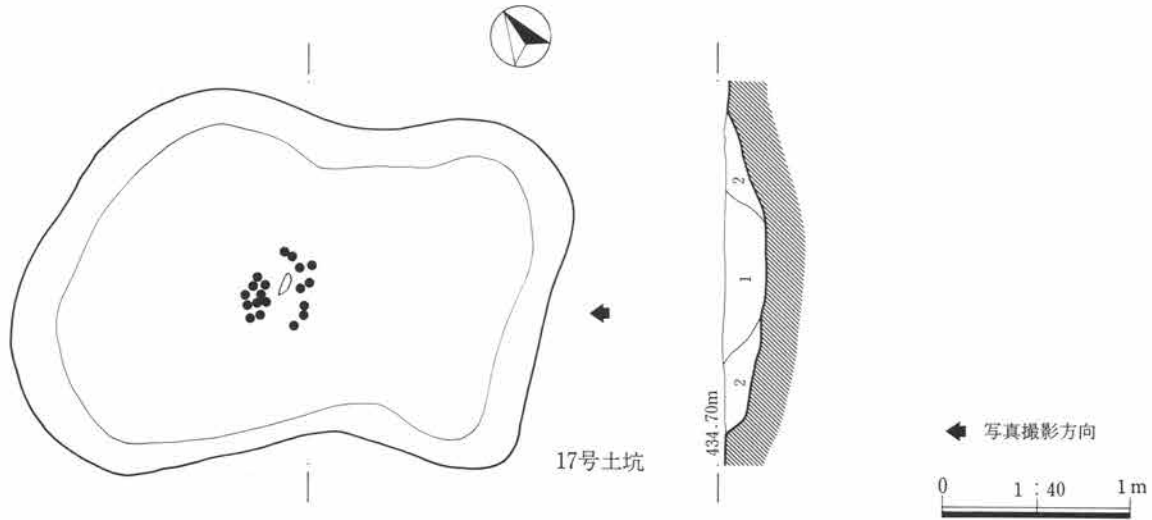
◀ 写真撮影方向



第201図 縄文時代の土坑 (5・6・26・28・29・37号)



第202図 縄文時代の土坑 (38・8・13・66・68号)



第203図 縄文時代の土坑（17号）

呈する。底面はほぼ平坦であり、面積約 $0.25\text{m}^2$ である。覆土は3層に分かれた。

- 第1層 黒色土層 やわらかくて締り良い。粘性が非常にある。ローム粒子・赤色スコリア粒子を含む。  
 第2層 黒褐色土層 やわらかくて締り良い。粘性が非常にある。ローム粒子を多量、赤色スコリアも含む。  
 第3層 暗褐色土層 やわらかく締り悪い。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

覆土最上層からは土器の出土はなかったが、石皿1点が伏せられた状態で、また凹石1点、両面調整スクレイパー1点がそれぞれ出土している。

#### 37号土坑

O-45グリッドにおいて検出された。当土坑は36号土坑（風倒木）を壊して構築されている。上面は $115\times 111\text{cm}$ 、底面は $94\times 67\text{cm}$ 、深さ $40\sim 44\text{cm}$ の楕円形を呈する。底面はやや皿状を呈し、面積約 $0.53\text{m}^2$ である。覆土は4層に分かれた。

- 第1層 黒色土層 少量のローム粒子を含む。第2層 黒色土層 1層よりやや多くのローム粒子含。  
 第3層 黒色土層 少量のローム粒子を含む。第4層 暗褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を含。

覆土からは縄文時代前期土器片1点と大きな礫が出土している。

#### 38号土坑

O-44・45グリッドにかけて検出された。53号土坑（風倒木）として接して構築されている。上面は $196\times 184\text{cm}$ 、底面は $178\times 137\text{cm}$ 、深さ $45\times 60\text{cm}$ の楕円形を呈し、断面は袋状である。底面はやや凹凸が認められ面積約 $1.8\text{m}^2$ である。覆土は4層に分かれた。

- 第1層 黒色土層 わずかにローム粒子を含む。第2層 黒色土層 粒子の密な層。  
 第3層 黒色土層 ロームブロックを含む。第4層 褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

覆土からは縄文時代中期土器片3点と上層から礫が出土している。

#### 8号土坑

I-53・54、J-53・54グリッドにかけて検出された。7号土坑（陥し穴）の東1mのところに位置する。上面は $127\times 112\text{cm}$ 、底面は $108\times 98\text{cm}$ 、深さ $82\text{cm}$ の楕円形を呈する。底面は平坦であり、面積約 $0.5\text{m}^2$ である。覆土は12層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 粒子やや細かく締りある。 第2層 暗褐色土層 粒子粗く締りない。ロームブロックを含む。 第3層 暗褐色土層 粒子粗く締りない。ロームブロックを含む。 第4層 黒褐色土層 粒子粗く締りない。ロームブロックを少量含む。 第5層 暗褐色土層 粒子粗く締りない。ロームブロックを多量に含む。 第6層 黒褐色土層 粒子粗く締りない。ロームブロックを少量含む。 第7層 暗褐色土層 やや締り、ロームブロックを多量に含む。 第8層 黒褐色土層 締りあまりない。ロームブロックを含む。 第9層 黒褐色土層 3・6層と近似した層であるが、やや締りがある。 第10層 暗褐色土層 5層と近似した層であるが、やや締りがある。 第11層 黒褐色土層 6層と近似した層であるが、締りがある。ローム・ブロックを含む。 第12層 暗褐色土層 10層と近似した層であるが締りある。

覆土を12層に分層したが、いずれの層も非常に近似した層を示している。覆土からは遺物の出土はなかったが、土坑の形態・覆土の層相・堆積状況等から判断して、縄文時代の貯蔵穴と考えられる。

### 13号土坑

K-49グリッドにおいて検出された。11号土坑・16号土坑のほぼ中間に位置している。上面は107×102cm、底面は91×80cm、深さ54cmの円形を呈し、断面やや袋状である。底面は平坦であり、面積約0.74m<sup>2</sup>である。覆土は3層に分かれた。

第1層 黒色土層 やわらかくて粘性が非常にある。ローム粒子・赤色スコリア粒子を少量含む。

第2層 暗褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

第3層 黄褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。ロームブロックを多量に含む。

覆土からは遺物の出土はなかった。8号土坑と同様に形態・覆土の層相から判断して縄文時代の貯蔵穴と考えられる。

### 66号土坑

N-34・O-34グリッドにかけて検出された。Y-5号住居跡の西、Y-6号住居跡の北に位置する。上面は130×118cm、底面は120×116cm、深さ46~57cmの円形を呈し、断面はやや袋状である。底面は平坦であり、面積約1m<sup>2</sup>である。覆土は5層に分かれた。

第1層 黒褐色土層 やや固く締り粘性はあまりない。ローム粒子を少量含む。

第2層 暗褐色土層 やや固く締り粘性はあまりない。ローム粒子を多量に、炭化物粒子を少量含む。

第3層 黄褐色土層 やわらかくて締り悪い。粘性が非常にある。ローム粒子を多量に、黒色土を少量含む。

第4層 黄褐色土層 やや固いが締り悪い。粘性が非常にある。黒色土とロームの混合土。

覆土からは遺物の出土はなかったが、形態や覆土の層相から判断して縄文時代の貯蔵穴になると思われる。

### 68号土坑

L-34、M-34グリッドにかけて検出された。上面は100×95cm、底面は80×61cm、深さ27~37cmの楕円形を呈する。底面は凹凸が認められ、面積約0.44m<sup>2</sup>である。覆土は3層に分かれた。

第1層 黒褐色土層 やや固いが締り悪い。粘性はあまりない。ローム粒子を含む。

第2層 暗褐色土層 やや固く締り良い。粘性が非常にある。ローム粒子を多量に、炭化物粒子を少量含む。

第3層 黄褐色土層 やや固く締り良い。粘性が非常にある。ローム粒子を多量に含む。

覆土からは遺物の出土はなかったが、土坑の形態・覆土の層相から判断すると、当土坑も縄文時代の貯蔵穴と考えられる。

### 17号土坑

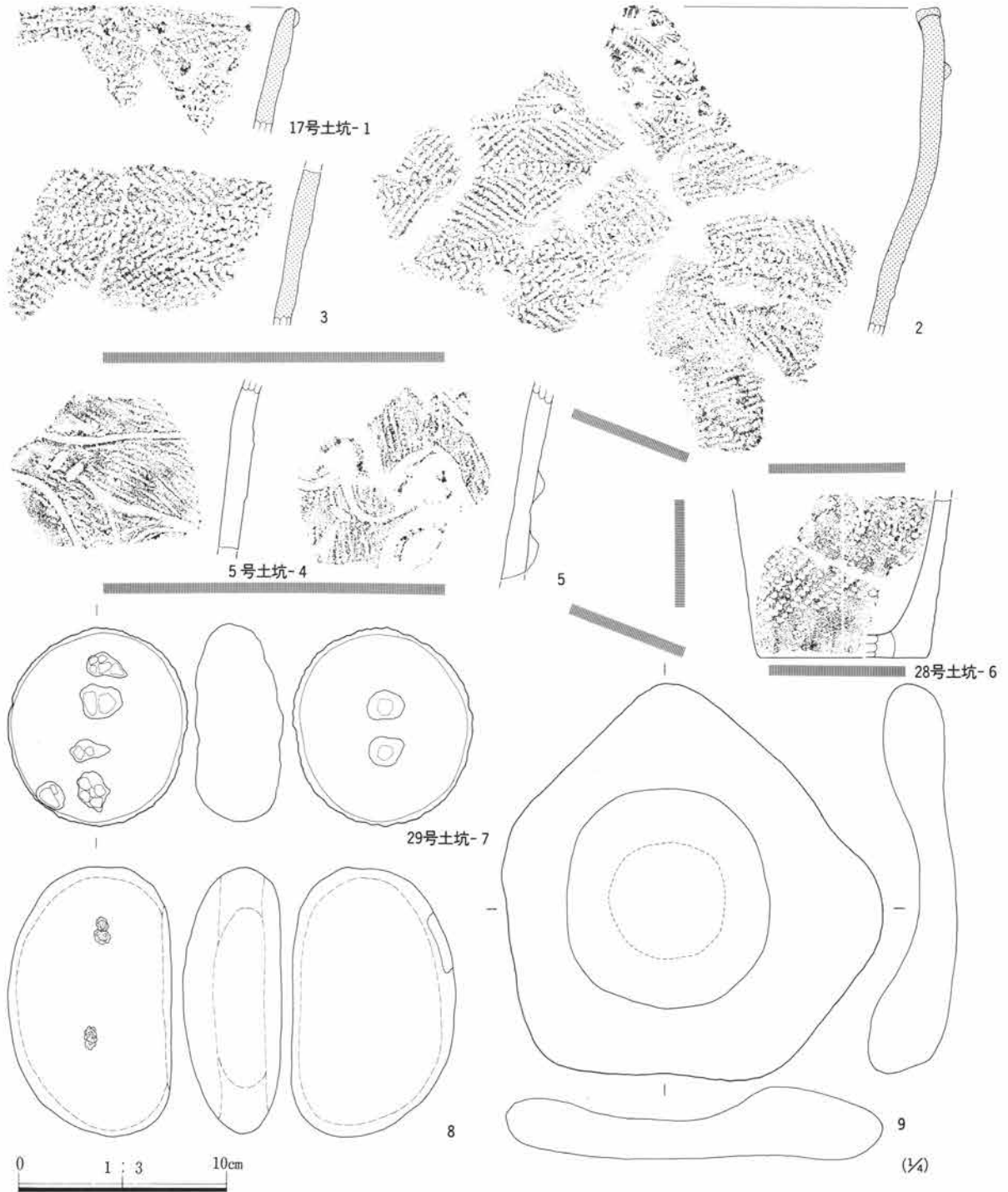
K-47グリッドにおいて検出された。26号土坑が接して存在する。上面は280×170cm、底面は240×130

cm、深さ7~11cmの中央でやや括れる不正形を呈する。底面は皿状を呈し、面積約3.3m<sup>2</sup>である。覆土は2層に分かれた。

第1層 黒色土層 粘性がわずかにある。全体的に極少量のローム粒子を含む。

第2層 暗褐色土層 粘性がわずかにある。全体的に極少量のローム粒子を含む。

覆土からは縄文時代前期前葉関山I式土器片が出土している。



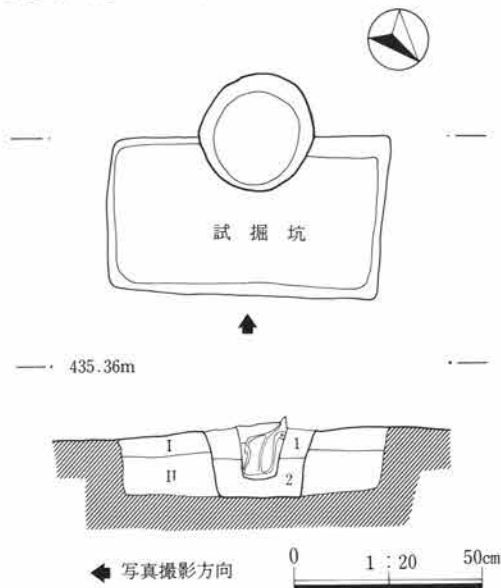
第204図 縄文時代の土坑(17・5・28・29号)出土遺物

縄文時代の土坑遺物観察表

図番 PL	器種 (部位)	法量(cm)	①胎土 ②焼成(遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様 (その他)	出土状況			
204-1 2 3 PL.69	口縁部 片 (圓山I式)		①含繊維 ②不良 ③外面 黒褐色 内面 褐灰色	1~3は同一個体。深鉢形土器の 口縁~胴部片。器厚8mm~1cmで 積みあげ技法A。内外面は繊維痕 顕著である。	口唇上に山形の小突起。口縁部文 様帯には梯子状文・貼付文。胴部 にはR $\left\{ \frac{1}{2} \right\}$ (0段多条)とL $\left\{ \frac{1}{2} \right\}$ (0段 多条)の環付きで羽状。環付末端で 多段施文。	17号土坑覆 土			
204-4 PL.69	胴部片 (五領ヶ 台式)		①雲母・粗砂を含む。 ②良 ③外面暗赤褐 色 内面 暗赤褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm~ 1.1cmで積みあげ技法A。内面はや や粗い調整が行われている。	L $\left\{ \frac{1}{2} \right\}$ の縄文施文後、棒状工具によ る沈線、三叉文が施されている。	5号土坑覆 土-1			
204-5 PL.69	胴部片 (五領ヶ 台式)		①細礫を含む。 ②やや良 ③外面 橙色 内面 灰褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm~ 1.1cmで積みあげ技法B。内面は丁 寧な調整が行われている。	L $\left\{ \frac{1}{2} \right\}$ の縄文施文後、隆帯に沿って 棒状工具による沈線が施されてい る。	5号土坑覆 土-2			
204-6 PL.69	底部片		①細礫を含む。 ②良 ③外面 橙色 内面 黒褐色	平底でやや開いて立ち上がる。器 厚7mm~1.4cmで接合技法A。内面 は粗い調整が行われている。	縄文施文。原体はR $\left\{ \frac{1}{2} \right\}$ 。 内面に煤が付着している。	28号土坑覆 土			
図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 ( )内は現存値				備 考	出土状況
				全 長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)		
204-7 PL.69	凹 石	完形	黒色頁岩	9.5	8.6	4.2	500	器面に敲打による凹みがある。	29号土坑覆 土
204-8 PL.69	磨石	完形	玢 形	12.9	7.8	4.7	610	器面全体に磨耗痕と一部に敲打に よる凹みがある。	"
204-9 PL.69	石 皿	完 形	玢 岩	24.8	24.2	4.4	4180	使用面が大きく凹んでいる。	"

(3)屋外埋設土器遺構 (第205図)

N-46グリッドにおいて検出された。配石遺構の西端に位置している。上面は31×31cm、底面は25×22cm、深さ20cmの円形を呈する。底面はほぼ平坦である。この円形のピットは屋外に単独で、ローム漸移層・ローム層を掘り込んで構築されており、ピット内には口縁部を欠損した縄文時代中期の土器を正位状態で埋設さ



第205図 縄文時代の屋外埋設土器遺構

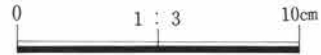
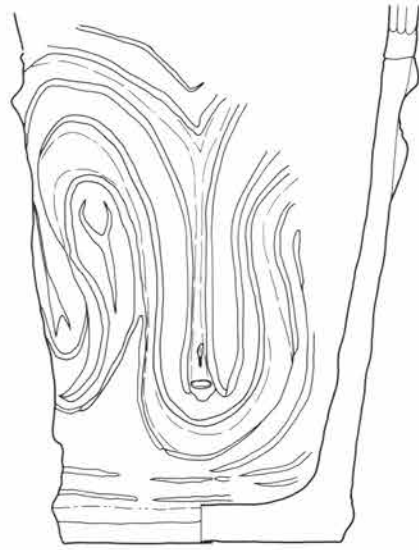
れていた。ピット内の覆土は2層に分かれた。

第1層 黒褐色土層 やわらかくて締り良い。粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を少量含む。  
第2層 暗褐色土層 やわらかくて非常に粘性がある。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

この第1・2層は土器を埋設する際の人為的埋土と理解すべきものであろう。土器の出土状態から判断すると、そう考えざるを得ない。土器内部からは土以外は何も検出できなかった。

こうした屋外に埋設された土器の事例は縄文時代中期から後期初頭にかけて比較的多く見うけられるが、その用途は判然としない。甕棺と考えるむきもあるが、人骨の検出がないので断定はできない。

出土した土器は、口径(16.2)cm、現高21.0cm、底径11.0cmを測る。口縁部は意図的に欠損されていた。胎土には雲母を含み、焼成良好。色調は外面で橙色、内面は褐灰色。小型土器であり器厚9mm~1.6cm。内面は非常に丁寧な調整が行われている。外面には隆帯に沿って棒状工具による沈線・三叉文が施されている。また一部に煤が付着していた。



第206図 屋外埋設土器

(4)陥し穴 (第208~213図、PL.32~34)

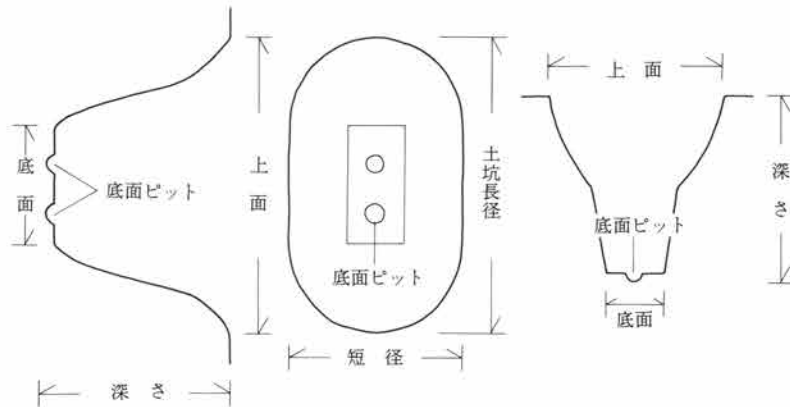
当遺跡から検出された縄文時代の陥し穴は総計17基を数えた。これらの陥し穴は、その規模や形態、また陥し穴相互の配置関係等から3群に分けて考えることができる。

**A群**：7・10・11・16・34・22・57・43・47・59・69号の11基の陥し穴から構成され、長さ85mにわたって展開している。

**B群**：19・50号の2基の陥し穴から構成されているが、本来は発掘区の北東に向かって展開するものと思われる。

**C群**：72・73・74・75号の4基の陥し穴から構成されているが、A群・B群よりも一段低い面に構築されていた。

尚、陥し穴の名称は下図に、また陥し穴番号は調査時に付した土坑番号を踏襲した。



第207図 陥し穴の名称

## 陥し穴A群

## 7号土坑

J-53グリッドにおいて検出された。陥し穴A群の東端に位置し、東に8号土坑が存在する。上面の規模は192×106cmの長楕円形、底面は136×46cmの隅丸長方形を呈し、面積約0.6m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-12°-E。確認面からの深さは92cmであり、底面からピット2個を検出した。P<sub>1</sub>は上面で24×19cm、底面で17×13cm、深さ22cm、P<sub>2</sub>は上面で23×14cm、底面で14×10cm、深さ10cmをそれぞれ測る。P<sub>2</sub>内からは礫2個が出土した。覆土は4層に分かれた。第1層・黒色土、第2層・暗褐色土、第3層・暗褐色土、第4層・黄褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

## 10号土坑

J-51・52グリッドにかけて検出された。7号土坑から北西方向9mのところのところに位置する。上面の規模は170×97cmの長楕円形、底面は84×46cmの楕円形を呈し、面積約0.4m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-28°-W。確認面からの深さは61cmであり、底面からピット1個を検出した。ピットの大きさは上面で17×14cm、底面では10×9cm、深さ8cmを測る。覆土は3層に分かれた。第1層・黒色土、第2層・茶褐色土、第3層・黒色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

## 11号土坑

K-50・51グリッドにかけて検出された。10号土坑の西6.5mのところのところに位置する。上面の規模は171×80cmの長楕円形、底面は120×40cmの中央部でやや括れる隅丸長方形を呈し、面積約0.4m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-15°-E。確認面からの深さは60cmであり、底面からピット1個を検出した。ピットの大きさは上面で20×15cm、底面で10×8cm、深さ8cmを測る。覆土は6層に分かれた。第1層・黒色土、第2層・黒色土、第3層・茶褐色土、第4層・黄褐色土、第5層・黒褐色土、第6層・茶褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

## 16号土坑

L-48グリッドにおいて検出された。11号土坑の北西12.5mのところのところに位置する。上面の規模は140×68cmの楕円形、底面は109×20cmの長方形を呈し、面積約0.2m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-18°-E。確認面からの深さは60cmであり、底面からピットを検出することはできなかった。覆土は4層に分かれた。第1層・黒色土、第2層・黒色土、第3層・暗褐色土、第4層・暗褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

## 34号土坑

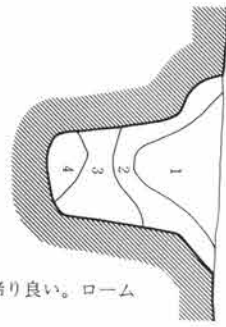
L-46、M-46グリッドにかけて検出された。16号土坑の北西9.7mのところのところに位置する。上面の規模は134×85cmの楕円形、底面は87×36cmの隅丸長方形を呈し、面積約0.28m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-24°-E。確認面からの深さは44cmであり、底面からピット2個を検出した。P<sub>1</sub>は上面で19×17cm、底面で8×6cm、深さ18cm、P<sub>2</sub>は上面で20×17cm、底面で9×7cm、深さ17cmを測る。覆土は5層に分かれた。第1層・黒色土、第2層・黒色土、第3層・黒褐色土、第4層・黄褐色土、第5層・黄褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。当土坑は33号土坑（風倒木）と重複関係にあるが、その新旧関係は判然としなかった。

## 22号土坑

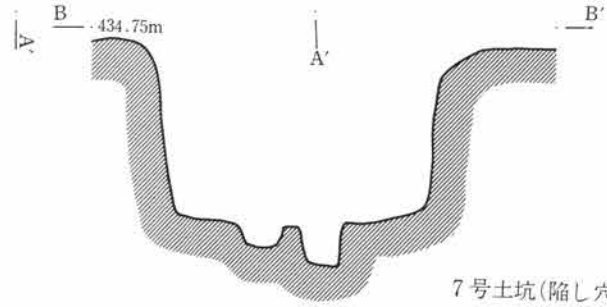
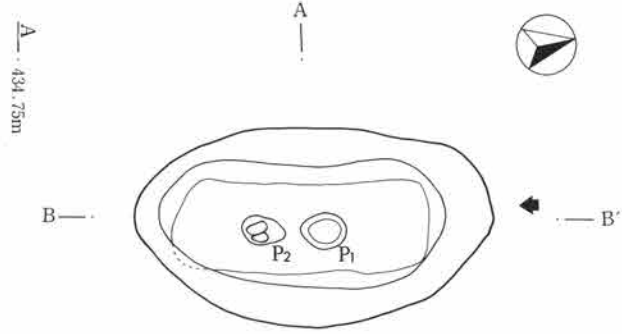
L-44グリッドにかけて検出された。34号土坑の北西12mのところのところに位置する。上面の規模は140×80cmの楕円形、底面は116×50cmのほぼ隅丸長方形を呈し、面積約0.55m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-18°-E。確認面からの深さは50cmであり、底面からピット5個を検出した。各ピットの大きさは、P<sub>1</sub>で上面19×14cm、底面9×6cm、P<sub>2</sub>は上面13×10cm、底面4×4cm、深さ10cm、P<sub>3</sub>は上面13×10cm、底面7×7cm、P<sub>4</sub>は上面12×10



陥し穴

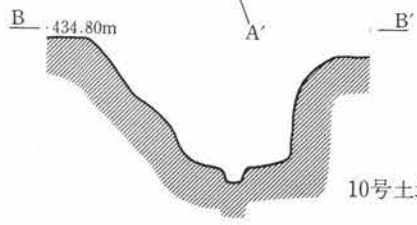
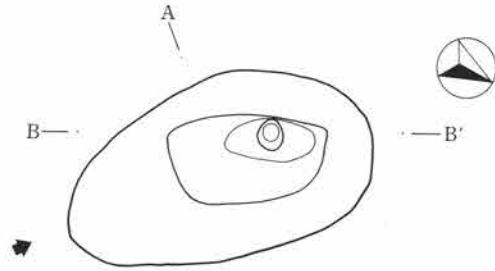
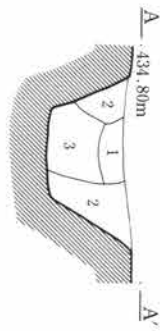


- 1 黒色土層 やや締り良い。ロームブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土層 やや締り良い。ローム粒子を含む。
- 3 暗褐色土層 ロームブロックを含む。
- 4 黄褐色土層 ロームと黒色土の混合土。



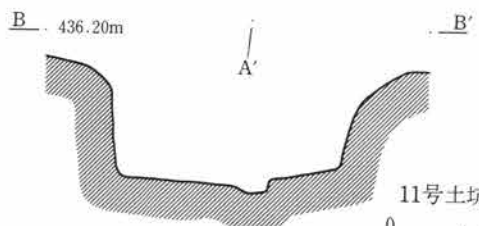
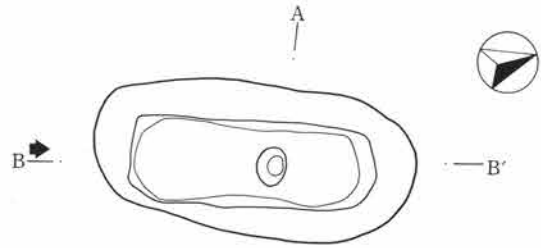
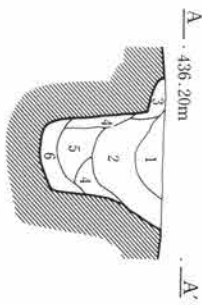
7号土坑(陥し穴)

- 1 黒色土層 やわらかく締り悪い。粘性非常にあり。ローム粒子を極少量含む。
- 2 茶褐色土層 やわらかく粘性がある。多量のローム粒子を含む。
- 3 黒色土層 やわらかく粘性非常にある。ローム粒子を極少量含む。

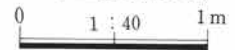


10号土坑(陥し穴)

- 1 黒色土層 ローム粒子を極少量含む。
- 2 黒色土層 やや固く締る。ローム粒子を極少量含む。
- 3 茶褐色土層 やや固く締る。ローム粒子を多量に含む。
- 4 黄褐色土層 やわらかい。ローム粒子を多量に含む。
- 5 黒褐色土層 やわらかい。ローム粒子を少量含む。
- 6 茶褐色土層 やわらかい。ローム粒子を多量に含む。

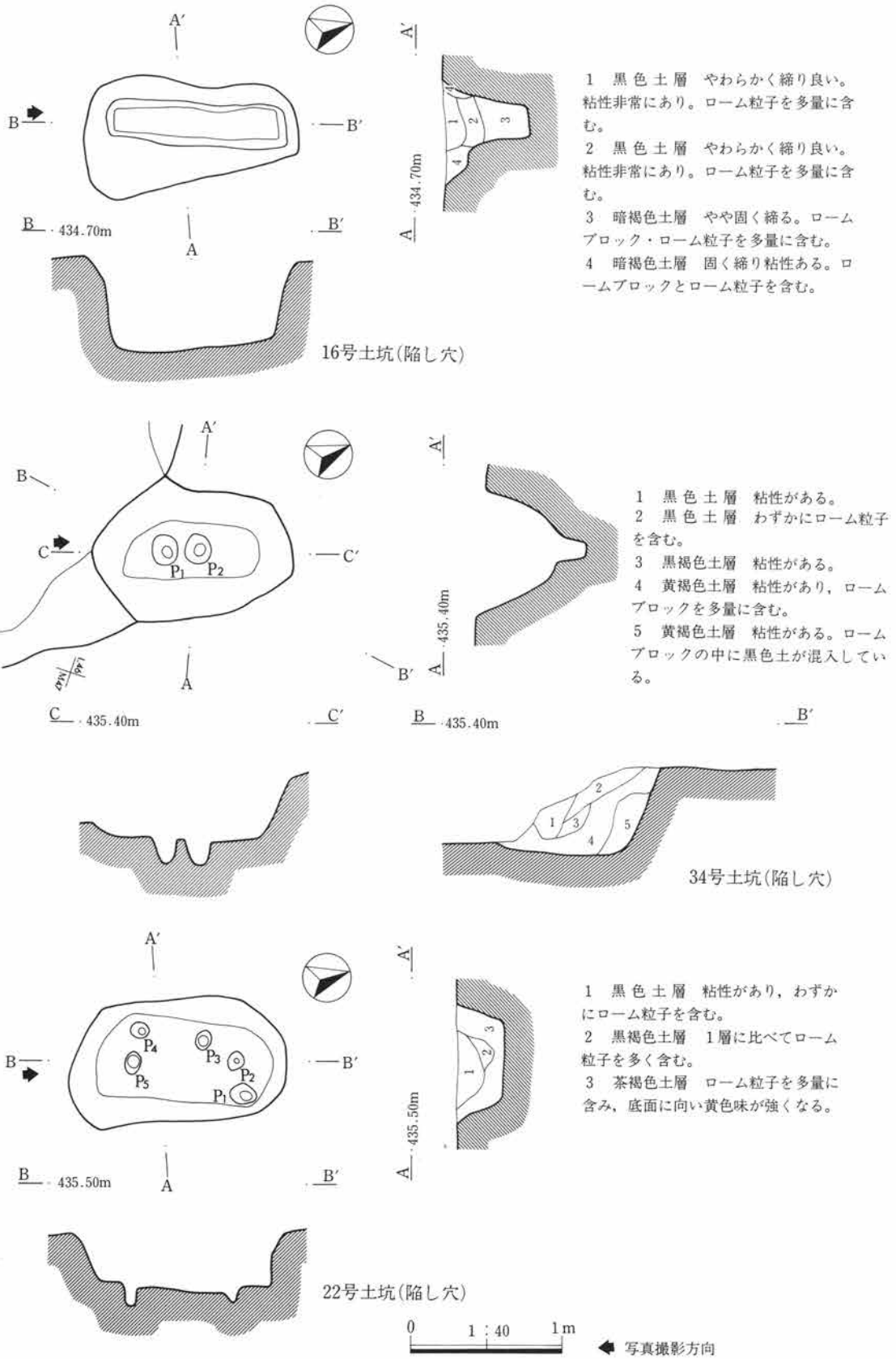


11号土坑(陥し穴)



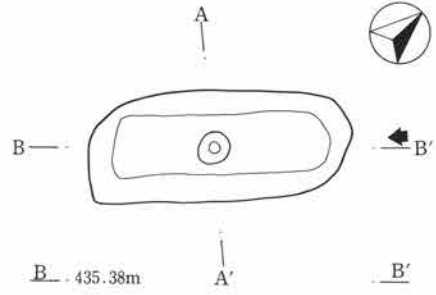
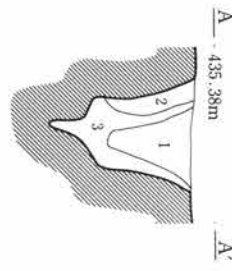
◀ 写真撮影方向

第208図 縄文時代の陥し穴 (7・10・11号)



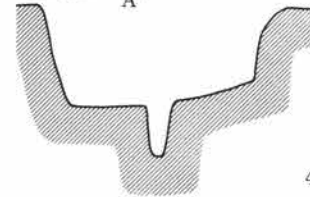
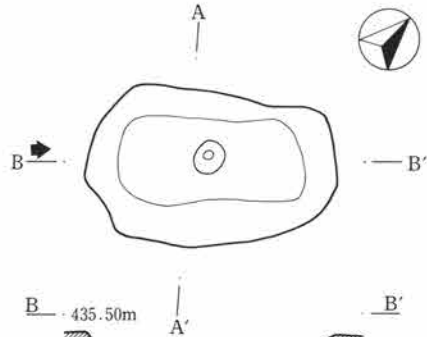
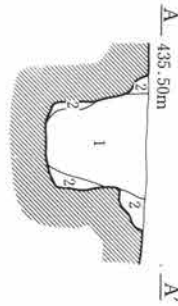
第209図 縄文時代の陥し穴 (16・34・22号)

- 1 黒色土層 やや固く締り粘性がある。ローム粒子を含む。
- 2 黒褐色土層 やわらかくて締り良い。ロームブロック・粒子を含む。
- 3 暗褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。ロームブロックを多量に含む。



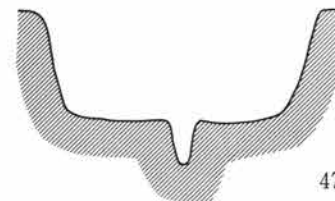
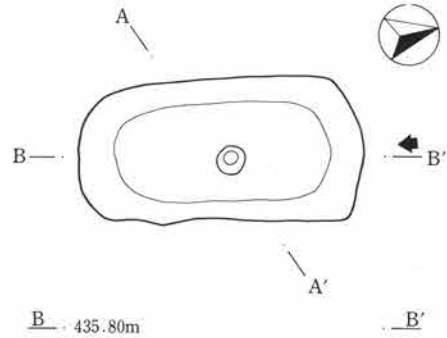
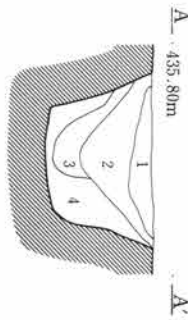
57号土坑(陥し穴)

- 1 黒色土層 わずかに粘性がある。
- 2 黄褐色土層 粘性がある。ロームブロック・粒子を多量に含む。



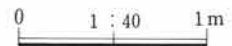
43号土坑(陥し穴)

- 1 黒色土層 締り良い。
- 2 黒色土層 締り良い。ローム粒子を少量含む。
- 3 黒色土層 締り良い。ローム粒子を少量含む。
- 4 黒褐色土層 ローム粒子を多量に含む。

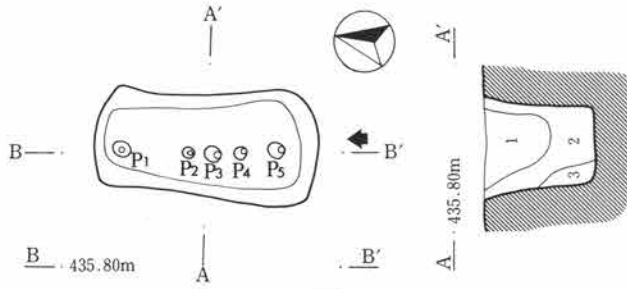


47号土坑(陥し穴)

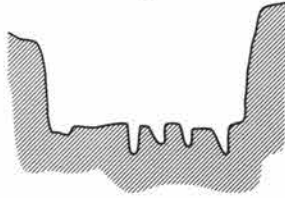
◀ 写真撮影方向



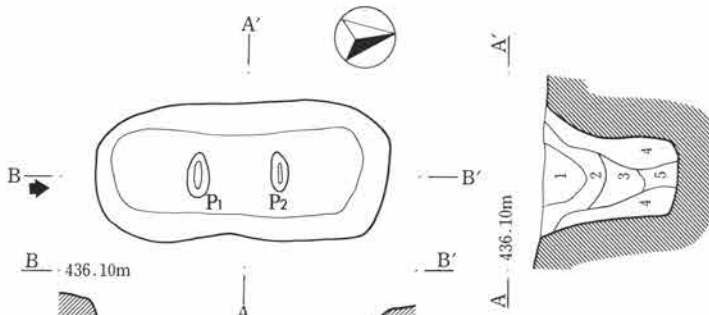
第210図 縄文時代の陥し穴 (57・43・47号)



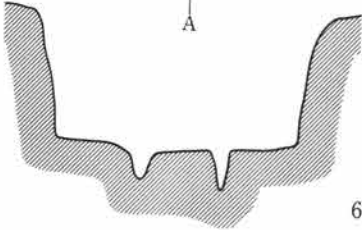
- 1 暗褐色土層 やや固く締め粘性がある。ローム粒子を多量に含む。
- 2 暗褐色土層 やわらかくて締め悪い。ロームブロック・粒子を多量に含む。
- 3 黄褐色土層 やわらかくて締め悪い。ロームブロック・粒子を多量に含む。



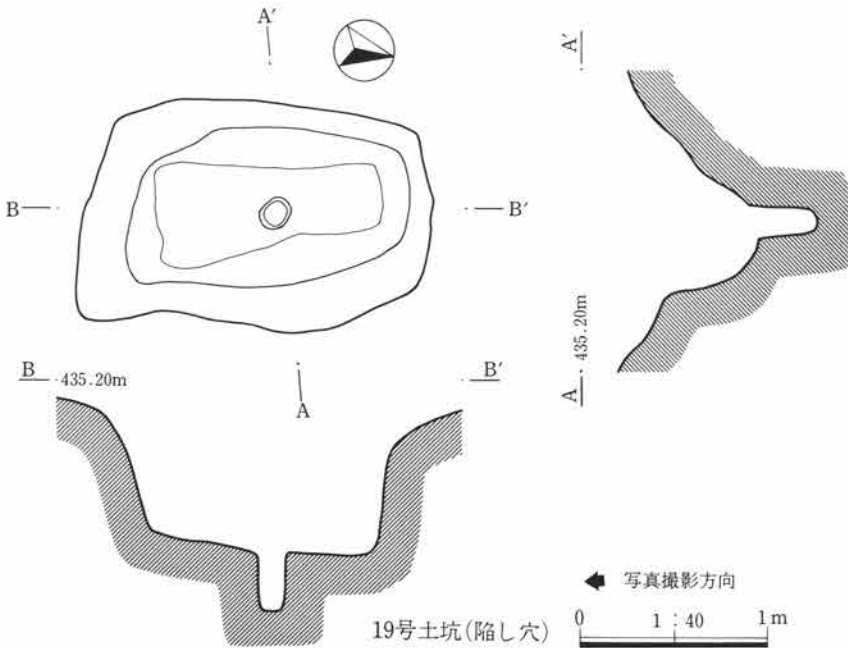
59号土坑(陥し穴)



- 1 黒褐色土層 やや固く締め悪い。ローム粒子を極少量含む。
- 2 暗褐色土層 やや固く締め良い。ロームブロック・粒子を多量に含む。
- 3 暗褐色土層 固く締め粘性非常にある。ローム粒子を多量に含む。
- 4 黄褐色土層 やわらかく締め悪い。ロームブロック・粒子を多量に含む。
- 5 黄褐色土層 固く締め粘性非常にある。ロームブロック・粒子を多量に含む。



69号土坑(陥し穴)

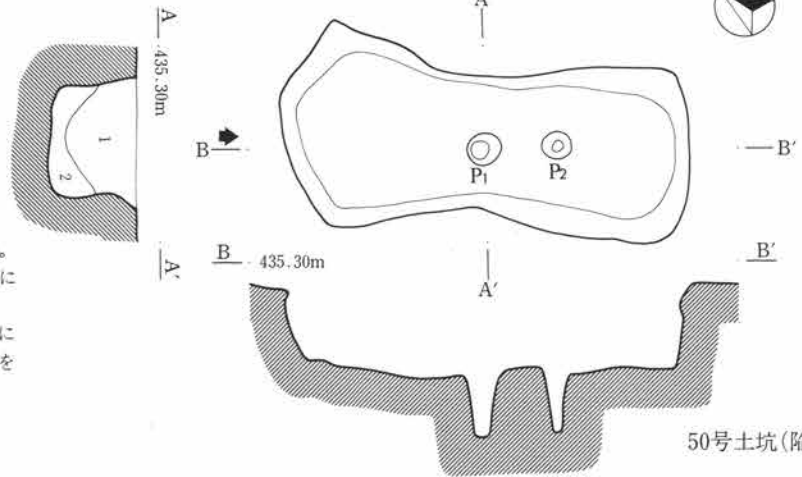


19号土坑(陥し穴)

写真撮影方向  
0 1:40 1m

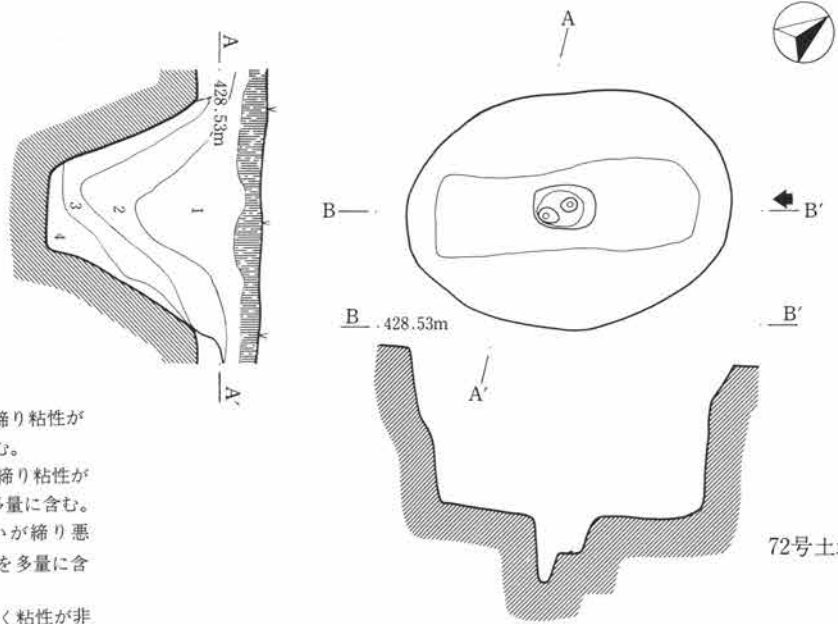
第211図 縄文時代の陥し穴 (59・69・19号)

陥し穴



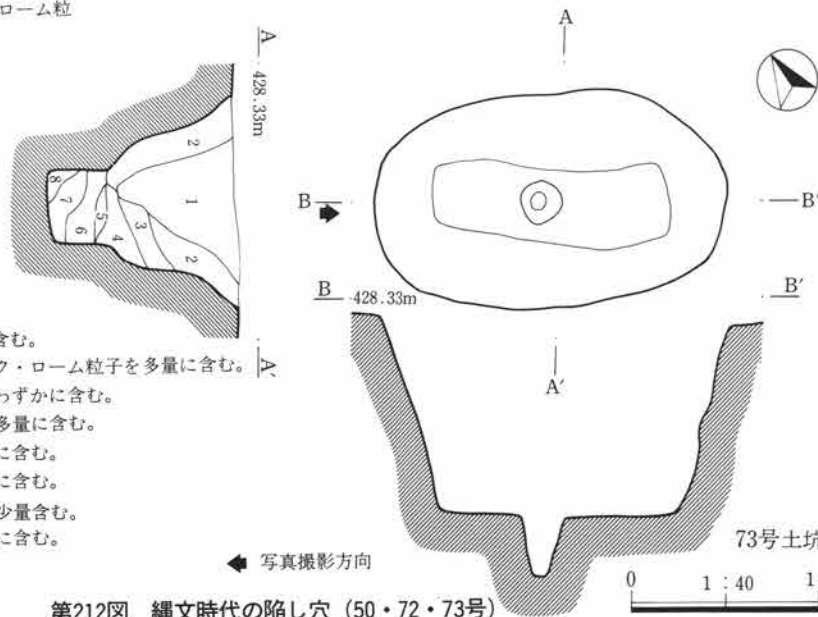
50号土坑(陥し穴)

- 1 黒色土層 やや固く締り良い。粘性非常にあり。ローム粒子を多量に含む。
- 2 暗褐色土層 やわらかくて非常に粘性がある。ロームブロック・粒子を多量に含む。



72号土坑(陥し穴)

- 1 黒褐色土層 やや固く締り粘性がある。ローム粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。ローム粒子を多量に含む。
- 3 茶褐色土層 やや固いが締り悪い。粘性あり、ローム粒子を多量に含む。
- 4 黄褐色土層 やわらかく粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

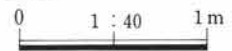


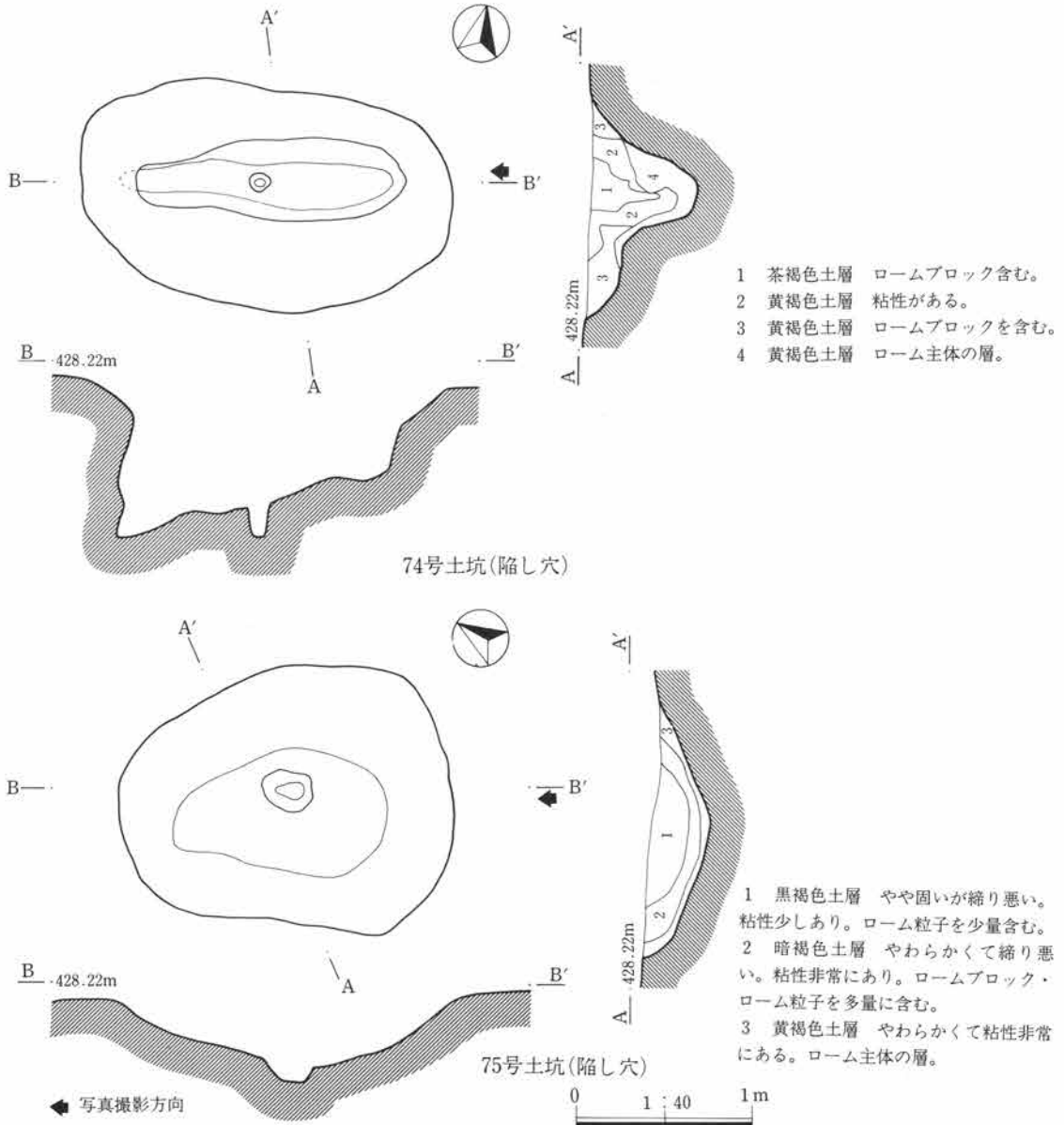
73号土坑(陥し穴)

- 1 黒色土層 ローム粒子を含む。
- 2 暗褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。
- 3 黒褐色土層 ローム粒子をわずかに含む。
- 4 暗褐色土層 ローム粒子を多量に含む。
- 5 黄褐色土層 ロームを多量に含む。
- 6 黄褐色土層 ロームを多量に含む。
- 7 暗褐色土層 ローム粒子を少量含む。
- 8 黄褐色土層 ロームを多量に含む。

← 写真撮影方向

第212図 縄文時代の陥し穴 (50・72・73号)





第213図 縄文時代の陥し穴 (74・75号)

cm、底面  $5 \times 4$  cm、 $P_5$ は上面  $15 \times 11$ cm、底面  $9 \times 8$  cm、深さ14cmをそれぞれ測る。覆土は3層に分かれた。第1層・黒色土、第2層・黒褐色土、第3層・茶褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。当陥し穴のピットは、他の陥し穴のそれに比べると、数は多いが、いずれも小さく浅い。当土坑は21号土坑(風倒木)と重複関係にあり当土坑の方が新しかった。

57号土坑

M-43グリッドにおいて検出された。22号土坑の西5mのところの位置する。上面の規模は  $135 \times 60$ cmの隅丸長方形、底面は  $114 \times 32$ cmの隅丸長方形を呈し、面積約  $0.34$ ㎡である。主軸方向は  $N-46^\circ-E$ 。確認面からの深さは58cmであり、底面からピット1個を検出した。ピットの大きさは上面で  $17 \times 17$ cm、底面は  $7 \times 6$  cm、深さ22cmを測る。覆土は3層に分かれた。第1層・黒色土、第2層・黒褐色土、第3層・暗褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

## 43号土坑

M-42グリッドにおいて検出された。57号土坑の北西7mのところに位置する。上面の規模は134×83cmの楕円形、底面は99×43cmの隅丸長方形で中央部でやや括れる形態であり、面積約0.4m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-48°-E。確認面からの深さは54cmであり、底面中央からピット1個を検出した。ピットの大きさは上面で18×15cm、底面では5×5cm、深さ30cmを測る。覆土は2層に分かれた。第1層・黒色土、第2層・黄褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

## 47号土坑

M-40グリッドにおいて検出された。43号土坑の北西10mのところに位置する。上面の規模は152×73cmの隅丸長方形、底面は116×52cmの隅丸長方形を呈し、面積約0.5m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-12°-E。確認面からの深さは58cmであり、底面中央からピット1個を検出した。ピットの大きさは上面で16×14cm、底面では7×7cm、深さ23cmを測る。覆土は4層に分かれた。第1層・黒色土、第2層・黒色土、第3層・黒色土、第4層・黒褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

## 59号土坑

L-39グリッドにおいて検出された。47号土坑の北5.2mのところに位置する。Y-2号住居跡と重複し、当土坑のほうが古い。上面の規模は120×55cmの隅丸長方形、底面は104×40cmの隅丸長方形を呈し、面積約0.39m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-8°-E。確認面からの深さは58cmであり、底面から一例に配された5個のピットが検出された。各ピットの大きさは、P<sub>1</sub>は上面10×8cm、底面3×2cm、深さ4cm、P<sub>2</sub>は上面6×6cm、底面3×2cm、深さ17cm、P<sub>3</sub>は上面9×8cm、底面3×3cm、深さ10cm、P<sub>4</sub>は上面7×7cm、底面3×3cm、深さ12cm、P<sub>5</sub>は上面8×8cm、底面3×3cm、深さ15cmをそれぞれ測る。いずれのピットも小規模なものである。覆土は3層に分かれた。第1層・暗褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・黄褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

## 69号土坑

N-37・38グリッドにかけて検出された。陥し穴A群の西端に位置し、59号土坑の西11mのところに存在する。上面の規模は154×72cmの隅丸長方形、底面は133×43cmの隅丸長方形で中央部がやや括れる形態であり、面積約0.55m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-10°-E。確認面からの深さは68cmであり、底面から2個のピットを検出した。P<sub>1</sub>の大きさは上面で24×12cm、深さ16cm、底面は11×2cm、深さ22cmを測る。覆土は5層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・暗褐色土、第4層・黄褐色土、第5層・黄褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

以上、11基の陥し穴がA群を構成する。

## 陥し穴B群

## 19号土坑

K-45グリッドにおいて検出された。J-2号住居跡とほぼ接するように構築されている。上面の規模は186×126cmの隅丸長方形、底面は122×33cmの中央部でやや括れる隅丸長方形を呈し、面積約0.6m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-12°-W。確認面からの深さは76cmであり、底面中央からピット1個を検出した。ピットの大きさは上面で17×15cm、底面で13×11cm、深さ31cmを測る。覆土からは遺物の出土はなかった。

## 50号土坑

M-45、N-45グリッドにかけて検出された。19号土坑の南西11.5mのところに位置する。上面の規模は216×68cm、底面は198×59cmの隅丸長方形で中央部でやや括れる形態で、面積約1.25m<sup>2</sup>である。主軸方向は

N-35°-W。確認面からの深さは49cmであり、底面からピット2個を検出した。P<sub>1</sub>は上面で18×16cm、底面で10×10cm、深さ35cm、P<sub>2</sub>は上面で15×15cm、底面で6×5cm、深さ35cmを測る。覆土は2層に分かれた。第1層・黒色土、第2層・暗褐色土である。覆土から縄文時代前期土器片1点が出土している。

#### 陥し穴C群

##### 72号土坑

J-26グリッドにおいて検出された。73号土坑の西3mのところに位置する。上面の規模は174×125cmの楕円形、底面は140×40cmの隅丸長方形を呈し、面積約0.58㎡である。主軸方向はN-35°-E。確認面からの深さは82cmで、底面から大ピット1個、そしてこのピット内から小ピット2個を検出した。大ピットの大きさは上面で33×23cm、底面で25×18cm、深さ19cm、小ピット1は上面9×7cm、底面3×3cm、深さ15cm、小ピット2は上面11×8cm、底面3×3cm、深さ16cmをそれぞれ測る。大ピットのなかに逆茂木2本を埋設したものであろう。覆土は4層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・茶褐色土、第4層・黄褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

##### 73号土坑

J-26グリッドにおいて検出された。72号土坑の東3mのところに位置する。上面の規模は190×112cmの楕円形、底面は127×38cmの隅丸長方形を呈し、面積約0.48㎡である。主軸方向はN-56°-W。確認面からの深さは103cm、底面中央からピット1個を検出した。ピットの大きさは上面で21×21cm、底面で10×8cm、深さ31cmを測る。覆土は8層に分かれた。第1層・黒色土、第2層・暗褐色土、第3層・黒褐色土、第4層・暗褐色土、第5層・黒褐色土、第6層・黄褐色土、第7層・暗褐色土、第8層・黄褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

##### 74号土坑

I-25グリッドにおいて検出された。73号土坑の北5.5mのところに位置する。上面の規模は212×124cmの長楕円形、底面は155×20cmの長楕円形を呈し、面積約0.3㎡である。主軸方向はN-78°-E。確認面から一番深いところで88cmを測り、底面中央からピット1個を検出した。ピットの大きさは上面で13×10cm、底面で7×5cm、深さ18cmを測る。覆土は4層に分かれた。第1層・茶褐色土、第2層・黄褐色土、第3層・黄褐色土、第4層・黄褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

##### 75号土坑

I-23グリッドにおいて検出された。74号土坑の北西11.5mのところに位置する。上面の規模は192×145cmの楕円形、底面は120×70cmの不正形を呈し、面積約0.66㎡である。主軸方向はN-5°-W。確認面からの深さは38cmで、底面からピット1個を検出した。ピットの大きさは上面で30×22cm、底面で16×9cm、深さ10cmを測る。覆土は3層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・黄褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。



土坑一覧表 (1)

縄文時代の土坑

No.	グリッド	上面 cm (長径×短径)	底面 cm (長径×短径)	上面 長径/短径	底面積 (m <sup>2</sup> )	底面 長径/短径	深さ (cm)	備 考
3	O-48・49	(110×100)	(104×92)	1.1	0.75	1.13	5~8	完形土器2個体出土
4	O-47・48 P-47・48	(110×105)	(97×90)	1.05	0.67	1.08	4.5~11	完形土器3個体出土
5	L-52・53	(216×180)	(204×168)	2.49	2.4	1.21	23~32	配石墓(?)
6	K-53	(205×149)	(164×124)	1.38	1.6	1.32	22~51	焼土検出
26	K-47	(123×82)	(102×64)	1.50	0.48	1.60	6~12	配石墓
28	K-44・45	(81×66)	(66×52)	1.23	0.25	1.27	30~48	20号土坑と重複
29	K-44	(82×72)	(61×55)	1.14	0.25	1.11	30~33	石皿等出土
37	O-45	(115×111)	(94×67)	1.04	0.53	1.40	40~44	36号土坑と重複
38	O-44・45	(196×184)	(178×137)	1.07	1.8	1.30	45~60	礫出土
8	I-53・54 J-53・54	(127×112)	(108×98)	1.13	0.5	1.1	82	貯蔵穴
13	K-49	(107×102)	(91×80)	1.05	0.74	1.14	54	"
66	N-34 O-34	(130×118)	(120×116)	1.10	1.0	1.03	46~57	"
68	L-34 M-34	(100×95)	(80×61)	1.05	0.44	1.31	27~37	"
17	K-47	(280×170)	(240×130)	1.65	3.3	1.85	7~11	前期の土坑

縄文時代の陥し穴  
A群: 11基

No.	グリッド	上面 cm (長径×短径)	底面 cm (長径×短径)	上面 長径/短径	底面積 (m <sup>2</sup> )	底面 長径/短径	深さ (cm)	主軸方向	ビット数
7	J-53	(192×106)	(136×46)	1.81	0.6	2.96	92	N-12°-E	2
10	J-51・52	(170×97)	(84×46)	1.75	0.4	2.0	61	N-28°-W	1
11	K-50・51	(171×80)	(120×40)	2.14	0.4	3.0	60	N-15°-E	1
16	L-48	(140×68)	(109×20)	2.06	0.2	5.45	60	N-18°-E	なし
34	L-46 M-46	(134×85)	(87×36)	1.58	0.28	2.42	44	N-24°-E	2
22	L-44	(140×80)	(116×50)	1.75	0.55	2.11	50	N-18°-E	5
57	M-43	(135×60)	(114×32)	2.25	0.34	3.56	58	N-46°-E	1
43	M-42	(134×83)	(99×43)	1.61	0.4	2.30	54	N-48°-E	1
47	M-40	(152×73)	(116×52)	2.08	0.5	2.23	58	N-12°-E	1
59	L-39	(120×55)	(104×40)	2.18	0.39	2.6	58	N-8°-E	5
69	N-37・38	(154×72)	(133×43)	2.14	0.55	3.09	68	N-10°-E	2

## 十二原II遺跡

## B群：2基

No.	グリッド	上面 cm (長径×短径)	底面 cm (長径×短径)	上面 長径/短径	底面積(m <sup>2</sup> )	底面 長径/短径	深さ(cm)	主軸方向	ビット数
19	K-45	(186×126)	(122×33)	1.48	0.6	3.70	76	N-12°-W	1
50	M-45 N-45	(216×68)	(198×59)	3.18	1.25	3.36	49	N-35°-W	2

## C群：4基

No.	グリッド	上面 cm (長径×短径)	底面 cm (長径×短径)	上面 長径/短径	底面積(m <sup>2</sup> )	底面 長径/短径	深さ(cm)	主軸方向	ビット数
72	J-26	(174×125)	(140×40)	1.39	0.58	3.5	82	N-35°-E	大1,小2
73	J-26	(190×112)	(127×38)	1.70	0.48	3.34	103	N-56°-W	1
74	I-25	(212×124)	(127×38)	1.71	0.3	7.75	88	N-78°-E	1
75	I-23	(192×145)	(120×70)	1.32	0.66	1.71	38	N-5°-E	1

## 4

## 弥生時代の住居跡

## Y-1号住居跡 (第214・215図、PL.35)

**位置** N-42、O-41・42グリッドにかけて検出された。風倒木と重複しているが、当住居跡の方が新しい。

**経過** 9月27日に調査を開始し、10月末日までに調査終了。当住居跡は黒色土層中に構築されていたために確認にまでどった。また南壁から西壁にかけて風倒木が存在していたために壁検出に支障をきたした。

**覆土** 黒色土層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

第1層 黒色土層 締め良く粘性がある。ローム粒子を少量含む。

第2層 黒褐色土層 多量のローム粒子を含む。

**形状** 長辺5.82m、短辺4.84mの不正形を呈している。これはさきにも記したように、南・西壁部分については壁確認が困難であったためである。本来の形状は長方形を呈していたものと考えられる。現状での面積は約24.9㎡である。

**壁高** 住居跡確認面より約7～11cmで床面に達する。 **床面** ほぼ平坦である。

**周溝** 検出できなかった。

**柱穴** 総計14個のピットが検出された。いずれのピットも不規則に配置され、支柱穴ならびに出入口部施設を特定できるものはなかった。これらのピットのなかで一番浅いのがP<sub>1</sub>の15cm、深いのがP<sub>6</sub>・P<sub>12</sub>の50cmである。他は30cm代に集中している。

**炉** 床面を掘り窪めた地床炉である。長径80cm、短径68cm、深さ16cmの楕円形を呈し、住居中央からわずかに北東寄りに位置している。面積は約0.42㎡である。またこの炉跡のやや西側に焼土の堆積が認められた。

No.	上 長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
	下 長径×短径(cm)		
1	29×28cm 16×15cm	15cm	浅い
2	28×24cm 18×17cm	44cm	
3	68×64cm 53×51cm	25cm	
4	31×24cm 16×14cm	40cm	
5	33×24cm 15×13cm	32cm	
6	28×28cm 17×16cm	50cm	深い
7	32×30cm 20×18cm	40cm	
8	44×43cm 42×41cm	28cm	
9	50×37cm 44×32cm	35cm	
10	32×30cm 26×23cm	38cm	
11	39×30cm 44×30cm	35cm	
12	26×26cm 21×21cm	50cm	深い
13	24×23cm 14×9cm	20cm	
14	24×23cm 13×13cm	38cm	

炉の覆土は3層に分かれた。

第1層 赤褐色土層 焼土の層。炭化物を少量含む。

第2層 黒褐色土層 やや固く、締め良い。粘性がある。ローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子を少量含む。

第3層 黄褐色土層 やわらかくて締め良くない。粘性が非常にある。ローム粒子を多量に、炭化物粒子・焼土粒子を少量含む。

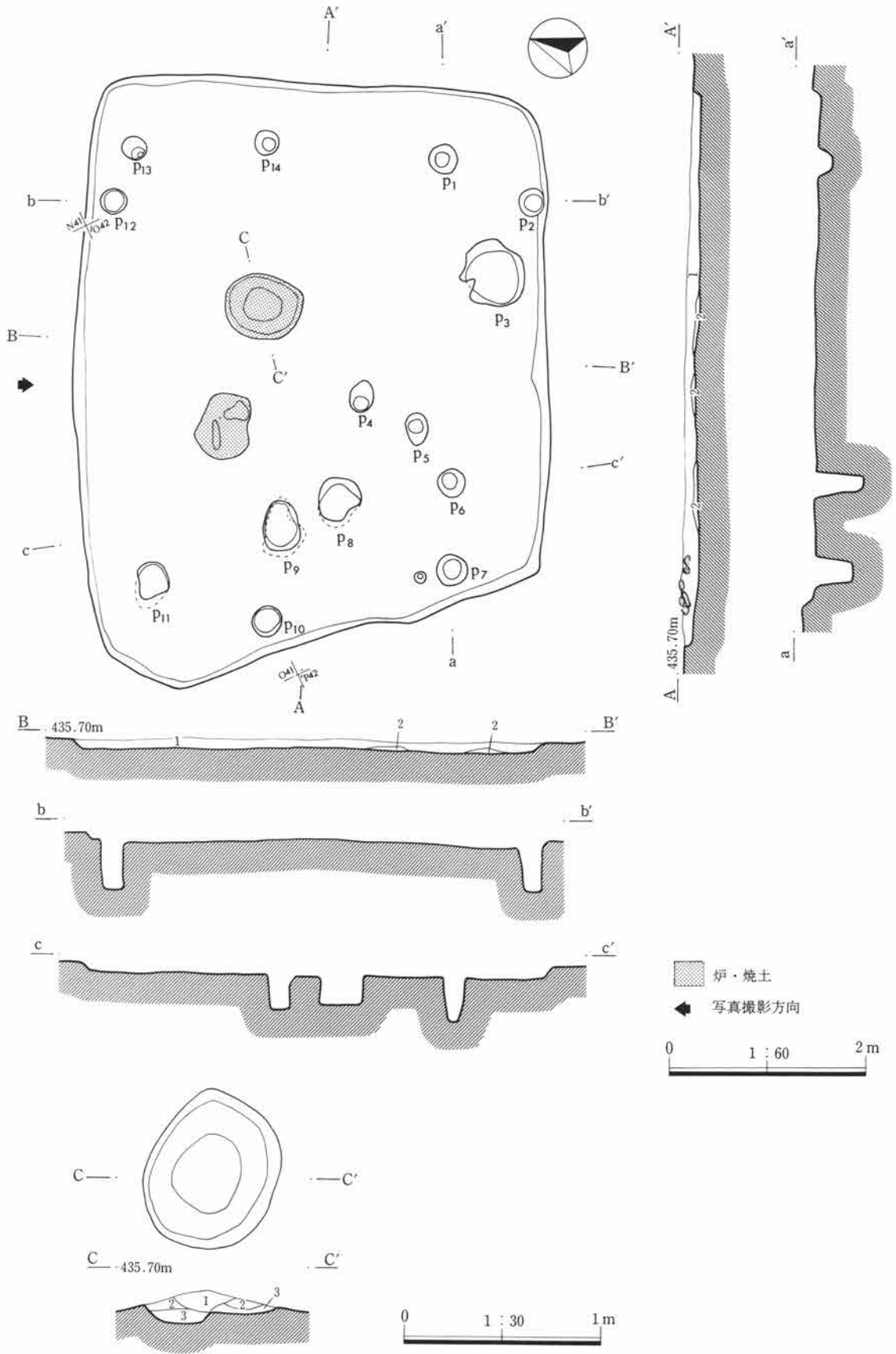
**遺物出土状況** 覆土・床面上から出土した遺物は比較的少なかった。そのなかで西壁際にほぼ同じ大きさの礫が集中して検出されたことは注意をひいた (第215図)。

**出土遺物 (第216図、PL.70)**

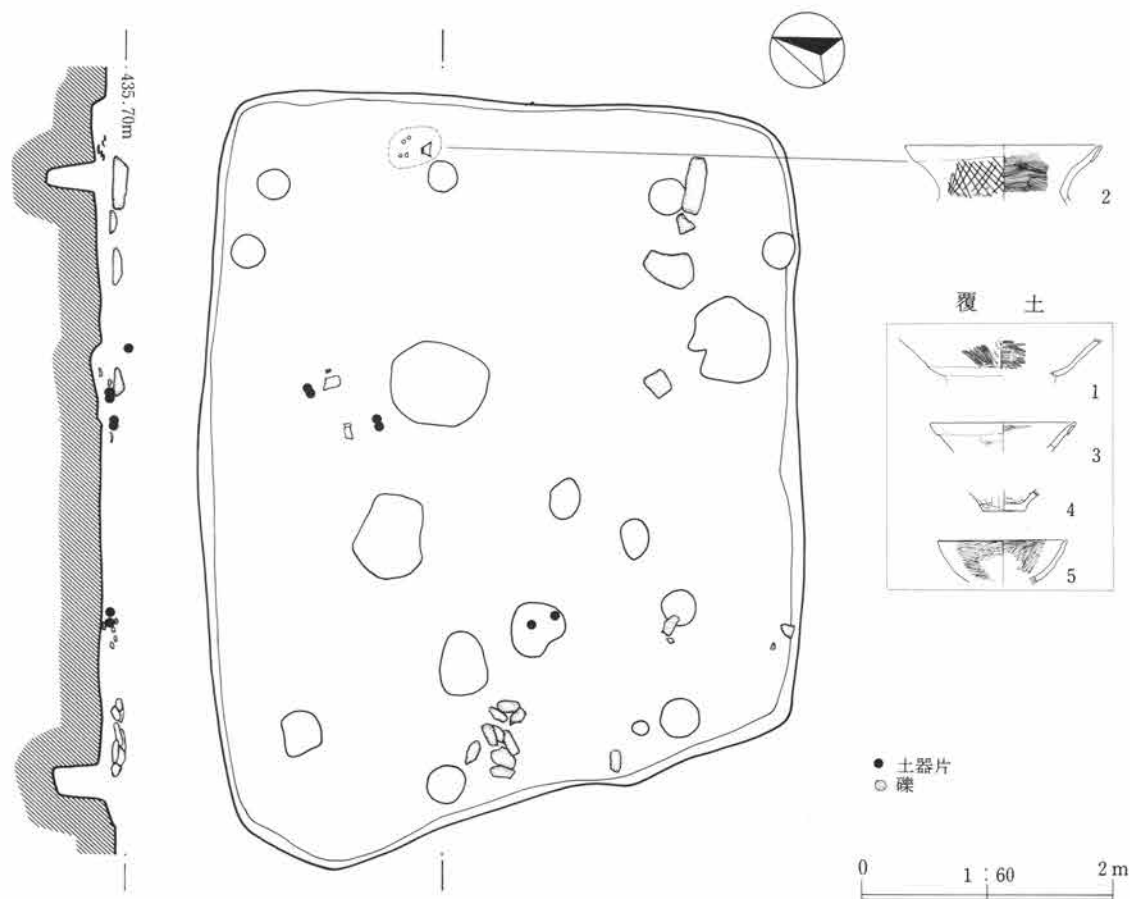
当住居跡から出土した遺物のうち実測した土器の内訳は、壺2点、甕2点、高杯1点である。この他に口縁部片30点、頸部片10点、底部片6点、脚・台部片2点、胴部片170点が出土している。このうち口縁部片12点、頸部片5点、肩部片1点、胴部片2点を拓本で図示した。また覆土には縄文時代前期土器片14点、中期土器片23点が混入していた。

**時期** 出土遺物から判断すると、当住居跡は弥生時代後期樽式期に相当する。

Y-1号住居跡ピット計測表



第214図 Y-1号住居跡

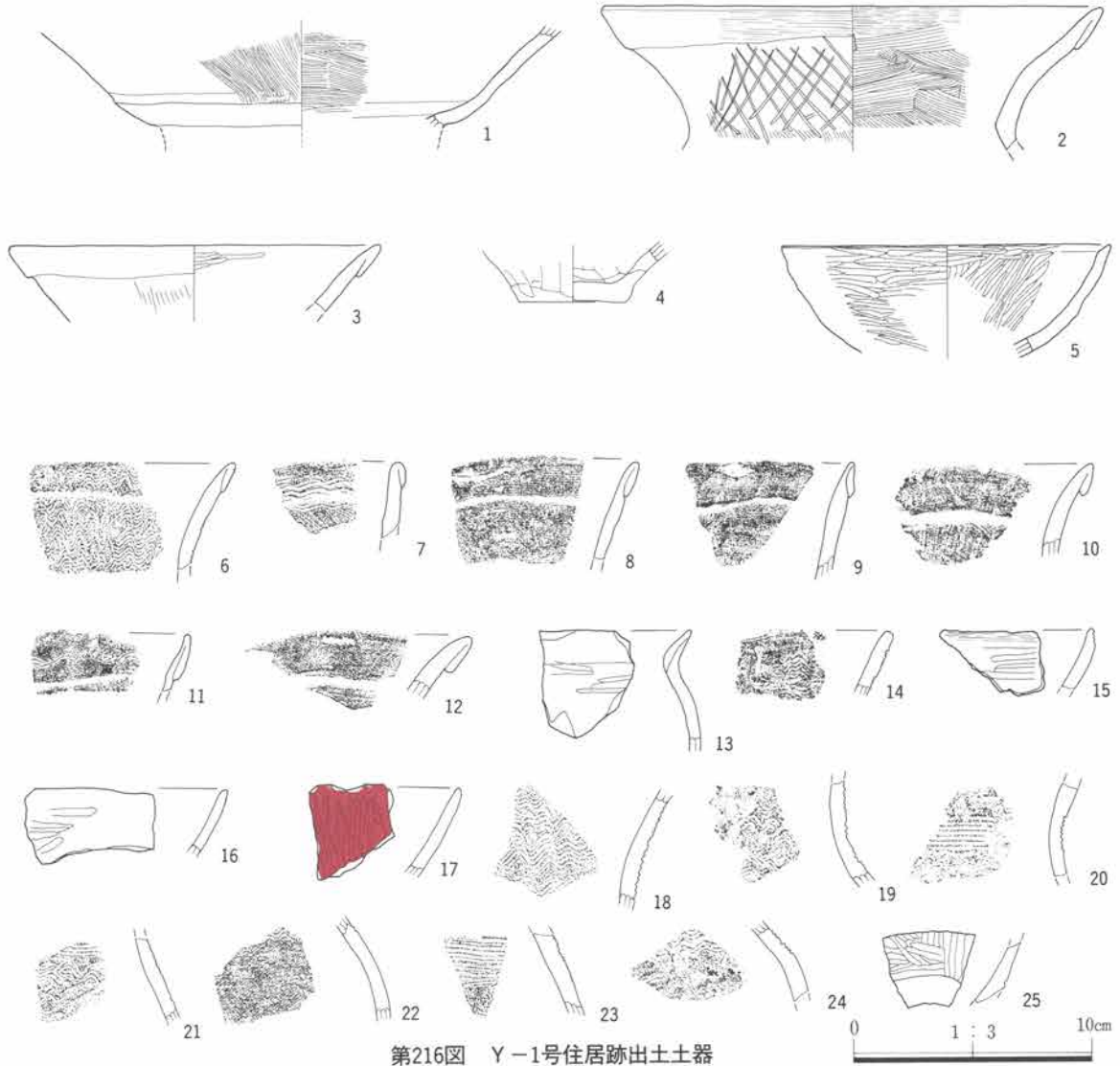


第215図 Y-1号住居跡遺物出土状況

Y-1号住居跡遺物観察表

[法量：①口径②頸部径③胴部径④底径⑤器高]

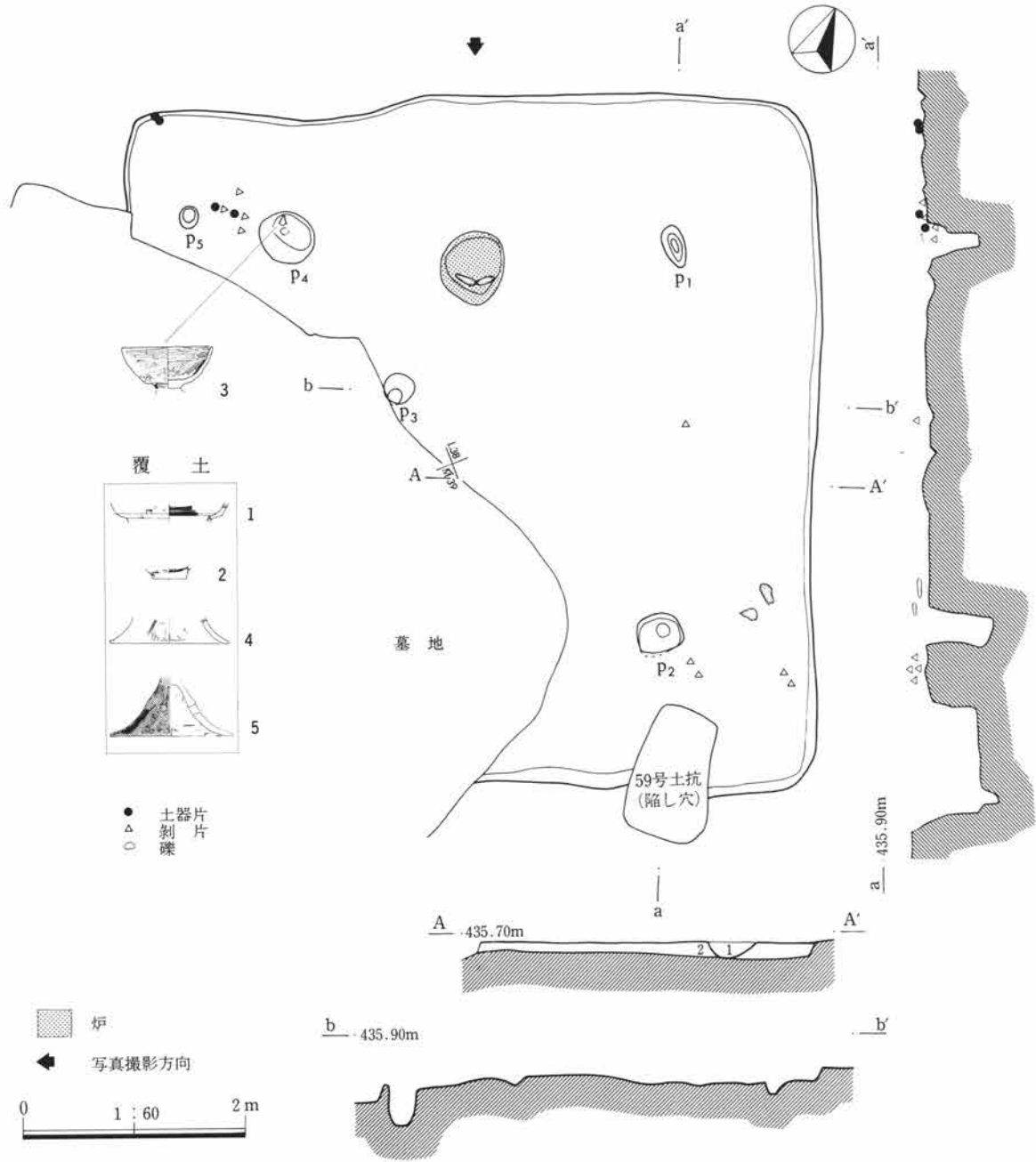
図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
216-1 PL. 70	壺		覆土 口縁部片	①石英、雲母を含む。 ②良好。 ③浅黄橙7.5YR8/3	有段口縁をもつ壺形土器の口縁部破片である。外面は縦、内面は横方向に刷毛目調整されている。	古式土師器である。
216-2 PL. 70	甕	①21.5 ②13.8	覆土 口縁部一 頸部片	①砂礫を含む。 ②内外面とも荒れる。 ③浅黄橙7.5YR8/3	折り返し口縁を有す。外面頸部は縦、内面は横方向に櫛状工具による器面調整、口縁部は横撫で整形。	外面には篋状工具と考えられる道具による斜格子目文が施文されている。
216-3 PL. 70	甕	①15.6	覆土 口縁部片	①小礫混入。 ②器面は荒れる。 ③浅黄橙7.5YR8/4	折り返し口縁を有す。口縁部は横撫で、外面口縁部から頸部にかけては櫛状工具により縦方向の撫で。	
216-4	壺?	④ 4.5	覆土 底部片	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③にぶい褐7.5YR6/3	内外面とも篋状工具による調整痕がある。	
216-5 PL. 70	高杯	①13.8	覆土 口縁部片	①白色粒子、小礫を含む。 ②良好。 ③浅黄橙7.5YR8/4	口縁部は削がれた様な状態を呈す。外面と内面口縁部付近は横、外面口縁部下部は縦方向に篋研磨。	古式土師器。
216-6	甕		覆土 口縁部片	①石英を含む。 ②器面が荒れる。 ③橙7.5YR7/6	折り返し口縁を有す。内面は横方向に器面調整が行なわれている。	口縁部は8条1単位の櫛状工具により波状文が施文されている。



第216図 Y-1号住居跡出土土器

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
216-7	甕?		覆土 口縁部片	①石英を含む。 ②良好。 ③にふい橙7.5YR7/4	折り返し口縁を有す。 内外面とも櫛状工具による器面調整が行なわれている。	折り返し口縁部の段状をなす部分に7条1単位の櫛描波状文が施文されている。
216-8	甕		覆土 口縁部片	①砂粒混入。 ②器面は荒れている。 ③灰白2.5Y8/2	折り返し口縁を有すると考えられる。返し端部に沈線を入れてある。口縁部は横撫で。	
216-9	甕		覆土 口縁部片	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③にふい橙7.5YR7/4	折り返し口縁を有す。 内外面とも横撫で整形が行なわれている。	
216-10	甕?		覆土 口縁部片	①長石、石英粒を含む。 ②内面が荒れる。 ③浅黄橙7.5YR8/4	折り返し口縁を有する。口縁部は横撫で、外面口縁下部から頸部にかけては櫛状工具による調整。	
216-11			覆土 口縁部片	①砂粒を含む。 ②器面は僅かに荒れる。 ③明褐色7.5YR7/2	折り返し口縁を有す。内外面とも横撫でを行なっている。	

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
216-12	壺?		覆土 口縁部片	①夾雑鉱物を含む。 ②良好。③にぶい黄橙 10YR7/2	折り返し口縁を有す。口縁部付近 は横撫で調整が行なわれている。	
216-13	甗		覆土 口縁部片	①長石、石英粒を含む。 ②外面は荒れている。 ③にぶい橙7.5YR7/3	口縁部は大きく外反する。口縁部 は横撫で、内面胴部は櫛状工具に より器面調整が行なわれている。	
216-14	?		覆土 口縁部片	①石英粒などを含む。 ②良好。 ③にぶい橙5YR7/4	口縁部の破片である。	櫛描波状文が施文されている。
216-15	?		覆土 口縁部片	①石英、小礫を含む。 ②器面は荒れる。 ③浅黄橙7.5YR8/4	口縁部は内彎する。口縁部付近 は外面で僅かに凹状をなす。	
216-16	鉢		覆土 口縁部片	①白色粒子を多量に含 む。 ②器面は荒れている。 ③にぶい橙7.5YR7/4	口縁部は僅かに内彎し、口縁部 は薄くつまんで整形している。外 面は横方向の篋磨き。	
216-17	高杯		覆土 口縁部片	①白色粒を多量に含む。 ②良好。 ③朱	内外面とも赤色塗彩が行なわれて おり、内面は横方向、外面は縦方 向に篋磨きが行なわれている。	
216-18	甗		覆土 頸部片	①白色粒を多量に含む。 ②良好。 ③にぶい橙5YR6/4	頸部の破片であり、口縁部に向い 外反をはじめる。内面は横方向に 器面調整が行なわれている。	櫛描波状文が施文されている。
216-19	甗		覆土 頸部片	①白色粒を多量に含む。 ②器面は荒れている。 ③浅黄橙7.5YR8/3	頸部の破片である。内面は横方向 に器面調整が行なわれている。	櫛描波状文が施文されている。
216-20	甗		覆土 頸部片	①白色粒を多量に含む。 ②器面は荒れている。 ③にぶい橙5YR7/4	頸部の破片である。内面は横方向 に器面調整が行なわれている。	頸部には櫛描横線文か簾状文が 施文されている。
216-21	甗		覆土 頸部片	①白色粒子を含む。 ②器面は荒れている。 ③にぶい褐7.5YR6/3	頸部付近の破片である。内面は横 方向に器面調整が行なわれている。	頸部は櫛描横線文か簾状文が施 文され、肩部は櫛描波状文が施 文されている。
216-22	甗		覆土 頸部片	①白色粒を僅かに含む。 ②器面は僅かに荒れる。 ③にぶい橙5YR6/4	胴部の破片である。内外面とも横 方向の器面調整が行なわれている。	頸部寄りに櫛描波状文が施文さ れている。
216-23	壺?		覆土 肩部片	①夾雑鉱物が混入する。 ②良好。 ③にぶい褐7.5YR7/4	壺形土器の肩部の破片と考えられ る。内面は櫛状工具により器面調 整が行なわれている。	櫛状工具による横線文が施文さ れている。
216-24	壺?		覆土 胴部片	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③にぶい褐7.5YR5/4	胴部の破片である。胴部は丸みをも つ。内外面とも横方向に整形さ れている。	胴上半部に櫛描波状文が施文さ れている。
216-25	甗?		覆土 胴部片	①夾雑鉱物を含む。 ②良好。 ③灰黄褐10YR4/2	胴最下部の破片と思われる。輪積 部分で剥離している。	



第217図 Y-2号住居跡

Y-2号住居跡 (第217図、PL.35)

**位置** L-38・39、M-38・39グリッドにかけて検出された。

**経過** 10月13日から調査を開始したが、すでに覆土の大部分が削りとられていたり、南西部分に墓地が存在していたこと等から、遺物はさほど出土しなかった。

**重複** 住居跡南西部分に墓地が存在している。また南壁部分に縄文時代の陥し穴 (59号土坑) が、さらに北壁部分では縄文時代前期住居跡 (J-11号住) と重複していた。当住居跡はJ-11号住居跡、陥し穴を壊して構築されており、また墓地によって住居跡南西部分を壊されている。

**覆土** ローム層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した掘り方の覆土は次のとおりである。



第1層 暗褐色土層 固く、締り良くない。ロームブロック・ローム粒子を含むが、黒色土が多い。

第2層 黄褐色土層 固く、締り悪い。ロームブロックを多量に含み、黒色土が少ない。

形状 長辺6.23m、短辺6.17mの方形を呈する。面積は現状で約23㎡である。

壁高 住居跡確認面より約3～19cmで掘り方底面に達する。

床面 床面は比較的平坦であるが、掘り方底面は凹凸が激しい。周溝 検出できなかった。

柱穴 総計5個のピットが検出された。このなかで支柱穴と考えられるものがP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の2個である。P<sub>1</sub>の深さ45cm、P<sub>2</sub>深さ59cmで、その間隔は340cmを測る。他のピットはその位置や深さから判断して支柱穴とはなり得ないと考えられる。P<sub>4</sub>はおそらく貯蔵穴になろう。長径50cm、短径44cm、深さ54cmの楕円形を呈している。覆土から土器が出土した。

炉 床面を掘り窪めた地床炉である。長径67cm、短径59cm、深さ6cmの楕円形を呈し、住居跡中央北壁寄りに位置している。また南端に礫2個を配置し、面積は約0.33㎡である。覆土は2層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて締り良い。粘性がある。ローム粒子を多量に、炭化物粒子を少量含む。

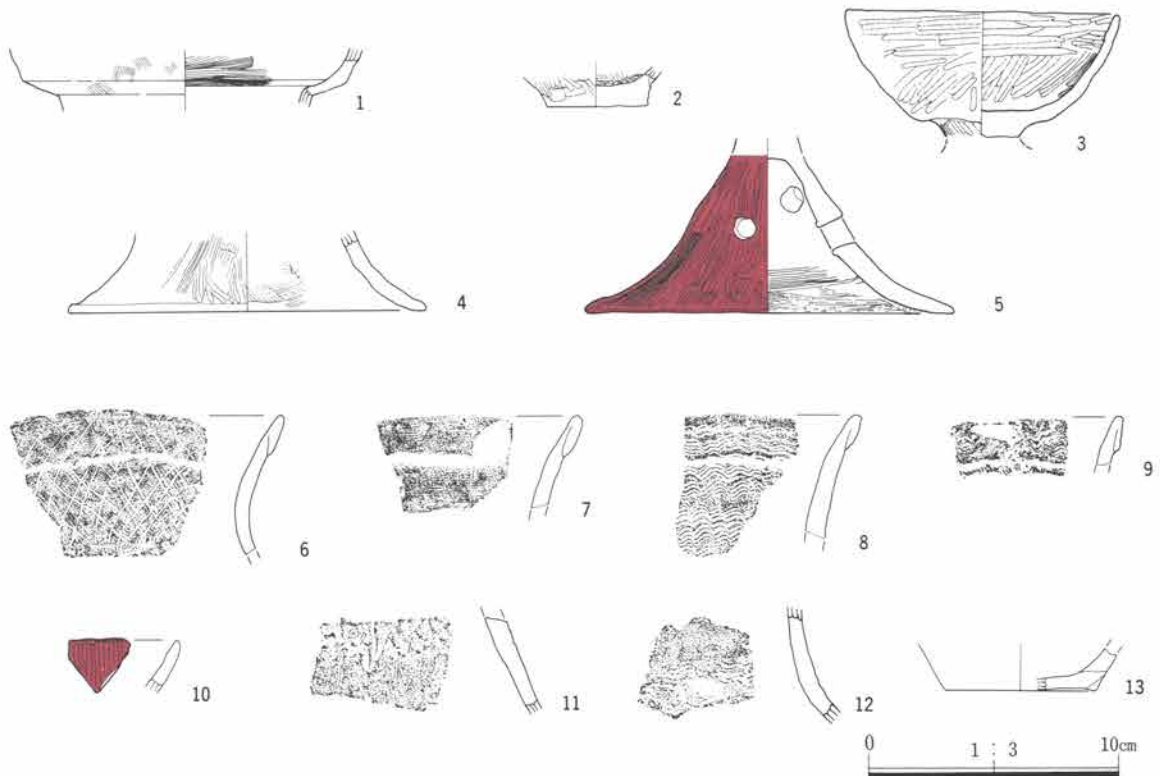
第2層 黒色土層 やわらかくて締り良い。粘性はあまりない。ローム粒子・炭化物粒子を少量含む。

遺物出土状況 覆土がほとんど残存していなかったために、遺物の出土は非常に少なく、わずかに床面上から出土しただけであった。

#### 出土遺物 (第218図、PL.70)

当住居跡から出土した遺物のうち実測した土器の内訳は、器台(?)1点、壺(?)1点、高坏3点、底部片1点である。この他に口縁部片8点、頸部片2点、脚・台部片1点、胴部片41点が出土している。このうち口縁部片5点、頸部片2点を拓本で図示した。また覆土には縄文時代中期土器片83点が混入していた。

時期 出土遺物から判断すると、当住居跡は弥生時代後期終末の段階に相当する。



第218図 Y-2号住居跡出土土器

## Y-2号住居跡遺物観察表

〔法量：①口径②頸部径③胴部径④底径⑤器高〕

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
218-1 PL.70	器台 ?		覆土	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③にぶい橙7.5YR7/4	器台の台部と考えられる。外面は荒れており不明瞭である。内面は横方向に刷毛目整形を行なう。	
218-2 PL.70	壺?	④4.0	覆土 底部片	①白色粒子を多量に含む。②良好。 ③にぶい赤褐5YR5/4	底部の破片である。小型である。外面は斜方向の器面調整が行なわれている。	
218-3 PL.70	高杯	①10.8 杯高 4.9	ピット内 杯部ほぼ 完形。	①白色粒を多量に含む。 ②器面は僅かに荒れる。 ③浅黄橙7.5YR8/4	杯部はほぼ残る。脚部は無い。杯と脚の接合部は僅かに段状を呈す。杯部はまるみをもち立ち上がる。	内面に椀の圧痕がある。
218-4 PL.70	高杯	裾径14.3	覆土 脚部片	①長石、石英粒を含む。 ②器面が僅かに荒れる。 ③浅黄橙10YR8/4	外面は縦方向に刷毛目整形が行なわれている。内面は横方向に調整が行なわれている。	
218-5 PL.70	高杯	④14.8 脚高 6.2	覆土 脚部片	①白色粒子を多量に含む。 ②良好。 ③朱。	脚部は大きく裾に向い合い広がる。脚部には上下交互に円窓を穿つ。外面は縦方向に篋磨き、内面は横方向に櫛状工具により器面調整が行なわれている。	外面は全面、内面は斑に赤色塗彩が行なわれている。
218-6	甕		覆土 口縁部片	①長石、石英粒を含む。 ②器面が僅かに荒れる。 ③にぶい橙7.5YR6/4	折り返し口縁を有す。内面と外面折り返し部分は横方向に器面調整、外面頸部は斜方向に刷毛目整形。	口縁部から頸部にかけて篋状工具による格子目文が施文されている。
218-7	甕		覆土 口縁部片	①白色粒子を含む。 ②器面は荒れる。 ③にぶい橙7.5YR7/3	折り返し口縁を有す。内外面とも横方向の撫で整形が行なわれている。	
218-8	甕		覆土 口縁部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③橙7.5YR7/6	折り返し口縁を有す。内面は横方向の撫で整形が行なわれている。	外面は全面に櫛描波状文を施文する。折り返し部分の波状文は別工具を使用している。
218-9	甕?		覆土 口縁部片	①長石、石英粒を含む。 ②器面は荒れる。 ③にぶい橙7.5YR7/4	折り返し口縁を有す。内面は横撫で整形が行なわれている。	口縁部の折り返し部分は櫛描波状文を施文、頸部寄り的一部にも波状文がみられる。
218-10	高杯 ?		覆土 口縁部片	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③朱。	口縁端部の破片である。外面は縦方向に篋磨きが行なわれている。	赤色塗彩が内外面に行なわれている。
218-11	壺?		覆土	①小礫を多数含む。 ②僅かに器面が荒れる。 ③橙5YR6/6	外面は櫛状工具により縦方向に器面調整、内面は同工具により横方向に器面調整が行なわれている。	2条1単位の波状文が施文されている。
218-12	壺		覆土 頸部片	①長石、石英粒、小礫を含む。②器面は荒れる。 ③にぶい赤褐5YR5/4	頸部の破片である。内外面とも横方向整形が行なわれている。	頸部に櫛描波状文が施文されている。
218-13		④ 6.1	覆土 胴～底部 片	①小礫を含む。 ②器面は荒れる。 ③灰褐7.5YR5/2	胴最下部は横方向と縦方向に器面調整が行なわれている。	

## Y-3号住居跡 (第219図、PL.36)

**位置** O-38・39グリッドにかけて検出された。北側に近接してY-4号住居跡が存在する。

**経過** 10月5日に調査を開始した。遺構が路線外に延びているが、借地不可能のために全掘することができなかった。

**覆土** II層(茶褐色土層)からローム層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

第1層 黒褐色土層 やわらかくて締り良くない。ロームブロック・ローム粒子・炭化物粒子を少量含む。

第2層 黒褐色土層 やわらかくて非常に粘性がある。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

第3層 暗褐色土層 やや固く、締り非常に良い。ロームブロック・粒子を多量に、炭化物粒子を少量含む。

第4層 黒色土層 粘性非常にある。ロームブロック・粒子を少量、炭化物・赤色スコリアを極少量含む。

第5層 黒褐色土層 粘性非常にある。ロームブロック・粒子、炭化物・赤色スコリア粒子を極少量含む。

第6層 黄褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。ロームブロック・粒子、炭化物粒子を多量に含む。

**形状** 長辺6.15m、短辺(4.36)mの方形を呈するものと考えられる。完掘できなかったが、現状での面積は約14㎡である。

**壁高** セクションから判断すると約58~62cmで床面に達する。 **床面** 平坦である。

**周溝** 幅8~12cm、深さ5cmの周溝が検出された。完掘できなかったが、おそらく全周するものであろう。

**柱穴** 2個のピットが検出された。P<sub>1</sub>の深さ23cm、P<sub>2</sub>の深さ63cmを測る。完掘できなかったために、これらのピットが柱穴となり得るのかは断定することはできない。

**炉** 床面を掘り窪めた地床炉である。長径74cm、短径62cm、深さ10cmの楕円形を呈し、住居北壁寄りに位置している。また南端に礫1個を配置し、面積は約0.38㎡である。覆土は2層に分かれた。

第1層 黒褐色土層 やわらかくて非常に粘性がある。炭化物を多量に、ローム粒子・焼土粒子を少量含む。

第2層 黄褐色土層 やわらかくて非常に粘性がある。ローム粒子を多量に、炭化物・焼土粒子を少量含む。

**遺物出土状況** 遺物の出土は非常に少なく、わずかに床面上から出土しているにすぎない。

## 出土遺物 (第220図、PL.70)

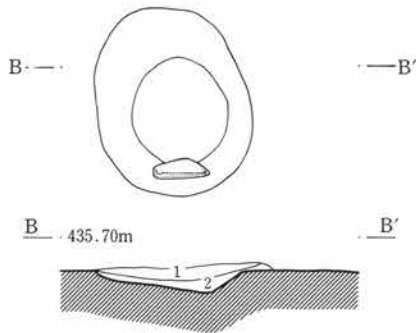
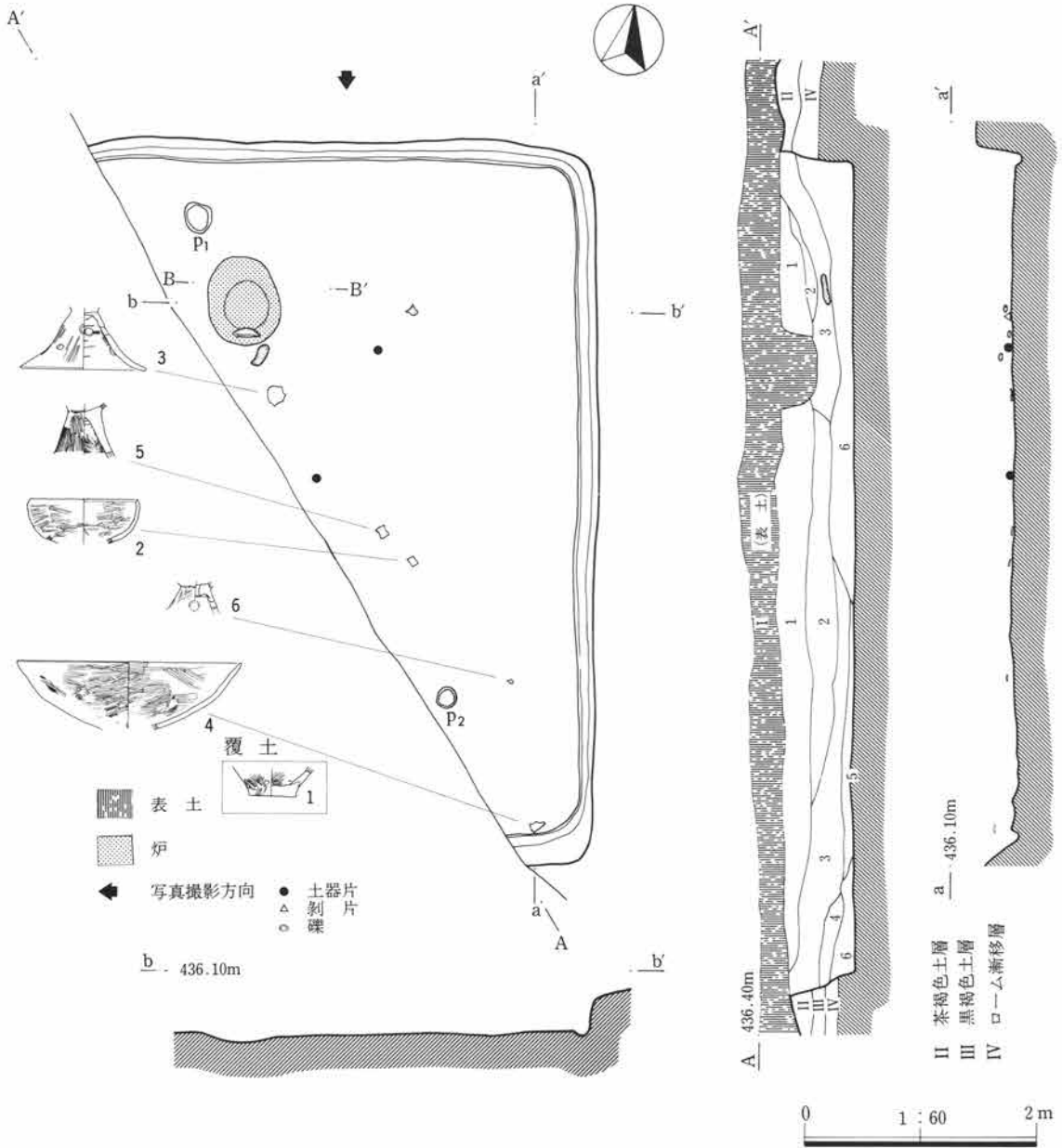
当住居跡から出土した遺物のうち実測した土器の内訳は、高杯3点、器台1点、底部片1点、口縁部片1点である。この他に口縁部片13点、頸部片7点、底部片5点、脚・台部片2点、胴部片77点が出土している。このうち口縁部片6点、頸部片4点、肩部片2点を拓本で図示した。また覆土には縄文時代中期土器片37点が混入していた。

**時期** 出土遺物から判断すると、当住居跡は弥生時代後期樽式期に相当する。

## Y-3号住居跡遺物観察表

〔法量：①口径②頸部径③胴部径④底径⑤器高〕

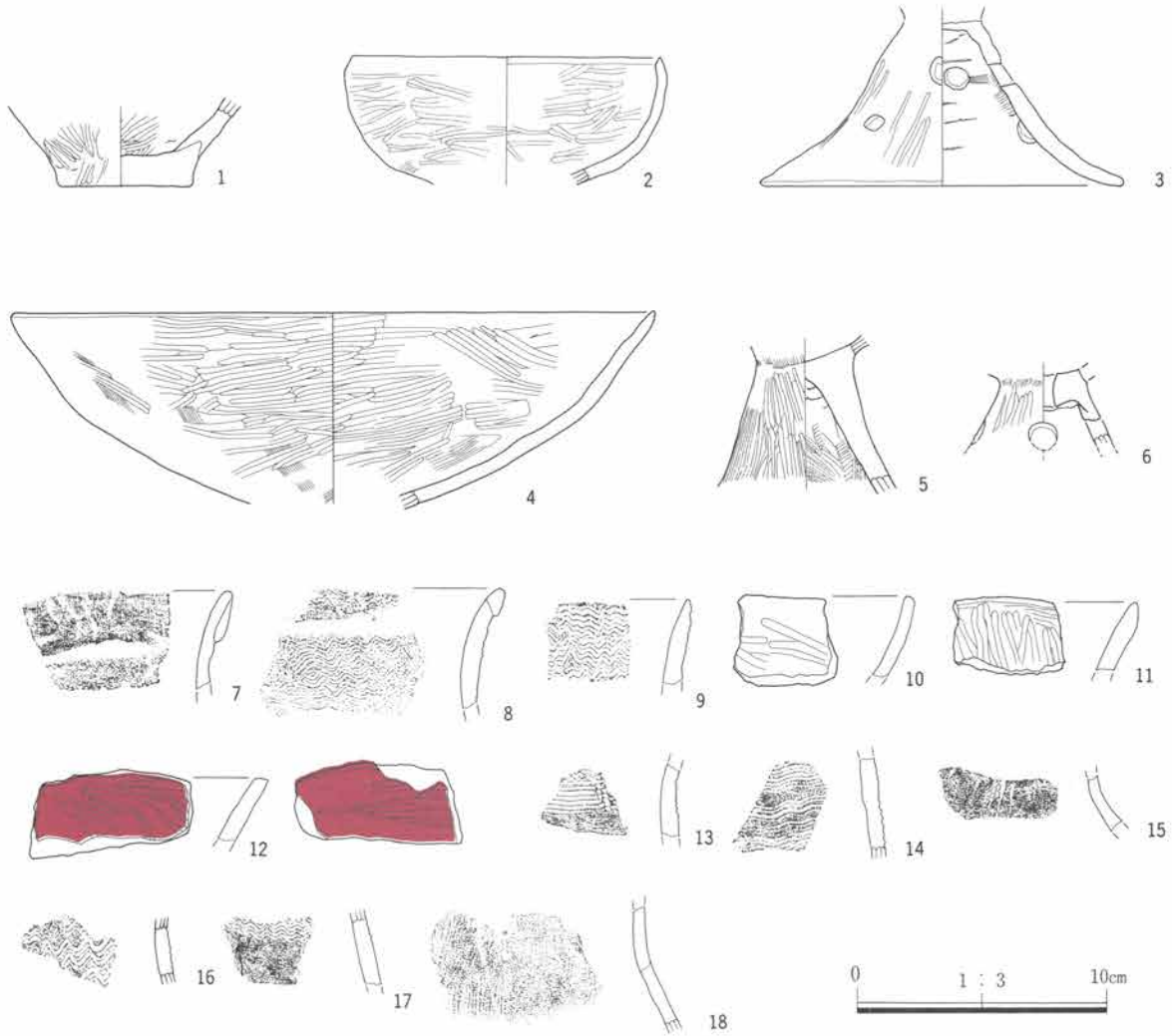
図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
220-1 PL.70		④ 5.2	覆土 底部片	①白色粒を多量に含む。 ②良好。 ③にぶい橙7.5YR6/4	底部の破片である。外面は縦方向、斜方向に撫で付け、内面は横方向に器面調整が行なわれている。	
220-2 PL.70		①12.4	床直 口縁部片	①長石、石英を含む。 ②良好。 ③にぶい橙5YR6/4	全体に丸みをもち口縁端部は内側に削ぐ様に面取りを行ない、内外面とも横方向に器面調整が行なわれている。	



No.	上 長径×短径 (cm)		深さ (cm)	備考
	下 長径×短径 (cm)			
1	26×24cm	22×18cm	23cm	
2	18×18cm	14×14cm	63cm	

ピット計測表

第219図 Y-3号住居跡



第220図 Y-3号住居跡出土土器

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様(その他)
220-3 PL.70	高杯	裾径14.3 脚高 6.8	床直 脚部ほぼ 完形	①長石、石英を含む。 ②良好、内面は荒れる。 ③浅黄橙10YR8/3	脚部は大きく裾に向い広がる。脚部には上下交互に円窓を穿つ。外面は縦方向に笕磨きが行なわれている。	円窓は合計8個である。
220-4 PL.70	高杯	①25.8	覆土 口縁部片	①白色粒を多量に含む。②良好。③にぶい黄橙10YR7/4	杯部の破片である。内面は横方向の撫で、外面は縦方向の器面調整後、横方向に笕磨きを行なう。	外面の一部に吸炭が認められる。
220-5 PL.70	高杯		床直 脚部片	①白色粒、石英を含む。②良好。③にぶい黄橙10YR7/4	杯部と脚部の接合部付近が残る。内面は横方向に撫目、外面は縦方向に笕磨き痕がある。	
220-6 PL.70	器台		床直 脚部片	①白色鉱物、石英を含む。②ややあまい。③にぶい黄橙10YR7/3	杯部と脚部の接合部分の破片である。円形透しが脚部に2ヶ所と器受底部に1ヶ所確認できる。	脚部の透しは4ヶ所に配置されていたと考えられる。
220-7	甕		覆土 口縁部片	①白色粒子を含む。②ややあまい。③にぶい橙5YR6/4	口縁部は外反し、折り返し口縁を呈す。口縁部は横撫で頭部は縦方向に器面調整が行なわれている。	内外面に煤が付着する。

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
220-8	壺		覆土 口縁部片	①石英を含む。 ②良好。 ③にぶい橙7.5YR7/4	折り返し口縁を呈す。	口縁部、頸部とも櫛描波状文を 施文し、施文順位は下から上、 右巻きに施文。
220-9	壺		覆土 口縁部片	①白色粒子、石英を含む。 ②良好。 ③にぶい褐7.5YR6/3	口縁部は僅かに外反する。	口縁部は頸部から引きつづき櫛 描波状文を施文している。
220-10			覆土 口縁部片	①長石、石英を含む。 ②僅かに器面が荒れる。 ③浅黄橙10YR8/4	内外面とも横方向に器面調整が行 なわれている。	
220-11	鉢?		覆土 口縁部片	①小礫を混入する。 ②良好、光沢をもつ。 ③にぶい黄橙10YR7/3	口縁部の破片である。外面は口縁 端部付近は横撫で、以下を下方向 に篋磨き、内面は横撫でを行なう。	
220-12	高杯		覆土 口縁部片	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③朱	口縁部の破片。端部は欠損する。 内外面とも横方向の器面調整が行 なわれている。	内外面とも赤色塗彩。
220-13	甕		覆土 頸部片	①夾雑鉱物を含む。 ②良好。 ③にぶい橙7.5YR7/4	頸部の破片、内面は横方向に撫で る。	頸部には簾状文を施文、7条1 単位。頸部上位に波状文が見ら れる。
220-14	壺		覆土 肩部片	①白色粒子を含む。 ②良好、内面光沢。 ③にぶい黄橙10YR7/3	肩部の破片と考えられる。内面は 横方向に撫でが行なわれている。	櫛描波状文が施文されている。
220-15			覆土 頸部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好、内面光沢。 ③にぶい褐7.5YR5/4	頸部の破片である。外面は縦方向 に櫛状工具により整形。内面は横 撫でが行なわれている。	
220-16	甕		覆土 頸部片	①白色粒子を含む。 ②僅かに器面は荒れる。 ③灰黄褐10YR6/2	頸部の破片。内面は横撫でが行な われている。	櫛描波状文が施文されている。
220-17	甕		覆土 肩部片	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③にぶい褐7.5YR5/4	肩部の破片と考えられる。内面は 櫛状工具により横方向に器面調整 が行なわれている。	櫛描波状文が施文されている。
220-18	甕?		覆土 頸部片	①長石、石英を含む。 ②器面は荒れる。 ③にぶい褐7.5YR6/3	頸部付近の破片である。内面には 輪積痕がある。外面は縦、内面は横 位に器面調整が行なわれている。	

## Y-4号住居跡 (第221~223図、PL.36)

**位置** N-36・37、O-36・37グリッドにかけて検出された。北西にJ-8号住居跡が存在し、当住居跡がその一部分を壊している。

**経過** 10月5日から調査を開始。覆土上層および床面上から比較的多くの遺物が出土した。各種図面の作成・写真撮影を行い、最後に出入口部の調査を行い終了した。

**覆土** 茶褐色土層中からローム層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおり。

第1層 黒褐色土層 少量のローム粒子を含む。 第2層 黒褐色土層 少量のロームブロックを含む。

第3層 黒褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

第4層 黒褐色土層 ローム粒子を含み、2層に近似した層。 第5層 黒褐色土層 ローム粒子を含む。

形状 長辺7.16m、短辺4.78mの隅丸長方形を呈する。面積は約31.9m<sup>2</sup>である。

壁高 住居跡確認面より約27~44cmで床面に達する。

床面 住居全体が硬く踏みかためられており、平坦である。

周溝 検出できなかった。

柱穴 総計6個のピットが検出された。このうちP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は主柱穴になる。P<sub>1</sub>の深さ54cm、P<sub>2</sub>深さ49cm、P<sub>3</sub>深さ40cm、P<sub>4</sub>深さ46cmであり、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>間距離160cm、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>間距離150cm、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>間距離316cm、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>間距離も同じく316cmを測る。P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>は出入口部施設になり、P<sub>5</sub>深さ40cm、P<sub>6</sub>深さ38cmでその間隔は100cmを測る。いずれも壁寄りに傾いている。この2本の柱穴内からは、中央に黒色土、この黒色土を囲むように白色粘土混りの土が検出された。

貯蔵穴 南壁東側から検出された。白色粘土で貯蔵穴の周囲を高く盛りあげているが、一部でとぎれている。高さは約4cm程である。覆土は3層に分かれた。

第1層 黒褐色土層 やわらかくて締り良くない。ローム粒子を多量に、炭化物粒子を少量含む。

第2層 暗褐色土層 やわらかくて締り良くない。ローム粒子を多量に、炭化物粒子を少量含む。

第3層 暗褐色土層 やわらかくて締り良くない。非常に粘性がある。

炉 床面を掘り窪めた地床炉である。長径54cm、短径48cm、深さ7cmの不正形を呈し、主柱穴P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の間やや北寄りに位置している。面積は約0.25m<sup>2</sup>である。覆土は3層に分かれた(第221図)。

第1層 暗褐色土層 やや固く、締り良い。焼土粒子・ローム粒子を多量に含む。

第2層 黄褐色土層 やわらかくて粘性がある。焼土粒子を少量含む。 第3層 赤褐色土層 焼土層。

なお、この炉跡から南西方向2.3mのところ焼土の堆積が認められたが、掘り込みは確認できず炉として断定することはできなかった。同様な事例はY-1号住居跡にも認められた。

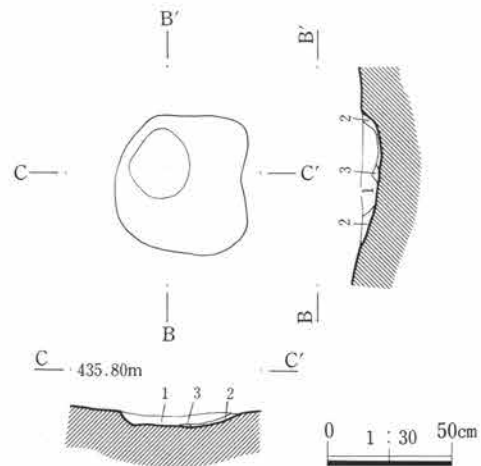
遺物出土状況 覆土・床面上から遺物が多数出土している。その出土層位は覆土第1層、第3層および床直上となっている。また貯蔵穴内からも出土している(第223図)。

出土遺物(第224~226図、PL.70・71)

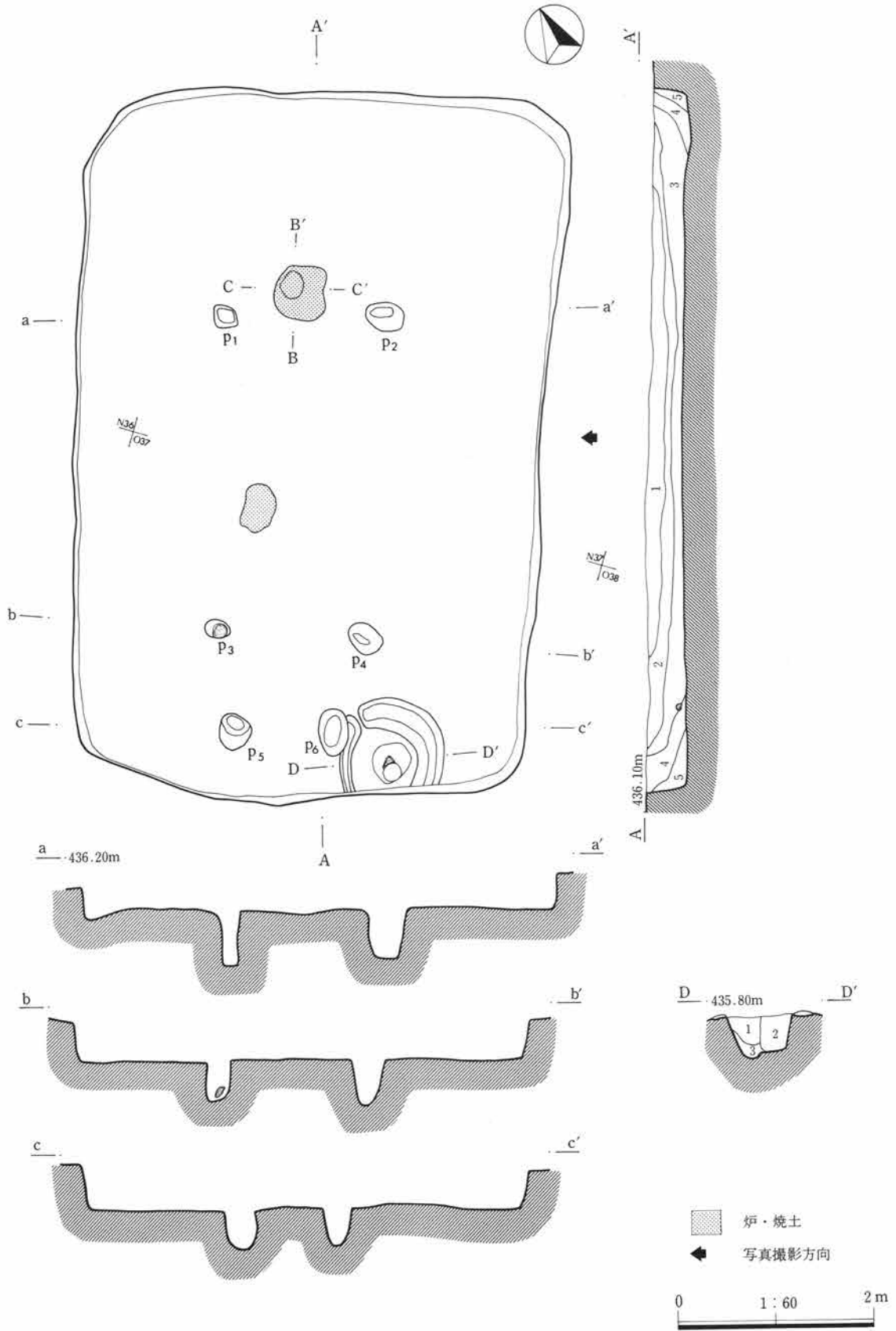
当住居跡から出土した遺物のうち実測した土器の内訳は、壺2点、甕6点、台付甕2点、鉢3点、高杯1点、底部片11点、脚部片2点である。この他に口縁部片47点、頸部片61点、底部片23点、脚・台部片7点、

No.	上 長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
	下 長径×短径(cm)		
1	23×22cm	54cm	主柱穴
	16×14cm		
2	38×29cm	49cm	"
	23×10cm		
3	26×18cm	40cm	"
	22×16cm		
4	36×27cm	46cm	"
	18×6cm		
5	34×33cm	40cm	出入口部
	18×11cm		
6	46×30cm	38cm	"
	31×16cm		

Y-4号住居跡ピット計測表

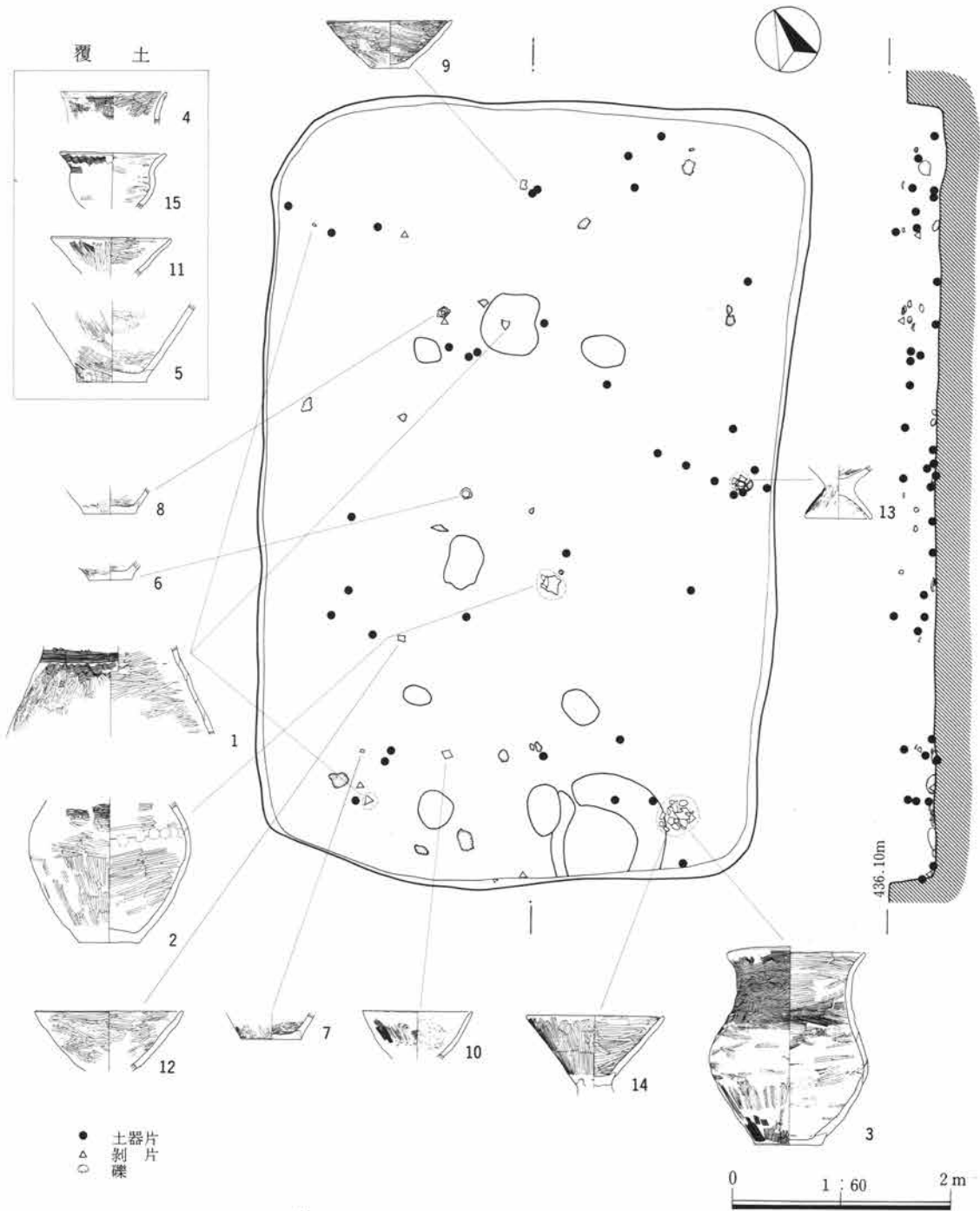


第221図 Y-4号住居跡炉



第222図 Y-4号住居跡

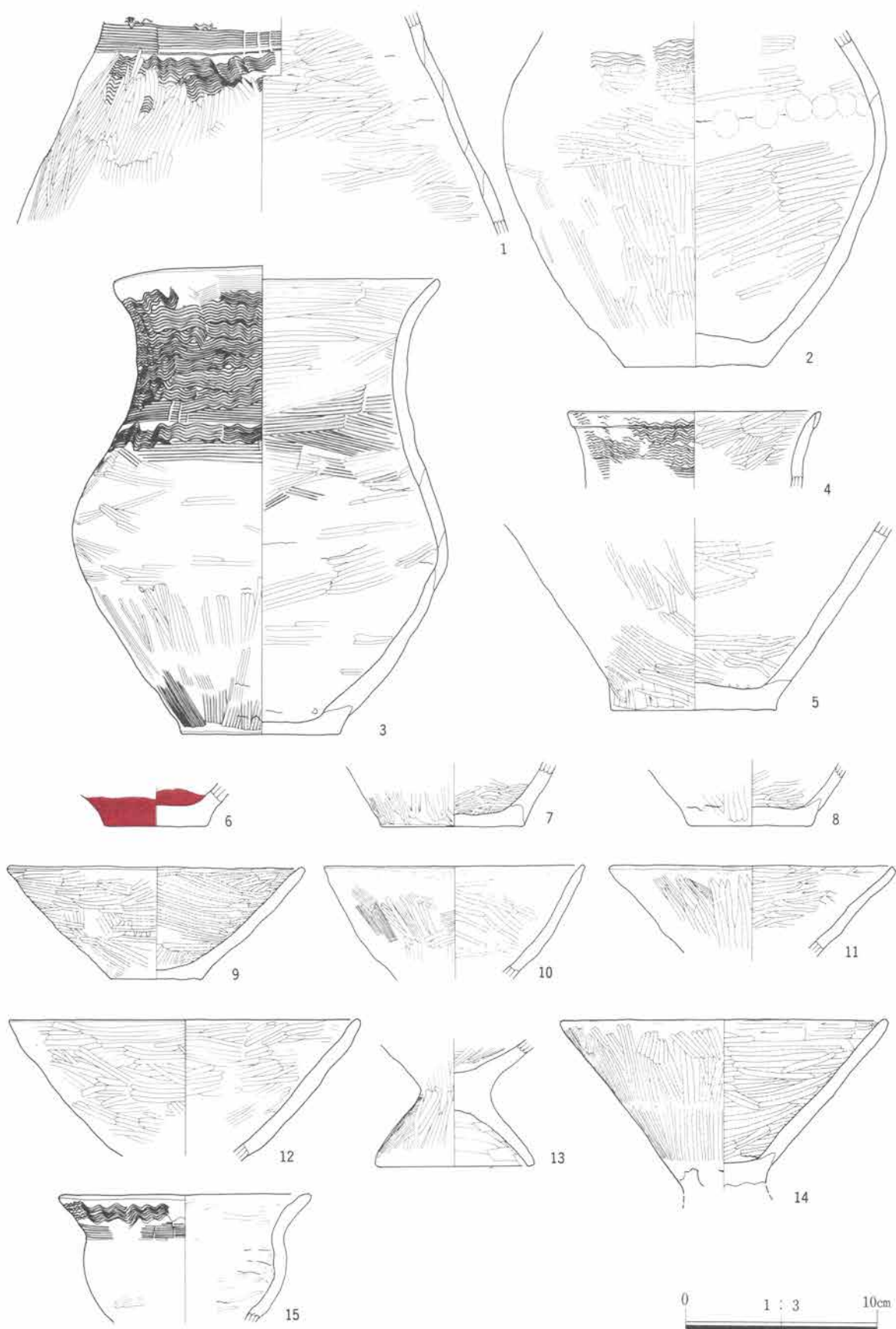




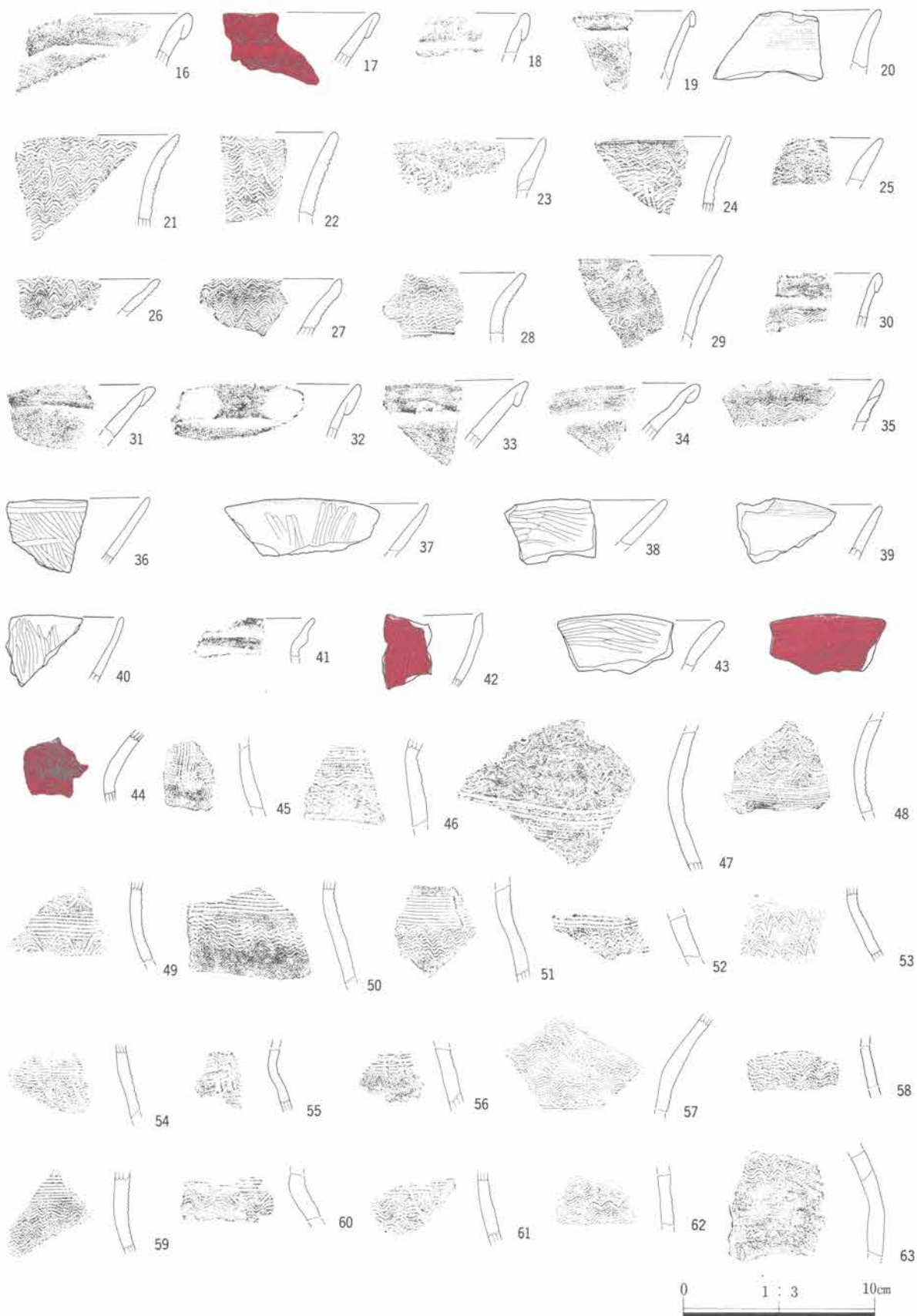
第223図 Y-4号住居跡遺物出土状況

胴部片323点が出土している。このうち口縁部片28点、頸部片25点を拓本で図示した。また覆土には縄文時代前期土器片5点、中期土器片315点が出土しているが、これはJ-8号住居跡と接していることから多量の遺物が当住居跡内に流れこんだものと考えられる。

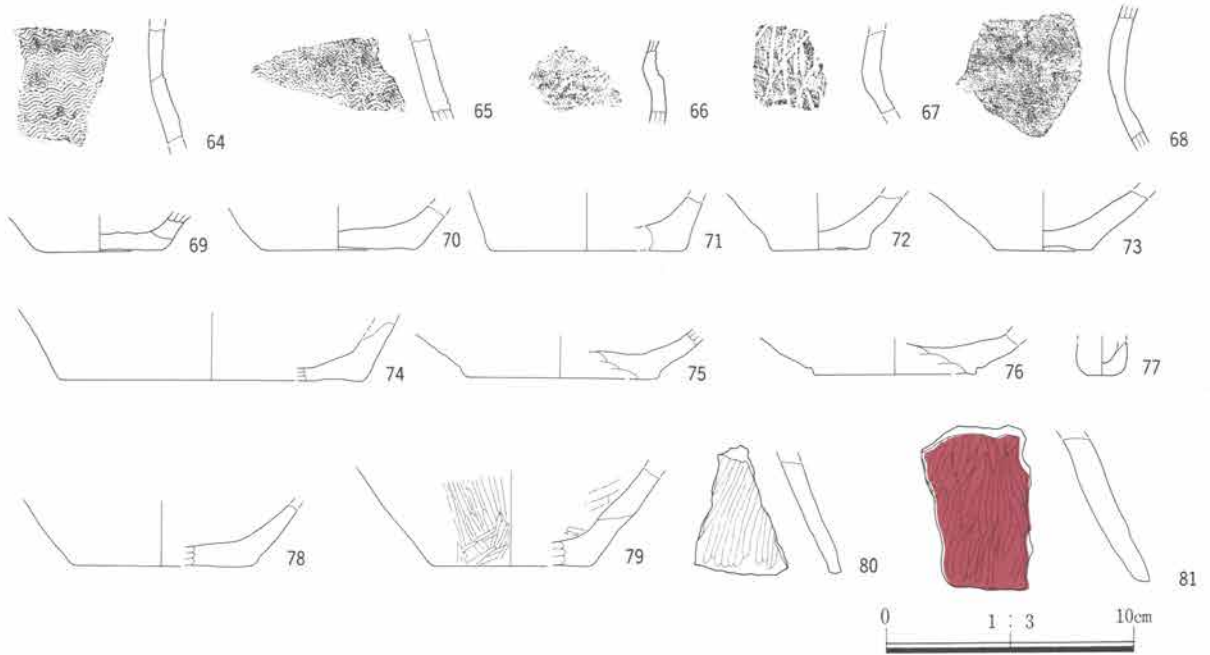
**時期** 出土遺物から判断して、当住居跡は弥生時代後期樽式期に相当する。



第224図 Y-4号住居跡出土土器(1)



第225图 Y-4号住居跡出土土器(2)



第226図 Y-4号住居跡出土土器(3)

Y-4号住居跡遺物観察表

[法量：①口径②頸部径③胴部径④底径⑤器高]

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様(その他)
224-1 PL. 70	壺		覆土 肩部～胴部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③にぶい橙7.5YR7/4	肩部から頸部にかけての破片である。文様施文後、縦方向に筥磨き。内面は横方向に器面調整。	9条1単位の3連止め簾状文施文後、櫛描波状文を簾状文の上下に施文。下位文様は2段施文。
224-2 PL. 70	甕	③19.9 ④7.4	床直 胴部～底部 1/2残存	①白色粒子を含む。 ②良好。光沢をもつ。 ③にぶい橙7.5YR7/3	胴下半分1/2を残す。胴下半部は縦方向に筥磨き、胴中位は横方向に器面調整が行なわれている。	胴上位に櫛描波状文が施文されている。
224-3 PL. 70	甕	①17.0②14.4 ③19.6④8.3 ⑤24.0	床直 口縁1/2他 はは完形	①白色粒子を含む。 ②僅かに荒れる。 ③にぶい橙7.5YR5/4	口縁部を1/2欠損する。内面と外面中央部は横、外面胴下半部は縦方向に器面調整が行なわれる。	頸部に簾状文が施文された後に口縁部方向と肩部に櫛描波状文が施文されている。
224-4 PL. 71	甕	①13.2	覆土 口縁～頸部片	①長石、石英粒を含む。 ②外面は荒れる。 ③にぶい橙5YR7/3	折り返し口縁を有す。内面は横、斜方向に器面調整を行ない光沢をもつ。	頸部に櫛描横線文(簾状文?)を施文後、口縁部に波状文を施文する。施文方法は粗い。
224-5 PL. 71	壺	④8.6	覆土 胴部小片 底部	①長石、石英、小礫を含む。②良好で光沢あり。 ③にぶい橙7.5YR7/4	底部から胴部にかけての破片である。外面は縦方向、斜方向に筥磨き。内面は横方向に器面調整。	
224-6 PL. 71	甕?	④5.4	覆土 底部	①夾雑鉱物を含む。 ②底面は荒れる。 ③朱。	内面は細かく筥磨きが行なわれている。外面は筥磨きと櫛状工具による調整痕が残る。	内外面とも赤色塗彩が行なわれている。
224-7 PL. 71	甕?	④7.5	覆土 底部	①長石、石英粒を含む。 ②良好。内面は光沢。 ③にぶい赤褐2.5Y5/4	胴下半部は斜方向に器面調整。内面は細かく筥磨きが行なわれている。	
224-8 PL. 71	甕?	④6.4	覆土 底部	①長石、石英粒を含む。 ②外面は荒れる。 ③にぶい橙7.5YR7/4	内面底部は筥磨きが弧状に行なわれている。	

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
224-9 PL.71	鉢	①13.7 ④ 4.8 ⑤ 5.8	覆土 口縁～底部片	①白色粒を多量に含む。 ②良好。光沢をもつ。 ③明黄褐2.5Y6/6	内面底部付近は縦方向の笥磨きであり、他は内外とも横方向に笥磨きが行なわれている。	外面には靫痕が明瞭に観察できる。
224-10 PL.71	鉢	①13.7	覆土 口縁～胴部 $\frac{1}{2}$	①砂質で白色粒を含む。 ②内面が荒れる。 ③浅黄橙7.5YR8/6	外面は櫛状工具により器面調整。内面は横方向の笥磨き。口縁部は内外面とも横撫で。	
224-11 PL.71	鉢	①14.7	覆土 口縁部片	①白色粒子を含む。 ②良好、光沢をもつ。 ③にふい黄橙10YR7/4	内外面とも整形はしっかりと行なわれている。	
224-12 PL.71		①18.2	覆土 口縁～胴部片	①白色粒子を含む。 ②良好、光沢をもつ。 ③にふい褐7.5YR6/3	内外面とも横方向を主に笥磨きが行なわれている。	
224-13 PL.71	台付 甕	裾径8.4 脚高3.0	覆土 脚部完形	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③明赤褐2.5YR5/6	脚部は内側に丸みをもつ。底部は平坦である。甕部内面は笥磨きが行なわれている。	
224-14 PL.71	高杯	①17.2 杯高9.0	床直 杯部完形	①白色粒子を含む。 ②良好、外面は光沢。 ③浅黄橙10YR8/3	杯部が残る。直線的に外にひらく。外面は縦方向に、内面は横方向に器面調整が行なわれている。	
224-15 PL.71	台付 甕?	①13.2 ②10.3	覆土 口縁～胴部 $\frac{1}{2}$	①夾雑鉱物を含む。 ②外面は荒れる。 ③にふい橙5YR6/4	内面は器面調整が行なわれており光沢をもつ。	頸部は簾状文が施文されている。右まわりである。口縁部は櫛描波状文を施文。
225-16	壺		覆土 口縁部片	①長石、石英粒を含む。 ②器面が荒れる。 ③淡橙5YR8/4	折り返し口縁を有す。外面口縁部は横撫で整形が行なわれている。	
225-17	壺		覆土 口縁部片	①長石、石英粒を含む。 ②器面が荒れる。 ③朱	折り返し口縁を有す。口縁部は横撫で、折り返し口縁下部からは縦方向に器面調整が行なわれている。	内外面とも赤色塗彩。
225-18	?		覆土 口縁部片	①長石、石英粒を含む。 ②僅かにあまい。 ③淡橙5YR8/4	折り返し口縁を有す。口縁部は横撫で整形が行なわれている。	
225-19	甕		覆土 口縁部片	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③にふい橙7.5YR7/4	折り返し口縁を有す。口縁部は横撫で、頸部は櫛状工具による器面調整が行なわれている。	
225-20	甕		覆土 口縁部片	①長石、石英粒を含む。 ②僅かに器面が荒れる。 ③浅黄橙10YR8/4	口縁部は横撫で整形が行なわれている。	
225-21	甕		床直 口縁部片	①白色粒子を含む。 ②良好。③黒7.5Y2/1	口縁部は外反する。内面は横方向に器面調整を行ない光沢がある。	6条1単位の櫛描波状文が施文されている。
225-22	甕		覆土 口縁部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③灰黄褐10YR6/2	口縁部は外反する。内面は横方向に器面調整が行なわれている。	6条1単位の櫛描波状文が施文されている。
225-23	甕		覆土 口縁部片	①夾雑鉱物を含む。②良好。③灰褐7.5YR4/2	口縁部は横方向の器面調整が行なわれている。	櫛描波状文が施文されている。

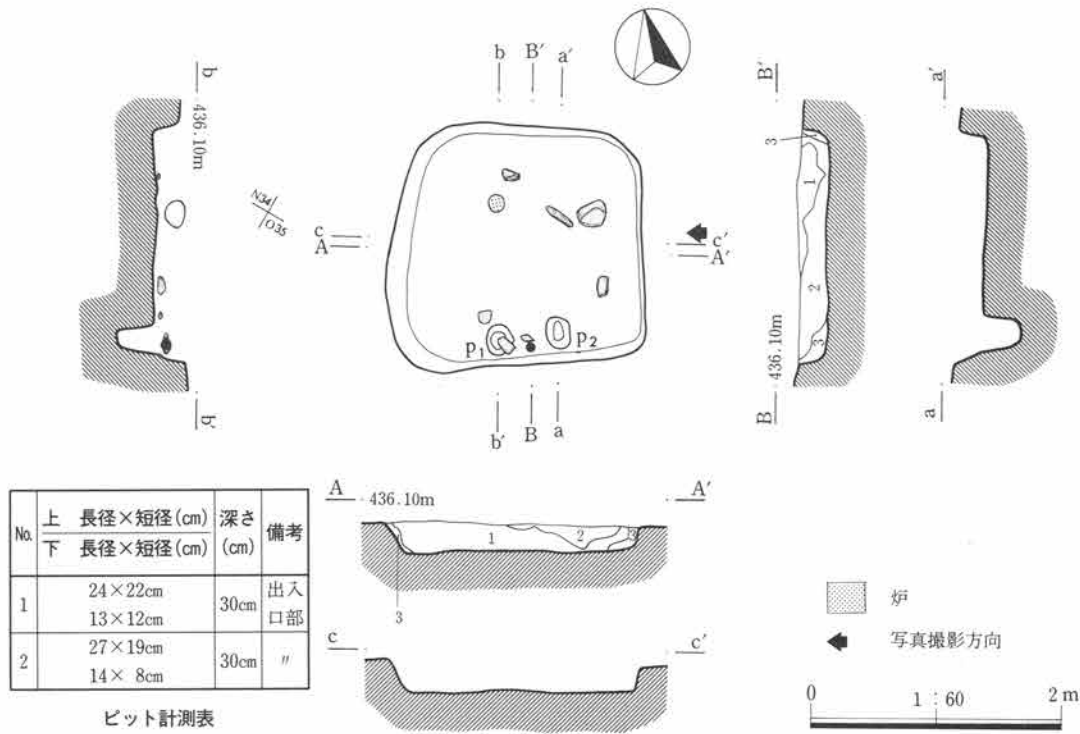
図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様(その他)
225-24	甕		覆土 口縁部片	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③灰褐7.5YR5/2	内外面とも横方向に撫で整形が行なわれている。	櫛描波状文が施文されている。口縁部から順次頸部方向へ施文をすすめている。
225-25	甕		覆土 口縁部片	①白色粒子を含む。 ②悪い(器面が荒れる) ③にぶい褐7.5YR5/3	内面は横方向に器面調整が行なわれている。	櫛描波状文が施文されている。
225-26	甕		覆土 口縁部片	①長石、石英粒を含む。 ②僅かに器面が荒れる。 ③灰褐5YR4/2	内外面とも横撫で整形が行なわれている。	櫛描波状文が2段にわたり施文されていることが確認できる。
225-27	甕		覆土 口縁部片	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③灰褐5YR5/2	内面は横方向に器面調整が行なわれている。光沢がある。	口縁部には何段かにわたり櫛描波状文が施文されている。
225-28	甕		覆土 口縁部片	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③灰褐5YR5/2	内面は横撫で整形が行なわれている。	頸部に櫛描横線文(簾状文?)を施文後、口縁部に2段にわたり櫛描波状文が施文されている。
225-29	甕		覆土 口縁部片	①白色粒子を含む。 ②僅かに器面が荒れる。 ③にぶい褐7.5YR6/3	口縁部は外反する。内外面とも横撫で整形される。	粗い櫛描波状文が施文されている。
225-30	甕		覆土 口縁部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③にぶい赤褐5YR5/4	折り返し口縁を有す。口縁部は横撫で整形が行なわれている。	頸部に櫛描波状文が施文されている。
225-31	壺		覆土 口縁部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③にぶい黄橙10YR7/3	折り返し口縁を有す。内外面とも横撫で整形が行なわれている。	
225-32	甕		覆土 口縁部片	①白色粒子を含む。 ②悪い。 ③浅黄橙10YR8/3	折り返し口縁を有す。口縁部は横撫で整形が行なわれている。	
225-33	壺		覆土 口縁部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③にぶい橙7.5YR6/4	折り返し口縁を有す。内面と外面口縁部は横撫で調整が行なわれている。	
225-34	壺		覆土 口縁部片	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③にぶい黄橙10YR7/4	折り返し口縁を有す。内外面とも横撫で調整が行なわれている。頸部は斜方向に器面調整。	
225-35	甕		覆土 口縁部片	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③褐灰10YR4/1	内面は横撫でと艶磨きが行なわれている。外面は横撫で調整が行なわれている。	櫛描波状文が施文されている。
225-36	鉢?		覆土 口縁部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③にぶい褐7.5YR6/3	内外面とも横方向に撫でが行なわれ、外面は斜方向に艶磨きが行なわれている。	
225-37	鉢		覆土 口縁部片	①長石、石英粒を含む。 ②悪い。 ③にぶい橙7.5YR6/4	器面は荒れている。口縁部は横撫で、一部縦方向に艶磨きが行なわれている。	
225-38	鉢		覆土 口縁部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好、光沢がある。 ③にぶい黄橙10YR7/3	口縁部内外面とも横方向に器面調整が行なわれている。	

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
225-39	甕		覆土 口縁部片	①白色粒子を含む。 ②良好、光沢がある。 ③灰白2.5Y7/1	口縁部は横方向に撫でによる器面調整が行なわれている。	
225-40	鉢		覆土 口縁部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③黒褐2.5Y3/1	口縁部の破片である。口縁部は内外面とも横撫で調整、外面体部は縦方向に筥削りが行なわれている。	
225-41	台付 甕		覆土 口縁部片	①小礫を僅かに含む。 ②やや軟質。 ③にぶい黄橙10YR7/2	S字状口縁台付甕の口縁部破片である。	古式土師器である。
225-42	高杯		覆土 口縁部片	①夾雑鉱物を含む。 ②良好。 ③朱	口縁端部は内傾する。口縁部は横撫で、外面は縦方向に筥磨きが行なわれている。	内外面とも赤色塗彩。
225-43	高杯		覆土 口縁部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③にぶい橙7.5YR6/4	高杯の口折状の口縁部である。内外面とも横方向に器面調整が行なわれている。	内面に赤色塗彩。
225-44	壺		覆土 頸部片	①砂質で石英を含む。 ②器面は荒れる。 ③朱	小型の壺形土器頸部の破片と考えられる。	頸部に簾状文が右まわりで施文されている。内外面とも赤色塗彩。
225-45	甕		覆土 頸部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③灰黄褐10YR6/2	頸部付近の破片である。外面は縦方向に筥磨き、内面は横撫でが行なわれている。	9条1単位の櫛状工具により横線文を縦方向に区画を入れる。
225-46	甕		床直 頸部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③にぶい褐7.5YR5/3	内外面とも横方向に器面調整が行なわれている。	頸部には右まわりの簾状文が施文されている。簾状文の下位には8条1単位の波状文が入る。
225-47	甕		覆土 頸部片	①長石、石英粒を含む。 ②ややあまい。 ③にぶい黄橙10YR6/3	頸部の破片である。内面は横方向に器面調整が行なわれている。	頸部には右まわりの簾状文が施文され、口縁部、肩部は櫛描波状文が施文されている。
225-48	甕		覆土 頸部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③灰褐5YR5/2	内外面とも横方向の器面調整が行なわれている。	頸部は櫛描横線文(簾状文?)を施文後、口縁部方向に順次櫛描波状文が施文されている。
225-49	甕		覆土 頸部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③灰褐7.5YR5/2	外面は縦方向に櫛状工具により器面調整が行なわれている。内面は横方向に筥磨きが行なわれている。	7条1単位の櫛描横線文(簾状文?)を施文後、上下に櫛描波状文を施文。
225-50	甕		覆土 肩部～頸部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③灰褐7.5YR4/2	内外面とも横方向に筥磨きが行なわれている。外面頸部付近は斜方向に調整が行なわれている。	頸部には右まわりの簾状文を施文後、肩部に7条1単位の櫛描波状文を施文。
225-51	甕		覆土 肩部～頸部片	①白色粒を多量に含む。 ②良好。 ③灰黄褐10YR5/2	内外面とも横方向に器面調整が行なわれている。	10条1単位の簾状文が右まわりに施文された後、肩部に櫛描波状文を施文する。
225-52	甕		覆土 肩部～頸部片	①長石、石英粒を含む。 ②器面が荒れる。 ③にぶい黄橙10YR6/3	外面は斜方向に器面調整。内面は横方向に器面調整が行なわれている。	頸部に右まわりの簾状文が施文され、肩部付近には櫛描波状文が施文されている。
225-53	甕		覆土 肩部～頸部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③黒10YR1.7/1	内面は横方向に筥磨きが行なわれている。	頸部には簾状文が施文された後に7条1単位の櫛描波状文が2段分肩部に施文してある。

図番 PL.	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
225-54	甕		覆土 頸部片	①長石、石英粒を含む。 ②外面は荒れる。 ③灰褐5YR5/2	内面は横方向に筥磨きが行なわれている。	8条1単位の簾状文が頸部に施文された後、上下に櫛描波状文が施文されている。
225-55	甕		覆土 頸部片	①長石、石英粒を含む。 ②外面は荒れる。 ③にぶい赤褐 5YR5/4	内面は横方向に器面調整が行なわれている。	頸部には右まわりの簾状文が施文されている。口縁部は櫛描波状文が施文されている。
225-56	甕		覆土 頸部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③にぶい赤褐5YR5/3	内外面とも横方向に器面調整が行なわれている。	頸部には簾状文が施文されている。
225-57	甕		覆土 頸部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③黒5YR1.7/1	内面は筥磨きが横方向に行なわれている。	頸部には櫛描横線文(簾状文?)を施文後、口縁部方向へ順次9条1単位の波状文4段分施文を確認。
225-58	甕		覆土 頸部片	①長石、石英粒を含む。 ②外面は荒れる。 ③灰褐5YR5/2	内面は横方向に器面調整が行なわれている。	頸部には簾状文を施文後、肩部に10条1単位の櫛描波状文を施文。
225-59	甕		覆土 肩部～頸部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③褐灰5YR4/1	内面は横方向に器面調整が行なわれている。	頸部には櫛描横線文(簾状文?)を施文後、肩部に櫛描波状文を施文している。
225-60	甕		覆土 肩部～頸部片	①白色粒子を含む。 ②内面が僅かに荒れる。 ③にぶい橙7.5YR6/4	頸部の破片である。	頸部は櫛描横線文(簾状文?)を施文後、肩部に櫛描波状文を施文。
225-61	甕		覆土 肩部～頸部片	①長石、石英粒を含む。 ②僅かに器面が荒れる。 ③にぶい褐7.5YR6/3	内面は横方向に器面調整が行なわれている。	頸部は櫛描横線文、肩部は櫛描波状文を施文している。
225-62	甕		覆土 頸部片	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③灰黄2.5Y7/2	内面は横方向に器面調整が行なわれている。	櫛描横線文(簾状文?)の一部がみられ、これを櫛描波状文が切って数段施文される。
225-63	壺?		覆土 肩部～胴部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③明赤褐5YR5/6	内外面とも横方向に器面調整が行なわれている。胴部は比較的丸みをもつ。	胴最大部付近まで肩部側から施文が続いているものと考えられる。
226-64	甕?		覆土 頸部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③にぶい黄橙 10YR7/3	内面は横方向に筥磨きが行なわれている。	4段の櫛描波状文がみられる。3条1単位の櫛状工具を使用している。内面は吸炭している。
226-65	甕?		床直 頸部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③褐灰5YR4/1	内面は横方向に器面調整が行なわれている。	櫛描波状文2段分が確認できる。
226-66	小型 甕?		覆土 頸部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③にぶい橙7.5YR6/4	内外面とも横方向に器面調整が行なわれている。	頸部には櫛描波状文が施文されている。
226-67	甕?		覆土 頸部片	①長石、石英粒を含む。 ②僅かに器面が荒れる。 ③にぶい褐7.5YR5/3	内面は横方向に器面調整が行なわれている。	沈線文があるが文様構成は不明。
226-68	壺?		覆土 頸部片	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③にぶい橙7.5YR6/4	外面は縦方向に櫛状工具による調整痕が残る。内面は横方向に筥磨きが行なわれている。	



図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
226-69		④ 5.0	覆土 底部 $\frac{1}{2}$	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③橙7.5YR6/6	底部の破片である。	
226-70		④ 6.2	覆土 底部 $\frac{1}{2}$	①白色粒子を含む。 ②良好。 ③にふい橙7.5YR6/4	底部の破片である。	
226-71		④ 7.8	覆土 底部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③にふい赤褐5YR5/4	底部の破片である。	
226-72		④ 3.8	覆土 底部 $\frac{1}{2}$	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③にふい黄橙 10YR6/4	底部の破片である。	
226-73		④ 3.8	覆土 底部 $\frac{1}{2}$	①長石、石英粒を含む。 ②良好である。 ③にふい橙7.5YR6/4	底部の破片である。	
226-74		④12.2	覆土 底部片	①砂質である。 ②器面は荒れている。 ③にふい褐7.5YR5/3	底部の破片である。	
226-75		④ 7.6	覆土 底部 $\frac{1}{2}$	①長石、石英粒を含む。 ②底が荒れている。 ③にふい褐7.5YR5/4	底部の破片である。	
226-76		④ 6.5	覆土 底部片	①長石、石英粒を含む。 ②僅かに器面が荒れる。 ③にふい褐7.5YR5/3	底部の破片である。	
226-77	ミニ チュアの 土器?	④ 1.6	覆土 底部片	①金雲母を含む。 ②良好。 ③黒7.5YR2/1	底部の破片。手捏土器である。	
226-78		④ 7.3	覆土 底部片	①白色粒子を含む。 ②器面は荒れている。 ③浅黄橙7.5YR8/4	底部の破片である。	
226-79		④ 6.5	覆土 胴部～底 部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③にふい黄橙 10YR7/4	底部から胴下半分にかけての破片。内面は横方向、外面は縦方向の器面調整が行なわれている。	
226-80	高杯 ?		覆土 脚部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③にふい橙7.5YR6/4	高杯の脚部と考えられる。底は僅かに粘土がまかれる。内面横方向、外面は縦方向の器面調整。	
226-81	高杯		覆土 脚部片	①白色粒を多量に含む。 ②良好。 ③朱。	高杯の脚部の破片。内面は横方向に器面調整。外面は縦方向に筥磨きが行なわれている。	外面は赤色塗彩が行なわれている。



第227図 Y-5号住居跡

Y-5号住居跡 (第227図、PL.37)

**位置** N-35、O-35グリッドにかけて検出された。近接してY-6号住居跡が存在する。

**経過** 10月5日から調査を開始。規模の小さな竪穴であったために住居跡か否かの判断に苦しんだが、床面から焼土が検出されたり、出入口部の存在等から弥生時代の住居跡と判断するにいたった。

**覆土** ローム層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は次のとおりである。

第1層 褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を多量に含み、黒色土を少量含む。

第2層 黒褐色土層 少量のローム粒子を含む。 第3層 黒褐色土層 多量のローム粒子を含む。

**形状** 長辺2.03m、短辺1.88mの隅丸方形を呈する。面積は約3.05㎡である。

**壁高** 住居跡確認面より約15~25cmで床面に達する。

**床面** 全面硬く踏みかためられており、ほぼ平坦である。 **周溝** 検出できなかった。

**柱穴** 南壁際に2個のピットを検出した。おそらく出入口部施設になると考えられる。P<sub>1</sub>の深さ30cm、P<sub>2</sub>も同じく30cmであり、その間隔は48cmを測る。支柱穴は床面上からは検出できなかった。

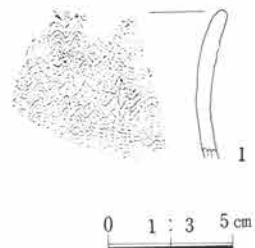
**炉** 床面を掘り窪めた地床炉である。長径13cm、短径13cmの円形を呈し、北西寄りに位置している。

**遺物出土状況** 床面上から少量の遺物が出土しているだけであった。

出土遺物 (第228図、PL.71)

当住居跡から出土した土器は、口縁部片3点、胴部片19点であった。このうち口縁部片1点を拓本で図示した。

**時期** 出土遺物から判断すると、当住居跡は弥生時代後期樽式期に相当する。しかし該期の住居跡にくらべて非常に小規模であることから一般的な住居であったか否かは、今後の検討課題であろう。



第228図 Y-5号住居跡出土土器

Y-5号住居跡遺物観察表

図番 PL.	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様(その他)
228-1 PL.71	甕		覆土 口縁部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。内面は光沢。 ③灰褐色7.5YR4/2	口縁部は外反し、端部は丸みをもつ。内面は横方向に撫で整形が行なわれている。	9条1単位の櫛描波状文が頸部から口縁部方向に順次施文されている。

Y-6号住居跡(第229図、PL.39)

**位置** O-34・35グリッドにかけて検出された。近接してY-5号住居跡が存在する。

**経過** 10月28日から調査を開始。遺構が路線外に延びているが、借地が行えず完掘することができなかった。

**覆土** セクションから判断すると、ローム漸移層から掘り込まれて竪穴住居跡は構築されている。そこに堆積した覆土は次のとおりである。

**第1層** 暗褐色土層 やわらかくて締り良くない。粘性がある。ローム粒子を多量に、炭化物粒子・赤色スコリア粒子を少量含む。

**第2層** 暗褐色土層 1層より明るい色調。やわらかくて締り良くない。粘性が少しある。ローム粒子を多量に、炭化物粒子を極少量含む。

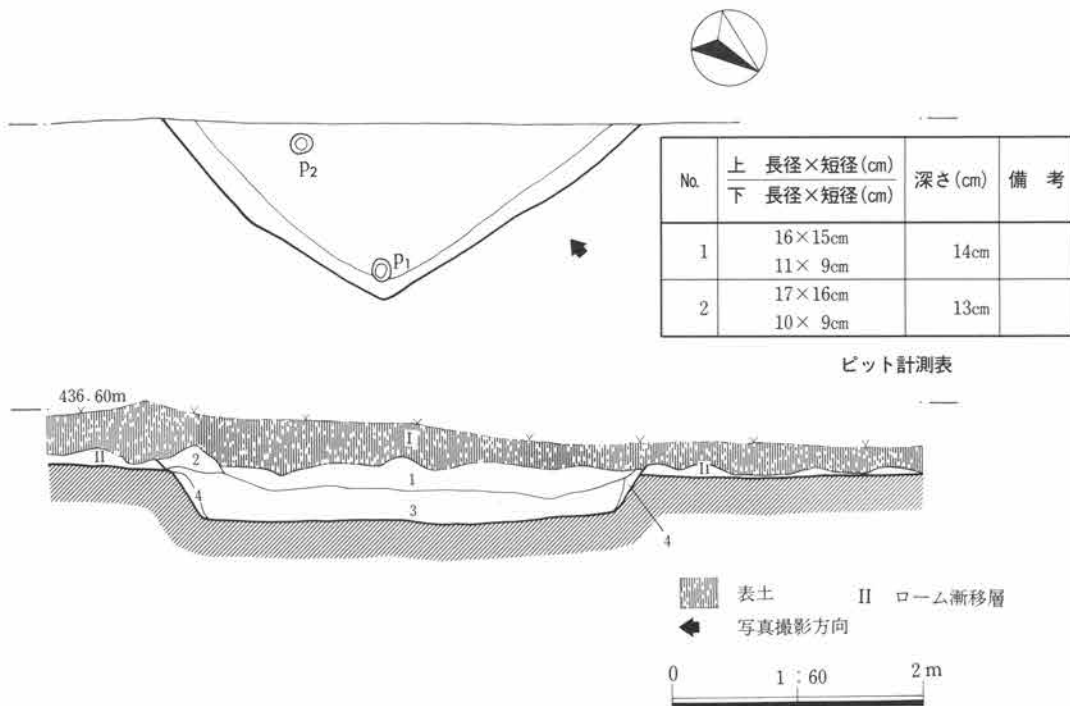
**第3層** 黒褐色土層 やや固く締り、粘性がある。ローム粒子を多量に、炭化物粒子を少量含む。

**第4層** 黄褐色土層 やわらかくて締り良くない。粘性が非常にある。ロームブロック・粒子を多量に含む。

**形状** 完掘できなかったために形状不明。現状での面積は約2.09㎡である。

**壁高** セクションから判断すると、約30~59cmで床面に達している。 **床面** ほぼ平坦である。

**周溝** 検出できなかった。



第229図 Y-6号住居跡

**柱穴** ピット2個を検出した。これらのピットが柱穴となり得るのかは住居跡が全掘されていない以上、判断はつかない。P<sub>1</sub>の深さは14cm、P<sub>2</sub>の深さは13cmといずれも浅い。

**炉** 調査範囲内からは検出されていない。

**遺物出土状況** 覆土から極少量の遺物が出土したにすぎなかった。

**出土遺物 (第230図)**

当住居跡から出土した土器のうち実測したものは底部片1点である。この他に口縁部片2点、頸部片3点、胴部片17点が出土している。このうち口縁部片1点、頸部片1点、肩部片1点を拓本で図示した。また覆土には縄文時代中期土器片47点が混入していた。

**時期** 極少量の出土遺物から判断すると、当住居跡は弥生時代後期樽式期に担当する。



第230図 Y-6号住居跡出土土器

**Y-6号住居跡遺物観察表**

[法量：④底径]

図番 PL	器種	法量 (cm)	出土状況 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・整形の特徴	文様 (その他)
230-1 PL. 71	甕		覆土 口縁部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③にぶい赤褐5YR5/4	折り返し口縁を有す。内面および外面折り返し部分は横撫で整形が行なわれている。	折り返し口縁直下から波状沈線文(櫛描?)が施文されている。
230-2	甕		覆土 頸部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好、内面に光沢。 ③にぶい黄橙10YR6/3	頸部の破片である。内面は横方向に整形されている。	頸部には右まわりの簾状文が施文。口縁部にかけて櫛描波状文が施文されている。
230-3 PL. 71	甕		覆土 肩部片	①長石、石英粒を含む。 ②良好。 ③にぶい褐7.5YR5/3	内面は横方向に器面調整、外面は横撫で整形が行なわれている。	肩部に7~8条1単位の櫛描波状文が施文されている。
230-4 PL. 71		④ 5.2	覆土 底部片	①小礫が混入する。 ②良好。 ③灰黄2.5Y7/2	底部が取り付け輪積み部分から離れた状況を呈す。外面胴最下部は櫛状工具による器面調整。	

**竪穴状遺構 (第231図、PL.39)**

**位置** I-14・15、J-14・15グリッドにかけて検出された。

**経過** わずかな落ち込みから検出された遺構である。規模もやや不明確であり、柱穴も検出されず、また遺物もほとんど出土していないことから住居跡と判断するまでにはいたらなかった。

**覆土** 覆土はほとんど残されていなかったために、検討することはできなかった。

**形状** 長辺4.0m、短辺3.4mの方形を呈するものと思われる。面積は約12.6㎡である。

**壁高** 北壁で約4~10cm残存していた。他の壁はわずかに1~2cmの残存状況であった。

**床面** ほぼ平坦である。住居中央部に48×47cm、深さ7cm、また西壁寄りに100×95cm、深さ12cmの焼土の堆積が認められた。

**柱穴** 検出できなかった。住居南西コーナーには84×82cm、深さ50cmの貯蔵穴と考えられるピットが検出さ

れている。

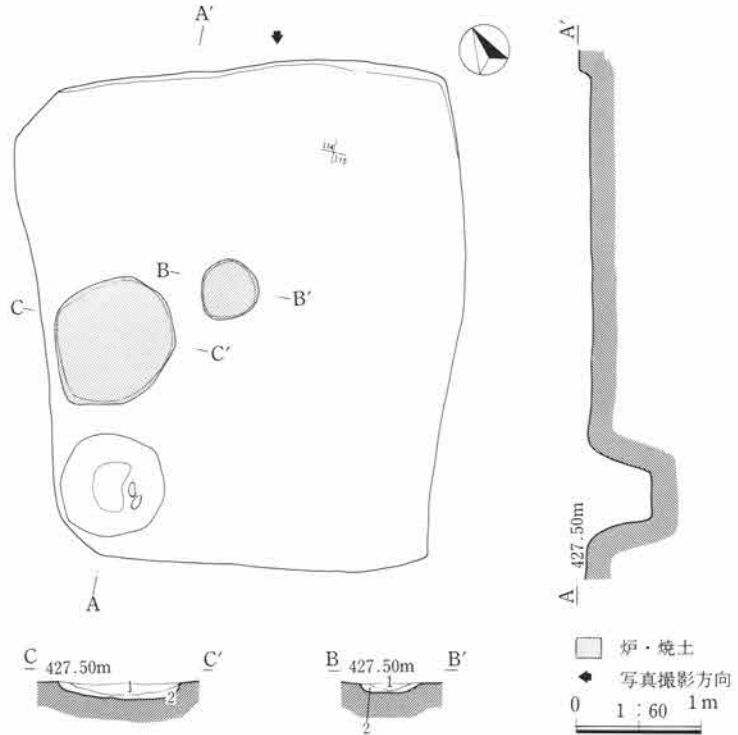
**炉** 住居中央部の焼土の堆積は炉跡になると思われる。覆土は2層に分かれた。

第1層 赤褐色土層 多量の焼土粒子を含む。第2層 茶褐色土層 1mm内外の軽石を含む。

西壁寄りの焼土の堆積は炉跡と判断することは不可能であった。覆土は中央の炉跡とほぼ同じ。

**遺物出土状況** 覆土・床面上からの遺物の出土はほとんどなかったが、埴輪片が数点出土している。

**時期** 出土遺物から時期を特定できるものはなかった。



第231図 堅穴状遺構

5

土坑

(1)時期不明の土坑 (第232~235図)

15号土坑

L-49グリッドにおいて14号土坑(風倒木)と重複して検出された。14号土坑によって壊されている。上面は95×95cm、底面は92×73cm、深さ25~28cmの楕円形を呈するものと思われる。底面はやや凹凸が認められ、面積約0.5㎡である。覆土は2層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて締り良い。粘性がある。ローム粒子を含む。

第2層 黄褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を含む。

覆土からは遺物の出土はなかった。

23号土坑

L-43グリッドにおいて検出された。24号土坑の東2.5mのところに位置する。上面は132×92cm、底面は120×68cm、深さ10~20cmの不正形を呈する。底面は凹凸が激しく、面積約0.6㎡である。覆土からは遺物の出土はなかった。

24号土坑

L-42・43グリッドにかけて検出された。23号土坑の西2.5mのところに位置する。上面は110×97cm、底面は91×70cm、深さ27cmの不正形を呈する。底面はほぼ平坦であり、面積約0.4㎡である。覆土は3層に分かれた。第1層 暗褐色土層 わずかに粘性がある。ローム粒子を含む。第2層 黒褐色土層 わずかに粘性がある。ローム粒子を含む。第3層 茶褐色土層 粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を含む。

覆土からは遺物の出土はなかった。

25号土坑

K・L-41グリッドにかけて検出された。30号土坑の南西4mのところに位置する。上面は106×98cm、底

面は91×75cm、深さ27cmの楕円形を呈する。底面は平坦であり、面積約0.6㎡である。覆土は4層に分れた。

第1層 黒褐色土層 やや固く締り粘性がある。ローム粒子を少量含む。

第2層 暗褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。ロームブロック・粒子を多量、炭化物を少量含む。

第3層 暗褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。ローム粒子を多量に含む。

第4層 黄褐色土層 やわらかくて粘性がある。ローム粒子を多量に含む。

覆土からは遺物の出土はなかった。

### 30号土坑

K-42グリッドにおいて検出された。25号土坑の北東4mのところに位置する。上面は112×90cm、底面は77×63cm、深さ24~26cmの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、面積は約0.4㎡である。覆土は4層に分かれた。第1層 黒色土層 少量のローム粒子を含む。第2層 黒色土層 多量のローム粒子を含む。第3層 黒褐色土層 ローム粒子を含む。第4層 黄褐色土層 ロームブロック主体の層。

覆土からは遺物の出土はなかった。

### 41号土坑

N-43グリッドにおいて検出された。39号土坑(風倒木)の北西に位置する。上面は101×95cm、底面は72×55cm、深さ20~32cmの楕円形を呈する。底面はやや凹凸が認められ、面積は約0.3㎡である。覆土は4層に分かれた。第1層 黒褐色土層 多量のローム粒子を含む。第2層 黒褐色土層 ローム粒子を含む。第3層 黒褐色土層 ローム粒子を含む。第4層 黄褐色土層 ローム主体の層。

覆土からは遺物の出土はなかった。

### 48号土坑

L-40グリッドにおいて検出された。北1.5mのところに60号土坑が存在する。上面は165×86cm、底面は136×70cm、深さ20~34cmの隅丸長方形を呈する。底面は北部分でやや下がり、面積約0.8㎡である。覆土は3層に分かれた。第1層 黒褐色土層 少量のローム粒子を均一に含む。第2層 黒褐色土層 ローム粒子を含む。第3層 黄褐色土層 やわらかくてローム主体の層。

覆土からは遺物の出土はなかった。

### 52号土坑

P-45グリッドにおいて検出された。遺構は路線外に延びるが、借地不可能のために完掘できなかった。現状での規模は上面で145×(85)cm、底面は115×(70)cm、深さ16~25cmの楕円形を呈するものと思われる。底面には段差が認められ、面積は約0.6㎡である。覆土は4層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やや固く粘性が非常にある。ローム粒子を多量に、ロームブロックを少量含む。

第2層 暗褐色土層 やや固いが締り良くない。粘性がある。ローム粒子を少量含む。

第3層 黒褐色土層 やや固いが締り良い。粘性が非常にある。ローム粒子・赤色スコリア粒子を少量含む。

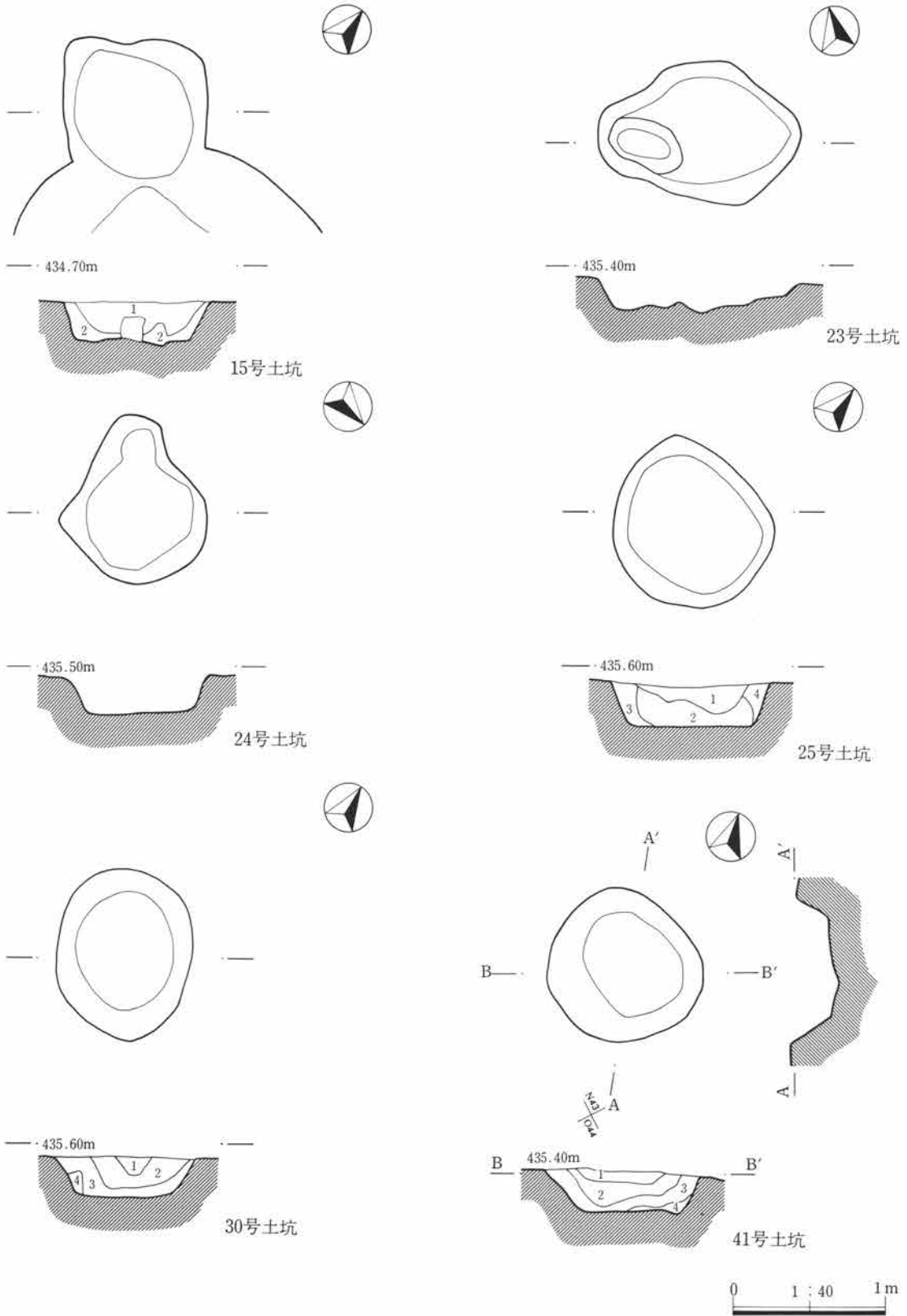
第4層 黄褐色土層 固く締りが悪い。粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子主体の層。

覆土からは遺物の出土はなかった。

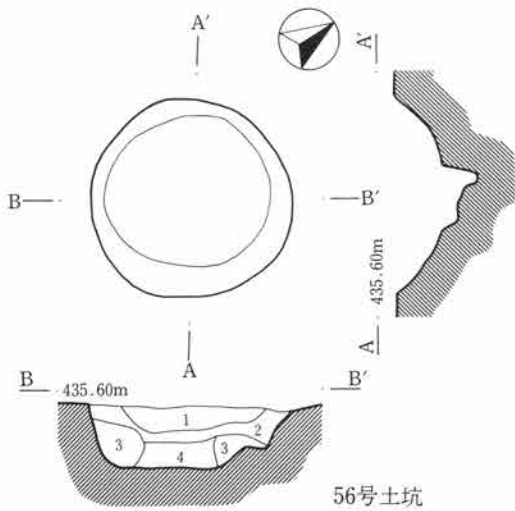
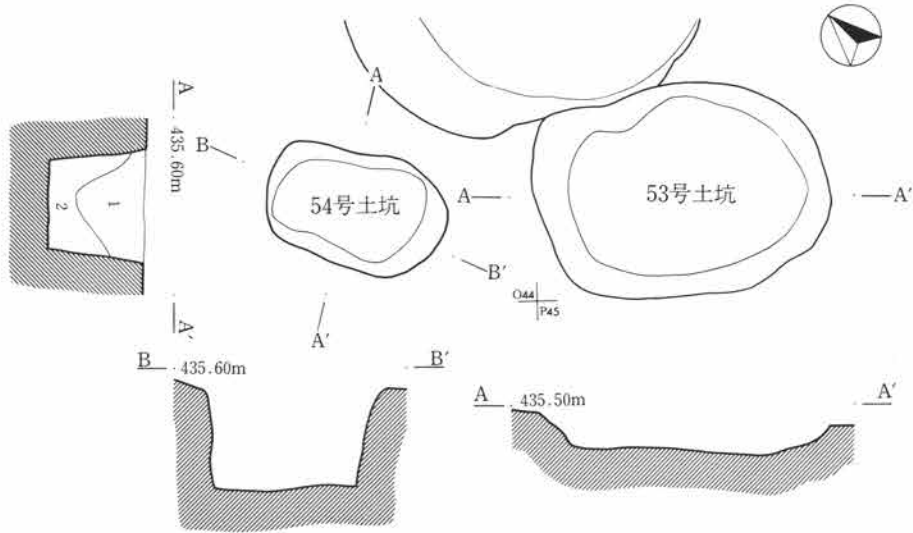
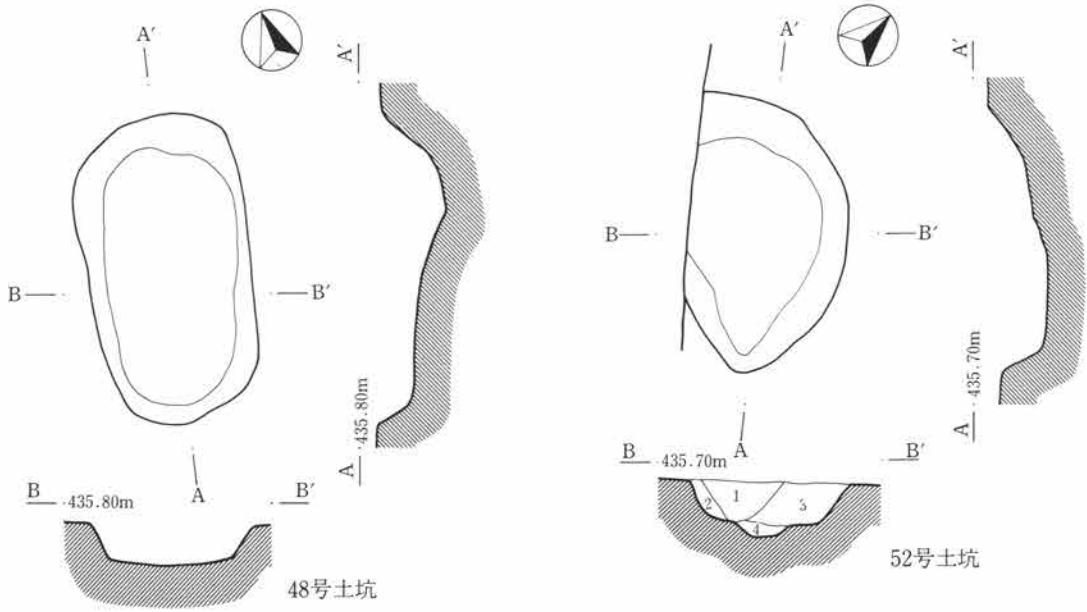
### 53号土坑

O-45グリッドにおいて検出された。縄文時代中期の38号土坑とほぼ接するように構築されている。上面は159×113cm、底面は128×95cm、深さ10~20cmの楕円形を呈する。底面はやや凹凸があり、面積約0.9㎡である。

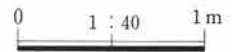
覆土からは遺物の出土はなかった。



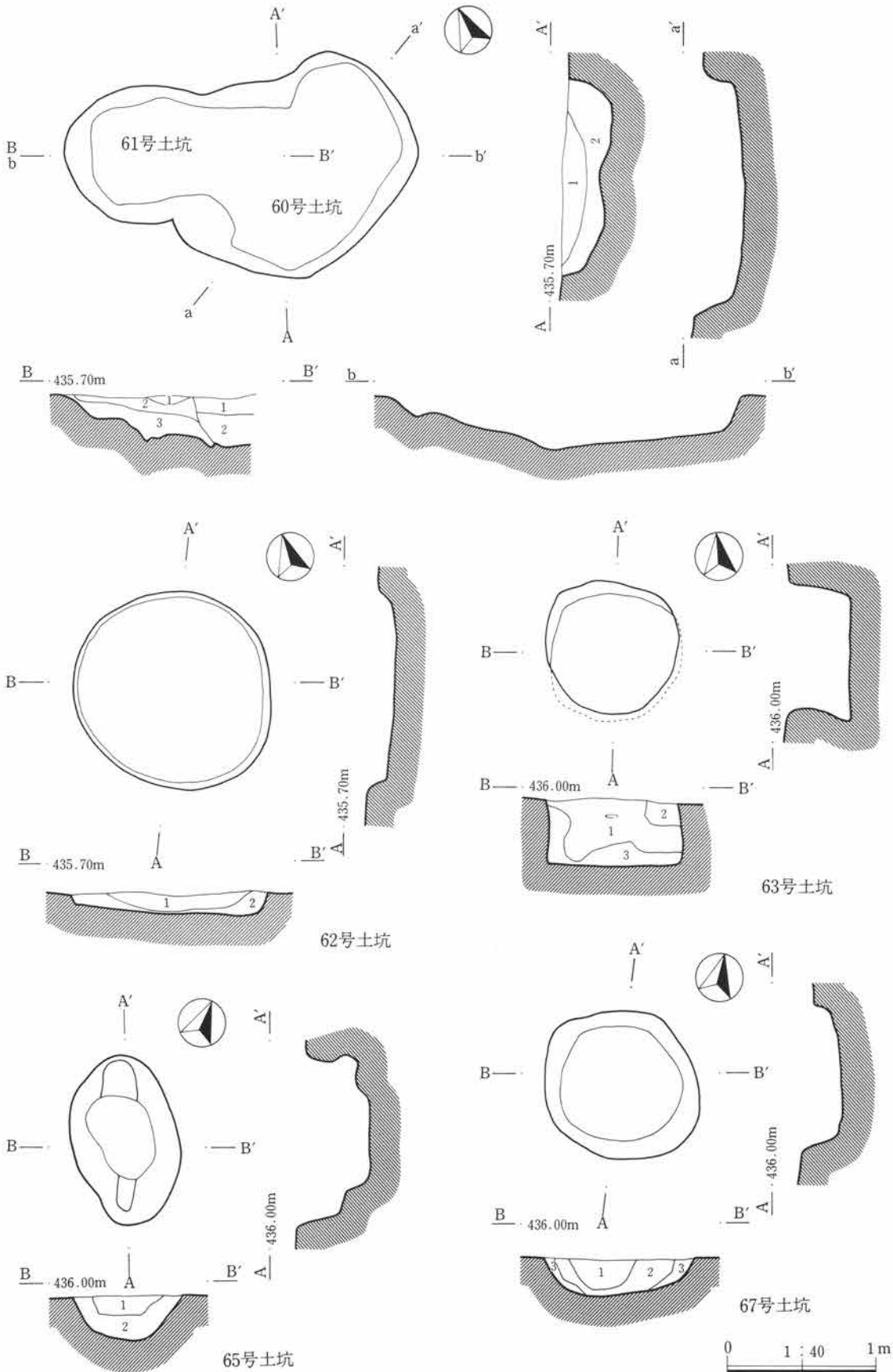
第232図 時期不明の土坑(15・23・24・25・30・41号)



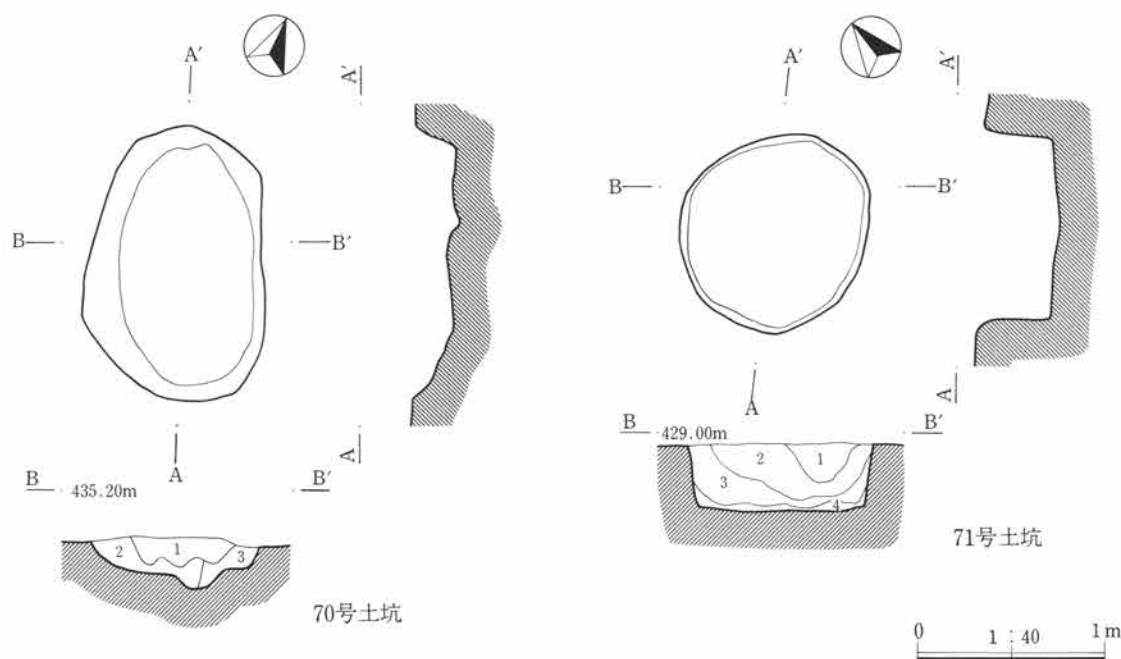
第233図 時期不明の土坑 (48・52・53・54・56号)







第234図 時期不明の土坑(60・61・62・63・65・67号)



第235図 時期不明の土坑 (70・71号)

#### 54号土坑

O-44グリッドにおいて検出された。53号土坑の北西に位置している。上面は97×60cm、底面は77×44cm、深さ50～56cmの隅丸長方形を呈する。底面は平坦であり、ほぼ垂直に立ちあがる。面積は約0.3㎡である。覆土は2層に分かれた。

第1層 黒色土層 やや固く、締り良い。粘性が非常にある。ローム粒子・赤色スコリア粒子を少量含む。

第2層 暗褐色土層 やわらかくて締り良くない。粘性が非常にある。ロームブロック・粒子を多量に含む。

覆土からは遺物の出土はなかった。

#### 56号土坑

O-43グリッドにおいて検出された。54号土坑の北西5.5mのところの位置している。上面は108×104cm、底面は88×80cm、深さ20～44cmのほぼ円形を呈する。底面は凹凸が認められ、面積は約0.6㎡である。覆土は3層に分かれた。

第1層 黒褐色土層 やわらかくて締り良い。粘性がある。ロームブロック・ローム粒子を極少量含む。

第2層 暗褐色土層 やわらかくて締り良い。粘性がある。ローム粒子・赤色スコリア粒子を少量含む。

第3層 灰白色土層 固く締り良い。粘性はほとんどない。黒色土をわずかに含む。

第4層 灰褐色土層 やわらかくて締りは良くない。粘性が非常にある。ローム粒子を多量に含む。

覆土からは遺物の出土はなかった。

#### 60号土坑

L-39・40グリッドにかけて61号土坑と重複して検出された。61号土坑を壊して構築されている。上面は156×(110)cm、底面は142×(80)cm、深さ17～27cmの隅丸長方形を呈する。底面はほぼ平坦で、面積約(1.1)㎡である。覆土は2層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて締り良くない。ローム粒子・赤色スコリア粒子を少量含む。

第2層 黄褐色土層 やや固いが締り悪い。粘性がある。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

覆土からは遺物の出土はなかった。

#### 61号土坑

L-39グリッドにおいて60号土坑と重複して検出された。当土坑が古い。確認面からの深さは10～23cmを測り、隅丸長方形を呈すると思われる。底面は凹凸が激しい。覆土は3層に分かれた。

第1層 黒褐色土層 やや固いが締り良くない。粘性もあまりない。ローム粒子を含む。

第2層 暗褐色土層 固く締り粘性がある。ロームブロック・ローム粒子を含む。

第3層 黄褐色土層 固く締り粘性がある。ロームブロック・ローム粒子からなり、少量の黒色土を含む。

覆土からは遺物の出土はなかった。

#### 62号土坑

K-39グリッドにおいて検出された。60号土坑の北4.5mのところの位置する。上面は133×131cm、底面は125×123cm、深さ8～14cmのほぼ円形を呈する。底面は平坦であり、面積約1.2㎡である。覆土は2層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やや固く締り悪い。粘性が少しある。ローム粒子を多量に含む。

第2層 黄褐色土層 やや固く締り悪い。粘性はほとんどない。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

覆土からは遺物の出土はなかった。

#### 63号土坑

M・N-36グリッドにかけて検出された。上面は90×88cm、底面は88×84cm、深さ39～45cmのほぼ円形を呈する。断面はやや袋状を、底面は平坦であり、面積約0.6㎡である。覆土は3層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 固く締り粘性はあまりない。ローム粒子・炭化物粒子を少量含む。

第2層 黄褐色土層 やわらかく締り良くない。粘性はあまりない。ローム粒子を多量に含む。

第3層 黄褐色土層 固く締り粘性は非常にある。ロームを多量に含み、少量の炭化物粒子を含む。

覆土からは遺物の出土はなかった。

#### 65号土坑

N-35グリッドにおいて検出された。64号土坑の西に位置する。上面は112×75cm、底面は55×42cm、深さ30～44cmの楕円形を呈する。底面は凹凸が認められ、面積約0.17㎡である。覆土は2層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やわらかいが締り良くない。粘性が少しある。ローム粒子を含む。

第2層 黄褐色土層 やわらかいが締り良くない。粘性が少しある。ローム主体でわずかに黒色土を含む。

覆土からは遺物の出土はなかった。

#### 67号土坑

N-34グリッドにおいて検出された。66号土坑の北4mのところの位置する。上面は114×100cm、底面は81×79cm、深さ9～24cmのほぼ円形を呈する。底面は皿状を呈し、面積約0.5㎡である。覆土は3層に分層。

第1層 暗褐色土層 やや固いが締り良くない。ローム粒子を含む。

第2層 黄褐色土層 固く締り粘性はあまりない。ローム粒子を多量に、炭化物粒子を少量含む。

第3層 黄褐色土層 固いが締り良くない。粘性はあまりない。ロームを多量に、黒色土をわずかに含む。

覆土からは遺物の出土はなかった。

#### 70号土坑

M-53グリッドにおいて検出された。上面は145×90cm、底面は126×71cm、深さ13～21cmの楕円形を呈する。底面は凹凸が認められ、面積約0.7㎡である。覆土は3層に分かれた。

- 第1層 黒褐色土層 やわらかくて締り良くない。粘性がある。ローム粒子を少量含む。  
第2層 暗褐色土層 やや固く締り良い。粘性がある。ローム粒子を多量に、赤色スコリア粒子を少量含む。  
第3層 黄褐色土層 やわらかくて締り悪い。粘性が非常にある。ローム粒子を多量に、炭化物粒子を含む。  
覆土からは遺物の出土はなかった。

#### 71号土坑

K-22、L-22グリッドにかけて検出された。71~78号土坑および竪穴状遺構は、住居跡の検出された面よりも一段低い面から検出されている。当土坑は上面で106×100cm、底面は96×92cm、深さ36~40cmのほぼ円形を呈する。底面は平坦であり、面積約0.7㎡である。覆土は4層に分かれた。

- 第1層 黒色土層 締り良い。第2層 黒色土層 極少量のローム粒子を含む。第3層 黒色土層 ロームブロック・ローム粒子を含む。第4層 黒褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を含む。

覆土からは遺物の出土はなかった。

#### (2)風倒木

#### 14号土坑

L-49グリッドにおいて15号土坑（時期不明）と重複して検出された。当土坑が15号土坑を壊している。上面は282×205cm、底面は210×115cm、深さ28~41cmの不正形を呈している。底面は凹凸があり、面積約2.2㎡である。覆土は4層に分かれた。第1層 黒色土層 やわらかくてわずかに粘性がある。ローム粒子を少量含む。第2層 暗褐色土層 やわらかくて粘性がある。第3層 黄褐色土層 ローム主体の層。

覆土からは礫が出土している。

#### 20号土坑

K-44・45、L-44・45グリッドにかけて28・29号土坑（縄文時代の構築）と重複して検出された。当土坑は28・29号土坑によって壊されている。上面は510×369cm、底面は367×282cm、深さ11~30cmの長楕円形を呈する。底面は激しい凹凸が認められ、面積約8.2㎡である。覆土は6層に分かれた。

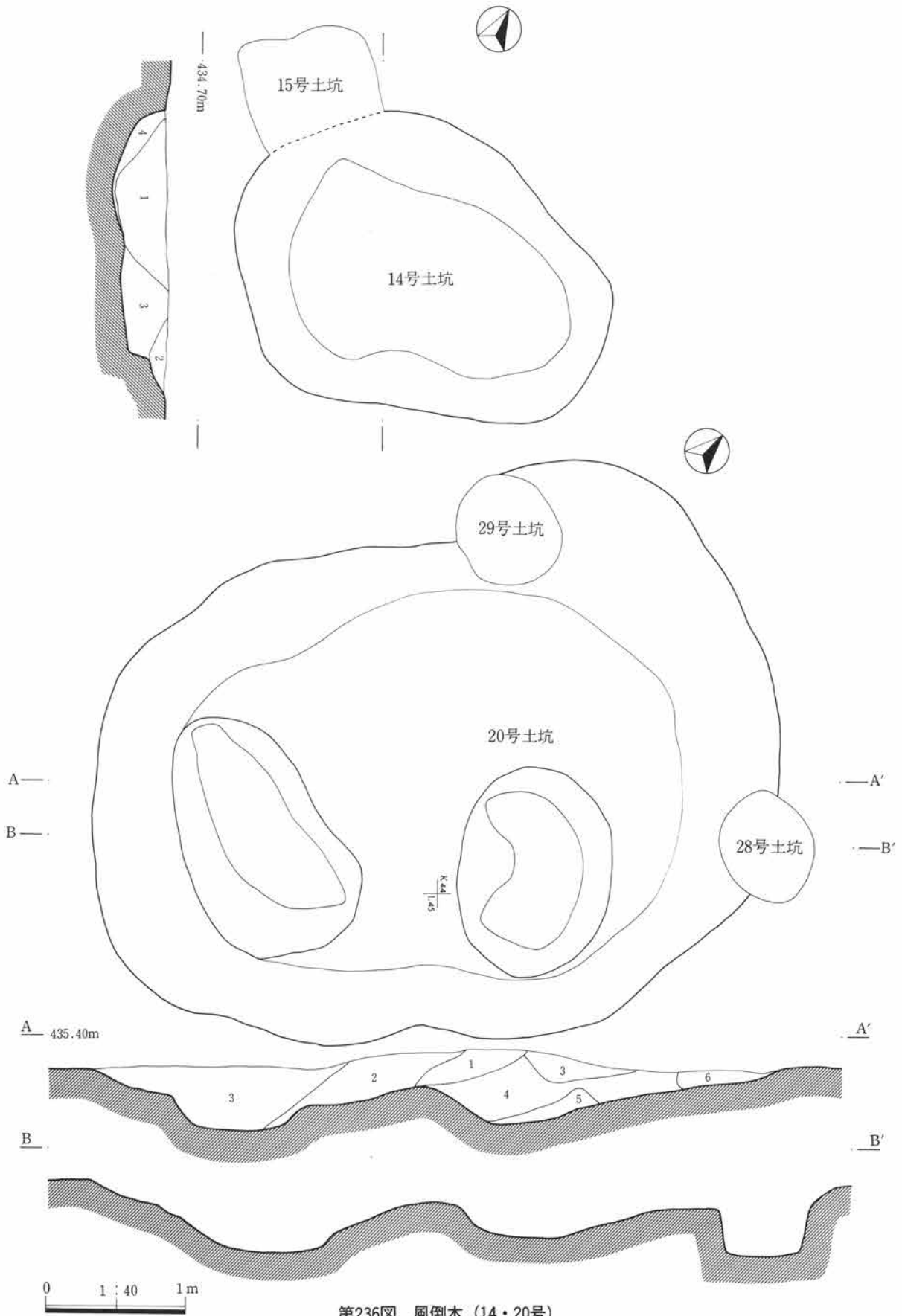
- 第1層 黄褐色土層 固く粘性が非常にある。大粒のロームブロックを含む。  
第2層 黄褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。ほとんどロームからなり、わずかに黒色土を含む。  
第3層 黒色土層 やわらかくて粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を少量含む。  
第4層 黄褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。ロームブロック・粒子からなり、黒色土を少量含む。  
第5層 暗褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。ロームと黒色土の混合土。  
第6層 茶褐色土層 やや固く締り粘性がある。ローム粒子を多量に、赤色スコリア粒子を少量含む。

覆土からは縄文時代前期土器胴部片4点、中期土器片11点（口縁部4点、胴部7点）、弥生土器片1点が出土している。

#### 31号土坑

L-47、M-47・48グリッドにかけて検出された。32・33号土坑と接近している。上面は350×330cm、底面は289×283cm、深さ20~70cmの不正形を呈する。底面は凹凸が激しく、面積約7.3㎡である。覆土は5層に分かれた。

- 第1層 暗褐色土層 やや固く粘性が非常にある。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。  
第2層 黒色土層 やや固く締り粘性が非常にある。ローム粒子・赤色スコリア粒子を極少量含む。  
第3層 黒色土層 やわらかくて締り悪い。粘性が非常にある。ロームブロックをわずかに混入。  
第4層 黄褐色土層 粘性が非常にある。ロームのなかに白色粘土がブロック状に混入している。



第236図 風倒木 (14・20号)

第5層 黄褐色土層 粘性が非常にある。ローム主体の層。

覆土からは遺物の出土はなかった。

### 32号土坑

L-46・47グリッドにかけて検出された。31・33・34号土坑と接近している。上面での規模は615×365cm、底面では562×200cm、深さ42～68cmの不正形を呈する。底面は凹凸があり、面積約9.7㎡である。覆土は5層に分かれた。

第1層 黒色土層 やわらかくて締り良い。第2層 黒色土層 やわらかくて締り良い。ローム粒子を含む。

第3層 黒褐色土層 ローム粒子を含む。第4層 黄褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。

第5層 黄褐色土層 ローム主体の層。

覆土からは遺物の出土はなかった。

### 33号土坑

L-46、M-46・47グリッドにかけて34号土坑（陥し穴）と重複して検出された。その新旧関係は判然としなかった。上面は330×300cm、底面は300×251cm、深さ40～60cmの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦であり、面積は約6.3㎡である。覆土は6層に分かれた。

第1層 黒色土層 やわらかくて締り良い。粘性が非常にある。ローム粒子を極少量含む。

第2層 暗褐色土層 やわらかくて締り悪い。ローム粒子を多量に、ロームブロックを少量含む。

第3層 黄褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。ロームと白色粘土の混合土。

第4層 暗褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。ローム・白色粘土・黒色土の混合土。

第5層 白色粘土層 固く粘性が非常にある。わずかに黒色土を含む。

第6層 黄色土層 やわらかくて粘性が非常にある。ロームと白色粘土の混合土。黒色土が極少量混入。

覆土からは遺物の出土はなかった。

### 36号土坑

O-45・46、P-45グリッドにかけて37号土坑（縄文時代の土坑）と重複して検出された。当土坑が古い。上面は532×428cm、底面は393×390cm、深さ52～91cmの楕円形を呈する。底面は凹凸があり、面積約13.4㎡である。覆土は7層に分かれた。

第1層 黒色土層 少量のローム粒子を含む。

第2層 黒褐色土層 ローム粒子を多量に含み、白色粘土ブロックを少量含む。

第3層 黄褐色土層 やわらかい。ローム主体の層。

第4層 黄褐色土層 やわらかいローム主体の層に固いロームブロックを含む。

第5層 黄褐色土層 やわらかいローム層中に多量の黒色土を含む。

第6層 灰白色土層 白色粘土層中に少量のローム粒子を含む。

第7層 黄褐色土層 ローム主体の層。

覆土からは縄文時代前期土器胴部片1点、中期土器片8点、弥生時代土器片2点が出土している。

## 土坑一覧表 (2)

## (1) 時期不明の土坑

No.	グリッド	上面 cm (長径×短径)	底面 cm (長径×短径)	上面 長径/短径	底面積(m <sup>2</sup> )	底面 長径/短径	深さ(cm)	備 考
15	L-49	(95×95)	(92×73)	1.0	0.5	1.26	25~28	14号土坑と重複
23	L-43	(132×92)	(120×68)	1.43	0.6	1.76	10~20	
24	L-42・43	(110×97)	(91×70)	1.13	0.4	1.3	27	
25	K-41 L-41	(106×98)	(91×75)	1.08	0.6	1.21	27	
30	K-42	(112×90)	(77×63)	1.24	0.4	1.22	24~26	
41	N-43	(101×95)	(72×55)	1.06	0.3	1.31	22~32	
48	L-40	(165×86)	(136×70)	1.92	0.8	1.94	20~34	
52	P-45	(145×(85))	(115×(70))	—	0.6	—	16~25	完掘できなかった。
53	O-45	(159×113)	(128×95)	1.41	0.9	1.35	10~20	
54	O-44	(97×60)	(77×44)	1.62	0.3	1.75	50~56	
56	O-43	(108×104)	(88×80)	1.04	0.6	1.1	20~44	
60	L-39・40	(156×(110))	(142×(80))	—	(1.1)	—	17~27	61号土坑と重複
61	L-39	—	—	—	—	—	10~23	60号土坑と重複
62	K-39	(133×131)	(125×123)	1.02	1.2	1.02	8~14	
63	M-36 N-36	(90×88)	(88×84)	1.02	0.6	1.05	39~45	
65	N-35	(112×75)	(55×42)	1.49	0.17	1.31	30~44	
67	N-34	(114×100)	(81×79)	1.14	0.5	1.03	9~24	
70	M-53	(145×90)	(126×71)	1.61	0.7	1.77	13~21	
71	K-22 L-22	(106×100)	(96×92)	1.06	0.7	1.04	36~40	

## (2) 風倒木

No.	グリッド	上面 cm (長径×短径)	底面 cm (長径×短径)	上面 長径/短径	底面積(m <sup>2</sup> )	底面 長径/短径	深さ(cm)	備 考
2	O-52 P-52	(327×274)	(265×141)	1.19	3.5	1.88	36~61	実測図・写真未掲載
9	J-52・53 K-52・53	(435×370)	(310×270)	1.18	8.2	1.15	45~72	"
12	N-50 O-50	(258×220)	(139×122)	1.17	1.4	1.14	54~68	"
14	L-49	(282×205)	(210×115)	1.38	2.2	1.83	28~41	15号土坑と重複
18	K-46 L-45・46	(277×208)	(232×175)	1.33	1.2	1.33	12~45	実測図・写真未掲載
20	K-44・45 L-44・45	(510×369)	(367×282)	1.38	8.2	1.30	11~30	

## 十二原II遺跡

No.	グリッド	上面 cm (長径×短径)	底面 cm (長径×短径)	上面 長径/短径	底面積(m <sup>2</sup> )	底面 長径/短径	深さ(cm)	備 考
31	L-47 M-47・48	(350×330)	(289×283)	1.06	7.3	1.02	20~70	
32	L-46・47	(615×365)	(562×200)	1.68	9.7	2.81	42~68	
33	L-46 M-46・47	(330×300)	(300×251)	1.1	6.3	1.19	40~60	34号土坑と重複
35	N-46・47 O-46	(400×391)	(332×261)	1.02	8.7	1.27	36~68	実測図・写真未掲載
36	O-45・46 P-45	(532×428)	(393×390)	1.24	13.4	1.01	52~91	37号土坑と重複
39	N-44 O-44	(350×330)	(261×220)	1.06	3.6	1.19	37~62	実測図・写真未掲載
40	M-44・45 N-44・45	(191×181)	(161×139)	1.06	1.8	1.16	32~43	"
42	M-42・43 N-44・45	(414×372)	(336×320)	1.1	—	1.05	—	"
44	M-41・42	(380×129)	(228×120)	2.94	—	1.9	—	"
46	M-40 N-40	(283×280)	(230×220)	1.0	—	1.04	—	"
51	N-45 O-45	(130×94)	(120×81)	1.38	0.9	1.48	2~14	"
55	P-44	(157×123)	(135×104)	1.28	1.1	1.75	10~20	"
64	N-35	(69×65)	(58×45)	1.06	0.2	1.29	15~24	"

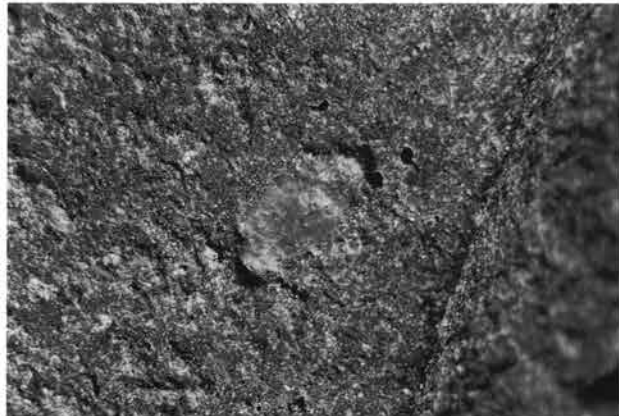


## 4章 自然科学的分析

- 〔1〕 石材の同定にあたって
- 〔2〕 黒曜石分析
- 〔3〕 縄文土器の胎土分析
- 〔4〕 縄文土器のX線写真撮影

## 5章 成果と問題点

- 〔1〕 有舌尖頭器について
- 〔2〕 縄文時代の石器について
- 〔3〕 弥生時代の遺構と遺物について
- 〔4〕 三後沢遺跡の集落変遷
- 〔5〕 十二原II遺跡検出の陥し穴群について
- 〔6〕 十二原II遺跡の集落変遷



黒色頁岩（フレイク）中に包含の  
有孔虫微化石（*Cyclammina* sp.）

## 〔1〕 石材の同定にあたって

飯島 静男

三後沢遺跡ならびに十二原II遺跡より出土した石器および石片等について、岩石の種類を同定を依頼された。同定は一般的な記載岩石学的な分類に従って行ない、もっぱら肉眼によった。観察した試料のうち、特徴的な岩質の2、3の種類には、とくに意味をもたせて名前をつけた。この種のものには説明が必要である。

今回、石器類につけた岩石名は37～38種類ある。しかし、これは安山岩や凝灰岩などを、岩質等によって細分したために多くなったので、ふつうに用いられる岩石名でくくると、20種以下となろう。原産地の推定を試みるという趣旨からすれば、一般的な岩石名をつけて、それだけですましているわけにもゆかないので、できる限り細かく分けた結果である。しかし、あまり細かく分けすぎても、かえってわずらわしくなった面もある。凝灰岩の細分はゆきすぎであった。それにしても、どのように細かく分けたかは明らかにしておかねばなるまい。

上述の点を踏まえ、以下、同定した岩石について若干の説明をする。

### (1) 安山岩類

安山岩類は多産するので、外観によって細分した。

輝石安山岩：安山岩としてはもっともポピュラーで、粗粒または細粒、肉眼的にみて輝石斑晶を有するもの。角閃石安山岩に相当する。

無斑晶安山岩：ほとんど斑晶を含まないもの。

玄武岩質安山岩：上記両安山岩のうち、暗色緻密、かつガラス質でないもの。

黒色安山岩：輝石安山岩の一種であるが、黒色でガラス質の基質を有する。他の遺跡にもよくみられ、斑晶の大きさ、量、および表面の風化のしかたなど、性質が一定しているので、略称を用いた。黒色ガラス質輝石安山岩とも呼べば、より一般的ではある。

安山岩：風化などのためよくわからないが、安山岩であろうとしたものである。

### (2) 凝灰岩類

凝灰岩類は8種に細分した。

緑色凝灰岩：緑色の強いもの。いわゆるグリーンタフ地域の示標岩石である。

軽石質緑色凝灰岩：上記のうち、軽石のパッチが目立つもの。

流紋岩質凝灰岩：白色～淡黄色系。斑晶として石英もしくは少量の長石を含む。

石英安山岩質凝灰岩：上記に加え、角閃石または黒雲母斑晶を含むもの。

酸性凝灰岩：白色で、しっくい固めたような外観がある。このような岩石はあまり見たことがないが、岩質的には凝灰岩に近いのでこうした。

珪質凝灰岩：岩質的には上記すべての凝灰岩のいずれにあたるものもあるが、おそらく珪化作用のために、緻密で、かたくなったものがある。

これは珪質頁岩や、場合によってはチャートに似るものもあるが石英斑晶等を有するというので、珪質凝灰岩として区別した。

溶結凝灰岩：溶結凝灰岩は産地ごとに特徴的な外観があり、ことに片品川上流地方に産するものは一見してそれとわかるが、今回調べた中では少かったので、分けなかった。

大峰溶結凝灰岩：石英・黒雲母等を含み、あづき色がかかった灰色を呈する。沼田盆地周辺の山地、すなわち大峰山、三峰山、切ヶ久保峠周辺および雨乞山などに分布する。代表的山名を用い、仮称。

以上のほか、石器別グラフには「流紋岩～石英安山岩同凝灰岩」というのがあるが、何かのミスであろう。

#### (3) 砂岩、泥岩、頁岩など

凝灰質砂岩：岩石学的にはおそらく凝灰岩とすべきであろうが、肉眼的には砂岩にみえる。このような砂岩は上越地方の新第三紀層中によくある。

凝灰質泥岩：上に同じ。

頁岩：いわゆる古生層にも中生層にも産するが、下記の黒色頁岩のうち、古期岩層中に産するものと区別できないものもある。細粒黒色である。

黒色頁岩：黒色頁岩には微化石を含むことが多く、化石から新第三紀層の頁岩であることが明らかである。黒色安山岩と同様、県内各遺跡より出土し、石器として多用されたことがうかがわれる。黒色頁岩の名前のもととなった赤谷黒色頁岩層はおもに黒色の泥岩からなり、比較的軟かいのであるが、三国峠から谷川連峰にかけての地域では、珪化作用によって、固い岩石に変化している。

・ 363ページの写真参照。

珪質頁岩：上記の珪化が進むと、灰色がかかった緻密な岩石に変化するが、これを珪質頁岩と呼んでいる。しかし今回みた石器の中には黒色頁岩の仲間の珪質頁岩とはやや異なる種類のものもあった。

#### (4) 脈岩類

流紋岩：利根川上流地方の各所に貫入岩として小規模に分布する。かたい岩石であるので、下流の川床礫として、ふつうにみられる。

輝緑岩：上に同じ。

石英斑岩：上に同じ。

石英安山岩：上に同じ。

#### (5) 深成岩類

石英閃緑岩：今回調べた石英閃緑岩は、ほとんど谷川連峰主部を構成する、にぶい灰色～灰緑色の細粒～中粒のタイプのものであった。利根川に多い。

ひん岩：玢岩と書く。上記石英閃緑岩の周縁部等に伴われ、その異相をなす。

花崗岩：利根川などにふつうにみられる種類で、奥利根花崗岩や沢入花崗岩など、よく知られているものではない。

閃緑岩：上に同じ。

#### (6) 変質岩類

天然に産する岩石にはしばしば、ふつうの分類法の系列上にならばない石がある。ここでは変質岩類として一括した。

珪化変質岩：火山の噴火口周辺にみられるような白色～淡黄色の多孔質岩。

鉄質珪質岩：上に似ているが、赤褐色をおびているもの。

酸化鉄質岩片：より鉄分に富むか、あるいは鉄のさびたもの（岩石でない？）

赤色珪質岩：珪質緻密、赤～赤黄色の岩石。赤色チャートに似るが、より鮮か。

#### (7) その他の岩石

チャート、黒曜石、石英などについては、あらためて説明はいらないであろう。

珪化木：骨片や角（つの）の破片としては、ややかたいので、珪化木であろうとしたものである。

珪藻土：ベージュ色で、チョークのような質感が珪藻土によく似ているが、珪藻が含まれるか否かは、そのほうの専門家の判定をまちたい。

以上、簡単に説明した。各岩石のひとつひとつについては記載的性質の記述は省略した。太字で示した岩石名が、とくに意味をもたせてつけたものである。

黒色頁岩と黒色安山岩については中東・飯島（1984）<sup>\*</sup>の小文を参照されたい。

他の岩石では黒曜石と珪質頁岩の一部、それに酸性凝灰岩と珪藻土、の4種を除いては、いずれも県内各所あるいは利根川上流地方にごくふつうに産する。

石器の形状が河川の礫をそのまま用いているようなものはもちろん、それ以外でも、それほど遠くから持ち運んだものとは考えられない。上記4種のうち後2者は稀である。黒曜石は和田峠かあるいは他の群馬県外の産地のものであろう。

\* 中東耕志・飯島静男「群馬県における旧石器・縄文時代の石器石材」『群馬県立歴史博物館年報』第5号 pp.28-36 1984

## 〔2〕 黒曜石分析

分析者：鈴木正男（立教大学） 福岡 久（日本大学）

金山喜昭（野田市郷土博物館） 戸村健児（立教大学）

分析方法：熱中性子放射化分析

分析結果（原産地推定）

試料No.	1	三後沢遺跡	J-4号住居跡	S-205（信州・和田峠産）
	2	〃	〃	覆土（信州・星ヶ塔産）
	3	〃	〃	〃（信州・星ヶ塔産）
	4	〃	〃	〃（信州・和田峠産）
	5	〃	〃	〃（神津島・砂糠崎産）
	6	〃	〃	〃（信州・星ヶ塔産）
	7	〃	〃	S-205（信州・星ヶ塔産）
	8	〃	J-5号住居跡	S-56（神津島・砂糠崎産）
	9	〃	〃	覆土（信州・星ヶ塔産）
	10	〃	〃	〃（神津島・砂糠崎産）

### 〔3〕 縄文土器の胎土分析

花岡 紘一（群馬県工業試験場）  
菊池 実

#### 1 分析目的と試料の選択

群馬県内における土器の胎土分析は、従来須恵器を中心に数多くの分析が試みられ、報告されてきている。その結果、県内10箇所が存在する窯跡群のうち、秋間、金山、中之条、月夜野、吉井、乗附古窯跡群について一傾向を知るとともに、須恵器製作地の同定も可能となってきた。

一方、縄文時代の遺跡調査の進展に伴い、縄文土器の粘土採取地域、時期差における胎土傾向、搬入土器の問題等、土器胎土の化学分析の必要性がたかまってきた。しかしながら県内における縄文土器の胎土分析は、過去ほとんど実施されていないために、まず第1に試料蓄積を行わなければならない、さらに分析方法の試行によって、より有効な方法を検討して行かなければならない状況にあった。このため今回は、三後沢遺跡に限定して、縄文時代前期中葉の土器片28点及び周辺採取粘土1点を加えた計29点を分析依頼することにした。

三後沢遺跡出土土器28点の内訳は、良好な一括資料を出土したJ-4号住居跡から11点、同じくJ-5号住居跡から17点であり、いずれも土器選定にあたっては、一括出土の土器、完形もしくはそれに近い土器を主体とし、さらに施文具の相違（櫛歯状工具・半截竹管・縄文）により土器を抽出している。

なお、J-4号住居跡とJ-5号住居跡は前期中葉に同時期集落を構成する住居であるが、その存続期間は異なっている。それはJ-5号住居跡が廃屋となった後も、J-4号住居跡は存続しており、おのずと出土する土器にも時間差が生じているものと考えられる。この差異が素地土製作方法や土器製作技術の上に反映されるものか。言い換れば、粘土や混和材の差異が土器に認められるものなのか、興味ある問題として浮かび上がってくる。

#### 2 分析方法及び測定条件

蛍光X線分析 分析用試料は各試料を10 $\mu$ m以下に粉碎し、5~10gを径4cmの円板に成型して使用した。測定条件は次のとおりである。

蛍光X線分析装置；理学電機(株)製 KG-4型

X線管球；銀対陰極 50kV, 20mA

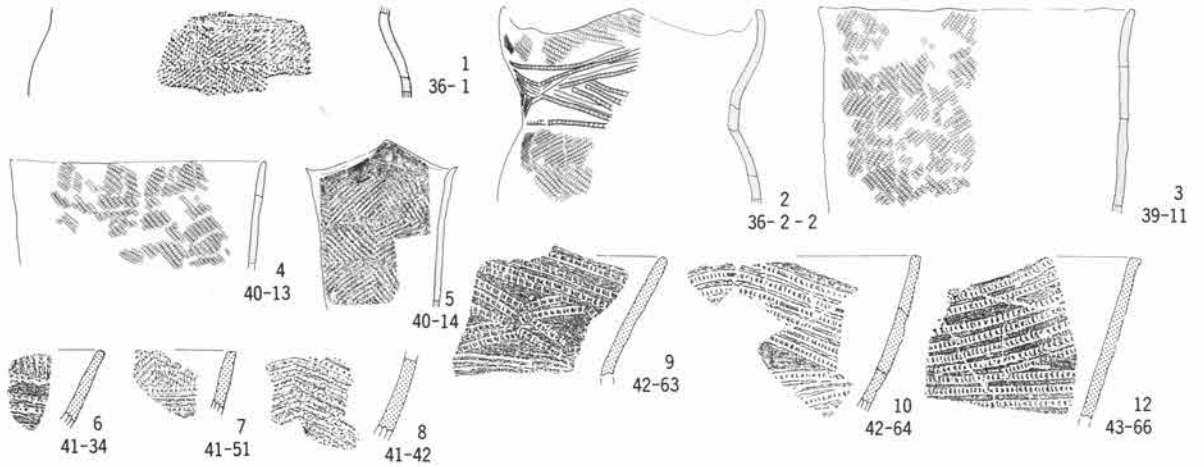
分光結晶；Fe, Sr, RbにはLiF (2d=4.028 Å)

Ca, K, Ti, Si, AlにはEDDT (2d=8.808 Å)

MgにはADP (2d=10.648 Å)

検出器；LiFを使用したとき、S.C EDDT、ADPを使用したときP.C

\* 県内における縄文土器の胎土分析は利根郡昭和村の中棚遺跡で初めて試みられている。黒岩文夫・富澤敏弘編「中棚・長井坂城跡」1985 群馬県昭和村教育委員会

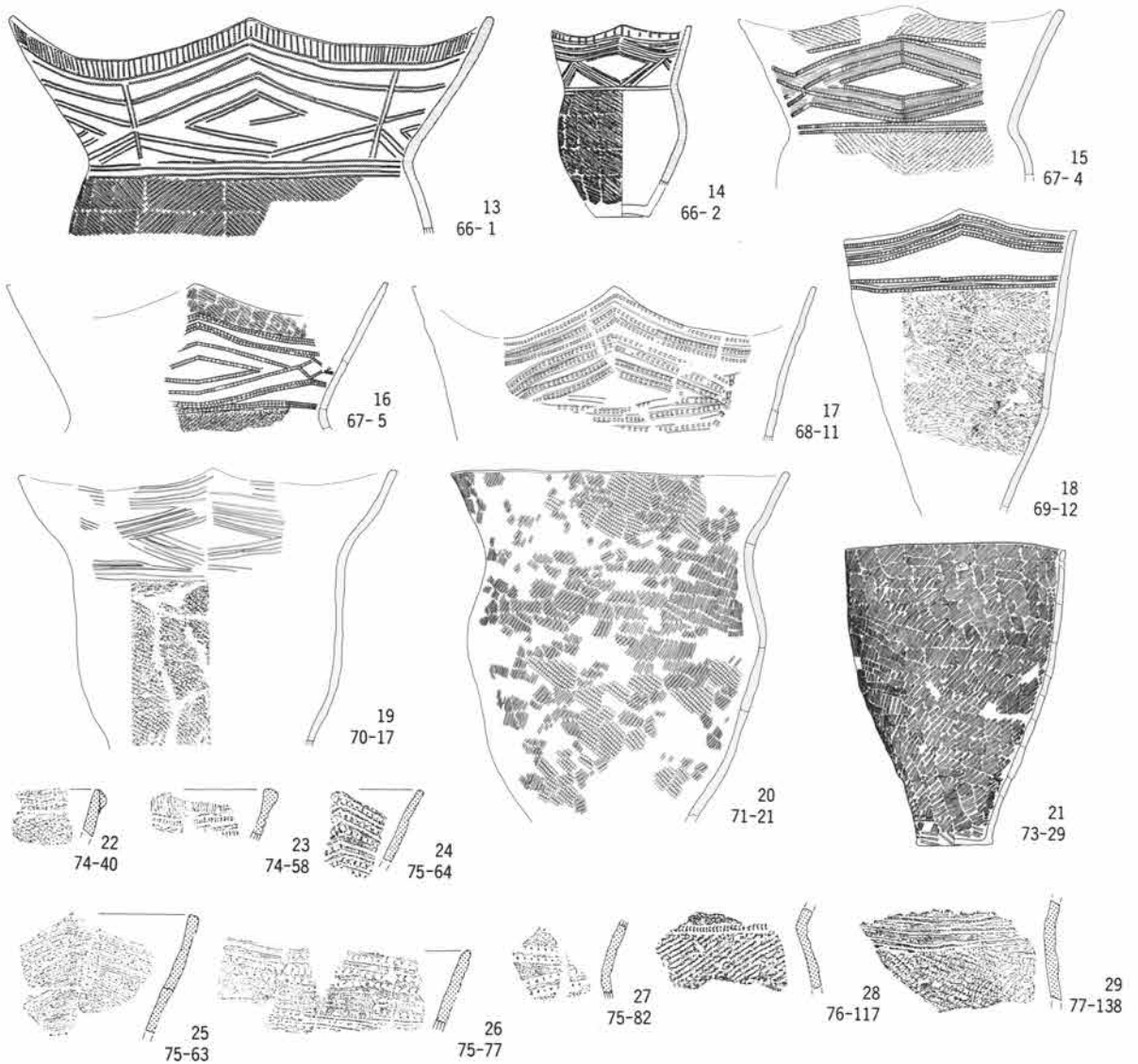


J-4号住居跡

11…粘土

\*\*\*\*\*胎土分析試料\*\*\*\*\*

J-5号住居跡



第237図 三後沢遺跡 J-4・J-5号住居跡胎土分析試料

時定数：1

計数法：Fe, Ca, K, Ti, Sr, Rbは  
チャートにより、Si, Al, Mg  
は定時計数法によった。なお  
チャートは4°/minとした。

波高分析器；積分方式

測定線；FeKβ, CaKα, KKα, TiKα,  
SiKα, AlKα, MgKα, SrKα,  
RbKαの各1次線を使用した。

X線照射面積；20mmφ

標準試料；群馬県埋蔵文化財調査事業  
団から依頼を受けた土器  
(203、205、210、213、215、  
M-1、M-10、M-11、M-  
17、M-25、S-17)を化学  
分析し標準試料とした。

203=吉井町西部団地内窯跡

205=南企比窯跡群

210= " 比砂田沼窯跡群

213=藤岡市金山瓦窯

215=三ッ木遺跡 210住-5

M-1=三後沢遺跡J-4住

M-10=三後沢遺跡J-4住

M-11=十二原II遺跡採取粘土

M-17=三後沢遺跡J-5住

M-25=三後沢遺跡J-5住

S-17=村主遺跡

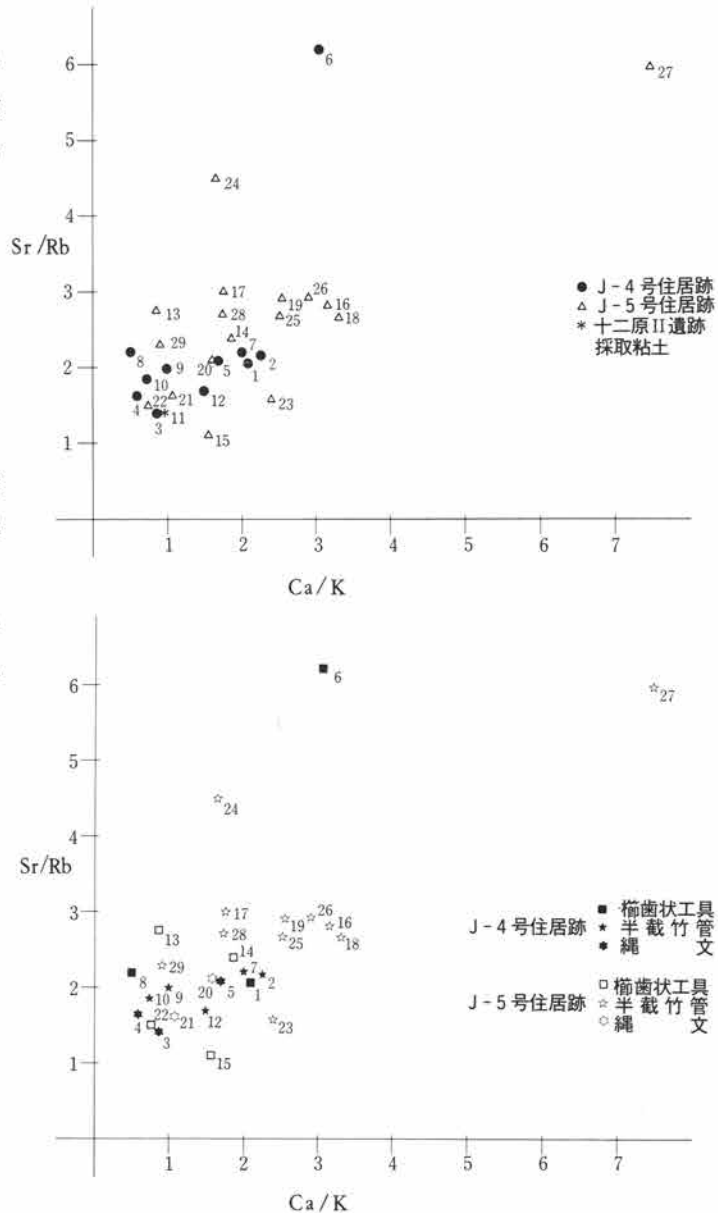
従来の分析対象が須恵器を中心として

いたために203、205、210、213、215の5試料が標準試料となっていた。今回の  
縄文土器分析にあたり、新たに5点の三後沢遺跡縄文土器片がこれに加わった。

### 3 分析試料

分析試料29点を第237図に示した。No.1~10・12の11点は三後沢J-4号住居  
跡出土土器、No.13~29の17点が三後沢遺跡J-5号住居跡出土土器、そしてNo.11  
が周辺採取粘土である。各No.の下の数字は図版番号と対応している。また、次  
ページの胎土分析試料観察表中の色調については、新版標準土色帖(1976)に  
基づいている。焼成および遺存状況の判定は、便宜的に、非常に良・良・やや  
良・不良に分類した。この分類は上條朝宏氏の分類基準にしたがっている。

\* 上條朝宏「胎土分析I」『縄  
文文化の研究 第5巻 縄文土  
器 III』1983



第238図 三後沢遺跡J-4・J-5号住居跡試料

胎土分析試料観察表

試料 No	遺跡名	住居跡	施 文 具	色 調		焼成及び 遺存状況	表 面 観 察
				外 面	内 面		
1	三後沢	J-4号住	櫛歯状工具	褐色	黒褐色	良	微粒子状の白色鈣物粒と繊維を含む
2	"	"	半載竹管	黒褐色	赤褐色	良	"
3	"	"	縄 文	褐色	にぶい褐色	やや良	1~5mm大の白色鈣物と繊維を含む
4	"	"	"	褐色	褐灰色	不良	1~4mm大の褐色鈣物と繊維を含む
5	"	"	"	褐灰色	黒褐色	良	白色・褐色鈣物粒と繊維を含む
6	"	"	櫛歯状工具・半載竹管	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	やや良	白色鈣物粒と繊維を含む
7	"	"	半載竹管	極暗赤褐色	にぶい赤褐色	良	"
8	"	"	櫛歯状工具・半載竹管	赤色	赤色	非常に良	"
9	"	"	半載竹管	暗褐色	にぶい黄橙色	やや良	細かい石英粒と繊維を含む
10	"	"	"	にぶい褐色	褐灰色	非常に良	白色鈣物粒と繊維を含む
11	十二原II	周辺採取粘土					
12	三後沢	J-4号住	半載竹管	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	半透明な鈣物粒と繊維を含む
13	"	J-5号住	櫛歯状工具	にぶい褐色	にぶい橙色	やや良	褐色鈣物粒と繊維を含む
14	"	"	櫛歯状工具・半載竹管	褐色	褐灰色	やや良	白色・褐色鈣物粒と繊維を含む
15	"	"	半載竹管	暗赤褐色	赤褐色	非常に良	白色鈣物粒と繊維を含む
16	"	"	"	灰黄褐色	にぶい黄橙色	良	白色鈣物粒・石英粒と繊維を含む
17	"	"	"	灰褐色	にぶい橙色	良	白色・褐色鈣物粒と繊維を含む
18	"	"	"	暗褐色	にぶい黄橙色	やや良	白色鈣物粒と繊維を含む
19	"	"	"	にぶい橙色	にぶい橙色	やや良	白色・褐色鈣物粒と繊維を含む
20	"	"	縄 文	褐灰色	にぶい橙色	良	白色・褐色鈣物粒と繊維を含む
21	"	"	"	にぶい褐色	褐灰色	やや良	微粒子状の白色鈣物粒と繊維を含む
22	"	"	櫛歯状工具	赤褐色	灰褐色	良	"
23	"	"	半載竹管	褐灰色	にぶい黄橙色	良	石英粒と繊維を含む
24	"	"	"	にぶい黄橙色	にぶい橙色	やや良	"
25	"	"	"	灰褐色	灰褐色	良	"
26	"	"	"	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	やや良	"
27	"	"	"	浅黄橙色	にぶい黄橙色	不良	白色鈣物粒と繊維を含む
28	"	"	"	褐灰色	にぶい橙色	やや良	石英粒と繊維を含む
29	"	"	"	にぶい黄橙色	にぶい橙色	やや良	1~4mm大の褐色鈣物粒と繊維を含む

#### 4 分析結果とまとめ

分析値は371ページの表および第238図に示した。No.11を除いた28点の試料を、

●印=J-4号住居跡、△印=J-5号住居跡と記号化し、さらに櫛歯状工具によって施文されている土器を■印で、半載竹管によって施文されている土器を★印、縄文施文のみの土器を★印で、それぞれ区別してグラフを作成した。

Ca/K・Sr/Rb値の高いNo.27とSr/Rb値の高いNo.6・24の3点を除いた26点の試料は、2つの領域設定が可能と思われる。1つはCa/K値0.83~3.28、Sr/Rb値2.11~3.00の領域。ここに集中する試料は、No.13・14・16~20・25・26・28・29の計11点、いずれもJ-5号住居跡出土土器である。もう1つはCa/K値0.53~2.25、Sr/Rb値1.41~2.22の領域。ここに集中する試料は、No.1~5・7~12・21・22の計13点、No.21・22がJ-5号住居跡出土土器、No.11が周辺採取粘土であり、残り10点はすべてJ-4号住居跡出土土器であった。以上のことから2つの領域は住居跡毎に対応できるものと考えられる。すなわち、Sr/Rb値2.22を境に上下に分離でき、上位にJ-5号住居跡出土土器が集中し、下位にはJ-4

\* ■★★印=J-4号住居跡  
 □☆☆印=J-5号住居跡



号住居跡出土土器が集中する。この差異は半截竹管によって施文された土器を中心に見ると、より明瞭となってくる。またNo11の粘土はNo.3と接近し、J-4号住居跡の領域に収まる。

すでに明らかなように、三後沢遺跡J-4号住居跡、J-5号住居跡はJ-6号住居跡とともに縄文時代前期中葉のある時期に同時期集落を構成していた。そしてJ-6・J-5号住居跡が廃屋となった後も、J-4号住居跡には縄文人が生活の拠点として住み続けている。この住居の存続期間の差異と分析結果の差異がみごとに一致している。さらに胎土の表面観察による特色では、J-4号住居跡の土器は、微粒子状の白色鉱物粒を多量に含み全体的に砂っぽい。一方、J-5号住居跡の土器は白色鉱物粒は少なく、細かな石英粒子を多く含んでいる。以上のことから総合的に判断すると、J-4号住居跡、J-5号住居跡の土器のあいだには、粘土採取地域の差異、あるいは混和材の差違等の問題が内在し、素地土製作方法や土器製作技術が、J-4・J-5号住居跡の存続期間の差異のなかで行われてきたものであることが理解できる。

成分 試料	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Fl <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	TiO <sub>2</sub>	CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	Ca/K	Sr/Rb
	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)		
1	50.3	19.7	10.75	1.64	1.31	0.58	0.84	2.03	2.08
2	50.3	21.0	12.50	1.42	1.06	0.38	0.62	2.25	2.17
3	60.8	15.3	7.30	0.85	1.39	0.71	2.08	0.88	1.41
4	57.9	18.5	7.73	1.08	0.98	0.56	2.22	0.59	1.67
5	59.5	17.8	6.45	0.93	1.08	1.15	0.85	1.67	2.10
6	52.3	21.0	11.90	1.35	1.33	0.57	0.58	3.03	6.22
7	51.9	21.1	9.75	1.43	1.13	1.02	0.76	1.98	2.22
8	53.2	20.5	11.10	1.39	0.56	0.37	1.41	0.53	2.22
9	61.8	18.6	6.95	1.14	0.79	0.13	1.03	1.02	1.98
10	59.2	18.3	7.81	0.96	0.68	0.47	1.21	0.75	1.85
11	67.8	15.1	6.51	0.84	1.05	0.93	1.27	0.90	1.43
12	55.8	21.1	7.00	1.46	1.86	1.76	1.37	1.49	1.68
13	59.8	17.8	7.40	1.12	0.71	0.72	1.13	0.83	2.76
14	56.6	19.5	8.41	1.09	0.81	0.39	0.56	1.86	2.38
15	50.6	19.1	14.70	1.49	0.68	0.32	0.57	1.56	1.13
16	51.4	21.4	12.10	1.59	1.01	0.43	0.54	3.17	2.84
17	55.2	20.0	10.10	1.15	1.04	0.53	0.78	1.75	3.00
18	55.5	19.5	9.46	1.09	1.12	0.60	0.44	3.28	2.67
19	54.7	19.3	9.64	1.73	1.06	0.45	0.54	2.54	2.92
20	59.0	17.0	8.95	1.31	1.07	1.01	0.92	1.57	2.11
21	56.6	22.2	4.40	0.94	0.63	0.72	0.80	1.06	1.62
22	57.8	20.1	7.20	1.34	0.87	0.73	1.34	0.77	1.50
23	58.3	18.2	6.55	1.13	1.88	0.85	1.50	2.39	1.59
24	55.6	19.7	9.30	1.12	0.82	0.45	0.66	1.65	4.50
25	58.7	17.3	9.40	1.40	1.09	0.43	0.57	2.52	2.67
26	57.6	18.8	9.80	1.25	1.04	1.05	0.47	2.88	2.92
27	53.4	23.8	9.70	1.34	1.19	0.72	0.15	7.46	5.93
28	52.6	17.2	10.00	1.26	1.34	0.41	1.04	1.72	2.70
29	58.0	18.4	8.73	0.83	0.38	0.37	0.54	0.90	2.30

## 〔4〕 縄文土器のX線写真撮影

北爪 健二  
菊池 実

### 1 はじめに

縄文土器の胎土に繊維を多量に含む手法は、早期後半の子母口式土器から前期中葉の黒浜式土器にかけて普遍的に認められる。この胎土に含まれる繊維状物質の種類研究は、草野俊助によって「草木の皮部から製出したものでなく、個々の維管束であることから推して、禾木科か莎草科（スゲ類）の葉茎の脉理であると思う<sup>\*</sup>」と推定されている。その後、杉山壽栄男や山内清男の研究があるが、土器の肉眼観察とは別に、X線照射による繊維混入方法の検討が試みられたのは最近のことである。例えば、北海道の前期土器で胎土に繊維及び撚糸繊維を多量に含有する中野式土器について竹田輝雄は、「X線透写によって、ネット状に撚糸が観察されたが、これは明らかに型塗成形である<sup>\*\*</sup>」と分析している。また東京都町田市藤の台遺跡出土の条痕文系土器7点を、川松康人は繊維混入方法及び、繊維の長さ<sup>\*\*\*</sup>と太さを観察の主眼点として、X線写真結果を報告している。これによると繊維混入方法については、繊維を1本単位にして使う、数本の繊維を束ねて繊維束とする、繊維をまとめて繊維塊とする、以上の三つの手法を用いて、土器製作時に混入しており、必ず二つ以上の方法が同時に使用されているとしている。また繊維の長さ<sup>\*\*\*</sup>と太さについては、多くは数mmから数cm単位で切られており、髪の毛のような細い繊維を用いているのが特徴であるとしている。さらに、神奈川県あざみ野遺跡で小西雅徳は、繊維混入テクニックについて早期後半の茅山下層式土器、前期中葉の黒浜式土器、前期中葉～後葉にかけての土器片計6点を時期別にサンプリングして分析している<sup>\*\*\*\*</sup>。そして繊維の走向には横位のものが顕著に見られるが、これは素地土に封入されていたものと見るべきである。しかし、なかには渦巻状のもの、集中するものが見られ、胎土中の鉱物が均等に分布していることから考えると、これは「素地段階で繊維を混入したのではなく、粘土紐作成段階で随時混入したのではないか」と考えている。

以上、先学の分析例を参考にしながら、今回、三後沢遺跡出土の前期前葉～中葉にかけての土器片を可能なかぎりX線写真撮影を実施し、繊維混入方法等の問題について検討してみた。

### 2 撮影条件及び撮影方法

軟X線発生装置 ソフテックス1005特型（ソフテックス KK製）を使用して実施した。

撮影条件；電圧40Kvp、電流2mA、距離60cm、照射時間1分、使用フィルム

\* 草野俊助「一王子式土器破片に残存する植物繊維」『史前学雑誌』第2巻6号 1930

\*\* 竹田輝雄「中野式土器一胎土に含む撚糸繊維のX線透写の試みから一」『北海道考古学』第12輯 1976

\*\*\* 川松康人「条痕文系土器のX線写真観察について」『藤の台遺跡II』 1980

\*\*\*\* あざみ野遺跡における繊維土器の光学的観察については、小西雅徳氏より数多くの御教示を得ました。記して感謝いたします。

富士フィルム社 ソフテックス用フィルム HS及びFGを使用

結果：土器胎土中に含まれる繊維混入状態は、先に述べた撮影条件下で実施した結果、明瞭な把握には至らず混入された繊維組織の単位なども確実な形状としてとらえることはむずかしかった。

また、X線ステレオ撮影<sup>\*</sup>（ソフテックスKK製、ステレオ撮影装置）による繊維混入の立体視を試みた。平面的なフィルム観察と比較して、やや不明瞭ながらもその形状が確認されている。

更に明確な繊維混入状態把握のため、増影剤の使用を試みた（増影剤—蟻酸タリウムについては、ソフテックスKK研究開発部の本間氏の紹介による）。結果、縄文土器特有な多孔質構造のために、繊維痕のみならず土器の亀裂部分やその他の空隙部分に浸透してしまうため、撮影後の観察では、この繊維痕と空隙部との明瞭な織別が困難であった。

今後、立体ステレオ撮影や増影剤の技術的な応用や実用性について、今後の課題としたい。

### 3 撮影試料の検討

X線写真撮影は、三後沢遺跡J-4号住居跡、J-5号住居跡、J-6号住居跡、J-7号住居跡の出土土器を中心に行った。J-7号住居跡は前期前葉の関山II式土器を出土し、他の住居跡は前期中葉の有尾系土器を出土しているが、J-5・J-6号住居跡はJ-4号住居跡よりも先行している。

J-5号住居跡の試料はPL.54に、J 5-175(第79図 P.131)、J 5-194(第80図 P.132)、J 5-230(第81図 P.133)、J 5-235(第81図 P.133)の計4点を掲載した。いずれも横位方向に繊維の走向が顕著に認められ、土器成形技法が輪積み方法によるものであることがわかる。しかし横位方向にも、J-5-175のように上方には右上がりの繊維の走向、下方では右下がりの繊維の走向が認められる。これは粘土接合部の境界を示しているものであろう。J 5-194は右上方に繊維の集中箇所が見られる。J 5-230は横位方向の繊維の走向が鮮明に認められ、さらに繊維の集中部分がほぼ均等に分布していることがわかる。これも繊維を心とする粘土接合部の境界を示すとともに、素地作成段階での混入ではなく、粘土紐作成段階で繊維を混入していったものかもしれない。J 5-235も土器なかほどに繊維走向に変化が認められることから、粘土接合部を示しているものであろう。

J-6号住居跡の試料はPL.57に、J 6-40(第90図 P.162)、J 6-44(第95図 P.162)、J 6-80(第96図 P.163)、J 6-108(第97図 P.164)の計4点を掲載した。いずれも横位方向に繊維の走向が顕著に認められるが、J 6-40は写真の鮮明度が落ちている。J 6-44とJ 6-80は、小破片の土器ではあるが、多量の繊維が混入されている。J 6-108は繊維の長さを把握することができ、約5cm程の繊維が横方向に認められる。

\* 呉屋充庸・三浦定俊・金子忠夫・石川陸郎「X線解析写真測量の文化財への応用」『保存科学』22号 1983

\* 呉屋充庸「古彫刻調査のためのX線解析写真測量法」『古文化財の自然科学的研究』1984

\* X-RAY TECHNIQUES IN ART GALLERIES AND MUSEUMS, ADAM HILGER LTD, Daniel GRAHAM, Thomas EDDIE, 1985

今回、底部のX線写真は掲載していないが、底部における繊維の方向は一定せず、乱雑に混入されている。また波状口縁を呈する甕形土器（J 5-11、第68図 P.110）の波頂部分は、土器本体と繊維混入量や繊維走向が極端に相違していることから、この部分だけ新たにつけくわえられていることがわかる。

#### 4 おわりに

今回実施したX線写真撮影の結果、全体に写真の鮮明度が落ち判読に不十分さを残しながらも、前期中葉の土器（J-4・J-5・J-6住）は、口縁部文様帯をもつ土器群、縄文施文のみの土器群にも横走る多量の繊維が含まれており、どちらかというと後者の土器に繊維混入量が多いように思われた。繊維混入方法は素地土作成段階と粘土紐作成段階での混入が認められた。前期前葉（J-7住）の土器との比較検討は、残念ながら写真の鮮明度が悪いために今後の検討課題としておきたい。

次に、混入されている鉱物においてJ-4号住居跡とJ-5・J-6号住居跡の間に大きな差異が認められた。J-5・J-6号住居跡の土器には、径1～5mm大の鉱物が多量に含まれるもの、微粒子状の鉱物が含まれるもの、両者の鉱物がほとんど認められないものの3つの鉱物含有傾向が認められた。ところがJ-4号住居跡の土器にあっては、微粒子状の鉱物を含む胎土に統一されていた。この違いは、胎土分析の結果とも合地するものである。J-5・J-6号住居跡とJ-4号住居跡の土器の間には、粘土採取地域もしくは混和材の相違等の素地土製作・土器製作上の差異が内在している。

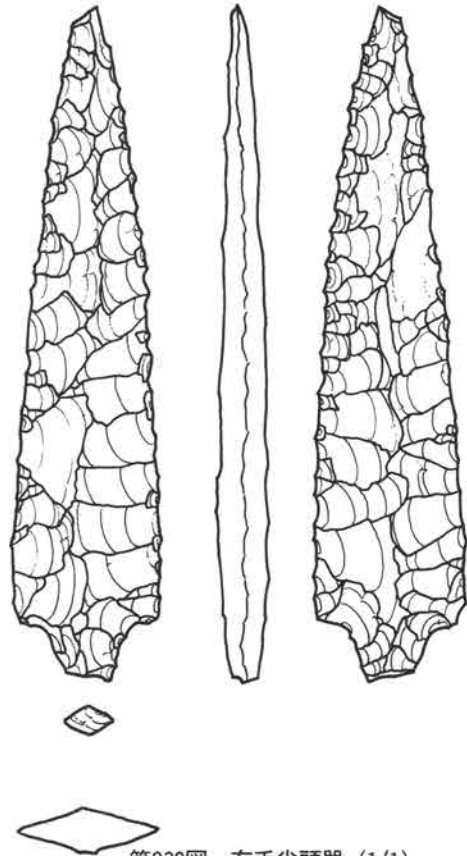
# 〔1〕 有舌尖頭器について

麻生敏隆

三後沢遺跡のO-96グリッド第4層（ローム漸移層）から出土した。柳葉形の細身で、表裏に並列剥離を施すことにより直線的な鋸歯状側縁を作り出した有舌尖頭器である。特に表裏面の左側縁には側縁に直交する形で並列剥離が施されているのに対して、右側縁からはやや左傾する剥離も認められる。だがこれが加圧具と被加工物との位置関係によるものか、あるいは製作者のくせによるものなのかは不明である。返しはそれほど深くなく舌部に対してほぼ直角をなす。使用による破損なのか、舌部は中程で折れている。先端部とその周辺には調査時の欠損が認められる。残存部の長さは8.91cm、幅1.98cm、厚さ0.66cm、重さ10.9g、先端の角度20°。石材は黒色頁岩。いわゆる「小瀬が沢型」であるが、他に共伴する遺物は認められない。

群馬県における有舌尖頭器の出土地は、筆者が見聞した範囲で、29箇所を数える。遺跡名をあげれば、水上町小仁田遺跡<sup>(1)</sup>、月夜野町高萩遺跡<sup>(2)</sup>、同町小竹A遺跡<sup>(3)</sup>、同町三後沢遺跡<sup>(4)</sup>、同町大友館跡遺跡<sup>(5)</sup>、同町三峰神社裏遺跡<sup>(6)</sup>、同町後田遺跡<sup>(7)</sup>、沼田市山岸遺跡<sup>(8)</sup>、同市石墨遺跡<sup>(9)</sup>、昭和村中棚遺跡<sup>(10)</sup>、赤城村見立溜井遺跡<sup>(11)</sup>、北橋村分郷八崎遺跡<sup>(12)</sup>、大胡町堀越字並木<sup>(13)</sup>、宮城村矢継遺跡<sup>(14)</sup>、同村原南遺跡<sup>(15)</sup>、新里村武井遺跡<sup>(16)</sup>、笠懸村稻荷山遺跡<sup>(17)</sup>、同村阿佐美<sup>(18)</sup>、桐生市蔦ノ巣<sup>(19)</sup>、太田市小町田遺跡<sup>(20)</sup>、大泉町間之原遺跡<sup>(21)</sup>、境町三ツ木遺跡<sup>(22)</sup>、同町神谷遺跡<sup>(23)</sup>、同町上淵名遺跡<sup>(24)</sup>、伊勢崎市伊勢崎・東流通団地内遺跡<sup>(25)</sup>、高崎市八幡中原遺跡<sup>(26)</sup>、箕郷町大字金敷平<sup>(27)</sup>、小野上村八木沢清水遺跡<sup>(28)</sup>である。この他に出土地不明のものが月夜野町、新里村、桐生市、さらに埼玉県秩父郡長瀬町にある長瀬総合博物館には主に大胡町を中心とした赤城山南麓より採集された有舌尖頭器が十数本も展示されている<sup>(31)</sup>。

これらの有舌尖頭器は表採やあるいは後の時代の遺構から出土したものであるために明確な時期判定も出来ないし、他の石器や土器との共伴関係も不明である。また一遺跡での点数も一点のみ、あるいは多くても二、三点の例が多い。しかし図化されたのみに限定して集成した有舌尖頭器の形態をみると、いわゆる「小瀬が沢型」が多いこと、また石墨、中棚、神谷の各遺跡出土の個体は小型で突出した返しをもつことから土器と共伴すると考えられる。だが実際には神谷遺跡で爪形文土器が表採されているだけで、しかも共伴か否かも不明である。逆に県内で隆起線文や爪形文土器が出土している遺跡では尖頭器の出土はみられるものの、有舌尖頭器の出土は残念ながら確認されていない。



第239図 有舌尖頭器 (1/1)

註

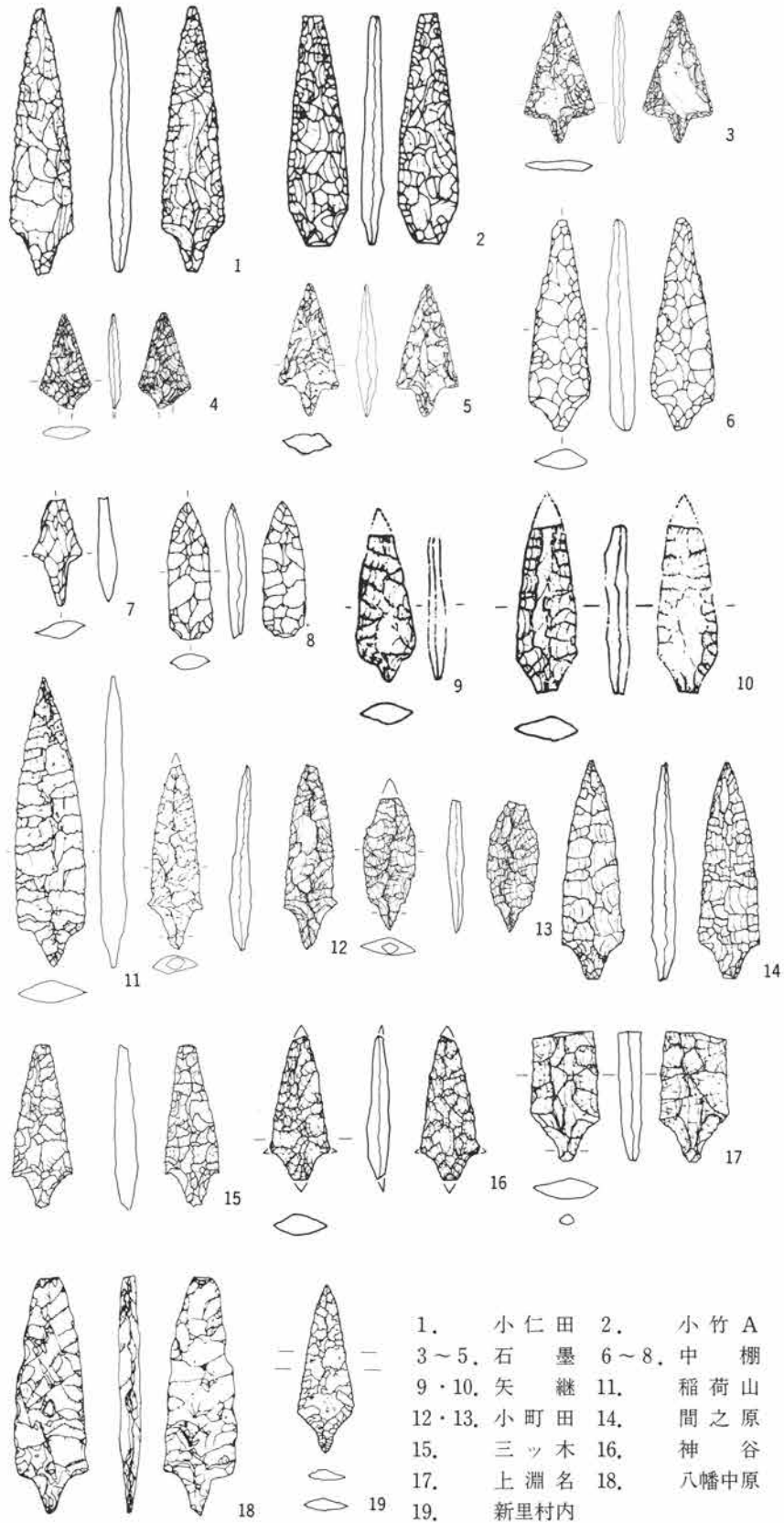
- (1) 水上町遺跡調査会 1985 関越自動車道（新潟線）水上町埋蔵文化財発掘調査報告書 128頁
- (2) 群馬県立歴史博物館 1981 常設展示解説 19頁
- (3) 月夜野町遺跡調査会 1985 関越自動車道（新潟線）埋蔵文化財発掘調査報告書 326頁
- (4) 月夜野町教育委員会の三宅敦気氏の御教示による
- (5) 前記（4）に同じ
- (6) 前記（4）に同じ
- (7) 筆者が現在整理中
- (8) 前記（2）に同じ
- (9) 沼田市教育委員会 1985 石墨遺跡 346頁
- (10) 昭和村教育委員会 1985 中棚遺跡
- (11) 赤城村教育委員会 1985 見立（溜井・大久保）遺跡展パンフレット
- (12) 北橋村教育委員会による1983年10月開催の分郷八崎遺跡の現地説明会で実見
- (13) 藤岡市教育委員会 1978 F1 竹沼遺跡 昭和52年度発掘調査概報 133頁

- (14) 前記 (13) に同じ  
 (15) 前記 (13) に同じ  
 (16) 前記 (13) に同じ  
 (17) 笠懸村教育委員会 1980  
 笠懸村稲荷山遺跡 136頁 (笠  
 懸村誌編纂委員会 1983 笠懸  
 村誌 別巻 202頁再録)  
 (18) 群馬県立歴史博物館  
 1981 野尻湖発掘展 62頁  
 (19) 芹沢長介 1966 新潟県  
 中林遺跡における有舌尖頭器の  
 研究 東北大学日本文化研究所  
 研究報告 第2集 55頁  
 (20) 群馬県埋蔵文化財調査事  
 業団 1984 小町田遺跡 21頁  
 (21) 大泉町教育委員会 1984  
 御正作遺跡 20頁  
 (22) 群馬県埋蔵文化財調査事  
 業団 1984 三ッ木遺跡 353  
 頁  
 (23) 中東耕志 1985 土器出  
 現期における局部磨製石斧の一  
 様相 一群馬県境町神谷遺跡の  
 石斧一 群馬県立歴史博物館紀  
 要 第6号 29頁  
 (24) 坂爪久純・中東耕志 1983  
 神谷遺跡の爪形紋土器と周辺遺  
 跡 群馬考古通信 8号 11頁  
 (25) 前記 (13) に同じ  
 (26) 高崎市教育委員会 1982  
 八幡中原遺跡 139頁  
 (27) 箕郷町誌編纂委員会  
 1975 箕郷町誌 97頁  
 (28) 前記 (13) に同じ  
 (29) 新里村教育委員会 1984  
 新里村の遺跡 23頁  
 (30) 桐生市史編纂委員会  
 1958 桐生市史 上巻 140頁  
 (31) 前記 (13) に同じ

参考文献

- 加藤稔 1986 関東・東北地方  
 の有舌尖頭器 考古学ジャー  
 ナル 第258号 11~15頁  
 栗島義明 1984 有舌尖頭器の  
 型式変遷とその伝播 駿台史学  
 第62号 50~82頁  
 松沢亜生 1979 旧石器の製作  
 技術 日本考古学を学ぶ (2)  
 有斐閣選書 2~16頁

この文章の作成にあたって  
 は、前原豊氏の御教示を得た。  
 記して感謝したい。



- |        |         |      |         |
|--------|---------|------|---------|
| 1.     | 小仁田     | 2.   | 小竹 A    |
| 3~5.   | 石 墨     | 6~8. | 中 棚     |
| 9・10.  | 矢 継     | 11.  | 稲 荷 山   |
| 12・13. | 小 町 田   | 14.  | 間 之 原   |
| 15.    | 三 ッ 木   | 16.  | 神 谷     |
| 17.    | 上 淵 名   | 18.  | 八 幡 中 原 |
| 19.    | 新 里 村 内 |      |         |

第240図 県内出土の有舌尖頭器 (1/2)

## 〔2〕 縄文時代の石器について

三宅 敦 気

### 石器研究の概要

石器とよばれるほとんどのものは、それに携わった当時の人間生活全般に渡って、生産手段としてまた精神的手段としての必需道具であったと位置づけられる。しかし、石器はすべて個々のみで社会的意義をもつものとはなり得ず、他の様々な遺物と密接に関連し合いながら存続していたと思われる。また、その製作・使用・廃棄及び再利用というサイクル内において、人間の行動型を時間的・空間的に復元する最終的の目的に関して、必用不可欠なひとつの手掛となるのである。

そのためには、石器個別の諸属性の細かい観察からはじまって、石器群及び分布状態の分析を通してさらにそれらを総括した考察を行い、社会構成の中で各方面に渡っての参加形態や役割などの意義をはっきりさせなければならない。

石器研究の一過程に、各属性の抽出から要素類型化としての分類という作業があるが、これは研究目的上における一手段にすぎない<sup>\*\*</sup>。石器の分類には数多くの方法・内容があるが、その中でも特に一般的といえるものは、その外形的特徴から分ける器種分類であろう。しかし、この器種分類はその分けられた各々がそのままひとつの用途や機能、ましてや時間や空間を直接的に表現するものはきわめて限られており、大部分の器種にはそのようなことはない。これにさらに時空的・事象的の意味合いをもたせるならば、形態や大きさそして技法などによるいわゆる型式に細分していくわけであるが、石器はその素材的特性や製作技術的制約などがあまりにも強すぎるうえに、石器に与えられた用途・機能があまりにも多すぎるため、かなり曖昧なものになってしまう恐れがある<sup>\*\*\*\*</sup>。このような器種分類を利用して分析・研究を進めていく方法として、その組成や分布状態そして石材との組み合わせなどの数量統計的・図象的なものが挙げられる。

### 器種分類の規準概念

この報告書中で用いた器種をそれぞれ簡単に概説する。

- 石 ① 鏃—おもに弓矢の先端に取り付けた1～4 cmぐらいの小型の尖頭器であり、細分するとかなりバラエティーに豊むが、そのことにより時期性や地域性がおおよそつかえると思われる。
- 石 ② 尖頭器—おもに柄の先端に取り付けた約3 cm以上を有する先端の尖ったものあり、細分に関しては石鏃とほぼ同様かそれよりも強いと思われる。
- 石 ③ 匙—おもに柄や紐に付けた摘部をもち刃部を有するものであり、細分することにより機能差が強うかがえると思われる。また、ミニチュアもある。

\* 石器以外の遺物との相互関連を考慮するという事は、石器は当然のことながら土器に附随するものでこそないが、石器だけではほんの一面しか語れないことを常に念頭に入れておかなければならない。

\*\* その他おもなものに、使用痕の分析や製作技術の分析などがある。

\*\*\* 器種形態は、ほぼ全国共通のものが多く、また存続時期が長く変化の特徴が把握しづらい。

\*\*\*\* この曖昧さは、石器の本来的にもつ矛盾や不明瞭さではなく、あくまでも研究者の主観から生じるものである。

① 射る・突く 狩猟具  
矢尻など

② 突く・刺す・切る 狩猟具  
石槍など

③ 切る・削る・摘む 加工具  
鏃・包丁など 調理具

④ 穿つ・刺す・凹める 加工具  
錐など（石錐）

⑤ 割る・削る・凹める 加工具  
楔など（楔形石器） 調理具

⑥ 掘る・載る・削る・敲く 工具  
斧やスコップなど

⑦ 載る・割る・削る・敲く 工具  
斧など

⑧ なめす・削る 加工具  
皮なめしなど（搔器）

⑨ 削る・切る 加工具  
円形ノミなど（抉入削器）

⑩ 切る・削る 加工具  
鋸など（鋸削器）

⑪ 削る・切る 加工具  
ナイフなど（削器） 調理具

⑫ 割る・敲く・削る 工具  
鉞や斧など

⑬⑭⑮  
R剥片とU剥片と折断剥片の、剥離痕と微細剥離痕と分割がそれぞれ、意図的なものなのか、偶発的・過失的なものなのか、判然としないが、同様なものはその範疇で扱えた。

⑯ 磨る・潰す 調理具  
磨鉢など

⑰ 磨る・敲く・潰す 工具  
作業台など 調理具

⑱ 敲く・潰す・（磨る） 工具  
調理具

⑲ 磨る・潰す・しごく 工具  
磨棒など 調理具

⑳ 敲く・潰す・（磨る） 工具  
槌など

ドリル<sup>④</sup>—柄に付けたり直接手で持って使用した細く尖る部位をもつものであり、細分により使用方法や対象物の差異がわかると思われる。

ビエス・<sup>⑤</sup>エスキュー—大きさ2～8cmで相対する縁辺からの剥離痕が見られるもので、間接的媒体の他に石核であった可能性もある。その細分により、製作方法・使用方法そして対象物の差異などがわかると思われる。

打製石斧<sup>⑥</sup>—おもに柄に付けて使用し、剥離調整によって斧形に製作されたものであり、細分やその数量的差により使用方法や対象物そして時空的な差異がわかるものと思われる。筧状石器は、小型の打製石斧としたい。

磨製石斧<sup>⑦</sup>—打製石斧とは製作技法が違うだけであり、それ程の差異はないものと思われる。ミニチュアがあり、これは祭祀的要素が強いと思われる。

エンドスクレイパー<sup>⑧</sup>—おもに剥片の短辺や角部に、片面急角度調整の刃部を作出したもので、細分により地域性が強くうかがえると思われる。

ノッチドスクレイパー<sup>⑨</sup>—剥片縁辺の一部に、1～数回の調整で凹んだ刃部を作出したもので、細分により被加工物の差異がうかがえると思われる。

鋸歯状スクレイパー<sup>⑩</sup>—剥片の縁辺に調整を加えて、凸凹のある刃部を作出したものであり、細分により時期性や地域性がうかがえると思われる。

スクレイパー<sup>⑪</sup>—剥片の縁辺に調整を加えて、刃部を作出したものであり、ここでは量が多いため両面調整と片面調整に便宜的に分けている。

礫器<sup>⑫</sup>—剥片または礫の縁辺に、特に整形をせず粗い調整による刃部を作出したもので、そのうち特徴的なものは被加工物の差異がうかがえると思われる。

R—フレイク<sup>⑬</sup>—剥片の縁辺の部分に剥離痕のあるもので、刃部を作出したものと完成品とは考え難い。

U—フレイク<sup>⑭</sup>—剥片の縁辺の一部に刃こぼれ状の細かい剥離痕が見られるものであるが、それらが使用痕であるかどうかは確認できない。

折断フレイク<sup>⑮</sup>—技法はともかく剥片を1回以上分割したもので、その部位により細分できる。また前述の製品中にも折断面をもつ石器が観察できる。

石皿<sup>⑯</sup>—大きい自然石の面部が磨り凹んだものをさし、磨石などと組み合わせて使用したと思われる。また縁辺や裏面が多孔石状に凹んだものである。

石台<sup>⑰</sup>—石皿とは凹んでいないところが異なるだけであり、磨痕や敲痕のついた大きなものである。磨石や敲石と組み合わせて使用するとと思われる。

多孔石<sup>⑱</sup>—大きい礫の全面または部分的に、底部丸の逆円錐形を呈した小凹がラングムに見られるものである。

凹石<sup>⑲</sup>—おもに手ごろな礫の面部に、大小の凹みが数ヶ所・両面に見られるものであり、縁辺に敲打痕・面部に磨痕が見られるものもある。

磨石<sup>⑲</sup>—手ごろな礫の全面または部分的に、磨痕や擦痕の見られるものであり、大きいものは丸く、小さいものは細長いものが多い。

敲石<sup>⑳</sup>—おもに手ごろな大きさの礫の縁辺を使用して、被加工物などを直接敲



いた痕が残るものである。中には、研磨されたものもある。

② 砥 石—礫の面部に溝状の磨痕が見られるものであり、被加工物を丸く仕上げ  
るためにこすりつけた部分が凹んだものと思われる。

③ 丸 石—遺跡内から出土する丸い石を総称してさすものであるが、人為的造作  
物かどうかは別として、磨石の一部とも考えられるものもある。

④ ストーンリタチャー—礫の一部分に、引っかき痕のような傷が残っているも  
のであり、この傷をネズミのかじった痕「鼠歯状痕」ともいう。

⑤ 棒 石—特になんら変哲のない細長い礫であるが、遺構内から出土するものは  
特別な意味をもつものであったかもしれない。

コア（石核）・フレイク<sup>\*</sup>（剥片）・チップ（碎片）は省略する。

また、石皿から棒石までの礫硯石器もその細分により、時期性・地域性や使  
用方法そして被加工物の差異などがわかってくるものもあると思われる。

### 三後沢遺跡と十二原II遺跡の石器群の特徴

三後沢遺跡と十二原II遺跡は、縄文時代前期から中期にかけての住居跡群が  
検出された集落遺跡である。この前期という時期は、後・晩期と並んで石器（特  
に剥片類）の多い時期であり、このことが何を意味するかは別として、資料数  
が多いということはそれだけ分析するには有利であるといえよう。

ここでは、遺構ごとにまとめられた石器群を器種分類したが、各器種内での  
細分は都合により不可能となり除外したため、器種別及び石材別に分類した資  
料を提示し、かつ、その特徴を取り上げて列挙するのみに止めたい。

組成検討するにあたり、資料点数の少ない三後沢遺跡のJ-1住とJ-3住、  
及び十二原II遺跡のJ-3住とJ-9住の4軒は除外することにする。

まずおおまかにみると、両遺跡とも主体になる時期の方が石器点数が多く、  
剥片類が住居跡個々の総点数の大半を占めていることや、黒色頁岩がそれぞれ  
の80~90%を占めていることがわかる。これは、遺跡内（居住地内）で剥片剥  
離作業が行われていたということであり、住居埋没過程の凹みにまとめて廃棄  
等されたものと思われる<sup>\*\*\*</sup>。また、黒色頁岩が非常に多いことは、遺跡地のすぐ  
北側を流れる赤谷川で容易に採取できるという利点と、ほとんどの剥片石器が  
黒色頁岩製のもので十分事足りていた結果であろう。

三後沢遺跡の時期的主体である前期前葉~中葉は、石鏃や尖頭器などの狩猟  
具、石匙や削器類などの解体用具、骨などを分割する楔形石器が組成の中心と  
なっている。一方、中期前半主体の十二原II遺跡では、おもに土掘具である打  
製石斧、調理用具としての石匙や削器類そして石皿や台石などが組成の中心と  
なっている<sup>\*\*\*\*</sup>。このことから強引に解釈すれば、三後沢前期集落では狩猟中心の  
生活様式であり、十二原II遺跡中期集落では当然狩猟もあるが植物採集中心の  
生活様式であったという仮説がいえるのではあるまいか。また、三後沢遺跡の  
組成には、磨製石斧や石錐が多く、かつ削器類が多様化しており木工関係が発

② 砥ぐ・磨る 加工具  
砥石など

③ 精神的遺物 狩猟具・工具  
調理具

④ 敲く・ひっかく 加工具  
(加工礫)

⑤ 精神的遺物?

\* フレイクの中には、微細な剥離を有するフレイクも分類便宜  
上含めたが、これは前述のR-  
フレイクやU-フレイクの枠に  
はいらないものである。

\*\* 各遺構ごとの石器群は覆土  
中一括のものが大半を占めてお  
り、あくまでもその遺構に伴出  
するとは断言できないという資  
料情報的制約がある。

\*\*\* 三後沢遺跡の方が十二原  
II遺跡よりも石器総数でかなり  
上まわっているのは、石器の依  
存度によるものではなくて、廃  
棄等の形態差によるものであら  
う。

\*\*\*\* 十二原II遺跡では、遺構  
外に石皿などが出土している。  
また、石鏃などの狩猟具は遺跡  
の外で使用する消耗品であるた  
め遺跡内に少ない点もうなずけ  
る。

\* 移住と移住の間の生活においてという意味である。

\*\* 丸石について、他の土器資料との関連性も加味して菊池氏が触れているので参照されたい。菊池 実「丸石（球石・玉石）」『埋文月報』No.38 1984（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

達していたと思われる。礫石器では、凹石と磨石そして石皿と台石などの調理的用具も多出している。このことは、前期からすでに生活に必要な道具類は質・量ともに充実しており、石器から見た限りでは、その生活に安定感がうかがえる。十二原II遺跡の組成には、前述したもの以外にこれといった特徴はないが、これは遺構内出土の石器資料が少ないことに起因している。しかし、中期には前期の組成以外に植物採集手段も発達しており、新たな生活手段獲得ということから、生活改善や従来生活の局面などの解釈が可能かと思われる。

器種のうち出土点数の極端に少ない、多孔石や砥石そしてストーンリタッチャーなどが入る組成は、どこもなく他の組成と異質性をもっていると思われるが、ここでは住居跡ごとの組成は考慮しない。

石材から見ていくと、前述のとおり黒色頁岩がきわめて顕著な他は、かなりバラツキがある。黒曜石やチャートのように外見上異質なものは、資料点数の多い住居跡に比例して多出しているが、逆にまとまった場所から出土しているとも見られる。これは廃棄場所に規制があったのか、または交易のあまりない半閉鎖的的社会において、限定された人物や家族しか所有できなかったのではないかという推定ができよう。また、両時期における黒色安山岩や、前期における石英閃緑岩は、ある程度選定して採取・使用した石材と見ることができる。

その他、前期では赤色顔料となる褐鉄鉱を含む角礫岩が、J-4住とJ-5住から出土しており、同住居跡からはそれを磨り潰したと思われる赤色鉱物の附着した磨石が出土している。この石材は、北側にある大峰山中腹から採取できるものであり、前期に赤彩技術および嗜好があったものと考えられる。

### 他遺跡との関係

\*\*\* 下城 正編『十二原遺跡・大原遺跡・前中原遺跡』—上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第一集— 1982（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

十二原遺跡は、十二原II遺跡からおよそ20mほど西側へ離れた場所にあり、出土土器からみると中期前半でほとんど同時期であるといえよう。しかし、十二原遺跡からは遺構が検出されておらず、十二原II遺跡とは性格が異なっている。遺物散布地である十二原遺跡では、具体的数値はわからないが多量の土器や剥片の中に散在して打製石斧が製品中圧倒的数量を占めている。十二原遺跡が、居住地である十二原II遺跡に附随するものと仮定して、また石器組成だけから見ていくと、ただ単純に廃棄の場とするよりも植物採集地への中継地点であったと考えられる。その周囲にある採集地で折れたり、壊れたりした打製石斧を、居住地附近まで持って来て廃棄するということである。その点が居住地内まで持ち込んで廃棄する集団と若干性格が異なるといえよう。

\*\*\*\* 中村富夫・間庭 稔・三宅敦気編『善上遺跡・三峰神社裏遺跡・大友館址遺跡』 1986 発行予定 月夜野町教育委員会

利根川をはさんで対岸約2.5km離れた、三峰神社裏・善上・大友館址遺跡では、縄文時代前期中葉から前期末葉にかけての住居跡群が調査されている。

ここでは、三後沢前期住居跡群と同時期であると思われる住居跡群が検出されており、かつ石器の器種分類は同一規準によるもので容易に比較できる資料である。それを見ると、数量的差異こそあるものの組成要素はほぼ同内容を示

している。善上遺跡を中心とする前期中葉集落では、三後沢遺跡で仮定した石鏃と尖頭器などの狩猟具、石匙や削器類そして楔形石器などの解体調理具が剥片石器の中心となっており、その他磨製石斧や石錐及び削器類などの木工具と共に、石皿・台石や凹石・磨石などの調理具も組成の中心を占めている。つまり、利根川をはさんでテリトリーを異にしなが、相方の集落とも同内容を呈しほぼ安定した生活をおくっていたものと思われる。さらに、三峰神社裏遺跡を中心とした前期後葉の集落では、これらの組成的特徴を強化増大しながらも、打製石斧の台頭という、十二原II遺跡中期集落の石器組成へと移行していく過渡的要素がうかがえる。<sup>\*</sup>

また、善上遺跡と三後沢遺跡は、石材的にも黒色頁岩が石器全体の80%を占めており、黒曜石やチャートがきわめて少ないこと、そして赤色の角礫岩を多量に出土することなど、ほとんど違いを見つけることの方が難しい程、その組成が類似している。

\* 三峰神社裏遺跡では黒曜石やチャートが組成中多く、交易的開放社会になったのか、異系社会集団なのかなどが考えられている。

### まとめと課題

三後沢遺跡と十二原II遺跡の石器群観察でわかったことをまとめると、飛躍し過ぎたきらいもあるが、おおよそ次のことがいえる。

- ① 前期中葉～中葉集落は、剥片類がきわめて多い。
- ②       "       は、狩猟を中心とした生活基盤をもつ石器組成である。
- ③       "       は、木工具・調理具なども充実している。
- ④       "       は、容易に入手できる石材でほぼ統一されている。
- ⑤       "       は、赤色顔料を入手しており、赤彩を行っている。
- ⑥       "       は、以上のことより安定した生活であったと思われる。
- ⑦ 中期前半集落は、石器類を居住地外へ廃棄している。
- ⑧       "       は、植物採集を中心とした生活基盤をもつ石器組成である。
- ⑨       "       は、器種・石材とも住居ごとに組成に差がでてくる。
- ⑩       "       は、以上のことより環境変化などに対して石器組成を変える文化的順応を行っている。
- ⑪ 十二原遺跡は、居住地である十二原II遺跡の遺物置き場、または廃棄の場である。
- ⑫ 三後沢遺跡と善上遺跡は、テリトリーを異にした同系同族集団関係であるといえる。

今後の課題として、遺構外から出土した石器群の観察や、それらの要素別の分布図を作成したうえでの分布形態の観察、そして、もっと広範囲にわたる遺跡間の石器組成の比較などをとりあげていかなければならない。

また今回は、器種及び石材の組成を観察することで、石器による遺跡の性格づけを行って見たわけであるが、遺跡の広がりに対する調査範囲による資料的制約・所属時期決定要素・遺構着出決定要素・器種分類要素など数多くの問題を含んでいることをお断りしたい。

〔追記〕

遺構外出土石器の分析は、各住居跡出土石器と同様に器種別および石材別に分類を終えているが、集計等が間に合わず前文では省略している。遺構外出土石器も取り立てて分類内容に差異は認められないが、やはり全体中に占める製品の割合が下がるようである。しかし、礫碗石器、特に石皿等の大型のものは、その検出頻度が同等もしくはそれよりも高い傾向にあるようである。これらのことは集計してみないことには具体的に触れられないが、従来よりいわれている石皿等の集団内における共同使用または廃棄形態の相異などを示唆することができるのではあるまいか。ともあれ、前述した石器の製作・使用過程における多大な資料的制約の問題を、遺構内出土石器よりも強く受ける遺構外出土石器群の解釈は非常に困難なものとなるであろう。

\* 遺構内出土石器といえども、覆土中検出のものと遺構外出土石器との区別は背反的矛盾的問題点であり、今後大きな障害となり得るものである。

石器における機能と用途を考えた場合、前述したようにひとつの石器がそれぞれひとつづつの役割を分担したとは限らず、複数の機能・用途を有していたものがあつたことは事実である。その場合、器種分類に大きな影響を与えることはかかせないが、人間の道具使用の場面を考えるとある特定の行動する時には、いくつかの道具を組み合わせると同時にもしくは連続して使用していたこともありうるであろう。それらの道具を各使用用途によってまとめて、セット関係を見ていくことも今後必要かと思われる。

石材については、黒曜石と珪質頁岩を除いた全体の95%以上が遺跡下の河床で安易に入手できるものである。黒曜石と珪質頁岩はおもに信越方面から遠く運搬して来たものであろうが、それらは単品または小破片として検出されており、当地域における伝統的文化系をうかがうことができよう。

また、褐鉄鉱を含む角礫岩は、前述の三峰神社裏・善上遺跡出土のものと大峰山麓採集のものが同一であろうという同定結果が出されており、当遺跡のものもほぼ間違いはないと思われる。このような石器ではない自然石について、使用（塗彩）対象物こそ検出されてはいないが磨り潰し等の過程に使用された石器とともに、それらの状況・形態を分析していきたい。

器種	三後沢遺跡								十二原II遺跡										
	J1	J2	J3	J4	J5	J6	J7	合計	J1	J2	J3	J4	J5	J6	J7	J8	J9	J10	合計
石 鍬				9	15		1	25					1		2				3
尖頭器					1	1	1		2										
石 匙				20	22	2	1	45	1			2	1	1	1	1			7
石 錐		1		5	9	2		17				1							1
楔形				13	4		4	21				5	3		2		2		12
打斧		4		6	1			11		1	1	4	5	2	7	10			30
磨斧				1	1			2											
搔器				1	1			2											
扶入				7	8	3	2	20	2							1			3
鋸齒				7	6	1		14		1								1	2
削器				11	10	4	1	26	1	3		9		3	7	4	2	3	32
削器	1	5		67	106	38	27	244	6	8		11	7	7	8	16	3	1	66
礫器		1		4	4		1	10		1						1			2
R 剝片		3		31	39	10	6	89	3	5	1	8	3	2	6	4		4	36
U 剝片		4		45	80	20	15	164	4	3	4	5	1	7	10	3	1	4	42
折剝片		4		108	131	9	12	264	1	3		2	1	3	9	10	1	3	33
石 皿	1				1			2	1	2									3
石 台					1	1	2	4		2	2	1				1			6
多孔						1		1											
凹石				4	6	2	3	15	2	7	2				1				12
磨石				2	8		3	13		1	1						1	1	4
敲石				1	7	1	1	10			2			1	1		3		7
砥石							1	1		1				1					2
丸石				1	2	1	1	5							2	2			4
加工			1					1										1	1
石 核	1	1		16	17	4	2	41	1	2	1			1	2	1	2	1	11
石 片	2	64		1110	854	174	138	2342	25	26		26	2	26	49	63	7	17	241
石 碎					409	25	32	473	4	20		26	34	7	49	43	6	6	195
合 計	6	87	1	1469	1743	299	253	3865	51	86	14	100	59	60	156	160	27	44	757
石質	三後沢遺跡								十二原II遺跡										
	J1	J2	J3	J4	J5	J6	J7	合計	J1	J2	J3	J4	J5	J6	J7	J8	J9	J10	合計
黒頁	4	80		1378	1600	287	237	3586	42	59	7	94	58	52	147	143	24	39	665
黒安		1		19	66	1		87	2	1		2		5	1	1		4	16
黒曜				16	16	1		33		13		2				11	1		27
チャート				9	4		1	14				1		3		1			5
珪頁				2	1		1	4	1										1
頁岩	1			2	6		4	13											
安山		3		6	11	4		24											
閃岩				16	6	2	3	27	2	1	1				2	1			7
輝安	1							1	3	4	2				3	2	1		15
花崗				1			1	2											
石斑					1			1			2								2
ひん								1			1				1	1			4
溶凝				1			3	4	1	3	1			1					5
凝灰		3		14	2	1		20		2					1			1	4
砂岩				1	4		2	7		3									3
角礫				9	5			14											
石 英				1				1							1		1		2
その他			1	3	33	3	1	41				1							1
合 計	6	87	1	1478	1755	299	253	3879	51	86	14	100	59	60	156	160	27	44	757

三後沢遺跡・十二原遺跡 住居跡内出土石器 器種・石質組成表

### 〔3〕 弥生時代の遺構と遺物について

相 京 建 史

月夜野バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の第2年目で検出した弥生時代の遺構は次の通りである。

三後沢遺跡 弥生時代後期の住居跡7軒

十二原II遺跡 弥生時代後期の住居跡6軒

三後沢遺跡と十二原II遺跡は直線で約130mの距離がある。間に中後沢が深い谷を形成している。

立地は両遺跡とも舌状台地上に位置する。台地の両側を沢が挟るように深い谷をつくり、利根川に流入する。三後沢遺跡は東西約320mの平坦地が調査対象地域である。この台地上を調査したところ、縄文時代前期の集落がある地点に弥生時代後期の住居跡7軒も検出した。この台地の平坦地でも比して高い地点を選んだ様相がある(第6図)。これは十二原II遺跡でも同様な状況が観察できる(第148図)。当遺跡に近接する弥生時代の遺跡では諏訪遺跡、十二原遺跡、大原遺跡、大原II遺跡がある。いずれも弥生時代後期の遺跡である。

\* 岩崎泰一編『城平遺跡・諏訪遺跡』1984 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

\*\* 下城 正編『十二原遺跡・大原遺跡・前中原遺跡』—上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第一集—1982 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

\*\*\* 相京建史・中沢 悟・菊池 実『大原II遺跡・村主遺跡調査概報』1984 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

#### 住居跡の形状と規模

三 後 沢	長軸 (m)	短軸 (m)	形 状	壁 の 高 さ (cm)				面 積	方 位	炉 の 面 積 (㎡)
				N	E	S	W			
Y-1号住居跡	6.6	4.05	長方形	36~37	30~40	43~48	38~47	21.0㎡	N-10°-W	0.65×0.52≒0.27
Y-2号住居跡	7.9	5.4	隅丸長方形	2~12	8~20	9~16	8~16	37.4㎡	N-30°-W	0.71×0.68≒0.36
Y-3号住居跡	5.8	4.02	隅丸長方形	8~12	9~20	10~19	10~14	21.0㎡	N-2°-W	1.0×0.6≒0.42
Y-4号住居跡	6.78	4.17	長方形	2.5~4	4.1~21	4~12	5~10	25.6㎡	N-22°-W	0.62×0.46≒0.21
Y-5号住居跡	4.38	4.17	方 形	11~16	11	4~15	7~8	16.3㎡	N-5°-W	1.14×1.07≒1.03
Y-6号住居跡	4.53	3.5	長方形	5~8	4~7	13~15	1~10	14.4㎡	N-31°-W	0.40×0.34≒
Y-7号住居跡	4.42	3.65	不正形	5~11	11~12	11~19	12~18	14.2㎡	N-4°-W	0.8×0.59≒0.4
十二原II										
Y-1号住居跡	5.82	4.84	不正形	7~9	8~11	7~11	7~11	24.9㎡	N-108°-W	0.80×0.68≒0.42
Y-2号住居跡	6.23	6.17	方 形	3~13	10~19	14~20	~16	23.0㎡	N-22°-W	0.67×0.59≒0.33
Y-3号住居跡	6.15	(4.36)	方 形	58~62				(14.0㎡)	N-11°-W	0.74×0.62≒0.38
Y-4号住居跡	7.16	4.78	隅丸長方形	27~32	35~37	38~40	33~44	31.9㎡	N-28°-E	0.54×0.48≒0.25
Y-5号住居跡	2.03	1.88	隅丸方形	~20	15~18	18~20	~25	3.05㎡	N-11°-E	0.13×0.13≒0.01
Y-6号住居跡	?	?		50~69				(2.09㎡)		

十二原遺跡<sup>\*</sup>は今回調査した十二原II遺跡の西に近接しており、同一集落を構成した住居跡の可能性が極めて強い。

表示した形状と規模を呈している住居跡は、その他に入口施設と考えられるpitも有している。このpitは壁に近接しており、梯子状の板を斜めにたてかけ、pitの上から粘土で埋めて固定したかの様相を呈している。このpitに該当するものは、三後沢遺跡と十二原II遺跡では次のpit番号である。

#### 入口施設と推定できるpit番号

三後沢遺跡	(推定)入口施設のpitNo	挿図番号	十二原II遺跡	(推定)入口施設のpitNo	挿図番号
Y-1号住居跡	pit 5, 6 (pit 7 付属)	116	Y-1号住居跡	?	214
Y-2号住居跡	pit 5, 6 (pit 7 付属)	121	Y-2号住居跡	?	217
Y-3号住居跡	pit 5, 6 (pit 7 付属)	128	Y-3号住居跡	?	219
Y-4号住居跡	pit 5, 6 (pit 7 付属)	131	Y-4号住居跡	pit 5, 6	222
Y-5号住居跡	pit 5, 6 (pit 7 付属)	133	Y-5号住居跡	pit 1, 2	227
Y-6号住居跡	pit 5, 6 (pit 7 付属)	136	Y-6号住居跡	?	229
Y-7号住居跡	pit 8, 9 (pit11 付属)	140			

上表のとおり三後沢遺跡、十二原II遺跡で検出した住居跡には入口施設と推定できるpitがある。このピットの掘り方は柱穴等とほぼ同じであるが、壁寄りの上端を広く掘り、下端に向い傾斜をつけている。このpitの中に梯子の下端を埋設し、pitの傾斜に沿って梯子を立てかけると、ほぼ住居跡壁の上端に梯子がかかるようになる。またこの際ピット内には白色粘土等の土を埋めて固定している。また入口pit付近の床面の状況は、全体がローム層の床面であるが、この付近のみが黒く汚れ、他の床面よりも比較して硬い。特に明瞭な住居跡は、三後沢遺跡Y-2号住居跡(第121図)が例としてあげられる。同様な例は近接する大原II遺跡Y-2号住居跡<sup>\*\*</sup>に見られる。当住居跡は、入口付近を中心とした部分と、炉跡付近が良く踏まれている。

また住居跡内の施設として炉がある。十二原II遺跡Y-5号住居跡は小型の住居跡であり、主柱穴<sup>\*\*\*</sup>と炉が未検出であった。同6号住居跡は炉の部分が調査区外であるため未確認であった他は、三後沢遺跡、十二原II遺跡の各住居跡で炉の確認ができた。次の表で各住居跡の炉の位置等をまとめたが、炉は住居跡の比較的北側に位置しており、僅かな掘り込みに焼土が残る。炉跡内には焼土の他に自然石が焼けた状況を呈して出土する例が多い。十二原II遺跡のY-1号住居跡では「住居跡の形状と規模」で表わした他に小範囲の焼土と焼けた自然石の出土により住居跡に2つの炉をもつことも指摘できる。同Y-4号住居跡も別地点に焼土だけが検出できた。これも炉の可能性があろう。これらの状

\* 下城 正編『十二原遺跡・大原遺跡・前中原遺跡』—上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第一集—1982 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

\*\* 相京建史・中沢 悟・菊池実『大原II遺跡・村主遺跡調査概報』1984 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

\*\*\* 明確な炉とは断定できないが、焼土の堆積は認められている。

\* 相沢貞順・中村富夫「群馬県北橋村分郷八崎弥生住居跡」『考古学雑誌』第59巻第1号 1973  
日本考古学会

況と類似し、明らかに二つの炉をもつ例として分郷八崎弥生住居跡がある。<sup>\*</sup>

炉の位置

(Pはpit No)

	住居跡内炉の位置	炉内に残された石の位置と数			
		N	E	S	W
三後沢遺跡					
Y-1号住居跡	P1・P2の間			2	
Y-2号住居跡	P1・P2の間			1	
Y-3号住居跡	P1・P2の間から僅かに内側				
Y-4号住居跡	P1・P2の間から僅かに外側				
Y-5号住居跡	P1・P2の間から僅かに内側				
Y-6号住居跡	P1・P2の間				
Y-7号住居跡	P2の西側		1		1
十二原II遺跡					
Y-1号住居跡	①住居跡中央より僅かに北東寄り ②住居跡中央より僅かに北西より				
Y-2号住居跡	P4・P1の間			2	
Y-3号住居跡	北寄り			1	
Y-4号住居跡	①P1・P2の間から僅かに外側 ②中央から僅かに南西に焼土の分布				
Y-5号住居跡	北西寄り?				
Y-6号住居跡	?				

遺物出土状況の中で気付いた点がある。壺形土器の口縁部から肩部にかけての破片で、この部分は復原が可能であり、胴部から底部にかけての破片が無い遺物が次のとおりである。

- 三後沢遺跡 Y-1号住居跡 (第177図-1)  
Y-6号住居跡 (第137図-5)  
Y-7号住居跡 (第141図-1・2)

- 十二原II遺跡 Y-1号住居跡 (第215図-2)

出土位置は一定していないが、三後沢遺跡では南東の柱穴から住居跡の隅に寄った部分からの検出が多い。十二原II遺跡Y-1号住居跡は東壁北寄りから検出できた。これらの土器は類例が増えつつあるが、土器を安定させるために使用した台として使われた可能性が高いものと推測している。

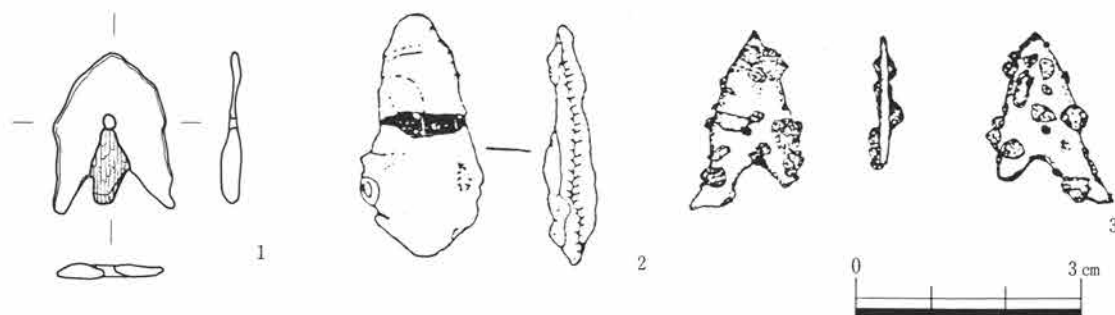
出土遺物では、三後沢遺跡Y-7号住居跡から鉄鏝(第142図-38)が出土し



た。県内で現在までに知られている樽式土器と共伴して出土する例は、第241図に提示した水沼遺跡第3 A号住居跡と北橋村分郷八崎弥生住居跡出土の2例である。当遺跡出土の鉄鏃は床面直上出土土器（第142図-4）内の土を除去する

\* 『水沼遺跡』倉淵村誌別冊 1975

\*\* 相沢貞順・中村富夫「群馬県北橋村分郷八崎弥生住居跡」『考古学雑誌』第59巻第1号 1973 日本考古学会



1. 三後沢Y-7号住居跡出土

2. 水沼遺跡第3 A号住居跡出土

3. 北橋村分郷八崎弥生住居跡出土

### 第241図 群馬県内出土の弥生時代の鉄鏃

際に検出したものである。当住居跡内からは典型的な土師器と思われるものは出土していないが、高崎市北宅地遺跡第1号方形周溝墓出土の土器の土器群組成表に共伴遺物のバラエティーがあり、この中に樽式土器2点の壺がある。この中の1点には基本的なモチーフの描き方等が（第142図-3、4）と共通点が多い。この土器の特色は筆者らが考えているIV期に比定できる。

また「古墳時代土器の研究」の中で橋本、加部両氏は北宅地1号方形周溝墓は4世紀第II四半期に位置づけている。

また三後沢遺跡、十二原II遺跡出土遺物の中で明らかに古墳時代（土師器）の規定概念の範疇に含まれるものがある。発掘調査区に古墳時代の遺構が無いことと、筆者の考えているIV期に該当する遺物が主に出土していることから覆土中出土の遺物をも含めて選出するならば次の土器は古墳時代に含まれる遺物としてとらえられよう。十二原II遺跡Y-1号住居跡第216図-1・5・25、Y-2号住居跡第218図-1(?)、Y-3号住居跡第220図-2・3・6である。Y-1号住居跡5とY-3号住居跡では所謂瓢形土器の特色をもつ形状を呈し、特に口縁端部の内側を削ぐかの様な状況を呈している。

当遺跡は筆者らが考える第IV期が主であり、年代観と地域的特色から考えると長方形に近い形状を呈す住居跡が先行して出現し、方形を呈す住居跡が後出する。同時期に双方とも存在する可能性は大であるが、古式土師器だけの組成から方形の住居跡が残ることも指摘できよう。しかしこれらの住居跡は樽式土器を出土する住居跡の諸施設に類似していることは同時に大きな影響を残しながらも漸次変化していく中に位置づけて良いと考える。

\*\*\* 橋本博文・田口一郎「土師器にみる伝統と変革」『第3回三県弥生時代シンポジウム 群馬県資料』1982 群馬県考古学談話会

\*\*\*\* 三宅敦気・相京建史「樽式土器の分類—榛名山東南麓を中心として—」『第3回三県弥生時代シンポジウム 群馬県資料』1982 群馬県考古学談話会

\*\*\*\*\* 橋本博文・加部二生「古墳時代土器の研究」『VII群馬県』1984

\*\*\*\*\* 石守 晃・山口逸弘編「糸井宮前遺跡I」—関越自動車道（新湯線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第8集—1985（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

## 〔4〕 三後沢遺跡の集落変遷

—縄文時代前期前葉から中葉を中心として—

菊池 実

### 1 はじめに

三後沢遺跡からは縄文時代早期後半の構築と考えられる陥し穴4基、前期前葉・関山II式期の住居跡3軒<sup>\*</sup>、前期中葉・有尾系土器を出土する住居跡3軒、中期前半の住居跡2軒、弥生時代後期の住居跡7軒等が検出されている。各住居跡からは多量の土器片、石器類が出土しており、また周辺グリッド(遺構外)からも同様に各時期にわたる遺物が出土している。住居跡出土遺物の具体的な数値は、各遺構説明の出土遺物項目中に、土器については総点数・部位別点数、石器類については器種別点数・石材別点数を記載し、その詳細なグラフを作成してある。遺構外出土遺物については、本論巧中に一覧表を掲載し、これをもとに分布図を作成した。この分布図作成にあたっては次の方法によっている。

遺構外出土土器の数量的把握を行うために、出土した土器の総量をおさえ、さらに時期別に分類し総破片数、口縁部・頸部・胴部・底部等の部位別点数、とともに重量の測定を行った。遺構外の遺物は基本的に5×5mのグリッドを単位として取り上げられているために、グリッドを最小単位として、このなかにおける時期別・部位別点数を把握し、1㎡あたりの重量を算出した。そして分布図作成には、この点数別・重量別の2通りを作成してみた。土器の総量はその遺跡の規模(居住人員×継続年数)を反映すると考えられ、時期別の量的変化は、遺跡の居住人口の変化、いわば盛衰を反映すると思われるが、調査が路線幅という限定された範囲内で実施されているために、問題点は多々ある。しかしながらある程度の把握は可能と思われる。

遺跡出土の土器を、破片数・重量によって数量的に把握することの目的を小林謙一<sup>\*\*\*</sup>は4点挙げている。それは遺跡の規模を数値としてとらえ、他遺跡との比較を行う。遺跡の時期的消長やその遺跡の属する地域、ないし、その遺跡自体の特徴をとらえる。遺跡の空間的な利用のされ方に関するアプローチを行う。遺物の遺存の仕方や、調査方法を考える材料とする、というものであった。この4点を念頭におきながら、今回、縄文時代早期後半の条痕文系土器の分布と陥し穴(第113図)、前期前葉～中葉にかけての繊維土器群の分布図(第242図)、中期前半の土器分布図(第244図)、弥生時代後期の土器分布図(第246図)を作成し、住居跡との関わり、集落の構造、遺跡の特徴などの把握に努めた。

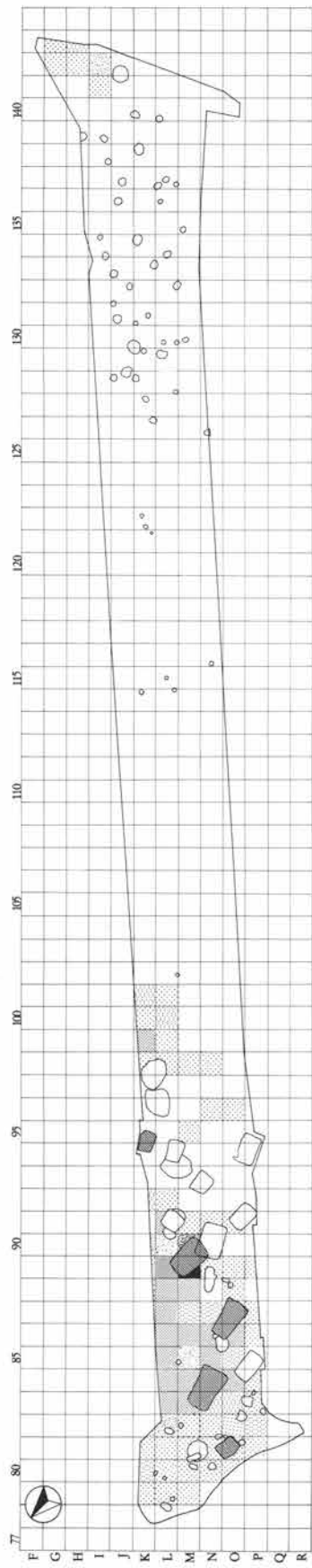
### 2 縄文時代早期後半の条痕文系土器の分布と陥し穴(第113図)

遺跡西端から陥し穴4基が検出された。覆土からは縄文時代前期前葉の関山式土器片、前期中葉の有尾系土器片、中期土器片が少量出土しているが、いずれも覆土上層からの出土であった。周辺に該期住居跡が存在することを考える

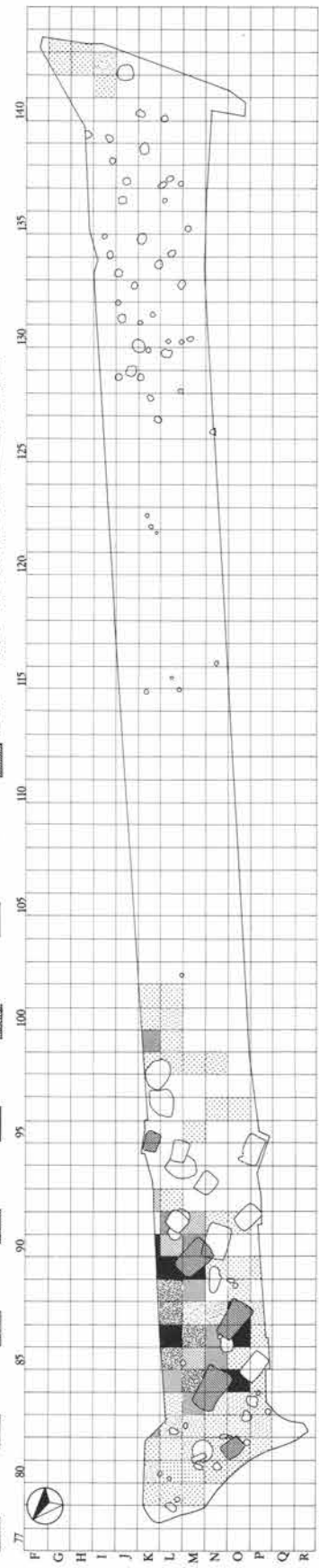
\* J-3号住居跡、J-7号住居跡とJ-6号住居跡の拡張前住居(第1期)を含め3軒とした。J-6号住居跡自身は前期中葉に含まれる。

\*\* 今村啓爾「土器・土製品の分析」『考古学調査研究ハンドブック 2 室内編』1984

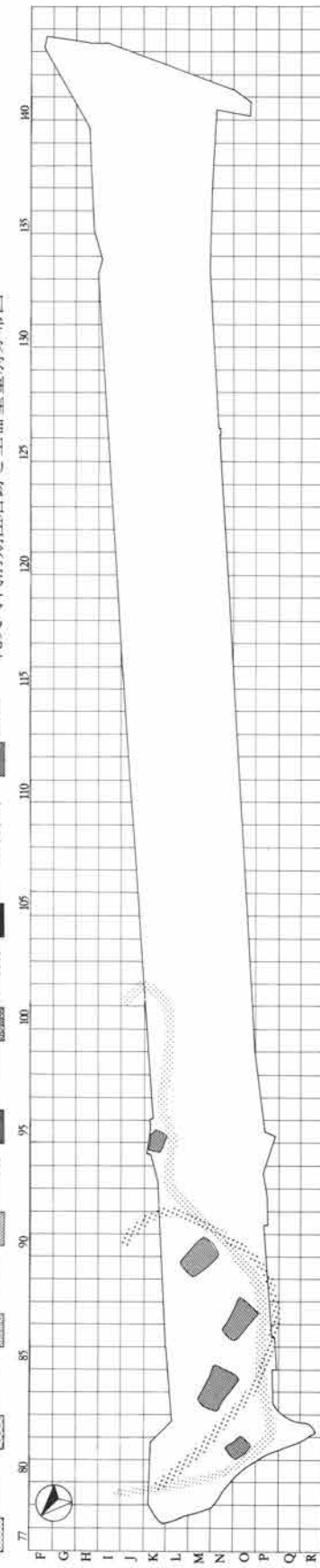
\*\*\* 小林謙一「遺跡出土の土器の量的把握に関する試論」『異貌』拾 1983



縄文時代前期住居跡と土器分布図



縄文時代前期住居跡と土器重量別分布図



前期前葉  
前期中葉

第242図 縄文時代前期前葉～中葉にかけての集落の広がり

と当然の結果と言えよう。こうした陥し穴は、縄文時代前期前葉以前に構築された可能性が考えられる。事実、陥し穴周辺グリッドから早期後半の条痕文系土器片が多数出土していることを考えると、短絡的に結びつけるのは危険ではあるが、早期後半にその構築時期を求めることも可能と思われる。少なくとも条痕文系土器が出土することじたい、何らかの該期の活動痕跡があったことの証左であり、南関東地方で多数検出されている陥し穴の構築時期が該期に集中していることをあわせ考えると、あながち無理な結びつきとは言えないであろう。

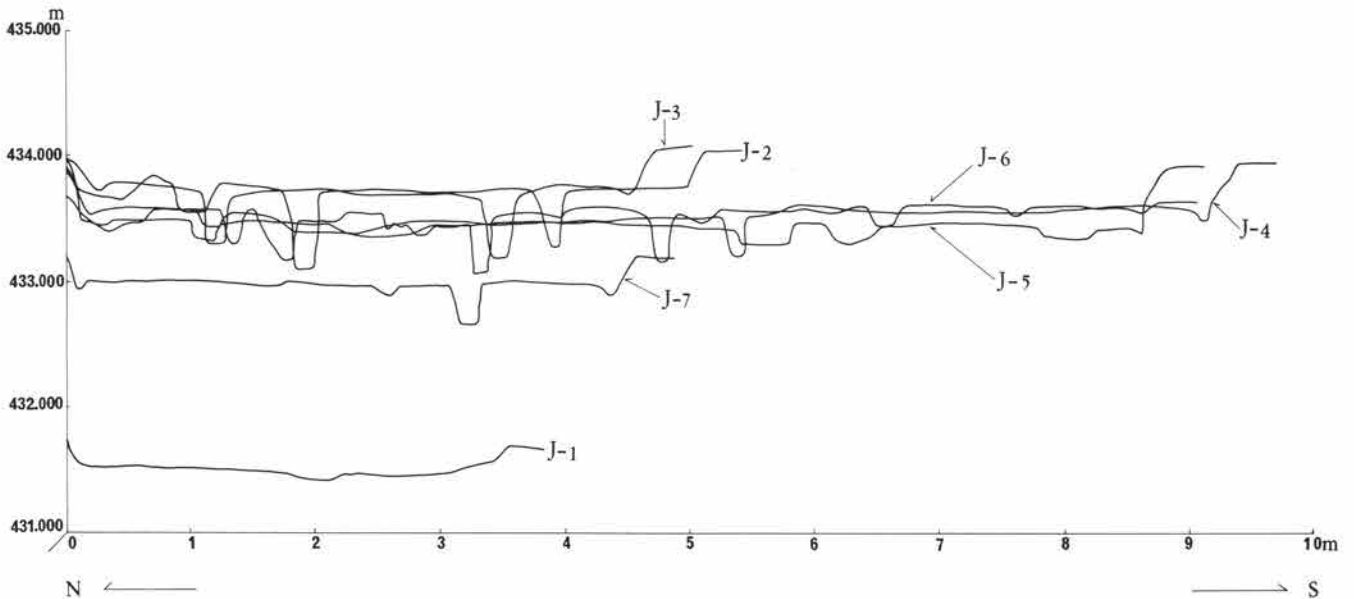
三後沢遺跡検出の陥し穴は4基とその数は少ないが、これは路線幅という限られた調査区のためであり、実際は南北に連なる群を構成していたものと思われる。50号土坑を除いた3基の陥し穴(48・56・64号)は主軸方向もほぼ同一にまとまり、また底面も大小の差はあるものの、ほぼ同一規格で構築されていることがわかる。さらに底面ピットの数も1個と共通しているが、これは十二原II遺跡、大原II遺跡、村主遺跡検出の陥し穴群の主体的な構築方法とはなっておらず、当遺跡検出の陥し穴の特徴の一つと見てよい。今後、周辺遺跡検出の陥し穴群との比較検討をすすめ、北部山間部における縄文時代の陥し穴を調べていきたい。

### 3 縄文時代前期前葉(関山II式期)の集落(第242図)

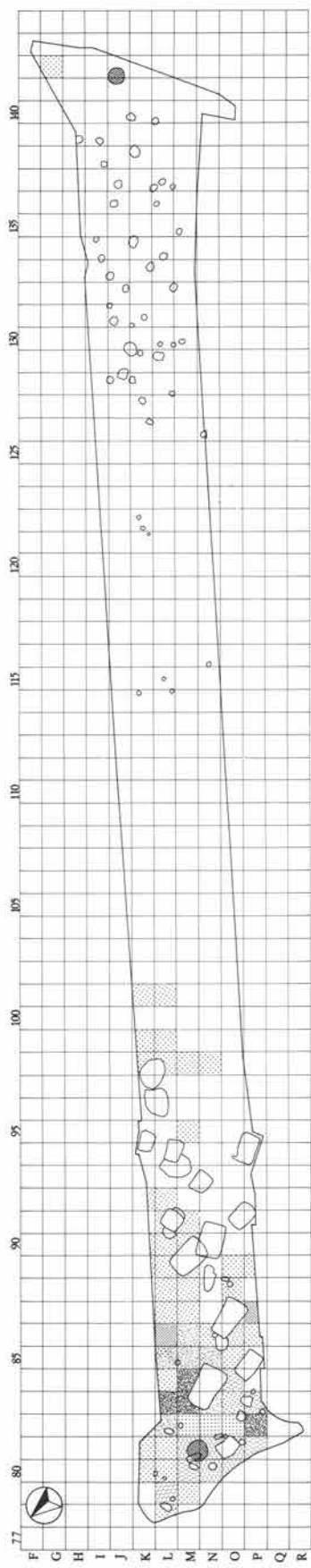
三後沢遺跡で住居が構築され始めたのは、関山II式期にはいつてからである。

\* J-6号住居跡の拡張前の住居跡である。

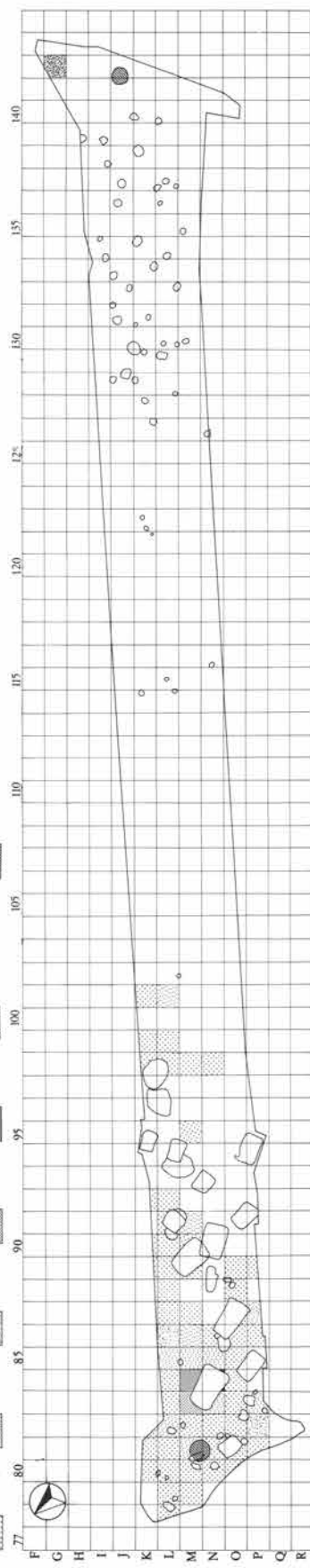
J-7号住居跡・J-6号住居跡第1期・J-3号住居跡がこれに該当する。J-7号住居跡は北壁で若干狭まる隅丸方形を呈し、面積約12.3㎡であった。居住人員に換算すれば約3.7人となる。J-6号住居跡第1期は北壁で若干狭ま



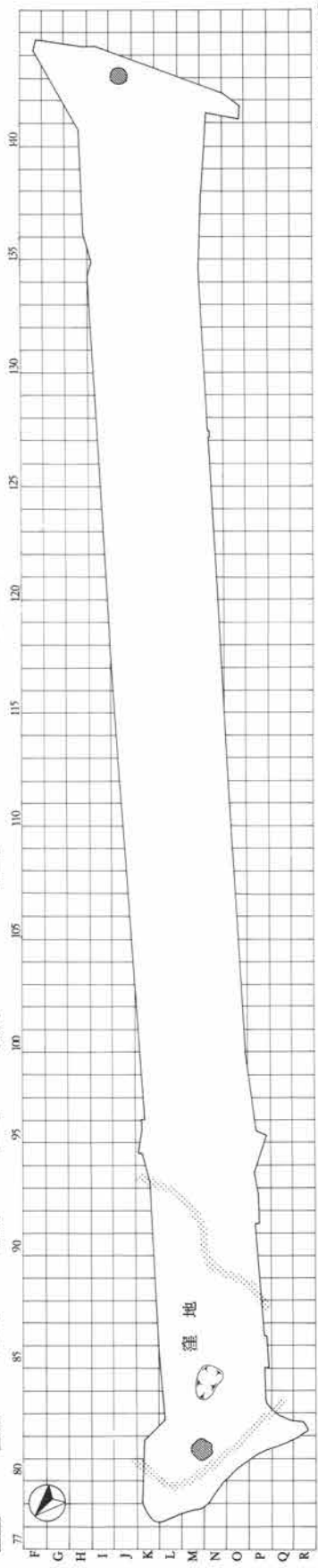
第243図 三後沢遺跡縄文時代住居跡の床面レベル (1/60)



縄文時代中期住居跡と土器分布図



縄文時代中期住居跡と土器重量別分布図



第244図 縄文時代中期集落の広がり (窪地はJ-4号住居跡の痕跡であり完全に埋没していない状況を示している。)

0 1 : 1500 25m

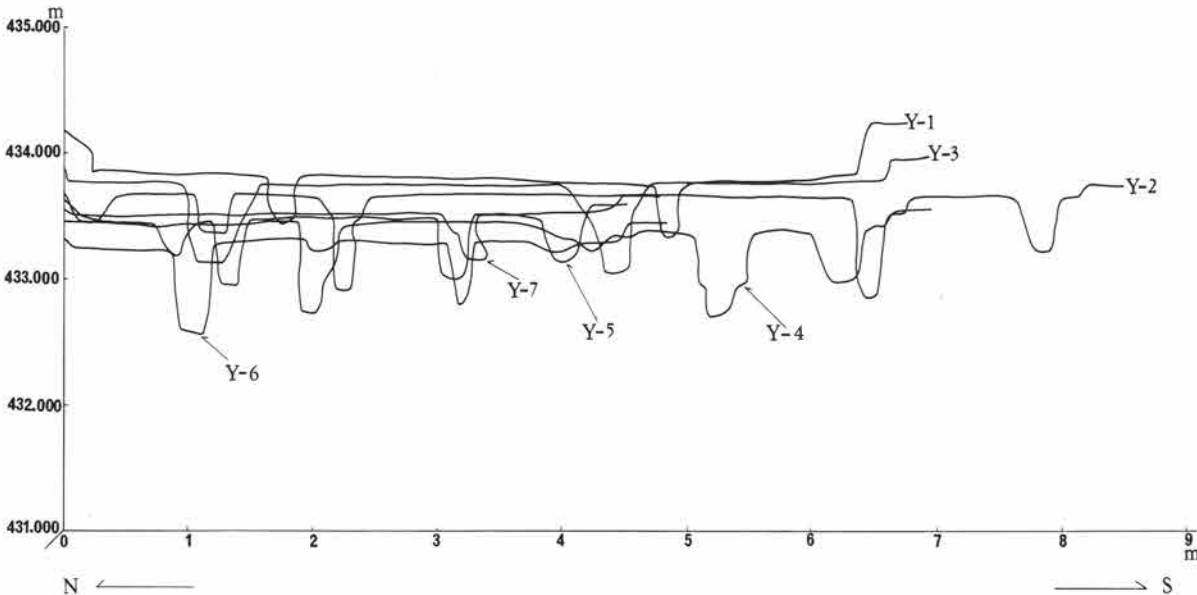
\* J-7号住居跡とJ-3号住居跡は直線距離にして約75mの距離がある。

\*\* これは第4期住居に直接伴うものであるが、第1期でも同様の形態であった可能性は否定できない。

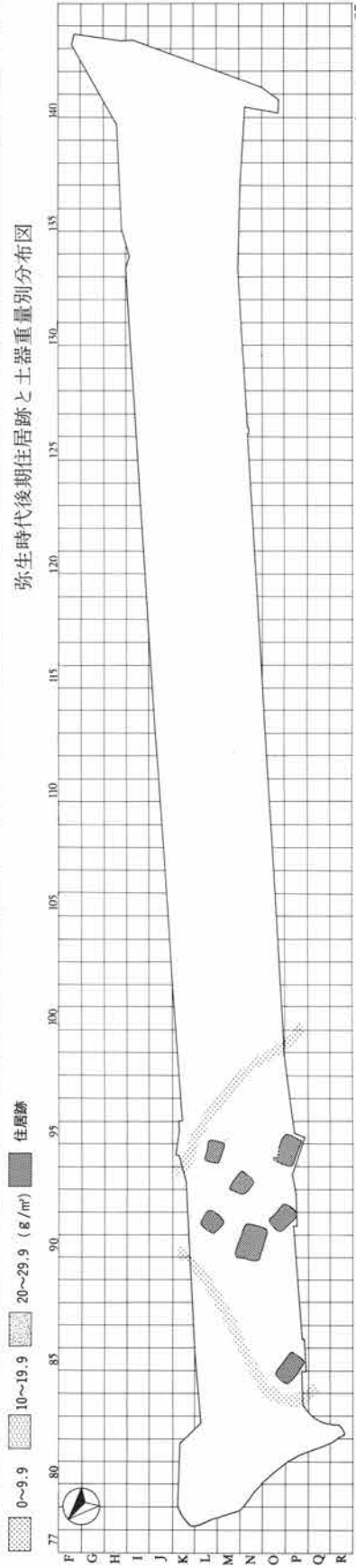
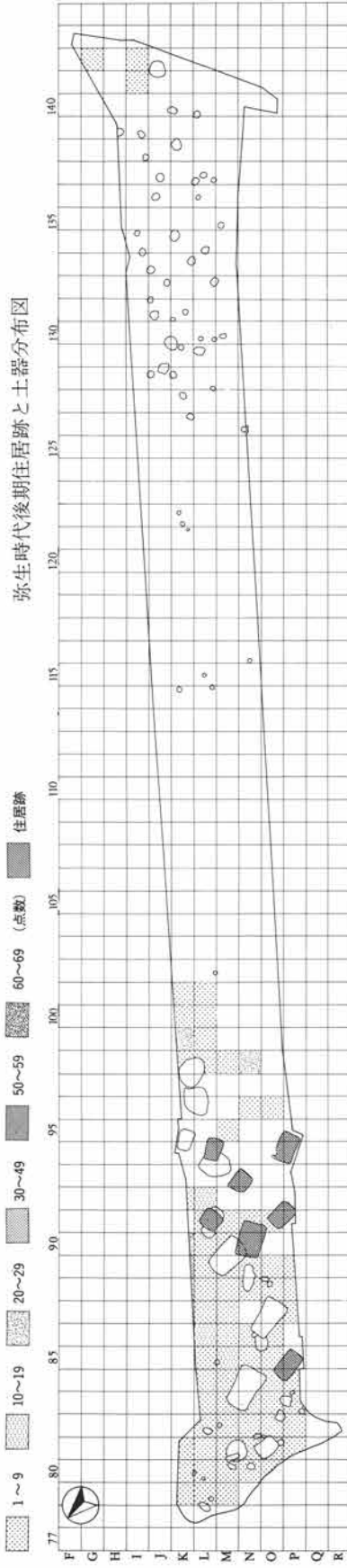
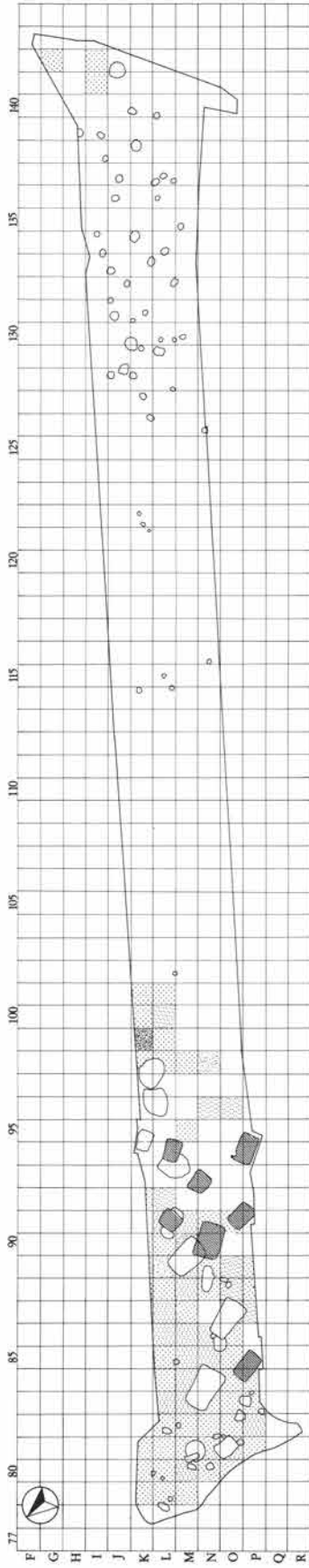
\*\*\* J-6号住居跡第1期はN-3'-W、J-3号住居跡はN-1'-Wであり両者は近似している。しかしJ-7号住居跡はN-34'-Wと隔たりが認められる。

る隅丸方形を呈し、面積約14.3㎡、居住人員は約4.3人となる。J-3号住居跡は隅丸方形を呈し、面積約12.7㎡、居住人員は約4人となる。3軒とも4人程の居住可能面積を有する住居であり、同形態・同一規模を有する住居であった。各住居跡間の距離はJ-7号住居跡とJ-6号住居跡第1期は約21m、J-6号住居跡第1期とJ-3号住居跡は約40mの隔り<sup>\*</sup>があり、いずれの住居跡も南側に出入口部をもち、北側に向かって展開する集落構造であったものと考えられる。

住居内部構造のうえからは、J-7号住居跡では埋甕炉・4本柱を基本として若干の壁柱穴を有する周溝・貯蔵穴、J-6号住居跡第1期では北端に礫を配置した地床炉<sup>\*\*</sup>・壁柱穴を有する周溝、J-3号住居跡では北端に礫を配置した地床炉・4本柱・周溝・貯蔵穴となる。3軒に共通する要素、また2軒のみ共通する要素が認められるが、なかでも大きな相違は埋甕炉と地床炉、主軸方向の違いに絞られる。言いかえれば、これはJ-7号住居跡とJ-6号住居跡第1期・J-3号住居跡の相違として把握されるものである。少なくとも当遺跡にあっては前期中葉の住居には埋甕炉は取り入れられていないことを考えれば、埋甕炉は古い炉形態を示しているものと思われる。またJ-7号住居跡にみられた主柱穴4本十壁柱穴の構造が、J-6号住居跡第1期には壁柱穴として、J-3号住居跡には主柱穴4本としてうけつがれていったものという解釈もなりたつ。さらにJ-6号住居跡自身、その後拡張されながら、前期中葉にいたってJ-4号住居跡・J-5号住居跡と同時期集落を構成することを考えると、J-6号住居跡の第1期住居は、J-3・J-7号住居跡と同時期集落を構成するものの、J-3号住居跡と同様にJ-7号住居跡から派生した住居ととらえることができる。世帯の分立として理解してよいものであろうか。



第245図 三後沢遺跡・弥生時代住居跡の床面レベル (1/60)



0 1 : 1500 25m

第246図 弥生時代後期集落の広がり

\* 396ページの図(住居期)参照。

限られた発掘区から、また集落の全貌を把握していない段階で断定することは非常に危険ではあるが、以下のように考えてみた。三後沢遺跡で最初の集落が営まれたのは縄文時代前期前葉の関山II式期の段階であった。この際、集落の基礎作りに中心的役割を担ったのはJ-7号住居跡であろう(三後沢遺跡住居期Ia期<sup>\*</sup>)。そしてこの住居跡から派生した世帯が、J-6号住居跡第1期とJ-3号住居跡(三後沢遺跡住居期Ib期<sup>\*</sup>)であり、同時期集落(三後沢遺跡住居期I期<sup>\*</sup>)を形成していった。世帯分立の背景には配偶者の獲得がまず考えられる。少なくとも前期前葉の集落にあっては、世帯構成員4人程で統一された村落構成原理が働いていたものと理解できるのではないだろうか。

#### 4 縄文時代前期中葉の集落(第242図)

\*\* 正確にはJ-6号住居跡第4期である。

前期中葉・有尾系土器を出土する住居跡はJ-4号住居跡・J-5号住居跡・J-6号住居跡の3軒である。この段階の集落構造、さらには前段階の関山II式期との関わりを理解するうえで大きなカギとなるのは、J-6号住居跡の存在である。

J-6号住居跡は3回の拡張が行われており、第1期から第4期にかけて考えることができた。すでに第1期住居については関山II式期にその構築が求められる。そしてこの住居跡の壁柱穴を基本として北壁で若干狭まる形態が、その後第4期に至るまで基本的に踏襲されていること、さらに言へば北側及び西側周溝が第3期住居跡まで共有され、炉もまた第1期から第4期まで規模の拡大が若干図られたであろうが、その位置が不変であること、等から総合的に判断すると、断絶を認めるよりは積極的に継続使用(連続居住)を考えた方がよいかもしれない。勿論、継続使用(連続居住)の場合でもそこには断続使用(反復居住)も考慮していかなければならないであろうが、すなわち集落の移住に伴う廃棄-修復のサイクルを想定した場合である。しかし、この場合でも第1期住居を設計・構築した集落構成員の技術・伝統が消失することなく第4期住居に生かされていることを考えれば、集落構成員の断絶は認めることはできず、そこには技術・伝統を保持しつづけた同じ系譜に帰属する住民の介在を認めざるを得ないである。このようにJ-6号住居跡は関山II式期からの流れをくむ住居跡であり、第2期・第3期の住居(三後沢遺跡住居期II期・III期<sup>\*</sup>)の拡充<sup>\*\*\*</sup>、いかえれば世帯の膨張が行われつつ第4期にいたって、J-4号住居跡・J-5号住居跡と同時期集落を構成していったものである。この時期が前期中葉集落の確立期(三後沢遺跡住居期IV期<sup>\*</sup>)となり、有尾系集落構築の核となった住居跡がJ-6号住居跡ということになる。第2期・第3期はその移行期と把握でき、おそらくは路線北側に同時期集落を構成する住居跡が存在するものと思われ、これが調査されれば移行期の時期決定は可能となろう。

\*\*\* J-6住第1期面積約14.3m<sup>2</sup>  
" 第2期面積約21.6m<sup>2</sup>  
" 第3期面積約25.4m<sup>2</sup>  
" 第4期面積約38.3m<sup>2</sup>

\*\*\*\* 関山II式期に属するものか、前期中葉段階に含められるのかということである。

J-6号住居跡第4期を核にJ-4号住居跡の拡張前住居とJ-5号住居跡が構築されるが、いずれの住居跡も北に向かって狭まる台形を基本とする大型



の住居跡である。J-6号住居跡第4期は面積約38.3㎡で、居住人員に換算すると11.6人、J-4号住居跡の拡張前面積は約34.2㎡で居住人員は10.4人、J-5号住居跡は面積約32.5㎡で居住人員9.9人となっている。3軒とも10人程の居住可能面積を有する住居であるが、内部構造の上からではJ-6号住居跡第4期とJ-4・J-5号住居跡間には大きな隔たりが認められた。J-6号住居跡第4期は壁柱穴を主体とする前段階からの流れをくむ内部構造となっているが、他の2軒は周溝は存在するものの壁柱穴はなく、床面にピットが配置されるが、それは住居北半分では少なく、南半分に集中している。そして集中するピット群は、ほぼ楕円状に密接に配置されている。このように内部構造が全く異なることから、同時期集落内において住居上屋構造の異なる2つの型の住居が構築されていたことになり、ここに新しい文化・技術を持った（生んだ）住民の<sup>\*\*\*</sup>介入を認めざるを得なくなるのである。

このように関山II式期の技術・伝統を保持しつつけた同じ系譜に帰属する住民の存在と、新しい文化・技術を持った住民との混在する集落内においても、住居存続期間において差異が認められる。これはJ-6号住居跡第4期・J-5号住居跡（三後沢遺跡住居期IVa期）とJ-4号住居跡（三後沢遺跡住居期IVb期）の差異としてとらえられる。J-6号住居跡は第4期をもって廃屋となり、J-5号住居跡は拡張されることなく廃屋となっているが、J-4号住居跡のみ1回の拡張が行われている。この拡張が行われた分だけ、J-4号住居跡が他の2軒よりも存続期間が長かったと思われるが、これは出土土器からも十分に納得できるものである。J-5号住居跡出土土器には櫛歯状工具による刺突文の施文される土器、半截竹管によって爪形文、平行沈線文が施文される土器、縄文施文のみの土器が多量に出土しているが、J-4号住居跡においては、櫛歯状工具による刺突文の施される土器や口唇部に縄文帯をもつ土器群は破片は出土しているもののその数は非常に少なく、主体は爪形文や縄文施文のみの土器群になっていることである。胎土分析からもこれを裏付けるように両者出土土器の胎土傾向に差異が認められた。さらにJ-4号住居跡覆土最上層からは中期前半の土器片が多量に出土しているが、これは三後沢遺跡に中期前半の住居跡（J-2号）が構築され集落が営まれた段階になっても、J-4号住居跡は窪地としてその痕跡をとどめていた証拠である（第244図）。ところが、J-5号住居跡・J-6号住居跡第4期からは中期土器片はほとんど出土せず、この段階では完全に埋没していたものであろう。住居存続期間の長短の結果である。以上のことから、従来有尾系土器として一括把握されていた土器群を<sup>\*\*\*\*\*</sup>2細分することは可能となる。

三後沢遺跡前期集落は前葉の関山II式期集落と中葉の集落に単純に分離できるが、今まで行ってきた住居跡の比較検討、拡張住居跡の分析・出土土器の検討を通じて、大別4期に、<sup>\*\*\*\*\*</sup>細分すれば6期の住居期を設定できる。参考までにその変遷過程模式図を次ページに掲載しておいた。

\* 関山II式期の4人程の居住可能面積とは大きな相違である。

\*\* 他集団からの移住、もしくは世帯の分立によって登場してくる新しい世代なのであろうか。

\*\*\* 396ページの図（住居期）参照。

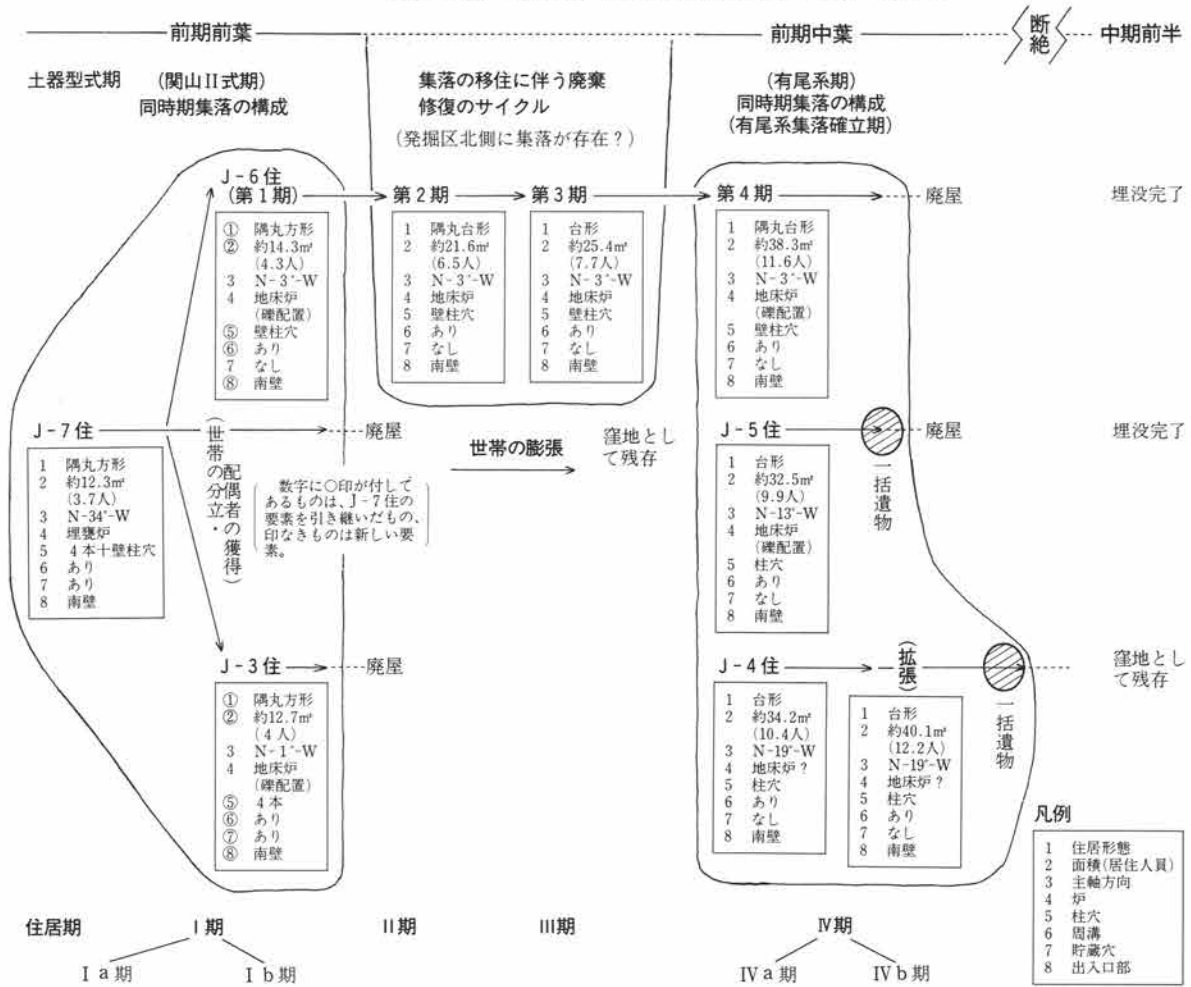
\*\*\*\* 4章 自然科学的分析〔3〕縄文土器の胎土分析参照。

\*\*\*\*\* J-5号住居跡の一括土器群、J-4号住居跡の一括土器群を基準とする。

\*\*\*\*\* 三後沢遺跡住居期I～IV期。

\*\*\*\*\* 三後沢遺跡住居期I a・I b期、II期、III期、IVa・IV b期の計6期。

三後沢遺跡の集落変遷（縄文時代前期前葉～中葉）模式図



グリッド別出土土器一覧表

(1) 縄文時代前期土器片

グリッド	重量(g)	面積(m <sup>2</sup> )	g/m <sup>2</sup>	総数	部位				備考
					口縁部	頸部	胴部	底部	
G-142	247	25	9.9	13	1		12		
G-143	11	6.3	1.7	2			2		
H-142	118	23.8	5.0	6	1		5		
H-143	118	16.3	7.2	12			12		
I-141	112	25	4.5	10	2		7	1	
I-142	789	25	31.6	55	8		46	1	
K-79	124	19.4	6.4	8		2	6		
K-80	500	17.5	28.6	37	1	5	31		
K-81	122	15.6	7.8	8			8		
K-82	79	1.2	65.8	5		1	4		
K-88	152	3.1	49.0	10		1	8	1	
K-89	1166	1.2	971.7	99	10	8	77	4	
K-90	1277	3.8	336.1	88	6	8	72	2	
K-92	395	9.4	42.0	32	1	1	30		
K-99	1774	23.1	76.8	102	12	5	79	6	
K-100	161	21.3	7.6	19			19		
K-101	203	23.8	8.5	20		2	18		

グリッド	重量(g)	面積(m <sup>2</sup> )	g/m <sup>2</sup>	総数	部位				備考
					口縁部	頸部	胴部	底部	
K・L-98・99	769.1	93.8	8.2	36	2	2	30	2	
L-79	125	25	5	12		2	10		
L-81	178	25	7.1	8	1		7		
L-82	630	21.9	28.8	56	3	11	42		
L-83	306	21.3	14.4	171	13	14	141	3	
L-84	1244	21.9	56.8	128	11	18	97	2	
L-85	2396.5	24.4	98.2	177	10	19	143	5	
L-86	2609	25	104.4	184	18	18	142	6	
L-87	1765	25	70.6	139	13	2	119	5	
L-88	2367	25	94.7	188	7	12	166	3	
L-89	3120	25	124.8	245	24	22	192	7	J-6住
L-90	841	25	33.6	70	4	3	63		J-6住
L-91	1278	25	51.1	118	8	12	97	1	
L-92	212.2	25	8.5	14	1		13		
L-98	64.3	25	2.6	8	1	1	6		
L-99	17.2	25	0.7	2			2		
L-100	461	25	18.4	38	3	2	32	1	
L-101	12.1	25	0.5	3			3		
L・M-79・80	620	100	6.2	41	2	6	32	1	
L・M-89・90	152	100	1.5	23			23		
M-80	46.8	25	1.9	4			4		
M-81	283	25	11.3	18			18		
M-82	338	25	13.5	18	1	2	15		
M-83	1713	25	68.5	133	18	5	107	3	J-4住
M-84	2247	25	89.9	149	9	14	121	5	J-4住
M-85	1192	25	47.7	94	3	9	80	2	
M-86	1826.3	25	73.1	152	15	17	115	5	
M-87	626	25	25.0	49	4	2	38	5	
M-88	1411.8	25	56.5	121	7	9	103	2	
M-89	7244	25	289.8	557	46	42	451	18	J-6住
M-90	1591	25	63.6	373	36	25	300	12	J-6住
M-91	427.2	25	17.1	44	1	3	40		
M-95	226	25	9.0	16	4	1	11		
M-98	177.7	25	7.1	16	1	1	11	3	
N-82	74.1	25	3.0	4			4		
N-83	395.2	25	15.8	31	7	2	22		J-4住
N-84	5056	25	202.2	398	37	45	301	15	J-4住
N-85	1509.5	25	60.4	103	16	11	72	4	J-4住
N-86	1742	25	69.7	133	4	12	115	2	J-5住
N-87	553.6	25	22.1	32	2	3	27		J-5住
N-88		25		14	1	1	11	1	
N-90		25		1			1		J-6住
N-91	77	25	3.1	4			4		
N-98	109.2	25	4.4	7	1		6		
N・O-80・81	170	86.9	2.0	13		1	10	2	J-3住
N・O-86	18	50	0.4	2		2			J-5住
N・O-89	39	50	0.8	5	1		4		J-6住
N・O-96	106.2	50	2.1	11		1	10		
O-81	154.7	25	6.2	9	1	1	7		J-3住
O-83	284	25	11.4	24	1		23		
O-84	3097	25	123.9	178	17	26	133	2	
O-85	78	25	3.1	5			5		
O-86	2926	25	117.0	185	11	17	143	14	J-5住
O-87	3708	25	148.3	303	22	28	244	9	J-5住
O-88	142	25	5.7	10	1		9		J-5住
O-89	59	25	2.4	4			4		
O-91	12	25	0.5	2			2		
O・P-81・82	325	96.9	3.4	17	3		14		J-3住

グリッド	重量(g)	面積(m <sup>2</sup> )	g/m <sup>2</sup>	総数	部位				備考
					口縁部	頸部	胴部	底部	
P-82	334	25	13.4	31	3	2	26	1	J-5住
P-83	209	21.9	9.5	14	1	1	12		
P-84	163	18.8	8.7	10		1	8		
P-86	42	18.8	2.2	3			3		
P-87	313	15	20.9	37	6	1	30		
P-89	28	10.6	2.6	2			2		
	67589.7	2238		5523	443	462	4462		

(2) 縄文時代中期土器片

グリッド	重量(g)	面積(m <sup>2</sup> )	g/m <sup>2</sup>	総数	部位			備考
					口縁部	胴部	底部	
G-142	180	2.5	72	10	1	9		J-2住
K-80	19	17.5	1.1	2		2		
K-81	36	15.6	2.3	3	1	1	1	
K-82	54	1.2	45	3	1	2		
K-89	5	1.2	4.2	1		1		
K-90	21	3.8	5.5	3		3		
K-92	22	9.4	2.3	4		4		
K-101	119	23.8	5	5		5		
K・L-98・99	42	92.5	0.5	1		1		
L-78	15	15.6	1.0	1		1		
L-79	69	25	2.8	5	1	4		
L-81	22	25	0.9	2		2		
L-82	300	21.9	13.7	26	2	22	2	
L-83	847	21.3	40	78	4	69	5	
L-84	90	21.9	4.1	16		16		
L-85	239	24.4	10	29	1	26	2	
L-86	520	25	20.8	33	4	27	2	
L-87	60	25	2.4	5	1	4		
L-88	45	25	1.8	4		4		
L-89	71	25	2.8	5		5		
L-90	13	25	0.5	1		1		
L-91	86	25	3.4	5	1	4		
L-92	35	25	1.4	4		4		
L-101	262	25	10.5	1	1			
L・M-79・80	321	100	3.2	21	4	16	1	
L・M-89・90	32	100	0.3	4		4		
M-80	64	25	2.6	6		6		
M-81	282	25	11.3	14	1	13		
M-82	120	25	4.8	7		7		
M-83	951	25	38.0	82	5	76	1	
M-84	1246	25	50.0	71	6	50	15	
M-85	359	25	14.4	27	2	23	2	
M-86	252	25	10.1	22	1	21		
M-87	16	25	0.6	2		2		
M-89	42	25	1.7	2		2		
M-90	6	25	0.2	1	1			
M-91	272	25	10.9	9	1	8		
M-95	81	25	3.2	2		1	1	
M-98	16	25	0.6	1	1			
N-82	36	25	1.4	1			1	
N-83	359	25	14.4	28	3	24	1	
N-84	4703	25	188.1	334	32	276	26	
N-85	426	25	17.0	28		23	5	
N-86	52	25	2.1	5		5		

グリッド	重量(g)	面積(m <sup>2</sup> )	g/m <sup>2</sup>	総数	部位			備考
					口縁部	胴部	底部	
N-98	12	25	0.5	2	1	1		J-2住
N・O-80・81	803	86.9	9.2	59	8	49	2	
N・O-86	89	50	1.8	5		4	1	
O-81	10	25	0.4	1		1		
O-83	77	25	3.1	8		7	1	
O-84	225	25	9	18	2	15	1	
O-85	33	25	1.3	3		(3)		
O-86	133	25	5.3	14		13	1	
O-87	38	25	1.5	5		(5)		
O-88	27	25	1.1	1		1		
O-89	40	25	1.6	1	1			
O・P-81・82	410	96.9	4.2	13	1	11	1	
P-82	699	25	28.0	56	3	50	3	
P-83	220	21.9	10.1	12	2	9	1	
P-86	10	18.8	0.5	1		1		
P-87	352	15	23.5	35		35		
P-89	12	10.6	1.1	1		1		
	15998	1722.7		1149	93	980	76	

(3) 弥生時代土器片

グリッド	重量(g)	面積(m <sup>2</sup> )	g/m <sup>2</sup>	総数	部位					備考
					口縁部	頸部	胴部	脚部	底部	
G-142	4	25	1.6	1			1			
I-141	4	25	0.2	1	1					
I-142	12	25	0.5	7		1	5		1	
K-79	13	19.4	0.7	2			2			
L-80	42	17.5	2.4	3			3			
K-81	15	15.6	1.0	1					1	
K-88	13	3.1	4.2	1			1			
K-89	46	1.2	38.3	6		4	2			
K-90	91	3.8	23.9	6	3		3			
K-92	15	9.4	1.6	5	1		4			
K-99	645	23.1	27.9	67	9	16	39	1	2	
K-100	29	21.3	1.4	3			3			
K-101	4	23.8	0.2	1			1			
K・L-98・99	220	92.5	2.4	22	1	6	14		1	
L-79	16	25	0.6	4			4			
L-81	10	25	0.4	1			1			
L-82	101	21.9	4.6	8		1	6	1		
L-83	127	21.3	6.0	13	1		11	1		
L-84	35	21.9	1.6	7	2	1	4			
L-85	64	24.4	2.6	9	2	3	4			
L-86	306	25	12.2	16		5	10		1	
L-87	110	25	4.4	13		2	11			
L-88	27	25	1.1	2		2				
L-89	195	25	7.8	20	2	6	12			
L-90	76	25	3.0	7	2		2		3	
L-91	160	25	6.4	18	1	3	14			Y-5住
L-92	264	25	10.4	10		1	8		1	Y-5住
L-98	19	25	0.8	1			1			
L-99	26	25	1.0	2			1		1	
L-100	189	25	7.6	12	3	2	7			
L-101	70	25	2.8	3	1		2			
L・M-79・80	45	100	0.5	5		1	3		1	
L・M-89・90	370	100	3.7	8			5	1	2	Y-2住

グリッド	重量(g)	面積(m <sup>2</sup> )	g/m <sup>2</sup>	総数	部位					備考
					口縁部	頸部	胴部	脚部	底部	
M-80	80	25	3.2	11				10	1	
M-81	56	25	2.2	2				2		
M-82	5	25	0.2	2				2		
M-83	103	25	4.1	10	1			9		
M-84	158	25	6.3	15	1	3		9	1	
M-85	261	25	10.4	18		4		10	3	1
M-86	161	25	6.4	15		5		10		
M-87	92	25	3.7	5		2		3		
M-88	57	25	2.3	10		3		7		
M-89	52	25	2.1	10	1	1		8		
M-90	175	25	7.0	20		4		16		Y-2住
M-91	158	25	6.3	15	1	4		10		
M-95	68	25	2.7	6	3			2	1	Y-6住
M-98	18	25	0.7	2	1			1		
N-82	26	25	1.0	3				3		
N-83	74	25	3.0	6	1	1		4		
N-84	172	25	6.9	12	2	2		8		
N-85	184	25	7.4	16	2	2		11	1	
N-86	114	25	4.6	11	1	2		8		
N-88	66	25	2.6	6		1		5		
N-91	115	25	4.6	9	1			8		Y-2住
N-98	614	25	24.6	26	3	5		15	1	2
N・O-80・81	222	86.9	2.6	17	2			15		
N・O-86	166	50	3.3	5				4	1	
N・O-89	93	50	1.9	10		4		6		Y-2住
N・O-96	250	50	5.0	23	3	2		17	1	
O-81	119	25	4.8	9		1		7	1	
O-83	41	25	1.6	8				8		
O-84	112	25	4.5	8	1			7		Y-1住
O-85	10	25	0.4	2		1		1		Y-1住
O-86	50	25	2.0	5	2			3		
O-87	96	25	3.8	11		3		7	1	
O-88	79	25	3.2	10		4		6		
O-89	148	25	5.9	19	1	2		16		
O-91	122	25	4.9	8	1	3		3	1	Y-3住
O・P-81・82	82	96.9	0.8	6				6		Y-3住
P-82	151	25	6.0	13	1	1		9	2	
P-83	31	21.9	1.4	3				3		
P-84	21	18.8	1.1	4				4		Y-1住
P-87	119	15	7.9	11	2			9		
P-88	56	13.8	4.1	2				1	1	
P-89	60	10.6	5.7	4	1			2	1	
	8200	2111.6		693	61	116	477	10	29	

## 〔5〕 十二原II遺跡検出の陥し穴群について

### —陥し穴群の基礎的分析を中心として—

菊池 実

十二原II遺跡から縄文時代の陥し穴17基が検出された。東の沢を隔てた三後沢遺跡検出の陥し穴とは形態や規模において、また西の沢を隔てた大原II遺跡・村主遺跡検出の陥し穴群とも、形態や規模、そして陥し穴群の配列等において著しい差違が認められた。こうした差異をより明確化させるために、当遺跡検出の陥し穴の特色を先学の分析を参考にしながら導きだしてみたい。

\* 中沢 悟編「大原II遺跡・村主遺跡」1986発行予定（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団において現在整理中

\*\* 今村啓爾「霧ヶ丘遺跡の土壌群に関する考察」「霧ヶ丘」1973 霧ヶ丘遺跡調査団 山崎和巳「遺構の概要」「東寺方遺跡」1983 多摩市遺跡調査会

#### 1 立地・配置について（第248図）

十二原II遺跡は東側の中後沢と西側の原沢によって区域られた小台地上に位置している。三後沢遺跡の陥し穴分布から考えると、2つの沢はすでに縄文時代においても、現在よりは小規模であったであろうが、その存在を指摘できる。そして陥し穴が検出された小台地には、高低差約7m程の上位面と下位面が認められた。陥し穴はこの上位面と下位面から検出されているが、その立地の差異や陥し穴の配置等から考えて3群に分けることができた。

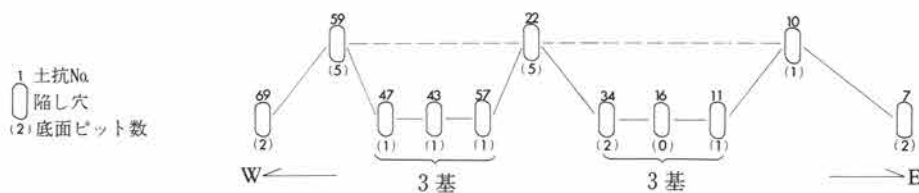
A群：上位面から検出され、東側から西側に向かって展開する11基の陥し穴から構成される。

B群：上位面から検出され、南西から北東に向かって展開するであろう2基の陥し穴。

C群：下位面から検出され、20mの範囲でまとまる4基の陥し穴。

この3群の分布の疎密は、 $A < C < B$ となる。ただし、B群は発掘区北東に向かってさらに展開するものと考えられ、実際にはA群とほぼ同様な基数となるものではなからうか。

A群を構成する11基の陥し穴相互の間隔は、最短の距離で22号土坑と57号土坑間の5m、最長の距離で11号土坑と16号土坑間の12.5mであり、平均は約8.8mであった。そして一連の陥し穴のなかで、配置・主軸方向をやや異にする土坑が10・22・59号の3基の陥し穴である。他の陥し穴から突出するように北に配置され、そのあり方は当初からかなり意識化されていたようである。模式化すれば次のようになる（第247図）。



第247図 A群陥し穴の模式図

こうした配置は陥し穴構築の時間差に起因するものと考えられるかもしれないが、調査時の所見やその後の検討から、同時期に配置されたものと把握したい。そして、その起因となるものは、当時の地形・環境・あるいは捕獲対象動物の習性に対応するため、または縄文人の狩猟法にあわせた配置方法が考えられるのではなかろうか。

B群の陥し穴は、A群と同様に上位面から検出されているが、陥し穴の主軸方向、土坑の形態や規模の相違等から、A群から分離できた一群である。19号土坑と50号土坑の間隔は11.5mあるが、ほぼ同様な間隔で北東に向かって展開するものであろう。

C群の陥し穴は、A・B両群の立地とは異なり、下位面から検出された。20mの範囲で半弧を描くような配置になっており、A・B両群とは際立った差異を示していた。

## 2 主軸方向と地形との関係

陥し穴の主軸方向は、土坑の長軸方向より北からの方位角として示した（第249図）。これによるとA群を構成する陥し穴は、10号土坑を除いて59号土坑のN-8°-Eから43号土坑のN-48°-Eのなかに収まるが、とりわけN-8°-Eから34号土坑のN-24°-Eのなかに集中している。その数はA群構成11基のうち8基までを占めている。北東方向の沢を非常に意識した構築であると言える。そして地形とのかかわりでは、陥し穴の主軸方向が傾斜の方向へ向くのではなく、傾斜と並行するように構築されていることも大きな特徴となっている。

B群の陥し穴はわずか2基しか検出されていないので傾向を把握することは困難であるが、19号土坑がN-12°-W、50号土坑がN-35°-Wであることから、A群の陥し穴の主軸方向とは著しく相違している。A群から分離された要因の一つである。そして傾斜の方向に向くような構築となっているが、2基からでは断定することは危険である。しかし調査時の感触では、北側の下位面、さらにその北の沢を意識した構築と思われた。

C群の陥し穴4基は主軸方向のまとまりを全く認めることはできない。しかし、その配置から考えると西から東方向を意識した構築となろう。

## 3 陥し穴底面ピットの検討

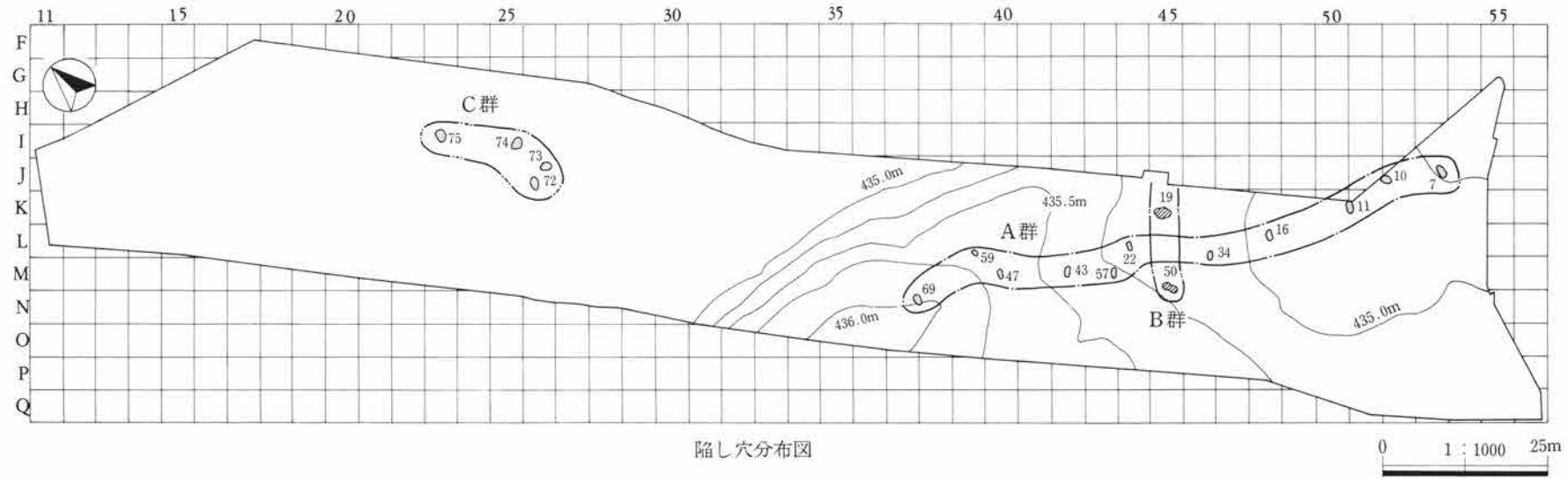
各陥し穴からは逆茂木を埋設したであろうピットが検出されている。底面におけるピットの数や配置は、各陥し穴群で同様な傾向を示すものと、全く異なった様相を示すものが存在する。各陥し穴群にわけて検討したい。

A群を構成する11基の陥し穴底面ピット数

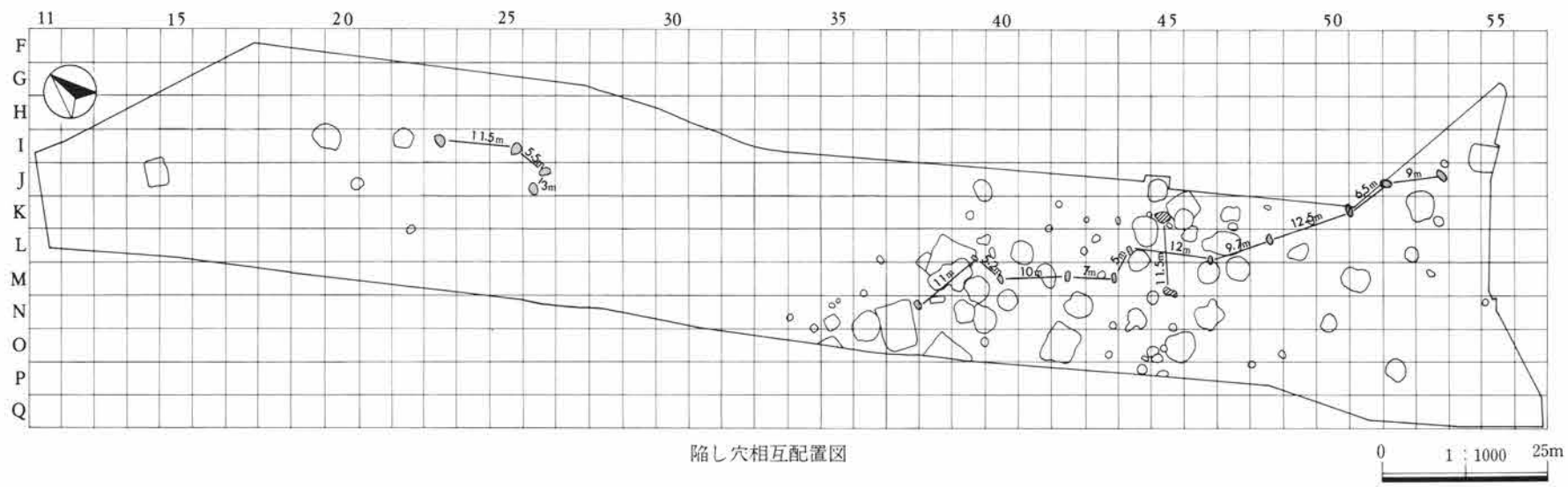
(a)底面にピットを有しない陥し穴-16号土坑の1基。

(b)底面にピット1個を有する陥し穴-10号土坑・11号土坑・57号土坑・43号

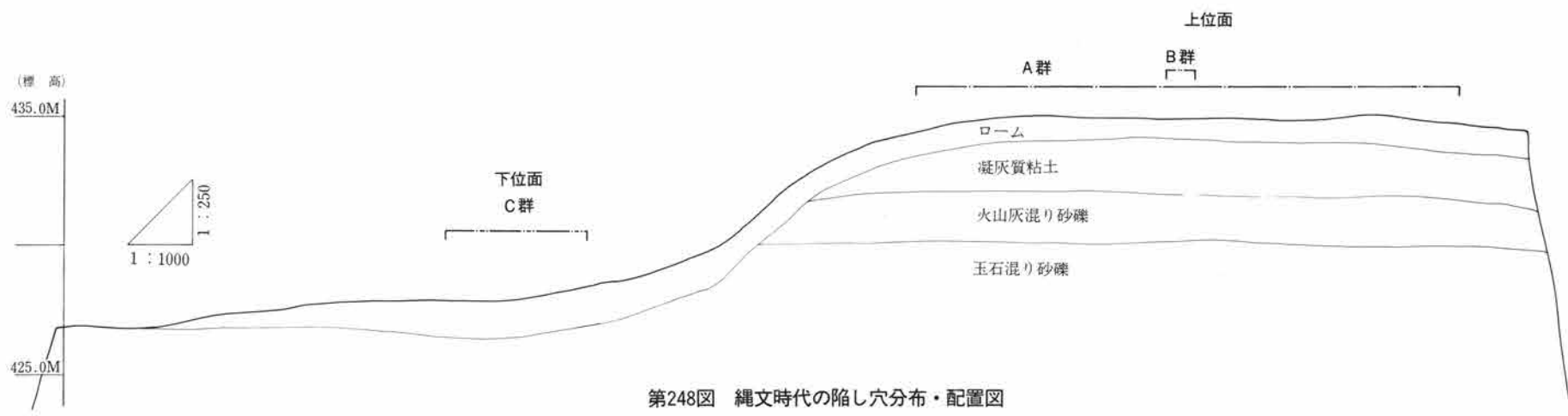




陥し穴分布図



陥し穴相互配置図



第248図 縄文時代の陥し穴分布・配置図



土坑・47号土坑の5基。ピットの深さは10号土坑から順に、8cm・8cm・22cm・30cm・23cmである。

- (c)底面にピット2個を有する陥し穴ー7号土坑・34号土坑・69号土坑の3基。  
ピットの深さは7号土坑のピット1・2から順に、22cm・10cm、18cm・17cm、16cm・22cmである。

- (d)底面にピット5個を有する陥し穴ー22号土坑・59号土坑の2基。

底面にピット1個を有する陥し穴が全体の約半分程を占めている。そしてその位置は10号土坑を除けば、ほぼ底面中央に存在している。ピット2個を有する陥し穴は、69号土坑の底面ピットの配列から考えると、陥し穴構築当初から2個存在していたものであろう。そしてこうした陥し穴はA群のなかでも東西両サイドと34号土坑のようにほぼ中央に構築されるなど、陥し穴群の比較的要所を占めた配置となろうか。ピット5個を有する陥し穴は、底面の壁に沿ってピットが配置される22号土坑と、小ピットが一行に並ぶ59号土坑のように、共通したピットの配置を認めることはできなかった。が、陥し穴構築当初からすでに複数ピットは存在していたものであろう。底面にピット1個もしくは2個もつ陥し穴から比べると、ピットはいずれも小さく浅かった。16号土坑は底面からピットを検出することはできなかったが、土坑の形態や規模、覆土の状態、さらに配置等を考慮して、陥し穴に間違いないと判断されたものである。

以上のことから、A群の陥し穴は底面にピット1個をもつ陥し穴の構築を基本として、要所（陥し穴群の両サイドと中央）に、やや殺傷能力の高い陥し穴を配置する。そして北側に突出するようにピット5本を有する22・59号土坑を配置して陥し穴群を完結されている。言い換えれば、時間的経過とともにこのような陥し穴を構成したものではなくて、構築前からすでに縄文人の思考のなかでこのような構成が図式化していたものとする事ができる。このような配置がとられた背景には、地形・環境条件を考えるよりも、捕獲対象動物の習性、もしくは縄文人の狩猟法に起因するものと考えてみたい。

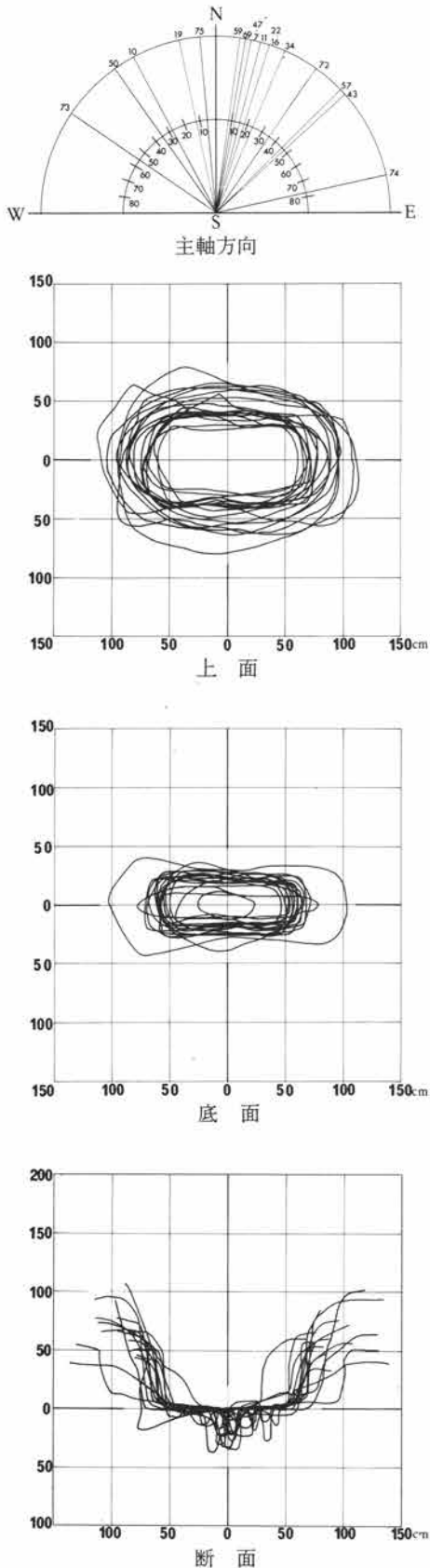
B群を構成する2基の陥し穴底面のピット数と深さは、19号土坑で1個、31cm、50号土坑は2個で、35cm・35cmとなっている。いずれも深く穿たれていた。

C群陥し穴の底面ピットで特徴的な構造を有する土坑は、72号土坑である。中央部に、大きなピットを掘り、このなかに2個の小ピットを有していた。このようなピットの構造は、三後沢遺跡・大原II遺跡・村主遺跡検出の陥し穴からは全く認められず、わずかに諏訪遺跡検出の11号土坑・34号土坑の陥し穴に認められるものであった。C群陥し穴と諏訪遺跡検出の陥し穴に何らかの共通する要素が求められるものであろうか。

・ 岩崎泰一編『城平遺跡・諏訪遺跡』1984（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

#### 4 陥し穴の規格性について（第249図）

陥し穴の規格性は、陥し穴のもつさまざまな属性分析をとおして導きだされるものであるが、すでに、立地と配置、主軸方向、底面ピットの問題については



第249図 陥し穴の平面・断面形図 (1/60)

言及してあるので、ここでは狭義の意味で、形態と規模に焦点をあて検討したい。十二原II遺跡検出の17基の陥し穴の形態・規模を比較するために第249図を作成した。陥し穴の上面・底面・断面を重ねたものであるが、上面については、陥し穴構築当初の姿を留めているとは考えられず、底面における比較が優先されなければならないのは当然であろう。

A群陥し穴の上面は、長径120cm~192cm、短径55cm~106cm、底面は長径84cm~136cm、短径20cm~52cm、深さ44cm~92cmの範囲に収まる。群のなかでやや大きな陥し穴は、7号土坑であり、小形なのが16号土坑となる。そしてA群陥し穴の平均的規模は上面で149×78cm、底面は111×41cm、深さ60cmとなる。底面積は0.2㎡~0.6㎡の範囲に収まり、その平均面積は約0.42㎡となった。第249図の上面・底面・断面のなかでまとまりをもつ一群がA群陥し穴となる。多少のバラつきはあるものの、ほぼ同規模で構築されていることがわかる。また底面は隅丸長方形を呈し、中央部でこころもち括れる形態となっている。A群陥し穴が同時期に構築・使用された傍証となろう。

B群陥し穴の規模はA群のそれと比べると極端に大きくなっている。50号土坑にいたっては、約3倍の面積を有している。また底面は隅丸長方形を呈するものの、中央の括れがやや強いようである。捕獲対象動物の違い、陥し穴構築の時期差にその差異を求められるものであろうか。

C群陥し穴の上面は、長径174cm~212cm、短径112cm~145cm、底面は長径120cm~140cm、短径38cm~70cm、深さ38cm~103cmの範囲にある。その平均的規模は上面で192×127cm、底面は129×47cm、深さ78cmとなる。底面積は0.3㎡~0.66㎡の範囲にあり、その平均面積は約0.5㎡となった。底面は隅丸長方形か、長楕円形を呈するが、中央の括れは弱い。A群よりも規模の大きな陥し穴から構成されている。

以上、各陥し穴群において形態や規模の差異が明確になったが、この差異は各陥し穴群の時期差もしくは捕獲対象動物の差として把握できるものと思われる。ただし、陥し穴群の配置とA群陥し穴が非常に小規模なものであることを考えると、時期差・捕獲対象動物の差を無理に別ける必要はないかもしれない。A群陥し穴では、当時の代表的狩猟獣であるシカ・イノシシの捕獲は到底無理と判断されるからである。

## 5 覆土の状態

各陥し穴の覆土はほぼ同一の層相を示している。とりわけA群陥し穴の覆土は上層に黒色土が堆積し、下層に向かって暗褐色土層、黄褐色土層へと順次変化している。ただし、一般的陥し穴の堆積状態である底面に黒褐色土が堆積し、その上に黄褐色土・黒褐色土が交互に堆積する状態を確認することはできなかった。小規模な陥し穴故であろうか。さらには当陥し穴群が比較的短期間のうちに廃棄されてしまった結果ともとらえることができようか。

B群陥し穴の覆土はA群のそれとさほど変化はなかった。

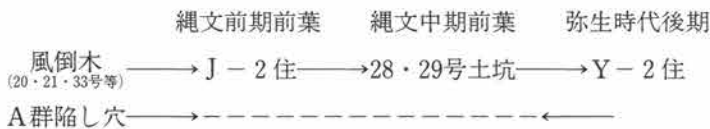
C群陥し穴のなかで典型的な陥し穴覆土状態を示していたのが、73号土坑である。黄褐色土・暗褐色土が交互に堆積していた。

以上、各陥し穴の覆土はいずれも縄文時代の覆土と判断される。

## 6 重複関係から考えられる陥し穴群の時間的位置付け

B・C両群の陥し穴には他遺構との重複関係は認められなかったが、A群陥し穴については3基認められた。34・22・59号の各土坑である。このうち34号土坑と22号土坑は風倒木と、59号土坑はY-2号住居跡と重複している。順次検討しよう。

59号土坑はY-2号住居跡によって壊されているから、少なくともA群陥し穴は弥生時代後期以前にその構築時期を設定できる。34号土坑は33号土坑（風倒木）と重複しているが、残念ながらその新旧関係は判然としなかった。しかし22号土坑では21号土坑（風倒木）を壊して構築されていることから判断して、十二原II遺跡の上位面検出の風倒木よりも新しい時期にその構築時期を設定できそうである。では風倒木が形成された時期はいつごろだろうか。これも風倒木とJ-2号住居跡、28・29号土坑との重複から考えると、縄文時代前・中期以前に形成されたものとなる。整理すると次のようになる。



さらに検討すると、前期前葉の時期に陥し穴の構築を考えると、該期集落を分断するように配置されてしまい、同様に中期前葉の時期で考えると、該期集落のなかの土坑・配石分布域に該当してしまう。以上を総合的に考えて、あわせて従来の陥し穴研究の成果を踏えると、縄文時代前期前葉以前にその構築時期が求められそうである。

B群陥し穴もA群と同様な時期に設定できようであろう。

C群陥し穴についてはその構築時期を検討できる資料は、当遺跡内では皆無にちかい。しかし、底面ピットの構造で特徴的な72号土坑の存在から、諏訪遺跡検出の陥し穴との共通性が読みとれることで、両者の比較検討をとおして今後ある程度の時期をおさえられるものと思われる。

## 7 まとめ

十二原II遺跡検出の3群17基の陥し穴について、6項目にわたって各陥し穴群の比較検討を行い、その特徴を導きだしてきた。以下、簡単にまとめてみよう。

A群陥し穴は東から西に向かって展開する11基の陥し穴からなり、構築にさしては北東方向の沢がかなり意識化されている。そして同時期に構築・使用され、早い段階で廃棄されていった陥し穴群である。その時期は縄文時代前期前葉以前に求められる。構築当初からかなりの企画性があり、底面にピット1個を持つ陥し穴を基本として、要所にピット2個をもつ殺傷能力が高くやや規模の大きい陥し穴を配置している。さらに北に5本のピットをもつ陥し穴を配置してあるが、こうした配置の背景には捕獲対象動物の習性もしくは縄文人の狩猟法に対応するためなどが考えられる。また地形の傾斜に並行するように配置されていることも重要であろう。当群の陥し穴の平均的規模は、上面で149×78cm、底面は111×41cm、深さ60cm、底面積0.42㎡となり、非常に小規模な陥し穴となる。この規模では当時の代表的狩猟獣であるシカ・イノシシの捕獲は到底無理と判断され、他の対象獣を考えていかなければならない。

B群陥し穴は南西から北東に向かって展開する陥し穴群であるが、発掘区からは2基検出されただけであった。実際はA群とほぼ同様な基数から構成されていたものであろうか。そしてその配置は北側の下位面、さらにその北の沢を意識した構築と思われた。陥し穴の規模はA群のそれと比較すると極端に大きくなっている。捕獲対象動物の違い、陥し穴構築の時間差にその差異を求められようが、陥し穴構築の時期はA群と同様に縄文時代前期前葉以前に求められそうである。

C群陥し穴は下位面から検出され、南西から北東に向かって展開する4基の陥し穴から構成される。20mの範囲で半弧を描くような配置になっており、主軸方向のまとまりはない。西から東方向を意識した構築となる。C群のなかで72号土坑の存在は注目された。底面ピットの構造が、十二原II遺跡は勿論のこと、三後沢遺跡・大原II遺跡・村主遺跡検出の陥し穴には認められず、わずかに諏訪遺跡検出の陥し穴に共通性が求められたからである。C群の構築時期は不明であるが、今後、諏訪遺跡の陥し穴を介在させることで構築時期を検討していきたいと思っている。勿論、縄文時代の所産であることには間違いのない事実であろうが。

## 〔6〕 十二原II遺跡の集落変遷

菊池 実

### 1 はじめに

十二原II遺跡からは縄文時代前期前葉以前に構築されたと考えられる3群の陥し穴<sup>\*</sup>計17基、前期前葉関山I式期の住居跡4軒と土坑、中期前半の住居跡7軒と配石遺構・土坑、弥生時代後期の住居跡6軒、等が検出されている。各住居跡内からは土器・石器等が出土しているが、これらの遺物は三後沢遺跡と同様に、土器については総点数・部位別点数を、石器類については器種別点数・石材別点数を記載し、詳細なグラフを作成してある。また周辺グリッド（遺構外）からも各時期にわたる多量の遺物が出土しているが、これら遺物の数量的処理についても、三後沢遺跡と同様に、5×5mのグリッドを基本単位として遺物を取り上げ、総点数、時期別・部位別点数を把握し、そして重量測定を行い1㎡あたりの重量を算出した<sup>\*\*</sup>。これをもとに点数別・重量別の2通りの分布図を作成してある。前期前葉住居跡の広がり<sup>\*\*\*</sup>と土器分布図（第250図）、中期前半の居住域と土器分布図（第252図）、弥生時代後期集落跡と土器分布図（第254図）がこれである。そして各時期における集落構造の把握に努めた。

\* A群陥し穴11基、B群陥し穴2基、C群陥し穴4基である。詳細は〔5〕十二原II遺跡検出の陥し穴群についてを参照していただきたい。

\*\* その目的とするところは、すでに〔3〕三後沢遺跡の集落変遷のなかで述べてある。

### 2 縄文時代前期前葉（関山I式期）の集落

関山I式期の住居は、J-1号住居跡・J-2号住居跡・J-3号住居跡・J-11号住居跡の4軒である。J-3号住居跡の遺存状況は非常に悪く、またJ-11号住居跡もその大半をY-2号住居跡によって壊されているものの、4軒の住居跡はいずれも同一時期に属するものと考えられる。また17号土坑も該期に属するものである。

J-1号住居跡は隅丸方形を呈し、面積約9.5㎡で居住人員に換算すると約2.9人、J-2号住居跡も隅丸方形で、面積約3.7㎡、居住人員は約4.2人となる。J-3号住居跡は完掘できなかったが、隅丸方形を呈するものと考えられ、推定面積約12.6㎡で、居住人員約3.8人となる。J-11号住居跡はその大半を壊されているが、隅丸長方形を呈すると考えられ、現状での面積は約3.22㎡であった。居住可能人員約3～4人程の規模をもつ住居で構成されるのが関山I式期集落の特徴となっている。これは三後沢遺跡の関山II式期集落を構成する住居跡とほぼ同規模であり、関山期にあっては世帯構成員4人程で統一された村落構成原理が働いていたと理解できる。

住居内部構造のうえで特徴的なことは、J-1号住居跡とJ-2号住居跡の南壁下に出入口部と思われる床面の高まりが認められたことである。J-1号住居跡では長径48cm、短径38cmの規模で、床面との高低差は2～5cm程であり、J-2号住居跡では長径50cm、短径44cmの範囲にわたり、約5cm程の床面の高

\* 深さ38cmを測る。

\*\* 詳細は〔3〕三後沢遺跡の集落変遷を参照。

\*\*\* J-7号住居跡、J-6号住居跡第1期、J-3号住居跡の3軒が調査されている。

まりが認められた。そしてこの高まりを狭むようにP<sub>3</sub>（深さ46cm）・P<sub>4</sub>（深さ34cm）の2つのピットが存在することから、これらは出入口部の柱を構成するものになろう。残念ながらJ-1号住居跡では出入口部ピットは1個（P<sub>10</sub>）<sup>\*</sup>しか検出できなかった。ところで、J-1号住居跡検出の10個のピットの配置は、三後沢遺跡J-7号住居跡のそれと非常に共通するものである。すなわち西壁下検出のP<sub>4</sub>・P<sub>7</sub>の2個はJ-7号住居跡のP<sub>11</sub>・P<sub>15</sub>と対応し、東壁下検出のP<sub>6</sub>はP<sub>10</sub>と対応、北壁下から検出されたP<sub>1</sub>はP<sub>7</sub>とそれぞれ対応している。三後沢遺跡J-7号住居跡が関山II式期集落の核<sup>\*\*</sup>としての住居と考えられたが、住居跡構造が十二原II遺跡の関山I式期住居からの系統を引きついだものであることを考えると、その根拠は充分なものとなろう。十二原II遺跡J-2号住居跡には炉体土器が存在し、またJ-11号住居跡には周溝が存在し、こうした内部構造が三後沢遺跡J-7号住居跡に集約された感が強い。その背景には集落の移住などの問題が考えられる。

関山I式期の住居跡間距離は、J-3号住居跡とJ-1号住居跡間約22m、J-1号住居跡とJ-2号住居跡間約25m、J-2号住居跡とJ-11号住居跡間約35mとなり、J-3号住居跡からJ-11号住居跡まで直線距離にして約90mを測る。これが該期における集落規模になるものと考えられる。この集落規模や住居跡間隔は三後沢遺跡の関山II式期集落<sup>\*\*\*</sup>と大きな隔たりはなく、関山I～II式期集落までは集落規模約90m程で、各住居跡間隔20～40m、世帯構成員約4人程で統一された村落構成原理が働いていたものと考えられる。

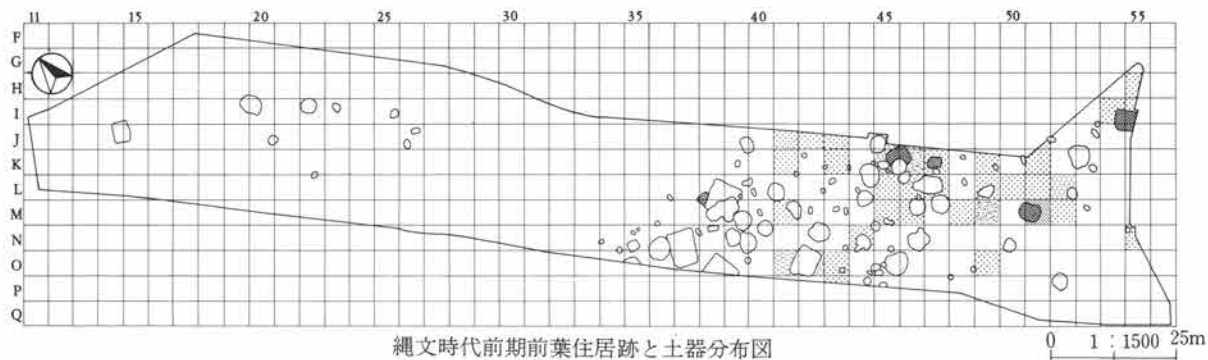
今回の調査は住居跡の配置や土器の点数別・重量別分布図から考えると、集落の南西部を発掘したものとなろう。

### 3 縄文時代中期前半の集落

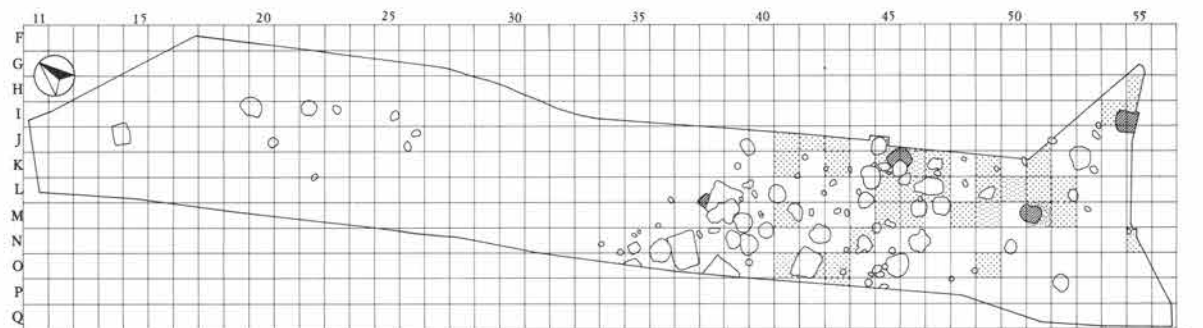
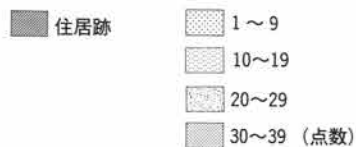
縄文時代中期前半の住居跡は、J-4号住居跡・J-5号住居跡・J-6号住居跡・J-7号住居跡・J-8号住居跡・J-9号住居跡・J-10号住居跡の7軒である。このなかでJ-9号住居跡とJ-10号住居跡は重複関係にある。またJ-4号住居跡・J-6号住居跡は地床炉をもつ住居跡であるが、他の5軒からは炉を検出することはできなかった。各住居跡覆土や周辺グリッドからは中期初頭の五領ケ台式土器、中期前半の阿玉台式土器、勝坂式土器片が出土しているが、住居跡内からの出土は非常に少なかったために、時期決定については困難な部分があった。

J-9号住居跡はJ-10号住居跡によって壊されていること、覆土中の遺物から五領ケ台式土器片が出土していること等から、中期初頭の五領ケ台式期に属すると思われる。またJ-7号住居跡もJ-9号住居跡と同一形態・規模を有することから判断して、該期に属するかもしれない。J-7号住居跡は面積約9.9㎡であり居住人員に換算すると約3人、J-9号住居跡は面積約10.6㎡で居住人員は約3.2人となり、ほぼ同規模の住居跡であり、その形態も不正形と

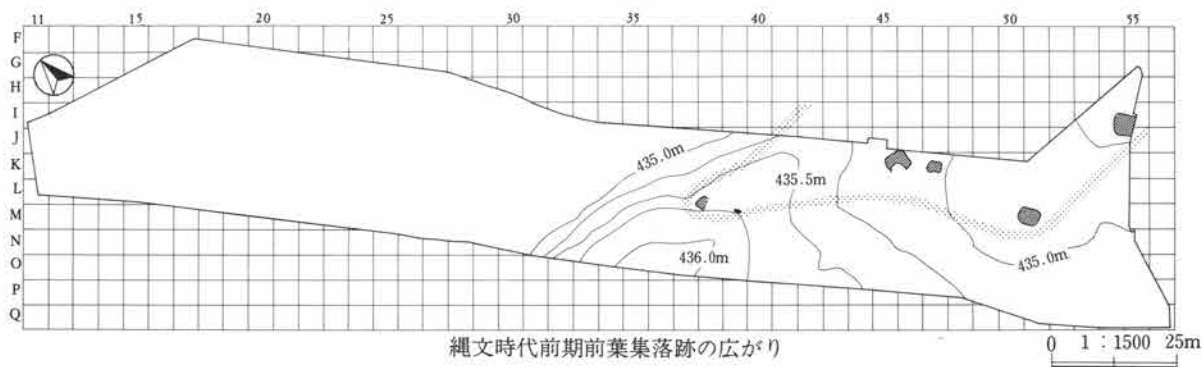
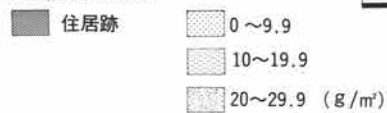




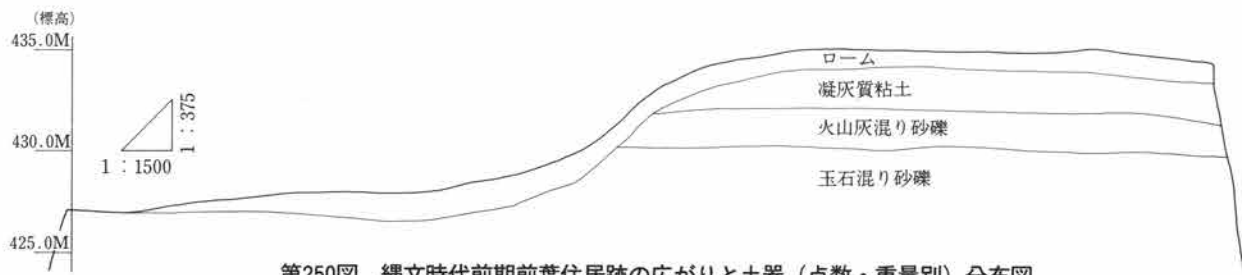
縄文時代前期前葉住居跡と土器分布図



縄文時代前期前葉住居跡と土器重量別分布図



縄文時代前期前葉集落跡の広がり



第250図 縄文時代前期前葉住居跡の広がり と土器 (点数・重量別) 分布図

・ J-7号住居跡は13個のピット、J-9号住居跡では7個のピットが検出されている。

なっている。内部構造では周溝はなく、炉跡も検出されていない。柱穴は複数検出されているが主柱穴の特定はむずかしかった。

なお、J-9号住居跡の覆土からは屋内集石遺構が検出されている。これは廃絶後の窪地化した住居跡に人為的に形成されたものであり、集石を構成する礫は、長さ17cm・幅約8cmの大きさに集中していた。そして火熱を受けた痕跡の認められたものは、検出礫16個中6個であった。この集石遺構の規模は長さ120cm・幅40cmであるが、礫の集中する範囲は若干狭まり、長さ80cm・幅40cmとなる。周辺からは焼土・灰・炭化物等は認められなかった。廃屋墓の一種と考えられるものであろう。

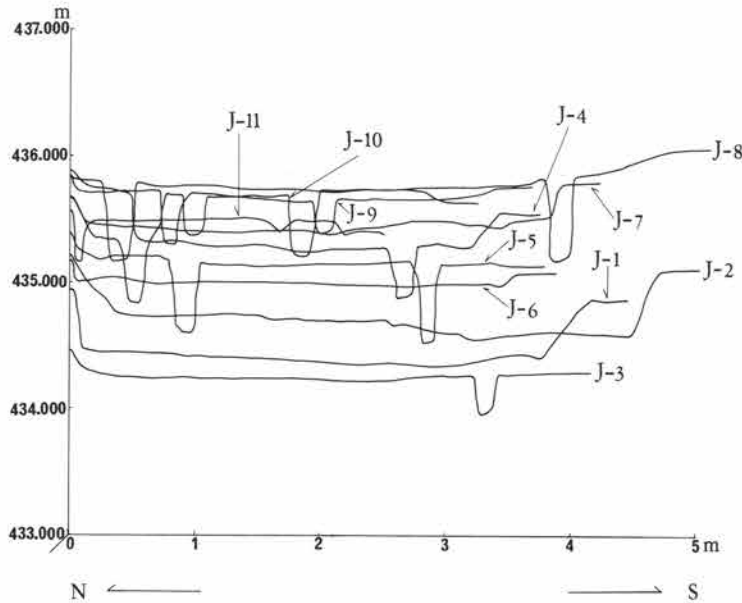
J-5号住居跡・J-8号住居跡・J-10号住居跡は中期前半の阿玉台II式期の住居跡と考えられる。J-5号住居跡からは土器片は全く出土しなかったが、住居形態・構造から判断して阿玉台II式期の基本タイプ<sup>\*\*</sup>の住居跡となろう。

\*\* 石塚和則氏（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）の御教示による。

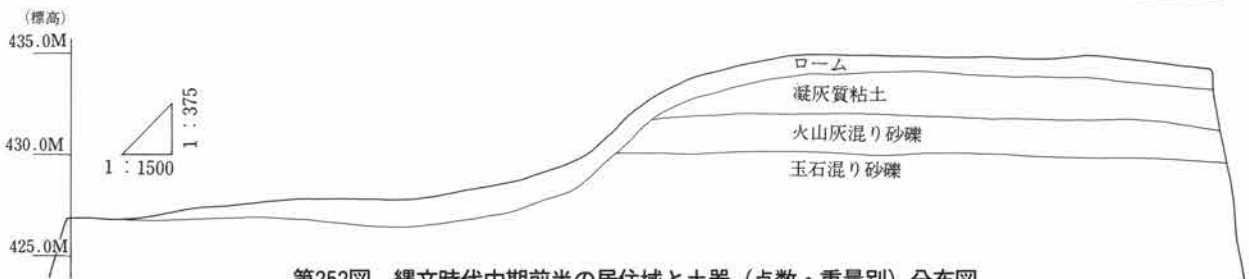
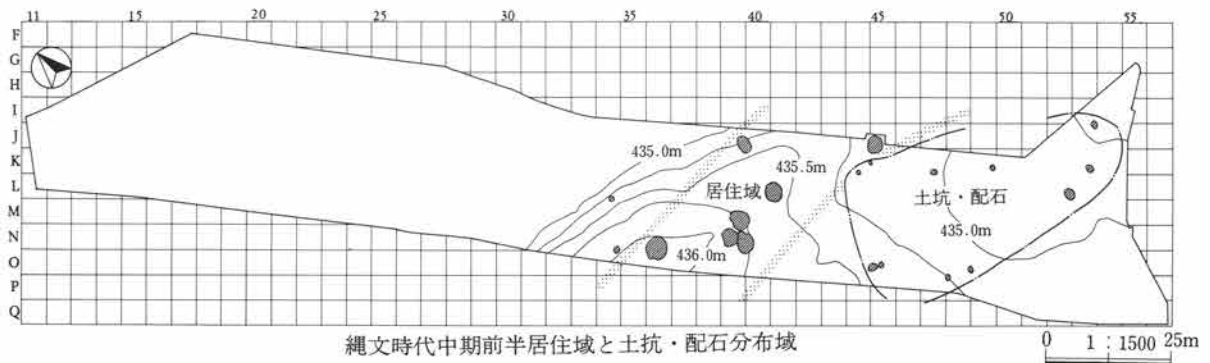
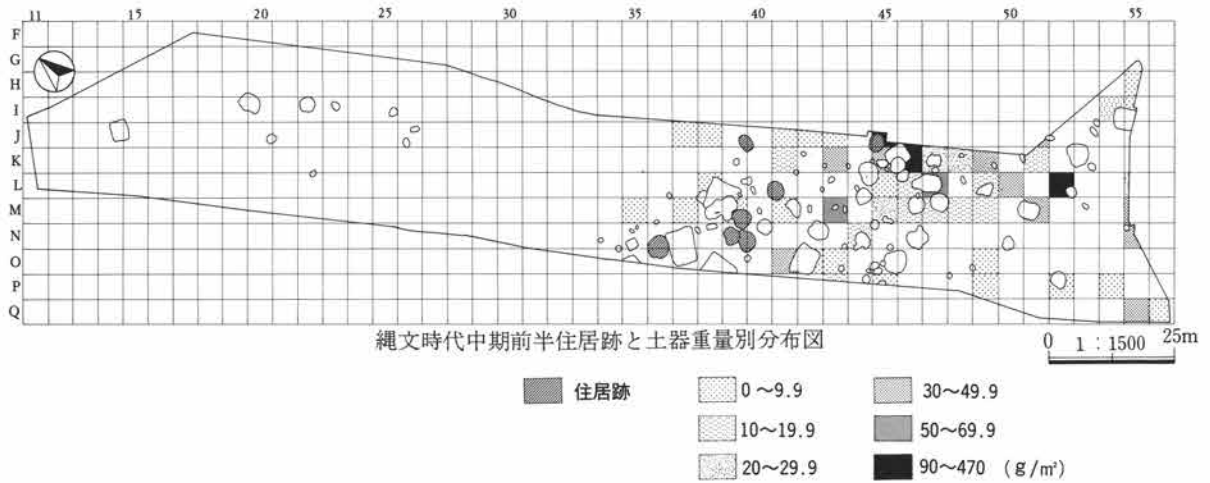
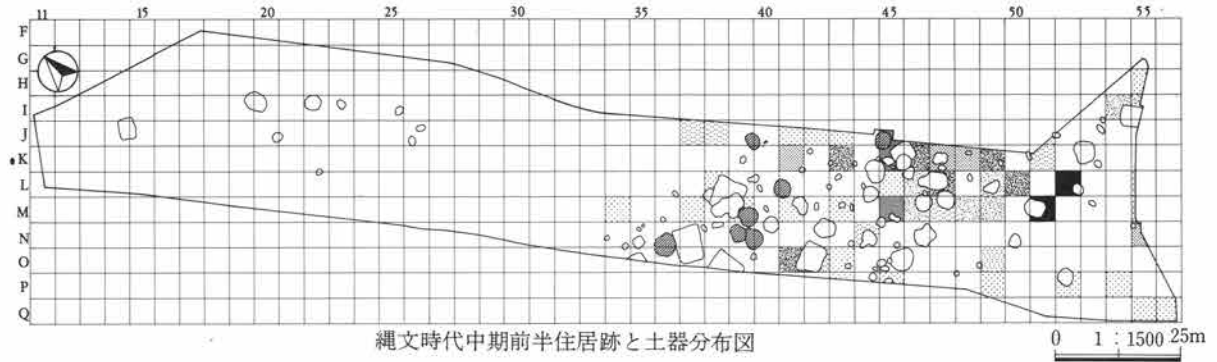
J-8号住居跡からは阿玉台II式の床面倒置土器が出土している。甕被葬と考えられるものであり床面に配置されていることからみても、被葬者はこの竪穴住居跡の構成員であったと推測できる。さらにこの種の土器が、丸石・顔面把手とセット関係にあることは注目してよい。丸石についての論文等は現時点では皆無に近いが、わずかに『季刊どるめん』No28 1981誌上で、民俗学研究者の中沢厚・島亨の2名と、考古学研究者の武藤雄六・小林公明・平出一治の3氏が参加して行われた座談会「丸石神と考古学」のなかで、縄文時代の丸石について簡単にふれている。

すなわち

①出土する時期は縄文時代前期末と中期後半から後期にかけて。



第251図 十二原II遺跡・縄文時代住居跡の床面レベル (1/60)



②丸石を出土する竪穴住居跡は祭祀的要素の強い家。

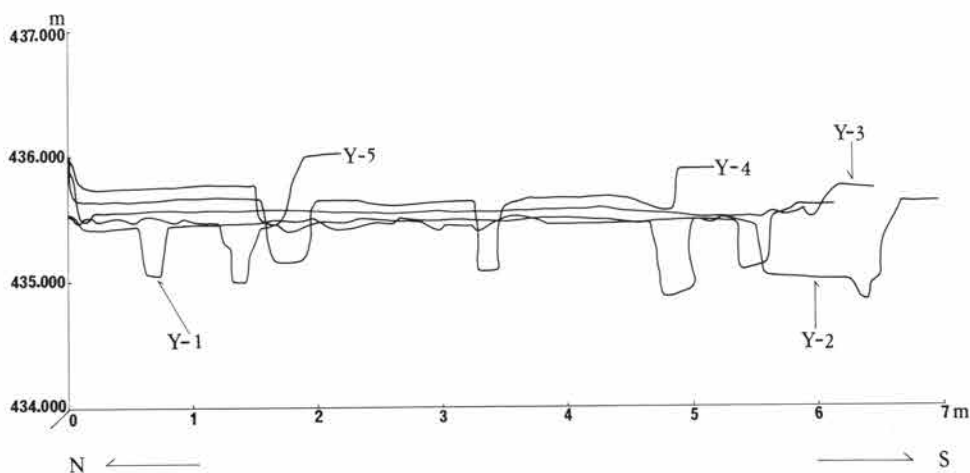
③丸石の祭祀形態は縄文前期では住居の外に、中期後半から住居の中に入って屋内祭祀に変わる。

という発言である。そして縄文時代前期例として長野県大町の上原遺跡や松川町の有明山社遺跡、さらに富士見町の机原遺跡を挙げているが、いずれも単発資料である。群馬県内における該期資料例は現在のところ知られていないと思う。中期例は長野県居平遺跡、唐渡宮遺跡、原村の居沢尾根遺跡、前尾根遺跡、茅野市では中原遺跡と下ノ原遺跡、川上村の大深山遺跡を挙げる事ができる。

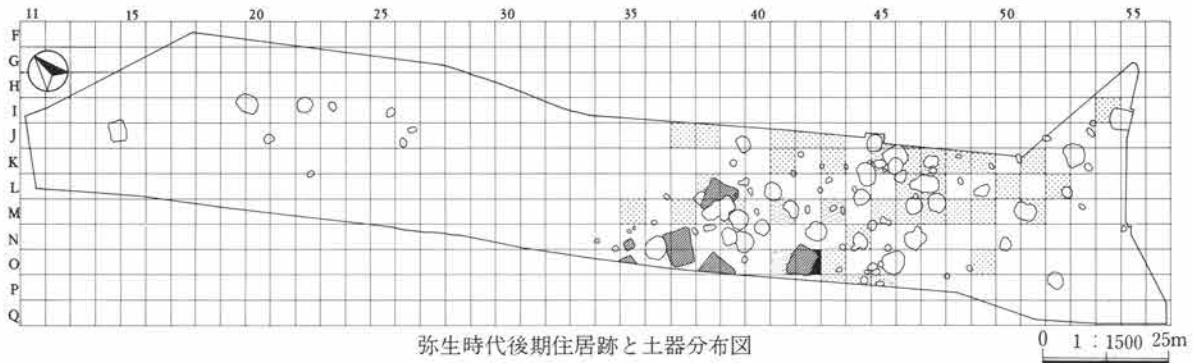
\* 八幡一郎『大深山遺跡』1976  
川上村教育委員会

このなかで八幡一郎の報告された大深山遺跡例は注目に値する。本遺跡からは直径20～30cm内外の球状の自然石が、第11・20・22・24・25・28・31・32・37号住居跡から出土し、37号住居跡からは2個、また第24号住居跡のそれは一部を水平にして座りやすいように加工され、周囲も幾分敲打して形を整えた形跡があるという丸石である。大深山遺跡例もJ-8号住居跡例と同様に、丸石の単独出土例ではなくて、特殊な遺物(?)との同伴関係を有している。たとえば第11号住居跡は「北壁に近く2つの土器が伏せてあった。また西寄りには不整形の扁平石が4個、南寄りに大きな丸石・扁平石・割石3個が据えられてあった」。また第22号住居跡は床面南側に伏せられた甕、北壁に近く炉の東北の床面に丸石が据えられていた。第32号住居跡では「石列の左端のものと並んで、顔面把手が縁に置かれてあった。そして穴の東寄りには1個の甕が直立している。顔面把手は明白に勝坂式土器に付属するものであるのに、直立する甕は口辺・底部を欠く加曾利E式の破片であった。この竪穴の作られたのは後者の土器の時期であろう。この楕円穴の斜め横に、第31号や第25号にあったような球形の石が、床上15cmに据っていた」とそれぞれ報告されている。

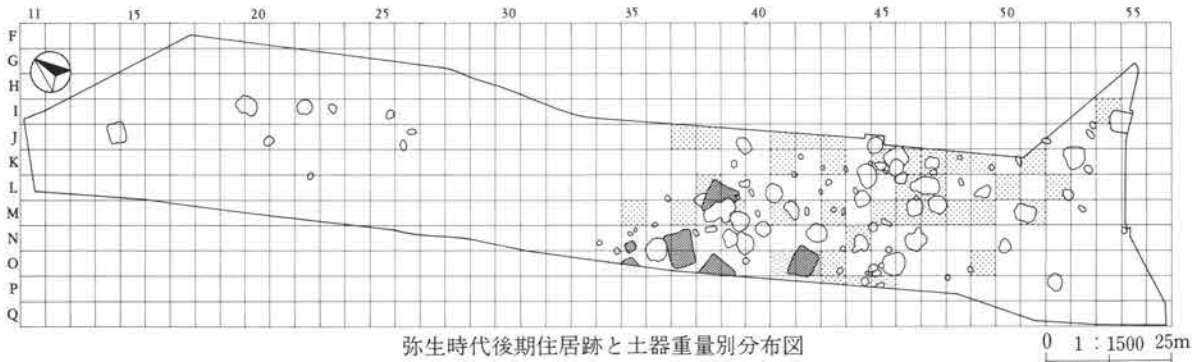
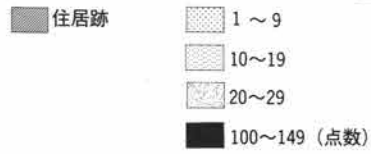
このように丸石の単独出土例ではなくて、床面倒置土器（大深山遺跡報告の伏甕）や顔面把手と出土すること、この三者の間に非常に密接な関係があるこ



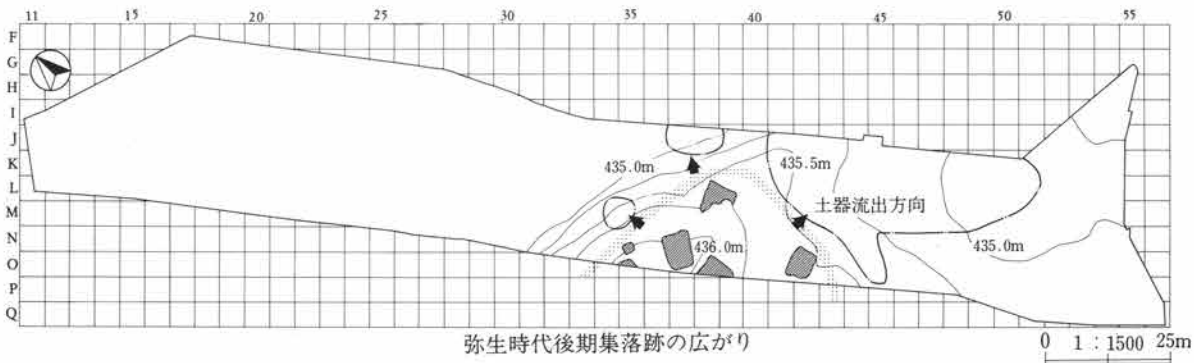
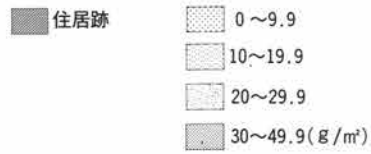
第253図 十二原II遺跡・弥生時代住居跡の床面レベル (1/60)



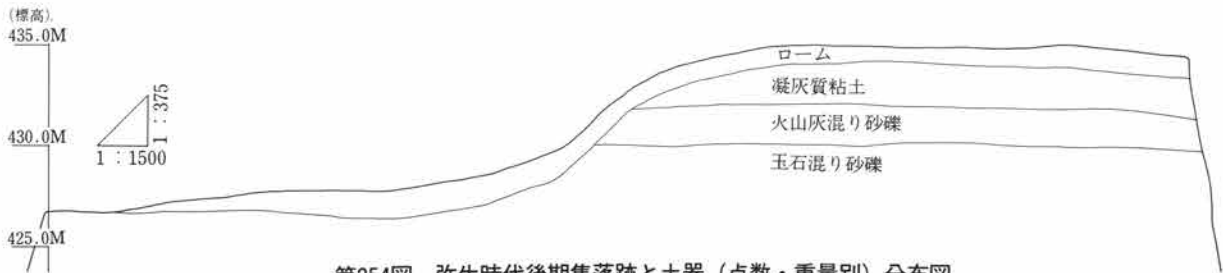
弥生時代後期住居跡と土器分布図



弥生時代後期住居跡と土器重量別分布図



弥生時代後期集落跡の広がり



第254図 弥生時代後期集落跡と土器 (点数・重量別) 分布図

とがわかる。とりわけ丸石は床面倒置土器と対になるようである。このように丸石の用途は葬制と非常に密接なかかわりをもっていたことがわかる。今後丸石の用途解明には出土状況の再吟味を必要としよう。

J-10号住居跡はその形態や内部構造がJ-8号住居跡と酷似しているが、規模は小型化している。阿玉台II式期の住居跡3軒には炉跡は全く検出されず、床面にはその痕跡すら認められなかった。該期住居跡の大きな特徴となっている。

こうした住居跡は分布図からもわかるように、土坑・配石分布域の北側に位置し、東から西に帯状に分布している。そしてその南側（内側）に土坑・配石から構成される分布域が認められ、中期集落の典型的な姿となっている。この土坑・配石分布域には、土壙墓・配石墓と考えられる9基の土坑と4基の貯蔵穴が検出されている。明確な配石墓は26号土坑のみであるが、完形土器が出土している3号土坑・4号土坑、焼礫・焼土が出土している5号土坑・6号土坑、石皿や礫の出土している29号土坑・37号土坑・38号土坑、そして中期土器片が出土した28号土坑も、形態や規模、覆土の状態から判断して土壙墓となるものであろう。4基の貯蔵穴<sup>\*</sup>については、残念ながらその所属時期は不明であった。

\* 8号土坑・13号土坑・66号土坑・68号土坑の4基である。

配石は環状構造をとるものと思われ、長径22m、短径18mの範囲に礫が散漫的に配置されている。この礫の配置を仔細に検討すると、内側と外側に配置された礫群に分解できる。内側は8×6m程の規模を有し、外側は22×18mの規模となっている。そしてこの配石間に焼土の堆積2ヶ所が認められた。いずれも1×0.65m程の範囲であり、掘り込みは確認できなかった。内側の配石には、26号土坑（配石墓）が、外側の配石には屋外埋設土器遺構が存在するなど、特徴的である。この配石遺構は北西部分で途切れて、中期前半の居住域と結ばれるなど非常に興味深い構造となっている。そしてこの配石を取り囲むように縄文時代の土坑が存在することも重要な事実であろうと思われる。

\*\* 中期末以降の配石遺構については複数の調査例がある。

このような中期前半期の配石遺構は、現在のところ県内にはその類例は知られていないと思われる。今後、他県の事例を<sup>\*\*</sup>集成し該期の集落構造の検討を続けていきたい。

なお、弥生時代後期の集落構造については、〔4〕弥生時代の遺構と遺物についてを参照していただきたい。

最後になりましたが、本文を草するにあたり、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 石塚和則・細田 勝の両氏、國學院大學大学院特別研究生 本橋恵美子氏にお世話になりました。記して感謝いたします。

グリッド別出土土器一覧表

(1) 縄文時代前期(織維)土器片

グリッド	重量 (g)	面積 (m <sup>2</sup> )	g/m <sup>2</sup>	総数	部 位			備 考
					口縁部	胴部	底部	
H-55	20	15	1.3	2		2		
I-54	33	25	1.3	3		3		
I-54・55	7	50	0.1	1		1		J-3住
I-55	17	10.6	1.6	2		2		J-3住
J-41~43	40	45	0.9	1		1		
J-45	9	10.6	0.8	2		2		
J-46	23	2.5	9.2	1		1		
J-51	9	3.1	2.9	1		1		
J・K-46	21	28.1	0.7	2		2		J-2住
K-41	11	25	0.4	1		1		
K-43	55	25	2.2	8	1	7		
K-45	130	25	5.2	11	1	10		J-2住
K-46	433	25	17.3	25	1	22	2	J-2住
K-47	41	25	1.6	2		2		17号土坑
K-49	67	22.5	3.0	7	1	6		
K-51	86	22.5	3.8	6	1	5		
L-45	29	25	1.2	2	1	1		
L-46	50	25	2.0	4	2	2		
L-47	63	25	2.5	3	1	2		
L-49	188	25	7.5	9	1	7	1	
L-50	292	25	11.7	9	1	7	1	
L-51	83	25	3.3	9		9		
L-52	86	25	3.4	10	1	8	1	
M-41	3	25	0.1	1		1		
M-45	23	25	0.9	1		1		
M-46	80	25	3.2	3		3		
M-48	80	25	3.2	5		5		
M-49	490	25	19.6	24	2	21	1	
M-51	520	25	20.8	39	30	8	1	J-1住
M-52	30	25	1.2	3		3		
N-44	33	25	1.3	1		1		
N-55	20	13.1	1.5	1		1		
O-41	160	25	6.4	10		10		
O-42	242	25	9.7	14		14		
O-43	78	25	3.1	1		1		
O-49	133	25	5.3	4		4		
P-43	10	6.9	1.4	1		1		
その他	551			37	6	31		
	4246	854.9		266	50	209	7	

(2) 縄文時代中期土器片

グリッド	重量 (g)	面積 (m <sup>2</sup> )	g/m <sup>2</sup>	総数	部 位			備 考
					口縁部	胴部	底部	
H-55	11	15	0.73	2		2		
I-54	337	25	13.5	28	3	25		
I-54・55	391	50	7.8	21	2	18	1	
I-55	459	10.6	43.3	28	1	26	1	
J-37・38	745	46.9	15.9	39	6	30	3	
J-41~43	151	46.3	3.3	14		14		
J-45	1041	10.6	98.2	41	9	30	2	J-6住
J-46	1175	2.5	470.0	87	10	75	2	

グリッド	重量 (g)	面積 (m <sup>2</sup> )	g/m <sup>2</sup>	総数	部 位			備 考
					口縁部	胴部	底部	
J-51	149	3.1	48.1	9		9		
J・K-46	501	28.1	17.8	31	5	26		
K-41	414	25	16.6	33	2	31		
K-43	1193	25	47.7	55	10	40	5	
K-45	961	25	38.4	55	11	40	4	28号土坑
K-46	2178	25	87.1	105	18	83	4	
K-47	691	25	27.6	35	6	26	3	26号土坑
K-48	667	22.5	29.6	31	7	23	1	
K-49	871	22.5	38.7	55	9	45	1	13号土坑
K-51	316	22.5	14.0	14	4	10		
L-38	49	25	2.0	4		3	1	
L-45	47	25	1.9	2		2		
L-46	489	25	196	24	2	19	3	
L-47	1403	25	56.1	60	7	49	4	
L-49	391	25	15.6	21	3	18		
L-50	817	25	32.7	80	19	56	5	
L-52	2323	25	92.9	127	17	106	4	5号土坑
L-55	79	3.1	25.5	4		4		
M-35	38	25	1.5	2		2		
M-37	9	25	0.4	1	1			
M-39	34	25	1.4	3		3		J-7住
M-41	14	25	0.6	2		2		
M-43	139	25	5.6	8		7	1	
M-45	678	25	27.1	44	8	35	1	
M-46	306	25	12.2	22	3	19		
M-47	405	25	16.2	15	4	9	2	
M-48	347	25	13.9	20	2	18		
M-49	432	25	17.3	28	2	25	1	
M-51	1164	25	46.6	131	19	108	4	
M-55	148	3.8	38.9	9	2	7		
N-44	251	25	10.0	18	5	12	1	
N-55	454	13.1	34.7	34	4	30		
O-41	1060	25	42.4	69	5	60	4	
O-42	222	25	8.9	16	2	12	2	
O-43	70	25	2.8	4		4		
O-49	199	25	8.0	13		13		3号土坑
P-43	99	6.9	14.3	6	3	3		
P-45	71	11.9	6.0	6		6		
P-49	29	16.3	1.8	3		3		
P-52	71	23.1	3.1	7		7		
P-54	65	25	2.6	7	2	5		
Q-55	100	3.1	32.3	6		6		
Q-56	22	2.5	8.8	3		3		
その他	1511			87	22	61	4	
	25787	1114.4		1569	235	1270	64	

(3) 弥生時代土器片

グリッド	重量 (g)	面積 (m <sup>2</sup> )	g/m <sup>2</sup>	総数	部 位			
					口縁部	頸部	胴部	底部
I-54	3	25	0.1	1			1	
J-37・38	83	46.9	1.8	10	1	3	6	

グリッド	重量 (g)	面積 (m <sup>2</sup> )	g/m <sup>2</sup>	総数	部 位				
					口縁部	頸部	胴部	脚部	底部
J-41~43	103	46.3	2.2	17				17	
J-45	43	10.6	4.1	9		1		8	
J-46	52	2.5	20.8	10	3			7	
J・K-46	93	28.1	3.3	12	1			9	2
K-41	50	25	2.0	5				5	
K-43	39	25	1.6	6				6	
K-45	172	25	6.9	13		1		12	
K-46	45	25	1.8	4	1			3	
K-47	72	25	2.9	11	3			8	
K-48	130	22.5	5.8	8	3	1		4	
K-49	44	22.5	2.0	4		2		2	
K-51	1	22.5	0.04	1				1	
L-38	105	25	4.2	5	2			2	1
L-46	17	25	0.7	2				2	
L-47	105	25	4.2	4		1		1	1
L-50	37	25	1.5	1				1	
L-52	4	25	0.2	1		1			
M-35	24	25	1.0	4				3	
M-37	12	25	0.5	2	1			1	
M-39	93		3.7	1					1

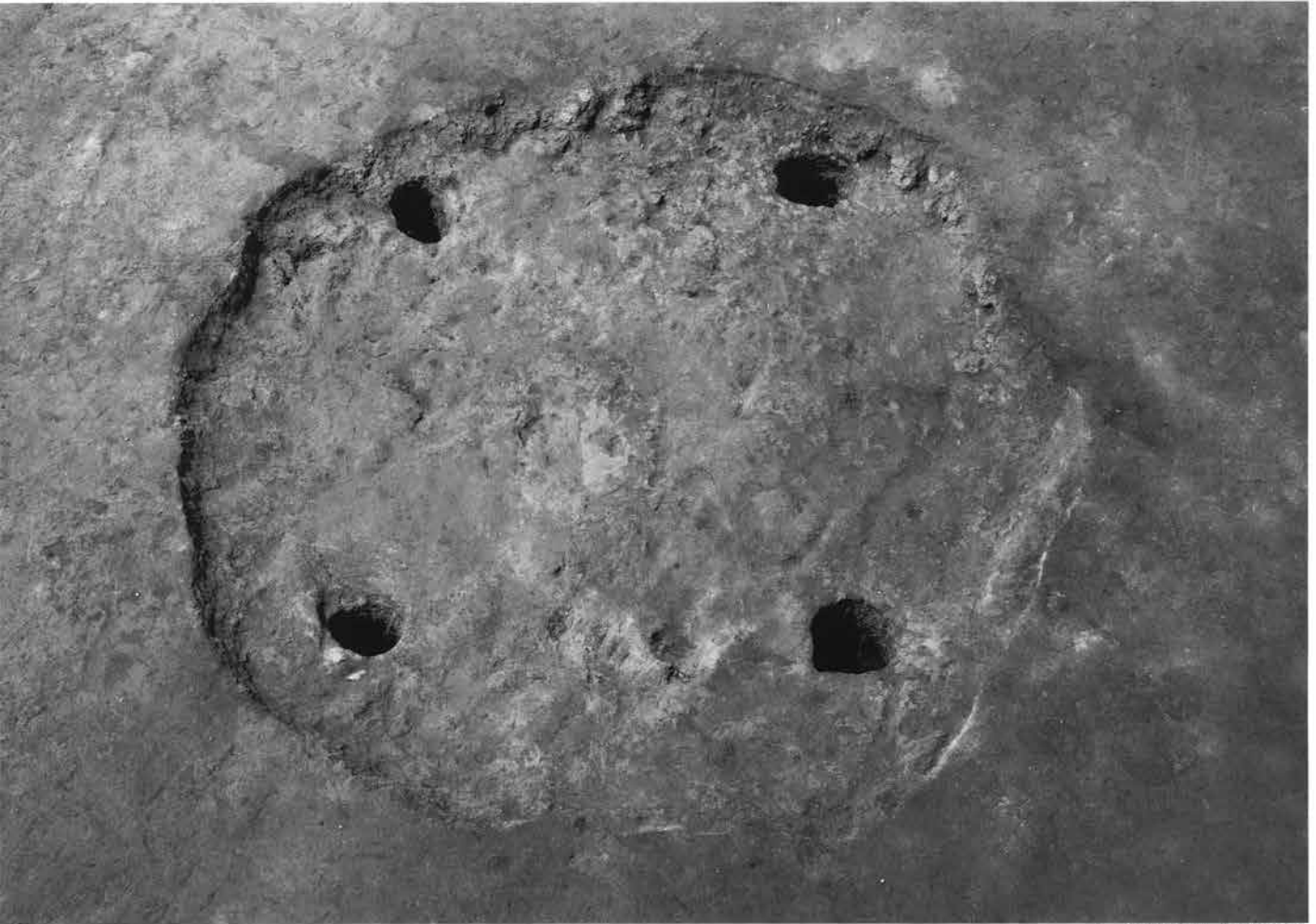
グリッド	重量 (g)	面積 (m <sup>2</sup> )	g/m <sup>2</sup>	総数	部 位				
					口縁部	頸部	胴部	脚部	底部
M-41	99	25	4.0	11				11	
M-43	83	25	3.3	10				8	2
M-45	32	25	1.3	5				5	
M-46	82	25	3.3	9	3			5	1
M-47	18	25	0.7	2				2	
M-48	37	25	1.5	6	1			5	
M-49	58	25	2.3	5	2			2	1
M-51	65	25	2.6	6	2			4	
N-44	10	25	0.4	2	1			1	
O-41	340	25	13.6	27	2	6		15	3
O-42	1018	25	40.7	139	25	7		105	2
O-43	24	25	1.0	4	2			2	
O-49	109	25	4.4	7	1	2		3	1
P-43	22	6.9	3.2	4	1			3	
P-44	57	7.5	7.6	6		2		4	
P-45	161	11.9	13.5	24	2	2		18	2
その他	14			2				2	
	3556	903.2		400	58	29	294	8	11



# PLATES

三後沢遺跡 (遺構 PL.1~PL.21)  
(遺物 PL.40~PL.62)

十二原Ⅱ遺跡 (遺構 PL.22~PL.39)  
(遺物 PL.62~PL.71)



J-1号住居跡（北東から）



4号土坑（南から）



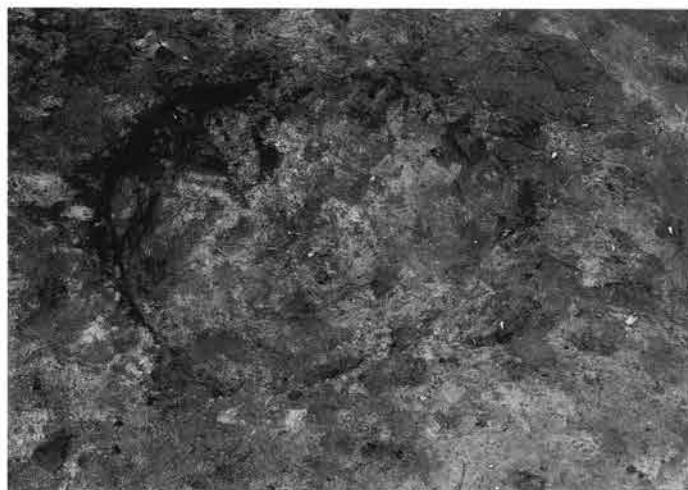
19号土坑（東から）



2号土坑（東南から）



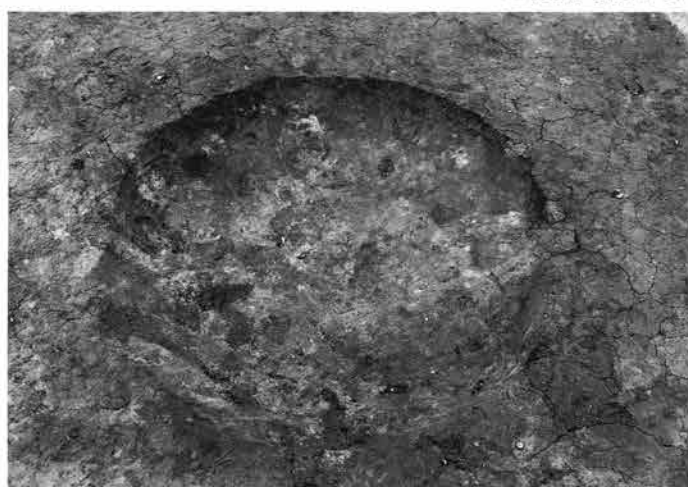
6号土坑（東南から）



11号土坑 (東南から)



12号土坑 (東南から)



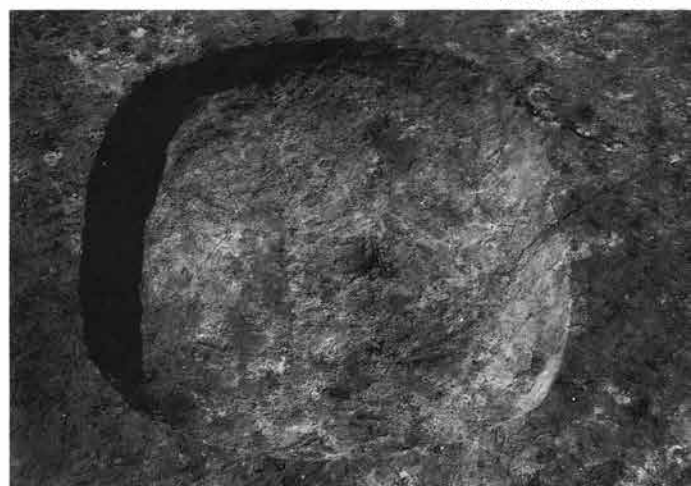
13号土坑 (東南から)



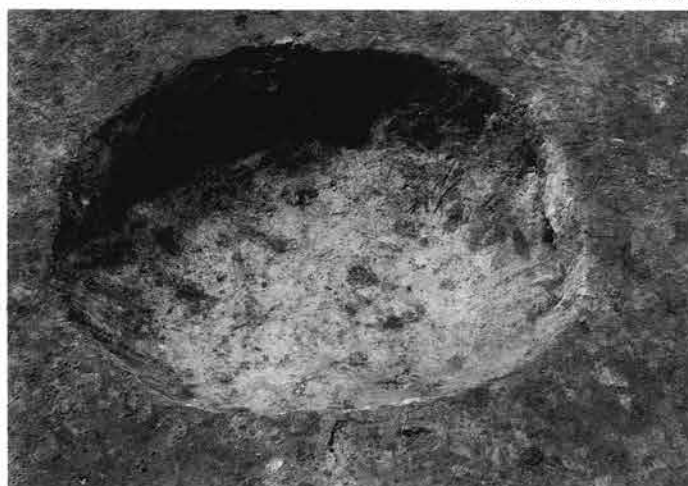
14号土坑 (東南から)



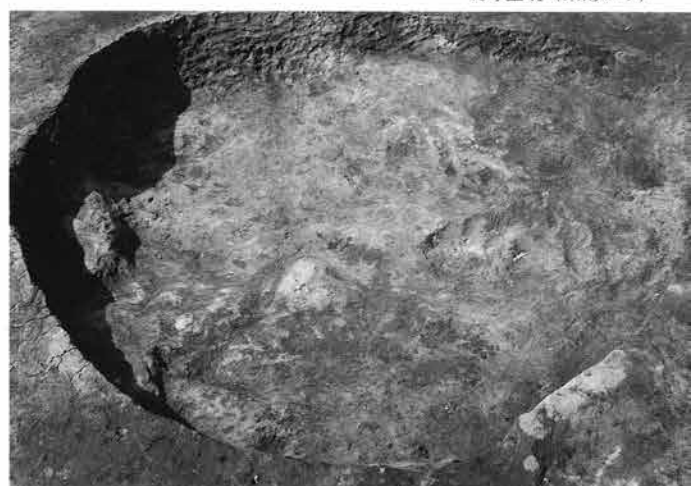
15号土坑 (東南から)



16号土坑 (東南から)



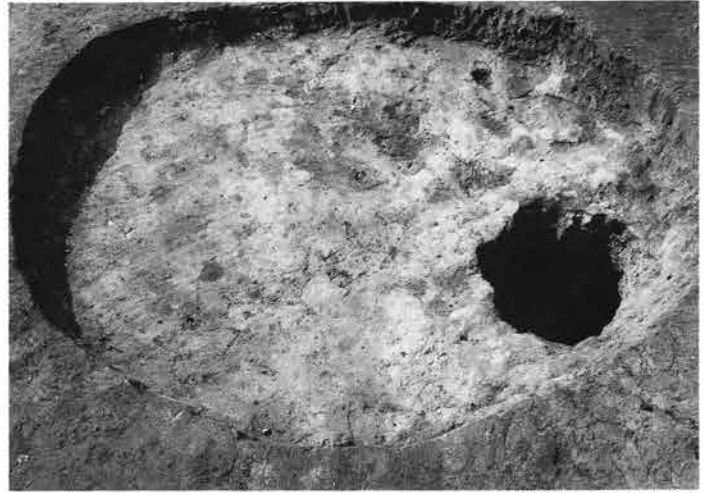
17号土坑 (東南から)



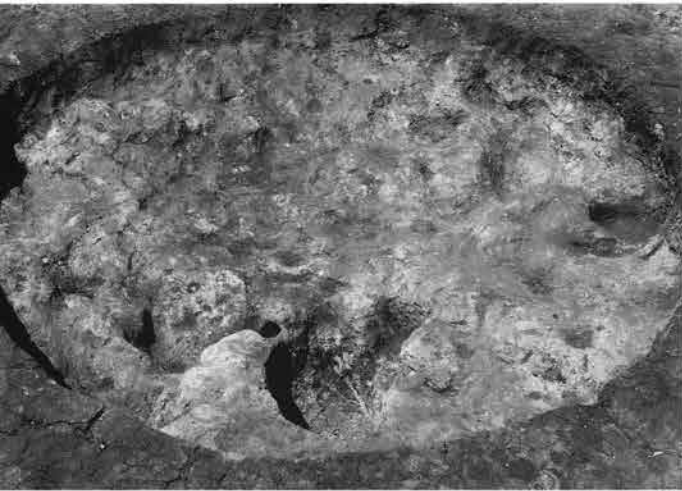
18号土坑 (南から)



23号土坑 (北東から)



24号土坑 (東南から)



27号土坑 (東から)



28号土坑 (南から)



29号土坑 (東から)



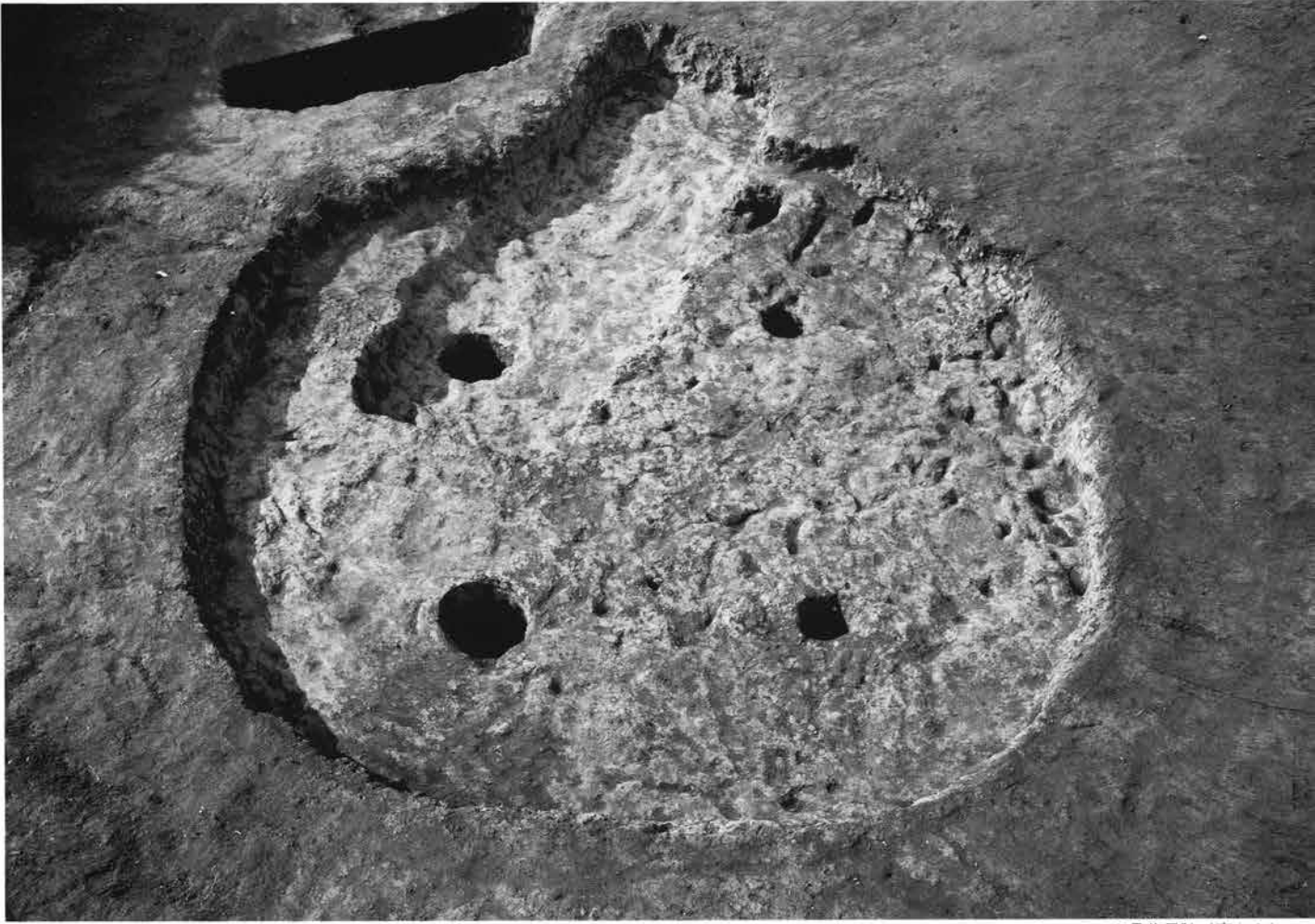
32号土坑 (東南から)



33号土坑 (東南から)



34号土坑 (南から)



J-2号住居跡（南から）



J-3号住居跡（南から）



1



1. J-4号住居跡(北東から)
2. 調査スナップ(南東から)

縄文時代前期中葉の有尾系土器を多量に出土した大型の住居跡である。1回の拡張が行われているが、拡張前の規模は長辺8.25m、短辺は北壁で4.7m、中央で4.8m、南壁で5.3mの台形を呈し、面積約34.2㎡である。拡張後は長辺9.4m、短辺は北壁で4.7m、中央で5.4m、南壁で6.0mの台形を呈し、面積約40.1㎡となる。居住人員に換算すると拡張前約10.4人、拡張後約12.2人となり、約1.8人の増員。

当住居跡はJ-5号住居跡、J-6号住居跡第4期と同時期集落を構成する住居であるが、その存続期間については他の住居跡よりも長かったと思われる。

〔遺構 pp.39-47 遺物 pp.47-98〕

2



1

1. J-4号住居跡遺物出土状況(北東から)  
2. // (西から)

当住居跡から出土した遺物は、半完形品・大形破片28個体、土器片3,384点、石器類1,616点であり、覆土第1・2層から集中的に検出された。とりわけ第2層では大形破片・半完形品が多かった。遺物の平面的分布は住居北半分で非常に少なく、南半分に集中的に出土している。住居が廃絶され、覆土が順次堆積した後に多量の遺物が投棄されたり、または自然営力により流入したものであろう。この段階では住居跡は擂鉢状を呈しており、壁際で埋没(覆土)が進行しているものの住居中央部から南壁寄りにかけては、床面がほぼ露出にちかい状態であったと思われる。住居の埋没土は、セクション図から判断すると、とりわけ北壁から西壁部分で堆積が早く進行していた模様である。遺物の平面的分布が南壁部分で広範囲な分布を示し、住居跡中央部に向かうにつれて先細りの分布を示すのは、埋没土の堆積状況と合地するものである。

なお、1の写真は小破片を除いて大形破片を中心に撮影したものである。



2



1・2. J-4号住居跡遺物出土  
状況(北から)

3. // (北東から)

1



2



3

出土した土器片 3,384点のうち部位別点数は、口縁部片 261点、頸部片199点、胴部片2,805点、底部片 119点である。土器(部位別)の平面的分布をみると、口縁部・底部片の集中する範囲を読みとることができる。さらに大形破片・半完形品の個体別出土状況とあわせ考えると、住居跡内の投棄場所を少なくとも3ブロック想定できるものと思われる。第1ブロックは住居跡中央部分に認められる。第2ブロックは住居南西コーナー内側約1.3mのところから北へ3mの楕円状に延びる一群。第3ブロックは住居東南コーナー内側約1.2mのところから北西方向へ3mの楕円状に延びる一群である。





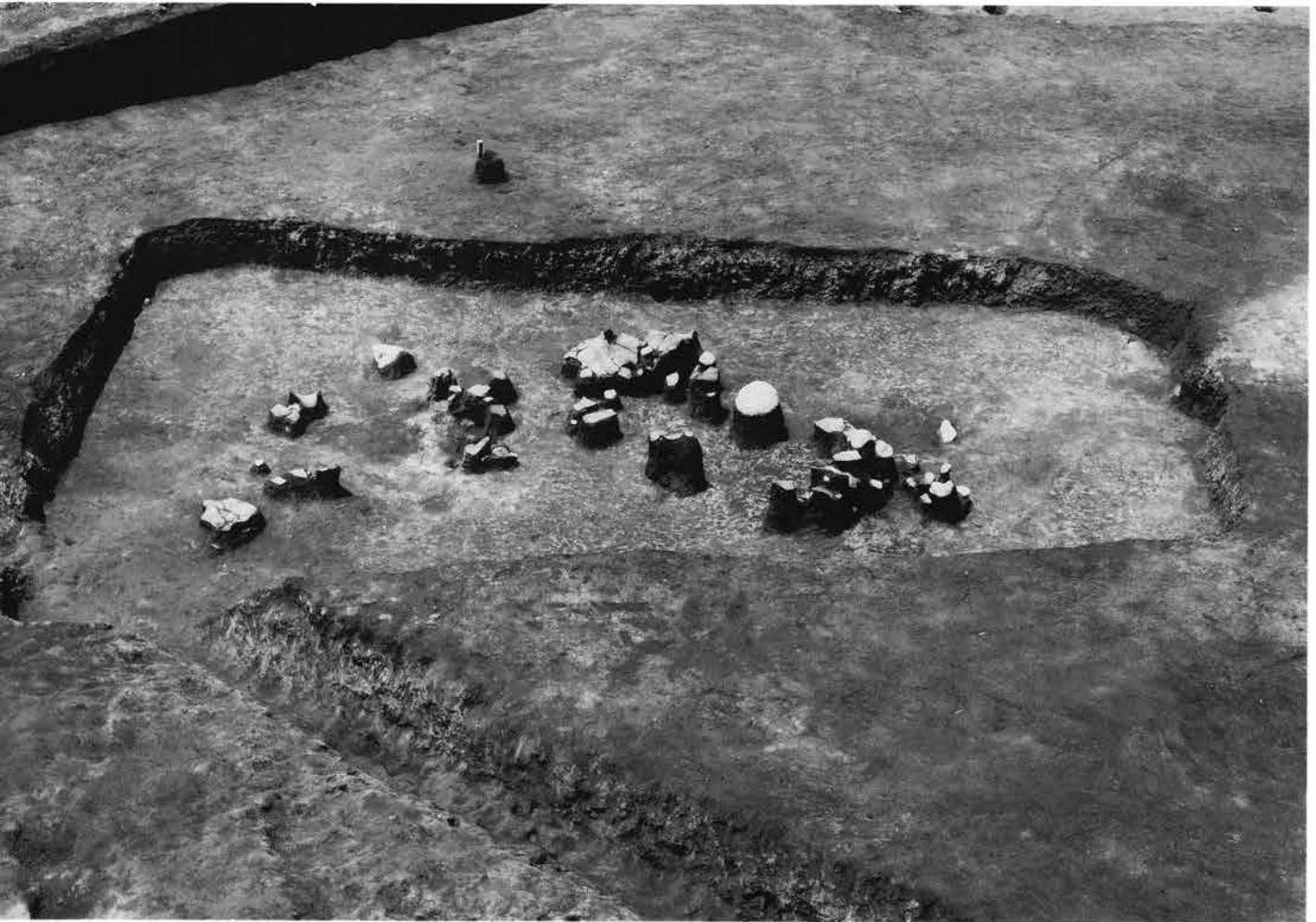
1

1. J-5号住居跡(北東から)
2. // 炉 (南東から)

縄文時代前期中葉の有尾系土器を多量に出土した大型の住居跡。J-4号住居跡、J-6号住居跡第4期と同時期集落を構成する。規模は長辺8.62m、短辺は北壁で4.09m、中央で4.43m、南壁で5.01mの北に向かって狭まる台形を呈している。面積約32.5㎡であるから、居住人員は約9.9人となる。J-4号住居跡の拡張前住居跡とほぼ同一の規模である。炉跡は床面を掘り窪めた地床炉であり、北端に礫1個を配置していた。  
〔遺構pp.99～106 遺物pp.107～153〕



2



1



2

## PL.9 1・2

J-5号住居跡遺物出土状況  
(北東から)

## PL.10

1. 廃棄第2ブロック(東南から)
2. 廃棄第2ブロック(北東から)
3. 廃棄第1ブロック(西から)



1

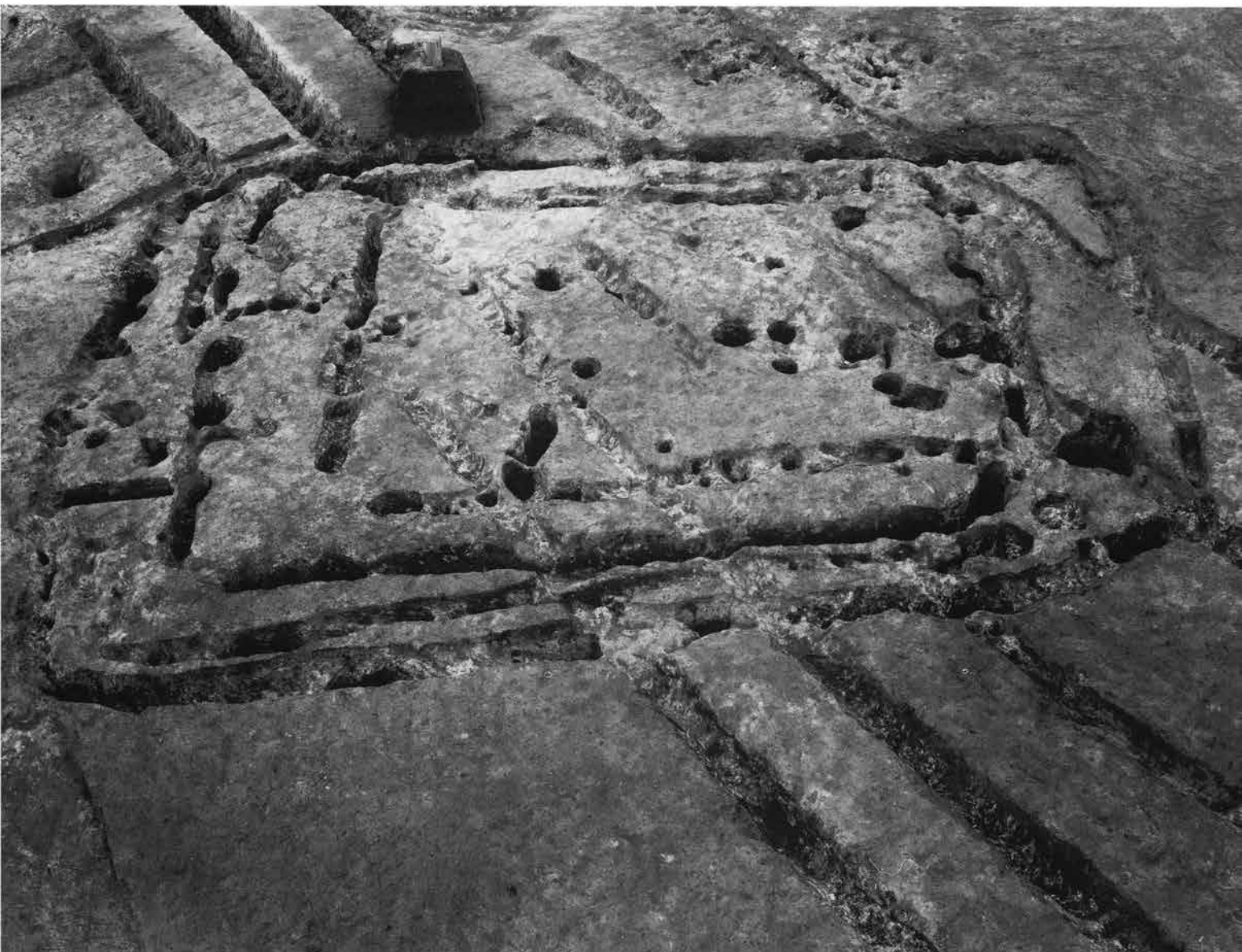


2



3

当住居跡覆土から出土した遺物は、完形品・半完形品38個体、土器片3,647点、石器類1,816点であり、覆土第1～5層にかけて集中的に検出された。とりわけ第4層からは完形品・半完形品が多量に出土している。遺物の平面的分布は、住居各コーナーや壁際部分に空白部があるものの覆土から万遍なく出土しているが、完形品を中心とした3つの廃棄ブロックを想定できる。第1ブロックは住居跡北東部分に認められ、半完形品を中心にまとまっている。第2ブロックは住居跡中央部やや西壁寄りに認められ、完形品・半完形品を中心にまとまり、第3ブロックは住居跡南壁寄りに広範囲に認められる一群である。



1



1. J-6号住居跡(東から)
2. // 炉 (南から)

縄文時代前期中葉の有尾系土器を多量に出土した大型の住居跡である。J-4号住居跡、J-5号住居跡と同時期集落を構成する。当住居跡は3回の拡張が行われているために、第1期から第4期に分けて考えることができる。第1期は拡張前の住居跡で面積約14.3㎡で居住人員約4.3人。第2期は1回目の拡張が行われた住居跡で、面積約21.6㎡で居住人員約6.5人。第3期は2回目の拡張が行われた住居跡で、面積約25.4㎡で居住人員約7.7人。第4期は拡張の終了した最終の住居跡で、面積約38.3㎡で居住人員約11.6人となる。

この拡張では断絶を認めるよりも積極的に継続使用を考えた方がよいかもしれない。勿論、継続使用の場合でもそこには断続使用も考慮していかなければならない。すなわち集落の移住に伴う廃棄—修復のサイクルを想定した場合。(遺構pp.154~159 遺物pp.160~175)

2

1. J-7号住居跡(南西から)
2. J-7号住居跡  
遺物出土状況(南西から)
3. // 住居跡炉(南西から)



1



2

縄文時代前期前葉の関山式土器を出土した住居跡である。規模は長辺4.6m、短辺3.24mの隅丸方形を呈するが、北壁で若干狭まっているようである。面積約12.3㎡であるから、居住人員は約3.7人となる。

当住居跡とJ-3号住居跡・J-6号住居跡第1期は、縄文時代前期前葉の関山式期に同時期集落を構成するものと考えられる。いずれの住居跡も南側に出入口部をもっている。

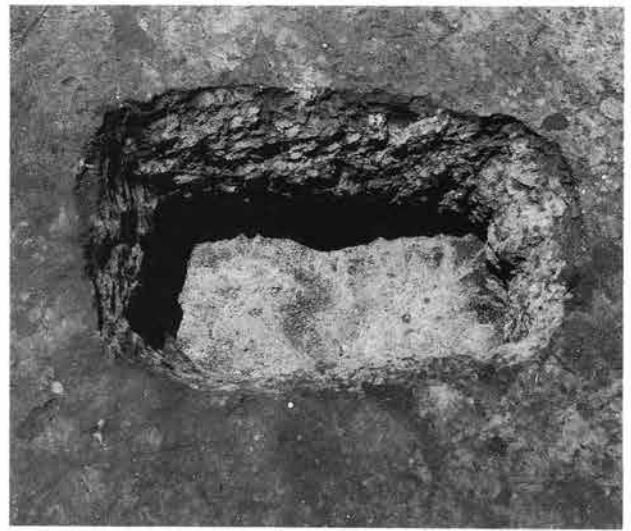
三後沢遺跡第2遺構群のなかで、最初の集落が営まれたのは縄文時代前期前葉関山式期であった。この際、集落の基礎作りに中心的役割を担ったのはJ-7号住居跡であろう。そしてこの住居跡から派生した世帯が、J-6号住居跡第1期とJ-3号住居跡であり、同時期集落を形成していった。世帯分立の背景には配偶者の獲得がまず考えられる。少なくとも前期前葉の集落にあっては、世帯構成員4人程で統一された村落構成原理が働いていたものと理解できる。(遺構pp.176~179 遺物pp.180~187)



3



1



2



3



4

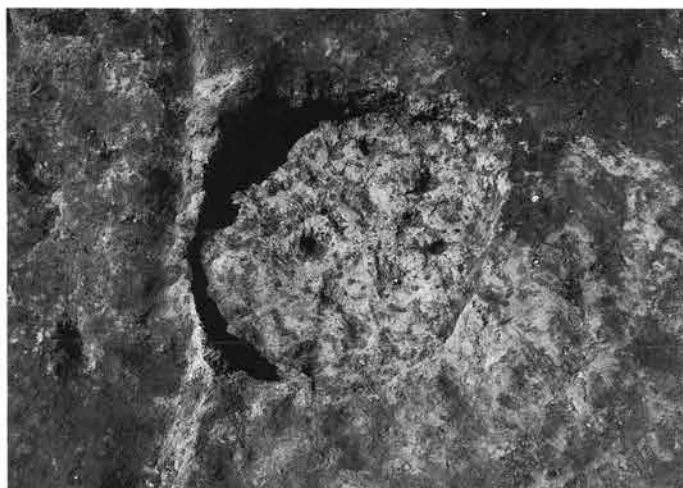
#### 陥し穴

1. 48号土坑(北東から)
2. 50号土坑(北東から)
3. 56号土坑(北東から)
4. 64号土坑(北東から)

三後沢遺跡第2遺構群から検出された陥し穴は4基である。調査当初において50号土坑は、他の陥し穴と規模が著しく異なることから陥し穴と考えるにはいたらなかった。が、床面を精査するに及んで、小ピットが検出されたことから陥し穴と判断された。

当遺跡検出の陥し穴を整理すると、48・56・64号土坑の3基は主軸方向もほぼ同一にまとまり、また底面も大小の差はあるものの、ほぼ同一規格で構築されていることがわかる。これに対して50号土坑は、主軸方向、規模も他の3基と著しく異なり、3基とともに同一群を構成するものではないと考えられる。構築の時間差に起因するものであろうか。

〔遺構：pp.187～192〕



1



2



3



4



5



6

### 縄文時代の土坑

1. 52号土坑(南西から)
2. 53号土坑(南から)
3. 58号土坑(東から)
4. 59号土坑(南から)
5. 61号土坑(東南から)
6. 62号土坑(南西から)
7. 65号土坑(南から)

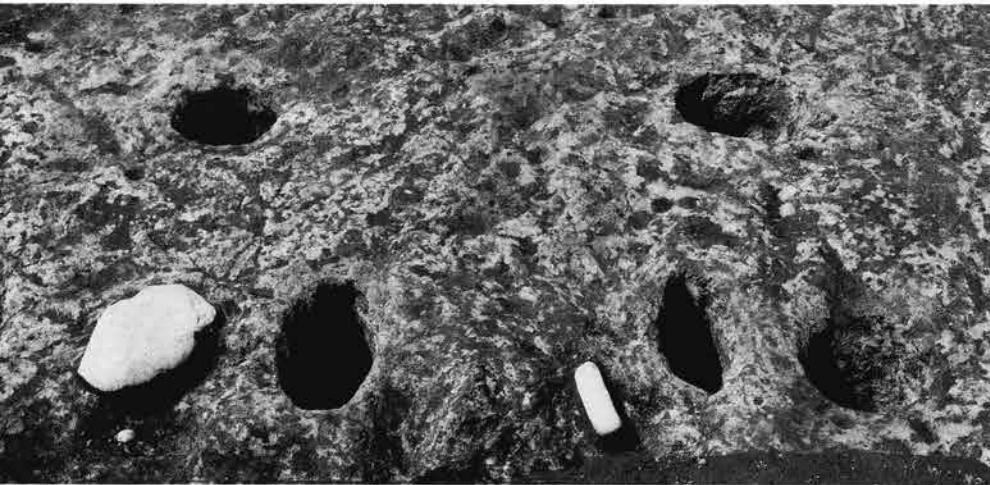
三後沢遺跡第2遺構群から検出された縄文時代の土坑は7基である。52・53号土坑はJ-3号住居跡と近接して構築されている。58・65号土坑は前期中葉の遺物が出土。61号土坑はJ-5号住居跡に壊され、関山式土器が出土していることから該期の所産と考えられる。  
〔遺構 pp.193～195〕



7



1



2



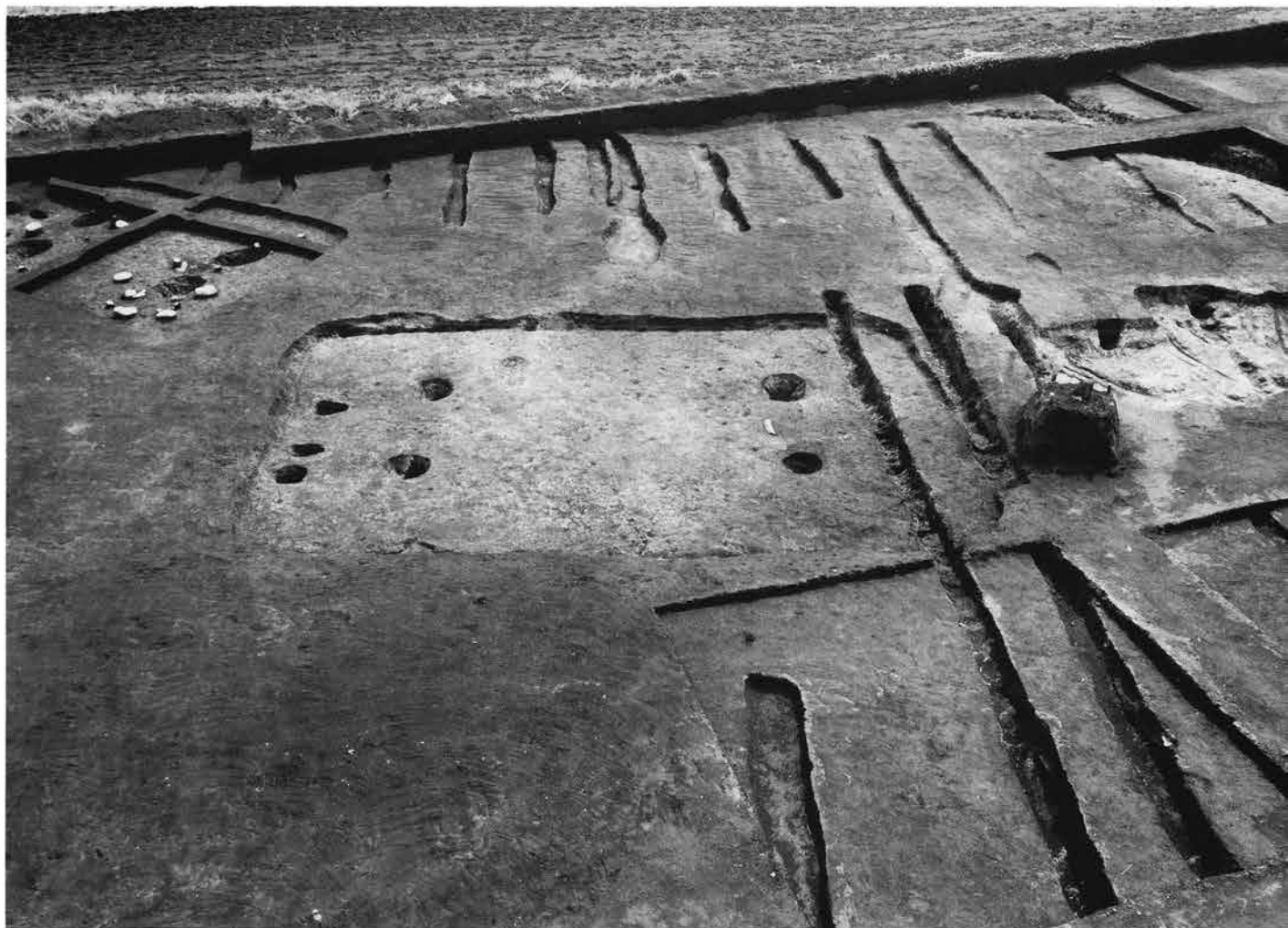
3

1. Y-1号住居跡(東から)
2. // 出入口部(南から)
3. // 遺物出土状況(南西から)

弥生時代後期樽式土器を出土した住居跡である。規模は、長辺 6.6m、短辺4.05mの長方形を呈し、面積約21㎡である。住居跡確認面より約30～48cmで床面に達している。床面は住居跡中央部分が硬く踏みかためられていた。周溝は東壁・西壁そして北壁の一部で検出されたが、南壁では検出することはできなかった。炉は床面を掘り窪めた地床炉で南端に礫2個を配置している。

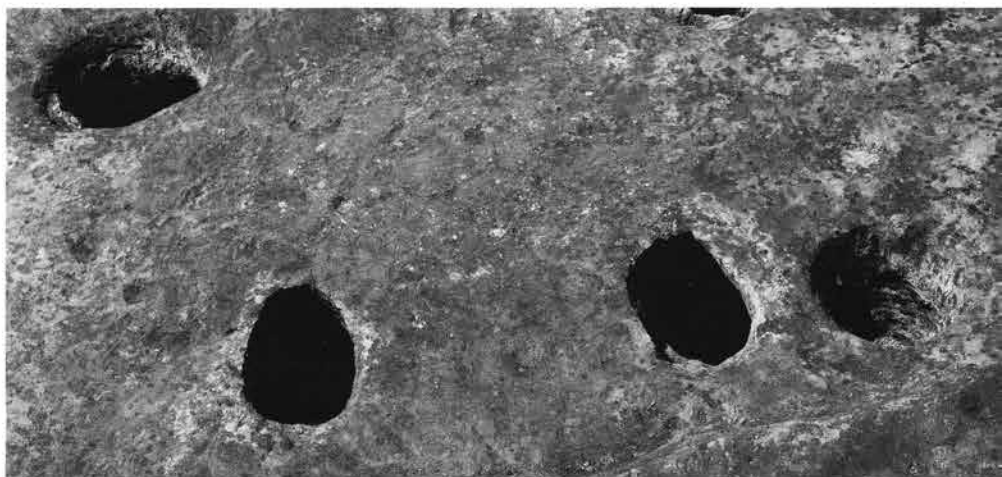
[遺構・遺物pp.196～203]





1

1. Y-2号住居跡(北東から)
2. // 出入口部(南から)
3. // 遺物出土状況(南から)



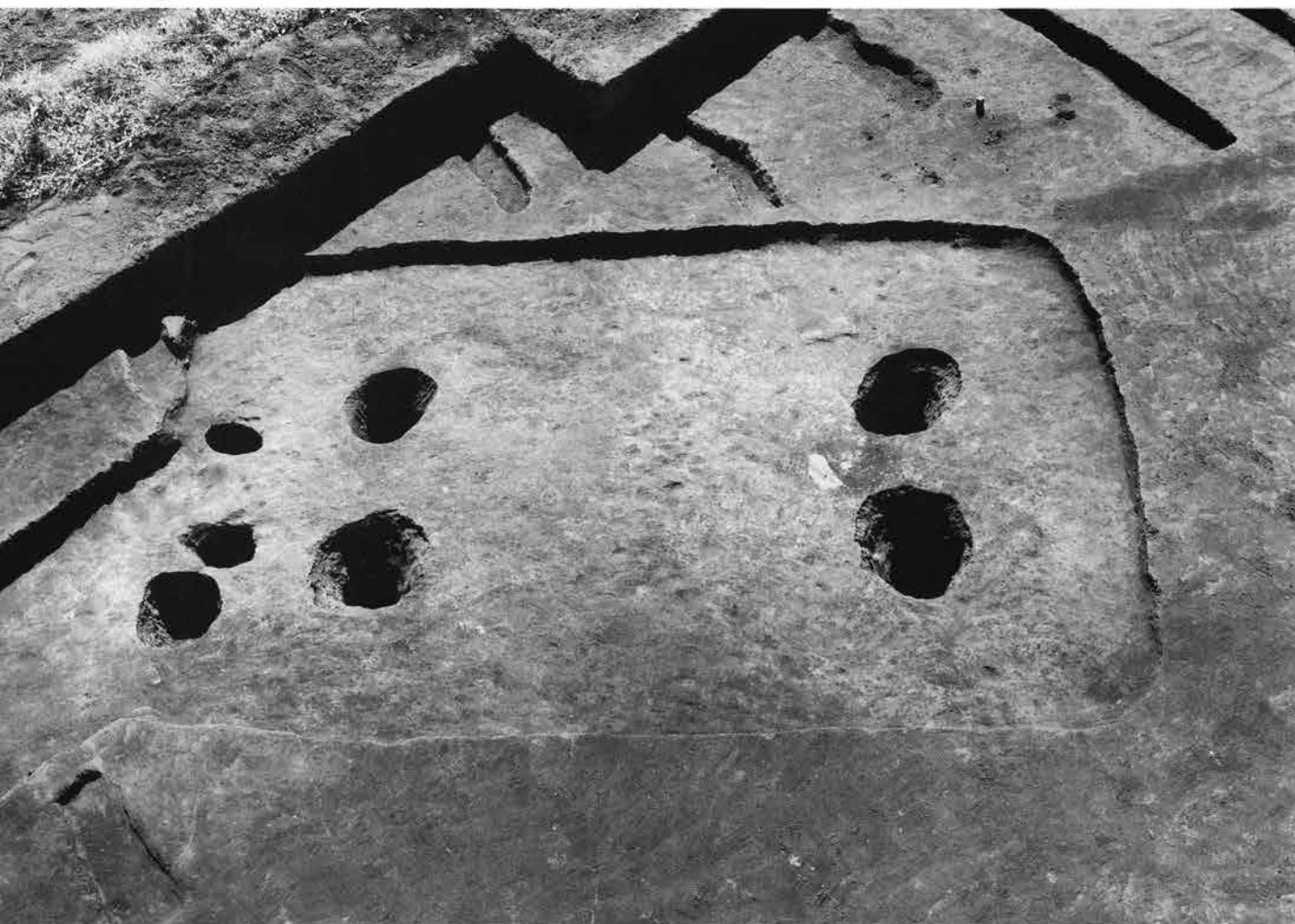
2

弥生時代後期樽式土器を出土した住居跡である。規模は、長辺 7.9m、短辺 5.4m の隅丸長方形を呈し、面積約 37.4㎡ である。J-6号住居跡と北東コーナーで重複していた。住居跡確認面より約 2~20cm で床面に達している。床面はほぼ平坦であり、一部が踏みかためられているが、とりわけ出入口部分と考えられるところが硬かった。遺物は覆土・床面上から多量に出土しているが、圧倒的に床面上からの出土が多かった。

〔遺構・遺物 pp.204~215〕



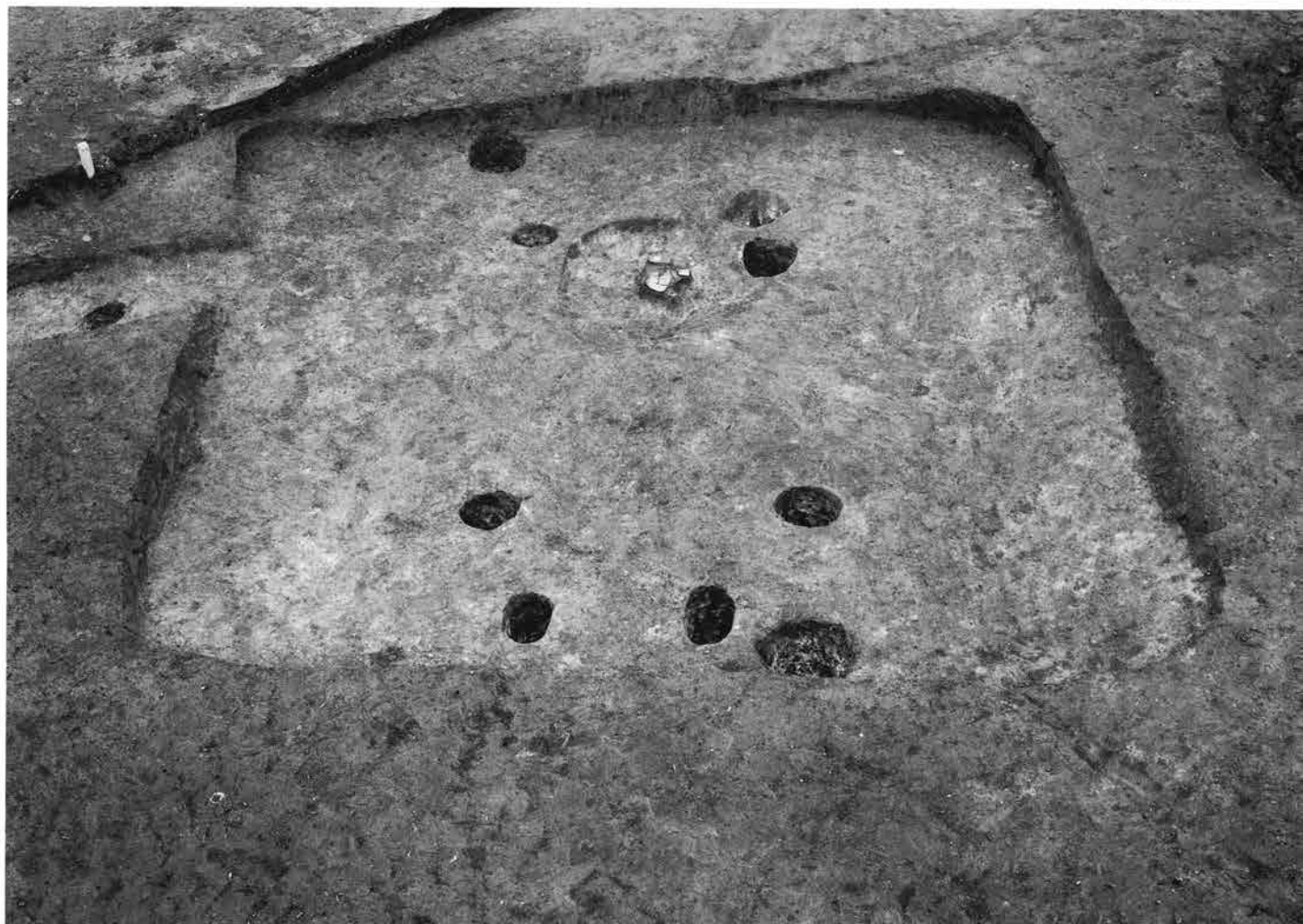
3



Y-3号住居跡（東から）



Y-4号住居跡（北東から）



Y-5号住居跡（南から）



Y-6号住居跡（北東から）



1



1. Y-6号住居跡遺物出土状況  
(北東から)
2. // 出入口部(東南から)
3. // 遺物出土状況(北東から)

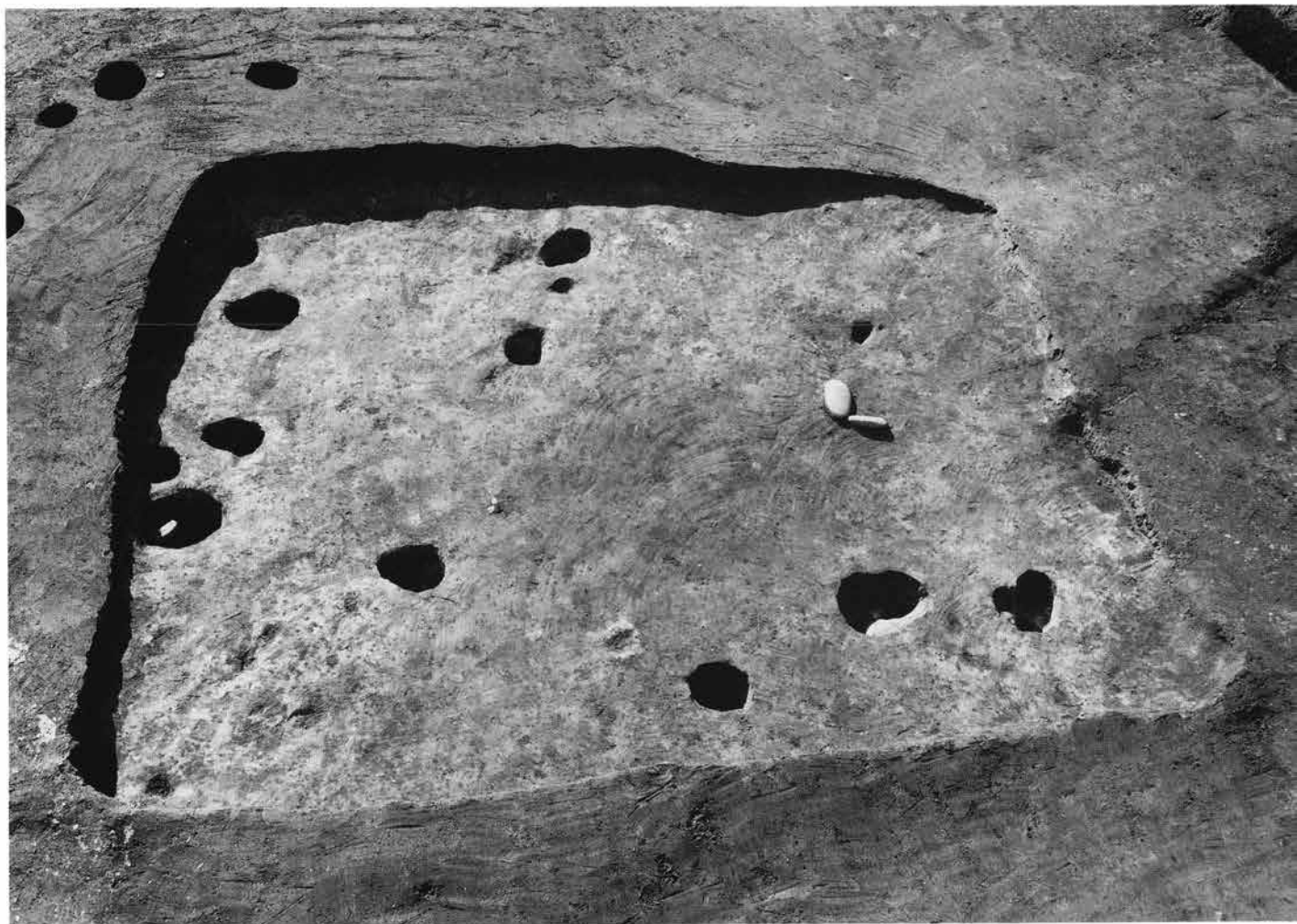
2



弥生時代後期樽式土器を出土した住居跡である。規模は、長辺4.53m、短辺3.5mの長方形を呈し、面積約14.4㎡である。住居跡確認面より約1~15cmで床面に達するが、西壁ではわずかに立ち上がり確認されたにすぎない。床面はほぼ平坦で、周溝は検出できなかった。覆土・床面上から完形品を含む多数の遺物が出土した。その出土位置は住居跡南東コーナーに集中している。

[遺構・遺物pp.227~232]

3



1



2



PL.20

1. Y-7号住居跡(東から)
2. // 遺物出土状況(東から)

PL.21

1. Y-7号住居跡炉(西から)
2. // 遺物出土状況(南から)
3. // 遺物出土状況(西から)

1



2

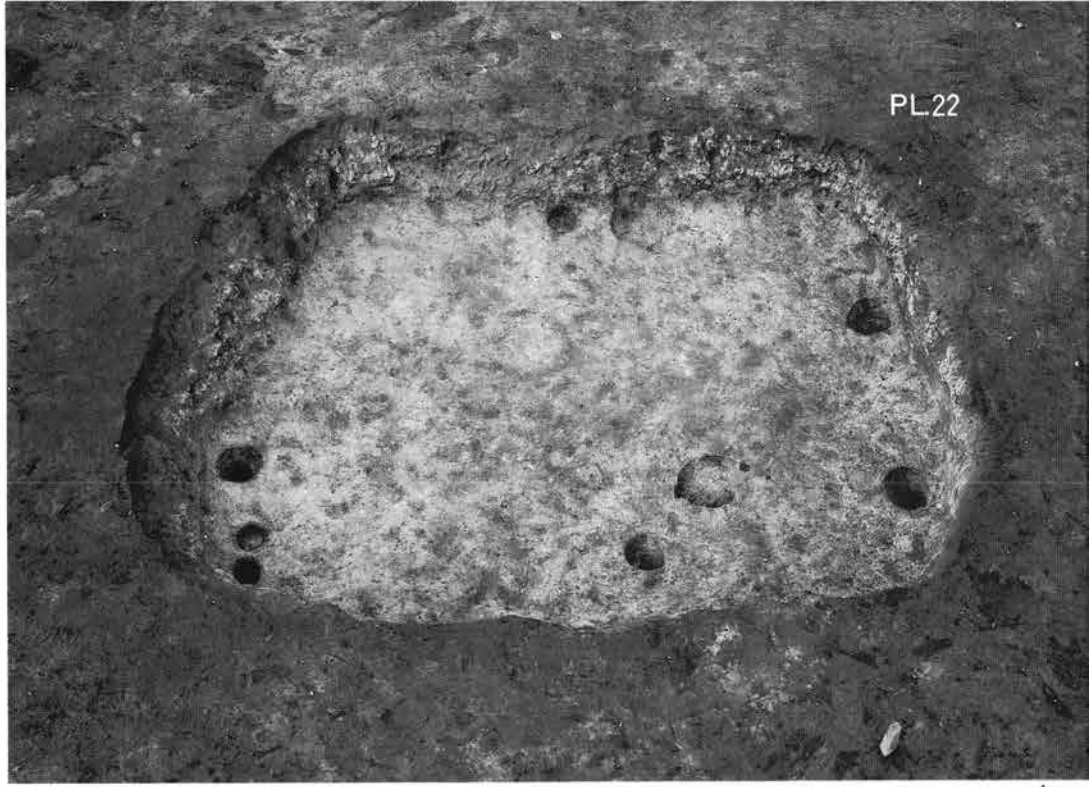


3

弥生時代後期樽式土器を出土した住居跡である。規模は、長辺4.42m、短辺3.65mの不正形を呈している。面積は約14.2㎡である。住居跡確認面より約5～19cmで床面に達している。周溝は検出されていない。ピットは11個検出されたが、主柱穴は確認できず、出入口部施設については判明した。覆土・床面上から完形品を中心に多量の遺物が出土したが、Y-6号住居跡と同様に住居跡南東コーナーに集中する傾向にある。  
〔遺構・遺物pp.233～240〕

## 十二原II遺跡

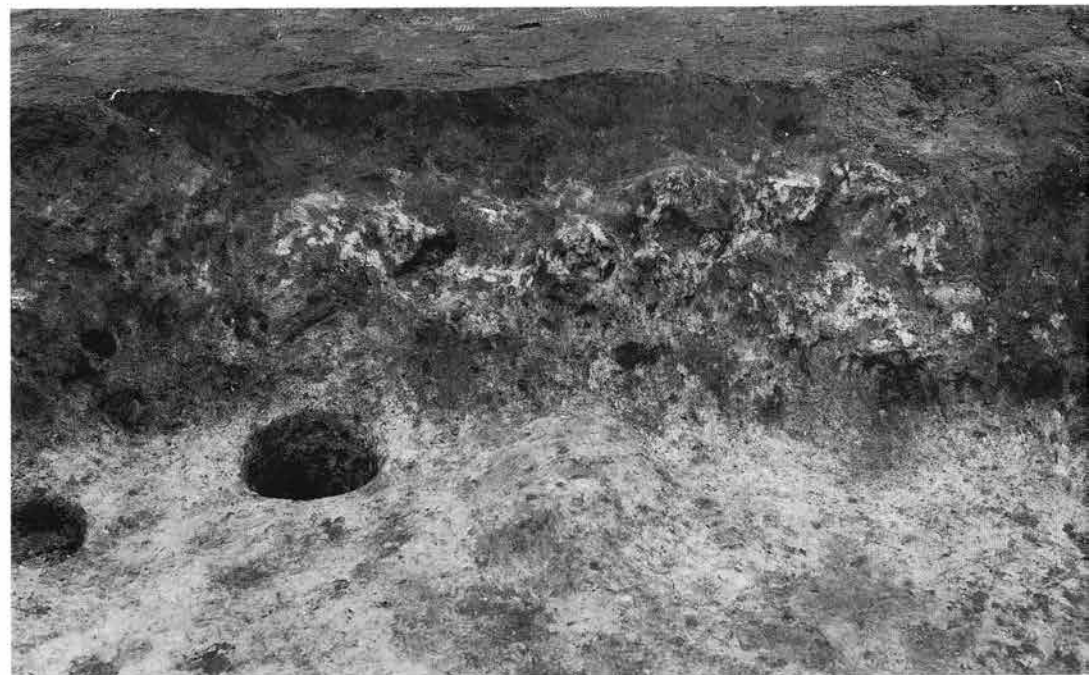
1. J-1号住居跡(北東から)
2. // 遺物出土状況  
(南西から)
3. // 出入口部  
(北西から)



1

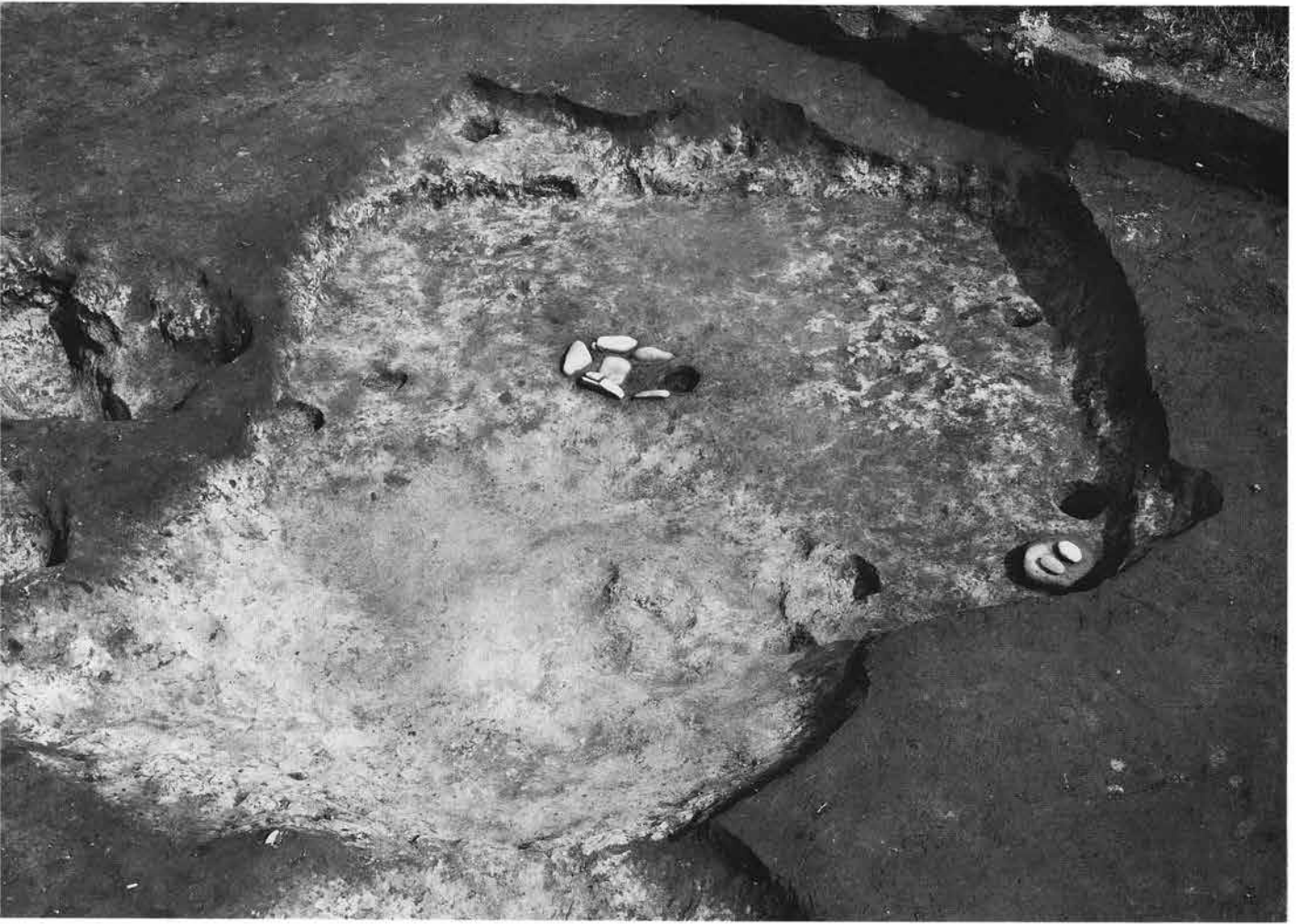


2



3

縄文時代前期前葉の関山I式土器を出土した住居跡である。J-2号住居跡、J-3号住居跡、J-11号住居跡と同時期集落を構成していたものと考えられる。規模は、長辺4.16m、短辺3.23mの隅丸方形を呈する。面積は約9.5㎡であるから、居住人員は約2.9人となる。南壁下中央部に床面の高まりが認められた。おそらく出入口部に相当するものであろう。同様な例はJ-2号住居跡にも見られた。出土遺物は比較的少なかった。〔遺構・遺物pp.248~252〕



1

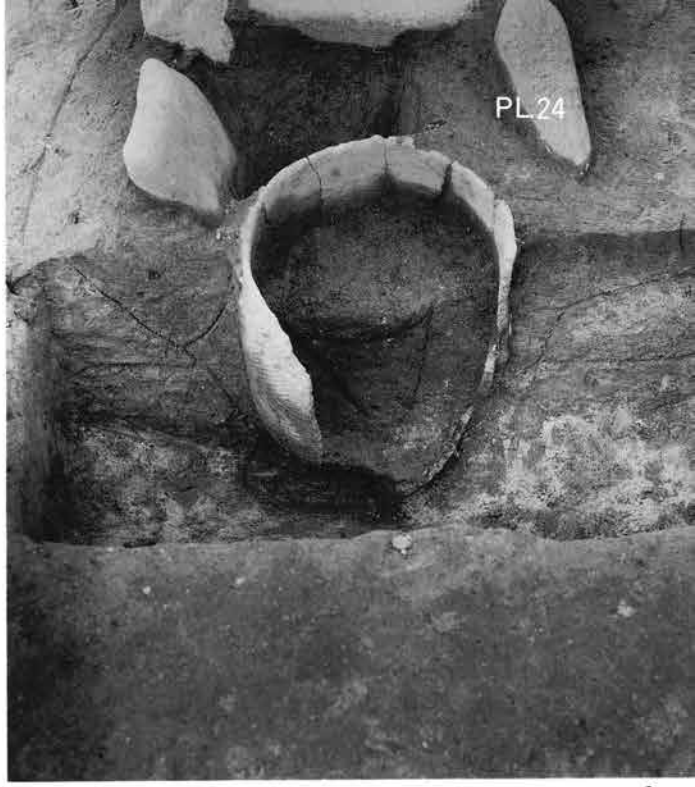


2





1



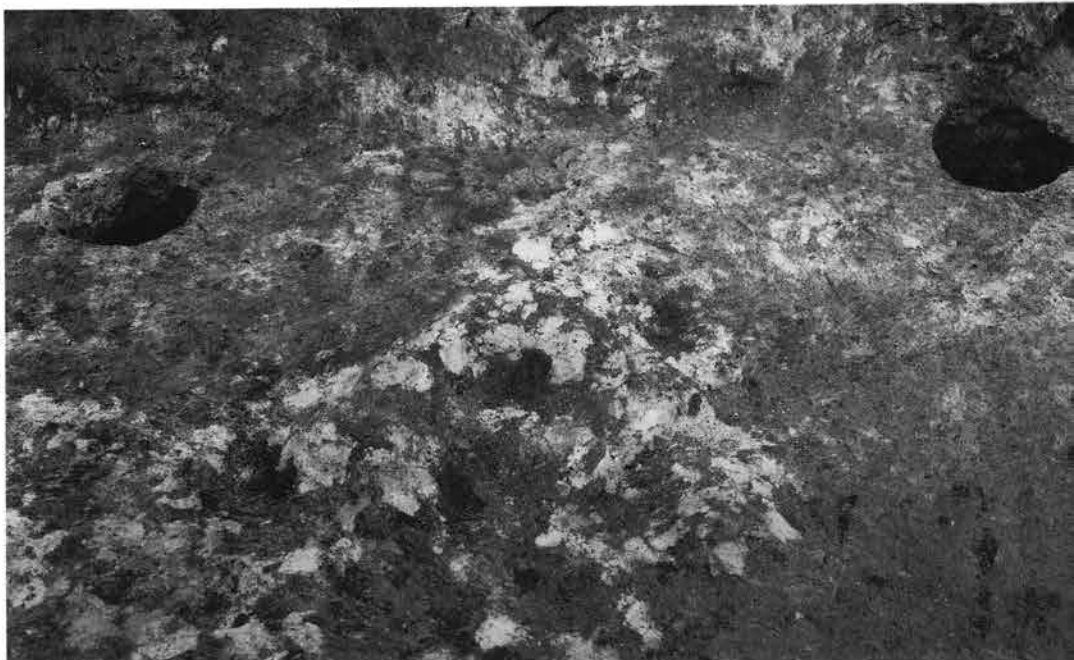
2

PL23

1. J-2号住居跡(南西から)
2. // 遺物出土状況  
(南西から)

PL24

1. J-2号住居跡炉(東南から)
2. // 炉セクション  
(東南から)
3. // 出入口部(北西から)
4. // 石皿出土状況  
(西から)

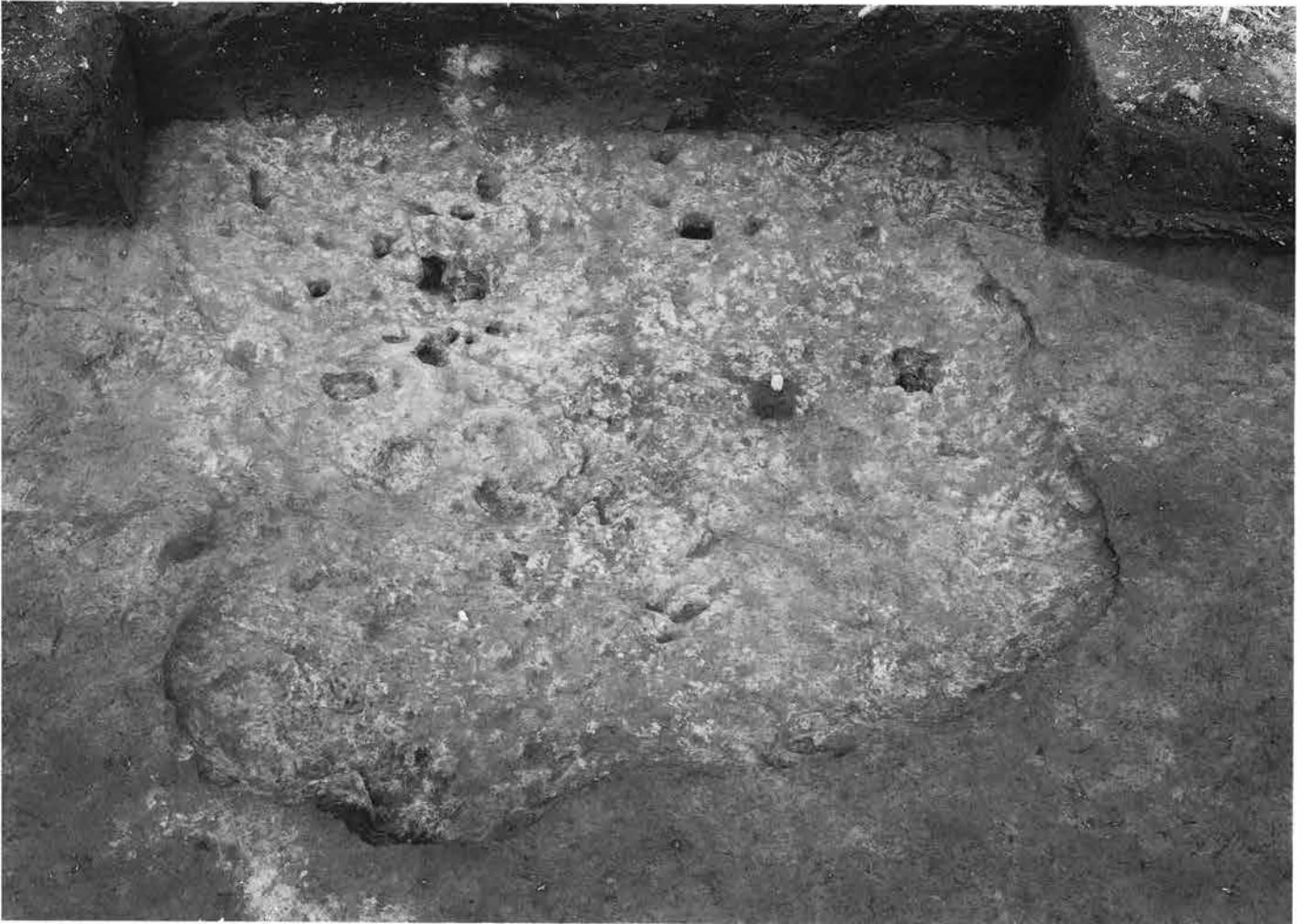


3

縄文時代前期前葉の関山I式土器を出土した住居跡である。J-1号住居跡、J-3号住居跡、J-11号住居跡と同時期集落を構成していたものと考えられる。規模は、長辺4.5m、短辺4mの隅丸方形を呈する。面積約13.7㎡であるから、居住人員は約4.2人となる。東壁下中央部に床面の高まりが認められ、出入口部に相当するものであろう。覆土上層には中期の配石遺構が構築されている。床面からの遺物の出土は少なかった。  
〔遺構・遺物pp.252~261〕



4



1



2



1

## PL. 25

1. J-3号住居跡(北西から)
2. J-4号住居跡(北東から)

## PL.26

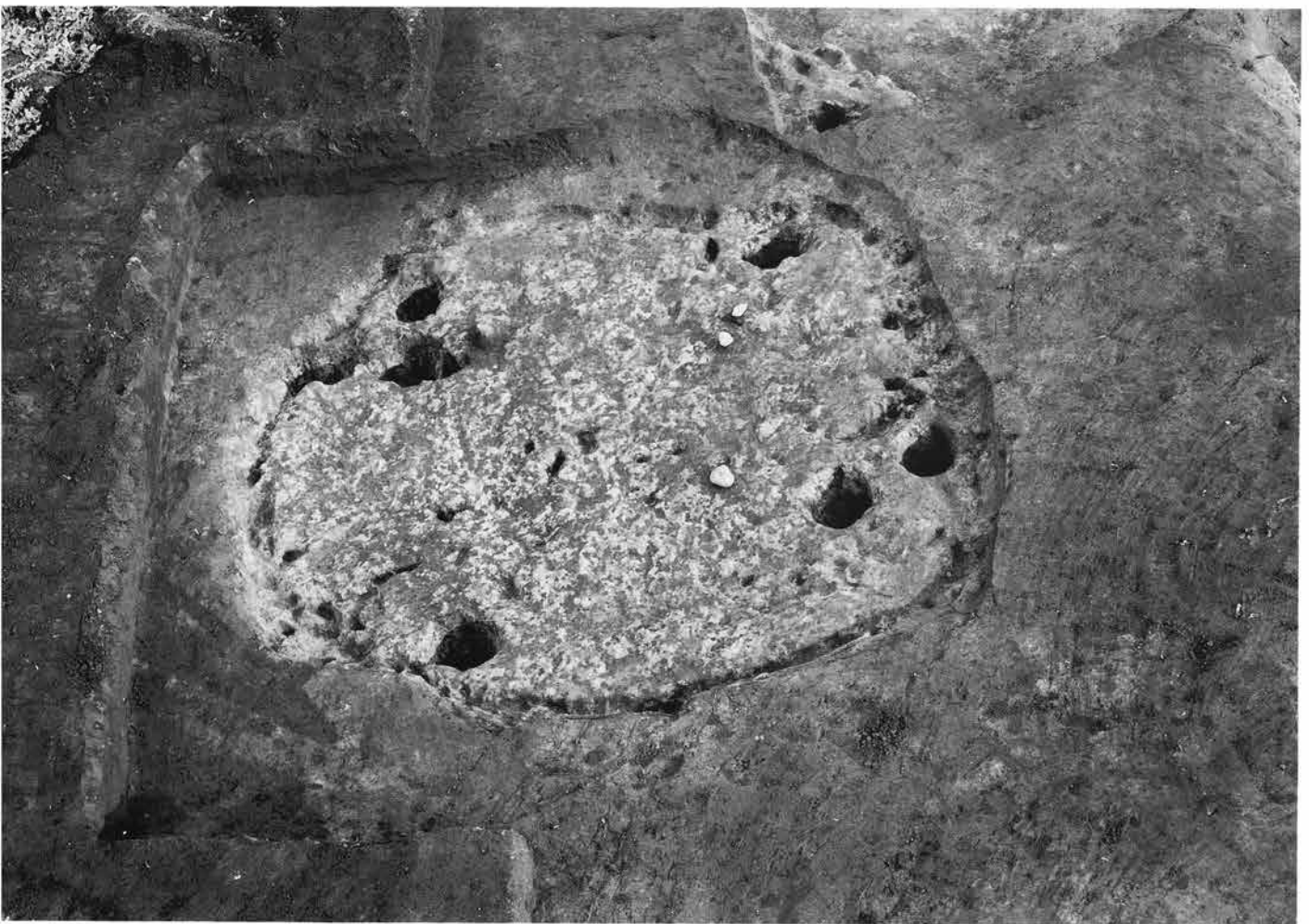
1. J-4号住居跡  
遺物出土状況(南から)
2. J-5号住居跡(南西から)



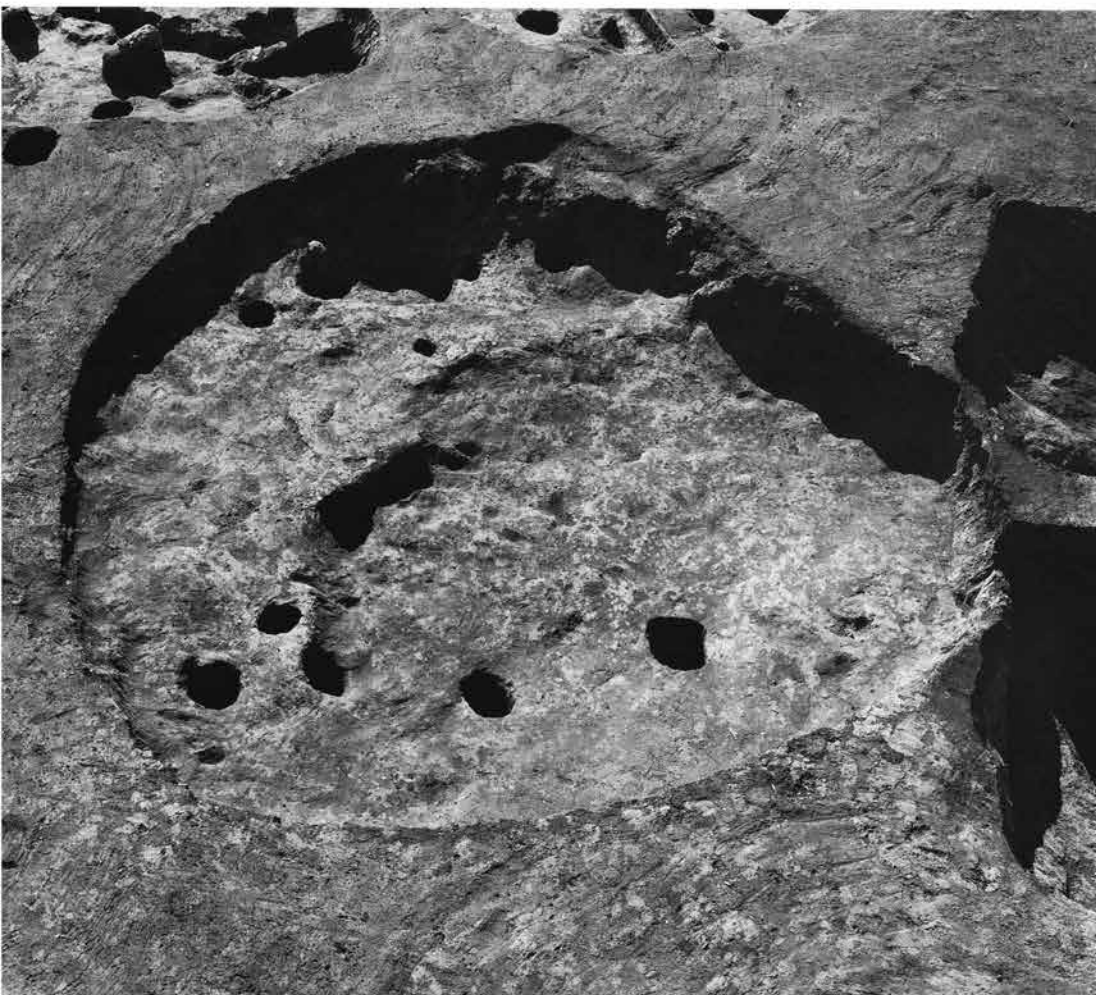
J-3号住居跡の遺存状態は悪く、遺物もほとんど出土しなかったが、前期前葉の関山期の住居跡と判断される。J-4号住居跡は中期前葉の住居跡である。規模は、長径3.49m、短径3.11mのほぼ円形を呈し、面積約7㎡であるから、居住人員は約2.1人となる。覆土からは大木7b式土器が出土している。J-5号住居跡は長径3.54m、短径2.46mの楕円形を呈する。覆土からは土器の出土はなかったが、覆土はJ-4住と同一層である。

[ J-3住 pp.261~264  
J-4住 pp.264~270  
J-5住 pp.270~273 ]

2



1



2

PL.27

1. J-6号住居跡(北西から)
2. J-7号住居跡(北東から)

PL.28

1. J-8号住居跡  
(北東から)
2. // 遺物出土状況  
(北東から)
3. // 床面倒置土器  
(東から)
4. // 丸石(北西から)
5. // 顔面把手  
(北から)

J-6号住居跡は長径3.86m、短径3.13mの楕円形を呈し、面積約7.7㎡で居住人員約2.3人となる。覆土からは遺物の出土は非常に少なかったが、中期前葉の住居跡である。J-7号住居跡も中期前葉の住居跡で床面に段差が認められた。炉は検出されていない。J-8号住居跡は長径4.84m、短径4.05mの楕円形を呈し、面積約13.3㎡で居住人員約4人となる。床面から阿玉台式土器(倒置土器)と丸石、顔面把手がセットで出土した。

J-6住	pp.274~277
J-7住	pp.277~282
J-8住	pp.283~292



1



2



3



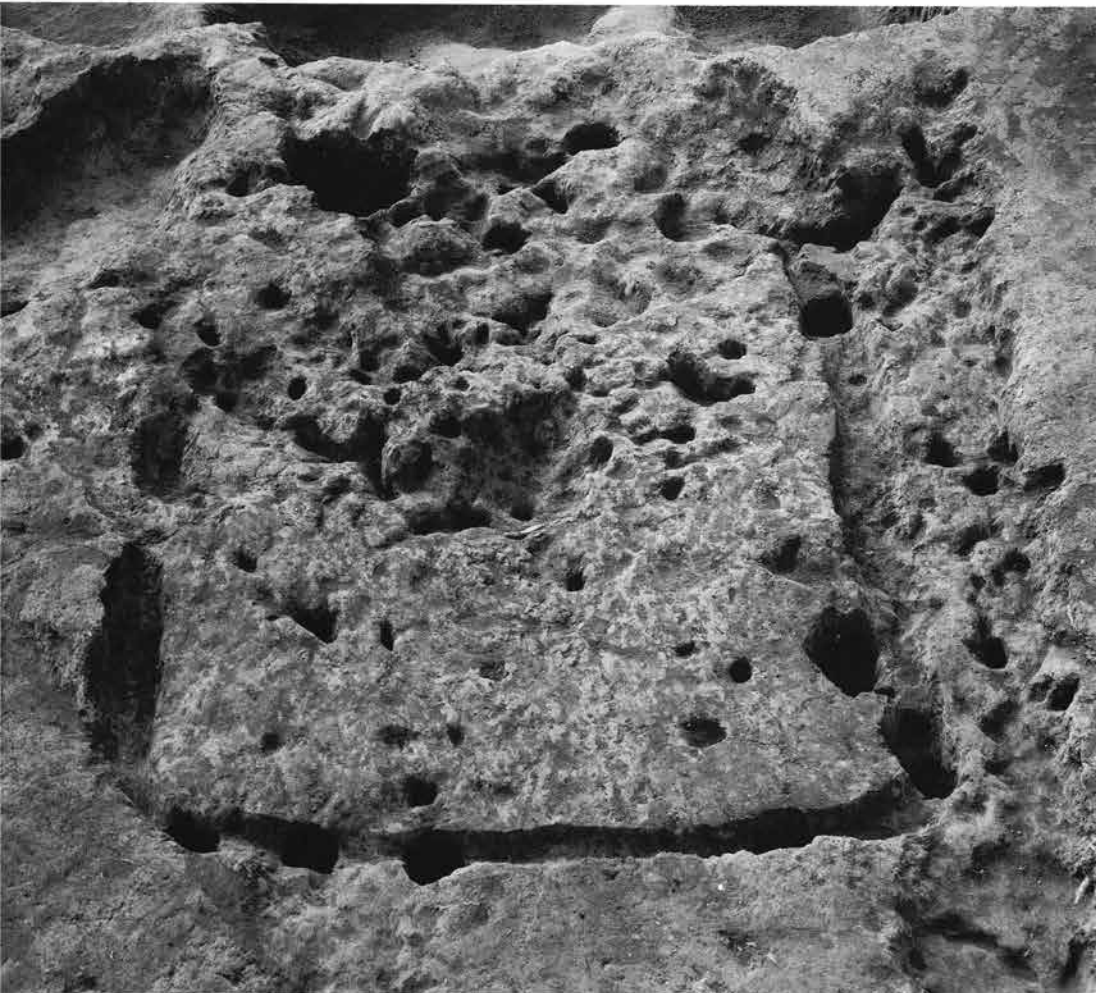
4



5



1



1. J-9号住居跡  
(北西から)  
手前はJ-10号住居跡
2. J-11号住居跡(北から)

J-9号住居跡はJ-10号住居跡によって壊されていた。当住居跡は長径3.81m、短径3.57mの不正形を呈し、面積約10.6㎡で居住人員約3.2人となる。覆土には「集石遺構」が構築されている。J-10号住居跡は長径3.28m、短径3.07mのほぼ円形を呈し、面積約7.1㎡で居住人員約2.2人となる。J-9・10号住とも中期前葉の住居跡。J-11号住居跡は前期前葉の住居跡であり、Y-2号住居跡によって一部を壊されている。

J-9住	pp.293~296
J-10住	pp.297~300
J-11住	pp.301~302



1

長径22m、短径18mの範囲に礫が散漫的に配置されている。この礫の配置を仔細に検討すると、内側と外側に配された2つの礫群に分解できそうである。内側は8×6m程の規模を有し、外側で22×18mの規模となっている。そしてこの配石間に、焼土の堆積2ヶ所が認められた。いずれも1×0.65m程の範囲である。内側の配石には、26号土坑（配石墓）が、外側の配石には屋外埋設土器遺構が存在するなど、特徴的である。この配石遺構は北西部分で途切れて、中期前葉の居住域と結ばれるなど非常に興味深い構造となっている。

〔遺構・遺物 pp.303～304〕



2



3

1. 配石(東南から)

2・3. 配石と土器出土状況(北から)



1



2

1. 3号土坑遺物出土状況(西から)
2. 4号土坑遺物出土状況(南西から)
3. 5号土坑セクション(北東から)
4. 6号土坑(東から)
5. 26号土坑(南東から)
6. 28号土坑(北東から)

縄文時代の土坑(3・4号土坑)

3号土坑は上面で110×105cm、底面で104×92cm、深さ5～8cmのほぼ円形を呈している。4号土坑は3号土坑の西4mのところに位置し、上面は160×105cm、底面は97×90cm、深さ4～11cmのほぼ円形を呈する。3号土坑からは2個体、4号土坑からは3個体の完形土器が出土している。3・4号土坑は、形態や規模において、また遺物出土状況が酷似するなど、同一時期に構築され何らかの目的をもって完形土器が土坑底面に配置されたものであろう。4号土坑の礫出土は抱石葬を連想させるものであろうか。

[3・4号土坑 pp.304～305]



3



4



5

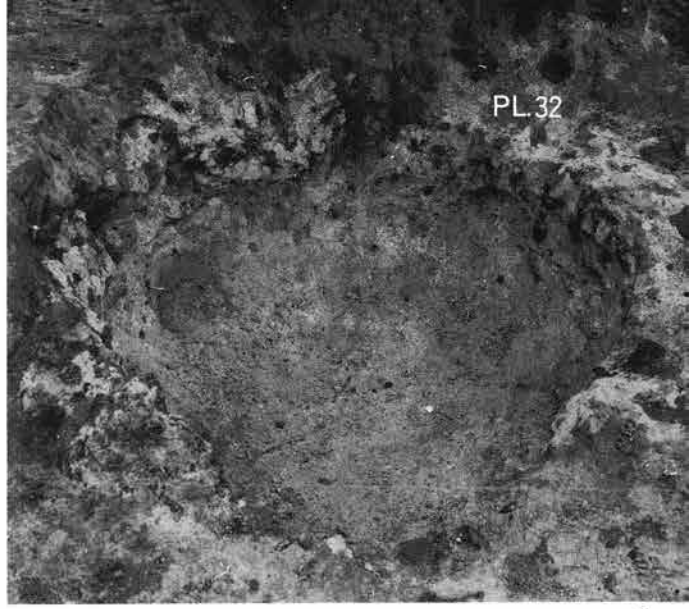


6





1



2



3



4



5

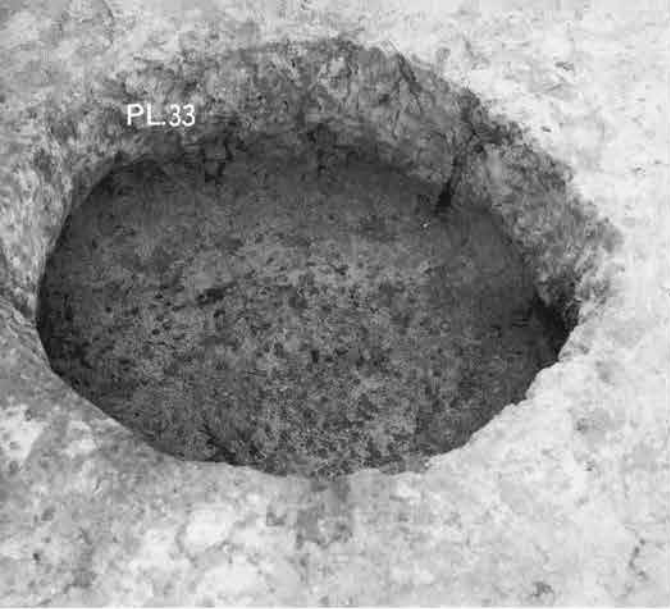


6

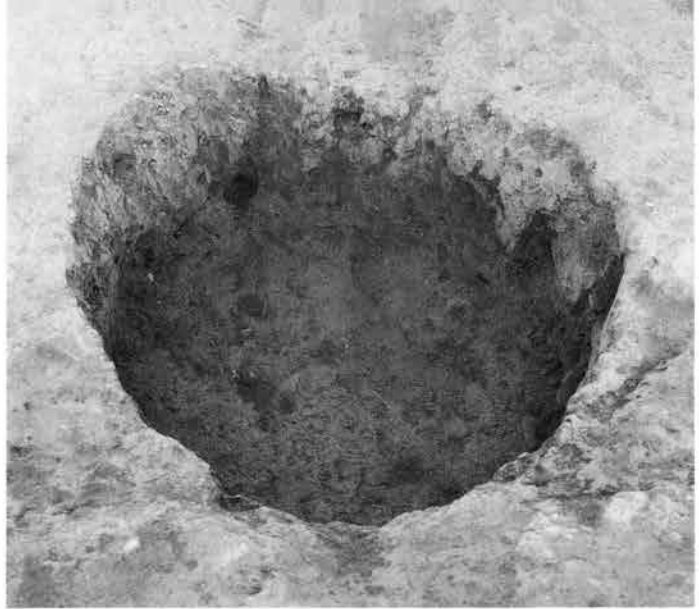


7

1. 29号土坑セクション(北東から)
  2. 29号土坑(南東から)
  3. 37号土坑セクション(南西から)
  4. 37号土坑(北東から)
  5. 38号土坑(北東から)
  6. 8号土坑(東から)
  7. 13号土坑(南から)
- 縄文時代の土坑  
 5号土坑からは焼礫と多量の焼土が、6号土坑も覆土最上層から焼土が出土している。26号土坑は北壁と西壁に礫が意図的に配置されており、また焼土も検出されている。これらの土坑は焼土の出土、礫の配置等から考えて縄文時代の墓塚と理解できるものであろう。28・29・37号土坑は風倒木を壊して構築されている。29号土坑覆土最上層からは伏せた石皿が、37・38号土坑からは礫が出土している。  
 〔遺構・遺物 pp.306~312〕



1



2



3

1. 66号土坑(東から)
2. 68号土坑(南から)
3. 17号土坑(東南から)
4. 屋外埋設土器(東から)

#### 縄文時代の土坑

8号土坑は上面127×112cm、底面108×98cm、深さ82cmの楕円形。13号土坑は上面107×102cm、底面91×80cm、深さ54cmの円形。66号土坑は上面130×118cm、底面120×116cm、深さ46～57cmの円形。68号土坑は上面100×95cm、底面80×61cm、深さ27～37cmの楕円形。いずれの土坑も形態や覆土の層相から判断すると貯蔵穴と考えられる。17号土坑は前期前葉の関山Ⅰ式土器が出土していることから該期の所産。



4

#### 屋外埋設土器

配石遺構の西端に位置している。上面は31×31cm、底面は25×22cm、深さ20cmの円形を呈するピット内には、口縁部を欠損した縄文時代中期の土器を正位状態で埋設している。土器内部からは土以外は何も検出できなかった。屋外に埋設された土器の事例は縄文時代中期から後期初頭にかけて見うけられるがその用途は判然としない。

[遺構・遺物 pp.312-313]

1. 7号土坑(北から)
2. 10号土坑(東南から)
3. 11号土坑(南西から)
4. 16号土坑(南西から)
5. 34号土坑(南西から)
6. 22号土坑(南から)



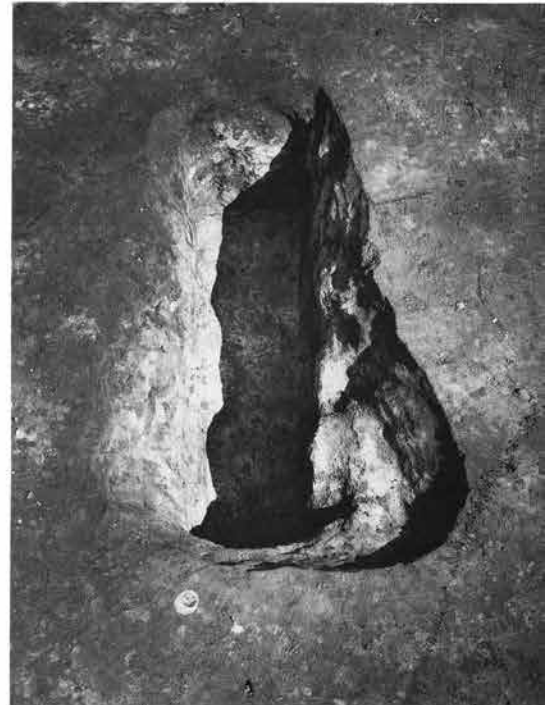
1



2



3



4

5

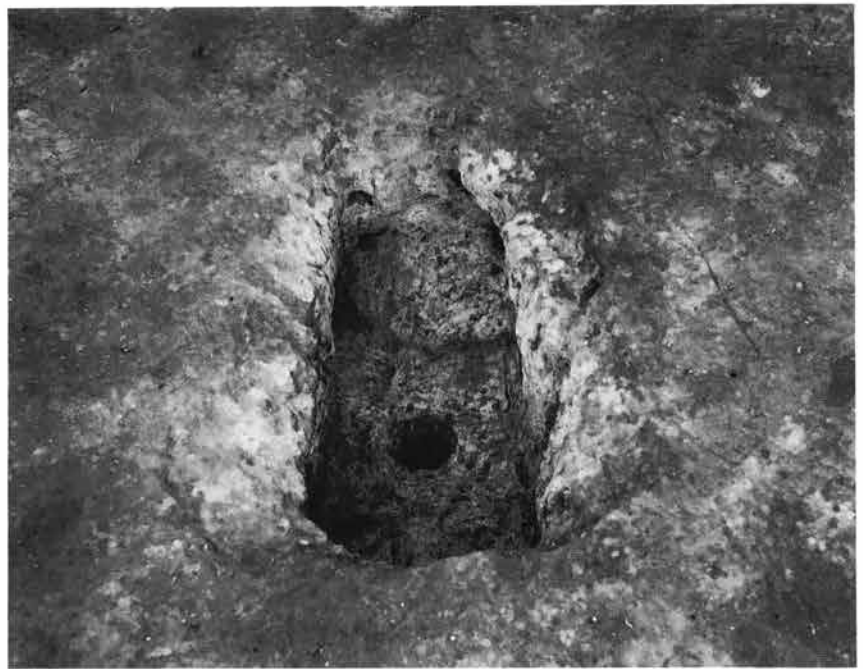
6



縄文時代の陥し穴  
 十二原II遺跡から検出された縄文時代の陥し穴は、その規模や形態、また陥し穴相互の配置関係等から3群に分けて考えることができる。A群：7・10・11・16・34・22・57・43・47・59・69号の11基の陥し穴から構成され、長さ85mにわたって展開している。B群：19・50号の2基の陥し穴から構成されているが、本来は発掘区の北東に向かって展開するものと思われる。C群：72・73・74・75号の4基の陥し穴から構成されているが、A群・B群よりも一段低い面に構築されていた。A・B両群の陥し穴は前期前葉以前にその構築時期が求められそうである。  
 [遺構 pp.313-322]



1



2



3



4



5



6

PL.35

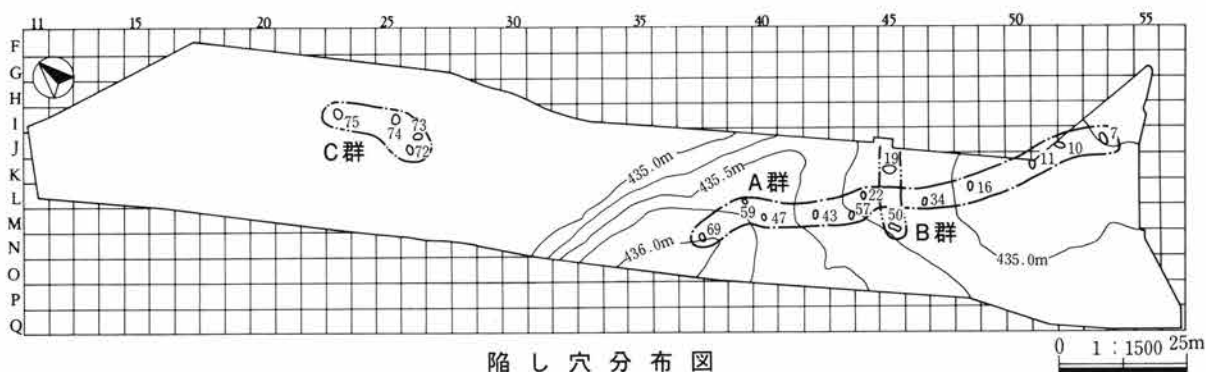
縄文時代の陥し穴

1. 57号土坑(北東から)
2. 43号土坑(南西から)
3. 47号土坑(北から)
4. 59号土坑セクション  
(北から)
5. 50号土坑(北西から)
6. 69号土坑(南から)



1

2



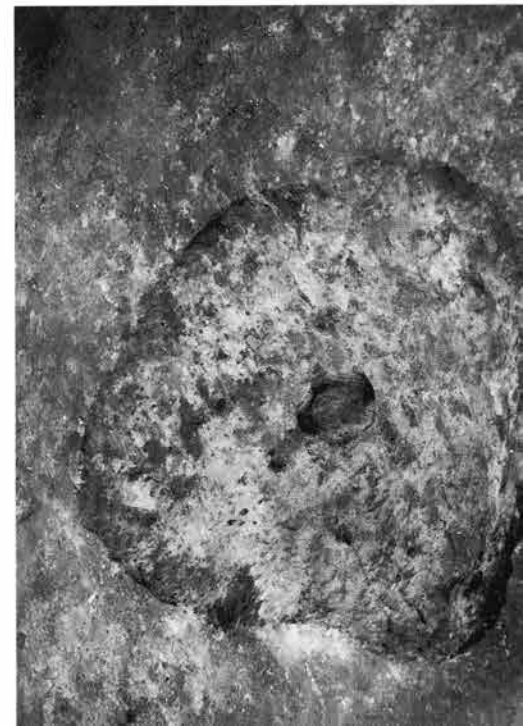
陥し穴分布図

0 1 : 1500 25m

PL.36

縄文時代の陥し穴

1. 72号土坑(北東から)
2. 73号土坑(北西から)
3. 74号土坑(東から)
4. 75号土坑(東南から)



3

4



1



2

PL37

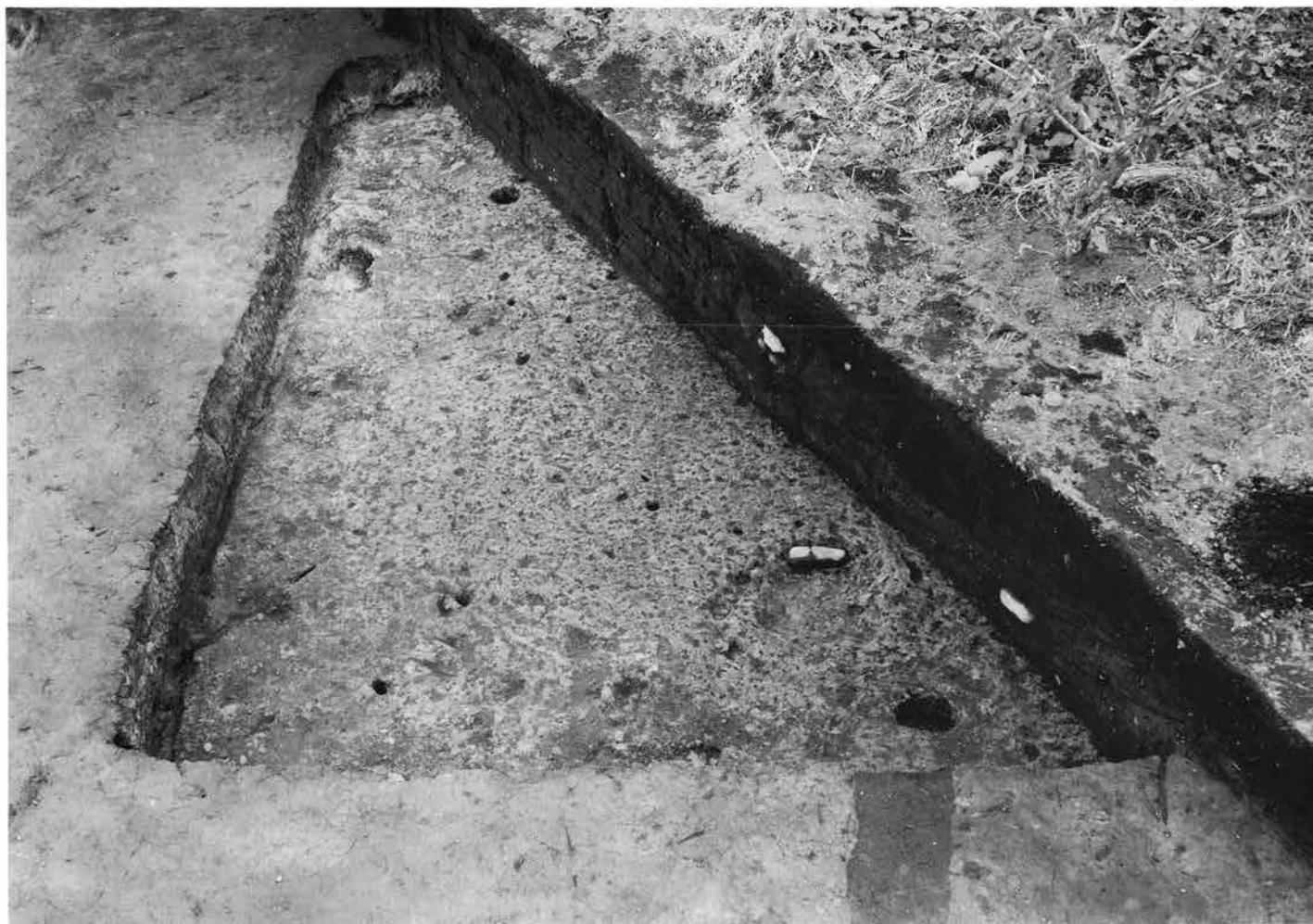
1. Y-1号住居跡(北西から)
2. Y-2号住居跡(北西から)

PL38

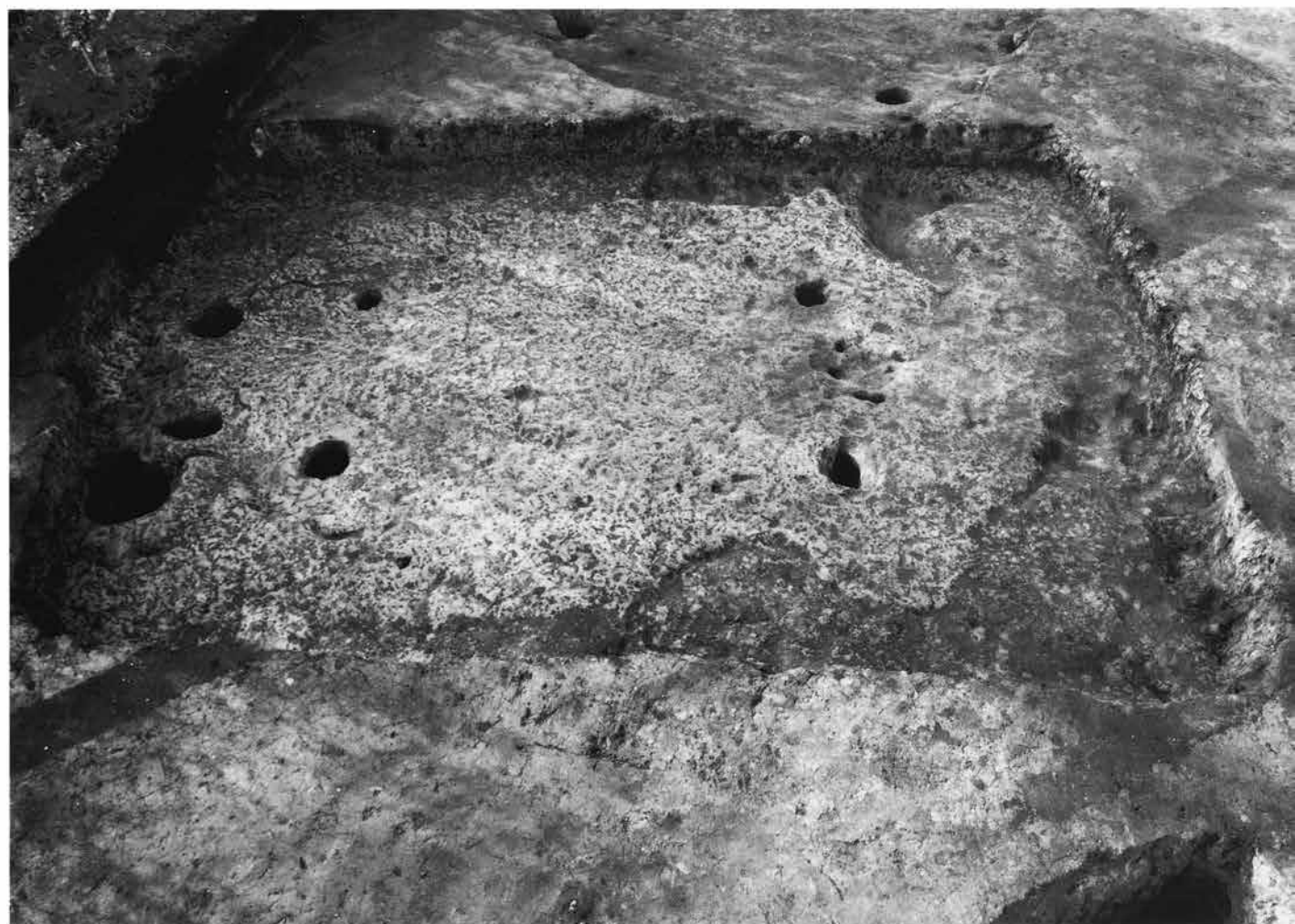
1. Y-3号住居跡(北から)
2. Y-4号住居跡(南東から)

弥生時代後期の住居跡は、Y-1号住居跡からY-6号住居跡までの6軒が検出された。Y-2号住居跡は後世の墓地によってその殆度を壊されている。またY-3号住居跡・Y-6号住居跡は完掘することができなかった。6軒の住居跡は、縄文時代前期・中期の集落立地と異なっており、上位面のなかでもっとも高い部分のところで集中的に検出された。そしてY-3号住居跡、Y-4号住居跡が非常に接近して構築されていること、また住居形態や覆土中の遺物に古式土師器を含む住居跡の存在等から考えて、少なくとも2段階に別けることも可能と思われる。

Y-1住	pp.325~329
Y-2住	pp.330~332
Y-3住	pp.333~336
Y-4住	pp.336~347



1



2



1



2



3

1. Y-5号住居跡(東から)
2. Y-6号住居跡(北から)
3. 竪穴状遺構(北東から)

十二原II遺跡の弥生時代後期の住居跡のなかで古い段階に属するものがY-4号住居跡とY-5号住居跡、新しい段階の住居跡がY-1・2・3・6号住居跡の4軒である。集落は西に広がりをもつと考えられる。Y-5号住居跡は長辺2.03m、短辺1.88mの隅丸方形を呈するが、非常に小規模なことから一般的な住居であったかどうかは今後の検討課題であろう。

以上のほかに、下位面の西端から時期不明の竪穴状遺構1基が検出されている。

Y-5住	pp.348~349
Y-6住	pp.349~350
竪穴状遺構	pp.350~351



三後沢遺跡 (遺物 PL40~PL62)  
十二原II遺跡 (遺物 PL62~PL71)  
\* ( ) 内数字は挿図番号を表示

## 三後沢遺跡



三後沢遺跡  
J-4号住居跡出土土器



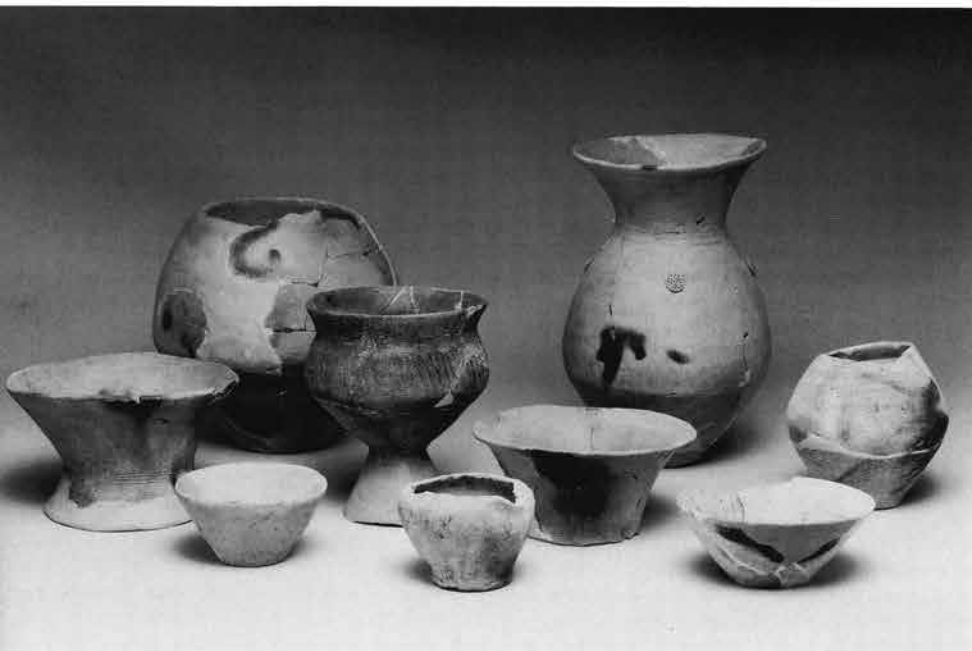
三後沢遺跡  
J-5号住居跡出土土器



三後沢遺跡  
Y-2号住居跡出土土器



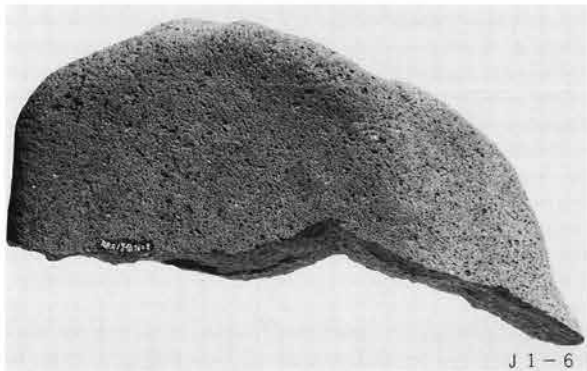
三後沢遺跡  
Y-6号住居跡出土土器



三後沢遺跡  
Y-7号住居跡出土土器



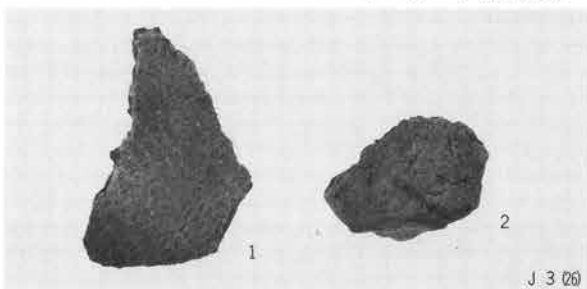
J.1-1(9)



J.1-6

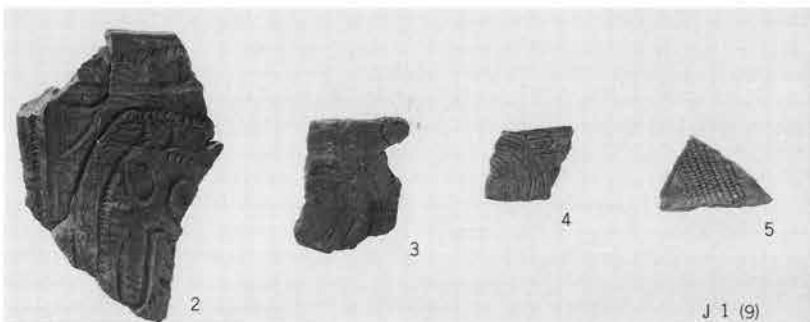
▲ J-1号住居跡

▼ J-3号住居跡



J.3(26)

▼ J-4号住居跡



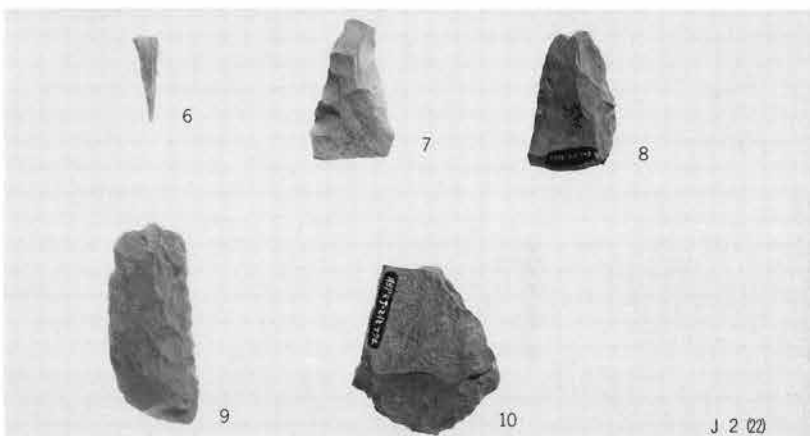
J.1(9)

▲ J-1号住居跡

▼ J-2号住居跡



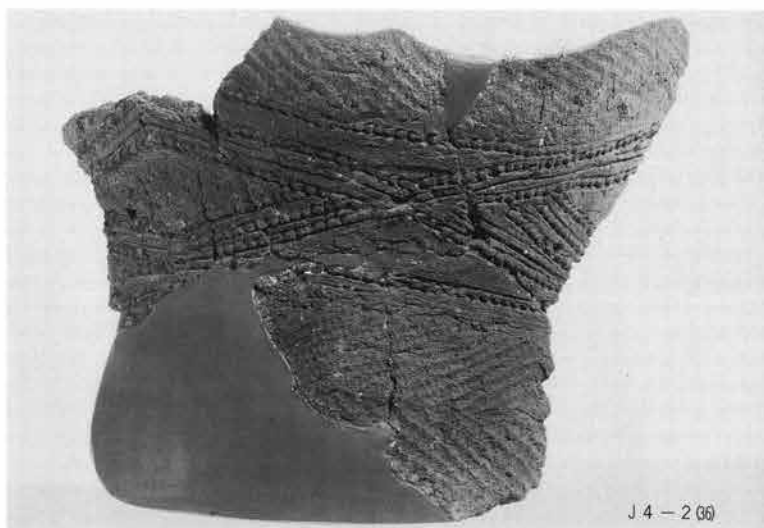
5



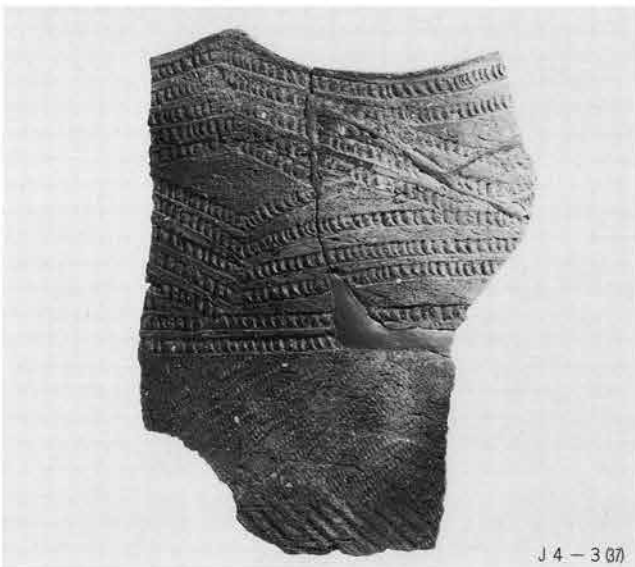
J.2(22)



J.4-1(26)



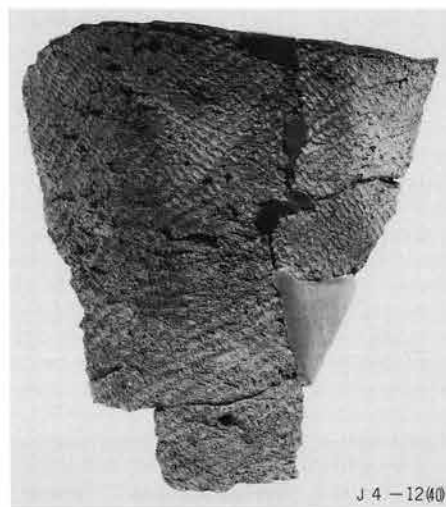
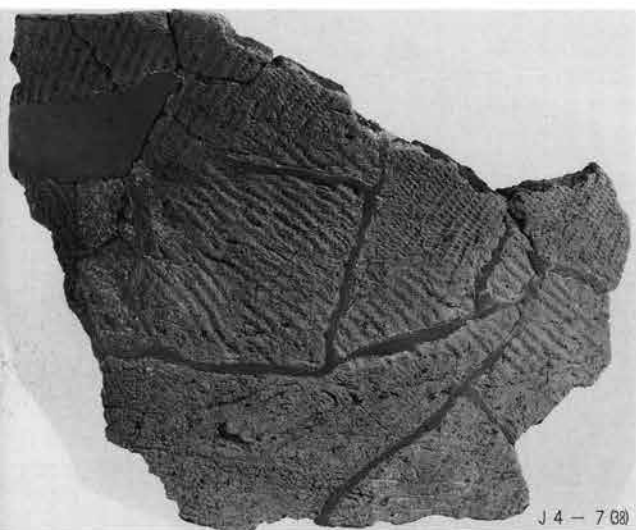
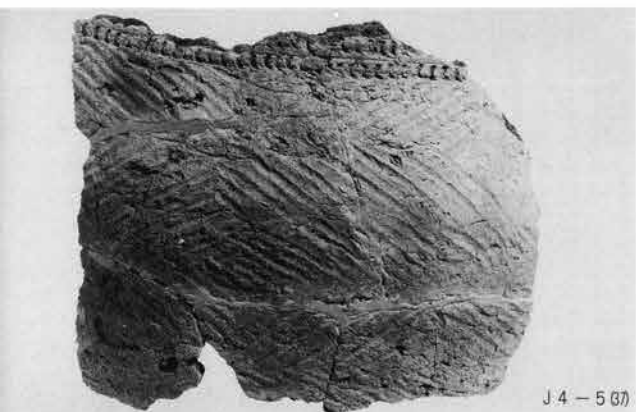
J.4-2(26)



J.4-3(27)



J.4-4(27)





J 4 - 15 (40)



J 4 - 16 (40)



J 4 - 19 (40)



J 4 - 21 (40)



J 4 - 20 (40)



J 4 - 17 (40)



J 4 - 23 (40)



J 4 - 22 (40)



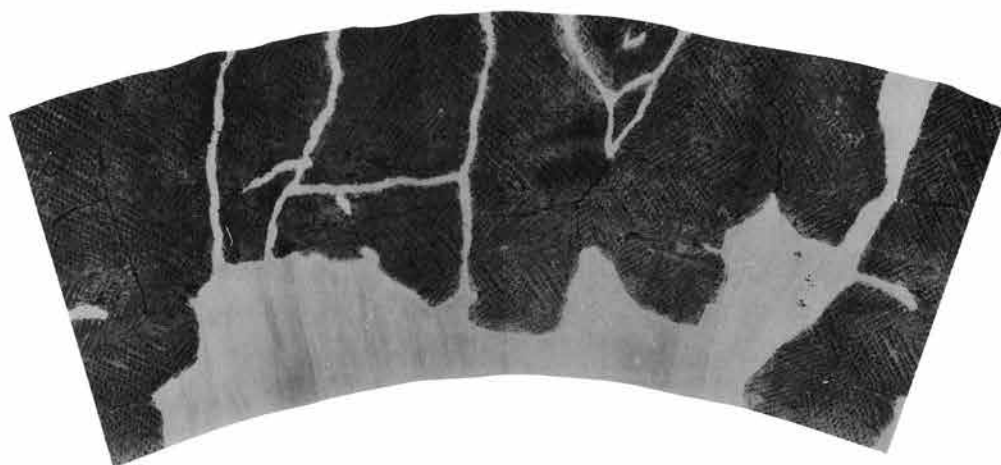
J 4 - 18 (40)



J 4 - 24 (40)



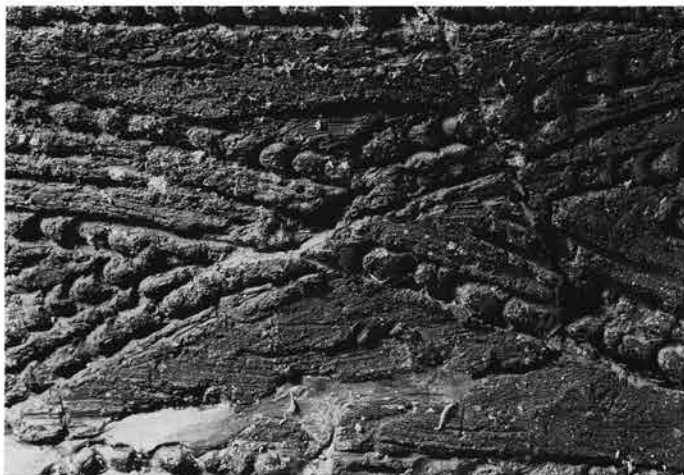
J 4 - 25 (40)



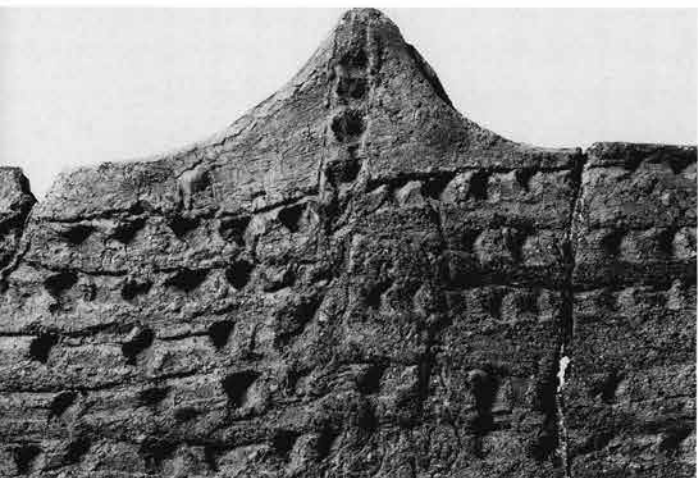
J 4 - 25 展開写真



① J 4 - 1 (G)



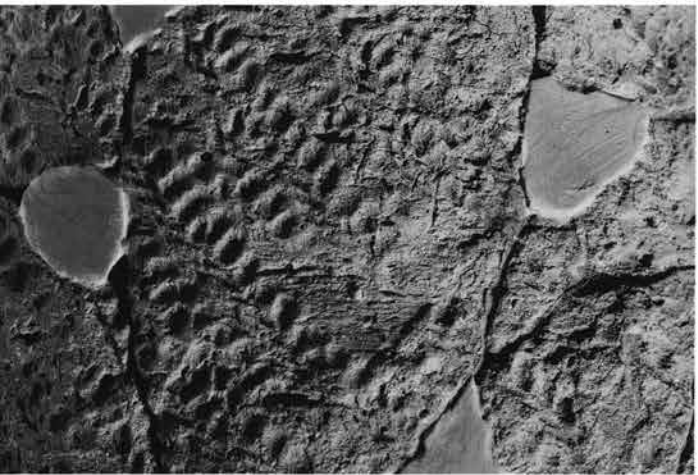
② J 4 - 2 (G)



③ J 4 - 4 (G)



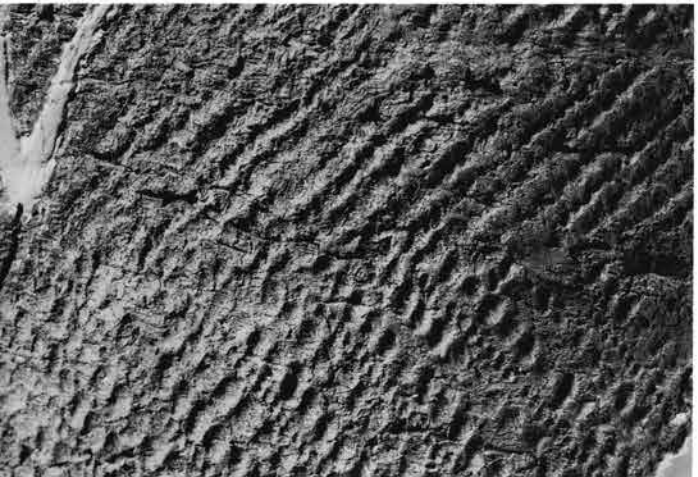
④ J 4 - 5 (G)



⑤ J 4 - 23 (H)



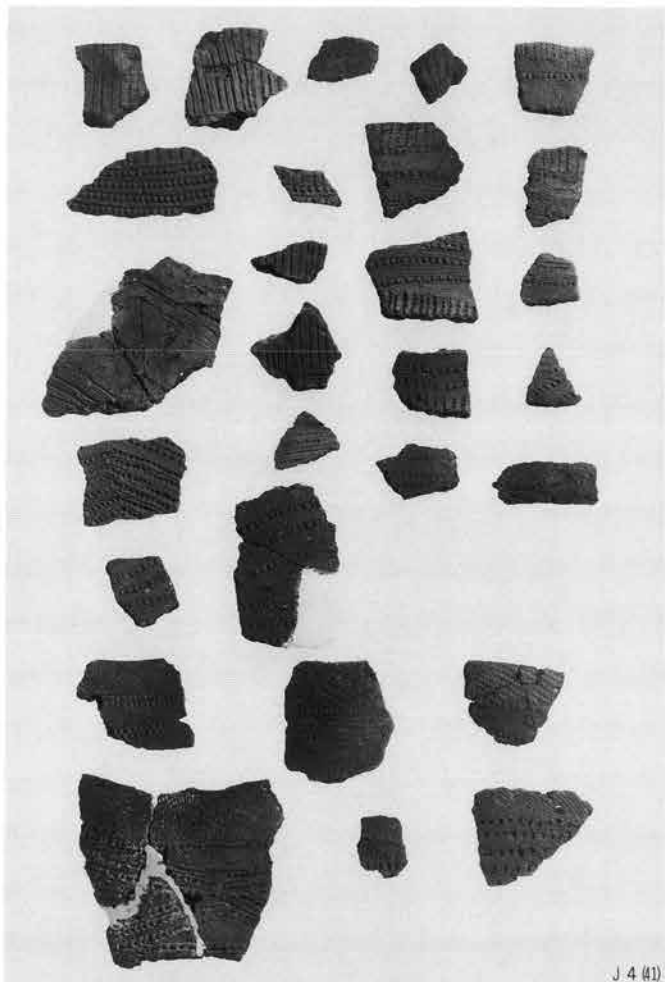
⑥ J 4 - 24 (H)



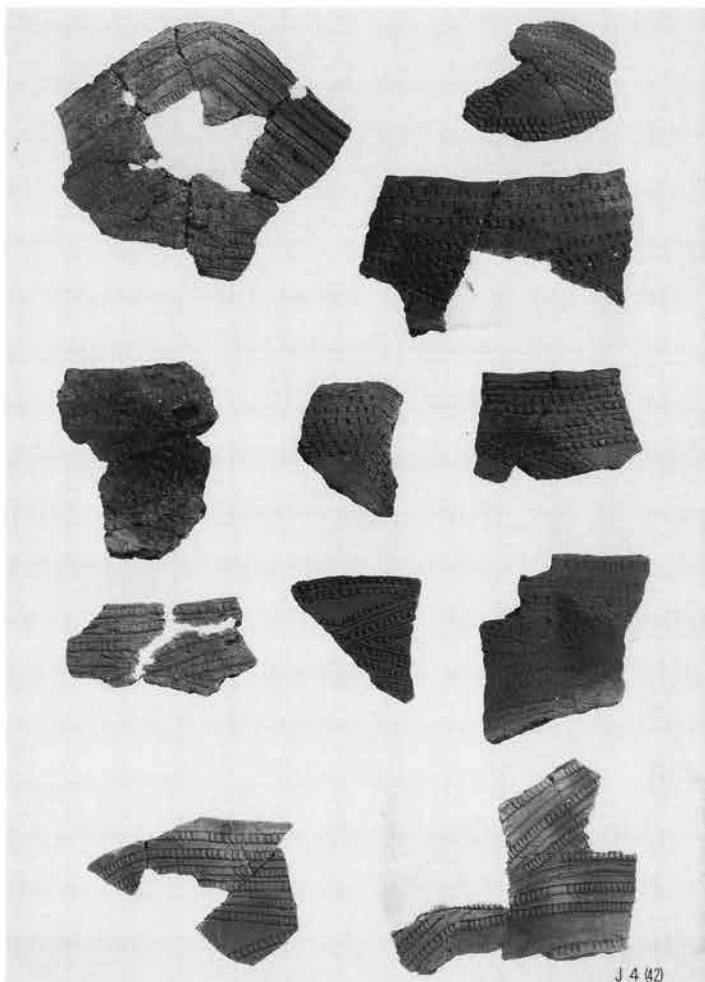
⑦ J 4 - 25 (H)

- ① 櫛歯状工具による条線・縦位刺突
- ② 半截竹管によるC字爪形文(手法C)
- ③ 半截竹管によるC字爪形文(手法C)
- ④ 半截竹管によるC字爪形文(手法A)
- ⑤ 附加条第1種  $R\left\{\begin{matrix} L \\ R \end{matrix}\right.$
- ⑥ 附加条第1種  $R\left\{\begin{matrix} L+r \\ R+r \end{matrix}\right.$  と  $L\left\{\begin{matrix} R \\ R+r \end{matrix}\right.$
- ⑦ 附加条第1種  $R\left\{\begin{matrix} L \\ L+L \end{matrix}\right.$  と  $L\left\{\begin{matrix} R \\ R+R \end{matrix}\right.$

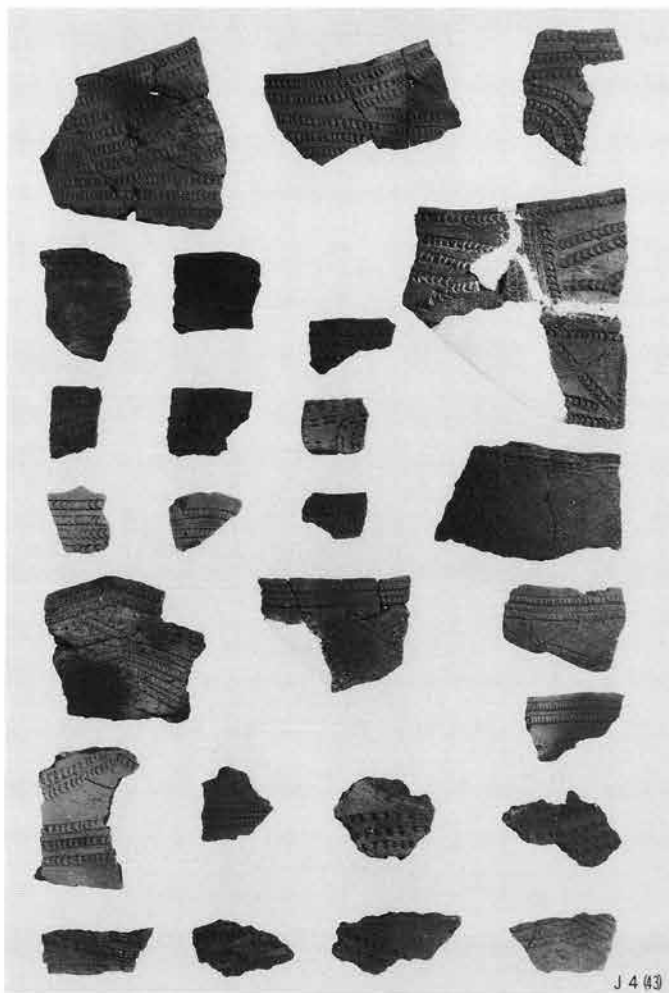
土器施文拡大写真



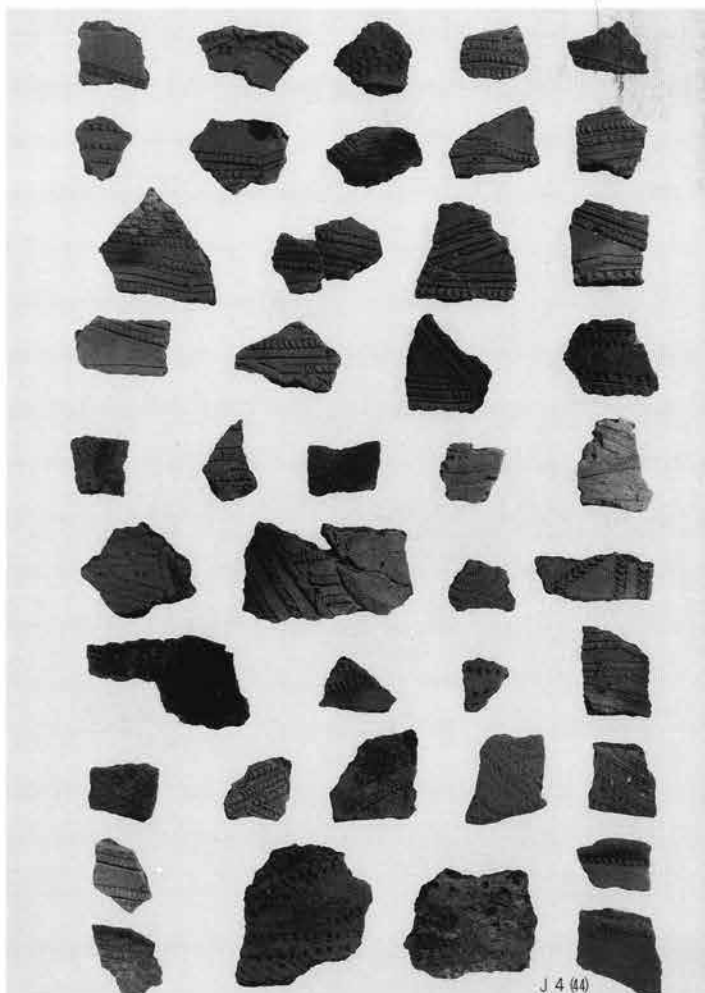
J 4 (41)



J 4 (42)



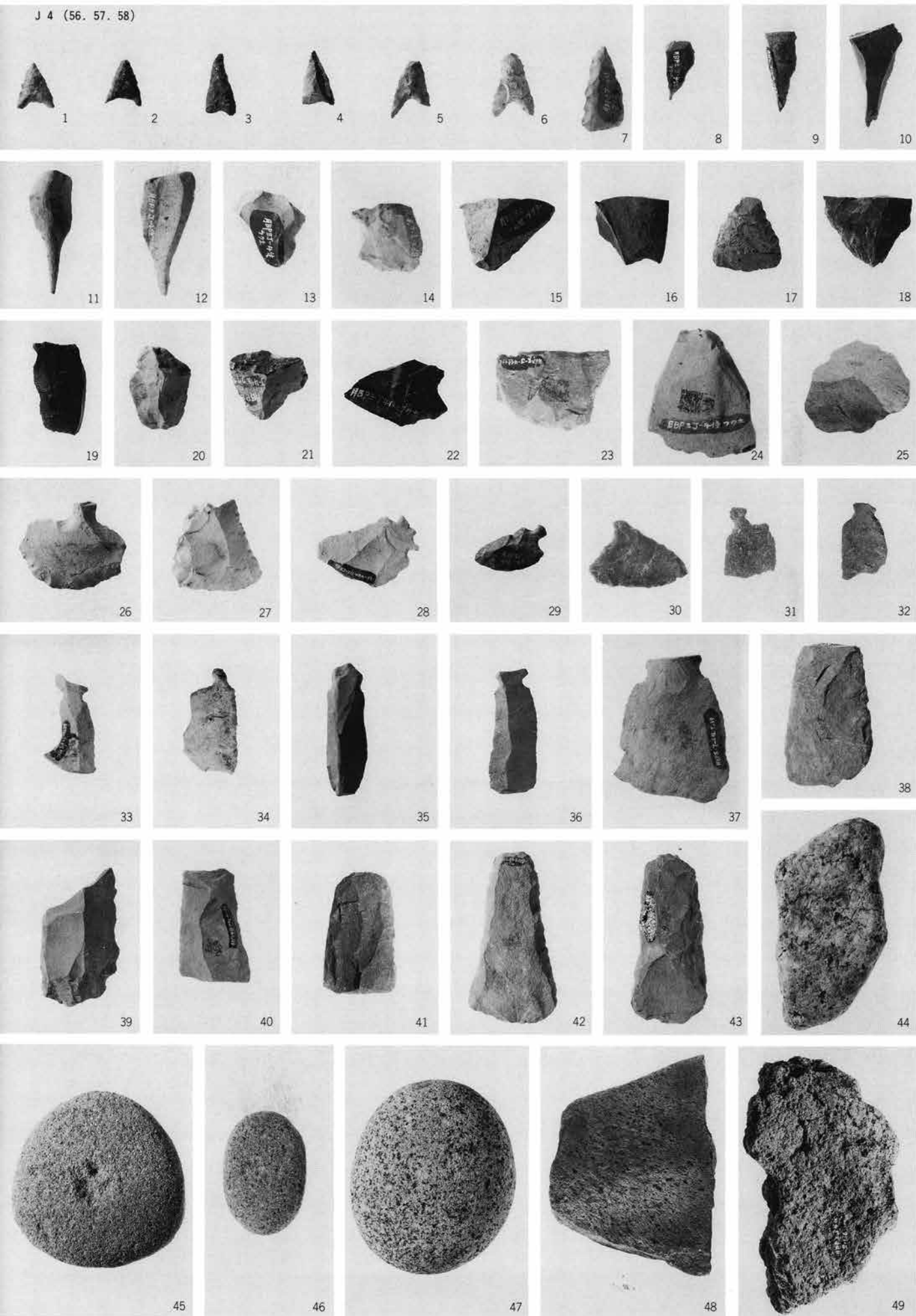
J 4 (43)



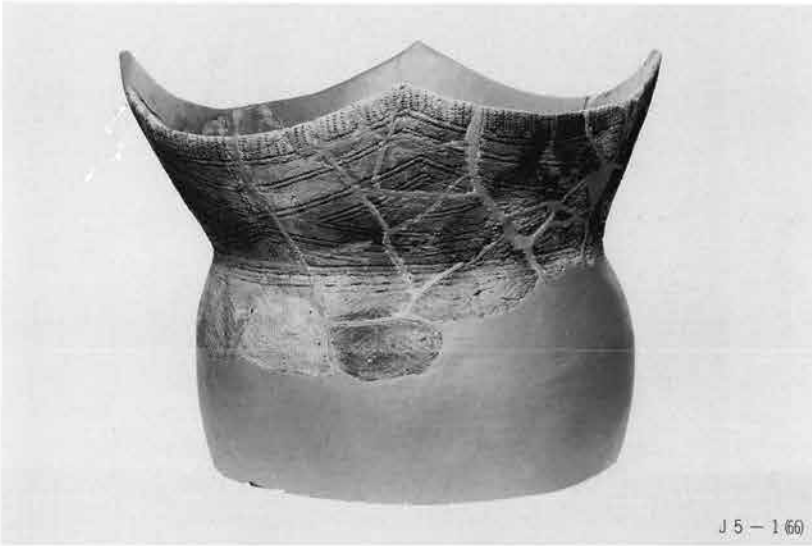
J 4 (44)

PL.47

J 4 (56. 57. 58)



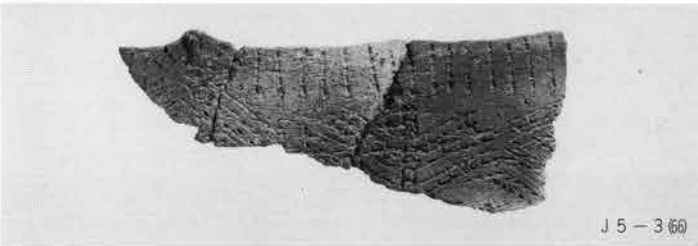




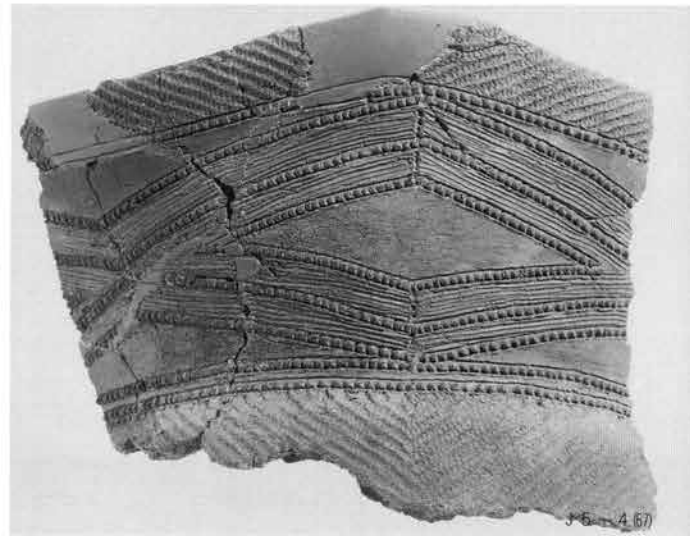
J 5-1 66



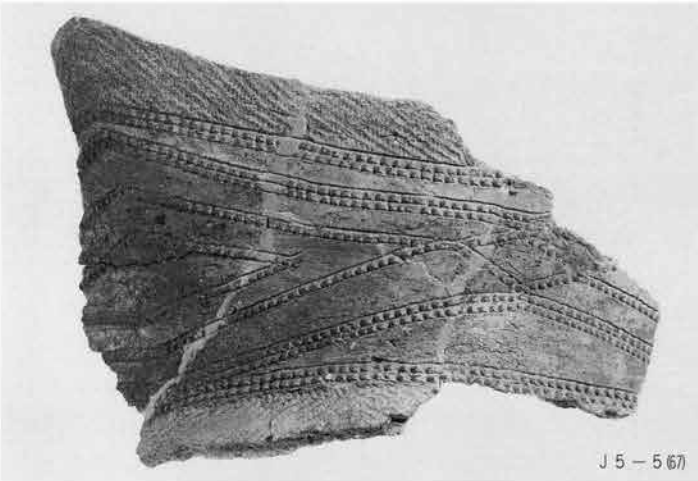
J 5-2 66



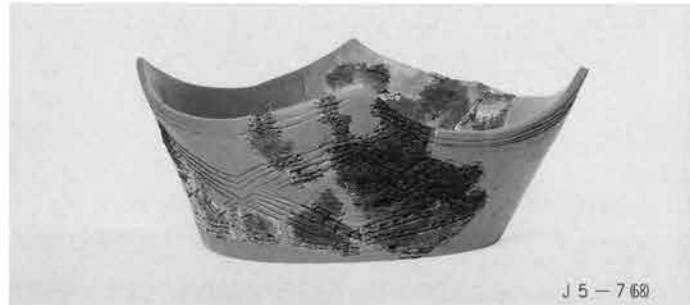
J 5-3 66



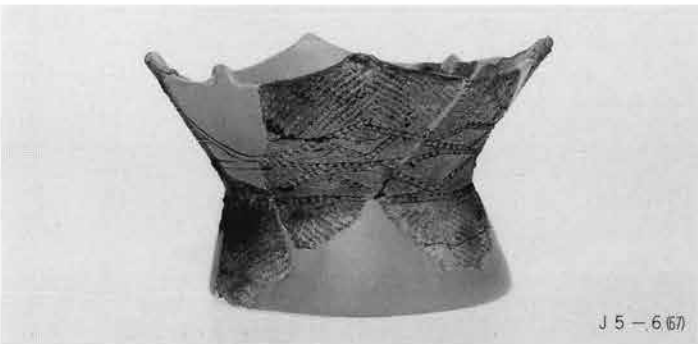
J 5-4 67



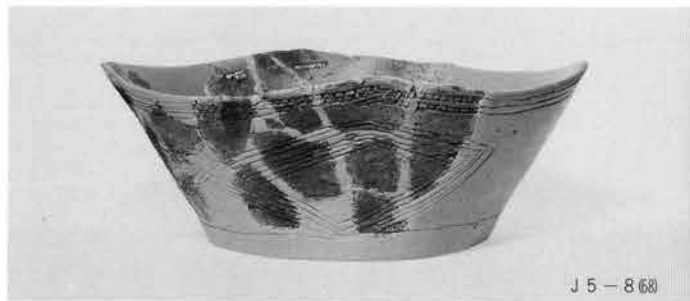
J 5-5 67



J 5-7 68



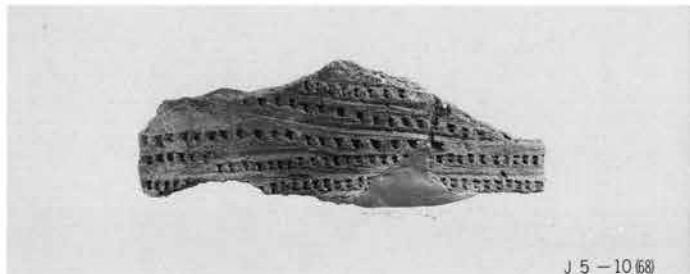
J 5-6 67



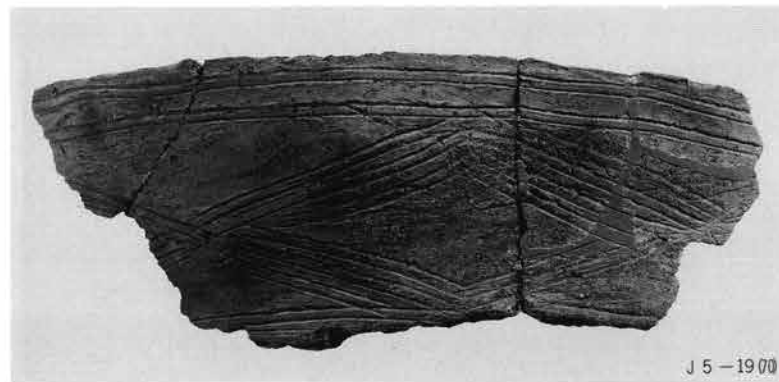
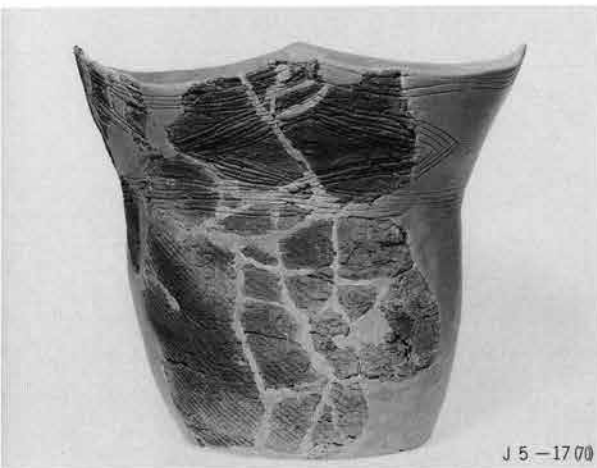
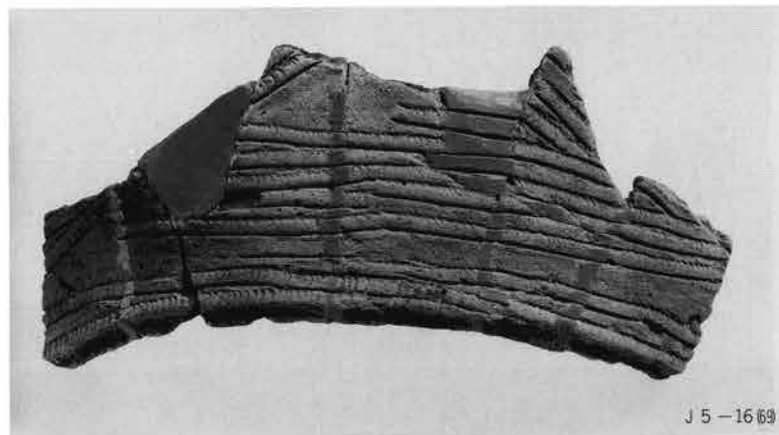
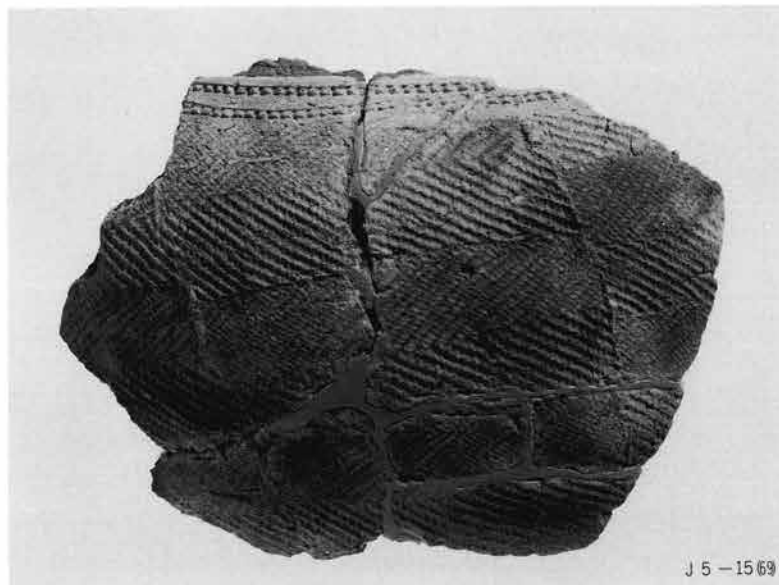
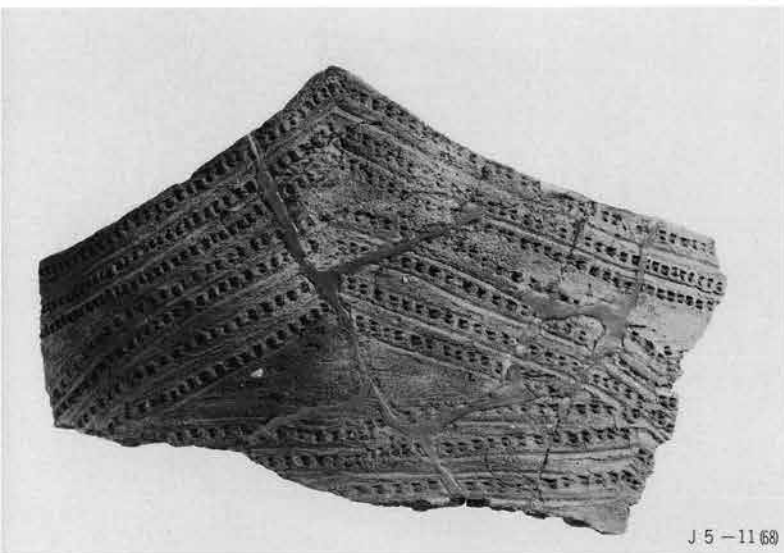
J 5-8 68

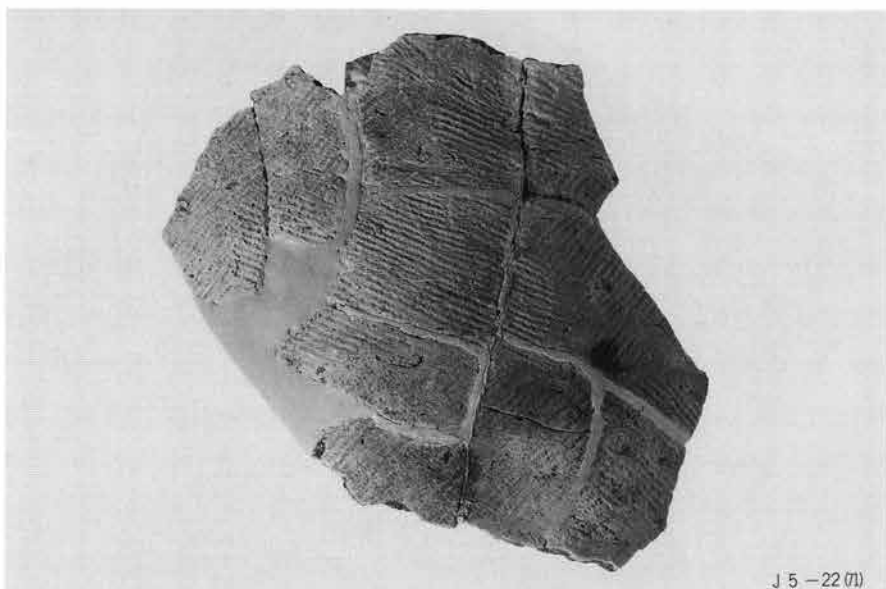
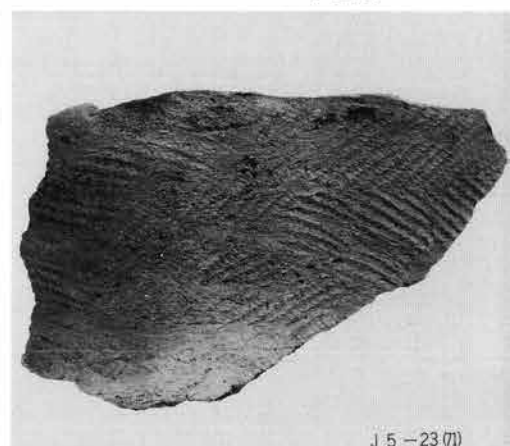


J 5-9 68



J 5-10 68







J 5 - 30 (73)



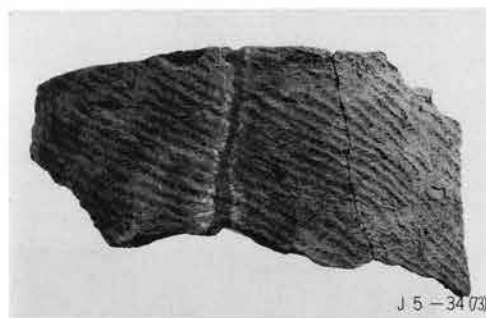
J 5 - 31 (73)



J 5 - 32 (73)



J 5 - 33 (73)



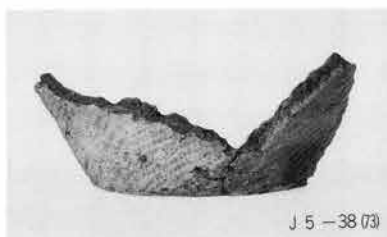
J 5 - 34 (73)



J 5 - 35 (73)



J 5 - 37 (73)



J 5 - 38 (73)



J 5 - 39 (73)

土器施文拡大写真



① J 5 - 4 67



③ J 5 - 6 67



② J 5 - 5 67



④ J 5 - 6 67



⑤ J 5-5 67



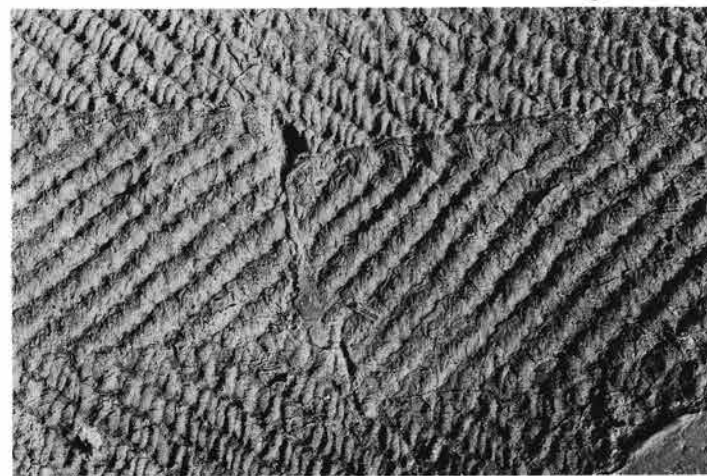
⑥ J 5-9 68



⑦ J 5-12 69



⑧ J 5-13 69



⑨ J 5-15 69



⑩ J 5-27 70

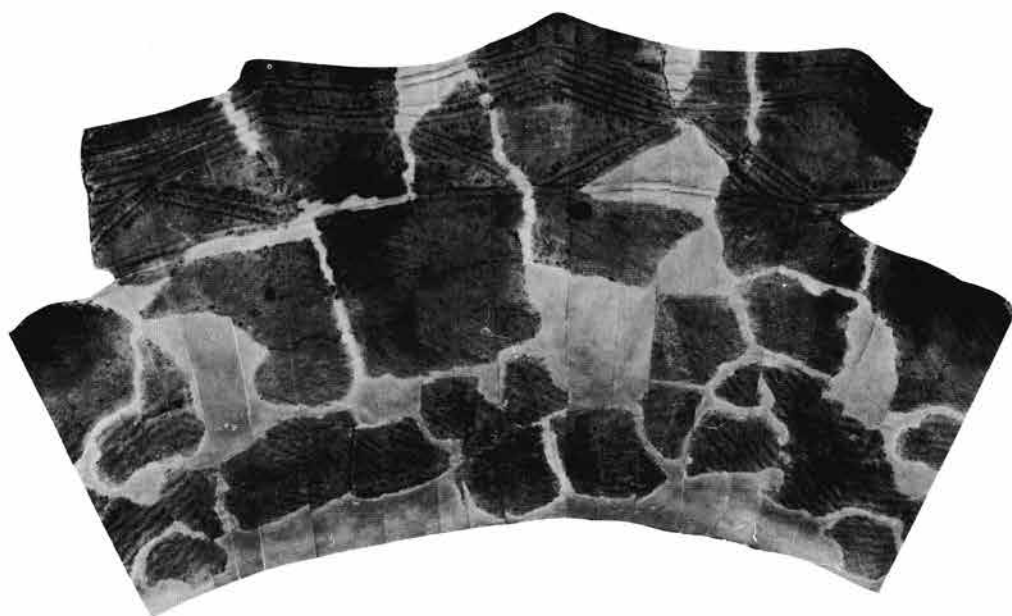


⑪ J 5-35 73

- ① 櫛歯状工具による条線・縦位刺突
- ②・⑤  $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \\ L \end{matrix} \right.$  (0段多条) と  $L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ R \\ R \end{matrix} \right.$  (0段多条) で羽状
- ③・④ 前々段反燃  $R \left\{ \begin{matrix} L & L \\ L & L \\ L & L \end{matrix} \right.$  と  $L \left\{ \begin{matrix} R & R \\ R & R \\ R & R \end{matrix} \right.$
- ⑥ 半截竹管によるC字爪形文(手法A)
- ⑦ 前々段反燃  $R \left\{ \begin{matrix} L & L \\ L & L \\ L & L \end{matrix} \right.$  と附加条第1種  $L \left\{ \begin{matrix} R & R \\ R & R \\ R & R \end{matrix} \right.$  + R(2本)
- ⑧ 半截竹管によるC字爪形文(手法A)
- ⑨  $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \\ L \end{matrix} \right.$  (0段4条) と  $L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ R \\ R \end{matrix} \right.$  (0段多条) 土器面は柔軟で押圧は強い。
- ⑩  $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \\ L \end{matrix} \right.$  ? と  $L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \\ R \\ R \end{matrix} \right.$
- ⑪ 附加条第1種  $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \\ L \\ L \end{matrix} \right.$  + L



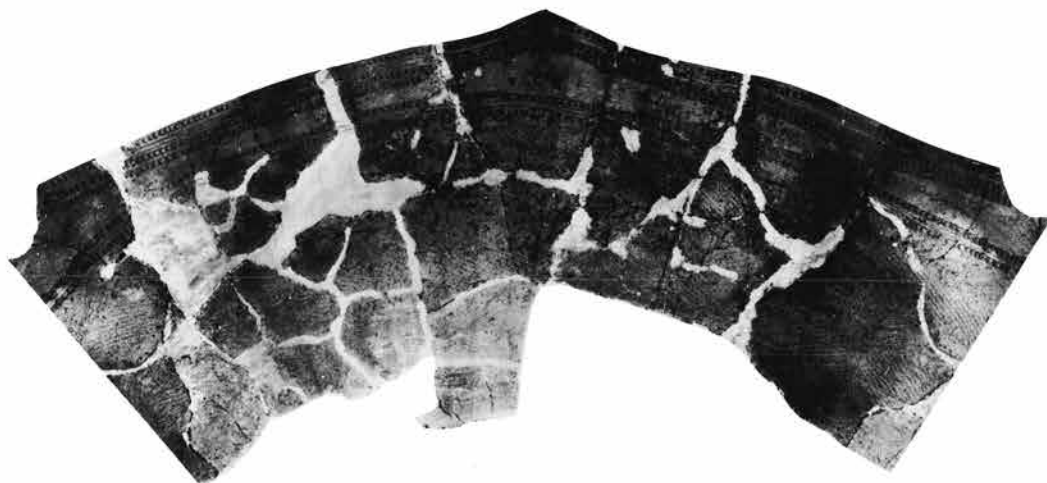
J5-1 展開写真



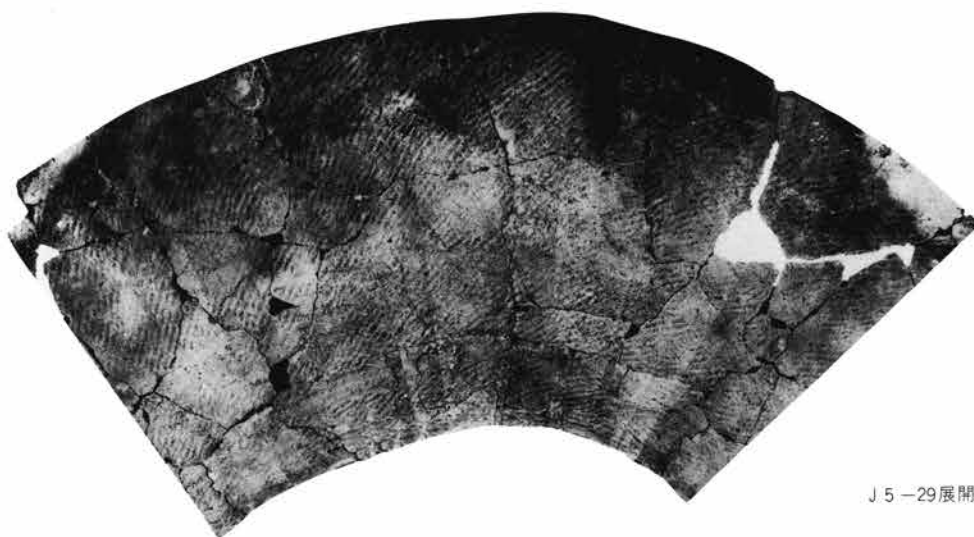
J5-2 展開写真



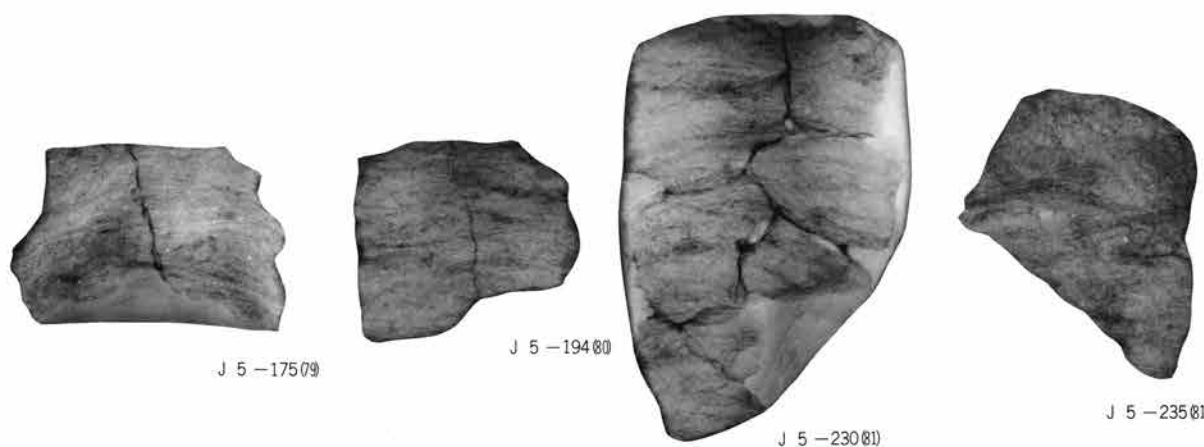
J5-6 展開写真



J 5 -12展開写真



J 5 -29展開写真



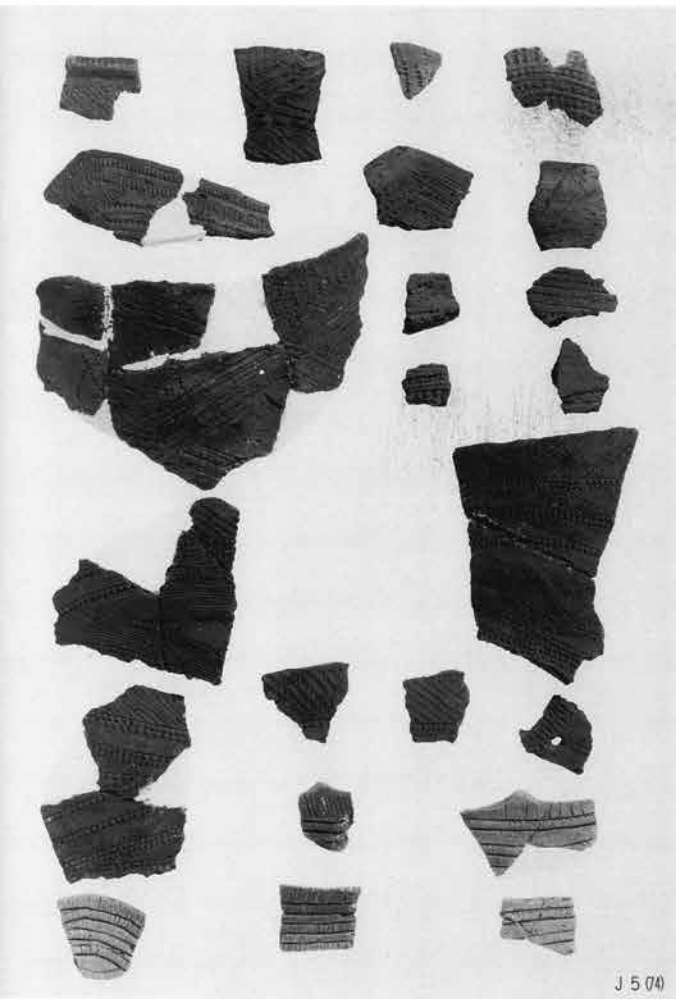
J 5 -175(9)

J 5 -194(8)

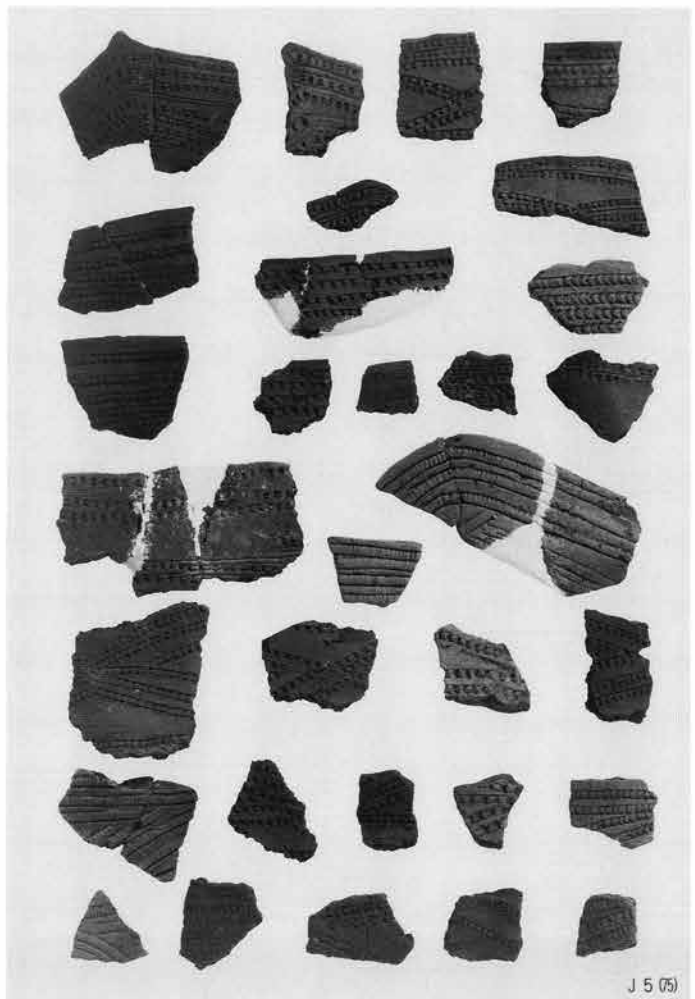
J 5 -230(8)

J 5 -235(8)

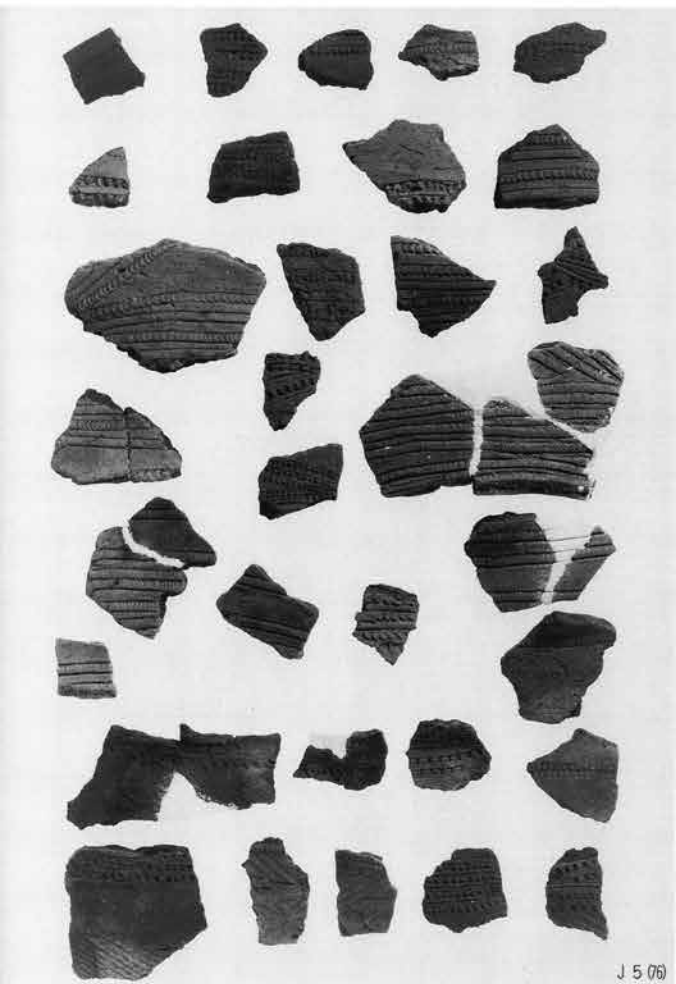
縄文土器（含繊維）のX線写真（1/3）



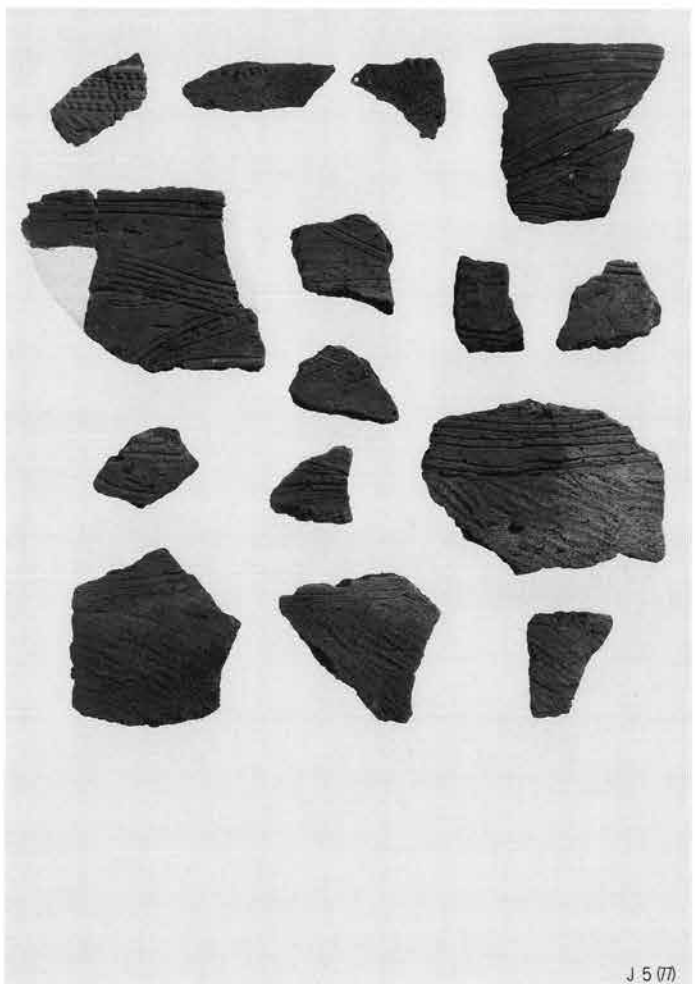
J 5 (7)



J 5 (5)



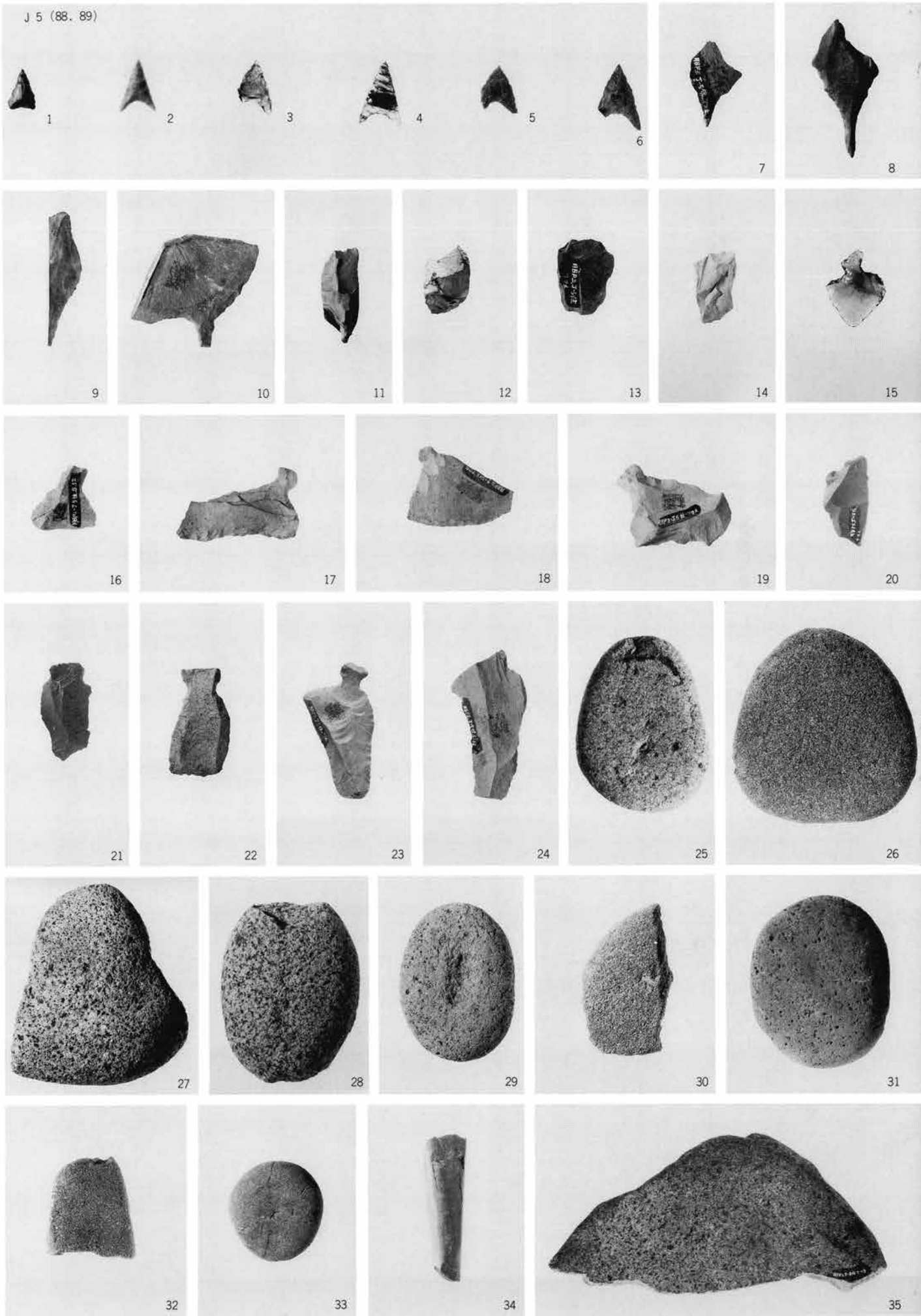
J 5 (7)



J 5 (7)



J 5 (88. 89)

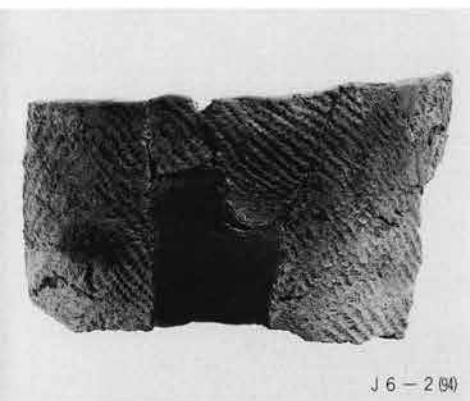




J 6-1 (94)



J 6-1 (94)



J 6-2 (94)



J 6-4 (94)



J 6-6 (94)



J 6-7 (94)



J 6-3 (94)



J 6 000



1



2



3



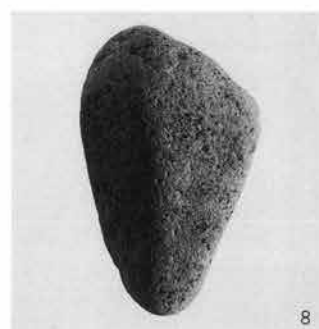
5



6



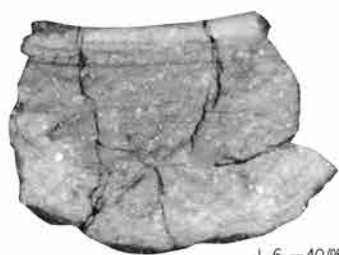
7



8



9



J 6-40 (95)



J 6-44 (95)

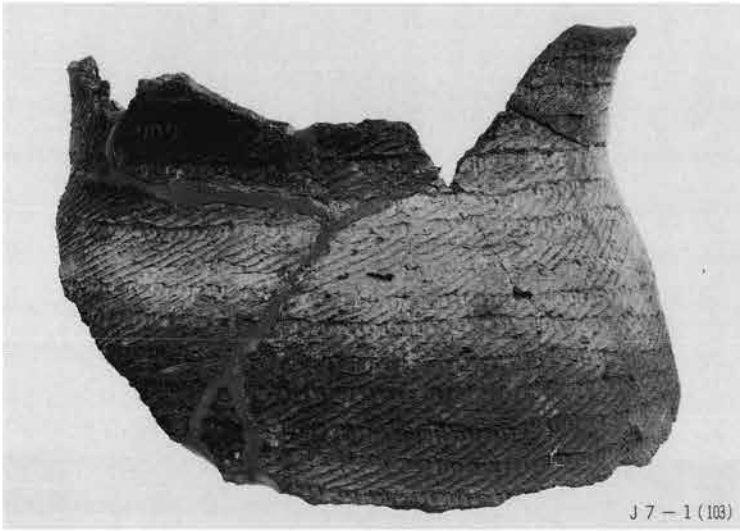


J 6-80 (95)



J 6-108 (97)

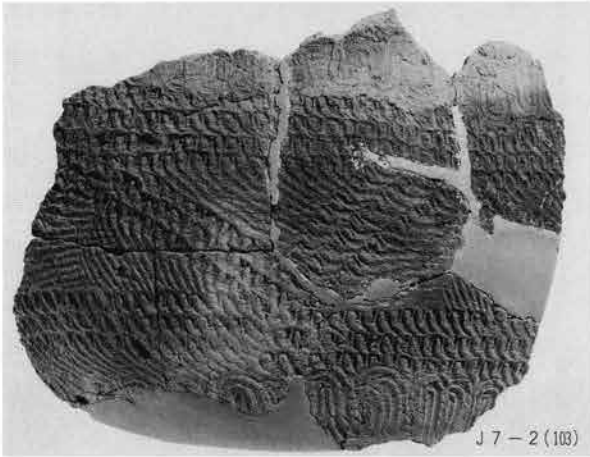
縄文土器（含繊維）のX線写真（1/3）



J 7-1 (103)



J 7-1 (103)



J 7-2 (103)



J 7-3 (103)



J 7-4 (103)



J 7-5 (103)



J 7-6 (103)



J 7 (107)

1



2



3



4



J 7 (108)

5



6



7



8



11



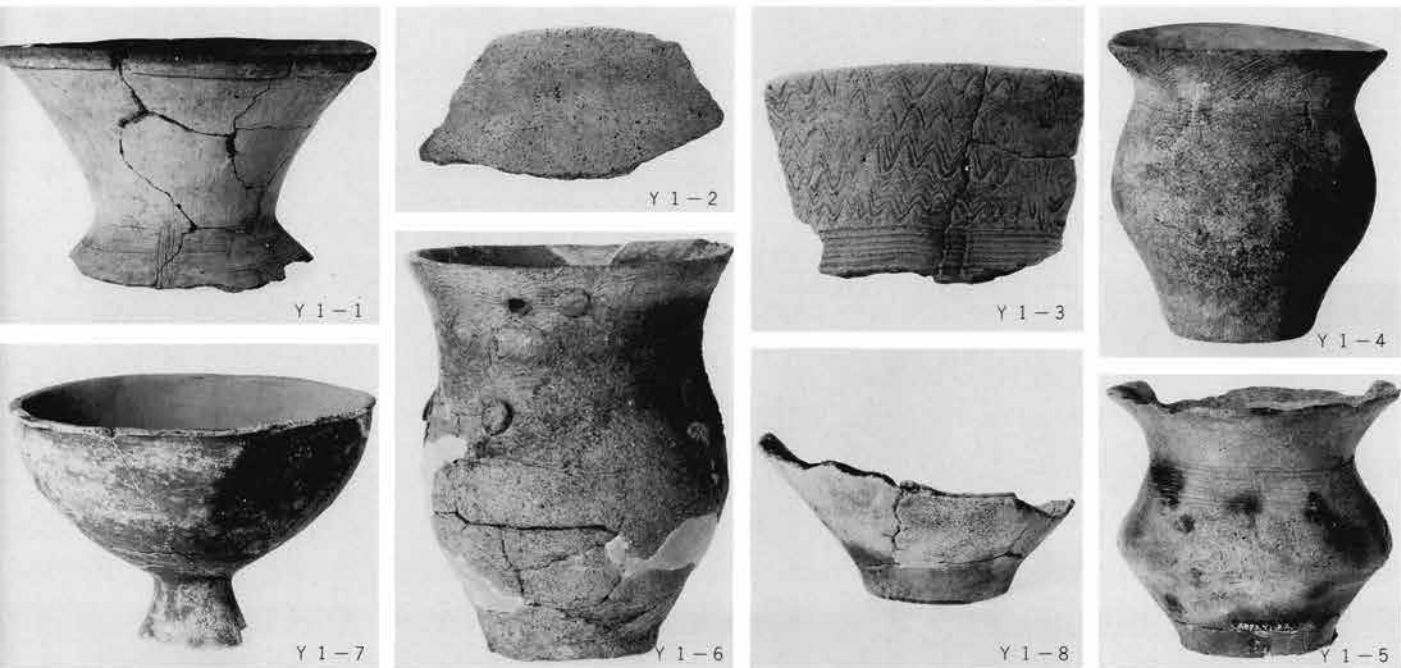
10



9

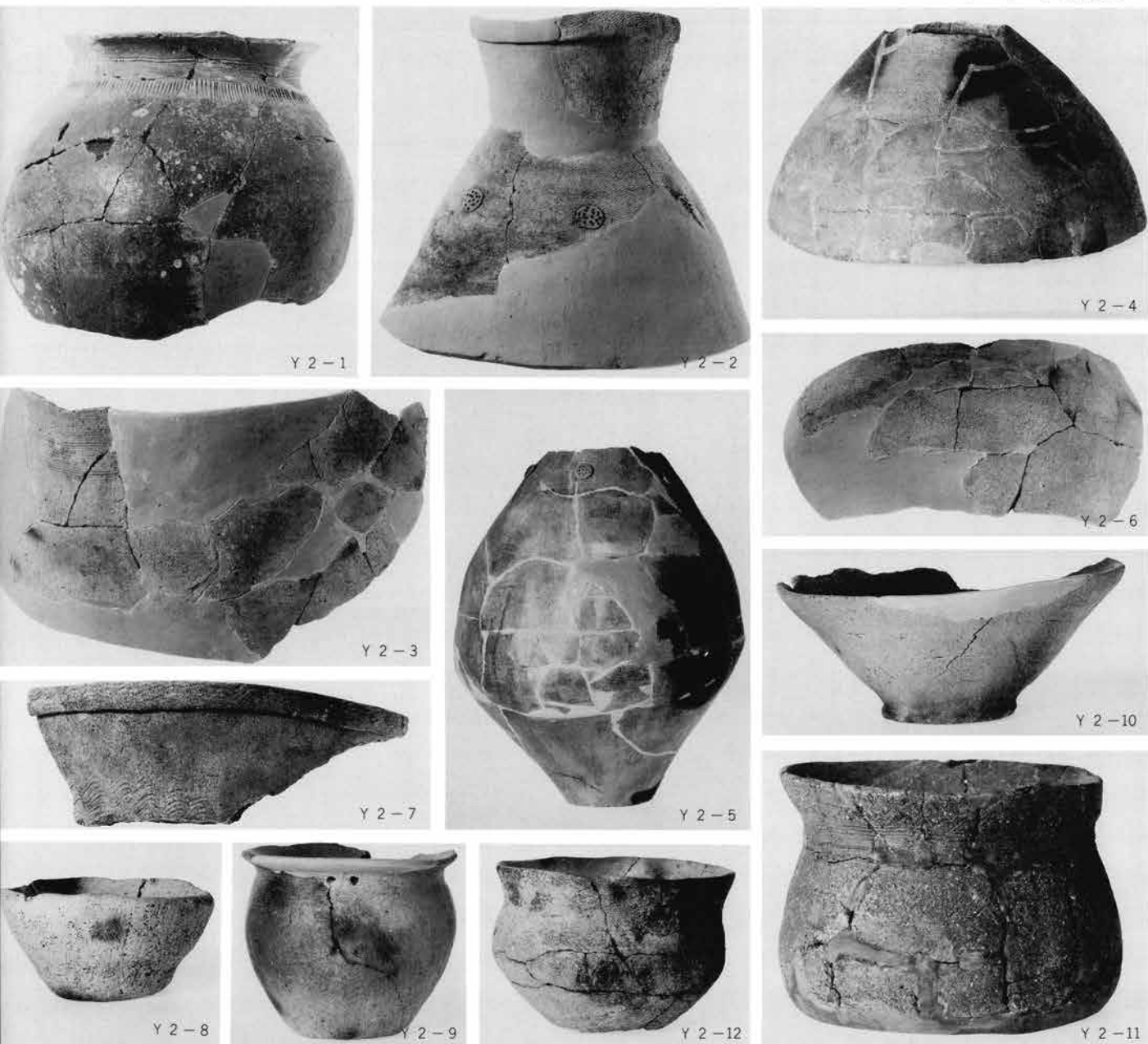
グリッド出土の  
有舌尖頭器





▲ Y-1号住居跡

▼ Y-2号住居跡





▲ Y-2号住居跡

▼ Y-3号住居跡

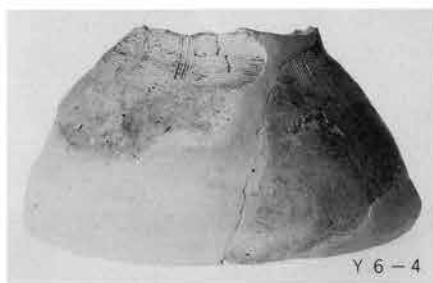
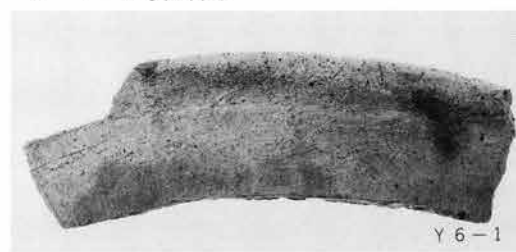


▼ Y-4号住居跡

▼ Y-5号住居跡



▼ Y-6号住居跡





Y 6-6



Y 6-7



Y 6-8



Y 6-11



Y 6-12



Y 6-14



Y 6-13



Y 6-10



Y 6-9

▲ Y-6号住居跡

▼ Y-7号住居跡



Y 7-1



Y 7-2



Y 7-3



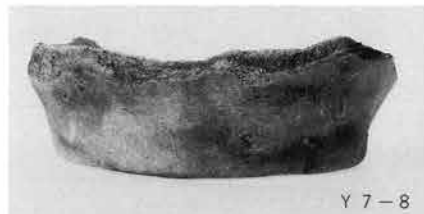
Y 7-4



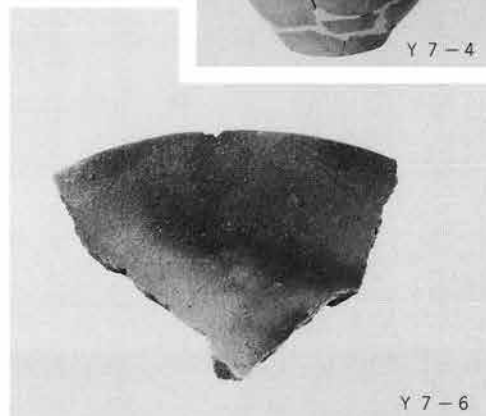
Y 7-5



Y 7-7



Y 7-8



Y 7-6



Y 7-9



Y 7-10



Y 7-11



Y 7-12



Y 7-13



Y 7-14



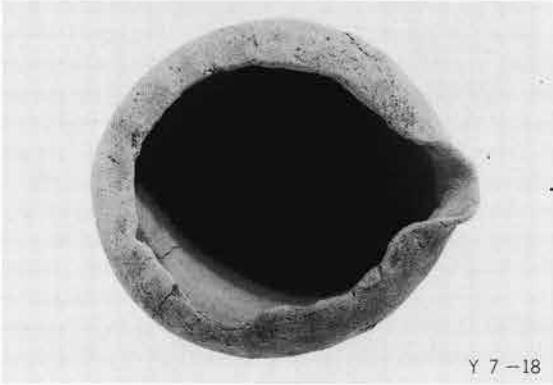
Y 7-15



Y 7-16



Y 7-17



Y 7-18



Y 7-18

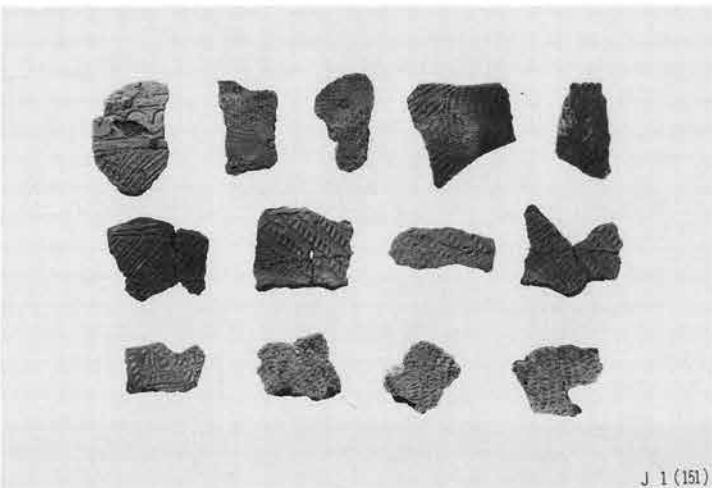


Y 7-19



Y 7-38

### 十二原 II 遺跡



J 1 (151)



J 1-17



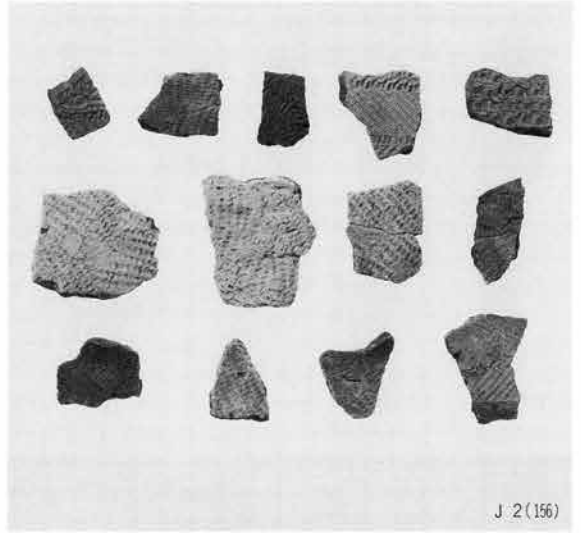
J 1-18



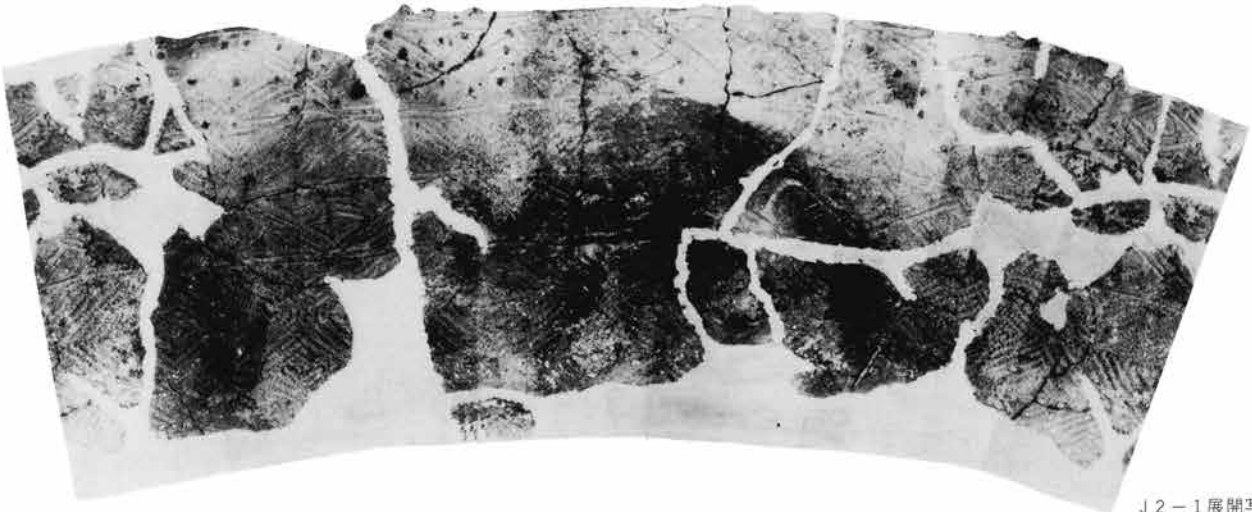
J 2 - 1 (156)



J 2 - 2 (156)



J 2 (156)

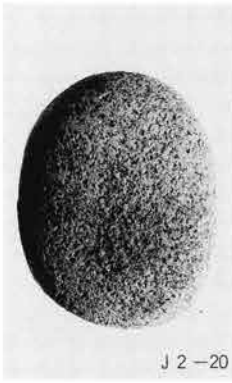


J 2 - 1 展開写真



(156)

J 2 - 19



J 2 - 20



(157)

J 2 - 21



J 2 - 22



J 2 - 23



J 2 - 24



J 2 - 25



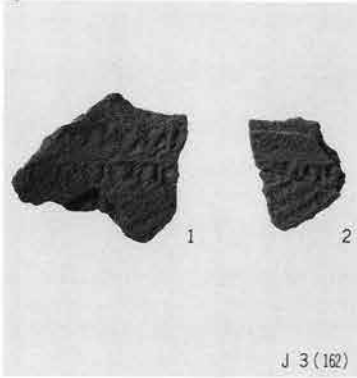
J 2 - 26



(158)

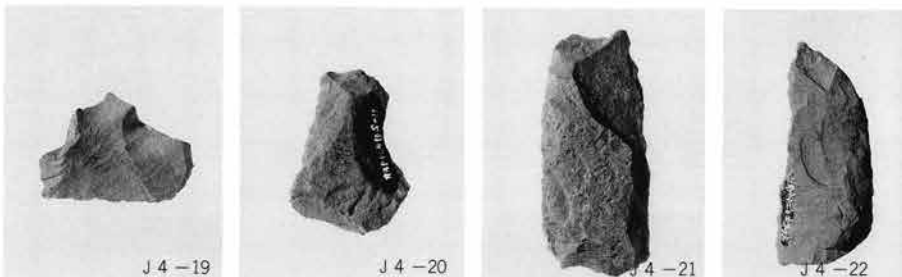
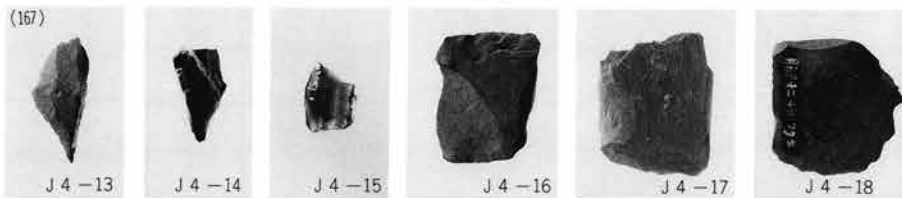
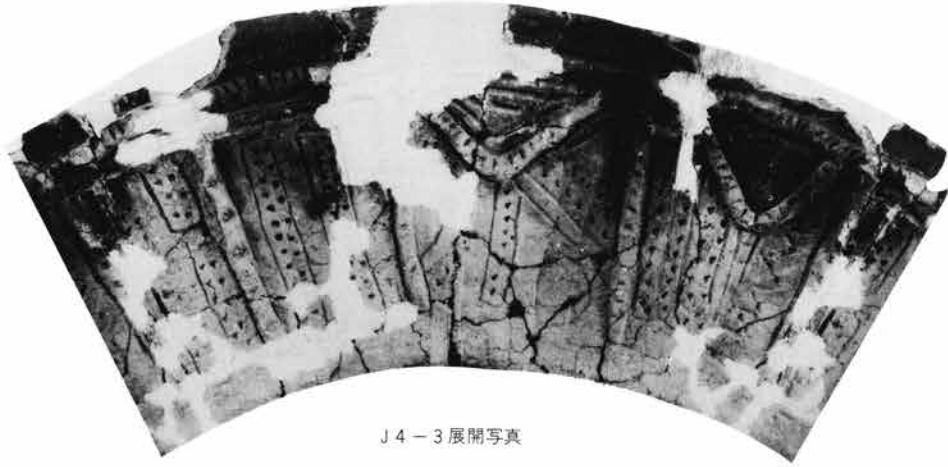
J 2 - 27

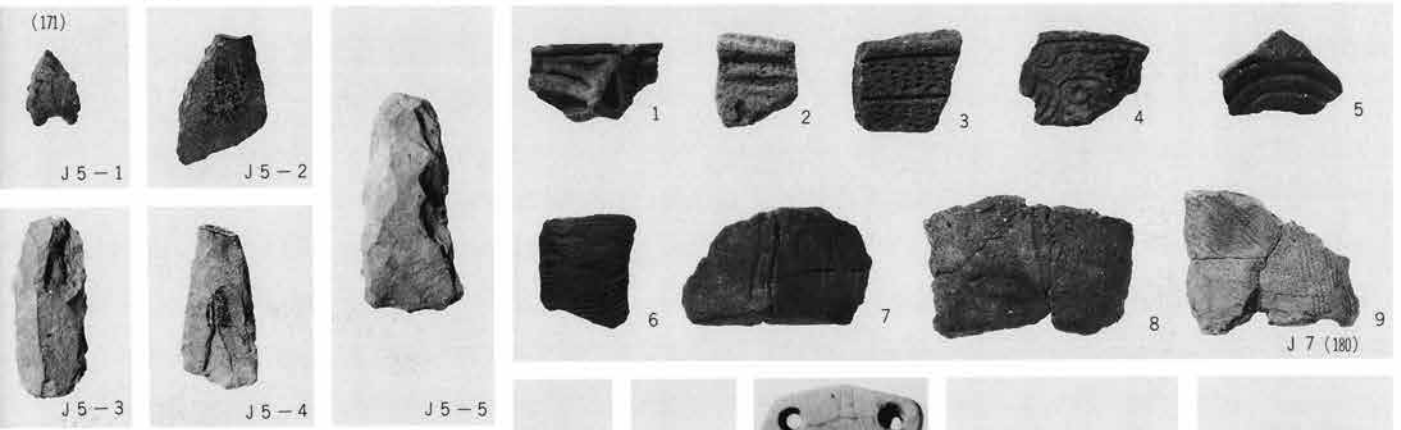




▲ J-3号住居跡

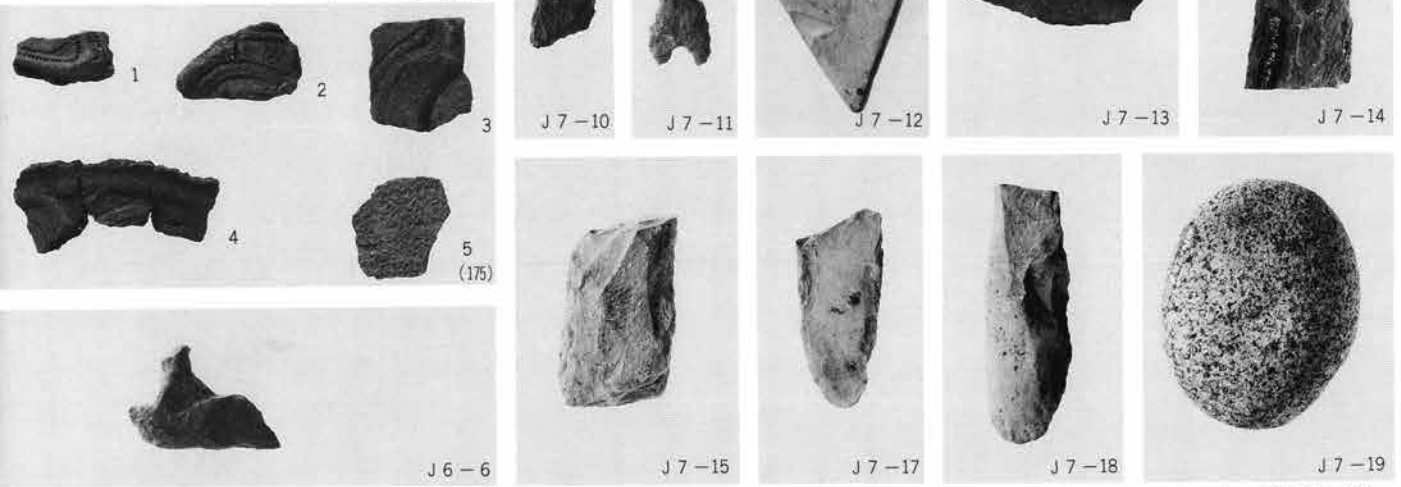
▼ J-4号住居跡





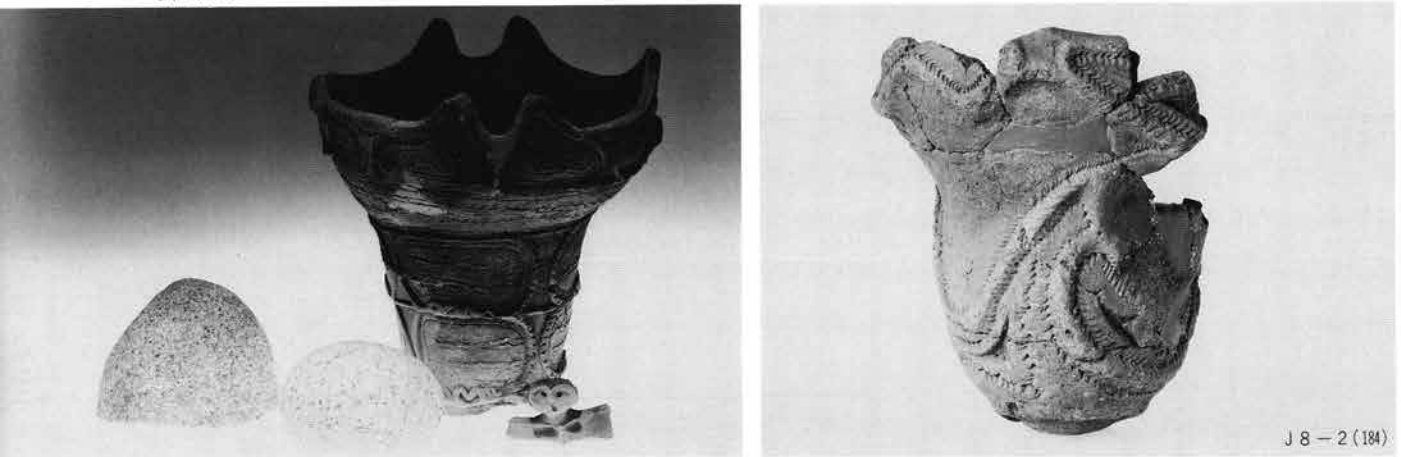
▲ J-5号住居跡

▼ J-6号住居跡



▲ J-7号住居跡

▼ J-8号住居跡



J 8 - 1 (184)



J 8 - 9 (184)



J8-1 展開写真



J8-56



J8-57



J8-58



J8-59



J8-60

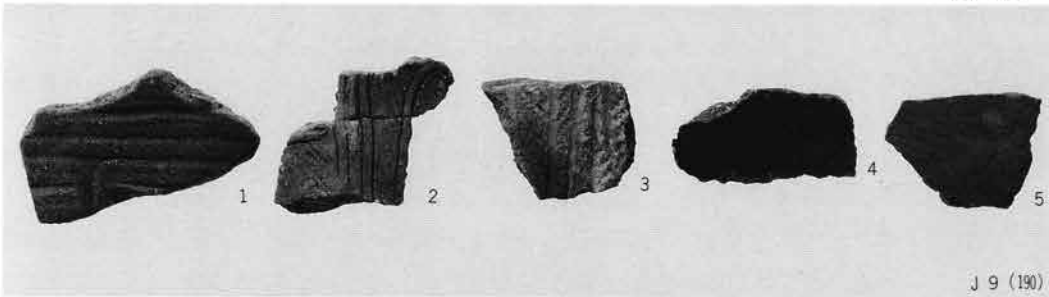


J8-61

▲ J-8号住居跡

▼ J-9号住居跡

▼ 配石

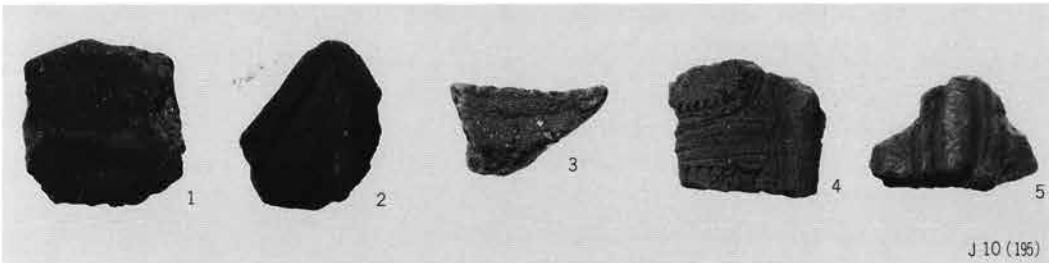


J 9 (190)



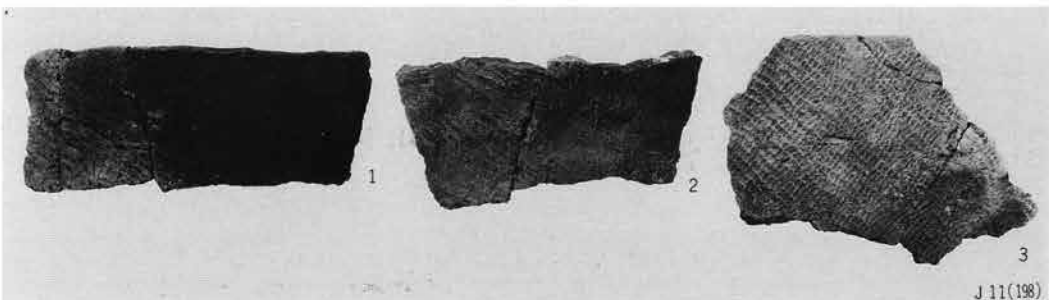
配石-1 (199)

▼ J-10号住居跡



J 10 (195)

▼ J-11号住居跡



J 11 (198)



配石-2 (199)



3 土坑 (200)



3 土坑-2



3 土坑-1



▲ 3号土坑

▼ 4号土坑



4 土坑(200)



4 土坑-3



4 土坑-4



4 土坑-5



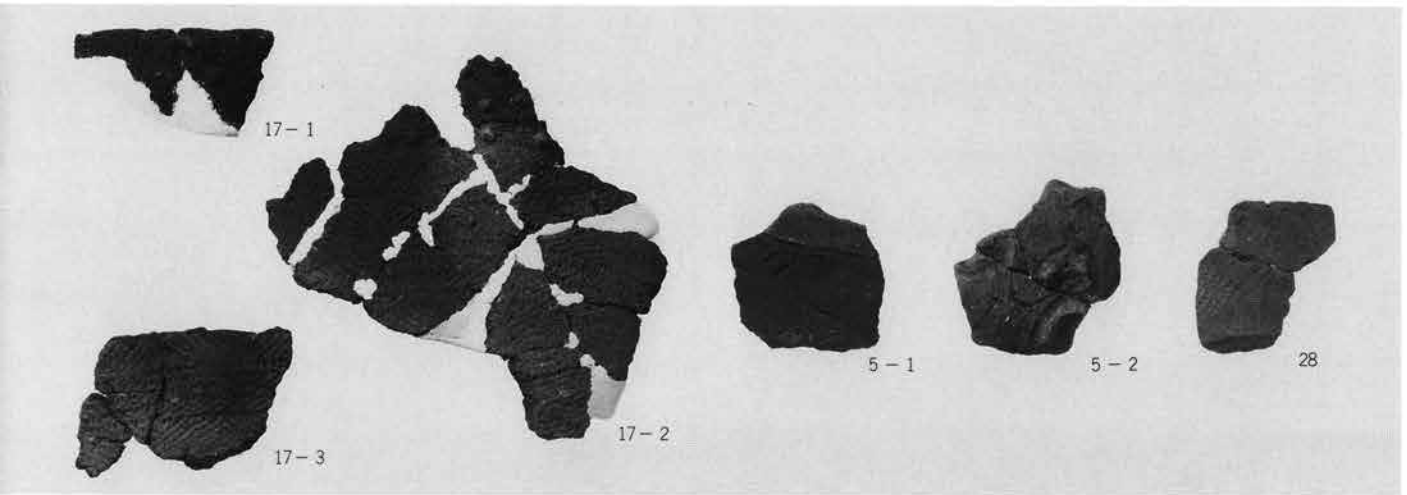
3 土坑-1 展開写真



4 土坑-3 展開写真

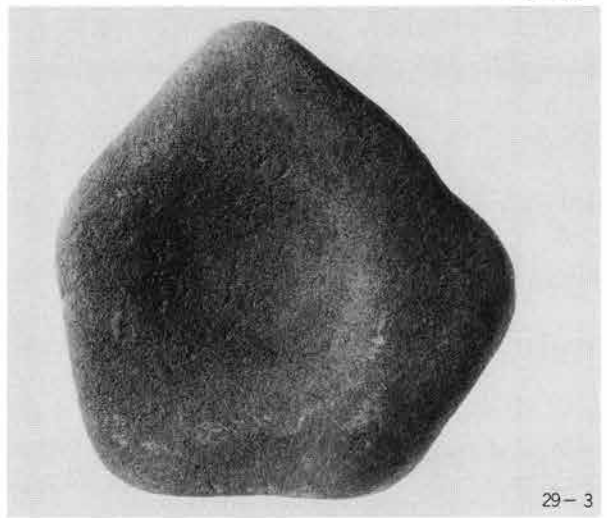
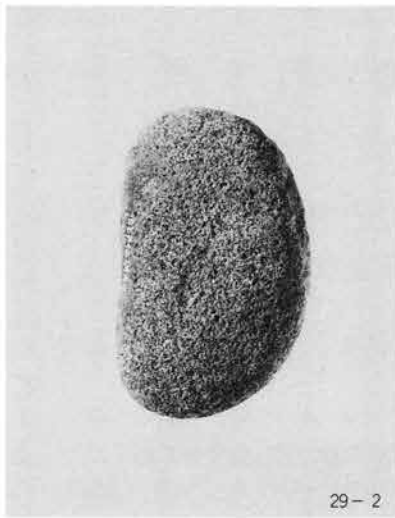
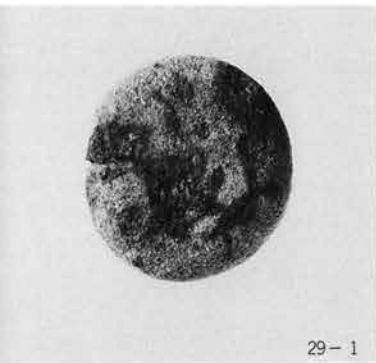


4 土坑-5 展開写真



▲ 17号土坑・5号土坑・28号土坑

▼ 29号土坑



▼ 屋外埋設土器



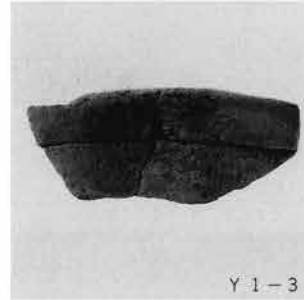
屋外埋設土器展開写真



Y 1-1



Y 1-2



Y 1-3

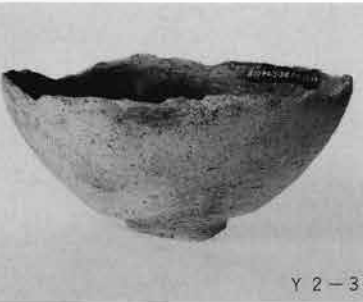


Y 1-4

▲ Y-1号住居跡



Y 2-1



Y 2-3



Y 2-4



Y 2-5

▼ Y-2号住居跡

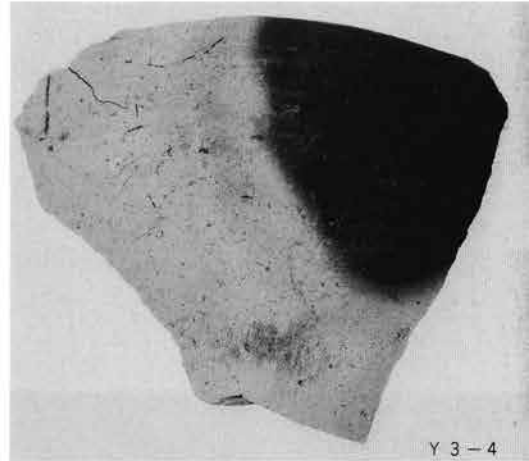
▼ Y-3号住居跡



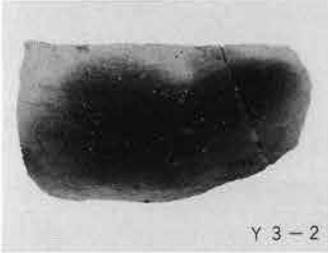
Y 3-1



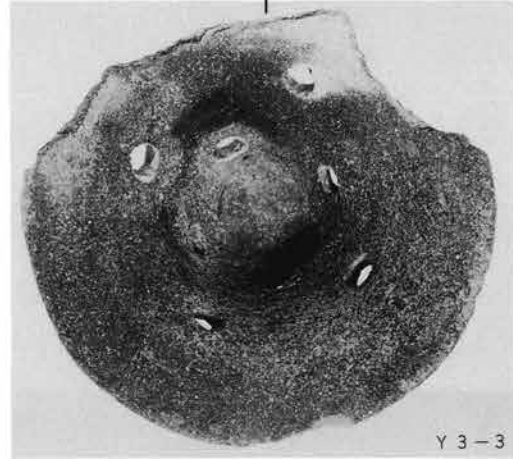
Y 3-3



Y 3-4



Y 3-2



Y 3-3



Y 3-5



Y 3-6



Y 3-6

▼ Y-4号住居跡



Y 4-1



Y 4-2



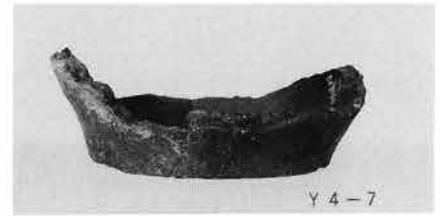
Y 4-3



Y 4-4



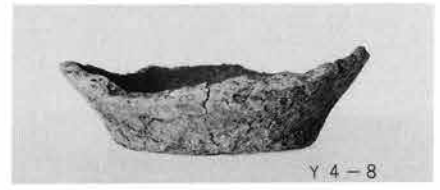
Y 4-5



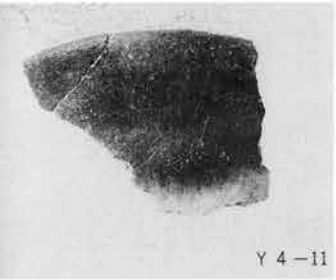
Y 4-7



Y 4-6



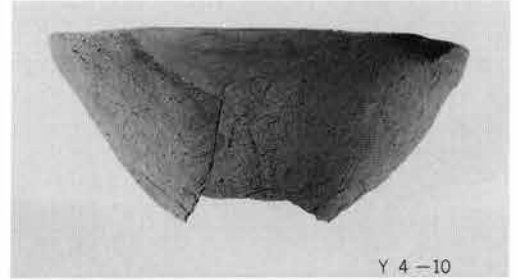
Y 4-8



Y 4-11



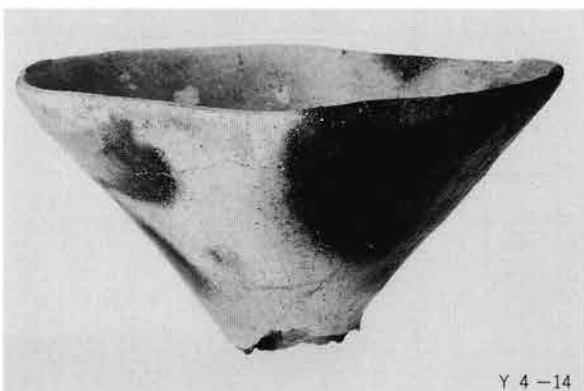
Y 4-9



Y 4-10



Y 4-13



Y 4-14



Y 4-12

▲ Y-4号住居跡

▼ Y-5号住居跡

▼ Y-6号住居跡



Y 5-1



Y 6-1

Y 6-2

Y 6-3



Y 4-15



**三後沢遺跡・十二原Ⅱ遺跡** 一般国道17号線(月夜野バイパス)改築工事  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—Ⅱ—

---

印刷 昭和61年3月25日

発行 昭和61年3月31日

編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2  
電話(0279)52-2511(代表)

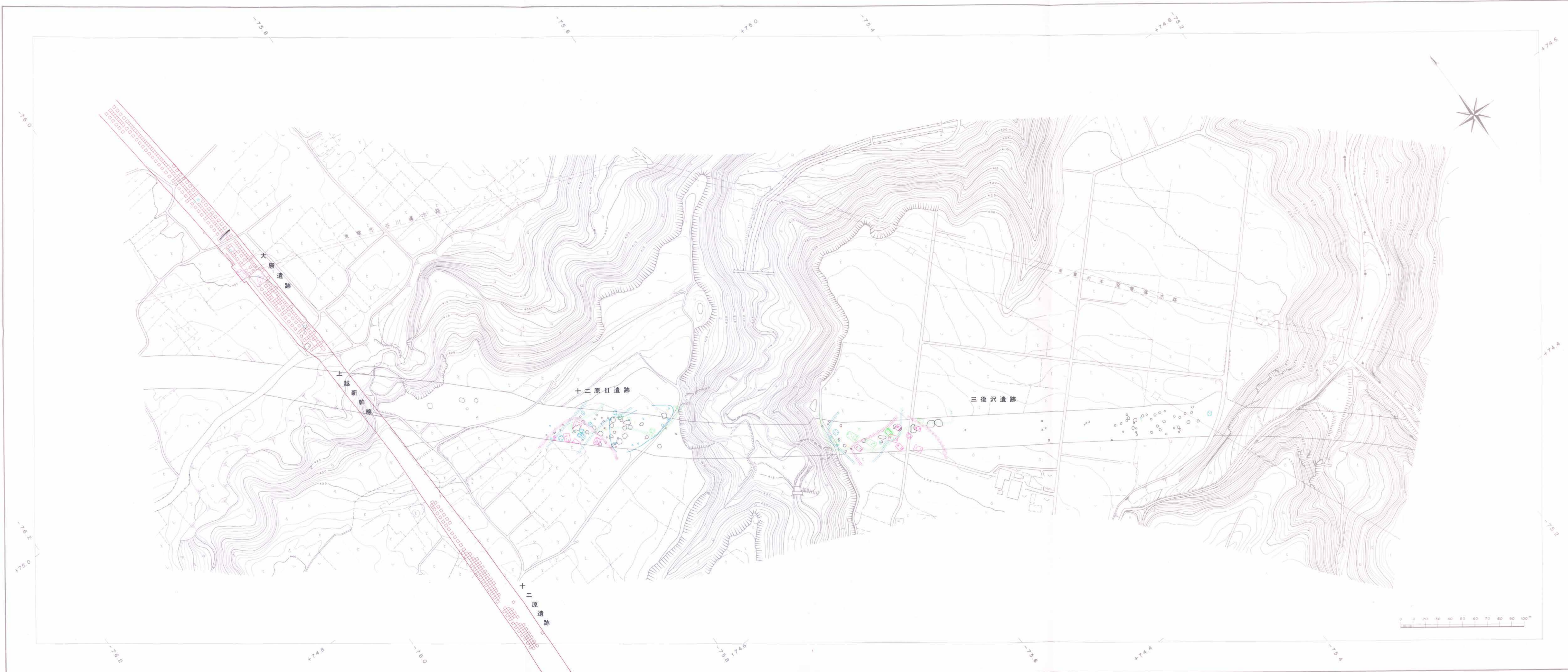
発行／群馬県考古資料普及会  
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2  
電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毎印刷工業株式会社

---

頁・行または番号	誤	正
PLATES 目次	十二原Ⅱ遺跡(遺物写真) PL.62 J-1号住居跡出土遺物 PL.63 J-2号住居跡出土遺物 PL.64 J-3・J-4号住居跡出土遺物 PL.65 J-5・6・7・8号住居跡出土遺物 PL.66 J-8・9・10・11号住居跡と配石遺構出土遺物 PL.67 3・4号土坑出土遺物 PL.68 3・4号土坑出土遺物(展開写真) PL.69 17・5・28号土坑出土遺物 屋外埋設土器 PL.70 Y-1・2・3・4号住居跡出土遺物 PL.71 Y-4・5・6号住居跡出土遺物 2.J-11号住居跡 写真撮影方向 第231図 竪穴状遺構	十二原Ⅱ遺跡(遺構写真) PL.22 1.J-1号住居跡 2.遺物出土状況 3.出入口部 PL.23 1.J-2号住居跡 2.遺物出土状況 PL.24 1.J-2号住居跡炉 2.炉セクション 3.出入口部 4.石皿出土状況 PL.25 1.J-3号住居跡 2.J-4号住居跡 PL.26 1.J-4号住居跡遺物出土状況 2.J-5号住居跡 PL.27 1.J-6号住居跡 2.J-7号住居跡 PL.28 1.J-8号住居跡 2.遺物出土状況 3.床面倒置土器 4.丸石 5.顔面把手 PL.29 1.J-9号住居跡 J-10号住居跡 PL.30 1.配石 2.3配石と土器出土状況 PL.31 1.3号土坑遺物出土状況 2.4号土坑遺物出土状況 3.5号土坑セクション 4.6号土坑 5.26号土坑 6.28号土坑 写真撮影方向 竪穴状遺構
P. 43		
P.351		

# 付図 三後沢遺跡・十二原Ⅱ遺跡全体図



■ 縄文時代の陥し穴 ■ 縄文時代前期 ■ 縄文時代中期 ■ 弥生時代後期 □ 時期不明・その他